ネギま！―剣製の凱歌―

佐藤C

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギま！―剣製の凱歌―

【Ｎコード】
Ｎ５１４９Ｍ

【作者名】
佐藤Ｃ

【あらすじ】
※２０１１年現在、一身上の都合により来年度まで更新停止中
※
魔法先生ネギま！とＦａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔのクロスオーバー。
ネギま！世界出身のオリ主化した「衛宮士郎」が主人公。
オリキャラ・オリジナルストーリーが入ります。
ルビが多いのでＰＣからの閲覧をお薦めします。
私の初小説作品です。よければ読んでください。

プロローグ1　業火の中で（前書き）

・この小説は主人公が「衛宮士郎」となっていますが、実際はほぼオリ主と化しています。
・ストーリーが作者の自己満足で進んでいきます。
・作者はネギま！もＦａｔｅもある程度しか知りません。
これらのことをふまえた上でお読みください。
こんなモン読めねえよ！！という方はお戻りください。

プロローグ1　業火の中で

瓦礫の隙間から見える外の世界。

そこには、空を焦がす真っ赤な炎があった。

瓦礫と炎以外、何も見えない。何もわからない。

――なんで？　なんで燃えてるの？　なにがあったの？
ここはどこ？　なんでボクはこんなところに？
痛い。痛いよ。たすけて、だれか――――・・・・

瓦礫の下敷きになった部位が苦痛を訴える。
燃え盛る炎の熱が迫り、少年の恐怖心を増幅させる。このまま炎が勢いを増せば、自分も燃えてしまうのではないかと。

「・・・・大丈夫だよ、士郎・・」

その声に、少年――――衛宮士郎は一瞬驚き、そして安堵する。

声の主は、士郎の最愛の姉、衛宮イリヤスフィールの声だったから。

おそらく、瓦礫の向こうにいるのだろう。

「大丈夫、わたしがちゃんとそばにいるから・・・」

その声で、士郎は自分の左手に伝わる温もりに気づいた。
イリヤはずっと、士郎の手を繋いでいてくれたのだ。

「・・うん、イリヤおねえちゃん・・・・」

姉の言葉で緊張が解けたのか、士郎はそのまま意識を手放した。

――――――――――――――――――――

――――――結論からいえば、その惨事の原因はテロだった。

衛宮一家は家族でアメリカを訪れていた。
士郎は一家がどんな理由で、何処を目的地とした来訪だったのかは知らない。
しかし士郎にそんな事は関係なく、ただ異国の地への期待に胸を膨らませていた。

そして、巻き込まれた。

国際空港の爆破に。

――――――――――――――――――――

士郎が意識を失ってから数時間後――――。

（大丈夫、大丈夫・・・大丈夫・・・。助けが来る。待ってればきっと来るはず・・・）

イリヤは自分にそう言い聞かせ、士郎の手を強く握る。

士郎の声がずいぶん前から聞こえないが、握る手の温かさから生きていると予想する。

――――――バキッ・・

「えっ・・・・」

パラパラと、上から砂が降ってくる。

――ガゴッ・・・・・

――――――――――そんな、だめ――――――――――――。

瓦礫が、崩れる――――

「しろ・・・・・・」

士郎、と呼ぼうとするが、彼女の、姉（イリヤ）の声が弟（しろう）に聞こえる事は

――――――――――二度となかった。

プロローグ1　業火の中で（後書き）

はあ・・・。初投稿ということで手間取り、このあとがきを書くのが既に3回目です。

「書きたい」という欲求に負けて投稿してしまいました。

私の拙い文章を読んでくださりありがとうございます。

不定期更新ですができる限り続けたいと思います。

ではまた。

プロローグ2　絶望の慟哭（前書き）

想像力豊かなヒトは気をつけてください。
今回のお話は残酷な描写があります。

プロローグ2　絶望の慟哭

――――――――誰かの声が、聞こえた気がした。

そして士郎は目を覚ました。

声が聞こえる。

「・・・X・X・・XXXXX・・ーーーー！！」

「・・・XX！？XXXX・・XXX！XXXーーーXXXX！！」

（だれかいるみたいだけど、何を言ってるのかわからない。たぶん英語。アメリカだし）

そんなことを思っていたら、目の前から瓦礫がどけられ、数人の大人たちが現れた。

大人たちは英語で何か言いながら、士郎を引き上げた。

（――――――――助かったんだ。）

疲弊しきった心は、命が助かったこと喜ぶことさえしなかった。
そして、そんなことより重要なことがあった。

「お・・姉え・ちゃ・・・・」

炎で焼かれた空気と煙を吸ったため、喉から声が上手く出せない。
しかし士郎が話さずとも、救助隊員たちは士郎が埋まっていた箇所の隣の瓦礫を除去し始めていた。
誰か別の子供の右手が見えていたから。

そして士郎は見てしまった

姉がいるはずのその場所にあった、姉だったモノを。

（――――――――――え？）

ソレは――――――――赤かった。
赤く、紅く、朱く、赫い。士郎が今まで見たこともないような程に、
鮮やかな――――――血の色。

力なく放り出された細い手足。

落ちた瓦礫に潰されて、腹から飛び出した内臓。

その時のものであろう、とてつもない量の出血。血溜まり。

美しい銀髪と、整った顔。

生前は愛らしかったであろう目は濁り、瞳孔が開いている。

誰の目にも、彼女――――衛宮イリヤスフィールの死は明らかだった。

それを――――――――――士郎は見てしまった。

「う・・・あ・・・・・・・ああ・・・ぁ・・・・・・・・・・・・・・・ああっ！！」

――――――――嘘だ。

（嘘だ・・・嘘だ・・・嘘だ・・嘘だ嘘だ・・・嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ・・・・・嘘だっ！！！！）

「うあああああああああああああああああああああぁぁああああぁぁあああああああああああああああああああああぁぁぁぁあぁあああああぁぁああぁぁああああぁぁあっっっっ！！！！！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

その日は、今思い出しても腹が立つくらいに。

忌々しいほどに。

―――――――――――――――綺麗な夕焼けだった。

プロローグ2　絶望の慟哭（後書き）

今回でプロローグは終了。

次回から麻帆良です。１１年後です。士郎１９歳。

まだネギは来ません。

２－Ａのみんながまだ中１くらいの時期です。
クラスは・・・やっぱ１－Ａ？だよね多分。

うっわどうしよう・・・
日常とかギャグとか書けんし（つか書いたことない）。
バトルも書けんし（書いたことない）！！

うわぁ・・・。よく「小説書こう」とか思ったな俺・・・・・。

・・・ガムバリます

第1話　衛宮士郎の一日・早朝（前書き）

・この小説は主人公が「衛宮士郎」となっていますが、実際はほぼオリ主と化しています。
・ストーリーが作者の自己満足で進んでいきます。
・作者はネギま！もＦａｔｅもある程度しか知りません。
これらのことをふまえた上でお読みください。
こんなモン読めねえよ！！という方はお戻りください。

第1話　衛宮士郎の一日・早朝

チチチ・・・チュンチュン・・・

「んーーー・・・眠い・・・・・。」

窓の外から、鳥のさえずりが聞こえてくる。
ここに来たばかりの頃は人形だらけで窓もない部屋で寝ていたので待遇が良くなったことに喜ぶべきなのだが、・・・朝は苦手だ。
鳥さんたち、もう少し静かにしてくれ。

時計を見ると４時５３分。目覚まし時計のアラームが鳴るまで、あと7分。
あと5分、と言って二度寝したが最後。寝坊することが確定してしまうのだと
自分に言い聞かせ、悪魔（睡魔）が宿る布団から脱出する。
くっ、このベッドに潜んでいるのは爵位級の悪魔に違いない。
候爵・・・いや、公爵か！？

アホな思考を止めて目覚ましのセットを解除し、一階へ向かう。

「衛宮士郎」は朝に弱くなかったんだけどな・・・と苦笑する。
ときどきこうして比べてしまう。

――――――――――自分と「彼」は、違う存在だというのに。

そんなことを考えながらうがいして顔を洗い、キッチンへ向かう。
今日の朝食はなににしようかな、と・・・誰かいる。や、心当たりはあるのだが。

「おはようございます、士郎さん」
「おはよう、茶々丸。今日も早いな」

彼女の名前は絡繰茶々丸。この家の主であるアイツの従者のひとりだ。
メイド兼戦闘用女性型ロボット（ガイノイドというらしい）であり、魔法使い（ミニステル・マギ）の従者でもある。

「指定された時間で自動的に起動しますから」
「・・・・便利だな」

流石ロボット。

「それで、今日の朝食はどうしましょう士郎さん。お米はいま炊飯器にセットしたところです」
「じゃ、今日の朝メシは・・・」

――――――――――――――――

「あ、もうこんな時間か。じゃ、茶々丸、そろそろ行ってくる」
「はい、わかりました。いってらっしゃいませ」

ジャージに着替え、準備運動も兼ねてジョギングで世界樹へ向かう。
ときどき新聞配達をしている娘と会うのだが、今日は出会わなかった。

世界樹前の広場に着くと、女の子が木刀で素振りをしていた。

「おはよう、刹那。待ったか？」
「おはようございます。私が早く来過ぎただけなので、お気になさらず」

この真面目そうな、凛とした雰囲気の娘は桜咲刹那。
俺の幼馴染で、妹分で――――恩人の一人だ。

だから、こんな堅っ苦しい話し方でなくてもいいのにといつも思うのだが、
それが刹那（コイツ）なのだから仕方ないか。

「んじゃ、始めるか――――――――『投影開始（トレース・オン）』」

俺が編む幻想は、ただの竹刀。だが、それだけでは終わらない。

――――――――創造の理念を鑑定し、
――――――――基本となる骨子を想定し、
――――――――構成された材質を複製し、
――――――――製作に及ぶ技術を模倣し、
――――――――成長に至る経験に共感し、

――――――――蓄積された年月を再現し、

――――――――あらゆる工程を凌駕しつくし、

ここに、幻想を結ぶ――――――――――――!!

チャラッ・・・・・・

竹刀の柄に虎のストラップが現れる。うむ、会心の出来だ。
そしてそれを見た瞬間、刹那の顔が引き攣る。

俺は訓練で竹刀を使うときは、いつも二種類のうちどちらかのストラップをつけている。
師匠として真面目に稽古をつけるときは獅子を
ちょっといぢめ・・・ゴホン、厳しく鍛えたくなったら虎を。

刹那はイジると面白いのでつい、いぢめてしまうのだ。

さて、心を鬼にしてやりますか。

「えっちょっ、士郎さ・・・ひっ!?　ひゃあああああああ――
――――!!!」

刹那の悲鳴が広場にこだました。

第1話　衛宮士郎の一日・早朝（後書き）

原作キャラのセリフが難しいです・・・。このキャラはこんな話し方しないんじゃないか？と、よく手が止まってしまいます。二次小説難しい～。

はい、士郎が麻帆良に来ました。来てから半年以上経ってる設定です。さらに、

申し訳ございません。前回の予告で「士郎１９歳」と書きましたが、１８歳の間違いです。

それでは、次回をお楽しみに。

第2話　衛宮士郎の一日・朝（前書き）

・この小説は主人公が「衛宮士郎」となっていますが、実際はほぼオリ主と化しています。
・ストーリーが作者の自己満足で進んでいきます。
・作者はネギま！もＦａｔｅもある程度しか知りません。
これらのことをふまえた上でお読みください。
そんなモン読めねえよ！！という方はお戻りください。

第2話　衛宮士郎の一日・朝

今、キッチンには髪を湿らせた主夫（おとこ）が楽しそうに作業をしている。

「～～～～～～♪」

世界樹前広場から帰ってきてシャワーを浴び、いま俺は二人分の昼食用の弁当を作っている。
俺が住み込む以前は専ら学食、ときたま茶々丸の作った弁当を食べていたらしいのだが
半年ほど前から家主が俺製の弁当を希望したのだ。
俺の料理を食べたいのいうなら断る理由はない。料理人冥利に尽きるというものだ。

――――――――――――――――

「・・・なんの真似だ？何故貴様が朝食を作っている？そもそも料理ができるのか？」

「言ったな？こう見えて料理には自信がある。おとなしく座って待ってろ。さっきのセリフ、後悔させてやる」

「はっ、そこまで言うのならいいだろう。
ただし、私の舌を満足させることができなければ――――――
そのときは・・・・・（ニヤリ）」

えっ？なに！？「そのときは・・・・・」の続きは？

その笑顔はなんデスカ――――――――――！！？

――――――――――――――――――――

ああ、あのときは怖かった。しかし、俺は勝った。アイツの悔しそうな顔は今でも覚えている。

その後、渋々といった感じで「美味い」との御言葉を賜ったのだ。

そしてそれ以来、この家の朝食を俺と茶々丸で担当している。

「士郎さん」

「・・・またか。」

――――――――――あの吸血姫は。

「わかった。いま行く。朝食を皿に盛りつけておいてくれ」

「申し訳ありません。最近、私ではなかなか・・・」

「ああ、気にすんな。茶々丸は悪くないんだから」

そう、あのわがままなお姫様が悪いのだ。

とはいえ茶々丸（かのじょ）は真面目すぎるので、主（あるじ）に過ぎたことができないのだ。

ノックもせずに目的の人物の寝室へ侵入し、彼女の毛布をめくる。

そして移動中に投影しておいたソレの力を開放する。

「――――――――――我（ノリ・メ・タンゲレ）に触れぬ」

赤い布がひとりでに動き出し、少女を拘束する。

「っっ！？」

やっと起きたか。ーーーーーーが、遅い。

「よっ、おはようエヴァ。」

出来るだけさわやかな笑顔で言う。おお、青ざめてる。

「しっ、士郎！？もうそんな時間か！！わかった！！いま起きるから――――――」

「茶々丸が朝食の準備をして待ってるぞーーーレッツ・ゴー」

ーーーーーーーーーーーーーーーフィーーッシュ。

「うあっ！士郎っ・・・やめっ、痛っ！！ドアにぶつけるなっ！！・・・っ！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

彼女の名前はエヴァンジェリン・A・K（アタナシオティ）・マクダウェル。

金の長髪と青い眼を持つ、見た目小学生くらいの女の子だ。

しかしその正体は約６００年の時を生きる「吸血鬼（ハイ・ディライトウォーカー）の真祖」。

「闇（ダーク・エヴァンジェル）の福音」、「人形使（ドールマスター）い」など、多くの

異名を持ち、世界の裏側に生きる魔法使い達に恐れられる、歴戦の

魔法使いである。

そして彼女は、俺が魔法に関わるきっかけとなった人物であり

――――――――俺の、初恋の女(ひと)である。

第2話　衛宮士郎の一日・朝（後書き）

本編最後の文章について。

――――――ウチの士郎くんはロリコンじゃありません！！（笑）

エヴァちゃんとは12歳の時に会っているのです。
（エヴァは覚えていない。士郎も再会するまで忘れていた）

「衛宮士郎の一日」編が終わったら、士郎のプロフィールとか能力表を
書いて投稿しようと思います。

ああ・・・。過去編もいつか書きたいナァ・・・。

ていうか自分、文章がダラダラしてますね。
「衛宮士郎の一日」なんてホントは一話で終わる予定だったのに。
短くまとめられるようにしなきゃ・・・。

愚痴ばかりスイマセン。
それでは次回をお楽しみに。

第3話　衛宮士郎の一日・日中（前書き）

・この小説は主人公が「衛宮士郎」となっていますが、実際はほぼオリ主と化しています。
・ストーリーが作者の自己満足で進んでいきます。
・作者はネギま！もＦａｔｅもある程度しか知りません。
これらのことをふまえた上でお読みください。
そんなモン読めねえよ！！という方はお戻りください。

第3話　衛宮士郎の一日・日中

あの後の朝食は、エヴァが睨みつけてくる以外は和やかに進んだ。
しかしな、エヴァよ。ごはんを頬張りながら睨んでも、迫力など皆無なのだよ！
見た目とあいまって、むしろ可愛い。
しかし、サラダにつけたあの自家製ドレッシング。なかなかの出来だったな。次もアレでいこう。

――――――――――――――――――――

「さて、そろそろ行くかな」

店に行く準備を整え、戸締りをしてから家を出る。

エヴァと茶々丸は学校だ。

約２０年前に終結した、魔法世界（ムンドゥス・マギクス）の大分裂戦争。
その大戦を終わらせた英雄「千の呪文の男（サウザンドマスター）」にかけられた呪いによって
もう１０年以上も中学生をやっているそうだ。

そのことで、エヴァはことあるごとに不満をもらすが
惚れたからってストーカーまがいのことをしたエヴァも、
しつこいからって呪いで相手を縛った　千の呪文の男（サウザンドマスター）も、
どっちもどっちだと思う。

「悪事から足を洗ってほしい」という思いには賛成だが、３年で呪いを解きに来るという約束を

破り続けていることを考えると・・・やはり彼が悪いか。

――――――――――――――――

俺は喫茶店を経営している。

「喫茶店アルトリア」。

豊富なメニューと安さがウリだ。味でも負けるつもりはない。

少しずつだが人気上昇中。時間帯によっては忙しくさせてもらっている。

――――――――カランコロン。

「いらっしゃいませ・・・って、タカミチさんじゃないですか。いつ帰ってきたんですか？」

「たった今だよ。予定よりも早く案件が片付いてね。ここで遅めの朝食をとってから
学園長に報告というワケさ」

タカミチ・T・高畑。麻帆良学園女子中等部の教師で、学園都市の広域指導員。

NGO団体「悠久の風」に所属し活動している。そして、この麻帆良を護る「警備員」

――――「魔法先生」のひとりである。

「そういうことですか。じゃあどうします？がっつりいくか、昼まで保つ程度に軽く食べるか」

「そうだな・・・。唐揚げ定食を頼むよ。」

とまあこんな感じに魔法先生が来たりもする。
事情を知っている人間の店のほうが落ち着く、ということなのだろう。

・・・・

タカミチさんが店を出たあと。

――――――――カランコロン。

「いらっしゃいませ・・・・・・。」

「元気かのう、士郎や。」

――――――――なんでさ。

この麻帆良学園都市を統括する学園長、近衛近右衛門はときどき仕事をさぼってここに来る。
だから、ここに来ることはおかしくない。
しかしだ。
ここからまっすぐ学園長室に向かったはずのタカミチさんと学園長室からまっすぐアルトリア(ここ)に来たはずの学園長が
――――何故すれ違わない？

考えられるのは・・・・・。
「おじいちゃん・・・・・・」
おもいっきり義理の祖父を睨みつける。
「じ、じゃって、タカミチくんは真面目じゃから、見つかったらそのまま学園長室に
連れ戻されるんじゃよぅ・・・。」
やっぱ隠れてたのか・・・・。
「だからって、出張帰りで疲れてる人に疲労を上乗せするような真似をするんじゃない！」
「うっうっ・・・・。昔はこのかや刹那くんと一緒に遊んでおったあのかわいい士郎は
どこへ行ってしまったんじゃ・・・・・・・反抗期かのう？」
「黙れジジイ」
いつも通り紅茶を出して、とっとと帰ってもらおう。
ああ、茶葉を選ぶのも面倒クセェ。

――――――――――――――――――――――――――もうこんな時間か。
いま客は店内にいない。まだ営業時間中だが、このまま客が来ないようなら早閉まいして
茶々丸の晩ゴハンを食べるのもアリだなー。と考える。
喫茶店アルトリア。忙しい時はとことん忙しいが、暇な時はこれでもかというくらい暇になる。

よし、そのプランを採用。さっそく片づけて――――――

――――――――カランコロン。

「土郎や、また来たぞい。今度は先生たちも一緒じゃ。席は空いておるかの？」

くっそおおおおおおぉぉぉぉぉぉおおおおおおお！！！このジジイイイイィィィィィイ！！！！

その気になったときに否定されると、悔しくなるものである。

その後、土郎は八つ当たりとして日中のことをタカミチとしずな先生にバラしてやった。

ざまーみろ。

第3話　衛宮士郎の一日・日中（後書き）

終盤の展開がちょっと早い・オチがムリヤリ・・・・ですね

アルトリアで飲んでいる魔法先生たちを書いたほうがよかったかなー

士郎は近衛家に引き取られたので、学園長はおじいちゃんです。

「唐揚げ定食」。ホントはトンカツ定食にしたかったんだけど、他のＳＳで
トンカツ定食食ってるタカミチさんがいるのでやめました。

この小説、人物の会話少ねえ・・・。

ではまた次回。

第４話　衛宮士郎の一日・夜（前書き）

・この小説は主人公が「衛宮士郎」となっていますが、実際はほぼオリ主と化しています。
・ストーリーが作者の自己満足で進んでいきます。
・作者はネギま！もＦａｔｅもある程度しか知りません。
これらのことをふまえた上でお読みください。
そんなモン読めねえよ！！という方はお戻りください。

第4話　衛宮士郎の一日・夜

――――――――夜。それは魔が跋扈する時間(とき)。

古来より魔性の類は群れを成し、悪鬼羅刹、魑魅魍魎は人々に恐れられた。

長い年月を経て文明が発達し、人々は魔と神秘を信じなくなった。

それに伴い、神秘は力を失い、鬼や悪魔は姿を消していった。

だがそれは、あくまで”普通”の場所の話。

日本有数の霊地であるこの麻帆良は、現代においても鬼や悪魔が現れる。

霊地だから、麻帆良学園都市の正体が関東魔法協会だから――――などの理由で

この地を狙う者たちが鬼(かれら)や悪魔を召喚するのだ。

そしてそんな輩からこの地を護るのが

”警備員”――――――「魔法先生」と「魔法生徒」である。

（・・・俺はどっちなんだろうな？）

そんなことを考えながら、押し寄せる悪魔に
矢を放つ。

――――――――――――――――――

士郎はビルの上に居た。
麻帆良の郊外にほど近いエリアの中、程よい高さのビルを探し、陣取る。

そこからの超長距離・超精密射撃。それが士郎の麻帆良（ここ）でのバトルスタイル。

「お、来た来た。んじゃ、こっちもぼちぼちいきますか――――――『投影開始（トレース・オン）』」

その手に現れるのは、ツヤのない漆黒の洋弓。持ち手にはナックルガードのようなものがついている。

矢を番え、射る。射る。射る。射る。射る射る射る射る射る射る射る射る射る。

射程距離は４～５ｋｍ。士郎が中ると思えば中る。

そして常人ではありえない高速連射。

その異常な射撃能力を以て、今夜も敵を殲滅する。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

（そろそろ・・・打ち止めか？）

悪魔たちが攻めてこなくなって数分経つ。
少なくともこの区域への侵攻は終わったようだ。

「ーーーーーーーーーーっっ！？」

ここ麻帆良学園都市には、魔の力を封じる「学園結界」が張られている。
強大な力を持つ者は結界の中で弱体化し、
結界の中で活動できる最低限の力しか持つことを許されない。
なのに。

（なんだこの魔力は・・・？結界の制限を受けているとは思えない・・・！）

魔力探知を全開にする。

（一番でかい魔力は・・・・っ）

ーーーーーーーーーーーーぬらりひょんがいた

しまったあああああああああっっ！！
学園最強（おじいちゃん）の魔法使いを忘れてたぁーーーーーーーーーーーーー！！！

近衛近右衛門。彼こそがこの麻帆良学園で最強の魔法使いである。
・・・・普段はそのことを全く感じさせないが。

ええい、次！二番目にでかいヤツ！！
エヴァは魔力を封印されてるから間違っても探知に引っかからないだろう。
さっきみたいなのはもう御免だ。

（ーーーーーーーみつけた！
ここから充分見える距離だ。近くに誰か居るな・・・・・っ！！！）

――――――――――――刹那！！？

桜咲刹那が、力なく倒れていた。

第４話　衛宮士郎の一日・夜（後書き）

くそう・・・刹那にいい役回りが来ない・・・。
ちなみに、刹那が誰かにやられちゃってる原因の一端は士郎にあります（笑）
朝のスパルタが効いているのです。

麻帆良防衛において士郎はあまり接近戦をしません。弓で足りるから。

次回、士郎はほとんど出ません。ほぼ出ません。

刹那メインです。負けちゃうけど・・・・油断で・・・。

・・・マジで刹那にいい出番ないな・・・刹那編作るか・・・？

ではまた次回。

・・・と、お知らせがあったんだった。

大学が学期末なので、更新ペースが落ちます多分。
連続で投稿することからわかるとおり、ガッコは最近サボり気味です。
なのでヤバイのです。
親に成績表見せたくねえ・・・・。

では次回。

第5話　衛宮士郎の一日・極夜（前書き）

忙しいけどなんとか更新。だって書いてて楽しいんだもん。つい書いちゃう。

小説のタイトル変えました。前のタイトルは思いつきだけでパパっと決めたので、実はずっと気にしていたので。

＊２０１０年１０月２９日、一部改訂。名称のみ変更したので内容は変わってません。にしてもこの頃は・・・・。駄文だなあ（今でもそうだけど。この頃は特にっていう話です）。

第5話　衛宮士郎の一日・極夜

ここら一帯の悪魔をすべて倒した後、そいつは現れた。

妙な悪魔だ。

その悪魔を見たとき、刹那はそう思った。

目の前の悪魔は人の姿をしている。魔力はそれほど大きくない。
結局、妙な感覚の正体はわからない。
でも、わかる。コイツは――――強い。

得体の知れない相手と長々と長期戦をするつもりはない。
先手必勝。

一瞬で敵に接近し、愛刀「夕凪」で一気に斬りつけた。

「神鳴流奥義――――『斬岩剣』！！！」

――――――――ガキイィンッッ！！

「っっ！？」

――――――――なんだ今のは。「硬い」！！
腕が痺れている。

悪魔のなかには硬い肉体を持つ者もいるが、コレはそんな代物ではない。

（私はいったい、何を斬った――――――――！？）

「・・・結界ですよ」

「え？」

刹那の心を読んだかのように悪魔が答える。

「この麻帆良に攻め入る為に作った術式、その試作品だそうです。我々の力を封じる
忌々しい結界。その効果を中和し、私を護る盾となる。
それが、いま私が纏っている守護結界『悪魔の神殿（デーモニウム・テンプラム）』。
フフフ・・・今回の召喚主はなかなかのやり手で嬉しい限りです」

――――――馬鹿な。ありえない！

この学園結界は莫大な電力を消費して展開している。それに抗う結界を一人で維持し続けるなど、並みの術者ではない。少なくとも”やり手”というレベルではない。

そもそも結界というのは”場”に張るものであって”特定の人物”に張るものではない。

魔法障壁のように人物の動きに追従する結界など、聞いたことがない。

そして、斬岩剣を防がれた。

しかし、それほどの結界を張れる術者が、なぜ自ら攻めて来ない？

魔性の存在でなければ学園結界の影響は受けない。

コイツの召喚主は、人外なのか？

「戦闘中に考え事とは、感心できませんね」

――――――接近されていた。

（しまっ・・・・！）

悪魔の右ストレートを、辛うじて夕凪で防御する。

そして、刹那は吹き飛んだ。

「～～～～～～～～～～～～！！！」

なんてパワーだ。夕凪が折れなくて助かった。

（こちらの攻撃は通さないというのに、向こうからは攻撃できるのか。なんて厄介な。

どうにかして奴のいう『守護結界』とやらを破らなければ――――――）

「・・・終わりです。」

「!?」

悪魔が、吹き飛ばされている刹那に――――――追いついた。

吹き飛ばされた圧力、先ほどの攻撃で痺れた腕。

刹那は、その拳を防ぐことが――――――出来なかった。

――――――バキボキッ・・・ミシッ・・――――――
――

――――――――――――――――――――

・・・夕凪は離さなかった。でも・・・駄目だ。体に力が入らない。

こんな・・・ところで・・・・・。

私には・・使命が・・・・・・・。

「おや、まだ生きているようですね。これほどの力を持って召喚されたのは久しぶりですから、加減を間違えたのでしょうか？」

申し訳ありません、お嬢様・・私は・・もう・・、

お嬢・・様をお守り・・・・することが・・・・・できません・・・・。

士郎さん・・・お嬢様を・・・どうか・・・・っ・・・・。

「言っておきますが、助けは来ませんよ。この守護結界は、認識齟齬の効力もあるそうですから。魔法使いさえも誤魔化せるほどだそうです。それでは、とどめを刺しましょう」

ごめん、このちゃん――――――――――――

「――――――――――――――――――――――――『偽・螺旋剣（カラド・ボルグ?）』」

刹那は、意識を手放した。

第5話　衛宮士郎の一日・極夜（後書き）

〜補足〜

守護結界『悪魔の神殿（デーモニウム・テンプラム）』。

・ついに完全オリジナル設定を出してしまった・・・。

魔法障壁のように特定の人物の動きに追従する、動く防御結界。

なんじゃそりゃ。そんなモンあってたまるかい・・・って

固有時制御（術者の体内に展開する結界）の親戚か!?・・・違うか。

このオリジナル魔法も今シリーズのストーリーも今後の伏線にする予定。

あと補足。

・魔法使いを騙せる認識齟齬結界が士郎に効かなかった理由は次話で記述します。

・そして今回の話。刹那が弱いのではなく、悪魔が強いんです。

相変わらず忙しいので、次の更新がいつになるかはわかりません。

それでは次回。

第6話　衛宮士郎の一日・深夜（前書き）

ナイス海の日。連休。それは約束の刻。

サボるのとは違う。あんな後から休んだ分のツケが来るような紛い物とは違う！！

「休日」という大義名分を以て俺は家に引きこもる！！

でも天気が良かったら古本屋に行ってネギま！読もうかなと思います（もしくは買う）。

オスティアでクルト元帥が伸珍鉄自在棍で壁に叩きつけられる辺りから真面目に読み始めたので、序盤の知識が残念なのですよ。

それでは長かった「士郎の一日」編、最終話です。

第6話　衛宮士郎の一日・深夜

「グッ・・・・ガッハァ！！！」

悪魔が血を吐く。

「そ・・・んな・・？どこから・・・？まったく気配を・・・感じないの・・・・に」

士郎の剣は『守護結界』ごと悪魔の身を貫き、

――――――――――悪魔の腹には、風穴が空いていた。

――――――――――

何者だ？アイツは。刹那がそう簡単に負けるとは思えない。

それに、なぜ誰もヤツの侵入に気づかない？ほど近い俺でも気づけたのはついさっきだ。

そして学園結界内であの魔力量。何か妙な能力でもあるに違いない。

援軍を呼ぶ時間はない。グズグズしていては刹那が殺られる。

ヤツの能力はわからないが――――――――俺がやるしかない。

士郎が悪魔の存在に気づけたのは、士郎が”世界の異常”に敏感だから。

その能力を以て「『学園結界』の領域に侵入した”異物”の存在」を感知した。

――――異世界（そのちから）の魔術の正体は隠しとけ。変なヤツらに狙われるだろうからな――――

昔、師匠に言われた。実際、その通りだと思う。

俺の能力を知っているのは、師匠とエヴァのみ。

だから、誤魔化す。魔力を使って幻想を編むのではなく、

魔力を以て、剣の丘から剣を呼び出す。

「――――――来（アデアット）たれ！！」

呼び出す剣は、「硬き稲妻（カラドボルグ）」。
ケルト神話の英雄フェルグスが使ったという伝承を持つ剣。
フェルグスはこの剣の一振りで３つの丘を薙ぎ払ったという。

我が骨子は捻れ狂う。
「――――――――――Ｉ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ．」

呪文を唱え、剣を矢へと改造する。バキバキと軋む音をたてながら、
剣は螺旋を描きだす。
完成したのは、捻れた剣（や）。

「たとえ剣として作られた物でも、矢として使われたのなら、それは矢だ」

剣（や）を弓に番え、狙いを定める。

――――俺が中ると思わば中り、

――――俺が外ると思わば外る。

――――――――弓の究極、『正射必中』。

浮かんだのは中るイメージ。ならば――――――――

衛宮（オレ）士郎が外すなど、有り得ない！

真名を唱え、宝具の力を開放する！！

「――――――――――――――――――――「偽・螺旋剣（カラドボルグ）」！！」

銀の閃光が、夜の闇を切り裂いた。

――――――――――――――――――――

「ッガアアアァァアァアアァア！！」

電流のようなものが、悪魔の身体に奔る。

護りは既に破られた。学園結界によって、その力を制限される。

腹に風穴を空けられ、魔力を封じられた彼は音をたててその場に倒れた。

彼は理解できない。

――――――――なぜ私は倒れている？
――――――――なぜ体に穴が空いている？
――――――――あの盾が、破られた？

あの少女にとどめを刺すところだった。
あのとき私は確かに”勝者”だった筈なのに。

（だというのに。今の、私は――――――――）

体に突き刺さる冷徹な殺気に、思考を止める。

（ああ、そうか。）

きっと、麻帆良（ここ）に侵入した時から決まっていたのだ。

――――――――この、結末は。

風を切る音がする。

姿も見えぬ敵対者に、敬意を表して――――――――

（――――――――私の、敗北です。）

飛来した流星は、悪魔の頭部を破壊した。

――――――――――――――――――――

「ん・・・・・・・・。」

「お？　起きたか？」

「・・・え？士郎さん？」

（えっと・・・私は・・・・そうだ、あの悪魔に――――――――――）

「あの・・・あの悪魔は、士郎さんが・・？」

「ああ、俺が倒した。だから安心しろ」

「・・・はい・・・・って、」

刹那は士郎におんぶされていた。

「っひゃあああああぁぁぁぁ！！おっ、おろっ、降ろしてくださ

い！！！」

「こら、暴れるな！もう治したけど、オマエ大怪我してたんだぞ？大人しくしてろ！！」

重傷だった。肋骨はほとんど折れていて、内臓もボロボロだった。
刹那の傷は全て遠き理想郷（アヴァロン）で治療した。
俺はカラドボルグもアヴァロンも実物を見たことはない。
「彼」の固有結界の中で見ただけだ。でも、衛宮士郎にはそれで充分。

「そりゃ、俺みたいなヤツにおんぶされたくないのはわかるけどさ・・・」

しかし、この状況。暴れる少女をおんぶする男。
見る人が見たら人攫いと勘違いされるかもしれないのだ。頼むから大人しくしてくれ。

「いえ、そうではなくて・・・少し恥ずかしいというだけで、その・・・・・
士郎さんにおんぶされるのが嫌というわけでは・・・・ゴニョゴニョ・・・・」

刹那は顔を赤くして何かを呟いている。

（なんかブツブツ言ってるけど、まあ、大人しくなってくれて助かった。）

そんなこんなで、女子寮の前に着いた。さすがに中に入るわけには

いかないので、
そこで降ろす。

「すみません士郎さん。わざわざ・・・」

「あー、気にすんなって。俺が勝手に運んだだけなんだから」

刹那は少し真面目過ぎる。さっきも「私が不甲斐無いばかりに・・・」などと呟いていた。
普段からちゃんと息抜きできているのだろうか？
なので、今度アルトリア(店)に来たらサービスすることにした。
刹那は始めは断ったが、笑顔で了承してくれた。

「じゃ。おやすみ、刹那」

「はい。おやすみなさい」

こうして俺は帰路に着いた。

――――――――――――――――――――

「遅い！」

「マスター、士郎さんはお疲れですから・・・」

開口一番。家に帰ったら、エヴァが怒っていた。なんでさ？

「いったい何をしていた？いつもより1時間ほど遅いではないか！！」

ああ。背中の刹那を起こすわけにはいかないから、歩いて寮まで送ったからな。

ていうか、もしかして・・・

「エヴァ、俺が帰って来るのを待ってたのか？」

「！？」

なんか焦ってる。図星か？

「ち、違う。そんなわけないだろう。私はここで読書をしていただけだ」

「はい。マスターはリビングで読書をしながら士郎さんの帰りを待っていました」

「っ！？コ、コラ茶々丸！！！」

「そうなのか？」

「はい。マスターは時折、時計に視線を向けながら舌打ちを・・・」

エヴァに視線を向ける。

「ち、違う！確かに何度か時計を見たが、士郎の帰りが遅いとか、
早く帰って来いとか、
少しだけ心配してたとか、そんなことはない！！！」

――――――ポン。

エヴァの頭に手を乗せる。

「ありがとうな。心配してくれて」

そのまま頭を撫でる。

「ん・・・・むぅ・・・・・・・」

顔を赤くして押し黙ってしまった。うん。可愛い。

茶々丸がそれを羨ましそうに見ている。

「フ、フン！私はもう寝るぞ！！茶々丸！戸締りを忘れるなよ！！」

「おやすみ、エヴァ」

「はい、マスター。おやすみなさいませ」

バタバタと音をたてて部屋へ向かうエヴァ。

さて、俺ももう寝るかな。おじいちゃんへの報告は明日でいいだろ。

・・・・ん？

「・・・・・・・・・・。」

茶々丸が物欲しそうな目でこちらを見ている。

士郎は少しだけ考えてから、茶々丸の頭を撫でた。

「おやすみ。茶々丸」

「・・・おやすみなさい、士郎さん」

そんなやりとりを交わし、士郎は自分の部屋へ向かう。

リビングを出るとき、後ろから「ぽひゅっ」という音が聞こえた気がした。

そして士郎は眠りにつく。

こうして、衛宮士郎の一日が終わる。

「――――オイオイ、俺様ノ出番ガネエジャネーカ」

忘れてました。

第6話　衛宮士郎の一日・深夜（後書き）

〜補足〜

・フェルグスは同じケルト神話の英雄クー・フーリンの養父であるという説があるのですが、この2人は友人・親友であったという説もあるみたいです。よくわかりませんが。

父親でもあり友人でもあったってことでしょうかね？

いや、長い「一日」だった。まずはそれでしょう。

表現がくどい。もっと人物の会話が欲しい。会話ないと筆者が書いててつまらん。

なんとか、少しずつでも改善していきたいです。

はい、オリジナルキャラとオリジナル展開。内容の陳腐さに赤面します。

これは今後のオリジナル展開の為の布石です。

あの結界魔法を作った術者にしてあの悪魔の召喚主は不明のままです。

まあ、この伏線が回収できる頃まで飽きずに書き続けていればの話ですがね。

コレが意味を成すのは。

出来る限り続けたいとは思いますが。

それでは次回。

―０１話　設定１　士郎のステータス（’１０．１２／１６　改訂）（前書き）

徹夜明けなのに眠くない。徹夜明けなのに眠れない。なので更新。

設定シリーズ第一弾。

＊２０１０．１１／１７に大幅改訂しました。
＊２０１０．１２／１６に更に改訂。

－０１話　設定１　士郎のステータス（’１０．１２／１６　改訂）

主人公：衛宮士郎（以下を読めば判る通り名前と諸設定以外はオリ主）

・誕生日４月６日

・原作ストーリー開始時１９歳

・身長１８４ｃｍ　体重７４ｋｇ

Ｆａｔｅ風ステータスで表示したかったけど、あれよくわからんので止めました。

・魔力量：木乃香の３／４程度（原作開始時）→後に木乃香の４倍程度になる（予定）

《外見》

：赤髪紅眼。Ｆａｔｅ原作の士郎よりはナギやネギの髪の色に近い（同じではない）。

：顔立ちは整っている。見る人によって「普通」「イケメン」に評価が分かれる。

：黒・赤系統の色の服を好む。

《魔法》

：普通の魔法はあまり使わない（使えないのではなく）。得意属性

は光・火・闇。

《技法》

：気、瞬動、虚空瞬動は習得済み。咸卦法を１５秒間だけ使用可能。

《固有技法》

○魔術

：禁呪・固有結界「無限の剣製（リアリティ・マーブルアンリミテッドブレイドワークス）」

魔術。世界を術者の心象世界で塗りつぶし、結界内は元の世界とは異なる理に支配される。

「無限の剣製」は士郎が一度でも視認した剣を登録し、結界内に貯蔵する。

展開すれば黄金の朝焼けに照らされた、無数の剣が突き立つ赤い荒野が現れる。

士郎はその世界の王であり支配者。あらゆる剣を一瞬で複製し意のままに操る。

：投影魔術（グラデーション・エア）

魔術。イメージを元に、魔力で（一時的に）物体を作り出す。

：解析

物体に魔力を流して物の構造を読み取る。無限の剣製の特性により、見ただけで物体の構造を理解できる（ウチの士郎は剣に限らず、あらゆるものを見ただけで解析できる）。

＊士郎は魔術（主に投影と固有結界）がバレないように剣を「来たれ」の呪文で召喚するが、これは”剣の丘から喚び出す”という概念で行っているため、無限の剣製に登録されていないものはこの呪文で取り出せない。
ただし呪文が違うだけで工程は変わらないので、通常の投影と同じように魔力を消費する。

○『無銘の刀工』《ネームレス・ソードメーカー》
コピーマジック。投影魔術とこの世界（ネギま！）の魔法をブレンドした技術。
敵の魔法を視認し、高速で解析する→呪文の構造術式を一瞬で理解する→
→相手の魔法を投影する（または、その術式を基に自分で魔法を発動する）
このプロセスを一瞬で行う技法。カウンター技としても使える。
士郎に解析・理解できない魔法は投影できない。

無詠唱で使用するが、なんちゃってラテン語で呪文を作ってみた。
強力な呪文はギリシャ語で唱えるらしいけど、それを失念してラテン語で
作っちゃったさー。

＊２０１０．１２／１６にギリシャ語に改訂。

コピー例：魔法の射手

「契約により　我に従え　模倣の王。
来れ　錬鉄の炎、神を殺す短剣！

創造主の御手、造物主の掟。魔を祓う大剣！！
鉄を打て　剣を鍛て。其はただ贋作を做る者。
『無銘の刀工』！
――――偽―魔法ノ射手！！」

←ルビを振ったバージョン。

「契約により　我に従え　模倣の王。
来たれ　錬鉄の炎、神を殺す短剣！
創造主の御手、造物主の掟。魔を祓う大剣！！
鉄を打て　剣を鍛て。
其はただ贋作を做る者。
『無銘の刀工！』
――――偽・魔法ノ射手！！」

バージョン2。

契約により
　το　σνβολαιον
我に従え
　διακονητω　μοι，
模倣の王。
　βασιλι??　τη?　μ?μηση?·
来たれ
　ερι γενηθητω
錬鉄の炎、

σφυρ?λατο　σ?δερο　φωτι?,
神を殺す短剣！
ο　Θε??　σκοτ?νει　?να　στιλ?το！
創造主の御手、
ο　Ｖｉｓｈｕｖａｋａｒｕｍａｎ　τｏ　χ?ρι,
造物主の掟。
ν?μο?　του　Ｌｉｆｅ　Ｍａｋｅｒ.
魔を祓う大剣！！
απελαθε?　?να　σπαθ?　δα?μονα！！
鉄を打て
βρ?ση　κολλ?ει　το　σ?δερο
剣を鍛て。
για　την　δημιουργ?α　εν??　σπαθιο?.
其はただ贋作を做る者。
απλ?　κ?νω　?να　ψε?τικο　πρ?σωπο.
『無銘の刀工！』
Ｎａｍｅｌｅｓｓ　Ｓｗｏｒｄ　Ｍａｋｅｒ！

→ワケわからん。

＊ホロウでアーチャーが最新式電動リール付きの釣り具を投影していましたが、ウチの士郎はバイクや自動車を投影できます。
（脳が複雑な構造把握に耐えられるほど強靭だから。乖離剣（エア）も投影可能。原作ではエアはいくら脳が耐えられてもムリなんですけどね。それくらい出来なければ師匠との修行で生き残れなかったから。）

しかし投影のレパートリーという点では勝っているが、剣製の質ではアーチャーに及ばない。

○我流陰陽術
：鬼道（ＢＬＥＡＣＨより）
修行時代に編み出した。始めは（主に師匠に攻撃を当てる為に）縛道のみを開発したが、師匠から「どうせなら攻撃用も作っちまえよ」と言われ破道も開発した。
系統的には陰陽術に魔法を足したようなモノ（という扱い）。

《スキル》
：直感－（Ａ～Ｅ）
「そんな気がする」という程度のものから虫の知らせ、未来予知レベルのものなど、精度が定まらない不安定（ランダム）な直感。

：道具作成－（Ｂ）
自分の装備等は自分で作っている。作り出される道具は一級品だが、陣地作成レベルには至らない。

：心眼（真）－（Ａ）
Ｆａｔｅ原作通りの心眼。経験に裏打ちされた戦闘論理で状況を打破する最適解を導き出す。

《戦闘時の装備》
黒いズボン、黒いロングブーツ、フード付きの黒いコートを身に纏う。
コートとブーツは特別製で、外側には対魔力の高い魔獣から剥ぎ取

った皮。
内側には竜の血で染めた布を使用している。
弱い魔法なら完全に無効化(キャンセル)し、高位の魔法すら抵抗(レジスト)する。
術式が組み込まれており、魔法発動体の役割をもつ。
魔法に対する防御力は最高クラス。
ぶっちゃけ切嗣をイメージすればてっとり早いです。
切嗣は普通の革靴にトレンチコート、中はスーツでしたが。
「来たれ」の呪文で保管場所から一瞬で転移してくる。
そのためコートの中の服はその都度かわる。
士郎が作った特製の魔法具。魔具師の才能あります。
魔法を弾くのにどうして「来たれ」の呪文で転移できるのかは気にしないでクダサイ。

これからもパワーアップします。

そしたらまたこんな感じで投稿します。

―０１話　設定１　士郎のステータス（’１０．１２／１６　改訂）（後書き）

次回も設定シリーズです。

・２０１０年１１月１７日に大幅改訂。いやあ疲れました。
・２０１０年１２月１６日に再び改訂。どんどん変わっていくなぁ。

―０２話　設定２　士郎の半生（前書き）

徹夜明けシリーズ・・・・じゃなくて、設定シリーズ第二弾。

ー02話　設定2　士郎の半生

士郎くんが辿ってきた半生です。

8歳　《事故》で両親・姉を失い、天涯孤独となる。その《事故》では7人の子供しか生き残らなかった。そして士郎は姉の死を直に見たショックで心を失ってしまう。そしてその7人の内5人が後遺症などで後に死亡することとなる。

親戚筋である近衛家に引き取られ、「近衛士郎」となる。（近衛の名を与えられたが、養子になったわけではない。しかし、実の子のように育てられた。）

9歳　近衛家で過ごす。養父である詠春は士郎の心が回復するまで療養させる

～11歳　方針をとったので、士郎はほとんど学校に通っていなかった。

木乃香や刹那とは幼馴染。このふたりが関わったある出来事をきっかけに心を取り戻す。そのため「俺はあのふたりに心を貰った」とふたりに感謝し、恩人だと思っている。近右衛門とも何度か会っている。

士郎12歳、木乃香7歳になる年に京都を離れ、麻帆良

を訪れる。

１２歳　　木乃香と共に麻帆良を訪れ、学園初等部に編入する。その年の冬に魔法の存在を知り、魔法使いを志す。士郎は目撃した魔法使いの会話を盗み聞きし、祖父（近右衛門）が魔法に関わっていると知って、魔法を教えてほしいと頼み込む。彼は何を思ったか士郎の記憶を消すことをせず、さらに士郎をメルディアナ魔法学校へ送り出す。

１３歳　　イギリスへ渡り、魔法学校へ編入。年下だらけのクラスメートの中で～１５歳　苦労する（主に精神面で）。２年飛び級した。メルディアナ魔法学校長つながりでネカネ、ネギ、アーニャと顔見知りになる。

１５歳　　冬にある事件に首を突っ込む。そのとき臨死体験した際に「無限の剣製」とアーチャーの姿、彼の記憶を幻視し、魔術に目覚める。その力で危機を退けるが・・・。

その後魔法学校を中退し、『修行』と『目的』の為に魔法世界（ムンドゥス・マギクス）へ向かう。

１６歳～１７歳　魔法世界（ムンドゥス・マギクス）で己の師匠となる人物と出会う。彼と修行しながら日々を過ごし、実力をつける。そして『目的』を果たすが、生きる目的を見失い、師匠と別れ旧世界（ムンドゥス・ウェトゥス）へ帰還する。

１８歳　　理由なく麻帆良を訪れる。そこで士郎はある人物と出会い、魔法使い
　としての自分の「原初の思い」を思い出す。そして士郎は生きる力を
　取り戻す。誰にも告げず魔法世界へ行ったためバレるとまずいと考え、
　偽名としてかつての名前「衛宮士郎」を名乗る。しかし偶然会った
　木乃香に一発でばれ、結局士郎のことは関係者全員に広がった。
　エヴァの家に居候し、喫茶店アルトリアを開業する。

１９歳　　原作開始。

・・・・うわぁ、すごい過密スケジュール・・・・・・・・・。１３歳から１８歳までが特に。

い、いや！波瀾万丈ってことだよね！？　うん、きっとそうだ！！！

これらのことを”過去編として書きたい”と以前に言ったわけです。

ー02話　設定2　士郎の半生（後書き）

次回も普通のお話じゃありません。

―03話　感想について（前書き）

徹夜明けシリーズ第三弾ッ！！

はっじまっるよぉ～～！！

チャンネルはぁ～、そのまま！！！

ー０３話　感想について

はい、今回は私の作品に寄せられた疑問・指摘について返答したいと思います。

まずは指摘から。

＊”ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅｓ　ｗｏｒｋｓ”の”ｗｏｒｋｓ”が”ｗａｒｋｓ”になっている。

＊（後日）”ｗａｒｋｓ”が直っていない。

Ａ、申し訳ございません。感想は小説を書き始めたあと少し経ってから感想を
　チェックしたので、指摘を受けていたことに気づきませんでした。わざわざ
　二度もご指摘いただき、ありがとうございました。

＊茶々丸の紹介文で「魔法使いの従者」のルビが”ミニステル”ではなく
”マギステル”になっている。

Ａ、ごめんなさい。全然気付かなかったです。
　自分は正しく打ってるつもりなんですけどね・・・。なぜ気付かない・・・・。

◎今回のこの二つの指摘、どちらも基本的な（というか、間違えてはいけない）ワードを間違えただけに、私もダメージ大きいです。

片や主人公とＦａｔｅ人気ナンバー１男性キャラの切り札の名前、

もう片方はネギま！の超基本設定。

恥ずかしくてもう書くのやめようかと思いました。１５秒くらい。

お次は質問です。マグダラの聖骸布に関する質問ばかりでしたね。

Q、マグダラの聖骸布でエヴァ（女性）を拘束できるのはおかしい。

Q、剣でもなんでもない聖骸布を能力付きで投影できるのは変だ。

という質問でした。いや、これも指摘なのかな?

＊う～ん、これはなんといいますか。

私の「マグダラの聖骸布」に対する認識は、

・マグダラの聖骸布・・・・男性に対して絶対的な拘束力を持つ

を独自解釈・拡大解釈したものなんですよ。

「マグダラの聖骸布には人間を拘束する力があり、
特に男性に対して絶対的な拘束力を持つ」

と考えていたんです。

そしてその考えを作中で使ったというわけです。
・・・女性には全く効かないんですか?

もうひとつの指摘「どうして剣以外も能力付きで投影できるの?」

この小説の士郎くんがハイスペックだからです。

あと、こんなものもありました。

”（下の感想について）聖骸布なのでエヴァになら有効では？”

マグダラの聖骸布に関する質問をした方に対する意見です。

今まで紹介したような感想を読んでへこんでいた時にこの書き込みを見つけて、

超元気貰いました。ありがとう！！いや、肯定されるって嬉しいですよね。

そしてごめんなさい。そこまで考えてませんでした。

魔力を封じられているエヴァには抜け出せねーだろって単純に思ってました。

ええと、以上で終わりです。これからもガンガン間違えるかもしれないので、

その時はご指摘宜しくお願いします。

ー０３話　感想について（後書き）

次回からまた通常営業です。

ネギが来る前に日常編を１，２本書きたいと思います。

それでは次回。

第7話　日々は穏やかに（前書き）

超難産。でした今回。忙しいってのもありますケド。

日常系は書きにくいぜ・・・シリアスだとぽんぽん進むんだけどなー。

正直、出来はイマイチなのですが・・・これが自分の限界です。

お目汚しになるかもしれませんが、よろしく読んでください。

第7話　日々は穏やかに

そこは喫茶店アルトリア。若干１８歳の少年が一人で経営・営業している小さな店。

普通ではありえない事だが、ここでは大抵のことは「麻帆良だから」で済んでしまうため

おかしいと思う者は誰もいない。中学生が切盛りする屋台もある。

そしてその喫茶店で雑務での疲れを癒す、威厳溢るる老人こそ、学園長・近衛近右衛門。

学園の皆（みな）から好かれる偉大な人「なに言ってんだ爺さん？」

学園長の言葉を遮ったのは、この店の店長・衛宮士郎であった。

「・・・遠慮がなくなってきたのう、士郎・・・。仮にも儂はお主の祖父じゃぞ？」

「だったら尊敬できるような振る舞いをしてくれよ。
少なくとも、毎日仕事サボってるうちは敬意なんて持てないっての」

「キビシイのぅ・・・この老体にゃデスクワークだけでも辛いんじゃよ」

そう言って溜め息を吐いたあと、緑茶を啜る。そして水羊羹を口に運ぶ。

「例の悪魔の召喚主じゃが、やはり特定出来んかったわい」

いま、店にはふたり以外誰もいない。

「・・・だろうな。ごめん、わざわざ調べてもらって」

そもそも、麻帆良を狙う者たちを個人まで特定するのは難しい。それでも、かなりの実力を持った人物であろうと思われるので、そのような人物が
国内へ、もしくは旧世界へ入って来たという記録がないかを調査したのだ。
士郎は茶々丸にも調べてもらったが、該当する人物はいなかった。

「一応、西の方もムコ殿に調べてもらったんじゃが・・・」

芳しくなかったようだ。もともと期待していなかったが、ここまで痕跡を隠せる辺り、
組織で動いている者達なのかもしれない。隠蔽が上手過ぎる。

「ところで・・・士郎、話がある」

近右衛門の表情が引き締まる。その目に鋭い光を宿して。

（－－－－－何か、手を打つつもりか？）

「お主、このかの事をどう思っとる？」

ーーーーーーーーは？

「どうって？」

何の話だ？

「いや、この歳になると老い先が不安になってのう・・・。
早く曾孫の顔が見とうてしょうがないんじゃよ」

「・・・で？」

話が見えない。てか木乃香はまだ中学生になったばかりだろ。曾孫って。

「どうじゃろう？また”近衛”に戻る気はないかの？」

「・・・・・・・。」

混乱し、祖父の言葉を理解するまで数秒かかる。

えーと・・・木乃香と曾孫・・・つまり出来れば早く木乃香にいい相手を見つけてほしいと。

そして俺。衛宮を名乗ってる俺にまた近衛になれっていうことは・・・・・。

おじいちゃんは木乃香と俺に・・・・・

「っはあああああぁぁぁあああああぁあ!!?」

なに考えてんだこのジジイ!?

「俺と木乃香は兄妹だぞ!?耄碌してんじゃねえよ!!!」

「フォッフォッフォ、お主は近衛の名を与えられてはいたが、実は養子に入ったワケではないんじゃよ。

・・・それと、何気に酷いこと言っておらんかのう?」

・・・・なんですと?

「つまりじゃ、お主とこのかは戸籍上は赤の他人!どうじゃ、問題ないじゃろ?」

かつて木乃香の父・近衛詠春にそうするよう進言したのは学園長だったりする。

すべては曾孫のために!!

こめかみに青筋を浮かべながら、努めて冷静に士郎は答える。

「問題だらけだ。帰れ」

この口論は1時間続き、学園長は士郎の通報で駆けつけたタカミチとしずな先生に回収された。

ーーーーーカランコロン。

ベルが来客を告げる。

「いらっしゃーーー・・・おっ、来たな」

「はい。お約束通り、ごちそうになります」

（サービスするとは言ったけど、奢るとは言ってないんだけど・・・）

店に入って来たのは刹那だった。そのままカウンター席に座る。

（まいっか。）

「何にする？ちなみに今日のおすすめは牛ステーキの赤ワイン煮込みだ」

喫茶店で出す料理ではない。

刹那は少しメニューとにらめっこした後、「半熟卵のオムライス」を注文した。

ーーーーーカランコロン。

「やあ士郎さん」

「お、龍宮」

龍宮真名。
木乃香たちのクラスメートで刹那の寮のルームメイト。
黒髪のストレートロングで褐色肌の美人。美少女でなく美人。
スタイル抜群のナイスバディ。とても中学生には見えない。
そして”こちら側”の住人である。
左目に魔眼を持つ「魔弾の射手」。裏では名が通っているらしい。
好物は餡蜜。

士郎は「ほんとに中学生か?」という疑問から、一度スリーサイズを解析で調べてみようかと本気で考えていたりする。

「龍宮?」
刹那は少し驚いている。
彼女はこの店の常連だ。ウチのスイーツが気に入ったらしい。
テイクアウトできるようにすればもっと客が来る、とまで言われた。
注文はハヤシライスと、デザートに餡蜜だ。
刹那はそれを聞いて「自分もデザートを頼めばよかった」と後悔した。

「この店にくるのは初めてか?刹那。ここで一番美味いのはスイーツといっても過言じゃない」

「くっ！」

龍宮。褒めてくれるのは嬉しいけど、俺が得意なのは和食なんだよ。あと刹那。追加注文って知ってるか？

しばらくして。

ーーーーーカランコロン。

「やっほー、しろー」

「へー、ここがこのかのお兄さんがやってるお店？」

「よう木乃香」

（一緒にいるのは・・・新聞配達の・・・・・神楽坂さん？木乃香と知り合いだったのか？）

向こうも気づいたようだ。あれ？と首を傾げている。

（おっ、お嬢様！？）

「あっ、せっちゃん！」

木乃香が刹那に気づく。

「ごちそうさまでした、士郎さん。とても美味しかったです。私はこれでーーーーー」

ガシッ

「！？」

逃げようとする刹那の腕をがっしり掴む。

「せーつーなー？まだケーキが残ってるぞー？」

「・・・・・・・・・・・・・！！」

士郎のとびっきり（きょうはく）の笑顔に、刹那は逃亡を諦めた。

なんかぎこちないんだよな、このふたり。主に刹那が。

木乃香と距離を置きたがっているようだ。なにかあったのだろうか？

二人の幼馴染・兄貴分である俺としては、ぜひ仲直りしてもらいたい。

よし。

「龍宮。その席を木乃香に譲ってくれたら料金チャラってのはどうだ？」

「のった」

はやっ。

「し、士郎さんっ！？」

「えへへー。士郎、龍宮さん、ありがとなー」

士郎の策略により、カウンターの端から刹那・木乃香・明日菜・真名と並ぶこととなった。
明日菜は事情を知らないようだが、刹那（ふたり）と木乃香の間になにかあることは察しているらしく、特に何も言わなかった。

（お、お嬢様が隣に・・・！な、何を話せば・・・・・）

――――――――――――――――――――

喫茶店アルトリア。そこに近づくふたつの影が・・・・・。

アルトリア店内。４人の女子中学生が食後のお茶を飲んでいた。

「そういえば衛宮さんってこのかのお兄さんなのに、なんで名字が違うんですか？」
立ち入った質問だが、どうしても気になってしまったそうだ。

「そーいえば話してへんかったね」と木乃香が答える。

「士郎はイギリスに留学してたんやけど、ウチが１０歳の年にホームステイ先から家出したんよ」

「「えっ！？」」
「ほう？」
刹那と明日菜はそろって声をあげ驚いている。
真名は興味深そうな反応を示す。
正確には”誰にも告げずに無断で魔法世界（ムンドゥス・マギクス）に行った”のだが。
確かに家出で間違ってはいない。が・・・なんか悲しい。
おい龍宮。「士郎さんにもそんな時代がねえ・・・」とはなんだ。
笑うんじゃない。
「そのまま行方不明やったんやけど、今年麻帆良に帰って来てな。
でもここにはじいちゃんがおるやん？
それでバレたらアカン思って名乗った名前が衛宮なんよ」
「木乃香には一発でバレたけどな」
そしてそこから学園長、詠春、メルディアナ魔法学校長にもばれてしまい、偽名を名乗った意味がなくなってしまったのだ。
まあ、実は師匠が父さんに連絡を寄こしていて、彼らは俺を心配していなかったそうなのだが。
そしてばれないだろうと高を括っていたので、この店の権利書の名義を「衛宮士郎」にしてしまったのだ。
今から変えられないわけではないが、面倒なのでそのまま衛宮を名乗っている。
魔法世界で”近衛”の名前に少しばかり苦労させられたというのもあるが。

明日菜はこの話で納得したようだ。

話が終わると木乃香と刹那はまたじゃれあいを始める（士郎にはそう見える）。

「士郎さん、さっきの家出の辺りをもっと詳しく聞かせてもらえないかな？」

勘弁してくれ龍宮。

ーーーーーーゾクッ

「っ！？」

「どうしたんだ？士郎さん」

「いやなんか、鳥肌がたったというか、寒気がしたというか・・・」

「・・・・・・・・・？」

視線を感じたのでその方向を向く。

うっ。

ーーーーー見覚えのある金髪の少女が、店のドアからこちらを睨んでいたーーーーー

（お、怒ってる・・・？）

よくわからないが、彼女の機嫌が悪いということだけは確かだ。

「マスター。入らないのですか？」

エヴァの後ろから現れた茶々丸がそう言いながらドアを開ける。
茶々丸は主の返答を待たずにドアを開けてしまったが、エヴァは何も言わずに店に入ってくる。
入ることは決まっていたようだ。

ーーーーーカランコロン。

「よ、ようエヴァ。どうしたんだ？あんま機嫌が良くないみたいだけど・・・・」

（エ、エヴァンジェリンさんっ！？）

（あ、エヴァちゃんやー）

（エヴァちゃんもここの常連なのかな？）

（・・・面白いモノが見れそうだ）

「フ、フフ・・・フ・・。いい度胸だな、士郎。」

「え？」

なにが？俺なにかしたっけ・・・・・？

ーーーーーーー桜咲刹那。近衛木乃香。神楽坂明日菜。龍宮真名。

「貴様、女を４人も連れ込んでいったい何をやっているーーーーーーーーーーーー！！！」

「んだそりゃーーーーーーーーーーーーーーー！！？」

喫茶店アルトリア。店内に楽しい声が響き渡る。

そのころ学園の女子中等部では。

しずな先生の”おかげで”溜まっていた書類を見事処理した学園長が気絶（きぜ）・・・居眠りをしていた。

麻帆良は今日も平和です。

「ーーーーーー俺ハマタ出番無シカヨ？」

しばらく無いです（予定）。

第7話　日々は穏やかに（後書き）

京都弁ムズイッス。関西弁混ざってるかも。木乃香の話し方がつかめない。

あと、エヴァにオチを頼ってる気がする。ここも改善しなければ。

感想でタグについての指摘と”ネギま！世界出身の士郎が無限の剣製を使えるのはおかしい”との指摘をしてくださった方へ。

タグについてはご意見どおり削除しました。サイレン要素はネギたちが魔法世界に行ってる間（夏休み編あたり）に士郎関連で出す予定です。

無限の剣製については、－０２話を読んで納得していただけないようでしたら、二次小説だから、と諦めてください。すいません。もし過去編を書くことになったら、そのときに詳しく記述するかもしれません。

まだまだ学期末の忙しさから解放されないので、引き続き更新は遅くなります。

というか以前まえがきで

作者はネギま！の序盤に詳しくないので原作を読んでおこうと思う。

という意図を
込めた文章を書いたのですが、実はまだ読めていません。
なので原作ストーリーに入れないのです（泣）

忙しさもあるので、おそらく8月中旬まで更新できないと思います。

（あ、これを機に過去編を書くのもアリかもしれない。）

（でも続き書きてえ～。他の二次小説作品を参考に原作編に入っちゃおうかなあ）

それではしばしの別れです。読者の皆さんも日々の生活、頑張ってください。

・・・・できれば忘れないでね

それでは次回！

一０４話　予告　『過去編・英国の吸血鬼』（前書き）

忙しい&ネギま！の勉強のため８月中旬まで更新できません、と言いましたが

あっさり破りました。いや、本格更新はまだ無理なんですけどね。

出席日数を計算したら、もう手遅れな教科がメッチャあったので、諦めました。

いや、生き残ってる教科のテスト勉強とか課題とかで充分忙しいんですケド。

そんなわけでちょっとだけ更新です。

―０４話　予告　『過去編・英国の吸血鬼』

＊以下の茶番はまだ作者のユーザ名前が「佐藤&谷口」だった頃のものです。

佐藤：こんにちは、佐藤です。

谷口：あ、ちわ～っす。谷口です。

谷口：イヤッホウゥ！！お気に入り登録件数が１００件超えたぜぇぇぇぇえ！！！！！

よってここに、お気に入り登録１００件超え記念として”ネギま！衛宮士郎異聞譚・過去編”の掲載を宣言します！！！

佐藤：１００件て・・・。嬉しいケド、他の作家さんと桁が違うね。普通もっと大きい数字の時にやるんじゃないの？こういう企画って。

谷口：るっせえなあ、やりてえからやんだよ！！

それにオメー、この作品がそんなにお気に入り登録されるまで

飽きずに書き続けられんのかよ！！

佐藤：うっ・・・・。確かに・・・・・。

で、できる限り努力します・・・

谷口：そーやって言い訳ばっかしてっから大学の単位半分以上落とすんだよ・・・・・

佐藤：ハア！？ンだとゴラァ！！

～～～～～～～～しばらくお待ちください～～～～～～～～

佐藤：えー、見苦しいところをお見せしました。

谷口：んじゃ気を取り直して。

今回は”ネギま！衛宮士郎異聞譚・過去編”の予告編をお送りしマ～ッス！！！

チャンネルはそのまま！！

士郎が麻帆良に帰って来て2度目の夏。木乃香たちは中学2年生に

なった。

士郎は平和を噛み締めながら、日々を過ごしていた。

そんな士郎のもとに2通の手紙が届く。

一通はメガロメセンブリア元老院から。

もう一通は英国・ウェールズの知人の妹からだった。

『お姉ちゃんのお墓参りに行ってあげてください』

その手紙を悲痛な面持ちで見つめる士郎。

「教えろ。イギリスで何があった」

「俺が”魔術”に目覚めるきっかけになった事件だ」

魔法の世界で魔術の力を手に入れた。

イギリスで何があったのか？

『この町に吸血鬼がいることが確認されました』

『これは、１３年前と同じだ・・・・』

『何故生きている・・・。お前はあの時死んだ筈だ!!』

『じゃ、俺が護るよ』

『ふふっ。じゃあもし吸血鬼に襲われたら、シロウくんに助けてもらうね。約束よ?』

『これは、復讐です』

『護るんだ、俺がーーーー・・・・・。約束、したんだからーーーーーーーーーーーー!!!!!』

《敵に勝つ己の姿を幻視しろ。現実で勝てないのなら、想像の中で勝て。

貴様自身が勝てないのなら、勝てるものを作り出せ》

『――――――――投影（トレース・オン）、開始――――――!!!』

15歳の少年・近衛士郎が遭遇した事件とは？

『私が憎いのなら追って来なさい・・・・・魔法世界（ムンドゥス・マギクス）まで』

～ネギま!衛宮士郎異聞譚・『過去編・英国の吸血鬼』～

乞うご期待!!

＊完全オリジナルストーリー。登場するのは冒頭・後日談を除きオリジナルキャラクターのみ。

それでも読んでくれる方はーーーーーーーー・・・。

乞うご期待！！

とっとと原作編に入れよ！！という方も・・・・

乞うご期待！！

一０４話　予告　『過去編・英国の吸血鬼』（後書き）

まず一言。ごめんなさい。

一応ネギま！の二次小説であり、原作キャラが登場すると謳っているのに、

全然ネギが出ない！！！２－Ａメンバーが出ない！！！

いいんです。主人公はもはやオリキャラと化した士郎くんなんですから、

別にいいんです！！！（開き直り）

ごめんなさい、過去（これ）編が終わったら今度こそ書きますから！！

ちなみに今回は『過去編・英国の吸血鬼』ですが、

『過去編・魔法世界』『過去編・麻帆良の吸血鬼』も構想としては存在します。

書く気はありませんが。

長ったらしくなってしまいましたね。そろそろ切り上げます。

それでは次回！！

第8話　過去編？　魔法生徒・近衛士郎（前書き）

・今シリーズは作者のオリキャラ尽くしのオリジナルストーリーとなっています。
・要点のみ纏めたため、駆け足な展開と内容になっております。
・でも長いです。後日談と合わせ１２話分くらいかかると考えています。

これらを踏まえたうえでお読みください。

なお、過去編を読まなくても今後の小説本編を理解するのに支障はありません。

それでは
『過去編・英国の吸血鬼』ー「第？話　魔法生徒・近衛士郎」
――――――どうぞ。

第8話　過去編？　魔法生徒・近衛士郎

麻帆良学園都市にある森。その中の木々と水に囲まれた一軒家。

エヴァンジェリン邸のリビングで、自分宛ての手紙を読んでいた士郎は渋い顔をしていた。

「どうかしましたか？士郎さん」

その様子を見て、茶々丸が尋ねる。それに少年・衛宮士郎は答える。

「ああ、連合の元老院からまた手紙が来たんだよ。我々の下で働けー、ってさ」

茶々丸が「ああ・・・」と納得する。手紙が来たのは今回が初めてではない。正直鬱陶しい。

「ふん、当然だろう。お前は詠春の息子なのだからな」

この家の家主にして茶々丸の主、エヴァンジェリンが言う。

「俺、養子（のようなもの）なんだけど・・・？」

「それでも、息子として育てられたことには変わりない。それを抜きにしてもお前はラカンの弟子なのだからな」

（え！？なんでバレてる！？）

「茶々丸に調べさせた。オマエ、向こうでは結構有名だぞ?千の刃の弟子。当然、元老院も知っているだろうな」

「心を読むな!!」

ていうか、元老院にもばれてるって・・・・・マジすか。

「”サムライマスターの息子”に”千の刃の弟子”。ククク・・・英雄達の遺児として売り込むには、充分過ぎるネームバリューだな?」

「・・・はぁ。だから従えって五月蠅いワケか」　嫌になるな。

まあ、こんなのは無視しておけば問題ない。

元老院の手紙はくしゃくしゃにしてごみ箱に捨てて、もう一通の手紙を見ることにする。

魔法使いが使う、映像の出る手紙のようだ。

送り主の名前は・・・・・「ラーラ・キャンベル」とあった。

「・・・・・・!!」

「?　士郎?」

その名を見た瞬間、士郎の顔が強張る。そしてそのまま封を破り、手紙を再生する。

普段の士郎だったら自室まで運んでから再生しただろう。しかし今の士郎にそんな冷静さは無かった。

一刻でも早く手紙を確認したかった。

映し出されたのは。

茶色の長い髪。腰まで届くほど長い。それをストレートロングにして流している。

人懐っこい印象の目。ブラウンの瞳。

いかにも箱入り娘という感じの白い肌をしている。

小学生くらいの女の子だ。

『えっと・・・シロウさーん!?ち、ちゃんと映ってますかー!?お久しぶりです、ラーラでーす!校長先生から日本に居ると聞いて手紙を送りました!

急に居なくなった時は本当にびっくりしま一一一一一一』

それを見てエヴァは顔を顰める。

(また女か。この女誑しめ。)

「おい士郎?このガキはいったいなん・・・・・」

いったいなんだ、と言おうとして、エヴァは言葉を失った。

その手紙を見て笑っていた士郎の顔を、見てしまった。

嬉しい？　悲しい？　懐かしい？　忘れていたかった？

「大きくなったな。ラーラちゃん」

――――――――その真意を探ることはできなかった。

『――――もうすぐそっちも夏休みですよね？ぜひ一度、ウェールズに戻って来てください！！
みんな会いたいって言ってますよ！！・・・・・・・・。あと、
――――お姉ちゃんのお墓参りも、してあげてください。』

（――――――っ！！！）

『帰ってくるときは、一度連絡してください。それじゃ、士郎さん

！お元気でーーーーー！！』

・・・・・・手紙の再生が終了した。

「そっか。もう・・・・・・三年経つのか」

そう。今年の12月で、三年経つことになる。・・・あの事件から。

「・・・・・・士郎。イギリスで、何があった？」

「マスター、それは・・・・・・」

・・・・たしかに、私は士郎の心の深い部分に踏み込もうとしている。

だが、それがどうした？目の前であんな表情（かお）をされて、黙ってなどいられるか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・フン。言いたくないのなら今は言わんでもいい。だが、いつかは話してもらうぞ」

そう言ってリビングから出て行こうとする。

「俺が”魔術”に目覚めるきっかけになった事件だ」

「「!!」」

「・・・茶々丸。お茶を淹れてくれないか」

はい、と返事をして、彼女はパタパタとキッチンへ向かう。

エヴァはソファーに戻り、士郎が話始めるのを待つ。

そして士郎が口を開く。

「―――――――俺が、15歳の時の話だ」

―――――――――――――――

産業革命をきっかけに大英帝国と呼ばれるまでの栄華を誇った国、イギリス。

その一地方、ウェールズ。そこに魔法を学ぶ場所があった。

その名は「メルディアナ魔法学校」。

「今日の授業は”呪い”についてです。
皆は呪いがどういうものかある程度知ってると思うけど、呪いについて正しい知識を知っておき、
それに安全に対処するための大切な授業です。しっかりと聞くようにね」

（なあ、知ってるかシロウ？最近、町で流行ってる噂！）

授業中にもかかわらず、後ろを向いて話しかけるのは金髪のスポーツ刈りに碧い眼の少年。

「ーーーーえー、私たちは普段魔法を使う際、精霊の力を借りることが多くあります。
そしてそれと同じように、呪いにも精霊が関係する場合があります」

（いや？知らない。ていうか今授業中だぞ）

話しかけられたのは赤い髪・赤い眼の少年。近衛士郎。
この５年生、１０歳くらいの年齢のクラスでただひとりの１５歳だ。

彼は１３歳のときにこのメルディアナ魔法学校に入学した。
そのため、歳の離れたクラスメートと魔法を学ぶことになったのだ。

メルディアナ魔法学校は7年制のカリキュラムを組んでいる。
６歳で入学し、１２歳で卒業する。
そのなかで、士郎は努力して既に2回飛び級している。
周りが年下だらけのこの状況から、一刻も早く抜け出したかった。

（おじいちゃん・・・。俺と同じくらいの歳の子が通ってるような学校に
入れてくれればいいのに・・・・！！）

そのような魔法学校があるのかは知らないが。
それに無理を言ったのは士郎なので文句は言える立場にない。

そして、このメルディアナ魔法学校の校長と士郎の祖父・近衛近右衛門が友人であることが理由で
士郎は自分がここに送られたと考えている。

（なんだ、なら俺が教えてやるよ。出るんだってよ、吸血鬼が！！）

普通は”吸血鬼”の部分を言わないでおいて焦らすものだと思うが、彼はいつもせっかちだった。

「ーーーーーあまりに強大な呪いを解呪するために、呪いの精霊を”騙す”という手法もあります。ただしその場合、その解呪は一時的な効果しか得られないことがほとんどです」

（授業中だっつってんだろうが！てゆうか、「探しに行こうぜ！！」とか言うんじゃないだろうな？）

士郎は、このランスという友人を正確に把握していた。そのうえで聞いてみる。

（あったり前じゃん！？　行こうぜシロウ！！　放課後校門前に集合な！！）

（俺も！？　そして決定！？　てかやっぱりかよ！！）

「・・・ランスくん」

（イイじゃん行こうぜ！面白そうだろ！？ロトも誘うからさ！！）

（誰が行くか！！二人で行って来い！！俺を巻き込むな！！！）

「・・・・ランス」

（シロウ・・・。俺はこんな馬鹿騒ぎをしながら、お前との友情を育みたいんだよ）

（嘘つけ。）

「・・・・・・ミスタ・オークランド？」

（行こ～ぜ～～シロ～～。お前がいると町では楽なんだよ～～顔が売れてるからさ～～）

（それが本音か！！）

「ランス＝オークランド！！！！！」

「っおわあああぁっ！！？」

我らがクラス担任、シャーリーン先生が教卓で怒りを振りまいていた。

「ランスくん！この授業は大切だから聞くようにっていったでしょ！？」

「先生！！授業はどんなものでも大事なんじゃねーの！？
この授業は～とか教師が言っていいのかよ！！」

「うっ・・・・！！・・・そうよね。その通りだわ。
ごめんね皆。こんな先生で・・・・・」

「誤魔化されないでください先生！ランスッ！！
アンタそう思ってんのなら真面目に授業受けなさいよ！！！」

撃沈された先生を援護したのがクラス委員長・マリナ＝ターナー女史。

「ハッ！！」　マリナの言でシャーリーンが復活する。

「ま、またやっちゃった・・・・・」　そして落ち込んだ。再起動まであと６００秒。

ランスとマリナはまだ痴話喧嘩をしている。

（ああ、このままベルが鳴るな・・・・・・。）

こうして、今日の授業は終わった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

今日は12月18日。クリスマスが間近に迫り浮ついた雰囲気の雑踏の中。

ーーーー士郎は町にいた。ランスのせいで。

ランスが授業時の罰として「魔法使用禁止でトイレ掃除」を仰せつかったので、その隙に逃げようとしたのだが、校門でロトに捕まった。

ロト＝ベーコン。俺・ランスのクラスメート。ランスの親友。茶色の短髪に茶色の眼。大食漢のぽっちゃり男子だ。

「フフフ・・・逃がさないよシロウくん。君を捕まえておけたらリドリー・ベーカリーのパンを一個だけ奢ってもらえる約束なんだよ!!」

お前・・・パン一つにどれだけ執着してるんだ・・・・・。

ならこちらはパンを二個奢れば済むのだが、俺の懐にそんな余裕はない。

もちろんランスにもだ。残念だったなロトよ。お前のパンは初めから存在しないのだよ!!

「そして町まで来たというわけだ」

「誰と話してるんだシロウ？」

気にするな。独り言だ。

「いねえなー吸血鬼」

「そんなそこら辺の猫を探すようなノリで言うな・・・。ていうかホントに見つける気なのか？」

「ああ。だって一回くらい見てみたいジャン？」

「軽っ・・・・」

その程度の気持ちで人を巻き込むなよ！！

「本当にこの町に吸血鬼が居ると思ってんのか？あくまで噂だろ？」

「居たとしても、まだ日中だしね～。真祖ならともかく、普通の吸血鬼が出歩いてるワケないよね」

「だよなー」

俺とロトが笑ってランスの意見を否定する。すると、

ーーーーーーーーランスが目と口を大きく開けてこっちを見ていた

まさか。

「・・・お前まさか、今が日中だって忘れてたんじゃないだろうな？」

「ん、んなわけないだろ？」

「違うよシロウくん。ランスは吸血鬼が日光に弱いってことを忘れてたんだよ」

「ぐうっ！？」

図星だった。まじかお前。魔法使いだろ。

「おう、お主ら」

俺達に声をかけたのは、帽子を目深にかぶり、杖をついて歩く老人だった。

「あ、サクス爺さん」

この老人の名はサクストン。彼はときどき俺達に頼みごとをしてくる。

報酬をくれるので大抵は引き受けている。ちなみに彼は魔法使い。もう引退したらしいが。

「うむ。今回も頼めるかのう」

――――――探してほしいものがあるんじゃよ。

第8話　過去編？　魔法生徒・近衛士郎（後書き）

～補足～

・「産業革命」を「文明開化」と書いていました。恥ずかしい！！
（２０１１／３／１２修正）
っていうか誰か教えてよーーーーーーー！！

・メルディアナ魔法学校がウェールズの何処にあるのか、どんな所にあるのか
わからなかったので、そこらへんをぼかして記述しました。架空の町が舞台と
なっています。
ー町の設定
・都会に近くもなく、ド田舎でもない。「どちらかというと田舎」
・街道は石畳・敷石でできている。
・街灯がない。
・医療機関は診療所程度の規模のものしかない。

ーメルディアナ魔法学校の設定
・７年制のカリキュラムと１年の飛び級を経てアーニャが１１歳で卒業と
聞いたので、６歳入学～１２歳で卒業と推測しました。
・ネギ・アーニャ卒業時の卒業生の人数から生徒数が少ないようなので、寮を
作るのをやめました。なので士郎は下宿しています。

今回の補足はこんなところでしょうか？

一士郎の師匠はラカンさん

・本編での士郎が強いことについての理由付けのための人選です。
修行内容はラカンさんとひたすらケンカ（殺し合い）です。その後ダメ出し。
士郎がアヴァロンを使わなかった日はなかったといふ。
（もちろん治療にのみ。防御には使用禁止令が出された）
授業料と士郎の生活費は詠春さんに請求済み。憐れ詠春。
・「すべては気合いでなんとかなる」の教えは士郎に受け継がれる。

ああ、やっぱ原作設定の中で自分の考えで構成されたオリジナルストーリーを
作るのって難しいし恥ずかしいですね・・・。
オリキャラも面倒だったし・・・。
ロトのファミリーネーム「ベーコン」を人名辞典で見つけたときは天啓かと思いました。

私はプロット作らずに脳内構想を文章に起こしますので、細部はぶっつけ本番で
書いてます。
なので執筆に手間取っております。

本当はもっと書き溜めておきたかったのですが・・・

読んでくださる読者の皆様を待たせるのもそろそろ・・・と思い、
更新に踏み切りました。

早く原作編に入るためにも頑張りまーす。

それでは次回！

第9話　過去編？　因縁の出会い（前書き）

・今シリーズは作者のオリキャラ尽くしのオリジナルストーリーとなっています。
・要点のみ纏めたため、駆け足な展開と内容になっております。
・でも長いです。後日談と合わせ１２話分くらいかかると考えています。

これらを踏まえたうえでお読みください。

なお、過去編を読まなくても今後の小説本編を理解するのに支障はありません。

それでは
『過去編・英国の吸血鬼』ー「第?話　因縁の出会い」
――――――どうぞ。

第9話　過去編？　因縁の出会い

それがサクストン老人からの依頼だった。

「猫探し？」

「うむ。灰色の毛並みをしていて、白い首輪をつけておる。儂の知人の猫でのう、
かなりわがままで気まぐれらしい。」

「うわ・・・・・それは・・・・」　面倒そう。

ていうか・・・「猫を探すようなノリ」で吸血鬼探しをしていたら、本当に猫探しをすることになるとは・・・・・・

「爺さん!!金持ちからの依頼ってことは報酬も豪華なのか!?」

「じゅる・・・・美味しいものいっぱい食べさせてもらえるかな？」

ランス。お前は何を期待している。　ロト。お前はそれしかないのか。

まだ仕事を引き受けてもいないのに・・・・・・。

だが結局、俺達はこの仕事を受けることになった。主にランスとロトの意見で。

「もうじき日が暮れる。今日はもう帰りなさい。明日からしっかり頼むぞい」

その言葉で今日はお開きになり、二人と別れる。

だが俺は聞きたいことがあった。

「サクス爺さん。今この町に吸血鬼が居るって話、本当なんですか？」

ーーーーーーーー俺でもわかるくらい、爺さんの雰囲気が強張った。

「・・・・・爺さん？」

「シロウ、今の質問は・・・忘れてくれんか」

今のサクス爺さんは、いつもの好々爺然とした表情ではなく・・・・・

歴戦の魔法使いの顔だった。

俺なんかが口出し出来る問題じゃない。挨拶をして下宿に帰ろうとする。

「――――――シロウ」

「？　はい？」

「・・・・・いや、なんでもない」

そう言って、サクストン老人は去っていった。

――――――――――――――――――

12月20日。俺達は遂にターゲットを発見した。そして絶賛追跡中。

しかし。標的は強者（つわもの）だった。

結論。ヤツは速かった。

「ぜっ・・・はっ・・・はぁっ・・・はっ！」

（すばしっこい！てゆうか速過ぎだろう！！ただの猫じゃねーよ絶対！！）

「・・・はあっ・・・待てっつってんだろぉがあああああああ！！！！」

ランスうるせえ！！そりゃ逃げるだろう！！

そして猫は建物の壁を蹴って急カーブし、路地裏へ逃げ込む。

――――――――――予定通り。

――――――――猫の目の前には、見習い（ロト）魔法使いが立っていた。

「プラクテ・ビギ・ナル！
風の精霊7人、縛鎖となりて敵を捕まえろ！『魔法の射手（サギタ・マギカ）・戒めの風矢（アエール・カプトゥーラエ）』　！！」

捕縛効果を持つ風の矢が猫に向けて放たれる。

「フハハハハ！！我が食の糧となれ！！」

（え、えーと・・・ロトさーん？）

もう報酬を手に入れた気になっているようだった。
そしてロトの渾身の〝魔法の射手・戒めの風矢〟が
――――――あっさり、避けられた。

「なっ！？」「はああっ！？」「えええ！？」
俺たちは声をあげる。だってそうだろう。いくら見習いとはいえ、
魔法使いの攻撃をただの猫が避けるなんて。
「フニャアーーーーーー！！」
「う、うわーーーーーーーー！！！！」

――――――――――――――――――――

「よく考えたら、あの爺さんが関わってる猫がフツーなわけないよな・・・・・」
「ああ、早くそれに気づくべきだったぜ・・・・」
「ああ～、美味しいよベーコンソーセージハムパン」
肉尽くしだな、と心の中でツッコんでおく。

ここはロトのお気に入りのパン屋「リドリー・ベーカリー」。
顔を引っ掻かれて心が折れたロトを復活させるために立ち寄ったのだ。
ははっ。財布が寒いぜ・・・

「ロトくん！お茶どうぞ！」
「ありがとうコリーン」

彼女はコリーン・リドリー。この店の店主の一人娘だ。
彼女がロトに好意を持っていることは周知の事実で、気づいてないのは本人だけというお約束。

「それで、その猫さんには逃げられちゃったの？」
「うん。その時に引っ掻かれて・・・そのまま逃げられちゃったんだ」

「イチャついてる奴等はほっといて、どうするシロウ？」
「まだ時間はあるけど・・・・」

俺達が猫探しをして数時間経っている。なのに門限までの時間が余っているのは、
学校が早上がりだったからだ。

『近頃、町で吸血鬼が出るという噂がありますが、それが事実だとわかりました。
既に被害者も出ています。先生たちは今後の対応についての会議を行いますので、
今日の授業はここまでとし、皆には早退し「ヒャッホウ！」ランスくん静かに！！』

で、「暗くなる前に家に帰ること、夜は出歩かないようにすること」と
注意されて下校したのだ。課題をたっぷりと頂戴することになったが。

「だから今日はもう切り上げて課題をやろ「やだよ！！」黙れ。」

こうして今日の猫探しは終わった。

――――――――――――――――――――

――――――その日の夜。

「お、終わった・・・・」

やっと課題が終わった。「古代呪文（ハイ・エンシェント）が強力な力を持っていることについての考察」なんてわかんないって・・・・・。
神代の頃の方が神秘が強大だったから、とかでいいじゃん・・・。

「・・・んお？」

窓から、誰かが外を歩いているのが見える。最近の吸血鬼騒動で魔法使いが働きかけ、
一般人も夜間の外出を控えているというのに。

何やってるんだ?月明かりを頼りにその人物を観察してみる。

それは士郎のよく知る人物――――――――――サクストン老人だった。

――――――――――――――――――――

暗闇に染まった町。月明かりがあるにも関わらず、普段よりも暗く感じる。

クリスマスが近いというのに、町に活気はない。

”吸血鬼という異分子が居る”。

そのことが、町を不穏な空気で包んでしまっているかのようだった。

そして、そんないつもと違う町の中を動き回る影がひとつ。

（・・・・どうしよう）

メルディアナ魔法学校5年生、近衛士郎だった。

窓からサクストンを見つけたあと、先日の彼の様子が気になって士郎は尾行を開始した。

そしてあっさり見失った。

（・・・本当にどうしよう?）

夜間外出禁止を無視して出てきたのに、こんなにあっさり撒かれては不愉快だ。

もう少し粘ってサクス爺を見つけたいところだが、今この町には吸血鬼が居る。

いま自分は危険な場所に一人なのだ。いますぐ帰った方が無難なのは間違いない。

そう。今この町は本当に危険なのだ。しかし士郎は、先日のサクストンの様子が気になっていた。

士郎は気になったことにはいつも首を突っ込んできた。

それがもとで厄介事・面倒事に巻き込まれることも少なくない。

それを解決することで結果的に人助けとなり、今では町のちょっとした有名人だ。

そして士郎は、今回も首を突っ込もうとしていた。

（くそっ、悔しいな・・・）

しかし当事者が見つからないのではやりようがない。

士郎はおとなしく下宿へ向って踵を返すことにした。

「・・・・・・・・・・・・・。」

??

（誰かの声が聞こえる。しかも・・・・こっちに近づいてる！？）

士郎は慌てて身を隠す。

「・・・それにしても、吸血鬼がいるというだけで気味が悪いですね」

「そうですね・・・人が全くいないということもあるのでしょうが・・・。

少し異常ですね。この空気は」

（あれは・・・シャーリーン先生と・・・・・ディーリアス先生か。）

マドック＝ディーリアス。

長身で、黒い髪と黒い眼の英国人。メルディアナの魔法先生の一人だ。

（魔法先生の見回り・・・これが吸血鬼対策か？）

「・・・・・・・・・・・・・・・。」
「どうしました?ディーリアス先生」
「・・・・いや、昔を思い出しまして。以前にもこんなことがあったんですよ。
私が新任の時にね。その時も・・・この町はこんな雰囲気になった」
(?前にもこんなことがあった?・・・・・・くそっ、もう聞こえない)
そのまま二人は士郎の隠れている地点を通り過ぎて行った。
(・・・・・帰るか)
下宿のドナおばさんにバレないようにしなきゃなと考えながら、士郎は帰って行った。
――――――――――――――――
(やはり、似過ぎている。この感じはあのときと同じだ)

ディーリアスは、１３年前のことを思い出していた。

そのとき。

（ーーーーーーーーっっ！！）

ディーリアスの全身の毛が逆立った。

「シャーリーン先生！！」

ディーリアスは彼女の肩を掴んで抱き寄せ、その場を離れる。

その直後、二人がいた場所をなにかが襲った。

この夜の闇よりもさらに黒いナニカ。その黒色は矢の形をしていた。

（闇属性の、魔法の射手！！）

夜の闇のせいで見えづらい。今日が月夜で本当に助かった。

「ディ、ディーリアス先生・・・お気持ちは嬉しいのですが・・・

その・・・

しっ仕事中ですし・・・。そ、それに、こっこんなところで・・・

・・・」

シャーリーン＝アール（２４歳・独身）。

男性経験ゼロの彼女は、いきなり抱きこまれて赤面していた。

「なに言ってるんですか！！敵襲ですよ！！」

幸い、シャーリーンが何を言ったのかはディーリアスに聞こえなかった。

そして敵が姿を現す。

月の光に照らされて、相手の姿がよく見えた。

真っ黒だった。
黒いシャツ、黒いネクタイ。黒いスーツに黒い革靴、黒いコート。
湿っているかのように脂ぎった、天然パーマの黒髪。
黒くないのは、その血の通っていない白い肌と、吸血鬼の紅い眼だけだった。

長い前髪の隙間から、紅い目が二人を射抜く。

「やはり、若い女性の血の方が美味ですからねええ・・・・・。邪魔するなら、
そちらの男性も相手してさしあげましょう・・・・・」

吸血鬼の標的は、シャーリーン。

ゾクッ!!

ーーーーーーーーーーダメだ。死ぬ気でやらなければ、負ける。

ディーリアスは相手の強さを感じ取って。

シャーリーンは自分が標的という事実に、気圧されていた。

「ッ！！シャーリーン先生、援護を頼みます！！」

「！！わ・・わかりました！！」

「ヘイロン・ヘリオン・ハイペリオン！！」

「クラクス・クラルス・クラルクス・・・ッ！！」

――――――――闘争が始まった。

「イイですねえ・・・・叩き潰してさしあげよう・・・・・・ククッ」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

――――――――――立っていたのは吸血鬼。

ディーリアスは建物の壁に叩きつけられたまま気を失い、
シャーリーンは路の真ん中で力なく倒れていた。

二人の魔法使いは、吸血鬼に敗れた。

「・・・それでは、その血を頂きましょう・・・」

吸血鬼の手がシャーリーンの右腕を掴み、そのまま持ち上げる。

左肩の部分だけ、彼女の服を脱がせる。
首から肩にかけて、彼女の肌が露(あらわ)になる。

月光で照らされた白い肌。それを見て吸血鬼は笑みを浮かべ――――
――――

彼女の首に、牙を突「そこまでだ」

「風の精霊１９９人。縛鎖となりて敵を捕まえろ。「魔法の射手・

戒めの風矢」」

「――――――ガアッ！！？」

風の封矢が吸血鬼を縛りつける。

「風精召還、剣を執る戦友」

風の精霊の力で己のコピーを作りだす。

その人物は、コピーにシャーリーンを運ばせる。自身は決して吸血鬼に近づかない。

「久しいな」

そして、吸血鬼に話しかける。

吸血鬼は、始めはそれが誰だかわからないようだった。

しかし思い出したのか、ニヤリと嫌な笑いを浮かべた。

「ああ・・・・貴方でしたか。人間は歳をとるのが早いですねえ・・・。

ク・・・息災でしたか？――――――――アドルフ・サクストン！！！」

吸血鬼と対峙したのは、引退した元魔法使い、サクストン老人だった。

第9話　過去編？　因縁の出会い（後書き）

～補足～

―灰色で白い首輪の猫
・名前はディアナ。実は魔法世界出身の猫。
・「魔法を避ける猫は普通じゃない」と書きましたが、普通によけられそうだと
　今は思っています。でも直さない。

―プラクテ・ビギ・ナル
・魔法学校5年生にもなって初心者用の始動キーを使わせるのはどうかと
　思いましたが、見習いっぷりを強調したかったので採用。

―ベーコンソーセージハムパン
・コリーンがロトのために商品開発した。健気やわぁ。ホロリ。
「娘はやらん！！」ｂｙ父親

―シャーリーン＝アール（２４歳・独身）。男性経験ゼロ
・容姿については皆さんの理想の女教師を想像してください（笑）。
　なんかいま「非実在青少年」という単語が頭を掠めましたが気にしない！

―「ッ！！シャーリーン先生、援護を頼みます！！」
「！！わ・・わかりました！！」
・ディーリアスは魔法拳（剣）闘士＝前衛タイプ
　シャーリーンは魔法使い＝後衛タイプです。

―ヘイロン・ヘリオン・ハイペリオン&クラクス・クラルス・クラルクス

・うわあ。オリジナル始動キー恥ずい！！

てかこれ早口で言いにくいッスね。戦闘に向かないや。

―「そこまでだ」「久しいな」

・サクス爺さんは魔法使いモードと老人モードで口調が変わります。

今回の補足はこんなトコです。

「登場人物の誰かが実は吸血鬼」という頭脳戦は作者に書けないので、吸血鬼には
早々にご登場していただきました。

余談ですが、サクス爺さんは当初は士郎の日常を演出するためだけの役割だった
のですが、いつの間にかシリアスキャラに・・・。
これがプロット無しの力です。

さて次回は吸血鬼ｖｓサクストン老人なワケですが・・・・・。

あ・ちなみに吸血鬼の名前はしばらく出ません。なのでいちいち「吸血鬼」と
打つのが面倒です。

で、彼がどれくらいの種類の魔法が使える設定にしようか未だに不確定

なんですよねえ。どうしよっか。

んじゃそろそろあとがき終わります。

それでは次回！

第１０話　過去編？　運命の出会い（前書き）

・今シリーズは作者のオリキャラ尽くしのオリジナルストーリーとなっています。
・要点のみ纏めたため、駆け足な展開と内容になっております。
・でも長いです。後日談と合わせ１２話分くらいかかると考えています。

これらを踏まえたうえでお読みください。

なお、過去編を読まなくても今後の小説本編を理解するのに支障はありません。

それでは
『過去編・英国の吸血鬼』ー「第?話　運命の出会い」
――――――どうぞ。

第１０話　過去編？　運命の出会い

士郎は困惑していた。

「・・・よりによってこんな時に・・・・・・」

――――――――なんで・・・なんで今なんだ・・・っ！！

「・・・ニャア？」

俺の目の前に、あの灰色の毛並みで白い首輪をした猫がいる――――――

――――――――――――――――――――――――

――――――――同時刻、英国・ウェールズのとある町。

「どうしたのですか?急に黙ってしまって?」

霧が深まりつつある夜の街道。吸血鬼と魔法使いは対峙していた。

「・・・何故だ」

「??」

「何故お前が生きている。お前はあの時死んだはずだ!!」

老人用のステッキを持つ魔法使い・アドルフ・サクストンが問う。

しかし目の前の吸血鬼は口を開くが、その言葉は質問に対する返答ではなかった。

「貴方は変わりませんねえ・・・。
外見だけでなく中身も老成したのかと思いきや・・・。思考はあの頃と同じで、
実に短慮だ」

「・・・何だと?」

「フンッ!!」

体に力を籠めるだけで、吸血鬼は「戒めの風矢」の拘束を引きちぎ

る。
破壊された戒めの風矢は唯の風となって夜の空気に消えていく。

「馬鹿な・・・・・」

「この通り、目の前の敵の力量すら測れない。充分短慮だと自覚できたでしょう？
　――――――――だから、私が生きていたことにも気づかない」

「・・・・・・・ッ！！」

ああ、そうだとも。私が不甲斐無いことは１３年前に承知している。今だって少し体がだるい。前線を退いたツケか、齢の所為か。体力も精神力も衰えた。

しかし、私はこの事件を解決しなければならない。
それが、アイツを死なせた私の使命なのだから――――――――――――！！

「ア・クセス・セルス・アクセルス――――――風精召喚・戦の乙女１６柱」

歳をとった？　引退した？　それがどうした。私は”アイツ”の魔法使い（ミニステル・マギ）の従者。

ならば私は、主の仇を打ち滅ぼすのみ。

「――――――往け」

現れたのは１６人の風の精霊。それらが敵に牙を剥く。

「こんなもので・・・・っ」

精霊達は隙間なく吸血鬼を包囲して攻撃しようとするが、彼には通じない。

一人の精霊を拳で殴り消滅させ、そして生まれた包囲網の隙を突いて

――――――脱出した瞬間、目の前には風矢があった。

サクストンが、気取られないよう無詠唱で放った「魔法の射手・戒めの風矢」。

（チッ、風の精は囮ですか！！

しかし、先ほど破られた魔法で私を縛れると――――――）

そこで彼は気づく。サクストンが欲したのは、ほんの僅かな「時間」だと。

戒めは、数秒でいい。

周りの霧が魔力の奔流で渦巻いていく。

「来れ、深淵の闇、燃え盛る大剣!!闇と影と憎悪と破壊、復讐の大焔!!
我を焼け、彼を焼け、そはただ焼き尽くす者・・・・・」

――――――――――――――「奈落の業火」!!

・・・・と、続けることはできなかった。

（あと・・・あと一小節、あと一言だというのに・・・・体が・・・・だるい。
このだるさは・・・・・？）

「――――それは”眠気”です」

風矢の戒めを破り、吸血鬼が言う。その瞬間、理解した。

（――――――――――――「眠りの霧」か!!!）

町に漂っていた霧。だが、それに紛れてサクストンの周りには「眠りの霧」が潜んでいた。

「フゥ、ギリギリでしたね・・・・・。仕掛けておいて正解でした。
さて、これで邪魔は入りません。
貴方の分身が避難させた者達のところへ行きましょうか」

（――――――――――何っ!?）

何故自分を殺さない。そう思考しながら彼はその場に倒れる。

「命は取りませんよ。貴方は自分の無力さに絶望していればいい。
実に良心的でしょう?」

（そん・・・な・・・・・。ふざ・・・け・・る・・な・・・・・・っ
!!）

「――――――――これは、復讐です。私を死に際に追い込み、
私の力を奪った、貴方達へのね」

そこまで聞いて、サクストン老人は意識を失った。

――――――――――――――――

とてとてとてとてとてとてとて・・・・・・

（オイオイ・・・何所まで行くつもりだよ？）

士郎はまだ猫と居た。

・　・　・

・

捕獲対象の猫を偶然見つけたものの・・・今、夜のこの町は危険だ。

一刻も早く下宿（いえ）に帰るべきなのだが・・・魔法さえ避けてみせるこの猫と

ここまで接近することなど、この機会を逃すともう無いかもしれない。

そう考えると、この場を離れることは憚られた。

どうしようかと考えているうちに、猫は移動し始めた。

「あ・・・ちょっ・・・オイ」

・　・　・　・

・

そのまま、成り行きで士郎は猫についていく形になったのだ。

「ニャー」

「・・・・おおぅ・・・・・・・・」

士郎（と猫）が辿りついたのは、大きなお屋敷だった。

ああ、でかい。そうとしか表現できない。作者の文才では無理だ。
いったいどれほどの敷地面積を誇るのか。生粋の庶民である士郎には想像もできない。
近衛家の屋敷も士郎は理解しきれていない。

（というか・・・ここみたいな普通の町になんでこんな金持ちが・・・。貴族？）

とてとてとて・・・・

（・・・・・・・？）

ガサッ！

（！！）

あろうことかその猫は、屋敷の敷地に侵入していった。

（うわあ・・・追いかけ難い・・・）

ここで入っていったら不法侵入＝犯罪者の図式があえなく完成する。

士郎は猫の追跡を諦めることにした。

こんな危険な夜にわざわざ外出したにも関わらず、
サクストン老人も見つけられず、猫を追いかけることもできず。

「俺、何やってんだろうな・・・・・・」

後悔と自己嫌悪に陥りかけたとき、声が聞こえた。

「ありがと。今日も来てくれたの？」

「ニャア」

「ーーーーーーーーーーえ・・・・・？」

（女の子・・・の、声・・・）

士郎はもう一度屋敷を観察する。
遠くにはレンガ造りで2階建てになっているが、士郎に一番ところは白い壁に青い屋根。
つまり別棟になっていた。廊下は繋がっているようだ。

（つまり・・・ここはこの屋敷のお嬢様の自室―（？）ってとこか・・・。
自室なんて呼べる規模じゃないけどな・・・）

「ニャッ」

「・・・あら？今日はお友達・・・いや、お客様がいるのね」

（――――――――――へ？）

近衛士郎、発見されました？

ガサガサッガサ・・・

「ニャー」　・・・・・・「おい、お前」？

「ニャア」　・・・・・「ついて来い」？

「フニャン」

ガサッガサッ・・・

・・・お前、俺をどうしたい・・・？

「そこの方、どうぞ？遠慮なさらず」

遠慮してるわけじゃないよ・・・・。
猫と同じ道（垣根の隙間）を通ってこんなお屋敷に入ることに抵抗があるだけだ。
なんか悪いことしてる気になってくる。

「・・・・・・・・・・・フニャア・・・」

（お、怒ってらっしゃる！？　急かしてるのか！？
なんだろう、逆らってはいけない気がする！？）

因みにこの猫、性別はメスである。士郎は女性には逆らえなかった。

（ええい、ままよっ！！！）

ガサガサッガサ・・・・・ガサッ

ううう・・・泥棒になった気分だ・・・・。　そろそろ抜ける・・・・・
よっと。
ぷはっ
「フウ・・・・・」
俯いて、息を吐く。そして顔を上げると
――――――――――長い金髪の美少女が、窓から俺を見降ろしてていた。
「初めまして。私はエレナ、エレナ・キャンベル。あなたのお名前は？」
士郎はその娘に見惚れて、問いに答えることができなかった。

第１０話　過去編？　運命の出会い（後書き）

～補足～

―吸血鬼は「戒めの風矢」の拘束を引きちぎる。
・当初は魔具とかアーティファクトによるものにしようと思ってたのですが、
　吸血による魔力上昇に伴う対魔力の強化、という理由づけにしました。

―ア・クセス・セルス・アクセルス
・何も言わないでください。
　モチーフとなったワードは「アクセル」。
　作者は仮○ライ○ーアクセル・トライアルが好きです。
「――――９．８秒。それがお前の、絶望へのタイムだ」

―実に良心的でしょう？
・良心的です。（↑外道）

―士郎はその娘に見惚れて、
・ウチの士郎、惚れっぽいなぁ。エヴァにも一目惚れやし？
　どないなっとんのやろ。

今回は若干、ふざけ気味の補足でした。

いや、過去編？が超・難産でして。ストレスがね・・・。ごめんなさい。

過去編？にもう5日くらいかけてますが、まだ未完成。

また更新が滞るかも・・・・・・。

頑張ります・・・・・。はあ。

それでは次回！・・・・・・はあ。

第１１話　過去編？　翳のある日常（前書き）

・今シリーズは作者のオリキャラ尽くしのオリジナルストーリーとなっています。
・要点のみ纏めたため、駆け足な展開と内容になっております。
・でも長いです。後日談と合わせ１２話分くらいかかると考えています。

これらを踏まえたうえでお読みください。

なお、過去編を読まなくても今後の小説本編を理解するのに支障はありません。

それでは
『過去編・英国の吸血鬼』ー「第？話　翳のある日常」

――――――どうぞ。

注）読めると思いますが一応。タイトルの翳は「かげ」です。
翳りのある人、とか言いますよね。「陰」でも意味は同じらしいですが。

吸血鬼という不穏分子を孕んだまま、日常は過ぎてゆく・・・的な？

うわあ。タイトル解説しちゃったよ。恥ずかしい。

第１１話　過去編？　翳のある日常

彼女との出会いは、運命だったのかもしれない。

それくらいの衝撃だったのだ。あれは。

エヴァを初めて見た時とは別の種類の衝撃だった。

エヴァは、気づいたら見惚れていた。

エレナは、――――ありがちな表現かもしれないが――――雷に打たれたように何も
できなくなって、それが自覚できていても、それに抗えなかった。

ただ――――――・・・・・・。

彼女は窓越しの部屋の中。俺は地面に這いつくばって、垣根から頭だけ出した状態。

いま思い出してみると・・・・・・。

運命の出会いと呼ぶには少々、間抜けな構図だったかもしれない。

――――――――――――――――――――

「えーと・・・・・・・・・・・・エレナ、さん？」

「はい？」

「えと、その・・・・・俺が”お客様”ってどういう・・・・・・・」

「？　だって、あなたはこの子が連れて来たんですもの、お客様でしょう？」

（えー・・・・・・。）

夜中に屋敷に侵入してきた人を、疑いもせず”お客様”だと彼女は言う。

理由は「知り合いの猫と一緒に来たから」。

天然なのか大物なのか、士郎には判断がつかなかった。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――翌日。１２月２１日。

「珍しいな。シロウが遅刻するなんて」

「また遅くまで魔術書を読んでたの？」

「あ・・・ああ。そんなトコ」

（サクス爺さんが吸血鬼騒動に関わっていそうだからあとをつけたとは当然言えない。

夜中に外出したことも言わないほうがいいだろうしな）

「でも、まだ先生来てないからセーフだな」

「え？まだ？」

――――ガチャッ！

ドアを開けて教室に入って来たのは、担任のシャーリーン先生ではなく、

事務のマクベス先生だった。

そして。

「――――アール先生とディーリアス先生が昨夜、町を巡回していたところを吸血鬼に
襲われました。そのため、今日の授業は――――――」

・・・ゾッとした。背筋に冷たいものが走る。

一歩間違えれば――――――――――――――俺が、襲われていたかもしれない。

――――――――――――――――――――

俺はつくづく自分が馬鹿だと思う。

時刻は夜。――――――――俺は今、エレナさんの屋敷に向かっている。

魔法先生ふたりが返り討ちに遭ったことを生徒に隠さなかったのは正解だと思う。
不安を煽ることになるかもしれないが、その方がより警戒するだろう。

校長が全校集会の時に俺のほうを見た気がしたが、おそらく気のせいではない。
俺の人助け（無茶）は学校側にも知られている。
ほとんどの先生は俺が立派な魔法使い（マギステル・マギ）を目指しての行動だと思っているため、あまり注意してこない。
しかし校長は近右衛門（おじいちゃん）の友人なので、俺に無茶してほしくないと考えているのだろう。

そこまで解っていながら夜間の外出などということをしているのは、初めて会った日の別れ際に。

『じゃあね、シロウくん。・・・・・・また、来てくれる？』

――――――彼女がとても、寂しそうに見えたから

・・・・・・ああ、単純だなあ、俺。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「ふふっ。そのセツナさんという方は、本当にコノカさんのことが好きなのね」

「うん。ただ、少しだけ空回り気味なところがあるんだけどね」

「ニャー」

吸血鬼の噂を聞いた日から5日目、猫探しを始めてから4日目の夜。

エレナさんは、初めはいかにもお嬢様な話し方だったのだが、今では大分砕けた態度をとるようになった。

対して俺は、少し口調が変わってしまっている。・・・なぜだ。

エレナ・キャンベル１７歳。
エレナさんは魔法関係者だった。（この町の住人はほとんど関係者だが）
亡くなったおじいさんが魔法使いで、家族全員が魔法を知っている。
彼女の家族構成は祖母・父・母・そして彼女と妹。
おばあさんと母親は魔女だったが、結婚と同時に引退。
父親は魔法学校を卒業したが現在は一般人。商売人として成功し今に至る。
つまりこの屋敷は父親のもの。
キャンベル家が経済的に裕福になったのは父親の代からということだ。
妹は現在８歳。メルディアナ魔法学校の３年生。
エレナさんは病弱で、学校には通えないのだという。

だから、ディアナ（猫の名前。エレナ命名）と俺がやってきた時、話し相手ができてとても嬉しかったそうだ。

「そういえばコイツ（猫）の名前、なんで「ディアナ」ってつけたの？」

「え？　わたしがつけたんじゃないよ？　この子がそう言ったから。ねー。ディアナ♪　にゃあ？」

「ニャー」

とおっしゃった。

「・・・・・ふ、ふーん・・・・・そう・・・・」

この人のこーゆー部分は未だにわからない。

そして、今日はお開き。

「じゃあね、シロウくん。おやすみなさい。また明日ね」

「うん。また明日」

（吸血鬼に襲われなけりゃね！）↑（滝汗）

女の子と逢い引きするために命を懸ける士郎だった。

こうして日々は過ぎていく。
士郎は危険を冒しながら、毎日エレナの屋敷に通い続けた。

――――――――――――――――――――

雪の降る12月24日。
いわゆる聖夜（クリスマス・イブ）の前夜祭。

「いい加減にしてください校長！！早くこの結界を解いてください！！」

病院に、怒声が響き渡った――――――

「い、今の、サク爺の声だよな？」
「この病院、一般人も居るのに”結界”とか言っちゃっていいのかな？」
「あれくらいだったら大丈夫だろ」
「え？　3人とも、今の声の人知ってるの？」

俺達（3人組＋マリナ）は今、隣町の病院に来ている。
うちの町には診療所程度の医療施設しかないため、

吸血鬼の被害者はここに入院している。俺たちは
サクス爺さんと未だ目を覚まさないシャーリーン先生の見舞いのた
めに訪れた。

「落ち着きたまえサクストン。
君のこの件に対する気持ちはわかるが、君は安静にすべきじゃ」
「あの吸血鬼は、私が倒さねばならんのです！！」

「あのー、認識障害とかをかけたほうがいいんじゃないですか？」

「「！？」」

二人はやっと俺達に気づいたようだ。
サクス爺さん。「吸血鬼」はアウトですよ。不審がられます。

「・・・それでは儂はこれでお暇しよう。士郎、決して封印は解い
てはならんぞ」

・・・・封印？
校長は気になる言葉を残して逃げるように去っていく。

（・・・ああ、あれか）

この病室に結界の基点がいくつかあった。

俺は昔からモノの構造を理解することに長けていた。
ガラクタ弄りにしか使えないと思っていたが、魔法に応用できると
判った時は
この才能に感謝した。見ただけで魔法や魔方陣の術式が理解できる

のだ。
とても重宝している。俺の飛び級はこの力に支えられていたのだ。
ふふん。

そしてこの病室に施された幾つかの基点。これは・・・幽閉結界。

（サクス爺さんが校長の結界で外に出られないってことか）

「シロウ。　お主、この結界が解けるのか？」

（・・・・・・。）

「・・・皆、シャーリーン先生の見舞いに行ってくれ。二人だけで話がしたい」

わがままを言って皆に退室してもらう。病室には俺とサクス爺さんのみ。

「ええ。俺はこの結界を解除できます。・・・・・・ただ、解除する代わり、
俺の頼みをきいてくれませんか」

「・・・・・頼み、じゃと？」

「・・・・・・13年前」

「――――っ！！」

「いま起きている吸血鬼の事件と、似たようなコトがあったそうですね？」

あの夜、ディーリアスが言ったことを士郎は覚えていた。

彼が新任の時、似たような事件があったと。

学校で彼がいつ赴任してきたのかを調べた。それが１３年前。

そして他の魔法先生にも聞いて知った。

１３年前にも吸血鬼がこの町で事件を起こしたと。

しかし、それ以上のことは誰もが口を閉ざした。

そして先日のサクストン老人の不審な行動と、

「あの吸血鬼は私が倒さなければならない」という発言。

士郎はただ日常を過ごしていたわけではない。

――――――――一度首を突っ込んだことは、最後までやり遂げる。

吸血鬼が徘徊する町でただ女の子とイチャついていたわけじゃありません。

主人公をナメちゃいけませんぜ、そこのアナタ。

「――――教えてください。すべて」

「――――――・・・・・・・・・・！！」

――――――これは騙し（ブラフ）。

”すべて”などという含みのある言葉を使うことで、こちらの手札を誤認させる。

しかしそんな小手先の策は、意味を成さなかった。

「――――――・・・・・・・駄目だ。それはできん・・・・！」

（・・・・チッ、ダメか。それにしても、爺さんがここまで拘る

のは何故だ？
――――――――――――――――13年前、一体何があった！？）

「シロウ。私たちは終わったわよ。あなたもシャーリーン先生のお見舞いしなさい」

シャーリーンの病室から3人が帰って来た。
これ以上話しても交渉が進まないと考えた士郎はマリナの言う通りシャーリーンの見舞いに行く。

入れ替わりにランス達が病室に入ってくる。

「サク爺、吸血鬼に襲われたってマジかよ？」

「・・・・ランス。猫探しはどうなったかね？」

彼はランスの質問には答えず、別の話題をふる。

「え・・・・い、いや、一度見つけたんだけど、かなりすばしっこくて駄目だった。
それに吸血鬼騒ぎで外出も母さんに良く思われなくてさ・・・」

「うむ・・・この状況ではそうなるじゃろうな。それでそのことなんじゃが、
猫探しはもうよい。・・・・・その代わり、儂の頼みをきいて

くれんか？」

「・・・・？？」

「儂の家から”あるモノ”を持ってきてほしいんじゃよ」

結局。士郎はそのまま病院を後にした。

謎はまだ、解き明かされない。――――――まだ。

第１１話　過去編？　翳のある日常（後書き）

まえがきに書いた「駆け足な内容になっております」が如実に表れた第？話でした。

ごめんなさい。

～補足～

ー事務のマクベス先生

・パメラ＝マクベス。女性。２０代後半のメガネ美人。

マクベスという名前を人名辞典で見つけた時、某ゲット○ッカーズの彼を

思い出したことは秘密だ。

ーエレナさんは魔法関係者だった。（この町の住人はほとんど関係者だが）

・町には一般人も居ますが、ほぼ関係者です。

ー？？？

まだ補足したいことはありますが、これからの展開で徐々に明かされますので、

疑問に思っても華麗にスルーしてやってください。

しかし第？話が進まない！！

原作キャラならともかく、自分で作ったオリキャラの心情が描写できないというまさかの事態。

次の更新はいつになるのか！？

それでは次回！

ああ・・・士郎の最強っぷりが書きたい。過去編じゃ無理だけど。

第１２話　過去編？　「約束」（前書き）

・今シリーズは作者のオリキャラ尽くしのオリジナルストーリーとなっています。
・要点のみ纏めたため、駆け足な展開と内容になっております。
・でも長いです。後日談と合わせ１２話分くらいかかると考えています。

これらを踏まえたうえでお読みください。

なお、過去編を読まなくても今後の小説本編を理解するのに支障はありません。

今話は少しおふざけ成分多し。どうしてこうなった・・・。

前半は凄く難産でシリアス、後半はふざけ気味でスラスラ書けました。
あるぇー。

違いがあるとすれば、前半を書いてる時の占いの仕事運が最低値だったこと
かなあ。自分、占いに影響され過ぎるヤバイ人種なんで。

それでは
『過去編・英国の吸血鬼』ー「第?話　「約束」」
――――――どうぞ。

第12話　過去編？「約束」

２４日・夜。
吸血鬼の噂を聞いた日から7日目。エレナと出会って5日目。

始めに感じたのは違和感。

体調が優れないのかと聞いた。彼女は病弱だから。

――――――ううん。大丈夫。

それでも違和感は消えない。『何かあったの？』

――――――ううん。そんなことないよ？

・・・・・・・・彼女は嘘をついている。

自分は彼女に信用されていないのだろうか？

彼女に信用されていない。そう思うと、少し虚しくなる。

そして彼女の言葉は、俺の胸を貫いた。

――――――――ごめんなさい。もう、ここに来ないでほしいの。

――――――――――――――――――――――――――――――――

そこはメルディアナ魔法学校校長室。

校長は椅子にもたれかかって居眠りしていたが、ドアを開ける音で目を覚ます。

「・・・校長・・・・大丈夫ですか？」

「いや、ただ眠っておっただけじゃ。そんな心配そうな顔をせんでいい」

そんな校長を心配するのが
学校の事務員、パメラ＝マクベス。

「明日になればロンドンの魔法協会から増援が到着する。
それまでの辛抱じゃ」

ネギとアーニャにはこの町から避難してもらった。
ネカネを呼んだのは正解だった。
ナギとスタン翁の忘れ形見を危険に晒したくなかった。

しかし、他の者はそうはいかなかった。
夜に部下を町に繰り出させることはしたくなかったが、警護のために仕方なく
町の徘徊を魔法先生達に命じ続けた。歯が立たなかった。
――死者こそ出ていないものの――被害者は増え続けた。

そして魔法協会から派遣される術者と協力し、
この町に封魔結界を展開することを決定した。

この町にいる吸血鬼は実に巧妙に立ち回っている。

しかし結界が張られれば吸血鬼は弱体化し、吸血鬼の居場所を探知できる。

――――――そこを殲滅する。

それでこの事件に決着がつく。しかし部下を死地に送り続けた校長の心労は
尋常ではなかった。

（齢かのう・・・この程度で心に限界がくるとは・・・・・）

明日。明日になれば驚異は格段に下がる。

だが彼にはもう一人、心配の種があった。

――――――――――近衛士郎。

魔法先生たちの話によれば、
どこから嗅ぎつけたのか彼は１３年前のことを調べているらしい。

（おそらく士郎は気づいておる・・・あの子は頭がいい。
しかし、まだ全てを知ったわけではないはずじゃ）

友人から預かった大事な子供だ。しかし彼の性格を考えて
この町から避難はさせなかった。言っても聞かないだろう。

（あと一日・・・。あと一日、何事もなきよう・・・・・・）

そう祈るしかなかった。

――――――――そしてそんな彼の想いは、天に届かなかった。

――――――――――――――――――――――――――――

「・・・今日、お父様が帰って来たの」

呆然とする士郎を置いて、エレナは話を続ける。

「今日はイブの日だから・・・仕事で忙しいお父様も帰って来たの」

そこで士郎の頭は冷静さを取り戻した。普段あまり家に居ない父親と会えたというのに
彼女は・・・・・浮かない顔をしていた。

「・・・その時、言われたの。私の部屋を屋敷の奥に移すって」

・・・・・。俺と会っていたことがバレて、
それを父親が良く思っていない・・・なんて展開は無いな。どこの小説の話だ。

「この町に、吸血鬼がいるからって」

「――――――――――!!」

「こんな、外から入られやすい部屋だと危ないって・・・」

それは士郎も思っていた。何故今までその処置をとらなかったのか。
何故今ごろになって？　理解に苦しむ。

そして彼女は俯いて、辛そうに話している。肩が震えている。
今の話のどこに、彼女が苦しむ理由がある？

「ごめんね・・・・シロウくん・・・・」

・・・・・・え？

「本当にごめんなさい・・・・・。私、知らなかったの・・・・・！」
今この町に、吸血鬼がいるって・・・・・」

――――――――――・・・・・・薄々は気づいてた。
彼女が今回の吸血鬼事件を知らないことを。

「・・・私・・・そんな危ない時に、シロウくんに無理言って・・・
危険な目に遭わせて・・・っ」

「――――――――本当に、ごめんなさい・・・・・!!」

・・・俺は、何を言えばいいのかわからなかった。

確かに夜中に出歩くことは危険な行為だったが、エレナさんと会うことは
いまや俺の楽しみのひとつになっている。苦でもなんでもない。

今の俺の気持ちを例えるなら
「自分が気にもしていない事柄について謝られた」そんな気分。

だが彼女に「そんなことないよ」と言ってやることもできなかった。
確かに危険の中を掻い潜って来たようなものなのだ。屋敷(ここ)に通うことは。
俺が屋敷に通うようになったのは、エレナさんに頼まれたから。
エレナさんは危険と知らず俺を招き続けたことになる。
つまり、彼女の言い分は正論。

俺は、何て言えばいいのだろう?

「・・・・・ひっく・・・・・ぐすっ」

「え・・・・・・・」

「ご・・・・ごめんな・・さ・・・・ひっく・・」

――――――――――――――エレナさんが、泣きだした。

えええええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？

いや、申し訳ないと思ってくれてるのはわかるけど！！

泣く程か！？　泣く程なのか！？　泣く程なのか！！

思考回路は～ショート寸前♪　今すぐ～

・・・・どうしよう。

「フニャア！」↑（訳：泣かせてんじゃないわよ！／新約・猫語辞典　講談社編纂）

おおっ、最近出番の無かったディアナ！

でも何言ってるかわからん！！

「ひっく、うぅ・・・・うえぇ～ん・・・・・！！」
「フシャアァァ！！」
「うっ、うわあぁぁあーーーーーーーーーー！？」

注）今の時刻は夜中なので、皆ちゃんと小声で泣き喚いてます。

～～～～～～～～～～～～～～～～１０分後～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「落ち着いた？」

「・・・・ごめんなさい」
エレナさんは顔を真っ赤にして俯いている。うん。カワイイ。
とりあえず、さっきよりは元気になってくれたようだ。

「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」
うをい！！なんでここで静かになる！？　くっ、話題！話題プリー

ズ！！

「エレナさんって、泣き虫なんですね」

・・・・やっと捻り出したのがこんなのでした。

「ちっ・・・違うよ！これは・・・その・・・」

エレナさんの顔がまた暗くなる。ヤバッ。禁句（ブロックワード）だったか！？

「ゴッ、ゴメン！　今のは忘れて・・・」

「・・・・ううん。いいの」

そう言ってエレナさんは真剣な表情になる。そして、口を開いた。

「私のお祖父ちゃんがもう死んじゃったって話、したよね？」

「・・・？　うん」

「私のお祖父ちゃん、若い頃は立派な魔法使い（マギステル・マギ）だったんだ」

「・・・・・・・・」

黙って話を聞くことにする。

「歳をとって第一線から退いても、自警団を組んでこの町の皆を守ってた。

・・・・お祖父ちゃんは、皆を守って死んだの。
私が3歳か、4歳くらいの時かな・・・。
――――――吸血鬼と、相討ちになって」

・・・・ちょっと待て。エレナさんが3、4歳の頃ってことは・・・・！

――――――――――――――――――――――――13年前!?

13年前にも吸血鬼事件があった。それにはサクス爺さんが関わっていた。
そして誰もその詳細を教えてくれない。

そしてエレナさんの言。
おそらく13年前。自警団。エレナさんの祖父が吸血鬼と相討ち。

そこから予想される事実。

――――――――――――――――――――――――これが・・・・・・答えか。

「だから、シロウくんが吸血鬼に襲われて、なにかあったら・・・・。
・・・・死んじゃったらって思ったら・・・怖くなって・・・・・

・」

そう言って、また泣きそうなカオをする。

――――――――・・・・・。

「大丈夫だよ」

「・・・・・・え・・・・・？」

「俺だって魔法使いなんだよ？倒せなくても、逃げるくらいなら吸血鬼相手でも
できるさ」

エレナさんは半信半疑、といった感じだ。まあそうだろう。
自分の祖父が相討ちになる程の強さだというのに、
俺なんかをそう簡単に逃げさせてはくれないだろう。

でも、いいだろう？　少しくらい、見栄を張ったって。

そうでもしなきゃ、この娘はきっと、本当の意味で泣き止んでくれない。

衛宮家の男子は、女の子を大事にするのだ。

「そうだなぁ。もし余裕があったら、エレナさんも助けてあげるよ」

ニヤリと笑ってエレナさんの顔を見る。

「・・・・無理よ。私は体が弱いから、とても逃げられないわ。
追いつかれちゃう」

「じゃあ、俺が護るよ」

「・・・・・え？」

「俺が、エレナさんを護るから」

・・・・・・恥ずい！　超恥ずかしい！！

何言ってんだ俺は！！　いや、言ったことは嘘じゃないけどさあ！！

もっとこう・・・言い方ってモンが――――ああっ！！！

あー・・・エレナさんが驚いたカオして固まってらー　ですよね～

これが小説の中だったら告白ととられてもおかしくないセリフ。

ああ・・・やっちまったゼ・・・・・・。

「・・・・・ぷっ」

――――――――――――――へ？

「ぷ・・・フフッ・・・フ・・ッアハハハハハハハハハハハハ！！」

・・・・・お笑いになられた。

あっ、シ○ア大佐も似たような台詞を言ってた気がする！

それは置いといて・・・・・ひどい・・・・・。

こっちは結構真面目に言ったのに・・・・・。

いや、俺も言った後に後悔したけどさあ。

ひとしきり笑った後、エレナさんがこっちを見てまた笑った。

「――――ふふっ。

じゃあ、私が襲われたらシロウくんに助けてもらうね。約束よ？」

――――――凄く綺麗な笑顔で。

「・・・うん。約束だ」

そう。これは他愛もないただの「約束」。

士郎も、本気で吸血鬼と戦えると思っていない。
エレナも、士郎がそこまで強いと思ってない。

それでも、大事だったから。
それでも、大事に思われてることが嬉しかったから。

約束を交わした。

そして、その約束は

――――――――――――――――――――守られなかった。

――――――――――――――――――――

英国のとある町、とある路地裏。

「なんということだ・・・・・・・・」

声の主は驚きを隠せない。
ずっと調べていた。探していた。
生きていると思っていた人物の死を知ったから。

それは、彼に重傷を負わせ、血を失わせ、力を奪った人物だった。

「亡くなったのですか・・・・・サイラス・キャンベル」

彼は吸血鬼。この町の闇に潜む、魔性の存在。

第12話　過去編？　「約束」（後書き）

うわああ！！！
いろんな意味で恥ずかしいよおおお！！
女の子の心情なんて理解できないんじゃい！！！
士郎の台詞クサ過ぎない！？カユイ！！
ぐあああああああ！！！！！！

さて、補足いきマ～ス

～補足～

―ナギとスタン翁の忘れ形見
・正確にはどっちも死んでないんですけどね。ナギは知りませんけど。
まあ、この二人が遺した者達、的な。
それにしても、ナギはなんで6年前にネギを助けて以来表舞台に出てこない
んですかね。でも完全なる世界を倒したら復活する気がする。

―町の徘徊を魔法先生達に命じ続けた。
・いや、勝てないとわかっていても、誰かが警戒しなきゃいけませんから

ねえ。誤解なきよう。

―吸血鬼は実に巧妙に立ち回っている
・見つからないのはそういうことにしておいてください。
１３年前もこの町に来てますから、地理も充分です。

―思考回路は～ショート寸前♪　今すぐ～
・作者はちっこい頃、姉と一緒にこのアニメを観てました。
ガキだったので最終回近くのシリアス展開はイマイチ理解できませんでした。

―新約・猫語辞典　講談社編纂
・定価　￥３．７５０（税込）　２４９８年８月１３日発売予定（ウソ）。

―禁句（ブロックワード）
・ガ○ダム種運命のフラ・・・げふんげふん。ノアローク大佐のセリフより。

―あっ、シ○ア大佐も似たような台詞を言ってた気がする！
・正確には「お笑いになられた？」。
キシリア様との腹の探り合いの時に出たセリフ。

―衛宮家家訓。
一、女の子には優しくする。
一、女の子を怒らせない。
一、女の子を泣かせない。
・ちなみにこの家訓ができたのは先代の衛宮家当主の代からだといふ。
衛宮切嗣。彼はフェミニストの鏡です。

―サイラス・キャンベル
・故人。エレナのじーちゃん。凄腕の魔法使い。
ナギやラカンのせいで「凄腕」っつっても凄さが伝わらない・・・。
うーん、若ければタカミチやクルト元帥と互角ってカンジ？
若ければね。
得意な属性は氷・雷・風。
ゼルレッチじーさんを若くしたような外見。

はーい、今話で大分謎が解消されましたね。まだ残ってるケド。
あとは読者様にも予想できる展開ですね。
そして課題はバトルシーン。戦闘描写が苦手です。
くっ・・・「投影開始（トレース・オン）」まであと４話・・・！！

ではでは、今回はここまでです。

それでは次回。

第１３話　過去編？　解ける謎（前書き）

・今シリーズは作者のオリキャラ尽くしのオリジナルストーリーとなっています。
・要点のみ纏めたため、駆け足な展開と内容になっております。
・でも長いです。後日談と合わせ１２話分くらいかかると考えています。

これらを踏まえたうえでお読みください。

なお、過去編を読まなくても今後の小説本編を理解するのに支障はありません。

サブタイトル通りの内容です。特に話は進みません。
ぶっちゃけ面白くないと・・・思います。
まあ、この過去編はあんまり人気ないみたいですね。
やっぱ原作編かーーーーーーーーーーーー！！！
読者の皆様、温かい目で読んでもらえると嬉しいです。

それでは
『過去編・英国の吸血鬼』ー「第？話　解ける謎」
――――――どうぞ。

第１３話　過去編？　解ける謎

約束から一夜明け、１２月２５日。
言わずと知れたクリスマス。基督教の神サマのお誕生日だ。
この時期には学校が冬休みに入り、街はクリスマス一色に染まるのだが、
今年は違う。
子供達が元気に走りまわるのが絵になりそうな、雪の日。
しかし人通りは少ない。

日中とはいえ、吸血鬼の存在がこの町を不安で包んでいた。

士郎は下宿（いえ）にいた。受話器を片手にダイヤルを回す。

ジーコ・・・ジーコ・・・ジー・・・・・・　トゥルルルルッ

「ガチャッ・・・はい。こちらオークランド・・・」
「もしもし、シロウ・コノエです。ランス君は居ますか？」
「あら、シロウくん？　わかったわ、ちょっと待っててね」

「おっすシロウ。なんか用か？
はっ、まさかようやく俺に宿題を見せてくれる気に・・・・」

「ならない。一日2枚やれば終わるだろう、これくらいのプリント。
まあいい。どうせヒマだろう？　病院に見舞いに行かないか？」

「ああ、いいぜ。もともと行くつもりだったし。そうだな・・・
午後からでいいか？」

・・・？　あっさり。
「昨日も行ったのに」、と返されると思っていた。
それに、「もともと行くつもりだった」？

「ああ、それは後で話す。じゃあ13時に東口な」

東口とはそのまま、町の東側の出入り口のことだ。

「ああ、わかった」

こうして俺は病院へ行くことにした。

――――――確かめるために。

――――――――――――――――――――――――――――

・・・なんということだ・・・。まさかサイラス・キャンベルが死去していたとは。

アドルフ・サクストンは彼のオマケに過ぎない。

彼・・・サイラス・キャンベルを打ち倒すことこそ、私の目的だったというのに。

公式記録では13年前に吸血鬼と相討ちになっている。

間違いなく私のことだ。

私のこの13年間はなんだったというのか。

いや、無駄ではない。

失った血と魔力の回復に努め、僅かながら魔法を習得した。

以前と同等かそれ以上の力を手にすることができたのだ。

そして復讐も終わらない。

アドルフ・サクストン。そして・・・。

――――キャンベル家。

サイラス・キャンベルの妻、息子夫婦とその娘達。

息子に至ってはつい先日この町に帰って来たそうではないか。

・・・・ククッ、これは天の采配か！？　まるで私に

殺してくれと言っているようではないか！！

奇しくも今日はクリスマス。

聖なる夜に啓示を受けて、私は己の悲願を果たす。

――――――――――――最高だ！！！

――――――――――――――――――――――――――――
―――

「頼まれ事？」

「ああ。これを持ってくるように頼まれたんだ」

ランスが持っていたのは赤い小箱。

「なんでも、お前には見つからないように持って来いってさ」

ランス・・・・。お前なあ・・・・・。

ちなみにロトは一心不乱にパンを食っている。

パン一斤をまるごと食う奴なんて初めて見た。

今のロトはシマリスのようだ。主に頬が。

そんなことをしているうちに、隣町の病院に到着した。

「んじゃ、俺は用事があるから、先に行っててくれ」

「？　わかった。早く戻れよ？」

士郎はふたりと別れ、病院のとある場所に向かう。

「すいません」

「はい、なんですか？」

適当な看護婦に話しかける。

「お聞きしたいことがあるんですけど」

――

「――――――シロウ！！」

ランスが息を切らして走って来た。少し遅かったか。

「サクス爺さんが居なくなった・・・か？」

「！？」

ビンゴ。え？　なんでわかったのかって？
とりあえず落ち着け、ランス。訳は後で話すから。

「ランスは病院の人にこのことを知らせて。
ロトは校長先生に電話して伝えるんだ。いいな？」

「お、おう！！」　「わかった！！」

まあ、こんな無茶をしないように結界を張ったんだろうけどな、校長は。
でもサクス爺さんがあの程度の結界を解除できないはずがない。
考えられるのは、魔法発動体を隔離された可能性。
校長ほどの魔法使いが張った結界を無詠唱では解除できなかったのだろう。
だからランスに運搬を頼んだのだろう。予備の発動体の。
あの小箱の中身は指輪とかそんな物だろう。

そして連絡と通報を二人に任せて俺が向かったのは、あの人の病室。

病室の表札に彼の名前を見つけた。

――――――――――「マドック＝ディーリアス」。

―――――――――――――――――――――――――――――――

今朝目が覚めた。見慣れない白い天井に混乱したが、すぐに理解した。
最後に見た、自分に迫る黒を思い出す。

私は敗れたのだ。

どうやら私は5日間も眠っていたらしい。
理由についてはいろいろと説明を受けたが、よくわからん。
目覚めたのだから良しとしよう。
しかしシャーリーン先生はまだ目が覚めないらしい。

私の意識が戻ったことは病院が学校に連絡をいれたらしいが、
校長は見舞いに来れないらしい。
ロンドンからの増援を迎えなければならないから、だそうだ。
くっ・・・・自分が不甲斐無い。

――――――――コンコン。

『失礼します』

入って来たのは。

赤髪赤眼の少年。私は彼を知っている。

我がメルディアナ魔法学校の異端児。

１３歳という遅い時期に入学した、飛び級の５年生。

サムライマスター近衛詠春の養子（むすこ）。

―――――――――近衛士郎。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーー

「失礼します」

「・・・見舞いに来てくれるとは嬉しいね。しかし、君と私はそれほど

　親しくなかったと思うけれど？」

つまり、用があるならとっとと本題に入れということだ。

話が早くて助かる、と思いつつ士郎は話を切り出す。

「・・・ではお聞きします。俺は１３年前のことを調べています。しかし

　誰もが途中までしか教えてくれません。それを、貴方にお聞きしたい」

「何故、私なんだい？」

「他の先生にもう一度お聞きしても教えてくれるとは思えません。
それに
ディーリアス先生は当時新任だったと聞いています。
印象的な出来事なので、より詳しく記憶されていると思いました
ので」

（・・・さて、どうしたものか）

ディーリアスは考える。
いくら英雄の息子といっても彼はまだ子供。未熟な見習い魔法使いだ。
私は教師。生徒を危険な目には遭わせたくない。
だが、シロウくんは本気だ。
眼を見ればわかる。真剣にこの事件に関わろうとしている。
しかし・・・・・。

「１３年前と今回の事件の吸血鬼は同一人物だと思います」

「・・・・・・・・・！」

（・・・・・・・・なんだって！？）

「サクストンさんと校長先生の会話から推測しました。

『あの吸血鬼は私が倒さなければならない』『君の気持ちはわかる』と。
そしてそこから推測されるのはそれだけではありません。
――――――――『サイラス・キャンベル』」
（・・・・・！！）
そこまで知っているのか、この子は。
「彼はこの町で魔法使いによる自警団を組んでいた。もし吸血鬼が現れたなら、
対抗したでしょう。そしてサクストンさんの発言。キャンベル氏の死に
対して、彼にはなにかしらの非があり、それに責任を感じている。
そんな彼を気遣って、当時を知る人達は皆口を噤んでいる。
――――――――こんなところだろうと、俺は思っているんですが」
「・・・・・まいったな」
校長の言っていた通りだ。「あの子は頭がいい」。
2年飛び級していることから成績のことだと思っていたが、侮れない。
「そこまでわかっていたのなら、私以外の先生方でも教えてくれた

んじゃ
ないかい？
君は校長先生と懇意なわけだし、校長に聞けば良かったじゃないか」

「ここまで調べがついたと知られたら、逆にこの町から無理矢理避難させられます。現にネギ・スプリングフィールド君は幼馴染の生徒と
一緒に避難させられています」

しかもネカネさんまで使って説得したらしい。
あのジジイ、そこまでやるか。
まあそうでもしなきゃ、ネギくんが無茶をしかねないんだろうが。

「それで、どうなんですか？　俺の予想は」

「・・・・・・・・・概ね君の予想通りだよ。
ただ、ひとつだけ君の知らないことがあるようだ」

「・・・・なんですか？」

「サクストンさんは、キャンベルさんの従者――――魔法使い（マギステル・マギ）の従者だった。
二人は幼い頃からの親友だったんだ」

「――――――そうですか」

「ああ」

サクス爺さんの「非」について教えてほしかったのだが・・・・。
従者のくだりで話を逸らされた。まだ話の軌道を戻すことは可能だが、
彼はおそらく話してはくれないだろう。

ならばここには用は無い。

「ありがとうございました。お大事に。早く退院して学校に戻って来てください」

社交辞令もテキトーにして帰ることにする。
あ、シャーリーン先生のお見舞いに行こうか。ランスとロトを連れて。

「・・・シロウくん」

「なんですか？」

「この件に関わって、どうするつもりだい？」

そう。いくら頭が冴えていても、英雄の息子だろうと、士郎は所詮見習いだ。吸血鬼と戦うことも戦う者のサポートも満足に出来ない。

大人しくしているのが一番なのだ。

なのに何故、彼は危険に首を突っ込むのか。

ディーリアスは聞かずにはいられなかった。

「・・・・・・友達がいるんですよ」

「・・・・・・・・？」

「その友達と、約束しました。・・・・・それだけです」

そして彼は病室を出て行った。

「・・・・・「約束」か。それじゃあ・・・・・しょうがないな」

ディーリアスは彼の事を校長に伝えておこうと思ったがやめた。
どうせロンドンから派遣された魔法使い達が近日中にカタをつける。
それに、もしそうならなくとも

――――――――男の子には、成長する機会が必要だ。

ああ、これが親心なのか？　いや、自分の場合教師心かな？　などと考えながら、士郎を見送った。

――――――――――――――――

２５日。時刻は夜。聖なる夜に、闇の眷属が動き出す。

第１３話　過去編？　解ける謎（後書き）

今回は、士郎くんによる
論理性のカケラもない、主人公補正バリバリの推理をお送りしました。
自分で書いておいてなんなんですが、作者はこういった推理が大嫌いです。

「貴方はこれこれこういった方法を用いて被害者を殺害した。
動機は怨恨。アリバイの無い貴方には可能だったはずだ！！」

「くっ・・・・。そうだ、私が殺した・・・！！」

ををい！！他にもアリバイ無くて動機がある人いるのになんでその人って特定
したんだよ！？

犯人も！！物的証拠が提示されてないのに諦めんな！！
あっさり認めるな！！

・・・と、私は言いたい。最近のコ○ン、この手の話が増えてヤダ。

～補足～
１２月２５日。基督教の神サマのお誕生日だ。
・誕生日でしたっけ？　処刑された日でしたっけ？
まあ、処刑日を祝日にしないんじゃね？とも思いますが。

―一日2枚やれば終わるだろう、これくらいのプリント。
・勉強がデキるヤツの言い分ですよこんなの。
作者は集中的に終わらせるタイプです。締切間近に。

―――――――――――――最高だ！！！
・こういう「狂った人」を書いてると、自分もそうなっちゃうんじゃないか
とマヂで不安になりました。

―ランスが持っていたのは赤い小箱。
「なんでも、お前には見つからないように持って来いってさ」
・ランスは馬鹿なのではありません。頭が残念なのです（笑）。
まあ、フリーダムなヤツってことっす。

―「お聞きしたいことがあるんですけど」
・ナースステーションにディーリアス先生が起きているか聞きに行ったのです。
で、起きているとわかったのでサクス爺さんに拘らなかったのです。

―「・・・・・・「約束」か。それじゃあ・・・・・・しょうがないな」
・彼は漢だと思います。

今回の補足終了～。

次回、物語はやっと動きます。

「投影開始（トレース・オン）」まであと3話！！

それでは次回！！

第１４話　過去編？　迫る破綻（前書き）

・今シリーズは作者のオリキャラ尽くしのオリジナルストーリーとなっています。
・要点のみ纏めたため、駆け足な展開と内容になっております。
・でも長いです。後日談と合わせ１２話分くらいかかると考えています。

これらを踏まえたうえでお読みください。

なお、過去編を読まなくても今後の小説本編を理解するのに支障はありません。

それでは
『過去編・英国の吸血鬼』ー「第？話　迫る破綻」
――――――どうぞ。

第１４話　過去編？　迫る破綻

「・・・・フゥ・・・・・・・」

キャンベル家の屋敷。クリスマスパーティーを終えて皆(みな)眠りについている。

しかし屋敷の一室に、まだ床に就いていない人物がいた。

色素の抜けた白い髪と、老いてなお強い意志を宿した金の瞳。
若い頃は間違いなく美人であっただろう、整った顔立ち。
彼女は椅子に座って考え事をしていた。

彼女の名はオリヴィア・キャンベル。エレナの祖母にあたる人物だ。

オリヴィアは孫・エレナの不憫を嘆いていた。

「あれ程の魔力を持っているというのに、体が病弱では・・・・・。
健康であれば、間違いなく一流になれる素質を秘めているものを・・・」

魔法を使うことは精神力をすり減らすこと。
精神が弱まれば、病弱なエレナの体もそれに引きずられて弱ってしまう恐れがある。
家族全員が魔法関係者である以上魔法の存在こそ教えたものの、
キャンベル家はエレナに魔法を教えなかった。

「・・・・今更考えてもしょうがないというのに。

わたくしは何をしているのかしら」

いえ、こんなことを考える理由はわかっています。
巷で起こっている吸血鬼事件が原因。
わたくしは、サイラスのことを思い出しているのでしょう。

エレナの魔力は間違いなく、サイラス譲りのもの。
息子のユアンも、エレナの妹のラーラも、魔力量だけなら
並みの魔法使いを軽く超えている。
・・・・・エレナのそれには及ばないけれど。

・・・それにしても・・・・・。

オリヴィアは口の端を僅かに上げる。

最近、エレナの体調が安定しているようで嬉しいわ。
これも、あの少年のおかげかしら？

『お嬢様の部屋に通う少年がいるのです』とメイドから報告を
受けたとき、放っておいて正解だったようね。
友達を作る機会もなかったエレナにとって、その少年は
よき話し相手になってくれているのでしょう。

今度彼に会ってみようかしら・・・・

――――――ぞわっ――――――

・・・・・この魔力は――――――――――――――！！

間違いない。わたくしが奴を間違えることなどありえない。

「また・・・わたくしから家族を奪おうというの・・・・・！？
――――――――――――コーンフィールド・・・・・！！」

――――――――――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・思わぬ邪魔が入りましたが、予定通り行きましょうか」

そう呟いて、吸血鬼は歩を進める。

彼の居た場所の傍らには――――――血だらけのディアナが倒れていた。

「――――――――――「眠りの霧」」

念には念を入れて、屋敷に「眠りの霧」を放つ。
これで中の者は無力化された。

「・・・・おや？」

コーンフィールドは、屋敷の中から感じられる巨大な魔力を感知した。

（流石は彼（サイラス）の血縁・・・というところですかね）

一人目の標的が――――――――決定した。

――――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・はあ～」

「モグモグ・・・・ゴクン」

「・・・・・・・・・・・・・はあ～」

「ムシャムシャ・・・モグモグ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ「おばさん」」

「・・・・・何よシロウ」

「一応クリスマスなんだからさ、その溜息なんとかならない？」

ここは士郎の下宿先。食卓にはクリスマスの食材・料理が並んでいる。

「クリスマスだからじゃないの！！」

バンッ！！とテーブルに手を叩きつける。

「せっかくのクリスマスだっていうのに・・・・どーしてあの人は帰ってこないのよぉ～～～！！！」

そう言ってテーブルに突っ伏して泣き始める。

いや、おばさん。いい大人が「うわ～ん！」はないと思います。

説明しよう。

彼女はドナ＝ネヴィル。３０代前半の既婚者。

夫が校長の知人という繋がりで、俺の保護者代わりになった。

ツヤのある栗色の髪をセミロングにしていて、調理は終わっているのに

エプロンを着っ放しにしている。

で、おばさんの言う「あの人」こそその旦那さんなわけだが、彼は魔具師をしていて、よく魔法世界に出張している。

今回も置き手紙を残して魔法世界に行ってしまったようで、

おばさんは荒れているのだ。

ちなみにラブラブ。旦那さんには一度も会ったことはないが
おばさんが事ある毎に惚気話をしてきて困る。
本名ではなく「ミセス・ネヴィル」と呼ぶと
赤面して体をクネクネさせて悶える程だ。

「ああ・・・あなた。どうしてアナタはアナタなの・・・？」

「それは神のみぞ知る、ってやつじゃないの」

「そんなっ！　神はあたしとあの人の仲を引き裂こうとしているの
！？」

「誰もんなこと言ってないよ！？
それに、神様もそんなことしてる暇は無いと思う」

「シロウ！あたしと彼の夫婦仲の危機を「そんなこと」で
済ませるワケ！？」

ああ・・・めんどくせえ・・・・・・。

「おばさんは旦那さんを愛してる？」

「当たり前じゃない！」

「おばさんは旦那さんに愛されてると思う？」

「勿論よ！！」

「なら問題ないじゃない。そんなに愛し合ってるんだから、
神様だってふたりの仲を引き裂けないよ」

「シロウ・・・・・・・」

ふう。鎮火終了。これで元気になっていつもの食卓に戻るはず。
と思っていた士郎は、いきなりドナに抱き締められた。

「シ～ロ～～～～ウ！！アンタやっぱりいい子だわぁ～～！！」

ちょっ、おばさん！！　胸が！！　胸が当たってます！！

ここで追記しておこう。ドナおばさんは美人で若くて
・・・・・・・・・巨乳です・・・・・。

「ねえ、あんたウチの子にならない？　あの人仕事ばっかりだから、
子作りもできないし～～」

「・・・・・故郷に義妹（いもうと）がいるのでそれはちょっと・・・」

どうでもいいから早く解放してください。

――――――――ギィ・・・・・・・・・・。

「「・・・・・・・・・・・・!?」」

揃ってドアのほうを見る。

――――あの人が帰って来たのかしら!?

――――旦那さんか？　遂にその姿が・・・・!!

「・・・・・ニャ・・・ア・・・・」

ドアから現れたのは、血だらけの猫――――ディアナだった。

（な・・・・・・・・っ!）

「ゼイ・・・ヒュゥ・・・ゼイ・・・」

呼吸がおかしい。明らかに重傷だ。診療所に――――――

「ニャアッ・・・・・・!」

・・・・・・・・・・・!!

ほんの一週間程度の付き合いだが、コイツの言いたいことは理解できる。
「止めろ」と言っているのだ。コイツは治療を拒んでいる。
いや、今どこかへ連れて行かれることを拒んでいる。

「ディアナ。何処に行きたい？」

「ニャア」

初めてエレナさんの屋敷に連れてこられた時と同じ一言。

――――――――――「ついて来い」。

「！？　シロウ！？」

士郎はすぐに2階の自室に上がり、準備を整える。

魔法学校から支給されたローブ。
微弱ながら耐魔法性能付きになっている。
近右衛門から入学祝いにもらった護身用の短刀。
学校で使う杖とは違う、士郎専用の魔法発動体でもある。
そして、「秘密兵器」を持って準備完了。

――――――――――よし。

急いで階段を下りると

――――――――ドナおばさんが仁王立ちしていた

「・・・ごめん、おばさん。俺ちょっと出かけてくる」

「ダメよ」

・・・まあ、当然だよな。

「シロウ。あたしはまどろっこしいことは嫌いだって知ってるわよね？

――――答えなさい。

あんたがやろうとしてることは、どうしてもあんたじゃなきゃ駄目なの？」

「・・・・・・・・・・」

いいや、そんなことはない。魔法学校に連絡を入れれば先生達やこの町の魔法使いが動いてくれるだろう。でも。

「ごめんおばさん。そういうわけじゃないけど――――・・・・・・約束したんだ。だから、行かなきゃ」

士郎は力強く微笑んで、家族（ドナ）を見つめる。

「・・・・・まったく、あたしは校長先生と旦那からあんたを

任されてるんだけどね・・・・」

「・・・ごめんなさい」

「謝るくらいなら無茶するんじゃないの。
言っとくけど、校長先生には連絡を入れるからね」

「じゃあお願い。場所はキャンベルさんの屋敷ね」

「・・・帰ったらブン殴ってやるから」

「うわあ帰りたくない・・・・・・・・」

「ニャー・・・！」

――――――――――――――――――――――――――――――

「・・・これは・・・・厄介ですね・・・」

吸血鬼の目の前にあるのは、強力な魔法障壁だった。
これではこの先の部屋に侵入できない。

しかしそれは、彼を相手にするには時間稼ぎにしかならなかった。

「闇の精霊１９柱。集い来たりて敵を射て。「魔法の射手・連弾・闇の１９矢」」

吸血鬼の周りに漆黒の矢が浮遊する。室内という狭い場所では一度に多くの矢を
展開することはできないが――――・・・・

「障壁が壊れるまで打ち続ければいいだけのこと」

――――――ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！！！！！！

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「・・・・・はっ・・・・！なんて威力・・・・！」

オリヴィアは自力で「眠りの霧」を抵抗（レジスト）した。
そして屋敷の構造を計算して孫の部屋の前に障壁を張っていた。
（これで少しは保つ・・・。しかし根本的な解決には至らない・・・・！）

屋敷の誰かが自分のように起きていることに期待するしかない。
その者に助けを呼んでもらわねばならない。
オリヴィアの部屋には電話は無いし、彼女は障壁維持のために遠くまで
移動できなかったからだ。

（誰か・・・・！わたくしの、孫を・・・・・！！）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「――――――――――――着いたぁ！！」

運命は加速する。終極へ。終焉へ。

第１４話　過去編？　迫る破綻（後書き）

～補足～

―若い頃は間違いなく美人であっただろう、整った顔立ち。
彼女の名はオリヴィア・キャンベル。
・エレナとラーラが美少女なのは彼女の遺伝です。

―「また・・・わたくしから家族を奪おうというの・・・・・！？
――――――――――コーンフィールド・・・・・！！」
・これが吸血鬼のファミリーネーム（名字）です。彼女は１３年前、夫と共に
吸血鬼に接触したことがあります。

―血だらけのディアナが倒れていた。
・奮戦虚しく。漢だ。アンタ漢だよ！！（ディアナはメス猫）

―彼女はドナ＝ネヴィル。３０代前半の既婚者。
・年上のお姉さん成分を補給するためではありません。
最初は「天空の城〇ピュタ」の「４０秒で支度しな！」のおばさんが
イメージだったのに、何故かこんなキャラに。
気に入ってるけど。これがプロットなしの力か・・・・！
旦那さんは当初重要キャラだったけどオミット。

―血だらけの猫――――――ディアナだった。
――――――――――「ついて来い」。
・この子も最初はここまで重要なキャラじゃなかったんだよなあ。大活躍。

これがプロットなし（以下略）。

―「・・・帰ったらブン殴ってやるから」
・自分で作ったキャラに惚れ込んだ瞬間。この台詞はフッ・・・と浮かんで
きたんですよ。ありがちな台詞だけど。

今回の補足終了～

なんかやる気で出ないんすよぉ。実家に帰る準備全然してないしぃ。
今週中に帰らなきゃなんないのに。切符買ってねえ。
みなさんも夏バテには御用心。

それでは次回。

第１５話　過去編？　ＢＡＴＴＬＥ　ＰＨＡＳＥ（前書き）

・今シリーズは作者のオリキャラ尽くしのオリジナルストーリーとなっています。
・要点のみ纏めたため、駆け足な展開と内容になっております。
・でも長いです。後日談と合わせ１２話分くらいかかると考えています。

これらを踏まえたうえでお読みください。

なお、過去編を読まなくても今後の小説本編を理解するのに支障はありません。

それでは
『過去編・英国の吸血鬼』ー「過去編？　ＢＡＴＴＬＥ　ＰＨＡＳＥ」
――――――どうぞ。

第15話　過去編？　BATTLE　PHASE

彼女はまだ眠れずにいた。
溜め息をついたのはこの屋敷の令嬢、エレナ・キャンベル。

今日のクリスマスパーティーはとても楽しかった。
お父様が旅先でのお話をいっぱいしてくれたし、
料理もとても美味しかった。
お祖母様もお母様も妹（ラーラ）も、皆楽しそうだった。
でも・・・・・・

「シロウくんに会いたいなー・・・・・・」

はあ、と再び溜め息を吐く。
もう寝よう。

エレナは毛布をかけ直して眠る。

バキィンッ・・・

「・・・・・・・・・・？」

（・・・・気の所為・・？　今、変な音が・・・）

コツ・・コツ・・コツ・・コツ・・・・・

（靴の音・・・。こんな遅くに誰・・・）

コツ・・コツ・・コツ・・コツ・・・・・

（・・・・！　違う！！　この屋敷の人の足音じゃない！！）

エレナは基本、寝たきりの生活をしている。
家族・屋敷の使用人の足音などとうの昔に聞き分けていた。
だからわかる。この足音の主は自分の知らぬ人間だと。

――――――――コンコン。

「・・・・・・・・誰？」

「夜分に失礼」

そう言って部屋に入って来たのは、笑みを浮かべた黒づくめの男だった。

――――その男を見た瞬間、エレナの体に寒気が走った――――

「――――――――あっ・・・・・・！！」

――――――怖い。怖い。怖い。怖い。怖い！　怖い！！

「クク・・・そんなに怖がることはありませんよ。
ここで貴女は死ぬのだから」

「・・・・・・っ！？」

「しかし・・・その魔力量に、処女ですか・・・・。
フフフ・・・。吸血鬼として、その素晴らしい血を頂かぬわけには
まいりませんね・・・・・」

「・・・・・・！　や・・・・・っ！！」

――――――――嫌。そんなの嫌。吸血鬼？　私の血を吸う？　や
めて！！

――ヒュオッ・・・・・

「フシャアアアアアァァァ！！」

「ぬっ！？」

突如飛来した物体が吸血鬼を襲う！

・・・・・トンッ

吸血鬼の頬に爪痕を残した猫が、エレナを護るように吸血鬼の前に着地する。

「・・・・ディアナ！？」

「貴様・・・先ほどの・・・・っ！！」

「テメェの相手はこっちだ吸血鬼」

その声が聞こえた瞬間、炎の流星が吸血鬼の腹部を貫いた。

「・・・・・シロウくん・・・・・・・！？」

「・・・・守りに来たよ。約束」

そう言って笑う士郎の顔は、エレナが初めて見る表情（かお）で。

（・・・・・・かっこいい）

エレナは見惚れた。

「エレナさん、こっちっ！」

エレナと共に燃え盛る吸血鬼から距離をとる。

「！？　ディアナッ・・・・！！」

意識を失ったディアナが、エレナの腕の中に抱きかかえられる。
血だらけの体でかなりの無茶をやったのだ。・・・当然の結果だ。

「助かったよディアナ。後はゆっくり休んでろ」

吸血鬼から目を逸らさず、労いの言葉をかける。

「グッ・・・・くくく・・・。この程度で吸血鬼を倒せると？　少年」

燃えたのはコートだけだった。
「魔法の射手」に貫かれた腹も再生している。

（・・・最初（はな）からこの程度で倒せるなんて思ってねえよ）

メルディアナで教えてもらえる戦闘用魔法は2つしかない。
「武装解除」と「魔法の射手」だ。

（「武装解除」は今のところ論外だ。吸血鬼は身体能力だけで魔法使いと
渡り合う。武装解除しても意味がない。ただ、コイツが魔法を
使ってくるのなら――）

「考え事をしている余裕があるのですか？　闇の精霊7柱。集い来たりて敵を射て」

（――言ったそばから！　クソッ！　吸血鬼の肉体に魔法行使

！！
恐れられるわけだよ畜生！！）

「魔法の射手・連弾・闇の7矢」

「・・・ッ！「障壁最大（バリエース・マーキシム）」！！」

――――――闇の7矢は、呆気なく障壁を貫通した。

「っぶねえ！」　掠った！！

「エレナさん、大丈夫――――――」

エレナさんが被弾していないか確認する。良かった。当たっていない。

「――――――がっ！？」

ガシャンッ！ガラッ・・ガタン・・・・！！

とてつもない衝撃が士郎の体に疾った。
激痛。腹と・・・背中。逆さになった視界。ああ、吹き飛ばされたのか。
うっ！　やばい、吐き気が・・・・・。

「シロウくん！！」

「他所見している余裕があるのかと言った筈ですが？」

――――――――――――――――――！！

うるせえ。テメエは喋るな。

ヘタレてんじゃねえ近衛士郎！！たとえ勝てなくても時間を稼げ！！

「・・・げほっ！　・・風（ウェンテ）よ・・・・・　我等（ノース）をっ！！」

「っ！？」

士郎とエレナが突然吹き始めた風に覆われる。

「防御呪文ですか？　しかしこの程度・・・・・・・。　？」

既視感を感じた。以前も言った。「この程度」と。

あの時、は――――――

「時間稼ぎか！！」

「・・・！　・・・・・・・・・！！　・・・・・、・・・！！」

風で聞き取れない、声なき声。しかし吸血鬼の聴力でわかる。これは。

「・・・・・らに風の加護を！　風花旋風（フランス・パリエースウェンティ・ウェルテンティス）　風障壁！！」

「っぬあああああああああああああぁぁぁ！！！！」

吹き荒れる竜巻は屋敷を破壊し、その破片は逆巻く風に吹き飛ばされる。
「風花旋風　風障壁」。竜巻を発生させ、風の障壁で術者を守る。
竜巻の内側には士郎とエレナのみ。吸血鬼は吹き飛ばされたようだ。
戦いは、エレナの自室から庭に舞台を移す。

「はあっ、はあっ・・・！！」

「シロウくんっ！　大丈夫!?」

「はあ・・・っなんとか」

そう、なんとか上手くいった。でもアイツが本気になればこの障壁も保たない。
でも何故だ？　魔法先生達ならとっくにここに到着していてもおかしくない。
なのに来ない。遅すぎる。

・・・これは・・・・。最悪、こっちだけで対処しなきゃなんないかな？
こっちっつっても俺しかいないんだけどな・・・・・！

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ぁっっ！！！！！」

吸血鬼の咆哮が屋敷の庭に響き渡る。

――――――――――ガキどもめ！！もう遊びは終わりだ。
ワタシを怒らせてタダで済むと思うなよ！！
先ずはワタシを吹き飛ばしたその竜巻、打ち消してくれる！！
「闇の精霊２９９柱！！　「魔法の射手・収束・闇の２９９矢」！！！」

「ぐ・・・・っ！」
「きゃああっ！！」

収束された黒い矢が、風障壁を紙のように貫く。

「フッ！」

驚異的な速度で距離を詰める。
速度を殺さず、腰を捻り、全ての力を拳に籠める。

「――――――シロウくん！！」

「――――――チェックメイトだ！！」

『誰が？』

「！！？」

吸血鬼の拳は士郎の頭部を粉砕した。だが、手応えが軽過ぎた。

「これは・・・・！？」

頭部がグチャグチャになった士郎の体が――――霧散した。エレナも消えていく。

「分身（コピー）！！」

「「戒めの風矢（アエール・カプトゥーラエ）」「紫炎の捕らえ手（カプトゥス・フランメウス）」「流氷の縛り手（ウィンクトゥス・アクアーリウス）」！！！」

「っぐ・・こ・・このおおおおおお！！」

魔法で作った分身をその場に残し、既に2人は避難していた。
そして隙を突いて三重の捕縛魔法を展開したのだ。

（増援が来るならこんなことする必要ないんだけど・・・）

「加速（アクケレレット）」

速度を上げて吸血鬼に接近し、ローブのポケットに両手を入れる。
左手には短刀、右手には羊皮紙を。

「キ、貴様何を・・・・！」

（・・・これで駄目だったらもうお手上げだな）

「俺はネギ君ほど天才でも努力家でもないからな。
こんな道具を使わなきゃなんないんだよ。」

この羊皮紙には魔方陣が描いてある。効果は魔法行使補助。

俺が完全に習得していない魔法を一度だけ使用可能な域に押し上げる。
この魔法を、ゼロ距離でぶちかます！！！

「何を言って・・・・」

「プラクテ・ビギ・ナル！！
闇夜切り裂く一条の光。我が手に宿りて敵を喰らえ。「白き雷（フルグラティオー・アルビカンス）」
！！！！
吹き飛べ！！！」

――――――――キャンベル家の庭に、弩級の雷が走った。

――――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・嘘だろ・・・・・・・・」

士郎の目の前には、信じられない光景が広がっていた。

士郎の「白き雷」は吸血鬼の体を容赦なく焼き、焦がし、貫いた。
腕と胴は千切れ、体のパーツが散乱している。
なのに。

「くっ・・・くく・・・くははははははははっっ！！！
面白い！！　子供が私にこれ程のダメージを与えるとは！！」

右腕と下半身を失った体で叫ぶ。

「・・・・・・・っ！！」

落ち着け。これで奴はもう動けないんだ。この場はこのまま逃げればいい。

屋敷の人達を起こして避難させるために、また捕縛魔法をかける。

「・・・私はまだ終わってはいませんよ？」

「！？」

ミチミチッ・・・メキ・・・ヌチャッ・・メキッ・・・

細胞が、体組織が、筋繊維が、臓器が骨が再生する。

間を置かず、吸血鬼の体は先ほどまでと寸分違わぬ姿を取り戻した。

今度こそ、士郎は戦慄した。

「さあ、第二幕といきましょうか」

――――――――――――――――――――――――

「はっ・・・はあっ・・・・・はっ・・・」

・・・情けない。若い頃はサイラスと並んで戦ったこともあるというのに。

この程度の魔法行使で息が上がるなんて。

荒い呼吸を鎮めながら、オリヴィアは廊下に座り込んでいた。

ついさっきわたくしのもとへ来た少年。

近衛士郎。

かのサムライマスターの系譜。彼に任せるしかない。

彼が呼んだ応援が到着するまで、彼は一人で戦うことになる。

彼が敗れれば、エレナも死ぬ。

サイラス・・・どうか、あの子たちを守って・・・・・！！

オリヴィアは亡き夫に祈ることしかできなかった。

第15話　過去編？　BATTLE　PHASE（後書き）

～補足～

―吸血鬼の頬に爪痕を残した猫が、エレナを護るように吸血鬼の前に着地する。

・名前に負けない働きです！！アンタすげえよ！！流石カミサマ！！

『ディアナ』

・ギリシャ神話ではアルテミスと同一とされる、ローマ神話の農耕の女神。

元は樹木の神で、人間に対する神性を持つ。

―武装解除しても意味がない。ただ、コイツが魔法を使ってくるのなら――

・魔法を使うということは発動体を持っているということなので、もし魔法を

使ってきたら武装解除を使おう、という算段です。

―「・・・ッ！「障壁最大（バリエース・マーキシム）」！！」

・士郎は障壁を4枚まで展開可能です。

―「「戒めの風矢（アエール・カプトゥーラエ）」「紫炎の捕らえ手（カプトゥス・フランメウス）」「流氷の縛り手（ウィンクトゥス・アクアーリウス）」！！！」

・吸血鬼が分身に気をとられてる間に詠唱しました。無詠唱ではないです。

―この羊皮紙には魔方陣が描いてある。効果は魔法行使補助。

俺が完全に習得していない魔法を一度だけ使用可能な域に押し上げる。

・困った時は道具作成。それが士郎クオリティ。

いくぜ　いくぜ　いくぜえ！！
オレは最初っからクライマックスだぜえ！！！

はい、クライマックスが近づいております。

それでは次回！！

第１６話　過去編？　Ｆａｌｌｉｎｇ　ｏｆｆ（前書き）

・今シリーズは作者のオリキャラ尽くしのオリジナルストーリーとなっています。
・要点のみ纏めたため、駆け足な展開と内容になっております。
・でも長いです。後日談と合わせ１２話分くらいかかると考えています。

これらを踏まえたうえでお読みください。

なお、過去編を読まなくても今後の小説本編を理解するのに支障はありません。

それでは
『過去編・英国の吸血鬼』ー「第?話　Ｆａｌｌｉｎｇ　ｏｆｆ」
――――――どうぞ。

第16話　過去編？　Ｆａｌｌｉｎｇ　ｏｆｆ

あれ・・・・？　俺、どうしたんだっけ・・・・？

なんか体が重いなあ・・・。全身痛いし。・・・うっ！

「ゲホッゴホッ！！」

口の中に鉄の味が広がる。ああ、そっか。

『闇の精霊１９柱。集い来たりて敵を射て。「魔法の射手・連弾・闇の１９矢」』

『――――障壁最大（バリエース・マーキシム）！！』

俺、死にかけてるんだった。

――――――――――――――――――――――――

メルディアナ魔法学校。

（・・・校長！　これでいいのですか！？）

学校の女性事務員、パメラ＝マクベスは小声で問いかける。

もう一人の人物に聞こえないように。

校長室には３人の人間がいた。

校長、事務員のマクベス、そして・・・

「余計なことは考えないようにしていただきたい」

白いローブに身を包み、フードで頭を隠した人物。
ロンドン魔法協会から派遣された魔法使いだ。

「校長。貴方の部下の多くが立ち打ちできぬ程の吸血鬼を相手にして、
せっかくの増援を減らすのは得策ではないでしょう？ここは一刻も早く結界を張ることに努めるべきです」

「生徒を見殺しにしろと！？」

（ネヴィル夫人からの連絡は既に受けている。シロウ・コノエが吸血鬼に襲われている可能性があるというのに、この男は救援を送るなと言う）

「その生徒を救うためにも、結界を張ることが最優先だと言っているのです」

（違う。この男はそんなこと微塵も思っちゃいない。ただの魔法生徒が吸血鬼相手にどれほど耐えられるというのか。それをわかっていないはずがない！）

「校長。貴方自身が彼らのもとに行こうなどとは考えていないでしょうね？
我々は貴方の指揮下に置かれているのです。指揮官が戦場に出る

など
以ての外です。お分かりですね？」

（指揮下に置かれているだと？　ならその態度はなんだ！？　協会の権力をちらつかせて、校長に無理やりいうことをきかせているくせに・・・！！）

「そちらの事務員の方もお願いしますよ？　今は人手が必要なのです」

（くっ・・・・・！）

「落ち着くんじゃ、パメラ君」
「校長っ・・・・・・」

（先ほどの竜巻・・・。アレはおそらく士郎じゃ・・・。しかし・・・）

（スマン・・・士郎。スマン・・・近右衛門・・・・・・）

校長の顔には、普段とは比べ物にならない深い皺が刻まれていた。

――――――――――――――――――――

現状。
魔力は全快時の半分。
身体は穴だらけ。出血多量。

ああ・・・寒い。死ぬときに体が寒くなるってホントなんだなあ。

痛みも失くなってきた。感覚も麻痺したのか？

じゃあ寒くないはずじゃん、などと思いながら、士郎は空の月を眺めていた。

そしてその月を遮るように、黒い影が士郎に覆い被さった。

（・・・コラてめえ、月を隠すなよ）

「――――まだ私を睨みつけるだけの気力がありますか。フフ・・・本当に
君は面白い」

「こっち・・・は、笑え・・ないん・・・・だ・けど」

俺は昔死にかけた。死が充満する世界を生き延びた。死んだ心も、代わりの心をアイツらに貰った。

――――――この程度でビビる程、ヤワな育ち方をしちゃいない。

（さて、最期にどうやって一撃喰らわしてやろうか）

「頭部を潰せば確実ですね。・・・君、才能ありますよ。サイラスを思い出して
しまいました。ここで死ぬのが残念です」

（へっ、テメエが殺すんだろうが）

「さらば、少年」

「・・・・・・・めてよ」

・・・・・・・・・・・・？

「やめてよっ！！！」

エレナさんが、アイツを――――――――――――――突き飛ばした。

「うおおおおっ！？」

１０ｍほど飛ばされたが、なんなく着地。
だが、明らかに面喰らっている。

もちろん俺も――エレナさん本人も。

「・・・っあ、あれ・・・・・・・・？」

エレナさんは病弱で、普段は寝たきりの生活をしている。なのに。
俺やアイツが気付かないほど速く接近し、吸血鬼を突き飛ばした。

（どうなって・・・・・？）

「・・・突き飛ばす、などという方法をとるあたり、貴女は魔法が使えないよう
ですね・・・・。しかし、サイラス譲りの魔力はホンモノ・・・・
というワケですか。フフ・・・そういえば、最初の標的は貴女でしたね」

「え・・・・・・・・・・？」

（――――――――マズイ！！）

「エレナ・・・さんっ、逃げ・・・！！」

「あっ・・・・・・・・！！」

――シロウくんが死んじゃう。
そう思ったら、体が勝手に動いてた。
なんであんなに速く動けたのか、なんであんな力が出たのかわからない。
でも、助けたかった。助けられた。
だから私は助けたことを後悔しない。
たとえ――――――私が死んでも。
お祖母様、お父様、お母様。ごめんなさい。

ラーラ。私がいなくなっても皆に迷惑かけちゃダメよ。

・・・楽しかったなあ。
この一週間、すごく楽しかった。
ディアナが来てくれて。
――――――――――シロウくんが来てくれて。本当に楽しかった。

また、会いたいなあ。

――――――――――――――――――――――――

――――あそこで倒れてるのはナンダ。ダレダ。
あの服は。あの髪は。あの顔は。あの・・・・・っ！

『力なく放り出された、細い手足。』

姉の死と重なる。

だれだ。誰だ。誰だ！！――――――――アイツだ。

「――――――――テッメエえええええええええ！！！」

アイツだ。アイツがエレナを――――――――――――――――――――！！！！

向かうは吸血鬼。瀕死の体に鞭打って、土を蹴り風を切る。

「プラクテ・ビギ・ナル！！「魔法の射手・収束・光の１９９矢」！！！！」

庭一面を覆い尽くす光の矢。それらが一か所に射出される。

「そんなあからさまな攻撃が当たるわけないでしょう」

吸血鬼は軽くステップを踏むだけでそれを避ける。

「矢の数も無駄に多い、魔力の無駄遣いです。それに夜中に光の矢を使う
とは。複数の属性が扱えるのなら、光や雷は避けるべきですよ？」

（――――――うるせえ）

「激昂し過ぎです。そんなに大事でしたか？　彼女のことが」

（――――――うるせえ！）

「彼女はまだ生きてますよ？」

――――――え？

「血を吸う前に殺すわけないじゃありませんか。ちゃんと手加減しました。
彼女の血はおそらく極上ですからね？」

・・・・・やっぱりコイツは、ここで殺す。
コイツが生きることは、百害あって一利なしだ!!

「プラクテ・ビギ・ナ――――――、あれ？」

ガクンッ

士郎の膝が崩れ、その場に倒れこむ。頭もクラクラする。

エレナが死んだと思い、士郎の体は怒りを燃料に動いていた。
失血気味の脳は、頭に上った血に支えられていた。

エレナが生きていると知り、僅かに怒りが冷めた士郎の身体機能は停止した。

「・・・さすがに限界ですか。まああれだけの「魔法の射手」を一度に放てば
そうなって当然」

あー、それもあるか。本当に俺は頭に血が上っていたらしい。
おかげで魔力も全快時の2割弱しかなくなった。

「君は一人で逃げていればよかったのです。君のような人間は
足手纏いの所為で死んでゆく。やはり君はサイラスに似ている」

サイラスさんの足手纏いってのは・・・サクス爺さんか？
あー・サクス爺さん忘れてた。さっきの「風花旋風　風障壁」を見て助けに来てくんねーかなあ。

「安心しなさい。すぐに彼女に君のあとを追わせてあげましょう。
マ・ルート・ハ・ルート・ノアノート――――――」

――――――――――――――――――――――――――――

――――――そこは、何処だったのだろう。

世界。根源の渦。英霊の座。とある英霊の心象風景。

それは剣の丘。

――――――――――――――――――――ゴォン！！

錆び色の大地。突き立つ剣。黄昏の夕焼け。宙で軋む歯車。

その丘に、たった独りで立つのは――――――――――

《理想に溺れて溺死でもしたか？　衛宮士郎。》

第１６話　過去編？　Ｆａｌｌｉｎｇ　ｏｆｆ（後書き）

今回は特に補足なし。
あえて言うなら、メルディアナ魔法学校校長を権力に負ける人間にして
ごめんなさい。
あ、補足あった。

～補足～

―ロンドン魔法協会の術者がなぜ夜中まで結界を張らなかったのか。
・ぶっちゃけ彼らの到着が遅れたからです。

明日から実家に帰るんですが、実家でパソコン使えるかわからないんで
２話投稿。

最悪、９月下旬まで更新できないということをお知らせしておきます。

次回、まさかのあの人登場！！

第１７話　過去編？　剣の丘

それでは次回！！

一人で長旅って初めてなんだよなあ。帰れるかなあ。
よし、切符買ってこよう。（↑まだ準備してない）

最悪、自由席で立ち席になりますね。

それではしばしのお別れ。９月（下旬）をお楽しみに！！

第17話　過去編？　剣の丘（前書き）

ソロモンよ、私は帰って来た！

お久しぶりです。佐藤です。活動報告で年末に更新すると言ってたわけなんですが、よく考えたら年末も実家に帰るのでパソコンいじれへんやん。っつーワケで今のうちから更新しようと思い直した次第です。

つっても忙しいことには変わりないので、この土日で過去編を全て投稿しときます。ああ、ストックが・・・・・。

それでは

『過去編・英国の吸血鬼』ー「第？話　剣の丘」

――――――どうぞ。

第17話　過去編？　剣の丘

――――――――――――――――――――ゴォン！

歯車が浮いていた。

黄昏という言葉が相応しい夕焼けの空。

空に、幾つもの歯車が浮いていた。

なんて、懐かしい――――――――――――

「――――――――え？」

懐かしいだって？

俺は、此処を知っている――――――？

ガバッとその場で起き上がり――――

――――――――――――剣。

剣が在った。

短剣、長剣、小剣、大剣、石剣、銅剣、西洋剣、騎士剣、斧剣、和刀、野太刀、
小太刀、夫婦剣、霊剣、聖剣、魔剣、破魔剣、妖刀、神刀、神剣。

あらゆる剣が、其処にあった。

錆び色の大地に墓標のように突き刺さる、無窮の剣。

そして――――――――――――――――

――――――赤い外套を着た男が、こちらを向いて立っていた。

「・・・随分とボロボロなようだが、平気なのか？」

言われて気づいた。そうだ。

俺は怪我をしていた筈なのに――――傷が、治っていた。

服は血だらけのままだったが。

「・・・・・安心するな。見たところ塞がっているだけのようだ。

此処はあらゆる剣を構成する要素が満ちている。

それがお前の傷を塞いだのだろう」

・・・・・・・・・・？

「なに言ってるんだ？　それじゃあ俺がまるで剣みたいじゃないか」

そう言うとその男は、面白いものでも見るような目で言った。

「ククッ・・・・・「衛宮士郎（おまえ）」の口からそんな言葉が聞けるとはな」

「は？」

「まあいい。こちらの用件をさっさと済ませてしまおう。お前はともかく女性（レディ）をいつまでも待たせておくわけにはいかないのでね。それに、いつまでもお前に此処に居られるのは迷惑だ。さて、――――――ついて来れるか？」

何を言ってるんだ、と口を開こうとして――――――――

コトバが、紡がれた。

体は剣で出来ている。

「――――――――――――――I am the bone of my sword.」

黒い太陽。ソコから溢れる黒い泥。呪いの炎。

周りには、人・・・・・・いや、ヒトだったモノ。

家族も友人も知人も他人も焼けていく。

家も公園も学校も、少年の生まれ育った場所が燃えていく。

大地も空も空気をも焦がし、それでも炎は命を喰らう。

まだ喰い足りぬと、炎は勢いを増していく。

助けを乞う声を振り切って、自分の命を守った少年の心も。

――――――――――灰になって燃え尽きた。

そして。

『・・・・・・ああ、よかった』

助けられ。救われ。そして・・・・・・呪われた。

血潮は鉄で、心は硝子

「Ｓｔｅｅｌ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｏｄｙ，ａｎｄ　ｆｉｒｅ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｌｏｏｄ.」

『――――――うん。初めに言っておくとね、僕は魔法使いなのだ』

『いいかい、士郎。君の投影は、絶対誰にも見せちゃいけないよ』

『何を言ってるんだ士郎！男はカワイイ女の子のために頑張るものなんだ！

・・・あれ？　大河ちゃん？　何をそんなに怒ってるんだい？』

『・・・・士郎、女の子を怒らせちゃいけないよ。後で損するから

ね』

『僕は、正義の味方になりたかった』

『・・・ああ、安心した――――――』

幾たびの戦場を越えて不敗。

「Ｉ　ｈａｖｅ　ｃｒｅａｔｅｄ　ｏｖｅｒ　ａ　ｔｈｏｕｓａｎｄ　ｂｌａｄｅｓ．」

『おはようございます、先輩。もう藤村先生来ちゃいますよ？』

『しーろーーう！！朝ごはんーーーーーっ！！！』

『おっす、衛宮！で、どうだ？そろそろ弓が恋しくなったか？』

『いつもスマンな衛宮。ところで、実は生徒会室のエアコンが・・・・』

『よう衛宮。お人好しのお前に頼みたいことがあるんだけど、イイよな？』

ただの一度も敗走はなく、

「Ｕｎｋｎｏｗｎ　ｔｏ　Ｄｅａｔｈ，

『問おう、貴方が私のマスターか』

『衛宮くん。どういうことかキッチリ説明してもらうわよ？』

『喜べ少年。君の願いはようやく叶う』

『こんばんわ、お兄ちゃん』

『――聖杯は欲しい。けれど、シロウは殺せない』

『判らぬか、下郎。そのような物より、私はシロウが欲しいと言ったのだ』

『――やっと気づいた。シロウは、私の鞘だったのですね』

『シロウ――――貴方を、愛している』

“――――契約しよう。我が死後を預ける。その報酬を、ここに貰い受けたい”

ただの一度も理解されない。
Ｎｏｒ　ｋｎｏｗｎ　ｔｏ　Ｌｉｆｅ．」

『殺して、殺して、殺し尽くした。己の理想を貫くために多くを殺し、
無関係な人間の命なぞどうでもよくなるぐらい殺して、
殺した数の数千倍もの人間を救った』

『そんなことを何度繰り返したか・・・分からないんだセイバー』

『そら、そんな男は今のうちに死んだ方が世のためだとは思わないか？』

彼の者は常に独り　剣の丘で勝利に酔う。
「Ｈａｖｅ　ｗｉｔｈｓｔｏｏｄ　ｐａｉｎ　ｔｏ　ｃｒｅａｔｅ　ｍａｎｙ　ｗｅａｐｏｎｓ．」

『・・・・・じゃない』

『・・・・・なんかじゃ、ない・・・・・・！』

『・・・・・・間違い、なんかじゃない・・・・・・！』

『――――決して、間違いなんかじゃないんだから・・・・・・！』

『俺の勝ちだ・・・アーチャー。』

『ああ、そして私の敗北だ。』

“――――俺は、間違えてなどいなかった――――”

故に、生涯に意味はなく。

「Ｙｅｔ，ｔｈｏｓｅ ｈａｎｄｓ ｗｉｌｌ ｎｅｖｅｒ ｈｏｌｄ ａｎｙｔｈｉｎｇ.」

『私を頼む。知っての通り頼りないやつだからな――――君が、支えてやってくれ』

『大丈夫だよ遠坂。答えは得た。俺も、これから頑張っていくから』

その体は、きっと剣で出来ていた。

「――――――Ｓｏ ａｓ Ｉ ｐｒａｙ，”ＵＮＬＩＭＩＴＥ

D　BLADE　WORKS”・」

――――脳が沸騰する。
鮮明な映像が、音が、匂いが、感触が記憶が経験が魂に流れ込む。
刻み込まれる。
――――脳が焼き切れる。
膨大な情報量に脳が悲鳴をあげる。
――――吐き気がする。
衛宮士郎の殺戮（じぶんりそう）に。英霊（じぶん）エミヤの殺戮（おこない）に。

そして理解した。
――――彼（コレ）は、俺なのだと。

薄れゆく意識のなか、士郎は――――

「――――よく耐えた。お前には戦うチカラが備わった。元居た場所へ帰るがいい。
まったく、姉弟揃って”英霊の座（こんなところ）”に迷い込むなど、
誰が予想出来るのか。少なくとも、私に非はないな。」

――――近衛士郎は世界に還る。

第17話　過去編？　剣の丘（後書き）

近衛士郎が去った後。剣の丘に残されたのは。
赤い外套を羽織った白髪・褐色肌の男、と――――
雪のように真っ白な肌と、輝く銀色の髪。血のように紅い瞳を持つ少女が
立っていた。

「ありがとう。シロウ。」

「私は君の弟とは別人だと何度言ったらわかるのかね？」

「もう、ホントにシロウは素直じゃないんだから！こういうときは素直にお礼を
　受け取ればいいのよっ」

少女は声を荒げるが、その声色と表情は楽しげだ。
対する青年は無言で苦笑している。この場所で何度も繰り返された遣り取りだ。
この少女には勝てないと、彼は既に諦めていた。

この剣の丘に雪の少女が舞い降りたとき、彼は我が目を疑った。
彼女から話を聞いて、彼はさらに混乱した。
彼女が英霊（ここ）の座に来た理由をひとまず仮定し、納得することにした。
剣しかない孤独な世界に、住人がひとり増えた。

どれくらいの時間が経ったか、ある時。血だらけの少年が迷い込んだ。
その少年は少女の弟であり、青年と基を同じとする存在だった。

うろたえる少女を制し、少年に近寄る。
生きている。何故か傷は塞がっている”だけ”の状態だった。
少年は何事か呟いた。
「・・・護るんだ、俺が――――・・・・・・」
「・・・・・・約束、したんだ・・・か・・・」
少年は誰かの為に戦い、傷ついたらしい。
平行世界だろうが異世界だろうが、「衛宮士郎」は人助けをする性分らしい。
青年はそう、思った。
「士郎ったら、小っちゃい頃と全然変わってないのね。ケガしちゃいけません
って、何度、言ったら、判るのよ・・・・・・」
少女は泣きそうな声で呟く。
「どうせこれからも、危ないコトを続けるんでしょ・・・・・？」
少女は青年に顔を向ける。
彼女が言いたいことは、目を見るだけで伝わってきた。
“ならばせめて。弟が死ぬことのないよう。彼に――――戦う力を。”

――――――そして冒頭。

「・・・・・これで良かったのかね？」
青年は少年に全てを与えた。
己の記憶を通して。
魔術、戦術、戦闘技術、戦闘経験。そして――――心象世界の剣（つるぎ）たち。
要らぬ重荷も背負わせてしまったのではないかと、青年は思考する。
「いいの。お姉ちゃんの言うことをきかない弟には、それくらいの罰（バチ）が
丁度いいわ。」
そう言って少女は笑う。
その表情は自分の知り合いにそっくりだと、青年も密かに笑う。

其処は剣の丘。とある英霊の心象世界。

いつまで私／彼女が英霊（ここ）の座に居られるのかわからないけど。

――――――別れ（その）のときまで、一緒に／共にいよう。

衛宮イリヤスフィールと英霊エミヤ。少年を見守る者が、ここに二人。

第18話　過去編？　Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ．．．（前書き）

・今シリーズは作者のオリキャラ尽くしのオリジナルストーリーとなっています。
・要点のみ纏めたため、駆け足な展開と内容になっております。
・でも長いです。後日談と合わせ１２話分くらいかかると考えています。

これらを踏まえたうえでお読みください。

なお、過去編を読まなくても今後の小説本編を理解するのに支障はありません。

それでは
『過去編・英国の吸血鬼』ー「第?話　Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ．．．」

――――――どうぞ。

第18話　過去編？　To be continue・・・

――――二十七の撃鉄よ、上がれ。魔力よ奔れ。
このボロボロの身体にもう一度、立ち上がる力を。よこせ。

◇――――◇――――◇

破壊された屋敷の庭。人知れず戦う場所と化したそこに立つのは一人だけ。
吸血鬼・コーンフィールド。
立ち向かった少年にとどめを刺し、当初の標的に向って歩を進める。

（・・・思ったよりあっけなかった）

――――しかし。

「子供にしては良くやったと、称賛するべきでしょうね」

標的の前に辿り着く。
１３年前。自分を打ち倒した男の孫娘。
その顔に既に生気はなく、力なく地に臥している。
１３年前。敗れた私は命からがら逃げおおせたが、吸血鬼の命である血液を大量に
失血し、かつての力を失った。そして誓った。彼への復讐を。
彼と再びまみえることは叶わなかったが――――
彼の一族を皆殺しにして復讐を果たすとしよう。
その血を、いただく。

「――――――同調開始（トレース・オン）」

◇――――――◇――――――◇

「――――――同調開始（トレース・オン）」

身体状況。損傷が著しいが、今は全て塞がっている。
残存魔力。残り2割を切っていたが、周囲の大源（マナ）を魔術回路に注ぎ込む。

――現在、僅かずつ回復中。
戦闘意欲――――充分。
――――結論。短時間なら”戦闘可能”。

歯を食いしばって立ち上がる。

「・・・・・・ありえん」

視線の先には――――――

「・・・・何故、生きている・・・・・・？」

――――さあ、戦いを再開しよう吸血鬼。貴様はここでブチ殺す。

◇――――◇――――◇

疑問。疑問。理解不能。不可解。恐怖。疑問。不可解。理解不能。
彼のナカに渦巻く感情。

「確かに殺したはずなのに。」「何故」「生きている？」
吸血鬼は初めて少年に、恐怖を、抱いた。

検索開始。
潜る。潜る。己の心へ。心象世界へ。吸血鬼（てき）を打倒できる剣を検索する。
今の俺の魔力量ではまともな剣は投影できない。
ならば。

「――――――投影開始（トレース・オン）――――――――――！！」

士郎の手に現れたのは細身の剣。
異様に短い、十字架を模した柄。レイピアのように細い刀身。
それは魔術の作用を打ち消し、基督教の神・聖人のものではない神秘を否定する。
「聖堂教会」の投擲剣、『黒鍵』。

「っっ！！？」

吸血鬼が怯む。

何だアレは！！
あの剣を見ているだけで震えが走る。
恐ろしい、怖ろしい！！
理屈ではない。体が、魂が、あの剣を恐れている。
一刻も早く、此処から逃げ――――――

――――――逃げ、る？

・・・・・冗談ではない。
何故、私が、あんな少年から逃げなければならないのだ！！
私は吸血鬼。夜を支配する怪物！！
それが、あのような子供に負ける道理はない！！

どんなに恐ろしかろうが、所詮は剣。間合いの外から「魔法の射手」で貫けば
いいだけの話ではないか！

「マ・ル――――「遅い」」

体を絞る。体を捻じる。身体を弓のように張りつめる。
全身の力を一点に集め、
脚を踏みこみ、腕を振りぬき――――黒鍵(や)を、放つ。

――――――――ヒュオッ・・・・・・・ドッ

「がっ・・・・・・！」

吸血鬼に黒鍵が突き刺さった――――瞬間。

「――――爆ぜろ――――――壊れる幻想(ブロークン・ファンタズム)」

黒鍵(とうえい)という名の幻想が膨れ上がり、籠められた魔力が暴発する。

――――――――ッドゴォォオン！！！！！！！！

・・・・――――――吸血鬼の敗因は。

黒鍵が投擲剣だと気づかなかったことか。

剣が爆発すると思いもしなかったことか。

黒鍵を恐れ、身体が弱っている士郎に接近戦を挑まなかったことか。

あるいは、その全てか。

いや、そのどれでもない。

この結果は始めから決まっていたこと。

幾たびの戦場を越えて不敗。

“――――――Ｉ ｈａｖｅ ｃｒｅａｔｅｄ ｏｖｅｒ ａ ｔｈｏｕｓａｎｄ ｂｌａｄｅｓ.”

衛宮士郎が敗(ま)けることなど、有り得ない。

「ぐっあぁっ・・・・グアァァああアァァアあアあアッ!!!」

吸血鬼の右半身はほとんど吹き飛んでいる。

傷口は焼け爛れ。右腕は無く、胴体は辛うじて繋がっている。

（・・・・・頑丈だな。）

「投影開始(トレース・オン)」

再び黒鍵を投影し、振りかぶる。

士郎の冷徹な視線と、コーンフィールドの笑みを浮かべた眼が交わ

る。

「――――終わりだ」

次の瞬間、戦いは確かに終わった。ただ、それは――――――――
士郎が予想した終わりではなかった。

――――――――ドサ・・・・・・。

視界が歪み、その場に倒れこむ、士郎。

「・・・・ふっはは・・・フハハハハハッハハハッ!!!!!
どうや・・・ら、ここまで、の、ようですね・・・・お互いに。」

コーンフィールドはそう言って士郎に背中を向ける。
足元もおぼつかない身体でこの場から去ろうとする。

――――――――待て。

――――――――巫山戯るなよ。

――――――――逃げんな!!
ここまでやっておいて――――危なくなったら逃げるのか!!!!!!

「ふざけんな、こんちくしょう……!!!!!」

しかし、士郎の身体は動かなかった。
士郎の身体は、とっくに限界を越えていた。
重傷の体で、他人の記憶任せに技を使用した結果だった。
今の士郎には、相手を睨むことしかできなかった。

「く・・・ク・・・・。イイ目デスネ。実にワタシ好みデすヨ・・・。
憎いですか・・・・？　私が憎いか！？」

コーンフィールドも限界なのか、口調が定まらない。
その拙い足でこの場から逃げようとする、前に。

「私が憎ければ、いつか魔法世界（ムンドゥス・マギクス）まで来るがイイ・・・・・。
私は吸血鬼・ボールドウィン・コーンフィールド！！
いつか来るその時までにこの傷を癒し、君との殺し合いに備えよう！」

『私が憎ければ追って来なさい・・・・魔法世界まで。』

その言葉を最後に、士郎の意識は暗転した。

第18話　過去編？　Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ．．．（後書き）

前話の現象を作者の理屈で説明すると長～くなるので割愛。機会があったらいつか書きますわ。

見せ場なのに勝負は一瞬。ゴメン。だってこれくらい強いんだもん士郎。

補足

・壊れる幻想
　本当は宝具でしか使用できない技ですが、普通の投影でも使用できることにしました。まあ、内包する幻想・魔力を暴発させる技ですから、ランクの高い投影品を爆発させた方が当然威力は高いです。黒鍵で大ダメージを与えられたのは、相手が吸血鬼だったからだからです。爆発した際に放出される魔力は、剣に内包された概念・性質を帯びるという設定もプラスしました。

・幾たびの戦場を越えて不敗。
　日常の争い（主に女性絡み）には常敗。

・他人の記憶任せに
　当時はまだアーチャーの記憶・経験をモノにしたわけじゃないですから。そしてこの後、ラカンとの修行を経て、魔法と魔術をハイブリットした独自の術式・戦闘方法を確立するわけです。

今回はこんなトコですね。

ラスト2話は後日談になります。
時間軸は現在（２００２年＝木乃香たちが中2の夏休み）に戻ります。

次回は3年ぶりにイギリスに戻った士郎の話。

それでは次回。

第１９話　過去編？　後日談・英国（前書き）

今回と次回は後日談。自分の気持ちにケリが着けられない士郎のために、健気なエヴァが「イギリスに行って来い」と後押ししたという背景があります。

といっても後日談の名の通り、「その後」を書いた話ですので、大した内容ではありません。過去編エピローグ？とでも思ってください。

それでは『過去編・英国の吸血鬼』ー「第？話　後日談・英国」をどうぞ。

第１９話　過去編？　後日談・英国

ここはイギリス・ウェールズ地方のとある山奥。

メルディアナ魔法学校と多くの魔法使い達を擁する町。

かつてここで3年を過ごした少年は、再びこの町を訪れた。

――――――――――――――――――――――――

噂に聞いたクラスメート達の卒業後を話そう。

ランスの修行先はなんとロンドンの探偵社。

まあ落ち着きの無いアイツにはぴったりの修行だな。

ロトはなんとロドリー・ベーカリー。

これは大食漢のロトにはツライ。目の前にある食べ物を食べられないんだから。

しかしロトに惚れてるコリーンは狂喜乱舞したことだろう。

ロトには地獄、コリーンには天国だな。

マリナ自身はロンドンで占い師。魔法使いにはオーソドックスな修行だ。

そして――――――母校、メルディアナ魔法学校に到着した。

「おお！　久しぶりじゃのう士郎!!　うむ、見違えた。
逞しく成長したようじゃのう」

「お久しぶりです校長。そう言う校長は変わりませんね」

「こう見えても歳はとっとるんじゃ、大事に扱こうてくれよ？
しかしお主があの「千の刃」の弟子になるとはの・・・。
ナギといいお主といい、ウチを中退した者ばかり有名になって困る」

「っ!?　校長!?　なんでそのこと知って・・・・・・」

「何を言っておる、魔法界じゃ有名じゃぞ？」

「・・・・それを知らなかったのは俺だけか・・・・・・？」

「おお、そうじゃそうじゃ！　近々ネギが麻帆良(そっち)に行くからの、
よろしく頼む」

「こっち・・・って麻帆良？　なんで？」

「ネギの修行課題が「日本で教師をすること」なんじゃ」

「修行課題!?　また飛び級したのか!?　てことは・・・９歳で
卒業かよ・・・・・・」

「うむ。今は日本語の勉強をしとるところじゃ。近右衛門と検討しとる
ところじゃが・・・そっちに行くのは来年になりそうじゃのう」

ネギ君はやっぱり天才だったか。
そしてアーニャちゃんは占い師らしい。

そして当時の吸血鬼事件に関わった人たちは。
なんとディーリアス先生とシャーリーン先生が交際中らしい。
隠しているつもりらしいがバレバレらしい。
サクス爺さんは校長の薦めでメルディアナの魔法先生になったという。
自分の体験・経験を子供たちに伝えたい、と頑張っているそうだ。

そして母校を後にした。

――――――――――――――――――――――――――

「シ～～～ロ～～～～～～～～ウ！！」

ドナおばさんとの再会については割愛する。

「ええっ！？　ヒドイわシロウ！！　きっと読者も私の再臨を望んでるわ！！」

「あり得ないから」

おばさんと別れ、やって来たのは広大な屋敷。キャンベル家。

ピン、ポーン

「すみません、衛み・・・近衛士郎です」

――――――――――――――――――――――――

「見違えましたね、士郎。」

「・・・お久しぶりです、オリヴィアさん」

「ユアンとラティーシャはいま出ているの。ごめんなさい。」

・・・ドタドタドタドタドタ・・・・・バタンッ！

「シロウさ――――――――――――――ん!!」

ドアを開けてそのまま俺に飛びついてくる。すごい勢いがついているが、
転ぶようなヘマをせずに受け止めてやる。

「久しぶり、ラーラちゃん。大きくなったね。」

「えへへ～。シロウさんもすっごくカッコよくなったね!!」

うん。元気がよろしい。でもなラーラちゃん。お嬢様なんだからもっと
お淑やかになるべきじゃないかな？　オリヴィアさんも苦笑してるよ？

「息子達（ユアン）が帰ってくるまでまだ時間があるから・・・・・。

お茶でもしましょうか？　いろいろと面白い話が聞けるでしょうし。」

・・・うん、あれだ。

「勝手にこの町を出て行って心配かけたんだから、せめてそれからのことは
包み隠さず全て話してもらうぞこの野郎」ってことですね。
はいわかりますよその笑顔で。
そしてラーラちゃん。なんで腕にしがみついてるの？
「逃がしません！」ってなに？　俺ってそんなに信用ないかな。

「ないです。」

・・・・・・さいですか。

――――――――――――――――――――

町から離れた丘の上。そこの墓地にエレナの墓はあった。

――――――――――――Ｅｌｅｎａ－Ｃａｍｐｂｅｌｌ（１９８２～１９９９）

・・・・・・・・・ザアッ・・・・・・・

丘に吹く風が俺の頬を撫でていく。

俺は無言で、墓石に刻まれた名前を見つめていた。

あのクリスマスの戦いの後。
目覚めたときにはベッドの上。ボールドウィンとの対決から3日経っていた。

エレナさんは一命を取り留めたが――――――――
２６日、容体が悪化し・・・・・・・・・帰らぬ人となった。

俺が起きたのは２８日。俺が寝ている間に彼女は死んだ。

彼女の親族・使用人達からのお礼の言葉が辛かった。
いっそ罵ってくれればよかったのに。
ラーラちゃんの泣き顔は今でも覚えている。

協会の魔法使いから色々聞かれたが、最終的には校長がなんとか取り繕ってくれた。

『俺の所為だ・・・・・・！』
『俺は約束を守れなかった・・・・・！』

・・・・・・あの頃は毎晩うなされた。

『フン、話にならんな。救う力も無いくせに、救えなかったことを後悔するなどおこがましい。貴様のそれは傲慢以外のなんでもない』

アイツにばっさり斬られ・・・いや、諭されるまでは
真面目に悩んでたんでたんだよな・・・・・。

・・・アイツ、いつになったら俺を従者にしてくれるんだろうか。
従者にしてくれと頼み込んだあの日から早1年。
「従者候補その1」はもう勘弁なんだが。

退院したあとは猛勉強した。主に攻撃呪文。
図書室で調べたりサクス爺さんやオリヴィアさんに頼み込んで
魔法世界について学んだ。
キャンベル家の人達とはこの頃に懇意になった。
エレナさんの祖母・オリヴィアさん。
父親・ユアンさんに母親・ラティーシャさん。
そして妹のラーラちゃん。

そして5学年を修了した後、魔法学校を（無断で）中退。
魔法世界に（無断で）旅立った。

『・・・・・”近衛”？　オメエもしかして、詠春の血縁か？』

師匠と出会えたのは本当に幸運だった。
あの人じゃなければ俺はここまで強くなれなかった。

『すべては気合いでなんとかなる』

そしてあそこまで死にかけることもなかっただろう。
あんなの修行じゃない。断じて！！

師匠と旅するなかで、吸血鬼（アイツ）を見つけた。
そして――――――――――――――――――――殺した。

そして俺はどうすればいいのかわからなくなった。
復讐を果たし、生きる目的を失ってしまった。
そして俺は放浪することになる。
まあこのあたりは、別の話――――――――――。

「――――ニャア」

「・・・・・・・・・よう」

いつの間にか俺の横にいたのは――――灰色の猫、ディアナだった。

「・・・・お前は変わんないな」

思えば、エレナさんと出会ったきっかけは、コイツだった。

「ゴロゴロ・・・・・・」

顎を撫でると気持ちよさそうに喉を鳴らす。

「ははは・・・・・・・・・は・・・・・・」

顔を上げ、空を見上げる。天気は快晴。

この町に帰って来てから。麻帆良に帰るまで一度も。

士郎は涙を流さなかった。

第１９話　過去編？　後日談・英国（後書き）

補足

・「うむ。今は日本語の勉強をしとるところじゃ。近右衛門と検討しとる
ところじゃが・・・そっちに行くのは来年になりそうじゃのう」
英国とかは９月から一学期が始まるので、士郎が渡英した頃にはネギは既に魔法学校を卒業してます（多分）。

・サクス爺さんは校長の薦めでメルディアナの魔法先生になったという。
ごめん爺さん・・・。最後の方出番無かった・・・。

・ドナおばさんとの再会については割愛する。
この人に需要ないと思うので。てゆうか一番の理由は「この人を書くと作者が暴走するから」です。この人書いてるとテンションが上がっちゃうんですよ。

・「えへへ～。シロウさんもすっごくカッコよくなったね！！」
大事な事だから言っておく。ラーラちゃんは美少女だッッ！！！

・エレナさんは一命を取り留めたが――――――――
２６日、容体が悪化し・・・・・・・・帰らぬ人となった。
俺が寝ている間に彼女は死んだ。

エレナの死を描写しなかったのは、読者さん達に士郎と同じ目線に立ってもらいたかったからです。自分が力になる、守ると約束した人が、自分の知らないところで死ぬ。その、士郎の絶望を、少

しでも感じ取っていただければ嬉しいです。
エレナの身内・使用人たちが士郎に感謝しているのは、彼女の遺言があったからです。今シリーズの続編で描写されます。続編を書く気はないですけど。

・まあこのあたりは、別の話――――――――――。
書く気のない続編の話です。

・麻帆良に帰るまで一度も。
麻帆良に帰るまで、ということは・・・・・？

・『フン、話にならんな。救う力も無いくせに、救えなかったことを後悔するなどおこがましい。貴様のそれは傲慢以外のなんでもない』
・・・分かる人にはわかると思います。何も言わないで。
わからない人は、深く考えずに。

次回は完全に俺の中のエヴァイメージ全開です。
「エヴァはこんなのじゃない」と思う人もいるかもしれませんが、この小説の
作者は俺だ！！！（↑横暴）
それでは次回をお楽しみに。

第２０話　過去編Ｌａｓｔ　後日談・麻帆良（前書き）

ついに過去編ラスト。長かった。

イギリスから帰って来た士郎。その様子を見てエヴァファミリーは・・・・・？

『過去編・英国の吸血鬼』ー「Ｌａｓｔー後日談・麻帆良」をどうぞ。

第２０話　過去編Ｌａｓｔ　後日談・麻帆良

――――――チチチ……

鳥の囀(さえず)りが聞こえる。
木陰に差し込む陽光。流れる水音(みずおと)。
麻帆良の森の中、そこにある一軒家。
時刻は午後３時３０分を過ぎた頃。

「……」
「……」
「ケケケ」

いかにも機嫌が悪そうな、実際ただいま不機嫌キャンペーン実施中の少女、
エヴァンジェリン。
その様子を温かい目で視界に収めながら、彼女の傍に立つのは従者の茶々丸。
そしてリビングの棚の上で笑っている初代従者の人形(ドール)・チャチャゼロ。
彼女たちの主人であるエヴァンジェリンは、
空になった紅茶のカップを咥えながらイライラしていた。

ピリピリしている主人と穏やかな従者。
この家がそんな妙な空気になった原因は、ここに居ない一人の少年。
マクダウェル邸の家政夫（闇の福音(エヴァンジェリン)の従者希望者）、
衛宮士郎の不在。

彼がイギリスに行ってから今日で3日目。
つまり彼が居なくなったのは2日前。
そしてエヴァンジェリンの不機嫌も2日前からだ。
ここまで言っても本人はそれを認めようとしないのだが。
ちなみにそれを指摘したのはタカミチ。
その後彼は文字通り吹っ飛ばされた。哀れタカミチ。
主人のそんな様子を見て内心満足している茶々丸は主人と違って終始穏やかだ。
茶々丸の記憶容量ドライブに「士郎さんが居なくて不機嫌なマスター」
というタイトルの動画が保存されたのは言うまでもない。
チャチャゼロはまた笑っている。

「……。」
この沈黙が続くかと思われたそのとき、
「……。マスター」
「……なんだ。」

――――屋敷より数十メートル先――この屋敷に近づく足音を確認。
――――歩幅、足音から推測される体重、足運びのリズム。
――――該当人物は……あの人ですね。

「士郎さんがお帰りになりました。」

◇――――◇――――◇

「ただいまー」

イギリスからの帰宅。
たった2日間居なかっただけなのに、とても久しぶりに感じる。
目の前には金の少女とその従者。
ああ……懐かしい。
俺にとってこの家は、自分が思っている以上に価値のある場所になっているのかもしれない。

「お帰りなさいませ。士郎さん。」

口の端を僅かに上げて、笑顔で迎えてくれる茶々丸。
居候し始めた頃と比べるとだいぶ表情が増えた。
「ああ、ただいま茶々丸……？」

うわっ。

なんだろうコレは。

さっきまでカップを咥えて不機嫌なカンジだったのに――――

視線の先にはエヴァ。
口と目を閉じ、腕と脚を組んでソファにもたれかかっている。
そうやって見た目不機嫌を装っているのだろうが、その、なんというか。
わくわくしているというか。ウキウキしているというか。
テンション上がっている感じが滲み出ている。
なんだ……？　この後の選択を間違えたら虎とブルマの道場に行ける気がする。
なんだ、なにが正解なんだ!?

とりあえず頭を撫でる

思い切って抱き締める
↓お土産を献上する

これだ。出発前に「お土産楽しみにしてろよ」と言ったからな。

「ただいまエヴァ。はいこれお土産、京都の茶菓子」
「ちょっと待て！！」

投擲されたカップを受け止める。
ああ危ない。これいくらすると思ってんだ。ホッ。割れてない。

「エヴァ、さっきから行儀悪いぞ。カップを口に咥えたり投げたり。他人のマナーには五月蠅いくせに。」
「待て、そんなことはどうでもいい。お前はいま何と言った？京都の菓子だと？　行ってきたのはイギリスだろう！？」
「お土産を楽しみに、なんて言った手前、下手な物は買えないからな。
　昨日京都に寄って来た。京都好きだろ？」

――よし、これでさっそくお茶にしよう。ああ、紅茶もう無いのか。
じゃあ淹れ直すか。
――いえ、士郎さんはお疲れでしょうから私が。ソファで休んでいてください。
――え、でも――――

……馬鹿共の会話はもう私の耳に入らない。
コイツ、私が行きたくても行けない京都に平然と「行ってきた」だと？
しかもそれは……昨日の時点でもう日本に帰って来たということで

はないか。
そのまま麻帆良に帰って来ることも出来たではないか。
この……！　私が、どれだけーーーーーーーーーーーー！！
「この――――――――」
「ヨウ、シロウ。テメェハ本当ニ鈍イ奴ダナ。」
「あ、ただいまチャチャゼロ……？」
「馬鹿者ぉぉぉぉぉおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」
どっごーーーーーーーーん
魔法で強化された真祖の拳を喰らって吹っ飛び。
頭部を壁に強打した士郎はめでたく気絶した。
……そのとき彼が虎の道場に旅立ったかは定かではない。

◇――――――――◇――――――――◇

「う、うーん……」
――――魘されている。
「なん、で」
――――魘されている。
師匠と修行していた頃によく見た夢。
――――魘されている。

「そんなこと……」
師匠の攻撃で気絶する度に、俺はこの夢に苛まれた。
――――――!!

ガバッ!!

「ロ……ロリブルマッ!!?」

士郎は飛び起きた。

◇――――――◇――――――◇

「…妙な魘され方をしていたが、平気か?」
「へ? いや……なんかすごく疲れる夢を見てた気がするんだけど…
まったく覚えてない……。ああ、体調のほうは問題ない。」

そうか、とエヴァは安心した表情になる。

ここは俺の自室。気絶している間に茶々丸が運んでくれたのだろう。
「もしかして、ずっと俺の部屋(ここ)に居たのか?」
するとエヴァはそっぽを向いて
「…私の過失で気絶させたのだ。起きるのを見届けるのが私の責任だろう。」
と仰った。
――――まったく、素直じゃない。
感謝の気持ちも籠めて彼女の頭を撫でてやる。
「……。」
ははは、睨んでる。でもなエヴァ。「まんざらでもない」って雰囲気が

駄々漏れだぞ？

「俺が居ない間、こっちはどうだった？　なにか変ったことはないか？

　っつってもたった2日間空けただけなんだけどな。」

「いや、言うべきことは特にない。いつも通り、呆れるくらい平和だよここは。」

「ちゃんと朝起きれたか？　授業に出たか？　授業中に居眠りしなかったか？

　茶々丸を困らせたりしなかったか？」

「お前は私の保護者か！だいたい最後のは何だ！？　私が自分の従者を

　好きなように使ってなにが悪い！！――それに、さっきからこちらの事ばかり。そっちはどうだったんだ？……懐かしかったか？」

「――――――。……ああ、懐かしくて……楽しかったよ。でも、詳しい話は皆が揃ってる時に話すよ。茶々丸とチャチャゼロは

　いま何処に――――、……エヴァ？」

エヴァはこちらを見たまま固まっている。

どうしたんだと、話しかけようとして

「この――――馬鹿が！！」

え？

いきなり怒鳴られた。エヴァは何故か凄い剣幕で俺を睨む。

「お前がそんな顔をするから――――イギリス行きを許可してやったんだ。
向こうに行けば、お前の気持ちにケリがつくかもしれないと。
なのに――――――」

前より酷くなっている。
以前は泣きそうな表情で笑っていたが――――今は。
泣いている。
泣きながら笑っている。

「ちょっ、エヴァ!?　痛っ痛い!!」
「ええい、黙れ!　大人しくしていろ!!」
「な……」

エヴァは髪を乱暴に掴んで俺の頭を引き寄せる。そしてそのまま――――
俺の頭は、エヴァの腕の中に収まった。
エヴァが俺の頭を自分の胸に押しつけているようなカタチだ。

「……士郎」

――――エレナ＝キャンベルが死んだのは自分の所為だと、まだ思っているのか？

「!!!」

……ああ、その通りだ。1年前、麻帆良に帰って来たときにエヴァに諭された。

でも、それで迷いが吹っ切れても――――その思いは、変わらない。
「俺は約束を守れなかった」。

「いいか士郎。以前にも言ったが、当時のお前にエレナを救う力はなかった。お前が今、生きて此処に居るのことすら奇跡に近いのだぞ？
魔法生徒が吸血鬼と正面から闘りあって無事に済むと思うか？」
「それは――――」

そんなことは理解している。でも、それでも――――
それでも、俺は。

「……お前は。誰かに責めてほしかったのだな。」

……そう。
彼女と親しい者たちが俺にくれたのは、感謝の言葉だけだった。
俺の所為だと。俺の所為だと。
いっそのこと、罵ってくれればよかったのに。
責められないということは、罰を受けないということ。
自分が持つ罪の意識だけが、延々と自分を苛み続ける。
俺の所為だと。俺の所為だと。
誰も言ってくれないから。
俺はこの感情に決着がつけられない。
俺の所為だと。俺の所為だと。
誰でもいいから、言ってくれ。

「……じゃない。」

――――え？

「お前の所為じゃない。――士郎。お前は悪くない。
もう、自分を、赦してやれ。」

そう言って俺を、ギュッと強く抱き締める。

……おかしいな……？
ずっとずっと、あの日からずっと。誰かに罰してほしかったのに。
俺の所為じゃないと、俺は悪くないと彼女に言われただけで――
――

「大丈夫だ。お前は強い。ずっと独りで罪の意識と闘ってきた。
自分を赦すことくらい、きっと出来る」

……俺はこの日、彼女の腕の中で――
――――声をあげて、泣いた。

俺がそれで吹っ切れたのかはわからない。けれど。
彼女と一緒なら、これからもやっていけるだろう――――――

◇――――――◇――――――◇

士郎がエヴァの腕の中にいた頃のリビング。

「マスターハ上手クヤッテルト思ウカ？」
「マスターと士郎さんですから。きっと大丈夫でしょう。」
「アノ二人、妙ニ初心ダカラナ」
「それには同意しますが――、……ああそろそろ夕食の準備をしなければ。それでは姉さん、失礼します」
「アア、士郎ノ帰国祝イダ。パァーットヤロウゼ。ケケケ。イイ酒出セヨ茶々丸。」
「はい姉さん」

◇――――――◇――――――◇

運命の車輪は回る。

――――The wheel of fortune turns around.

西からの風が吹く。英雄の息子が――――やって来る。

第２０話　過去編Ｌａｓｔ　後日談・麻帆良（後書き）

今回は特に補足はないです。

エヴァちゃんマジ天使。むしろ女神。
彼女は、本気で大切に思ってる人たちには、こんなカンジで真摯になってくれると思ってます。俺は。
まあ今回は、あんまりにも士郎が見てられない状態だったというのもありますが。

次回から遂に原作編。もうできてるけど出来はイマイチ。難しいわー。

さあ、次回の更新はいつになるのか！？　はい未定です。忙しいからね。
一気に４話投稿できたのは運が良かっただけっス。明日も用事があるし。
ストックがあと2話しかねえ・・・・。

それでは次回！！

第２１話　子供先生がやって来た（前書き）

明日は文化の日。だから投稿しマース。
やっと原作編に入ったけど、なんか原作ｉｎオリジナルキャラってカンジ。この小説ならではの要素が全くないんだ・・・。要改善。
そして私の力不足でしばらくダイジェスト形式を多用します。だって原作第１話とか、ページ数多いうえに省略できない要素ばっかですやん・・・・・。
では記念すべき原作編・第１話。始まりまーす。

第２１話　子供先生がやって来た

ドドドドドドドドドドドドドドド

『遅刻遅刻ーーーー』

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

『急げーー』

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

『わわわ何コレ！？　スゴイ人！』

麻帆良学園都市・朝の名物。学生が大通りに溢れ返るように走る。路上電車に掴まって移動する者、移動購買部なるものからパンを買う者など、急いでいる割には余裕な者も多い。しかし、遅刻しかねないというこの状況にしっかり危機感を持っている真面目な生徒も、毎日この時間帯に登校していては無意味なのだが。

そしてそんな遅刻生徒予備軍常習者がここにも二人。

「やばいやばいーーー、今日は早く出なきゃいけなかったのにっ」

体力だけなら超人の『バカレッド』。苦学生ながら明るい性格。橙色のツインテール髪とオッドアイの持ち主。神楽坂明日菜。

「にしてもアスナ足早いなー、私なんてローラーブレード（コレ）やのに」

京都生まれの生粋のお嬢様。おっとりした性格。ツヤのある黒髪をストレートに伸ばした大和撫子。近衛木乃香。

「悪かったわね体力バカで。」

――――――瞬間、風が吹き。

「――――ん」

――ガッチャガッチャガチャッ――――

明日菜に併行して走る、赤い髪の少年。
なにやら妙な大荷物を背負っている。眼鏡をかけていて落ち着いた印象だが、
まだ小学生くらいの歳であろう。そして。
大荷物を背負った子供が、ローラーブレードを履いた少女と同等のスピードで走っていて
汗ひとつかいていない。
周りがその異常に気づく前に。

「あの――……あなた、失恋の相が出てますよ。」

「…な…何だとこんガキャーーーーーーーーー!!!」

この日、女子校エリアで生徒が制服を吹き飛ばされたとかナントカ。

「あ、自己紹介が遅れました。
この度この学校で英語の教師をやることになりました――――
ネギ・スプリングフィールドです。」

……。

「え…えええーーーーーーーっ！！」

◇――――――――◇――――――――◇

ところ変わって学園長室。
椅子に座るぬらりひょんのような後頭部の老人、近衛近右衛門。
その右隣に立つ眼鏡の女性教員、源しずな。
彼女の隣に立つ眼鏡と無精髭の男性教員、タカミチ・Ｔ・高畑。
そして新しく赴任してきた子供先生と――――
それに異論を唱えるジャージの明日菜（と隣の木乃香）。

なぜ明日菜がジャージ姿なのかというと……
未熟な魔法使いであるネギがくしゃみをしたことによる魔力の暴発で明日菜の服が下着以外吹き飛んだ――――――かはご想像にお任せする。

「学園長先生！！　一体どーゆーことなんですか！？」
愛する先生に代わってムカつく子供先生が自分の担任になる。
そんなことがどうしても認められない明日菜が学園長の机を叩く。

「まあまあアスナちゃんや。……にしても修行の為に日本で学校の先生を……
　そりゃまた大変な課題をもろうたのー。」
さりげなく明日菜の言を流す、我らが学園長。

「は、はい。よろしくお願いします。」
ネギ少年は些か緊張しているようだ。

「しかし先ずは教育実習ということになるかのう。今日から3月までじゃ」

「はあ。」

「ところでネギ君には彼女はおるのか？
どーじゃな？　うちの孫娘（このか）な「――ゴッ！――ややわじいちゃん」」

笑顔で金づちを振い、老人を殴る美少女。シュールだ。

「大体子供が先生なんておかしいじゃないですか！
しかもうちの担任なんて…。高畑先生も何か言ってください！！」

「いや…知っての通り僕は出張が多いからね。
きちんと君たちに構っていられないから、ちゃんとした担任がつくことは
良いことだと思うよ。ネギ君のことは知ってるから信用できるしね。」

「そ、そんなぁ……」

愛する（元）担任までもが賛成の意を示し、明日菜は勢いを失う。

「フォッフォッフォッ。ネギ君。この修行はおそらく大変じゃぞ。
駄目だったら故郷へ帰らねばならん。二度とチャンスは無いが――
その覚悟はあるのじゃな？」

「はいっ、やります。やらせてくださいっ。」

「……うむわかった！それでは早速今日からやってもらおうかの。
儂の隣に居る彼女が君の指導教員になるしずな先生じゃ。

わからないことがあったら彼女に聞くといい。」

「よろしくね。ネギ君」

「あ……はい」

「そうそうもう一つ忘れとった。このか、アスナちゃん。しばらくはネギ君をお前たちの部屋に泊めてくれんかの。ネギ君の住む所がまだ決まっておらんのじゃよ。」

「げ。」「え。」「ええよー」

「そんな――――学園長ーーーーーーーーーーー!!!」

学園長室に明日菜の悲鳴が響き渡った。

「フォーフォーフォー」

◇――――――――◇――――――――◇

初めての授業。黒板に手が届かなかった。
けどいいんちょさんが台座を持ってきてくれた。
いいんちょさんはいい人だ。
その後アスナさんにイタズラされた。
朝からなんなんだろうこの人の態度！僕先生なのに。
そしていいんちょさんとアスナさんのケンカが始まった。

ちょっ、今は授業中ですからケンカは……
あうう…チャイムが鳴っちゃったよ……。

授業の失敗で落ち込んでいたら、ウチのクラスの宮崎のどかさんが
階段から落ちてケガしそうになっていた。
とっさに魔法を使って助けたけど、それをアスナさんに見られてし
まった。
魔法の事はとりあえず秘密にしてもらえたけど、
成り行きでタカミチに読心術を使うことになった。

教室に行くと、生徒さん達が僕の歓迎会を開いていた。
えへへ、うれしいなー。
初めての授業で失敗して頼りないところ見せちゃったなーって
落ち込んでたんだけど…こんなに歓迎してくれるなんて余計な心配
だったかな。
歓迎会の再中、宮崎さんにさっきのお礼として図書券を、
いいんちょさんに…僕の銅像を貰った。いつ作ったんだろう……。

――――――また失敗した。
タカミチに読心術を使ったけど結果は良くなくて、アスナさんは教
室を
飛び出してしまった。
タカミチがあんなこと考えていたのは僕のせいだ。
なんとかしなくちゃ――――

『その惚れ薬を使って上手くいくっていうの?』と言われてしまっ
た。
……その通りだ。上手くいくわけない。人の心を操って好きにさせ
るなんて
間違ってる。

――――そうだ、アスナさんに伝えよう。

「おじいちゃんが言ってました。
『わしらの魔法は万能じゃない。わずかな勇気が本当の魔法だ』って。」

「……わかったよ。私も……勇気出す。」
そう言って初めて、アスナさんは笑ってくれた。

◇――――――◇――――――◇

「はあ……マジありえねえ。」

ウチのクラスは変わってるとは思っていたが、まさか――――――
「何だよ『子供先生』って！」

そう言って、カップを握る手に力がこもる。

「ん？　どうした千雨ちゃん。また悩みごとか？」

「……店長。」

あたしは長谷川千雨。クラスでは目立たない女子中学生。
しかしその正体は、Ｎｏ．１ネットアイドル「ちう」。
趣味はコスプレとブログ更新。
そして日々変人達（クラスメート）との対人ストレスと闘っている。

そんなアタシの自室以外で唯一の癒しスポットがここ、喫茶店アル

トリア。

変人だらけのこの都市で数少ない一般人の店長と
美味しい紅茶とコーヒーが、あたしに約束された癒しをくれる。
例の子供先生の歓迎会の後だから今日は控えめだが。

「店長……。子供が教師に…ウチのクラスの担任になったって言ったら
　信じるか？」

途端に店長は苦笑する。そりゃそうだろう。普通そんなことありえない。
（ああ店長、あんたはやっぱりマトモだよ。）

そしてこの店の店長、衛宮士郎は。

（……ごめんよ千雨ちゃん。君のストレスの元になっている少年のことを
　俺は知っているんだ……！）

彼は留学時、既にネギと顔を合わせている。
彼の赴任もメルディアナ・麻帆良双方の最高責任者から聞いているのだ…

「あー……てことはウチのじいちゃんも関わってるんだろうな。
　いや、なんていうか…スマン。」

（ここは知らない体を装おう。感情の矛先はじいちゃんへ。
　それくらいは役に立てそしてたまったツケ払え！！）

「あー……アンタ学園長の孫なんだったか。あんたも近衛も苦労するな」

「はは……ありがとうな千雨ちゃん」

ああ、涙が出てくる。あのじじいにはいつも苦労させられている。

そしてたまったツケ払え。

「はい、良い子にはサービスだ。」

ショートケーキとチーズケーキ、モンブランにチョコムースを箱に入れて

渡す。

「え…い、いや、悪いって。こんなに。」

「いやいや、いいんだよ。俺の気持ちなんだから。

あと、今度デザート類のお持ち帰りを始めようと思ってな？

千雨ちゃんが第1号。箱のデザインもっとこうした方がいいとか、

持ち運んでみて中身が崩れなかったかどうかとか、次に来たら

聞かせてくれ。」

（…つまり商品テストってコトか）

「まあ、そういうコトなら…ありがたく貰ってくぜ？」

「ああ。そうしてくれ。それと、俺はホントに千雨ちゃんには

感謝してるぞ？　平日はほとんど毎日来てくれて――――

話してるとすごく楽しい。」

（……な……！）

「そ、そうかよ。じ、じゃあな店長！今日はもう帰るよ！！」

「ん。そっか。じゃまた明日。」

士郎は笑いながらヒラヒラと手を振って見送る。

（くそ……！ハズカシイことを真正面から言いやがって……！！）

「……。」

千雨の手にはケーキボックス。店長（かれ）の料理はどれも絶品だ。

「……♪」

「ちうのホームページ」が更新される数十分前の出来事だった。

◇――――――◇――――――◇

「……はあ。」

歓迎会が終わり、寮に向かって歩くネギ。

（結果的になんとかなったけど……授業は失敗しちゃうし、
魔法はバレちゃうし。
１日目からこんなカンジで僕、やっていけるんだろうか？）

「……なに落ち込んでんのよ。」

見かねた明日菜が声をかける。

「……1日目から失敗ばかりで、こんなので…やっていけるのかなって」

（……。）

「――――さっきの言葉（セリフ）、ちょっとだけ…ぐっときたわ」

「え？」

明日菜は照れくさそうに、髪を弄りながら――――

「だから……このまま頑張れば、あんたもいつかはいい先生になれるかもね。」

「え……。あ、はい！ありがとうございます！！」

「アスナー、ネギ君ー行くえー」

木乃香が二人を急かす。

「ほら、行くわよ！」

「は、はい！」

（……お姉ちゃん。少し不安だけど、僕ここで頑張ってみます。）

「立派な魔法使い」になる誓いを新たにするネギであった。

◇――――――◇――――――◇

再び喫茶店アルトリア。

「…タカミチさん。元気ないですけどどうしたんですか？」

「あ、ああ、少し、色々あってね……」

そう言って話そうとしないタカミチに、士郎はさらに怪訝に思う。

「そういえば今日はネギ君の初勤務でしょ？どうでしたか、天才少年の初日は？」

――――タカミチの動きが停まる。

（まさか……。）

これ以上詮索するのはやめておく。

（何をしたんだ、ネギ君……！）

具体的には、タカミチ（と木乃香）の前で明日菜の服を吹き飛ばしたり、

タカミチの前で明日菜の服を吹き飛ばしたり。

千雨といいタカミチといい、周囲に心労を与えまくるネギに不安を抱く士郎だった。

第２１話　子供先生がやって来た（後書き）

原作編一回目から千雨ちゃんがまさかの登場。後悔はしていない。

いやあ、文字数を気にし過ぎてこんなカンジに。ダイジェストってラクだわー

最初はちゃんと書いてたんですけどね。消してやり直してこの出来ですよ。はは。

ちょっとずつでも上達するよう頑張ります。

それでは次回。

第２２話　士郎とネギの日常（前書き）

２発目投下ー。
バトルがないと士郎のポジションがない。なんか今は賢者っぽいカンジ？そして苦労人になりつつある。
それではどうぞー。

第２２話　士郎とネギの日常

――――――早朝。世界樹広場へ駆ける影。その人は衛宮士郎。
今日も今日とて鍛練に向かう道。そこへ。

（――――魔力？　西の空から…誰だ？）

まだ暗い空を見上げると、杖に跨って空を飛ぶ人影。視力を強化して再度観察すると

その人影の正体は女子中等部の子供先生、ネギ・スプリングフィールドだった。

（認識阻害もかけないでなにやってんだアイツは――――――！！）

「……悪い、刹那。少し遅れる」
そう呟いて自らの周囲に認識阻害をかけ、瞬動と虚空瞬動を使い、ネギのもとへ駆けた。

数秒後。

「――――――ネギィ！！！」

「うわああっ！？」

突然の大声に声をあげて驚くネギ。まあ、空中で話しかけられるなど予想できないだろうが。

「一体何……。あ、士郎さん！？」

「おう。半年ぶりだなネギ君。ってそうじゃなくてだなあ！」
思わず和みそうになる意識を現実へ引き戻す。

「ネギ君。なにか大事なことを忘れてないかな？魔法使いとして！」
「え…ええっ？」
「いくら早朝とはいえ、人目につきそうなところでフツーに飛んだらどうなると思う？」
「……！ああっ！！忘れてた！！」

ふう、やっと気づいたか。まあ、このくらいのポカはするか、まだ子供だし。
「木乃香さんがもし起きたら「どこに行ってたのか」って聞かれる！「眠りの霧」をかけてくれれば良かったーーーー！！」

まてまて違うだろう！
そんなの「早く目が覚めたから散歩に行ってた」とかいくらでも誤魔化し様があるだろう！！
それにそんなポイポイ魔法使うな！！

「ああもう！認識阻害をかけろって言ってんだよ！！」
「え？あああ！！」

頭痛くなってきた……。
よく考えたらさっき「子供だからポカするか」って考えたけど、それでバレたら致命的なんだよな、どんな小さなミスでも。
ああ、タカミチさん…こういう事だったんですね…。

「いやあ、助かりました士郎さん。危うく誰かに見られるところでした。」

もう既に見られたかもしれないとは考えないんだなネギ君！！

「そういえば、士郎さんはこんなところ（空）でなにしてるんですか？」

お前がヘマしてるから急いで来たんだよ……。

「ああ、お前が何してるのかとおもってさ。ところで、そっちこそ何してるんだ？」

「あ、それは――」

明日菜に迷惑かけてばっかりだから、新聞配達を手伝おうということらしい。

「そっか。呼び止めて悪かったな。次はこんなヘマするんじゃないぞ。」

「はい！わかりました！それじゃあこれで！！」

（さて、俺も早く刹那のトコに行かないとな。）

『うわあっ！！』

『っなにやってんのアンタ！！』

結局、ネギは明日菜をまともに手伝うことが出来なかった。

（ネギのヤツ……この様子だとヤバイな……。）

◇――――――――◇――――――――◇

数日後。

喫茶店アルトリア。学園都市の放課後の時間帯。
女子校エリアに近いこともあり、店内には女子生徒が多く座っている。

「てんちょーさーん！いちごパフェひとつー」
「アタシはチョコレートケーキで。」
「あいよー。」

――――――カランコロン。

「いらっしゃいませ……って、ようネギ君」

入って来たのは巷でウワサの子供先生、ネギ。
『あ！アレが子供先生よ！』
『あーんカワイイー！！』
『ハァハァ……活きの良さそうなショタ！……じゅるり』

彼の登場に周囲が沸き立つ。今凄くアブナイ発言があった気がする。

「……どーした？　ネギ」
「……。」

なんか様子がおかしい。纏う雰囲気がやけに重い。
落ち込んでいるようだ。
「ま、座れよ」
「はい……」

ネギをカウンター席に座らせる。
「なににする？」

「……じゃあ紅茶を…」

・　・　・　・　・

「自分の生徒と上級生の仲裁が出来ずにオロオロしていたと……」
「はい…逆に上級生の人達にはからかわれてしまって……。
結局タカミチがなんとかしてくれたんだけど。
でも、僕も先生なのに……」
「ネギ君」
ネギの目を覗き込む。
「ネギ君は先生なのに生徒にからかわれて、喧嘩の仲裁も出来なかった。
だから自分が情けなくて、落ち込んでるんだろ?」
「はい…」
「じゃあもう一度目の前で喧嘩が起きたらどうする?」
「え……。……今度こそ上手くやりたい。けど、僕には……」
「なら頑張れよ。今度こそ上手くやれるように。
失敗して落ち込むことは誰にもできる。そこから反省して、努力するんだ。大丈夫。お前なら出来るさ。」
「……！」

「衛宮さーん　お勘定お願ーい」
「はいよー」
「士郎さん!!」
「ん?」
ネギが立ちあがってこちらを見ている。

「僕、ただ落ち込んでるだけでした。努力しようとしなかった。タカミチみたいに、先生らしくなれるように頑張るよ！！」

「…おう、頑張れ。何かあったらまた来るといい。」

「ありがとうございます！ごちそうさまでしたっ！！」

――――――カランコローン！

勢いよく扉を開けて、ネギは走り去って行った。

（若いってイイなぁ。）

士郎はジジくさいことを思っていた。

（――――あ。ネギ君食い逃げ……）

「えーみやさーーん」

「あ、ゴメンゴメン。」

（……じじいにツケとくか）

・　・　・　・　・

「む……ぶぇーっくしゅ！！」

「汚い唾を飛ばすなジジイ。」
「むぅ、風邪かのう…？　む！？　エ、エヴァ！その手は少し待っとくれい！！」
「フン、一手も待たん。この対局は私の勝ちだな。諦めて士郎の店のツケを払え」
「う、う～～～む……！」

知らぬところで、払うべきツケが増えていく学園長だった。

◇――――――◇――――――◇

さらに後日。学園の５時限目。中等部校舎の屋上運動場。

「あらアンタ達、偶然ね？」
「な…！高等部２－Ｄ！！」

「私達は自習でバレーやるのよ。アナタ達も？」
「くっ、アンタ達わざとでしょ！わざわざ中等部の屋上まで来て…！！」

「何よ今度は言いがかり？お子ちゃまね～」
「なんですって！？」

先日２－Ａと衝突した聖ウルスラ女子高の２－Ｄ生徒達。
前回はタカミチに仲裁されたものの、
不満が残っていた彼女たちは仕返しに現れた。

「アンタ達の方がガキじゃないのよーーーー！高校生のくせに！！」
「なんですって！？かかってきなさいよこの中坊ーーー！！」

そして体育教師代理のネギ。
（ああっなんとかしてケンカを止めないと…！
でっでも…タカミチも居ないし……）
『――――なら頑張れよ。今度こそ上手くやれるように。』
――ぐっと唾を飲み込み、拳を握る。
「あ、あの！どんな争い事も暴力だけは絶対にダメです！！」
「……！？」
「あ、…うん……。」
今までオロオロして頼りなかったネギが強く出たことで、周りが呆気にとられている。
「両クラス対抗でスポーツで争って勝負を決めるんです！
爽やかに汗を流せば、つまらないいがみ合いもなくなると思います！！」

麻帆良学園本校女子中等学校２－Ａ

ＶＳ

麻帆良学園聖ウルスラ女子高等学校２－Ｄ　Ｉｎ

ドッヂボール

――――――――Ｆｉｇｈｔ！！

◇――――――◇――――――◇

その日の放課後。

「へえ、そんな事があったのか。」

『アルトリア』のカウンターに座る刹那と真名。

「ええ。私や龍宮など参加しなかった生徒もいましたが、勝った時はクラス全員が盛り上がっていましたね。」

「勝ったのか、スゴイな。相手は高校生だったんだろ？」

「ま、らしくない高校生だったがな」と真名が言う。

確かに、高校生らしからぬ振舞いが目立つ集団であった。

人の後頭部にボールを当てたり。

自分達がドッヂの実力者だという事を隠したり。

「トライアングルアタック」とか「太陽拳」とか、技名を言いながらプレーしたりなどｅｔｃ．．．．．

「で、ネギ君が体育の先生の代理だったんだろ？どうだった？」

「……。」

「……。」

二人は視線を交わすとクスッと笑った。

「？　おい、なんだよ？」

「いや――なかなかだったんじゃないか？」

「ああ、またいつも通りオロオロしてるだけかと思ったが、逆にみんなを引っ張っていた。」

「『後ろを向いていたら狙われるだけです。前を向けばボールを取れるかもしれないんです！頑張りましょう！！』……だったかな？」

「――――――へえ。」

「……そう言う士郎さんの方こそ、今の表情（カオ）はなんだい？」

「ん？　何か変な顔してたか？」

「ええ。なんというか、いつもと質の違う笑みでした。」

「……よくわかるな」

真名は刹那を見て笑う。

「私はただの勘だが、刹那は貴方のことをよ～く見てるからな？」

「なっ！龍宮、何を――――」

この遣り取りはいつもの事なので流すことにする。

しかしなんで刹那は龍宮にからかわれるとすぐ取り乱すんだ？

「なんて言うかな。出来の悪い弟が知らないところで成長したのを聞いた兄……みたいな心境、かな？」

――――カランコローン。

「士郎さーーーん！僕やりましたよーーーーー！！」

「アンタ士郎さんとも知り合いだったのね……。てゆーか高畑先生とはどういう知り合いなのか教えなさいよー」

「やっほー！士郎、来たえー」

クシャッ。

（――――――え？）

「――――――頑張ったな、ネギ君。」

ネギ君の頭を撫でてやる。ネギ君は一瞬驚いた顔をするが

「うん！！でも、なんで士郎さんが知って――――あ、桜咲さんに龍宮さん」

「あ、せっちゃんやん！」

「お嬢様っ！？」

「なんか龍宮さんと桜咲さんって、よくこの店に来るよね」

「ん、まあな」

お客様、３名追加。ああ、また騒がしくなりそうだ。

そして、ネギ君。

教師らしくなってきたみたいだし。

生徒に信頼されるようにもなってきたみたいだ。

頼りないと思っていたけれど。

もう少し信用しても、いいかな？

「……チクショウあいつら……。

これじゃあ入れねえじゃねえか……！！」

どんまい千雨ちゃん。

第２２話　士郎とネギの日常（後書き）

～補足～

○（認識阻害もかけないでなにやってんだアイツは――――――！！）

○もう既に見られたかもしれないとは考えないんだなネギ君！！

・ネギが原作よりちょいアホです。でも成長率も原作より速くなる予定。

○諦めて士郎の店のツケを払え。

・士郎の為に賭け試合をして見事に勝利。ええ子や。ええ子やわあ。

○前回はタカミチに仲裁されたものの、
不満が残っていた彼女たちは仕返しに現れた。

・原作より執念深い。数日経った後に仕返しなんて・・・。

○『――――なら頑張れよ。今度こそ上手くやれるように。』

・次がある、ってとても幸せなことですよね・・・。社会に出るとやり直しのきかない仕事とかばっかですからね・・・・・。

あと、今回から士郎が諭したり説教したりしますが、自分だったら耐えられない。今回の士郎みたいなこと言われたらムカつくし絶対。正論な部分もあるし、反論したい部分もあるし。

○ドッヂボール

・「ドッジボール」のほうが正式名称だという説が有力だとウィキペディアに書いてあったんですけど、作者は「ドッヂ」ボール派です。

こんなトコですかね。ああ眠い。最近ちょっと調子悪い。小説じゃ

なくて体調のほうです。いや、小説も調子良くはないけど。

あー、桜通りの吸血鬼編の最終話が進まなーい

それでは次回ぃー

第２３話　期末テストと図書館探検（前書き）

やっとネギま！らしい話に突入ーーーーー！！やっぱ図書館島編は面白いですよね！！普通あんな状況で勉強なんて絶対にしないからｗ

それではどうぞ！

第２３話　期末テストと図書館探検

「……ふあ。」
刹那が可愛らしい欠伸を漏らした。
「…？　刹那？」
「すっすいません」
「いや、別にかまわないけどさ。…眠いのか？疲れてるのか？」
「……両方、だと思います。もうすぐ学期末試験ですから、その勉強で」
「――――――。珍しいな。刹那ってあまり自分から勉強しないだろ？」
「…はい。普段は剣道部の練習や鍛練をしていますから。でも今回は、
その、事情がありまして……」

・　・　・

「……はぁ？　学年最下位を脱出できなかったらクラス解散？」
「まあ、あくまで噂であって……そんなコトはありえないと思うのですが。
ただ今回も最下位だと、ウチのクラスに何かあるというのは本当らしいです。」
「ふーん。」
（ありえないと思っていても、木乃香と離れたくないから一応頑張ってるワケか）
「じゃ、そんな刹那にはコレだ。特製紅茶」

疲労回復作用がある酢と、味を調えるためのはちみつが入っている。
甘いものは頭にいいしな。
日本茶も体の疲労成分の排泄を促進するらしいのだが、
生憎いまは切らしている。
「あ、はい。いただきます」

「さて、じゃあテストまで朝の鍛練は休みだな。」
何故か刹那に渋られた。お前、状況を考えろ、状況を。

◇――――――◇――――――◇

これは麻帆良学園に噂される都市伝説……

バカ力（ぢから）のツインテール――バカレッド

高身長のござる口調――バカブルー

褐色肌の中国武人――バカイエロー

リボンを自在に操る――バカピンク

いつも変なジュースを飲んでる――バカブラック

――麻帆良女子中等部には、バカ五人衆（レンジャー）が棲んでいる――。

しかしそれは実在する。

そしてそんな彼女たちが、ある目的を持って集結する！！

『テスト最下位のクラスは解散～～～！？』
『バラバラになるのはイヤやわ～～』
『ま、マズイね。足引っ張ってるの私達だし……』
『今から死ぬ気で勉強しても間に合わないアル』
『ここは――アレを探すしかないかもです』
『夕映！？　ア、アレってまさか……』
『ウチの学校の図書館島に、読めば頭が良くなるという「魔法の本」がある
らしいのです。まあ、大方出来のいい参考書の類かと思いますが、手に入れれば強力な武器になります』
『……。』
『――――――行こう！！図書館島へ！！』

◇――――――◇――――――◇

ＰＭ：６：５２
図書館島・秘密の裏口

バカレンジャーである明日菜、楓、古菲（クーフェイ）、まき絵、夕映（ゆえ）。
図書館探検部であるのどか、パル、木乃香。
そしてネギ。

（ボク、なんでこんなトコにいるんだろ……）

ＰＭ：７：００
図書館島・地下３階

「往復４時間で帰って来れるハズです。」
「一応ちゃんと帰ってきて寝れるねー」
「あ、あのー、皆さん何でこんなトコに集まって……」

「ええ～～っ!?　読むだけで頭が良くなる魔法の本を探しに!?」

ＰＭ：？：？？
図書館島・？？？？？

「わあっ！これ凄く貴重な本ですよ!!」
「あ、先生。貴重書を持ちだそうとすると――――――」

本を棚から抜き取った瞬間、
――――――――ヒュンッ！
――――――――ガシッ!!

「え？」
本棚から矢が飛び出した。間一髪、楓が矢を掴み取る。
「気をつけるでござるよネギ先生」
「は、はい……ありがとうございます長瀬さん……。」
ちなみにネギは「自分はいつも魔法に頼っている」と反省してテストまで魔法を封印中。つまりただのお子様状態だ。

「盗掘者除けの罠が仕掛けられているそうです。」
淡々とその事実を告げる夕映。
「それにしても、片手で矢を掴むとはスゴイです長瀬さん」
「お褒めに与り光栄でござるよバカリーダー」
「何のんきに話してんのよ!
フツー図書館に罠なんてありえないでしょ!?」

「うわーん大丈夫なのーーー！？」
「大丈夫やて。図書館探検部のウチもいるし」

「本棚の上を歩くんですか？」
「なに考えて作ったんやろね」
「た、高いよー、落ちたらケガするー」
「そこ、気をつけてです」
――――――――カチッ
まき絵の真下の床が開く。

「さ・佐々木さんっ！」
「――――えーーーーーい！！」
ヒュンッ――――シュルルルッ――――ビシッ！！
「あ～～～、びっくりした。」
新体操部である彼女はリボンを駆使し、落下するのを免（まぬが）れる。

（……アレって新体操のリボンだよね……？
あのリボンって人の体重を支えられるものなの？）

――――――――カチッ
まき絵が再び罠を踏む。
――――上部の本棚が落ちてくる。
「ハイヤーッ！！！」
掛け声をあげて古（クー）が飛び蹴りを放ち、本棚を押し返す。

しかし、その本棚に収まっていた大量の本も落下してくる。
「わぁ～～！本の雪崩だ～～～！！」
「ほいほいほいほいほいほいほい？」
それらはすべて、楓の手に収まった。

（な、なんなのこの人たち！？）

「ワタシ達、成績悪い代わりに運動神経いいアルから？」

「これくらいなら平気でござるよ。」

（そんなレベルじゃないよ絶対！！）

まき絵が「え、私も…？」と呟いている。はい、充分超人です。

「ふふ……流石バカレンジャーです。これなら……」

夕映が不敵に笑っていた。

「夕映、燃えとるなー？」

◇――――――――◇――――――――◇

携帯電話が鳴る。

「刹那か。どうした？……何？木乃香が寮に帰って来ない！？ああ、わかった。俺が調べるから、お前は大人しく勉強してろ。いいな！！」

「悪い、つーワケだからちょっと出掛け――――睨むなよ、俺の所為じゃないだろ？」

「こんな平和ボケした場所で大事が起きるわけないだろう。放っておけばいいんだよ、このシスコン。」

「行ってきます。」

「ま、待て士郎！そう怒るな！私が悪かった！！だからーーーー」

「ああ、マスターー、あんなに慌てて……」

茶々丸はうっとりした目で主人の様子を録画している。

「変ワッタナ、茶々丸……。」
チャチャゼロは妹の成長を喜ぶべきか、悲しむべきか悩んでいた。

◇――――――◇――――――◇

そのころの図書館探検組。

「な……何コレ……」

～～～☆英単語ＴＷＩＳＴＥＲ☆Ｖｅｒ．１０．５～～～

『フォフォフォ……この『メルキセデク(まほうのほん)の書』が欲しければ
わしの質問に答えるのじゃー』

ＲＰＧゲームのラスボスの間のような広場で、２体の石像(ゴーレム)が行く手を阻む。

『第１問、ＤＩＦＦＩＣＵＬＴ(ディフィカルト)の日本語訳は？』
魔法の本を手に入れるべく、ゴーレムにバカレンジャーが挑む！！

・　・　・　・　・

『最後の問題じゃ、ＤＩＳＨ(ディッシュ)の日本語訳は？』

「やったーー！最後だって！！」
「え……ディッシュ…？」

「ほら！食べるときに使うやつ！」
「メインディッシュとか言うやろー」

「わかった！『おさら』ね！！」
「『お』！」　「『さ』！」　「『ら』！」

「……『おさる』？」

『ハズレじゃな』

「アスナさんーーーー！」
「まき絵ーーーーー！！」

間違えて文字を選択した二人に非難が集中する。

『フォーフォーフォー！』
ゴーレムは高笑いしながらハンマーで床を破壊する。そして図書館探検組は大穴に落下していった。

『いやあああ～～～～～～～～～～～～！！！』

◇――――――――◇――――――――◇

さて、木乃香の魔力を頼りに図書館島に向かっているわけだが。

「刹那？待ってろって言ったよな？」
「お嬢様に危機が迫っているというのなら、それをお守りするのが私の使命です。」

「……ならとっとと仲直りしろっての……ボソッ」
「何か言いましたか？」
「いや何も。」
「……あれは？」

刹那の視線の先にいたのは、
シェルパ（実働部隊と連絡を取り合う役割）として外に残った宮崎のどかと早乙女ハルナの二人だった。
「あーわわわどーしよー！！連絡とれないよーー！！」
「皆さん、返事してくださーい！！」

「どうしました？」
「あ！桜咲さん……と、誰？」
「はじめまして。俺は衛宮士郎、木乃香の兄貴だ。」
「へ？木乃香っておにーさんいたの？」
「それよりお二人とも、何があったんですか？」
「あうぅー、それが……」

・・・・

えーと……。学年末テスト最下位を脱出するために「頭が良くなる魔法の本」を探しに危ないトコまで行って連絡がとれなくなった、と。
ネギ君も一緒になって。

……。
……。

……止めろよ。

止めろよぉ……、ネギぃ……。

仮にも教師だろぉ……！！

あー頭痛い。茶々丸ぅー、頭痛薬～。

「し、士郎さん？」

「あ・の……馬鹿ども……！」

「「「ひっ！！」」」

そのとき3人は、怒気を纏う士郎の背後に鬼の姿を幻視したといふ。

「早乙女さんと宮崎さん……と刹那。今日はもう帰れ。後は俺がなんとかしとくから。」

「しっしかし」

「大丈夫だから……な？」

「「「はいいいぃぃぃぃぃ！！」」」

そのときの士郎の顔は、笑っている筈なのに恐ろしかったといふ。

◇――――――◇――――――◇

「さーて、どーいう了見だジジイ」

『ひょっ！？士郎、なぜ一発でわしだと……』

「気配がした。」

『ひょー……。』

図書館探検組が辿りついた大広間。現在は大穴が開き、ゴーレムも一体になっている。もう一体は彼女たちと一緒に落ちて行った。そして、その2体のゴーレムを遠くから操っていたのが学園長・近衛近右衛門。

『ふぉっ、流石わしの孫……』

「どういうつもりだって聞いてんだけど?」

士郎の手には黒い洋弓と、とてつもない魔力を放つ捻れた矢。

『わ、わかった!わかったからそれをしまっとくれい!!』

現在、ゴーレムと近右衛門の感覚は同調している。そこに宝具など喰らったらたまったものではない。まあ、士郎はわかってやっているのだが。

まとめ。

・今回の学期末試験で2－Aが最下位を脱出できなければネギは正式教員になれない。

・そのウワサが（妙な形で）伝わり、2－Aの成績不良者がテスト対策を講じようとした。

・その結果、図書館島の都市伝説「魔法の本」を入手し、その力でテストを乗り切ろうとした。

『で、少~し懲らしめるために突き落したワケじゃ。』

「大丈夫なのか?結構深いだろこの穴?」

『その辺りは無問題じゃ。落下中に魔法で気絶するようになっておっての、

着地時は風魔法で優しくキャッチ。目が覚めたときに

「あ、私たち落ちたんだー」となるようにしておる!!わしが直々に
作った術式じゃから、ネギ君でも簡単にはレジスト出来ん!!』
「……無駄に凝ってんな。」
『それだけではないぞい!あの子らが落ちた地底図書室には全教科の参考書（1教科につき10種類ずつある）と食料・キッチン完備!!
明るい光に溢れ、気温と空調は快適じゃ!!!』
（……その情熱を1%でもいいから仕事に回してくれ……）

『おいおい様子をみて、地底から出してあげるつもりじゃ。
魔法に頼ろうとしたあの子らが、地底でマジメに勉強するかはネギ君次第じゃな。』
「そーですねー。じゃ、俺も行ってくるわ。」
『は?』
「キッチンあるって言ったけど、アイツらは料理する時間ももったいないだろ?だから行って来る。早乙女さんと宮崎さんが心配
してたから、クラスのみんなにも明日連絡しといてくれ。
俺のこともエヴァに言っといてくれな。」
『ふぉ!?』
「じゃ。」
ひょーいと瓦礫を乗り越えて、大穴に落ちていく士郎。
（エヴァに伝えたら、
わしが八つ当たりされるんじゃないかの士郎ーーーーーーー!!?）

◇――――――◇――――――◇

「何ですって!?
２－Ａが最下位を脱出しなければネギ先生がクビに～～～～!!
？」

久しぶり（？）の登場ッスねいいんちょさん。

「問題はアスナさんたち５人組（レンジャーズ）ですわね……」

「みんなーーーー!ニュースニュース!!
アスナたちとネギ先生、今日から３日間、特別学習室に合宿だって!!」
ハルナとのどかが走って教室に入って来た。

「なんですって!?ズルイですわ!!」
委員長はネギと合宿できないことを悔しがっている。

「特別学習室?それどこ?」
「合宿だって。楽しそーじゃない?」
「ていうか今日、ネギ先生の授業あったよね」
「あの５人はわかるけど、なんで木乃香も参加なの?」

「それと、保護者としてこのかのお兄さんも一緒なんだって」

「このかにお兄さんっていたんだー」
「あたし達、昨日会ったよ。」
「え!どんな人!?」
「ん～?けっこーカッコよかったよ?どっちかっていうとイケメンで、身長は
龍宮さんくらいあったし」
「えーー!!会ってみたーーい!!」

（マ、マジか……！）
長谷川千雨は密かに絶望した。
（てことは、『アルトリア』は休みかよ！？
テスト前の、最後のリラクゼーションタイムが……。）

「皆さん！！
アスナさん達が頑張っているのに、私達が負けるわけにはいきませんわ！！
ちゃんと勉強して最下位脱出、ネギ先生のクビ回避ですわよ！！」

『おおーーーーーーーーー！！』

◇――――――◇――――――◇

今日は日曜日。テストは明日。地底図書室の面々は。

「この問題がわかる人？」
「はーい！！ｙ＝２（ｘ－２）－１です！！」
「正解です！！」
「やたーーー！！」
『おおおーーー！！』

絶賛勉強中。
ネギが見つけてきた黒板と、士郎が投影した机と椅子で勉強している。
筆記用具とテキストは学園長の言うとおり準備されていた。

「おーい皆、昼メシできたぞーー」

そして俺は給仕をやっている。
最初は魔法でテストをどうにかしようとしたことについて説教しようとしたのだが、
地下に着いたら真面目に勉強していたので言いだすタイミングを失ってしまった。
……頑張ってるみたいだし。ま、いっか。

「わーーーーい！！」
「待ってましたーーーーーー！！」
「師父、これ食べ終わったら食後の運動に手合わせお願いするアルよ！」
「クーちゃん、その呼び方はやめてくれって……」
「おっ、今日の昼食は和食でござるか？」
「しろーさんってなんでも作れるんだねー」
「卵焼き、かぼちゃ煮、こんにゃくのおかか煮、野菜の肉巻き炒め、ほうれん草のおひたし、鶏肉の照り焼き、きのこの炊き込みご飯、大根とにんじんのみそ汁……うん、お袋の味ですね。」
「ホントに美味しいわよね。桜咲さんと龍宮さんも士郎さんの店に通ってるし」
「士郎さん！今度はイギリスの料理作ってくれませんか！？」
「……まあ、英国風、でいいのなら。」
作者は食べたことは無いが、英国料理は不味いといわれている。
古代においてはあの腹ぺこ騎士王が「雑」の一言で表現したほどらしい。

「師父！早速手合わせをーーーーー」
「テストが終わったらな。ほら、勉強勉強。」

「あ、皆さん。水浴びしてるん…です…か…」
『キャーーーッネギ君のエッチーーーーーー！！』

「あ、あわわっ、スミマセン！！」

「本に囲まれて暖かくてホント楽園やなー？」

「一生ここに居てもいいです。」

「ゴラ。木乃香はともかく夕映ちゃんはンな余裕ないだろが」

「そんなことを言いつつ差し入れを持ってきてくれる士郎さんはいい人です。」

「あ、アイス作ったん？　美味しそーや」

「な・何よそれぇ！！クラス解散とか留年とかはデマなの！？」

「はい…そうだと思います。本当は僕のクビがかかってるんですけど」

「だったらこんなヘンな図書館になんか来なかったわよっ！！」

「ええっアスナさんヒドイ！！！」

――――――――そしてそこに。

「キャーーーーッ！大変やーーーーーっ！！」

『――――――あ！』

――――彼女たちを突き落したゴーレムが現れた。

『フォフォフォ！ここからは出られんぞ。ここには出口は無い！！』

（……ノリノリだな、じいちゃん…。つーか「様子を見て出してやる」って
言ってたよな？こんな登場でどうするつもりだ？）

『フォーフォーフォー！』

「キャーーーーーーーーーーーー！！！」

（……追って来ましたよ！？おいおいおいおい！！
こんな怖がらせるような手段で出口まで追い込むのか！？
……。しょうがないな。）

「皆！あの滝の裏に隠れろ！クー！アイツの足止め、手伝え！！」
『はーーい！！』
「りょーかいアル！」

この地底図書室の構造は解析済みだ。あの滝の裏に非常口がある。

「中国武術研究会・部長の実力（ちから）を見るアルよ！ハイ！！」
ゴーレムの左脚部に拳打。
「ヤッ！！」
直後すぐさま跳び上がり、ゴーレムの右腕部に蹴撃。

――――その隙に。
ゴーレムの首もと、顔の正面に立つ士郎。

（――――――――『戦いの歌（カントゥス・ベラークス）』）

自らの肉体に魔力を流して魔力を纏うことで、身体能力を上昇させ
攻撃面・防御面
ともに強化する戦闘魔法。

『ちょっ……待つのじゃ、しろ…』

「ボールは友達！！！」
『ひょーーーーーーーーーーーーーー！？』

――――――ボガンッッ！！！

サッカーボールを蹴る要領で、ゴーレムの頭を蹴り砕く。
物言わぬゴーレムが倒れてゆく。

「あのゴーレム、最後に何か言わなかったアルか？」
「さあ？気の所為じゃないか？」
『古菲（クーフェイ）、士郎さん！出口がありました！！脱出しますよ！！』
「おっ！？出口があったアルか！！」
「おし、これで帰れるな。」

・・・・・

「わ、眩し……。」
『やったーーー！！外に出れたーーーーーーーーー！！！』
『いえーーーっ？』

◇――――――◇――――――◇

「――というわけで……」

『２－Ａ学年トップおめでとうパーティー！！！』
『いえーーーーーー！！！』

なんと。２－Ａが学期末試験で学年トップの点数を叩きだしたらしい。

無謀なことに徹夜で一夜漬けをして遅刻し、その点数が学園長（じいちゃん）のミスで加算されなかった為、当初は学年ビリだったという。
それによりネギ君はウェールズに帰ろうとしていたが明日菜達が引き止め、再計算されたテスト結果の発表により、４月から正式な教員となる運びとなった。

そして記念パーティーを開くことになり、
今回の件に関わった俺が喫茶店の店主だということで――――――

「ウチの店、定員が２０人なんだけど……」
「詰めればなんとかなるって？」
「師父の料理の美味しさなら、狭くても問題ないアル。」

「何コレ！？すっごくおいしーーー！」
「こんな店が近くにあったなんて知らなかったよーーー」
「また来たいねー」
「ほら、むしろ常連が増えそうだよー♪」

（くっ……あたしのオアシスがぁ……！！）

「……あんまり増えても困るんだけどな」
「だってよ朝倉。記事にすんのはやめといたほうがいいんじゃない？」
「…チッ」
「え？なにその子？」
「ふっ。報道部の突撃カメラマンといえばこの私・朝倉和美！！
どーよこのかのお兄さん？客寄せしたくない？取材だけでもイイよ？」
「……いや、遠慮しとく。」
「…チッ」

「ええい士郎！いつまで他の女と口をきいている！！」
「ああ、マスターが寂しがって……」
「黙れボケロボ！！」

「ネギ君、先生おめでとーーー！」
「えへへ、ありがとうございます！」

喫茶店アルトリア。定員オーバーで営業中。まだまだ閉まる気配はない。

余談。

ネギたちに採点ミスを伝えに来た学園長は、なぜか頭は包帯でぐるぐる巻きに。右腕と左脚はギプスをしていたという。その右手でどうやって採点したんですか？

「ひょー……。」

第２３話　期末テストと図書館探検（後書き）

今回の補足はーーーーー・・・・・・。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

――――あの足運び。大木のように安定した重心。無駄のない動き。
そして一部の隙もない。
間違いない。あの人は間違いなく、ワタシより圧倒的に強いアル。

（――――――――うおっ！？）

何だろう。目の前にいる色黒の中国人っぽい女の子が、俺をとても
キラキラした
目で見つめてくる。

「え、えーと……君？俺の顔になんかついてる？」
「ワタシ、古菲いうアルよ！アナタのコト、師父と呼ばせてほしい
アル！！」
「なんでさ！？」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～

みたいな感じの出会いです。

次回の更新はいつになるかな！？
それでは次回！！　再見！！

第２４話　桜通りの吸血鬼？（前書き）

今回の「桜通りの吸血鬼？」と次話の？は対になる話となっています。この２話を読むと、序盤の流れがわかると思います。

今話からこの小説のオリジナル要素っぽいのが出るので、原作と違う所があっても気にしないでください。

それでは第２４話、どーぞー。

第２４話　桜通りの吸血鬼？

桜咲く春。新年度の開始。一年の始まり。
全く違う、新しい環境に踏み出す人、去年と同じ年を営む人。
すべてにおいて新風が吹き込むこの時期。
――――麻帆良学園では。

「３年！」
「Ａ組！！」
『ネギ先生ーーーーーーーーっ！！』
『ワアアアアアアアアァァァ！！』

某国民的高校教師・金○先生の如き挨拶。
（バカどもが……。）
（アホばっかです……。）

「えと…改めまして
このクラスの担任になりましたネギ・スプリングフィールドです。
これから来年の三月までの一年間よろしくお願いします。」
『はーーい！』
『よろしくーーー♪』

――――そして新学期早々。

『うわぁーーーーーーん！！
アスナさん…こっこっ……怖かったです～～～～～～！！』

英雄の息子・ネギ・スプリングフィールドに試練が舞い降りる。

◇――――――◇――――――◇

朝のＨＲで寒気を感じた。
その寒気の元を辿った――僕の視線の先には。
（出席番号２６番、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルさん……？）
目が合ったと思うと、彼女はプイッと目を逸らしてしまった。

しずな先生に連れられて保健室に行くと、まき絵さんが眠っていた。
「桜通りで倒れているところを保護されたそうですが……。」
（何だ？まき絵さんの体から魔力を感じる……？）
まき絵さんが倒れていたという「桜通り」の調査を行うことにした。

その夜。
「あ…あなたはウチのクラスの……エヴァンジェリンさんっ!?」
「フフ…その通り。新学期に入ったことだし、改めて歓迎の挨拶と行こうか？
先生……いや、ネギ・スプリングフィールド。」
「…何者なんですかあなたは。魔法使いのくせに何故こんなことを!?」
「なに、簡単な話だ。この世には…いい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ」
「……こんばんわネギ先生。」
「……出席番号１０番、絡繰茶々丸…さん!?」
「そうだ。コイツが私のパートナー、魔法使い（ミニステル・マギ）の従者の茶々丸だ。」
「我々魔法使いは呪文詠唱中、完全に無防備となる。そこを盾となり剣となって

守るのが従者の役目だ。つまりパートナーのいないお前では私達に勝てない」

「私はお前の父・サウザンドマスターに敗れて以来魔力を極限まで封じられ！

もう１５年間も女子中学生をやらされているんだよ！！」

「この馬鹿げた呪いを解くには、奴の血縁であるお前の血が大量に必要

なんだ。悪いが……死ぬまで血を吸わせてもらう……！」

「うわーーん助けてーーーーーー！！」

「コラーーッウチの居候に何すんのよこの変質者どもーーーーーー！！」

「……思わぬ邪魔が入ったが…覚悟しておけよ？　先生……。」

◇――――――◇――――――◇

今朝。

「もーっいくらあの二人が怖いからって先生が仮病使っちゃダメでしょ！？」

「あーんやめてくださーい！！」

明日菜に無理矢理登校させられるネギの姿があった。そして教室。

「エヴァンジェリンさん達に会ったらどーするんですか！……ってあれ。

いない？」

見たところ、エヴァンジェリンの姿はないようだった。

「マスターは学校には来ています。すなわちサボタージュです。」

「うわああぁっ！！！」

気配なく隣に現れた茶々丸に驚いて飛び上がる。

「……お呼びしますか？」
「えええいやいや、いいです！いいです！ご遠慮なさらず！？」
茶々丸は気を利かせたつもりなのだが、ネギは完全にビビっている。
そして日本語がおかしいぞネギ少年。

◇――――――◇――――――◇

「はあ…自分のクラスにあんなスゴイ二人組がいたなんて……」
魔法学校を2年飛び級、しかも首席で卒業し「天才」と称されたネギ。
それだけならこのようなことにはならなかったかもしれない。
今回の事件の原因はネギが「千の呪文の男（サウザンドマスター）」の息子だからに他ならない。
しかし既に起きたことに「もし」はなく。言い訳もできない。
ネギは己の力でエヴァンジェリンをどうにかしなければならない。

しかしいくら天才といってもネギは１０歳。
真祖の吸血鬼（ハイディライトウォーカー）とまともに闘り合えるはずがない。
しかも敗れれば、「死ぬまで」血を吸われてしまうのだ。
自分の命が懸っている。
今まで挫折らしい挫折を味わってこなかったネギの最初の壁としては、
あまりにも高く、厚過ぎる壁だった。

（……どうしよう……。）

――――景気悪そうなカオしてんな、ネギの兄貴。

（――――え？）

「ここだよ、ここ。下、下。」

目の前にいたのは、白い毛並みのイタチ。

「えっ！？カモくん！！？」

「久しぶりだな兄貴。

アルベール・カモミール、恩返しに来たぜ！」

◇――――――――◇――――――――◇

「……っていうのが、俺っちと兄貴の出会いなんでさー♪」

女子寮の明日菜と木乃香（とネギ）の部屋。

明日菜がカモミールとネギの話を聞いていた。

話の内容は二人（？）の出会い。

罠にかかったカモミールをネギが助けた…だけではなく、カモを助けた所為で

村の大人に怒られるネギを見て「漢（おとこ）だ」と感激したという。

「へ～～～～～～～？」

「いやあ、カモ君おっきくなったね～」

「で？どーしたんスか兄貴？」

「え？」

「何か困ったことがあるんじゃないっスか？俺っちは兄貴の力になるために

ここに来たんスよ！何でも相談してくだせえ！」

「アンタ役に立つの？」

「何言ってんスか姐さん！俺っちは由緒正しきオコジョ妖精！

分野によっちゃあ兄貴より魔法界の知識があるんだぜ！！」

「あ……ありがとうカモ君……！！」
「兄貴……！！」
「…さっさと話し合いなさいよ。」

・　・　・　・　・

ふむふむ……兄貴のクラスには問題児がいて、ソイツらが兄貴の命を狙っている。兄貴としてはその二人に自分を狙うことを諦めてもらって、そのうちの片方には真面目に授業に出てもらいたいと。ふむふむ……え？そのエヴァンジェリンってヤツは真祖の吸血鬼？って兄貴！！
そりゃあ元賞金首の「闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）」じゃあねえのか！！？

「く……故郷（くに）へ帰らせていただき『待ちなさいよ』」
「ヒ、ヒドイよカモ君……」
即まわれ右したカモミールを明日菜が捕まえ、ネギは涙目になっている。
「だ…だってそんな化け物に敵うわきゃねえ……ってそういや兄貴、よく
　そんなの相手に生き残ったな。」
「なんか力が弱まってるらしいのよ。次の満月まではネギを襲えないって
　言ってたし」
「えっ！？いつそんなの聞いたんですか！？」
「学校の廊下で会ったのよ。屋上で昼寝してたらしいわ。」
「ア、兄貴の授業をボイコットして……。兄貴！ナメられてるぜ！？」
「で、でも……」

「大丈夫。姐さんの言ったとおり弱ってるんなら勝てないこともねえ！」
『え！？本当！？』

「兄貴と姐さんがサクっと仮契約を交わして……相手の片一方、従者のほうを
二人がかりでボコっちまうんだよ！！」

――――――「仮契約（パクティオー）」。
魔法使いが己の従者と結ぶ契約システムの一種。
いわゆる「本契約」と呼ばれる通常の契約は原則一人としか契約できないのに対し、仮契約は何人とも契約を結ぶことができる。
契約により従者となった者は主人である魔法使いから「魔力供給」を受け、精神・肉体が大幅に強化される。肉体に関しては供給された魔力を纏うことで攻守ともに強化される。
他にも「最大の特徴」と呼べる機能があるが、それは別の機会に解説する。
というか、二次小説を読む人というのは原作をある程度知っている、読んだことがある人が多いのだから、こういう説明って要らないんじゃないかなーと思いながら書いている。
話が脱線したがもうひとつ。
この仮契約を結ぶ方法は複数あり、なかでも最もメジャーなのが本人同士の接吻（キス）である。
なので契約を結ぶ相手は異性であることが多く、由緒正しきこのシステムは現在では恋人探しの口実になってしまっている。
ちなみにエヴァンジェリンには本契約の従者が二人いるが、彼女たちが結んでいるのは人形（ドール）契約というもので、複数と契約することが難しくないものである。まあ、エヴァンジェリンのスペックならば複数の人間と本契約を結ぶことも難しくないのだろうが。

「ってコトで姐さん！いっちょブチューっと一発！！」
「何でよ！！」
「姐さんしかいないでしょーが！事情を知らないヒトを今からパートナーに
して、役に立つと思うんスか！？
それに姐さん、兄貴のピンチを放っておけるよーな性格じゃねーだろ？」
「……う……。」
「で、でもカモ君。茶々丸さんは僕の生徒なんだよ？
それに二人がかりって卑怯じゃ……」
「卑怯じゃねーよ！兄貴だって二人がかりでやられたんだろ！？
それに兄貴は自分の命が懸ってるんじゃねーのか！？」
「……う……。」
二人ともカモミールに反論できない。
何故なら、彼の言い分は間違ってはいないからだ。
ただ、この場合は。
――――――正解ではないのだけれど。

「……もう……しょうがないわね。ちゃちゃっとやっちゃうわよ！」
「は、はい……。」
「おっ。お二人さん、やっとやる気になったんスか。んじゃ
いきますよー、オコジョ魔法！！」
ネギと明日菜の間、中央に六芒星が描かれた円形の魔方陣が現れる。
それは光を放ち、二人を照らし出す。
「ああ姐さん、おでこなんてそんな中途半端なー」
「うっさいわね別にいいでしょ！！」
（おでこー……）
「ええいしょーがねー、仮契約（パクティオー）成立！！」
明日菜はネギのおでこにキスし、仮契約が成立した。

◇――――――――◇――――――――◇

「おっ？やったっスよ兄貴！アイツ今一人だぜ！！」

明日菜との仮契約（パクティオー）から二日後。
カモミールの策を実行すべく機会を窺（うかが）い続けた。
そしてこの日。遂にチャンスが巡って来た。

「ま、待って。まだ人目が多いよ。」
「う…なんか辻斬りみたいで嫌ね……クラスメートなのに」
「……しっ！動いたぜ！」
ネギ一行は尾行を開始した。

――――――――川沿いの土手の上。桜並木。
茶々丸は、桜の木に引っ掛かった少女の風船を取ってやる。
「わーい！ありがとうお姉ちゃん！」

――――――――交差点の歩道橋。
階段が辛そうなおばあさんをおぶって歩道橋を渡る。
「ありがとうございます。茶々丸さん。」

――――――――川に、段ボール箱に捨てられた仔猫が流されていた。
体が濡れることも構わず、川に入って猫を助ける。
「大丈夫ですか茶々丸さん！？」
「流石茶々丸さんだ。」
「茶々丸カッコイー！！」

――――――教会の裏手。

茶々丸は、野良猫たちに餌を与えていた。猫だけでなく、鳥たちも集まってきている。

「ニャー」　「チチ…」

物影の尾行者たちは。

「……。」

「……。」

『……いい人だ』

――――――ホロリ。

「ちょっとぉ！しっかりしてくださいよ二人とも！！ネギの兄貴は命を狙われたんでしょ！？」

「でも……」

「人目のない今がチャンスっス。心を鬼にしてポカーっとお願いします！」

「う、ううう……。」

「…しょうがないわね……。」

◇――――――◇――――――◇

「……油断しました」

考え事をしていた所為でしょう。そちらに思考を割き過ぎました。

いま私の目の前にはネギ先生と……

「…神楽坂明日菜さん。いいパートナーを見つけましたね」

「茶々丸さん、あの…僕を狙うのを止めてくれませんか？」

優しいですね。ネギ先生。問答無用で攻撃すればいいものを。
やろうと思えば、私があの子たちにかまっている隙に不意打ちも出来たはずなのに。

「申し訳ありません。私にとってマスターの命令は絶対ですので」

「……ネギ。」

「ううう……仕方ありません」

「――――行きます！契約執行１０秒間！！ネギの従者『神楽坂明日菜（カグラザカアスナ）』！！」

先生がそう言うと同時に明日菜さんが接近してくる。
速い。「契約執行」――――仮契約を結んだことは確定ですね。

『――――ラ・ステル・マ・スキル・マギステル！』

牽制にお互いの腕を弾き合う。

『――――光の精霊（ウンデキム・スピーリトウス・ルーキス）１１柱。』

契約執行中とはいえ、一般人にはあり得ない速度で接近してくる。
こちらに伸びてきた腕を逸らしますが、それでも彼女は私の頭部にデコピンを
喰らわせる。

「はやい。素人とは思えない動き。」

『集い来たりて敵を射て(コエウンテース・サギテント・イニミクム)！！』

「――――――――！！」

急いでアスナさんから距離をとる。ネギ先生に周りに魔力が収束しています。

上手く時間を稼がれてしまいました。はやく回避行動に移行しなければ――

「魔法の射手(サギタ・マギカ)・連弾(セリエス)・光の１１矢(ルーキス)！！」

追尾型魔法至近弾多数。回避方法の演算開始…終了。

「回避不可能」。程度は不確定ながら被弾・損傷は不可避。

――――――避けきれません。

「すみませんマスター……。もし私が壊れたら、あの子たちのエサを……」

（――そして士郎さんと、仲直りしてください――――）

――――光の矢が、茶々丸に降り注いだ。

◇――――――◇――――――◇

『兄貴！相手はロボだぜ！？手加減してちゃ駄目っス、ここは一発派手な呪文でドバーっと！！』

「魔法の射手（サギタ・マギカ）・連弾（セリエス）・光の１１矢（ルーキス）！！」

カモ君の言う通り、ありったけの魔力を込めた魔法の射手（サギタ・マギカ）を撃つ。これで茶々丸さんを倒せるハズ。でも。

（――――でも、本当にこれで良かったの――――？）

そしてそれは聞こえてきた。

「すみませんマスター……。もし私が壊れたら、あの子たちのエサを……」

「――――――――――！！」

（だ、駄目だ！！！）

「や…やっぱりダメーーーーーーー！！戻れっ！！」

しかし、光の矢が軌道を変えるには時間が足りなかった。

（そんな……！間に合わ――――――――――）

『――――いや、よく踏みとどまった。それがお前の「正解」だ。』

「え？」

ネギが茶々丸を襲ったのは「間違い」ではない。
エヴァンジェリンを倒す為に、己の命を守る為には効果的だといえるだろう。
しかしネギはそうするべきではなかった。
ネギは「先生」であり、茶々丸は「生徒」なのだから。
先生は生徒の力になりこそすれ、傷つけることなどあってはならない。
それはあくまで「理想」かもしれない。奇麗事かもしれない。
それでもネギが選ぶのは、こちらの選択。
なぜならネギは、英雄（ちちおや）を目指しているのだから。
理想を追う者が、理想を蔑ろにするわけにはいかない。
だからこそ。
「茶々丸を傷つけない」。それが、ネギが選ぶべき「正解」だった。

ネギの光の矢は目標を違えることなく茶々丸に向かっていく。そして。
茶々丸の背後から、光の矢が降り注いだ。

ネギは目を剥いた。

（――――そんな！？アレは僕の――――――――）

その光の矢は誰が撃ったものだったのか。ただ、そのときネギにわかったことは。
その呪文の術式は間違いなく、ネギの術式だったということ。

バキキキキキキキキン！！！！！

２方向から撃たれた光の矢は引き合うように。
鏡合わせのように同じ動きで進み――――相殺した。

――――明日菜と茶々丸の間に
境界線を敷くように、７本の大剣が虚空に現れ突き刺さる。

「きゃあっ！？」
「ッ！？　アスナさん！？」

『――――――ブレイク』

――――ッドォオオオオンン！！！！！！

「ッキャアアアアアアアアッ！！！」
「うわあああああ！！？」

大剣が爆発し、辺りに轟音と爆風を撒き散らす。
至近距離にいた明日菜は悲鳴をあげ、ネギも立っているのが精一杯だった。

「……！やべえ、兄貴！！アイツに逃げられ――――」

爆音で耳をやられた。何も聞こえない。
粉塵で何も見えない。

――――――煙が晴れた時には、茶々丸さんの姿はどこにもなかった。

◇――――――◇――――――◇

『兄貴！何で昨日矢を戻そうとしたんだよ！？』
『でも、やっぱり茶々丸さんは僕の生徒だし……』
『甘い！！』

『絶対、二人がかりで仕返しに来るって！！』
『周りも巻き添えを喰らうかも……』

『……！　……う……うわあ～～～～～ん！！！』
『ちょっ、ネギ！？』

――――――その翌日。土曜日。カモに責められ。事態の重さに気づき。

ネギは逃げ出した。

◇――――――◇――――――◇

麻帆良と隣り合う山脈。その上空。

（アスナさんや皆には迷惑かけられない。何処か遠くへ逃げなきゃ――――）

「……もう、ウェールズに帰っちゃおうか……」

そんな弱音を吐いた直後。ネギは杉の木にぶつかって落ちていった。

――――――――ドッポォオオオオン！！！

運良く川に落ちたものの。

「うっ…ゲホッゴホッ……ここどこ……って、しまった！僕の杖！？」

（杖がなきゃ、マトモに魔法も使えない――――）

魔法の使えないネギはただの１０歳の子供。遭難すれば命はない。

「うう……お姉ちゃん……アスナさん……！」

「おや？誰かと思えば…」

「――――ネギ坊主ではござらんか。」

目の前に、忍者のような服を着た長瀬楓が立っていた。

助けられた、そのあと。

「しばらく拙者と修行でもしてみるか？」

第２４話　桜通りの吸血鬼？（後書き）

～補足～

・その呪文の術式は間違いなく、ネギの術式だったということ。
種明かしは次回。

・（――そして士郎さんと、仲直りしてください――――）
次回で。

こんなトコですか。まともな解説をしなかったな、今回。

それでは次回！！

第２５話　桜通りの吸血鬼？（前書き）

今話は前話と対になっております。前にも言ったねコレ。

前回がネギサイドの話とするなら、今回はエヴァサイドの話です。

前話で士郎の出番が無かった理由とは？

ではどーぞ！

第２５話　桜通りの吸血鬼？

かつて、魔法界で最高クラスの懸賞金・６００万$の賞金首がいた。
その人物の名はエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。
闇の福音、不死の魔法使い、人形使いなどの多くの異名を持つ大魔法使いだった。

１５年前、「千の呪文の男（サウザンドマスター）」ナギ・スプリングフィールドに敗れたエヴァンジェリンは呪いを受け、麻帆良学園に封印された。

「悪事から足を洗ったらどうだ？」「光に生きてみろ。」

そして彼女は女子中等部に編入し。

「お前が卒業する頃にまた来てやるからさ。そのとき呪いも解いてやる。」

しかし３年経っても彼は現れず。５年後、公式に死亡扱いとなった。

◇――――――◇――――――◇

３月下旬のころ。
「――――そろそろ動くぞ。」
この家の主・エヴァンジェリンがそう告げた。

「……具体的にはどのように？」

エヴァンジェリンの目的。それは己にかけられた「呪い」を解くこと。
その解呪には彼の血縁であるネギ・スプリングフィールドの血が大量に必要になる。

「坊やの生徒を何人か襲っておびき出す。今まで大人しくしていたおかげで
ジジイも完全に警戒を解いている。やるなら今だ。」

襲うといっても大きな危害は加えない。「闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）」は女・子供は殺さない。

「そしてまんまとやって来たところを狙う。すべてが上手くいけばそれでお終いだ。」
そう言ってニイッと笑う。

「決行は次の満月がもう少し近づいてからだがな。茶々丸、お前は私と行動しろ。」
「了解しました。マスター」
「オイオイ御主人、俺ニモ殺ラセロ。」
「フン、五月蠅いぞ役立たず」
「役立タズナノハ御主人ノ所為ジャネーカ。」
エヴァの魔力が極限まで封じられている限り、それを動力にして動くチャチャゼロは自力で行動することができない。

「さて士郎。お前にはしばらくここに居てもらうことになるが安心しろ。
お前にもたっぷりと働いて『やだ。』ぞ。」

士郎は平然とした顔で手を頭の後ろで組んでソファにもたれかかっている。
エヴァは半分驚愕、半分理解できないといった感情で士郎を凝視する。

「……貴様、いま何と言った？」

「いやだ、と言った。俺はエヴァに味方しないし、かといってネギにも協力しない。
俺はこの件には関わらない。今回俺は、中立の立場を取らせてもらう。」

◇――――――◇――――――◇

エヴァは呆然としている。
そりゃあそうだろう。自惚れかもしれないが、彼女とはそれなりに信頼関係を築いていると思っている。
俺だって、いきなりエヴァが敵対してきたら絶対に困惑することだろう。

「……あの、士郎さん。それは何故なのでしょうか？」

「俺はネギのことを弟分だと思ってるからな。そいつを襲う手伝いなんて
したくない。だからといって味方になるわけにもいかない。
だから不干渉。中立を選んだ。」

「……士郎……貴様……！！」

氷のような冷たい殺気が突き刺さる。本当にご立腹のようだ。

「敵にも味方にもならないだと……ふざけるな！！！」

――――――バタン！！

壊れんばかりの力でドアを開け放ち、エヴァは部屋を出て行った。

まあ…当然だよな。

「あの、士郎さん…どちらにも協力しないというのは……」

「…ああ、ちゃんとわかってるよ。」

そう、この状況でどちらにも協力しないということは、

片方に肩入れするということだ。

「俺がエヴァに協力しない」ことが、ネギにとって有利に働くのだから。

だがそれでも、ネギの圧倒的な不利は変わらない。

弱体化しているが紛うことなき歴戦の魔法使いと、その従者のガイノイド。

それらと2対1で戦わなければいけない。

俺に出来るのは、俺が加わることで3対1という状況にしないことだけ。

あとはお前次第だ、ネギ。

さて、この状況。どうしたもんか。

「ケッ。御主人ヨリソンナ坊主ヲ選ブトハナ。

オ前モシカシテ、ソッチガ趣味ナノカ？」

「殺すぞチャチャゼロ」
「ええと、そういうのを男色、というのでしたか？」
「違う！茶々丸違う！！俺は至ってノーマルだ！！！」
「焦ッテヤガル。怪シイナオイ。」
「ですね。」
「なんでさぁーーーーーーーーーー！！！」

◇――――――◇――――――◇

事の原因は、間違いなく先日の一件でしょう。
あれからマスターと士郎さんは、口をきかなくなってしまったのです。

◇――――――◇――――――◇

喫茶店アルトリア。

「あーーーーーーーー……。」

店長・衛宮士郎がカウンターで突っ伏していた。

（エヴァ、怒ってた。すっごく怒ってたなーーーーー）

ちょっと滅入った気分の士郎の懐から音が鳴る。

――――――ＰＵＬＬＬ・・・・・ピッ

携帯電話。しかし知らない番号からだった。電話をかけてきたのは。

「もしもし？」

『もしもし、士郎くん？』

「……ネカネさん？ですか？」

『久しぶりね。半年ぶりになるかしら。元気にしてる？』

（ていうか、何で俺の番号知ってるんだろう……）

「……まあ、そこそこ元気……ですね。」

『……？　何かあったの？』

「それより。どうしたんですかネカネさん。」

『それがね。こっちで最近頻発してた下着泥棒の犯人を捕まえたんだけど、

そのオコジョ、どうやらネギの知り合いらしいの』

「…オコジョが犯人だったんですか？」

『ええ。ネギのことを慕っているらしいし、とりあえずウチで私が預かってる

んだけど。どうしたらいいかしらと思って。このこと、ネギに話しておいて

くれないかしら』

「知り合い？……もしかしてそのオコジョって妖精？」

『ええ、自分から「由緒正しいオコジョ妖精」って名乗ってるわ』

（……。）

「ネカネさん。そのオコジョに電話代わってもらえませんか？」

・　・　・

「わかったぜ旦那！アルベール・カモミール、ネギの兄貴の力になるぜ！
日本の麻帆良って学校に行きゃあイイんだな！！
え？　旦那に頼まれたってことは秘密に？　わかったぜ！」

◇――――――◇――――――◇

始業式の夜。マスターはネギ先生と接触しました。
想定より早い遭遇となりましたが、計画通りです。

合流場所はある地点の８階建ての建物の屋根の上。
そこに先生をおびき寄せる手はずになっています。
万全に行けば、そこで合流するまでもなくマスターはネギ先生の血を吸うことが出来るでしょう。

――マスターが来ました。ネギ先生に追われる形で。
先生。これで詰みです。
「こんばんわ、ネギ先生。」
「申し訳ありません。マスターの命令ですので」
先生の首を絞めて拘束し、マスターに引き渡す。
「くく……待ちわびたぞこの時を……。」
「悪いが……死ぬまで血を吸わせてもらう……！」
「うわーーん助けてーーーーーー！！」
牙を剥き出しにして先生の首に迫るマスター。
「ん……？」
――――カプッ。ちゅ～～～～……
その時は、これで目的は達成されたと思ったのですが……

「コラーーッウチの居候に何すんのよこの変質者どもーーーーーー！！」

クラスメートの神楽坂明日菜さんが飛び蹴りをしてきました。

「あぶぶぶーーーーーーーーっ！！」

――ドシャアアア！！

奇声をあげてマスターが吹き飛ばされ、転ぶ。

私も蹴りを喰らいましたが、マスターほどのダメージは受けませんでした。

つまり、今のシャッターチャンスを逃さずに済んだということです。

アスナさん、グッジョブです。

「くっ、よくも私を足蹴にしたな神楽坂明日菜……。覚えておけよ……！」

了解しました。撤退ですね。

「……思わぬ邪魔が入ったが…覚悟しておけよ？　先生……。」

格好良くキメているマスターをよそに、私は先ほどの

「あぶぶぶーーーーーーーーっ！！」をリピート再生していました。

◇――――――◇――――――◇

翌朝。

朝食の時間です。です、が……

無言。

ズズ……

カチャ……

味噌汁を吸う音。箸の音。それ以外の音が、食卓にはありませんでした。

ああ、いつもなら私と士郎さんが作った朝食を美味しそうに食べて、「美味い。」と言っているのに。

最近では無言の無表情です。

――――ガタンッ

ああっ。

いつもなら「ごちそうさま」とか「うむ、今日も美味かった」など言いながらご自分の食器を流しまで持って行かれるのに。

食事を召し上がった後そのまま、席を外してしまいました。

あの、食器を運ぶ可愛らしいマスターのお姿が見られません……。

そういえば、マスターがそのようなことをするようになったのは士郎さんが来てからですね。

「はぁぁ……。」

士郎さん、だいぶ参っておられる様子です。

私もこの状況をなんとかしたいとは思っているのですが……

姉さん、どうすればいいでしょうか？

「本気デ愛想ガ尽キタンナラ、トックニココカラ追イ出シテルダロ。

アリャア意地張ッテルダケダゼ、ケケケ。シバラクホットケヤ。」

意地、ですか。ロボの私には解りません。

しかし私には、このまま放っておくことは……

◇――――――◇――――――◇

学校について早々、マスターは屋上へ行くと仰いました。

マスター、朝のＨＲくらいには出席したほうがよいのでは。

・　・

「マスターは学校には来ています。すなわちサボタージュです。」

「うわあぁぁっ！！！」

教室にネギ先生がやって来ました。マスターの姿が見えないことを気にしていたようなのでお呼びしようかと思ったのですが……

断られました。

ネギ先生、あんなに怯えて……。昨日は申し訳ありません。

マスターの命令ですので。

◇――――――◇――――――◇

「んん……」

学校の屋上で昼寝をする少女が一人。

麻帆良本校女子中等部３年Ａ組。出席番号２６番、

エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。

言うまでもなく今は授業中であり、つまり彼女は授業をサボっているということだ。

春の風が心地いい。私が人間ならこの陽気にもいい感情を持つのだろうが、
そこは生憎・真祖の吸血鬼。暑いしダルい。
しかし吸血鬼の性質のおかげで昼寝には困らない。
要するに、昼は眠いということだ。
あの坊やが担任になってから随分サボり易くなった。
今日も屋上で惰眠を貪る……つもりだったというのに。

（眠れん……！）

目を閉じるとあのバカ（士郎）の顔が浮かんでくる。やっと眠れたと思うと、
最近は別のバカ（ナギ）の夢を見る。とても眠ってなどいられない。

（ええい、失せろ貴様ら！）

――――――バシンッ！！

（！　……。）

何かが学園の結界を越えたな……。小さい。動物の類か。
面倒だが仕方ない、これも仕事だ。全く、厄介な呪いだよ。

イラつく思考を切り替えて、「警備員」の職務を果たすべく
彼女は屋上を下りていった。

◇――――――◇――――――◇

茶々丸と合流して先ほどの侵入者を調査すべく校外に出ようとすると。

「……ほう、神楽坂明日菜か。」
「な……あんた達……！」

随分と警戒しているな。ま、それが当然の反応だがな。

「安心しろ神楽坂明日菜。少なくとも次の満月までは坊やを襲ったりすることはないからな。」
「……え？どういうこと？」
「今の私では満月を過ぎると魔力がガタ落ちになる。ホラ。」
口の端を指で広げて歯を見せる。どうだ？牙がないだろう？
「次の満月が来るまでは私もただの人間。坊やを攫っても血は吸えない
というわけさ。」

さてそろそろ行くか。これ以上の会話は不要だろう。
次の満月まで坊やを襲えないという認識を植え付けることが出来たのだから。

◇――――――◇――――――◇

翌日の朝。学校の昇降口、下駄箱の前にて。

「おはよう先生。今日もまったりサボらせてもらうよ。
フフ、ネギ先生が担任になってから随分と楽になった。」
「くっ…！」
坊やが背中の杖に手をかける。
「おっと、ここで闘る気か？校内ではおとなしくしていたほうがお互いの
ためだと思うがな。
そうそう、タカミチや学園長に助けを求めようなどと思うなよ？
また生徒を襲われたくなければな。」
「うぐっ……」
はは、何も言い返せないか。む？
坊やの肩に乗っている、あのオコジョ……？
学園結界を越えて来たのはアレか？

◇――――――◇――――――◇

神楽坂明日菜と接触した日から2日後。
（――間違いない。最近坊やの周りをウロチョロしているあのオコジョ、
魔力を感じる。おそらく妖精だろう。）
坊やに足りないのはパートナーの存在と、実戦における駈け引きの知識・経験だ。
あのオコジョがそれを補えるようなら……勝負は分からんな。
「茶々丸。ネギ・スプリングフィールドに助言者がついたかもしれ

ん。
　しばらく私の傍を離れるなよ」
「はい。マスター」
「おーいエヴァ」
（うっ……タカミチ）
私を呼びとめたのは麻帆良学園の広域指導員にして２－Ａの元担任のタカミチ。コイツとは同級生だった時代もあったな。
「…何か用か」
「学園長がお呼びだ。一人で来いだってさ。」
「……わかった。すぐに行くと伝えろ。茶々丸、すぐ戻る。
　必ず人目のある所を歩くんだぞ。」

私の言葉にうなずく茶々丸と別れ、タカミチと共に学園長室へ向かう。

「何の話だよ？また悪さじゃないだろーな？」
「うるさい。貴様には関係のないことだ」
「何してるのかは知らないけど、あまり士郎君を困らせるなよ？」
「……どーいう意味だ。」
「昨日店に行ったとき、彼、元気なかったからさ。
　何があったかは話してくれなかったけどな。……？　どうした？エヴァ」
「……いや、なんでもない。」

（そーかそーか、士郎の奴、元気がなかったか。ふん、いい気味だ。）

（……エヴァ、急に機嫌が良くなったな？）

タカミチは、エヴァの変化の理由がわからなかった。

◇――――――――◇――――――――◇

マスターと別れ、日課であるネコたちのエサやりに行くことにします。

道中いろいろありましたが、ネギ先生からの襲撃もなく無事に教会に到着しました。
私が来るとネコたちが一斉に集まって来ます。
最近は小鳥にも懐かれるようになりました。
この子たちを見ていると、……なんと言いますか、ゼンマイを巻いてもらった
ばかりのような気分になります。
これは人間でいう「癒し」というものでしょうか？

それにしても、マスターと士郎さんの不仲はもう見ていられません。
お互い口を利かなくなってもう2週間近くになります。
姉さんは放っておけと言いますが……

私はそのことに思考を割き過ぎて。
センサーが反応している事に気づかなかったのです。

「……油断しました。でもお相手はいたします……。」
「茶々丸さん、あの…僕を狙うのを止めてくれませんか？」
優しいですね。ネギ先生。問答無用で攻撃すればいいものを。
やろうと思えば、私があの子たちにかまっている隙に不意打ちも出来たはずなのに。

「申し訳ありません。私にとってマスターの命令は絶対ですので」
「うう……仕方ありません。……行きます！」
『契約執行１０秒間！！ネギの従者「神楽坂明日菜（カグラザカアスナ）」！！』
――契約執行。仮契約を結びましたか。接近してくるアスナさん……速い！

◇――――――◇――――――◇

上手くいけば儲けモンだと思っていたが……カモミールはなかなか優秀
だったようだ。
魔法界の知識、実戦の戦略。今のネギに足りない部分を見事に補っている。

問題はネギの方だ。
今のアイツはただカモミールの言う通りに行動しているだけ。
いや、言い包められたと言う方が正しいか。
確かにカモミールが言ったことは正しいだろう。
だが、それはお前が望んだことか？
何か引っかかってるものがあるんじゃないのか？
誰かの意見を聞くだけでは駄目だ。
それを受け入れた上で、自分の意思を持たなければ。

『魔法の射手（サギタ・マギカ）・連弾（セリエス）・光の１１矢（ルーキス）！！』

（……それがお前の選択か。ネギ。）

失望を顕わにした士郎の耳に飛び込んで来た声。

『すみませんマスター……。もし私が壊れたら、あの子たちのエサを……』

（――――馬鹿野郎！！んな事言う暇があったら避けろ！！）

『や…やっぱりダメーーーーーー！！戻れっ！！』

（――――――――――――――――……！！）

しかし「戻れ」と言ったネギの顔は「間に合わない」と告げていた。

（――――全く、遅いんだよ馬鹿が。）

『――――――いや、よく踏みとどまった。それがお前の「正解」だ。』

安心しろ。俺の家族（おまえのせいと）は俺が救う。

「カラダ・ハ・ツルギ・デ・デキテイル。『無銘の刀工（ネームレス・ソードメーカー）』！」

ネギの魔法を高速解析・瞬間理解・術式改変・反転投影。

魔法の矢の進行方向を反転。標的を茶々丸からネギの呪文へ。

「――――――偽・魔法ノ射手（FALSE MAGICA）。」

バキキキキキキキキン！！！！！

22本の魔法の矢が相殺して消滅する。

「来たれ(アデアット)！！」

七本の大剣を呼び出し、茶々丸と明日菜を分断する。

「――――ブレイク。壊れる幻想(ブロークン・ファンタズム)。」

――――ッドォオオオオンン！！！！！！

『ッキャアアアアアアアッ！！！！』

『うわあああああ！！？』

明日菜とネギの悲鳴が聞こえる。

だが明日菜の『魔法完全無効化能力(マジックキャンセル)』があれば怪我はしないだろう。

爆発で粉塵と土煙りが舞っているうちに。

「――――士郎さん？何故ここに……」

「話は後だ。行くぞ茶々丸。」

茶々丸を抱えてその場を離れ、先ほどまで隠れていた建物の屋根に飛び乗る。

そのまま屋根から屋根へ移動して、俺達は教会前広場から離脱した。

◇――――――――◇――――――――◇

屋根から屋根へ飛び移る。茶々丸を所謂お姫様だっこで抱えて走る。

「あの……士郎さん。私は大丈夫ですから降ろしてください。」

「いいから、大人しくしてろ。聡美ちゃんに診てもらうから」
「しかし、私はその……機体（ボディ）が重いですし……。」
「大丈夫だって。」

……うん。確かに重い。
魔力で追跡されないように魔法を使わず、気で身体を強化して運んでいる。
しかし女の子にそんなことは口が裂けても言えない。

「……士郎さん」
「え？何？何だい茶々丸！？」
思考を読まれたかと、少し動揺してしまった。
「ネギ先生は……なぜ私に向けた矢を戻そうとしたのでしょう？」
……ああ、なんだ。そんなことか。ふー、焦った。
「簡単なことさ。アイツにとってお前は『生徒』なんだからな。」
「……理解できません。
生徒である以前に、私は先生にとって敵のはずです。」
「敵である以前に生徒なんだよ。アイツにとってはな。」

『……ネギ先生。ネギ・スプリングフィールド……』

小さくそう呟いた後、聡美ちゃんの居る研究室に着くまで、
茶々丸はずっと何かを考えていたようだった。

◇――――――◇――――――◇

ネギと明日菜が茶々丸を襲撃した翌日。土曜日。
麻帆良大学近郊の喫茶店に茶々丸はいた。

「ネギ先生……」

「茶々丸、ここにいたか」
そこへエヴァンジェリンがやって来た。

「昨日の学園長（じじい）の話だがな……桜通りの件を感づかれたようだ。
釘を刺された。やはり次の満月まで派手に動けん。まあ、坊やが動けば
こちらも対処はするが……どうした？　茶々丸。」

・　・　・

『あの、士郎さん……今日の事はマスターに報告するべき…でしょうか？』
『……なんでそんなこと聞くんだ？』
『ええと……その……』
『…お前が言いたくないなら言わなくてもいいんじゃないか？
言いたくなったら言えばいいさ』

・　・　・

「昨日から様子がおかしいが…どうかしたか？」
「……いえ、何でもありません。」
「ならいい。そのコーヒーもらうぞ。」
主人に忠実なロボの従者は嘘をつく。そしてその主人は顔を顰めた。
（……不味い。）
正確にはそのコーヒーが特別不味いわけでも、安物なわけでもない。

（……くそ。いつもアイツのコーヒーを飲んでいたから……）
「…マスター。士郎さんのコーヒーが恋しいのですか？」
「……誰が。」
そう言ってエヴァはコーヒーをテーブルに戻した。
（そろそろ仲直りしてくださらないでしょうか……。）
「……？」
「どうした？」
（気の所為でしょうか。
今カメラの端に、空を飛ぶネギ先生の姿が見えた気がしたのですが……。
画像もブレていてよくわかりません。）

それは見間違いではなかったりする。
「うわああ～～～～～ん！！！」
ネギは、麻帆良から逃げ出した。

◇――――――◇――――――◇

「何か、悩み事があるようでござるな。」

「ネギ坊主、しばらく一緒に修行でもしてみるか？」

第２５話　桜通りの吸血鬼？（後書き）

～補足・解説～

・アスナさん、グッジョブです。

・「あぶぶぶーーーーーーーっ！！」をリピート再生していました。

・・・・・・。茶々丸が変わっていく・・・・・・。何も言うまい。

・「本気デ愛想ガ尽キタンナラ、トックニココカラ追イ出シテルダロ。

アリャア意地張ッテルダケダゼ、ケケケ。シバラクホットケヤ。」

チャチャゼロが一番の常識人になりつつある。

・カラダ・ハ・ツルギ・デ・デキテイル

やっぱコレでしょう。始動キーなんてモンは極論、自分にとって一番しっくりくる、「力ある言葉」ならなんでもいいんですから。弐集院先生の始動キーみたいなもんです。

・『無銘の刀工（ネームレス・ソードメーカー）』！

１０１話　設定１　士郎のステータス（＋１０．１２／１６　改訂）を参照。

・『……ネギ先生。ネギ・スプリングフィールド……』

・『あの、士郎さん……今日の事はマスターに報告するべき…でしょうか？』

・主人に忠実なロボの従者は嘘をつく。

ネギ×茶々丸のフラグを折るつもりはないので。士郎と茶々丸はあくまで家族です。

オリジナル魔法2号が登場。なんか、写輪眼のカ○シみたいになってきた・・・。
ちなみにオリジナル魔法3号も作ったよ！修学旅行編か学園祭編のあとに出る予定。

それでは次回！！

第２６話　桜通りの吸血鬼？（前書き）

今シリーズの中間地点。次回からバトルバトルバトル！！はい！
バトル描写が下手クソな俺！！てゆーかまともに描写してないぜ！！

おっと脱線。今話の話をしなければ。でも特に言うコトないやｗ

それではどーぞ！

第２６話　桜通りの吸血鬼？

「ありがとう長瀬さん。僕……なんとか一人で頑張ってみます。」

――◇

◇――――――◇――――――

走る。

「おはよーございます！」

走る。

「おはよーございます！今日も元気にいきましょう！！」

校門を抜けてなお、走る少年。ネギ・スプリングフィールド。

（こないだ僕の方から茶々丸さんに仕掛けたことでエヴァンジェリンさんが
報復に来るのは間違いない。でもこれ以上周りに迷惑はかけたくない……！）

そしてネギが考えついた作戦は――――「果たし状を渡すこと」。
上手く相手が応じてくれれば、決戦までに襲撃される危険はなくなり周りに
被害も出なくなる。

しかしそれはあくまで「上手くいけば」の話。
その話に乗ったフリをして油断しているところを襲撃してくるかもしれない。
そもそもネギは茶々丸を2対1で襲撃した。
そんな相手の持ちかけた話に「闇の福音」が応じるはずがない。
――――だからこその幸運。
茶々丸がネギから襲撃を受けたことを隠しているうちは、この作戦が成功する
可能性はゼロではない。
…それはネギの知らないことだが。

――――ガラッ！

「おはようございます！エヴァンジェリンさんはいますかっ！！」

――――あ、ネギ君おはよー
――――お、おはよーございます…
――――おーす？
「エヴァンジェリンさんならまだ来てないですが」
「なんや風邪で来られへんて連絡がー」
「へ……あ、そうですか……。」

（……て、おかしいな……？
魔法使いな吸血鬼が風邪なんてひくワケないよなぁ。でも仮病で登校の呪いから
逃れられるかな……？）
――――――よし。
「行ってみよう！」
「あっ、ネギ？どこ行くのよ」

明日菜が聞くが、ネギは既に走り去ってしまっていた。
（何かアイツ妙に元気ねー…エヴァンジェリンのことは大丈夫なの？）
（兄貴、昨日帰って来てから顔つきが違ってたからなー。
何か考えついたんスかねー）

そしてそんなネギを見て暖かい笑みを浮かべる生徒がひとり。
「ニンニン♪」

そしてネギは朝のＨＲをすっぽかした。

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

「こんにちはー、担任のネギですー。家庭訪問に来ましたー」
玄関のベルを鳴らす。
「はーい、ちょっとお待ちをー」
（…あれ？　今の声、どっかで聞いたよーな……？）
――――ガチャッ
「おっす。よく来たなネギ」
「――――……え、士郎さん？」

「――――うわっ中はスゴくファンシーだ……」
「はは、俺がここに初めて来た頃はもっとすごかったぞ？」

以前はエヴァと茶々丸（＋チャチャゼロ）しか居なかったためリビングがぬいぐるみ
だらけでも問題なかったが、士郎が暮らし始めてリビングを使用す

る人数と頻度が
増えたため、以前よりはマシになったのだ。
ついでにいうとこの家に来た当初は、士郎は人形だらけの地下室に
放り込まれた
という。

「というか…士郎さんがエヴァンジェリンさんの従者だったなんて
…驚きました」
「あー、言ってなかったからからなぁ……それにまだ正式に従者に
なったわけじゃ
ないし……実を言うと今、アイツとはケンカ中でな?」
「え……ケンカ、ですか?」
「ああ、だから俺がお前を襲うなんてことはないから、そこは安心
していい」
「そ、そうですか」
(よ……よかったーーー!これ以上敵が増えたらどうしようと思っ
たよ!!)
「あ・そうだ。士郎さん、なんで今日エヴァンジェリンさんは学校に
来ないんですか?」

「マスターは病気です。」
水の入ったポットとカップ、風邪薬をトレイで運ぶ茶々丸が奥から
出てきた。
「あ、茶々丸さん……き、昨日はどうも…すみませんでした!」
「……いえ。それより、学校の方には連絡を済ませたハズ
ですが。」
「え。ま、まさか……。
不老不死である吸血鬼が風邪なんてひくワケないでしょう」
「――――その通りだ」
寝巻き姿の吸血鬼・エヴァンジェリンが階段の手すりに座っていた。

「よく一人で来たな？魔力が充分でなくとも貴様一人くびり殺すくらい
わけないのだぞ？」
「っエヴァンジェリンさん！！」
――――バッ！
「……何だそれは？」
「は・果たし状です！僕ともう一度勝負してください！！
それと授業にも出席してください！このままだと卒業できませんよっ！！」
「出席しても呪いの所為で卒業できないんだよ」
（結局、呪いに行き着くんだよなあ。）
（ええ。残念ながらマスターと先生の話し合いは平行線を辿るだけです。）
「そういうことならここで決着をつけるか？　私は一向に構わないが……」
「……いいですよ。その代わり、きちんと授業に出てもらいますからね！」
「ああ、マスター。先生……」
場を収めたい茶々丸だが、この空気の前に何もすることができない。
そして。エヴァンジェリンが――――ニイッ、と笑った。
「！　マスター！！」
エヴァンジェリンは意識を失い、前のめりになって手すりから落下し――――
「フゥ、この意地っ張りは。」
落下する寸前に、いつのまにか背後に回っていた士郎に抱きとめられた。
「？　？？」

「先生、マスターは魔力を封じられている間は元の肉体である１０歳の少女と
同様の体力しかありません。マスターは本当に病気なのです。」
「ええっ！？」

◇――――――――――◇――――――――――◇

エヴァは士郎によって2階のベッドに運ばれた。
「ハア…ハア……」
（エヴァンジェリンさん、苦しそうだ……）

「ネギ先生」
「はい？」
「……申し訳ありませんが、マスターを見ていていただけませんか。
私はツテのある大学の病院から良く効く薬をもらって来ますから」
「ええっ！！ぼ、僕ですか！？士郎さんがいるじゃないですか！！」
「その、色々と事情がありまして……。士郎さんは現在キッチンでおかゆを
作っています。士郎さんには大学病院のツテがありませんし、私の名前を出して
も時間がかかってしまうかもしれないので、私が病院に行くしかないのです」
「で、でもイイんですか？僕に任せて」
「ハイ。先生にならお任せできると判断します。」
「わ、わかりました。なるべく早く帰って来てくださいねー」
そうして茶々丸は1階に下りていった。

（…僕は敵のハズなのに……。何考えてるんだろあの人？　いやロ

ボ？）

「ううっ、ゲホッゲホッ」
「ああっ大丈夫ですか！？」

～～ネギ先生のエヴァンジェリン看病記～～

「ハアハア……のどが……」
「のどが渇いたんですね！待っててください！！」

「うう…あつい……」
「ああっスミマセン　窓から日光が！」
（やっぱ吸血鬼って日光ツライんだ……）

「ハァハァ　寒い……」
「ああっどうしよう　汗でパジャマぐっしょり！
着替えさせないと……」

・
・
・

「ふう……なんとか落ち着いた。」

（それにしてもヘンなことになったなー。対決するつもりが看病になっちゃった）

寝息をたてて眠るエヴァンジェリン。看病の甲斐あって大分ラクになったようだ。

（寝てるとこんなにカワイイのになあ。
どうして吸血鬼なんてやってるんだろう……）

真祖。今では失われた秘伝の術式によって自らを吸血鬼と化した元・人間。
１０歳の少女が自ら吸血鬼になるとは考えにくい。
そしてなぜサウザンドマスターに呪いをかけられたのか。
二人はどんな関係だったのか。

（……なんか気になってきた。）

エヴァンジェリンの部屋を物色してみる。
「やめろ……」
「すっすいません！悪気は……って、あれ？　寝言？」
「サウザンドマスター……待て…やめ…ろ……」

（――サウザンドマスターの夢……？…そうだ。）

「――ラ・ステル　マ・スキル　マギステル。」
（女の子の夢を覗くなんて気が引けるけど……父さんの手がかりがあるかも）

「――夢の妖精　女王メイヴよ。扉を開けて夢へと誘え…」

◇――――◇――――◇

『危なかったなー、ガキ。』
『……。』」

『つーか、お前みたいなガキがこんなガケの側で何してンだ？』
『……お前は誰だ。何で助けた？」
『そんな警戒すんなよ。そうだ、メシでも食うか？』

『なあ……お前、私のモノにならんか？』
『オイオイ。それよりいつまで俺について来るつもりだ？俺について来たって
イイこたねえぞ。はやくどっか行けって』
『やだ。お前がうんと言うまで地の果てまで追ってやるぞ。』

『とうとう追い詰めたぞ千の呪文の男（サウザンドマスター）。この極東の島国でな。
今日こそ貴様を打ち倒し…その血肉、我がモノとしてくれる。』
『「人形使い（ドールマスター）」「闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）」「不死の魔法使い（マガ・ノスフェラトゥ）」エヴァンジェリン……

恐るべき吸血鬼よ。己が力と美貌の糧に何百人を毒牙にかけた？
その上俺を狙い何を企むのか知らぬが……。
諦めろ。何度やっても俺には勝てんぞ。』
『……貴様、その口調はなんだ？』
『いやー、偶にはこーいうノリもいいかなと』
『フン、フザけていられるのも今のうちだぞ？　行くぞチャチャゼロ！！』
『アイサー御主人！』
『えーとこの辺だっけ…』
『フ…遅いわ！私の勝ちだ――――――あぶっ！！？』
『あぷあぷ、落トシ穴ダ御主人！』
『見りゃわかるっ』
『ふはははは！中をよく見てみるがいい！！』
『な……私の嫌いなニンニクやネギ～～～～～！？』
『フフ…お前の苦手なモノは既に調査済みよ。うりうり』
『混ぜるなああ！あうっ、やめろぉ！！』

『アアッ、御主人ノ幻術解ケタ！！』
『わはははは、大人の姿から元に戻ったな。噂の吸血鬼がチビのガキだと知ったら
　みんな何て言うかな』
『ひ…卑怯者ーーーーーー！貴様は「千の呪文の男」だろ、
魔法で勝負しろーーーーーーーー！！』
『やなこった。俺は本当は5、6個しか魔法知らねーんだよ。
魔法学校も中退だ。恐れ入ったかコラ。』
『な……く、くそ！おいサウザンドマスター！！私の何がイヤなんだ！？』
『だから俺ガキには興味無いってば』
『歳なのか！？歳なら百歳越えてるぞ私！！』
『じゃオバハンだなー』
『オバハン言うなー！』
『落チ着ケヨ御主人。』
『……なあ。そろそろ俺を追うのを諦めて悪事からも足を洗ったらどうだ？』
『やだっ！』
『そーかそーかそれじゃ仕方ない。変な呪いかけて二度と悪さの出来ない体に
　してやるぜ』
『ば…馬鹿やめろっ！そんなふざけた魔力で変な呪文使うなっ！！』
『確か麻帆良のじじいが警備員欲しがってたんだよな……これでいいか。
　えーとマンマンテロテロ……』
『御主人ピーンチ！』
『た…助けて…やめろーーーーーーーーーーー！！！！』
『登校地獄（インフェルヌス・スコラティクス）！！』
『いやーーーーーーーーーーーーー！！！！』

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

「うわあああああああっ！！！！」

大声をあげてエヴァンジェリンは目覚めた。

「ハァ…ハァ……また、この夢か」

（くそ……ここ一年ほどは全く見なくなったというのに。最近頻繁に見るように

なってしまった……。……ん？）

エヴァンジェリンの隣で、ネギがうたた寝していた。

（何だコイツは。敵の前で眠るなど、殺してくれと言っているようなものだ。）

エヴァの視線はネギの隣のベッドデスクに移る。そこには飲み物とコップに風邪薬が

置いてある。

（……ちっ。私の看病をしていたのか……。）

「――はっ！？しまった寝てた……ってあれ！？起きて大丈夫なんですか

エヴァンジェリンさん！？」

「……ああ、もう平気だよ。……今日のところは見逃してやる。

風邪は治ったからもう帰れ。」

「あ……そ、そうですね。じゃあ果たし状も今日のところはナシってことで……。

それでは。」

（うわー、いろんなモノが見れちゃったなあ。アレが本当に父さんなのか

まだ確信できないけど……）

部屋を出て行こうとするネギを見て、エヴァは違和感を覚えた。
魔法使いは魔法を使用するのに「魔法発動体」という媒体が必要で、
ネギの
場合それは杖なワケで。
夢を覗いた時にも使っていたワケで。

「……待て貴様。何故に寝ながら杖を握っていたんだ？」

――――ぎくっ。

（まさか。）

「貴様……私の夢を……！！」

ネギから冷や汗が滝のように流れる。

「言え！何を見た！？どこまで見たんだ貴様ぁーーーーーーーーー！！」

「べっ別に何も……！！」

「ええい貴様らは親子揃って……！！……コロス。やっぱりここで殺す！！」

「え…うわぁーーーーーーー！？」

◇――――――――――◇――――――――――◇

「ただいま戻りました」
「おっ、おかえり茶々丸」

『わ――――――わ――――――――!!!!』
『ギャ――――ギャ――――――――!!!!!』

2階から響く騒がしい人声。

「……何かあったのですか？」
「あーーー……なんかネギのヤツがエヴァの夢を覗き見したらしい。」
「マスターがこれほど騒ぐということは……あの夢ですか」
「あの夢だろうな」

本人は秘密にしているつもりでも、
寝言で既に従者たちにはバレバレだった。

「でも、マスターが元気になったようでよかったです。」
「……ああ、元気だな。さっきまで弱ってたとは思えないくらい。」

『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック!!』
『ちょ……エヴァさん……!!』

「あ、あの馬鹿……!!」

――――バキィィィィン！
――――バキキキン!!
――――ミシミシッ！
――――ズドオォォォン!!!

――――直後。穴の空いた天井から、目を回したネギが落ちてきた
――――

「…う……う～～ん……」

（……ご愁傷様です、マスター……）

《……降りて来い、エヴァ。》

その日エヴァンジェリン邸に、怒気を纏った鬼神が降臨した。

『――――――ビクッ！！』

1階から彼女の姿は見えなかったが、その怯えは空気を通して伝わった。

《――――降りて来いっつってんだろこの吸血姫ィイイイいイイいい！！！！》

（屋敷を壊すのはやり過ぎですマスター……。）

修理するのは士郎だから。

◇――――――――――◇――――――――――

――◇

エヴァンジェリン邸、1階のリビングのソファに座る人物が二人。
彼らは向かい合うように座っている。

「さて、何か言い訳はありますか御主人様？」
両手と足を組んで不機嫌を隠そうともしない士郎。

「……ない」
絶対に目の前の従者と目を合わせようとしないエヴァンジェリン。

気絶したネギは茶々丸が起こして学校まで付き添って行った。
本当は自然に起きるまで寝かせてやりたかったのだが、授業があるらしい
ので無理やり起こした。で、心配だと言って茶々丸が付き添う形になった。
天井もさっさと直して破片なども掃除した。
そしてエヴァにはちゃんと厚着をさせてから説教中。
（説教しないという選択肢は存在しない）

「いくらなんでもやり過ぎ。次回からは絶対に家を壊さないこと。
以上。
さ、もう寝ろ。風邪がぶり返すぞ。」

「……。」

「……どーした？もしかして、また体調が悪く――――」

「……どうして、お前じゃなくて、あの坊やが私の看病をしていた

んだ？」

「どうしてって」

「……看病もしたくないくらい、私に……愛想が、尽きたか……？」

エヴァはそう言って俺を見つめる。

――――――沈黙がこの場を支配する。

（……コイツ、そんなこと考えてたのか……。）

……。

「――――――ぷっ」

「！？」

「ぷっ……くっ、あはははははははははははは！！！！」

突然士郎は笑いだす。

「……なっ、何が可笑しい！！！」

「…だ……だって、キャラが合わねえって……！そんなにしおら

しいお前なんて
ありえないだろ！！！！」

そう言って腹を抱えて爆笑する。

「な……！こ、こっちは真剣に悩んでいたんだぞ！！」
「く、ははは……、あーーーくくく……。だ、大丈夫。こ、こっちが遠慮
してただけだから……。ぷっくく」
「…遠慮、だと？」
「――ああ。最近全く口をきいてくれなかったからさ、俺に看病なんかされたく
ないと思ってな。」
「――――――……！」
「？？　エヴァ？」
「……。」
「ん？」
「……そんなことは…ない。」

（――――ク。全く、どうしてこのお姫様はこう素直じゃないのかね？）

（ヤレヤレ、コレデヤット仲直リニ一歩前進カ？）

チャチャゼロに温かい目で見られていることに気づかない二人だった。

◇――――――◇――――――◇

「それにしても、あのエヴァンジェリンを授業に来させるなんてスゴイじゃない。」

あの家庭訪問の後。エヴァンジェリンは真面目に（？）授業に出席するようになった。看病してくれたことに多少の恩を感じたようだ。

「はい。それもアスナさんやカモ君や長瀬さんのおかげです。」

「ん？楓ちゃんが何かやったの？」

「え。い、いや、何でもないです」

一緒に修行して一緒にお風呂に入ったとは言えまい。

お年頃な少年には、年上のお姉さんと密着して風呂に入ったなどとは言えまい。

結果的には、その修行生活でネギは成長できたのだが。

（うーん、俺っちにはあのエヴァンジェリンがそう簡単に改心するとは
思えねーんだけどなあ。）

――――ワイワイ、ガヤガヤ。

帰宅中のネギ達の前に、生徒たちの人だかりができていた。

「どーしたんですか？」

「あ…せんせー」

「知らないの先生？　今日の夜８時から１２時まで一斉に停電するんだよー」

「学園都市全体の年２回のメンテです。」

人だかりは、停電中の明かりを買おうとする生徒たちの混雑だった。

「あ、職員会議で言ってたかも。
そうだ、それで僕、寮の見回りをしなきゃいけないんだった。」

忘れんなよネギ少年……。

「アスナー。アスナの分のローソクも買っとこーか？」

「いや、８時だったら私寝ちゃうからいーや。」

「じゃ、僕はここで。」

「ほななー、ネギ君♪」

「がんばんなー。」

――――◇――――――――――◇――――――――――

放課後の麻帆良女子中、コンピュータ室に二人の少女がいた。
「……どうだ？」
「ハイ。問題ありません。ファイアウォールやセキュリティレベルの変化も
ありませんし、こちらの計画が漏れている様子はありません。
予定通り実行できます。」
「フ、そうか。坊やの驚く顔が目に浮かぶな……クッハハハ……」
「しかし、本当によろしいのですか、マスター？結界を停止させれば、麻帆良は
襲撃に対して無防備になりますが……」
「フン、その程度の事に対処できぬヤツらだと思うか？むしろ好都合。
魔法先生たちは襲撃に備え麻帆良の端へ、我々は麻帆良の内だ。
これで坊やに助けは来ない。計画に変更はない。」
「了解しました。」

◇――――――――――◇――――――――――◇

ＰＭ：７：５９

『――こちらは放送部です。これより学園内は停電となります。』
『学園生徒の皆さんは極力外出を控えてください。』

『――こちらは放送部です。これより学園内は停電となります。』

『学園生徒の皆さんは極力外出を控――――――ザザッ、ブツッ』

ＰＭ：８：００

――――――――――――フッ

「わーーーー？」

「うわー停電始ったー」

「学園結界への電力停止・予備電源への移行を確認。予備システムへの
ハッキング開始。……成功しました。これで……」

「…なんか不気味な空ねー」

「そやなー」

「――――――マスターの魔力は戻ります。」

「じゃあ私、寝るねこのか。」

――――――――――――学園都市は眠り。

「うん、おやすみアスナー」

――――――――――夜の女王が目覚める。

『――――――さあ。始めようじゃないか、坊や。』

今宵、「闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）」が、復活した。

第２６話　桜通りの吸血鬼？（後書き）

～補足・解説～

・《……降りて来い、エヴァ。》

・『――――――ビクッ！！』

・《――――降りて来いっつってんだろこの吸血姫ィイイイいいい！！！！！》

ギャグ補正時、士郎がキレると誰も勝てません。

・チャチャゼロに温かい目で見られていることに気づかない二人だった。

エヴァンジェリン家の影の保護者、その名はチャチャゼロ。

・「しかし、本当によろしいのですか、マスター？結界を停止させれば、麻帆良は

襲撃に対して無防備になりますが……」

この「原作より麻帆良は危険地帯」という設定を忘れてました。

ええ、忘れてました。

「そんな設定あったっけ？」という人は第４話と第５話を読み返してください。

今回の補足終了。それでは次回！！

第２７話　桜通りの吸血鬼？

世界樹を保持する日本最高クラスの霊地であり、関東魔法協会の拠点である
「麻帆良学園」。
年に１０数回の頻度で、この土地は
その価値ある霊地を狙う者、協会に恨みを持つ者の襲撃が後を絶たない。
だからこそ、今回の停電においても予備電源を用いて結界を維持し続けていた。
だが現在、それは破られた。
今夜はまだ敵の接近は確認されていないが、今、麻帆良は超・危機的状況にあるといえるだろう――――――――

『弐集院君！緊急回線を回してくれい！！学園結界が停止した！！』
『――――！！わ、わかりました！！』
『明石君、復旧にはどれくらいかかる！？』
『……駄目です！結界へのハッキングではなく予備電源の電力供給そのものが
阻害されています！！……学園長、これは下手な方法を取るより、正規の方法
で電力を供給した方が早いかと……！！』
『――――つまり、通常通りに電気系統のメンテナンスを終え、その後に通常電源を
復旧する、ということかのう？』
『そうです！通常（それ）電源への移行を阻害するプログラムは

組まれていないようです！！』
『……あいわかった！ならばそれで頼むぞ明石君！！出来る限り早く頼む！！』
（くっ……まさかエヴァがここまでするとはのぅ……！
最近は随分と丸くなったと思っておったのじゃが……！！）
『学園長！全魔法先生との念話回線繋がりました！！』
『うむ！皆の衆！！異常事態により緊急招集をかけさせてもらう！！
学園結界が停止した！！これより諸君らには結界が復旧する０時まで学園を
守護してほしい！！
子供たちに傷を負わせてはならん！！この学園と生徒たちを護るのじゃ！！』
『――――――はっ！！！』

◇――――――――――◇――――――――――◇

『…ネギ・スプリングフィールド……。わがあるじ、
エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルさまがきさまにたたかいをもうしこむ
……。』
「ま・まき絵さんっ！？」
「！！　兄貴、あの娘エヴァンジェリンに噛まれたことあんだろ！
真祖に噛まれたら操り人形だぜ！！
――――――やっぱあいつ、諦めてなかったんスよ！！　姐さん

を呼ばねえと！！」

「――――いや、僕一人で行く。もうアスナさんに迷惑かけられないよ！」

「な……なに言ってんだよ兄貴！
パートナーがいなきゃ勝てないってわかっただろ！？
一人であんな化け物に勝てるワケねえ！！」

「大丈夫、こんなこともあろうかと準備はしてたんだ！」

ネギは建物の陰から道具袋（ｉｎ魔法道具（マジックアイテム））をドラ○もんよろしく取り出した。

「これは僕の問題なんだ。もうアスナさんには頼れないよ！」

「相手はあのエヴァンジェリンなんだぜ！？　せめて姐さんに連絡を！！」

「やだ！！」

「……このわからず屋。もう知らねえよ！！！」

――――そう言って、カモミールはネギから離れて行った。

――◇

◇――――――――――◇――――――――――

「さて。私達にも招集がかかったワケだが、どう思う？」

巨大な時計塔の天辺に立つ二人の少女。
魔眼の射手、龍宮真名。神鳴流剣士、桜咲刹那。

「どう、とはどういうことだ？」
「今回の結界停止のことさ」
「……何か知っているのか？」
「おや、まだ感づいていないのか。私達であればこそ気付けるというのに。」
「勿体ぶるな。さっさと話せ」

真名は仕事道具の入ったギターケースを肩から下ろす。
「最近、ネギ先生とエヴァンジェリンの間に何かあったみたいじゃないか。」
「……まさか、エヴァンジェリンさんが結界を？」
「そうすれば彼女には全盛期の力が戻る。結界が復活する０時までに何かを
やろうとしているんじゃないか？」
「……確かに、茶々丸さんなら結界にハッキングできるだろうしな……」
「お前の愛しの人はどうなんだろうな？」
「……！！」
（士郎さんもこの件に関わっているのだろうか……？）

――――――ぞわっ

「っ龍宮！」
「わかっている」

真名はギターケースからライフルを取り出し、スコープを覗きこむ。

「残念、敵襲だ。こういう時に限って来るのさ、ああいう奴らっていうのは」

やって来たのは悪魔の軍勢。飛来し、地を駆けてやって来る。

「西からではないな、霊地目的の悪魔か。」

基本的に、霊地を狙って襲撃してくるのは西洋魔術師、協会を狙ってくるのは
西日本の陰陽符術師であることが多い。

刹那の纏う雰囲気が鋭くなる。

「龍宮。援護を頼む。私は前に出る。」

「了解だ。今回は高い給金が貰えそうだからな。出来る限りサポートするよ」

「――――――疾(シ)ッ！」

刹那は前方に駆け、真名はライフルに弾を籠める。

――――――別の地点では。

『二人共、あまり私から離れるなよ。』

『はい、先生』

『お姉様、私、役に立つでしょうか……？』

『愛衣、もっと自信を持ちなさい。貴女なら大丈夫です。』

『は、はい。』

『神多羅木先生。こんな夜中にサングラスをしていてちゃんと見え

るのですか？』
『気にするな、葛葉。戦闘に支障はない。これは俺のポリシーだ』
『はあ、高畑先生も居ないのに大丈夫ですかね……』
『そんな弱気では出来ることも出来ませんよ、瀬流彦先生』
『しかしですねシスターシャークティ、僕は敵を倒すことには
向いてないんですよ？』
『警備向き、なのでしょう？ならばそれで生徒たちのいる場所をしっかり
守ってください。敵は私が倒します。士郎君に貰った「黒鍵」を試す
いい機会です。』

――――――『神鳴流剣士、桜咲刹那。参る！』
――――――『メイプル・ネイプル・アラモード！』
――――――『ディク・ディル・ディリック・ヴォルホール。』
――――――『黒鍵・起動。』

闘争が、始まる。

◇――――――――――◇――――――――――

――――◇

「――――ええっ！？　今なんて言ったのエロオコジョ！！」

――――ガンッ！！

「～～～～～……！！」

二段ベッドの上に寝ている明日菜は頭を天井に打ちつけてしまう。
頭を抱えて痛みを堪えている。

（なにやってんスか姐さん！このか姉さんが起きちまうよ！！）
（ううぅ…わかってるわよぉ……！）

（てワケで、エヴァンジェリンの奴やっぱ諦めてなかったんスよ！）
（で、ネギは一人で行っちゃったの！？）
（そーなんだよ。もう姐さんには迷惑かけらんねえって意地張っちゃってさ！！）
（……！　も～～あのバカ！！
子供（ガキ）が他人の迷惑考える必要なんてないっての！！
このままじゃ前の二の舞じゃない！！！）

そう言ってベッドを下りて着替え始める。
「行くわよ、カモ！！」
「合点、姐さん！！」

――◇――◇――◇――

――――射る。　射る。　射る。　射る。

士郎が立つのは学園都市の端。湖に架かる橋の門の上。

頭蓋を、喉を、心の臓を、腹を貫く数多の矢。

学園に迫る黒い軍勢を撃ち落とす。

我が骨子は捻れ狂う。

「――――――I am the bone of my sword.」

音速の矢を避ける光速の悪魔に。

「この矢を避けることは敵わない。必ず貴様を喰らい尽くす。――――20秒だ。往け、赤原猟犬（フルンディング）！！」

ただの矢では貫けぬ巨塊の悪魔に。

「貫け――――――――偽・螺旋剣（カラドボルグ）ッ！！！」

そして。

「壊れる幻想（ブロークン・ファンタズム）」

強大な神秘がその存在を歪めて爆発する。

宝具を喰らった悪魔たちが周囲を巻き込んで焼けてゆく。

「とっとと来いよ。こっちは時間がないんだ。

ああ――――――安心しろ。全員滅ぼしてやるから」

そう呟いた彼の目は、鷹のように鋭い光をたたえていた。

「露払いはやってやる。思う存分やれ。」

「ケケケ。」

◇――――――――――◇――――――――――◇

「あはははははははは！！！！！」

マントをなびかせ、吸血姫は空を駆ける。

彼女の視界に映るのは、彼女を封印した男の息子。彼女が愛した男の息子。

「どーした坊や！？逃げてばかりじゃないか！！」

「くっ……！」

「まあ、逃げる以外に出来ることなどないだろうがな！！

リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！魔法（サギタ・マギカ）の射手・連弾（セリエス）・氷（グラ）の17矢（キリーアス）！！」

「うあっ！」

氷の矢を間一髪で躱す。

（まだだ……もう少し、あの場所まで行ければ……！！）

ネギの進行方向の先に、湖に架かる橋が視界に入る。

（あの橋は学園都市の端……学園の外へ逃げる気か！？）

「――――させんよ！　リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！
来たれ氷精　大気に満ちよ。白夜の国の凍土と氷河を！
――――――――こおる大地！！」

「く――――うわああっ！！」

大地が凍り、地面から発生する氷柱がネギを襲う。当たりはしなかったものの、
その強大な魔力の余波で吹き飛ばされる。

杖から振り落とされ、勢いそのままに橋に転がり落ちるも、
ネギは杖を手放さない。

「なるほど。私は呪いでこの学園都市から出られない。ピンチになれば
学園の外に出ればいい、か……以外にセコイ作戦じゃないか、先生？」

エヴァンジェリンがネギの前方に降り立つ。従者の茶々丸と共にネギへ迫る。

（妙だな……。襲撃が来る危険があるというのに、何故この付近に
魔法使いが配置されていない？）

「うっ……ぐっ」

ネギの呻き声を聞き、思考をやめる。

（ま、居ないのなら好都合。邪魔されないうちにとっとと終わらせよう。）

「これで決着（ケリ）だ、坊や。」

（――――――――――今だ！！）

瞬間。エヴァンジェリンと茶々丸の足元が光りだす。

「……！」

「なっ……！これは……捕縛結界！？」

魔方陣から現れた無数の光の帯が二人を拘束する。

十二星座の紋様を刻んだ魔方陣、「捕縛結界」。現在のネギが使用できる最高クラスの拘束魔法であり、たとえ真祖であろうと簡単には抜け出せない。

「や……やったーーーー！！　もう動けませんよエヴァンジェリンさん！！

僕の勝ちです！！さあ大人しく観念して、悪いこともうやめてくださいね！！」

勝利を確心したネギは興奮して歓喜し、対するエヴァンジェリンは呆然としている。

――――数秒後、彼女が口を開いた。

「…やるなあ、坊や。感心したよ。」

いつもの嫌味でも皮肉でもない。彼女は本心から、ネギに称賛の言葉を贈った。

格上の相手と闘うとき、どう足掻いても相手の力量に迫れないのなら、相手を
自分の有利なステージに引きずりこむことが効果的だ。
しかし見習い魔法使いのネギではそれでもエヴァンジェリンとの圧倒的な
実力差が埋まらない。
ならば答えは「戦闘を避ける」こと。エヴァンジェリンを戦闘行動不能状態に
してしまえばいい。
そしてネギは橋の上に捕縛結界の魔方陣――罠を仕掛けた。
サウザンドマスターの落とし穴から得た着想だった。

「ふ……アハ……アハハハハハハハハ！！！」

突然、エヴァンジェリンが笑いだす。

「な、何がおかしいんですか！？」

「く……先生、この前も言ったよな？
この程度で……勝ったつもりなのかと。」

「――――――――え？」

「呪いに縛られ、結界に封じられ。１５年の苦渋を舐めた私が、この類の罠に
なんの対処もしていなかったと思うか？――――茶々丸。」

「――――はい、マスター。結界解除プログラム始動。
……すみませんネギ先生」

茶々丸の機械の耳が変形・展開し、駆動音を鳴らす。途端に。

――――――――パキッバキ……！

「な……え！？」

エヴァンジェリンと茶々丸を縛る光の帯が、音をたてて砕けていき――――

「――――この通りだ。」

――――――――――完全に砕け散った。

「…え……そんな……ウソ……！！！」

捕縛結界（きりふだ）が破られた今。ネギにはもう、為す術はなかった。

――――◇

◇――――――――――――◇――――――――――――

「ものみな焼き尽くす浄化の炎、破壊の王にして再生の徴よ。
我が手に宿りて敵を喰らえ。紅き焔（フラグランティア・ルビカンス）！！」

魔法拳士であるガンドルフィーニ、近接操影術の使い手である高音を援護するべく
放たれる愛衣の「紅き焔」。数体の悪魔が火炎を受けて吹き飛ぶ。

「愛衣！もっと派手な魔法を使っても構いません！！私も先生も、貴女の魔法
ごときの巻き添えは喰らいませんわ！！」
「は、はい！！」

絶え間なく動き続け敵を狩るガンドルフィーニ。
鉄壁の盾と17の使い魔で敵を屠（ほふ）る高音に、二人を援護する愛衣が敵を焼く。

「……え……？　あ、アレは……！？」
「どうしました！？　愛衣！！」
「お姉様……あれ……」
「――――――な……！！」

「先生！！」
「どうした、高音君！！」
「あれを――――――……！！！」

空を蹂躙するのは巨大な悪魔。

「馬鹿な……！　あれは、『動く石像』！？」

ガンドルフィーニが驚愕の声をあげる。

建造物よりも大きな巨体と強大な力を持つ悪魔、「動く石像」。
それが、４体。
麻帆良学園には今、それらに対抗できる魔法使いは少ない。圧倒的に足りない。

学園の危機は、確実に大きくなっていった。

第27話　桜通りの吸血鬼？（後書き）

～補足・解説～

・『士郎君に貰った「黒鍵」を試すいい機会です。』
シスターシャークティの育成計画。
・十字架というシールドビットで防ぎ、黒鍵というソードビットで攻める。
　そんなヒトにしたいです。わくわく。フフフのフ。

それでは次回。

第２８話　桜通りの吸血鬼？

ぽーん。

「ああっ！？」

茶々丸に奪われた杖が、エヴァンジェリンによって湖に投げ捨てられてしまった。

「ひ・ヒドイですよエヴァさん！ホントなら僕が勝ってたのにーー！！

も、もう一度勝負してくださーーーい！！」

――――パシンッ！

「一度戦いを挑んだ男がキャンキャン喚くんじゃない！！

この程度で負けを認めるのか！？

貴様の親父ならこの程度の苦境、笑って乗り越えたものだぞ！！」

エヴァンジェリンが、泣き喚くネギの頬を叩いた。

「……！　…う……。」

「――――だが、よくやったよ坊や。一人で来たのは無謀だったがな。」

「さて、血を吸わせてもらおうか。」

「コラーーーッ　待ちなさーーーーい！！――――――――――カモ！！」

「合点姐さん！俺っちの力を見せてやるぜ！！」

ネギを救うべく明日菜とカモミールが駆け付ける。

必要なのは光。

停電により完全に光が失われた世界。なればこそ。

どんな僅かな光でも、敵の目を眩ませることが可能となる。

使用するのはマグネシウムリボンとライター。

剋目せよ。我こそは由緒正しきオコジョ妖精。

化学の炎よ、我が手に宿りて敵を喰らえ。

ライターでマグネシウムリボンに火を点ける。

化学反応により生まれる閃光。

「オコジョフラーーーーーッシュ！！」

まずは茶々丸のカメラを、潰す。

――◇――――――――――◇――――――――――◇――

「ハア…ハア……。……大方斬り伏せた……か？」
刹那が息を切らせて周りを見渡す。いま自分の目の届く範囲には、悪魔はもういない。――――地上には。
「――――――――――！！！」
強大な力を感じ取り、上を見上げる。
「な……！こんな……このクラスの悪魔がなぜ……」
空を駆けるのは、ガンドルフィーニ達が目撃した「動く石像」の悪魔たち。
「――――マズイ……ッ！！」
（このままでは、学園内に……！！）
悪魔は真っすぐに学園都市へ進んでいる。
（龍宮の銃弾ではあの悪魔たちは倒せない。ならば――――私がやるしかない。）
夕凪を握りしめ、刹那は覚悟を決める。
「神鳴流決戦奥義！　――――真・雷光剣！！」

極大の雷が落ち、衝撃が辺り一帯を吹き飛ばした。

――◇

◇――――――――◇――――――――

カモが茶々丸のカメラを潰し、その隙に明日菜がエヴァンジェリンに飛び蹴りを
当てる。エヴァンジェリンが転がっているその隙に、ネギを連れて離脱した。
血を吸われる直前の、絶対絶命のピンチだった。

「ごめんなさいアスナさん、僕…アスナさんに迷惑かけないようにって
一人で頑張ったのに……ダメでした…。」

「バーカ。子供一人で何が出来るってのよ。もっと年上を頼りなさい！」

「ス、スイマセン」

「謝んなくていいんだってば。私が助けに来たくて来たんだから、迷惑でも
なんでもないの！さ、あの問題児をチャチャッとなんとかするわよ！！」

「――――――……お願いしますアスナさん。僕、あの人に勝たなきゃ。」

「よっしゃキタァ兄貴！一発いくぜぇっ！！！」

「へ？」

「まぁ、この場合はしょうがないわよね……。
緊急事態だし、相手は１０歳だし。」

「え？」

明日菜の両手が、ネギの頬に触れて――――……ネギの唇に、口づけをした。

《――――――仮契約（パクティオー）！！》

「兄貴、この前みたくおでこにキスじゃあ契約もチカラも中途半端なんだよ！
でも今回はちゃんとイケるぜ！！
ってワケで――――――――――――契約、更新！！」

――◇――――――――◇――――――――◇――

真・雷光剣を放ち、刹那は膝をつく。

（くそ……気が、足りない……！）

悪魔の軍勢の殲滅戦を経て、刹那の体力と気は酷く消耗していた。
退魔の剣術・神鳴流の決戦奥義は出力不足に終わり。
刹那の前には、雷で翼を失った悪魔が一体、生き残っていた。

「私が時間を稼ごう。さっさと逃げろ。」

いつの間にか、刹那の前で真名が弾倉を交換していた。

確かに、彼女ならばこの悪魔を相手に時間を稼ぐことはできるだろう。

「……だが――――――」

「今のお前に何ができる？　足手纏いはさっさと言うとおりにしてくれ。
安心しろ。この程度の修羅場なら何度も通っている。」

（時間と装備があればこの程度の悪魔なんでもないが、生憎そのどちらもない。
左目を完全開放すれば簡単に決着（ケリ）は着くが――――）

「元教え子に、そんな危険な真似はさせられないな。」

――――――キュオッ！！

空気を裂く独特の音。しかし、これだけでは終わらない。

――――――キュンッ
――――――――キュキュッ！
――――――キュオッ
――――――――キュッ！！
『――――ガッ――――……！！』

呻き声をあげ体制を崩す悪魔。拳が奏でる、戦列のメロディ。

「こんな時間に大勢で押し掛ける無粋な客には、早々にお帰りいただこう。
『右手に気』、『左手に魔力』。」

「咸卦法」。究極技法（アルテマ・アート）、気と魔力の合一（シュンタクシス・アンティケイメノイン）。
気と魔力、相反する二つのエネルギーを合成して強力な力を得る。
身体強化、物理・魔法防御、耐熱、耐寒、耐毒などの効果を持つ最強の肉体強化術。

「居合い拳」。無音拳。
目に見えない速度のパンチで拳圧を発生させ、それで相手を攻撃する。

それらを使う魔法使いは現在、この世界に一人しか存在しない。

――――――――――――ド　ゴン！！！！！！

鈍い音が響き渡る瞬間。それは戦いの終わりを意味していた。
大地には大きなクレーター、悪魔の腹には風穴が空いていた。

「さて、怪我はないかい二人とも？」

悪魔の体が消滅し、元居た世界へ還って行く。

――――――豪殺居合い拳。それを使えるのは。

「はい。大丈夫です……高畑先生」
「もう少し早く帰って来ても良かったんじゃないかな？」

学園広域指導員。魔法使い、タカミチ・Ｔ・高畑。

「ハハ、悪いね。でも、無事でよかった。転移魔法符８４枚分の価値はあったかな？
いきなり学園長から帰還要請が来たから驚いたけどね。」

（はちじゅ……っ！！？）

転移魔法符は一枚８０万円デース。８０×８４＝●●●●万円。

「ああ、もう他のところもあらかた片付いたみたいだね。引き続き警戒は必要
だろうけど――――お疲れ様、二人とも。」

「はい。ありがとうございます。」
「礼は要らないよ。代わりに報酬を貰うからね。」

「ああ、そうそう。ええと、ここからは……北西になるかな？　そ

っちにある
湖の橋には近づくな、だとさ。」

「？　なぜですか？」

「学園長が言うには……ケンカして仲直りさせる……とかなんとか」

「「？？」」

そう言ったタカミチの顔が僅かに笑っていたことに、二人は気づかなかった。

――◇――――◇――――◇――

「フ、これで2対2。ようやく正当な決闘というわけだな。ではいくぞ。
私が生徒だという事は忘れ、本気で来るがいい。ネギ・スプリングフィールド。」

「契約執行９０秒間！ネギの従者『神楽坂明日菜』！！」

ネギの声が合図となって、再戦の幕が開く。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！！」
「ラス・テル・マ・ステル・マギステル！！」
ネギは予備の杖を使って呪文を唱える。

「失礼しますネギ先生」
「わわっ！」
茶々丸の攻撃を明日菜が捌く。

ネギとエヴァは呪文を撃ち合う。ネギを潰すべく接近する茶々丸と明日菜が組み合う。
前衛二人の力は拮抗し、勝負の行方は後衛の魔法使いにかかっていた。

「魔法の射手・連弾・氷の１７矢！！」
「魔法の射手・連弾・雷の１７矢！！」

――――相殺。

「ハハ、雷も使えるとはな！だが詠唱に時間がかかり過ぎだぞ！！闇の精霊２９柱！！」
「にっ…２９人！？　く…　光の精霊２９柱！！」

――――相殺。

２種類の魔法の矢がぶつかり、弾け、周囲に魔力が迸（ほとばし）る。

「くうっ……！」
「アハハ、いいぞ！！よくぞついてきた！！」

（なんてスゴイ……！　父さんはこんな人に勝ったのか……。でも、僕だって！！）

「ラス・テル・マ・ステル・マギステル！　来たれ雷精　風の精！！」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！　来たれ氷精　闇の精！！」

「えっ……」

「フフッ」

（なっ……エヴァンジェリンのヤツ、あえて兄貴と同種の魔法を！？　撃ち合う気か！！）

「来るがいいぼーや！！」

「――――闇の吹雪（ニウイス・テンペスタース・オブスクランス）！！」

「――――雷の暴風（ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス）！！」

――――――ズドンッ！！！

暗黒の氷雪が吹雪き、雷電を纏った暴風が吹き荒（すさ）ぶ。

――――――オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ――――――

「どうした！？　この程度かぼーや！！」

「……ぐぅ……！！」

ぶつかり合う「雷の暴風」と「闇の吹雪」。徐々に、ネギの方が劣勢になってゆく。

（スゴイ力だ……。駄目だ、勝てない……！！）

『この程度で負けを認めるのか？』

『貴様の親父ならこの程度の苦境、笑って乗り越えたものだぞ！！』

（――――――――！！……いや、諦めない。もう逃げない！！！）

舞い上がる粉塵が、ネギの鼻孔を刺激した。

「は……？　――ハックション！！」

「な……なにっ！？」

――――――ド　オ　ンッ！！！！！

轟音と共に閃光が奔った。

「ネギ！？」

「マスター……！」

「……や、やったぜ兄貴！！あのエヴァンジェリンに打ち勝つなんて、
　信じらんねーーーー！！！」

ネギの魔法の威力が増したのは、くしゃみによる魔力の暴発（ブースト）。
強化された「雷の暴風」がエヴァンジェリンを直撃した。

「……やりおったな小僧……。フ、フフ……流石は奴の息子だ……」

衣服こそ吹き飛んだものの、エヴァンジェリンは無傷だった。

「…この私が打ち負けるとはな……。だが、まだ決着はついていないぞ？」

「くっ……！」

「……！いけない！！マスター戻って！！」

――――――――バシャ
――――――――バシャ！
――――――――バシャッ！！

次々と橋のライトに光が灯る。周りの街にも明かりが戻る。

「く……予定より7分27秒も停電の復旧が早い！！マスターっ！

！」

「っち。いい加減な仕事をしおって！！」

――――――――――バシンッ！！！

エヴァの体に紫電が走る。

「――――――きゃんっ！！」

エヴァは真っすぐ湖に落ちて行く。

「ど　どうしたの！？」

「停電の復旧でマスターへの封印が復活したのです！魔力が無くなればマスターは
ただの子供……このままでは湖へ……！！マスターは泳げません……っ！！」

「――――――エヴァンジェリンさんっ！！」

ネギは茶々丸よりも先に橋から飛び降りる。

（……バカが。魔力を使い果たし、杖もない。そんな身でなんのつもりだ……。
……溺れ死ぬぞ？）

「間に合え……杖（メア・ウィルガ）よ！！」

「ネギーーーーーっ！！」

（――――そういえば、前にもいたな。そんな馬鹿が。）

『危なかったなー、ガキ。』
ただの子供と思って、崖から身を乗り出して私を助けた男。
『お前が卒業する頃に、また会いに来てやるからさ。』
『……本当だな？』

そして彼は現れなかった。

『えーと？　こんな時間にどうしたんだ、君？　迷子か？』
結界の侵入者を感知して出会った男。
『仮契約カード……。これでめでたく、お前の従者ってワケだな』
『フン。あくまで「仮の」契約だ。使えないと思ったら、いつでも破棄
してやる。』

そして彼は裏切った。

――――――――――この、嘘つきども。

……。

……え？

――――――――――まったく。世話の焼ける御主人様だよ。

「そう思わないか？　茶々丸。」

「いえ。私にとって、マスターの命令は絶対ですので。」

黒いコートを風になびかせる、赤い髪の男。

彼がエヴァを抱きとめていた。

エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルが従者、衛宮士郎。

「な……！おま……」

「――――――あぶふっ！？」

杖を呼び寄せて飛行し、エヴァを助けようとしたネギだったが、

士郎が来たことに驚いてそのまま墜落してしまった。

水煙並みの水しぶきがあがる。

「何やってんだ？ネギのやつ。エヴァ、水かかってないか？」

「あ、ああ……。」

「ガボゴボ……ビボイでぶビロウばん……！！」

その後、ネギを引き揚げた。

―――◇―――◇―――

「もーっ、アンタは言ったそばからまた無茶してー」

「ス、スミマセン。」

「大丈夫ですか？ネギ先生。」

茶々丸が持っていたタオルで明日菜がネギの体を拭いている。

「ケケケ。ザマァネーナ御主人。」

「……何故お前までいるんだ」

「俺ァ士郎ト一緒ニイタンダヨ。ケケケ、久シブリニ思ウ存分暴レラレタゼ」

「……ああ、襲撃に対処していたのか」

こちらにはエヴァ、チャチャゼロ、士郎。

エヴァは士郎のコートを着ている。

「ケケケ。俺タチガイナカッタラアノ坊主ガ御主人ニ勝ツナンテアリエナカッタダローナ」

「あっ……こら、チャチャゼロ……！！」
「――――――ほう？」
今は封印状態のハズなのに、そこには間違いなく――「闇の福音」がいた。
「詳しく聞かせてもらおーか、士郎？」
「……はい……。」
◇――――◇――――◇
――◇
『――学園長。』
「おお、タカミチ君か。悪いのう、急に呼び戻して」
『いえ……。それより、さきほどの話ですが……ネギ君は大丈夫でしょうか？』
「ふぉっ、心配は要らん。エヴァ（あの子）は子供は殺さん。相手はナギの息子じゃ。
それにそこまで非道でないことをお主は知っておるじゃろう？」
『それはそうですが……ネギ君はまだ１０歳です。』
「心配症じゃのう。あのナギの息子じゃぞ？
それに……安心せい、ちゃんと信用できる者をつけておる。」

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

「……フ、フフフ……。そうかそうか、全てあのじじいの仕業か」
「……はい。そうです。誠に申し訳ございませんでした、
エヴァンジェリン様。」
「ヤメロー。御主人ヤメロー」

両手を組んで仁王立ちするエヴァと、彼女の足元で土下座する士郎。チャチャゼロはエヴァの足に踏みつけられている。エヴァへの封印が復活したので
為す術なく踏まれている。

「それで？貴様は主人に逆らって己の祖父の頼みをきき、何をしたんだった
かなぁ？」
「……はい。まず、エヴァンジェリン様に協力しないこと。
オコジョ妖精カモミールをネギに合流させたこと。ネギが罠を仕掛けたこの橋に
到着して決闘ができるよう、襲撃の悪魔たちを事前に掃討したこと、などです。」
「ケケケ。」
「フッフフ……。ハハハ……」

「ねえ、あっちはどうなってるのよ？なんで士郎さんが土下座してんの？」
「さ、さあ……僕にもさっぱり……。」
「気にしないでください。いつものことですから。」

「茶々丸。」
「なんでしょう、マスター」
エヴァは親指で士郎を指差し、次いで湖を示した。
――――――――――――落とせ。
――――――――――――Ｙｅｓ．マスター。
茶々丸は士郎を羽交い締めにした後、湖に突き落した。
（魔法発動体のコートはエヴァが着ているので、大人しく落ちて行きます。）
「エヴァンジェリンさん！！」
「ん？」
――――――――――ばっしゃーん
「今度こそ僕の勝ちですよ！もう悪いコトはやめて、授業にもちゃんと出て
もらいますからね！！」
「……。」
（まあ、確かに。士郎の助けがあったとはいえ、このぼーやはなかなか見どころが
ある。私の本気の呪文を正面から打ち負かしたしな……。）
「……わかったよ。今回は確かに、私の負けだ。」

「えへへー♪じゃあ名簿のところに「僕が勝った」って書いとこー♪」
「!?やめろ貴様!!てゆーかどっから出した名簿(ソレ)!!」
「えーだってー」
「停電が続いていれば私が勝ってたんだよ!!」
「……仲直りってことでいいの?」
「どうなんでしょうか?」
魔法使いたちはじゃれあい、従者たちは苦笑してそれを眺める。
「安心してくださいエヴァンジェリンさん。呪いなら僕がうーんと勉強して、
立派な魔法使い(マギステル・マギ)になれたら解いてあげますから」
「オイ。それまで何年待たなきゃなんないんだ!!お前の血を吸えば今すぐ
解けるんだよ!!いいかぼーや!!私はまだ諦めたわけじゃないからな!!」
「オーイ士郎。平気カ?」
「……"気"で水面に着地すればよかった……。」
「……アホカ。」
大停電の夜以降、桜通りの吸血鬼は現れなくなったという。

後日。

「士郎！今日は大根おろしハンバーグが食べたい！！」
「へーい」
「士郎さん、マスターが『今日はシチューが食べたい』と……」
「あいよー」
「ケケケ、士郎。良イ酒出セヤ。」
「うるさい黙れ。お前が余計なこと言わなきゃバレなかったんだよ！！」

ある家庭では従者への罰として1ヶ月間、主の希望通りの献立を作ることになったという。

第２８話　桜通りの吸血鬼？（後書き）

・・・これで次話のストックが、ゼーロー♪

しばらく皆様には会えないと思います。次の更新は１１月下旬か１２月になりそうですね。

それでは次回！！

第２９話　悪夢の兆候（前書き）

次の更新は１１月下旬になるって言ったのに、投稿しちゃいました。
書いてたらちゃちゃっと出来ちゃったんで。

特に面白くもない。今回はそんな、日常のハナシ。

第２９話　悪夢の兆候

……。

……ろ。

い……て…る。

（――――――――――？？？）

お……雑……。

…っと……き……。

い…まで……る。

（――――――――――誰の声だろう。）

……おい、雑種。

……とっとと起きろ。

……いつまで寝ている。

（――――――――――なんだ、この、どっかの金ピカみたいなのは？）

なんだ、我（オレ）が誰だかわからんというのか？

我は、貴様の――――――――――――――

「……ヘンな夢。」

つーか、アレはなんだったんだろう？いや、ホントに。

よりによってあの金色っぽいのが出てくるとは。悪夢か？うん、悪夢だ。

よし。そんなことより、そろそろ起きようか――――

「――――って、あれ？」

「士郎さん、もうすぐ刹那さんとの鍛練の時間――――……士郎さん！？」

視界が歪み、俺の意識は暗転した。

目の前に、こちらに頭を下げている男がいる。髪はボサボサで、歳の頃は
十代前半というところだろうか。

『近衛翁。僕に……西洋魔術を教えてください。』

約１０年後。

『なんじゃ、何か良いコトでもあったかのう？』
『はい。今日は報告に来ました。僕、父親になるんですよ。』

数年後。

『おかーさま！シロウはわたしがだっこする！！』
『ふふ。ダーメ。イリヤには重いわよ。』
『ぶー。』
『フォ。微笑ましいのぉ。』
『……そうですね。僕にはもったいないくらいの……家族です。』

――――――チュンチュン。チチチ……

「――ほ。随分と……懐かしい夢を見たモンじゃわい。」

最後に会った時は、相変わらずのボサボサ頭に黒いスーツ、黒のトレンチコート
を着て――――随分と、痩せこけていた。

「お主の息子は、立派になったぞ……切嗣。」

学園長・近衛近右衛門は、窓から空を見上げて呟いた。

――――◇――――◇――――

「……39度7分。おそらく風邪だと思われます。」

「ううう……。マ、マジか……。」

「なんで苦しんでる本人が驚いてる。一目瞭然だろうが。」

う、うるさいやい。風邪なんて何年ぶりだと思ってんだよ。花粉症も持ってる誰か

さんとは違うんだよ。

「今日一日は絶対安静ですね。というより、動きたくても動けないはずです。」

うん。ものすごくダルい。体に力が入らないし。

「茶々丸。学校に連絡しろ。身内の看病をするから今日は欠席するとな。」

「まてまて。お前は何を言ってる。」

エヴァがとんでもないことを言い出した。

「ふん。お前は自分の衰弱ぶりを自覚していないのか？いつもだったら『まて』を
あと二回は言っているぞ。」

知らんよ。

「いやでも、俺の所為で二人を欠席させるわけには……。」

「何を言ってる？休むのは私だけだぞ？」

「「え？」」

「なんだ貴様ら揃って。心配するな、看病くらいできる。茶々丸は学校に行け」

「「……不安だ／です。」」

「な、なんだと！？」

「エヴァが心配でおちおち寝てられない。」

「マスターが心配で学校に行っていられません。」

目に浮かぶよ。１３０ｃｍくらいしかない身長のエヴァが薬を取ろ

うとして背が
足りなくて、棚を睨むんだ……。
（これも魔力がなくて飛べないせいだ、と言うんでしょうね……。）
そのあとトレイに水と薬を載せて運んでくるんだけど……。
（ああ、可愛らしいお姿なんでしょうね。）
階段で躓いてその場の掃除を始めるんだ……。
（そしてそれも呪いの所為にするんでしょうね……。）

「「――――――不安だ／です。」」

「おい貴様ら！！なんだその目は！？」

おお、つい父親な気分に。

「しかしマスター。なぜいきなり私だけで学校に行けと言うのですか？」

たしかに。今までこの二人は大体一緒にいたはず。なぜ急に一人で行けと言うのだろうか？

「いやなに。茶々丸はあのぼーやに会いたいだろうと思ってな？」

あ、なーる。この前の一件以来、ネギのことを気にしてるっぽいからな。

「……そ、そのようなコトはありません。」

「ほう？今の間は何だ？この色ボケロボ」
「い、今の発言の撤回を要求します。」
「……もう学校行けよ。お前ら」

――――◇

◇――――◇――――

「みなさん！おはよーございます！！」
『おはようございます！！』

毎日元気な３－Ａの生徒たち。朝礼を終えてネギは出席を取り始める。

「アスナさん」
「はーい」
「春日さん」
「はーい」
「茶々丸さん」
「……」
「アレ？　居ない？　お休みですか？」
「ウチんトコには連絡来てへんよー」
保険委員の亜子が言う。

――――ガラッ

「あ、珍しいですね。茶々丸さんが遅刻するなんて」

噂をすれば影。茶々丸とエヴァが教室に入って来た。

「私は珍しくないのか？先生」

エヴァがギロリと睨む。

「だってエヴァンジェリンさんはよく授業をサボるじゃないですか。」

ネギが笑顔で事実を言い放つ。

「……ぐ……。」

（コイツ……私に勝ったからと調子にのって……。）

「スミマセン先生。家族が熱を出しまして、その看病で遅れました」

「家族……って、士郎さんですか？」

「はい。３９度の熱で……。学校を休もうかと思ったのですが、本人が看病は
いらないと言うので……。」

「そ、そうですか。わかりました、もう席に着いていいですよ。」

「ではこれで朝のＨＲを終わります。１０分後に１時間目の授業を始めますよー」

―――◇―――◇―――◇―――

「――――で。何だ貴様らは。」
「何ってエヴァちゃん。お見舞いに決まってるじゃない。」
「先生、アスナさん、このかさん。今お茶をお持ちします」
「あ、お気づかいなく。茶々丸さん」
「ほえー、エヴァちゃん家ってカワええわー」

ネギ・明日菜・木乃香が士郎のお見舞いにやって来た。

ちなみに、古菲と刹那もお見舞いには行きたかったのだが、部活動があるので
断念した。
まあ刹那の場合は、木乃香も来ることが予想出来たから避けたのだろうが。

――――――士郎の自室。

「……悪いな、わざわざ来てもらって」
「ダメやえ、シロウ。」
「あぐっ」
木乃香のチョップを額に喰らった。
「シロウは病人なんやから、気ィ使わなくてええんよ。こーいうときは
ありがとうって言(ゆ)ーんや」
「……ごめん」
「ホラ、また謝ったやん。そーいうところはホンマに変わらへんなあ。」
「……う。」

兄妹の微笑ましいやりとりを、周りは黙って見ていた。

「ここだけ見てると、このかの方がお姉さんみたいね。」
「そうですか？」
「いや、士郎の性格と扱い方を知ってるだけだ。流石は妹なだけはある。」
「あはは。褒めてくれてありがとなー、エヴァちゃん」

（てゆーかさ、ネギ。士郎さんが風邪ひいたのって……）
（は、はい。多分、昨日湖に落ちたから……）
「何か言ったか？貴様ら」
「「いいえ、何も。」」

「近衛木乃香。お前はここで士郎と一緒に居ろ。ぼーやと神楽坂明日菜は私と
来い。話がある。」
「…？　何？　エヴァちゃん」
「あ、はい。わかりました。」
「ほな、兄妹水入らずで待たせてもらうわー」

―――――◇―――――◇―――――◇―――――

一階のリビングでテーブルを囲む４人。ネギ、明日菜、エヴァ、茶々丸。

「で、何の話なんですか。エヴァンジェリンさん」

「なに、この前の約束を果たそうというだけだ。」
「…約束？」
「なんだ、忘れたのか？私に勝ったらサウザンドマスターと私の関係を話してやると
言っただろう。」
「――――――――！！」
（サウザンドマスター……父さんの情報……！！）

「――――お茶をお持ちしました。マスター」
「うむ。」
エヴァは紅茶で口を湿らせる。

「そして昨日、貴様は私に勝った。だからこの場を設けてやったんだ。」
「もー、もったいぶらなくても知ってるわよ。
エヴァちゃんはネギのお父さんのコトが好きだったんでしょ？」
「――――――ぶぅーーーーーーーーっ！！！ゲホッ、ゴホッ！！」

紅茶を吹き出して咽るエヴァ。

「な、なんで知ってる！？……ネギ（キサマ）か！？貴様が喋ったのか！？
やはり貴様、私の夢を見たなーーーーーーーーーー！！！」

「ああ、アスナさんもご存じでしたか。」
「まて貴様！？茶々丸、何故お前も知っている！？」
「マスターがサウザンドマスターを想っていることを知らない者はこの屋敷には
いませんが？」
「……な……！？　ま、待て。ということは、士郎も知っている

のか!?」
「あら、なーにー?エヴァちゃん。士郎さんには知られたくないのお?」
「うっ……!?べ、別にそそそ、そんなワケないだろう!?」
「んふふー。そーお?　エヴァちゃんって恋多き乙女なのねー♪」
「……だ、黙れえええ!!!!神楽坂ぁぁ明日菜あぁぁぁぁぁ!!!!!」

「アハハ、エヴァちゃんってからかうと面白ーい。」
「ア、アスナさん……。」

～～～～～～～～～～～～しばらくお待ちください～～～～～～～～～～～～

「……だが奴は死んだ……。１０年前にな……。」

「……エヴァンジェリンさん、違うんです。僕、サウザンドマスターに会ったことがあるんです。」
「……何?確かに奴は１０年前に死んだ!お前は今１０歳だろう!?
どういうことだ!!」
「で、でも……僕は本当に会ったんです!６年前の、あの雪の日に……。
その時に助けられて、この杖を貰ったんです。」

「……そんな……奴が、生きているだと……？」

―――――◇

◇―――――◇―――――

『アハハハハハハハハハハ！！』

『そーかそーか、奴が生きているか！！』

『ま、殺しても死なんよーなヤツだとは思っていたがな！！』

「なんやゴキゲンやなー、エヴァちゃん。一階から声が聞こえてくるえ。」

「あー、15年想い続けた人が生きてたってんだから、そりゃ嬉しいだろーな。」

「15年？」

「！！っい、いや、なんでもない。」

「？？」

（あ、アブねー。ネギのコト言えたモンじゃないな。）

―――――◇

◇―――――◇―――――

―――――カランコロン。

エヴァンジェリン邸のベルが鳴る。

「……やっと騒がしいヤツラが帰ったと思えば、今度は誰だ？」

「…お邪魔します。エヴァンジェリンさん」

扉を開けて入って来たのは、刹那だった。

・　・　・　・

「もう起きても大丈夫なんですか？」

「ああ、熱はもうすっかり下がったからな。もう平気なんだけど…

…茶々丸に

寝かしつけられた。明日も寝てろって言われそうだな。はは」

「いえ、そうした方がいいです。士郎さんはいつも働き過ぎです。

この機会に体をゆっくり休めるのもいいのでは？　……

……？

どうしたんですか？」

「……いや。木乃香と同じこと言うんだな、と思ってさ。」

「……！　そ、そうですか……。私が、お嬢様と同じこと

を……。」

「……刹那」

「…？　はい。」

「修学旅行、このままだと京都になりそうなんだってな」

「……はい。」

関西呪術協会に属する京都神鳴流。

西と東の協会は仲が悪く、水面下での争いが続いている。

そんな中、刹那は東へやって来た。向こうから見ればそれは裏切り

だろう。
それは、――――木乃香のため。
関東魔法協会会長の孫娘にして、関西呪術協会の長の一人娘。
そして極東最大の魔力を潜在的に持つ木乃香。狙われるには充分過ぎる生い立ちだ。
だからこそ、彼女を護るために。彼女は西を抜けた。
裏切り者の謗りを受けようとも。親友を護るために。

だというのに。刹那は木乃香と以前のように接することができなかった。
親友だった頃のように愛称で呼ばず、お嬢様と呼ぶようになった。

（…はー……。俺も鈍いな。最近気づいたよ。刹那が木乃香を遠ざける理由……）

「向こうでいろいろ起こると思う。木乃香のこと……頼むな。」

士郎の左手が刹那の頭に伸び、そのまま頭を撫でる。

「……はい！」

刹那は笑って、それに応えた。

（あわよくば……そこで仲直りしてくれれば一番なんだけどな。
なにかキッカケがあれば……）

◇――――――――――◇――――――――

―――――◇

「……ようやく帰ったか」
「……エヴァ」

どうしたんだろう。サウザンドマスターが生きているとわかってご機嫌だったはずなのに、どこかピリピリしている。

「なんてことはない。自分が弱っているというのに他人の事ばかり心配するバカを見て胸くそ悪くなっただけだ」
「……耳が痛いな。」
「それはいい。もっと言ってやろうか。」
「遠慮します。」

エヴァは椅子をベッドの傍に引き寄せて座る。

「刹那はお前が思っているほど弱くはない。」
「なんだよ。いきなり？」
「お前の心配など杞憂に過ぎんというコトさ。闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）からの直々の予言だ。
感謝しろ。」

「……そうだな。」

（言葉通りの意味か…あんまり心配し過ぎるなって意味か。ま、どっちも同じか？）

「うん。なら安心だ。じゃ、俺はもう寝る。おやすみ」

「？？　む、そうか。じゃあな」

席を立ち俺の部屋から出て行くエヴァの背中に、一言。

「……ありがとう。エヴァ。」

「……なにがだ？」

彼女は顔だけこちらに振り向く。

「いや。なんとなく。」

「……そうか。――――おやすみ。」

エヴァが去ったので、電気を消して布団をかける。

（やっぱ俺って考え過ぎなのか？）

――――士郎。確かにおめえは考えて戦った方が強えんだろうがな。たまには気合いでなんとかしてみろや。案外うまくいったりするモンなんだぜ？

（ああ。師匠も言ってたなー。）

（そういや最近、気合いなんてものとは無縁だったしなあ。）

いろいろと思考しつつ、士郎の意識は闇に落ちて行った。

◇――――――◇――――――◇

翌日。

「まさか、熱を出した翌日から運動をしようなどという愚を犯すとは思いませんでした。」
「バカなのか？貴様は馬鹿なのか！？」
「すいません申し訳ありませんでしたゴメンなさいいやホント」
「俺モ混ゼロヤテメーラ。」

早朝鍛練に出かけようとした士郎は茶々丸に発見され、エヴァに取り押さえられましたとさ。

ちゃんちゃん？？

第２９話　悪夢の兆候（後書き）

日常系のお話でしたー。

第３０話　誕生日会と打ち上げ（前書き）

今回はショートストーリー２本立て。ってカンジの構成になってます。

第３０話　誕生日会と打ち上げ

「ん～～～～～～！！美味しーーーーーーーー！！」

喫茶店アルトリアに、明日菜の声が響く。

――海老と野菜のフリッター、スペアリブのハニーグリル、デミグラスハンバーグ、
牛フィレステーキ、サーロインステーキ、炙りマグロのカルパッチョ、ピザ、
オムレツ、フライドポテト、コーンポタージュ、カボチャスープ、
コンソメスープ
フライドチキン……

「いや～ホント！この味でこの値段なんて本当にオトクだよね～！！」

「シロウのごはんはいつ食べても美味しいわー」

「士郎さんは何でも作れるのですね。」

「取材して広告料を取れば絶対儲かるのになぁ～」

「……ちょっと。なんでクラスの皆が来てるのよ！？」

今日の夕方、アルトリアは明日菜の誕生日パーティーで貸し切りだった。

当初の参加者は明日菜、木乃香、ネギの３人だけだったのだが、渋

谷で合流した
らしい柿崎・釘宮・椎名・委員長の４人が急遽参加。そして何故かクラスの
大多数が参加している状況だ。

士郎は足りない分を調理するため厨房に入りっぱなし。しかし「忙しい」と
言いながら楽しそうに作業しているあたり、根っからの料理人である。
いや、主夫か？

――――春巻き、海老チリ、茶碗蒸し、小龍包、手鞠寿司、五目ちらし寿司、炒飯、
キムチ炒飯、鶏の唐揚げ、春雨サラダ、白身魚のチリソース、かに玉、
ワンタンスープ、蟹と春雨スープ、シューマイ、マーボー豆腐、マーボーナス、
たこ焼き、石焼きビビンバ……

「本当に美味しいですわ。ウチのシェフに見習わせたいくらいです。」
「えーーー!?そんなに!?」
「……てかスゲー……。専属シェフいるんだ……」

「だから……なんで呼んでないのに来てるのって……」
「まーまー、大勢でやった方が楽しいジャン！」
「気にしたら負けだよ？アスナ。」
そう言って明日菜の肩を叩くのはハルナと朝倉。明日菜は直感した。

「あんたらかあああああ！！」
「「……てへっ♪」」
……この二人の情報網を舐めてはいけない。

（……まあ、でも……）

――――ショートケーキ、チーズケーキ、フルーツケーキ、ロールケーキ、
いちごパフェ、チョコレートパフェ、杏仁豆腐、アイスクリーム、
あんみつ、
クッキー、エクレア、アップルパイ、レモンパイ、焼きプリン、かぼちゃプリン、
お米のムース……

（な、なんだ……？龍宮と長瀬が黙々とデザート食ってやがる……！？）
「ん～？このかぼちゃプリン美味しいでござるよ？」
「楓、このあんみつもなかなかイケるぞ？」

（――――こんな大人数で誕生日パーティーなんて、初めて。）

「よーし、出来たぞ！！ホラホラ皆、道空けてくれ！！」

士郎が厨房から持ってきたのは――――大きなバースデーケーキだった。

「スゴーーイ！！大っきいーーー！！」

「凝ってるーーーー！！」
「え？ちょっと何アレ！？衛宮さんってパティシエ！？」
「ほらネギ、お前がまとめろ。先生だろ？」
「え？は、はい。……えーと……コホン。アスナさん！！
お誕生日おめでとうございます！！！」
『おめでとーーーーーーーーーーーー！！！』
ワーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！
「……ありがとう、みんな。わ、私……私、嬉しいよっ！！」
その後も誕生日会は続き、大盛況で幕を閉じた。
―◇―――――◇―――――◇―
「そんなことがあったのかい。」
夜。喫茶店アルトリアは引き続き貸し切り状態。魔法先生による打ち上げ会だ。正確には打ち上げではなく、先日の結界停止事件にあたった事の慰労会だが。

「いや、３一（アイツら）Ａ元気過ぎですよ。どうしてあんなに騒ぎ続けられるんだか。
　あのスタミナは異常です」
「はは。元気なのは良いコトじゃないか。」
「……さすが元担任。笑ってそんなコト言えませんよ、あの集団には。」
「ハハハ。」

士郎の正面のカウンターに座って酒を飲むのはタカミチ。
ついさきほどの誕生日会の愚痴を聞いている。

弐集院と明石はテーブル席に座って二人でなにやら魔法談義をしている。
そのほかのメンバーは士郎とタカミチから離れたカウンターに座っている。
黒人教師ガンドルフィーニが瀬流彦に酔っ払って絡んでいる。
刀子と神多羅木、シャークティは３人並んで座っている。

ちなみに士郎は猫背になって頭をカウンターの上に乗せてダレている。

「出張から帰って来てあの子たちの顔を見てると……なんだか元気になってくるんだよ。」
「…俺はその境地には至れません。
常にアイツらと一緒にいるネギの苦労が計り知れませんね」
「おおーい士郎君！！枝豆と唐揚げ、あと生ビール追加してくれーー！！」
「食い過ぎ・飲み過ぎですよ弐集院先生。」

「わかっているよ。最近娘にも「パパ、太り過ぎ！」なんて言われちゃってね。
これで最後だから！！」
「本当に、これで最後ですからね！」
そう言って士郎は厨房に入って行った。

「……どうじゃ、楽しんでおるかの？タカミチ君」
「が、学園長！！？」
「なんじゃい。そんなに驚かなくてもいいんじゃないかのう？
……ちょっと傷ついたぞい」
「気配なく近寄られたら普通驚きますよ。」
学園長・近右衛門はタカミチの隣に腰掛ける。
「のう、タカミチ君……。」
「……どうしたんですか、改まって？」
「何で誰も、わしと飲んでくれんのかのう！？」
今まで彼は、店の隅の方で一人で日本酒を飲んでいた。

「……それは、私にはちょっと……」

「瀬流彦君。私は自分が不甲斐無いよ……。大型の悪魔が来ても何も出来なかった
んだ……」
「そんなに落ち込まないでくださいよ。そのとき周りに他の悪魔が大勢いて

身動きとれなかったんでしょう?仕方ないですよ。」
「仕方ないとはなんだね!?この学園と生徒を護るのが私達の使命なんだよ!?
高畑君が居なかったらどうなっていたことか……聞いているのかい
瀬流彦君!!」
「あーはいはい聞いてます!ほら、今日は慰労会なんですからもっと気楽に
飲みましょうよ!!」

「はあ……最近仕事が多くてカレに会えていないんです……」
「そういう話は修道女(わたし)ではなく神父様にお願いします、刀子先生」
「いっそシスターになったらどうだ?葛葉。一生を神に捧げれば結婚を
意識しなくて済むぞ?」
「斬りますよ?」
「……スマン」

「ホレ、皆楽しそうに飲んでおるじゃろう……」
「そ、そうですね……」

単純にジェネレーションギャップの問題だと思われる。

「……タカミチ君。士郎にはもう……話すべきかのう?」
「!!　……切嗣氏のこと、ですか?」
「アレはもう一人前じゃ。話しても受け入れてくれると思うのじゃが
……わし自身が、踏ん切りがつかなくてのう」

赤い髪と、紅い真っ直ぐな目をした少年。

「初めて彼を見た時は……彼があの衛宮切嗣の息子だとは信じられませんでしたよ」

「まあ、外見は全く似とらんからの。じゃが性格は間違いなく父親譲りじゃよ。

自分より他人を優先する、あの性格は……。」

「あの“魔術師殺し”がそんな男だったとは、今でも信じられません。」

――――店の夜は更けてゆく。

士郎（かれ）の周りで、真実が蠢き始める。

第３０話　誕生日会と打ち上げ（後書き）

今度こそ次話のストックが、ゼ～ロ～♪です。

今度こそ次回の更新が遅くなるよー。ストックがゼロですから。

次回から修学旅行編に入ります。さあて、士郎をどう動かそうか。
フェイトとガチバトルさせたいなー。木乃香・刹那・士郎の過去も
書きたいなー。

それでは次回！！

ー05話　設定3　士郎のアーティファクト（前書き）

「ー01話　設定1　士郎のステータス」をさっき更新しました。
気になる方は読んでください。気にならない方も読んでください。
色々変更したので。

さて、今回の内容はネタばれ？になるのかな？

本編に出てくる前に知りたくない！！という人は回れ右です。

そんなの別にどーでもイイし？という人はどうぞお進みください。

知りたくないけど気になる・・・！！という人は

ＹＯＵ読んじゃいなよ！！誰も止めはしないぜ・・・？

・・・ちょっと調子に乗り過ぎました。

それではどうぞ。

105話　設定3　士郎のアーティファクト

・仮契約カード
契約主：エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル
従者のカード（Ｃｈａｒｔａ　Ｍｉｎｉｓｔｒａｌｉｓ）
数字：９９９（ＣＭＸＣＩＸ）
色調：虹色（ｐｒｉｓｍａ）
称号：無限の剣を持つ者（ＧＬＡＤＩＵＳ（グラディウス）　ＩＮＦＩＮＩＴＵＳ（インフィニトゥス））
徳性：正義（ｊｕｓｔｉｔｉａ）
方位：東（ｏｒｉｅｎｓ）
星辰性：黒い穴（ｎｉｇｒｕｍ　ｆｏｒａｍｅｎ）

・アーティファクト発動時に現れる服：赤い外套

・アーティファクト：六道籠手《マヌサス・セクス》
外見：朱色の生地のグローブに赤錆びた鉄板がついたような手甲。
　一言で表すなら「赤錆びた手甲」。

・六道籠手（マヌサス・セクス）の能力
：登録した他人のアーティファクトの形状と能力を完全再現する。
：登録できる数は６つ。
：登録したいアーティファクトのカードと自分のカードを重ねて「登録（メミニ）」と唱えれば登録できる。
：この能力で現れたアーティファクトはあくまで六道籠手が変化したものなので、本来の持ち主がアーティファクトを発動しているかいないかは関係ない。よって使用に制限はない。
：この能力を使えば同じ場所、同じ時間に同じアーティファクトが存在できる。

―05話　設定3　士郎のアーティファクト（後書き）

やっぱ強過ぎるかなぁ？

あらゆるモノを模倣する贋作者（フェイカー）、士郎ゆえの至高のアーティファクト。

でも相手の任意がないと登録が難しいという点が唯一のネック。

ま、それを補って余りある能力だとも思いますが。

よってカードの色調が「虹色」くらいのレア度があると判断しました。

称号は

「正義の体現者」「正義に囚われた愚者」「この世すべての贋作者」

などの候補がありましたが、

師匠ラカンの「千の武器を持つ者」にならって決定稿の名前に。

本編は修学旅行編の３４話が難航しており、執筆が滞っております。

１１月下旬に更新する、という予定が大幅に遅れるかもしれません。

イヤ、マジで身動きとれないぐらいの忙しさなんです。最近自覚した。

今しばらくお待ちください。

それでは次回。

第３１話　修学旅行編　一日目・上（前書き）

今日（もう昨日か。）は勤労感謝の日。勤労よりもこの祝日に感謝。

この修学旅行編から原作改変・設定捏造の度合いが増加します。多分。

こらからも頑張りますのでよろしくお願い致します。

でも今、大学の後学期の中間だから課題とテストが多くてねぇ。

おっと。それでは愚痴になる前に、どうぞ。

第３１話　修学旅行編　一日目・上

麻帆良学園本校女子中等部の修学旅行先は京都・奈良に決まった。

『京都へ行ってみるがいい。何処かにナギ(やつ)が一時期住んでいた家があるはずだ。
奴の死が嘘だというのなら、そこに手掛かりがあるかもしれん』

『先方が京都行きの修学旅行に難色を示して来おった。先方――――
関西呪術協会と我が関東魔法協会は仲が悪くてのう。そこでじゃ。ネギ君には
東西友好の特使としてこの親書を届けてもらいたい。向こうの長に渡してくれる
だけでよろしい。道中妨害があるやもしれんが……やってくれるかのう？』

こうして、ネギの波乱の修学旅行が幕を開けた。

◇――――◇――――◇

３－Ａの修学旅行は６班編成。

１班。チア部三人娘＋双子（椎名、柿崎、釘宮、鳴滝風香・史伽）

２班。「超包子」組と陸上部と忍者。
（古菲、超（チャオ）、葉加瀬、四葉、春日、楓）

３班。お嬢様－Ｓと地味－Ｓと報道部。（雪広、那波、千雨、村上、朝倉）

４班。ファザコンと保健委員と水泳部とバカピンクと巫女のスナイパー。長い。
（明石、和泉、大河内、まき絵、真名）

５班。図書館探検部４人とバカレッド。（夕映、ハルナ、のどか、木乃香、明日菜）

６班。剣士とピエロと吸血鬼とロボ。
（刹那、ザジ、エヴァンジェリン、茶々丸）

しかし麻帆良に封印されているエヴァは茶々丸とともに不参加。
よってザジは３班に、刹那は５班に編入された。

「あ……せっちゃん、一緒の班やなあ。」

「あ……。」

麻帆良学園本校・女子中等部の屋上に、ほけーっとした少女がいた。

「今頃やつらは新幹線かぁ。」

「マスターは呪いのせいで修学旅行に行けず残念ですね。」

「……オイ、何が残念なんだ？別にガキどもの旅行なぞ――」

「いえ、行きたそうな顔をしていましたので。」

「アホか。それより――お前は行ってもいいんだぞ？」

「いえ。私はマスターのお傍に」

「……ふん。……まあ、それはそうとしてだ。」

「……はい。」

「あのじじい、士郎を京都へ送りよってからにーーーーーーーー！！！！」

まず東京駅へ向かう新幹線の車内。

――――――ワイワイ、ガヤガヤ。

隣の車両から、生徒たちの声が聞こえる。

『士郎や。しばらく婿殿の所に顔を出しとらんじゃろう？丁度良い。修学旅行の生徒
たちと一緒に京都に行ってくるとええとじゃろ。向こうには話を通してある。
向こうでゆっくりしてくるのがいいんじゃないかのう？』

（……なーに企んでるんだか）

麻帆良学園・修学旅行生の隣の車両に座るのは衛宮士郎。
側にペットボトルのお茶を置いて新聞を読んでいる。

（父さんまで巻き込みやがって……。でも、ホントになんのつもり

なんだ？）

関西の妨害が気になるならそう言えばいい。今みたいにコッソリ生徒のあとをつけて行けばいいのだから。なのに回りくどく「帰省してこい」などと言ってきた。……ま、考えてもわからんか。とりあえず京都旅行を楽しもう。

―◇―――◇―――◇―――

『キャーーーーーーーーーーーーーッ！！』

『ヒーーーーーーーーーー！！！』

車内に湧き上がる悲鳴。

「――――――ゲコ。」

カエル。

カエルだった。

『ゲコゲコゲコゲコーーーーーーーーーッ！！！』

「な、なんですかこのカエルの団体さんはーーーーっ！？」

「なんかそこら中からいっぱい出てきたのよーーーっ」

「助けてネギ君ーーーっ！！」

（……魔力のようなものを感じる。このカエルの大量発生、まさか魔法？

これが妨害？）

「カエル１０８匹、回収終わったアルよー」

「しずな先生が失神してるーーー！！」

「保健委員は介抱を！いいんちょさんは至急点呼をお願いします！！」

「ハ、ハイ？」

「保健委員も失神してるよーーーー！！」

「……きゅう」

（ちっ！一般人を巻き込むたあ下衆な！！兄貴、騒ぎに乗じて親書を狙ってるかも

しれねえ。親書ちゃんと持ってるか？）

（うん、ちゃんとここに――――――）

――――――――ヒュッ。

「あっ！？」

カエルの次は、ツバメ。ネギの手から親書を奪って飛んでいく。

「ま、待てーーーーーっ！！」

「兄貴！近くに術者もいるハズだ！！そいつを探せ！！」

「あら？」

「どしたの？いんちょ」

「あ、アスナさん。桜咲さんがいませんの。」

「え？桜咲さん？」

◇――――――――――◇――――――――――◇

「で、何をしているのですか。士郎さん？」

「いや、その……観光旅行？」

修学旅行生の車両からいくつか後部の車両のトイレ付近。

黒コートを着た男性と制服を着た少女がいた。

（お嬢様の事は私に任せると言っていたのに……）

拗ね始めた刹那の雰囲気に反応して士郎が理由を話し出す。

「待て刹那、お前のことを信用してないわけじゃないんだ。じいちゃんに京都に
行くように言われたんだよ。」

「学園長に？ならやはりお嬢様の護衛ということでは？」

「いや、どうも違うっぽい。言い方が回りくどかったし。京都で何があるのかは
俺も知らないんだけどな。だから刹那、木乃香のこと頼んだぞ」

「はい。このかお嬢様は命に代えてもお守りします。」

「命って。いや、意気込みは買うけど……」

（刹那は木乃香のことになると、木乃香以外なにも見えないからな……。自分の体
くらいは大事にしてほしいんだが。）

士郎が自分のことを棚に上げた思考をしていると――――

「……お？」

――――チャキ……

――――――――キンッ！

飛んで来たツバメを、刹那が居合いで斬り伏せる。

「……“式”とは穏やかじゃないな。もう来たのか、まだ西日本にも入ってないってのに」

「これは……？」

「あーそれは多分、関西呪術協会への親書だ。ネギが持ってる」

「……早速奪われたというコトですか。」

「なかなか優秀なヤツなんだが、どっかぬけててなー。」

『待てーーーっ！！』

「と、来たか。俺は隠れるからな。ネギや（アイツら）３－Ａに見つかると面倒だから。」

「わかりました。士郎さんもお気をつけて」

「お互い何もないことを。」

――――プシュー。

「待っ……ってあれ？桜咲さん？あーーーーっ！！僕の親書！！」

「あ……先生の持ち物でしたか。落ちていましたよ。
気をつけたほうがいいですね先生。特に、向こうに着いてからは。
……それでは」

「あ、どうもご親切に……」

（オイオイ兄貴！「ご親切に」じゃねーだろ！！床を見てみろ！！）

床には、真っ二つになったツバメを模った紙片。

（これはさっきの式神だ、さっきの奴が術者だったんだよ！！あの女、西からの
スパイかもしんねーぜ！！）

（そんな、桜咲刹那さんが西のスパイ……！？）

―◇――――――◇――――――

清水寺。

「京都ぉーーーーーーーーーーーー！！」

「ここが噂の飛び降りるアレ。」
「誰かっ！！飛び降りれっ！！」
「…では拙者が……」
「おやめなさいっ！」
（テンション高けーなー、コイツら。）

「ここが清水寺の本堂、いわゆる「清水の舞台」ですね。本来は本尊の観音様に能や舞いなどの踊りを楽しんでもらうための装置であり、国宝に指定されています。有名な「清水の舞台から飛び降りたつもりで……」の言葉通り江戸時代には実際に人が飛び降りる事件が２３４件もあったと記録されています。しかし生存率は８５％と意外に高く……」

「うわっ！？ヘンな人がいるよ！？」
「夕映は神社・仏閣マニアだから。」
「「……ほぉ……。」」

夕映の知識に驚く裕奈とは逆に、感心するインテリ外国人２名（ネギと超）。

「ああ……この歴史ある木材の肌ざわり……すりすり」

「「……。」」

これには流石についていけない一同だった。

・　・　・

「ネギくーんこっちこっちーーー？」

「これが恋占いの石だってさーーー！」
「へー、目を瞑ってこの石からあの石まで辿り着ければ恋が成就するんですかぁ」
「遠っ！」
「２０ｍくらいあるんじゃない！？」
「で、では早速クラス委員長の私から……」
「あ・ずるーい私も行く！」
「わ・私もー……」

《ＥＮＴＲＹ》
２９番　雪広あやか　　好きな人：ネギ
１６番　佐々木まき絵　好きな人：ネギ
２７番　宮崎のどか　　好きな人：ネギ

《Ｐｌａｙ．》

――――――――雪広あやか恋の心眼術！！見えた！！

「ターゲット確認！！行きますわよ！！」

全速力でダッシュする委員長。つくづく一般人離れした人だ。心眼ってなによ。

「ずるーい　いいんちょ目開けてるでしょ！！」
「ホホホまさか！！これで私と某Ｎ先生との恋は見事成就ですわ！

！」

――――――ズボッ！！

「あンっ！？」

「きゃあっ！！」

フォーリンダウン・イン・カエル入り落とし穴。

「だ・大丈夫ですかまき絵さん、いいんちょさん！」

（こ、これも関西呪術協会の妨害……？）

「ゴ、ゴールですー」

「やったねのどか！！」

――――ＷＩＮＮＥＲ：宮崎のどか　ＲＥＳＵＬＴ：恋愛成就？

「何やってんのよいいんちょ。ズルしてバチでも当たったんでしょ。」

「いや、私がうす目開けたからかなー」

「なに言ってるんですのアナタたち！こんな人為的なバチがありますかっ！！」

そうですよ明日菜さん。委員長の心眼は本物です。

音羽の滝。三筋の水が流れている。

「ゆえゆえっ、どれがなんだっけー！？」
「右から健康・学業・縁結び、です。」

つまり左が縁結び。

『左・左ーーーーーー！！！』

「アナタたち、順番を……！」
「あのー、他のお客さんの迷惑にならないようにー……。」

「う、うまい！？もう一杯！！」
「いっぱい飲めばいっぱい効くかもーーーーっ」

（兄貴、やっぱりあの刹那ってのが怪しいって！）
（そーかなー…？）

「あの、先生」
「あ・はい。どうしました夕映さん？」
「何か皆酔い潰れてしまったようなのですが……。」
「……はい？」

「うわっお酒臭い！！なんで！？」

音羽の滝を覆う屋根の上。
縁結びの水にホースが繋がっており、その先になんと酒樽が。
（こ、これも妨害！？こんなの他の先生たちにバレたら修学旅行中止だよーーーー
ーーーーっ！！！）
３－Ａは総力を結集して飲酒を誤魔化し、酔い潰れた生徒たちをバスに押し込んでホテルへ運んだ。

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

？毘古社と呼ばれる神社の千本鳥居を抜けた先。そこに士郎・木乃香の実家がある。
そして。

『お帰りなさいませ、若様』

「……若……様……。」

（ああ……「坊ちゃま」よりは改善されたと喜ぶべきか……？）

「長がお待ちです。ですが執務が滞っておりまして、若のお出迎えは出来ないとのことでございます。執務室までご案内いたします。」

「あー、その若ってのやめてくんない？」

「お気になさらず」

「……。」

―◇―――――◇―――――◇―

「久しぶりですね、士郎。元気そうで何より。」

「そういう父さんは顔色悪いな。仕事忙しいのか？」

関西呪術協会、長の執務室。座布団に座って対面する。こういう部屋まで和室にするとはこだわりを感じるが、デスクワークは椅子に座った方が楽だろうに。

もっと実用性を重視しよう、関西呪術協会。畳と座布団に座って低い机で仕事するのは辛いと思う。

「ていうかさ、若様ってなんだよ。俺は近衛の血が入ってないんだ、そんなヤツを
若様なんて呼ばせるのはみんな嫌がるだろ？」

「ははは、いや、安心しなさい。君の出迎えに参加した彼女たちはそう思っていない
ですから。私に忠誠を誓ってくれる者、君のコトを認めている者、そして君の……
……ファンですね。」

「……いつから冗談言うようになったんだ？」

「いやいや。2年前に帰って来たときに君のファンが大勢できたようですよ？」

「……。」

「その筆頭は彼女ですね――――――――」

「それ以上言うな」

酷く蒼ざめた顔で士郎が息を吐きだす。

2年前。

『何処ですか！？坊ちゃまが帰って来たのでしょう！？一体何処で

すか！？』

（……ああ、あの人か……。）

「安心なさい。彼女は今、仕事で出払っています。」

ガシッ！！

士郎は詠春の手を握って――――――

「ありがとうございます、父さん。」

――――涙を流した。

「そんなに苦手なんですか……。」

「嫌いじゃないんだけど…過保護過ぎなんだよあの人。気の休まる暇がない。」

そう言って疲れたように溜息を吐く士郎とは対称に、詠春は笑みを漏らした。

（ギャグじみているとはいえ……士郎が「泣く」とは……。これは
エヴァンジェリンに感謝ですね。）

――――――士郎はだいぶ人間らしくなった。

だからこそ躊躇わざるを得ません。
ようやくここまで心を取り戻した士郎に、この話を聞かせるのは。

「……なんだよ？」

「いえ。息子の成長を見て喜んでいただけですよ」

「今のやりとりのどこにそんな要素が？」

いえ、士郎ももう一人前でしょう。これは話しておくべき話。
願わくばこれが、息子のさらなる成長に繋がってくれれば。

「士郎。君に、大事な話があります。」

「君の実の父親、――――――衛宮切嗣について。」

◇――――――――――◇――――――――――◇

『ちょっとネギ！何が起きてるの？カエルとか落とし穴とかさっきのお酒とか！

……え？私達が関西の変な魔法団体に狙われてるーーー！？』

『まったくしょうがないわね、手伝ってあげるわ。どうせまた助けてほしいって言う

んでしょ？』

・

・

・

・

・

「ふぃ〜〜〜〜〜……。」

ホテル嵐山の露天風呂。現在は教員の入浴時間。ネギとカモが風呂に浸かっている。

「気持ちいいねえカモ君」

「ああ……極楽だぜ……」

――――カポーン……。

「これで桜咲刹那の件がなけりゃなあ。」

「桜咲さん、剣っぽいのを背負ってたよね……うう、魔法使いに剣士は天敵だよ〜」

「式神使ってたところを見ると、術の心得もあるっポイしな」

「……でも、ホントに敵なのかなあ？桜咲さんって、このかさんと士郎さんの幼馴染
だって聞いたことあるよ。」

「ちょっと待てよ兄貴！このか姉さんと旦那の幼馴染ってコトは、桜咲も京都出身じゃ
ねえのか！？」

「そーいえば、名簿に京都とか書いてあったような……？」

「決まりだな！！アイツは関西呪術協会の刺客だぜ！！」

「う～ん、でも……なんか違う気がする……」

刹那さんは修学旅行中、時々こっちを見てた。でも、魔法使い(ボク)を見てるって
感じじゃなかった。
周りの生徒さん達や……「誰か」を見ていた気がする。
そして何かに気を配っていた……と思う。
そう。あれは逆に――――

――――――誰かを、守っているような。

――――カラカラカラッ

「兄貴、誰か来たぜ。」

「誰だろう？瀬流彦先生とか、新田先生かな？」

――――――桜咲刹那だった。

（うおおおおおおおおーーーーーーーーっ！！？）

（ななななんでーーーーーーーーっ！？）

（しまった。兄貴、ここは多分混浴なんだ！！）

（に、日本にはそんなのがあるの！？でも、今は先生が入る時間だよ！？）

（そこまでは知らねえよ！！）

思わず岩陰に隠れて様子を窺う。

刹那は入浴する前に体に湯をかける。

（わ――キレーな人……。お肌まっしろ――）

（こーいうのを大和撫子っていうんだろーなー……？）

「参ったな……。ネギ先生は優秀な魔法使いだと聞いていたからなんとかしてくれると
思ってたんだが……もうこれは私が動くしかないか」

（！？　僕が魔法使いだって知ってる！？やっぱり敵のスパイなのか……？）

「！！　そこに居るのは誰だ！？」

（うわっ！バレっ、ばれたーーーーーーー！！）

ネギは隠し持っていた携帯用の小型杖を取り出し、刹那は野太刀を構える。

言っておくがここは風呂である。お前ら、どっから出したソレ。

――――――――神鳴流奥義　斬岩剣！！

――――――――風花　武装解除！！

刹那の剣を魔法で弾くが、彼女は神鳴流剣士。「神鳴流は得物を選ばず」。体術で圧倒し、ネギは岩壁に押しつけられる。

「――誰だ。答えねば……って、え……？　ネギ、先生？」

「や……やい桜咲刹那！！てめえ関西呪術協会のスパイなんだろっ！？

ネタは上がってんだこの野郎！！」

混乱する刹那と啖呵を切るカモ。妙な状況が出来上がりつつあった。

「なっ、ち違うっ！！誤解だッ！誤解です先生！！

１５番・桜咲刹那、一応先生の味方です！！」

「「……え？」」

ネギとカモが呆気にとられる中、けたたましい悲鳴が響いた。

『ひゃあああーーーーーーーーーっ！！！』

「……今の悲鳴は……このかさん！？」

「このかお嬢様っ！？」

「「……お嬢様？」」

ネギとカモは再び呆気にとられた。

第３１話　修学旅行編　一日目・上（後書き）

～補足・解説～

・「その筆頭は彼女ですね――――――」
・『何処ですか!?坊ちゃまが帰って来たのでしょう!?一体何処ですか!?』
過去編で懲りたハズなのに懲りずに作ったオリキャラです。

名前：鍋島柚衣（なべしまゆうい）：女性：２５歳
：関西呪術協会の上位符術師。腕前は上の下。まだまだ実力に伸び代があり、いずれは上の役職に就くことが決定している。

元・士郎の世話係（当時１６歳）。かつてはのどかと千雨の短所を足したような性格だったが、士郎と接して成長し、彼を溺愛している。

今話で士郎を泣かせるためだけに生まれたキャラクタです。不憫。
ごめんよゆーいさん。

それでは次回。

第３２話　修学旅行編　一日目・中（前書き）

この小説の「売り」ってなんだろう・・・。

最近マジでこの小説の方向性がわからない。

とりあえず第３２話、どうぞ。

第３２話　修学旅行編　一日目・中

『ひゃあああーーーーーーーーーーっ！！！』

「……今の悲鳴は……このかさん！？」

「まさか奴等……お嬢様に手を出す気か……！？」

「「……お嬢様？」」

「お嬢様ーーーーーーっ！！」

刹那はそう叫びながら声のした方へ駆けてゆく。

「兄貴、脱衣所の方だ！追うぜ！！」

「う、うん！！」

・　・　・　・

――――サル。

――――――――おサル。

大量の猿が明日菜の服をひん剥いていた。

カエル。ツバメ。そしてサル。まさにアニマルパニック。

ああ、作者の言葉のセンスが古いとか言わないで。

「ネ、ネギ！！このかがおサルに攫われて……ッ！！」

「ええ！？」

「お嬢様がっ！？」

『ウキーーーーーーーッ！！』

「ひゃ～～～～っ！？」

ちょうど刹那とネギが入って来た出入り口から、木乃香が連れ出されるところだった。

「お嬢様に――――――何をするッ！！！」

――――神鳴流奥義・百烈桜華斬！！！

『ウキーーーーーーーーー！！』

神鳴流の対多数攻撃用の技。全ての猿の式神を斬り裂き、紙型に還した。

（……チッ。術者は逃がしたか。）

「あ……せっちゃん、助けてくれたん？」

「っあ……。そ、その……！」

――――ダッ。

（（（に、逃げたーーーーーーーーーー！？））））

「あっ、せっちゃん！」

このかと顔を合わせるや否や、刹那はその場を走り去ってしまった。

「あ・あの、このかさん！あの刹那さんって人は何なんですか！？
このかさんのこと
お嬢様って呼んでましたけど……」

「……このか。桜咲さんとやっぱり……何かあったの？」

「……うん。アスナにも、ちゃんと話してへんかったね……。」

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

―――ウチ、麻帆良に来てアスナと暮らすまでは京都に住んでたんや。

小さい頃えらく広くて静かなお屋敷で育ったんやけど……山奥やから友達一人もいーひんかったんや。

そんなある日、父様の知り合いの人と一緒にせっちゃんが来たんや。

ウチらはすぐ友達になって、せっちゃん・このちゃんて呼び合うよーになったんや。

せっちゃんが、ウチの初めての友達やってん。

そのうち士郎もウチに来て、3人で遊んだりして仲良くしとった。

ウチに来たばっかの頃の士郎はボーっとしててな、危なかってん。

せっちゃんは剣道やってて、そんな士郎やウチをよく助けてくれたんや。

恐い犬を追い払ったり……危ない時は守ってくれた。

（へ――――。）

（……やっぱり。刹那さんは、このかさんのコトを守ってたんだ）

何やらウチが川で溺れそうになった時も、一生懸命助けようとしてくれて……

結局二人とも士郎に助けられたんやけど……

『ごめん、このちゃん。ウチ……もっと強おなる』

『え？　そんなんええよ、一緒に遊んでくれるだけで。』

そのあとせっちゃんは剣道の稽古が忙しくなって、あんまり会わんようになって……。

中一の時せっちゃんも麻帆良に来て再開できたんやけど……

「何かウチ、悪いコトしたんかなぁ……？
せっちゃん昔みたく話してくれへんよーになって……。」

そう言って力なく笑いながら、木乃香は目尻りに涙を浮かべた。

「で？どーなのよ桜咲さん？このかのコトどー思ってるの！？」

「そ、そんな……私のような者がお嬢様の友人など……。わ、私はお嬢様をお守りするだけでいいんです。お嬢様を守れれば……満足なんです」

「……いろいろ言いたいコトはあるけど。あんたがこのかのこと嫌ってないっていうのはわかったわ。それで充分！よし！！友達の友達は友達だからね、私も協力するわよ！！」

「じゃあ決まりですね！３－Ａ防衛隊（ガーディアンエンジェルス）結成です！！」

「何その名前？」

「関西呪術協会からクラスの皆を守りましょう！！よし、ぼく早速外の見回りに行ってきます！！」

「では私達は班部屋の守りにつきましょう。ホテルの至る所に式神の侵入を防ぐフダを貼りましたが、油断はできません。」

「オッケー！」

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

？毘古社。

「……どういうことだ」

何故。何故詠春（とうさん）が切嗣（オヤジ）の事を知っている。

――――――近衛家と衛宮家は血縁関係にある。

まさか、知っていたのか。最初から。すべて。

くそ。何故気付かなかった。

そして何故。教えてくれなかった。

「貴方が不安定だったからです。」

心を読んだかのように、士郎の疑問に句を繋げる。

「貴方が精神的に成長し、話しても大丈夫だと思える日まで。私は……私達は
隠し通すつもりでした。」

「私達……。……ジジイもグルか」

「口調が乱れていますよ。まだ話すには早かったですか？」

クソが。そういう事かよ、今回京都に呼び寄せた理由は。

「……切り出してしまったからには仕方ありません。話しましょう。切嗣のコト。
貴方の家族のコトを……。」

◇

◇

◇

「衛宮という家は歴史こそ浅いものの、近衛家の血筋です。
その縁で彼の父・衛宮矩賢（のりかた）は京都神鳴流に属し、切嗣も神鳴流の門下生でした。
しかしある出来事をきっかけに、彼は神鳴流を抜けてしまったのです。」

「彼の父、衛宮矩賢は実力も高く、魔を滅するためという神鳴流の崇高な精神で
剣を振るっていました。
しかし彼はいつしか、強さのみを求めるようになっていったのです。
彼は宗家ゆかりの者にしか伝えられていない剣を学ぶため、呪術協会や神鳴流
の上層部・幹部・実力者に接触しましたが、それを学ぶことは出来ません
でした。」

「そしてその後――――――彼は反逆罪で処刑されました。」

「このことについては、その事実しか記録に残っていません。
彼が反逆したという証拠も、理由も、なぜ処刑という重い処分だったのかも、
何も記されていないのです。」

「そして切嗣は……神鳴流を脱退し、西から姿を消したのです。」

「それで、実のところはどうなんだ？」

「わしも詳しいことは知らん。じゃが、幹部から秘剣（わざ）を無理矢理奪おうとしたからだとも、以前から矩賢の強さを恐れていた者に嵌められたとも言われておる。」

「…ハ。くだらん。そんな理由で他者の命を奪うか。ま、弱い人間というのは己の感情もロクに制御できんからな。」

「……そうじゃのう。強さに溺れた矩賢も、そんな彼を恐れた者たちも。人間という生き物は容易く間違える。」

「貴様は人間でもマトモな部類だが……安心しろ。もし貴様が間違えた時は、この私が殺してやる。貴様には借りがあるからな。」

「ほぅ？　おぬしがそんなコトを言うとはの。じゃがそれには及ばん。

優秀な部下がおるわい。それに曾孫の顔を見るまでは耄碌しておられんよ。」

「……そうか。ではこれで詰みだ」

「ふおっ！？」

学園長、碁にて敗北。

―◇―――◇―――◇―――

「その後彼はお義父さんに弟子入りして西洋魔術…魔法を学んだそうです。そして彼は
紛争地域の人々を救う為に、戦争に身を投じました。
しかし、彼の目指した正義は実現できなかった。」

「父親の死の所為か……彼は『他者の命が不当に奪われる』ことに憤りを感じて
いたそうです。彼はそんな人々すべてを救おうとした。でも、できなかった。」

『詠春、僕は馬鹿だった。「正義の味方」なんて夢物語で……そんなものに
なれるわけなかったんだ。その時、やっと気づいたんだよ。』

「彼は挫折しました。でも、そうしている間にも命は失われていく。彼は理想を
諦めることができなかった。そして彼は……手段を変えたんです。」

「全ての人を救うことが出来なくても、紛争の拡大を防ぐことで他の命を守ろうと
した。しかし、他のＮＧＯの魔法使いのようにどちらかに肩入れして紛争終結を
促す方法も、話し合いの場を設けて解決する方法も、時間がかかる。それでは
紛争拡大は防げないと考えた彼は――――――
――――戦争に参加する者全てと敵対したのです。」

「自分が全てを皆殺しにすることで迅速に戦争を終わらせる。それが切嗣の正義。
戦争に携わる全ての者が、彼の敵だった」

「自国を愛し、自国の利権を守るため。他国の利益を奪い、自国を潤すため。
宗教に殉じるため。
紛争から自分の村を守るため。紛争で失った家族の仇を討つため。
戦争に参加した理由の善悪を区別せず、彼は全てを――――ただ、殺し続けた」

「人の命を救う為に人の命を奪う、か。とんだ正義があったものだ。
だがそれも真理のひとつ。人の幸福は、他者の不幸の上に成り立っている。」

「本来巻き込まれる筈だった紛争が終結し、切嗣によって救われたカタチとなった
者たちの幸福は……切嗣によって殺された者たちの不幸の上に成り立っている
……と？」

「なんだじじい？幸福量保存の法則というのを知らんのか？」

「そのようなもの、あってたまるものか。我々魔法使いは、不幸（ソレ）を無くす為に人間界に
関わっておる。」

「……ご高説感謝するよ。ま・悪の魔法使いである私の耳にはタコができるがな。
む。茶が無くなったか。茶々丸、おかわり。」

「はい。マスター。……それで学園長。切嗣氏はその後どうなったのですか？」

―◇―――――◇―――――

「ＮＧＯの魔法使いがそんな彼を見逃しておくわけがなかった。彼らは切嗣に挑み
ましたが、悉くが戦死。立派な魔法使い（マギステル・マギ）を目指す多くの魔法使いが殺されました。」

「そして彼の噂は裏の世界を通じて関西呪術協会にも伝わりました。
西洋魔術師を憎む
者が少なくない関西で、彼は畏敬を籠めて「魔術師殺し」と呼ばれるようになり、
再び裏の世界を通じてその異名が定着し“魔術師殺し（マーダー・メイガス）”と恐れられる
ようになったのです。」

◇――――――――――◇――――――――――◇

「わしが知る中で、奴とマトモに戦って生き残ったのはタカミチだけじゃのう」

「……何だと？そこまで強かったのか、士郎の父親は？」

「いや、当時のタカミチはまだ若かったしのう。じゃが、単純な戦闘力なら切嗣より

強い魔法使いは大勢いたじゃろうな。だがアレは、戦争の天才じゃった。

特に罠や暗殺に長けておったようじゃのう。

それに“魔術師殺し”という名もあながち間違いではなかったらしい。奴と戦った

魔法使いは呪文が使えなくなるという噂があった。無詠唱呪文は別らしいが。」

「ハハハッ！！何だそれは！！罠や暗殺に長けた魔法使いだと？それはいい！！

立派な魔法使いとやらを目指す輩とは抜群の相性だったろうよ！！

そして強制的な呪文詠唱禁止か。無詠唱呪文を使えない者にはこれ以上ない

切り札だな。だが、それだけで生き残れるはずもない。他にも何か隠し玉があった

のだろう。クク……流石はあのバカの父親だ。」

（ああ、マスターがあんなに楽しそうに……）

―◇――◇――◇――

「そして彼とアイリスフィールさんは結ばれたのです。」

「……は？」

「ですから、切嗣と貴方の母君が……」

「いやいやいや待て、いま随分はしょったろ！？」

「いや……二人の馴れ初めは恥ずかしいから出来れば誰にも話すなと、切嗣に
言われていたものですから。知っているのは私とお義父さんだけでしょう。
酔っていた彼から無理やり聞き出したんですよ。」

「……ここまで来たら全部話してくれよ」

「そうですか……。わかりました。一目惚れだったそうです。」

「そうか……。ってはいいいい！？」

「ＮＧＯの魔法使いだったアイリスフィールさんは戦場で切嗣と出会い……

両方とも、一目で好きになったと。」

ちなみに親父の方は「雷が落ちたようだった」と、

母さんは「この人しかいないと思った」と言っていたとか父さんが言っているが

俺の頭には入らない。

爆炎、煙、銃声、爆音、狂気。血と火薬の匂いが充満する戦場で一目惚れ？

……ありえない。

「そして彼は戦場から居なくなり、数年後、お義父さんの前に現れた。

「子供ができた。自分は父親になるんだ」と、そう言ったそうですよ。それが

貴方の姉、イリヤスフィールさんです。」

「……。」

「更にその数年後、赤ん坊の貴方を連れて私とお義父さんに会いに来ました。

麻帆良でお義父さんに、京都で私に。そして麻帆良で、両方と会いました。
その時三人で酒を交わして、馴れ初めを聞き出したんですよ」

―◇―――――――◇―――――――◇―

「あの時のイリヤちゃんと士郎は可愛かったの～。おお、そうじゃ。確かあの時の
写真が残っておったハズ……え～と」

「――――――ぴくっ」

（……士郎の赤ん坊の頃の写真……。）

（マスター、興味津々ですね）

「お？おお！！あったあった、これじゃ。いや～懐かしいのぉ」

「じじい。ちょっと見せろ。早く見せろ。いや、もうよこせソレを。」

「なんでじゃい！？わしだってこれ一枚しか持っとらんのじゃぞ！

！そんなに欲しい
なら後で焼き増ししてあげるから……」

「いやだ。いま欲しい。さあよこせ。さあ！！」

「くっ……目の色を変えおって……！！ふむ、ならば碁で勝負を着けようぞ！！」

「ほう？今年に入ってまだ私に１０回も勝てていない老いぼれのセリフとは思えんな。
ハッ、いいだろう！！この私に挑んだ事を後悔するがいい！！」

―◇―――――◇―――――◇―――――

「アイリさんと出会って戦場から足を洗った切嗣でしたが、そこで買った恨みは膨大な
ものでした。いつ襲われてもおかしくなかった。
君たち一家は転々とした生活を送り、――――――アメリカに渡ったのです。」

そう。そして。あの《事故（テロ）》が起きて――――――

――――――――――――――――――――俺だけが、生き残った。

「……話はこれで終わりです。」

「……そうか。」

「……大丈夫ですか？」

「……ああ。」

ああ、確かにショックは受けてる。実の父親が大量殺人犯なんて聞いたら大抵の人は混乱するだろう。

だが、俺がショックを受けたのはそこじゃない。そこじゃないんだ。

――――――――――――――――――――――――――――――――同じだ。

同じなんだよ。

《アーチャー》の記憶の中の《衛宮切嗣》と、同じなんだ。

その事実が、俺の頭から離れなかった。

◇

夜も更けた学園長室。そこに凄惨な光景が広がっていた。

「か……返せ……わしの、孫の写真……」

「往生際が悪いぞじじい。フフフ、もうこの写真は私の物だ！！」

倒れ伏した学園長とホクホク顔のエヴァ、それを達観した目で見つめる茶々丸。

（今ごろこの話を聞いている士郎さんはどうしているでしょう……？

ネギ先生はお疲れでないでしょうか……？）

少しはこのロボを見習うべきだ、他の二人は。

―◇―――――◇―――――◇―

自動ドアを開けて外に出て行くネギとある女性がすれ違う。

ホテルの従業員のような服を着てカートでタオルを運んでいるが……

「フフ……カワイイ魔法使いね……。」

（式神返しの呪符を貼られた時はどないしよ思たけど……）

「入れてくれておおきに、坊や。さて、お仕事始めましょか……」

駆けて行くネギを一瞥し嘲笑うような台詞を吐いて、彼女はホテルに侵入した。

……式神と共に。

第３２話　修学旅行編　一日目・中（後書き）

～補足・解説～

・ウチに来たばっかの頃の士郎はボーっとしててな、危なかってん。
・せっちゃんは剣道やってて、そんな士郎やウチをよく助けてくれたんや。

この頃の士郎はボケボケだったので、刹那がよく面倒をみてました。後に木乃香と共に士郎に助けられてからは彼に一目置くようになり、今では尊敬しています。

・切嗣に関して
彼に関しての詳しい設定を記述するつもりはないです。要望があれば載せますが。「執筆中小説」の中に保存してあるのでいつでも投稿できます。でも出来が悪いんだよなぁ。

・その後彼はお義父さんに弟子入りして西洋魔術…魔法を学んだそうです。

近衛家なのに西洋魔術師となり、あまつさえその組織のトップになった近右衛門は関西呪術協会では悪い意味で有名ですからね。切嗣も当然彼を知っていました。
そして人々の力になるマギステル・マギは切嗣の思想に近いものがあり、魔法は「正義の味方」となるには絶好の技術だと切嗣は考えたのです。

＊誤字・脱字・矛盾点・疑問点があれば感想へお寄せください。
これからは少しオリジナル要素が混じってくるのでどこかを間違えると思うんです。

それでは次回。

第３３話　修学旅行編　一日目・下（前書き）

それでは３３話どうぞー。（↑なげやり）

第３３話　修学旅行編　一日目・下

『しまった、騙されました！！』

『ごめんネギ！このかが攫われちゃった、どうしよう！！』

―◇―――――◇―――――

昔使っていた俺の自室。２年前に帰って来るまでの６年間と、この２年間。

長らく空けていたはずなのに埃ひとつ無いのはおそらくあの人のおかげ。毎日欠かさず掃除してくれていたのだろう。苦手ではあるが、あの人には本当に頭が上がらない。

俺は手を頭の後ろに組んで横になっていた。

「……なんの冗談だよ……。」

《あちらの世界》の切嗣とこちらの切嗣の人生。その在り方。似過

ぎている。
「平行世界」という理論が存在するが、ここと向こうはもはや「異世界」だ。
その考えが当て嵌まるとは思えない。

「……俺も、そうなのかな」

俺と《アーチャー》……《エミヤシロウ》が似てるとは思わない。
彼と俺は別人だ。

そう、思ってた。

でも本当に、そうなんだろうか？

《エミヤシロウ》は俺くらいの歳に戦場に身を置いた。

いつか俺もそうなってしまうのではないか？

いつか『彼の記憶』に侵食されてしまうのではないか？

いや、もう既に影響されているのかもしれない。

俺の使う戦術・魔法は『彼の記憶』から読み取ったものを基にしているのだ。

思考や思想も影響されていておかしくない。

「…………くそっ…………………！！！」

……誰だ。

――――――――――――俺は、誰なんだ。

（…………！　…………………。）

「京都の街中（まちなか）を“式”が高速で移動してるな……。」

感覚を研ぎ澄ます。集中力を高めるため、自己暗示のスイッチを入れる。

「トレース・オン」

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

京都駅に向かう電車の中。木乃香とネギの魔力を感じる。

「……おいおい。何の冗談だ？」

『潜在的ではあるが、このかには莫大な魔力が眠っておる。その量は極東最高。
かのサウザンドマスターを凌ぐほどじゃ』

俺は”潜在的な”魔力を感知することは出来なかったが、今ならわかる。間違いない。
木乃香の強大な魔力が目覚め始めている。

そして二人の傍に幾つかの気を感じる。

「符術使いか……。どこの馬鹿だ？――――来たれ（アデアット）。」

布団から起きて立ち上がり、戦闘装束を喚（よ）びよせる。
黒いブーツ、黒いズボン、黒いコート。それらを纏う。

「――――とんだ帰郷になったもんだ。」

そう独りごちて、士郎は夜の京都を駆けて行った。

『しまった、騙されました！！』

『ごめんネギ！このかが攫われちゃった、どうしよう！！』

『落ち着いてください！なにか敵の持ち物が落ちてませんか？追跡魔法をかけます！！』

『いた！！』

「ちょっと！ただのイヤガラセじゃなかったの！？なんでこのか一人が攫われるのよ！？」

「じ、実は関西呪術協会の中に、関西（こちら）の出身であるこのかお嬢様を関東魔法協会である麻帆良にやってしまったことを快く思わない輩がいて……。

おそらくヤツらは……お嬢様の力を利用して関西呪術協会を牛耳ろうとしているのではないかと……。」

「な、何それ！？」

「私も学園長も甘かったと言わざるをえません。まさか修学旅行中に誘拐などとは……
しかし関西呪術協会は裏の仕事も請け負う組織。こんな暴挙に出る者がいても
おかしくなかったのです……！！」

『向こうでいろいろ起こると思う。木乃香のこと……頼むな』

「くっ。私がついていながら！！」

「あっ刹那さん！！」

京都駅の大階段。その中腹の踊り場で符術使いの女は刹那たちを待ちかまえていた。
さっきまで着ていたサルの着ぐるみは傍に脱ぎ捨てられている。

「よーここまで追って来られましたなあ。でもしつこい人は嫌われますえ。それも
ここまでどすけどな。お札ちゃんいかせてもらいますえ」

「おのれ、させるかっ！！」

「『お札さん、お札さん。ウチを逃がしておくれやす。』喰らいなはれ！！

三枚符術・京都大文字焼き！！！」

「うあああっ！！」

「――桜咲さんっ！」

大の字型の巨大な炎が出現し、符術使いと刹那たちを隔てる壁となる。

刹那は間一髪で明日菜に引き戻され、燃えるのを免れた。

「ほほほ、並みの術者ではその炎の壁は越えられまへん。ほなさいなら。」

「！！　こっの……！！」

「――――吹け一陣の風（フレット　ウネ・ウエンテ）。風花・風塵乱舞（フランス　サルタティオ・プルウエレア）！！！」

「な、何や！？」

「きゃあっ！！」

「くっ！！」

――――突風。吹き荒れる突風が燃え盛る炎を消し飛ばす。

「逃がしませんよ！！このかさんは僕の生徒で、大事な友達です！！行きますよ

アスナさん！！契約執行１８０秒間！！『神楽坂明日菜』！！！」

「りょーかいっ！！行くよっ！！桜咲さん！！」

「え……あ、はい！！」

「アスナさん！パートナー専用のアイテム――”アーティファクト”を出します！！
『ハマノツルギ（エンシス・エクソルキザンス）』、多分武器だと思います！！」

「武器！？よーし頂戴ネギ！！」

「はい！『能力発動・神楽坂明日菜』！！」

明日菜の手に、スチール製のハリセンが現れた。

「どこが武器よーーーーーーーーーっ！？」

「あ、あれー？」

「神楽坂さん！！」

「敵はもう目の前だ！いっちまえ姐さん！！」

「も――――しょーがないわねっ！！喰らいなさいバカ猿女！！！」

「――――――怨（オン）。猿鬼（エンキ）、熊鬼（ユウキ）。」

――――――ガキンッ！！

――――――ズパァンッ！！

「うわった……！？何コレ！？」

「術者を護る式神、善鬼と護鬼です！間抜けなのは外見だけです、気をつけて！！」

人間大の猿と熊のぬいぐるみのようなものが明日菜と刹那の攻撃を防ぐ。

「ホホホ、ウチの自慢の式神やえ！一生そいつらの相手でもしときやす！！ほな……」

「ま、待ちなさいよ！！このぉーーーーーっ！！」

――――――ズパァアンンッ！！！

『――ムギッ！？』

「あ・あれ？」

明日菜のハリセンを喰らって、煙のように消えてゆくサル。

（な。なんや？ウチの猿鬼が簡単に倒され……いや、送り還されてしもた！？）

「す、すごい…神楽坂さん……」

「な、なんかよくわかんないけどいけそーよ！！そのクマは任せてこのかを！！」

『く、くまっ！？』

「すみませんお願いします！！」

「……さあ、覚悟しなさい……。おサルに服を剥がされた恨み、ふふふ……」

『ク、クマーーーーーーーーーーーーッ！？』

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

「スミマセン、遅刻してもーて……」

「全く、遅いですえ月詠（つくよみ）はん。」

女に迫る刹那の前に立ちはだかったのは、ロリータ風の服に身を包

む眼鏡の少女。
太刀と小太刀の二刀流剣士のようだ。

「こちらが敵さんですか?神鳴流の月詠いいますー、お初にー。…
…アレ?
もしかして神鳴流の先輩さんですかー?」

「……こんなのが神鳴流とは、時代も変わったな……。」

刹那は少々唖然としている。

「甘く見たらケガしますえ?ほな任せますえ月詠はん。」

「はい~。ほんじゃセンパイ、楽しみましょ~♪」

「えーい」

「やあ」

「たー」

「とぉーーーーーー」

気の抜けた声と共に鋭い剣閃が振るわれる。
右の長刀で斬りつけられ、その隙に斬り込まれた左の短刀を切り返した夕凪で防ぐ。
ガラ空きになった刹那の左に長刀が迫るが、月詠の腕を掴むことで回避する。

同じような攻防が何度も繰り返される。

（い・意外にデキる……マズイ、時間が……！）

「ホホホ、神鳴流剣士は伝統か知らんが化け物相手用のバカでかい野太刀を
後生大事に使てるさかいな。小回りの効く二刀を相手にするのは骨が折れるやろ？」

その通り。今は刹那の体術で躱し・いなし・防いでいるが、純粋な剣術では月詠の方
に分がある状況だ。

『キャーーーーーーっ！！またおサルーーーーーーーー！？』

『ウッキィーーーーーー！！』

新たに召喚された猿の式神たちが再び、明日菜の服を剥ごうと絡みつく。

「これで足止め完了や。所詮は見習い剣士に素人中学生……」

「――――――いいえ、まだ僕がいます！！」

「……っあ……しまった！！」

「風の精霊１１人！縛鎖となりて敵を捕まえろ！！魔法の射手・戒

めの封矢！！」

「ひいっ！！お助けーーーーーーー！！」

符術使いは思わず木乃香を盾にした。

「あっ！？曲がれ！！」

「……あ？……フフ、なるほど。読めましたえ？
甘ちゃんやなあ、人質がちょっと傷付くくらい躊躇わんと撃ち抜けばえーのに。
本当にこのお嬢様は役に立ちますなあ！！あはははは！！」

「こ、このかさんをどうするつもりなんですか！？」

「どーやって、そやなあ……。呪薬と呪符使って口きけんよーにしてから……
ウマいことウチらの言うコト聞く操り人形にするのがえーな……。ククク……」

――――――　一瞬で空気が凍りつく。

「な……。」

「なんですって……！！」

「……！！！」

符術使いの女は気づかない。
己の敵対者たちの変貌を。
自分がこの状況を作り出してしまったことを。

明日菜は無理やりハリセンを振り回して式神をに送り還し、
刹那は力任せの豪剣で月詠を吹き飛ばす。

『ウキーーーーッ！！』
『クマーーーーーーーーー！！』
『ひゃあ～～～～～』

「なっ、なんやて！？」

明日菜は式神の拘束から脱出し、眼鏡を落とした月詠は刹那を追う事ができない。

そして。

「――――――風花・武装解除！！！」

「んなぁ～～～～～っ！！？」

ネギが武装解除で女の服と共に全ての呪符を花びらへと散らし、そのとき発生した風が女と木乃香を引き離す。

「このかから……！！」

「お嬢様から――――――」

「「――――――――――――――――離れろッ／離れなさいッ！！！！」」

「――――へぶっ！！」

ハリセンと刹那の剣撃を喰らって、女は遥か後方へ吹き飛んでゆく。全裸で女性が吹き飛ぶなど、どんな状況だろうか。

「ぐ……な、なんでガキがこんなに強いんや……！！」

（見習い剣士に式祓いのできる素人、赤髪の魔法使いのガキ……調べといたほうがええな……。）

「猿鬼（エンキ）２！！」

『――――ウキッ！！』

先刻召喚しておいた式神を呼び出し、一味はその場から逃げ去った。

「覚えてなはれーーーーーー！！」

「あわわわ、メガネメガネー」

「あっコラ待ちなさいよ！！」

「いえ、深追いは禁物です。それよりお嬢様を！」

―◇―――◇―――◇―――

「そう言えばアイツ薬とか呪符を使うとか言ってたよな？
このか姉さんは大丈夫か！？」

カモの発言で一同の顔が青ざめる。

「こ、このか！！大丈夫！？このか、このか！！」

「……このかさん……！！」

「お嬢様！しっかりしてください！！このかお嬢様！！」

「ん……？　あれ？　せっちゃん……？」

「……良かった……！……もう大丈夫です。このかお嬢様……。！！？

ど、どうしたんですかお嬢様！？」

目が覚めた途端、木乃香の目に涙が浮かぶ。

「ど、どこかお怪我でも――――」

「よかったあ……。

せっちゃん、ウチのコト嫌いになったんやなかったんやなあ……」

「――――――え……。」

（そない風に思っとったんや……い、いや、でも……）

「そ、そりゃ私かてこのちゃんと話し……ハッ！？」

思わず出た本音に本人が驚く。飛び上がって後ろに下がり頭を下げて、

「し、失礼しましたっ！！私はこのちゃ……お嬢様をお守りできればそれだけで

幸せ……いやそれもひっそりと影からお支えできればそれで……あの……！」

「――――御免！！」
「あっ、せっちゃーーーん！！」

「刹那さん……。」
「うーん、いきなり仲良くしろって言っても難しいかー」
「やっぱそう簡単にはいかねーべ。」
（！！カモ君、このかさんがいるのに喋っちゃダメだよ！！）
（おっといけねえ！！）

「よし！　桜咲さーーーーん！！明日の班行動一緒に回ろうねーーーー！！約束だよー
ーーーー！！」

「アスナー……。」
「大丈夫だってこのか。安心しなよ。」

「てゆーかまだ修学旅行一日目なのよね……。ホントどーなっちゃうのよ。」

「僕も長さんに親書渡さなきゃ……」

長い長い一日が終わる。修学旅行はあと４日間。

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

「メガネ――――」

「ああもう、ウチの眼鏡貸したるさかい、しゃんとしいや。ウチは眼鏡なくても
動けるから。」

「おおきにー。うー、度が合いまへん……でもなんとか歩けますー」

「にしても、まさか子供に邪魔されるとは……。くっ、あのガキども……！！
次は本気でいきますえ！！」

『――――――悪いな。今イライラしてんだ。手加減は出来そうにない。』

「！？　誰や！？」

「あはー、なかなか心地いい殺気ですわ――――」

『存分に八つ当たりさせてもらう』

京都市街の闇の中。黒いコートを着た男が彼女たちの前に現れた。

「人の妹に手を出してタダで済むと思うなよ？」

「っ月詠はん！！」

「行きますえー、色男はん。」

「来たれ（アデアット）」

――――――ギィンッ！

「あら～、お兄さんも二刀ですか～」

士郎の手に現れたのは水波模様のついた白い剣と亀裂模様が刻まれた黒い剣。
中華風の夫婦剣・干將莫邪。

「ふふ……楽しめそうですなぁ……。」

「悪いがこっちには殺し合いの趣味はない。大人しくしていろ。
我流陰陽術。縛道の六十一　――――――『六杖光牢』」

――――――ドッ！！

六つの帯状の光が月詠の胴を囲うように突き刺さり、その動きを封

じる。

「うふふ……この程度でウチの動きを止めたなんて思うてないですよね？」

「そうか。縛道の六十三、『鎖条鎖縛』」

――――――――ジャラララッ……ギャリリィィィィイッ！！！

「――――――がっ！？」

巨大な鎖が絡みつき、月詠を縛り上げる。彼女はもう動けない。

「は……。月詠はんをこんな簡単にあしらうなんてなぁ……。血は繋がってない
とはいえ、流石は長の息子や……」

呪符をネギの武装解除で失い、護衛の月詠は無効化された。だというのに、彼女は
完全に余裕を失ってはいなかった。まだ、なんとかなる。そういった表情だ。

「そこまでわかってるなら諦めろ。お前の負けだ」

「フフフ、そない言われて諦める程度なら最初からこないなことせんわ。それより
……ウチは知ってますえ？アンタが『衛宮切嗣』の息子やって」

「……！！」

「アンタの親父さんはウチら……西洋魔術師を恨んどる者たちにとっては
英雄ですえ？どうや？あんさんも親父さんと同じ道を歩いてみいへんか？」

「冗談は格好だけにしとけ。この露出狂」

「なっ……！！」

ネギの武装解除を喰らい、今の彼女は素っ裸だった。

（――――英雄、だと？巫山戯るな。親父の思いも知らないで。
親父の苦悩も知らないで。親父をそんな風に扱うなよ。）

「ふ、ふふ……。いろいろと言いたいコトはありますけど……
そろそろやな。」

「何？」

――――――チャプ……。

『――――緊急事態ですか？　千草さん』

（水の……転移扉（ゲート）……！！）

いつのまにか水たまりの中から現れた、制服のような服を着た白髪の少年。

（ち、さっきの会話は時間稼ぎか……。）

だが問題ない。この少年を倒せば千草という符術使いを今度こそ無力化できる。

そう思っていた。目の前の少年と、目を合わせるまでは。

「アナタは、誰だい？」

「――――――――――――」

――違う

そんな生半可な相手じゃない

本気で、殺す気で戦らなければ――――――――――――――死ぬ

こいつは――――――――――――――――――――――――化け物だ。

「全工程（セット）投影完了――――――全投影連続層写（ソードバレルフルオープン）――――――――――――――！！！！」

一本一本が膨大な魔力を内包する掛け値なしの魔剣であり宝具たち。それら27本の剣が敵を貫かんと飛んでゆく。

――――――パシャッ

剣は彼らを貫いたが――――――――彼らの体は水に変わって消えていく。

「水の幻像（イリュージョン）！？馬鹿な、いつ――――――」

『驚いた。とんでもない剣ばかりだったよ。当たっていれば僕の魔法障壁を何枚か
貫いたかもしれないね』

消えてゆく少年の幻像が語りかけてくる。

『さっきの攻撃は何だい？あれだけの剣を呼び出すなんて。
「千の刃」の「千の顔を持つ英雄（ホ・ヘーロース・ネタオキン・プロソポーン）」でもない。
……そうか、貴方は彼の――――』

完全に消えた。千草も月詠も、少年と共に完全に逃げおおせた。

「……くそ……！！」

士郎の、完敗だった。

第３３話　修学旅行編　一日目・下（後書き）

～補足・解説～

・ついに出ました縛道！！『六杖光牢』と『鎖条鎖縛』です。
月詠に六杖光牢は効きません。アレってメチャ強い人には時間稼ぎにしかならんのよねー。でもその隙に『鎖条鎖縛』です。月詠さん油断したね。

・士郎の、完敗だった。

ブリーチ風に言うのなら、（うろ覚えだから多分間違ってるけど）

「仲間を傷つけられて
傷つけた奴を
倒せてもいいねえ。
俺は、敗けたんだ。」

士郎は間違いなく、フェイトに敗けました。

それでは、次回。

第３４話　修学旅行編　二日目・悩み悩む

修学旅行一日目、深夜。

「木乃香が狙われましたか……。しかし今、腕利きの者は皆(みな)明々後日まで
出払っているのです。敵はそれを知っていて事を起こしたのでしょうがね。
明後日まではネギ君や刹那君たちに任せましょう……」

「千草って名前の符術使いに心当たりないか？」

「……ええ。私がサウザンドマスターの戦友だと言ったら敵意を剥き出しにして
きましたからね、よく覚えていますよ。彼女は先の大戦で西洋魔術師に両親を
殺されていますから……その恨みでしょう。そうですか、彼女が……。」

「……明日はアイツら奈良らしいんだけど、敵は動くと思うか？」

「いえ、京都(ここ)は彼女たちにとっても本拠地(ホームグラウンド)ですから、奈良まで出向いて行動は
起こさないでしょう。おそらく明後日が正念場……。」

「明日から俺も張り付く。任せるって言った手前、堂々と現れるの

は気が引けるしな」

「刹那君とそんな約束を？」

「今度手合わせしてみたらどうだ？だいぶ腕を上げたぞ？」

「ほう、それは楽しみですね……。この件が片付いたらそうしましょうか」

―◇―◇―◇―

『私、ネギ先生のこと　出会った日から好きでした！
私……私　ネギ先生のこと大好きです！！』

『……え……あ……の、のどかさん……！？』

—◇

◇————————————◇————————

『ネギ君、君は魔法使い？』

『え————————』

・・・・

『……やっぱ魔法使いの取材は一筋縄じゃいかないかぁ』

『そんなコトねーよ姉さん、アンタ光るモン持ってるぜ！！』

・・・・

『くくく……じゃあ契約成立♪いいんだよねカモっち？報酬ははずんでもらうよ？』

『ＯＫＯＫ。これからよろしくな姉さん！それじゃあ準備開始だぜ！！』

―◇―――――◇―――――◇

修学旅行二日目。
奈良での自由行動を終え、夜のホテル嵐山。

「お前たち、もうすぐ就寝時間だぞ。さっさと自分の班部屋に戻りなさい！」

（へへーん新田のバーカ。徹夜の勢いで遊びまくるに決まってんじゃ――――ん！！）

キャーーーーーーッ！
キャハハッ
ドタン！！バタン！！
ギャアア～～～～ッ！！

キャッキャッ

「コラァ３－Ａ、いーかげんにしないか！！これより朝まで自分の班部屋から退出
禁止！！見つけたらロビーで正座だ、わかったな！！」

「……ねえみんな？新田はああ言ってたけど、このまま夜が終わるのはもったいない
じゃん？　いっそ３－Ａで派手にゲームでもして遊ばない？」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～

『くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦？！！』

～ルール解説～
・各班から二人ずつ選手を選び新田先生の監視を掻い潜り旅館内のどこかに居る
ネギ先生の唇をＧＥＴすれば勝利。
・班対抗だから妨害可能！ただし武器は両手の枕投げのみ
・上位入賞者には豪華賞品プレゼント！？

・新田先生に見つかった者は他言無用・朝まで正座。「死して屍拾う者なし」。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「朝倉さん………やりましょう！　クラス委員長として公認しますわ。……ハアハア」

「……ども、いいんちょ」

「見つかった人は助けないアルか！？」
「きびしっ！」
「豪華賞品って何だよ？」
「面白そーーー」
「でも見つかったら正座だよー？」
「その方が緊張感あっていいって！」
「よーし異論はないね！？各班10時半までに私に選手2名を報告！！
11時からゲーム開始・だーーーーーーーっ！！」
『おおーーーーーー！！』

（…フフフ……。ラブラブキッス大作戦とは仮の姿。その実態は仮契約カード大量ＧＥＴ大作戦さ！！）

「既にこの旅館の四方には魔方陣が描いてあるべ。これで旅館内で兄貴とチューしたら
即仮契約（パクティオー）成立！！カードが一枚発生する度にオコジョ協会からの仲介料５万オコジョ＄儲かるから……」

「更に今回は班＆個人の連勝複式トトカルチョも実施するよーーー！！！
ヒュー！！大儲けだねカモっち！！」

―◇―――◇―――◇―――

ネギの自室、３０４号室。

『私、ネギ先生のこと　出会った日から好きでした！
私……私　ネギ先生のこと大好きです！！』

『ええ～～！！魔法がバレた～～～～～！？しかもあの朝倉に～～！！？？』

『安心しな兄貴。ブンヤの姉さんは俺っちたちの味方だぜ！』

『報道部突撃班・朝倉和美。カモっちの熱意にほだされて……ネギ先生の秘密を
守るエージェントとして協力していくことにしたよ。よろしくね？』

・　・　・

「はぁー。今日も大変な一日だったなー……」

（昨日のおサルのお姉さんは襲って来なかったけど、親書を渡すまでは油断できない。
ううん、もう二日目なのにまだ親書渡せてないよ……。明日の完全自由行動中に渡しに
行かないと……。）

（のどかさんへの返事、どうしよう……。）

――――――11時。

『修学旅行特別企画！！
「くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦
～～～！！！」』

――――――――――――ゾクッ

「な、なんだろう　この寒気……。」

（やっぱり部屋（ここ）には居ない方がいいかも。ヘンな殺気みたいなものを感じるし……）

「刹那さんから貰った「身代わりの紙型」を使おう。えーとこの紙に筆で名前を書けば
いいんだよね」

紙型に名前を書けば、それが本人に成り替わって命令通りに行動してくれる。
日本古来の魔法「陰陽道」の一種。
ネギが慣れない筆で紙型に名前を書きこむ。

「ぬぎ」「みぎ」「やぎ」「ホギ・ヌプリングフィールド」
「ネギ・スプリングフィールド」

3週間で日本語をマスターした天才のくせに、数枚の書き損じを経てようやく完成。

「ふぅ、やっと書けた。筆で書くと緊張するなー、たくさん失敗しちゃったよ。
それじゃあ僕の代わりにここで寝ててね。よーし、パトロール行って来ます！！」

{はーい。}

命令を与えられた「ネギ」に任せて外の警備に出かける。
そしてネギは気づかなかった。
書き損じた紙型が勝手に動き始めていた事を……

◇――――――◇――――――◇

ホテルと言いつつ見た目は旅館。そんなホテル嵐山の瓦屋根の上に寝そべる人影。

主人公、衛宮士郎だ。

千草たちの襲撃に備えて修学旅行生を一日尾行し、今はここで見張

りをしている。

詠春の予想通り奈良では特に仕掛けてこなかったが、まだ夜は長い。

警戒を怠るわけにはいかなかったのだが、士郎は既に上の空だった。

現在、彼はただの主人公ではない。

――――――悩める主人公・衛宮士郎だ。

京都は昔ながらの街並みを残すための条例が施行されており、ビルなどの高い建物が多くない。少なくともこのホテル嵐山の周りには高い建物は建っていない。

そして天気は快晴、雲はない。

そのおかげか、星がとてもよく見えた。

「――――はあ……。」

しかし彼の心は、空と違って曇天だった。

（わかってるよ……。俺が幾ら考えたって、マトモな答えなんか出ないってこと
くらい。）

しかし気が引けるのも事実。

この程度のことで彼女の手を煩わせるのは。

（間違いなくまだ起きてる。でも、やっぱりなぁ……）

再び思考の海に潜って数分。結局彼は懐からソレを取り出した。

―◇―――――◇―――――◇―

「あー、テステス。マイクのテスト中。聞こえるかー？　……もしもーし。……。出ないな……。」

仮契約カードによる念話。あまりにも距離が離れていると会話できないが、主・従者がそれぞれに思念を送ることができる。

「おーい、エヴァ！　もーし！！　……。」

「……金髪幼女――――――！！」

『そんなに死にたいか。』

「ごめんなさい！！」

ほんの出来心だったんです。

『――――――悩みごとか？』

「……え……。」

（――――衛宮切嗣の話を聞いたのなら、そろそろだと思っていたよ。）

『それで？いったい何事だ？従者の世話も主人の役目だ、言ってみろ。

どんな悩みか知らんが相談には乗ってやろう』

……。

「自分が何者なのか……わからないんだ……」

昨日からの悩みごと。
切嗣の過去を聞いてからずっと悩んでいた。
でもわかっていたんだ。俺が一人で考えたって碌な答えなんか出ないんだって。
こんな情けないことを相談できる人なんて、コイツか師匠くらいだ。

『くだらん』

……ぐぅ。

『それ程までに自己の証明が欲しいなら、役所に行って戸籍や住民票でも確認してろ。』

「……っ。」

『……まったく、呆れた奴だ。お前の師匠は誰だ?』

「そんなの……『千の刃』の……ジャック・ラカン……」

『奴なら何と言うか考えろ。それで答えが出るハズだ』

(――――――師匠なら?)

――――『そんな小せえコト気にすんな。』

……違う。

――――――『ったく、いつも考え過ぎなんだよてめえは。』

……そうじゃない。

考えろ、師匠ならなんて――――――

『どうでもいいじゃねえか、んなこたぁ。』

「は……はは……！！！」

思わず目に手を当て笑う。

そうだ。あの人ならこんなこと、最初から問題にしないんだ、絶対。

「俺」は『俺』だ。でも俺はそれを信じきれない。肯定できない。でも。

――――――――――――――――――《俺》が此処に在(い)ることを、誰が否定できる？

なら――――――

「わざわざありがとうございました、御主人様。」

『ああまったくだ。だがまあ仕方あるまい。不甲斐無い従者に喝を入れてやるのも主の仕事だ。これからも甲斐甲斐しく私に尽くすがいい。』

「はいはい、了解しましたよ。闇の福音(ダーク・エヴァンジェル)。――――――ありがとう。おやすみ、エヴァ。」

礼と挨拶を告げて念話を切る。

（――――――――……。）

「なんだ。こんな綺麗なのに気づかなかったのか。」

星空を眺めて、士郎は呟いた。

「……そして妙な魔方陣があるんだが」

士郎も事態に気づき始めた。

――◇――――――◇――――――◇――

『おおーーーっとぉ？ゴールであるネギ先生の部屋の前で１班と５

班がエンカウント！
　両班とも敵を欺く移動手段を使っていたようだが運が悪かった！
！バトル開始ーー
　ーーーーーー！！
『

楓から忍術もどきを習っている鳴滝姉妹が天井裏から現れ、非常口から侵入した夕映・のどかと鉢合わせてしまった。
そして何故か双子は忍装束のコスプレをしている。

（こんなところで時間をかけるワケにはいかないです！）

《ここは私が食い止めるです！！のどかは早く先生の部屋へ……！！》

《ゆ、ゆえっ……！！で、でも……》

《フッゆえ吉。我ら甲賀忍軍に敵うと思うてか！！》

《お、思うてか！！……でござる～》

《おっ？　エモノ発見アル！！》

（（（（（くーふぇさん／くーふぇ！？））））））

体力自慢の古菲と楓が参戦。４人に古が襲いかかる。

《ハイヤーーーーッ♪》

《早くっ、ドアを閉めますっ！！》

《ゆ――――あうっ！！》

夕映がのどかをネギの部屋に突き飛ばし、ドアを閉めた。

「ごめん…ゆえ……。……あ……」

「ネギ先生（せんせー）――――……」

のどかの目の前には、布団の中で寝息を立てているネギがいる。

（せ、せんせーとキス……。）

のどかの心臓の鼓動は鳴り止まない。

極度に緊張した状況で、下手をすれば呼吸することすら忘れてしまいそうだった。

それでものどかは、ネギの方へ歩を進める。

ネギの傍に腰を下ろして――――

「すみませんネギ先生……こんな形でー……」

「でも…でも、私　嬉しいです……。先生…キスさせてください……。」

〜わかりました。〜

「――――――え」

〜キスですか。〜

〜チュー〜

〜いただきまーす♪〜

〜了解しました。〜

命令を与えられなかった書き損じの分身と分身ネギが、のどかの言葉を命令と受け取ってしまった。

「ひゃあああああぁぁ〜〜〜〜〜〜〜っ！！！」

そりゃあ、リアルに同じ人間が5人もいたら驚くだろうねえ。

◇――――――◇――――――◇――

その頃、エヴァンジェリン邸では。

「マスター、何かいいコトでもあったのですか？」

夜の読書に勤しむ主の為に、紅茶を準備していた茶々丸がキッチンから出てきた。

「……なんだイキナリ？」

「いえ、どこか笑っているように見えましたので」

「……そうか。」

そう言って紅茶に口をつける。

「心配ではありませんか？」

「まさか。」

誰が、とはどちらも口にしない。

「アイツは大丈夫だよ」

（そう、もともと私の助言など必要なかったんだ。何故ならあの馬

鹿は――――――）

いつも細かい事でウジウジと悩むくせに。
いざという時は迷いも弱さも吹っ切って進むんだ。アイツは。

「マスター……。」

「今度はなんだ？」

「……いえ、なんでもありません。」

今度こそエヴァが笑っていたことを、茶々丸は胸に仕舞っておくことにした。

第35話　修学旅行編　二日目・キス騒動

『ひゃあああああぁぁ～～～～～～～っ！！！』

叫び声を聞き付けた一同の目に飛び込んできた光景。

開け放たれた窓。そこから吹きこむ風がカーテンを揺らし、月光が部屋を照らす。

その部屋の布団の上に、人間が倒れている。

――――――宮崎のどか。

「ほ、本屋が死んでるアル……！！」

「「ええーーーーーーっ！？」」

「アホですか！！　そんなワケないでしょう！！　のどかっ！！　大丈夫ですか！？　しっかりしてください！！」

「う、う～ん……ネギ先生が…5人……」

「何言ってるですかっ！」

「ネギ坊主は窓から逃げたアルかッ！！」

「史伽！！追うよっ！！」

「あっお姉ちゃん！！」

・　・　・　・

『え――5班の宮崎選手が果敢にもネギ部屋に突入しましたが――
――どうやら失敗した模様。ネギ先生は逃走しました！！』

「……朝倉の姉さん。」

「何よカモっち」

「なんか……ネギの兄貴が5人いるように見えるんだけど」

「……な……？」

現在二人（？）に占拠されている部屋に設置されたモニターに、ネギの分身たちが
映っている。

彼らは「キスする」という誤った命令の為に、動き始めていた……

……

そのころ、本物のネギ。

「ふう……異常なし。そろそろ旅館にもどろうかな。」

その旅館でこそ異常が発生していると彼は知らない。

「でも、のどかさんのこと……本当にどうすればいいんだろう。」

「…いつまでも先延ばしにはしておけないよね……よし！」

ネギは決意を胸に、旅館に踵を返した。

―◇

主催者側も異常を察知した頃……。

旅館の周りに描かれた魔方陣の前に立つ士郎。

（二重円の外円の内側に十二星座、内円には六芒星――――仮契約の魔方陣。こんなバカをしでかすのは――――――）

『げへへへ。いっちょブチューッといっちまうかぁ？仮契約！！』

カ――――――モミ――――――――――ル。

（どんな構造してんだ、消えねえぞ魔方陣！！）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～～～～～～～

「そういえばさあ、カモっち。仕掛けた魔方陣って何かの拍子に消えちゃったりしないの？」

「ああ、バッチリさ。普段　人や動物が来ないような場所に敷いたからな。それに不測の事態に備えて――――」

「俺っちをどうにかしない限り決して消えないような仕組みになってんのさ。」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～～～～～～～～

「…………行くか。旅館」

（どんな理由か知らないが、そんな簡単に一般人を魔法（こちら）の世界に巻き込まれては堪らない。みっちり締め上げてやる…………）

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

ネギの部屋、３０４号室。

「う、う～ん……」

「私がネギ先生を連れて来ますからここで休んでいるですよ、のどか。よし、行くです！！」

気絶したのどかを介抱し、勇んでネギ探しに行こうとしたところで

――――ガラッ

「あ、どうも夕映さん」

「ネ…ネギ先生！？いや…丁度良かったです、実は――」

「のどかさんは寝てるんですね……。それは僕も丁度良かった」

（……え？）

「今日、のどかさんに告白されて考えたんです。……突然こんなこ

と言いにくいんですが……僕、僕は……」

「――――――夕映さんのことが……」

（――――ビクッ）

「キス…してもいいですか？――夕映さん……」

「えっ……な、な……ネギ先生……？」

―◇―――◇―――◇―――

旅館・玄関ロビー。

「……」

「……」

「……。」

（えーと……？）

「…何してるんだ？」

「…あははー。見てわかんない？」

「……正座してるな。」

士郎の目の前には、ロビーの端で正座する裕奈と千雨。

「いやー、騒ぎ過ぎて新田に正座させられてんの。」

「……流石。」

流石、元気（騒がしさ）には定評のある３－Ａである。と士郎は思った。

ジィ～～～～～～ッ。

千雨を見つめる。

「……なんだよ」

「いや。千雨ちゃん、修学旅行楽しんでるなぁ～って」

「楽しんでるワケねえだろこの状況でっ！！アタシはムリヤリ参加させられたんだよ！！てゆーか何でアンタがここにいるんだよ！？京都に実家があるとは聞いたけど！！」

「裕奈ちゃん、ネギがいま何処にいるか知ってるか？ちょっと用事があるんだけど」

「サラッと流すなぁっ！！」

「いやーそれがさー」

ラブラブキッス大作戦。ネギにキスした者が勝者。ネギは現在３０４号室にいる。

こんな騒動の中でカモがネギと一緒にいるとは思わないが、手がかりはネギだけだ。

士郎は３０４号室に駆けた。

―◇――――――――――◇――――――――――

「夕映さん」

「あっ」

頭が真っ白になった夕映は抵抗することも忘れて壁に押し付けられる。

「み、見損ないましたよネギ先生！！のどかに告白されてすぐ私に迫るなんてそれはないでしょう！！それに……のどかがそこで寝ているというのに……っ！！」

「…すみません。それでも……夕映さんとキスしたいんです」

「あ、う……？」

（ま、まさかそんな、ネギ先生が私のことを……？　いや、この状況は何か変です！！　お、落ち付きなさいダメです私。のどかは

先生のことが……）

「や……だ、だめ……あっ！？」

頭に手を回されて――――――

（だ、駄目です――――――――――！！）

（～～～～～～～～～っ！！）

――――――ぐいっと、体を引っ張られた。そのままその人の腕の中に。

「――――大丈夫か？」

夕映が声の主を見上げると。

「……し、ろう……さん……！！」

｛邪魔するんですか、士郎さん？｝

剣呑な声でネギが言い放つ。その目は異様な光を湛えており、夕映の目にも異常がはっきりと理解できた。
そして決定的だったのが、テレビから聞こえてきたゲームの中継。

『5人の先生が一斉にキスの体勢に入った――――――――！！しかしこの期に及んで各班なかなかキスの実行に移らない！！そして5班の綾瀬選手はどうなったのか！？このカメラの位置では見えない！！』

「な……！ではコレは――――ニセモノということですか！？」

｛いいえ、ネギです。｝

「夕映ちゃん」

「な、なんですかっ」

（あ、ああっ！！　いま私の顔は真っ赤になっているのでしょう。ニセモノのネギ先生に迫られて押し切られそうになっていたところを……キ、キスしようとしていたところを、み、見ら、見られ……）

「――――もう大丈夫だから。安心しろ」

自信に満ちた目で夕映を見て、あまつさえそのまま微笑みかけてくるものだから――――
夕映は再び赤面した。

（なっ……あっ、き、今日は厄日です！！男性運が最悪に違いないのですっ！！）

『――――――――失せろ』

士郎が言霊を放つと

――――――――ボウンッ！！

「ひゃあっ！？」

音をたてて偽ネギが爆発し、煙が充満する。床に落ちた人型の紙をすかさず士郎が回収した。

「…何ですか今のは？」

「さあ、大方朝倉のやつが用意したゲームの仕込みじゃないのか？」

そう言って誤魔化してこの場を後にする。

「ネギはここにはいないみたいだな。じゃあ俺はもう行くよ、じゃあな夕映ちゃん、気をつけてな。」

「ぶ、物騒なことを言わないでくださいっ。」

（まだニセモノがいるみたいではないですか……いや、ゲームの主催者が朝倉さんなのですから、その方が自然かもです……）

正解。ちなみにあと４体。

「う、う～ん……？　ゆえ～？」

「！！　目を覚ましたのですね　のどか！！」

◇――――――――――◇――――――――――◇

旅館内の見回りを終えてこっそり入浴中の明日菜と刹那。

「ねえ、何か旅館の方ヘンじゃない？」

「…たしかに。害意はないようですが……逆に不気味というか、事態が読めませんね……」

「んー。なんか気になるなぁ……そろそろ上がろっか？」

「そうですね」

ジィ――――――……

「な、なんですか？」

「いや、桜咲さんの肌って本当にキレイよねぇ……」

「!？　い、いや私などそんな……！！か、神楽坂さんだってスタイルいいじゃないですか！！」

「……もっとスゴイのがウチのクラスにはわんさかいるのよね……」

「……ですね……」

……どちらも得をしない、不毛な会話に終わった。

―◇―――◇―――◇―――

旅館の廊下を走る。

「のどか！アナタはさっき『ネギ先生が5人』と言いましたね？」

「う、うんー。びっくりしてよく覚えてないけど……」

「考えてみたのです。ネギ先生がこんなアホな騒ぎに参加するとは思えません。ソレはおそらく朝倉さんが用意したニセモノ。本物は別のどこかにいるハズです！！」

「あ、そっかー……。！？　あわわっ！？」

「な、なんですか！？」

２Ｆ廊下にまき絵が倒れている。気絶しているだけのようだが……近くの観葉植物の鉢は倒れ、まき絵愛用のリボンが遠くに飛ばされている。

（ああ、ニセ先生が爆発したのですね……）

「安心しなさいのどか。ネギ先生のニセモノが爆発して気絶しただけです」

「ば、爆発！？　せんせーが爆発するのっ！？」

１Ｆ廊下。
楓と古菲。

「……リ、リーダー……」

「……まさか、バカレンジャーの武闘派が二人とも……！？」

「不覚…で、ござ……ガクッ」

「長瀬さーーーーーーーーん！！」

そのまま1F廊下を移動中。

「ゆ、ゆえっ！！中庭でふーちゃんとふみちゃんが……」

中庭で鳴滝姉妹がのびていた。

「死して屍拾う者なし、です」

玄関ロビーのそばで。

――――――BOMッ！！

「……委員長……。」

委員長・雪広あやかが偽ネギにキスして……爆発した。

「そ……そんなバカ…な……ガクッ」

（最後の一人だったからホンモノだと思ったのでしょうが……やはり……）

『なんと全員がニセモノ！！この瞬間トトカルチョは親（あたし）の総取りかぁーーーーーーー！？』

不測の事態でも儲けを計算するその精神、脱帽です。

『と？　おぉーーーっと、ここで本物の登場だぁーーーーーーー！！』

自動ドアが開いて、現れたのは本物のネギ・スプリングフィールド。

（！！今度こそ本物の先生です！！ほら、のどか……！）

（っう、うん……）

「あ……。…宮崎さん……。」

「せ……ネギ先生……。」

◇――――――◇――――――

「まったくウチのクラスは――――。せっかく奈良で本屋ちゃんがネギに告白したのに」
「マジか!?　あのおとなしそうな宮崎さんが……スゴイな。」
「士郎さん？　なぜ当たり前のようにここにいるんですか？」
物陰から様子を窺う3人。明日菜・刹那・士郎。
「この『ラブラブキッス大作戦』でキスしちまうと、ネギと仮契約が成立するようにしやがったんだよ、カモミールが」
「なにそれ!?あ・のエロガモ～～～」
「お、お嬢様は参加されてないですよね!?」
「あっ、なんか話始めたわよ、あの二人!!」

「あの……お昼のことなんですけど……」

「！！　い・いえ――、あのコトは聞いてもらえただけで――――……」

「すいません宮崎さん。僕まだ１０歳だし、人を好きになるとかよくわからなくて……それに、先生と生徒だし……」

「だから僕、ちゃんとした返事はできないんですけど――――、あの……」

「――――友達から……お友達から始めませんか？」

「……はいッ？」

◇――――◇――――◇――――

「へ――――♪」
「そこらへんの１０歳にあんな答え出せないぞ。やるなーアイツ」
「……／／／／／／／／」
明日菜と士郎は二人の微笑ましい恋愛模様（？）で保護者な気分に。
刹那は顔を赤くして黙っていた。

―◇―――◇―――◇―――

「じゃ、そろそろ部屋に戻りましょうか。」
「は、はい」
（……。）
――――ガッ
夕映がのどかの足を引っかけた。

「「あっ」」

ネギは倒れるのどかを受けとめようとして、のどかはそのままネギの方へ倒れて――――――――――

図らずも、二人の唇が重なる結果となった。

「あっすすすすいませっ……」
「いえっあのっこちらこそ……」

（まったく。この二人はこれくらいやらないと仲が進展しないです。）

モニター越しに湧き上がる観客たち。

『本屋ちゃんの勝ちだーーーーーーーーーー！！』
『おおーーーーーーーーーー！！』
『優勝・宮崎のどかーーーーーーーーーー！！』
『誰か賭けたやついるーーーーー！？』

物陰の三人組は。

「な……なにやっちゃってんのよネギのヤツ……！！」
「いや、アレは夕映ちゃんだろ、原因。何やってんだ……。」
「……／／／／／／／」

「コラァ！！何やっとるかーーーーーーーーーーーーー！！！」

『！！！』

鬼の生活指導・新田先生がご降臨あそばされた。彼の後ろには連行された他の生徒たちが。

「全員朝まで正座ーーーーーーーーーッ！！ネギ先生もです！！まったく、生徒と一緒になって遊んで……！！」

「あ、新田先生。ちょっとよろしいですか？」

「ん？　おお、士郎君じゃないか！！どうして京都に……ああそういえば実家が京都
だったな」

「ええ、ちょっと用事があって帰省してたんですが…それより、この騒ぎには主犯が
いるんですが……。」

「よっしゃーーーー宮崎のどか仮契約カードＧＥＴだぜーーーーーーーーー！！」

「おおっニセ先生とのキスでもカードは出るみたいだね、計６枚じゃん！！」

「大がかりだった割には成果がショボイが仕方ねえ！！」

「そろそろズラかるよカモっち！！」

ガチャッ

「え？」

「なるほど朝倉……お前が主犯か」

おに　の　にった　が　あらわれた　！！

「ありゃ――――――……」

朝倉和美・捕縛。

（ま、それなりに儲かったし？　良しとしますかね。）

そんな朝倉の視線の先には――――――

（旦那！！潰れる！！内臓が潰れ…ギャアアアッ！！……ごぷッ）
（ククク……どうしたカモミール？お前が逃げないようにちょっと強く掴んでいるだけじゃあないか？）

「どうした朝倉、さっさと来い！ロビーで正座だぞ！！」
「はーい」

（……骨は拾ってあげるよ、カモっち）

こうして修学旅行・二日目は幕を閉じた。

第３５話　修学旅行編　二日目・キス騒動（後書き）

第３５話・Ｂルートを載せようと思います。かつてのＡルート。

ずーっと迷っていたのですが、

当初のルートでは夕映ちゃんが士郎とパクティオーする予定でした。

久しぶりにコミックスを読んでのどかとの三角関係で悩んだり泣いたり顔を真っ赤にするゆえちゃんを見て悶えて、「ゆえちゃんはやっぱりコッチ（原作通り）で！！」と決心しました。俺、単純。

――――――――――ボウンッ！！

「ひゃあっ！？」

音をたてて偽ネギが爆発し、煙が充満する。床に落ちた人型の紙をすかさず士郎が回収した。

「…何ですか今のは？」

「さあ、大方朝倉のやつが用意したゲームの仕込みじゃないのか？」

「そうではありません、士郎さん。なぜその紙型を隠したのかを聞いているのです。しかも私にバレないように。」

「――――――。」

（煙に紛れて上手くやったと思ったんだけどな――――……）

夕映の攻勢は止まらない。

「オカルトの本で読んだことがあります。その紙型はいわゆる陰陽術の一種だという記述がありました。そのようなものが実在するとは思えませんが、今の出来事がただの仕込みという理由で済むとも思えません。ですので――――……」

「その紙型、調べさせてください。」

（夕映ちゃん、それはアウトーーーーーーー！！）

「いや、何のことだかさっぱりわからない。見間違いじゃないか？」

「いいえ、まだ右手に持っているハズです。あっ、いま手を後ろに隠しましたね！？」

「き、気の所為だって……」

「いいから貸してくださいっ」

「いや、ちょっ、待てって……！！」

ゴツン。ずるっ。

（あ。やばっ……）

夕映に押されて壁際まで来た士郎はそのまま後頭部を壁にぶつけ、足を畳で滑らせた。

「え。」

「うわっ」

士郎に詰め寄っていた夕映も巻き込まれて一緒に――――

・ここまで書いておいて、後は放置。その後、のどかの「いどのえにっき」や夕映自身の独白、カモが仮契約カードを持って接触するなどしてこの場面で何が起きたのかを語るつもりでした。

・あー、アーティファクトとか色々考えたんだけどなー。勿論「世界図絵」なんですが、装備される帽子、マント、箒をもっと高性能にしようと思ってました。

・帽子：かぶっている間は思考速度上昇。装備者の任意でなければ脱げない。
・箒は大気中の魔力を取り込んで貯蔵し、術者に擬似魔力上昇効果を与える。
・マント：裏地に聖骸布が仕込まれている。対魔力アップ。

・マント裏地の聖骸布の「外界からの護り」によって「超の計画が成功した未来」での戦いでかけられた幻術を防いであっさり勝利、てカンジにするつもりでした。

・思考速度と魔力も上昇しているので結構ハイスペック、魔法世界編・アリアドネーの魔法学院では最初から優等生にするつもりでしたー。

ああ、夕映ちゃん可愛いなぁー。

それでは次回。

第３６話　修学旅行編　三日目・序

修学旅行二日目、深夜。

「白い髪の少年はどうだった？　あと月詠っていう神鳴流剣士」

「いいえ、少年の情報はあまり出ませんでした。月詠の方は色々と。それと、彼女達に雇われた少年がいるようですね。」

「では月詠から。神鳴流には二刀を使う剣術が少なからずあるのですが、彼女はそれを好んで使っているようです。ただ、彼女は神鳴流剣士の多くが使う野太刀を使いません。伝統ある魔を祓う剣術ではなく、小回りの利く二刀を使った「斬る」ための剣術……。それを使用する戦闘狂です。」

「……白髪の少年は？」

「『フェイト・アーウェルンクス』という名前と……一ヶ月前にイスタンブールの魔法協会から日本へ研修に送られたという偽証だけです。」

「……『アーウェルンクス』？」

（……なんだ……？　どこかで聞いたことがあるような……
…どこかで、誰かに……）

士郎と同じようにその名前に心当たりのある詠春も表情に翳りを見せたが、士郎はそれに気づかなかった。

―◇―――――◇―――――◇

翌朝のホテル嵐山。

「おーっこれが豪華賞品か――っ」

「ラブラブキッス大作戦の優勝者に相応しいね！！」

のどかの手に握られているのは仮契約カード。

《ＰＵＤＩＣＡ　ＢＩＢＬＩＯＴＨＥＣＡＲＩ》……《恥ずかしがり屋の司書》、宮崎のどか。

「はーい皆さん、今日は完全自由行動日よ。そろそろ準備して出発してね。」

「は――――い！」
「行くよ――、大阪――――――！！」
しずな先生の号令で散ってゆく生徒たち。
景品のカードを大事そうに抱いて走るのどか。
「えへへ――――♪」
（きゃー？ネギせんせーとのファーストキスの証です――！！しあわせ――――――？？）
……しかし彼女のこの幸福の裏には、邪な企みがあったと知る者は少ない……

◇――――――――――◇――――――――――◇

「ちょっとネギ！！こーんなにいっぱいカード作っちゃってどう責任とるのよ！！」

「えっ！？　ぼ・僕ですか！？」

そう、彼に罪は無い。あるのは――――――

「まーまー姐さん」

「そーだよ。儲かったからいーじゃん」

この二人。

「朝倉とエロガモは黙ってて！！」

「……はい……」

「エロガモッ！！？」

「ゲームの景品らしいからコピーはしょうがないけど、マスターカードは渡しちゃダメよ？　本屋ちゃんは一般人なんだから。」

「魔法のコトも教えない方がいいでしょうね」

「アスナさんも一般人じゃ「今さら私にそんなこと言うワケ？　このお子様は」…あう。」

「そ、それもそうですね。宮崎さんには全て秘密にしておきます」

「惜しいなァ、あのカード強力そうなんだけどなー。ただの勘だけどよ。まーいーや、姐さんにもコピーカード渡しとくぜ。『来たれ』って唱えれば武器が使えるんだ」

「えー、いいわよ別にそんなのー」

「絶対役に立つからさぁ。やってみてくれよ。」

「うー、しょうがないわねー。……『来(アデアット)たれ』」

光が瞬いてカードが見えなくなったと思えば、気がつけば明日菜の手にはハリセンが。

「スゴイ!!手品に使える!!」

「ちゃ、ちゃんと使ってくれよぉ!?」

「ではネギ先生、そろそろ今日の予定の確認をしましょうか」

「そうですね。僕は親書を長さんに渡しに行こうと思ってます。」

「ってーか、元々はそれが兄貴の任務だしな。色々巻き込まれちまったケドよ。でもそうすると……このか姉さんの守りが薄くなっちまうなぁ……」

「……ふぁ～あ…。よぉ、お前ら」

欠伸をしながら気だるそうな声でやって来たのは。

「士郎さん!?」

「よー。ネギ」

「朝に弱いところは変わらないんですね。」

「おはよ、刹那」

「服、ズレてますよ。もっとこう、シャツを後ろに…………」

「ん？　いいって別に」

「いいえ、じっとしててください！」

「……あーい」

明日菜が呟いた。

「なんか新婚さんみたいね。」

「――――――な、な、な、な――――――――――――――――！！？」

「ぐあぁぁあぁッ！？　刹那！？　絞まってる！！シャツの首元絞まってる！！が………」

『命危うし助けて俺。ただいまライブで大ぴんち。』そんなワードが脳裏を掠めた。

「！！？　お、落ち付いて刹那さん！？　ふ、雰囲気よ！！　雰囲

気がそれっポイって言っただけ！！　中学生と１９歳じゃ夫婦に見えないでしょ！？」

「ふ、ふ、夫婦…………！！」

「～～～～～～～～～～～～～～～～～～！！」↑士郎の声にならない叫び

理不尽だ、と心の中で運命に吐き捨てた。

◇　◇　◇

「――――――――――ムッ！？」

――――――ピキィ――――ン！！

どこかの宇宙世紀っぽい紫電がエヴァの頭に奔った。ちなみにいま読書中。

「マスター？　どうされました？」

主の挙動に反応した茶々丸。ちなみにいま給仕中。

「……いや、どこかで私を不愉快にさせる何かが起きた……ような気がする」

「……そのような第六感のようなものは私にはわかりかねます。」

「…誰もお前にわかってもらおうなどと思っていない。」

「お主ら、ここは学園長室なんじゃが？」

「今更だなじじい。ウチのクラスが修学旅行なのは知ってるだろう。私は呪いでそこに行けないし、学校（ここ）で受ける授業もない。なのに登校しなければならないこの身の恨めしさがわかるか？」

「要するに、マスターには居場所がないのです」

「淋しい言い方をするんじゃない」

「寂しいのですか？　マスター。」

「んなワケあるか！！」

「……うるさくて仕事にならんわい……」

―◇―――◇―――

「それで、旦那はどーして京都にいるんだ？」

「メンドクサイから省くけど、じーちゃんに行けって言われたから。それで今日のことなんだが――――」

「お前ら。木乃香を連れて本山まで来い。」

「「「「「――――――――――――――――――――は？」」」」」

「え、本山ってどこよ？」

「――――――関西呪術協会の総本山……。つまり敵の本拠地です。ネギ先生が親書を届けに行く場所でもあり……このかお嬢様と士郎さんの御実家でもあります。」

「な、なにそれ!?」

「このかさんの実家が敵の本拠地……?」

「なるほどな、そーいうコトか。」

「えっ?　どういうこと!?　カモ君!?」

「つまりだな、旦那がその本山に帰って来るように言うってことはだ。単純に本山の中に居るのが安全ってこった。このか姉さんを攫ったり親書を奪おうとするヤツらってのはあくまで協会の少数派。関西呪術協会そのものは敵じゃねえんだ。むしろ味方……ってことでイイんだよな、旦那?」

士郎はその問いを受けて、僅かに口の端を上げる。答えは是。

「流石だエロガモ、その通り。なんたって関西呪術協会の長が俺と木乃香の父親なんだからな。」

事情を知らなかった明日菜・ネギ・カモは今度こそ――――――開いた口が塞がらなかった。

「あのー、あたしはもうサッパリついていけないんだけど？」

朝倉の問いに答える者は誰もいなかった。

―◇―――――◇―――――

『日が暮れるまでは修学旅行を楽しんで来い。俺も父さんも木乃香にはそうしてほしいと思ってるからな。』

『明日になれば味方の増援が来るから、敵は必死に仕掛けてくるだろう。楽しむどころじゃないだろうけど、頼むな。』

『俺も離れた所から様子を見てるから安心しろ。それじゃあ、行ってこい。』

「ねえネギ。士郎さんが言ってたことってどーいうコトなの？」

「えーとですね、士郎さんと長さんはこのかさんにできるだけ普通

に修学旅行を楽しんでほしいと思ってるんです。でもそれにも限界があるから、夜になったら本山で匿うということです。」

「日中は私達が三人がかりでお守りし、このかお嬢様には普通に修学旅行を送ってもらうのです」

「兄貴の親書は本山に入ったら渡せばいいしな。いや、大分ラクになったぜ。このか姉さんの護衛に集中しつつ、夕方には親書を渡せる。しかも夜は安全な場所で過ごせる。その後は援軍の到着だ。４日目はなんの気苦労もなく修学旅行を過ごせるぜ？」

「え、ホントに！？」

「でもその分、敵も必死にお嬢様と親書を奪おうとしてくるでしょう。今日が正念場です。」

「ん？　でもそれだと、夜はこのかの実家に泊まるってことでしょ？　他の先生やクラスの皆はどうするの？」

「それは長や学園長が上手くやってくれるでしょう。」

「それじゃあ皆さん。今日一日、張り切って行きましょう！！」

「張り切ってどーすんのよ……。せめて『頑張りましょう』でしょ」

「ねーそこ―、なに話してんの――？　置いてくよ――？」

ハルナの声で３人は駆けて行く。

という訳で本日、５班は表向き普通に修学旅行を送ることとなった。

―◇―――――――◇―――――――◇―

「もー。なんで京都に来てまでゲーセンで遊ぶのよー」

「ふ、甘いねアスナ。」

ハルナが不敵な笑みを湛えて明日菜を見やる。

「最近はねぇ、こーいうゲーセンもお土産屋のごとくご当地限定ってのが当たり前なのよ！！　ほら、プリクラとかどう？　そうだのどか、ネギ先生とプリクラ撮んなよ！！」

「あ、え？」

「せっちゃーん、ウチらも撮ろー♪」

「あ……いえ、私はっ」

――――ガシッ

(逃げちゃダメよ、刹那さん♪)

「ア、アスナさん!?」

「よ、よろしくお願いします――、ネギせんせー」

「いえ、こちらこそ……」

「たかがプリクラにどれだけ畏まってるですか」

・　・　・　・

「で、結局フツーのゲームしてるんじゃない」

「甘い、と言ったはずだよアスナ」

ククク……と言ってハルナがポーズをキメる。

「あ、コレ新幹線の中でやってたカードゲームですね?」

「そー！上手くいけば関西限定のカードがゲットできるかもしれないんだよ。ってワケでアタシら、しばらくここでゲームしてるから。ごめんね先生……そーだ、ネギ君もやってみる？」

・・・・・・

チュド――――ン！！

――――――《ＷＩＮＮＥＲ　ネギ・スプリングフィールド》

「おおおっ！？　スゴイ先生！！初めてとは思えない！！」

「え、えへへー。」

「ネギ君、頭ええもんなー？」

「――――隣り、入ってええか？」

ネギの隣の台に入ってきたのはニット帽をかぶり黒い学ランを着た、ネギと同じくらいの歳の少年。

「お！？　勝負だよ先生！！　大丈夫！？」

――――――《ＢＡＴＴＬＥ！！》

◇――――――――――◇――――――――――◇

「あー、負けちゃった。」

「いや、今日始めたばっかにしては上出来だよー先生。でもさっきの勝ち逃げしてった子……なんか捉えどころのない子だったねー」

「というか、修学旅行中の私達と違ってあの子は地元の学生ですよね？　こんな時間にゲーセンとは感心できませんね。」

「あ、確かに！！　てコトは、あの子に比べたら普段のアタシたち

ってマジメだねー！！」

「ハルナ、調子に乗らないでください。」

今の発言を新田先生が聞いたら眉を顰めること間違いなしであろう。

「んじゃ、次はドコ行くー？」

「京都ならでは、という場所に行きたいですね。では初日に行った清水寺にもう一度……」

「シネマ村ってあったよね？　時代劇のセットで仮装できるんだよねー。行ってみよっか！！」

「……。」　↑（夕映）

「それじゃあ5班、シネマ村にしゅっぱーつ！！」

「時代劇かぁ……昔の日本の建物とか見れるのかなーカモ君」

「サムライってやつだな。これから行くのはあくまで再現なんだろうけど、面白そうだな兄貴！！」

◇――――――――――◇――――――――――◇

ネギと対戦した黒学ランの少年が走っていた。ゲームセンターがあった通りからいくらか離れた路地裏に向かって。

少年が向かう路地裏に、誰かがいるようだ。

「――――やっぱり名字、「スプリングフィールド」やて。あとアイツらシネマ村に行くらしいで」

先ほどの勝負はネギの名前を知るための探りの一環。ネギはプレイヤーとして名前を入力し、少年はネギの名前を手に入れた。

「やはり……あのサウザンドマスターの息子やったか……。」

それなら相手に不足は無い。と、彼女――――――天ヶ崎千草は笑う。

「小太郎、アンタは本山の千本鳥居で張っとき。親書を渡そうとそこまで来たら閉じ込めてやりや。」

「月詠はんはウチと一緒にシネマ村に行くえ。新入りはウチらの近くで待機。この前みたく邪魔が入ったら足止め頼むえ?」

「ええ！？　俺が本山の方に行くんか！？　罠なんて俺の性に合わんて！！」

「新入りが中々使えるみたいやから連れてくんや。突っ込むしか能のないアンタは黙って言うコト聞いとき。」

「……俺より、ソイツの方が強いゆーんか！？」

小太郎はギラリと、獣のような目を光らせて千草を睨む。

「「使える」言うたんや。そうやってすぐ頭に血ィ上る性格直せゆーコトや。ほな行きますえ！！」

依頼主である千草の号令がかかったことは作戦の開始を意味する。
渋々、小太郎は作戦に従った。

（犬上小太郎……他人の力量も測れずに挑発するとは、やはり子供か……）

（ウフフ。刹那センパイに、あの赤い髪のお兄さん……。ああ、早く死合いたいわぁ）

千草、月詠、小太郎、フェイト。

「シネマ村は町中で劇をやるさかい、派手に動いてもバレへん。うふふ、ボウヤ達……。一昨日の借りはキッチリ返させてもらいますえ……。」

刺客が、動き始めた。

第３６話　修学旅行編　三日目・序（後書き）

～補足・解説～

『命危うし助けて俺。ただいまライブで大ぴんち。』

・この台詞は言っても、「ゴッド、俺何かしましたか？」は言いません。

ウチの士郎は神の存在は信じていても、家族を失うという運命を自分に与えた神サマが大嫌いなので。

・「えーとですね、士郎さんと長さんはこのかさんにできるだけ普通に修学旅行を楽しんでほしいと思ってるんです。でもそれにも限界があるから、夜になったら本山で匿うということです。」

矛盾だらけな理屈ですが、ネギま！世界の人達はノー天気な人が多いのでこんな理屈が通りそうだと思います。

士郎は木乃香に魔法のことを教えるべきだと考えていますが、詠春が反対しているので結局教えていないままです。

その結果、こんなヘンな作戦に。

それでは次回。

第37話　修学旅行編　三日目・激突シネマ村

シネマ村。

「せっちゃん、じゃーーん♪　どーや？」

「お・お嬢様、その格好は？」

さっきまでTシャツにスカート、ブーツだった木乃香はいつのまにか髪を結え上げて着物を着ている。まさしく「お姫様」といった感じだ。
和傘までさして本人もノリノリのようだ。

「え？　そこの貸し衣装屋で着させてもらえるんやえ？」

ここは京都シネマ村。映画セットの町並みをコスプレ……貸し衣装を着て体験できる。

（……お嬢様、本当にお綺麗になられた……って、何で私は顔を赤くしてるんでしょう？）

「せっちゃんも着てみーー♪」

「えっあっ、わ・私はこーいうのはあまり……！！」

（ああもう！！アスナさんたちは何処に行ってしまったんですかーーーーーー！！）

◇――――――――――◇――――――――――◇

時は少し遡る。

「う～ん……このかと刹那さん、うまく仲直りできないかなぁ……」

修学旅行以前に比べてだいぶ打ち解けたようだが、まだまだ幼少の頃のようにはいかないらしい。

「なあ姐さん、そんなに急いて仲直りさせる必要はねーんじゃねえ

か？　刹那の姉さんにも事情ってモンがあるんだろ。今の状況だけでも随分な進歩だと思うけどなー、俺っちは。」

「でも……やっぱり仲良くしてほしいわ。どっちもお互いを大好きなのに仲良くできないなんて、嫌じゃない。」

「なになに？　何の話？」

ここでハルナが関わったのが発端。

「ふ～ん……あの二人が実は幼馴染みで、今は何かの事情で桜咲さんがこのかと仲良くできない、と……。フフフ、なるほどね。よーし！！ここはアタシらが一肌脱ごうじゃん！！」

「へ？」

結果、木乃香と刹那は二人きりでシネマ村見学と相成った。

◇――――――◇――――――◇

「――――――なぜ私は男物の扮装なのですか？」

刹那の衣装は新撰組風の服だった。着物と袴に胴当て、額当て、羽織り。
模造刀と一緒に脇に夕凪を差している。

――――ズシッ

（……？　この模造刀……）

「似合うとるで、せっちゃん♪」

「ほらほら、色々売ってるえ。」

「そうですね。何かお土産でも……」

「ほ～れせっちゃん、甘食？　ハイあ～ん♪」

「お……お嬢様っ……！！」

「わっスゴーー！！美少年剣士とお姫様だーーー！！」
「写真撮ってもイイですかーーー！？」

「ハーイ？」
「え。お嬢様っ！？」

（即答ですかっ！？）

「ありがとうございましたー」

「……あの、今の写真のデータ貰えます？」

「あ、ウチも欲しいー♪」

「……ん～？　匂うよ！　甘くて酸っぱい、ラブ臭「妄言はそのくらいにしとくです。」が！！」

「ただの仲良し二人組です。ハルナが思ってるような関係ではないでしょう。あのくらいなら普通にいますよ。」

「そーかなぁー？」

「いや、確かにアヤシイねーあの二人」

「だよねー！！　朝倉もそう思う……って」

「ってわあっ！！あんた達いつの間に後ろにいたのよ！？」

明日菜が飛びあがって仰天した。

「報道部をナメちゃいけないよー？」

「あの二人がどうかしたんですの？」

いつの間にか3人の後ろに立っていたのは朝倉と3班メンバー（委員長、千鶴、夏美、千雨、ザジ）。

……パカラッ　パカラッ　パカラッ――――

「あれ、何か来たよ。」

夏美が指差した方から――――

―◇

◇―――――◇―――――

パカラッ　パカラッ　パカラッ　パカラッ

「うふふふふ――――」

「！？」

パカラッ　パカラッ　パカラッ　パカラッ

「おほほほ――――」

パカラッ　ガガガガーーーーッ

刹那と木乃香の前に馬車が停まった。

「ホホホ。どうも～、神鳴流です～」

「!?　お、お前は!?」

「……じゃないです、そこの東の洋館のお金持ちの貴婦人にございます～。」

どう見ても月詠だった。

「今日こそ借金のカタにお姫様を貰い受けに来ましたえ～」

「わー。せっちゃん、これお芝居やろ?　どんなんやろ♪」

（なるほど、シネマ村の劇に見せかけて堂々とお嬢様を連れ去ろうというワケか。）

「――そうはさせんぞ。このかお嬢様は私が守る!!」

「きゃー?　せっちゃーんカッコえ――――?」

――――ギュッ

「わっ、い・いけません、お嬢様っ!!」

木乃香が刹那に抱きつく。実は緊迫した状況なのだが、傍目には美少年と美少女が劇に乗じてイチャイチャしているようにしか見えなかった。

尾行組。

「むむ……やはり二人はそーいう関係……？」

「だから違うって……！」

明日菜の言葉も空しく、彼女たちの大半は勘違いを加速させていった。

「ウフフ……そらしようがありませんなぁ～。っえーい！」

月詠が刹那に手袋を投げつける。それは決闘の申し込み。

「このかお嬢様をかけて決闘を申し込ませて頂きます――――……。

３０分後。シネマ村正門横の「日本橋」にて――」

「逃げたらあきまへんえ――――――……刹那センパイ？」

（！？）

木乃香が思わず身を震わせる。月詠の目が、とても恐ろしいものに見えた。

その「恐ろしいもの」の正体。月詠の目に宿る光が「狂気」だと、彼女は知らない。

「ほな、助けを呼んでもかまいまへんえ～～」

――――――ガガガッ、パカラッ　パカラッ　パカラッ……

そうして彼女は去っていった。

（――――行くしかないか。）

「決闘」は、３０分後。

―◇―――――◇―――――

（きゃー♪　あの忍者の男の子、カワイー！）

（初々しいカップルねー？）

（お？　忍者にくの一……ペアルックで仮装か、若いなあ）

観光客、シネマ村係員を問わず周りの目を引くのは。

「いやあ、思ったより色々あるんですねえ。昔の日本はこんなカンジだったんだ。」

「は、ハイ――。そうですねー」

（ネ、ネギせんせーと、ふ、二人っきり――…！！）

実は刹那・木乃香組と同時進行のデートだった。モチロン、発案もとい首謀者はハルナである。

「あの、のどかさん？」

いつの間にか、ネギがのどかの顔を覗き込んでいた。

「ひゃいっ！？　な、なんでしょう？」

（ひゃー！？　せ、せんせーの顔がこんな近くに……！！）

「さっきから下を向いてますけど……やっぱり恥ずかしいですか？」

現在の二人の格好は忍者とくの一。

どこか気恥ずかしくて、のどかはずっと顔を真っ赤にしてネギの後ろを歩いていた。

しかし。

「は、はい……。で、でも大丈夫ですー。ネギせんせーと二人で歩けて……それだけで私、嬉しいです……」

「の、のどかさん……。」

言った方も言われた方も、顔を真っ赤にしてシネマ村を歩き続けた。

（（（……若いね――――――））））

周りは二人を微笑ましい目で見つめていた。頑張れ若人（わこうど）。

『――ネギ！！』

（え！？　アスナさん！？）

頭の中に直接声が響く。仮契約カードによる念話。

『一昨日戦ったゴスロリの女の子が来たの！！それでその子と刹那さんがこのかをかけて決闘することになって……』

（け、決闘！？）

『３０分後！！シネマ村正門横の日本橋だから！！本屋ちゃんに上

手く理由つけてそこに来て！！』

（３０分後…日本橋……。）

即座に思考を巡らせる。

「のどかさん。次はこっちに行きましょうか。」

「は、はいー……？」

日本橋へ、進路を向けた。

◇――――◇――――◇

『ねーねー！二人はいつからそーいう関係なの！？』

『桜咲さん！！お二人の愛に私、感動いたしましたわ！！』

『よーし皆！！二人の恋、私達が全力で応援するよーーー！！』

『野郎ども助太刀だーーー！！』

『わああ皆さん！？　待ってください違うんですーーーーー！！！！』

３０分後。

――――――ザッザッザッザッザッ……

シネマ村を闊歩する、妙に張り切った一団。

明治時代の洋風紳士、文学少女。江戸時代の町娘、姫、芸者、用心棒、剣士。戦国時代の武将。

見事に統一性のない仮装に身を包んだ、彼女たちの目指す先は日本

橋。

麻帆良女子中修学旅行、３－Ａ・３班＋５班。

（――こ、困るなぁ……。）

（全くウチのクラスは～～～～！）

一般人であるクラスメートを巻き込むことは避けたい刹那と明日菜だったが、その彼女たち自身がやる気なのが問題なのだ。そのうえ善意での行動なのだからタチが悪い。

『ふふふふ、着きはったようですなぁ……。』

「！！」

太陽を背にして、日本橋の上に月詠が立っていた。既に刀を抜いている。

「このか様も刹那センパイも……ウチのモノにしてみせますえ――…？」

（……怖い）

「うふふふ……」

（――怖い……。）

「せっちゃん、あの人……なんかこわい。」

木乃香が刹那に抱きついて、囁いてくる。

（……お嬢様？）

「…き、気をつけて……」

（――――――……！）

いくら木乃香が天然気味のおおらかな性格とはいえ、自分の周りでこれだけ妙なことが起きれば気づく。

自分を取り巻いて、何かが起きていると。
そしてそれらから自分を守ってくれている者がいることを。
それを理解したところで、彼女には何もできない。ただ、自分を守ってくれる親友を心配し、無事を祈って声をかけるだけ。
――でも。その声は刹那にとって、これ以上ない激励だった。
「――安心してください、このかお嬢様。何があっても――――――お嬢様をお守りします。」
そう言って微笑みかけた。
太陽の光で少し陰になったその笑顔は。疎遠になって以来、初めて木乃香が見た――――――刹那の笑顔だった。
「……せっちゃん……！」
「桜咲さんかっこいいわねー、あやか。」

「ウチの部に来てくんないかなー。もちろん男役で」

「ええ！！感動いたしました！！では行きましょう皆さん！！そこな貴婦人、そちらの加勢はないのかしら？　私達、桜咲さんのクラスメートがお相手いたしますわ！！」

（（い、委員長――――――――――！！））

「ツクヨミ……といったか？　この人たちは――」

関係ない、と言おうとして

「ハイ　センパイ♪　心得てます～。そちらの方々はこの子たちがお相手します～」

……と句を継がれた。

（っ！！　アスナさん、ハリセンの用意を！！）

（え！？　なんか嫌な予感しかしないんだけど！！）

「ひゃっきやこぉ～！！」

――――――ＢＯＭッ☆　　↑この☆に「イラッ」ときた人、ゴメンね！！ｂｙ作者

「きゃ～～～～～！？」

「何このスケベ妖怪ーーーー！？」

『おーっ、スゴイＣＧだー！！』

『さすがシネマ村のアトラクション！！』

現れたのは百鬼夜行ならぬ「ひゃっきやこう」。コミカルチックでアニメチックなディフォルメ妖怪たちが、麻帆良女子中一般人ズに襲いかかる。具体的には抱きついたり裾をめくったり服を剥いたり。

一日目に猿の式神に同じように襲われた明日菜は、何故かとても疲れた顔をしていた。

「あーもう！！何でこんなのばっかなのよ！！来たれっ（アデアット）！！喰らいなさいエロ妖怪！！」

スパーン！！　ボムッ！！

・　・　・　・

（マズイ、このままではお嬢様にも危険が……）

「すみません、遅れました！！ってどーなってるんですかコレ！？」

（！！）

「ネギ！！」

のどかは野次馬の向こうで待機している。

「先生、お嬢様を連れてここから逃げてください！！ここは私とアスナさんが引き受けます！！」

「――わかりました！このかさん、僕について来てください！！」

「はえ！？　ネギ君いつ来たん？」

「申し訳ありません先生、お願いします！！」

「――――――行きますえ？　センパイ？」

「あ……せっちゃ……」

「このかさん早く！！」

「二刀連撃（にとーれんげき）、斬鉄閃（ざんてつせーん）！！」

「――――――フッ！！」

――――ガギィンッ――――ガギギギィン！！！

―◇

◇――――――――◇――――――――

「このかさん、この中に隠れましょう！」

「おけ？」

――カンカンカンカンッ！！

1階に隠れられそうな場所がなかったため、階段を駆け上がる。

思いのほか長い階段を上がった先に、襖が見えた。

「ネギ君、部屋や！！」

「よし、あそこに隠れましょう！！」

『――――――ようこそ、このかお嬢様』

「「っ！？」」

部屋の先客は、一昨日に見た顔。眼鏡をかけた符術使いの女と、白い髪の少年。

「月詠はん、うまく追い込んでくれはったようどすなあ。しかし小太郎を本山にやったんは失敗やったな。アンタ本当に親書届ける気あるんか？　まあええ。お嬢様の護衛の剣士も、厄介な式祓いの中学生もおらん。アンタ一人や。お嬢様を守りながらの2対1……。」

『ウフフ……詰みましたなぁ？』

そう言って笑う千草の声は、ネギに否応なく現実を突きつけた。

―◇――――――――――◇――――――――――

「二刀連撃（にとーれんげき）、斬鉄閃（ざんてつせーん）！！」

「――――――フッ！！」

――――ガギィンッ――――ガギギギィン！！！

月詠の嵐のような剣戟を、刹那は紫電の速さで捌ききる。

「あら～？　その刀、貸し衣装の模造刀（つくりもん）と違いますなぁ～。なにやら妙な紋様までついて……」

その刀、とは刹那が左手に握る鍔付きの刀。しかしこの刀は間違いなく借りた物だ。

貸し衣装屋を出た直後までは。

持ち主を守る対魔力・対物理上昇効果の紋様。稀代の名刀と見間違

う程の刃。

こんな細工を仕込める人物を、刹那は一人しか知らない。

――ギィィン！！

「一昨日は互角だったが……これでお互い二刀。お前に遅れをとることはない。それより……なんだアレは？　最近の神鳴流は妖怪を飼っているのか？」

――ガキィンッ！！

「ご心配なく～、あの子たちは無害ですぅ～。ウチはただ……センパイと刀を交えたいだけ……？」

――ガギギギッ……

「――戦闘狂（バトルマニア）か、付き合わんぞ！！」

――ギャンッ！！！

「そう言わずに～」

『おおっ！！スゴイ殺陣だーーーーー！！』

野次馬の声が湧く。

いやいや皆さん、ガチ斬り結びの殺し合いですから。まあ確かに殺陣だけど。

『おっ？　あんな所でも劇が！！』

『お父さん！！お姫様が危ないよ！！』

『少年忍者頑張れーー！！』

（あんな所？　お姫様？　少年忍者？）

――――――バッ！！

振り仰ぐとそこには。

城の天守閣の屋根の上に複数の人影。

ネギ、木乃香――――……千草とその式神、弓を構える鬼、白い髪の少年。

「――――お嬢様！！！」

「他所見したらあきまへんえ？」

――ガギギギィン！！！

「くっ！！」

月詠の剣が更に速く、更に重くなる。

「こない楽しいのに、そう簡単には終わらしまへんえ～？　付け焼き刃の二刀でウチを振り切れると思わんといてください～♪

――――――斬岩剣（ざーんがーんけーん）っ！！」

剣戟が、更に加速する。

第３７話　修学旅行編　三日目・激突シネマ村（後書き）

～補足・解説～

・のどかのくの一。

　下の裾が短い。ミニスカートなど目じゃないくらい。

膝上２５ｃｍ近くいってるかもしれない。

そして忍者が着る鎖帷子（くさりかたびら）をイメージした網目模様の袖とタイツ。

タイツと裾の間で露出している太ももの白い部分が、健全な男子の目の毒かもしれない。

貸衣装屋のお姉さんは何を思って中学生にこんな物を着せたのだろうか。

　個人的には木乃香みたいなお姫様が似合うと思ったんですが、ペアルックさせたかったのでくの一になりました。

・（……？　この模造刀……）

・持ち主を守る対魔力・対物理上昇効果の紋様。稀代の名刀と見間違う程の刃。

・こんな細工を仕込める人物を、刹那は一人しか知らない。

　はい、士郎です。刹那が貸し衣装屋から出てくるのを遠くから見ていた士郎が、刹那の腰の模造刀を媒介にして投影しました。ホントは危険を知らせる機能もつけていたんですが、流石にそれは機能付け過ぎかなと思って中止。

　公式設定では士郎（とアーチャー）の投影は「既存のモノに投影を重ねて補強する」という行為ができないらしいですね。まあこの小説の設定捏造っぷりは今に始まったワケではありません。

それでは次回！

第３８話　修学旅行編　三日目・決着シネマ村

京都・シネマ村。城の天守閣の上で対峙する者達。

木乃香を背に立つネギと、彼らを弓で狙う鬼。式神を従えた千草と部下の少年。

「聞いとるかお嬢様の護衛、桜咲刹那！！この鬼の矢が二人を狙っとるのが見えるやろ！！お嬢様の身を案じるなら手ェ出さんとき！！」

その言葉通り、鬼の双眸がネギと木乃香に狙いをつけている。

「ネギ言うたかボウヤ。諦めて大人しくお嬢様を渡してもらおか。一歩でも動いたら撃ち抜かせてもらいますえ？」

妙な真似をすれば撃たれる。従者（アスナ）も刹那もいない今、呪文を唱える時間も稼げない。ネギには、切れる手札が無かった。

「……ネギ君、アレ……CGとちゃうんよね……？　やっぱ」

「……すみません、このかさん……。」

（……馬鹿だ、僕は。よりによって建物の上階なんて逃げ場のない場所に来てしまうなんて……！！）

「――――――大丈夫やえ。安心してな、ネギ君。」

「え？」

目の前の現実に目が眩みそうなネギに木乃香が言った。「大丈夫」と、言いきった。

「せっちゃんが「何があっても守る」言うたんや。必ずせっちゃんが助けてくれるて。」

「――――このかさん……」

「……何をグズグズ言うとるんや。さっさとお嬢様を……わぷっ」

――――風が吹いた。

成人である千草がよろけるほどの風なのだから――――

「きゃっ」
「このかさんっ！　大丈夫ですか？」
よろけた木乃香をネギが支えて――――　一歩、動いた。
《お？》
『――――――　一歩でも動いたら撃ち抜かせてもらいますえ？』
《おりゃっ》
――――――ビンッ！！
矢が放たれた。
「……あ？　あ――――っ！？　何で撃つんや！！」
《一歩でも～言うたやんけ》
「――アホか！！　お嬢様に死なれたら困るやろーーーーーっ！！！」
「くっ！！」

（詠唱は間に合わない！！せめて僕が――――）

――――――――――盾に――――――――――。

ネギが――――――――――――木乃香の前に飛び出した。

――――――――――――――――ッ

音が、聞こえた。

流れる水の、川音。

昔、木乃香が溺れたとき、助けようとしたのは刹那だった。

しかし力及ばず、彼女も川に流された。

その二人を、助けたのは――――――……

第３８話　修学旅行編　三日目・決着シネマ村

日本橋。先ほどの熾烈な剣戟は治まり、二人は互いに睨みあう。

「……意外どすな～。」

「何がだ？」

「このか様とあの坊やのピンチやいいますのに～。センパイはもっと焦る思てましたわ～」

「私が居らずとも、あの程度なら問題ない。私はただ、お前を斬り伏せるだけだ」

「あはぁ～？　嬉しいコト行言ってくれますな～、お嬢様より私をとってくれはるなんて♪　でもそんなにあの子供を信頼してはるなんて、やっぱり意外です～」

「……確かにネギ先生は若い……いや、まだ幼いが優秀だ。だが、勘違いしているぞ月詠。私が信頼しているのはネギ先生ではない。」

『……あ？　あ――――っ！？　何で撃つんや！！』

『くっ！！』

――――私が信頼しているのは――――――――――――

――――――――バキャンッ！！――――――――

「――――――――え？」

木乃香を狙い、ネギに当たろうとした矢が――――――矢によって砕かれた。

――――――――ヒュオッ――――――――

次いで。

《んあっ！？》　《ウキッ！？》　《クマッ！？》

矢を撃った鬼と千草の式神が還っていく。

「な、なんや、何が起きとるんや！！」

そして。その場にいた全ての者が、その声を聞いた気がした。

『――――――――――I am the bone(我が骨子は) of my sword(捻れ狂う。).』

刹那が信頼するのはGLADIUS(グラディウス) INFINITUS(インフィニトゥス)。

――――――「無限の剣を持つ者」。衛宮士郎。

木乃香を守る騎士は一人ではない。

親友と義兄(せつな)(しろう)。この二人がいる限り、近衛木乃香を害することは叶わない。

―◇――――――――――◇――――――――――

「千草さん。新手のようです、どうしますか？」

白い髪の少年が声を発した。

（僕がこの見えない射手の相手をすればいいのだけれど、判ったのは方角だけだ。姿が全く見えない。矢が届く程度の距離にいるはずだというのに。ここは雇い主の意見を伺っておこう）

そう思考した、瞬間。

「ッ――――――――――――――――――！！！！！」

彼の体が、吹き飛んだ。

――――ガギギギギギッギィギギギギッギギ！！！

（……この、矢はっ……！！）

フェイト・アーウェルンクス。

彼が常時展開している魔法障壁は３６０。あらゆる方向に幾重にも張られている。

彼を襲った矢はその頑強な障壁を突破するには至らなかったが、今も魔法障壁に牙を突きたて、彼を吹き飛ばし続けている。

「なっ……新入り！？」

「ネギ！　このか！！　大丈夫！！？」

「アスナさん！！」

「アスナー！！」

月詠のひゃっきやこうを全て送り還した明日菜が駆け付けた。

「こっちは全部終わったわよ！！刹那さんはまだ戦ってる！！ここもチャチャっと終わらせるわよ！！」

「ハ、ハイ！！」

「――――くっ……！！」

形勢逆転。パートナーを従えた西洋魔術師の力を千草は一昨日に味わっている。
そして彼女にとって最悪なのが「ハマノツルギ」を持つ明日菜。
明日菜の前では、千草の式神はただのデカイ着ぐるみに成り下がる。

（ここではもう無理やな……引き時か）

「吹っ飛んでった新入りも回収せなアカンし……月詠はん！！」

「――仕方ありません～。ほなまた死合いましょ～センパイ？」

「断る。」

「あ～ん、そんなツレへんこと言わんといてください～。」

月詠と千草は姿を消した。

『お、もう終わりか？』

『お父さん、お姫様無事で良かったね！！』
『あのハリセン持った町娘は何だったんだ？』

劇だと思って観戦していた野次馬は散っていった。
ひゃっきやこうに襲われた麻帆良女子中ズは地面に座ってぐったり。
のどかは野次馬に流されて行方不明。

「……終わった？」

「ああ、とりあえずはな。もうここでは襲って来ねーだろ。とりあえず刹那姉さんと合流しようぜ」

「それじゃ、下に降りましょう。」

「……え……？」

『お姫様を守る騎士（ナイト）がこれだけいると、流石に厄介だね』

『あの「無限の剣（グラディウス・インフィニトゥス）」にも対処しなきゃいけないし、君には退場してもらおうか』

『殺しはしないよ。腕のいい治癒術師なら十分治せるから安心するといい』

『――――――「石の息吹（プノエー・ペトラス）」』

「刹那さん!?」

「ちょっ……何よコレ……!!」

「……これは「石化（ペトリフィケーション）」!?　高等魔術じゃねえか!!一体何で刹那姉さんがこんなことに……。ヤバイぜ、兄貴は軽傷しか治せねえし……!!」

「……？　このか？　しっかりしてこのか!?」

物言わぬ灰色の親友を見て、木乃香は顔面蒼白。体は竦み、肩が小刻みに震える。

木乃香は理解したのだ。

目の前の石像が、彼女の無二の親友「桜咲刹那」本人であることを。

「……ちゃ……。」

「――――せっちゃ……、せっちゃん。せっちゃ……せっちゃん!!」

石となった刹那に駆け寄り、必死に名を呼ぶ。だが、返事が帰って来る筈もなく。

「ちょっ、落ち着いてこのか！！」

明日菜は必死に木乃香を宥めようとするが、明日菜の言葉は彼女の耳には入らなかった。

「……く……！！」

ネギが呻く。

目の前の状況に無力な自分。それが悔しくてしかたなかった。

（僕は何て無力なんだ……6年前と同じじゃないか。魔法学校首席なんて、何の役にも立たない！！）

「兄貴も落ち着け！！　関西呪術協会に行けば治癒術師がいるハズだ！！　治せる見込みはある！！」

（――――関西呪術協会――――！！）

「じゃ、じゃあ早く行こう！！　アスナさん、このかさ――――」

「キャアっ！！？」

瞬間、風が吹き。

（（（（――――――――――――！！？））））

周囲に光が満ち。

「――――――……お……お嬢様……？」

刹那が、目を開けていた。

自分の、最初の友達。

いつだって自分を守って傍に居てくれた親友。

疎遠になった後も、親友を慕い続けた。

また、昔のように話したかった。

それが、叶った。

この修学旅行でまた昔のような関係に戻れた気がした。

そして親友は昔と変わらず、自分を守ってくれた。

その親友がいま、目の前にいる。

只の物言わぬ石像。

自分の予想が現実離れしていることは理解している。でも間違いなかった。

親友が、石になってしまったことは。

（――いやや……！！　せっかくまた仲良うできたのに。また一緒に、遊べるようになったのに……！！）

「せっちゃん……！！」

二人が親友だった証。「せっちゃん」、「このちゃん」の愛称。

刹那を抱き締めて、その名を呼び続ける。

「――――――――せっちゃん……！！」

――――木乃香を中心に、突風が吹き荒れた。

――――眩い閃光が、その場に奔った。

――――――――全てが収まると――――――――

「――――――……お……お嬢様……？」

柔らかな体。感じる体温。自分に向けられる瞳。自分にかけられる声。

――――――全てが収まると――――――刹那の石化は解けていた。

「せっちゃん！！！」

「えっ！？　な、な、何が……。い、いけませんお嬢様っ！！」

木乃香は刹那を――――――力いっぱい抱き締めた。

もう二度と、放さぬように。

「成程。アレがお姫様のチカラというわけか。」

「治癒能力に長けているのかな。どう思う？　無限の剣（つるぎ）。」

「――――木乃香（アイツ）らしい才能だよ。誰かを傷つけるなんてアイツには似合わない……というより、できないだろうな。」

「それはそうと、さっきの矢は面白かったよ。あれ程の威力を持ちつつ追尾してくるなんて性質（タチ）が悪いね。でも術者が狙い続けなければいけないのがネックだ。そのせいで君は、あの剣士の石化を防げなかった。」

「……なんで殺さなかった？　殺そうと思えばいつでも出来たはずだ。」

「殺してほしかったのかい？」

「……殺すぞ。」

映画セットの瓦屋根の上で、赤髪の少年と白髪の少年が睨みあう。

「君が「千の刃」から僕らのことをどう聞いているか知らないけれど……。そろそろ雇い主の所に戻らなきゃいけないし、何より、君に興味が出てきた。だから簡潔に教えてあげよう。」

「僕ら……いや、我ら『完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）』の目的は、世界を滅ぼすことで世界を救うことだ」

「……な……に……！？……」

「だから無駄な殺生は好まない。また会うかもしれないね、無限の

剣。」

「！！　待っ……！！」

パシャンッ

水に溶けて消えていった。

――また、勝てなかった。

「フェイト……アーウェルンクス……！！」

手を強く、握りしめた。

◇――――――◇――――――

―◇

「ス、スゴイですこのかさん！！」

「え？　今のってやっぱこのかがやったの！？」

「お嬢様……、チカラをお使いに……？」

「え、と……。ウチ、何かやったん？」

本人に自覚は無いようだが、刹那の解呪は間違いなく木乃香によるものだ。

（しかし、ここまで堂々と襲ってくるとなると……私達では厳しいかもしれない）

「ネギ先生、カモ君、アスナさん」

「わかりました。」

「ああ、それが最善だぜ」

「え？　なに？」

「――――お嬢様。これからお嬢様の御実家に行きましょう。」

「ほえ？」

予定変更。一路、関西呪術協会を目指す。

第３９話　修学旅行編　三日目・永遠循環

「――お嬢様。これからお嬢様の御実家に行きましょう。」

「ほえ？」

「よし！そうと決まればさっさと行動しようぜ。クラスの皆はまだあそこでぐったりしてるから、バレないうちにな。」

「皆さん、着替えましたか？」

「終わったよ！！」

「よし、行きましょう！！」

「ネギせんせー、どこ行くんだろう……」

―◇――――――◇――――――

「えへへへ～。せっちゃぁ～ん？」

「お、お嬢様っ」

他の面子は二人の様子を微笑ましく見守る。
石化が解けてから、木乃香が刹那に抱きついて離れないのだ。

「な、何見てるんですかお二人ともっ！？　わ、私達は少しゆっくり歩きますから前の方にいてくださいっ」

恥ずかしがってはいるが、喜んでいるのもバレバレだった。
ネギ達は刹那の言うとおりに、彼女たちの前を歩くことにする。

「良かったですね！！二人ともあんなに楽しそうで……」

「二人の友情に俺っち、涙が止まらねえぜ……。グスッ」

二人を一番仲直りさせたがっていた明日菜は何も言わない。

時折りこっそり後ろを見て、嬉しそうに笑うだけだった。

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

?毘古社、と刻まれた古い石碑。その隣に佇む千本鳥居。

「ここが関西呪術協会の本山……？」

「はい。この鳥居を抜けて少し進めば本殿です。」

「伏見神社ってのに似てるなー」

「この先を抜ければ到着、ですが……」

『小太郎を本山にやったんは失敗やったなぁ。』

「「小太郎」っていう人がどこかにいるかもしれない。」

「そいつも撤退してくれてりゃあ楽なんだけどな」

「話し合ってもラチがあきません……行きましょう。」

「アスナとネギ君もウチに来るん？」

「話すと長くなるのよ……」

「――よし、行きましょう！！」

一同は気を引き締めて、最初の鳥居をくぐった。

・　・　・

・・・・・・

「……何も出てこないわよ。」

「変な魔力も感じられないです。」

鳥居の中を歩き続けて約5分。特に何も変化はない。

「いけるんじゃないの、コレって？」

「いえ、油断は禁物です。」

「説得力ねえぜ、刹那姉さん」

逸る明日菜を刹那が止める。木乃香と腕を組んだまま。

「な〝っ。カ、カモ君、これはお嬢様をお守りする為であって……」

「よぉし一気に行っちゃいます！！」

「ＯＫ！！」

「ああっ！？　ネギ先生、アスナさんっ！？」

「安心しな、俺っち達が先に行って罠があるか確かめてくるからよ！！」

「離れるのが危険だと言って――ああ……。」

「よーわからんけど…元気出してな、せっちゃん」

「……ありがとうございます……。」

『…へへッ……』

◇――――――◇――――――

―◇

「あれー？　せっちゃん、「立ち入り禁止」やて。」

今までこんなことあったっけ？と木乃香は首を傾げる。

対して刹那は、自分の血の気が引けていくのがわかった。

（――――これは罠だ……！）

おそらくこの立て看板の先の鳥居を抜けると結界に囚われる。

そしてこの看板は一般人が侵入しないための配慮。

……

もうこれ以上、結界に人が入らないように。

つまり既に、明日菜たちが結界に囚われていると思われる。

（私達を捕えるためか、足止めするためか……どちらにしろ、閉鎖性が高いのは間違いない。）

どうする、と自問する。

明日菜たちを見捨てて木乃香を本山に送り届けるべきか。

明日菜たちを助けるために、木乃香を連れて得体の知れない結界に乗り込むか。

（――――――……。）

『逃がしませんよ！！このかさんは僕の生徒で、大事な友達です！！』

『このかから――――――――――――離れなさいッ！！！！！』

（――――――――――大丈夫……。大丈夫だ。あの二人なら……！！）

「お嬢様、こちらへ。」

「んー？」

「立ち入り禁止」の看板がある鳥居を避けて、進んだ。

（お嬢様を送り届けたら……すぐに戻って来ます！！）

◇――――――――――◇――――――――――◇

昔の刹那なら、ただ木乃香を優先して判断を下しただろう。

だが今回は違う。刹那は、ネギと明日菜を――――信頼して判断した。

盲目に考えることなく、秤にかけ、吟味して、信じることを選択した。

信頼しているが故に、信じるに足る人間を置いて進む。この、辛い選択を選んだ。

（――――――成長したなぁ、刹那。）

「さて。かわいい幼馴染みの為にやりますか。」

立て看板のある鳥居に手をつける。

（術式解析、開始。）

「同調（トレース・オン）、開始。」

「あれ、あの人……。あれー、立ち入り禁止？」

◇

「あ、このお茶美味しい。」

「このサンドイッチも美味しいですよー」

「うわ、見てくださいアスナさん！　ここ、川がありますよ！！」

「ホントだわ！！　キレイねー」

「平和ねー」

「ですねー」

「――いい加減にしろよぉ――――――――――――！！！」

カモの怒声が響き渡った。

「何よカモ？　そんなにカリカリして。」

「カモ君。折角の京都なんだよ、ゆっくりしようよ。」

「この状況で何でそんなに落ち着いてられんだよ！？　いいか兄貴、姐さん！！　今、俺っち達は閉じ込められてるんだぜ！？」

いま明日菜たちが居るのは千本鳥居の中であってそうではない。
鳥居を触媒にして張られた閉鎖結界、「無間方処の呪（しゅ）」。
結界の端に進むと反対方向に出る――つまり無限ループ。

「だって、私は魔法なんてわかんないし。考えたってしょうがないじゃない。」

「陰陽術は僕にはよくわからないので……ちょっとムリです。」

「「刹那さんの助けを待ってようよ／待ちましょう。」」

「だぁぁかぁぁらあぁぁぁぁあ！！　こうしてる間にこのか姉さんが襲われてるかもしれねえじゃねえか！！」

「大丈夫でしょ。ネギの話だと士郎さんもちゃんといるらしいし、刹那さんもいるし。」

「シネマ村で鬼の矢を撃ち落としてくれたのは多分シロウだよ。」

「なるほど。旦那がいるなら安心だな。じゃー俺もゆっくりするか。姐さん、おしるこのボタン押してくれ。」

「至れり尽くせりよねー。休憩所にトイレ、無料自販機にお弁当まであるなんて。」

「多分、この結界を張った術者のためだと思います。」

「ああ、標的を結界に閉じ込めたかどうか、中に居て確認しなきゃいけねーんだろうな。サンキュー姐さん。お、美味い。」

「ナメとんのかお前ら――――――――――――――――――――!!!!!」

斜め上方から怒号が飛んで来た。

「ちょっと。アレ、さっきゲームセンターに居た子じゃない？」

「あ、そうですね。あの子もここに閉じ込められちゃったのかな？　ていうかアスナさんよく見えますね。僕は魔法で視力を良くしないと見えませんよー」

「ふふん、体力には自信あるって言ったでしょ？」

「姐さん、それ体力じゃねーと思うぜ」

「聞いとるんかコラァ――――！！　フン、西洋魔術師のクセに舐めくさりよって。ここから出たかったら俺を倒すしかないで！！」

「！！　て、敵!?　すると今頃このかさんも襲われて……」

《いえ、お嬢様はまだ無事です》

「「「へ？」」」

ネギと明日菜の頭の上に、二頭身の刹那が浮いていた。

「……刹那さん？」

《はい。連絡用の分身のようなものです。ちびせつなとお呼びください。》

ペコリ、と頭を下げた。ああ可愛い。（作者の私見が多分に含まれております）

《もうすぐお嬢様を本山にお入れすることが出来ます。その後すぐに本体が助けに来ますから、なんとか耐えてください。》

「え？　でも……」

「――――あの子を倒せば出られるのよね？」

「いえ、術者を倒しても出られないかもしれません。そういう魔法もありますから。」

「アイツに聞きだすのが一番確実だろーな。」

《え。あの、皆さん？》

「――――ええ度胸しとるやんけ姉ちゃん。デカイ口叩けんのもそこまでやで。そない簡単に俺を倒せる思うなや！！　来い、鬼蜘蛛！！！」

――――ザザザザザザザッ

――――バキバキッ！！　ズズゥン！！！――――

「――――デッ、デカイ蜘蛛……。」

「見たまんまだな。」

跳んで来た小太郎は休憩所の屋根に着地し、蜘蛛の式神はその横の林に落ちてきた。
十本足と角を持ち、体に梵字が描かれた巨大なクモ。人間の身長を軽く越える程の巨体だ。

（式神？　あのおサルのお姉さんと同じく護鬼を連れてる。ということは一昨日と同じく護鬼ＶＳ従者、陰陽術師ＶＳ西洋魔術師の戦いになるってことだ……！！）

（――――――――――本当に？）

『……これで勝ったつもりなのか？　さあ、呪文を唱えてみるがいい。』
『……こんばんわネギ先生。』
『アナタは出席番号１０番、絡繰茶々丸さん！？』

『く……先生、この前も言ったよな？　この程度で勝ったつもりなのかと。』

『呪いに縛られ、結界に封じられ。１５年の苦渋を舐めた私が、この類の罠に
なんの対処もしていなかったと思うか？』

「ネギ！！」

「ハ、ハイ！！」

思考の海から意識を引きずり戻す。

「契約執行９０秒間！！ネギの従者『神楽坂明日菜』！！」

（――――――……）

『……これで勝ったつもりなのか？』

「――――――ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！」

魔力の鎧を纏って明日菜が走る。

（うお！？　あの姉ちゃん速っ！！？）

一般人離れした速度に小太郎は目を瞠る。

「ガキだからって手加減しないわよ――――――！！」

――――――――バガンッ！！！

力任せの右ストレートで蜘蛛の巨体が吹き飛び、仰向けにひっくり返った。

足をバタつかせて足掻く間に。

「来たれ（アデアット）！！え――――――い！！」

――スパァ――――ン！！　ボシュウウゥゥゥ……！！

瞬殺された。

「うおおっ！　やるじゃんあたし！！」

《おおっ！》

「アスナさんスゴイ！！」

「さすが姐さん！！　いくら契約執行してるからって普通あんなパワー出ねえよ！！」

「へっへーん♪　どんなもんよ！！」

いや明日菜さん。

体力自慢としては誇るべきかもしれませんが、女子中学生としてはどーよ？

「あっはは！！やるな姉ちゃん！！式祓いの力を持つ妙な中学生がいるゆーから防御の固いの連れてきたのに、あっさりお札に戻されてしもたわ。」

式神が倒されても小太郎に焦りは見えない。逆に明日菜を認める程の余裕がある。

「でもお前は大したことないなチビ助。スゴイんは姉ちゃんだけや。女に守ってもらって恥ずかしくないんか？　……だから西洋魔術師はキライなんや」

「ムッ……。」

その言葉が無性に、ネギには腹立たしかった。

「ふんっ！　護鬼ちゃんやられちゃったから負け惜しみなんてカッコ悪いわよボク！！」

「おうよ、もうてめえに勝ち目はねえ！！　降参するなら今のうちだぜ！！」

「……アンタら何かカン違いしてへんか？　俺は術師とちゃうで。」

「――――へ。」

《！！　気をつけてください、もしや奴は……！！》

小太郎が屋根を蹴り、明日菜の目前に現れた。

「わっ…！　っ、このぉっ！！」

「ははははっ！！　ンなモン当たらんわ！！　オラッ」

「キャッ！」

振り回される明日菜のハリセンを容易く躱し、足を引っかけて転倒させる。
体勢を入れ替え、ネギに突進する。

「っ！　ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！風花（フランス）・武装解除（エクサルマティオー）！！」

弾かれた。

「えっ！？」

花弁と消えていったのは小太郎のニット帽のみ。
ネギが驚いている隙に小太郎が右腕を振りかぶる。

「――風盾（デフレクシオ）――――あぐっ！！」

障壁で威力が緩和されているにも関わらず――ネギの体は地面を1（ワン）バウンドして吹き飛んだ。

「ネギっ！？」

「ハッ、まだまだぁっ！！」

「――――――――風精召喚！！」

小太郎を取り囲む、７人のネギ。正体はネギの姿をした風の精霊７柱。
風精召喚、「剣を執る戦友」。

「迎え撃て（コントラー・プーグネント）！！」

「はっ――――なんや、こんなものっ！！」

拳打、肘打ち、蹴りで一度に三体倒される。
懐から取り出したクナイを投げつけて更に3体撃破。
そして最後の一体を殴って消滅させる。
3秒とかからず7体の精霊を撃破してみせた。

「ちょ、ちょっと！！　あの子すごく強いじゃない！！」

「メチャクチャ戦い慣れしてやがる！！」

小太郎が風精と戦っている間に、距離をとって呪文を唱える。

「魔法の射手（サギタ・マギカ）・連弾（セリエス）・光の１１矢（ルーキス）！！」

「うおおっ！！」

――――バキキキキキンッ！！！！

小太郎は懐からお札を取り出し、それを盾にして矢を防ぐ。

（あぶなっ！！　魔法の矢か、なんちゅー威力や！！　……っ！？）

「――――闇夜切り裂く一条の光。我が手に宿りて敵を喰らえ。白き雷（ウーヌス・フルゴル　コンキデンス・ノクテム・メア・マヌー・エンス　イニミークム・エダット　フルグラティオー・アルビカンス）！！！！」

――――ビシャアアアァァァンッ！！！！

「がああああっ！？」

ネギの掌から放たれる電撃が小太郎に直撃し、周囲が土煙に覆われる。

「スゲエ兄貴！！　吹き飛ばされながらの”風精召喚”、それで時間を稼いで”魔法の射手”に”白き雷”！！　初めての対戦士魔法戦闘とは思えねえ！！」

「か、雷！？……ネギも結構強いじゃない……！！」

「にしても……出て来ねえな。やったんじゃねえか？」

《いえ、まだです！！》

ちびせつなの言葉通り――土煙から、無傷の小太郎が飛び出した。

「やるやないかチビ助！！　今のはちょっとヤバかったで！！」

（おかげで護符を全部使(つこ)てしもたけど、今ので決められなかったんは致命的やな！！――これで終いや！！）

一足跳びで己の射程距離にネギを捉える。当然、呪文を唱える暇など与えない。

「ネ、ネギっ！！」

「『瞬く雷精(パルペブロアー・フルグラーリス)』――――――――――――――解放(エーミッタム)。」

――――ビシャアアアァァァンッ！！！！

「――――――――がああああああああああああっ！！？」

「白き雷」の直撃を喰らった小太郎は地に倒れ伏す。

（このチビ何をしたんや！？　呪文も唱えずに魔法を……いや、何をされた！？　体が動かへん！？）

「はあ……はあ……。」

「ネギ、大丈夫！？」

明日菜とカモがネギに駆け寄る。

「いや兄貴、良くやったぜ。」

（パンチ喰らって吹き飛びながら魔法行使、しかも４連続でだ。おまけに最後のアレは遅延呪文（ディレイ・スペル）。これじゃあ息が切れて当然だぜ。体力と精神力をいっぺんに削られたようなモンだからな。）

「ちょっと、ネギ？」

フラフラの体でネギが小太郎に近づく。

「ぐ……な、なんやワレ……！！　トドメ刺す気か！？」

「そんなことしないよ。……ついこの前、君や…僕なんかじゃ全然敵わないような人と戦ったんだ。それが無かったら、僕は君に勝てなかったかもしれない。」

「……？」

そう。エヴァンジェリンとの戦闘経験があったからこそネギは慎重になった。

明日菜と鬼蜘蛛が戦っている隙に「白き雷」の遅延呪文（ディレイ・スペル）を準備した。

小太郎が両者の戦いを様子見していただけで、ネギに攻撃してこなかったのも運が良かった。

「……君、言ってたよね。「西洋魔術師のクセに」とか、「西洋魔術師は嫌いだ」って。でも……魔法使いの中には、スゴイ人だっていっぱいいるんだ。」

タカミチ。エヴァンジェリン。そして……越えるべき父親、サウザンドマスター。

「……。」

小太郎は、ネギの話を静かに聞いていた。

「――――どうだ。これが西洋魔術師の……僕の、力だ……！！」

自分もその”スゴイ人達”と同じ西洋魔術師であるということが、ネギにはとても誇らしかった。

「ネギ……。」

「フフ……成長したな、兄貴」

（≪１０歳にしてこの才気と精神力……士郎さんが「優秀だ」と言っていたワケがわかった気がします。≫）

「……ああ、俺が悪かった。訂正するわ」

「え？」

まさか謝ってくるとは思いもしなかったネギは面喰った。

「チビ……言うんもやめるわ。そんな話聞かせられて大人しくぶっ倒れてんのは――――――失礼やろ！！」

「「「っ！！？」」」

小太郎の体から〝気〟が吹き荒れる。

〝気〟が噴き出すと共に、徐々に小太郎の姿が変わっていく。

少年とは思えない、筋骨隆々の身体。
体から毛が生え、髪は伸びて鬣（たてがみ）に。
尾が生えて手足の爪が鋭く伸びる。

狗族と人間のハーフである小太郎の――――〝狗族獣化〟。

「な、何よコレぇっ！？」

「変身した！！　人狼（ワーウルフ）！？」

《いえ、アレは狗族です！！》

「そう言われてもわからねえよ！！」

「白き雷」で体が麻痺していたはずの小太郎が――――立ち上がる。

「ナメてかかって悪かったな、ネギ・スプリングフィールド。こっからが本番や。」

「――――さあ、もっと戦ろう！！」

終わらない螺旋の結界に取り込まれたネギたち。

戦いもまだ終わらない。

第３９話　修学旅行編　三日目・永遠循環（後書き）

～補足・解説～

・「『瞬く雷精（パルペブロアー・フルグラーリス）』――――――――――――解放（エーミッタム）。」

タネは原作でネギが武道会のｖｓタカミチ戦で使用した遅延呪文（ディレイ・スペル）の特殊術式と同じモノ。
通常の遅延呪文は「直前に」溜めた魔法しか使えないので特殊術式の出番と相成りました。
発動キーワードが原作タカミチ戦と違うのは、私はネギがその場で思いついた言葉をキーワードにしてるのだと思ったので変えました。

「ラ・ステル・マ・スキル・マギステル！！特殊術式（アルティス・スペキアロリス）「夜に咲く花（ノクティクルス）」」

・リミット３０！！
詠唱発動鍵設定（カントゥ・クラウセ・エンス・シッペルペブロアー・フルグラーリス　フルグラティオー・アルビガンスティオー・エフェクトゥス）「瞬く雷精」！！「白き雷」、術式封印！！」

こんなカンジです。

・そう。エヴァンジェリンとの戦闘経験があったからこそネギは慎重になった。

「――――――――――ムッ！？」

――――ピキィ――――ン！！

どこかの宇宙世紀っぽい紫電がエヴァの頭に奔った。ちなみにいまはティータイム。

「マスター？　どうされました？」

主の挙動に反応した茶々丸。ちなみにいま給仕中。

「……いや、どこかで私の株が上がったような……気がする。」

「……はあ。」

こんなやりとりがあったかは定かではない。

それでは次回！

第４０話　修学旅行編　三日目・螺旋の果て（前書き）

いやぁ～、疲れた。
この連続投稿は昨日のうちに予約投稿で行ったんですが、いやぁ～疲れた。

え？　昨日はそんなに暇だったのかって？　いやいや。

嫌な事があってサボったんですよ、大学を。

で、この作業してました。ああ、前学期の二の舞を踏みそうだあ。

ここで愚痴りたいんですが、俺の愚痴を読むために皆さんアクセスしてくださってるわけじゃないですからね。ただ、嫌な事があったとは言いたかったんだ・・・！！

それでは第４０話、どうぞ。

第４０話　修学旅行編　三日目・螺旋の果て

「あああ、どうしよー……！！　ネギせんせーがピンチです……！！」

（――あの男の子の名前が判れば心が読めるのに――）

（――あれは、狗族？　天ヶ崎に雇われた子供がいたハズだ。確か名前は――）

「――――――小太郎……」

「え？」

（確証は無いが――――）

「のどかちゃん、アイツの名前は「犬上小太郎」だ！！」

「え？　え？　こ、コタロー君、ですか！？　わ、わかりましたっ。来たれ！（アデアット）　「いどのえにっき（ディアーリウム・エーユス）」――――『犬上小太郎』！！」

戦いは終わらない。

「オラオラオラァッ！！」

獣化した小太郎は目にも止まらぬ速さで動き、一撃で大地を砕く。

魔法障壁と風盾（デフレクシオ）で防ぎ続けるが威力を殺すには至らず、貫通ダメージがネギの体力を奪っていく。

その隙になんとか反撃の手段を模索しようとするネギの懐に

「ココや！！」

小太郎が入り込んだ。

（――障壁と風盾の併用の継ぎ目を――――！！）

「――――風花（フランス）・風障壁（パリエース・アエリアーリス）！！」

――――ビュオッ――――ゴパァンン！！！！！

間一髪、小太郎の拳を押し返す。

「はっ、隙だらけやで、ネギ！！」

「！！！」

ネギの背後で、小太郎が拳を握っていた。

「風花・風障壁」は優秀な防御呪文だが、技後硬直があることと、連続使用が不可という欠点がある。
そこを見事に突かれた。

――――ドガンッッ！！！

「……っあ……！！」

風盾で防いだが、マトモに声も出ないほどのダメージ。

ネギの体は宙を飛び、鳥居にぶつかって崩れ落ちる。

「ネ、ネギ！！」

明日菜が悲鳴に近い声で叫ぶ。

（ッ考えろ……！！　どうすれば小太郎君に勝てる……？　呪文を唱える暇なんて無い。いや、今の小太郎君相手には作れない！　アスナさんの攻撃だって当たらない。なら、どうする……！？）

「こ、このぉ！！　何でネギばっか狙うのよ！！　私にかかってきなさい！！」

「男同士の戦いに水差すなや姉ちゃん。それに俺は女と戦るシュミはないんや。戦いってのは、男のやるモンやで」

――――――戦い。

ネギの脳裏に再生されるのは月下のエヴァンジェリンと――――――

6年前の雪の夜。焼ける空の下。上位悪魔の首を片手で締め上げる、偉大な魔法使い。

そしてカモの言葉。

『従者（パートナー）は魔法使いから供給される魔力を纏うことで身体能力をアップさせるんだ』

（――なら。僕も魔力供給を、自分の体に魔力を流せば、小太郎君に追いつけるかもしれない。）

通常、仮契約を結んでいる相手にしか魔力は送れない。しかしこれは『ネギ・スプリングフィールド』と『神楽坂明日菜』の契約だ。供給先を魔法使い本人に設定することも出来るはず。

「ハッ、話はここまでや。」

ズプンッ！！

小太郎の影から全身真っ黒な犬たちが現れる。

「な、なに！？　アイツの影から犬っぽいのがいっぱい！？」

《え……と式神のようなものです！》

「そう、さっき言ったやろ。俺は術師ちゃう。「狗神使い」言うんや！！

――――お前ら、あの姉ちゃん達と遊んでやり。」

《――ウオオォォォォン！！！！！》

「なっ……ちょっと！！」

「マズイぜ！！兄貴はもう動けねーってのに、小太郎（アイツ）がフリーになっちまった！！」

明日菜は狗神に足止めされた。

誰も、ネギを助けに行けない。

「ネギ！！　これで終わりか！？　ガッカリさせんな！！」

鳥居に凭（もた）れかかったまま動かないネギに声を飛ばす。

「フン、まあええ。つまらん終わり方やけど、そのまま動けへんいうなら――――――これで終わりや！！」

瞬動で踏み込み、ネギの脇腹目掛けて拳が放たれ、逸（・・・）らされた。

「――――――契約執行０．５秒間。ネギ・スプリングフィールド（ネギウス・スプリング フィエルデース）。」

――――――ガシィッ！！

「――――――な。」

目の前で起こった出来事に、小太郎の思考が停まる。

その隙に右手を握りしめ、渾身のカウンターを叩きこむ！！

――――――ド　ゴンッ！！！！！！

完璧なカウンターを顔面にもらった小太郎。動きが止まった。

（うまくいった。コレなら――――――！！）

「契約執行１０秒間、ネギ・スプリングフィールド！！」

「――へっ、いいぜネギ！！　もっとや！！」

（――さっきの「白き雷」と同じだ、回復が早い！！）

――――ヒュッ！！

「！！」

小太郎が一瞬で

（視界から消えた――見えない！！）

（――攻撃はどっちから！？　右！？）

「――――左ですせんせーーーーーーー！！」

「――おらぁっ！！」

（っ！！）

間一髪で――なんとか躱した。

しかし問題はそこではなく。

先ほどの声を辿った先には。

「――――――の、のどかさん！！？」

――◇

◇――――――――――◇――――――――――

刹那と木乃香が結界を避けて本山へ向かった後。

「えっと、あのー……」

「！！　と、君は３－Ａの――宮崎のどか、さん……だよね？」

「は、はいー。わざわざ覚えてくださって、ありがとうございます……。」

（喫茶店のマスターさんに会うとは思わなかったなあ……）

「何でこんなトコに……って、その本……！！」

「はい？　え、、えーとこれはそのー……」

（え？　え？　何か変かな……あ。この本少し光ってるからかな……？）

「……ネギを探してついて来たのか？」

（え？　何でわかったんだろー……）

「は、はい……。でも、何でわかったんですかー……？」

「その本の名前は「ＤＩＡＲＩＵＭ（ディアーリウム）　ＥＪＵＳ（エーユス）」……「ｉｄ（いど）の絵日記（えにっき）」。もう体験したんだろう？　その本は持ち主が名前を知っている者の心を読むことが出来る、魔法の本なんだ。」

「……え……」

（――ま、魔法――）

「まあいきなり魔法なんて言っても信じてもらえないだろうけど、その本は間違いなく本物だ。それは君が一番良く知ってるだろう。」

「……は、はい……」

（じゃあ私が読んだのは、ネギせんせーの……）

「で、その本なんだが……その本の元になったカードは、魔法使いとの契約で手に入るんだ。まあぶっちゃけると……昨日、ネギとキスしたからだな。」

（な、な、ネ、ネギせんせ、とキス、したの、何で、知ってるんですか――!!!!）

――――ボフンッ!!

「えーいや、そのー、昨日の夜にゲームでネギにキスしたって聞い

ただけで、決して覗いてたワケじゃないからな？　だから落ち着いてくれ頼むから。」

「ふぁ、は、はいぃ……。」

（あああああ～～～～。は、は、恥ずかしい……！！！！……、「魔法使い」……？）

「じゃ、じゃあネギせんせーは……」

「そう、魔法使いだ。」

（お、思い当たることはあるけど……。それにこの本、どう見ても魔法の本だし……）

「――――君は今、入り口に立っている。」

「え……。」

「この立て看板の向こうへ行けばネギに会える。だが下手したら二度と其処から出られないかもしれない。」

「に……二度と……？」

「危険の全く無いファンタジーなんて、本の中にだって無い。危険が満ちている。魔法の世界というのは物語のようにはいかないんだ。」

不思議の国のアリスが、夢とも知れぬ世界で追われるように。
ヘンゼルとグレーテルが、魔女に捕らわれるように。
浦島太郎が、竜宮城での数日と引き替えに老人になってしまうように。

「それで君はどちらを選ぶ？　魔法を知ってしまった者は選択を迫られる。記憶を消されて全てを忘れるか。危険な魔法の世界に足を踏み入れるか。記憶を消されたくないなら、これから決して魔法に関わらないことを約束してもらわなきゃならない。」

「あの、この本…いえ、このカードは、どうなるんですか……？その、魔法に関わらなかったら……」

「まあ、持ってないほうがいいのは間違いないな。君のソレは危険――いや、希少すぎる。そのカードの価値を知っている者は思わず目を瞠るくらいな。できるなら捨てることを勧める。」

「――――――いや、です……。」

「――――――……。」

「このカードは、とても大切なものなんです……。捨てるなんて、

嫌です……！」

（だって、このカードはー……ネギせんせーとの……）

「……進めば戻れなくなるぞ？」

「……大丈夫です、きっと……。ネギせんせーはホントは、スゴく頼れる人なんですー……。」

のどかの心は決まった。答えは、「前へ」。

「――若いな。一時の感情に任せた行動で身を滅ぼす、いい例だ。でも――女の子が危険に飛び込むって言ってるのを、放っておくわけにはいかないな。」

「え……」

士郎は立て看板を蹴り飛ばす。

「――行くぞ。ネギの所に行くんだろ？」

「……は、はいっ……！」

◇――◇――◇――

「えっと、あのー……」

後ろからかけられた声に、解析を中断して振り向く。

（――驚いた。何でこの子がここに居るんだろう。）

「……って、その本……！！」

（「ＤＩＡＲＩＵＭ　ＥＪＵＳ」――「いどのえにっき」――だと！？）

ネギとの契約アーティファクトか……！！

こんな激レア能力（アイテム）が出てくるなんて、なんて運の悪い……！！

しかも呼び出し方を知っているなんて。

これはこのままにしていていいレベルの問題じゃない。

下手をすれば彼女の身に危険が及ぶ――――――!!

魔法に足を踏み入れて、知識と身を守る術を学ぶか。
記憶を消して完全に関わりを断つか。

そのどちらかを、選ばせるべきだ。

本当なら今すぐじゃなくてもいいのだが、
この子は放っておいたらこのまま鳥居をくぐって行ってしまうだろう。
そして魔法に遭遇する。
ならば、始めから危険を知らせておいた方がいい。

「その本は持ち主が名前を知っている者の心を読むことが出来る、魔法の本なんだ。」

「じゃ、じゃあネギせんせーは……」

「そう、魔法使いだ。」

「君はどちらを選ぶ?」

「このカードは、とても大切なものなんです……。捨てるなんて、嫌です……！」

「……大丈夫です、きっと……。ネギせんせーはホントは、スゴく頼れる人なんですー……。」

（…ベタ惚れじゃねえか……。ネギ、お前責任取れよ。）

にしても、女の子が危険に飛び込むって言ってるのを、放っておくわけにはいかないな。

邪魔な看板を蹴り倒してやった。

「――――行くぞ。ネギの所に行くんだろ？」

「……は、はいっ……！！」

無間方処の陣へと続く、鳥居をくぐった。

◇――――――――――◇――――――――――◇

「――――――――――の、のどかさん！！？」

「ほっ……良かった、ネギせんせー……」

「来(アデアット)たれ。」

――――――ドドドドドッ！！！

士郎が投影(しょうかん)した剣が飛来し、明日菜を襲う狗神を地面に繋ぎ止める。

《……グルルゥ……！！》

「あっ、しろ――――――本屋ちゃん！？　な、何でここに！？」

「そ、それはこの――――――あっ！！」

「右ですせんせー！！」

「上！！」

「み、右後ろ回し蹴りだそうです――――――！！」

躱しざまのネギの右ストレート――――ヒット。

――――ボカンッ！

「おぶっ！！」

（な、何やあの姉ちゃん。どー見ても一般人のクセして、俺の攻撃を全て読んどる！？）

「――――あぐっ！？」

このまま勝てると思った明日菜達だったが、ネギが呻き声をあげて苦悶の表情を浮かべている。

仮契約（パクティオー）の契約執行術式を逆手にとった、自身への魔力供給。

それは「術者への魔力の逆流」を意味し、ネギの肉体にダメージを与えていた。

「やべえ、兄貴のダメージが大き過ぎる！　このまま戦うのは危険だぜ！！」

「――――――のどかちゃん。」

「は、はいっ！　すぅ――――――～～～～……。あ、あのぉ――、小太郎クーン！！　ここから出るにはぁ、どうすればいいんですかーーー！！？」

「「！？」」

「は？　ア、アホか姉ちゃん、ンなモン言うワケ……。ハッ！？」

ＤＩＡＲＩＵＭ（ディアーリウム）　ＥＪＵＳ（エーユス）－Ｍａｓｕｔｅｒ：宮崎のどか

４月２４日　木曜日　　コタロー

脱出方法やて？　そんなん言う訳ないやろアホ。ちゅーか言ったらアカン。俺がメッチャ怒られるし、絶対言わんで。「この休憩所の広場から東に向かって６本目の鳥居壊したらええ」なんて。……アレッ？　そういえばこの娘いま、俺の攻撃を読んで……マ、マズッ！！

「こ、この広場から東へ6番目の鳥居の上と左右3箇所の隠された印を壊せばいいそうです――」

《なっ…！》

「ふおおおおおお!?　何とぉ!?」

「すごい!!!　本屋ちゃん!!」

（て、敵に回したくねー）

「な、何ィイ!?　あっ、ネギ!!　待てコラァ!!!」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！　魔法の射手（サギタ・マギカ）・連弾（セリエス）・光（ルーキス）の三矢!!」

――――バキキキィン!!

「のどかさん!!」

「明日菜、走れ!!」

ネギが杖にのどかを乗せて飛び、明日菜と士郎その他が「6番目の鳥居」に駆ける。

《光って見えるのが空間の亀裂ですアスナさん!!》

「任せて!!　おりゃっ!!」

「ハマノツルギ」を振い、「空間の亀裂」という神秘を破戒する。

――――パキャアアァンッ!!

「脱出ーーーーーーーーっ!!」

『待てコラァッ!!逃がさへんでーーーー!!!』

結界の向こうから小太郎が追って来る。

「――――刹那!!」

《ちびせつなです!!　わかってます、再度結界を閉じて奴を封じ込めます!!》

《――ヴァン、ウーン、タラーク、キリーク、アク……「無間方処・返しの呪」！！》

『――――あっ、待っ……！』

――――――――ガコオォォォンンッ！！！

―◇

◇――――――――◇――――――――

《本体に状況は知らせました。本山でお嬢様と共に待っているそうです。では私はこれにて……》

「カワイイのにナァ、ちびせつな。」

《な、何言ってるんですか！！　今度こそ帰りますっ！！》

――ぽんっ！

ちびせつなが紙型に戻った。

「だそうだから、さっさと本山に行こうか――」

「バ、バレちゃいましたね……。黙っててすいません。その、秘密だったもので……」

「いえ、前からうすうすは――……。でも、ネギせんせーが魔法使いなんて……。こんなのって図書館の本の中だけって思ってましたから…私…なんだかドキドキしちゃって……。」

（でもネギ、本屋ちゃんは巻き込まないんじゃなかったの？）

（でも、ここまで知られちゃったら……）

（……詳しく話したのは俺だっていうのは黙っておこう……）

本山に向けて歩き始める。

「しかしコイツは異常に強力なアイテムだぜ！！いやー強力な仲間が加わってよかった！！」

「「黙りなさいエロガモ！！／黙れエロガモ」」

「イ、イエッサー」

「お、そこの石段上がったトコの門を過ぎれば本山だぞ。」

「ていうか、なんだかんだいって夕方になっちゃったわね。」

明日菜の言う通り、既に京都の日は傾いていた。

『お帰りなさいませ、若ｓ「はいストォーーーーーーップ！！！」』

「うわぁー……。神社みたいなのがいっぱい……」

「お帰りーなシロウ♪」

「今朝会っただろうが。」

「担任のネギ先生ですね。長から話は伺っております。お怪我は大丈夫ですか？」

「は、はい。」

「刹那？　何でカオ赤いんだ？」

（この人、私に最後になんて言ったか忘れてるんでしょうか……。いや、アレはあくまでちびせつなに言ったのであって、私が言われた訳では……！！　うう……）

「アスナ、ウチの家おっきくてひいた？」

「ううん？　ビックリしたけどいいんちょで慣れてるし。」

「ところで皆様、後ろの方々もこのかお嬢様のご友人でございますか？」

「「「「「「え？」」」」」」

本山の門の向こうに居たのは――――――

「「へへ♪」」

「してやったり」と笑うハルナと朝倉。そして夕映。

「アンタらがこっそり何処に行くのか気になってねー？」

「刹那さんのバッグにＧＰＳケータイを放りこんどいたんだ♪　ふふん、報道部の名は伊達じゃないよ？」

ああ、伊達でよかったのに。と士郎は思った。

士郎は思わずこめかみを押さえ、刹那は苦笑するしかなかった。

（ああ、なんでさ……）

５班＋朝倉・ネギ・士郎の計９人、関西呪術協会へ入山。

第４０話　修学旅行編　三日目・螺旋の果て（後書き）

～補足・解説～

・「来たれ（アデアット）！　「いどのえにっき（ディアーリウム・エーユス）」――――『犬上小太郎』！！」

のどかが「いどのえにっき」のラテン語名を知ってるのは、士郎にいろいろ教わったからです。

・「――――刹那！！」

・《ちびせつなです！！　わかってます、再度結界を閉じて奴を封じ込めます！！》

ちびせつなにも「ちびせつな」というアイデンティティとプライドがあります。

～お知らせ～

１２月８日から１月中旬頃まで年末年始休暇に入ります。

来年もこの小説を読んでいただけると嬉しいです。

来年にまたお会いしましょう。

皆さん、良い年末を。

それでは次回！！

第４１話　修学旅行編　三日目・長い夜のはじまり（前書き）

前回のあとがきのお知らせ、嘘予告になってごめんなさい。

体調悪くてしばらく大学休んでて、その間の暇つぶしに書いてたら出来ました。

１２／２５日くらいまでは更新を続けることにします。

それでは第４１話、どうぞ。

第４１話　修学旅行編　三日目・長い夜のはじまり

？昆古社が建つ山の中。
立ち並ぶ木々のひとつに登り、関西呪術協会の本山を臨む集団。

「小太郎！！何でお嬢様を結界に閉じ込めへんかったんや！？」

「はあ！？　アンタ俺に親書届けさせへんよーにって言うたやんけ！！」

「お嬢様を本山に入れさせたらアカンて考えなかったんかい！！あそこの結界は鉄壁なんやえ！？　もう手出しでけへんやんけ！！」

「ンなモン知らんわ！！」

「……。」

「新入り！！アンタも聞いとるんか！？　アンタが追わんでええ言うから放っておいたら、お嬢様が本山に入ってしもたんやえ！！」

「大丈夫ですよ。」

「……あ？」

「僕に、任せてください。」

第４１話　修学旅行編　三日目・長い夜のはじまり

「うっひゃー、スゴイ歓迎だねえ。」

「コレはどーゆーことですか？」

「えーと…実は僕、修学旅行とは別に仕事があって……」

「「秘密の任務！？」」

「誰もんなこた言ってねぇ！！」

思わず士郎がツッコんだ。

現在9人が通されているのはとてつもなく広い大広間。
床は全て板張りになっていて、天井は組入天井になっている。
広間の端には礼服を着て正座し、和楽器を奏でる巫女たち。
そして広間の前方には奥へと続く大階段。
その手前に9人分の座布団が敷かれている。
大人しく座っていると――――

「――お待たせしました。」

階段を下りてきたのは和風の礼服に身を包んだ眼鏡の男性。
黒髪の短髪で、髪の生え際が若干後退している。
少し頬が痩せこけていて不健康な印象だ。
彼が関西呪術協会の長にして、衛宮士郎・近衛木乃香の父親。

「ようこそ明日菜君、このかのクラスメイトの皆さん。……そして担任のネギ先生。」

ニコッと笑う。

「お父様！！　久しぶりやー！！」

「ははは。これこれ、このか。」

父娘（おやこ）が再会を喜び抱きあう。士郎が（魔法世界からの）家出から帰還した際に二人で帰省して以来なので、約2年ぶりとなる。

「こんなお屋敷に住んでる割には普通の人だねー。」

「てかちょっと顔色悪いカンジだけど……」

ハルナや朝倉が小言とはいえ、本人を前に失礼な事を言っていると思えば、

「し……渋くてステキかも……！！」

明日菜は衝撃を受けたような表情で詠春に見入っている。

そんな3人は置いておいて、ネギは本来の任務に移る。

「あ、あの。長さんこれを……」

「――東の長、麻帆良学園学園長・近衛近右衛門から　西の長への親書です。
お受け取りください。」

「確かに承りました、ネギ君。大変だったでしょう。」

「い、いえ。」

さっそく封筒の封を切ると、出てきたのは正式な文書二枚と一枚の伝言。

『下も抑えれんとは何事じゃ　しっかりせい婿殿!!　ぷんすか』

（はは……相変わらずお義父さんは手厳しい。）

「……いいでしょう。東の長の意を汲み、東西の中違いの解消に尽力するとお伝えください。任務御苦労!!　ネギ・スプリングフィールド君!!」

「……ハイ!!」

「お――――――!!　何かよくわかんないけどオメデト――――先生!!」

「ご苦労様――――――!!」

「え、えへへー。皆さん、ありがとうございます。」

（何で３－Ａ（コイツら）はこんなにすぐテンションが上がるんだ？）

「今から山を下ると日が暮れてしまいます。君達も今日は泊まっていくといいでしょう。歓迎の宴を御用意致しますよ。」

「え――っやった――――！！」

「ラッキー！！」

（あんた達はついてきただけでしょ……）

「え、でも僕たち修学旅行中ですから……」

「それは大丈夫です。お義父さんから先生方に話が行っている筈です。しかし彼女たちは予定外ですし……私が身代わりをたてておきましょう。」

詠春の言う「彼女たち」とは夕映・のどか・ハルナ・朝倉の４人。

詠春は近くの巫女に指示を飛ばし、一行を客間に案内させる。

そして大広間に残ったのは二人のみ。

「……昼間、会ったぞ。『アーウェルンクス』。」

「！　……アレは、ナギが倒したハズです。同一人物だとは……

思いたくないのですがね……。」

―◇―――◇―――◇―――

ホテル嵐山。

「まったく、学園長先生はお孫に甘い！　修学旅行中に実家に孫を泊まらせる教師がどこにいるというんだ……。学校の団体行動を何だとお考えなのか……！　しかも幼馴染みだとか親友だとか言って桜咲と神楽坂も一緒に泊まるなど……！！」

教師の鏡・新田先生が憤慨していた。

「新田先生、機嫌悪いねー」

「触らぬ神に祟りナシ、だったアルか？」

「そうネ。さっさとここから離れるヨロシ。」

―それじゃあ、部屋で新しいメニューを考えましょう―

「うむ。京都の素材を上手く肉まんに使えないか検討するヨ。フフフ、超包子。世界の全てに肉まんを！！　さらなるグレードアップを目指すネ！！」

その様子を陰から観察する魔法先生・瀬流彦。

（要注意生徒・超鈴音。特に妙な行動はナシ。ああ、新田先生怒ってるなー。でもこれでネギ君の方は安全になる手筈なんだからしょうがないな。さて、僕は引き続き一般生徒の警護をしなくちゃ。）

「ねえ、なんかヘンじゃない？」

「うん。５班の３人、何か様子が……」

「朝倉も目が虚ろだし……」

ホテル嵐山、異常ナシ。……たぶん。

客間で宴が開かれてドンチャン騒ぎの中、

「刹那君。」

詠春がやって来た。

「こ、これは長！　私のような者にお声を……！！」

「ハハ……そう畏まらないでください。変わりませんね君は」

「……この2年間、このかの護衛をありがとうございます。私の個人的な頼みに応えよく頑張ってくれました。苦労をかけましたね。」

「ハッ…いえ、お嬢様の護衛は元より私の望みなれば……もったいないお言葉です。しかし……申し訳ありません、私は結局お嬢様に……。」

「話は聞きました。このかがチカラを使ったようですね。しかしそれで刹那君が大事に至らなかったのなら、むしろ幸いでしょう。」

「このかには普通の女の子として生活してもらいたいと思い秘密にしてきましたが……いずれこうなる日が来たのかもしれません。刹那君。君の口からそれとなく、このかに伝えてもらえますか。」

「長……。」

◇――――――――――◇――――――――――◇

「ふぃ〜〜〜〜っ？　今日は色々あって汗かいたからサッパリする〜〜〜〜〜♪」

「疲れもしっかり洗い流してくださいね。」

明日菜と刹那は宴会を抜け出して、大浴場でシャワーを浴びている。

「なんか刹那さんってお姫様（このか）を守る騎士（ナイト）ってカンジだよねー？　ただの幼馴染みとかボディーガードじゃないってゆーかー」

「！？　あああアスナさんまでそんなコト言わないでください！！　そんな関係じゃないですよ！！　そーいうアスナさんはどうなんで

すか！？」

「へ？」

「あんなに一生懸命ネギ先生に協力するのはおかしいです！！」

「なっ！？　な、何の話してんのよ！！」

「一般人のアスナさんが危険な目にあってまだ協力するなんて――」

「だっ…だってアイツまだガキだし！！　心配するでしょ！？」

「私もお嬢様が心配なだけです――――！！！」

「「ぜえ……はあ……。」」

「……私達、何やってんのかしらね。」

「クスッ、そうですね。」

（そーいえば、いつのまにか桜咲さん→刹那さんって呼んでるなあ、あたし。）

（そういえば、いつのまにか「アスナさん」って名前で呼んでます

ね。）

「あの……明日菜さん。色々と話したいことがあるので……後でお嬢様と一緒にこのお風呂場に来ていただけますか？」

「？？　うん、いいけど……」

『ハハハハ。』

「「ん？」」

『いや、１０歳で先生とはやはりスゴイ。』

『いえそんな……』

「あの声はネギとこのかのお父さん！？」

「なっ……！　あわわ　どうしましょう明日菜さん！！」

◇―――◇―――◇

「このかの事、よろしく頼みますよネギ先生」

「はい、わかりました。」

桶で体に湯をかけた後、二人はすぐに湯船に入って歓談している。

（……何で隠れてるの私達？）

（す、すみません。いつものクセで……）

明日菜は心の中でひっそりと涙した。

（そうやって陰からこのかを守ってたのね……ホロリ）

「この度はウチの者達が迷惑をかけてしまい、申し訳ありません。生憎どこも人手不足で、腕の立つ者は西日本全域に出払っているんですが……明日の昼には部下たちが戻りますので奴らをひっ捕らえますよ。」

「は……はい！　……それで、あのお猿のお姉さんはなぜこのかさんを狙ったんですか？」

「お猿……天ヶ崎千草のことですか。その……彼女には西洋魔術師に対する恨みのようなものがあって……いや、困ったものです。彼女は、切り札が欲しいのでしょう。」

「切り札？」

「はい、薄々お気づきとは思いますが……。近衛家で最も濃い血を受け継ぐあの子には、凄まじい呪力……”魔力を操る力”が眠っています。その力は君のお父さん・サウザンドマスターを凌ぐほどです。その力を上手く利用すれば西を乗っ取り、東を討つことも可能だと考えたのでしょう。」

「ですから今回のようなことが起きないようにとこのかを安全な麻帆良学園に住まわせ、あの子にもその事を秘密にして守ってきたのですが……」

「そ、そうだったんですか……。あれ？　僕の父さんのコトを御存知なんですか？」

「君のお父さんのことですか？　フフ、よく存じてますよ。なにしろあのバカ……ナギ・スプリングフィールドとは、腐れ縁の友人でしたからね。」

「え……。」

『ですからあのシネマ村の一件はどう見ても不可思議なのです！！』

『だからなー、あれはＣＧやってん』

『私はそんなモノでは納得出来ません！！』

「おやおや御婦人方が……これはご案内を間違えたかな？

皆さーーん!!　申し訳ありませんがただいま入ってますよ!!」

『え!?　あ、ホントだー、カゴに服入ってるー』

『これ先生の服じゃん!　のどか、アンタ一緒に風呂入んなよ!!』

『え!?　あ、あわわ、せ、せんせーとお風呂……!!』

『何バカなこと言ってるですか!　わかりましたー!!　出直しますー!!』

『んん?　このかのお父さーん、お二人以外に誰か入ってます?』

「いえ、私達だけですが?」

（（――ぎくっ））

『どうしたん?』

『ここに服があと二人分あるんだけど。』

（（朝倉／朝倉さん――――――!!））

その後明日菜と刹那は詠春に発見され、無事保護されたという。

「父様のエッチ――――――！！　なんでアスナと一緒に風呂入っとるん――――――！！」

「このかさん、お父様は何もしていませんよ？」

夕映の説得も空しく、詠春は愛娘に「エッチ」呼ばわりされてダメージを受けたという。

―◇―――◇―――◇―――

「士郎、君も一緒に風呂に入れば良かったのでは？」

「……油断し過ぎじゃないのか？　俺は嫌な予感がしてしょうがない。」

詠春の自室。詠春は髪を拭きながら机の傍の座布団に座り、士郎は柱に寄り掛かって胡坐をかいている。

「そう気を張っていては疲れますよ。安心なさい、ここの結界は過去に破られた例がありません。」

「記録上は、だろ?」

「ハハ、用心深いですね。」

何気に詠春と士郎は意見が対立することが多い。

木乃香に魔法の存在を教えるべきか否か、この状況で警戒すべきか否か。

「用心するに越したことはないだろ。まあいい。それじゃ俺も風呂に入るよ」

「ゆっくりしてきなさい。」

「あーい。」

背を向けながら手をひらひらと振って、士郎は部屋を出て行った。

――パタン。

「フゥ……。」

詠春は安堵していた。

(切嗣の事――きちんと受け入れて、ふっきってくれたようですね。)

さて、養子（むすこ）の忠告を少しは聞いて刀を用意しておこうか。と思って腰を上げて――――

（ッ――――――――――！！）

バッ！！

咄嗟に後ろを振り返る。

……誰も居ない。

「衰えたね、近衛詠春。」

「！！！」

さらに、背後。

――ボフンッ！！

「やはり２０年も経てば人間は衰えるか。それとも平和に浸かり過ぎたのかな？」

「――――――――舐めないで頂きたい！！」

「！！」

「石の息吹」の煙の中から詠春が飛び出した。

“――――――神鳴流奥義・斬魔掌！！”

手の先に”気”を纏って手刀と化す技、斬魔掌でフェイトを斬り裂いた。

――パシャッ

「幻影、ですか……！！」

フェイト・アーウェルンクスは消えていった。

（くっ……！　いささか守護結界を過信していたようですね……！！）

「マズイ――――このか……！！」

―◇

◇―――――◇―――――

『このか、ちょっといい？　刹那さんが話があるって言うんだけど……』

『せっちゃんが？　うん行くー』

『『！？』』

『こ、こんな夜更けに刹那さんがこのかを呼び出し？』

『と言うことは……』

『『いよいよ告白かーーーーー！？』』

『何の話してんのよっ！！　このかも照れてんじゃないの！！』

二人は廊下を歩いている。

「わー、夜桜綺麗ねー」

「うん、ここ　けっこー遅くまで咲いとるんや。」

（はあ……でも、このかがそんなワケありだったなんて……）

（それでこのかのお父さんが、ネギが探してるネギのお父さんの友達で……。）

（でもよく考えたらそうよね。学園長も「魔法使いのネギ」のことを知ってたみたいだし、孫のこのかも関係あって当然……）

「どうかしたんアスナ？」

「えっ！？　ううん何でも……」

「？　変なアスナやなー」

（で、このかはそれを知らないのよね……。刹那さんの話っていうのはきっと――）

――ゴツンッ！

「あたっ」

明日菜が何かに頭をぶつけた。

「なんだっての、よ……。」

二人は言葉を失った。

開いた襖から覗くのは、本山の巫女たち。
まるで何かから逃げるような姿勢・表情で固まっている。
知っている。
二人はコレを知っている。
ほんの数時間前、コレを目の当たりにしたばかりなのだから。

巫女たちは、石像と化していた。

（な、どーして……。ここは、安全じゃなかったの！？）

明日菜は瞬時に理解した。敵（ヤツら）が、来たと。

―◇―――◇―――◇―

「うーん、このかさんのお父さんが父さんの友達だったなんてねー」

木乃香に全てを話す為、ネギ・明日菜・刹那は人の居ない風呂場に集まろうとしていた。

「親書も渡せたし、明日は父さんの住んでた家に案内してくれるって言ってたし！　目的は全部果たしたねカモ君！！」

「おうよ！　これでやっとゆっくり出来るな！！」

『きゃあああああっ……！？』

「っ！？　今のは！？」

「悲鳴だぜ、嬢ちゃん達の部屋の方からだ！！」

ただならぬ気配を感じて彼女達の部屋に向かう。

――ガラッ！！

「どうかしました――か……」

「こ、これは……！！」

――ネギの生徒達が、石になっていた――

「朝倉さん！？　パルさん！！　の、のどかさん！！」

「――落ち着け兄貴！！　敵だ！！」

「でも皆が！！」

「落ち着けって！！　石化ならきっと長のオッサンが解いてくれるって！！
それより敵に備えろ！！」

「で、でも……本山（ここ）に居れば敵は手を出せないハズじゃないの！？」

「来ちまってるモンはしょうがねえだろ！！　今は分析より対処だ！！　しっかりしろよ兄貴！！」

（くっ、僕のせいだ……。僕のせいで生徒の皆を……！！）

「ハッ……！　そうだ、アスナさん達は！？」

『アスナさん！　アスナさん！！』

「ネギ！？　あ、そうか。『念話（テレパティア）』。」

カードを頭にかざして回線を繋ぐ。

「ネギ、あんたは大丈夫なの！？　屋敷中の人達が昼間の刹那さんみたく石になって……！！」

『敵が来たんです、気をつけて！！』

「や、やっぱり……！！　でも何でよ、一件落着じゃなかったの！？」

『とにかく、狙われてるのはこのかさんです！！　予定通りお風呂に集合しましょう！！』

「わかった！！」

「ア、アスナー……？」

（……。）

「いい？　よく聞いてこのか。悪い人達がここに来てあんたのこと狙ってるの。だから逃げるわよ、いいわね？」

「わ…悪い人って……昼間のシネマ村の人……？」

「そうよ、でも安心して。――――私が守るから。来たれ（アデアット）！！」

「ハマノツルギ」を手に、木乃香を背に。明日菜は大浴場へ向かう。

―◇―――――◇―――――◇―――――

「杖よ（メア・ウィルガ）！！」

バシッ！！

杖を呼び出し、敵に備える。

明日菜達と合流するために廊下を走る。

廊下の角から、何かが飛び出した。

「刹那さん！？　お風呂場にいたんじゃ……」

「ただならぬ気配を感じて飛び出して来ました！！何があったんですか！？」

「それが……」

「ネ、ネギ君…刹那君……」

「「！？」」

「長……！！　っ！？」

「抵抗（レジスト）はしたのですが……平和な時代が続いた所為でしょうか、不

意を喰らってこのザマです……かつてのサウザンドマスターの盟友が情けない……！！」

「お、長！！」

詠春の体は下半身が完全に石に変わっていた。

会話している間にもみるみるうちに詠春の体は石になっていく。

「ネギ君、刹那君……白い髪の少年に気をつけなさい……。格の違う相手だ……。並みの術者にならば本山の結界もこの私も……易々と破られたりは……しない……。」

「……貴方達二人では辛いかもしれません……学園長に……連絡を……。」

「すまない……このかを頼み……ます…。」

……ピシッ……

「……長……」

夜桜が風に撫でられる音が聞こえる。

ほんの数秒。数秒だけだったが、その場を沈黙が支配した。

「……行きます！！　先生！！」

「はい！！」

風呂場を目指す。木乃香を守るために。

―◇―――◇―――◇―――

（い、一体これはどういうことですか……）

（皆とカードゲームをしていたあの場からまだ数分……！！）

（部屋に白い髪の男の子が来たと思えば、いきなり煙が出てきて皆が石に……！！）

『ゆえっち、あんた逃げろ！！あんた小っこいし頭回るし体力あるだろ！！』

『で、でも……』

『いいから！　助けを呼ぶんだゆえっち！！』

（朝倉さんが逃がしてくれなければ私も今ごろ……）

「しかし朝倉さん！！　こんな非常識な事態に対処してくれる所など日本の何処にも――――」

（ハッ！　そうです、あの人達なら……！！）

（たとえこれが夢でも！！まずやるべきは問題への対処です！！）

そう判断し、夕映はケータイを開いた。

ホテル嵐山。自由行動を終えた生徒たちが団欒していた。

『パーララ　パラララ　パラララ――――♪　パラ…ピッ』

「長瀬でござる。おや？　バカリーダー？」

「お、ゴッドファーザー「愛のテーマ」アルね。」

「む……？　どうした夕映殿、まずは落ち着くでござるよ。落ちついて……」

「ふむ…つまり……助けが必要でござるかな？　リーダー」

「？　どーしたアルか？」

「何かあったか楓？」

―◇―――◇―――◇―

――バチッ

麻帆良学園の学園長室に、碁石を打つ音が響いた。

「ぬ……。まっ「待ったはナシだ」……ケチじゃのう。年上のクセに……」

――トゥルルルルルッ、ピッ

「もしもし、わしじゃが。おお何じゃ、ネギ君か！親書を渡したか、いやいやそりゃ御苦労！！」

「っ何じゃと！？　西の本山で……何と、西の長までが！？　それは一大事じゃぞ！！」

「成程、助っ人か……しかしのうタカミチは今海外じゃし……」

「今すぐそこへ急行できる人材は……。――ほ！」

「――ん？　何だジジイ。」

「わかった。必ず助っ人をそちらへ送る。何とか耐えてくれい！！」

「おい、何だというんだ。向こうで何かあったか？」

電話を切った後、近右衛門はエヴァを見て二ヤリと笑った。

「特別任務じゃエヴァンジェリン。お主に、今から京都に行ってもらいたい。」

「――――ほう？」

近右衛門の意外な言葉に、エヴァンジェリンも笑みを返す。

長い夜が、始まる。

第４１話　修学旅行編　三日目・長い夜のはじまり（後書き）

「京都だと？　どういうつもりだジジイ。私の呪いを忘れたわけではないだろう？」

「そこまで耄碌しとらん。確かにナギがかけた呪いを解けるなどと思っておらんが、騙くらかすコトは出来るじゃろ。」

「――――く。ハハハハハハッ！！　成程な、伊達に長生きしてないというワケだ。」

「お主ほどではないわい。」

「で、私が出張らなければならない程の事態なのか、向こうは？」

サムライマスター近衛詠春が石化したという話を聞き、エヴァンジェリンは事態の重さを理解した。

「茶々丸、家に戻って装備を整えて来い。ついでにチャチャゼロも連れてな。」

「Ｙｅｓ．マスター。」

「――――――それでは始めるぞい！」

エヴァンジェリンの解呪を開始する。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回から新シリーズ「京都決戦編」に入ります。

「第４２話　京都決戦編　其の一　百鬼の召喚（仮）」

それでは次回！

第４２話　京都決戦・壱　百鬼の召喚（前書き）

今回の士郎のＫＹっぷりは半端ないです。
人によっては憤ったり不快に思ったりするレベルだと思われます。

・・・石だけは投げないでください

それでは第４２話、どうぞ。

第４２話　京都決戦・壱　百鬼の召喚

本山の廊下を走る、ネギと刹那。

石になった者達へ思いを馳せる。

（すいません皆さん……後で必ず治します！！）

「このかさん、アスナさん……無事でいてください！！」

第４２話　京都決戦・壱　百鬼の召喚

――――バンッ！！

風呂場の戸を勢いよく開け放つ。そこには明日菜が倒れていた。

「あっ！？　明日菜さん！？」

「大丈夫ですか明日菜さん！！　何があったんです！？」

「う……うう……ごめん刹那さん、このか……攫われちゃった……」

「！！」

「き、気をつけて……あいつまだ近くにいるかも……。」

「ッ！！」

――パンッ！

刹那が後ろを振り向くと、白髪の少年が宙に浮いていた。

だがそれを視認した時には、刹那の右腕が弾かれていた。

――ヒュボッ！

「！！」

――ガ　ンッ！！！

左腕の防御も間に合わず、少年の右拳打が空気を切る速さで刹那の腹を打ち抜いた。

刹那の体は床を跳ね、壁に弾かれ、弾かれた壁とは別方向の壁にぶつかってようやく止まる。

2クッション入ったにも関わらず、刹那がぶつかった壁にヒビが入った。

「あ〝……かはっ……！！」

「刹那さん！！」

「ほんの数時間前に自分を石にした相手に向かってくる、その精神力は買うけど……。恐怖を拭いきれていないね。体が強張っていたよ。」

「う〝……。」

「……！！」

ネギが白髪の少年を睨みつける。

「ま、まさか君が……。」

（長さんの言ってた、白い髪の少年……！！）

ネギが白髪の少年――フェイト・アーウェルンクスの接近に気づいたのはたった今。

そんな一瞬で刹那を無力化してみせた彼の力は、ネギには計り知れない。

しかしそれが彼に挑まない理由には、ならない。

「……みんなを石にして、刹那さんを殴って、このかさんを攫って、アスナさんまで……！！

先生として……友達として……！　僕は、許さないぞ！！」

「……それで、どうするんだい？　ネギ・スプリングフィールド。僕を倒すのかい？　やめたほうがいい。近衛詠春も衛宮士郎も既に石になっている。君に勝ち目はないよ。」

「――――なっ……！？」

「今の君には無理だ。」

床の水たまりから大量の水が渦を巻き、フェイトの体を覆っていく。

「待っ……！！」

――――トプンッ……

「消えた……水を利用した『扉（ゲート）』…瞬間移動（テレポート）だぜ！？　兄貴。浮遊術も使ってたし、かなりの高位術者だ……」

「く……！」

あれだけ息巻いていたくせに、敵に容易く逃げられた。

杖を握るネギの手に、力が籠もる。

「だ……大丈夫ですか？　明日菜さん……」

脇腹を押さえながら刹那が立ち上がる。

「う、うん。刹那さんも……。」

「――とにかく追いましょうネギ先生！！　気の跡を辿れば……ぐっ！！」

「だ、大丈夫ですか！？　見せてください、軽いケガなら僕にも治せます。」

「え……あっ」

「汝が為にユピテル王の恩寵あれ。治癒（クーラ）」

ネギの手から漏れる魔力が刹那の傷を癒す。

「すみません……。でも急がなければお嬢様が……」

「しかしよ、あの白髪のガキ、長のオッサンが言ってた通りタダ者

じゃねえぜ？　あのガキの言葉を信じるなら旦那の助けも期待できねえし、ただ無謀に突っ込んでも……」

「――――！！　天啓だ！！　名案を思い付いたぜ！！」

「えっ！？」

「何ですかカモさん！！」

「――――――――刹那の姉さんと兄貴が仮契約（チユウ）するんだよ」

「「な〝っ」」

――――ガシッ

明日菜がカモを握り締めた。カモの脳裏に昨日の士郎のお仕置きが甦る。

「あっちょっとヤメテ姐さんマジだからふざけてないから一回理由を聞いてお願い」

「――――ホントね？」

「本当っス。ふう。刹那の姉さんは”気”が使えるだろ？　そこに兄貴の魔力を上乗せすれば、倍のスーパーパワーアップってわけさ！！（上手くいくかはわかんねーけど）」

「で、でもいきなりキスなんて」

「そ、そうだよカモ君。」

「わ、私にはお嬢様という……」

「いーじゃねえか　やっちまえよブチュ――っと？　ちゅっちゅっ」

――ガシッ

「あっすいませんごめんなさい調子に乗り過ぎましたお願いだから潰さないで」

（め、名案だと思うんだけどよー）

「と、とにかく、話しあっても仕方ないです先生！！」

「そうですね刹那さん。行きましょう！！」

―◇―――――◇―――――◇―

本山の山中に流れるせせらぎ。

その小川は下流にある湖の支流であり、その流れが変わる場所に彼

らはいた。

着物を着た符術師、天ヶ崎千草。
彼女の式神の猿鬼と、それに抱えられた木乃香。口を塞がれている。
そして白い髪の少年、フェイト・アーウェルンクス。

「おおっ!?　やるやないか新入り!!　どうやって本山の結界を抜いたんや!?　最初からお前に任しとけば良かったわ。」

「まあこれでお嬢様が手に入った。後はあの場所まで行けばウチらの勝ちや。」

――――バシャッ!

「そこまでだ!!　お嬢様を放せ!!」

「……またアンタらか」

音をたてて3人が川に到着した。

「天ヶ崎千草!　明日にはお前を捕えに応援が来るぞ、諦めて投降するがいい!!」

「ふふん、応援がナンボのもんや。あの場所に行きさえすれば……。まあええ。そんなに痛い目に遭いたい言うんなら、お嬢様の力

の一端を見したるわ。本山でガタガタ震えとったら良かったと後悔するで。」

「お嬢様、失礼を……。」

――ぱしっ

「ん〝っ……！」

千草が木乃香に札を張り付けると、千草の式神に抱えられた木乃香の体が光りだした。

「お嬢様っ！！」

「――――オン。キリ、キリ。ヴァジャラ。ウーンハッタ」

川面に梵字が映しだされ、辺りを無数の光が照らし出す。そこから――――

《――むぅ？》

《ふーやれやれ。喚び出しかいな》

「なっ……！！」

――山中の小川は無数の異形に埋め尽くされた。

――――狐のような面を持つ者、鴉のような翼を持つ者、角を持つ者、一ツ目の者。

――――剣、大剣に槍、棍棒を持ち、３人を取り囲む。

――それはまさしく百鬼夜行。

――――ただそれは、百体では済まなかったが。

「ちょっとちょっと、こんなのアリなの――――――!?」

「やろー、このか姉さんの魔力で手当たり次第に召喚しやがったな……!!」

「な、何体いるか分からないよ……。」

「あんたらはその鬼どもとでも遊んどきや。ガキやし、殺さんよーにだけは言っとくわ。五体満足でいたかったらお嬢様を取り返すなんて欲張りせんで、追って来んほうが身の為やで。」

「ほな。」

「まっ、待て!!」

《グフフ》

千草たちは跳んでその場からいなくなる。
刹那は追おうとするが、周りの百鬼がそれを許さない。

「くうっ……！」

《何や何や、久々にこんな大所帯で喚ばれた思ったら……》

《相手はおぼこい嬢ちゃん坊ちゃんかいな。》

《悪いな嬢ちゃん達。「殺すな」言われとるけど、喚ばれたからには手加減でけへんのや。》

《恨まんといてな》

「ううっ……」

「あ、明日菜さん？」

明日菜の体が震え、歯をガチガチと鳴らしている。

「せ、刹那さん……こ、こんなの流石に私、ムリ……！！」

その言葉で刹那はハッとする。

（そうだ。どうも常人離れしているから忘れていたけど、明日菜さんは一般人なんだ……！！）

その様子を見たカモも危機感を覚える。

（ヤベエ、このままじゃすぐにやられちまう！）

「兄貴、時間が欲しい。障壁を！！」

「ＯＫ！　ラス・テル・マ・スキル・マギステル。逆巻け春の嵐。我らに風の加護を。『風花旋風（フランス・パリエース・ウェンティ・ウェルテンティス）・風障壁』！！！」

《うおおっ！？》

３人を守るように、竜巻が吹き始めた。

――――ゴオオオオオオオオオオオオオ……！！！

「こ、これって！？」

風の流れが竜巻の外と内を遮断したため鬼の姿が見えなくなり、明日菜は落ち着きを取り戻す。

「風の障壁です。ただし２、３分しか保（も）ちません！！」

「よし、手短に作戦立てようぜ！！　どうする、コイツはかなりやばい状況だぜ！？」

「……「二手にわかれる」これしかありません。私が鬼を引きつけます。その間にお二人はお嬢様を追ってください。」

「ええっ!?」

「そ、そんな刹那さん!!」

「任せてください。ああいう化け物の相手をするのが神鳴流の仕事ですから。」

だから大丈夫、心配しないでくださいと、二人を諭すように刹那は笑う。

しかし。

「はいわかりました」と頷けるほど、二人にとって刹那の存在は軽くなかった。

「じゃ……じゃあ私も残る――――――!!」

「「ええっ!?」」

明日菜はただの中学生。いきなり化け物どもに囲まれて平静を保つことは出来ないし、それらと戦うなど想像もできない。

しかしそんな戦場に友達を置いていくことも、到底できなかった。

「ア、アスナさんっ」

「刹那さんをこんなところに一人で残して行けないよっ!!」

明日菜は涙目で、今にも泣き出しそうな声で。それでも刹那を、放っておけない。

「……いや、案外イイかもしれねえ！　どうやら姐さんのハリセンは召喚された化け物を送り還しちまう代物だ。あの鬼達を相手にするには最適だぜ！？」

――――ヒュボッ

「兄貴、姐さんへの魔力供給を防御とかの最低限に節約して何分保つ？」

――――ヒュオオオオ――――

「術式が難しいけど……１０分、いや１５分は頑張れるよ！！」

「１５分か……いつもの１０倍、９００秒だしな。短いが仕方ねえ……ん？　兄貴、風の音がおかしくねえか？」

「え？　まだ障壁は保つはずだけど……」

――――ババババババッ……！

「「「！？」」」

何か、布が風になびく音が上から聞こえる。そしてその音は、こちらに近づいている。

「な、何！？」

「敵！？」

「まさか！！　この竜巻の中、吹き飛ばされずに降りてくるなんて――」

「――あっ……！！」

「え？　うそ……！！」

――――ズドォン！！！！

落下してきたのは巨大な岩、いや、岩のような斧剣に掴まった二人の男。

一人は黒いコートを纏い、一人は野太刀を手に持っている。

それは、ここにいるはずのない者たち。

「――――よう。」

「御無事ですか？　皆さん。」

『僕を倒すのかい？　やめたほうがいい。近衛詠春も衛宮士郎も既に石になっている。君に勝ち目はないよ。』

「シロウさん……！！」

「……長……！！」

―◇―――◇―――◇―――

「お、長……なぜ……？」

3人の目の前には、フェイトが「既に石化した」と言い放った士郎と詠春。

士郎はともかく詠春の石化はネギと刹那が確かに目撃している。

先程と違いシャツとズボンという動きやすい服装に身を包み、手には野太刀を持っている詠春が、確かにそこにいた。

「今はそれを話している時ではありません。ここは私達二人が引き受けます、貴方たちはこのかを頼みます。」

「し、しかし――――」

「いや、ここは俺一人でいい。」

「士郎!?」

士郎の発言にその場の皆が目を見開いた。

「詠春(オヤジ)の鈍った身体は持久戦に向いてない。刹那達と一緒に行け。」

「しかし君一人でこの数は……」

「俺を誰だと思ってる。「千の刃」ジャック・ラカンの弟子で……「サムライマスター」近衛詠春の養子(むすこ)だぞ?」

……

そう言って不敵に笑ってみせる。

「じ、じゃあ僕も残りま……」

「邪魔。足手纏いだ。」

「っ!」

「ネギ君。悔しいでしょうが士郎の言う通りでしょう。ここは士郎に任せるのが一番のようです。」

詠春と士郎は目配せし、お互いの行動に合意した。

「しかしよ旦那、このか姉さんを取り返す方にそんなに人数を割く必要があるのか？」

「アーウェルンクス……あの白髪の少年は詠春（オヤジ）クラスじゃなきゃ相手にできない。そして天ヶ崎には月詠と小太郎も付いてるかもしれないんだ。人数は多い方がいいだろう？」

「そ、そうか……その二人をすっかり忘れてたぜ……！！」

「もし士郎さんの言う通りになったら、ギリギリの人数ですね……。」

天ヶ崎・月詠・小太郎・フェイト
ｖｓネギ・明日菜・刹那・詠春．．．４対４ということになる。

「しかし士郎が言う通り私にはかつての力はありません。それこそ時間稼ぎがやっとでしょう。」

「よし、なら作戦はこうだ！　旦那が鬼どもを引きつけてる間に俺達はこのか姉さんの救出に向かう。厄介な白髪のガキは長のオッサンが押さえる。その隙に兄貴達はこのか姉さんを奪還するんだ！！」

「な、なんかイケそうな気がしてきた……。」

「あくまで月詠と犬っコロがいない場合だがな。二人が出て来たらもっと厄介になる。」

「それでも、これが最善ならば仕方ありません。」

「よし　少しでも勝率を上げる為だ、アレもやっとこうぜ！！」

明日菜は激しく嫌な予感に襲われた。

「アレって？　まさか……」

「キッスだよキス？　仮契約！！」

「「えええっ！？」」

ネギと刹那は難色を示すが……

「緊急事態だ！！　手札は多い方がいいだろうがぁぁぁあ！！！！！」

「「は、はいいっ！！」」

「「「……。」」」↑明日菜・士郎・詠春

◇――――――――――◇――――――――――――◇

「……う……。うう……。」

カモが敷いた魔方陣の上でネギと対面していた刹那が、顔を真っ赤にしてチラチラと士郎の方を見ていた。

（ん？　何だ？）

士郎は理解できなかったが、明日菜と詠春は気づいた。

（あっ！　刹那さんって士郎さんに気があるっぽかったじゃない！！）

（うーむこれは……どうなるんでしょうねぇ）

（ちょっとカモ！！　察しなさいよ！！）

明日菜がそんな思念を籠めてカモに視線を送ると――

「――――――二ヤッ……。」

（このエロガモ、分かってやってる――――――!?）

オコジョ妖精は昔から魔法使いの仮契約をサポートしてきた種族だ。
ゆえにオコジョ妖精には「人の好意を計る」というトンデモ能力がある。

そんなカモが刹那の気持ちに気づかないハズがない。

「何だ刹那の姉さん？　兄貴より旦那の方がいいのかい？」

「――――びくっ!!」

「はあ？　なに言ってんだカモミール。」

（ククク、どうするよ刹那姉さん？　これはチャンスなんだぜぇ!?）

（な、なんかカモ君怖い……）

カモの邪悪な空気を感じ取ったネギだった。

そしてカモの策略に嵌まった刹那は。

（あ……あああ……わた、わた、私はぁ…あああ～～～～!!!）

沸騰しきってオーバーヒートした頭で――――

士郎に向き合った。

「わ……私は……！　士郎さんがいいです……！！！」

（言ったぁ――――――――！！頑張ったね刹那さん！！）

（息子が告白される場に居合わせるとは……なんというか、むず痒いですねぇ……）

（え……せ、刹那さんて、もしかして……！！）

「いや、ここはネギと仮契約した方がいいんじゃないか？」

「え、いやだって……月詠や小太郎が出てきて離れ離れになっても、カードの機能で呼び出せるじゃないか？」

例えば途中で月詠に遭遇して刹那がその場に残った場合、仮契約カードがあれば「従者召喚」機能で呼び出してネギと合流することができる。

もし士郎と刹那が契約しても、百鬼夜行犇(ひし)めくこの場に召喚してしまうことになる。

ネギとの契約に比べ士郎との契約はメリットが少ないのだ。

そう説明しても、刹那からは涙目で、他の者からは白い目で睨まれた。

（……なんでさ？）

結局。気まずい雰囲気のままネギと刹那が仮契約し、ネギは申し訳

ない気持ちになった。

明日菜の士郎への尊敬度が１００下がった。

「シロウさいてー」

「呼び捨てっ！？」

空気読め主人公。

◇

―◇

風障壁の外。

《オヤビン、これじゃ手出しできやせんぜ》

《安心せい、こんな大がかりな風は長く保たん。》

《……そろそろか。》

《ふん、待たせよってからに……。》

風が弱まり、鬼達が臨戦態勢になった時。

風の中から、鬼達に向けられたネギの掌が現れた。

《！！》

「雷の暴風！！！」（ヨウイス・テンペスターズ・フルグリエンス）

――――ズドン！！

風を纏った雷が鬼を貫き吹き飛ばす。

《ぬおお！！　西洋魔術師かああ！？》

雷撃で一筋の道を作り、刹那がネギの杖に乗って、明日菜は詠春に抱えられて飛び出した。

《オヤビン！！　逃がしちまっただ！！》

《……２０体は喰われたか。》

《やーれやれ、西洋魔術師にはわびさびってモンがなくてアカン》

《――――む？》

竜巻が収まり、水が戻ってきた川の中に立つ男。
黒いコートを身に纏い、巨大な斧剣を肩に抱えている。

《ふっふっふ……たった一人で残るとは、勇ましい兄(あん)ちゃんやな》

《でもちょっと舐め過ぎゅーか……無謀ちゃうんか？》

「――く……。」

《？》

鬼達は怪訝に思う。目の前の人間が笑って――いや、嗤っていたから。

「舐めているのはそっちだろう？　その程度の数で俺を倒せると？　笑わせる。本気で俺を殺したいなら、この3倍は持って来い――――――！！」

《な……》

《なんやとワレェえええええええ！！！》

「――――さあ鬼ども。還る準備は充分か？」

第４２話　京都決戦・壱　百鬼の召喚（後書き）

風呂に入るため自室に着替えを取りに行った士郎は、そこでフェイトに遭遇した。

「はあっ……クソッ！！」

（やられた。掠っただけでこの侵食力……なんてデタラメなんだ……！！）

フェイトの「石の息吹」を喰らい、左手から徐々に石化している。

（石化の確認もしないで行ったのは助かったな……。）

「来たれ（アデアット）！　破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）！！」

あらゆる魔術の効果・契約・呪いを初期化する”裏切りと否定の剣”。

魔女と呼ばれたコルキスの王女メディアの伝説を体現した宝具。

ナイフ程度の大きさで、ジグザグに折れ曲がった歪な刀身を持っている。

それを己の石化した部位に突き刺すが――

「くそ、ダメか……」

破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）は”最強の対魔術宝具”。しかし初期化できる

のは
締結された契約、かけられた呪いなど、「一度効果が発動しきった」魔術。

この石化呪文は士郎の全身を石化するまでは「発動途中の呪文」なのだ。

「……これだけは勘弁だったんだけどな……！」

そして士郎は新たに剣を呼び出し――――

――――――――左腕を、斬り落とした。

「……全て遠き理想郷（アヴァロン）……ッ！！」

―◇―――――◇―――――◇―――――

――パキイィンッ！

「……は……私は……。　士郎！？」

「よう、起きたか。」

「私は石化した筈……そうです、このかは！？」

「ほら。」

「！！」

士郎が詠春の部屋から持ち出した無銘の野太刀を投げ渡し、問いかける。

「――――――どうする？」

組織の長としての体面の為に残るか、娘の為に戦うか。

「――――――行くに決まっているでしょう。」

迷いのない目で、そう答えた。

“――――娘も守れずに、何が父親か。
これからも、木乃香（あの子）の父親だと胸を張って言い続けるために。
――――――私は再び剣を執る。”

「――――そうか。じゃあとっとと行くぞ、オヤジ」

「!?　士郎、今なんと……」

（今まで士郎は切嗣（オヤジ）、詠春（とうさん）と、呼び分けていたハズ。）

「ん、いや、まあ……そう呼び分けるのが面倒になったっていうか……。
俺の父親はもう、アンタ一人だしな。」

士郎は照れくさそうに、頭を掻いた。

「士郎……。」

「ああもう、この話はここまでだ。行くぞ親父!!」

「ちょっと待ってください。動きやすい服装に着替えてきます。」

「手短に!!」

その後二人は本山を出立し、ネギ達と合流した。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜

〜補足・解説〜

詠春が時間ないのにわざわざ着替えに行ったのは、それくらい万全でないとヤバイと思ったからです。

士郎がそれを止めなかったのは、フェイトが「殺生は好まない」と言っていたので最悪の展開にはならないだろうと考えていました。

それでは次回！

第４３話　京都決戦・弐　鬼神の顕現（前書き）

予約・連続投稿。

やばい。マヂで最近学校行ってない。

もうこれ以上休んだら単位落とすってくらい。

でもそれくらいじゃないと学校に行く気にならない俺はゆとり世代。

くそう・・・先輩と後輩の方がいい教育を受けてるから、俺らの世代は能力低いって企業から敬遠されがちなんだよな・・・。

いい迷惑だよ●泉元総理・・・！！

おかげで楽だったけど！！

それでは第４３話、どうぞー。

第４３話　京都決戦・弐　鬼神の顕現

周りを山に囲まれた湖。

湖の中央には大岩が置かれ、そこに向かって延びる桟橋（さんばし）がある。

その桟橋の端に、松明と灯篭に照らされた祭壇があり

「んむ……？」

祭壇中央の台座に、薄布一枚の木乃香が横たわっていた。

「あの大岩にな、危な過ぎて今や誰も召喚出来ひんゆー巨躯の大鬼が眠っとる。１８年だか前に封印が解けて大暴れしたらしいんやけど、今の長とサウザンドマスターが封じたんやと。でもそれも……」

「お嬢様の力があれば制御可能や。」

側に控えるフェイトに語りながら準備を進める千草。

「んむ゛……っ」

「御無礼をお許しください、お嬢様。……ほな、始めますえ。――”イジャヤ”。」

「ん゛っ……！」

木乃香の体を中心に、光の柱が立ち上(のぼ)った。

第４３話　京都決戦・弐　鬼神の顕現

生前に「十二の難業」を成したギリシャの英雄ヘラクレス。
その十二の難業の一つである「ヒュドラ殺し」。
ヒュドラの頭は九頭というのが定説だが、五頭～百頭という異説も存在する。

そして英霊の力は伝説の在り方に影響を受けて形を成す。
つまり――――

宝具「射殺す百頭(ナインライブス)」は、最大１００連撃が可能だということだ。

「カラダ・ハ・ツルギ・デ・デキテイル。」

「――――『戦いの旋律(メローディア・ベラークス)』。」

「――――投影装填(スプレーメイルツホー)」

ギリシャの英雄を祀った神殿の支柱に使われていた、岩の塊のような斧剣。

それを投影し、その経験に共感し、その身に刻まれた英雄の技を己の体で模倣する。

その動きに耐えられるよう魔力を纏い、身体機能を強化する。

身の丈ほどもある斧剣を左腕一本で構え、

――――――――――その力を解放する！！

「――――――解放(エーミッタム)。」

“――――――――――是、射殺す百頭(ナインライブズブレイドワークス)――――――――――――――！！”

《――――グアアァァァァァァァァッ！！！》

百重の剣戟を、鬼の軍勢のど真ん中にブチ込んだ。

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

――――ズドォォォォォン！！！

《――――グアアァァァァァァァァッ！！！》

「……派手にやってますね」

”気”の跡を辿って飛ぶネギと刹那。

（士郎さん……無事でいてください！！）

「兄貴、感じるかこの魔力！！　ヤツら何かおっ始める気だぜ！！」

「わかってる、『加速（アクケレレット）』！！」

「む……、向こうで何か始めたようですね。明日菜さん、飛ばしますよ！！」

「え、きゃっ！？」

明日菜をお姫様だっこで抱えた詠春も、ネギと同じく加速した。

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

――――ドドン！！

「！？」

再び聞こえた衝撃音。しかし今度のは――近い。

「先生！！」

刹那の声にネギが振り返ると、こちらに何かが向かって来ていた。

真っ黒な、漆黒の――――

「――――狗神！？　風盾（デフレクシオ）……」

ドガッ！！

――――――撃ち落とされた。

「くっ！　杖（メア・ウィルガ）よ……『風（ウェンテ）よ』！！」

弾かれた杖を呼び戻し、風に命じて体を浮かせ着地した。

「大丈夫ですか刹那さん！？」

「はい、なんとか！」

「へへっ……。」

聞こえてきたのは、こちらに近づく声と足音。

それは、見知った顔だった。

「き、君は……！」

「嬉しいで……こんなに早く再戦の機会が巡ってくるなんてなあ。
――――ここは通行止めや、ネギ！！」

ネギと刹那の乗っていた杖を攻撃したのは学ランを着た少年。
狗神使い、犬上小太郎が立ち塞がった。

（刹那の姉さん、ここは……）

「わかっていますカモさん。先生、ここは私が引き受けます！　先生はお嬢様を！！」

ネギさえこのかの元へ辿り着ければ、カードの機能で召喚できる。

（士郎さんの言った通りになって少し癪ですが……）

刹那は先程の仮契約をちょっと根に持っていた。

「へっ、誰が女と戦うかい！　アンタの相手は俺ちゃうで。」

――ザッ……

「こんばんわー、刹那センパイ♪」

ロリータファッションに身を包み、眼鏡をかけた二刀流剣士。月詠。

「つ、月詠！！」

（おおい……旦那が言った通りになっちまった！　マズイぜ！！
あの犬っコロと違って兄貴は昼の疲労が抜けてねえんだ！！）

「いくで、ネギ！！」

「お昼の続きといきましょー？　センパイ♪」

◇――――――――――◇――――――――――――――◇

千草が唱える呪文によって
木乃香の魔力に共鳴し、大岩からも光の柱が立ち上って天を衝く。

「まだですか？」

「もう少しや！」

自分が質問したにも関わらず、フェイトは千草の言葉を聞かずにあらぬ方向を見つめた。

「――――……！　これは……思わぬ客人だね」

「何やと？」

――――ザッ――――ドドドドドドドッ――――――！！

湖の上を走る人影。水飛沫をあげて桟橋に向かってくる。

「なっ、お・長！！？」

水飛沫の中心には、明日菜を抱えた詠春がいた。

（んなアホな！！　長自ら突っ込んでくるとは！！）

「明日菜さん。私があの少年を引きつけます。貴女はその隙にこのかを……」

「は、はい！」

「ッ新入り！　なんとか時間稼ぎしてや！！」

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト！！
小さき王、八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ。その光我が手に宿し　災いなる眼差しで射よ！
『石化の邪眼（カコン・オンマ・ペトローセオース）』！！」

浴びた者を石と化す光を指からレーザーのように発射し、水面を薙ぎ払う。
石化効果だけでなく攻撃性能も持っているのか、光が当たった湖水が蒸発し水煙が上がる。

（……しまった。水煙で見失った）

「舐めるなと、言った筈です。」

「！！」

フェイトの背後で、詠春が刀を構えていた。

「――――雷（らい）ッ……光剣（こぉーけん）ッ！！」

――――ドパァアアンッ！！

威力を緩和されたものの詠春の剣は障壁を突破し、フェイトを湖に

吹き飛ばした。

だが、気は抜けない。詠春はフェイトから離れるわけにはいかない。

娘を救いだすのは、彼女。

「『念話（テレパティア）』。ネギ、お願い！！」

『す、すいません、今ちょっと緊急事態で……。よし、いきます！！

契約執行６００秒！！ネギの従者「神楽坂明日菜」！！』

「よぉ――しＯＫ！　来たれ（アデアット）！！　さあ、このかを返しなさい！！」

明日菜がハリセンを千草に向ける。

「チイ……ッ！　小娘が……！！」

―◇―――――◇―――――◇―――――

小太郎の攻撃をネギが逸らす。刹那の剣が月詠に防がれる。

４人の戦いは千日手。

生粋の戦闘狂の月詠と同じくそのきらいのある小太郎はむしろ長期戦を望んでいる。
より長く、戦っていたい。
しかしネギと刹那は逆。一刻も早く戦闘を終わらせなければならない。

そして戦闘しているうちに、ネギと刹那は離れてしまった。
協力して状況を打破することもできない。

「ど、どいてよコタロー君！　僕、いま君と戦ってる暇なんてないんだ！！」

「嫌や。つれないこと言うなやネギ。」

（兄貴、これ以上　自分への契約執行を使うんじゃねえ。姐さんへの魔力供給もしてるし、もともと無茶な術式だから体への負担が大きいんだからよ！！）

（わ、わかった）

「コタロー君！　何であのお姉さんの味方をするの！？　あの人は僕の友達を攫ってひどいことしようとしてるんだよ！！」

「はっ、千草の姉ちゃんが何やろうと知らんわ、俺はただイケ好かん西洋魔術師と戦いたくて力を貸しただけや。でも…その甲斐あったわ！！
俺は嬉しいで！！　同い年で俺と対等に渡り合えたんはお前が初めてや　ネギ！！　さあ、戦おうや！！」

「そんな、戦いなんて意味無いよ！！　試合なら後でいくらでも――」

「ふざけんな！！」

「！？」

「俺にはわかるで。事が終わったらお前は本気出すようなヤツやない。俺は本気のお前と戦いたいんや！！
ここを通るには俺を倒すしかない。俺は絶対譲らへん！！」

（挑発に乗るな兄貴！！説得は諦めて、出し抜く方法を考えるんだ！！）

「ぐ……。」

「全力で俺を倒せば間に合うかもしれんで！？　来いやネギ！！
男やろ！！」

「……！」

「――――――わかった。」

「あ、兄貴！？」

肩からカモを降ろす。

「大丈夫だよカモ君。一分で終わらせる。」

「へっ、言うやないか！！」

（ちょっ……ぐああ、マズイ……兄貴の頑固さと子供っぽさが悪い方向に出ちまった……！　ここで戦ったらどう転んでもこのか姉さんは……！！）

「いくぞ！！」

「来い！！」

（だ、誰か止めてくれ――――――――！！）

『――熱くなって我を忘れ大局を見誤るとは……精進が足りんでござるよネギ坊主』

「ッ！？」

（い、今の声――――――！！）

――――――ドッ！！

「な、何やこの馬鹿でかい手裏剣は！？」

二人を分断したのは巨大な十字手裏剣。

ネギと小太郎の身長を足してもなおこの手裏剣の方が大きい。

桜の木の上に感じる気配。

「長瀬さん……！！　ゆ、夕映さん！？」

―◇―――――◇―――――◇―

《おらあああっ！！》

複数の鬼が一斉に押し寄せる。

右手の莫耶の投影を破棄し、詠唱を開始する。

「散在する獣の骨。尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪　動けば風
止まれば空　槍打つ音色が虚城に満ちる！！　破道の六十三、『雷吼炮』！！！」

士郎の右の掌から雷撃が迸り、鬼達の体を焦がす。

《グアアッ！！》

４体撃破。

《おんどりゃあっ！！》

巨体の鬼が力任せに拳を振り上げる。

――――――ドゴォオンッ！！！

川の水と小石が辺りに飛び散る。

《ガハハハッ、潰したか！？》

――ひゅっ

鬼の拳を躱して宙に跳び、体重を乗せた干将莫耶で叩き斬る！！

“――――――『鶴翼攻究』！！！”

《――ッグハァッ！！》

1体撃破。

《――――――フンッ！！》

「ッ！！」

――ガキンッ！！

斬りつけてきたのは大きな嘴（くちばし）と翼を持った種族「烏族」の剣士。

《なかなかやるな若造！！　だが某（それがし）は今までの輩とは一味違うぞ！？》

――ギインッ！

――ガガッガガガガッ

――――――ギャリィンッッ！！

剣を交える。

確かにコイツは今までとは違う。ただの一撃が段違いに重く、切り返しも速い。

刃だけを武器と考えず、鍔や柄も巧く使用してくる。

だが、それだけだ。

自分はこれよりも重い剣を知っている。

これより速く、鋭い剣を知っている。

千の武器を手足の如く操る人を知っている！

「――――――。」

《――む？　何か言ったか？》

「――――――全投影（イルシオーニス）、待機（シースム）」

《！！　貴様、西洋魔術師か！？》

「――――停止解凍（アギテー・エクストラティオー）！！全投影連続層写（オーバードバレルフルオープン）――――――――――――！！！」

二十七の剣群を射出し烏族を貫き、その呪文を開放する。

「――――――壊れる幻想（ブロークン・ファンタズム）」

射出された剣の魔力を暴発させ、爆発を引き起こす。

――――――ドオオオオンッ！！！！！

《ぐあああああああああ！！！！》

周りも巻き込んで、概算――１３体撃破。

《な……２５０の兵が2分足らずで……残り２０体やと！？　ば、化け物かこのあんちゃん……！！》

《あんたが言うな。》

《ぐぁっは～、剣術・体術・陰陽術に西洋魔術。どんだけ究めてんねん、反則やろ》

《オヤビン、どーします？》

……「オヤビン」？

鋼鉄の棍棒を持つ、３ｍを越える身長の大鬼がいる。あの鬼がリーダー格か。

確かに強いな、手間取りそうだ。

――――――マズイぞ。

向こうに見える光の柱の魔力がどんどん強くなってる。
さっさと終わらせなければ――――

「なんだ、もうほとんどいないな。私達の出番は無かったか？」

「うひゃー、あのデカイの本物アルかー？　強そアルねー？」

――――そんな声が、耳に飛び込んで来た。

――◇――――――――◇――――――――◇――

「長瀬さん……！！　ゆ、夕映さん！？」

「わ、私が電話で長瀬さんを呼んだです　ネギ先生……。」

「ここは拙者に任せるでござるよ。急いでいるのでござろう？」

「で、でも」

「兄貴、このノッポの姉ちゃんなら大丈夫だ。刹那姉さんも兄貴が湖に着けば呼び出せる！　急ごうぜ！！」

「……拙者のことなら心配いらぬ。今は考えるより行動の時でござるよ。さあ、早く！！」

「～～～～～！！　す…すいません長瀬さんっ！！」

「あ！！　待てネギ！！」

――ドドッ！

ネギを追おうとする小太郎の足元に楓のクナイが突き刺さる。

「……オイ。そこのデカイ姉ちゃん、邪魔すんなや……俺は女を殴るんは趣味とちゃうんやで……？」

やっと出会えた好敵手に逃げられ、小太郎の眉間には青筋が浮かんでいる。

しかしその程度で楓の余裕は崩れない。

「ふ……小太郎と言ったか少年。ネギ坊主を好敵手（ライバル）と認めるとは、なかなかいい目をしているでござる。

――だが今は、主義を捨て本気を出すのを勧めるでござるよ。

今はまだ拙者の方が、ネギ坊主よりも強い。」

「……？」

「甲賀中忍　長瀬楓。――参る。」

――――――ドザンッ！！！

「……！！！」

目の前に現れた１８人の楓を見て、小太郎は口を開けて驚いている。

舐めていたのだ。目の前の「長瀬楓」という人物を。

僅かに忍術を齧っている小太郎でも、これほどの数の分身は作れない。

「……ハッ、上等ォ！！！」

狗神使いと忍者の戦端が開かれた。

◇――――◇――――◇

湖の祭壇で、明日菜は千草を追い詰めたのだが……

《なんや嬢ちゃん、ハリセンが使えんかったらただの子供やな》

「なっ……放しなさいよ！！　このおっ！！」

ゲシゲシと鬼を蹴るが、その程度では効果など無い。
明日菜はハリセンを持った右手を鬼に掴まれ、宙にぶら下がっている。
《姉ちゃん、まだ終わらんのかい？》
「ええい、いちいち五月蠅いやっちゃな！　もう少しや！！」
（ルビカンテ、何で関西弁なんだろう？）
「おっと、彼女の所に行こうなんて思わないでね、近衛詠春。」
「く……！！」
詠春がフェイトを押さえる役割になるはずが、逆に詠春がフェイトに押さえられている状況になっていた。
明日菜なら千草の式神を送り還せると考えての布陣だったが、たった一体の鬼の召喚で明日菜が劣勢になってしまった。
いや、通常レベルの鬼ならなんの問題もない。
いま明日菜を捕えているのは低く見積もっても中級以上の力を持っている。
いくら身体能力は一般人離れのうえ契約執行していても、戦闘経験の差は埋まらない。
「あの鬼……いや悪魔は、あなたが召喚したのですか？」

「そうだよ。それが？」

「……何が目的なのですか。なぜ今頃になってまた動き出したのです？」

「貴方に話す必要があるの？」

「ええ。ないとは言わせません。私の娘を使って、「お前達」は何をしようとしているのですか！！」

「ただの鬼神の召喚だよ。何か勘違いしてないかい近衛詠春？　この件にお姫様を巻き込んだことに「僕達」の思惑は含まれていない。ただ依頼主（クライアント）の指示があったからそうした、それだけだ。」

「そんなもので納得できると――――」

《む！？》

「迎え撃て（コントラー・プーグネント）！！」

《ぬうっ！》

「きゃっ――――――」

――――ガシッ

ネギの姿をした11体の精霊達が悪魔（ルビカンテ）を攻撃し、吹き飛ばされた明日菜を拾う。

《なんやなんや、こんなんで儂を倒せる思うとるんか!?》

精霊達が次々とルビカンテの剣の餌食になっていく。

「あ。」

一柱の精霊に抱えられた、明日菜の視線の先には――――

「契約執行1秒間!!ネギ・スプリングフィールド!!　杖よ、最大加速(マーク シマ・クケレラティオー)!!」

水飛沫をあげながら高速でこちらへ飛んで来る、小さな魔法使い。

《むう!?》

今更気づいても、もう遅い。契約執行した「魔力パンチ」を最高速度の突進で繰り出し――――ネギはルビカンテを一撃で貫いた。

（スゲエ！　昼の疲労に姐さんと自分への契約執行。そろそろガタがきてもおかしくねえのにこの威力!?）

「大丈夫ですかアスナさん!!」

「う、うん。アリガト。って、そうだ！　早くこのかを――――あれ、居ない!!?」

「え、そこに居たんですか!?」

「そうよ!!　確かにそこにおサルの女と一緒に……」

「ふふふ……一足遅かったようですなあ。儀式はたった今終わりましたえ。」

――――――ズズン！！！

「うわあっ！！」

「きゃあっ！！」

――――――ドドォオン！！

――――――ドドォォォン！！

「全く……人生で二度もコレの復活に立ち会うことになるとは……。」

「ある意味幸運じゃないかい？　この国では有名な鬼神なんだろう？」

「こ…これは……！？」

「そ、そんな……こんな、こんなの……！！」

「うおおいっ！？　幾らなんでもデカ過ぎるぜっ！！？」

祭壇の前に安置された大岩。そこからソレが現れていた。

顔が頭部の前と後ろについている。「二面」。

胴体から延びる両の腕。その肩甲骨の辺りから生えるもう二つの腕。「四つ手」。

まだ上半身しか大岩から解き放たれていないにも拘らず、３０ｍはある巨大な身体。

「二面四手の巨躯の大鬼、『リョウメンスクナノカミ』。
千六百年前に討ち倒された、
飛騨の大鬼神や」

「――――こ、こここんなの相手に、どうしろっつうんだよっ！！！」

両面宿儺（リョウメンスクナ）が復活し、湖面が荒れる。

カモの悲鳴はその波音に?き消され、誰の耳にも届かなかった。

第４３話　京都決戦・弐　鬼神の顕現（後書き）

～補足・解説～

・生前に「十二の難業（功業）」を成したギリシャの英雄ヘラクレス。
その十二の難業の一つである「ヒュドラ殺し」。
ヒュドラの頭は九頭というのが定説だが、五頭～百頭という異説も存在する。
そして英霊の力は伝説の在り方に影響を受けて形を成す。
つまり――――
宝具「射殺す百頭（ナインライブス）」は、最大１００連撃が可能だということだ。

公式設定では「九連撃」なんですが、こう考えることもできると思います。技名にも「百頭」って入ってるし、ゲームとかでも「射殺す百頭」は１００ＨＩＴ攻撃として使われてますし。

・右手の莫耶の投影を破棄し、詠唱を開始する。
・鬼の拳を躱して宙に跳び、体重を乗せた干将莫耶で叩き斬る！！

史実（？）では

干将＝陽剣＝白い剣。亀裂模様がついている。
莫耶＝陰剣＝黒い剣。水波模様がついている。

でもＦａｔｅ原作の干將莫邪は逆なんですよね。白い剣が莫耶で水波模様、黒い剣が干将で亀裂模様がついてます。おかげでどっちがどっちだかわからなくなります。

それに史実にも異説があってＦａｔｅ原作と同じく「黒い剣が干将、白い剣が莫耶」っていう説もあってわけわかめ。

・“――――――『鶴翼攻究』！！！”

上記の「射殺す百頭」と同じく、Ｆａｔｅゲームの技です。ちなみに私は未プレイです。
正確には「鶴翼攻究・襲」。

・《な……２５０の兵が2分足らずで……残り２０体やと！？ば、化け物かこのあんちゃん……！！》

”飛竜撃賊震天雷砲”とか”千手皎天汰炮”など八十～九十番台の鬼道を使えばもっと早く倒せるんですが、展開上ここで時間をとらせないといけないし、これらを使ったら下手したら自然破壊じゃないですか。なので自重させました。
あと鬼の数は原作の１５０体から２５０に色をつけました。「2分足らず」が仮に９０秒だとして、ネギが倒した２０体を抜いて……平均１秒に約二体殺ってますね。あ、案外少ない……。

・《ぐぁっは～、剣術・体術・陰陽術に西洋魔術。どんだけ究めてんねん、反則やろ》

鬼道はこの小説では陰陽術の一種という扱いです。

ああ、詠春＋士郎がいるので人材が充実していて大変。どうやってピンチな方向にストーリーを持って行こうか悩むなあ。

それでは次回！！

第４４話　京都決戦・参　逆転の光明（前書き）

予約・連続投稿第３弾。

今回の話はいつもより長いです。

いつもは６０００～８０００文字程度で１話を書いているんですが、
今回は１００００文字弱あります。

それでは第４４話、どうぞ。

第４４話　京都決戦・参　逆転の光明

「…ふむ。結局最後まで本気を出さなかったなコタローとやら。勝った気がせんでござるよ。」

「……いや、言い訳はせん、負けは負けや。強いな姉ちゃん」

勝負はついた。楓が小太郎の背中を押さえ、腕を締めた。

「か、勝ったのですか……？」

木の陰に隠れていた夕映が姿を見せた。

「！？　か、楓さんアレを！！」

「む？」

夕映と楓の目に映ったのは、湖の――――――

「あ～んセンパイ、生けずやわ～。ウチをこないにして行かんといてやすぅ～」

月詠は術で地面に縛り付けられている。

刹那の、ネギとの契約アーティファクト「匕首（シーカ）・十六串呂（シシクシロ）」。

番号を指定することで最大１６本まで分身する小刀。

刹那の意思に呼応し自由自在に動き回る。

それを月詠の周囲の地面に円状に突き刺して、陰陽捕縛陣「稲交尾篭（いなつるびのかまた）」を発動。

見事月詠を無効化した。

しかし「稲交尾篭」は捕縛と同時に対象に電撃を与えるのだが、月詠はピンピンしている。

時間が経てば陣を抜け出すかもしれない。

（やはり月詠は侮れない……。早くお嬢様の元へ……！！）

「ッ！？　な、なんだアレは！？」

湖に立つ光の柱の中から、何かが――――

その頃、麻帆良。

エヴァを京都へ送ろうとする近右衛門。

「何いっ！？　やっぱ無理とはどーいうことだジジイ！！」

「うーむ……修学旅行は学業の一環じゃし、呪いの精霊を騙せると思ったんじゃが……。ったくナギの奴め、力任せに術をかけよって……。正直、無理かも？　てへっ。」

「おおいっ！！　孫の危機だろうがっ、諦めるんじゃない！！」

「マスター、そんなに必死になって……よほどネギ先生が心配なのですね。」

「だ・れ・が、あのガキの心配をしてるって!?　それはお前だろうがっ!!」

――――――間に合うのか。

再び京都。本山下流の川にて。

「……なんで」

士郎は驚きを隠せない。何故あの二人が此処にいるのだ。

「なに、楓が綾瀬に呼ばれてな。応援、もとい付き添いだよ。」

「師父、そのオバケ本物アルか!?」

仕事道具が入ったギターケースを抱えた真名と、カンフーチャイナ娘・古菲がそこにいた。

真名はともかく、一般人の古まで連れてきやがって。と士郎は思考する。

とはいえ無意識に”気”を使えるので、完全な一般人ではないが。

「ほろ？」

古が声をあげて湖を見やる。

湖から出てきたソレは、この地点からでもよく見えた。

《ほう、アリャ凄いわ。》

「これはまた、厄介なコトになっているな。
ここは引き受けてあげるよ士郎さん。さあ、アナタはいくらで私を雇う？」

――――――湖の大岩から現れたのは。

『二面四手の巨躯の大鬼、≪リョウメンスクナノカミ≫。
千六百年前に討ち倒された、
飛騨の大鬼神や』

第４４話　京都決戦・参　逆転の光明

約１６００年前、朝廷に背き飛騨で民衆を苦しめたとして討伐された伝説の鬼。
二面四手の鬼神「両面宿儺（りょうめんすくな）」。
まだ召喚が不完全だからなのか、体が光を帯びている。

「フフフ、喚びだしは成功やな。伝承では身の丈１８丈（約５５ｍ）もあったというけど……こいつはそれ以上ありそうやな。」

「――――――ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！」

「あ、兄貴！？」

規格外の存在の出現に呆然としていた３人の中で、ネギが一番早く行動を始めた。

「完全に出ちゃう前にやっつけるしかないよ！！『来たれ雷精　風の精』！！」

「おい兄貴！！　確かに効きそうなのはそれしかねえが、それを使ったらもうバテちまうぞ！！」

「雷を纏いて吹き荒べ　南洋の嵐！！」

ありったけの魔力を籠めて、青嵐を纏った雷閃が奔る！！

「『雷の暴風（ヨウイス・テンペスターズ・フルグリエンス）』！！！！」

――――パシィィィッ

――――――――――全く、効いていない。

鬼を２０体吹き飛ばした雷霆（らいてい）も、巨躯の鬼神には通じない。

その圧倒的な存在感は微塵も揺るがない。

「アハハハハハ！！　それが精一杯か！？　サウザンドマスターの息子が！！　まるで効かへんなぁ！！」

「――――はあっ、はぁっ……そん、な……！！」

「こいつをこのかお嬢様の力で制御可能な今、もう何も怖いモンはありまへん。明日到着するとか言う応援も蹴ちらしたるわ！！

そしてこの力があればいよいよ東に巣食う西洋魔術師に　一泡吹かせてやれますわ！！　アハハハハハハハハ！！！」

「く……くそぉっ……！！」

大量の魔力を呪文に使用し、ネギの体力は一気に削られた。

「ちょっ、ネギ！　大丈夫!?」

――――トンッ

桟橋に、足をかける音。

「善戦だったけれど……残念だったねネギ君……。」

後ろに、白い髪の少年がいた。

「なっ何でだよ!!　長のオッサンは……!?」

「湖に沈んでいるよ。」

（……さ……最悪だ……!!）

「よく頑張ったよ、ネギ君。」

「ッ!!　兄貴!!」

「――――くっ!!」

懐のカードに手をかける。

「召喚!!　ネギの従者『桜咲刹那（サクラザキセトゥナ）』!!」

――――――――ザンッ!!

「ネギ先生、明日菜さん……っ!!　っ、コレは……!!」

目の前に佇む巨躯の鬼神に刹那は言葉を失う。

「……それでどうするの？」

「ッ!!　お前は!!」

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト。小さき王　八つ足の蜥蜴　邪眼の主よ。」

「始動キー!!　コイツ西洋魔術師!?　マズイ姐さん、奴の詠唱を止めて――」

「駄目です、間に合わない!!」

一度この呪文を聞いた刹那には分かる。あと一小節で、この呪文は完成すると。

「時を奪う毒の吐息を。――――――――『石の息吹（プノエー・ペトラス）』。」

祭壇を、白い煙が覆い尽くした。

―◇――――◇――――◇――――

（く……不覚……っ！！）

湖に沈みゆく、近衛詠春。

あの時――――――――。

『石化の邪眼！！』

己に向けて放たれたそれを詠春は完璧に躱した。

『そのようなもの、何度やっても当たりませんよ！！』

――――ボジュッ！！

『！！』

石化効果を持つレーザーによって湖水が蒸発し、詠春の周りが水煙で満ちる。

『く……』

（これが狙いですか……！！）

周囲に意識を張り巡らせ、フェイトの奇襲に備えて構える。

『……。』

だが、来ない。もうすぐ水煙が晴れ始める。

おかしい。そう気づいた時。

――――バキパキ……ッ！

『！！』

詠春の体が――――――――石化し始めていた。

『――――全く、我ながら間の抜けている……！！！』

かつて命を預けあった戦友にも言われたこと。

近衛詠春は生真面目で、色気に弱く――――詰めが、甘い。

攻撃を避けただけで安心していた。

アーウェルンクスか、彼の攻撃が来ると思っていたのだ。

実際、攻撃された。ただ目に見えなかっただけで。

今ならわかる。自分の周りに魔力が満ちている。

――――この水煙には、「石の息吹」が紛れ込んでいる。

『言ったハズだよね、近衛詠春。分かり易くもう一度言ってあげるよ。

君は、「自分で思っている以上に」衰えている。』

『……それは…どうも……！！』

湖に沈みゆく、近衛詠春。

本日2回目の石化だなと、そんなことを思いつつ、詠春は沈んでいく。

しかし不思議と、残された者達が心配ではなかった。

（ウチの息子と……あの馬鹿の息子……明日菜君に刹那君……）

この後を託せる、気がした。

石像は、湖に沈む。

◇――――――――――◇――――――――――◇

「――なんとか逃げれた。奴はまだこちらに気づいていません。」

祭壇にはまだ「石の息吹」が満ちているのが見える。

３人がいるのは祭壇に繋がる桟橋の、祭壇から１０ｍほど離れた辺り。

刹那は瞬動で、明日菜はネギを抱えてその身体能力であの場を離れていた。

「……ハァ……ハァッ……」

「大丈夫、ネギ？　ひどい死にそうじゃない。」

「……！！　ネギ先生、その手……！！」

ネギの手が、石のような色に変化していた。

「……だ、大丈夫。掠っただけです。」

何が大丈夫なものか。一気に魔力を放出し、右手を石化され、半端ではない体力を消耗している。

ネギの態度が虚勢、或いは強がりであることは容易く判る。

刹那は思った。もう、この二人は戦えないと。

ネギはもう息切れしていて満足な戦闘が出来るかどうか怪しい。
明日菜はいくら身体能力が並み以上でも、魔力供給なしにはフェイトとリョウメンスクナを相手に戦闘など出来ない。そして今のネギに魔力供給が出来るのか？

（……ダメだ。もうこれ以上、二人を危険な目に遭わせられない。）

「……お二人は今すぐここから逃げてください。お嬢様は私が救い出します！！」

「「「えっ！！」」」

「お嬢様は千草と共にあの巨人の肩の所にいます。私ならあそこまで行けますから。」

ネギ達など敵ではないと思っているのか、千草は3人を攻撃してこない。
今なら近づける。

「で、でもあんな高い所までどうやって」

「ネギ先生　明日菜さん……。私……お二人にもお嬢様にも秘密にしていたことがあります……。
この姿を見られたら…もうお別れしなくてはなりません」

「え……。」

「でも今なら……。あなた達になら……！！」

――――――羽根が舞う。

月の光に照らされて、舞い散る羽根が光を纏う。

周りを山に囲まれた湖。晴れ渡った夜の三日月。輝き踊る白い羽根。

幻想的な光景に、二人は魅入られていた。

背中を丸めて屈(かが)んだと思うと、制服のシャツは上に捲(まく)れ、

――刹那の背中に、白い翼が生えていた。

「…これが私の正体……。奴らと同じ……」

犬上小太郎は人間と「狗族」のハーフ。そして刹那は

「――――――――化け物です。」

――刹那は人間と「烏族」のハーフ。

「で……でもっ、誤解しないでください、お嬢様を守りたいという気持ちは本物です！！　……今まで、秘密にしてきたのは……」

「――この醜い姿をお嬢様に知られて嫌われるのが怖かっただけ……！！」

（――あの大人しそうな宮崎さんでさえ、ネギ先生に告白する強さがあるというのに。）

「私……宮崎さんのような勇気も持てない、情けない女ですっ……！！」

「ふぅーん。」

「ひゃっ！？」

――わしゃっ。もふもふ……さわさわ……。

「あの……明日菜さん？」

明日菜は刹那の翼をも触ったり弄ったりしている。

「……。」

そしてそのまま、無言で腕を振り上げ――――――

「何言ってんのよ……この、バカチーーーーーーーーーン！！」

――――――バッチィィィーーーーーン！！！

「きゃうっっっっ！！？」

刹那の背中を、おもいっきり叩いた。

「あ、明日菜さん、何を……！？」

刹那は涙目で抗議するが、明日菜は無視した。

「――――あんたさあ、このかの幼馴染みで、その後も2年間もずっと見守ってたんでしょ？　その間、あいつの何を見てたのよ。

このかがこんなことであんたのことを嫌いになったりすると思う？　ホンットにもう……バカなんだから。」

化け物とのハーフ？　羽根が生えている？　だからどうした。

木乃香も、そして明日菜も。その程度のことで刹那を嫌うなどありえない。

「桜咲刹那」は。紛れもなく自分の友達であると。

明日菜は、胸を張って言える。

そんなことも分からぬ友人にその意思を示すように、明日菜は笑顔で言ってやった。

「それに……こんなの背中に生えてくんなんてカッコイイじゃん。」

「あ……明日菜さん……。」

蔑まれ、忌避され、「醜い」と思っていた自らの姿。

目の前のひとはそれを、容易く肯定してみせる。

遠い昔、多くの悪意に晒された。

その苦しみを、たったの一言で消し飛ばす。

悲しくて、悔しくて泣いたことならいくらでもある。でも今は。

「嬉しくて」。涙が零れる。

刹那の、初めての経験だった。

「行って、刹那さん!!　私達が援護するから!!　いいわよね、

ネギ！！」

「ハイ！！」

「ほら早く、刹那さん。」

「グッドラック！　刹那姉さん。」

三人が、力強い笑みで刹那を送り出す。

「…ハ……ハイ！！」

その場にしゃがみ、翼を拡げて力を溜める。

「……ネギ先生。このちゃんのために頑張ってくれてありがとうございます。」

以前とは違う。自分には、信頼できる友達と仲間がいる。

だから、この戦いが終わったあと。

――――――――彼らと別れなければならないのが、辛い。

数多の想いを振り切って、刹那は桟橋から飛び立った。

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

小さくなっていく刹那を目で追う。

「自分は化け物だ」と言う刹那の顔を見て、ネギは何も言えなかった。

『それに……こんなの背中に生えてくんなんてカッコイイじゃん。』

それは簡単に言える台詞ではない。

「アスナさんは本当にスゴイな」と、ネギはそう思う。

明日菜のようには出来ないと思う。

（なら、いま僕に出来るのは……刹那さんを無事に送り出すこと――――！！）

「魔法（サギタ・マギカ）の射手・光（ウナ・ルークス）の一矢！！」

「！！」

――――――バチィッ！！

刹那を撃ち落とそうとするフェイトの腕を撃ち抜く。邪魔はさせない。

彼の眼が三人を射抜く。フェイトの標的は三人に移った。

「さて……これからどうしようか？　カモ君。」

「さあ、どうすっかな……何も思いつかねえや……へへっ」

この圧倒的不利に、ネギとカモは笑うしかない。

対魔力が高いせいか、ネギの右手の石化スピードは限りなく遅い。
しかしもう動かすのがやっとだ。
石化に伴って体力も削られ続けている。
魔力はまだ残っているが……今の身体でどこまで保つか。
なんとか状況を打破しようとするネギ達に

――――――――――――――――――――勝利の女神が囁いた。

『ぼーや。聞こえるか　ぼーや？』

「「！？」」

「こっ、この声は……！！」

『ぼーや　まだ限界ではないハズだ　意地を見せろ！！　あと一分半持ち堪えられたなら私が全てを終わらせてやる！！』

「ちょっと、コレって……！！」

「ああ、姐さん！！」

『さて、先達からのアドバイスだ　ぼーや。貴様の戦い方は戦略や戦術ばかりで脆い。小利口にまとまり過ぎているんだ。今からそんなんじゃあ、ナギ（あいつ）には追いつけんぞ？
　たまには後先考えずに突っ込んでみろ！！　ガキならガキらしく、後の事は大人に任せてな！！』

「……ネギ！！」

「……すぅっ…ふぅ――――――～～～……。」

息を吐き出し、呼吸を整える。

覚悟は決まった。「1分半」。全力で凌いでみせる。

「アスナさん……行きます！！」

「――――ＯＫ（おーけぇ）ッ！！」

「来るのかい。では相手をしよう。」

―◇―――――◇―――――

ネギと明日菜はまさしく防戦一方。いや、防げてすらいなかった。

契約執行も発動前に潰され、一方的に蹴られ、殴られて吹き飛ばされる。

障壁とハリセンで凌ぐもまたすぐに吹き飛ばされる。

とどめとばかりに「石化の邪眼」が放たれた。が……

（まただ。また?き消された。）

ネギを庇って明日菜が邪眼を一身に浴びたが、服が石化するに止(とど)まっていた。

「魔法完全無効化能力(マジックキャンセル)か?」

白髪の少年、フェイト・アーウェルンクスは思考する。

（風呂場で戦った時もそうだった。「石の息吹」でも服しか石化せず、呪術は不完全な効果しか発動しなかった。そして今、彼女は「石化の邪眼」すら弾いてみせた。

仕入れた情報に載っていたハズだ。彼女は麻帆良学園女子中等部の――――――）

「まずは君から倒すべきだね。カグラザカアスナ！！」

明日菜に危険性を感じ、真正面から拳を握って突進してくる。

それが致命的な隙となった。

――――ガシィィィッ！！！

――――ネギに防がれる。

右手が使えないので当然左手一本で、だ。

フェイトの腕を掴んだ時の摩擦熱で左手からは煙が出ている。

ネギの額からは玉のような汗が吹き出し、汗が頬を伝う。

やっとのことで防いだのは間違いない。

なのに。フェイトはその腕を力で振りほどくことが出来なかった。

「ぐうぅっ……！！」

ギシギシと、ネギの腕が、筋肉が、骨が軋む。

「ア…アスナさん……大丈夫ですか……？」

「うんネギ。大丈夫よ。

……イタズラの過ぎるガキには……お仕置きよっ！！」

――――――――パキィイィィンッ！

ハリセンを振りぬいたことで、石化した明日菜の服が砕け散る。

そして同時にフェイトの魔法障壁が、ハマノツルギに破壊された。

（――――障壁が！！）

今までフェイトは徹底的にネギ達の隙を突いてきた。

背後から、または反撃が出来ない状況からしか攻撃してこなかった。

魔法を使う際も距離をとって呪文を唱えた。

しかし先程の一撃は違った。

明日菜の危険性に焦り、真正面から拳を握って突進してきた。

だから防がれた。ネギの腕に捕まった。明日菜に障壁を砕かれた。

今、彼の身を守っていた鉄壁の魔法障壁は、ない。

「兄貴　今だ！！」

石化した右手で無理やり拳を握り

「おおおおおおっ！！！」

力いっぱい、拳を振りぬいた。

――――――ドガンッッ！！！！！

◇――――――――――◇――――――――――◇

リョウメンスクナノカミは飛騨の民衆を苦しめたと言われているが、当地では逆に信仰の対象となっている。

二面四手で身長十八丈の体を持ち、腰に二刀を提げ、弓矢を操ったという。

強大な力を持ち、朝廷に背き、飛騨で信仰される。

故に鬼ではなく鬼神。リョウメンスクナノカミ。

そんな伝説が今、刹那の目の前にいる。

しかし恐れるに値しない。

千草は言った。「このかお嬢様の力で完全に制御可能」だと。

いくら強力な鬼神だろうと、それを操るのはただの人間。

しかも己の力だけで操る力量もない、一介の符術師。
それが、飛騨の鬼神の力を完全に使役できるはずがない。
鬼神に敵う者などいないと油断しているのか。
鬼神を制御下において慢心しているのか。
――――天ヶ崎千草よ、お前に迫る翼の剣士が見えないか？
――バサッ！！
「！？　お前は！！」
「天ヶ崎千草。お嬢様を返してもらうぞ！！」
人間に使役されてないスクナだったならば、刹那の接近に当然気づいただろう。
だが今は、千草によって「完全に制御」されている。
千草が命令を出さなければスクナは力を振るえない。
リョウメンスクナノカミは愚かな人間の手によって、木偶の坊に成り下がった。
「くっ、いつの間に！？　近過ぎてスクナの力が使えん！！　猿鬼！！　熊鬼！！」

２体の式神が召喚された。悪あがきもいいところ。

翼を出した状態こそ刹那の真の姿。

通常よりも霊格・霊力が上昇し、戦闘能力もアップする。

たかが２体の着ぐるみに、彼女の行く手を遮る事など出来はしない！！

――――――ボシュッ

一瞬で斬り刻み、送り還し、木乃香を抱いて離脱した。

「お嬢様、大丈夫ですか！？　お嬢様！！」

「ん～～～……？　ああ……せっちゃん…。…へへ……やっぱり、また助けに来てくれたー

……？　せっちゃん、その背中のは……？」

「えっ……あっ、こ、これはっ……」

「……くすっ……」

「え？」

「キレーなハネ……。なんや天使みたいやなー……」

―◇―――◇―――◇―――

「や……やったの……？」

ネギの渾身のパンチを顔に喰らったフェイトは、殴られた体勢のまま固まっていた。

「……？」

――――ゾクッ

大気が震えた。

フェイトの纏う空気が変わった。

「体に直接拳を入れられたのは……初めてだよ。ネギ・スプリングフィールド！」

機械のようだった彼の目に、初めて感情のようなものが宿る。
今までとは桁違いの力を籠めて――――拳を、振るう。

「っ！！」

「ネギっ！！」

――――バキィイン！！

「――――子供相手に大人気(おとなげ)ないな。」

ネギの前で白い短剣がフェイトの拳を止めていた。

莫耶を逆手に持った、士郎。

――――ガシィッ！

士郎の影から出てきた白い手がフェイトの腕を掴む。

（影を使った転移扉(ゲート)！？）

「――――ウチのぼーやが世話になったようだな。若造。」

――――――――――ドパンッ！！！！！

影から出てきた人物がフェイトを殴り飛ばす。

魔力による強化もしていない、ただのパンチ。
しかしフェイトは面白いくらい湖の上を滑っていく。

水は速度が大きい物体とぶつかると硬くなる性質を持つ。
水切りで石が跳ねたり、水に飛び込んだ時に体が痛かったりするのはこのためだ。

フェイトは１０数メートル以上も沈むことなく湖を滑り続けた。
彼を殴った人物がそれほど異常な力でパンチを放ったということ。

『――――ぐっ！！』

フェイトが、ようやく沈む。

「あっ……エッ……！！」

「エっ……エ……エヴァンジェリンさんっ！！！」

学園結界と呪いから解き放たれ、全盛期の力を取り戻した吸血鬼。
「闇の福音」「不死の魔法使い」「人形使い」「禍音の使徒」「童姿の闇の魔王」。

――――――エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。

「これで貸し1だなぼーや♪」

最強の吸血姫が降臨した。

―◇

◇――――――――――◇――――――――――

「……エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。「人形使い（ドールマスター）」か……。」

「その通りだ。」

「！！」

湖の端。その陸地で様子を窺うフェイトの隣に士郎が立っていた。

「お前を生かしておけば世界が滅ぶというのなら。全力で叩き潰してやろう！！」

体は剣で出来ている。

「――――I am the bone of my sword.」

ただ一度の敗走もなく、ただ一度の勝利もなし。

「Ｕｎａｗａｒｅ　ｏｆ　ｌｏｓｓ．Ｎｏｒ　ａｗａｒｅ　ｏｆ　ｇａｉｎ」

この体は、”無限の剣で――――”。

「■■■――“ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅ　ｗｏｒｋｓ”」

地を這う炎は境界線。

その内側のあらゆるものが破壊され、あらゆるものが再生した。

紺の湖は赤い荒野に。夜の星空は黄金の朝焼けに。

桟橋と祭壇は消え、其処に在るのは無限の剣。

その中心に立つ一人の男。

「ご覧の通り、貴様が挑むのは無限の剣。剣戟の極地！　恐れずしてかかってこい！！」

剣戟の王が、石の王に挑む。

第４４話　京都決戦・参　逆転の光明（後書き）

～補足・解説～

・湖に沈みゆく、近衛詠春。

詠春さーーーーーーーーーーん！！
うああ、当初の予定では「スクナＶＳ詠春」だったのにーーーーーーーー！！
それだとピンチっぷりが演出できないからぁあ。詠春さんごめんよーーーーーーー！！

・『それに……こんなの背中に生えてくんなんてカッコイイじゃん。』
・それは簡単に言える台詞ではない。

目の前の人間に「人間じゃないナニカ」が生えてて「それカッチョイイ！！」なんて言えませんよね。凄いよ明日菜さん。アンタの友情に乾杯！！　酒は飲めない！　作者は未成年！！

・水は速度が大きい物体とぶつかると硬くなる性質を持つ。

「水が硬くなる」と言うと実は語弊があるんです。判り易く言うとそうなるよってコトです。
皆さん、他の人に「水って硬くなるんだぜー！」って言わないようにね。ホントにね！！

・影から現れた人物がそれほど異常な力でパンチを放ったということ。

「人が１０数メートル以上も水の上を滑り続ける速度で殴り飛ばすって、超スゲー！！」というくらいしか作者には分かりません。

今年最終更新予定日の２５日までに次話を更新できるだろうか・・・。

期待しないで待っててください。

それでは次回！！

第４５話　京都決戦・肆　剣製の凱歌（前書き）

ごめんなさい。また長いです。空白含め１１０００文字くらい。

本当は２４日の２４時（２５日の０時）に「クリスマス更新」と称して投稿する予定だったんですが、クリスマスに予定のある人のために早めに更新。

まあ私は大多数（？）の読者様たちと同じく

「クリスマス？ねえよ予定なんか」なカンジなんでいつ更新してもイイんですけどね♪

泣いていい？

それでは４５話、どうぞーーー！！

第４５話　京都決戦・肆　剣製の凱歌

体は剣で出来ている。
「――――I am the bone of my sword.」

血潮は鉄で、心は硝子。
「――――Steel is my body, and fire is my blood」

幾たびの戦場を越えて不敗。
「――――I have created over a thousand blades.
ただ一度の敗走もなく、
Unaware of loss.
ただ一度の勝利もなし。
Nor aware of gain」

担い手はここに孤り。
「――――With stood pain to create weapons.
剣の丘で鉄を鍛つ。
waiting for one's arrival」

ならば、我が生涯に意味は要らず
「――――I have no regrets. This is the only path」

この体は、無限の剣で出来ていた。

「――――Ｍｙ　ｗｈｏｌｅ　ｌｉｆｅ　ｗａｓ“ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅ　ｗｏｒｋｓ”」

真名を口にした瞬間。

何もかもが砕け、あらゆるものが再生した。

士郎を中心に走り出す二つの炎。正反対に弧を描き、湖を覆っていく。

燃え盛る炎の壁は境界線。炎が描いた真円の内側は「衛宮士郎」の理が支配する。

三日月の夜空。聳（そび）える山々。木々に囲まれた湖。架かる桟橋。

それら全てが赤い荒野に成り替わる。

炎の壁の内側は、朝焼けの空。無数の剣が乱立する、剣の丘に変化した。

固有結界「無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）」。

衛宮士郎の世界であり英霊エミヤの宝具（シンボル）。

術者の内に在る心象世界を術者の外に置く、世界図（たましい）をめくり返す大禁呪。

あらゆる剣を構成する要素が満ちた世界。

直視しただけで剣を複製するこの世界に、存在しない剣など無い。

ここには全てがあり、おそらく何も無い。
故にその名を“無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）”。
生涯を剣として生きてきたモノが手に入れた、唯一つの確かな答え。

ゆらり、と左手を中空に差し出す。
開いた掌は眼前の敵に。睨む瞳は目前の敵に。

その動きに呼応して、剣の丘の武器たちが引き抜かれる。
空中に静止し――――――――、主の敵に切っ先を向けた。

眼前に広がるのは荒涼とした世界。生き物のいない、剣だけが眠る墓標。

「……成程。これは驚嘆に値する。」

己の網膜に映る光景に、フェイトはそう言葉を吐き出した。

第４５話　京都決戦・肆　剣製の凱歌

「――――なっ…なんじゃこりゃあああっ！？」

カモが叫ぶ。

「な、何！？　なんで朝になってるのよ！？」

明日菜が驚く。

「……！！」

ネギが呆然とする。

湖の一帯は全て士郎によって書き換えられた。

星空は朝焼けの空になり、湖は荒野に変わる。

「ハッ……随分と派手にやっているな、士郎。」

「!?　え、何よそれ!?」

「コレは旦那がやったのかよ!?」

「すごい、シロウ……!!」

「正直、士郎の戦いを見物したいところだが……。」

エヴァでさえ士郎の本気を見たことがない。
以前「別荘」でイジメたことがあるが、その時は「無限の剣製」を見るに留まった。
エヴァはそのとき士郎が本気を出したとは思えなかった。
彼女の勘では士郎の力は未だ未知数。

「――――こちらの客を待たせるワケにもいかないな?」

エヴァンジェリンの視線の先には巨躯の鬼神。そして傍らにいる愚かな人間。

『おのれぇっ、ひよっこの神鳴流剣士が……!!　このスクナの力で直ぐに取り返して……!!』

「――――――茶々丸。」

「えっ、茶々丸さん！？」

上空で茶々丸がバーニアを噴射してホバリングしている。
彼女が構えるのは２メートルはある特別製のロングライフル。
標的（ターゲット）は伝説の鬼神。

『――イエス、マスター。結界弾Ｓｅｔ，　ｕｐ.』

（だが士郎……）

――――――――何をそんなに熱くなっている？

◇――――――――――◇――――――――――――◇

――――ガギギギギギギギギギギッバキンガギッバキキキキギギンン！！！！！！！

戦戟の音色は鳴り止まない。

士郎の剣群に対抗してフェイトは石の針をぶつけるが、悉くが押し負けて砕かれる。

針は触れた者を石化する呪いを持っているが、そんなものは通じない。

突進する武具は世界に名を刻む伝説の住人たち。

強大な神秘を内包し体現するそれらを、石にするなど不可能だ。

剣を撃ち続ける。障壁に阻まれる。

剣を撃ち続ける。障壁に緩和される。

剣を撃ち続ける。障壁を貫通する。

剣を撃ち続ける。障壁を突破する。

――――それでも尚、白髪の少年は立っていた。

有り得ない光景に、士郎は剣を撃つのをやめてしまう。

剣戟が止むと、フェイトは何でもないように話し始めた。

「やれやれ、服がボロボロだ。僕は別に構わないのだけど……仲間がうるさくてね」

（――――どうなっている。障壁に防がれていたのか！？）

士郎が敵の力量に戦慄を覚えた時、フェイトが口を開いた。

「少し話をしないかい？　衛宮士郎。この戦いは無意味だ。」

「……話、だと？」

訝しみながら言葉を返す。士郎は彼を信用できない。

「僕は撤退するよ。」

「――――――な、に？」

理解できない。

「当然だろう。『闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）』まで出てきた以上、僕らの負けは確定だ。負けると判った戦いに参加する意味なんて無いと思うけど」

それは当然の理屈。もともとフェイトはこの戦いに千草ほどの執着はない。

それならば彼の目的は何なのかという疑問は残るが。

その事に、士郎が気付かなかったのは――――――。

「貴方がどうしてそこまで僕に敵意を持っているのか分からないけど。もう少し公平な目で物事を見てみたらどうだい？　師から聞いているんだろう、僕らが滅ぼそうとしているのは「魔法世界（ムンドゥス・マギクス）」であってこの世界じゃない。「旧世界（ムンドゥス・ウェトゥス）」の住人である貴方には関係ない

筈だ。」

「……だからって――――――――――――――!!」

「――そう。貴方は自分と関わりのない人々でも傷つくのを恐れるんだね。わかった、なら教えてあげよう。

魔法世界はいずれ滅ぶ。僕らが手を下さずとも、自然にね。そしてそれは避け得ない。回避不可の、絶対の運命だ。」

「だから滅ぼす。壊して、新たな世界へ魔法世界人（かれら）を導き、彼らを救う。

――――それが、僕らの目的だ。無駄な犠牲は出したくないし、無駄な戦いはしたくない。」

士郎は、目を見開いてフェイトの言葉を聞いている。

「これでもまだ、貴方は僕らを「間違っている」と断じることができるかい？」

「――――――――――――――――――――――――――ああ。」

士郎は苦しげに、忌々しげに、歯を食いしばってそう答えた。

「お前がやろうとしていることは正しい。だが、手段が間違っている。」

「これ以外の方法なんて無いよ。魔法世界は「はじまりの魔法使い」によって創り出された。人の手で生み出された物には必ず限界が来る。

数十年かけて研究されたんだ。分かったのは、訪れる滅びは確定だということ。回避する手段は僕らが選んだ方法しかないということ。

それでも、貴方はこの方法を否定するのかい？　拒否すれば、そこには滅びしかないというのに。」

「――――――なら俺は、その滅びを肯定しよう」

「……何だって？」

かつて魔法世界で起きた大分裂戦争。フェイトら「完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）」が引き起こしたそれによって多くの人が傷付き、命を落とした。ラカン曰く「儀式」のために必要だったらしいが――――――

それを。世界を救うためだから仕方ないと、言えるわけがない。

（ああ、判ったよフェイト・アーウェルンクス。）

“――――――――――――俺はお前が気に喰わない！！”

お前は俺と同じだよ。自分の掲げる「正義」のために、容易く他人（ひと）を傷つける。
でもな。
――――――どんな理由であれ、利益のために人を傷つけるのは、「悪」だ。

俺達はそれを解ってる。自分達が正しいなんて微塵も思っていない。
それでも。この道を進むと決めた。

だから。俺達はお互いの「信じるもの」を譲れない。

だから。俺はお前を認めない。

「……貴方は本当に面白い。英雄の意志を継ぐ筈の人間が、「世界が滅んでもいい」なんて言うとはね。」

「滅びるのではなく、誰かに滅ぼされるというなら立ち塞がるさ。
言葉遊びはここまでだアーウェルンクス。お前はここで滅ぼされる。
――――――この体は、硬い剣（ツルギ・デ・デキティル）で出来ている。（カラダ・ハ・）」

その呪文を口にする。

体を剣に。
「――――Ｍｙ　ｂｏｄｙ　ｉｓ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ.」

血潮を鉄に。

「――My blood is steel.」

己が限界を越えて、飽くことなく歩き続けろ。

「――Beyond the limits I continue walking without giving up.」

「――――――――――『剣製の凱歌（ヴィクトーリア・ブレイドワークス）』」

「無限の剣製」が――――――――――消滅した。

そのとき、背筋に走る死神を。フェイト・アーウェルンクスは確かに見た。

―◇

◇―――――◇―――――

「セットアップ・クリア。結界弾――――――――Ｆｉｒｅ。」

――――――ドッ――――――――――ズシィィィィイイン！！！！！

茶々丸のロングライフルから放たれた銃弾が結界を形成し――――――

――リョウメンスクナノカミを縛りつけた。

《グッ……グオオォォッ！！！》

「なあああぁっっ！！？」

「この質量相手では１０秒程度しか拘束できません。お急ぎを。」

さらっと凄いことを言ってみせる。

桁違いの霊格を持つ鬼神を殺さず、封印せずに動きを封じるなど容易ではない。

まあ、ここで讃えるべきは茶々丸ではなく、装備を開発した彼女なのだろうが。

「ス、スゴイ、茶々丸さん……！」

ネギ達は呆気にとられるしかない。空中から地上の様子を窺う刹那

達も同じだ。

――――――バサバサバサッ!!

「ぼーや、よくやったよ。だが　まだまだだな。」

夜の闇が戻った空から無数のコウモリが現れ、エヴァのマントに変じていく。

「いいか。このような大規模な戦いでの魔法使いの役割とは、究極的にはただの砲台!!　従者が守っている間にデカイのを決める!!　つまり火力が全てだ!!

よーく見ているがいい。今から最強の魔法使いたる私の最高の力を見せてやる!!」

外套（マント）を靡（なび）かせて空へ飛んだ。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック!!　契約に従い　我に従（ディアーコネートー・トー・シュンボライオン）え　氷の女王。（イ・ヘークリュスタリネー・バシレイア）

来れ　とこしえのやみ!　えいえんのひょうが!!（エピゲネーテートゥイオーニオン・エレボス　ハイオーニエ・クリュスタレ）」

――――――エヴァの魔法によってスクナが湖もろとも凍りつく。

氷結音などない。一瞬だ。音が鳴るよりも速く、鬼神も湖も凍りついた。

「おわぁっ！？　つ・次から次へと何や、何なんや！　アンタ何者や！？」

「くくくく、相手が悪かったなぁ女……。ほぼ絶対零度、１５０フィート四方の広範囲
完全凍結殲滅呪文だ。そのデカブツでも防ぐこと敵わぬぞ？」

エヴァの体から迸る魔力によって周囲が超低温化し、空気中の水分が氷結する。
そこから生まれる氷結晶。ダイヤモンドダストが魔力の光を乱反射する。
その現象を引き起こす、桁違いの魔力。

「我が名は吸血鬼（ヴァンパイア）エヴァンジェリン！！『闇（ダーク・エヴァンジェル）の福音』！！最強無敵の悪の魔法使いだよ！！」

「――――全（パーサイス・）ての命（ゾーサイス・）ある者に等（トン・イソン・タナトン）しき死を　其（ホス・アタラクシア）は安らぎ也」

――――――ビシベキバキバキッ――――

詠唱が進むにつれ、鬼神の氷像が罅（ひび）割れていく。
千草に為す術はない。喚き、悲鳴をあげるしかない。

「――――な、あ……なあぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！！！！！」

「――――――――――――――――“おわるせかい（コズミケー・カタストロフェー）”。砕けろ。」

リョウメンスクナノカミは、その巨体が崩壊するにしてはあり得ない程に。
綺麗で、澄んだ音をたてて。あっけなく砕け散った。

―◇

◇――――――――――――◇――――――――――

――――ドドドドドドドドドド…………………！！

リョウメンスクナの砕けた破片が湖に落ちる音をＢＧＭに、エヴァは高らかに笑う。

「アハハハハハハハハ！！　バカめ！！　伝説の鬼神か知らぬが私の敵ではないわ！！」

「スゴイ…エヴァヴァンジェリンさん………。」

「ご満悦だなーオイ」

「やるじゃないエヴァちゃん！！　さすが最強とか自慢してただけあるわ！！」

「フフフ、もっと褒め称えろ。」

嬉しそうに空から降りてくるエヴァと茶々丸。

「どうだ　ぼーや、私の圧倒的な力　しかと目に焼き付けたか？」

「ス……スゴかっ「そーかそーかよしよし♪　いい子だ？」」

今のエヴァは最高に「ハイ！」ってヤツだアアアアア！！！

……いかん、どっかから電波が。

「で、でも『登校地獄の呪い』は？」

茶々丸が答える。

「今現在　高度な儀式魔法の上、学園長自らが5秒に1回『エヴァンジェリン（スター）の京都行きは学業の一環である』という書類にハンコ（マ）を絶えず押し続けています。」

「……が、学園長大丈夫なの？　5秒に1回って、トイレとかは……」

「ふん！　この事件のそもそもの原因はじじいの見通しの甘さだ！！　この程度の苦労など当然だろう。」

『うひぃ～！　こりゃキツイわい。早く帰ってこんか～～！！』

学園長室に、近右衛門の叫びが木霊した。

―◇―――◇―――◇―

《……ふむ。どうやら勝負あったようやな》

百鬼が喚ばれた小川。

先程まで見えていた鬼神が消えたことから、「オヤビン」は召喚主の敗北を悟った。

《あんたらの勝ちや。どーする？　ねーちゃん》

「こっちも助っ人なんでな。そっちが退くなら戦る理由はないよ。」

（むしろ退いてくれるとありがたい。２０体のうちほとんどの鬼が中級以上、上級クラスが５体とは……厄介所ばかり残していってくれたね、士郎さん）

「もー終わりアルかー。暴れ足りないアルねー」

――――ボシュゥゥゥ……

《ほななー嬢ちゃんたち》

《なかなか楽しめたぞ大陸の拳法使い！》

《さっきのやたら強いあんちゃんにもよろしゅうなー》

《久しぶりに愉快やったわ。今度会った時には酒でも飲もう》

――――シュゥゥ……

「ふ……私達まだ未成年なんだがな。」

「結構いい人達だたアルね。」

ていうか「命令だから手加減できひん」言ってたのに、負けを悟ると命令なくても勝手に還っちゃうんですね。自由だなーあの人たち。

「それじゃあ向こうに合流しようか。」

「どうやら上手くいったようでござるな。」

「あの、楓さん。あの子をどこかへ縛り付けておかなくていいのですか？」

「いや夕映殿、それより皆の安否が気掛かり……行くでござるよ」

―◇―――――◇―――――

「いいかぼーや。今回のことをテレビゲームに例えるとだな、序盤のダンジョンで死にかけてたら何故かラスボスが助けに来てくれたようなものだ。」

「いや何よソレ」

「うるさいぞ神楽坂明日菜。だからなぼーや。次にこんなことがあっても私の力は期待できんからな、そこは肝に銘じておけよ。」

「…ゼェッ……は……はい……。」

――――ぴりっ……

「……！？」

後ろ髪が焦げ付くような……なにかを感じた。

「む…流石にキツそーだなぼーや。大丈夫か？」

「ッ！！　エヴァンジェリンさん後ろっ……！！」

エヴァの後ろに、――――――左腕の無いフェイトがいた。

ネギがエヴァを庇うようにして抱きつく。

「なっ何！？　ちょっ、ぼーや……」

「！！」

『ぼーや、その心配は杞憂だよ』

（え？）

「――――――障壁突破（ト・ティコス・ディエルゲサス・ペートラス）・“石の槍”」

桟橋の台座が隆起して槍と化す。『石の槍』が桟橋を突き破って二人を襲う！！

「――――――――無駄だ。Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．
“熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）”――――――――――――――――！！！」

七枚の紅い花弁が湖に咲き、石の槍と激突した。

「――――ぐっ――――――――――――――！！」

――――――バキィィィィィンッ！！

片や「投擲武器や飛び道具に対して無敵」という概念を持つ結界宝具。
片や「あらゆる障壁・防御を突破する」呪いを持つ槍。

二つの攻防は「矛盾」の再現。
最強の盾と矛は――――――七枚羽の盾は全て破られ、石の槍は粉々に砕け散った。

後に残ったのは、砕けた石の槍と壊れた桟橋と。
黒いコートを纏った、白髪黒肌の男だけだった。

「……ア、アナタは……！？」

「安心しろ、コイツは（たぶん）士郎だ。」

「「えっ、シロウ！？」」

明日菜とネギが驚きの声をあげる。
そうしている間に、徐々に士郎の肌と髪の色は戻っていった。

「あのガキは……逃げたか……。」

エヴァが呟く。それに士郎が噛みついた。

「この……バカ吸血姫！！」

「！？　な、何だと！！」

「逃げたんじゃない、お前の所為で逃げられたんだ！！」

封印から解き放たれたからか、エヴァは通常ありえないほどに気を抜いていた。
フェイトの接近にネギが気づけたのに、エヴァには気づけなかったのがその証拠。

士郎の気を逸らすために、まんまとエヴァ達は利用されたのだ。
そして今の攻防の隙に彼は逃げおおせた。

「き・貴様、主人に向かって……！！　フン、いいだろう！！
以前から貴様には躾けが必要だと思っていた。この私の恐ろしさ、この場で思い知らせて――――」

「……ハァッ……良かった…。エヴァンジェリン……さん」

「あ、兄貴っ!?」

――――――――――ドサッ

「ネギ!!」

「「!?」」

「ど、どどどーしたぼーや!?」

「これは……!!」

「ひでえ、兄貴の右半身が石に……!!」

「ネギくーーーん!!」

「ネギ先生!!」

「どーしたでござるか!?」

「オイッ、ネギ!!」

「ム!?　どーしたアルかネギ坊主!!」

「どうだ茶々丸。」

「……危険な状態です。」

診断を終えた茶々丸の言葉に、一同が騒然とする。

「ネギ先生の対魔力が高すぎるために、石化スピードが非常に遅いのです。このままでは首部分が石化した時点で窒息してしまいます」

「ど…どーにかなんないのエヴァちゃん!!」

「わ……私は治癒系の魔法は苦手なんだよっ、不死身だから」

「そんなっ……!!」

「明日来るっていう応援部隊なら治せるだろうが……間に合わねえ……!!」

（この状態の石化に破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）が効かないことは実証済みだ……どうする……!?）

「お嬢様……。」

「うん。」

「あんな、アスナ……。ウチ、ネギ君にチューしてもええ?」

『……。』

一同の頭の上に疑問符が浮かぶ。

「なっ何言ってんのよ　このか、こんな時にっ」

「あわわ、ちゃうちゃう。あのホラ……ぱ、パクテオーとかいうやつ」

「え？」

「「……あ。」」

仮契約（パクティオー）には契約を結んだ人物の潜在能力を引き出す効果がある。カモと士郎が思い当たったのはシネマ村で木乃香がやってのけた「石化の完全解呪」。

「……いけるかもしれねえ！！」

カモが敷いた魔方陣の上にネギを寝かせ、木乃香が傍に寄る。

「ネギ君。しっかり……。」

――――――――――二人の唇が重なった。

『仮契約カードＧＥＴ！（小声）』

――――《ＲＥＧＩＮＡ（レジーナ）　ＭＥＤＩＣＡＮＳ（メディーカンス）》――――「癒しなす姫君」、『近衛木乃香』。

――◇――◇――◇――

暖かい、何かに包まれているようだった。

名前を呼ばれたような気がして、起きなきゃと思って瞼を開けたら

――――――

「……このか……さん……。」

和風の服装、本山の巫女さん達が着ていたのと同じような服を着て、扇のような物を持っている。

アスナさんや刹那さん、あれ、長瀬さんにくーふぇさん、龍宮さんもいる……？

ああ、でも今は――――――

「……よかった……無事だったんですね……」

なんか皆が喜んでいる。なんなんだろう？

そしてシロウに殴られた。な、なんで……。

―◇―――◇―――◇―――

ったく。自分が死にかけていたってのに、起きぬけの第一声が他人の心配とは。

ああ、まるで自分を見ているようだ。

とはいえ師匠に鍛えられたおかげで、死にかけることなんてめっきりなくなったが。

いや、殴った理由はそれだけじゃない。

妹のキスの相手って考えたら、なんかムカついたから。

さて、この結末は不本意だが……最後の仕上げだ。

『汝の――――――――――』

「？　何か言ったか？」

エヴァが問う。

「いや、別に」

「……気は済んだか？」

「ネギにゲンコツやったことか？　アレは――――――」

「違う。」

エヴァが下から俺の目を見つめる。

「やけに熱くなっていたと思ったんだが？」

疑問形で聞いてるクセに、確信に満ちた声で言う。

「……ああ、もう済んだ」

アイツに対する敵意の正体はわかった。もう熱くなり過ぎるコトはないだろう。

そして――――ただの勘だが、アイツを倒すのは俺じゃない。

アイツと戦う役割（ロール）を与えられたのは、おそらく――――――――――

『あの、僕が魔法使いだっていうことは秘密に……』

『わかたアル。武人は約束を守るものアルよ、安心するヨロシ！！』

『分かった、約束するよ。（私は元々知っていたんだがな……）』

――――――――――ネギ・スプリングフィールド。

なら俺は「極力」大人しくしておくことにする。

精々あのガキんちょが強くなるのを待ちますかね。　とはいえ……

『もう！　ぶっ倒れるまで無理するんじゃないの！！　このバカ！！』

『あ、わわわ、ごめんなさいアスナさん！！』

もうしばらくはお守りが必要だろうがな。

―◇―――――◇―――――

何処とも知れぬ遠い場所に、左腕のない、白い髪の少年がいた。

（近衛詠春はもはや脅威ではない。しかし『闇の福音』が麻帆良に封印されているという噂は事実だったようだね。くだらない噂だと思っていたけど……）

（そして「ネギ・スプリングフィールド」と「衛宮士郎」。彼らは今後脅威となるか……。そしてもう一人……「神楽坂明日菜」。調査が必要だ――――――）

汝の血潮は我が剣。
『――――――――――Ｙｏｕｒ　ｂｌｏｏｄ　ｉｓ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．』
――――――――――ドッ――――――――――ドシャアアアアッ！！！
フェイトの体を内側から剣が貫き、残る右腕と両足を切断した。
彼は――――そのまま地面に倒れこむ。
「これは……！！」
『しばらく大人しくしていろ。アーウェルンクス。』
そんな声が聞こえた気がした。
「やってくれるね、『無限の剣』……。」
固有結界「無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）」。あらゆる剣を構成する要素が満ちた世界。
土にも、空にも、空気にも。当然それは満ちている。
大気に存在するソレを、当然のようにフェイトは吸い込んだ。

彼の体に蓄積された「剣を構成する要素」。それに働きかけて剣と成す、遠隔剣製。
発動すれば対象の内側から剣が飛び出しその身を貫く。

「困ったね、旧世界（こっち）には今僕しか来ていないし……どうやって帰ろうか」

その後彼は魔法世界に帰還した後、「修理」が終わるまである程度の休養を必要とした。

―◇―――――◇―――――◇―

その後。

詠春は士郎に引き揚げられ、本山の巫女ともども石化を解除された。
警戒のために眠ることをせず、彼らが眠りについたのは、朝になってからだった。

――――――――こうして、京都決戦は終局した。

第４５話　京都決戦・肆　剣製の凱歌（後書き）

～４５話・ボツ文章～

・ボツ？　ＶＳフェイト

両手を左右に振り抜き、干将莫耶を投擲する。

「……？」

フェイトはあらぬ方向へ飛んでいく双剣の意味がわからない。

（瞬動ッ！！）

フェイトの背後に回り込む。

“――――――鶴翼攻究！！”

――――――ガギィイッ！！！

魔法障壁に防がれる。

――――――ズ……。

「！！」

フェイトの後ろの空間から無数の魔方陣が浮かび上がる。

「そっちがそう来るなら……あまり手加減はできないよ」

魔方陣から現れるのは光沢のある黒い槍・杭・針。それら総てが切っ先を士郎に向ける。

「――――――『往け（イトゥラス）』。」

――――――ギュオッ！！

宙空を、フェイトの武器が覆い尽くす。

逃げ場など、無い。

「今から全て撃ち落とせるかい？」

「――――ああ。」

「――――――！！」

「『無銘（ネームレス・ソードメーカー）の刀工。――――偽・石（FALSUSNETPAΣ）の針！！」

――――――――――――ガギギギギギギギンッ！！！

瞬時に相手の魔法をコピーする俺の固有魔法、「無銘の刀工」。
フェイトの攻撃を俺の攻撃（フェイト）で相殺する。

――――バキパキバキバキッッ……！！！

今の攻撃を解析した。奴の針は全て石化効果を持っている。

戦闘中に解呪する時間も暇も隙もない。
俺のコートでどれだけレジストできるかもわからない。つまり。

一撃でも喰らおうものならその瞬間、こちらの負けが決定する。

（――――だからどうした？）

再び瞬動でフェイトに接近する。

「一撃も喰らわなければいいだけだろうッ！！」

――――――――ガギィイッ！！！

干将莫耶を交差させて斬りつける。しかし障壁に阻まれる。

ヒュッ！

「！！」

恐ろしいほど「入り」の精度が高い瞬動。士郎の背後に回り込んだ。

――――――バ　ガンッ！！

「ぐっ！！」

急いで体を回転させて、干将莫耶で拳を防ぐ。

（ッ痛えな！！）

彼が放つ独特の雰囲気のおかげで、士郎が「抜き」を見逃すことはない。

フェイトが士郎に追撃しようと突進してくる。

しかし士郎もこのままフェイトのペースに呑まれるわけにはいかない。

彼の気を引くために。

干将莫耶を投擲して地面に突き刺した。

「っ！！」

わざわざ武器を捨てた士郎を見て、フェイトの思考が一瞬停まる。

（そうだフェイト・アーウェルンクス。その一瞬の思考の乱れが命取りになる！！）

――――――ヒュオンッ！

――――――ヒュオンッ！

「！！」

数秒前に放った最初の干将莫耶。「一翼」。

干将莫耶はお互い引き合う性質を持っている為、空中に投擲すれば弧を描いて飛翔する。

「……。」

――――ドンッ！！

フェイトが地面を強く蹴り、士郎に突進するスピードを加速させた。

そうして黒白の双剣を躱そうとするが――――

（――――――――地面に刺した二番目が待っているぞ？）

士郎は自分とフェイトの間に刺さっている干将莫耶「二翼」を――――

「壊れる幻想（ブロークン・ファンタズム）」

爆発させた。

「！！」

干将莫耶はＤランク宝具。

いくら強固な魔法障壁だろうが、宝具の魔力暴発の衝撃を防ぎ切れるはずがない。

「――――投影（トレース）、重装（フラクタル）。”オーバーエッジ”」

爆発の衝撃でフェイトは後方に吹き飛んでいく。

だが後方には。

彼が躱そうとした「一翼」が飛来する。

――――――ガギィイッ！！！

障壁に、阻まれる。

「……何度やっても――――」

無駄だよ、と言おうとして口がとまる。

爆炎の向こう側にいる筈の士郎が、目の前にいた。

――三対の干将莫耶を駆使した連続攻撃戦術。

翼のような形状の大剣に変化した、三番目の干将莫耶を振り下ろす！！

「――――――――鶴翼欠落ヲ不ラズ（しんぎむけつにしてばんじゃく）ッ！！」

――――――――――“鶴翼三連”！！

少年の小さな体を、黒白（こくびゃく）の双剣が切り裂いた。

「――――――――――終わり？」

斬り裂いた――――――筈だった。なのに。

フェイトの体には、傷一つついていなかった。

「……『石の針（ペトラス・ベローラ）』」

「ッ！！」

フェイトが右手を翳し、再び現れる無数の魔方陣。

士郎は後ろに跳んで距離を取り、左手をフェイトに向ける。

その動作に呼応して、丘に突き立つ剣たちが引き抜かれる。

宙に浮き、刃の切っ先が一斉に標的（フェイト）へ向く。

「往け（イトウラス）」

「――――――――往け！！！」

石化の武器と無限の剣群が激突する。

・ボツ？　士郎ブチ切れ

「『世界を滅ぼして世界を救う』？
世迷い言を。寝言は寝て言え。独善的な正義だそれは。
理想を抱いて溺死しろ！！」

～補足・解説～

・お前は俺と同じだよ。自分の掲げる「正義」のために、容易く他人を傷つける。
でもな。
――――――どんな理由であれ、利益のために人を傷つけるのは、「悪」だ。

「正義」の反対は「悪」ではなく、別の「正義」とはよく言ったもんです。フェイトは魔法世界人を救うには自分達のとる方法が正しいと思っているし、士郎はそんなフェイト（たち）の「救うために滅ぼす」という手段を絶対に認められない。
この二人は決して相容れない存在です。

・桁違いの霊格を持つ鬼神を殺さず、

「霊格」…魂の大きさ、強さ。これが大きい存在ほど神秘（気や魔力を基にした術、魔法や呪術など）に対する抵抗力や、神秘を扱う才能に優れる。

この小説内の霊格設定←

ランク高い

→

スクナ（大鬼神）

エヴァ（６００年モノの吸血鬼）

→

鬼神（麻帆良地下に封印されてる鬼神レベル）

→

上級悪魔

刹那（烏族ハーフ・白鳥）

→

（ネギ（オスティア王族の末裔））

（アスナ（黄昏の姫御子））

→

下級悪魔

→

鬼

→

士郎（魂が英霊（アーチャー）と同調（シンクロ）しているため。魂だけ英霊もどき。）

小太郎（狗族ハーフ）

→

人間

悪魔が鬼よりも霊格低いのは、「悪魔」はキリスト教と共に世界中で信仰される（信じられている）存在ですが、「鬼」は日本及び中国でのみ信仰される存在だからです。しかも中国では鬼は幽霊のようなイメージなので日本人が持つイメージと違います。よって信仰による恩恵が少なく、霊格が低いと判断しました。「信仰が力になる」という考えはちょっとＦａｔｅが入ってます。

そしてオスティア王族の血を持つネギと明日菜は魔法世界でのみ霊格がアップ。魔法世界限定で上級悪魔・刹那と下級悪魔の間に入ります。

・「逃げたんじゃない、お前の所為で逃げられたんだ！！」

やつ当たり。元々エヴァ達への接近を許した士郎の責任です。まあエヴァが油断してなきゃあの後フェイトに逃げられなかったかもね、というのはあります。

・体に蓄積された「剣を構成する要素」。それに働きかけて剣と成す、遠隔剣製。
発動すれば対象の内側から剣が飛び出しその身を貫く。

固有結界を解除した後なのに「剣を構成する要素」が消えないのは士郎の投影品と同じ理屈です。意識して消さない限り結界解除後も存在し続けます。

危ないのでフェイト以外の人の体内からはちゃんと消してます。
ちなみにこのオリジナル技にはちゃんと技名があり、設定話で投稿する予定です。

それでは次回！！

第４６話　修学旅行編　最終話　さよなら京都（前書き）

前回と前々回で文章割いたので今回は短いです。

長かった修学旅行編、最終話。

第４６話「グッバイ京都」・・・あ、違う。

＊２０１１／１／２６　ちょっと改訂。

第４６話　修学旅行編　最終話　さよなら京都

『オ前……悪人ダナ……？』

『自分ノ目的・欲望・理想ノ為ニ　他人ノ犠牲ヲ厭ワヌ者……ソレガ「悪」ダ。』

『ダガ誇リアル悪ナラバ、イツノ日カ自ラト同ジ悪ニ滅ボサレルコトヲ覚悟スルモノダ』

『――――――オ前ニソノ覚悟ガアルカ？』

『覚悟（ソレ）ガネエンナラテメエハタダノ馬鹿カ、三流デ腰抜ケノ小悪党ダ』

『誇リナキ悪ハ。地ベタニ這イツクバッテ死ニヤガレ。』

――――――――――――アバヨ。

「――――何だろう、今の夢……。」

すっかり日が昇ったころ、ネギは目を覚ました。
眼鏡をかけて髪を束ねる。

『ネギ先生はぐっすり寝ていますね』

『まあハードな一夜だったし、何より死にかけたからな』

話し声が聞こえる。
ネギの寝ていた部屋のすぐ外の縁側からだ。

『オイ、もう行くのか？　せめて別れの挨拶くらい……』

『……。顔を見れば…辛くなりますから』

《ネギ先生　明日菜さん……。私……お二人にもお嬢様にも秘

密にしていたことがあります……。
この姿を見られたら…もうお別れしなくてはなりません》

「――――――刹那さんっ！　何処へ行っちゃうんですかっ！！」

襖を開けると、手摺りに腰掛けたエヴァと隣に立つ茶々丸。そして、荷物を提げて背を向ける、刹那。

「このかさんはどーするんですかっ！　アスナさんもいい友達ができたって喜んでたのに……！！」

「い、一族の掟ですから……、あの姿を見られた以上仕方ないんです……！！
お嬢様をお守りするという使命も果たせました、私を拾って育ててくれた近衛家へのご恩も返すことが出来ました。もう思い残すことはありません。先生……お達者でっ！！」

「待っ、待ってください、ダメですよ刹那さん！！　僕だってみんなに正体バラされたらオコジョにされちゃうんですから！！
茶々丸さんなんかロボだし、エヴァンジェリンさんなんか吸血鬼ですよ！！」

士郎なんか剣だしね。

「あ、ちょっ……放してください！！」

「どうぞ、マスター。」
「うむ。……ほう、久右衛門の玉露か。さすが近衛家、イイものを置いてるな。」
「お。丁度よかった。抹茶羊羹作ったんだけど食うか？」

「だから刹那さん、これからもずっと傍でこのかさんを守ってくださいよーーーー！！」
「そんな無茶な、あなたそれでも先生ですか！！」
「刹那さんに言われたくないですーーーっ！！」

「ズズ……うむ、美味い。よし戴こう。」
「抹茶が入ってるとはいえ羊羹が甘い玉露に合うか分からないが……どうだ？」
「……モグモグ……ん。大丈夫だ、美味いぞ。」

「それは私だって去りたくないです！！　せっかくまたお嬢様と仲良く……」
「じゃあいればいーでしょ！！」
「しかしっ……！！」

「……若いってイイよなー」

「なぁー。」

「お二人とも。急に老けこまないでください。」

士郎は手摺りに肘をつけて寄り掛かって様子を眺める。

「もぐもぐ……んっ…。お前は引き留めないのか？」
「なんで？」
「――――は？」

幼馴染みが二度と帰らないつもりで出て行こうとしているのに、コイツは何をほざくのか。
エヴァが顔でそう言っている。

「あいつは残るよ。」

さらっと断言してみせる。
青春（？）していたネギと刹那も固まってこちらを見ている。

そんな二人に笑顔を見せて、士郎はどこかを指差した。

「せっちゃんせっちゃん、大変や――――――――――――！！」

「大変よ刹那さーーーーーん！！」

一同がその方向に視線を向けると――――明日菜と木乃香がこちらに走ってくる。

「な、何事ですか？」

「実は旅館に飛ばした私達（明日菜・木乃香・刹那・ネギ除く）の身代わりが大暴れしてるらしいのよっ」

「ええーーーーーーーーっ！！」

「――――おっ　ここにいたか桜咲！」
「ネギ坊主、ホテル嵐山に急行するアルよ！！」
「ホラ刹那、身代わりはお前の専門だろ！」
「せっちゃん早よ――――――――！！」

クラスメイトが続々と集まり、慌ただしく出発の準備をする。

彼女達は当然のように刹那を呼ぶ。

輪の中に刹那が居ることは当然であり当たり前のこと。

刹那がいなくなるなど誰も考えない。

その、当然の信頼を籠めて急きたてる。

「行こうよ」と。

「――――仕方…ないですね……。」

「刹那さん。僕たち、黙ってますから……」

「……ありがとう。ネギ先生……。
――――わかりました、行きましょうお嬢様！！」

「も――せっちゃん、このちゃん　て呼んで――――――！！」

「ホラ早くあんた達！　置いてくわよ！！」

「あ！　ぼく着替えがまだ――――」

「……騒がしい連中だ。」

「まあアイツらしいっちゃらしいけどな」

「士郎さん、どうぞ」

「ありがと茶々丸。――ズズ……お、美味い」

桜舞う？毘古社。その千本鳥居を少女達が駆けて行った。

「……お前も行った方がいいんじゃないのか？」

「後からゆっくり行くさ。折角の京都で、初の修学旅行だ。学生の名物行事、存分に味わってやろう。」

フフン、と楽しそうに鼻を鳴らす。

「マスター、やはり修学旅行に来たかったのですね。」

「巻いてやろうか？」

「士郎さんはこれからどうされるのですか？」

（回避上手くなったなあ、茶々丸……）

「そうだ士郎！　お前も私の京都観光に付き合え！！」

ああ、楽しそうにしてるところ悪いけど――――

「ちょっと、行く所があるんだ。」

――◇――――――◇――――――◇――

修学旅行四日目。完全自由行動日、二日目。

学生が朝風呂に入ったり微笑ましく騒いだりするホテル嵐山の一室では。

「は――――――――――――――――……」

――――チチチ……

「疲れましたね――――」

昨夜使われなかった布団の上に寝転がる４人。明日菜・木乃香・刹那・ネギ。

昨日のハードな一日の反動か、全員すでに朝からお疲れモードだ。
あまり睡眠をとっていないのも原因の一つであろう。

「……でもこうしてると……昨日のことってなんか夢みたいだね――――」

「そうですね……傷も消えてしまいましたし」

人間が石になり、夜の湖が朝焼けの荒野に変化し、巨人（鬼神）とバトルした等々、
大スペクタクル目白押しである。

――ピ――――ヒョロロ――――……

「……いい天気。」

「平和が一番やな――――」

――――スパァン！！

そのひと時の平和をブチ破る音が響いた。

「起きろぼーやとその他！！　今から私の京都観光に付き合うがいい！！」

「えー、長さんとの待ち合わせの時間はまだ……」

「だからそれまで観光するんだろ、ほら起きろ！！」

「エヴァちゃん寝かせて――」

「図書館組の3人は付き合ってくれるそうだぞ！　まずは清水寺だ！！」

「え～～、そこ行ったよ――――」

エヴァンジェリンの京都観光を終え。

「――やあ皆さん。休めましたか？」

「どうも、長さん！」

詠春と合流した。

「……私服も渋い……！」

「満足いきましたかマスター」

「うむ、いった。」

「この奥です。3階建ての狭い建物ですよ。」

「ねえねえドコ行くの？」

「何でもネギ先生の父親の別荘に……」

「ネギせんせーの――――……」

（スクナの再封印は完了しました。）

（そうか。面倒を押しつけて悪いな近衛詠春。）

（いえいえ。こちらこそ今回は本当に感謝を……）

「あの…長さん。小太郎君は……」

「それほど重くはないでしょうが……それなりの処罰があるでしょう。その辺りは我々にお任せください。」

「そうですか……。」

「それよりも問題はあの白髪のガキか。」

「現在調査中です。――――と……ここです。着きましたよ」

「京都だから和風だと思ってた。」

「なんか秘密の隠れ家みたいねー」

「天文台がついてる――――……」

「１０年の間に草木が茂ってしまいましたが中はキレイなものですよ。

――――どうぞ、ネギ君。」

――――◇――――――――――――◇――――――――――――◇

――――パシャッ

柄杓（ひしゃく）で掬って水をかける。バケツで絞った雑巾で墓石を拭く。

――――――「衛宮家乃墓」。

詠春（オヤジ）が手続きをして３人をこの墓に入れてくれたのだ。

アイリ（かあさん）の父親が渋ったそうだが、母さんのお姉さんが説得してくれたらしい。

既にあった造花を買ってきた生花に差し替え、線香を立てる。

――掃除が終わった。

「ふう……。」

墓の前にしゃがみこむ。

「……切嗣（オヤジ）。……俺、何も知らなかったよ」

親父がどういう風に生きてきたのか。どんな思いで生きてきたのか。

あの地獄で。

瓦礫の下。炎の熱と痛み。人が焦げる臭い。人が腐る臭い。

網膜に映る血まみれの姉。

明確な、逃れようのない「死」の気配を感じて、士郎は思った。

「死にたくない」と。

家族に会いたい。独りは嫌だ。寂しい。

『おとうさんとおかあさんにあいたい……。おねえちゃんにあいたい……。

きっと死んで天国にいけばあえるとおもう。

――――――でも、いやだ。ぼくは……ぼくは死にたくない』

家族を喪い、詠春の好意で近衛家に引き取られた。

まだその頃、「衛宮士郎」は。

生きる理由も目的も、生きたいという思いもなく。

ただ、「死にたくないから」生きていた。

――――――――でも。

「今は違うよ。死にたくないから、仕方なく生きてるんじゃない。
俺は今――――――――「生きたい」と、思ってる。」

「切嗣（オヤジ）とアイリ（かあさん）と……イリヤ（ねえさん）の分まで生きるから、さ……
……」

……やばい。これ以上ここに居たら泣いてしまいそうだ。
バケツを持って立ち上がる。
もう行こう。

「じゃあな、皆。」

背を向けて、立ち去った。

「――――なんでさ？」

――――――――そこには、予想外の人物が立っていた。

「――――――――エヴァ？」

向こうから歩いてくるの金髪の少女は間違いなく士郎の主。
エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。
そして傍らに寄り添う緑髪の少女（ロボ）は彼女の従者、絡繰茶々丸。

「何を呆けている？」

「え……いや、だって。ネギの父親の別荘に行ってるもんだと……」

「行ってきたさ。朝倉に記念写真を撮られてな、これ以上面倒にならないうちにあの連中とは別れた。

茶々丸、士郎と一緒に寺の境内で待ってろ。私一人でいい。」

「はい、マスター。」

「？　何しに来たんだ？」

「お前は何を言ってる？　墓に来て飯でも食うのか？

――――知人の、墓参りだよ」

◇――――――――――◇――――――――――◇

エヴァが立ち止まって見つめる墓は「衛宮家乃墓」。

（６００年のほとんどを賞金首として生きてきた私に、友人などいるわけないだろう。）

「本当なら、こんな女々しいことをするつもりなどなかったんだがな」

一歩前に踏み出して――墓石を睨みつける。

「――――安心しろ衛宮切嗣。士郎は私が責任持って面倒みてやる。なに、従者の面倒をみるのも主人の役目だ。この『闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）』が……いや、

このエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルが約束しよう。」

辺りは夕方になり、風が吹き始めた。そろそろ帰ることにする。

「士郎（あいつ）と、もう一人の従者が待ってる。じゃあな。」

「そうか。ああ――安心した。」

「――――え――――――――――？」

その長髪を揺らせて、声のした方へ振り返る。

――――ザアッ――――……

風がエヴァの髪を撫でた。

ただ、それだけだった。

―◇―――◇―――◇―――

修学旅行五日目、最終日。
朝に新幹線に乗って昼過ぎに学園駅で解散となる。

「皆さ――ん、修学旅行楽しかったですか――――!?」

『は――――――――い!!』

『いえ――――――――い!!』

――プァン――――

帰りの新幹線。

「……やれやれ。あれ程騒がしかった３－Ａが静かなものですな。」

『くか――――』

『すぴ――――――』

「ふふ、ホントに……。騒ぎ疲れたんでしょう」

『Ｚｚｚ・・・・・・・・・』

「……あら。見てくださいあの二人。」

「何ですか？」

新田先生としずな先生の視線の先は。
お互い寄り掛かって眠る、ネギと明日菜。

「まるでカワイイ恋人ね。」

「いやあまだまだ子供ですよ。どちらかと言えば姉弟ですな。」

「す――――――……」

『私はかつての大戦でまだ少年だったナギと共に戦った戦友でした』

『そして２０年前に平和が戻った時、彼は数々の活躍から英雄……
サウザンドマスターと呼ばれていたのです』

『以来彼と私は無二の友であったと思います。しかし彼は突然姿を
消す……』

『彼の最後の足取り、彼がどうなったのかを知る者はいません。
ただし公式の記録では１９９３年死亡――――――……』

『それ以上は私にも……すいませんネギ君』

『――ネギ君、実はコレなんだがね……』

――――プァ――――ン――――――――……

得難きモノを手に入れた彼女達。

波乱の修学旅行は、こうして幕を閉じた。

第４６話　修学旅行編　最終話　さよなら京都（後書き）

～補足・解説～

・――――――――――――――アバヨ。

さあ、これはなんなのカナーーーーー♪

天ヶ崎千草はどうなったのか？　皆さんのご想像にお任せしまっす。

・・・どうせならブラックな方向で想像してね・・・ククク。

本当に長かった。皆様のおかげでなんとか修学旅行編、完結しました。

１月からは日常編です。

構想のみではありますが、ネギの弟子入りの後に刹那編と真名編を書こうかなと。それぞれ１話ずつですが。

でも迷ってるんですよねえ。京都決戦編、妹が攫われてるのに士郎の必死っぽさがあまり感じられないというか。ＶＳフェイトに意識が向き過ぎてる。

京都決戦を全編書き直そうか考えてます。まあそうなったら士郎無双になっちゃうだろうなあ。さてどーしよー。

それでは次回！！

―０６話　設定４　オリジナル魔法（前書き）

これが今年最後の更新です。

初投稿からはや半年・・・。もう２０１１年かあ。感慨深いです。

来年もよろしくお願いします。

良いお年を！！

―０６話　設定４　オリジナル魔法

今までに登場したオリジナル魔法を掲載します。

・守護結界『悪魔の神殿』《デーモニウム・テンプラム》
（初登場／第５話　衛宮士郎の一日・極夜）

魔法障壁のように人物の動きに追従する、動く防御結界。結界内の人物・存在を外界から守る。
麻帆良の学園結界の中でも人外が１００％の力で活動できるようにする目的で作られた。
結界に対抗できる出力を持たせるために「結界」魔法として開発された。
腕輪型の魔法具を装備してそれに魔力を流せば、その間常時発動する。
あらゆる魔法・攻撃をシャットアウトするため、並みの魔法で破ることは困難。
ある伏線のために登場したが、それが回収される気配はない。

・『無銘の刀工』《タクティキ・シディロルゴース》
（初登場／第２５話　桜通りの吸血鬼？）

＊２０１１／６／１６　追記・変更。

コピーマジック。投影魔術とこの世界（ネギま！）の魔法をブレ

ンドした技術。敵の魔法を視認し、高速で解析し、呪文の構造術式を理解し、相手の魔法・呪術を投影する。高速解析・瞬間理解・反転投影・術式改変。このプロセスを一瞬で行う迎撃魔法(カウンターマジック)。

士郎に解析・理解できない魔法は投影できない。基本的には無詠唱で使用するが……。

「契約により我に従え無貌の王！！　来れ錬鉄の炎、鍛造の鉄槌！　八の工程と二十七の路を以て　模倣しよう遍く万象！　『無銘の刀工』！！

――――偽・魔法ノ射手！！」

←ルビを振ったバージョン。

「契約(ト・シュンポライオン・ディアコネートー・■■■■■)により我に従え無貌の王。来れ錬鉄の炎、鍛造の鉄槌。(エピゲネアテーロトガ・アロプトースフィリー・エプリクセ)八の工程と二十七の路を以て　模倣しよう遍く万象！『無銘の刀工』(イ・プローリ・ケー・マギア・ギア・ナ・スフィリラティ・ドゥン・コズモ・タクティキ・シディロルゴース)！！

――――偽・魔法ノ射手！！」(FALSUS MAGITTA MAGICA)

・『剣製の凱歌』《ヴィクトーリア・ブレイドワークス》

（初登場／第４５話　京都決戦編・肆　剣製の凱歌）

能力：まだ秘密。　＊２０１１／５／１２解禁。

固有結界「無限の剣製」を体内に展開した状態。魔法で制御術式を開発・使用して暴走（体中から剣が突き出るような症状）を抑えている。制御術式は自己封印(ブレーカー・ゴルゴーン)・暗黒神殿のような作用反転系のモノ。肉体を剣と化して防御力・魔力・投影速度が上昇する。

・防御力：肉体が鋼鉄のように硬くなる。

・魔力：内包する聖剣・魔剣・神剣・銘剣・宝具の魔力を己のモノ

として使用できる。
・投影速度：体内に「無限の剣製」を既に展開している状態なので、そこからすぐに剣を取り出せる。
これを使用している間は副作用で髪が白髪に、肌が褐色に染まる。
使用後は体力を著しく消耗する。
基本的に使用は1日1回。2回以降の使用では全身に痛みを伴う。
3回目以降は……

「この体は、硬い剣で出来ている。」
（カラダ・ハ・ツルギ・デ・デキテイル）

体を剣に。
「Ｍｙ　ｂｏｄｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｓｗｏｒｄ.」
血潮を鉄に。
「Ｍｙ　ｂｏｄｙ　ｉｎ　ｂｌｏｏｄ.」
己が限界を越えて、飽くことなく歩き続けろ。
「Ｂｅｙｏｎｄ　ｔｈｅ　ｌｉｍｉｔｓ　Ｉ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　ｗａｌｋｉｎｇ　ｗｉｔｈｏｕｔ　ｇｉｖｉｎｇ　ｕｐ.」

「――――――『剣製の凱歌』（ヴィクトーリア・ブレイドワークス）」

・『仇血剣製』《グラディウス・イニミッチ・サングウィーネ》
（初登場／第４５話　京都決戦編・肆　剣製の凱歌）

「無限の剣製」を発動した後にのみ使用可能。固有結界内に満ちる「あらゆる剣を構成する要素」を敵の体内に蓄積させ、体の内側から剣製し貫く。任意の時間差で発動できる。

汝の血潮は我が剣。
「Ｙｏｕｒ　ｂｌｏｏｄ　ｉｓ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ.」

「――――――『仇血剣製（グラディウスッオエーサングウィーネ）』」

オマケ企画。誰でも一度はやってみる「オリジナル宝具」のコーナ～。

「真っ赤な嘘（ハイド・オブ・トゥルー）」

（Ｉ　ｈｉｄｅ　ｔｈｅ　ｔｒｕｔｈ．＝「私は真実を隠します」をモジった。

「ハイド・オブ・トゥルー」＝「真実の皮」。真実を隠す姦計の皮）

・イソップ童話「嘘をつく子供」（＝狼少年）の逸話がカタチになった宝具。

・能力：真名解放直後に発した言葉が指す事実を完全に隠蔽する。

例：真名解放して「ここで戦闘を行った」と言えば、どれだけの目撃者がいようとその事実は当事者以外の人々の記憶に残らなくなる。カメラなどからも消え失せる。あらゆる調査を回避し、情報隠蔽に特化した宝具。あくまで「当事者以外には知ることができなくなる」だけなので、事実を無かったことにしているわけではない。

・ただ、担い手がいねえ。周の幽王くらいか、使えそうなのは。でも彼は英霊になれるほどの偉業をしてないからなあ。

「尊ぶべき（トライデント）三叉の海」ランクＡ

・海神ポセイドンが持っていた三つ又の槍。

・能力：水または液体を自在に操る力を持つ。ただし生物の体内の水分は操れない。水がある場所ではランクがＡ＋に、海に近い場所ではランクＥＸに上昇する。この宝具の力で操作される水は、操作されている時のみこの宝具と同じランクの神秘・魔力を帯びる。言ってしまえば操る水全てを宝具と化してしまう。

・神様の槍。聖杯の助けがあっても人間じゃあ神霊クラスの存在を召喚するなんてできないよねえ。

今回はこれでおしまいです。

次回の更新は１月中旬以降になります。

それでは次回！！また来年、良いお年を！！

第４７話　弟子入りしよう！～立志篇～（前書き）

また予定を破ってしまった。
最近、嘘予告しかしてない気がする。

今回からネギの弟子入り編。
内容と文章量のバランスを考えた結果、弟子入り編がまさかの三話構成に。

それでは第４７話、どうぞ。

第４７話　弟子入りしよう！～立志篇～

麻帆良に帰ってきて二日目。月曜日。

親父、俺は元気にやってるよ。
京都での数日間は大変だったけど、やることはやらなくちゃな。
今日から店を再開するよ。
俺の店にも常連ってのがいるからな。大事にしなきゃ。
そうそう、こっちは今――――

「う〝――――～～～……。っくしゅ！！」

――――――御主人様（エヴァ）が花粉症になりました。

第４７話　弟子入りしよう！～立志篇～

「ズズッ……っううう〜〜〜〜〜〜」
「昨日から調子悪かったもんな……」

ベッドの上でパジャマ姿のエヴァが唸っている。最強の吸血鬼なんだよな、こいつ。

「マスター。やはり今日は学校を休まれては……」
「……グスッ……うむ、そうする。茶々丸、私は寝る。後の事は頼んだぞ」
「はい、マスター」
「じゃあ、今日は俺も早く帰るよ」

がばっと布団を跳ね除けてエヴァが起き上がった。

「まて。私がこんな状態になっているというのに、お前はどこへ行く？」

「え、『アルトリア』だけど。今日から再開するって言っただろ？」

「コイツ……私が京都で誓いを新たにしたというのに……！！」

ワケもわからぬまま、部屋を追い出された。

―◇―――◇―――◇―

「修学旅行明け、初の登校日です！！」

「誰に説明してんのよ」

今日も今日とて遅刻ギリギリで登校（出勤）する、ネギ・明日菜・木乃香。

すると。

『喧嘩だケンカ！！』

『部長に食券５０枚！！』

「あ、あれは……くーふぇさんっ！？」

学園へ通じるメインストリートの開けた場所に、
いいガタイをしたあんちゃんや不良っぽい人、武術をかじってそうな方々が古菲（クーフェイ）を取り囲んでいるのが見えた。
剣道少女やボクシング野郎もいる。てか不良はともかく運動部員が多対一って。
スポーツマンシップは無いのかアンタら。

『今日こそ勝たせてもらうぜ！　中武研（中国武術研究会）部長・古菲！！』

一人がそう叫んで突っ込んでいったのを合図に、彼らが一斉に古菲に突撃していく。
ていうかコレで勝って「やったぜーーーー！！」って喜べるの？

「く、くーふぇさ――――」
「心配ないでござるよ、ネギ坊主」
「あ、楓ちゃんおはよー」
「あの、心配ないってどういう…？」

“――――――――？打頂肘（かくだちょうちゅう）！！”

『ぐふぁっ！？』

「あれはいつものことでござる」

『ひでぶっ！』

「古（クー）は学園の格闘大会で優勝して以来、挑戦者が後を絶たないでござるよ」

『あべし！！』

後を絶たないということは――――

「弱いアルネ、功夫（クンフー）が足りんアルヨ。もっと強いヤツはいないアルか？」

毎回退けてるってワケですね、はい。

『へへへ……流石だぜ……』

築かれた死屍累々の中に、恍惚の表情をしている人がいる。

ダメだ、殴られるのが目的になってるよこの人。

「お。ネギ坊主、？好（ニーハオ）！」

「お、おはようございます。くーふぇさん強いですね！！」

「いやあ、楓や真名には敵わんアルよー」

（うーん……くーふぇさんかぁ……）

「どしたん？　アスナー」

「いや……なーんかネギ（あいつ）の目がキラキラしてるような」

「――くーふぇさん！　僕に中国拳法を教えてください！！」

―◇―――◇―――◇―

放課後。体育教員室。

「失礼しまーす。二ノ宮先生、お話ってなんですか？」

「ああ、来たか。んー……。まき絵、お前に話というのはな……」

「ネギ、どーいうつもりなの？　くーちゃんに弟子入りなんて」

「……僕、少しだけ戦うための勉強をしたことがあるんです」

「？？　なんでそんな……」

「……父さんを探すうちに必要になると思ったからです。長さんが言ってた通り、父さんはとても強かったそうです。そんな父さんが行方不明になるなんて……何かあるに違いありません。でも今の僕じゃ……そんな事はとても……」

「だから修行？　何言ってんのよ、アンタまだ子供じゃない。お父さんを探すにしても、今すぐ強くなる必要なんて――」

「いえ。このままじゃ、僕は何も守れません。京都で僕は……何もできませんでした」

生徒の石化、鬼の軍勢、白い髪の少年、リョウメンスクナノカミ。

「僕は先生です。みんなを守らなきゃ……いや、守りたいんです。このかさんも刹那さんも……アスナさんも。だから――――――」

――カランコローン。

「こんにちは――。エヴァンジェリンさん、お見舞いに来ましたー」

――◇――――――◇――――――◇――

「……グスッ……何？　私に弟子入りしたいだと？　アホか貴様」

ベッドの上でエヴァンジェリンが胡坐をかいて座っている。鼻が真っ赤だ。

「京都では助けてやったが、私と貴様はまだ敵同士だぞ？　貴様の父には恨みもある。何故私が貴様に稽古などつけねばならないんだ、さっさと帰れ！」

ネギはそれでも諦めずに、膝を床につけ頭を下げて頼み続ける。

「それを承知でお願いに来ました！　京都での戦いを見て、魔法使いの戦い方を学ぶにはエヴァンジェリンさんしかいないと！！」

――――――ぴくっ。

「……ほう、つまり私の強さに感動したと」
「はい！！」
ちょっと嬉しそうに問いかける。
「……本気か？」
「ハイッ！！」
エヴァの機嫌がどんどん良くなっていく。
「……ふふん。そこまで言うなら…いいだろう」
「え……。あ、ありが「だが！！」……えう」
エヴァンジェリンが、意地悪く二ヤリと口を吊り上げた。
「ぼーやも知っての通り、私は悪い魔法使いだ。悪い魔法使いにモノを頼むには…それなりの代償が必要だぞ？」
――――――ずいっ。
「――――先ずは足を舐めろ。我が下僕として永遠の忠誠を誓え。話はそれからだ」

なんて言って、足を向けられました。
ネカネお姉ちゃん。
僕、この条件を飲むか本気で考えました。
このときアスナさんがいなかったら、僕はどうなっていたかわかりません。
懐古。

「アホかーーーーーーーーーーっ！！！」

――――――スパァンッ！！

「へぶぅっ！！」

明日菜がハリセン（ハマノツルギ）でエヴァの顔を引っ叩く。
当然魔法障壁は破壊され、哀れエヴァは吹っ飛んでベッドから落ちていった。

「エヴァちゃん、なに子供にアダルトな要求してんのよ――――！！」

「あああコラ神楽坂明日菜！！　弱まってるとはいえ真祖の障壁をテキトーに無視するんじゃないっ！！」

もはや涙目である。

「こんだけ必死に頼んでるんだから聞いてあげればいいじゃない！！」

「頭下げたくらいで物事が通るなら誰も苦労せんわ！！……それ

はそうと……

何でそこまでぼーやに肩入れするんだ？」

「……え……」

――――二ヤッ

エヴァンジェリンがいやらしい笑みを浮かべて目を細める。

「まさか惚れたか？　１０歳のガキに」

「――――なっ……ち、違うわよっ！！」

「ハハハどうした！？　カワイイじゃないか、耳まで真っ赤だぞ、え？　まさか本当に――――」

（た、確かに修学旅行の時とかさっきとかチョットかっこよかったけど――――！！）

「ちがぁーーーーう！！！」

――――スパコーンッ！！

「へぷろばぁっ！！」

ケンカする（？）２人を、ネギと茶々丸は離れた場所で見守っていた。

「あああああ……！」
「マスターに物理的ツッコミを入れられるのはアスナさんだけですね。
……要録画です」

――ケンカ終了。

「ああもう……わかったよ。今度の土曜にウチにもう一度来い。弟子にとるかどうかテストしてやる、それでいいだろ？」

「は……はい！！　ありがとうございます！！」

こうしてネギはエヴァンジェリン邸をあとにした。

◇――――◇――――◇

「へえ、弟子入り。」

時刻は夜。エヴァンジェリン邸。

「ハイ。マスターはそれはもう嬉々として先生をどうお鍛えになるか思案しておりまして……」

がしっ。

エヴァが捩子を片手に茶々丸の頭に掴みかかる。

「まだ弟子にとるとは言っていない！　このボケロボが、巻いてやるぞ！？」

「士郎さん、その箱はなんでしょう？」

（茶々丸、危なくなったら俺に会話を振るのヤメテくれ……）

茶々丸の頭の後ろには魔力充填用のゼンマイ穴がある。

必要以上に巻き過ぎるとキモチ良くて大変なのだという。

エヴァは脅し又はお仕置きとしてゼンマイを巻こうとするのだが、最近は茶々丸が上手く回避するようになったようだ。

「ああ、余ったデザート持ってきたんだ。エヴァ、冷蔵庫に入れとくから元気になったら食べ――」

「いま食べる」

「…大丈夫か？　それに夜食は太るぞ？」

「問題ない。それに体型など変わらん。いま食べたい」

「……皿とフォーク取ってくる」

（ほんとにわがままだなあ。かわいいから許しちゃうんだけど）

「では紅茶を淹れましょう。士郎さんはいかがですか？」
「俺は風呂入ってすぐ寝るからいいや」

キッチン。

「――――テスト？」
「はい。ネギ先生が自分の弟子に相応しいかを見るのだそうです。」

「テストねえ……」

「お前達なに話してる、早くしろ！！」
「へーい」
「ただいまお持ちします」

こうして夜は更けていった。

―◇―――◇―――◇―――

数日後。

（……賑やかになったな、ここも）

ただいま日課の早朝鍛練。世界樹前広場。以前は刹那と俺の二人きりだったのだが――

「違う！　そこはもっと腰を落として足をしっかり踏み込むアル！」

「はい、古老子！！」

「明日菜さん、筋はいいと思います。このまま鍛練を続ければかなりのところまでいけると思いますよ」

「そ、そお？　……よっと！」

ネギは白髪の少年……フェイトの戦い方を見て中国武術に興味を持ったらしい。

まあ、強くなりたいんだったら接近戦術も必須科目だしな。

刹那は明日菜に頼まれて剣術（本人曰く剣道）指南をしている。

こちらも京都で思うところがあったらしい。

そして余った俺は筋トレだ。

古はネギが休憩してる時はヒマだし、明日菜は新聞配達もあるので朝はそう長い時間鍛練できない。なので古と刹那、二人がヒマになったら相手をするのが俺だ。

よし、筋トレ終了。

次はシャドー・トレーニングだ。

久しぶりに師匠を想定して……いややっぱやめよう。シャドーで死にたくない。

「ヨシ、これから15分間、教えた型を反復するヨロシ！！」
「はい！！」

お、ウワサをすれば。

「師父、それではよろしくお願いするアル！！」
「だからその呼び方変えてくれって。よし……いくぞ」

とはいえ俺が得意なのは剣術も体術も「防御」なんだよなー。
まず師匠との修行では「気絶しないこと」が最初の課題だったから……
……アレ、涙が……。

「ネ――ギくーーーーーーん！！」

「あ、おはようございます　まき絵さん！　早いですね、朝のジョギングですか？」

（お？　アレは……）

ジャージを着た新体操リボン娘、３－Ａ　１６番・佐々木まき絵の姿があった。

「ネギ君なにやってるの――――――！？　それってこないだ言ってた

中国拳法？」

「は、はい。一昨日からくーふぇさんに教えてもらって……」

「えー？　一昨日？　それにしては様になってるよ、スゴイねー？」
ね、今のもっかいやってよ♪」

「は、はい。いいですよ」

「――――――随分と熱心じゃないかぼーや。」

（……あーあ……。）

士郎が心の中で密かに溜め息をついた。

「あれー、エヴァちゃんおはよー♪」
「エ、エヴァンジェリンさんっ！？」

広場前に佇むのはエヴァンジェリン。早朝で寒いからだろうか、普段のラフな感じの薄着ではなく、しっかりと服を着込んでいる。それでも履いているのはミニスカート。
こだわっております。

隣りにはチャチャゼロを頭に乗せた茶々丸。
士郎への差し入れを持っている。

そしてエヴァは腰に両手をあてて、ちょっぴり悔しそうな顔をしていた。

「カンフーの修行をすることにしたのか？　じゃあ私への弟子入りはナシということでいいんだな」

ムスッ。という擬音が聞こえてくるようだ。

「えっ！？　いえっこれは、その…あの少年の戦い方の研究で……！」

「いーよいーよ別に。もともと私は弟子などとる気はなかったしな！！」

完全にへそを曲げていた。

「ヤキモチですか？　マスター。」

「ソンナニ気ニ入ッテンノカ、アノガキ」

「なっ、ち・違うわっ！！」

「ちょっとエヴァちゃん。何の弟子かしらないけど教えてあげればいーじゃん。何でそんなイジワルするのー？」

するとそこにまき絵が割り込んだ。

「ヤキモチだそうです」

「ちがうっつーのっ！！」

間違いなく焼き餅を焼いて（妬いて）いる。しかもかなりの数であろう。

「はん。そこのガキにはカンフーもどきがお似合いだよ。子供の遊

びに付き合う趣味はないんだ。お前のような子供っぽい奴と話すのもな、佐々木まき絵」

「――――なっ……！！」

『まき絵、お前に話というのはな……』

『お前の技術は正確だし努力してることも知ってる。才能もある』

『でもこのままだと大会は厳しいかもしれない』

『お前の明るさは間違いなく長所なんだが…短所でもあるというか……』

『厳しいことを言うようだが、お前の性格は良く言えば天真爛漫、悪く言えば子供っぽい』

『お前の新体操ははっきり言って……小学生の演技なんだ』

――――――――――“子供っぽい”――――――

「な、何よ――――！！　エヴァちゃんだってお子ちゃまみたいな体型じゃん！！　ふ――んだ、ネギ君あーんなに強かったんだもん。エ

ヴァちゃんなんかに教えてもらわなくてもすぐに達人だよ――――だ！！」

「えっ、ちょっ…まき絵さ……」

――――――ビキッ。

（あ。ヤバイ）

士郎が悟ったとおり――――エヴァの眉間に青筋が浮かんだ。

「……いいだろう、いま貴様の弟子入りテストの内容を決めたぞ」

『そのカンフーもどきで茶々丸に一撃入れてみろ。それが出来たら合格にしてやる。ただし一対一でな』

「へ――――んだ！！　そんなのネギ君だったら楽勝だよ♪」

「ま、まき絵さ――――ん！？」

「…だそうだ。茶々丸、少し揉んでやれ。」

「しかし……」

「いいから行け。ケガせん程度でいい」

「……ハッ」

「――――失礼しますネギ先生」

――――――ドガッ！！

「……きゅ～～～～……」

「場所はここ、時刻は日曜日の０時にまけてやる。ま、精々頑張ることだな」

ネギは呆気なく吹き飛び、広場の壁に頭をぶつけて気絶した。
そんな彼を尻目に、エヴァは茶々丸とチャチャゼロを連れて帰って行った。

「大丈夫アルかネギ坊主！！」
「え？　なに、どうしたの！？」
「ネギ先生！？」

古菲と、事態に気づいた明日菜と刹那が駆け寄ってくる。
そして呆然と立ち尽くすまき絵と、額に手を当てて下を向く士郎。

「もしかして私……マズイことしちゃった……？」

「……残念ながら……」

今日は木曜日。テスト当日まで今日を含めてあと3日。

ネギ少年の、強くなるための修行を受けるための猛特訓が始まる！！

……なんて面倒な状況……。

第４７話　弟子入りしよう！～立志篇～（後書き）

～補足・解説～

：「マスター。やはり今日は学校を休まれては……」
：「……グスッ……うむ、そうする。茶々丸、私は寝る。後の事は頼んだぞ」
　鼻がグズってるだけで休めるなんて、この小説内の呪いの精霊は随分と甘いみたいです。

：まず師匠との修行では「気絶しないこと」が最初の課題だったから……
：……アレ、涙が……。
　先ずは防御が重要だったんです。気配を感知したり、衝撃を殺したり、攻撃を受け流したり、相手の先を読んだり。士郎は修行の初めは一秒くらいで気絶していました。

：ネギ少年の、強くなるための修行を受けるための猛特訓が始まる！！
　なんかＲＰＧのイベントみたい。城のダンジョンに入る為の鍵を手に入れるためにＡ村の村長を助けるために洞窟に行くみたいな。
　ややこしい。

それでは次回。

第４８話　弟子入りしよう！～特訓篇～（前書き）

この「弟子入りしよう」シリーズのコンセプトは

「（京都決戦を経た）ネギの精神面の成長を描く」

「まき絵の出番を殺さない」

です。

ネギま！の二次小説ではまき絵のネギに対する気持ちが「カワイイから好き」から「異性として好き」に変化する過程をすっ飛ばしていきなり「だめ――――！！　アスナ、止めちゃダメ――――ッ！！！」ってまき絵の出番が来る小説が多いのが気に入らなかったんです。

（原作イベントをいちいち書いていられないから省略する、というのは二次小説では当然の選択なのですが）

だから原作トレース色が強くなってもまき絵の出番は減らしません。

これが俺のポリシーです！！

それでは第４８話、どうぞ。

第４８話　弟子入りしよう！～特訓篇～

『そのカンフーもどきで茶々丸に一撃入れてみろ。それが出来たら合格にしてやる。ただし一対一でな』

木曜の放課後。

「まき絵ー、やっぱ元気ないなー。どしたん？」

「んー――――……」

校舎を歩くまき絵と亜子。

（どうしよう、ネギ君私のせいであんな事に……。何か、何かしてあげなきゃ……。）

「――――よしっ」

「よし？」

「たー――――――――っ！！」

「まっ、まき絵――――――――！？」

雄叫びをあげて、まき絵は廊下を駆けていった。

第４８話　弟子入りしよう！～特訓篇～

世界樹が遠くに見える、麻帆良の広場のひとつ。

「――――――ふっ！」

「ほっ」

散歩する者、遊ぶ者、昼寝する者がいる中――――ネギは古菲と修行していた。

「ネギ坊主は恐ろしく飲み込みが早いし、才能もある思うが……正直、あと二日ではどうにもならんアルよ。ホイッ」

――――すてーんっ

「あうっ！」

「じゃあエヴァちゃんトコの弟子入りはダメってこと？」

「ネギ先生は格闘については素人ですから……」

隣りには刹那と稽古をする明日菜。彼女はは早朝鍛練に充分な時間を割けないので、放課後にも稽古をつけてもらっていた。２人についてきた木乃香もいる。

「ヨシ弟子よ、少し休憩するヨロシ」

「は、はい……」

「なーネギ君。そんなにエヴァちゃんに弟子入りしたいん？」

大の字に寝転ぶネギに木乃香が聞いた。

「え？　ハ、ハイ。京都でエヴァンジェリンさんの戦いを見て、魔法使いの戦い方を勉強するにはあの人しかいないと思って……」

「そーなんやー」

「なに？　このかどうしたの。」

「いやなー。エヴァちゃんトコに弟子入り出来ひんかったらの話や

けど、そん時はシロウに弟子入りすればええんとちゃうかなー思て」

「！！　それよ！　ネギ、何もエヴァちゃんに弟子入りする必要ないじゃない！！　エヴァちゃんまだアンタは敵だーなんて言ってるし、シロウに弟子入りしなさいよ！！」

ネギの保護者が板に付いてきた明日菜は強引に提案する。
本人は否定するだろうが、明日菜はネギには危ないことをしてほしくない。

「え……そ、それは……」

「駄目やえアスナー。ネギ君はエヴァちゃんに弟子入りしたいゆーて頑張ってるんやから」
「そうアル。やる気になってるトコロに水を差すのはよくないアル。」
「う…わかったわよぉ……」

「ネギくーーーーーん！　お弁当たくさん作ってきたよーーーーーーーー！！？」

「え…あ…ありがとうございます？」
「え、まきちゃん？」

まき絵が亜子と一緒に弁当を運んできた。ちなみに重箱１６個。多い。

「みんなも食べてや」

「ス、スゴイ豪華ですね」
「うまそーアル♪」
「ひゃー、おせちみたいやなー」

「お気持ちは嬉しいですけど……どうしたんですか？　まき絵さん」

「うッ。そ、その……ゴメンネギ君！！」

「「「「「へ？」」」」」

「ホンットにゴメンね、私のせいでこんなことになっちゃって……」

事情を知る者はそれで納得した。

「アハハ、大丈夫ですよまき絵さん」
「でもでも、日曜日まであと2日しかないんだよ？　……あれ？」

「あーーーーー！！　忘れてた！！　私も大会の選抜テストが日曜にあるんだったーーーーーーーーーー！！！！！」

「え――っホント！？　大丈夫なの！？」

「そ、それが……。……全然自信なくて……」

「なんで！？　まきちゃんスゴイ上手いじゃない！！」

「私の演技『子供だ』って先生が……。ネギ君にも迷惑かけちゃう

し…私もーダメ……」

いつも元気なまき絵が表情を暗くして涙を目に湛えている。普段の彼女はまさしく天真爛漫。そんな彼女の落ち込みように、周りも心配せざるを得ない。

「なっ、何言ってるアルか、バカピンク」
「そうだよ、まきちゃんらしくないよっ」
「元気出しぃ」
「うん」

「――――そうだ、まきちゃんの演技見せてよ！」

「え――――っ、ダメだよそんなの――――っ！！」

完全に自信を失くしたまき絵は、人に自分の演技を見せる気にはならない。

「いいじゃん見せて見せて！」
「あ、僕も見たいです！　まき絵さんの新体操見たことないし……」

「う……ネギ君……」

しかしネギには負い目があるので、まき絵はそれを断れなかった。

「じゃ、じゃあ…ちょっとだけね……。コホン」

――――タンッ

リボンを手に、芝生を蹴った。……いつも持ち歩いてるのね、そのリボン。

・　・　・　・　・　・　・

――――トンッ……。

芝生の上に、静かに着地した。

「えと……こ、こんなカンジなんだけど……」

「す、すごーーーい！！」

「全然いいじゃないですかーーーーー！！」

まき絵の演技に一同が沸く。素人から見ても、それが優れた演技であると一目でわかるものだった。

「でも先生が子供っぽいって……」

「そんなコトないですよ！！　僕　新体操はよくわかりませんがと

ても良かったです！　まき絵さんらしい素直でまっすぐな、美しい演技だと思いますよ！！」

明日菜（さ、さすが外国人…よくまぁ照れもなくそんな褒め言葉ばっかをペラペラと……）

「ホ、ホント……？」

「本当ですよ、驚きました！」

「あ……ありがとー、ネギ君……。でも、もうテスト明々後日なんだよね――……」

「それはそうですけど、ここまできたらもうやるしかないですよ。あと2日、一緒に頑張りましょう！　まき絵さん」

「よしネギ坊主、そろそろ続きやるアルよー」

「はいっ！！」

古菲との特訓に戻っていくネギを、まき絵はじっと見つめながら呟いた。

「アスナ……」

「ん？」

「ネギ君ってカワイイだけじゃなくて……。結構カッコイイかも」

「――え？」

カモ（……ほほう。二ヤッ）

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

土曜日。ＰＭ：４：００

「これで時間内に教えられることは全て教えたアル！
後は運を天に任せ、残りの８時間は休息と回復に使うヨロシ！！」

「ハイッ！　古老子！！」

「……と、何やら師父が用事があるそうアル」

「え、シロウ？」

「ここしか時間（出番）がとれなかったからな。正直時間が全然足りないが……ま、お前なら２時間くらいで形になるだろ」

「？？」

「ひとつだけ、お前に教えておきたいことがある」

ＰＭ：６：３０

日が沈みかけた時間、世界樹広場に音が響く。

――ザッ。パシンッ！　パシィン！

――パシンッ！　パシーンッ！！

套路（かた）の反復練習をするネギの姿があった。

「な――にやってんのよこのネギ坊主――――っ！！！」

――スパコーンッ！！！

「あたっ！！？」

ネギの頭に明日菜のハリセンが炸裂した。

「くーふぇに『休んどけ』って言われたでしょ――！？　なに練習

してんのよ！！」

「いや、その……じっとしてると落ち着かないっていうか……。
……あれ？　アスナさんはどうしてココに？」

「アンタがいつまで経っても帰ってこないから皆で探してたのよ！！
もーいいわ。休まないっていうなら力づくでふん縛って――――」

「わーわー！！　わかりました休みます！！」

「ったく……じゃあ帰るわよ！！」

「はい……あ。」

「ぜえっ、はぁっ……。あ！　ネギ君いた――――――！！」

まき絵が息を切らせてやって来た。

「ごめんねまきちゃん、ウチのバカのために……」

「バ、バカ……」

「アンタなんかバカで充分よ。聞いてよまきちゃん、コイツったら
休んでろって言われたのにまだ練習してたのよ！？」

「……。」

「……？　まき絵さん？」

まき絵が静かに、まっすぐにネギを見つめていた。

「……ネギ君ってまだ10歳でしょ？　なのに先生やって大変だろうし、今だってこんなに頑張ってるよね？」

「……？」

「――ねえネギ君。ネギ君はどうしてそんなに一生懸命頑張ってるの？」

「……それは……」

父親のような魔法使いになりたいから、とは言えない。
でも、まき絵のまっすぐに澄んだ目を見て、適当な答えを返すこともできなかった。
――ネギは――――――――

「――僕、ずっと憧れてる人がいて……その人に追いつくために、どんなことも頑張らなきゃって……そう決めたんです」

夕陽の向こうに父親の姿を幻視(みて)、ネギはそう答えた。

「……そう。…ネギ君……大人だね――――……」

そう言って、まき絵が笑った。

「「え？」」

「言っとくけどまきちゃん、コイツまだまだガキよ？」

「違うよ――？　ネギ君は大人だもんね――――♪」

「え、え？　まき絵さん！？」

そう言って楽しそうに、まき絵はネギの手を握って歩いていった。

「ちょ、ちょっと、待ってよ――――――！？」

明日菜は慌てて二人を追った。

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

PM：11：59

その場を照らすのが街灯だけになった夜の世界樹広場。そこで静かに刻を待つのは。

「オイ御主人、コレジャ試合ガ見エネーゾ。モットイイ位置ニ座ラセロヤ」

粗末に街灯の台座に寄り掛からせられたチャチャゼロが不平を言う。

「まったく、役立たずのくせに口うるさい奴だ」

「動ケネーンダカラ仕方ネエダロ。ソレニ役立タズナノハ御主人ノセイダゼ」

「ああもうお前ら、ケンカするんじゃない。ほらチャチャゼロ」

ひょいっ。と士郎がチャチャゼロを自分の頭に乗せる。

「あ、コラ士郎！　甘やかすんじゃない！！　つけ上がるだろうが！！」

「オー、イイ眺メダゼー。色ンナ意味デナ」

含みのある目でエヴァを見下ろした。

「（カチンッ）……どういう意味だ」

「ケケケ、チビダナ御主人」

――ブチッ

「貴様の方がチビだろーがっ！！」

「今ハオレノ方ガデケーゾ」

「ええい言わんこっちゃない、士郎そいつをよこせ！　その生意気なヤツは地べたに放り投げておけばいいんだ！！」

士郎の頭からチャチャゼロを引きずり落とそうとするが、悲しいかな。

二人の身長差は５０ｃｍ以上もある。

エヴァは必死にぴょいこら飛び跳ねるが全く届かなかった。

「――――しかしよいのですかマスター」

３人とは離れた位置で茶々丸は待機していた。

「ネギ先生が私に一撃入れる確率は３％以下。先生が弟子になれなければマスターとしても不本意なのでは……」

「おい勘違いするなよ茶々丸、私はホントに弟子などいらんのだ。メンドイし、ただでさえ手のかかる奴が一人いるしな」

「……うぐぅ」

「それに一撃入れれば合格など破格の条件だ。これで駄目ならぼーやが悪い。いいか茶々丸、決して手加減などするなよ。」

「……わかりました」

「さて、そろそろ時間だな」

「エヴァンジェリンさんっ！！」

「――来たか」

「ネギ・スプリングフィールド、弟子入り試験を受けに来ました！！」

――――――PM：0：00

「ふ、よく来たな　ぼーや。それでは早速始めよう。貴様のカンフーもどきで茶々丸に一撃入れられれば合格。貴様が手も足も出ずにくたばればそれまでだ。」

――ニイッ。

「……その条件でいいんですね？」

「ん？　ああ、いいぞ。」

（ハハ。エヴァ気づけよ。ネギが笑ってる意味を）

「……それよりも！　そのギャラリーは何とかならんかったのか！！」

『がんばー！』
『やったれネギ君！！』
『しっかりー！』
『ネギ先生がんばってー！！』

関係者である明日菜・カモ・刹那・木乃香・古菲だけでなく、まき絵・亜子・裕奈・アキラなど――――　一般人ズまでがギャラリーの中にいた。

「はあ……ついてきちゃって。あはは」

（ナメとんのかこのガキ！　せめて一般人は置いてこい！！）

「大丈夫？　ネギ君」
「大丈夫ですまき絵さん。練習の成果出し切ってきます！！」

「ネギ！」
（兄貴！！）
「大丈夫です、カモ君　アスナさん！！」

「落ち着いていくアル！」
「はい古老子！！」

（……フン。あの人望だけはナギ譲りか？）

「だ、大丈夫だよね？　くーふぇ」

「いや……この前見たカンジ、茶々丸はかなり強いアル。長引けば不利、最初の1分間でカウンターを決められなければネギ坊主に勝ち目はないアル」
「そんな……！」

――――ザ……。

ギャラリーから離れ、ネギが茶々丸と対峙した。

「茶々丸さん、お願いします！」

「お相手させて頂きます」

「ケケ。アノガキガドコマデヤルカ見物ダナ」
「まあ、なるようになるさ」

「――――では始めるがいい！！」

エヴァンジェリンの号令が広場に響き渡った。

第４８話　弟子入りしよう！～特訓篇～（後書き）

～解説・補足～

ひょいっ。と士郎がチャチャゼロを自分の頭に乗せる。

・泣き虫カエルさんの「魔法の世界の魔術し！」に似たような展開があるので似ないようにするのに悩みました。
　他のネギま！二次小説に影響されないように他作品は基本読まないようにしているのですが、「魔法先生ネギま！銀の風が吹く」と「魔法の世界の魔術し！」だけは読んでます。だって面白いもん。
＊２０１１／７／３１追記：現在は「魔法の世界の魔術し！」は読んでいません。

それでは次回！

第４９話　弟子入りしよう！～対決編～（前書き）

今話を書き終わってから思った。

いつからこの小説はネギをプッシュするようになったんだろうかと！！

まあこの小説は「ネギま！世界にオリジナル衛宮士郎を放りこんだらどうなるか」って考えて書いてるので本来の主人公・ネギが目立つのは当然なんですけどね。

ネギが弱いままじゃーやってられんので強くするしかないですよね。

それでは第４９話、どうぞ。

第４９話　弟子入りしよう！～対決編～

「――――――では始めるがいい！！」

「――――失礼しますネギ先生」

エヴァンジェリンの掛け声と共に、茶々丸が突進した。

――――――――バッ！

ネギが携帯用の杖を取り出す。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！　――――――――『戦いの歌（カントゥス・ベラークス）』！！！」

第４９話　弟子入りしよう！～対決編～

茶々丸の左パンチ。通常なら対応できないようなソレを、強化された左腕で逸らす。
続けて繰り出された右パンチを、体勢を変えて左腕で受け流す。
前進してくる茶々丸の動きに合わせて回転し、背中に裏拳を喰らわせる！

“――――八極拳・転身胯打！！”

――――ガシィッ！！

茶々丸の右腕に防がれた。
踏み出していた左足で飛び除き、ネギに向かい合う形に体勢を立て直していた。

「おおっ！？」
「ム、惜しい！！」

拳の応酬が始まった。一撃、二撃、三撃、四撃、五撃六撃七撃八撃……！！

――――ガッ！　ガキッガゴッ　ドカバキッ！！　ガガッ　ガキッ！

『ななな何やコレ!?』
『ポコポコ殴りあうだけだと思ってたのに、あの二人何者!?』
予想外の戦いに、一般人ズギャラリーが驚愕の声をあげた。
『あのスピード!!　やるアルよネギ坊主!!』
『（で、でもこれは……）』
『（いや心配なさそだーだぜ姐さん。あの魔力供給、京都の時とは段違いに術式が完成されてやがる!）』
『ほう、身体強化呪文を覚えてきたか。だが……』
「――――ぅぐっ!!」
茶々丸の蹴りを交差させた腕で防ぐが――――吹き飛ばされた。
『わずか2日の修行では、スピード・パワーが追いついたところで勝てんぞ?』
ネギはまだ型に沿った戦いしかできない。
ときたま古菲が舌を巻くほどのキレを見せるが、まだ応用が完全ではない。
それは時間をかけてゆっくりと鍛練しなければ身に付かない。

そのために対応が遅れ、蹴りの勢いを殺しきれなかった。
その衝撃は確実にネギにダメージとして蓄積されていく。
蓄積されている。

――――――ガクンッ！！

「ッ！？」

吹き飛ばされ――――着地し損なった。膝が崩れる。
その隙を見逃さす、茶々丸が踏み込み――――拳を叩きこむ！！

『ネギ君っ！！』

――――――ガッ！！！

「！！」

『……上手い！！』

振るわれた茶々丸の右腕を右手で逸らし、左手で彼女の手首を掴む。
彼女を――――捕らえた。
そのまま茶々丸を引きよせ、渾身の一打を叩きこむ！！！

“――――八極拳・？打頂肘！！”

「……！？」

『――――な』

茶々丸が消えた。
ネギは思考が追いつかない。そして達人の古菲が声をあげて度肝をぬかれる。
彼女は宙空に存在した。
ネギに掴まれた右手首を軸に、傍にあった街灯を蹴って宙(そら)へ跳び。
呆然としたままのネギに向けて、手首を軸にした回転と、落ちてくる重力と体重を乗せた蹴りを繰り出した――！
「がっ……！！！」
――ドガッ――ダンッ――ダダンッ――ッズシャアアアア……！！！
地面を数回跳ねながら数メートル吹き飛ばされる。
強烈な一撃を喰らい、ネギはピクリとも動かなかった。
「……ネギ君……！」
「くっ……。」
（――チッ……ナギ(あいつ)の息子がこの程度か……。まあ…鷹の子が鷹になるとは限らん）

「フン。こんなところだろう」
「ケケケ。御機嫌ナナメダナ御主人。」

「ネギっ！！」
「ネギ君！！」

明日菜とまき絵が駆けだす。

「残念だったな　ぼーや。だがそれが貴様の器だ。顔を洗って出直して――――」

「へ…へへ……ま、だです……」

「ネギ君っ！？」

「まだです……まだ僕くたばってませんよ、エヴァンジェリンさん」

震える足を抑えつけて立ち上がる。

『貴様のカンフーもどきで茶々丸に一撃入れられれば合格。
――――貴様が手も足も出ずにくたばればそれまでだ』

エヴァは「負ければ終わり」というニュアンスで言ったのだろうが――文字通りの意味でとれば「くたばらない」限り決着は着かないことになる。そして時間制限もない。

しかもエヴァは「その条件でいいのか」という確認に是と答えてしまった。
今から撤回など不可能。――――言質は既に取っている。

（……やっと気付いたか。エヴァ、お前はネギを舐め過ぎだ）

――――――――退けない理由を持つ人間は、手強いぞ？

「まさか貴様……！！」

「はい、一撃入れるまで何時間でも粘らせてもらいます！！」

「し、しかし先生……」

茶々丸が躊躇いがちに声を出す。ネギの足はガクガク震えており、先の蹴りが効いていることは明白。とても試験を続行できるとは思えなかった。

「茶々丸さん手を抜かないでください。手加減してもらってテストに受かっても意味無いんです！！」

――――ス……

構えをとり、本気の眼で茶々丸に相対した。

「……わかりました。本気で……お相手させて頂きます。」

「やあああぁぁッ！！！！！」

—◇

◇———————◇———————

「ネギ先生、まだやるつもりなん？」
「勝ち目ないよ……」
「ネ、ネ、ネギ君……！！」

『はぁっ……はぁっ…』
『ネギ先生……』

頬と瞼は腫れあがり、内出血して紫色に変色している。
口が切れて血が滴る。
息が上がり、体は震える。もはやネギはいつ倒れてもおかしくない。

「お、おい。ぼーやもういいだろ。いくら障壁で防御しても限界がある。お前のやる気はわかったから、な？」
「根性アルナーアイツ」

あまりの痛々しさにエヴァさえやめるよう勧めるが、ネギは意に介さない。

『い、いえ……まらでふ（まだです）……。』

“———ッ崩拳（ポンチュワン）！！”

当たる筈もなく、容易く反撃を喰らってしまう。

――――ドカァッ！！

「ひゃあっ！！」

「センセ、もーやめて――――っ！！」

「……もう1時間以上になる」

「な、なんであんなに頑張るの――」

「……っ！！　も、もう見てらんない！　止めてくる！！」

「だめ――――――！！　アスナ、止めちゃダメ――――――――――ッ！！！」

声が広場に響き渡る。駆けだした明日菜の腕を、声の主が掴んで制止した。

「……ま……まきちゃん……！？」

「……む？」

「オッ？」

「な、何でよ！　もうボロボロじゃない！！　あんなにケガしてまで頑張ることないよ！！」

「だ、だめだよ……だって……ネギ君頑張ってるもん。どんなことでも頑張るって言ってたもん！　今止めちゃう方がネギ君にとってヒドイと思う！！」

「う……で、でも。あんなの子供の意地っ張りだよ、誰か止めてあげなきゃ……！！」

「違うよ、ネギ君は大人だよ！　子供の意地であそこまでやれないよ！　上手く言えないけど……ネギ君には、カクゴがあると思う……」

「覚悟？」

「…うん……ネギ君には目標があって、その為に自分の全部で頑張るって決めてるんだよ。
アスナ、アスナの周りにちゃんと目標持って生きてる人いる？あやふやな夢とかじゃなくて、ちゃんとコレだって決めて生きてる人いる！？」

（な、なんて青い……これが若さか……）

「照レンナヨ御主人」

「覚悟、ねえ」

「オ、アノガキノ言イ分ニ文句デモアンノカ」

「ああ。ネギが持ってるのは決心とか決意とかで、覚悟なんて大層なものじゃないと思うな」

「まあ確かに、１０歳のガキが覚悟などそうそう持てるものではないな」

「佐々木さんはああ言ってたけど…ネギのアレは意地だと思う。ただ、子供の意地じゃない。あれは――男の意地だ」

「ケケケ、ナンダソリャ？」

「勝つまでは絶対負けない。遂げるまでは諦めない。そういう意地を、張ってようと決めたんだ。

――――背中しか見えない、その人に追いつくために」

「ネギ君は大人なんだよ。目的持って頑張ってるもん……。だから……だから今は止めちゃダメ」

「まきちゃん……」

『……まき絵さん……』

まき絵の声が聞こえなかったのはネギだけだった。それ以外の全ての者が動きを止めて聞き入っている。

明日菜も木乃香も刹那も古菲も亜子も裕奈もアキラも、

エヴァンジェリンも士郎もチャチャゼロも。

――――茶々丸も。

「――――――あ！　オイ茶々丸！！」
「え」
――――――――――ぺちんっ
ネギの拳が、茶々丸の頬を叩いた。
「なっ……」
「オオ」
頼りなく、情けない音であったものの。それは確かに、届いた「一撃」。
「あ……当たり…ま…ふぃた……」
――――――――ドサッ……
確かめるように呟いたあと、ネギは糸が切れたように崩れ落ちた。
「やったーーーーーーーーー！！！」
「ネギくーーーーーーーーーん！！」
「コラーーーっ茶々丸ーーーーーーーー！！！」
「す、すすすいませんマスター！！」
「ケケケ士郎。テメエモ青イナ」
「自覚はあるよ。でも…入ったろ？　一撃」

生徒たちがネギに駆け寄る。彼女達はネギの勝利を喜び、心から祝福した。

「ネギ君っ！！」

「……あ…まき絵……ふぁん（さ）……。あれ？　僕　てふと（テスト）は……」

「大丈夫よネギ！」

「合格だよネギ君！」

「ネギ坊主　良くやたアル！！」

「うん、スゲー見直した！！」

「ネギ君、ウチ御褒美においしーゴハン作ったげるからな――！」

「お疲れ様。ネギ君」

「ふぁい……。まき絵ふぁんも頑張ってくらはい……」

「……うん！　任せてネギ君！！」

「……す――――……す――――……」

――――そうして、少年は穏やかに目を閉じた。

◇――――――――◇――――――――

―◇

およそ7時間後。中等部専用体育館。

「次ー、5番・佐々木まき絵」
「ハイ!!」

新体操部員が集まり、大会の選抜メンバーの座を巡って演技を披露する。
顧問の二ノ宮先生の号令で、まき絵が前へ出た。

「リボンでいいんだなー？」
「はい」

（さーて…この前はキツイ事を言ったが、どう仕上げてきたか……なっ……？）

「……まき絵、お前なにかあったか？　一瞬誰かと思ったよ」

「えっ……別に何もないですよ？」

（いや、それにしては雰囲気が変わったというか……まき絵らしさは消えてないのに、どこか凛としているというか……？）

――――そう、以前よりもどこか大人びている。

「ん～…まき絵？　まさか好きな男の子でも出来たか～？」

「っ！？　何オヤジみたいなコト言ってるんですか先生！！」

「ハハハ冗談」

「も～～～～！」

「――――じゃあいくぞ。５番・佐々木まき絵、演技スタート！」

「ハイ！！」

彼女が選抜入りしたかどうかは、語るまでもない。

第４９話　弟子入りしよう！～対決編～（後書き）

～補足・解説～

：「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！　――――――『戦い（カントゥス）の歌（ベラークス）』！！」

　ホントは士郎に瞬動も仕込ませたかったんですが、そこまでやっちゃうとエヴァにバレそうなんで「戦いの歌」に留めました。

　ちなみにこの時点でネギの「戦いの歌」の持続時間は約４分です。覚えたてなので短い。魔法障壁との並行運用とかで神経（精神力）使うし。

：茶々丸の左パンチ。

　自分の語彙とかボキャブラリの無さに落ち込む。もっとウマい言い方ないだろうか。

：（……ようやく気付いたか。――――エヴァ、お前はネギを舐め過ぎだ）

：――――――退けない理由を持つ人間は、手強いぞ？

　まえがきに書いた「ネギのプッシュ」の件を感じた文章。

　コミックス１巻のネギは自分勝手で独善的で嫌いなんですが、彼の努力と成長を見てたら応援したくなってきちゃったんですよねー。

　その後のｖｓラカン戦で完全に好きなキャラになりました。

「――――僥倖だ。この勝負僕らが勝つ」

「双腕掌握（ドゥプレクシオー）！！」

かっけえええええええ！！！

：“――――――崩拳（ポンチュワン）！！”

「崩拳はただの中段突きではない」ってどっかで誰かが言ってたんですが、作者には違いがよくわかりません。

：男の意地に関しては「このくだり要らないんじゃね？」と思ったんですが、なんか消したくなかったのでそのまま投稿。

：彼女が選抜入りしたかどうかは、語るまでもない。

次話でフツーに語りますｗ

それでは次回。

第５０話　２１世紀の日本に竜なんているワケない（前書き）

刹那編ｏｒ真名編は次回以降ですね。
う～む、もしかしたら刹那&真名編として一話になるかも。
まだ書いてないのでなんともｗ

それでは第５０話、どうぞ。

＊１／８　追記
・申し訳ありません。今話の舞台である２００３年５／５（月）は祝日だったのですが、この小説では平日になっていました。
展開上修正は致しません。何卒ご容赦を。　ｂｙ佐藤Ｓ

第５０話　２１世紀の日本に竜なんているワケない

「――あたっ…！」
「やはり痛みますか？」
「あー、もっと噛みやすいモン作れば良かったな」
「ったく、ムチャし過ぎよ」
「でもこんなになるまで頑張るなんて、ネギ君て意外と熱血なんやなー♪」

時刻は日曜、弟子入りテスト直後の昼。
喫茶店アルトリアにて昼食を摂るネギ、刹那、士郎、明日菜、木乃香の姿があった。
そして……

「……ふん、負けたよぼーや。約束通り稽古はつけてやる。いつでもうちに来な」

「ケケケ、嬉シソーダナ御主人」

エヴァはカウンターの左端から2番目の彼女指定席に、茶々丸はチャチャゼロを頭に乗せて一番左に座っている。
茶々丸が申し訳なさそうに口を開いた。

「あの、ネギ先生……いくら試験とはいえ先生に……その……」

「？？」

「あのさーこのか。京都の時みたくあんたの力でパーッと治したりできないの？」

「ん――――でも、ウチあのときエヴァちゃんに言われた通りやっただけやし……。
それにウチ魔法なんてどう使ってえーかわからん」

「――――ああ木乃香。その事でお前にも話がある。ぼーやと一緒に来るといい」

「へ？」

「いやーしかし、お疲れだぜ兄貴」
「うん。これで魔法はエヴァンジェリンさんに、中国拳法はくーふぇさんに教えてもらえるし。あとは頑張るだけだよ」
（あと気になってるのは……）
『――ネギ君、実はコレなんだがね……』
――バタ――ンッ!!　カランコロ――ン!!
「ネギ君ネギくーんー!!　受かったよ――選抜テスト!!」
亜子と一緒に、まき絵が満面の笑みでやって来た。
「ってひゃあっ!!　茶々丸さん!?」
「コラコラ怖がらないの。茶々丸さんホントはすごくいい人なんだから」
「おめでとうございますまき絵さん!!」
「うん、アリガト――――!!」
「せや、今日の晩ゴハン、ネギ君の分と一緒にお祝いパーティーせえへん?」

「おお、いーじゃん　やろーよ！！」
「うん、それいい」

「……いつ来たのよ」

裕奈とアキラがテーブル席に座っていた。

「はい裕奈ちゃんにアキラちゃん」

士郎がトレイでケーキとジュースを運んできた。

「え。シロウ、二人に気づいてたの？」
「俺がお客を見逃すことなどありえない」
「……あっそ」

「それじゃあパーティー前のお茶会を始めよ――――――！！」

「おお――――――――！！」

――――ワイワイ、きゃっきゃっ

――――キャイキャイ、アハハハハ……

「……まったく煩い連中だ。帰るぞ茶々丸」
「はい、マスター」

「アルベール、今度飲モウゼ」
「オウ、またなチャチャゼロ」
「――む？」

――カランコロ――ン

「やけに騒がしいですね……あなた達でしたか。納得です」
「ネギせんせーは……あ、居ましたー……？」

「あれ？　夕映ちゃんに本屋ちゃん」

「……アスナさん。実は……ネギ先生に内密の話があるのですが」

◇――◇――◇

中等部の図書館に、ネギの驚く声が響いた。

「え――――っ！？　あの地図の中に手掛かりを見つけたんですか！？」

西の長・詠春に渡された麻帆良の地底地図。ナギが失踪する直前まで研究していたモノのようで、なにか手掛かりがあるかもしれないと貰って来たモノ。ギリシャ語の暗号で文章が書かれていて、京都から持ち帰ってから毎日解読に勤しんでいた所だった。

「凄く難しい暗号だったのに…やっぱり夕映さん頭いいじゃないですか！！

この調子で勉強も……」

「こ、この部分を見てください」

教師モードに入ったネギから逃げるようにすぐ本題に入る。

彼女が指差した箇所には――――

“――――――オ　レ　ノ　テ　ガ　カ　リ　？”

（（（手がかりだ――――――――――――――――――――！！？））））

思いっきりカタカナで書いてあった。

「あ、あれ――！？　おかしいな、日本語だから見逃しちゃったのかな！？」

「ネギ……アンタ時々すごいバカでしょ？」

「暗号じゃねーし」

地図には「オレノ　テガカリ？」の文字の隣にピースして笑っているナギの顔が描いてあり、矢印でとある方向を指していた。その先には更に地下へ続く階段がある。

「でも良かったじゃないネギ！」

「はい！　ここ　すぐ調べに行かなきゃ――――」

「ネギ先生、その前にハッキリさせておきたいのですが」

はしゃぐネギの言葉を夕映が遮った。

「こんなファンタジックな単語を大マジメに言うのは抵抗があるのですが……あの修学旅行の戦いを見せられては納得しないわけにはいきません。

――――ネギ先生、あなたは魔法使いですね？」

―◇―――――◇―――――◇―

――早朝。女子寮前。

「兄貴、ケガは大丈夫かよ？」

「うん、ヒドイのは見た目だけでそれほど大ケガじゃないよ」

明日菜が配達に出かけたのを確認して、木乃香を起こさないように

準備する。
目指すは図書館島地下、「手がかりの階段」。
何故こんな早朝に出かけるのかというと、ひとつは（一応）一般人の明日菜にいつまでも迷惑はかけていられないという考えで、もうひとつは――――……

『修学旅行の出来事を見るにこのかさんも魔法使い、彼女のお父様も魔法使い。さらに魔法使いの組織も存在するとわかりました。そして非常識だらけのこの学園の学園長はこのかさんのおじい様です。ならば学園長も魔法使い。
　ということはそもそも、この学園を作ったのも魔法使いではないのですか？』

『ううっ！？』

『そこで提案なのですがネギ先生。私達もその場所の探索に連れて行ってくれませんか？　私達は図書館島やこの学園の秘密……あなた達魔法使いのことが知りたいのです』

『だ、だめですよ！　修学旅行からも分かる通り、こっちの世界にはいろんな危険が――――』

『構いません先生！！』

『ダメですって――――――――――！！！』

夕映とのどかにバレないようにするためだ。

「流石に一般人の二人を連れていけないよ。アスナさんにいつも迷惑かけるわけにもいかないしね」

「よし、じゃあ行こうぜ兄貴！！」

「おはようございます、ネギ先生」

「「！！？」」

夕映とのどかが、ネギの後ろに立っていた。ウエストポーチに簡易装備を装着し、いろいろ準備万端のようである。

「ふふふ……こんなこともあろうかと先生に動きがあったら連絡するよう…このかさんにお願いしておきました……Ｚｚｚ．．．」

「おはよー…ございますー……ウトウト」

「ね、眠そう……」

「起きぬけだなコリャ。それでも身支度が完璧なのはさすが女子」

「……今のうちに行っちゃおうか」

「――はっ！？　待ってください先生！　図書館のことで私達図書館探検部を出し抜こうとしてもそうはいきませんよ！！　私達には手がかりを見つけたことの正当な報酬を受け取る権利があります！！」

「ううっ！！」

「……兄貴、こりゃ駄目だ。嬢ちゃん達の熱意勝ちだぜ」

「……仕方ありません……」

結局ネギが折れ、箒に跨る少年少女＋イタチが、麻帆良の空を駆けて行った。

『――――先生が飛んで行ったのは……図書館島の方向ですね……』

それを見つめる人物が、一人でそう呟いた。

―◇――――――――◇――――――――◇―

昨年度の期末テスト・魔法の本騒動の時に通った螺旋階段を、箒で飛んで下っていく。

「今度は魔法が使えるので楽ですよ」

「そ……そうですね」

京都で乗ったことがあるのどかと違い、夕映は高速で飛ぶ箒に不安があるのかネギの背中にしがみついていた。

――――――ビュオオッ！！――――――

「わわわっ！　落ちちゃいます――――――！！」
「す、すごい風です……ッ！！」
「大丈夫ですから落ち着いて！」

「っ！？　わ――――っ！　クモの巣です――――――！！」
「ひゃああっ！　ねばねば……っ！！」
「お、落ち着いてください！　暴れないでっ！！」

着地。

「探検部なんだろぉ二人ともよぉ。もちっと落ち着けや」

「ご、ごめんなさいです――――……」
「面目ありません……。」

「あはは、カモ君しょうがないよ。箒で飛ぶなんて普通ないだろうし。えーと、ここからは歩きですね」

一行の目の前には狭い回廊が続いている。
ただし、「罠がしかけてありますよー」というイヤな空気がプンプンするが。

「何があるかわかりませんから僕の手を握ってください。はい、夕映さんも」

のどかの手をとり、夕映を促す。ネギに好意を持っているのどかだけでなく、男の子と手をつなぐことを意識したのか夕映の顔も少し赤い。
それが致命的な隙となった。

――カチッ。

ネギに近づこうと一歩踏み出して――夕映がなんか踏んだ。

十数秒後。

「わ――――――――っ！！！」
「わ、私としたことがっ」

回廊を走って来る鉄球に追い回された一行だった。

『……。』

―◇―――◇―――◇―――

「わあ――――――……」
「ス、スゴイ……！！」

一行が辿りついたのは、森だった。
ビルほどの高さの大樹が無数に茂り、大地には草花や苔が生えている。
地下のはずなのに暖かい日光が差し込んで辺りを照らしている。

「一体、学園地下の何処にこんな広大な空間が……」
「ゆえっち、考えてもムダだと思うぜ」

なんせ魔法なんだから、とカモが言おうとして――

「っひゃあああああっ！！？」
「のどか！？」
「のどかさん！！」

蔓（つる）のようなものがのどかの足首に絡みつき、彼女を宙に吊るし上げた。

「兄貴マズイぜ！　こんな常識ハズレにデカイ木があるんだ、魔法植物がいてもおかしくねえ！！」
「で、でも、植物相手ならそんなに大したコトにはならないんじゃ……」
「兄貴、食虫植物って知ってるか……？」

「……。」

ネギは顔を青くして絶句する。

「魔法植物なら、食人種がいてもおかしくない……」

「せ、せんせ――――!!」

「先生、アレを!!」

のどかと夕映が叫んだ。

視線を上げると、のどかの真下に現れた植物が口を開けていた。中に蜜のような液体が溜まっているのが見える。その時、のどかのポーチからペットボトルが落ちた。

――――ボチャッ――ボジュウウウウウウ!!!!!

「「「「……。」」」」

一瞬で溶けました。

「きゃーーーーー!!　せんせーーーーーーーーーー!!!!」

「せ、せ、せ、せ、先生!!　のどかをををを!!!!」

「あ、兄貴!!　ブチかませーーーーーーー!!!!」

「――――ラス・テル・マ・スキル・マギステル!

風精召喚、「剣を執る戦友」!　迎え撃て(コントラー・ブーグネント)!!」

「――ひゃっ――――」

精霊を飛ばして蔦を裂き、のどかを奪還し――

「――――『雷の暴風（ヨウイス・テンペスターズ・フルグリエンス）』――――！！」

――――ズドォン！！

雷で植物を焼き焦がす。そして、一同の心は一つだった。

「逃げろぉ――――――――――――！！！」

撃破を確認せず、カモの号令で一斉に逃げ出した。作戦名は「いのちをだいじに」。

――◇――――――◇――――――◇――――――

森の中を彷徨い、ようやく目的の場所に辿り着く。

大樹の根に取り込まれかけているアーチと、その奥にある門。

間違いなく、手がかりに繋がる階段への入口だった。
ちなみに彼らの服装がボロボロなのはご愛嬌。
この森にはいろーんな植物がいるとだけ言っておこう。

「こ、ここに手掛かりが……！」

ネギが扉を調べ始めた。

「ゆえゆえー、ちょっとー」
「どうしたのですか？」

のどかが地図を拡げてある一点を指す。

「地図のこの場所にいるこれ、『ＤＡＮＧＥＲ（危険）』って書いてあるけどー……」
「生き物の絵、ですね。猫？　いや犬でしょうか……？」

――――べちゃっ

「ひゃっ？　ベタベター」
「何ですかコレは……？」

『――――――――Ｇｕｒｕｒｕ……』

――――ゾクッ――

背中に走る悪寒に、ネギがバッと後ろを振り向くと――――

大樹の根に跨る巨体。その質量に根が陥没している。
尾を振い、獰猛な眼球で辺りを窺い、口からは唾液が滴り鋭い牙が飛び出している。
その姿は、その生物の名は――――

「ド、ド、竜（ドラゴン）！？　二人とも、逃げて――――――！！」

「えへへへー、絵本にはこーいう出来事はあまりー……」
「腕の先が翼になっていますね。腕がない種類の竜といえばワイバーン？　ならばそれほど強くはないのでは――いや強いとか強くないとか何を言ってるですか私は。あははは」
二人は放心中（スターゲイジング）。

「えええええ！？　夕映さん、のどかさん――――――！？」

『Ｇｙａｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！！』

竜が、足を振り上げた。

「くっ！　ラス・テル・マ・スキ――――」

――ボヒュッ！！

（え！？）

――――――ズドォオンン！！！

竜の足が二人を踏み砕くことはなく。

「――――脱出しますネギ先生」

二人を抱えた茶々丸が空を飛んでいた。

「え？　あ、ハイ！！」

竜があの扉の門番だというなら簡単には通れないだろう。魔法学校を卒業したばかりの新米魔法使いに竜種は荷が重い。ネギは茶々丸の言う通り箒に跨り、撤退することにする。
ネギが箒にのどかを乗せ、茶々丸が夕映を抱えて空を滑る。

『Ｇａａａッ！！！』

「追って来ましたね」

「くっ！！」

『Ｇｒｕｒｕｒｕ．．．．Ｇｕｒｕａａａａａａａａａａッ

ッ！！！』

「ひゃあああああっ！　何か吹いたですーーーーーー！！」

「きゃ――――――！！　火ーーーーーーー！？」

（くっ、二人を守りながらじゃあ……！！）

『ッ！？　Ｇｉａａａａａａッ！！！』

「えっ？」

いきなり竜が――――何かに怯えたように動きを止めた。

「どうなってんのか知らねーがチャンスだ！　兄貴、今のうちに！！」

「う、うん！」

とりあえず今回の地底探索は中止。４人は急いで地上に向かった。

◇――――――――◇――――――――◇

ネギ達が去っていった森に佇む、大樹の枝にいる人影。

枝の上に立つ野太刀を持った少女と、西洋剣を手に腰掛ける青年。
――あの時。

『Ｇａａａａッ！！！』

「追って来ましたね」
「くっ！！」

「ひゃあああああっ！　何か吹いたですーーーーーー！！」
「きゃーーーーー！！　火ーーーーーーー！？」

（くっ、二人を守りながらじゃあ……！！）

『――――――そこらへんにしとけよ？　トカゲ』

『ッ！？　Ｇｉａａａａａａッ！！！』

身体に突き刺さる死の気配に、竜はその場で震えることしかできなかった。

「……行きましたか」
「ああ。まったく世話の焼ける奴らだよ」

そう毒づくも口の端が上がっている。その様子を見て刹那は構えた夕凪から手を放した。
士郎は右手で弄っていた剣の投影を破棄する。
その剣は「太陽剣グラム」。北欧神話の英雄シグルズが父親から受け継いだ魔剣。
その身に内包する概念――――能力は「竜殺し」。先程の竜が怯えたのは当然のことだった。

「じゃ、帰るか」
「はい」
「よし、付き合ってくれたお礼に帰りはサービスしてあげよう」
「え？　ひゃっ！？　し、士郎さんっ！？」

刹那を抱えて士郎も地上へ踵を返した。モチロンお姫様だっこである。
最初は騒いでいた刹那だったが、途中からとても大人しくなったという。

―◇―――――――◇―――――――◇―

地上。

「ありがとうございました茶々丸さん。でもどうして助けてくれたんですか？」

茶々丸は基本的に命令通りにしか動かない。主であるエヴァや姉のチャチャゼロ、家族同然の士郎に関しては自分から彼女たちのために行動するが、ネギを助ける理由はないはずだ。とネギは考える。

「それは……あの、何でしょう、私……」

「??　でも、あの竜を何とか出来なきゃ先には進めないみたいだね」

「今の兄貴には無理だな。何てったって竜だもんな。ま・結局修行しろってこったな」

「あ、あのー　せんせー……ゆえが――……」

「はい？」

「フ……フフ……ちょっとデカイだけのトカゲが、私の顔に大量のヨダレを……！！」

「あ、あのー、夕映さん？」

「ネギ先生！！　またあそこへ行くです！！　いつかあのトカゲにギャフンと言わせるですよ！！」

「え、ハ、ハイ！！」

「いつか必ずリベンジするです――――――――――――！！」

「おお――――っ！！」

「お、お～～～～」

こうして父親の手がかりにお預けを喰らい、日々修行に打ち込む日々が始まる。

ちなみに今日は月曜日。
刹那は士郎のおかげで、４人はギリギリで遅刻を回避した。
ただしネギは新田先生に「教師が遅刻しかけるとは何事か」と説教を喰らったという。

第５０話　２１世紀の日本に竜なんているワケない（後書き）

～補足・解説～

：蔓（つる）のようなものがのどかの足首に絡みつき、彼女を宙に吊るし上げた。
　気がついたらオリジナル展開になっていた。
絵がついたら間違いなくのどかのパンチラが描かれるだろう場面ですね。

：二人は放心中（スターゲイジング）。
　「ふたりは●リキュア！」みたいな語呂で表現したかった。ただそれだけ。
ちなみにスターゲイジングは〝ｓｔａｒｇａｚｉｎｇ〟。訳は「放心状態」。

：枝の上に立つ野太刀を持った少女と、西洋剣を手に腰掛ける青年。
　巨木の枝にグラムを持った士郎が腰かけ、その傍で夕凪に手をかける刹那。
カッコよくないですか！？　今話一番のお気に入りシーン。

さて、次回の更新の目処はまっっったく立ってないです。
次話の投稿はいつになるだろうか・・・・。

それでは次回！！

第５１話　喧嘩するほど仲がいい（前書き）

ヤベーよ年末休みの課題やってねーよ超ヤベーよ。

現実逃避してる間に話が出来ちゃったよ。

作りが粗いけどこれ以上のクオリティは今の作者の状態では無理です。

それでは５１話、どうぞ。

第５１話　喧嘩するほど仲がいい

「シロウ、これから土日使っていんちょの別荘行くんやけど、一緒に行かへん？」

「これから！？　いきなりだなオイ。悪いな、日曜日に予定が入ってて無理なんだ」

「そうなん？　残念やなー……。ネギ君とアスナの仲直りにも協力してほしかったんやけど……」

「……あいつら、まだ仲直りしてないのか？　もう３日も前の事だろ？」

「アスナが意地張ってもーて……」

火曜日の放課後。エヴァンジェリン邸の庭地。

ネギの従者４人が横一列に並び、その後ろにネギが控える。

その様子を眺めているのは古菲と夕映と茶々丸、そしてネギの師匠・エヴァ。

「よし、では始めろ。刹那、〝気〟は抑えておけ。相応の修練がなければ気と魔力は相反するだけだ」

「はいエヴァンジェリンさん。」

「――――いきます！　契約執行１８０秒間!!
ネギの従者『近衛木乃香』『宮崎のどか』『神楽坂明日菜』『桜咲刹那』!!」

「――ひゃっ！　うひゃひゃひゃ、こそば――」

「あう……」

「慣れないのよね、コレ」

「そうですか？　私はそれほど……」

「く……!!」

大量の魔力消費にネギから苦悶の声が漏れる。

「次！　対物（アンチ・マテリアル）・魔法障壁（シールド）を全方位全力展開!!」

「ハイ!」

「次！　対魔（アンチ）・魔法障壁（マジック・シールド）全力展開！！」
「ハイ！！」

「それを3分持ち堪えた後　北の空に『魔法の射手』１９９本！！
結界張ってあるから全力でいけ！！」

「ハイ！！　光の精霊１９９柱、集い来たりて敵を射て。魔法の射手・光の１９９矢！！」

――――――バキキキキキンン！！！

光の矢は結界にぶつかって消え、魔力の残光が降り注ぐ。

「おお――――」
「これが魔法……ですか」
「キレ――――……」
「花火みたいやなー」

「――――ぜえっ、はあっ――――――――あううー――――？」

――――――ドサッ

「せんせー！？」
「ネギくーーん！！」
「……フン。」

不機嫌そうにエヴァンジェリンが鼻を鳴らした。

「――――何だ今のチャチな矢は！！　この程度の結界貫いてみせろ！！　この程度で気絶とは話にもならん。いくら奴譲りの魔力があ

ったとしても、使いこなせなければ宝の持ち腐れだ！！」

ネギは唸りながら木乃香の膝枕で横になっている。

「よーよーエヴァンジェリンさんよう。今アンタがやらせたコトは修学旅行の戦い以上の魔力消費だぜ。並みの術者だったらこれで充分――――」

「黙れ下等生物が。並みの術者程度でこの私が満足できるか。……煮て食うぞ？」

――――ガクガクブルブルッ！！

「コエー……！！」

「はいはい大丈夫。怖かったわね」

反論空しく敗北。

「エヴァ、ちょっと待て」

いい機会だと庭の草むしりをしていた士郎が話を遮る。

（おおっ、旦那！　頼む、俺っちの仇を……！）

「オコジョは準絶滅危惧種だから食べちゃあいけないんだぞ？」

「反論するとこソコかよっ！！？」

カモの叫びは黙殺された。

ていうかカモミールはオコジョじゃなくてオコジョ妖精。

「う――――～～ん……」

「やっと起きたかぼーや。丁度いい士郎、お前も『魔法の射手』を撃て。全力でな」
「うえ！？　なんでだよ？」
「ぼーやの勉強のためだよ。ほら早くやれ！！　手は抜くなよ！！」
（ああ、面倒なことに……うっ！？）

（シロウの魔法見るん初めてやわー♪）
（師父の魔法……どんなのが飛び出すアルか！？）
（興味あります）

期待の眼差しに士郎は怯んだ。

（や、やりづらい……ええい、ままよ！！）
「カラダ・ハ・ツルギ・デ・デキテイル。『魔法の射手・光の９９９矢』！！！」

――――――――バ　ギィン！！！！！

◇――――――――――◇――――――――――――◇

「馬鹿かお前は！！　あの結界は認識阻害も兼ねていたんだぞ！？
壊すヤツがあるか！！」

士郎は地面にうつ伏せに倒れ、ご丁寧に靴を脱いだエヴァに頭を足

蹴にされている。
こう、ぐりぐり、と。

「姐さん、アイツさっき『貫いてみせろ』とか言ってたよな……」
「うん、言ってた……」
「弱っているエヴァンジェリンさんの結界では耐えられないでしょうね……」

「しかも――あれほど手を抜くなと言ったのに手加減したな!?」
「いや、全力は出した……」
「全力ではあっても本気ではなかったろう!!」

「……スゲー、アレで本気じゃねーのかよ。」

「ああ、その通りだオコジョ。ぼーやに魔力量で遥かに劣る士郎が、本気も出さずに同じ呪文でぼーや以上の威力を出せる。後で詳しく教えるが、これが『魔力を使いこなす』ということだ。」

「成程。魔力を使いこなすだけでかなりの強化が望めるな。」

「何を言っている。私を師と呼び教えを乞う以上、そんな生半可な修行で済むと思うな。
――――いいかぼーや。今後私の前ではどんな口応えも泣き言も許さん。少しでも弱音を吐けば貴様の生き血、最後の一滴まで飲み干してやる。心しておけよ?」

「ハイ!!　よろしくお願いしますエヴァンジェリンさん!!」

「む……?」

脅したつもりだったのに威勢のいい返事が返ってきて、思わずたじろぐ。

「わ、私のことは師匠（マスター）と呼べ」

「ハイ、マスター！！」

（――――チッ、やりにくいガキだ……）

「あの、マスター。ドラゴンを倒せるようになるにはどれ位修行すればいいですか？」

「何？……もう一回言ってみろ」

「ですからドラゴンを「アホかーーーーーーー！！！」へぷぁっ！！！」

右ストレートが顔面ヒット。

「２１世紀の日本でドラゴンと戦うことなどあるかーーーーー！！んなコト言ってるヒマがあったら呪文の１つでも覚えとけ！！」

「ははははいぃぃ！！！」

『何、何の話？』

『えーと、信じてもらえるかわかりませんが昨日……』

「ああメンドイ。今日はこれで解散！！」

「メ、メンドイって……」

「弟子、返事は！？」

「ハ、ハイ！！」

「えー、というわけで、皆さんわざわざありがとうございました。」
「なんのなんの。」
「で、では失礼します――……」
「――――――アレ？　どうしたんですかアスナさん」
ネギからそっぽ向いて、明日菜さんはわかりやすーく拗ねている。
「……聞いたわよ。私に内緒で昨日　図書館島に行ったでしょ」
「えっ!?　あっ、いや、えーとそれは……!!」
「木乃香、お前とぼーやにはまだ詳しい話がある。夕食はウチで食べていけ」
「??　うん、わかったえー。せっちゃんも一緒でええ?」
「ああ構わん。」
「それじゃあ夕食の準備をしなきゃな。えーと冷蔵庫に何があったかなー?」
「……ブラウニーかアイツは」
「――――――かっ、関係ないって今更なによその言い方!!　ネギ坊主――――!!!」

「わわわアスナさん!?　いえ僕は無関係な一般人のアスナさんに危険がないようにって」
「無関係ってこの……!!　私が時間無い中わざわざ刹那さんに剣道習ってるのなんでだと思ってるのよ――――!!」
「えええ!?　そんなの別に頼んでないです!　なに怒ってるんですか!?」

「……何だアレは」
「ケンカのようで」

「何でって……これだからガキは!!　あんたが私のことそんな風に思ってたなんて知らなかったわ　ガキ!!　チビ!!」
「アスナさんの方こそ大人気ないです!!　怒りんぼ!!　おサル!!」

「あ、あの……」
「久しぶりやなーあの二人」

「この――――――来たれ(アデアット)――――」
「はうっ!?――――――『風盾(デフレクシオー)』――――」

「アホーーーーーーーーーーーッッ!!!!!」

――――スパアァァァ――――――――――ン!!

当然、障壁に意味はなく。ネギは弧を描いて数メートル吹き飛んでいった。

「――――あっ……ごめ……。っし、知らないわよ!!　馬鹿っ

！！！」

この場に居ることに耐えられなくなって、明日菜は逃げだした。

「あうう――？」

「先生、大丈夫ですか？」

「アスナー！！」

「……ったく、何やってんだバカどもが。とりあえずウチに入れ」

こうして、数日間に渡るネギと明日菜のケンカが始まることになる。

◇――――――――――◇――――――――――◇

食後。

「ぼーや（おまえたち）と木乃香の魔力容量は強大だ。これは云わば才能だ、ラッキーだったと思え。ただしそのままではデカイだけの魔力タンクだ。使いこなすためには『精神力の強化』と『術の効率化』が必要になる。どちらも要トレーニングだな。」

「ううう……アスナさん怒らせちゃった、どうしよう……」

「元気出してーなネギ君」

「人の話を聞けーーーーー！！　お前らに聞かせてやってるんだぞ

！？」

真面目に話を聞いているのはカモと刹那だけである。

「魔力量で劣っていても、旦那は術式の扱い方や精神力で兄貴に勝ってたってことか」

「ああ、あのバカはデタラメな精神力でアホみたいに無駄を削ぎ落とした魔法術式を使用するからな。」

「さ、散々な言われようですね……」

褒めてるのか貶してるのかわからない言いようである。
それもエヴァンジェリンと士郎の間に信頼があるからこそなのだが。

「さてぼーや。修行に際してお前には戦い方を選択して……」

「ううう～～～」

「ええいいつまでもウジウジと！！　いい加減にせんとくびるぞガキが！！」

「は、はいぃ……。」

ネギは相当に参っている。赴任当初はともかく、最近はケンカなどなく一番信頼していた明日菜と仲違いしてしまって、どうしたらいいかわからなくなっている。
だが、それを見て楽しむ者がここにひとり。

「クッ。貴様らの仲違いは私にはいい気味だよ。お前と明日菜のコ

ンビには辛酸を舐めさせられてるからな？」
「そ、そんなぁ……」

「話を続けるぞ。お前には戦いのスタイルを選択してもらう。」

『魔法使い』
・前衛をほぼ完全に従者に任せ、自らは後方から強力な呪文を使う。
オーソドックスで安定したスタイル。

『魔法剣士（拳士）』
・魔力を付与した肉体で従者と共に前に出て戦い、威力より速さを重視した魔法も
使う。変幻自在のスタイル。

「魔法使いと魔法剣士……」

「一応言っておくが、修行のためのとりあえずの分類だ。私やあの白髪の少年のように、強くなってくればこの分け方はあまり関係なくなってくる。ま・小利口なお前は『魔法使い』タイプだと思うがな。」

「……あの、」
「そして――――ナギ（やっ）のスタイルは『魔法剣士』。それも従者を必要としないほどに、な」

「……。」

「ふっ、聞いてくると思ったよ。よく考えるといい。
さて――――木乃香、詠春から頼まれていてな。『真実を知っ

てしまった以上、本人が望むなら魔法について色々と教えてほしい』とのことだ。」

「え、父様が……？」

「ああ。お前のその才能（ちから）は人の役に立つ。偉大な魔法使い（マギステル・マギ）になることも可能だろう。」

「……むむ……」

「お嬢様……」

「ゆっくり考えろ。お前の人生に関わる問題だからな。あとそのカードの説明をしておこう。また魔法に巻き込まれんとも限らんからな。茶々丸！」

「はい、マスター。アーティファクトアーカイブスのデータベースにアクセスしたところ、検索ＨＩＴしました。

木乃香さん。あなたのアーティファクトは『東風ノ檜扇（フラーベルム・エウリー）』・『南風ノ末廣（フラーベルム・アウストラーレ）』という名の二つの扇。

『東風ノ檜扇（コチノヒオウギ）』は傷ついてから3分以内のケガを完全に治癒し

『南風ノ末廣（ハエノスエヒロ）』は発症して３０分以内の状態異常を完全治癒します。

また、デフォルトで『公家の狩衣』が衣装登録（ドレス）されています。」

「あーかい……？　でほると……？　どれすー？」

「……そこは大した部分じゃない、わからないなら忘れろ。大事なのは『3分以内に負った傷の完全治癒』『３０分以内に発症した呪いなどを完全解呪』できるということだ。兄に似てお前も中々デタラメだな。」

「えへへ、エヴァちゃんありがとー」

「アーティファクトの呼び出し方は簡単だから刹那に聞け。ああ疲れた。もう帰っていいぞ。」

そう言ってエヴァは1階へ降りていった。

―◇―――――◇―――――

土曜日の朝。

「うう……。アスナさん、もう3日も口きいてくれない……」

（兄貴、相当参ってんなぁ……）

あの後。直接会って謝ろうと明日菜を召喚しようとしたのだが、その時明日菜はシャワーを浴びており。久しぶりにエヴァに会いに来たタカミチが召喚の場に居合わせ。

明日菜はネギの所為で、愛しの高畑先生に裸を見られてしまったのだ。

両者の溝はさらに深まった。

「はあ～～……。どうしよう」

（やっと父親の手がかりを見つけたと思ったら、やたらデケエ門番がいやがるし。
『魔法使い』か『魔法剣士』。今後を左右する重大な選択もしなくちゃならねぇ。
そしてここにきて姐さんとの仲違いか……姐さんは従者に絶対欲しいよなー）

――――ブロロロロロ……キィッ！　バタンッ！！

「おはようございますネギ先生！」
「いいんちょさん！」

自家用車から現れたのはネギＬＯＶＥのショタコン委員長・雪広あやか。

「ここ数日元気がないようですが……」
「え、えーと……実は、アスナさんとケンカしちゃって……」
「え？」

（まあ珍しい。いつもあんなに仲の良い先生とアスナさんがケンカだなんて。）

「なんで怒ったのかもわからないまま、また失敗して怒らせちゃって……」

（……その「ケンカ」、思ったより重症のようですわね……。）

「……仕方ありませんわね。本当はネギ先生と『ふたりっきりパラダイス計画』のつもりでしたが……」

「？？」

「先生、少々お待ちを。――ピッ。もしもし朝倉さん？　ハルナさんにも連絡を回してクラスの方々を集めてくださる？　これから雪広グループの南国リゾートに招待いたしますわ！！」

「え？　いいんちょさん！？」

――ブツッ。

「ネギ先生。私が先生とアスナさんの仲直り、お手伝いさせて頂きます！！」

ネギの手を握って、委員長は力強く宣言した。

第５１話　喧嘩するほど仲がいい（後書き）

～補足・解説～

「オコジョは準絶滅危惧種だから食べちゃあいけないんだぞ？」

・正確には準絶滅危惧種なのは日本に生息する亜種で、イギリス出身のカモは食べても大丈夫・・・なのか？　タヌキと間違えて食べられたオコジョもいるというので味はマズくないと思われる。

『東風ノ檜扇（コチノヒオウギ）』は傷ついてから３分以内のケガを完全に治癒し

・ただし「完全治癒」は１日１回しか使用できない。「完全治癒」使用後もある程度の治療は行える。３分を過ぎてもある程度は回復できる。

けっこう制限多いけど強力ですよね。

アーティファクトアーカイブスのデータベース

・「まほネット」とはリンクが繋がってないのでカモのＰＣからは接続できない。ただ、麻帆良祭動乱編で千雨のアーティファクトの使い方を調べられたあたり、夕映の「世界図絵」なら接続できるっぽい？

まあこのデータベースはオリ設定なので、今はそこまで考えなくてもいいか。

次話ではリゾートでの仲直りの描写は書きません。逃げました。
ごめんなさい。

では次話はどうなるのか！？

それでは次回！！

第５２話　真名編　似ている気がしたんだ（前書き）

今回は真名編です。

出来に自信は無いとです。

それでは第５２話、どうぞ。

第５２話　真名編　似ている気がしたんだ

それはネギ一行が麻帆良地下で竜と遭遇した日に遡る。

学園都市５時間目。麻帆良女子中等部、３－Ａ教室での会話がきっかけ。

――――ウトウト……

「――――刹那。」

「はっ……ああ龍宮。なんだ？」

「いや、お前がここまで気を抜いているのは珍しくてな。何かあったのか？

ネギ先生が視線を送っていた綾瀬と宮崎も居眠りしていたな」

「ああ、それは――――――」

真名は所属するバイアスロン部の集会を終えて、放課後の学園都市を一人で歩く。

『――――アナタはいくらで私を雇う？』

『……金とるのかよ』

『当然だ。私は仕事でしか動かない。』

『ああそうかい。面倒だ、事が終わってから考える。なんなら言い値で買うぞ？』

『おや、太っ腹だね？　了解した、引き受けよう。さっさと行きな士郎さん。私の戦場に男は不要だよ。』

『へいへい、報酬さえ貰えりゃ用済みかよ。……俺は戦場でも真名と一緒に居たいけどなー。』

『……どういう意味だい？』

『？？　まんまの意味だよ。じゃーな二人とも。ここは任せた』

『任せるアルよ師父！！』

京都で為された会話。記憶に新しい出来事だ。

「戦場でも一緒に居たい」。

曲解、又は拡大解釈すれば「いつも一緒に居たい」ともとれる。

「まるでプロポーズみたいだな」と考えて苦笑した。

いかん、今日は刹那をからかった所為か思考の方向がおかしいな。

『成程。士郎さんに抱っこされたのがあまりに気持ち良くて、それを思い出して眠くなったと』
『ッ！？　なななな！！　誰もそんなことは言っていない！！　た、確かに思いのほか居心地が良くてつい腕の中で眠ってしまったが、ずっとこうしていて欲しいなどとは思っていない！！』
『……ごちそうさま』
『っ！？』

その時、少しだけ。少しだけ空しくなったのは――気の所為だろう。

真名はその足をアルトリアへ向けた。

「あ――――――……落ち着くなぁ」
「ブレイクタイムってやつだぜ……」

ミルクティーを飲んでテーブルにぐったりと突っ伏しているのは子供先生、ネギ・スプリングフィールド。
そのテーブルで紫煙を吐いているのは彼に仕えるオコジョ妖精、アルベール・カモミール。

「ウチは夕食（ディナー）時間以外は禁煙なんだが」
そしてカモを注意するのが店主の衛宮士郎。

「固てえコト言うなよ旦那～。あと１０分。」
「……はぁ、バレないようにな？基本　学生しか来ない店で煙草の煙とか不自然だろ」
今は彼ら以外いないからいいようなものだ。
といっても今は教職員のネギが帰宅できる時間帯。学生がこの時間に店に来ることは早々ない。
「どうする？　晩メシ食ってくか？」
「いえ、このかさんの晩ゴハンが待ってるので～」
「ほほう？　まるで新婚夫婦みたいだなあ？」
「旦那、その剣を仕舞え！！」
「シ、シロウ怖い……」
基本的に放任主義だが、少々シスコンの気がある士郎だった。
――――カランコローン
「――――やあ士郎さん。報酬を貰いに来たよ」
――◇――――――――◇――――――――
要求された金額に目を見張る。

「……たかだか２０体の鬼を撃破したにしては随分ぼったくるな？」

「おや？　あの場では数が問題だったのではなく時間が欲しかったんだろう？　数を査定に入れるのは間違いだ。それにアナタが残してくれた鬼共は中級や上級の厄介なヤツばかり。そもそも「言い値で雇う」と言ったのはアナタだよ。私としては正当な報酬だと思うのだけどね？」

ぐうの音も出なかった。言い値で～などと言ったのがそもそもの間違い。

いや、払えないわけではないのだが、こちとら店を営む身。無駄遣いは御免被りたい。

「カモ君、そろそろ帰ろうか……」

場の妙な空気に耐えかねて二人は店を出ることにする。

「……ケーキ２つと紅茶２つで、お会計は１３８０円になります……」

（旦那、ご愁傷様だぜ……）

――――カランコローン

「また明日、ネギ先生。」

真名は顔だけ向けて笑ってネギを見送った。

（わー……キレイだな――……。龍宮さんって美人……）

顔を僅かに赤くして帰ったネギに、士郎の心で咆哮が響いた。

（ネギ騙されるな!!　ここにいるのはお前の思ってるような娘じゃない!!）

「なにか失礼なコトを考えてないかい？」

「イヤ、ナニモ？」

恐るべきは女の勘。

そして士郎は顎に手をあてて「ん〜〜〜〜〜……」と唸り始めた。

だから真名の表情に気づかなかった。そして彼女は意を決して話を切り出す。

「確かに報酬は貰いたいところだが……いつも世話になっている店の店主ということもある。少し妥協してあげても――」

「その案でお願いします」

即答だった。そしてそれが罠だった。

「それじゃあ今度の日曜日、1日私に付き合ってもらうおうか」

「――は？」

◇――――――◇――――――

―◇

日曜日、世界樹広場に佇む俺。

世界樹広場は麻帆良でも有数のデートスポットであり、俺と同じように相手を待つ男女が大勢いる。

しかし困った。どうしてこうなった。この衛宮士郎にデートの経験などない。

アーチャーの記憶を見ると彼は女の子と出かける程度のことは経験したようだが――――刺激の強い１８禁の記憶は即シャットダウンした――――俺にはそれすらない。

女の子と逢い引きしたことはあるが、取り留めのない会話で楽しんだだけだ。

その経験は今回まったく役に立ちそうにない。

むう。どうしたものか……

「――――おまたせ。」

悩みは一瞬で思考の外へ吹っ飛んだ。

目の前には。銃火器など全く似合いそうのない可憐な美女が俺に微笑んでいた。

「それじゃあ行こうか、士郎さん」

そう言って俺の左腕に自分の腕を絡めてくる。

「なっ。ちょっ、オイ!!　いきなりなんだ!?」

「ん？　男女がデートするんだ、別におかしくないだろう？　『今日1日私に付き合う』約束なんだから文句は言わせないよ」

ぐっ……しかし色々とマズイのだ。

真名の髪からはいい香りがしてくるし、密着している体はとても柔らかい。

そして何より……その……ムネが、当たっているんだが……

そんなことはお構い無しとばかりに、真名は俺を引っ張って進んでいく。

俺は顔を真っ赤になるのを感じながら、彼女と共に広場を出た。

―◇―――◇―――◇―

本当に、この男はなんなんだ。

ちょっと悪戯してやろうと思って腕を組んだが、最初こそ顔を真っ赤にして可愛気があったものの、途中から腹を決めたのかまったく気にしなくなった。いつも通りの自然体だ。

面白くない。

しかし形だけの恋人ごっことはいえ……

広い背中、がっしりとした肩、筋肉質な引き締まった身体。

服の上から見るのでは判らない彼の体に触れて、

この悪戯を楽しんでいることに気づいた。

本当に、この娘はなんなんだ。
あんな目玉が飛び出るような報酬金額をふっかけてきたと思えば、今度は「1日付き合え」とは。
前者と後者の価値がどう見ても釣り合わない。
さらに腕を組んできやがった。コイツ俺が女性経験皆無って分かってやってやがる。
ウィンドウショッピングしたり適当な店に入って食事したり、龍宮行きつけの店に行ったり。
銃火器や刀剣類を扱うなんてアブナイ店がどうして麻帆良（ここ）にあるのか。疑問だ。
つまり……何か用事があるのかと思いきや、ただ街中をブラブラするだけだったのだ。
これでは本当にデートになってしまうではないか。

もうひとつ気になる事がある。
真名が所属する麻帆良大学のバイアスロン部を見学したのだが、その部長が俺に妙な視線を送って来たのだ。
一体何だったんだろうな。

―◇―――――◇―――――

「いいんちょー、もう帰るのぉ～!?」
「もうちょっと居ようよー」
「何を言ってるんですのアナタ達は！　土日丸々遊び尽くす気ですか？　宿題はやったのですか!?」
「うう～。でもでも、せっかくの南国リゾートなのに……」

「いいから行きますわよ！！　いつまでもそうおっしゃるなら置いて行きますわよ！？」
「あはは皆さん、名残り惜しいですけどいいんちょさんの言う通りですよ。そろそろ帰りましょう」
「ああネギ先生、ありがとうございます……！！」
「もうちょっとネギ君と遊んでたかったナー」
とある一行を乗せた飛行機が麻帆良に向けて飛び立った。

◇――――――――――◇――――――――――◇

１３時半頃、再び世界樹広場に戻って来た二人。
どうやらこの辺りでお開きらしい。

下手すれば夜まで付き合わされるのではないかと思っていた士郎はほっと胸を撫で下ろしたが、
逆に不審に思う。昼に解散など早過ぎる。そもそも何のために自分を誘ったのだろうか。

広場の階段を昇った高台から街を眺める。
真名は両手を柵にかけ、士郎は組んだ両腕を柵に乗せる。
どちらともなく無言になり、侵し難い空気が満ちる。
それの元は彼女、真名が纏う雰囲気によるものだ。

「――――誰かに似ていると、思ったんだ。」

彼女から切り出した。誰が、とは聞かなかった。

会ったことなどない筈なのに、既視感のようなモノを感じた。

優し過ぎて、関わりない他人が傷つくことに耐えられない。
救うために、約束された平穏を捨てて自らを死地に置く。
救うためなら自分の命を容易く秤にかけて、いつも周りを心配させる。
そんな男(ひと)を知っている。

――――――似ている気がした。

隣にいる人物は、彼ほど異常ではないようだが。

分というものを知っている。
自分の力量では助けられない人がいる事を受け入れている。
それをどれほど嘆いたところで。
救う力もない人間が、救えないことを嘆くなど傲慢であると知っている。

だから。救う力が無い己を呪っている。自分に価値などないと思っている。

『だいぶ矯正してやったつもりなんだが、まだまだだな。馬鹿は死んでも治らないというが……まっ、気長にやるさ』

エヴァンジェリンの言葉を思い出す。
「彼」とそっくりな彼がエヴァンジェリンの従者になった理由。
それだけがわからない。

――――――――でも。

今は亡き想い人と似た少年。私は彼の闇を知っている。

彼は友人（クラスメート）の想い人。

友人の前で彼を弄って楽しんでいただけだったのに。

いつのまにか、私は――――――

――――――～～～♪～～～♪～～～♪♪～

真名の携帯電話が鳴った。

――――――ピッ

「ああ朝倉。――――――あと２０分だな？　わかった、ありがとう」

『何でそんなこと聞いたのか知んないケド龍宮、あたしの情報料は高いよ？　実はアンタの隠れファンからブロマイド欲しいって言われて――――』

――――――ブツッ。

（優秀なんだが、あのパパラッチな性分は何とかならないものか……）

「あれ、朝倉って雪広さんの別荘に行ってるんじゃないのか？」

「正確には雪広グループの南国リゾートを貸し切っているんだけどね。

――さて、仕上げだ。行くよ士郎さん。今日の目的を果たしにね。」

「なんだ、まだ行く所があったのか」

「クスッ。安心しなよ、これが最後だ。ああ、あと――ひとつだけお願いがあるんだけど」

◇――――――――――◇――――――――――◇

「はぁ～、憂鬱だわ。遊んだツケをこれから払わなきゃいけないのね」

「本当におサルさんですわね。これからやれば夕食までには終わるでしょうに」

「アスナは勉強ニガテやからな～」

雪広グループの送迎車の中。

南国リゾートで過ごした３－Ａ生徒がそれらに乗って寮へ帰る。

そのうちの１台にはネギ・あやか・明日菜、木乃香と刹那が乗っていた。

「お嬢様、到着しました」

「あら、もうですの？　もう少しネギ先生と一緒にいたかったんですけれど……」

「いいんちょさん、また明日学校で会えますよ」

「そうですね！　それではまたお会いしましょう先生！！」

寮の前に停まった数台の車から生徒達がぞろぞろと出てくる。

「あ――疲れた――」

「でも楽しかったね――！」

「また行きたいですー」

「アスナさん！！　もうネギ先生とケンカなどしてはいけませんわよ！！」

「うっ。わ、わかってるわよぉ。」

そうして一同は解散した。

「楽しかったなーせっちゃん♪」

「ハイ、とても。海で遊ぶというのは初めてでしたが楽しかったです。」

「――やあ、帰ってたのか皆。」

「あ、龍宮さんと……シロウ？」

ネギの声でその場にいた人間の目が一斉に動く。

彼女達の目の前には。

嬉しそうな笑顔で士郎とくっついて歩いてきた真名、だった。

「真名、流石に知り合いの前でこんなことするのは恥ずかしいんだが」

「いいじゃないか、デートっていうのはこういうものだ」

『デ、デート！？』

『たつみーがッ！？』

『く……え、絵になってる……！！　何よ、龍宮どこであんなイケメン引っかけてきたのよ！？』

『あ、アレがこのかのお兄さんだよ』
『あれがウワサのっ！！』

寮に入ったと思っていた３－Ａメンバーが何故か戻ってきていた。
そして「ウワサの」ってどんな噂だ。

（ア、アカンッ！！）

木乃香が隣を見ると――――――――

「え……？」

そう漏らして、刹那が呆然と立っていた。

（シロウのあほ――――――――――――っ！！！！）

そんな木乃香の心の叫びに士郎が気づく筈もなく、場の妙な空気に首を傾げる。

「じゃあね士郎さん。今日は楽しかったよ」
「ああ。俺も結構楽しめたよ。偶にはいいな、こういうのも。
――――――またな、真名」

この「またな」というのは「また会おう」という意味なのだが、デート直後では
「またデートしよう」という意味で受け取る方が自然だ。
しかもそれを笑顔で言うものだから、至近距離でそれを喰らった真名は勿論、３－Ａの面々も顔を朱に染めあげた。

――――――刹那以外は。

士郎と別れて、真名は寮に入ろうと歩を進める。

「安心しろ、お前が思っているような関係じゃない。
それでも悔しかったら――――お前もデートに誘ってみたらどうだ？」

「――――――なっ、ななっ……！！　たっ、龍宮っ！！！」

すれ違う際に耳元でそう言われ、刹那は顔を真っ赤にして反論しようとしたが――――
真名はさっさと寮に入ってしまった。

『な、なに今の！！』
『これはもしや……禁断の三角関係！？』
『フフフ……臭うよ！！　これは「ラヴ臭」に相違ないッ！！！』

その様子を冷静に眺める人間が一人。
（やるねー、龍宮……。この為にアタシらが何時頃に帰るか聞いてきたワケだ）
そう見当がついた「麻帆良のパパラッチ」朝倉和美だった。

その後。言いようのないモヤモヤを胸に抱えた刹那と
「士郎ブッ血ＫＩＬＬ！！」な明日菜、「後でお仕置きせな？」という木乃香がその場に残された。

もう少し。もう少しだけ。この曖昧な関係を楽しもうと、真名は思った。

後日、士郎はワケもわからず明日菜と（真名とデートした事を知った）エヴァにボコられ、木乃香に治療され、またボコられるという無限ループを体験したといふ。

第５２話　真名編　似ている気がしたんだ（後書き）

～補足・解説～

「……ケーキ２つと紅茶２つで、お会計は１３８０円になります……」

・ショートケーキ￥３９０　紅茶￥３００円なんですけど、実際の相場ってどれくらいなんですか？
　誰か教えてください。

銃火器など全く似合いそうのない可憐な美女が俺に微笑んでいた。
・ファッションに詳しくないので服装の描写は出来ません。ちくしょう。

バイアスロン部を見学したのだが

・どうやって練習しているのだろう。工学部が人工雪でも作っているんだろうか？

部長が俺に妙な視線を送って来たのだ。

・本人達（士郎と真名）の知らないところで生まれた三角関係ｗ

いつのまにか、私は――――――

・真名は士郎のことが好きなんでしょうか。作者も決めかねております。

そもそも何のために自分を誘ったのだろうか。

「安心しろ、お前が思っているような関係じゃない。
それでも悔しかったら――お前もデートに誘ってみたらどうだ？」

（やるねー、龍宮……。この為にアタシらが何時頃に帰るか聞いてきたワケだ）

・今回の真名の行動は、実は「半日かけた悪戯」なんです。
要するに士郎とデートしたという既成事実を作り、それを刹那に見せつけ、彼女を弄り、からかいつつ、焚き付けようという魂胆です。
しかし刹那編の構想が全っ然出てこないのが問題だ。ヘルマン伯爵編の後かな、刹那編は。

ひとつだけお願いがあるんだけど

・お願いは「名前で呼んでくれないかな？」です。今まで「龍宮」って呼んでた士郎が終盤で「真名」って呼んでるのはこのため。
刹那の前で親密さをアピールするためです。

「士郎ブッ血ＫＩＬＬ！！」な明日菜、「後でお仕置きせな？」という木乃香

・二人は刹那を応援しているので。

それでは次回。ああ～、小論文書かなきゃ・・・・。

おまけ。

「く……くく……がっ、はぁっ！！」

そこは砂塵が舞う戦場。広がる荒野に積み重なる無数の屍。
血の海の中で苦悶の表情を浮かべる男と、彼を見下ろす青年。
それだけが、そこで生ける者だった。

「く……ははっ……。まさか……こんな所で『四音階の組鈴』に会うとは……な」

「……随分と有名になったんだな」

「ああ……有名だとも。優秀な日本人のリーダーと『魔弾の射手』……率いる、紛争に介入するＮＧＯ団体『四音階の組鈴』。……オレみてえな…ヤツらにとっちゃ、アンタらは……はっ……有名人だぜ」

「……その銃を捨てろ。降伏すれば陣地に運んで治療してやれる」

瀕死になっても男は銃を手放さず、それを青年に向ける。青年も男に銃を向ける。

「はっ、馬鹿言え。敵の…情けなんか……いるかい」

「俺は敵じゃない！　この紛争を収めたいだけだ！！　先に仕掛けたのはそちらの国だろう。アナタ達が矛を収めてくれれば――――」

「判ったような口きくんじゃねえ！！　何も知らないくせに出しゃばるな若造！！――――ぐっ……がはぁっ！！」

「！！　頼む……武器を捨てて降伏してくれ！！　じゃなきゃ…治療できない……！！」

「はっ……ざけんな……。てめえらが肩入れした国が……俺達に経済封鎖なんてしなきゃあこんな……ことにはならなかったんだ……。こうする以外になかったんだよ！！先に仕掛けたのは……てめえらの方だろうが！！」

「……！！」

「……は……『四音階の組鈴』のリーダーは甘ちゃんだ……ってウワサぁ本当だったんだな……。そんな……顔してんじゃねえよ」

「……ッ」

「……てめえソックリだぜ…あの死神、に……。いいぜ、人生の先輩として……そいつの言葉、くれてやる……」

「……？」

「『そう、数は限られている。幸福という椅子は、常に全体の数より少な目でしか用意されない。その場にいる全員を救うことなど出来ないから、結局は誰かが犠牲になる。
だから――――僕が殺す。いずれ零れ落ちる誰かを僕が切り捨てる。速やかに殺し、効率的に殺し、それ以外の多くの人間を救ってみせる。そのためなら僕は――――死神にだってなってみせる』」

「――――――――!?」

「俺達の伝説……「マーダー・メイガス」の言葉……だ…。人を救いたいなら……精々、あの人のようにならねえように気を……つけ……な……」

１０数年前、誰よりも戦場で人を殺した男・「魔術師殺し（マーダー・メイガス）」。
誰よりも冷徹だった男は、誰よりも優しく、誰よりも人間の幸福を愛した。
だからこそ伝説。
兵士たちは彼を目指し、彼に敬意を払い、彼のようにはなるなと心に刻む。
人間を愛したゆえに、人間を殺した男。

掲げられていた腕は落ち、銃が男の手から落ちる。
戦士の命の灯は消えた。

「……コウキ」

褐色肌に黒髪の少女が、青年の後ろから声をかける。
青年は息絶えた男の前に立ったまま、動かなかった。

「……どうして」

曇天の空を睨む。

「――――どうしてみんなが、幸せになれないんだ……！！」

雨が降る。それは砂塵と、大地に染みる血を洗い流していく。

コウキと呼ばれた青年の顔にも、雨が降っていた。

「――――――――ああ、夢か……」

向かいのベッドにはルームメイトが眠っている。

随分と昔の夢を見てしまった。それも、今日の予定の所為なのだろうか。

すやすやと眠る友人。修学旅行を終えてから、随分と表情が柔らかくなった。

「もう少し積極的にならないと、お前の想い人、貰ってしまうぞ？」

「……ん……？」

おお、反応した。どれだけ好きなんだお前。

さてと。奥手な友人を焚き付けるために、行こうか。

彼女は小悪魔な笑みを浮かべて、準備にとりかかった。

―07話　設定5　世界観設定

＊注意！
この話はＰＣ表記ありきの書き方をしている箇所がありますので、携帯電話からの閲覧ではわけのわからない文章がある可能性があります。ぜひＰＣから閲覧してください。

　この小説での「ネギま！」世界の在り方としては、Ｆａｔｅにおける「並行（平行）世界」の概念で考えています。並行世界とは『ある時の選択でＡではなくＢを選んでいたら、世界は別の道筋を歩む。そういった、数限りなく存在する可能性の数だけ分岐した世界・パラレルワールドのこと』。

世界Ａ
世界Ｂ
世界Ｃ
・・・・・
世界？

→このように世界は隣り合っているワケですが、その離れ具合＝距離が離れているほど、その差異は大きくなります。世界Ａと世界Ｂを比較した時よりも、世界Ａと世界Ｃを比べた時の方が世界の違いは大きくなるというわけです。

通常　少し離れているからといって世界に大した違いはありませんが、それがもう有り得ないくらい離れていたら、それはもはや並行世界ではなく「異世界」になるのでは？と考えました。

その考え方が「ネギま！―剣製の凱歌―」におけるＦａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔとネギま！の世界の関係です。

「もはや異世界と呼べるほどに差異が大きくなった並行世界」。

そういう位置づけなのです。

え？　それはもう並行世界じゃないだろ？　それは言わないで。

で、「なんでネギま！世界出身の士郎が無限の剣製を使えるの？」という質問が以前　感想に寄せられたのですが……。

過去編において臨死体験した士郎が「何故か」”英霊の座”に迷いこんだことが原因。

この「何故か」は非常にご都合主義なのですが、説明させていただきます。

過去編における士郎はあくまで「死にかけた＝瀕死状態だった」だけで、死んで「根源」に行ったとかそういうことではありません。

そもそもネギま！世界にはガイア論、アラヤ識など「世界」というシステムがないので当然ですね。では何故、根源の中に在る（↑この言い方は語弊がありますが）英霊の座に士郎の魂が迷いこんだの

か？　答えは「引っ張られた」からです。

死にかけて肉体という器、枷からの束縛がゆるくなった士郎の魂は、元を同じとするアーチャー＝エミヤシロウの魂に引っ張られてしまった、というのが作者の理屈です。

ふふ、ご都合主義でしょう。自覚はあります。

姉の衛宮イリヤスフィールについてもご都合主義です。

もともと「イリヤスフィール」という存在は「根源」と繋がる「聖杯という存在」なので、死して魂がＦａｔｅ世界に引っ張られ、そこで偶然”英霊の座”に引っかかったという設定です。

以上がこの小説における世界観と世界の位置づけ、士郎が無限の剣製を使える理由、衛宮イリヤスフィールが英霊の座に居た理由に関する話です。

ああ、こんな面倒なこと考えてたんだなぁ、去年の7月の俺は。

あと、士郎以外のＦａｔｅ世界の住人もネギま!世界に存在している設定です。

冬木市もあります。麻帆良から電車で乗り継いで行けます。

でも凛が書けない（作者の力量不足ゆえ）から彼らは登場させません。

ただ士郎は作中で現在１９歳なのですが、凛たちは高校3年生、桜は高校2年生です。

士郎の方が年上になってます。

彼女たちは魔法学校に通っていないのか？　などの細かい設定は考えていません。
登場させる気がないので。

ちょっと気力というか精神エネルギーが不足していて次話が書けなかったので
コレを投稿させていただきました。
いつ復活できるかわかりませんが、ぜひ次話をお楽しみに。

それでは次回。

ー07話　設定5　世界観設定（後書き）

いや、本当に書く気・・・というか書く気力が湧いてこないというか。

しばらく更新しないかもしれません。

ああ、書きたいんだけどなあ。

特に刀子さん書きたい。何故か無性に。

でもやる気が出ない。

ご迷惑おかけします。ｂｙ佐藤Ｓ

第５３話　非日常編　Ｃａｌｍ　ｄａｙｓ　ｂｒｅａｋｅｒ.　［不穏が迫る］

一週間ぶりに更新。難産だった。でもでけた。（↑仕様。誤字ではない）

日常編でありながら日常編に非ず。故にこれ、非日常編なり。

カッコつけたけど全然カッコよくないｗ

Ｃａｌｍ　ｄａｙｓ　ｂｒｅａｋｅｒ.――穏やかな日々を壊す者。

訪れる災禍の正体は・・・・！？　まああの悪魔伯爵さんですが。

ではでは。第５３話、どうぞ。

……何だね君は？

「へっ、んな事どーでもええやろ。それよりアンタ、人間とちゃうな？　しかもカタギやない、雰囲気で判るで。そんなヤツらが……「ネギ」に何の用や？」

――聞いていたのかね、感心しないな。それにそういう君もただの人間ではないようだが？

「しつこいでオッサン。敵に自分の事べらべら話すヤツがおるかい！　言っとくけどな、ネギは俺のライバルや。手ェ出す気ならタダじゃおかんで！！」

ケケケ、ツンデレってヤツカ？
ただのバトルマニアじゃないデスカ？
……生意気。

「ッ！？」

日本屈指の封魔結界を持つ麻帆良に侵入するんだ、彼女達のウォームアップに丁度いいじゃないか？　ヴィルヘルム。

こんな少年を嬲るなど、君は相変わらず趣味が悪いな。まあ才能ある少年なら別だがね。

（……はっ、どんだけ不利やねん……。……でも）

「――――やったろうやないか！！」

――プルルルル……ピッ。

「もしもし？　ワシじゃが。おおムコ殿か。……何じゃと？　脱走！？」

第５３話　非日常編　Ｃａｌｍ　ｄａｙｓ　ｂｒｅａｋｅｒ.

［不穏が迫る］

「ただいま～～」

「おかえり～、ネギ君？」
「おかえりー……。？　ちょっ、ネギ大丈夫？　フラフラじゃない。」

「ネギ君　ここんとこエヴァちゃんとこから帰って来るとエライやつれてるなー。」

「ま、まあハードな修行だからな」

「でもいくらハードだからって、エヴァちゃんトコ行ってから2、3時間くらいしか経ってないのよ。あんなにフラフラになるもん？」

「いや　ほら……その、ハードだからな」

「怪しいわねー、なんか隠してないでしょうねー？」

「このかさん、ボクもー寝まふ……」
「わかったえ、おやすみネギ君？」

（……ちょっと頑張り過ぎなんじゃない……？）

――翌日。

――――フラフラ～～

――――コソコソ……

おぼつかない足取りで帰宅しようとするネギを尾行する人物が。

「……たった2、3時間であんなにやつれて帰って来るなんて絶対おかしいわよ。何やってるか絶対突き止めてやる」

「成程、エヴァンジェリンさんとの修行ですか」

「わ！？」

「それであんなにやつれてたんだ。」

「朝練でもフラフラだったから気になってたアルよ」

いつのまにか背後にのどか・夕映・朝倉・古菲が集まっていた。

「な、何よアンタたち。」

「お、エヴァと落ち合ったアルよ。」

昇降口で合流した二人はそのままエヴァ宅へ向かっている。

「アスナー、ウチらも行くー」

「ぎゃ」

木乃香も刹那を連れてやってきた。

「……また増えた。こんな大人数じゃ尾行になんないじゃない……。」

校門を越える前に7人という大所帯に。

しかし続行。

街中で親子連れに「ママー、アレなにー？」「見ちゃいけませんっ」と言われたのはいい思い出……なワケはなく、一同は苦笑いしながら二人を尾行けていった。

◇――――――――――――◇――――――――――――――――◇

さっきまでエヴァンジェリン邸の地下でジオラマ球を見ていたはずなのに。

明日菜は真っ白な塔の上に立っていて、それは細い橋でもう一つの塔と繋がっている。

二つの塔はどちらも円柱の形をしていて、平らな最上部には建造物が建っている。

もう一つの塔は内部にも部屋がありそうだ。

塔の下には透き通った青い海が広がっている。

水平線の向こうには雲が広がり、辺りにはヤシの木が植えられている。

そして南国のように暑い。

どう見てもエヴァの家ではなく、麻帆良でも日本ですらもない。

「な……。ど、どどどど何処なのよここはーーーーーーーーっ！！？」

・・・・

・・・

「ここは私が造った『別荘』だ。しばらく使ってなかったんだが、ぼーやの修行のために掘り出した」

正確には士郎に掘り出させたモノである。

「日本の昔話に『浦島太郎』ってのがあったろ。ここはそれの逆だ。」

『別荘』での1日＝24時間は『別荘の外』の1時間にしか相当しない。

「精神と●の部屋」と並んで現代人が欲しがる垂涎モノのアイテムである。

「……てことはネギ君、1日　先生の仕事した後、もう1日ここで修行してたってコト？」

「教職の合間にちまちま修行してもラチがあかないからな」

「てコトはネギ坊主、1日が2日アルか！？」

「大変過ぎやーーーーっ！」

「ネギ、アンタまたそんな無理して……」

「大丈夫ですよアスナさん。それにまた修学旅行みたいなことがあったら困りますし、強くなるためにこんなことでへこたれてなんていられませんよ！！」

「……。」

本人が無理をしていないと言うなら強くは出れない。
しかし本当に問題なのは――ネギに無理をしている自覚がないということ、なのだが……

・・・・・・・

時は流れて夜。
エヴァンジェリンの別荘は入室してから最低２４時間経過しないと外に出られない仕組みになっている。当然彼女たちは別荘で一夜を過ごすこととなり、みな即席のベッドで眠りについている。これでも外では数十分しか経っていないというから驚きだ。

――モゾモゾ……

「ん……トイレ」

（てゆうか広過ぎるのよ……。トイレどこー？）

明日菜が別荘を徘徊していると――

――ダンッ！！

「うひゃっ！？」

突然聞こえてきた音と体に響く振動に、ビクッと声をあげて反応する。

『――――――馬歩頂肘…開弓勢……左右分掌…招肚双掌……』

『面白れー動きだよなぁ、中国拳法』

「……もー。あいつまた……」

月下の広場で、ネギが型の反復練習をしていた。

「――――ラス・テル・マ・スキル・マギステル。
来たれ虚空の雷（ケノテートスアストラプサトー）。薙ぎ払え！（デ・テメトー）『雷の斧（ディオス・テュコス）』！！」

的の空き缶に見事命中。カモが歓声をあげているのを見ると、簡単なことではないらしい。

「さっすが天才少年は違うわね。」

「え？　アスナさん！」

「でもねー」

――――がしっ

ネギの体に腕を回して締め上げる。

「一言言わせてもらうと、頑張り過ぎて体壊しちゃ何もなんないのよ～～～？」

――――――ぎちぎちぎちぎち……

「うぐぐぐ……いえ、その……今日は皆さんと遊んじゃったので、その分を……。ア、アスナさん！　ギブギブ！！」
「だ・か・ら！　遊んで休むのも修行のうちなのよっ！！　アンタは頑張り過ぎなの！！」
「うぐ…ぐ……ぐぇへ……」
「姐さん！！　マジで、マジで兄貴　限界だから！！」

二人（＋カモ）は塔最上部の端から海を眺める。

「にしても不思議よね。あんだけ騒いで食っちゃ寝したのに外ではまだ……何分？」
「２０分です」
「それくらいしか経ってないなんてね――――」
「アハハ、そうですねー」
「これこそ魔法の力だな。」

「アスナさんは寝ないんですか？」
「あんたが寝たら戻るわよ。放っておいたらまた修行しそうだし」
「……はは……」

大きな月が世界を照らし、さざ波の音色が耳を撫でる。

「……アスナさん。ちょっとお話いいですか？」

「……何？」

「話しておいた方がいいと思うんです。パートナーのアスナさんには」

――――――私、心配なのよアンタのことが。

――――――いつも無茶ばっかりして……いつか私の知らないところで大ケガしたり……死んじゃうんじゃないかって……

――――――無関係なんて言わないで、ちゃんと見てよ。

――――――ネギの従者（パートナー）として私を見て。守らせてよ。あんた（あんた）のこと。

「6年前、僕がサウザンドマスター（父さん）と会った時、何があったのかを。」

――◇――――――◇――――――◇――

やれやれ、してやられたようだよ。

……ヴィルヘルム、またヘマをしたんじゃないだろうね。

はっはっは。いや、さっきあの少年がこちらに吹き飛ばされた時に掠め取られたようだよ。もしかすると全て計算ずくだったのかもしれないな。

掠め取られた？　まさかあの小瓶を！？　き、君ってヤツは……！！

ふむ、なかなか才気溢れる少年だったな。ネギ君の知り合いのようだし、放っておいても麻帆良で会えるかもしれないが……。君の言う通りあの”瓶”はとても重要だ。すぐにでも回収しなければ。

――あめ子。

了解シマシタ。あの犬のコトちゃちゃっと調べちゃいマスー。

さて。少々予定は狂ったが――侵入を開始しよう。

―◇―――――◇―――――◇―

「お手洗いどこかなー、ここ……。」

（――――？？）

のどかの視線の先には、膝立ちになって顔を近づけるネギと明日菜が居た。

（な、何してるんだろー……）
（ふむ、アレは意識シンクロの魔法だな）
（うひゃいぃっ！？　エ、エヴァンジェリンひゃんっ！？）

（ケケ。）
（お前アレ持ってたろ、『ｉｄの絵日記』。ちょっと貸せ、ぼーやの心をウォッチする）
（ええ～～～～！？　ダ、ダメですよそんなの……！！）

（どうやらぼーやの昔話のようだぞ、聞きたくないのか？　好きな男の過去を知っておくことは何かと有利だと思うがな。
　あのぼーやの姉貴面をした神楽坂明日菜だけに聞かれては色々と先を越されてしまうかもしれんぞ？　いいのかホラ？　どうする宮崎のどか。）

（……ちょ、ちょ……ちょっとだけなら――……）

明らかに正気を失った目をしたのどかが『いどのえにっき』をエヴァに手渡した。
エヴァは満足したように笑ってそれを受け取る。

（よし、いい子だ。）
（ガキハ堕トシ易イナ。ケケケ）

「――で、両手を合わせておでこをぴったりくっつけます。」
「ちょっと、こんなのであんたの記憶を体験できるの？」
「はい。この方が口で話すよりも簡単ですから。……いいですか？」

「う、うん。いいわよ。」

明日菜は自分の頬が赤くなるのを感じた。

（って、何これくらいで動揺してるのよ私！）

「では。ムーサ達の母ムネーモシュネーよ。おのがもとへと我らを誘え」

――――――Ｓｉｘ　ｙｅａｒｓ　ａｇｏ，　ｓｎｏｗｙ　ｎｉｇｈｔ．

雪の夜は語られる。

第53話　非日常編　Ｃａｌｍ　ｄａｙｓ　ｂｒｅａｋｅｒ.　[不穏が迫る]

～補足・解説～

日本屈指の封魔結界を持つ麻帆良に侵入するんだ、彼女達のウォームアップに丁度いいじゃないか？　ヴィルヘルム。

・まさかの（？）オリキャラ。作中で自己紹介させるのでしばらくお待ちを。

「ここは私が造った『別荘』だ。しばらく使ってなかったんだが、ぼーやの修行のために掘り出した」

正確には士郎に掘り出させたモノである。

・士郎の実力を見るため2年前に使用して以来、埃をかぶっていました。

今話から非日常編が開始しますが、内容やテンポの理由で1話ごとの量が若干少なめになります。ご了承ください。

それでは次回！

第５４話　非日常編　Ｎｅｇｉｕｓ　ｔｅｎｅｂｒｉｓ．　［６年前、雪の夜］

１／１４　２４：２０～　ＴＶ番組「ありえへん世界」の「ありえへん夫婦」特集に赤松健先生が夫婦で出演。見た。
チャンネル変えたら偶然発見できたのですぐ眼鏡を着装しました。
奥さんええ人や。これぞ日本人的な「尽くす」奥さんやで。
・・・いや、あれは「尽くす」、なのか・・・？

Ｎｅｇｉｕｓ　ｔｅｎｅｂｒｉｓ．――ラテン語で”ネギの闇”。
その記憶は魂に刻まれる。

第５４話、どうぞ。つってもまんま原作トレースですけど。（↑オイ）

『――――そうね……あなたのお父さんはね、スーパーマンみたいな人だったのよ』

『スーパーマン？』

『そう？　誰かがピンチになったらどこからともなく現れて、必ず助けてくれるのよ』

『へ――……。カッコイイ……！　ネカネお姉ちゃんも助けてもらったことあるの？』

『フフフ。それはヒ・ミ・ツ・よ？』

『――――じゃが奴は死んだ。小さいお前を残してな……。まったく馬鹿な奴じゃい』

『もう、スタンさんたらそんな言い方……』

『……「死んだ」って……？』

『……。』

“――――もう……会えないってことよ……。”

第５４話　非日常編　Ｎｅｇｉｕｓ　ｔｅｎｅｂｒｉｓ．

［6年前、雪の夜］

『ちょっと！　何で私ハダカなのよっ！？』

どこかの山奥の村の中に、明日菜は裸で立っていた。

―ス、スミマセン。でもそーいう仕様なので―

『誰かに見られたらどーすんのよっ！　それに雪降ってるし！！』

―あ、そこは僕の記憶の中なので誰かに見られるとかはありません。
それに寒くはないハズですけど―

『そーいう問題じゃなくてっ』

「お父さんは来てくれるもん！！」

「あなたバカね、『死んだ』のイミわかってないでしょう！」

スタンという老人と別れた後、ネギは赤い髪の少女と言いあっていた。

『なに？　あのおしゃまな娘は』

―幼馴染みのアーニャです。１歳年上の―

「はいコレあげるわ、初心者用の練習杖。アナタも来年　学校に来るんでしょう。生きてた頃のお父さんみたくなりたかったら少しは練習しておきなさい。」

ネギはアーニャから星の飾りがついた杖を受け取った。

どうやら、エヴァンジェリンとの戦いで砕けた杖のようだった。

「じゃーね　ネギ」

「元気にしてるのよ。」

「うん、お姉ちゃん」

『あれ？　お姉ちゃん行っちゃうの？』

―はい。ウェールズの学生だったのでたまの休みにしか会えなかったんです―

ネカネとアーニャが乗ったバスが見えなくなるまで、幼いネギは見送っていた。

「プラクテ・ビギ・ナル。火よ灯れ（アールデスカット）！　えいっ」

杖をぶんぶん振りまわして呪文を唱える。

「いまなんか出たかもー」

ログハウスのような家の中には暖炉と机・椅子とベッドなど、簡素で最低限の物しかない。
そこで一人、ネギは魔法の練習をしている。

『（おじさんの離れを借りてほとんど一人暮らし状態か。こんな広い家に一人で……。お姉ちゃんと一緒に幸せに暮らしてたんじゃなかったのか……）』

熱心に練習していると思ったら、いきなり絵を描き始めた。
この辺りの行動はやはりお子様である。

「ふふ～ん♪　ピンチになったら現れる～♪　どこからともなく現れる～♪」

ネギが描いたのは、杖を手にマントをなびかせた赤い髪の人物。
雑な字で『１０００ＭＡＳＴＥＲ』と書いてある。

『ぷっ。本当にお父さんが好きなのね』

「ネ……ネギが溺れたって本当ですかお父さま！！」

「ああネカネ、大丈夫だ。４０度の熱を出してブッ倒れてるがね」

『本当にアイツに似た悪ガキじゃわい』

『フツーの子供なら死んどるぞい』
『まったく、最近のコイツはとんだイタズラ小僧で……』
『まあ元気があるのはいいことだ』

村の古株魔法使いがベッドの傍でそんな会話をしている。
最近のネギは木から飛び降りたり、猛犬を逃がして追いかけられたりと、危ない目に遭ってばかりだった。

『（冬の湖に飛び込むなんて……何考えてんのよこのバカは）』

明日菜はその一部始終を見ていた。
ここが記憶の世界で、自分が干渉できないことを明日菜は歯痒く思った。

「ネギ、どうしてこんなこと……」

「……だってピンチになったら……お父さんが来てくれるかも……って思って……」

「……！！」

下がったとはいえまだ熱で辛いはずだというのに、ネギは笑ってそんなことを言う。
彼は自分の行動を後悔していない。この状況をまったく苦に思っていない。
それどころか「次はどんな風にピンチになろうか」と思案すらしている。

『（……ネギ……！！）』

「バカ……ネギ……。もうこんなことしないで……お願い……」

ネカネは、ベッドで横になったネギに縋りつくように泣き出してしまった。

ネギに父親の話をしてしまったことに罪悪感を感じているのかもしれない。

しかし、ネギがここまで無茶をするなど誰が予想できただろうか。

「……ごめんなさいお姉ちゃん……もうしないから…泣かないで……。ごめんなさい……」

自分の軽率な行動の所為で姉を泣かせてしまったことに気づく。

父親に会うことしか頭になかったネギは、ここでようやく後悔した。

ネカネが泣きやんだ後も、ネギは申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

父親に会うためのネギの無茶は、ここでひとまず鳴りを潜めることになる。

その様子を、明日菜は静かに眺めていた。

『――――あら、雪……。』

積っていた雪は溶け、春の兆しを見せ始めた村に久しぶりの雪が降る。
明日菜は宙に浮いてそれを眺める。ここではそんなこともできるようだ。

『もう春も近いのに雪かー。そう考えると随分記憶に付き合っちゃったわね。
あ、お姉ちゃん。』

明日菜が空から見下ろす先には、バスから降りて村へ向かうネカネの姿が。

「1ヶ月ぶりね。ネギは元気にしてるかしら。――あら？」

（何かしらアレ……。）

ネカネが見たのは、遠い空を飛ぶ黒い影。
その影は、少しずつ、少しずつ大きくなっているように見えた。

――――――チャプ……。

「ピンチになったら現れる～♪　どこからともなく現れる～♪」

いつか溺れた湖で釣りをするネギ。
ここに積っていた雪もすっかり溶けて、青い雑草が茂っている。

「あ、そうだ。今日はネカネお姉ちゃんが帰って来る日だった、もう帰らなくちゃ」

コートを着て魔法使いの帽子を被り、手にはアーニャから貰った杖を握って走る。

いかにも「小さな魔法使い」といった格好で、その可愛らしさに明日菜は頬を緩めた。

『ふふ、カワイイもんね。ガキもこれだけ小さいと。』

村へ向かって丘を登る。風が吹いてネギの帽子を攫っていく。

その足を、唐突に止めた。

『え？　どうしたのよネギ――――――』

――――――――――――――赤い。

紅い、朱い、緋い、赫い――――――――炎。

大炎は辺りを照らし、家を焼き、空を焦がす。

ネギの帽子を攫ったのは風ではなく、村から吹き荒れる熱風。

炎が村を灼いていた。

『え……ちょっ、ちょっと！！　火事！？　どーなってんの、何で村が燃えてんのよ――――――！！！』

「お姉ちゃ――ん！！　おじさ――――ん！！」

『あっネギ！！　危ないわよ！！』

肉親を捜して、炎が猛る村を走る。焼けていない物などなく、村はもはや地獄のよう。
そしてネギが見つけたのは――――

「……おじさん……？」

ただの石像だけだった。

『（ちょっ……これって修学旅行の時と同じ……！？）』

「――――うっ……、僕が……。」

ネギの口から言葉が零れた。

「僕が『ピンチになったら』って思ったから……？　ピンチになったらお父さんが来てくれるって思ったから……。」

『え……？』

「――――――――僕があんなコト思ったから――――！！！」

『なっ…何言ってんのよ馬鹿！！　そんなことあるわけないでしょバカネギ！！』

これは既に起きた事実を再生しているだけに過ぎず、明日菜の声は届かない。
5歳にもならない少年の小さな慟哭は、辺りが燃える音に?き消された。

それでも――――奴等に居場所を知らせるには充分だった。

――――――ドシャッ！

――――――ズズ……。

『ちょっ……何よコレ……！！』

結論から言うならばそれは――――悪魔だった。
液体のような体を持つ者。ぬいぐるみのような風貌の者。西洋人形のような者。
不自然に長い手足を持つ者。翼を持つ者。角を持つ者。
１０体や２０体どころではない。明日菜が修学旅行の出来事を想起するほどの数。
もはや軍勢と言って差し支えない悪魔達がネギを取り囲む。

『ど……どどどどーなってんのよネギ！！　ちっちゃいネギがやられちゃうわよ！？』

外のネギに向けて思わず叫ぶが、返事は帰ってこない。

『ちょ、ちょっとぉ……！！』

軍勢の内の１体、筋骨隆々の悪魔がネギに向かって一歩踏み出す。

「お父さん……。　お父さん……！！」

ネギはうわ言のように同じ言葉を繰り返す。悪魔は拳を振りかぶり――――――

『ネギ――――――――――――！！！！』

――――――――大地が、砕けた。

”――――――――ピンチになったら現れる～♪”

悪魔の拳を受けとめた衝撃で、彼の足元の地面が砕けた。

”――――――――どこからともなく現れる～♪”

骨が軋む音が聞こえる。ただし軋んでいるのは彼の腕ではなく、悪魔の腕の方だった。

ローブを纏い、身の丈ほどの杖を持つ赤い髪の魔法使いが、ネギを守った。

『ま……まさかこの人……！？』

――――――バチィッ！！

《ッ！！》

彼の掌から無詠唱の雷（サギタ・マギカ）の二矢が放たれた。雷撃は体を麻痺させ、悪魔の自由を数瞬奪う。

「――――――来たれ（κενοτητος）虚空（σστοπαατω）の雷。薙（δε）ぎ払（τεμετω）え」

“――――――――――――『雷（ΔΙΟΣ）の斧（ΤΥΚΟΣ）』！！”

『詠唱が短く、攻撃の出が速いが威力は高くない』。それが『雷の斧』。彼はその『中級の呪文』で――――――悪魔を一撃で真っ二つにした。

『ス、スゴイ……！』

敗れた悪魔はそれだけでは済まず、雷に身を焼かれながら還っていった。

仲間がやられたと見るや悪魔の１体が手を掲げ、それを合図に魔法使いを倒そうと一斉に軍勢が迫る。

『あっ、危な――――――！？』

彼は圧倒的だった。

拳を振るえば十の悪魔が苦しみ悶え、蹴りを放てば百の悪魔が吹き飛んでゆく。

「雷（cum fulgur tempestas austrina）を纏いて吹き荒べ南洋の嵐」

――――そして彼が魔法を使えば

「――――――『雷の暴風（JOISPEEMINSGURIENS）』！！」

千の悪魔が蒸発した。

拳を振り抜くようにして放たれたそれは、もはや雷ではなかった。

竜巻を纏った魔法はまるで極太のレーザービーム。

悪魔の軍勢を一瞬で殲滅したソレは山を砕き地形を変え、爆発を引き起こした。

『――――――きゃあああああっ！！？』

・・・・・・・

閃光が収まると、眼に映ったのは　悪魔の首を片手で締め上げる魔法使いの姿。

《……ソウカ、貴様アノ……。フフ…コノ力（チカラ）……ドチラガ化ケ物カ分カランナ……？》

「……。」

――――ゴキッ……！！

びくっ！！

何故だろうか。ネギを助けたところを見ると敵ではないらしい。しかし。

無言で悪魔の首を折ったその姿に、幼いネギも明日菜も、うすら寒いモノを感じた。

『な……なんか……。？　ネギ？　あっ、ちょっと！！』

魔法使いに怯えたネギは思わずその場から離れてしまう。

『危ないわよネギ！！　まだアイツらの残りがたくさんいるハズ……！！』

言ったそばから――ネギの前に、口を開けて何かを放とうとしている悪魔が現れた。

しかしその攻撃も、ネギには届かなかった。

『え……』

掌を前方に突き出し、スタン翁とネカネ・スプリングフィールドがネギを庇って「何か」をレジストした。

「お姉ちゃん……？」

「う……」

ネカネの足が石化し――砕けてその場に倒れ込んだ。

「お姉ちゃん！！」

「――――六芒の星と五芒の星よ、悪しき霊に封印を。『封魔の瓶（ラゲーナ・シグナートーリア）』！！」

スタンは体を石化されながらも周囲の悪魔数体を丸ごと小瓶に封印した。

「……無事かぼーず」

「おじいちゃん……。」

――――――バキパキッ……

「むぐっ……！！」

「スタンおじいちゃん！！」

スタン翁は助からない。彼の体は既に胸の下まで石と化している。

「逃げるんじゃぼーず、お姉ちゃんを連れてな……。ワシャもう助からん。この石化は強力じゃ、治す方法は……ない。

頼む……逃げとくれ。どんなことがあってもお前だけは守る。

それが……死んだあの馬鹿へのワシの誓いなんじゃ。」

（まったく……あの馬鹿には随分と苦労させられたわい……。奴のしでかしたことの後始末が何度あったことか。奴がいなければこの村ももちっと平和じゃったものを……。）

彼の目に、涙を湛えてこちらを見る子供が映る。

おじいちゃん、おじいちゃんとしきりに呼んでいる。

（この子の前では父親（ナギ）の悪口しか言うておらんというのに……。

この子はワシを、心配してくれるのか）

彼が「馬鹿」と呼ぶ男の息子。顔は生き写しだが、性格は正反対。
そんなネギを見てスタン翁は、ナギの息子ということは関係なしに「無事に助かってほしい」と思った。

「……誰か残った治癒術者を探せ…石化を止めねばお姉ちゃんも危ないぞい。
さあぼーず、この老いぼれは置いて……早く……」

（――――――早く……）

――――ピシッ……。

村が見渡せる丘の上。

「すまない……。来るのが遅過ぎた……」

魔法使いがそう呟いた。

この場に逃げおおせた村の住人はネギとネカネのみ。
赤髪の魔法使いが悪魔を全て倒したが、二人以外は助けられなかった。

「……？」

ネギが――――眠るネカネを背にして、杖を手にして立ちあがる。
まるで、目の前の魔法使いから姉を守るように。
赤い髪の魔法使いと、赤い髪の少年が対峙する。
「――そうか……お前が、ネギか……」
そう言って彼はネギに近づいてくる。
ネギの足は恐怖で震え、立っているのがやっとだった。でも退くわけにはいかない。
怖くて恐くてしょうがなくて目を瞑る。それでも逃げるわけにはいかない。
「お姉ちゃんを……守っているつもりか？」
魔法使いが――――ネギの頭を撫でた。
「大きくなったな。」
（――え……？）
「お、そうだ。お前に…この杖をやろう。俺の……形見だ」
「――――お……父さん……？」
「……もう時間がない。ネカネの石化は止めておいた。後でゆっくり治してもらえ。
――悪りぃな。お前には何もしてやれなくて……。」

「……お父さん？　お父さん！！」

「こんなこと言えた義理じゃねえが……元気に育て！　幸せにな！！」

「お父さ――――あうっ！！」

去ろうとする父親を追いかけるが躓いて転んでしまう。顔を上げると――――

彼の姿はどこにもなかった。

「おとう……さ……。……お父さぁーーーーーん！！！！！」

燃え散る村を背に、雪の降る丘で泣き続ける。

「雪の日の真実」。これが、ネギの闇が産声をあげた夜だった。

第５４話　非日常編　Ｎｅｇｉｕｓ　ｔｅｎｅｂｒｉｓ．　［６年前、雪の夜］

今話の原作トレースは、決して手抜きではありません。

ネギの過去、６年前の出来事のみを抜粋して１話にしようと思っただけです。

でも・・・文章評価が下がりそうだナァー・・・・。

・・・・・・それでは次回・・・・・・。

第５５話　非日常編　Ａｃｃｅｌ　ｏｆ　ｓｔｒｕｇｇｌｅ.　［闘争急進］

Ａｃｃｅｌ　ｏｆ　ｓｔｒｕｇｇｌｅ.＝闘争の加速。

・・・ま、まえがきに書くこと無い・・・。

一気に投稿すると話題がなくなって困る。

ああ、最近は家事もメンドくさくなって周囲には空きペットボトル、シンクには食器が散乱してる。くらいの話しかできひん。

それでは第５５話、どうぞ。

――その３日後、僕とお姉ちゃんは救助されました。
そしてウェールズの魔法学校がある山奥の街に移り住んだんです。
石になった皆がどうなったのか、子供の僕には誰も教えてくれませんでした。

僕はあの雪の夜のことが怖くて怖くて……なぜだか勉強に打ち込むようになったんです。

ただ「もう一度お父さんに会いたい」って……僕を助けてくれた、立派な魔法使いだったお父さんに会いたいって……

――――でも僕は今でも時々思うんです。
あの出来事は、「危機（ピンチ）になったらお父さんが助けに来てくれる」なんて思った、
僕への天罰なんじゃないかって……

その言葉に明日菜は目を剥いた。

「――な……！　何言ってんのよそんなわけないじゃん！！
今の話にあんたが悪いところなんてひとつもないわ！！　大丈夫、お父さんにだってちゃんと会える！！　だって生きてるんだから！！」

「ア…アスナさん……」

「任しときなさいよ、私がちゃーんとあんたのお父さんに……
……あれ？」

「「うわっ！？」」

ネギの背後には、今この別荘にいる全ての人物が揃っていた。
ほとんどの人物が号泣している。

「うっうっ……ネギ君の過去にそんなことが……！」
「おじ、おじ、おじいちゃんが～～～」
「楽シメタゼ。首折ルトコロトカナ」

「き、聞いてたんですか皆さん！？」

「ネギ君、及ばずながら私も先生のお父さん探しに協力するよ！！」
「ウチもー！！」
「ワタシも協力するアルよー！！」
「わ、私もーーー～～～」

「ダ、ダメですよそんなの！！　マスター、この人達に何とか言ってください！！」

「いやまあ……私も協力してやらんこともないが……。グスッ」
「泣イテンノカ　オイ」

「ちょっとぉ！！　そーじゃなくてマスター――！！」

第５５話　非日常編　Ａｃｃｅｌ　ｏｆ　ｓｔｒｕｇｇｌｅ.
［闘争急進］

「おじゃましましたー」
「わ、スゴイ雨降ってるアルよ」
「傘持ってへんわー」
「ピピ……検索終了しました。この辺り一帯に大雨警報が出ています。」
「あやー。」

「エヴァちゃん、テスト前に時間なかったらまた別荘使わせてよ！」
「別に構わんが、女には薦めんぞ。……歳取るからな」
「う〝っ！！　そうか！！」
「まー1日2日くらいならいいんじゃね？」
「若いから言えるセリフだぞそれは……」

そんなやりとりを交わして、エヴァンジェリン邸を後にした。

「む……？」
「どうしました？　マスター」
「……いや、気の所為か……」

―◇―◇―

《犬上小太郎は反乱の懲罰で能力を制限されていマス。》
《使えるのは”気”ダケ》
《今なら楽勝ダナ。》

『よろしい、君たちは作戦を実行したまえ。真祖（ハイディライトウォーカー）の吸血鬼に気取られぬようにな』

《ラジャ。》
《ステルス完璧デスゥ。》

『やれやれ……それでは始めるか』

―◇―◇―

――ザアアアア……

「すごいなー、雨。」

喫茶店アルトリア。

この雨では雨宿りがてら立ち寄る者以外、新しい客は来ないだろう。

「今日は早めに店を閉めようか」と士郎は考える。

（――――――――――――――――。）

意識の一部がどこかに引っかかるような、妙な違和感が脳に響く。

（――――――――誰か、入ってきたか……？）

だが、隠蔽が上手過ぎる。常人離れした空間認識能力――――”世界の異常”を感知できる――――士郎が確信を持てない程に、上手く姿を隠している。

相手が只者ではないことだけは確かだった。

「……こりゃ本当に……店仕舞いした方が良さそうだな。」

そう呟いて、士郎は作業に取り掛かった。

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

「うう、困ったなー」

「何が？」

「僕の過去の話は……あーゆー危険がありえるから、僕との関係は考えた方がいいって言いたかったんですけど」
「いいじゃない、協力してくれるっていうんだから」
「アスナさんもですよっ！！　やっぱり……僕が強くなるしかないですね。よし、もっと修行頑張らなきゃ！！」

「ちょ、ちょっと！　またフラフラになるわよ！？」
「大丈夫ですよー！！」

そう言ってさっさと寮部屋に行ってしまった。

「ネギ君、ちょっと頑張り過ぎる性格やなー」
「…それも先生の過去を考えると納得という感じですが……。」
「うーん……ホントだったら近所の悪ガキとバカなことして遊んでるような年頃なのよね……」

『だ・か・ら！　遊んで休むのも修行のうちなのよっ！！　アンタは頑張り過ぎなの！！』

明日菜はただ思ったことを言っただけなのだが、おそらくそれは的を射ていた。

「うーん……、同い年の友達でもいればええんやけどなぁ……。」

――ズズ……

《……ケケ。》

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

「……カモ君。アスナさん達遅くない？」

ネギが部屋に帰って来てから２０分は経っている。

「……確かに。何かあったのか？」

――――――ゾクッ……

「ッ！！！」

「兄貴っ！？」

杖を手に、ドアを蹴破って廊下に飛び出す、と。

「……僕に気づいたのか。成程、確かに歳の割に優秀なようだね」

ネギの目の前には、黒いタキシードにシルクハット・ステッキを身に着けた男が立っていた。

「――――誰ですかあなたは。ここは学園中等部の女子寮ですよ？」

「ああ、そういえば君はここで教師をしているんだったね。安心したまえ、中学生は私の守備範囲外だ。決して覗きに来た変態というワケではない」

「……は？」

ネギは目を点にして呆気にとられた。

「だから通報しないでほしい。」

「バッキャロォ！！　自分から変態だって名乗る変態がどこにいやがる！！　もし写真かなんか撮ってたんなら大人しく置いていきな！！」

「カ、カモ君、それって自分が欲しいだけじゃ……」

「ほう、日本でオコジョ妖精とは珍しい。しかも気が合いそうだ。しかし今は仕事中でね……。ネギ・スプリングフィールド君、君に伝言だ。

『君のお仲間は預からせてもらった。返してほしければ６６５号室にいる小太郎君と合流して来たまえ』だそうだよ」

「え……小太郎君!?　それに仲間って……、まさか……！！」

「魔法で探せば場所は判るだろう？　それでは待っているよ。また会おう」

「ちょ、ちょっと待ってください！！　伝言って、あなたは頼まれただけなんですか!?　誰に頼まれて――――――」

床から水のようなものが現れ、男を飲み込んで消えた。

「今のって、転移扉（ゲート）……？」

「いや、そんな高等な術を使ってる感じはなかったな。たぶん別の何かだぜ」

（くっ……また僕のせいで皆を巻き込んで……！！）

「落ち着け兄貴、とりあえず６６５号室に行ってみようぜ！！　たしか委員長や那波さんが居る部屋だ！！」

カモよ、何故そこまで記憶している？

◇――――◇――――◇

「――ん……？」

（ここって、大学部の学園祭用のステージ……？　なんでこんなトコに……）

「って、きゃあぁっ！？　何よこの格好ーーーーー！！？」

明日菜は両手を封じられて、吊られているような格好になっている。そして作者はファッションに詳しくないので上手く描写できないが、今の明日菜はぶっちゃけエロい下着姿なのである。

つまり、わざわざ服と下着を全部脱がせて今の姿に着せかえられたという恐ろしい事態が発生したのだ。

「はっはっは、お目覚めかねお嬢さん」

「ハッ！？」

声の主は、全身黒ずくめの初老の男性。何が愉快なのか楽しそうに笑っている。

「いや、囚われのお姫様にしては雰囲気が出ないと思ったのでね。少し趣向を凝らして」

「なんなのよこの変態ジジイーーーーーー！！！！」

「へぶぁっ！！」

羞恥と怒りで顔を真っ赤にして、男の顔面に蹴りを喰らわせる。言っておくが足はフリーである。ていうか自分より身長デカイおっさんの顔にハイキックて。

「いやいや、ネギ君のお仲間は活きがよくて嬉しいね」

「鼻血流しながら気取ってんじゃないわよ！！……って、ネギって言った？」

「アスナー！！」

「なっ……皆！？」

「彼女達は観客だ。」

明日菜の後ろ、ステージの奥の方に3つの水牢がある。

中央の水牢には木乃香、のどか、夕映、古菲、朝倉が囚われている。

「刹那さん！？　那波さんまで……！？」

中央の水牢の左右に1つずつ別の牢があり、刹那と千鶴が眠ってい

た。

「退魔師の少女は危険なので眠ってもらった。そちらの彼女は飛び入り参加でね」
「飛び入り……？」

「で、そっちの皆は何で裸なの？」
「風呂場で襲われたんだよっ！」
「文句はそのオッサンに言うアル」

「なーそこのおちびちゃんたちー」
「ここから出してくださいー」

水牢の傍に控えるのは、二頭身の少女のような姿をした水色の三人。

《私達特製の水牢からは出られませんよ。私あめ子》
《水中なのに呼吸ができる辺りが特別製……。ぷりん》
《すらむぃ。溶かして喰われないだけありがたいと思いナ。一般人が興味半分で足突っ込むからこういうことになるんダゼ。》

「あう……」
「ム……。」

「こ、こんなことしてどうするつもり！？」

「いやなに、ただの仕事だよ。『麻帆良学園の調査』が大まかな目的だが……。
その詳細の中には『ネギ・スプリングフィールドと』キミ……
『カグラザカアスナが今後どの程度の脅威となるか』の判断も依頼に含まれている。」

「――――へ？　わ、私！？」

「……来たようだね。仕事とは別に、彼には個人的に思い入れがあってね。彼があの時からどの程度使えるようになったか、私も実に楽しみだよ」

（……！？）

「ふむ、来たね。」

『戒めの風矢』が雨を弾いて飛来した。
しかし男が手を前方に突き出したと思うと、それらは全て？き消された。

「あうっ！？」
その一瞬、明日菜の首のペンダントが光ったように見えた。

『弾かれた！？』
『障壁か！！』
『いや何かに？き消されたように見えたぜ！！』

ステージの観客席に、ネギと小太郎が降り立った。

「来たでおっさん！！」
「皆を返してください！！」

「ネギ！！」
「ネギ君！！」
「おお弟子ヨー」

「アレは修学旅行の……？」
「小太郎君！！」

「アスナさ……ああっ！！　アスナさんがまたエッチなことに！！」
「違ァ――――――う！！」

（――――ちづる姉ちゃん……！！）

小太郎は囚われた千鶴を見て――――静かに戦意を燃やした。
そしてネギが口火を切る。

「あなたは一体誰なんです！！　どうしてこんなことを！？」

「いや、手荒な真似をして悪かった。ただ人質でもいないと君は本気を出してくれないと思ってね。
私はただ君たちの実力を見たいだけだ。私に勝てたら彼女達は無事に返す。
……条件はそれだけだ。これ以上話すことはない」

男は柔らかい物腰で自らの非礼を詫びる。
しかし人質を返すようなことはせず、自分達の条件だけ突きつけて対話を終わらせる。
ネギ達に選択肢などない。人質がいるのだから。

――――何かに足を掴まれた。

「「ッ！？」」

動けないところへ、あめ子とすらむぃの強烈な回し蹴りが放たれた。

「――ぐぅっ！！」

「うわあぁっ！？」

一気にステージ前、観客席の最前列まで飛ばされた。何とか着地し敵に目を向ける。

「なんやあいつら！　手足が伸びたで！？」

「ありゃスライムってやつだ！！」

（……スライム？）

（あれが？）

（（――――――イメージと違う……。））

そんな呑気な考えが浮かぶくらい、スライムのイメージの違いに困惑するふたり。

ドラ●エ誕生国家の国民である影響だろうか。あ、ネギは英国人だった。

まあ○ラクエはインターナショナルでグローバルに人気があるからね。

「へっネギ、休んでてもええんやで。接近戦は苦手やろ？」

「小太郎君の方こそ女の子は殴れないんじゃなかったの？」

「問題ない。軟体動物が女のふりしてるだけなんやったら――関係ないわ！！」

「いけるか兄貴！？」

「大丈夫！！　『戦いの歌（カントゥス・ベラークス）』！！」

戦端が開かれた。

～補足・解説～

「ピピ……検索終了しました。この辺り一帯に大雨警報が出ています。」

・原作では嵐でしたがこの小説では大雨になってます。特に理由はないです。

「落ち着け兄貴、とりあえず６６５号室に行ってみようぜ！！　たしか委員長や那波さんが居る部屋だ！！」

カモよ、何故そこまで記憶している？

・朝倉から入手した情報と合わせ、カモは３－Ａ全員の個人情報を握っています。完全ではありませんが。真名とかね。

そして作者はファッションに詳しくないので上手く描写できないが、今の明日菜はぶっちゃけエロい下着姿なのである。

・この明日菜の服装ではガーターベルトしかわからん。うん、いいよねガーターベルト。嫌いじゃないぜ・・・ニーソの方が好みだけど。

つまり、わざわざ服と下着を全部脱がせて今の姿に着せかえられたという恐ろしい事態が発生したのだ。

・ギャグな流れで忘れちゃうけど、実際コレってかなりの犯罪ですよね。まあヘルマンじゃなくてスライム娘が着替えさせたんだろうけど。だって彼は紳士だし。

《水中なのに呼吸ができる辺りが特別製……。ぷりん》
・誰も水牢の「水中なのに息ができる」という特性に気づいてくれないので自己申告。

作者はスライム3人娘の中ではダントツでぷりんが好きです。
（→どうでもいい）

それでは次回！

第５６話　非日常編　Ｇｈｏｓｔ　ｏｆ　ｐａｓｔ．　［雪の夜の亡霊］（前書

眠い。

Ｇｈｏｓｔ　ｏｆ　ｐａｓｔ．――過去の亡霊。

「過去からの刺客」とか「過去との邂逅」とか考えましたが「亡霊」に落ち着きました。

それでは第５６話、どうぞ。

「一般人の筈のカグラザカアスナ嬢……彼女が何故か持つ完全魔法無効化能力。
極めて希少かつ危険な能力だ……。今回は我々が逆用させてもらったがね」

小太郎が麻帆良に侵入する前に交戦した際　奪い取った小瓶。彼らは長らくコレに封印されていたらしく、自ら持ち歩いて管理していた。呪文を唱えるだけで高位の魔物すら封印できるという”瓶”はネギ達の切り札だったが――――不発に終わった。
”瓶”は完全魔法無効化がある限り使用できず、放出系の術や呪文――――”気”や魔法――――は完全に無効化される。
小太郎は懲罰によって狗神も獣化も使用できず、ネギは魔法が封じられた。

そして男が魔法を無効化する度に明日菜が苦悶の声をあげる。

「ア、アスナさん大丈夫ですか!?」
「わ、私の事は気にしないで……このエロジジイ……ブッ飛ばしちゃってよ……」
「で、でも――――」

（――――ふむ……。）

カモが、明日菜の首に付けられたペンダントに目をつける。

（アレか……！！）

「兄貴、俺っちがなんとかする!!　持ち堪えてくれ!!」
「え？　カモ君!?」
カモはピョンとネギの頭から降りてどこかへ消えた。
「さて。私に対してもう放出系の技は使えないぞ。男なら――拳で語りたまえ」
「「ッ!!」」
“悪魔パンチ（デーモニッシュ・シュラーク）!!”
ボクサースタイルの構えから拳が振り抜かれ――――――魔力弾が放たれた。

第５６話　非日常編　Ｇｈｏｓｔ　ｏｆ　ｐａｓｔ.

［雪の夜の亡霊］

呪文も無しに拳を振るうだけで魔力弾が放たれ、観客席を破壊していく。
しかも常に魔力弾を放つわけでなく、ただのパンチと併用してくるから攻撃が読めない。
ただ、普通のパンチも出鱈目な威力を持っているから手の出しようがない。
判断を間違えれば大ダメージを喰らい、疲労が蓄積していく。

つまり劣勢。勿論ネギと小太郎が。

「ネギ……！」
（姐さん姐さん！）
「え、カモ！？」
（しーっ、静かに！　今そのペンダント取ってやるぜ！　そうすりゃ兄貴達も……）

――がし。

《捕まえマシター》
「うおおしまった！？　放しやがれぇ～！！」
「アホガモーーーーーー！！」

「てめーもこの中に入ってナ」
「うおふ」

ドプンッ。

人質と同じ水牢に入れられる。

「カモさん」
「カモ君！！」
「役立たずアル。」

《ククク、あのガキふたりもーダメメダナ。》
《もったいないデスケドネー》

『！？』

「ど、どーいうことです！！」

《調査の結果に関わらず、ネギ君はしばらく戦えないようにしとけって言われてマス》
《安心シナ、てめーらは無事に返してヤル。しかしヘルマンの旦那の石化は強力だからナ。――下手したら片手か片足、永久石化かも知れネエナ？》

「……！！」
「ネギ君ヤバイの！？」
「どどどどーしよー……！」

「……なぁカモ君、アスナの胸のペンダント取ればえーの？」

「？？　あ、ああ、そうだけどよ……？」

―◇―――◇―――◇―――

「やれやれ。この程度かね」

「くっ……」

「くそ、強ええ！！」

地に這い蹲（つくば）る二人をヘルマンが見下ろす。

「先ほどの動きは中々良かったが……どうやら私が手を下すほどではなかったようだね……？」

自分で魔法と”気”を封じておいて平然とそんなことを言い放つ。

「小太郎君大丈夫！？」

「アホ、まだいけるわ！！」

ネギは杖を武器にして突きを繰り出し、小太郎は手数と速さでゴリ押しする。

しかし経験と修練に裏打ちされたガードを突き破るには至らない。

「――いや違うな。ネギ君キミは……」

ヘルマンが振りかぶった拳に魔力が収束する。

（またアレかっ！！）

「ふんっ！！」

「――があっ！？」

「小太郎君ッ！？」

魔力収束のフェイクに引っ掛かり、パンチを喰らった小太郎が吹き飛んだ。

――――――ドガァァアンン！！！！

観客席の椅子を破壊するには留まらず、吹き飛ばされた先でコンクリートが容易く砕けた。

「ネギ君キミは……本気で戦っていないのではないかね？」

（――――――――え？）

「な、何を……？　ぼ……僕は本気で戦ってます！！」

「そうかね？　やれやれサウザンドマスターの息子が……彼とはまるで正反対、戦いに向かない性格だよ。」

「！？　な……なに言って……」

『――――――君は、何のために戦うのかね？』

「な……何のために……？」

「そうだ。小太郎君を見たまえ、彼は実に楽しそうに戦う。君が戦うのは仲間の為かね？　くだらない。実にくだらないぞネギ君。

戦う理由は常に自分だけのモノだよ。そうでなくてはいけない。」

「怒り、憎しみ、復讐心などは特にいい。誰もが全霊で戦える。あるいはもう少し健全に
『強くなる喜び』でもいい。小太郎君のようにね。
そうでなくては戦いは面白くない。」

コンクリートの瓦礫を押し退けて小太郎が立ちあがる。

――まあ、怪我してるわこの子。
――ワケありみたいだし……何か思い出すまでここに居ていいのよ。
――どんな事情かは知りませんが、子供に対してすることではありませんわ。
――小太郎君といい貴女といい……気に入った。君にも一緒に来て頂こうか。

――くそ……無関係のちづ姉を巻き込んでもーた……！！
――ほな共同戦線やな、ネギ！！

（クソ……ッあのオッサン……！！）

怒りが湧き上がる。恩人一人救い出せない己の弱さに。
この戦いは、そんな小太郎が初めて――戦う理由を占める割合としては僅かではあるが――「誰か」の為に力を振るう戦いだった。
しかし元は違う。人間と狗族のハーフである小太郎は、幼い時から戦うことを必要に迫られた。

生き延びるために戦った。生きていくために戦った。強くなるために戦った。

――――――――では――――ネギは？

「ぼ……僕は別に戦う事が面白いなんて……。僕が戦うのは――――」

「彼女達を巻き込んでしまったという責任感かね？　それとも助けなければという義務感？
義務感を糧にしても決して本気になどなれないぞネギ君。実につまらない。」

「いや……それとも、君が戦うのは……」

“――――あの雪の夜の記憶から、逃げるためかね？”

ネギは、ヘルマンの背後に燃える村を幻視した。

「な……なん…で、それを……。ち、違います。僕は……！！」

「そうかね。では……コレなどは、どうかな？」

「え……？」

帽子を脱ぎ、素顔を晒したヘルマンの真の顔。それに、ネギは見覚えがあった。

《そうだ。君の仇だ。ネギ君。》

――――6年前の、雪の夜に――――。

紅イ、朱イ、緋イ、赫イ――――――――炎。
大炎ハ辺リヲ照ラシ、家ヲ焼キ、空ヲ焦ガス。

炎ガ村ヲ灼イテイタ。

再び帽子を被り、人間の顔に戻る。

「あの日召喚された者達の中でも、極僅かに召喚された爵位級の上級悪魔の1人だよ。

そういえば君にはまだ自己紹介をしていなかったね。

私はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン伯爵。とはいえ家は没落していてね、今はしがない雇われの身だよ。はっはっは」

肉親ヲ捜シテ、炎ガ猛ル村ヲ走ル。

焼ケテイナイ物ナドナク、村ハモハヤ地獄ノヨウ。

ソシテねぎガ見ツケタノハ――――タダノ石像ダケダッタ。

「君のおじさんやその仲間を石にして、村を壊滅させたのもこの私だ。」

『六芒ノ星ト五芒ノ星ヨ、悪シキ霊ニ封印ヲ。『封魔ノ瓶（らげーな・しぐなーとーりあ）』！！』

――――――バキパキッ……

『すたんオジイチャン！！』

「あの老魔法使いにはまったくしてやられたがね。」

「――――どうかね？　自分のために戦いたくなったのではないかね？」

ネギの動悸が激しい。汗が噴き出る。体が震える。何も――――考えられない。

「おいネギ！　しっかりせえ！！　おい、ネギ！！　ネ……」

ヘルマンの体が宙を舞った。

◇――――◇――――◇

一瞬。一瞬だった。その場の誰もが視認できない速度で懐に潜り込み、掌底でヘルマンの腹を突き上げた。

その体は樹高２７０ｍに及ぶ世界樹の枝の高さまで舞い上がる。

ヘルマンと同じ高さまで跳躍し、マシンガンのように怒涛の連打を喰らわせる。
肘打ちを入れ、蹴りを入れて吹き飛ばす。
瞬動も使えず、身体強化を覚えて間もないネギが出せる速さ（スピード）と出力（パワー）の限界。
今のネギはそれらを容易く超えていた。

「な……！　なんやあの動きは！！」

「――魔力の暴走（オーバードライブ）だ！！」

修行不足で使いこなせてはいないが、元々ネギは膨大な魔力の持ち主だ。
何かのきっかけ――春のエヴァンジェリン戦ではクシャミだった――があれば解放されて、強大な魔法行使が可能となる。

「しかし兄貴、こりゃぁ……！！」

戦術も戦略もない、ただ力任せに殴りつけるだけの攻撃。
エヴァンジェリン戦と違い――今のネギは正（まさ）しく「暴走」だった。

地に落ちる時間すらやらない。
ネギは杖を呼んで飛行し、追撃をかけ続ける。

「――ふはははははは！！　いいね素晴らしい！！　これだよこれを待っていたのだよ！！
それでこそサウザンドマスターの息子だ！！！！」

興奮したヘルマンの姿が変化する。コートは翼に、髪は角に、服は鎧に。
そこにいたのはもはや好々爺然とした老人ではなく、ただの邪悪な悪魔だった。

そんなヘルマンに――――――――闇雲に突っ込むネギ。

（うむ――――素晴らしい、惜しい才能だ。将来を見てみたい。
だがしかし……そういった才能が潰えるのを見るのもまた……）

《――――――私の楽しみの一つだよ！！》

悪魔の口から放たれた光線が――――――ネギに直撃する！！

（――――――――――……！！）

ネギに避ける術は――――――なかった。

―◇―――――――◇―――――――◇―――――――◇―

「な……！　なんやあの動きは！！」

全く反応できなかった。ネギを見失ったと思えば、空中でヘルマンをいいようにサンドバッグにするネギの姿が目に映る。

それは圧倒的だった。

「すっ……げぇ……。」

（でも……）

「でもネギ！！　その戦い方じゃアカン！！」

小太郎はその場を駆け出し――――

《――――――私の楽しみの一つだよ！！》

（ふざけんなやこのド変態が！！）

「――――ネギっ――――――――――！！」

――――ネギを引っ張り、ヘルマンの石化光線から救った。

――――ドッ――――ドシャアアアアッ――――――――ドガァァン！！！！！！！！

遥か上空から落下した二人はステージ前に落ち、観客席にぶつかって止まった。

「っ痛（ッ）……んのアホ……！！」

思わずネギに悪態をつく。あんな闇雲に突撃し続ける馬鹿など何処にもいない。

しかもそんなライバルを庇って額を切ったようだ。小太郎の額から一条の紅い線が流れる。

ネギの方を一瞥すると————

「あ…………………」

ネギは、青い顔をして怯えていた。

あの時、あの瞬間。「仇だ」と言われ、ネギは容易く思考を手放した。

ただ力任せに殴り続けた。殴り、蹴り、殴り、殴り、殴り蹴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り蹴り殴り殴り殴り殴り殴り蹴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り殴り————————

そんな自分が信じられなかった。

自分の裡に潜む、昏い、昏い、昏い感情。

『怒り、憎しみ、復讐心などは特にいい。誰もが全霊で戦える。』

（————僕は————————…………！！）

「…………あほ——————————！！」

——————ガンッ！！

「へぷあっ！？」

小太郎が、ゲンコツを喰らわせた。

「痛った……！！　こ、小太郎君！？」

「アホ！！　あんな闇雲に突っ込んで返り討ち喰らうんは当たり前や！！　確かにお前の底力が凄いのはわかったけどな、今のは最低や！！　周り見えてへんし決め手も入れられへん！！　仇と知らんけど簡単に挑発に乗ってからに！！　頭良さそーな顔しとるくせにな！！　ガキ！！　アホ！！」

「ふむぐっ！　むぐぐぐ――――！！」

ネギは小太郎に頬を摘まれ、為す術なく悶えている。
一気に捲くし立てられ、しかもそれが全て正論なので全く反論できない。
戦場に似つかわしくないその様子はまるで、子供がじゃれて遊んでいるようだった。

しかし――――明日菜、カモ、そしてヘルマンは気づいていた。
今のやりとりが、ネギの心を恐怖から引き戻したことを。

「――共同戦線ゆーたやろネギ。二人であのオッサン、ブチのめすで！！」
「……うん。行こう、小太郎君！！」

「ふ……いい仲間ができたようだ。しかし残念だね。さっきまでのはとても良かったのだが……。君達二人で、私を倒せるのかね？」

「――――クテ・ビ……ル！　――……灯れ！！」

「――――ラクテ・ビ……ナル！　……よ灯れ（アールデスカット）！！」

中央の水牢の中。円陣を組んで全員で、木乃香の杖を握って呪文を唱える。

「誰でもいい、一瞬でいいから発動させてくれ！！　火種さえあればこのか姉さんの魔力で燃え上がる！！」

「――――プラクテ・ビギ・ナル！　火よ灯れ（アールデスカット）！！」

――――ボゥッ！！――――

「やった！！　着い「そこまでだよ。」」

「ひゃっ！？」

「ちょっ……！！」

白い手袋の手が水牢に入ってきて――――希望の火種を奪い取った。

黒いタキシードにシルクハット、ステッキを持った若い男。

女子寮でネギにヘルマンの伝言を伝えた男だった。

◇――――◇――――◇

「ヴィルヘルム。君はいつも詰めが甘いな」

ハートの飾りがついた杖を片手で弄りながら、男は友人に声をかける。

「いや、まったく耳が痛いね。しかし君が気づいてくれたのだからいいじゃないか？」

「昔から私は君の尻拭いばかりしているような気がするのだけれど？」

「はっはっは。不貞腐れないでくれたまえよアロイス。」

「そ、そんなぁ……」

「もう一人いたのかよ……！！　チクショウ、失敗か……！！」

《ナメた真似してくれんジャネーカてめーら。次　妙な真似したら痛い目ミルゼ？》

《油断してマシタネー》

「なんや知らんけど、ピンチ倍増ってカンジやな……！！」

「くっ……！！」

あのアロイスという男が悪魔だとして、悪魔二人とスライム3体。分が悪過ぎる。

「安心したまえ、彼は君達に手を出さない。最初に言っただろう？『私を倒すことができたら彼女達は無事に返す』。悪魔は約束を守る。」

（それが簡単に出来たら苦労せんわ……！！）

ヘルマンを倒すには明日菜の解放が必須条件だ。
そのためには木乃香たちの脱出が必要であり、それをスライム娘とアロイスが妨害している。
せめて、もう一人戦力が居れば――――――

「妹の杖、返してくれないか？」

「！！」

――――ヒュオンッ！！

アロイスは横から振るわれた黒い閃光を間一髪で避ける。
スライム達は避け切れずに薙ぎ払われて《うひゃ～》と悲鳴をあげたが。

「不意打ちとは品のない……。誰だい君は？」

斬りつけた男のコートが靡く。手に持つ双剣を持ち直す。

「なに、通りすがりの――――喫茶店のマスターだよ。」

第５６話　非日常編　Ghost of past.［雪の夜の亡霊］（後書

次話でやーーーっと士郎の出番。

お待たせしました。

無双とまではいきませんが強いです、強いですよー。予定では。

まだ出来てないです。

それでは次回！！

第５７話　非日常編　Ｃｕｔ　ｏｆｆ　ｄａｒｋｎｅｓｓ．　［王の剣、雷の斧］

ごめんなさい。
オリキャラ・アロイスの自己紹介は展開上ムリになってしまったので、あとがきで紹介します。

Ｃｕｔ　ｏｆｆ　ｄａｒｋｎｅｓｓ．＝闇を切り裂け。王の剣と雷の斧が過去を振り払う。

それでは第５７話、どうぞ。

第57話　非日常編　Cut off darkness.　［王の剣、雷の

「不意打ちとは品のない……。誰だい君は？」

斬りつけた男のコートが靡く。手に持つ双剣を持ち直す。

「なに、通りすがりの――――喫茶店のマスターだよ。」

赤いシャツにジーパン・黒いコートを纏った、黒白の双剣を持つ男はそう答えた。

「―――シロウ！！」

現れた士郎は、干将莫邪を持った両腕をだらんと下げて立っていた。

「師父！！」

「士郎さん！！」

「旦那、姐さんの首のペンダントを外してくれ！！　そうすりゃ兄貴達にも勝機が……」

「そんなことはさせないよ。」

タキシードの男・アロイスが、ステッキの仕込み刀を抜いて立ちはだかる。

「シロウ、というと、君がエミヤシロウでいいのかな？」

「……だとしたらどうなんだ？」

「いや。会いに行く手間が省けてよかった。君の調査も依頼に含ま

れているからね。」
「依頼、ねえ。」

そんな会話の最中も、二人は互いの敵から視線を逸らさない。

「聞きたいことは山ほどあるが――――後ろのガキんちょ達が心配だ。とっととケリを着けさせてもらおう。」

「――――――――くっ……。」

「？」

「――――――――くっ……はははははははははは！！！！」

「！？」
「ひゃっ！？」
「な、何笑ってるアルかあのオッサン！？」
「キモッ」

「これは可笑しい！！　これが笑わずにはいられるか！？　まさか君は、私を倒せると本気で思っているのかい！？」

『！？』

「な、何言ってやがるんだアイツは……？」

カモが呟いた。
彼は修学旅行の戦いで士郎が並みの強さでないことはわかっている。
いくらアロイスが強かろうが、士郎が負けるなど想像もできない。

「く……くく……。無数の魔剣を操る『無限の剣（グラディウス・インフィニトゥス）』。その高名は聞いていたが……君自身を恐れる必要はないようだ。ネギ君やあの狼男の少年の１００分の１でも才能があればよかったろうね？」

『え……？』

木乃香達はアロイスの話が理解できない。

士郎を恐れる必要はない？　士郎には才能がない？　――――馬鹿な。

魔法使いとしての士郎を知るのどかや古菲は彼が弱いとは思えない。

間近で士郎を見てきたが、そんなことがあるわけない。

「初見でそこまでわかるのか。凄いな。」

――――だというのに、本人がそれを肯定した。

「シロウが……勝てへん……？」

第５７話　非日常編　Ｃｕｔ　ｏｆｆ　ｄａｒｋｎｅｓｓ．

［王の剣、雷の斧］

「いつまでそうしているつもりだね？」

「うおっ！！」

「ぐっ！！」

士郎達の会話に耳を傾けていた二人にヘルマンが攻撃を再開する。

間一髪　躱して後退する。

「くっ、あっちはあのにーちゃんに任せるしかないな！！

――――――どうしたネギ？」

『シロウが……勝てへん……？』

先の会話と、木乃香の言葉がネギの頭から離れない。

「しっかりせえネギ！！　あっちが心配ちゅーならさっさとこのオッサン倒して加勢すればええだけの話や！！　腑抜けんな！！」

「！！」

（そうだ……今は目の前に敵に集中して……！！）

「ネギ、さっきの最強モードっぽいのやれるか？」

「い……今の自分でもどうやったのか……」

「へへ。ま、そーやろな。」

ヘルマン伯爵は二人の前に悠然と立っている。

（何も焦る必要はない。ネギが暴走する前に状況が戻っただけや！）

いや、士郎が明日菜を助け出せる可能性を鑑みればむしろ好転している。

だから今はただ、全力で戦うのみ。

「――いくで！！」

「うん！！」

魔力と気を滾らせて、突進した。

◇――――◇――――◇

「俺がお前に勝つことなんて、無理だろうな。」

士郎は干将莫邪の投影を破棄した。

「な……何言ってんだよ旦那！！」

「いやいや、自分の力量を正しく把握できていることは素晴らしい。大人しく私達と共に向こうを観戦していようじゃないか」

「……ああ、俺の言い方が悪かったか。」

「？」

「だ、旦那……？」

「大丈夫やえ、安心しいカモ君。」

木乃香がカモを腕に抱く。

「さっきはウチもちょっとビックリしたけど……大丈夫。大丈夫や。

――――――シロウが何かを諦めたことなんて、一度だってあらへん。」

その声は、確信に満ちていた。

「お前が言った通りだよ。俺には才能なんてない。」

並みの魔法は全て習得しているが、その精度は平均程度でしかない。

『無数の魔剣を操る「無限の剣」。その高名は聞いていたが…君自身を恐れる必要はないようだ。』

アロイスが言外に言った通りなのだ。

『恐れるべきは士郎ではなく、士郎の持つ剣である』。

ならば――――――

「だというのなら話は簡単。俺自身が勝てないのなら、勝てる手段があればいい。

そして俺には――――お前に勝てる武器がある。」

ならば――――その恐れるべき剣（ぶき）を相手に勝てるのか？

「来（アデアット）い！」

剣の丘から呼び出す呪文を走らせる。

――――――創造理念の鑑定を通過し
――――――基本骨子の想定を遂行し
――――――構成材質の複製を貫徹し
――――――製作技術の模倣を達成し
――――――成長経験の共感を完遂し
――――――蓄積年月の再現を実現し
――――――あらゆる工程を凌駕しつくたその先へ、
――――――幻想を結び剣と成す――――――――――――！！

士郎の右の掌から魔力の光が迸る。丘の中心から、あ・・・の剣を引き抜いた。

閃光が止んで現れたのは黄金の剣。青と金の華美な装飾が施された剣。

『彼女』の剣。王権を示す≪王の剣≫。

その美しい輝きに、誰もが目を奪われた。

――――ザ……

「！！」

剣を構えた士郎が――――――――――――目の前に。

（馬鹿な――――私に気配を悟らせないなど――――――――！！）

魔力が奔る。魔力が滾る。魔力を籠める魔力を纏う！！

真名を開放し、光を放つ黄金の剣が悪魔の体を両断する！！

「――――――――『勝利すべき黄金の剣（カリバーン）』――――――――――！！」

――――――――――――袈裟斬りにした。

◇――――――◇――――――◇

「く……は、ははははは！　見事にやられた。私の負け、いや君の勝ちだよ！！」

仰向けに倒れた悪魔は、嬉しそうに笑って自分を倒した男を称える。

彼の胸には、肩口から伸びる一条の傷が刻まれていた。

「どうやら私は君という存在を見誤っていたようだ。今回の私の役柄は道化といったところかな？」

カリバーン。神話や伝説に生きる武器を使役するなど、出鱈目に過ぎる能力だ。

「君に感謝するよ。彼（ヘルマン）とは腐れ縁でね、まさか共に6年も封印されるなど思いもしなかった。」

これでようやく帰れると呟いた、彼の体が徐々に消えていく。

「悪いがそれは無理だ。お前には全てを話してもらう。」

士郎がそれを遮った。

「こちらこそ悪いがね、依頼主や召喚主のことを話すのは最大のタブーなんだよ。いくらなんでもそれだけは無理――」

「お前の意志は関係ない。時間をかけて、ゆっくり話してもらうさ」

士郎の手には、”瓶”が握られていた。

「なっ――それは……！！」

彼らが封印されていた瓶。ネギが使用するも完全魔法無効化（マジックキャンセル）によって弾かれたそれを、士郎が拾っていた。

「カラダ・ハ・ツルギ・デ・デキテイル。
五芒（ヘキサグラマ・エト・ペンタグラマ）の星と六芒の星よ、悪しき者に封印を。（マロース・スピリトウス・シギレント）『封魔の瓶（ラゲーナ・シグナートーリア）』！！」

「ぬあああああああああああああああっっっ！！！！！！」

後に残ったのは、彼が奪った木乃香の杖が落ちていた。

◇――――――――◇――――――――◇

「ぬあああああああああああああああああっっっ！！！！！」

「「「！？」」」

聞こえてきた絶叫に3人は動きを止める。
声の先には――瓶を握る士郎の姿。

「アロイス……！」

「イヨッシャアァァ！！　やったゼ旦那！！　早く姐さんのペンダントを外してくれ！！」
「お前らでやれ。もう出られる。」
「え？」

――――パシャァァンッ！

水牢が弾けた。

「！？」
「なんと！？」

一同の頭に疑問符が浮かぶが、彼女達はすぐに行動を開始した。

「木乃香！」
「ありがとー！シロウ」
取り返した杖を受け取り、木乃香は魔法で、古菲は崩拳で刹那と千鶴の水牢を壊す。
「……彼女達は、どうしたのかね？」
「薙ぎ払っただけだが？」
斬っても斬れないスライムだというなら、大火力で蒸発させるのが確実だ。
しかしそれは面倒なので、1番簡単な方法をとることにした。
手品の種は「干将莫邪」。干将の妻・莫邪が炉に人身御供として身を投げて生まれた二振りの剣は「対怪異専用の宝具」。怪物に対する絶対の概念を持つ。
それはあくまでオリジナルが持っていた能力であり、投影では再現しきれないが、スライム3体を倒すことなら充分可能だ。
つまり――彼女達はもういない。
「ああそうそう、そこの悪魔。お前に言いたいことがあったんだ」
「？」
「戦う理由、と言ったな。ああ、確かに理由があった方が本気を出せるし、強くもなれるだろう。」
「……何が言いたいのかね。」

「お前が言ったんだ。『戦う理由は自分だけのものだ』と。そんなに理由が大事なら、いちいち他人の『理由』にいちゃもんつけんじゃねえっつってんだ」

“――責任感？　義務感？　くだらない。実にくだらないぞネギ君――”

「責任感や義務感の何が悪い。それになネギ！　お前もだ！！」

――ずびし！

「ええっ！！　僕！？」

「いちいち悩んでんじゃねえ。お前は理由がなけりゃ本気も出せないのか！！

「助けなきゃいけないから」助けるのか？　違うだろ！

助けたいから助けるんだ！！　理由なんてそれで充分だ！！」

「――――――……！！」

「助けたい」と思ったのは紛れもなくネギ自身。その気持ちに偽りなどない。

ならば何を迷う必要がある。目的を果たすために、全霊を以て戦え。

「二人がかりでなに手こずってる。そこのいけ好かないツラ、さっさとブチのめせ。」

「お待たせアスナっ！！」

「朝倉！！」

朝倉がアスナのペンダントを引き千切った。

「今だネギ君！！」

「――みんな！！」

「やるやないかねーちゃん達！！」

これで――ハンデなし。今度こそイーブン。

「ふふ……やるじゃあないか」

再び構えをとり、ネギと小太郎を迎え撃つ体勢に入る。

――さっさとブチのめせ――

――今だネギ君！！――

「へへ……もう行くしかないね！！　とっておきのヤツがある、小太郎君　前衛頼める！？」

「ナメんなや！　お前の方こそ大丈夫か！？」

「――いいぞ、来たまえ！！」

「何笑っとんのやおっちゃん！　もう魔法は……防げへんのやで！！」

小太郎が分身と共に突進した。計６体の小太郎が一斉にヘルマンへ向かう！

「どきたまえ小太郎君！！」

全ての分身を殴りつけて消滅させ、炙り出した本体を突き上げる！

――――ドッ！！！

「が……！！」

「私の狙いは……ネギ君ただ一人だよ！！」

鋭い眼光がネギを射抜いた。

「――ダァホ。」

「！！？」

ヘルマンの正面――下に、消えたはずの小太郎の分身が――。

「こっちが本体や、おっちゃん」

足に込めた力を開放し、顎に掌底アッパーを喰らわせる！！

――――ド　ガッ！！！！！

「ご……お……っ！！」

「行けぇネギ！！」

“――――魔法の射手（サギタ・マギカ）・雷の一矢――――――――――”

「――――――――――？打頂肘（かくだちょうちゅう）！！」

――――バチチッ――バチッ――――――バシィィッ！！！

電撃を纏った肘打ちが、悪魔の自由を数瞬奪う。
しかしその数瞬が、ネギの勝利を約束する！！

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！　来たれ虚空の雷、薙ぎ払え！！
　あああああああああああああああああっ！！！」

“――――――――――――――――『雷の斧（ディオス・テュコス）』！！”

巨大な雷霆が悪魔に叩き付けられた。

◇――――――――◇――――――――◇

「……ふん。乗り切ったようだな。」

世界樹の枝の上に立つ、数人の女性。そのうちの一人がそう呟いた。

「内心ハラハラ、半ばオロオロだったようですが……良かったですねマスター。」
「茶々丸……お前その方面のツッコミはよせ……ここはシリアスな場面だ」
「今の発言の方が問題でござるよ。」

「……まあぼーやの潜在能力が見れたのは思わぬ収穫だったよ。ヘルマンとやらには礼を言わねばな。それにしても士郎（あのバカ）は……！！

危うく全て台無しになるところだったぞ……！？」

「エヴァ殿ー、〝気〟…ではなくて魔力が漏れてるでござるー。寒いでござるよー」

「マスターの属性は氷と闇ですから。あ、また1℃下がりました。」

「くく……久しぶりにアイツも別荘でしごいてやるか……ぼーやと一緒にな……！！」

――――ゾクッ！

「ッ！！？」

「コノエコノカ嬢……極東最強の魔力を持ち、治癒の才能に長けている……。修練次第では世界屈指の治癒術師になれるだろう。成長した彼女の力ならば……石化した村人達を元に戻せるやもしれん」

「……！」

「今のはお礼だよネギ君。久しぶりに、実に楽しい時間を送らせてもらった。」

ヘルマンの身体が――――消えていく。

――成長した君と再び戦えることを今後の楽しみとしよう。私を失望させてくれるなよ
少年！
――ふふふ……ははははははははははははは……！！
完全に――消えた。
それで全てが終わった――――わけはなく。
『怒り、憎しみ、復讐心などは特にいい。誰もが全力で戦える』
『君が戦うのは――あの雪の日の夜から、逃げるためかね？』
『何故トドメを刺さない？　君が日本に来る前に覚えた９つの戦闘用呪文のウチのひとつ……最後に覚えた上位古代語魔法（ハイ・エンシェント）は、悪魔（この）を殺（とき）すためのモノだろう？』
この日の出来事は、長く尾を引いてネギの心に刻み込まれることになる。

第57話　非日常編　Cut off darkness.　[王の剣、雷の

〜補足・解説〜

・アロイス・マルヴィン・フォン・ヴィターハウゼン伯爵
（Ａｌｏｉｓ　Ｍａｒｖｉｎ　ｖｏｎ　Ｗｉｔｅｒｓｈａｕｓｅｎ）
ヘルマン伯爵と腐れ縁の友人である上位悪魔。
６年前にも彼と共に召喚されてネギの村を襲撃した。
能力は剣術と火炎。６年前に村を焼いたのはアロイスの炎である。
ヘルマン家と違いヴィターハウゼン家は貴族として没落していない。
しかし６年も当主であるアロイスが不在にしてしまったので、彼はすぐに国へ帰りたかったのだが、封印から解放されてすぐ依頼を受けることに。
しかも今度は士郎に封印されて・・・。彼はいつ国に帰れるのだろう。
人間体の時は若い男性の姿をしている。

――――創造理念の鑑定を通過し
――――基本骨子の想定を遂行し
――――構成材質の複製を貫徹し
――――製作技術の模倣を達成し
――――成長経験の共感を完遂し
――――蓄積年月の再現を実現し
――――あらゆる工程を凌駕しつくたその先へ、
――――幻想を結び剣と成す――――――――――――!!

・これスゴク疲れた。「複製を貫徹」「共感を完遂」がちょっと納

得いかないけど、これしか日本語が思いつかなかったッス。

『彼女』の剣。王権を示す≪王の剣≫。
・「彼女」は皆さんお分かりのようにあの騎士お・・・腹ペコ王です。
「王権を示す」はカリバーンを選定の岩から引き抜いた者が王となる、という伝承に従ってアルトリアが王になったことから「王の象徴」「王の権威を示す剣」という意味です。

（馬鹿な――――私に気配を悟らせないなど――――――――!!）
・士郎の才能の低さに目が眩み、努力と経験値を甘く見たのです。
まあぶっちゃけ油断っスね。
「学園結界で弱体化していた」ことを本人が忘れているので・・・。
ヘルマンとかアロイスはエヴァよりも霊格はずっと下なんですが、エヴァは「元人間」という縛りから学園結界の効果をより強く受けてしまっているという設定です。
ちなみに狗族ハーフの小太郎も麻帆良に入った時に「何やピリピリするなぁ？　ちょっと窮屈やし。」とか思いました。

士郎の手には、”瓶”が握られていた。
・士郎は「投影して二つにして、ヘルマンも封印する」とは考えませんでした。投影品はいつ存在に綻びがでるかわからないので信用できないですから。

手品の種は「干将莫邪」。干将の妻・莫邪が炉に人身御供として身を投げて生まれた二振りの剣は「対怪異専用の宝具」。怪物に対す

る絶対の概念を持つ。
・出典は「Ｆａｔｅ／ｃｏｍｐｌｅｔｅ　ｍａｔｅｒｉａｌ　？」。以下引用文。
「対怪異専用の強力な宝具として立派に活躍したでしょう。ライダーの最終神話形態ゴルゴーンＬＶ１００も、ジルが召喚した異界の邪神も真っ向からズンバラリン。」
　マジか！！　オリジナルの干将莫邪ってそんな強ええんかい！！って思った。

お前は理由がなけりゃ本気も出せないのか！！
・現代社会は理由、理由ってうるさいと思います。「気に入ったから」この大学に入りたいと思った。とかでいいじゃん！！「私が御社に入社したいと考えたのは～」とかメンドくせー。感性で生きちゃいけないのか。

「エヴァ殿ー、”気”…ではなくて魔力が漏れてるでござるー。寒いでござるよー」
「マスターの属性は氷と闇ですから。あ、また１℃下がりました。」
・ネギは風（＝雷）なので風が吹いてパンチラ発生させますよね。
エヴァはネギみたく未熟じゃないけど、不機嫌を表すための描写として書きました。
ちなみにこのとき周囲の温度が３℃くらい下がりました。

今回の話はすっごい難産でした。
書いては消し、書いては消しを繰り返すこと５、６回。
「そろそろプロット書いてから話作ろうか」と本気で思いました。

さーて、次話の構想がまーったくないなー。どーしよ。

おまけ。今話の没ルート？。ちょっとＦａｔｅ／ＥＸＴＲＡ入ってます。

「――――――――気が変わった。お前には全て吐いてもらうぞ」

そう、士郎が言い放つ。更に空気が重さを増す。

彼がそこにいるだけで、心が折れそうになる。

体は金縛りに遭ったかのように動かない。呼吸ができない。

隠しようのない憤怒と殺意が、その場の全てを呑み込んだ。

「来たれ（アデアット）」

剣に代わって真紅の槍が現れる。

「憑依経験（スキルモジュール）、共感終了（ダウンロードクリア）。――――――『戦いの旋律（メローディア・ベラークス）』。」

槍を構えてその場に沈み込む。屈めた足に力を溜める。

「……っ！！　何をしようと、この盾は君には――――」

気押されながらも言葉を吐き出すが、彼はまだ勘違いをしている。

士郎には無理でも、士郎が持つ槍なら――――――――――！！

「振るえ――――――――槍術（しょのつち）・初の槌！！」

――――ガギギギギギギギギギ！！！！！！！

突進し、槍を防壁に叩きつけた。

「おおおおおおおおおおっっっ！！！！！！」

「――――――――無駄だよ！！」

アロイスの体が陽炎に揺らぐ。

“悪魔フレイム（デーモニッジュ・フリーエム）！！”

アロイスの体は炎を纏い、辺りの大気を燃やし始める。

あまりの熱に、士郎の額に汗が浮かび始めた。

「ぐ――――――ああああああっ！！！！！！」

集中を殺がれた突進は失敗し、槍は防壁を大きく逸れた。

――――そして士郎の脇腹がガラ空きになる。

「そこだよ！！」

ステッキの仕込み刀を引き抜き、体の炎を纏わせる。

魔炎を取り込んだサーベルが振るわれる！！

士郎の体が回転した。

「！！？」

槍が逸れた勢いを殺さず回転し、再びその防壁に牙を突き立てる！！

「――――――――――――――砕け、槍術（なかつやり）・中つ槍！！」

『初の槌』は速さを第一とした突き。

そして『中つ槍』は重さを重視した槍であり――結果は明白だった。

――――バギィン！！！！！

これで、盾は無くなった。

「その心臓――――――――貰い受ける！！」

「盾など、無くとも――――――――！！！！！！」

真紅の槍と紅蓮の炎が周囲の魔力（マナ）を喰らい始める。

士郎が盾を砕いた時点から二人の位置は変わっていない。

つまり二人は超近距離。互いが互いの間合いの中。

時を刻むほど悪魔の炎は燃え盛り、紅い槍は鳴動する。

そして――――――――！！

「刺し穿つ（ゲイ）――――――――死棘（ボルク）の槍！！」

「悪魔ソード（デーモニッシュソート）――――――――！！」

槍は炎の剣を砕き、当然のように悪魔の心臓を貫いた。

それでは次回！！

第５８話　悩みは尽きないけれど（前書き）

明るい話なのかシリアスな話なのか、何が書きたいのかよくわからない出来に仕上がっちゃいました。
そして原作重視のストーリーなので士郎の出番が以前から少なめだったのですが、今回はホントにネギが主人公です。どうしてこうなった。

第５８話、それではどうぞ。

第５８話　悩みは尽きないけれど

――君が戦うのは…あの雪の日の夜から逃げるためかね？

――そうだ。君の仇だ。ネギ君。

――我々のような上位の魔物を討ち滅ぼし消滅させる超高等呪文。
君が復讐のために血の滲む思いで覚えた呪文だよ。

――――――逃げるため――――――仇――――――復讐――
――――――

（――――僕は――――――……！！）

「……あ……。」

――チュンチュン……

「むにゃ……せっちゃー……ん…♪」
「ぐおー……ぐおー……」

「す――――……。」

周りの安らかな寝息。窓から陽光が射し、鳥の囀りが聞こえる。
瞳に映る、絵に描いたような平和な日常の風景。

「……顔洗ってこよう」

洗面台に向かうネギの目は、赤く腫れあがっていた。

第５８話　悩みは尽きないけれど

「終ーわった、と。」

二人が登校した後、士郎はそう独りごちた。朝食の後片付けを終えてエプロンを脱ぐ。

（さて……店の開店までまだ時間があるし、家の掃除でもやるかな）

「……あれ？」

ぬいぐるみや人形に隠れて見えづらいが、リビングのテーブルの上に何かが置いてあった。いつもはあんな物ないハズだが。

「……おいおい」

――士郎が作った、エヴァの弁当だった。

◇――――◇――――◇

「ひゃー、遅刻やー」

「職員会議に遅れる～！！」

毎日懲りない人達である。ネギ・明日菜・木乃香はいつものように学園都市を走っている。その途中――やけに人が集まる屋台が目に付いた。人混みの中に見慣れた金髪幼女がいた気がしたが、気の所為だとネギは思った。

「あー！　超包子（チャオパオズ）やってる――――！！」

「今日からやってんねや。あーん、もっと早よう起きれば良かったなー」

「スゴイ混んでますね。あのお店、そんなに人気あるんですか？」

「ふふー？　アスナー、明日は早起きしよなー♪」
「そーね！　ネギ、明日になればわかるわ。楽しみにしてなさい！」
「？？？」

「オッス、ネギ！！」

「――――あ。小太郎君！！」

登校時間でごった返す路中に、学ラン姿の小太郎がいた。

「どうしたのその制服？」
「おう、俺こっちに本格的に転校することにしたんや。こっちにはお前とか刹那とか
楓のねーちゃんとか赤い髪のにーちゃんとか…って多過ぎやボケ！！」
「何が！？」

Ｔａｋｅ２。

「おう、俺こっちに本格的に転校することにしたんや。」

こっちにはお前とか刹那とか、強いのがぎょーさんいるしな♪と嬉しそうに語る。

先日の”ヘルマン伯爵襲撃事件”の折、ネギに協力したことで懲罰が解除・脱走が不問になった彼は、これ幸いと麻帆良に転校してくるようだ。

「今は一人暮らしできるトコ探してんねんけどな。”仕事”すれば食いぶちくらい稼げるし」

「うふふふ～♪　ダメよ。小太郎君はウチに住むの～～♪」
「はうっ!?　ち・ちづ姉!!」
「あれ？　お知り合いなんですか？」
小太郎の背後に千鶴が、とってもキレイな笑顔で立っていた。
「聞いてます、この子両親がいないそうなんです。
この子は私がきっと立派に育ててみせます!!」
「ちづねっ、やめてーな!!」
どうやら逆らえない力関係が出来ているようだ。
一緒に来た夏美が小声で囁いた。
（ネギ君も気をつけたほうがいーよ……ちづ姉怖いから）
「夏美ちゃん何か言った？」
「い、いや何も!!」
「おいネギ見てみい!!」
「うわっ!?」
学園校門と学園敷地の端を繋ぐ道の前に、某国の凱旋門のようなものが建っていた。
下げられた垂れ幕には――
――'０３麻帆良祭
――麻帆良祭まであと１５日

「麻帆良祭かあ」
「ちょっとおっちゃん、このデカイ門なんや？」

「何って学祭門だよ。スゴイだろ！　木製だけどね。てか誰がおっちゃんだ、お兄さんだろフツー」

「くあ～～……門でコレか。どんな学校やねんここは」

「学園内の全校合同学園祭よ？」
「１５日も前から随分と活気があるんやなー」

よく見ると周りには、宣伝も兼ねてかぶりものを着て登校する生徒も多い。

「なんやよーわからんけど楽しそうやな！　俺こっちに転校してきてよかったわ！！
お、格闘大会あるで！　ネギ出よーや！！」

「ええっ？　いいよ僕……ていうか遅刻――――！！」

――――キーンコーンカーンコーン

「「「「「「あ。」」」」」」

予鈴が鳴った。

◇――――◇――――◇

職員会議を終えて教室へ。

「うーん学園祭かー」

「随分と賑やかなお祭りみてえだな。」

「ウチのクラスも出し物を決めなきゃねー」

「あの嬢ちゃん達じゃー決めるのも大変そうだけどな。」

「あはは。」

――ガラッ

「おはようございまーす、朝のＨＲ……」

「いらっしゃいませ――――！！？

３－Ａメイドカフェ『アルビオーニス』へようこそ――――！！」

「……え？」

３－Ａでもノリのいい部類の生徒達が、様々な種類のメイド服を着てネギを出迎えた。

「ネギ先生、３－Ａの出し物が「メイドカフェ」に決まりましたの。」

「ウチの学校　お金儲けしていいからね！」

「お小遣い稼ぐならこれだよ！！」

「そーだネギ君　お客やってよ！！」

「ええ！？」

「練習練習！」

「ちょっ…待っ」

「ささ、ググ――っと飲んで？」
「は、はあ。」
何故か教室に置かれている、値の張りそうな黒いソファに座らせられた。
「ネギくぅーん、あたしこのカクテル飲みたいな――？」
「ど、どうぞ？」
「キャー！　社長太っ腹――？」
何故か教室にバーテン用のカウンターがあり、カクテルが作られていた。
「あーんネギ君？　胸の谷間に栓抜き落ちちゃったー？　取って～」
「ぶっ！？」
――――結果。
「お会計、７，８００円になります？」
「――――――え〝え〝え〝っっ！！？」
「コラコラ――ッ！！」
「一体なんのお店ですのっ！！」
明日菜と委員長が思わずツッコむが、メイド達の勢いは止まらない。
「ネギ君見て見て――っ、まだ衣装いっぱい用意してあるよ――――！！」

古菲、葉加瀬、超のチャイナ風ウェイトレス。
まき絵の和風ウェイトレスに、裕奈のネコミミメイド。
そしてアキラのバニーガール。

「１２，０００円になります」
「見ただけでっ！！？」

「ちょっと――――っ！　趣旨が全然違うじゃないのよ！！」
「いやだって色んな服着たいし、お金も儲かるし。ネギ君も大人の世界の厳しさを学べて一石三鳥？」
「アホか！！」

「相変わらず騒がしいなこのクラス。ほらエヴァ、弁当忘れてたぞ」
「……む？　おおスマンな。」

「しかし明石……なんか今イチ　グッとくるものがなくない？」
「確かにね。もっとこう、客を引けるようなヤツを……。」

朝倉と裕奈が唸り始めた。

「ちょっと、そんなくだらないことに頭捻らなくても……」

「よし！　龍宮は巫女！！」
「何？」
「美空ちゃんは――ミニスカシスター！」
「え……うん」
「桜咲――猫耳スクール水着！！」
「え〝っ……意味が……」
「亜子――……ミニスカ猫耳ナース！！」

「ひいいっ！？」
「――……！！」
「――――……！！」
「……！！」

◇――――――◇――――――◇

ジャ――――――ン。
朝倉＆裕奈のプロデュースが完了した。
着せられた本人達は楽しむ者半分、赤面する者半分といった様子。
しかしそれを指示した二人は……
「……。」
「……。」
――やり過ぎたか……。
――うん……。
「失敗した」といった表情だった。
「「「コラ――――――！！！」」」

ここまでさせた以上、せめてこの二人には褒めるか満足するかしてもらわなければ、恥ずかしがりながら着た者達が報われないのである。

「２０，０００円。」
「は…はぃ……」

ネギは真っ白になっていた。

「ふふふ、甘いわね二人とも。このクラスは素材がいいのが多いんだから、味付けは薄味が基本……。これで充分よ！！」

「い……いらっしゃいませ――――……」

ハルナと夕映に促され、
普通のウェイトレスの制服に袖を通し、髪を結い上げたのどかが現れた。

「おおっ！？　フツーに可愛い！！」
「その手があったかっ」
「なんかズルイぞ！！」
「おお。のどかちゃんカワイイなー」
「あ、アリガトーございま……え？」

（今の、声は――――）

「士郎、いつまで居るつもりだ？」
「いや、四葉さんのカクテルをもーちょい見てから……」
―学園祭が終わったあとなら、いつでもお教えしますよ―

「え、いいのか？　そうだな、じゃお言葉に甘えることにしてそろそろ帰ろ……」

「しろー何やっとるん？」

クラス一同の目が、一斉に士郎に向けられた。

「じろ゛――う！！」

「うわっ！？」

涙で顔がグシャグシャになったネギが抱きついてきた。

「僕……ちょっと飲み物飲んで、衣装を着た皆さんを見ただけなのに……2万…2万円……！！　僕、僕どーしたら～～～」

士郎はフッ、と笑って告げた。

「……ネギ。それが……大人の世界だ。アディオスッ！！」

――スパァ――――ン！！

「待てーーーい！！」

明日菜のハリセンが頭に直撃し、士郎は教室を脱出することは叶わなかった。

「何でシロウが女子校の教室にいんのよーーーーーー！！」

「いや、やましい理由はないぞ。エヴァが忘れた弁当を届けに来ただけだ」

士郎が指差す先にはエヴァの机と、その上に置いてある包みがあった。

「にしたってどーやってここまで入ってきたのよ。誰かに通報されなかったの？」

「だいじょーぶやえアスナ。シロウは外面（そとづら）がええから」

「木乃香……外面『だけ』いいよーな言い方はやめてくれ……」

職員室で「士郎君なら問題ないだろう」と言われて一人で来ただけだ。

不法侵入したような言い方はよしてもらいたい。

「お久しぶり――ッス！！」

「お、君は……早乙女さん、だよな？」

去年の図書館島探検事件で会って以来だ。

「あ・覚えててくれたんですかー？　皆ー、この人がこのかのお兄さんだよー♪」

「彼の詳しい個人情報は私まで！！」

「待てコラ」

「あはは冗談だって。それでさ士郎さん、龍宮とは付き合ってんの？」

「「「「！？」」」」

そして３－Ａ生徒の約半数は士郎と真名のデートの件を知っている。

お年頃な女子中学生は即座にこの話題に喰いついた。

「お兄さ――ん！　龍宮と付き合ってるんですか――――？」
「二人の馴れ初めは？」
「どこまでいってるんですか！？」
「桜咲さんとの三角関係は！？」
「そうだ、たつみー！！　桜咲さーん！！」

（……マズイ。アレだ、このままだと根掘り葉掘り聞かれること間違いナシだ。幸い退路（ドア）は俺の後ろに――――）

なかった。いや、ドアはあったのだが、そこは既に退路ではなかった。

（龍宮真名の一件、私も非常に気になるナァ？）
（エヴァ――――――――――――！！！！）

エヴァが茶々丸を従えて、ドアの前で仁王立ちしていた。

（後でいくらでも話すから！！　とにかくそこを退いてくれ！！）
（ふん、聞く耳持たん。従者の動向を知っておくのも主人の義務だ！！）
（どんな義務だよ！？）

そんなこんなしてるうちに、真名が引っ張りだされて来た。

「な……お、お前達……。」

「どーよ士郎さん？　彼女のコスプレ姿は？」
「彼女じゃねえっつーの……。」
「はぐらかさないでさ、ほらほら感想は？」

「う、う――ん……」

じー～っと見つめられて、真名は顔が熱くなるのを感じた。

（……な、何だ。何で私はこんな緊張しているんだ……）

真名が赤面するという珍しい様子に、クラスの面々は誤解を加速させていった。

（あの龍宮さんが……！？）

（以外でござるよ）

（こ、これはもしや本当に……？）

（あわわわ……！）

「うーん。その服は真名には似合ってないと思うな」

「……。」

クラス一同（（（（ええええ――――――――――！！？））））

（ソコは褒めておこうよ！！）

（シロウはほんまにわかってへんなー……）

「だって、その袴も中途半端な長さだし。巫女ってーか和服の良さがないんだよな。襟から見えるうなじとか、袴の下から見える足首とか。そういう和服の色っぽさがないんだ。

俺は――普段の真名の方が好きだな。」

――――好きだな――――

「なッ……！！」

真名は耳まで真っ赤になった。

（スゲエぜ旦那…。こりゃその気になれば仮契約者をかなり増やせるんじゃねえか？）

「せっちゃん早よう～♪」

「こっ、このちゃん！　堪忍してぇ～～～！！」

昔の口調に戻るほど切羽詰まって懇願するが、愛しのお嬢様は聞く耳ナシだった。

「はいシロウ？　せっちゃん可愛ええやろ！！」

木乃香に突き出された刹那は――――――――

髪を下ろした頭にネコミミ。平仮名で「せつな」と書かれたスク水。

ネコのしっぽ。

水着姿のせいで、白い肌が羞恥で全身真っ赤に染まっているのが一目でわかる。

「せ……刹那ぁ――――――――――――――！！！！　何してんだお前――――――！！」

「ひゃ、ひゃいっ！？」

「そんなハズカシイ格好するんじゃない！！　ああもう、これ着ろ！！」

思わず士郎は叫んでいた。流石にこんな人目のある所で投影はでき

ないので自分の着ていたジャケットを刹那に着せる。

「ぜえ、はあ……」

「す…すいません……」

「ふぅ～～～ん？」

「？？」

妙な声の先では、朝倉・明日菜・木乃香が暖かい目で二人を見ていた。

真名は面白くなさそうな顔をしている。

「龍宮より桜咲に反応したね。」

「そうね？」

「シロウがせっちゃんと結婚したら、ウチせっちゃんの義妹になるんやな～？」

それは気が早過ぎると思いますよ木乃香さん。

「もしかして士郎さんってロリコ「違う！！」」

「ほぅ……士郎はロリコンなのか……」

「何言ってんだエヴァ！？」

「ネギ坊主、２万円払うアルよ」

「ええっ！？　……うっうっ……財布が寒いよ……」

「コラーーーー！！　お前らいつまで騒いどるかーーーーーー！！

もうＨＲの時間は終わっとるぞ！！」

（チャ――――――ンス！！）

全員の意識が新田先生に向いた瞬間、士郎は３－Ａを脱出した。

士郎は九死に一生を得た…ような気分だった。

士郎が退室した後。

（……士郎さんのジャケット……。）

刹那は士郎が残していった黒いジャケットを、大事そうに抱いていた。

◇――――――◇――――――◇

放課後。喫茶店アルトリア。

「今日は旦那の所為でいつも以上に騒がしかったぜ。」

「はは……スマン」

カモがカウンターの上に座っている。ネギとは別行動だ。

ちなみに店内に客はいない。麻帆良の学生は学祭準備に熱心なので、

この時期はあまり客が来ないのだ。

「で、旦那、例の物は？」

カモに急かされて注文の酒をカウンターから引っ張り出す。日本酒と焼酎である。

「ちゃんと用意してある。店を閉めたら持って帰るから安心しろ。」

チャチャゼロと一緒に飲むらしい。月見酒とでも洒落こむのだろうか。

「…なあ旦那。最近の兄貴をどう思う？」

「何だいきなり？」

「いや……何か時々、遠くを見てボーっとする時があってな……。あの夜以来、な」

「……。」

だとしても俺には何もできない。それはネギの問題だ。相談されれば立ち直る手伝いくらいはするが。

「まぁ……大丈夫だろ」

アイツは独りじゃないから。

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

「ただいまー」
「おかえりーネギ。」

明日菜は布団の中からネギに話しかける。

「このかは刹那さんと一緒に用事で学園長のトコに泊まるってさ。」
「そーですかー」
「…ちょっとー、あんたまたフラフラじゃない。またエヴァちゃんトコで修行してきたの？」
「はいー」
「あれ、カモは？」
「チャチャゼロさんと飲むって言って……。最近仲いいんですあの二人」

ネギは眠そうな顔をしながらパジャマに着替えている。

「……。」

そんなネギを、明日菜はじっと見つめていた。

（……まったく、このバカは……）

「ネギ。」
「はい？」

「アンタまだあの事件のこと引き摺ってんでしょ。」

「！！」

「どうせホントは――今日も一日中落ち込んでたんじゃないの？」

「……な、なんでそれを……」

「ふふん、あんたのことは大体わかるわよ。伊達に保護者やってないわ。毎晩布団でグズグズ泣いてんのも知ってるんだから。」

「なっ……アスナさ……！！」

「……ほら」

「えっ」

体を横にしたまま布団を持ち上げる。

「今日は久しぶりに一緒に寝てあげるわ。」

「えっ……あの…い、いいですよ僕っ！！」

「何遠慮してんのよ、ちょっと前までは自分から潜り込んできたクセに。いいからほら！」

「ど、どうも……」

断り切れずに、ネギは明日菜の隣で横になっていた。

「いいのよ別に。……私、あんたが夜　苦手だって知らなかったし……」

「ホント馬鹿よねー。せっかく友達も出来たっていうのに、また一人で抱えこんじゃって」

「う……」

「……何　悩んでるのか知らないけどさ。今日は安心して眠りなさい。」

「……。……ありがとう……アスナさん……」

その夜、ネギは久しぶりに――――悪夢を見なかった。

◇――――◇――――◇

翌朝。いつもと違って生徒の混雑が見られない早い時間帯。

「今日は遅刻しないで済みそうね♪」
「毎日こうやとええのになー」

「でも、どうして朝食も食べないでこんな早くに出てきたんですか？」
「ネギ、昨日話したこと忘れたの？」
「学祭期間中の名物があるんや♪　あ、着いたえ。」

「――――わあ！」

『いつものお願いー』
『肉まん八つアルネー』
『やっぱ「超包子」は美味しいね！』
『当然アル！』

路面電車屋台「超包子（チャオパオズ）」。今日も大人気営業中。空いた席にすかさず座る。

「へー、超（チャオ）さん達の屋台なんですかー」

「超包子」を経営する中学生達。
「麻帆良の頭脳」「完璧超人」超鈴音（チャオリンシェン）。
超に続く「天才その２」葉加瀬聡美。料理の達人、通称「さっちゃん」四葉五月。
そして中武研部長・古菲とガイノイド茶々丸を加えた彼女達を「超一味」と呼ぶ！！

「あんたも超一味（アイツら）の点心が美味しいの知ってるでしょ？　毎年大人気なのよ。」

「学祭期間中の名物なんやえー。ウチらもファンやから早起きして来るんや。」
―おはようございます、ネギ先生―
「あ、四葉さん」
やってきたのは超包子の料理長にして３－Ａ生徒・四葉五月。
―元気の出るスタミナスープ…サービスです？―
「えーなーネギ君」
「ありがとうございます、あの…どうして僕だけ？」
―最近元気ないように見えたので―
（……え。僕、結構いろんな人に心配かけちゃってたのかな……？）
知らぬは本人ばかりなり。
―あの……修行頑張ってるって聞きました。でも……無理はダメです。体壊すし……。体が資本、元気が第一です？
修行大変そうですが……お仕事も頑張ってください―
ネギはお辞儀を返して五月を見送った。
「四葉さんって良い人ですねー」
「何言っとるんネギ君ー」
「四葉さんはスゴイ人ですよ。料理は達人並ですし」
「へ～。よし、それじゃあいただきまーす」
―――ズズー……

「よ――――し、今日も1日頑張るぞ――――――!!」

「うわっ？　何よ急に？」
「スープパワー!?」
「おおネギ君が燃えとる!!」

「朝から気合いれていくぞーーーーーーー!!」
「ちょっ、うるさいわよアンタ!?」

「ウチのクラス、結局出し物決まってないし！　朝のＨＲから頑張るぞーーー!!」

その後、ネギのテンションが鎮まるまで３０分を要した。

◇――――――――――◇――――――――――◇

――――チュンチュン……

「ん……、アレ？」

目が覚めると、いつもロフトから見る近い天井ではなく。
周りには棚があり食器が積まれている。

「ここは……あ。」

回想。

『おや、ネギ先生じゃないですか！！　ここで会うとは珍しい、一杯いかがです？』

『わあ新田先生！　お酒はダメですよ！！　ほらネギ君、こっち飲んで』

『うっうっ……ひっく……ぐす……うえ……』

『おいおいどうしたんだいネギ君？』

『……瀬流彦君、何を飲ませたのかね？』

『瀬流彦君こりゃ甘酒だよ！？』

『あちゃー！？　しまったぁ！！』

『うっうっ……新田先生……僕はダメダメですぅ～』

『違うんですぅ～～～～！！　僕　強くなんてなってないんですぅ～～～～～！！！』

『おっと！？　ど、どうしたんだネギ君！？』

『あー……高畑君。実は甘酒を飲ませてしまってねー……』

『僕……っ逃げてただけなんですっ……！！』

『僕は…ダメ先生で……っ、ダメ魔法使いですぅーーーーーーー！！！』

回想終了。

結論。ここは超包子の屋台の中。

「ぼ、僕あのまま寝ちゃった……？」

とりあえず服装を整えて屋台を出る。すると、屋台の前を箒で掃除する五月がいた。

―あ……おはようございます―

「あの……昨晩はご迷惑をおかけして……」

―あ……覚えてたんですか―

「は、はい……」

―さすがイギリスの人はお酒　強いですね―

五月は掃除に戻る。ネギといえば特にすることもなく、野外のテーブルに座って五月の様子を眺める。

（こんな朝早くから準備してるんだ……）

思わず、言葉が漏れた。

「四葉さんはスゴイです。」

―……？―

「将来の夢がしっかり決まってて……毎日お料理を頑張ってて……。」

――……先生もお仕事や修行……頑張ってます……――

「……僕はダメなんです。ある人にズバリ言われました。そしてそれは当たってたんです。

先生をやるための勉強も強くなるための修行も。

全部僕の昔の嫌な思い出から逃げるための　嘘の頑張りだったんです。」

――――あの雪の夜から、逃げるためかね？――――

――――僕はあの雪の夜のことが怖くて怖くて……

……何故だか勉強に打ち込むようになっちゃいました――――

「そんな気持ちで先生やってたなんて僕……皆に恥ずかしくて……。」

「そんなことないです。」

「……え……？」

五月は力強い瞳で。確信に満ちた声で言った。

「嘘なんかじゃないですよ。

誰かを恨んだり何かから逃げたりして手に入れた力でも……

それは立派なあなたの力ですネギ先生！！」

「……！」

「恥ずかしいなんて思わないで！　ホラ、元気出して！！」

バンッ！！

「わわっ！？」

背中を思いきり叩かれた。ただ叩かれただけなのに、何故かとても暖かくて……元気づけようとしてくれていることがとてもよく伝わってきた。

―頑張って……？―

さっきまでの力強い姿はどこにもなく、いつも通りの四葉五月がそこにいた。

「ハ……ハイ！　四葉さん！！」

◇――――――◇――――――◇

「えーそんな訳で……３－Ａの出し物を『おばけ屋敷』に決めたいと思うんですが、どうでしょう？」

『……いいんじゃない？』

「よぉーーーーーし！！　そうと決まれば思いきり怖いヤツを！！」

「お化け屋敷ならお化け屋敷でいくらでもやりようはあるってモンよ！！」

「「「おーーーーーーーーーーーー！！！！！」」」

こうしてようやく３－Ａも麻帆良祭へ動き出した。

”あの夜”の翳りは消えない。悩みは尽きない。でも――前へ。今は、前へ進もう。

第５８話　悩みは尽きないけれど（後書き）

～補足・解説～

・クラス一同の目が、一斉に士郎に向けられた。
：士郎を知らない人達は不法侵入者にマジで混乱しました。知ってる人も「何で学校に？」と混乱しましたが。

・（龍宮真名の一件、私も非常に気になるナァ？）
：以前ボコられた時は「ただ一緒に買い物したりしただけ」「恋愛関係じゃない」とだけ説明したので、これを機に詳細を聞き出そうとしました。

・真名は面白くなさそうな顔をしている。
：あ、あれー？　真名はイタズラ心あれど基本的に刹那を応援する立場だったハズなのにー
　手が勝手にキーボードを叩いたよー。もはや真名の気持ちは作者にもわからん。

・全員の意識が新田先生に向いた瞬間、士郎は３－Ａを脱出した。
：新田先生が入って来たのがエヴァが封鎖していたドアで、反対側のドアから瞬動で脱出。

・―元気の出るスタミナスープ…サービスです？―
：原作では点心ばっかり描写されてますが、菜や湯はメニューにな

いのだろうか。でもサービスで出せる辺り売ってそうだけどなー。

・「ぼ、僕あのまま寝ちゃった……？」
∴思いっきし省きました。ごめんなさい。

前回の「非日常編」で色々と失敗したので、今回の投稿は少し緊張してます。
いや、勉強になりました。

それでは次回。

第５９話　士郎編　修行しよう！（前書き）

士郎を絡めた日常の話を書きたかっただけなんだ・・・。

まさか士郎メインになるなんて・・・士郎編って誰得？

それでは第５９話、どうぞ。

第59話　士郎編　修行しよう！

「ふふ～ん？　士郎、魔法使いのクセに箒にも乗れないの？　お姉ちゃんは悲しいぞぅ？」

道着姿の藤ねえ（藤ねえって誰だ）が、虎竹刀に跨って空を飛んでいる。

「おにいちゃん、箒に乗れないんだ？　大変だね～」

目の前には姉さんにそっくりなロリブルマ。つーかアンタ、その地面に突き立ててる戦斧（ハルバード）は何ですか。もしかしてそれが貴女の箒ですか？

「え？　違うよ。ていうか私　箒に乗らないし。私が乗るのは……」

――――ドドドドドドドドド……！！

……後ろから何かが突進してくるような音が聞こえる。すごく嫌な予感がする。

「――――バーサーカーだよ♪」

「■■■■■■■■■――――――！！！！！」

ぎゃあああああああああああ！！！

「――――ハッ！！？」

広がるのは青い空、白い雲。エヴァの別荘。

「シロウ大丈夫！？」

ネギが杖で飛んでやってきた。

（……ああ、そうか。）

――――士郎は箒から落ちて気絶したのである。

第５９話　士郎編　修行しよう！

発端は数日前。

「くっ……！」

後退するネギにエヴァが迫る。避けることも出来ず、強化された腕で吹き飛ばされる。

「あうっ！！」

１０ｍ弱吹き飛んだ後　体勢を立て直そうとするが、その間に茶々丸とチャチャゼロに肉迫された。回避行動が間に合わない。

「くっ……ラ・ステル・マ・スキル・マギステル！　『風花・風障壁（フランス・パリエース・アエリアーリス）』！！」

二人の攻撃を風障壁で防御する。しかしそれは一瞬だった。

「ぎゃ！！」

茶々丸に組み敷かれ、訓練終了。

（……あれ？）

ネギはおかしいと思った。いつもならここでエヴァンジェリンに文句やらダメ出しを受けるはずなのだが、今回はいつまで経ってもそれがない。

「……１４……いや、１５秒か……。伸びんな……」

エヴァはブツブツ呟いている。

（今回は15秒しか保たなかったのか……）

――どうした？　たった12秒だぞ？　3対1とはいえもう少し保たせろ――

以前より3秒しか増えていない。

「どうしたものか……」

「あ、あの、マスター？」

「む？　ああ、今日はもう終わっていいぞ。帰るなり自主トレするなり好きにしろ」

「は、はい」

こうして今日の修行は終わった。

◇――――◇――――◇

「おじゃましましたー」

「お疲れ様でしたネギ先生」

ネギは寮に帰って行った。

「エヴァお疲れ。何か食うか？」

「……ああ、そうだな。何でもいい。お前に任せる」

何か考え事をしているようだったので、紅茶とチョコクッキーを出すことにする。
糖分は脳にいい。

「なあ、何があったんだ？」
「ネギ先生の修行が上手くいっていないのです。」
「へえ……」

（弟子にとる時はあんなに嫌々なカンジだったのに、しっかり師匠やってるんだな）

「何を笑っている。」
「いやなに、ネギのことをちゃんと考えて師匠やってるんだなと思ってさ」
「フン、当然だろう。一度弟子にとると言った以上、半端な育て方をしては私の沽券に関わる」

顔を少し赤くしてそっぽ向く。

（照れ隠しがバレバレだって。すっかりネギのこと気に入ったみたいだなー）

「士郎、何か妙な事を考えなかったか？」
「別に？」
「……むぅ……」

（フッフッフ、真祖の力で心を読もうとしても無駄だ。その程度簡単にレジストできるのだよ！！）

お仕置きを受ける口実を回避して得意気な士郎だったが、その余裕はすぐに失われた。

「……決めたぞ。士郎、明日の修行からお前も別荘に来い」

「……へ？」

「言っておくが拒否権はない。逃げるなよ？」

そう言って優雅に紅茶のカップを口に運ぶ。士郎は血の気が引けていくのを感じた。

彼女が浮かべた妖艶な笑みは、間違いなく悪の魔法使いのものだった。

◇―――◇―――◇

「というワケで修行を始める」

「ハ、ハイ！」

「へーい」

別荘の広場で、エヴァの前に並ぶネギと士郎。

「しかし今回　私は何もせん。」

「え？」

「はぁ？」

士郎としては「どんなスパルタを受けるんだろうか」と冷や冷やしていたのでホッとしたが。

「ぼーや、最近お前の成長は伸び悩んでいる。」
「……うう」
「そこでだ。んー……アレだ。人間という生き物はいつもと違うことをすると成長ホルモンというヤツが出るらしい」
（あー、同じ修行ばっかしてマンネリだから、いつもと違うことして気分転換を兼ねた修行をしようってコトね。ていうかどこから仕入れた、その付け焼刃な知識は）
「そこでだ。お前らには互いの苦手な分野を鍛えあってもらう」
「「……はい？」」
エヴァンジェリンはニヤニヤした目つきで士郎を一瞥した。
（コ、コイツまさか……！？）
「ちょっと待てよ、旦那は魔法使いとして兄貴より何段も上なんだぜ？　兄貴から旦那に教えることなんて何があるんだよ。」
カモが一見　もっともな意見を述べるが、その懸念は杞憂に過ぎない。
「安心しろ。士郎は箒に乗れんからな。」
ネギ「……。」
カモ「……。」
士郎「……。」

「「えええええええええーーーーーーーーーーーー！！？」」

信じられない、といった目で見つめられる。

（これが昨日の仕返しか、エヴァ……。）

士郎は地に跪(ひざまず)いてがっくりと項垂(うなだ)れた。

◇――――――◇――――――◇

そして冒頭に戻る。

「ホントに飛べないんですねー」

「意外な弱点だな」

魔法学校における必修科目であり、箒に乗って飛ぶことが出来ない魔法使いなど聞いたことがない。得手不得手あれど、皆ある程度は飛べるのだ。

しかし士郎はまっったく飛べない。

しびれを切らしたエヴァに突き落され、士郎は海へ真っ逆さま↓気絶。

「人間が箒なんかで空を飛べるわけないだろう！！」

「貴様は魔法初心者か！？　そんな現代の既成概念はドブにでも捨ててしまえ！！」

「ネギ先生、飲み物でもいかがですか？」
「あ、ありがとうございます茶々丸さん」

「しかしよう、旦那は魔法界に行った経験もあるんだろ？　空中戦とかしたコトねーのかよ？」
「あー、全くないな。空を飛ぶ幻獣とかと戦ったことはあるけど」
「え？　その時はどうしたんですか？」
「撃ち落とした。」
「「……え？」」

ネギとカモは口を半開きにしてポカンとしている。
エヴァは腕を組んで目を閉じて、茶々丸は両手を前で組んで「納得」といった面持ちだ。

「だから、撃ち落としたんだって」

具体的には剣とか、剣とか、剣などで。
しかしそれは容易ではない。高速で自在に飛び回る飛竜や怪鳥を狙い打つ至難さは想像に難くない。

「……成程。飛べなくても困らなかったんだな……」
「なんかシロウなら出来そうだから不思議だよ……」

二人は何故かとても疲れた気分になった。

「あれ、俺　呆れられてる？」
「当たり前だ馬鹿者……。箒で飛べないくせに飛竜を撃ち落とせ

る魔法使いなどお前くらいだよ」

妙な空気になったので、とりあえず休憩を挟むことにした。

◇――――――◇――――――◇

「で、エヴァ？　ネギの苦手って何なんだ？」

「うむ、未熟過ぎて指摘できん。マトモな水準に達しているのは生まれつきの魔力くらいだ」

「あうう……。」

「今回鍛えてほしいのは回避運動……防御だな。ぼーやの技術といったら目も当てられん」

ついこの前まで近接戦闘とは無縁だったので仕方のないことではあるが。

「3対1で15秒がベストスコアだ。みっちりしごいてやれ」

「ええっ！？」

ネギは涙目で悲鳴をあげた。

「シ、シロウ……お手柔らかに……」

『ガンバレよーアニキー』

カモはチャチャゼロの頭に避難していた。

「カモ君　ズルイ！！」

「で、士郎。どうするつもりだ？」

「いやー……防御を鍛えるっていったらやっぱ……」

――――――スパルタだろ。

「避けろよー。止まったら死ぬぞー」

「……え」

「投影（グラーヴィス・イルシオー）、重装。全工程投影完了（セット）、全投影連続層写（ソードバレルフルオープン）～」

「――――キャアアアアアアアアアアッッッ！！！！！！」

無数の剣群が撃ち出される。

ネギは咄嗟に障壁を全開にしつつ、その場から杖に乗って飛び立った。

「わあああああっ！？　何本か追ってくるーーーーーーーー！？」

７つの閃光が空を切る。ネギがいくら飛ぶ進路を変えても、意志を持つかのように

追いかけて攻め立てる。

「旦那、ありゃ何だ？」

「あれは大神宣言（グングニル）と刺し穿つ死棘の槍（ゲイボルク）と……あと五つは轟く五星（ブリューナク）だな。

どれも一度狙った標的をずっと追いかけるぞー」

「兄貴ぃーーーーーーーー！！　死ぬなぁーーーーーーーーーーーー！！」

聞かない方が良かったとカモは思った。どれも神話に名高い武器達だ。

「障壁なんかじゃ防げないからな。間違っても停まるなよー。移動だけで回避するんだぞー」

投影する際に構造を弄って弱体化させてあるので、実は命の危険はない。

「うわあああああああっ！！！」

しかしそれを知らないネギは必死そのものだった。

「ううっ！！　ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！

光の精霊４９柱、集い来たりて敵を射て！！　魔法の射手（サギタ・マギカ）・光の４９矢（セリエス・ルーキス）！！」

――――ドドドドドドドドドッ！！！！

「魔法の射手」が命中し、辺りの空域が爆煙に包まれる。が、腐っても宝具。

――――――ギュオンッ！！

爆煙から、無傷の槍が飛び出した。

（き、効いてないーーーーーーーー！！）

「マ、マスター！！　助けてくだ……」

エヴァンジェリンは水着に着替えて、パラソルの下でフルーツジュースを飲んでいた。

『マスタァァァァァァ！！！！！』

「おお、いい眺めだ。」

「ああ……ネギ先生……」

ネギが墜落するまで修行は続いた。

◇――――――◇――――――◇

――――早朝。まだ日は昇っていないが、海の向こうから光が漏れている。

「うーん……最近こんなのばっかりな気がする……」

こんなの、とは「気がついたら寝ていた」という状況である。

甘酒に酔い潰れ、修行で気絶し、気がつけば朝である。

「……あれ？」

下の砂浜に人影が見えた。

『――――フッ！』

弾き、逸らし、受け止め、受け流し、いなし、防ぐ。

時に剣を逆手に持ち替え、投擲し、新たな剣が現れる。

双剣を振るう、士郎がいた。

（――おかしい……）

ネギがそれに気づいたのは、エヴァンジェリンとの修行の成果であろう。

士郎は今シャドートレーニング――仮想敵を相手にイメージで剣を振るっている。

（シロウが防戦一方なんて……！？）

士郎のイメージの中にいる相手は、一体何者なのか。

「……お？　起きたか」

「あ、うん……」

「ぜっ……はっ……！　やっぱ…シロウはスゴイや……」

砂浜で大の字に寝ころぶネギ。

「いやいや。お前もだいぶ上達したな。修行の成果が出てるじゃないか」

組み手を終えて士郎も腰を下ろしている。

「まだまだだよ……。まともに組み合うことも出来なかったし……」

「いや、そりゃ俺も必死だったからな。俺は我流だから、マトモな武術と組み合うと簡単に相手のペースに嵌まっちまうんだ。なら組み合わないようにするのが一番だろ？」

言うほど簡単ではないことをさらっと言ってのける。

ネギは「やっぱりすごい」と思った。

「修行はどうだ？」

「……大変だけど、何とか頑張ってるよ。少しずつだけど使える魔力の量も増えてるし」

「厳しいだろーアイツ」

「……はは……」

「多分もっと厳しくなるぞ……」

「は……」

笑えなかった。

「でもまあ……エヴァを師匠に選んだのは正しかったと思うぞ。何だかんだ言ってちゃんと考えて教えてくれるし、色々と気にかけてくれるし。」

「……そう言うシロウは、何でマスターの魔法使い（ミニステル・マギ）の従者になったの？」

「いきなりだなぁオイ」

そう言ってニヤッと笑う。そしてつらつらと話し始めた。

「俺は昔　京都に居たんだけど、木乃香と一緒に麻帆良に来たんだ。」

木乃香が麻帆良に来た事情をネギは知っているので、その話には頷いた。

「俺が麻帆良に来た1年目……12歳の冬だったな。クリスマスだったからよく覚えてるよ。
まだ魔法を知らなかった俺は――魔法使いに会ったんだ。」

金糸の髪を靡かせて、冬の街に降り立つ小さな魔法使い。
彼女が何か呟く毎に、光が奔って化け物が凍りつく。
封印されているとはいえ、アイツは圧倒的だった。

「俺はさ、憧れたんだよ。」

「俺は、弱い自分が大嫌いだった。大切な誰かを守れる力が欲しかった。」

「――だから。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの強さに、俺は憧れたんだ。
いつか彼女のように。いつか彼女に――並び立てるような存在になりたいと」

「ま、再会するまですっかり忘れてたんだけどな。」

「……。」

士郎の話を、ネギは黙って聞いていた。
何ということはない。昔は士郎も、ネギと同じだったのだ。
背中しか見えない、その人のようになりたいと――――

――ただ……ひとつだけ違うのは――――

◇――――――――――◇――――――――――◇

――――むっすぅ〜〜〜〜〜〜……。

「……何だよ」

あの修行の翌日。夜も更けた頃に別荘から出てきたエヴァは何故かご立腹で、今は士郎を上目遣いで睨みつけている。

「ネギ先生の３対１の記録が３１秒だったのです」

「おおっ！？　スゴイじゃないか！！　前は１５秒だったんだろ？」

「ええ、ですが……」

――――ムスッ。

「マスターとの修行で伸びなかった耐久時間が、士郎さんとの修行で大きく伸びたことが不満のようで……」

「……ああ……」

目の前にいるのは、見た目小学生くらいの女の子。６００年を生きる真祖（ハイ・ディライトウォーカー）の吸血鬼。

中学生であり歴戦の魔法使い、「闇（ダーク・エヴァンジェル）の福音」。

７年前。

――フン、他愛のない。数だけの雑魚が私の手間を取らせるな――

不機嫌そうな――金の長髪を持つ、人形のように可憐な少女。

（……同一人物なんだよな？）

「……何ニヤついている」

おお、無意識に笑っていたらしい。

「いや。エヴァは本当に可愛いなと思ってさ。」

「――――なっ！！」

ああもうホントにカワイイなこんちくしょう。耳まで真っ赤じゃないか。

「おやすみ茶々丸。おやすみ、エヴァ。」

「な、ちょっと待て貴様！！」

「おやすみなさい士郎さん」

リビングのドアを閉める時、思い出した。

『でもまあ……エヴァを師匠に選んだのは正しかったと思うぞ。』

（ああ、俺も――――――）

呼び止めようとする声を聞きながら、ドアを閉めた。

第５９話　士郎編　修行しよう！（後書き）

～補足・解説～

・序盤の似非タイガー道場は気分と勢いです。作者はＦａｔｅ未プレイなので書こうと思っても書けないですけどね。

・つーかアンタ、その地面に突き立ててる戦斧（ハルバード）は何ですか。
：リズさんの斧です。

・（フッフッフ、真祖の力で心を読もうとしても無駄だ。その程度簡単にレジストできるのだよ！！）
：原作で明日菜の心を読んだっぽい描写がありましたが、戦闘でそれを使った描写が見られないことから魔法使いはこれをレジストできるのでは？と考えました。

・投影（グラーヴィス・イルシオー）、重装。
正確な和訳はイルシオー＝幻想、グラーヴィス＝重い、です。
直訳すると「重い幻想」。
「投影」のラテン語訳よりもイルシオーの方が響きがかっこよかったんだ・・・。
ちなみに「武装」は「アルムス」。こっちも単語の響きのカッコよさから選びました。

・大神宣言（グングニル）と刺し穿つ死棘の槍（ゲイボルク）と……あと五つは轟く五星（ブリューナク）だな。

：どこでブリューナクを見た（登録した）の？　というツッコミはスルーの方向で。グングニルは見たことある（？）っぽい発言をアーチャーがしてたので大丈夫かも？

・士郎のイメージの中にいる相手は、一体何者なのか。
：ラカン師匠です。

・「俺は、弱い自分が大嫌いだった。大切な誰かを守れる力が欲しかった。」
：士郎の半生を考えれば理解して頂けるかと。

・――――ただ……ひとつだけ違うのは――――
：士郎は「エヴァと同等」になろうとし、ネギは「ナギそのもの」を目指しています。

・（ああ、俺も――――――）
：「エヴァの従者になって本当に良かった。」・・・とか、かな？

・・・学期末なので更新速度が落ちるかも・・・。

それでは次回！！

第６０話　進み始める（前書き）

チート書きたい。↑独白

士郎はあとあとチート化する予定なんですが、その設定がまだ脳内なのでそろそろ文章にしてみようかな。

ベッドで寝てる時にいいアイディアが出るんですけど、眠いからメモるの怠けて朝になると忘れてるんですよねえ。ちくしょう。

それでは第６０話、どうぞ。

第６０話　進み始める

「何だ……今のっ……！！」

息を荒くして言葉を吐き出す。

ベッドから上半身だけ起こした体は、汗でびっしょり濡れている。

掴んだシーツは皺が出来るほど強く握りしめられている。

いつもは爽やかに感じる朝の陽光も、今は鬱陶しいだけ。

彼は額に手を当てて、見た夢を反芻しようとする。

――――――思い出せない。

何か。大事な何かを見たような気がするのに――――――

（――潮時、なのかもな……）

「――――――行ってみるか」

第６０話　進み始める

「ああんアスナ、せっかくチャンスやったのにー」
「あんなに勇敢な明日菜さんが……以外です」
「わっ！　み、見てたの！？」

『世界樹の前で告白すると恋愛が成就する』
『一緒に学園祭を回っていいムードを作ってから告白しよう』
・・・などの噂・情報に後押しされ、タカミチを学祭デートに誘おうとした明日菜だったが……失敗してしまった。

「…でも刹那さん……告白するのに必要な勇気に比べたら、化け物相手に暴れる勇気
なんてどーってことないよ……。」
「あ……そ、それはわかる気がします」

「……いい。私片思いで……。ずっと片思いで満足……フ…フフ……」

「そんなぁアスナー」
「へへへ。俺っちにいいアイデアがあるぜ。」

「カモさん!?　どこから……」

「「ええっ!?　アスナさん／ネギとデートしろってーーーーー!?」」

寮部屋に二人の叫びが響き渡った。

「そ、いわばデートの予行演習さ。要は”慣れ”よ慣れ。場数を踏めば緊張もなくなって
タカミチを学祭に誘うくらいどーってことなくなるって寸法よ」

「でもええ考えかもなー。丁度明日は休みやし」

「プレ公演などをやっている団体もあるのでデートの下見にもなりますね。」

「だからってネギと歩いてデートの練習になるワケないでしょー!!」

１０歳の少年と１５歳の少女。デートというよりは姉弟のように見えるだろう。

「確かにネギ君じゃー高畑先生の代役には無理あるなー」

「でもネギ先生以外に手近な男の人もいないで……す…し?」

一同の脳裏に、とある喫茶店のマスターが浮かんだ。

「そうだ！　シロウなら大丈夫じゃないかな？」

そんなネギの意見をカモが遮った。

「フッ、旦那の手を煩わせるまでもねぇ。コレがあれば万事解決よ！！

ジャーン♪　『赤いあめ玉・青いあめ玉　年齢詐称薬』～！！

これで兄貴の外見年齢を操作すれば何の問題もないぜ。」

（ふふふ、兄貴と姐さんがもっと親密になるに越したことはねえ。

姐さんには是非

これからも兄貴の従者でいてほしいからな）

（ナイスやカモ君。せっちゃんの前でまた士郎がデートなんてことになったら目も

当てられんからなー）

「わかりました。僕も協力しますよ！　アスナさんの恋のために！！」

「う……」

自分のためと言われてしまえば、簡単に断ることは出来なかった。

◇―――◇―――◇

「Ｇｕｒｕｒｕ．．．．．．．．．」

「よし、良い子だ。」

無理矢理　竜を大人しくさせる。

彼の両手には竜殺しの剣。最強の魔剣・原罪（メロダック）と太陽剣・グラム。

ここは学園地下。

ビルほどの高さの大樹が無数に茂り、大地には草花や苔が生えている。

地下だというのに暖かい日光が差し込み、辺りを照らしている。

以前、ネギがのどかと夕映を連れてやってきた場所。彼は再びこの場所を訪れた。

――――――ガゴンッ――――

重い扉を開けて、明かりのない暗い階段を下りて行く。

すると。

大きな滝があった。ぽっかりと穴が開いたようになった場所に水が流れ込み、滝のようになっている。水の周りには陸地があり木々が茂っている。どこかに繋がっているのか？

そして中央に、建造物が存在した。

「おやおや……あの門番を抜けてここまでやって来るとは……随分と奇特な方がいた

ものですね」

妙に頭に響く声だった。

その出所を探ると、建物のテラスに人影を見つけて――目を剥いた。

「……おいおい」

（知ってるぞあの顔……！！）

大戦の英雄『紅き翼（アラルブラ）』の一人。サウザンドマスターの盟友。

「――――――”アルビレオ・イマ”……！？」

呟いた彼の頭上に、黒い球体が現れた。

◇――――――◇――――――◇

「えっと、待ち合わせは工科大前のカフェだったよね・・・」

赤い髪の少年が、学園都市を歩いていた。

「ちょっちょっと今のカッコイイ人誰！？」

「げ！？　ちょっと見てアレ！！」
「わわ？　カッコイー？」
「ん……あのにーちゃんかなりデキるな。でもどっかで見たコトあるよーな」

「もー……このかや刹那さんまで一緒になって……」

カフェの前の壁に寄り掛かってネギを待つ明日菜。

『別にええやんアスナー？』
『兄貴の大人版、楽しみにしてな♪』

「予行演習なんていいって言ったのに。大体ネギと練習したって緊張なんてするわけないし、意味ないんじゃないかなぁ？」

（……はあ。）

思わず溜め息をついて空を見上げた。

「すいませんアスナさん、遅れちゃいました。」

「――――な゛っ……！！」

目の前に現れた男性に、明日菜は思わず顔を赤くした。

「やっぱり30代のオジサンは無理だったので、アスナさんと同じ15歳なんです
けど……ど、どうでしょうか？」

線の細い感じの整った顔で、アスナよりも高い身長。

バッチリだった（色んな意味で）。

◇――――――◇――――――◇

「……っ！！」

後ろを振り返る。さっきまでいた場所は重力に押し潰され、橋が粉々に崩れてしまった。

「ふむ。ここまでやって来た実力はホンモノのようですね」

背後にアルビレオが立っていた。

「！！　来た（アデア）――」

「ああ、警戒しなくて結構ですよ。戦うつもりはありませんから」

「――――――何？」

ローブの下で手を組んだまま、アルビレオ・イマは笑みを浮かべて言った。

（いきなり不意打ちしてきたのは誰だ？と言ってやりたいが……勝手に入って来たのはこっちだしな……）

そうして逡巡する彼を見つめながら、アルビレオはニコっと笑う。胡散臭い、作られた笑みだ。

「どうぞお上がりください。紅茶くらいは出しますよ」

そう言って建物の中へ消えていくアルビレオに従った。

◇――――――◇――――――◇

学園祭実行委員会の飛行船が空を飛び、あちこちで宣伝用の櫓（やぐら）や看板の組み立てが行われ、いくつかの大学サークルのプレ公演が行われている。

「学祭前の休日だけあって準備に熱心ですねー」

「そ、そーね」

その雑踏の中をネギと明日菜が並んで歩く。

「いやー僕　デートってしたことないので。なんかドキドキしちゃいますね。」

（デートじゃない……デートじゃないって！　ていうか何　緊張し

てるのよ私。そりゃ予想外にカッコよくてちょっとビビったけど……！！）

「……か、勘違いしないでよねバカネギ」

「はい？」

「いい？　これはあくまで予行演習なのよ　よこーえんしゅー！！　魔法で大きくなってちょっとカッコよくなったからっていい気になんないでよ！？」

浮かれたネギを大人しくさせるためにハッキリ言ってやった。……が。

「え？　僕ってちょっとカッコイイですか？　やった♪」

「……そのカオであっけらかんと言われるとかなりカチンと来るわね」

効いてなかった。

「だ、大体　私はガキも嫌いだけど、今のアンタみたいなカッコイイだけのチャラチャラしてるタイプも嫌いなの！！」

「でもアスナさん、僕はアスナさんの予行演習のためにこの姿になったんですよ？　それにそんなプンプンしてたらデートの練習になりませんよ。」

「う……そ、それはそうだけど……」

（……別に私が頼んだ訳じゃないもん）

そんな事を思っていると、いきなりネギがぐっと顔を近づけてきた。

互いの前髪が当たるくらい近い。

――――ドガンッ！！

「なっ、なっ、何なのよ！！」

明日菜が力づくで押しのけた。具体的には鉄拳で。

「いえカモ君が『今の兄貴のツラで迫れば姐さん絶対動揺する』って言ってたので」

（カモ後でひねる！！）

「それじゃあデートに行きましょう！！」

「ちょっと予行演習だってば！！」

明日菜は「デートではない」と頑なに主張しているが、「喧嘩するほど仲が良い」を
地でいく二人は周りの人間に立派にカップルとして認識されていた。

◇――――――――――◇――――――――――◇

「詠春の養子でラカンの弟子とはまた……君も随分と数奇な人生を送っていますね。
とても興味深い。是非ともその人生を収集したいものです」

「……はぁ」

（人生の……収集？）

「ええ、他人の人生の収集が私の趣味ですから」

なんとまあ。聞いた印象だけで「趣味が悪い」と判る趣味である。

しかし「人生の収集」とはどういうことなのかさっぱりわからない。

「ならば実演して差し上げましょうか？　そうですね。君のお父上などはどうでしょう」

おもむろに椅子から立ち上がると、彼はカードを取り出した。

「来たれ（アデアット）」

空間に無数の本が現れた。それらがアルビレオの周囲を取り巻くように浮遊する。

その内の一冊を手に取り、栞を挟んで、引き抜いた。

「……！？」

アルビレオの手にある栞が、導火線のように光を放ちながら短くなっていく。

そしてそれが消えた瞬間。

辺りは光に包まれた。

「いかがですか？　父親の若い頃の姿は。これが私の言った『人生の収集』。
　アーティファクト『イノチノシヘン（ハイ・ビュブロイ・ハイ・ビオグラフィカイ）』の能力です。」

光が収まった後には、野太刀を持った若い詠春が立っていた。
口調を見るに性格はアルビレオのままのようだ。

記録した人物の”外見的特徴と能力”の完全再現。それが『イノチノシヘン』の能力。
さらにもうひとつ、「第二の能力」が――――

「……まさしく『人生の収集』ですね」

（しかしまさか…父さんのデコの広さは昔からだったのか。てっきりハゲてきてるのかと）

アルビレオは発動を解いて元の姿に戻った。

「フフフ……しかし士郎君。キミはこんなものを見に来たわけではないでしょう？」

「……。」

「いいでしょう。君の知りたいことをお教えします。ただし私の話せる範囲で、という
条件付きですが」

「こちらが切る札は俺の半生――ってトコですか」

「流石、話が早い。それでは準備を始めましょう。人ひとりの『半生の書』を作るには儀式が必要でして」

アルビレオは嬉々として動き回る。他人の人生を覗くのがそんなに好きなのか。

本当に趣味が悪い。

士郎は『イノチノシヘン』に己の半生を登録した。

そして。

「それではお聞きしましょう。君が知りたいこととは一体？」

◇――――――◇――――――◇

「今日は付き合ってくれてありがと、ネギ。私やっぱ頑張ってみるよ。

勇気出してさ。」

「……ハイ！　アスナさん。」

「あ、アスナさん。アレが世界樹前で話題のカフェですよ。オシャレで美味しいって言ってました」
「へーイイ感じね♪」

上の街道からカフェを見下ろす。店名「北欧料理イグドラシル」。イグドラシルとは北欧神話の世界樹「ユグドラシル」の英語名。麻帆良の「世界樹」付近に店を出すに当たって考えた名前なのだろう。

――そこに。

「ん……？　あれは……」

◇――――――――◇――――――――◇

「ありがとうございました。」
「いえいえ、こんな地下まで足を運ぶ気があればいつでも歓迎しますよ。」

話を終え、アルの家を辞することにする。帰ろうと背を向けると、破壊された橋が
目に付いた。

「ああ、うっかり壊してしまったのでしたね。これは困りました。

幻影（このからだ）では修理も
ままなりませんし……」

（ついさっき紅茶を飲んでたのは誰だ。アーティファクト使ってたのは誰だ。）

結局、アルが言いたいことを察して自分から申し出た。

「俺が直しますよ。投影して補強すればすぐに済みます」

「おやそれはありがたい。客人にそんな事をさせるのは気が引けますが……お願いしましょうか」

（なんて白々しい。「半生の書」を読んで俺の投影を知ってるくせに。直させるように会話を持ってったくせに）

士郎はアルビレオ・イマという人物を理解したような気がした。

「士郎君。帰ったらエヴァンジェリンを『キティ』と呼んでみてください。きっと喜びますよ」

絶対　嘘だと思った。

◇――――――――◇――――――――◇

夕暮れの世界樹広場、明日菜は何をするでもなく一人で佇んでいた。

――高畑先生としずな先生が一緒に食事してて――
――慣れているような、とても自然な仕草で高畑先生の口の煙草を灰皿に――
――それを高畑先生は、ただ苦笑いして――

「――ア、アスナさん　どうしたんですか！？」

ネギがようやく明日菜を見つけて追いついた。

「さ、さっきのタカミチとしずな先生を見たから……？」

「いや……、うん……。」

「で、でも二人はただ食事をしてただけだし、アスナさんが想像してるようなことじゃ……！！」

「それは…そうなんだけど、あの雰囲気がさ……」

明日菜はもう――――――諦めてしまった。

「私バカだし……乱暴だし、友達も多くないし。性格的に…あんまり人に好かれるタイプじゃないし……きっと高畑先生も……」

「な……そんな事ないですよ！！」

口から出たそれはネギの本心からの言葉。何度、ネギは何度　明日菜に助けられたことか。
それにただ乱暴なだけなら、木乃香や委員長が友達になったりする筈がない。

「アスナさんはしっかりしてるし強いしキレイだし、ぼ、僕は……」

『このまま頑張れば、あんたもいつかはいい先生になれるかもね』

『頑張り過ぎて体壊しちゃ何にもなんないのよ～～～？』

『私、心配なのよアンタのことが。無関係なんて言わないで、ちゃんと見てよ。』

『……何　悩んでるのか知らないけどさ。今日は安心して眠りなさい』

「僕はアスナさんのこと……ずっと好きでしたよ。」

「……え……」

「それにこのかさんも刹那さんもカモ君もアスナさんのこと好きだし、いいんちょさん
だってホントはアスナさんのこと大好きですよ！！
だからタカミチだって絶対　大丈夫です！！」

「――――――ぷっ……！」

「……へ……？」

「ホント……あんたガキね。……バーカ……。」

「ええっ！？　な、何でバカなんですか！？　ぼ、僕はアスナさんを励まそうとして……！！」

「バカだからバカっつったのよ」

（――とっくに励まされたわよ……。）

「バ――カ？」

「むむ……！！」

「大丈夫。ダメでもちゃんと告白するわよ。――ありがと、ネギ」

その日の夕焼けは、一際　奇麗な燈色に染まっていた。

余談。もしくは蛇足。

「……。」

――ガチャッ

「ただいまーキティ」

「うむ、おかえり」

（――あれ、気づいてない……。ま、いいか）

「茶々丸、今日は何を作ってるんだ？」

「おかえりなさい士郎さん。本日の夕食は……」

「……士郎」

「ん？……わーお」

後ろに立つエヴァの足元には、割れた試験管が二つ。

そして彼女からは魔力が迸っていた。

「誰だッ！！　誰からその呼び名を聞いた！？」

茶々丸が止めるまで、首根っこを掴まれて頭をガクガク揺らされるハメなった。
しかしその時にはもう手遅れで、士郎は顔を真っ青にして気絶していたという。

第６０話　進み始める（後書き）

～補足・解説～

・（――――潮時、なのかもな……）
：「潮時」というのは本来は「物事を始めるのに良い時期」という意味です。昨今では悪い意味で使う場面が多いですすが、こちらが本当の意味です。
　つまりこのセリフは「そろそろかもな」というニュアンスです。

・最強の魔剣・原罪（メロダック）
：ギルガメッシュがカリバーンを折りやがった時に使った剣。この剣に関してはある資料を読んで書いたんですが、メロダックはグラムの原典だからって一緒に紹介されてたんですよ。おかげで「最強の魔剣」「竜殺しの属性」はメロダックのことを言ってるのかグラムのことを言ってるのかわかんなかったです。多分グラムの事なんだと思うけど、竜殺しの剣がもう一振り欲しかったので設定捏造。Ｆａｔｅに出てないけど「アスカロン」も竜殺しなんですよね、そっちでも良かったかも。

・士郎は『イノチノシヘン』に己の半生を登録した。
：『イノチノシヘン』の能力は「その人の能力を再現する」こと。士郎に出来ることは全て再現できるのハズなので、投影も固有結界も使い放題です。多分ね。固有結界って色々面倒な設定があるから考察も一苦労です。クロスオーバーってこういう時に困りますねー。
　ネギま！世界の魔法って常識破りなデタラメ能力多いし、この考察で大丈夫だと思いますが。

・余談。もしくは蛇足。

：皆さん予測できたであろう展開だとは思いますが一応書きました。
士郎は「キティ」って呼ぶつもりは絶対なかったんですが、段々気になってきて、最後には好奇心に負けてしまった、という流れ。
士郎、アルの術中に見事に嵌まってるなw

それでは次回！

第６１話　前日から波乱（前書き）

これで日常編は終わりです。

次回から学園祭編が始まります。但し・・・・・・。

・・・・・・はは。

第６１話　前日から波乱

お化け屋敷の作成作業が遅れに遅れ、３－Ａは学校に無断で徹夜作業を行った。
とはいえその程度の校則違反はこの時期ならばどこでも当然のようにやっている。
結局彼女達はそのまま朝を迎えた。今日は麻帆良祭前日、前夜祭の日である。

職員室に向かうネギと美術部に向かうアスナ、ついてきた木乃香と刹那も一緒に学園を駆ける。

「さすが前日だけあって変なのがいっぱいですね。」
「ホンマやなー♪」

学内には「ヘンなの」としか形容のしようがないモノで溢れていた。

「あらネギ先生、丁度よかった」
「あ。しずな先生」
「学園長先生がお呼びよ。ただ校長室でなくて世界樹前広場に来て欲しいって。
　出来れば桜咲さんにも来てほしいそうよ。」

その場で明日菜・木乃香と別れることにした。

「一体なんでしょうねー？」
「……さあ……あれ？」
「どうしたんですか？」

学園中に人が溢れているのに広場一帯には――誰も居ない。

「おや、ネギ君」

声のした方へ目を向ける、と――――

「――待っとったぞ。」

第６１話　前日から波乱

――――其処に居並ぶ集団が。

「へ……」

二人のシスター。　タカミチ。　瀬流彦。　女子中等部の生徒。
小太郎。
芸大付属中学の生徒。　小太りで細目の男性。　明石教授。
ウルスラ女子高の生徒。　眼鏡をかけた色黒の男性。
サングラスにスキンヘッドの大柄な男性。　野太刀を抱えた長髪の女性。
濃い髭を生やしたサングラスの男性。

そして彼らの中央に立つ学園長・近右衛門。

「あ、あのー……この人達は……？」
「うむ、ネギ君には紹介がまだじゃったの。
ここに集まっとるのは、この学園都市に点在する小・中・高・大学に常時勤務する
”魔法先生”……及び”魔法生徒”達じゃよ。全員ではないがの」

「え……えええっ！？」

驚きで叫んでしまう。ネギには寝耳に水な情報だ。
並んだ者達の中には見知った顔もあり、驚愕はさらに深まる。

「やあネギ君」
「いやー、黙っててゴメンね」

「あ、明石教授……に、瀬流彦先生も魔法先生……？」

（この学園にこんなに魔法使いがいたなんて……。）

「……さて、あと来とらんのは1人じゃのう」

「ちわーす。……あれ、もしかして俺　最後ですか？」

ネギの後ろから新たな人物の声。しかしネギには聞き慣れた声だった。

「うむ、来たかしろ「士郎君。」」

近右衛門の声を遮ったのは、野太刀を持った長髪の女性――葛葉刀子だった。

「集合時間はとっくに過ぎています。ネギ先生は連絡が遅れたので仕方ありませんが……貴方は一体どういうことですか？」

剣呑な空気が彼女から発せられる。

（……え？　何これ？）

（気にしないでください先生、いつものことです）

混乱するネギに刹那が耳打ちした。

周りも分かっていて、「またか」といった顔をしている。

「――まったく、貴方は仮にも近衛の名を与えられているのですから、もっとそれを

自覚して節度ある行動を――」

「はい……はい、すんません……」

「まあまあ刀子君、そのへんにして――」

「学園長がそうやって甘やかすからこうなるのです」
「……シュン……」
ネギ（学園長――――――――！！）

一応言っておくが、士郎は近衛の名字を与えられていただけで正確には養子ではないし、修学旅行時に詠春と話し合って戸籍上の名前も旧姓の「衛宮」に戻している。
しかし近衛家の家系図にはなぜか士郎の名前がしっかり書いてあるのだ。これは詠春も
木乃香も譲れないらしい。

よって今でも士郎は「近衛家の一員」扱いを受けている。
それを理由に刀子は事ある毎に士郎につっかかってくるのだ。
「近衛の名に相応しい態度をとれ」と。
……ただ、本当の理由は――――

「――――これもあの人の下についているからです。士郎君、いい加減　エヴァンジェリン
　とは縁を切りなさい」

これが言いたいのである。

「その通りだよ士郎君。あんな犯罪者の従者などやめるべきだ。」
眼鏡をかけた色黒の男性――ガンドルフィーニが口を出した。
「なっ！　師匠（マスター）は犯罪者なんかじゃ――――」

（落ち着いてください先生、大丈夫です。）
「刹那さん!?」
ガンドルフィーニのエヴァンジェリンに対する言い様にネギが抗議しようとしたが、
刹那に押し止められた。
（さっきも言ったでしょう。いつもの事だと。見ていてください、すぐに済みます）
（……？）
刹那の視線の先では士郎が苦笑しながら頭を掻いていた。
「お二人とも、俺を心配して言ってくれるのは嬉しいんですが……」
“――――――――その位にしてもらえませんかね？”
――――ゾクッ!!
「「……ッ!!」」
――――目が、笑っていなかった。
確かにエヴァンジェリンは多くの人間を殺した元賞金首だ。だが本当の彼女を知る者にとっては刀子やガンドルフィーニの言うことなど戯れ言でしかない。
そんな戯れ言に付き合うほど、士郎は甘くない。

（何やあのにーちゃん、あんなカオも出来るんか……戦ってみたいわ）

士郎が二人を黙らせたところでようやく、近右衛門が口を開く。

「そろそろ……本題に入ってもよいかの？」

異論はなかった。

◇――――――――――◇――――――――――◇

生徒達に世界樹と呼ばれる木は正式名称を『神木・蟠桃』という。
その正体は強大な魔力を秘めた『魔法の樹』。
２２年に１度の周期でその魔力は極大に達し、世界樹を中心とした六ヶ所の地点に
魔力溜まりを形成する。その六ヶ所の地点が「世界樹前広場」である。

「この膨大な魔力が人の心に作用する。よって即物的な願いが叶うことはないが――
　こと告白に関する限り、その成就率は１２０％！！　まさに呪い級の威力じゃよ！！」

「……はあ――――……。」
「んなアホな……」

ネギ・小太郎・刹那は口をあんぐり開けて驚いている。

「本当は来年のハズだったんじゃが、異常気象の所為か1年早まってしまったことが昨日
分かっての。それで今日の緊急招集と相成ったワケじゃ。」

「でも恋人になれるならいいんじゃないですか？」

「とんでもないぞい。人の心を永久に操ってしまうなど魔法使いの本義に反する。
好きでもない奴と恋人になってしまうなど嫌じゃろ？
じゃがこの噂、生徒の間にかなり広まっておる。」

「女生徒は占いや迷信好きな子が多いですから……実行したがる人は少なくない
でしょうね」

「そういうことじゃ。マズイのは最終日じゃが、今からでもそれなりに影響は出始める。
生徒には悪いが、この六ヶ所で告白が起きないよう見張っていてほしい。」

「校長先生。」
「む？」

刹那と同じ制服を着た生徒――佐倉愛衣（メイ）が空を見つめた。

「――誰かに見られてます」
「何？」
――ボヒュッ！！
濃い髭を生やしたサングラスの男性――神多羅木が指を鳴らすと、
彼の手からカマイタチが飛び出した。
「おおっ！！」
「面白い無詠唱呪文だろ。」
感嘆の声をあげるネギに士郎が話す。
カマイタチが空中の飛行カメラを真っ二つにした。
「魔法の力は感じなかった…機械だな。」
一仕事終えた、といった趣で煙草をふかす神多羅木。
「生徒か、やるなー。人払いの結界を抜いてくるとは」
「ウチの生徒達は侮れないですからねー」
非武闘派の明石と、小太りで細目の男性――弐集院は落ちていくカメラを眺めながら
そんな会話をしていた。
「追います」
「深追いはせんでいいよ、こんなことが出来る生徒は限られとる。」
「ハイ」

ウルスラ女子高の生徒――高音・D・グッドマンは静かに使い魔を走らせた。

「――さて、たかが告白と思うなかれ！！　事は生徒達の青春に関わる重大な問題じゃ！！　但し魔法の使用にあたってはくれぐれも慎重に！！　よろしく頼むぞ！！
以上解散！！」

◇――――――――――◇――――――――――◇

明日菜の絵を見に行くため、揃って美術部の部室へ向かう。

「アスナって美術部なんか。動きは素人やから武術はやってへんて判ってたけど、運動部かなんかに入ってる思うとったわ。何であんな動き出来んねん」

出店で買った菓子を食べながら小太郎が言う。
学園祭の影響で、辺りはすっかり出店だらけになっている。何故か野菜や果物まで売られていて、見た目は外国の市場のようにも見える。

「でも驚いたなー。世界樹もそうだけど、この学園にあんなに魔法使いがいたなんて」
「でもアイツら戦ったら大したコトないやつらばっかやで。やっぱ

西洋魔術師はアカンなー」

「もー、すぐそっちに持っていくんだから」

「戦うのが好きなんですね」

「……兄貴。魔法先生の仕事入ったらスケジュール……ヤバイんじゃ」

「！！！！」

「？？　どーしたネギ？　何止まっとんのや」

往来の真ん中で立ち止まる。

顔を真っ青にしたネギは、震える手で鞄から手帳を取り出した。

「何やそれ……うげっ……！！」

「どうかしましたか？」

開いたページにはスケジュール。

ネギの学祭の３日間は、２０人以上との予定でパンパンになっていた。

しかも同じ人物と複数の約束をしているものもある。

そこに更に魔法関係の仕事が入るのだ。

「こ、これは大変ですね――…」

「こんなのもう無理だよ……」

「こりゃマジでお手上げかもな」

ネギは泣きながらスケジュール表とにらめっこしていた。

「しっかし女との約束ばっかかいな。見損なうでホンマ」

「ちっ違うよ、僕は先生として」

――――――ドガシャアァァァンッ！！！

「うわぁ！？」

「何や？」

ネギの真横の屋台がいきなり崩れた。

よく見ると誰かが屋台にぶつかった――いや、落ちてきたようだ。

「だ、大丈夫ですか…って、あなたは――」

「ネ、ネギ坊主、丁度良かった　助けてくれないカ。私　怪しい奴等に追われてるネ。」

テストは毎回　全教科満点の天才。大学工学部に顔が効く「麻帆良の頭脳」。

中国武術を嗜み東洋医術に精通する「完璧超人」。中華屋台「超包子」オーナー。

そこにいたのは３－Ａ出席番号１９番。ネギの生徒　超鈴音（チャオリンシェン）だった。

◇――――――◇――――――◇

「じいちゃん、ちょっといいか？」
「うむ？」
魔法関係者が解散した後、広場には近衛右門・タカミチ・刀子・士郎が残っていた。
「いくつか話したいことがあるんだけど……、まずさっきの『こんなことが出来る生徒は限られてる』って話。俺もあんなことが出来るヤツにはいくらでも心当たりあるけどさ。じいちゃんは実行するような奴に目星がついてるのか？」
（――――――ギクッ。）
「何を言っているのですか士郎君。そのような人物など彼女、チャオリ「おおそうじゃ！！久しぶりにお主の料理を食べたくなってきたのう！！今から行ってもいいかの？」」
刀子の言葉を近衛右門が遮った。
「刀子君、タカミチ、話があるなら士郎の店にせんか？そこで美味しい茶でも飲みながら――」
「……どういうことだ」
祖父を睨みつけた。
刀子は顔に疑問符を貼り付け、タカミチは苦笑している。
「ど、どう、とは？」

明らかに狼狽している。冷や汗を流し、士郎と目を合わせない。

「学園長……これ以上は無理ですよ」

「タ、タカミチっ！！」

タカミチも一枚噛んでいるような口ぶり。

状況が分かっていない辺り　刀子は無関係のようだが、問題は近衛右門の今の発言。

「――――教えろジジイ。どういうこった」

今度は声に怒気を含めて問いかけた。

◇――――――――――◇――――――――――◇

超（チャオ）を追っていたのはガンドルフィーニ・高音・愛衣の3人だった。

ネギは生徒を守ろうとし、3人は魔法使いの会合を覗いた要注意人物を捕らえようとした。

結局。お互いの正体を知らぬまま戦闘となり、そこでようやく事態が発覚した。

ガンドルフィーニの話では、超は学園との協定で魔法をある程度知る許可を受けているのだという。しかし学園の許可した範囲以上に知ること、知ろうとすることは協定に違反する。超はそれを破る常

習犯であり、前回注意された際に「これ以上　違反を行った場合は記憶消去もありうる」と含められていたという。

「――待ってください。確かに超さんは何か違反をしたかもしれません。
でもだからって、僕の生徒を勝手に危険人物とか凶悪犯とか決めつけないでください！
彼女は僕の生徒です、僕に全て任せてください！！」

――言いきった。
毅然とした態度。相手の目を見つめる強い瞳。子供ながら大人に啖呵を切る胆力。

（……ふむ……。）

ガンドルフィーニは、ネギに対する認識を改めた。

「……わかった。今日の所は君を信頼しようネギ君。
しかし超君、次はないぞ。今度なにかあったら私も見逃す気はないし、ネギ君でも庇いきれないと覚えておきたまえ」

「……ハイ」

「では後は任せたよネギ君」

「……ふう。」

何とか場を収めて一息ついた。

「ケッなんや。教師なんてどこ行ってもエラソーやな」

「まあ、それが仕事ですから」

「いやーホントに助かったヨ。ネギ坊主は私の命の恩人ネ？」

「そんな大げさですよ。でも超さん、危険人物って言われちゃうなんて一体何したんですか？」

「ふふふ、それはヒミツネ」

「ダメですよ、僕　責任があるんですから」

「――それよりネギ坊主、何か困っていることはないか？」

「え？」

あからさまな話題転換だったが、深刻な悩みを抱えたネギは即座に食いついた。

「恩に報いるためにネギ坊主の悩みを一つ解決してあげるヨ。この超鈴音の科学の力でネ？」

◇――――――――◇――――――――◇

（今回は少し軽率が過ぎたナ。イザという時は力ずくで逃げる算段だたが……ネギ坊主のお陰で穏便に済んだヨ？）

ネギ達と別れ、工学部の廊下を歩く超。自分の研究室に向かう。

（計画は実行直前だ。目をつけられないに越したコトはない）

――――ガチャッ。

「あ、超さん！　よかった、無事でなによりです」

「ナハハハ。なに言ってるネ　ハカセ、あの程度ワタシにかかれば造作もないヨ♪　と

いうのは冗談で、かなり際どかったんだがネ」

「そうでしたか。あ、それと……超さんにお客さんです」

「ウム？」

ハカセは何処か気まずそうな顔をしている。

「教授か？　まだ観測データは纏まってないんだが、それとも別件かナ？」

いや、それなら「お客さん」などと遠回りな言い方はしない。一体誰だと思った時。

「ここ、コーヒーしか置いてないのな。胃が荒れるぞ？」

「……そういうのは客人がするコトではないヨ　衛宮サン」

３人分のコーヒーをトレイに乗せて士郎が奥から出てきた。

資料に埋もれていたテーブルを引っ張り出して三人で座った。

「……で？　衛宮サンは私に何の用があるのかナ？」

士郎はカップをテーブルに置いて答えた。

「エヴァとはどういう関係なんだ？」

「どうとは？」

「何も知らずにこんなコト聞きにくるなんて思っちゃいないだろ？
しらばっくれずに
答えてほしいんだけどな。」

『エ、エヴァの奴に口止めされとったんじゃよ。お主に決して超鈴音の情報を与えるなと』

「そうカ。ならば私も学園長と同じ。ただの被害者だヨ」

「被害者？」

「そうヨ。話を聞くに学園長はエヴァンジェリンに脅されてたんだろう？　それと同じ。
私も言われてたヨ。『衛宮士郎に接触するな』――私の方からアナタに接触するなとネ。だから今回のコトは何の問題もない。アナタの方から私に会いに来たのだから」

「……！？」

超の目を見るに嘘はついていない。しかし、ならばどういうことだ。

「混乱してるみたいネ。無理もない、私も何故そんなコトを言われたのか分からない。
――しかし光栄だヨ。あの衛宮切嗣氏の御子息に対面できるとはネ。」

更に混乱するような言葉をぶちまけられた。

「オヤジを知ってるのか？」
「……そうネ。これ程度なら話しても問題ないカ。――少しお話を聞いてもらおう。
とある少女の話ネ」

ここから遥かに遠い場所。そこに一人の少女がいた。
その少女にはどうしても叶えたい願いがあった。
しかしそれを実現するには「ある手段」を実用化する必要があった。
少女は文字通り寝食を忘れて研究に没頭した。
しかし一度、一度だけ挫折した。
「もう、無理だ」と。
心が折れたわけではない。願いを諦めたわけではない。
「ある手段」を開発するのに必要な、技術的問題を克服できなかったのだ。
夢に、思想に、願いに。力がついていかなかった。

そんな時、ある文献が目に入った。

「『”Ｔｈｅｏｒｉｅ　ｄｅｒ　ｚｅｉｔｇｅｓｔｅｕｅｒｔ”Ｍａｇｉｅ』――『魔法の”時間制御の理論”』。
魔法による時間制御に成功したという、真偽の定かでない眉唾モ

ノの記録。」

少女は魔法が科学で実験検証が可能だと知っていた。
そして科学こそ至高の技術と考えていた。もし、この資料の内容が真実なら。

”魔法で出来るコトが科学で出来ないハズがない――――――――。”

「少女は奮起して研究を再開し――――「ある手段」を、実用化に漕ぎつけたのヨ」

（――――――――まさか）

「そう、そこにはアナタの父親の名前が載っていた。」

悪戯っぽく笑った後、超は唇に指を当てて呟いた。

「――――――『Ｔｉｍｅ（固有時制御）　ａｌｔｅｒ』」

「……ッ！！」

ガタンッ！と音をたてて立ち上がる。

「おっと、これ以上話すコトはないヨ。私達はこれから用事がある。お帰り頂こう」

「……そうか。ならこっちから言っておくよ」

「……ム？」

◇――――――――――◇――――――――――◇

「――で、これ貰ったの？」
「は、はい、スケジュールが大変って言ったら……」
アスナの手には懐中時計のような物が握られている。
複数の羅針盤が重なったような基盤が見える。
「何の役に立つのよコレ？」
「さ、さあ……超さんは後で説明してくれるって言ってましたけど」
「超さんの発明は怪しいからなー」
「あー！　いたいたネギくーん！！」
3－A生徒達が揃って集まってきた。
「こっちこっちー！　早くしないと前夜祭始まっちゃうよー」
「ネギ先生どうぞ御一緒に？」
「あ、はーい！！」
「さ――て……麻帆良祭の始まりだ――――――っ！！！」
「いえーーーーーーーい！！！」

世界樹が魔力で発光し、花火が夜空を綺麗に照らした。

その空を飛ぶ飛行船、その上部。

「そういえばネギ先生達はどうでしたか？」

「うむ、思てたより良い奴だたよ。気に入たネ♪」

地上より著しく気温の低い上空で会話する3人の少女達。茶々丸、ハカセ、超。

「うまく仲間に引き込めれば――――かなり使えるかもしれぬヨ。……む、茶々丸どうした？」

茶々丸が微妙な表情をしてあさっての方向を見ている。心ここに在らずという感じだ。

「……いえ、大したコトではありません」

「ほう？　創造主たる私達に隠しごととは、随分とＡＩが進歩したネ。」

「そーでしょう。もーだいぶ人間らしい反応　返してくれるようになっちゃって、からかうのが楽しいんですよー♪」

「ハ、ハカセそれは……」

思いっきり遊ばれている。

「それで？　何　考え事しちゃってたの？　大したことなくても聞くよ？」

「……その、マスターと士郎さんがケンカしていないかと心配で……」

「「……。」」

『士郎に超鈴音の情報を与えるな』　『衛宮士郎に接触するな』

エヴァンジェリンの行動を知って、今ごろ二人の間では険悪な空気が流れていることだろう。茶々丸はそれが心配でならないが、彼女は「計画」のため学祭期間中は超・ハカセの元にいるので家には帰らない。だから余計に不安が募るのだ。

「……少しだけ、グッときたヨ」

「ええ、心優しい娘に育ってくれて……グスッ」

「ハカセ……科学に魂を売った私達に涙は似合わないネ」

「そ、そうでした」

「あ、あの……ハカセ？　超？」

生みの親　二人は、愛娘（？）の成長に胸を打たれていた。

「あ、そういえばさっきの士郎さんの話、本当なんでしょうか？」

「ああアレネ。真偽の程は明日になれば判る。仮に本当ならば好都合。

学園側の戦力が――――――　一人減ってくれたヨ」

超は不敵に笑って眼下の街を見下ろした。

◇――――――◇――――――◇

学園長室の机に座って花火を眺める。しかしその目は何も映していなかった。

『いくつか話したいことがあるんだけど……』

（まあ、あやつにも何か思う所があるのじゃろう……）

『――――――俺、明日から１０日間くらい麻帆良を離れるから』

超が麻帆良祭で計画を実行しようとしていることなど、この時点で誰も知らなかった。

第６１話　前日から波乱（後書き）

～補足・解説～

・「あ、明石教授……に、瀬流彦先生も魔法先生……？」
：原作と違ってネギと明石教授は知り会ってます。勿論「アルトリア」で。二人が偶に会うと裕奈の話題になります。

・「ちわーす。……あれ、もしかして俺　最後ですか？」
：魔法生徒じゃないけど士郎も召集されました。まー実力者なんで。

・刀子は事ある毎に士郎につっかかってくる
：刀子さんは士郎が嫌いなワケじゃありません。どちらかといえば好きな方。でも彼がエヴァの下にいる（エヴァの従者やってる）ことが気に入らないらしい。
　ガンドルは「紅き翼」のジャック・ラカンの弟子である士郎が元賞金首の闇の幼女に従っていることが不満。

・“――――――――その位にしてもらえませんかね？”
・士郎が二人を黙らせたところでようやく
：「士郎は怒らせると怖い」ことは麻帆良の魔法使いの常識。

・（何やあのにーちゃん、あんなカオも出来るんか……戦ってみたいわ）
：書いてて「バトルマニアもここまでか」と思いました。でも月詠さんに比べたら全然ノーマル。超ノーマル。

・「教授か？　まだ観測データは纏まってないんだが、それとも別件かナ？」

：この教授は原作で登場した「量子力学研究室」の教授のことです。

・「ここ、コーヒーしか置いてないのな。胃が荒れるぞ？」

：彼女達がコーヒーに求めるのは脳の覚醒、眠気覚まし効果のみ。

・『”Ｔｈｅｏｒｉｅ　ｄｅｒ　ｚｅｉｔｇｅｓｔｅｕｅｒｔ”Ｍａｇｉｅ』

：この文献資料は手書き作成だった。

著者の名前はＪｕｂｓｔａｃｈｅｉｔ　ｖｏｎ　Ｅｉｎｚｂｅｒｎ．と記されている。

・「――――――『Ｔｉｍｅ（固有時制御）　ａｌｔｅｒ』」

：一応言っておきますけど、超が固有時制御を使う予定はありません。

＊切嗣と固有時制御に関連する話は今回だけです。

・この小説オリジナルで登場する衛宮一家はちゃんとネギま！世界に関わっているんだぞ、とアピールしたかったので書きました。

＊学園祭、士郎がまさかの不在！！

・その期間が『約１０日』っていうのがミソです。１０＝３＋７ですからね。ここまで言えば勘のイイ人は分かるかも？

＊エヴァと士郎の行動の理由とは？

それでは次回。

第６２話　学祭編　時計の針は動き出す（前書き）

今回は短いです。

麻帆良祭編のプロローグ的な位置づけになります。

そしてほんの数文を除いてほぼ原作通りです。

あとひとつだけ言っておきます。

「今章は次話より一部の原作シーンを多く省きます」。

具体的には次話を見ればわかるでしょう・・・。

ああ読者の皆様の反応が怖い・・・。

それでは第６２話、どうぞ。

第６２話　学祭編　時計の針は動き出す

麻帆良大学航空部の飛行機が空を飛ぶ。

その空は風船、宣伝バルーン、地上から舞い上がった紙吹雪で満ちている。

「やっばいやばい、一般のお客さん来ちゃうよ！」
「教室に戻らなきゃ」

「毎日お祭りだったらいいのになー♪」
「次はパレード見に行こうか？」

出し物の準備を急ぐ中学生に、見物を楽しむ幼稚園生。
学園関係者は慌ただしく動き回る。

――――ゴォォォォ……！

「わっ、スゴ――」
「キレイに飛ぶなー」

航空部のアクロバティック飛行が始まった。

『――――只今より、第７８回　麻帆良祭を開催します！！』

第６２話　学祭編　時計の針は動き出す

「は……はち？　８時！？　夜の８時！？」

暗くなった保健室の時計は、間違いなく２０時を指していた。

――――ふらっ……

『あや？』
『ちょっと、あんた大丈夫？』
『やっぱ１０歳で２日連続の徹夜は辛かったんちゃう？』

『ちょっと休んできなさいよ。向こうの保健室で休ませてもらえるから』
『ハ、ハイ』
『じゃあ私が付き添います。部活の出し物もないので』

『うう……すいません刹那さん、３０分くらい寝ます……』
『ハイ。しっかり寝てくださいね。』

ネギは今朝の出来事を思い出す。徹夜疲れでフラフラだったので保健室で横になっていたのだ。

「ね……寝過しちゃったーーーっ!?　ど、どどうしよう!?
今日は皆のところ回ったり先生の仕事や格闘大会の予選とか……ぜ、全部すっぽかし!!?」

「え…ええ!?」
「も、もう夜じゃねーか!!」

ネギに付き添っていた刹那とカモも飛び上がる。２人も一緒に眠ってしまったようだ。
困惑する３人が窓を見ると花火が上がり、夜を照らす明かりが見える。日は完全に沈んでおり、時刻が夜である事は間違いなかった。

「ど、どーしましょー刹那さん――!!」
「スススミマセン私もすっかり寝てしまって!!」
「兄貴　のどか嬢ちゃんとの約束は!?」
「今日の午後４時!!」
「「えええぇーーー!!」」

「と、とにかく待ち合わせ場所に――!!」

「し、しかし今行ってももう……」
「いや…あの嬢ちゃんのコトだ……
……４時間ずっと待っててくれてるかもしれねえ……」
……その様子が容易に想像できて、ネギから一気に血の気が引いた。
「も、申し訳ありません全て私の責任です！！」
「んなコト言ってる場合じゃねえだろ！！　兄貴、とにかく待ち合わせ場所に――」
――――――カチッ。
『チュンチュン……チチッ…』
『……ワ――…ワ――……』
窓から陽光が差し込む。見える景色は青い空に白い雲。
外からは朝鳥の囀りと人々の歓声が聞こえる。時計は午前１０時を指していた。
「……え？」

――「朝と同じ」保健室。

「あ、あれ……今……？　外が……あれ？」

「え……１０時？」

「「……え？」」

「……お、おかしいですね――」

「俺達、寝惚けて夢でも見てたのか？」

「時計が壊れてたんでしょうか……」

何とか混乱から立ち直って頭を捻る。しかし直後、さっきの出来事は夢などではなかったのだと証明される。

「あ、あれ！？　僕のケータイは２０時になってるよ！？」

「え！？」

「何！？」

『――ザザッ――只今より、第７８回　麻帆良祭を開催します！！』

『ワアアアアッ！！！！』

「「……えっ」」

「…こりゃあ、まさか……？」

カモに促され、２人は保健室を後にした。

◇――――――――◇――――――――◇

「わ――――♪　スゴイや！！　僕、こんな大きな祭りだとは思いませんでした！！」

「三日間の延べ入場者数　約４０万人。世界でも有数の学園都市の全校合同イベントですから。三日間は昼夜を問わず乱痴気騒ぎのどんちゃん騒ぎというわけです」

「学園内は仮装ＯＫだから歩いてるだけでも楽しいよん♪」

（あ、あれは僕！？　ど、どーいうこと！？）

ネギは驚きを隠せない。彼の視線の先にはのどか、夕映、ハルナの図書館探検部三人娘と一緒に歩く、この時間のネギがいた。その様子を３人は物陰からこっそり窺う。

（私も詳しくはないのですがおそらく……この現象は魔法世界でも実現不可能とされている『時間跳躍術』です）

（これで確定だな。俺達は寝過ごした時間から「戻って」きたんだ。つまり、超から借りたその懐中時計は……「タイムマシン」だ）

（……タ？）

（「タイムマッスィーン」）

（……。）

「えええええええええええ！？　タイムマシン！？　本当に！！？」

（先生　静かに！）

（ホ、ホントにタイムマシンなの！？　スゴイや、僕　映画とかマンガで知ってるよ！！こんな小さいのがホントに！？ホントにタイムマシン！？　僕ねえ、僕ねえ……！！）

（恐竜時代に行きたいな――♪）

（コラ兄貴）

（子供や……）

鉢合わせするとマズイので、1人と1匹は顔を輝かせるネギを引き摺って「8時のネギ」達から離れた。

「でも良かったー！　これでのどかさんとの待ち合わせに間に合いそう！」

「しかしそのタイムマシン……怪しくないですか？」

「ああ。いかに超が天才でもタイムマシンは超科学過ぎる。ましてそんな貴重品を簡単に貸すなんざ何か裏が……」

「もう、何言ってるの二人とも。クラスメイトを疑っちゃダメだよ。それにこれがあればスケジュールも全部解決だし♪　ホントに良かった――♪」

「……アホみたいに何をハシャいでいるんだぼーや？」

「わひゃあっ！？　マママスター！？」

いつの間にか、チャチャゼロを連れたエヴァンジェリンが後ろにいた。学祭期間中は世界樹の魔力が高まるため、、出歩く程度にはチャチャゼロも動けるのだ。

「あ、マスターも仮装ですか？　よく似合ってますよ！」

彼女は真っ白な帽子を被り、フリルとリボンを多くあしらった白い服を着ている。その外見と合わさって本当に人形のように見えた。

「フン、ガキの世辞などいらん。それより、面白そうなモノを持っているな？」

「妙ナ魔力ノ波動ヲ感ジルゼ？」

二人の視線は――ネギの手にある懐中時計（タイムマシン）に注がれていた。

「あっ、いえ、これはその……！」

「ほう？　隠そうとするとは益々怪しい。
――どれ、よこせ。なあに悪いようにはせん……！」

「オ前ノ物ハ御主人ノ物。御主人ノ物ハ御主人ノ物ダ」

なんというジャイアニズム。しかしこのタイムマシンは、過密スケジュールを過ごすネギに舞い降りた救いの天使なのだ。簡単に渡すわけにはいかない。しかし……

「フフフフ……」
「ケケケ……」

怖い。笑い方が怖い。ネギには上手い断り方が思いつかなかった。

「あ、あの……いえ……す、すすすいませーーーーん！！！」
「あっコラ待て！」

ネギ　は　にげだした　！！

「なぜ逃げる――――！！」
「来ないでくださ――――い！！」

・

「ハア…ハア…、何だあいつは」

「御主人　逃ゲラレテヤンノ。……士郎ニモ逃ゲラレタシナ？」

「――煩い、黙れ」

「ケケケ。嫌ワレテンジャネーノ？」

「……フン。」

エヴァはそれ以上何も言わず、来た道を戻り始めた。
彼女の傍らにはチャチャゼロのみ。茶々丸も、士郎もいない。

（……気にすることはない。賞金首時代と同じなだけだ）

チャチャゼロそれ以上何も言わず、静かにエヴァを追っていった。

・・・・

・・・・

「あ、危なかった……」

ネギ達は路地裏で息を荒くしていた。

「――――さて、これからどうしましょう？」

「……言っとくがな兄貴、コレはもう使うんじゃねえぞ」

「え〝。何で！？」

「こんな怪しいモン危ねえだろ。そもそも使い方がわからねえんじゃ危険だぜ」

「そうですよ、超さんがどういうつもりでコレを渡したのかもわからないですし」

「う～ん、そうだね……。……よし、超さんを探そう！！」

「「え！？」」

「確かに説明書か何かがないと使えないですよね！！」

タイムマシンという夢のアイテムを手にしたネギは忠告に全く耳を貸さず、バリバリ使う気満々だった。

だが超に真意を聞くことはカモも刹那も吝かではない。

３人の超　探しが始まった。

◇――――――――――◇――――――――――◇

数々の施設・アトラクションを踏破して、彼らは飛行船でようやく超を発見した。

「やっぱりこれはタイムマシンなんですか！？」

「そうネ。懐中時計型航時機（タイムマシン）『カシオペア』。使用者とそれに密着した同行者を時間跳躍させる驚異の超科学アイテムヨ♪説明書　渡しておくネ、好きなだけ使うといいヨ」

「あ、ありがとうございます！！　じゃあすみません、僕この後も予定がありますのでこれで！！」

「うむ、楽しんでくるといいネ♪」

その場を離れるネギと刹那に、超は笑顔で手を振った。

――しかし、刹那の表情は優れなかった。

ネギがトイレに行っている間の会話が思い出される。

『過去への旅、いかがカナ？　まずは体験してもらうのが一番と思い保健室のお茶に眠り薬を入れさせてもらたヨ。悪かたネ　せつなサン』

『タイムマシンなんてモンはいかな天才だろうとフツーの人間にどうこう出来るもんじゃねえ。……お前は一体、何者だ？』

『フフフ……知りたいカ？　ならば教えようアルベール！！　ある時はナゾの中国人発明家！　クラスの便利屋、マッドサイエンティスト！　またある時は学園ＮＯ．１天才少女！　そしてまたある時は人気屋台「超包子」オーナー！

――――その正体は！！　なんと火星から来た宇宙人ネ！！』

『ふざけるなーーーっ！！』

～～～中略～～～

『……貴様、目的は何だ。ネギ先生の信頼を裏切るようなら私の剣が黙っていないぞ』

『信頼は約束できないが…安心するネ。時計は本当にネギ坊主に学祭を楽しんでもらうためだけに渡したヨ』

『ネギ坊主は血のつながった私の大切な人ネ。私がヒドイことするハズないヨ♪』

『……な？』

『何だって……？』

『火星人ウソつかないネ？　安心するといいヨ』

（――超鈴音……。ネギ先生と血がつながっているだと？　どういうことだ……）

刹那の不安も、学園祭が進むごとに薄れていく。

しかしこの瞬間。ネギがカシオペアの使い方を知った時。
もしくは、超がネギにカシオペアを与えた時に。

――――――運命は始まった。

運命（はぐるま）が噛み合って。航時機（カシオペア）は、時計は時を刻み出す。

第６２話　学祭編　時計の針は動き出す（後書き）

～補足・解説～

「御主人　逃ゲラレテヤンノ。……士郎ニモ逃ゲラレタシナ？」
士郎は麻帆良を出ることを近右衛門にしか話していません。ネギや木乃香には後日に伝わりました。

――――――運命は始まった。
運命（はぐるま）が噛み合って。航時機（カシオペア）は、時計は時を刻み出す。

何と言いますか、「中二病」という単語が脳を掠めました。「無意味なカッコつけ」も中二病の一種だと思っているのでね……。
このまま行くと宝具「羞恥記す厨二病（フォーティーンイヤーズ）」を久しぶりに開放してしまいそうだぜ・・・！！
いや、今の記述の方が恥ずかしいけどね。

それでは次回！！
次話を投稿したら皆様がどのような反応をなさるか凄く怖いです・・・。

ー０８話　設定６　衛宮家＆アインツベルン＋ａ（２／１２追記）（前書き）

・調子が悪いと設定話を投下する。それが私だ。

・大学の、学期末における課題・試験地獄があと2週間くらい続くので、更新はしばらく期待しないでください。
　ごめんなさい。

＊２／１２追記
・もう少し、もう少しで学期末地獄が終わります・・・！
そしたらちゃんとした話を更新しますのでもう少しお待ちを・・・！！

ー０８話　設定６　衛宮家＆アインツベルン＋ａ（２／１２追記）

今回はこの小説世界における衛宮家とアインツベルンの設定です。

◎衛宮家

・元は関西呪術協会・近衛家の分家。しかし本家から別れて３００年ほどしか経っていないため、歴史の浅い弱小分家だった。数代前の当主が裏社会（陰陽術・神鳴流など）からの引退を決定し、一族は京都から西日本のとある地方都市に移り住んで一般人として生活を始めた。

　しかし衛宮矩賢が京都神鳴流に入門し、再び裏との結び付きが強まった。

◎衛宮一族とその関係者

：衛宮矩賢

・息子・切嗣が１０代の時に謎の死を遂げる。神鳴流・呪術協会内の争いに巻き込まれたと思われているが、詳細と真実は不明。

：衛宮切嗣

・父に倣って京都神鳴流に入門していた。しかし父・矩賢の謎の死に疑念を抱き、

「理不尽に命が失われる」ことを嫌悪するようになる。

全ての人間を救う「正義の味方」を目指し、立派な魔法使い（マギステル・マギ）とい

う思想を持つ
「魔法使い」になるべく麻帆良の近衛近右衛門に師事する。
１０年弱の修行を終えて魔法使いのＮＧＯに参加して中東を訪れるが、自らの理想の甘さと限界、現実を知って絶望する。紆余曲折を経て、多くを殺すことで逆説的に多くを救うことを選択。生涯で多くの血と汚名を浴びた。
後に妻との間に娘と息子を儲ける。アメリカでテロに巻き込まれ死亡する。

：衛宮士郎（近衛士郎）
・本作の主人公。感想にて「オリ宮士郎」と名づけられるほど中途半端な設定を持つ
オリ主。
元は「衛宮士郎」だったが家族の死後に詠春に引き取られ「近衛士郎」となる。現在は籍を抜いて衛宮性に戻っているが、何故か近衛家の家系図に養子として名前が残っている。
その他の説明はもう要らないと思うので割愛。ぶっちゃけメンドイ。今までの設定話
を読んでくださいな。

：青山詠春（近衛詠春）
・切嗣の神鳴流時代の友人。稽古の合間に会話を交わす程度の付き合いだったが、
お互い友人だと感じていたらしい。
切嗣の遺児である士郎を引き取って育てた。今では彼を実の子のように思っている。

：近衛近右衛門
・切嗣少年に魔法を教えた。切嗣の遺児である士郎を孫のように思っている。魔法を

知って魔法使いを志した士郎を友人が勤めるメルディアナ魔法学校へ送り出した。
自分が士郎に魔法を教えることで、切嗣と同じようになってしまうのではないかと
恐れたのかもしれない。矩賢とも面識があったようだ。

：桜咲刹那
・詠春に拾われて京都神鳴流に身を置いていた少女。木乃香の最初の友人であり親友。
同じく詠春に引き取られて木乃香の義兄となった士郎を最初は「怪しい、信用できない」と思って警戒していた。
川で溺れたところを助けられてからは心を許すようになったようだ。

：近衛木乃香
・詠春の一人娘。幼少時、父が突然連れてきた”兄”と仲良くなろうとするが、当時まだ
家族を失ったショックで茫然自失状態だった士郎はそれに応えなかった。しかし木乃香は諦めず、士郎を笑わせようと奔走した。
現在はお互いの生活に積極的に干渉しようとはしないが、兄妹仲は良い。

◎アインツベルン
・ドイツ貴族であり魔法使いの一族。体質的に頑丈な身体（長寿、並みの魔法使い以上の魔力容量、対魔力などｅｔｃ．．．）を持ち、錬金術――「ものをつくる」ことに長けた一族。
本家筋の女性は何故か必ず銀髪・白い肌・真紅の瞳を持って生まれる。始祖は雪の妖精だという伝承があるとかなんとか。

遺伝的に女性の方が強い能力を持つため歴代当主はほとんどが女性。その中で男性が当主になるということは、その人物が出鱈目な実力者だということを示している。そして先代当主も男性である。

かつて「アインツベルン」の名は魔法具業界における優秀なブランドだった。しかし

現在（２０００年代）より約１００年前にこの世界と異界（＝魔法世界）が繋がり、向こうの優れた魔法技術が流通・普及したために衰退・没落していった。

しかし彼らの技術力は紛れもなく本物である。その「作る才能」は密かに士郎に引き継がれている。

◎アインツベルン一族

：ユーブスタクハイト・フォン・アインツベルン

・「アハト翁」と呼ばれた八代目当主と同じ名前を持つ、第二十八代目当主。

二人の娘をもつ。現在は隠居し、長女に家督を譲っている。

アイリと切嗣の結婚には大反対だった。しかし孫にはデレデレだったという。

：アイリスフィール・フォン・アインツベルン（衛宮アイリスフィール）

・二十八代目当主・ユーブスタクハイトの次女。ＮＧＯに参加した際に切嗣と出会い、

彼に惹かれる。後に結婚し、彼との間に娘と息子を儲ける。

アメリカでテロに巻き込まれ死亡する。

：衛宮イリヤスフィール

・切嗣とアイリの間に生まれた長女。アインツベルン本家の血筋であることを示す

身体的特徴を持つ。母親に瓜二つ。アメリカでテロに巻き込まれ死亡する。
　死後は運命か偶然か、現在Ｆａｔｅ世界の「英霊の座」でアーチャー宅（？）に居候中。
　心象世界の剣を通してアーチャーと共に弟を見守る。

：第二十九代目・アインツベルン当主
・アインツベルン現当主。ユーブスタクハイトの長女でありアイリの姉。士郎の伯母。
アイリの遺骨を衛宮家の墓に入れることを渋った父親を説得した。
なぜ士郎を引き取らなかったかは不明。
　アインツベルン最盛期の当主であり、歴代最高最強と謳われるユスティーツァ・
リズライヒ・フォン・アインツベルンの再来と呼ばれる。

＊２／１２追記

◎この小説における衛宮切嗣のステータス

・魔力容量は並みの魔法使い程度で、得意な魔法は火と重力。
・戦術・戦略・罠・銃火器など近代兵器・魔法を駆使して戦う。
・スキル：破壊工作／ランクＡ
　戦闘を行う前、準備段階で相手の戦力をそぎ落とす才能。トラップの達人。
　ランクＡならば、相手が進軍してくる前に六割近い兵力を戦闘不能に追いこむ事も可能。

《魔法・武器》

：呪文封印弾（Ｃ・Ｓ・Ｂ＝キャスト・シール・ブリット）

魔法使い専用独房（ネギま！Ｋ１６巻に登場）に使用されている呪文封印処理が施された弾丸。銃弾を約３０層に分けて製造し、層の表面に術式を刻んで重ねている。この弾丸が体内に埋め込まれると魔法使いは呪文詠唱が出来なくなる。無詠唱呪文は使用可能だが、魔法使いに対して詠唱不可というのは大きなハンデとなる。敵の体内にあってこそ威力を発揮するので、貫通しないように銃弾の先が僅かに丸みを帯びている。

：火炎の魔弾・燃える天空

「燃える天空」の術式を刻んだ弾丸。基本的に着弾時に刻まれた術式が発動するが、戦略的に運用するために遅延呪文（解放と唱える（エーミッタム））でも起動する。

地面に撃ち込んでおいて即興の地雷としても使用したりする。戦略に基づいた戦いの時はもちろん普通の地雷を使うので、この弾丸を地雷として使用する時とは切嗣にとっての不測の事態か敵との直接戦闘時のみ。

：障壁貫通弾

切嗣が使用する武器・銃器・兵器には全てこの呪いが掛けられている。通常の銃弾も魔弾も地雷もミサイルも全て魔法障壁を貫通する。

＊作者は銃火器に詳しくないのでそれらについての記述は割愛。

Ｆａｔｅは魔術師の物語のハズなのに、なんでＺｅｒｏはあんなに近代兵器の記述や設定が多いんだ……。切嗣スゴイよ。

：『戦いの旋律（メローディア・ベラークス）』

身体強化呪文「戦いの歌（カントゥス・ベラークス）」の上級版。罠を抜けて切嗣に接近できる腕利きの
魔法使いも当然いたので、肉弾戦に備えておく必要があった。
切嗣は元・神鳴流なので体術も申し分ない。

・・『固有時操作結界（ムーヴェオ・プロパリウス・テンパス）』
通称「固有時操作」（↑誤字に非ず。あえて「固有時制御」ではない名称にしている）。準備と条件を満たすと使用可能になる。光魔法と重力魔法でそれぞれ光と重力を操作して結界内の時間流を停滞させる。このとき結界の中の人物を結界の外から見るとスローモーションのように見える。
これに敵を捕えている間に周囲に攻撃・罠を仕掛けておき、結界の解除と同時に襲撃
する（結界を解除しないと、結界に入った瞬間に切嗣自身の攻撃も時間が停滞してスローになってしまうために攻撃が届かない。＝止まった時の世界で主人公にナイフを投擲するザ・ワールドな吸血鬼と同じ戦法かもしれない）。
無詠唱呪文に長けた魔法剣士や魔法拳士、魔法使いの従者に対する切り札。
Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏの「固有時制御」の「固有時」とは「術者の肉体の時間」を指すが、この
結界の「固有時」とは「指定された領域内の時間」を指す。
なお、この固有時操作は「停滞」だけでなく「加速」も出来るが、固有時制御と違って体内展開が出来ないため加速にはあまり意味がない。

《まとめ》
・基本的には罠を使った戦術などを用いて陰から戦い、正面きって相対して戦うことは
あまりない。特技は暗殺。好みは暗殺。やっぱり暗殺。

・「呪文封印弾」で魔法使いを無力化し、「戦いの旋律」「魔弾」「固有時操作」で
魔法使いの従者・魔法剣士に対抗する。

「敵を殺すのに相手より強い必要はない。ただ、殺す手段があればいい」

……と、いろいろとこじつけたりして作った設定ですが、どうでしょう？
しかしウチの切嗣、（ステータス的には）弱い……。
銃弾当てなきゃ意味ないからなー。だから罠とか戦略が基本戦術なんですけどね。

重力魔法使いなので「近衛右門の紹介でアルビレオの弟子に……」なんて案も
考えましたがボツ。そこまで重要なファクターのキャラじゃないので。

でも戦場では強いですよ。何てったって「スキル：破壊工作／ランクA」ですから。
ほとんどの敵は切嗣の姿を見ることすら出来ず死亡する。罠を潜り抜けて切嗣に辿り
着いても敵は既にボロボロ&冷静さを欠いている状態ですから簡単に殺せます。
　効率よく殺す。効果的に殺す。同情せず殺す。慈悲なく殺す。容赦なく殺す。
――それが衛宮切嗣。戦争と暗殺の天才。

◎この小説世界における冬木市
　かつて衛宮家が居を構えた西日本にある都市・冬木市。東西ＪＲ線の関係で一度だけ乗り継ぎをしなければならないが、麻帆良から普通に電車で行ける。
　この土地は「聖地」クラスである麻帆良には劣るが、２本の竜脈と２本の霊脈が通る強力な霊地である。
　陰陽術師の勢力が強い西日本にも関わらず、魔法使いの一族「沙条」「遠坂」「間桐」「言峰」の４つの家が土着して住んでいる。
　また、名前に「ヤ」のつく職業の藤村という家と竜洞寺の竜洞家に”気”を使う人物が確認されている。

◎おまけ：冬木四家の設定

：沙条
・もともと関西呪術協会に属する陰陽師の家系だったが、いつの頃からか西洋魔術に転向した変わり種。家の歴史は四家の中で一番古い。
　元が陰陽術師の家系である点を生かし、東洋・西洋の系統が入り混じった独自の術式を使用する。気・魔力の習得はこの家の魔法を使用する為には必須事項であり、究極技法「咸卦法」を代々伝えるというデタラメな一族。

：遠坂
・約５００年前、日本を訪れた西洋魔術師が遠坂家の人間に「うっかり」魔法を見られた事がキッカケで魔法を伝授された。その後、彼女は自分が魔法バレしてしまった人物と

結婚し、彼女の血が遠坂に混じることになる。ちなみに彼女は故郷に妹がおり、その妹の子孫が今もフィンランドに住んでいるらしい。
　火属性呪文と身体強化呪文に才能を持つ者が多い。ちなみに当家の末裔の長女はなんと全属性適合者（オールユーザー、アベレージ・ワン）であるらしい。

：間桐
・日本に移住した魔法使いマキリ・ゾォルケンを始祖とする一族。といってもそれはまだ数十年前の事で、高齢ながら彼はまだ存命中。当家は当代の遠坂と仲が悪い。
　水・闇・影系統呪文に適性を持ち、さらに呪い・契約などを得意とする。

：言峰
・代々冬木教会で神父を務める魔法使いの一族。かつて彼らは基督教の布教が出来る地を探して冬木に流れ着き、そこで遠坂家と懇意になった。遠坂家の援助もあって布教が進み、そのまま冬木に根を下ろした。それ以来この二家は仲が良い。
（→ネギま！世界ではシスターシャークティーや美空など、教会関係者が魔法使いであることは基督教の教えに反するものではないらしいのでこの設定で問題ないはず）
　ただし「遠坂と言峰の仲が良い」といっても、その末裔のあかいあくまと毒舌シスターの仲が良いというワケではない。
　主に身体強化呪文と、鍛え上げた自らの肉体から繰り出される体術、十字架を武器として戦う一族。

＊冬木についてはこれ以上の設定を作りません。だって登場しない

んだもの。
掲載するにはちょっと火の通りが足りないレアやミディアムな設定がまだまだありますがそれはもういいでしょう。
実はゾォルケンさんは観光もとい研究で日本へ来てそのまま住みついてしまった
超・日本好きだという平和な設定とか、
鶴野は弟に才能で劣っていることにやさぐれているとか、
慎二は天才肌で周囲には不遜な態度をとっているけれど、実は自分に自信がないという
良い意味で青臭いヘタレだとか
慎二と凛はお互いライバル視していて仲が悪いけど実は信頼し合っているとか
桜はそんな姉と慎二の関係をちょっと羨ましく思っているとか
綾香は美空のように魔法や面倒事に関わりたくないと思っているとか
綺礼とカレンは凛の天敵だとか
ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトと名乗る人物が遠坂家を訪ねて来たり
ｅｔｃ．．ｅｔｃ．．ｅｔｃ．．．．．

以上で、この小説世界観におけるＦａｔｅ的な設定記述を終わります。
書いてて結構面白かったｗ

ー０８話　設定６　衛宮家＆アインツベルン＋ａ（２／１２追記）（後書き）

ああ、何か刹那と木乃香の項目を書いてたら京都過去編を書きたくなってきた。

！！　おおっ！？　これと絡めて刹那編　書けばイケるんじゃね！？

全然アイデアが出なくて書くのを諦めてたんですが、これはイイかもしれない・・・・・！！

まあ、まえがきに書いた通りしばらくは忙しくてそれどころじゃないんですけどね。

皆さまも近づく年度末で忙しいでしょうが、一緒に頑張りましょう！

＊２／１２追記

・まえがきにも書きましたが、もう少しで地獄が終わるので読者の皆様にももう少し辛抱して頂けると有り難いです。

・切嗣の設定は昔　未完成のまま放置していたものを少し手直ししただけなので少々出来が悪いです。

・ちなみに”気”が使える藤村家と竜洞家の人っていうのは雷画さんと藤ねえと零観さんです。

それでは次回！！

第６３話　強制時間跳躍（前書き）

学期末地獄終わったァーーーーーーーーーー！！！
ヒャァッフォウォオーーーーーーーーーーイィィィィ！！！

えー、久しぶりの更新です。あれ、そんなでもないな。

しかし今話は冒頭からある意味衝撃的な展開となっております。

詳細はあとがきで。

第６３話　強制時間跳躍

航時機（カシオペア）を駆使して、ネギは順調に学園祭を過ごしていった。

麻帆良祭１日目。

３－Ａのお化け屋敷「ＨＯＲＲＯＲ　ＨＯＵＳＥ」を見学。
委員長、小太郎と一緒に生徒達の部活・サークルの出し物を見学。
千雨のコスプレコンテストの見学。真名と世界樹付近のパトロール。
のどかとデート。まほら武道会の予選に参加・本戦出場決定。
中夜祭と称して３－Ａとタカミチで１日目の打ち上げをした。

麻帆良祭２日目。

まほら武道会本戦に出場。
タカミチと戦い、刹那を倒し、偽名で参加したアルビレオの「イノチノシヘン」の
第二の能力で再生された「１０年前のナギ本人」と戦う。結果は準優勝だった。

茶々丸の野点に行き、千雨に魔法がバレた。
「ネギのいとこ・ナギ」として亜子とデートしてライブを観た。
ハルナに正体がばれ、彼女と夕映、二人と仮契約を結んだ。

――――――そして。

『超さん教えてください！　何で突然退学届けなんかを？　どうして……悪いコトをするんですか？』

『フ、悪いコト……ネ。魔法先生達から話を聞いたカ？』

『タカミチを捕まえて閉じ込めたりするのは悪いコトです。それに…魔法を普通の人達にバラそうとしてるって……』

『事実ネ』

『理由は言えない……と言たら？』

『――止めます。あなたの先生として……悪いコトをするのは止めなければいけないと思います』

『面白い。それでいこうカ』

『！？』

『――私を止めてみるがいい。ネギ先生。』

決別は、決定的だった。

第６３話　強制時間跳躍

学祭最終日に「計画」を実行しようとする超。
彼女に対抗するために、エヴァンジェリンの別荘で作戦会議が開かれた。

「えと…超さんは百年以上先の未来から来た火星人で……」

「しかもなんとネギ君の子孫！？」

「目的は航時機（タイムマシン）による歴史改変。その為に魔法を世界にバラそうとしてて」

「学園祭３日目にそれを行動に移す……でござるか」

――――むにゅっ

「ふぁいっ！？」

明日菜がネギの頬を摘(つま)んだ。

「え～～と？　この子は？　からかってるのかしら～～～～～？」

「からかってまふぇんゆ～～～～！！」

ネギが嘘や冗談を言う性格でないことは明日菜もよく知っている。

しかし今の話はいくらなんでも突拍子過ぎた。

「……世迷い言だな……」

「確かに、酔っ払いの戯れ言以下という感じですが……」

千雨は頭を抱えながら、夕映は少し呆れながら明日菜に同意する。

「やはり全て嘘と考えた方がいいでしょうか？」

「……でも、さっきの超さんはまるっきりの嘘を言っているようには　僕には見えなかったんです。それに……

この、超さんからお借りしたカシオペア(タイムマシン)は……本物です。」

「……う。」

「……」

「……確かに……」

明日菜・木乃香・刹那・千雨は航時機(タイムマシン)を体験しており、夕映もその存在を知っている。

そう。その開発者である超が時間に干渉出来ることは紛れもない「事実」だ。

「もう少し慎重に考えた方が良さそうですね……」

結局その時に結論は出ず。新たにネギと契約した、夕映とハルナのアーティファクトの能力確認などを行った。

◇――――◇――――◇

「――皆さん、僕の話を聞いてください！！」

「は、はい！」
「お、ネギ君　気合い入ってるー」
「聞くです」
「なになにネギ君～」

別荘の夜が明けた。２４時間が経過し、退出が可能となる。
ネギが出口に集まる全員に話し始めた。

「超さんは学祭最終日…つまり今日、大変な作戦を実行しようとしています。
　その目的は『「魔法」の存在を全世界にバラすこと』。詳細はわかりませんが、もしこの目的が達成されれば世界中が混乱し、色々

な問題が起こることが予想されます」

ネギは超から受け取った航時機（カシオペア）をじっと見つめる。

「ただ…正直に言って、超さんの目的が本当に悪いことなのか、僕にはわかりません」

『いらっしゃい。今日も来たネ、ネギ老師』

『うむ、学園祭　楽しんでくるといいネ♪』

『――私を止めてみるがいい。ネギ先生。』

それで超の真意が分かる筈もなく、航時機（カシオペア）にはネギの顔が映るだけ。

「でも超さんはその過程で悪いことをしています。話し合いという呼びかけにも応じず作戦を強行しようとしていること。また良し悪しに関わらず作戦成功時の影響がこれ以上ないほど甚大であることなどから……僕には超さんを止めなければならない責任があると思います。

例え力ずくでも……」

「――僕は超さんを止めます。みんなの力を僕に貸してください！！」

「任せといてよっ！！」

「改めて頼まなくてもいーってのバカネギ！！」

――――――――開門（ヒスカット）――――。

魔方陣から光の柱が立ち上り、外へ繋がる門が開く。

「ほいじゃＬｅｔ'ｓ　Ｇｏ!!」

「お――――――っ!」

「お、お――――……」

士気が上がり意気込む彼女達と対称に、ネギの表情は固かった。

別荘を出れば、全てが超との決戦に向けて動き出す。

逃げることも後戻りも出来ない。話し合いの機も逸した。

――――戦いが始まる。

その事実が、どうしようもなく重い。

≪――――――パチッ…――――≫

（……え?）

――――――――今のは、

≪――――――――パシィインッ！≫

何の、音――――――――。

不意に猛烈な悪寒がネギを襲うが――――何もかもが手遅れだった。

◇――――――――◇――――――――◇

時の流れは川に例えられる。
時間は進むだけのものであり、万物はその中を流れる舟だ。
生命は川を下り続け、寿命を経て舟は水底に沈む。

時は不可逆であり、また抗うことの出来ない絶対の概念（そんざい）。

「時」の前に――――――――人間（ヒト）は、余りにも無力だ。

◇――――――――――◇――――――――――◇

別荘の触媒であるジオラマ球の周囲に光が溢れ、明日菜達が帰還した。

「よし戻った！　まずはどうする！？」

「何でもやるよ！！」

「……。」

「……いやホラ、この盛り上がってる時に無視しないでよー」

「ちょっとネギ、何ボーっと突っ立ってんのよ？」

明日菜とハルナの声に反応せず、

――――――ネギは滝のような汗をかいて呆然と立っていた。

「あれ、ネギ君どーしたん？」

「先生、何か……？」

周りもネギの様子に気づく。９人の視線が全てネギに注がれた。

すると突然、彼は持っていた航時機を凝視する。

「……航時機（カシオペア）が……動いてない……！」

「おいおいどーした兄貴？」

「――――カモ君！　カシオペアの説明書持ってる！？」

「おう！？　あ、ああ。それならこのか姉さんが」

「このかさん説明書を出してください！！」

「わ、わかったえ」

奪い取るように木乃香から説明書を受け取って、鬼気迫る様子で速読し始めた。

「せ、せんせー、どうしたんだろ――――……」

「わかりませんが……あの様子はただごとではありません」

「……だってまだ学祭3日目だし……世界樹の魔力のピークは今日の……」

「ネギ坊主、何をブツブツ言ってるアルか？」

「さっぱりでござる」

「夕映さん！！」

「は、はいっ！！」

いきなり大声で呼びつけられ、夕映は驚いて思わず恐縮してしまう。

「魔法を使ってみてください！！」

「……え？　い、今ですか？」

「ハイ、お願いします！！」
「わ、わかりました」

すちゃ、と三日月の飾りがついた練習杖を取り出し構える。

「……で、ではいきます。プラクテ・ビギ・ナル、火よ灯れ（アールデスカット）！！」

……プスン。

「え、あれ？」
「おかしいな。一昨日は出来たのになーゆえっち」

「……まさか本当に……！？　――千雨さん！！」

「な、何だよっ！？」

まさか一般人である自分が呼ばれると思わなかったのか、少し狼狽して返事を返す。

「パソコンで時間を――いや、今日の日付けを調べてください！！僕はテレビを確認します！！」
「は？」
「あっ、ちょっとネギ！？」

訳が分からない千雨と呼び止める明日菜の声も聞かず、ネギは地下室の階段を一目散に駆け上がって行った。

◇――――――――――◇――――――――――◇

（――今の、音は――――――――）

「――よし戻った！　まずはどうする！？」
「何でもやるよ！！」

明日菜とハルナが何か言っているが、ネギには聞こえない。
悪い予感と言い様の無い焦りに襲われ、嫌な汗でYシャツがべっとりと背中に貼り付いている。

「え、ネギ君どーしたん？」
「先生、何か……？」

（そうだ、航時機（カシオペア）は――――）

「……航時機（カシオペア）が……動いてない……？」

（――何で止まってるの！？　壊れた？　そんな、これじゃあ超さんへの対抗策が――イヤ……あの超さんが作った物が簡単に壊れる？　……違う。嫌な予感がする。
何か、別の可能性が……！？）

「――カモ君！　カシオペアの説明書持ってる！？」
「おう！？　あ、ああ。それならこのか姉さんが」

「このかさん説明書を出してください！！」
「わ、わかったえ」

「せ、せんせー、どうしたんだろ――――……」
「わかりませんが……あの様子はただごとではありません」

＊故障かも？と思ったら。
・行き先の時間設定（p，8）と移動先の座標設定（p，13）を間違えていないアルか？
・当アイテム「懐中時計型航時機（タイムマシン）カシオペア」は魔力を動力にしてるアル。普通の一般人には使えないから気をつけるヨロシ。
・当アイテム「懐中時計型航時機（タイムマシン）カシオペア」は使用者の魔力を使用しているが、大気中に高濃度の魔力が満ちている環境でなければ使用できないネ。これも注意アルヨ！

（大気中に高濃度の魔力が満ちる場所でしか使用できない？　じゃあ学祭期間中しか使えないってコト？
――――じゃあ。カシオペアが止まったのが、故障以外の理由だとしたら――――）

――――今、麻帆良に世界樹の魔力が満ちていない？

――――否。ありえない。

（だってまだ学祭3日目だし、世界樹の魔力のピークは今日の夕方から夜のハズ……）

「ネギ坊主、何をブツブツ言ってるアルか？」

「さっぱりでござる」

「夕映さん、魔法を使ってみてください！！」

「わ、わかりました……では。プラクテ・ビギ・ナル。火よ灯れ（アールデスカット）！！！

……あ、あれ？」

「おかしいな。一昨日は出来たのになーゆえっち」

『や、やった出ました……』

『スゴイじゃないですか夕映さん！！』

『ま、学祭期間中は世界樹の魔力が溢れてきてっからな』

（もしかしてホントに――――世界樹の魔力がない！？）

この疑問への、解答は。

思考する。世界樹の魔力が弱い状態とはどんな時か。

まず考えられるのは当然、学祭期間中ではない時――――――

（――――――――――ま　さ　か。）

3日間の学園祭。世界樹の魔力。航時機。時間跳躍。「麻帆良の頭脳」超鈴音。

――――――――――想定されるのは、最悪の可能性。

「千雨さん!!　パソコンで時間を――いや、今日の日付けを調べてください!!
僕はテレビを確認します!!」
「は？」
「あっ、ちょっとネギ!?」

誰の声も聞かず、ネギは階段を駆け上がる。地下室から1階へ。廊下を走ってリビングへ。そのままテレビのスイッチを入れて――

絶句した。

『――5日前に私達が取材した――』

『――のまほら武道会の映像ですが――』

『突然あなたの手に箒が出現したように見――――』
『――――ま話題の「魔法」とみて間違いないんでしょうか!?』
『――――どうなんでしょうか佐倉愛衣さん!?』
『わっわっ、私…魔法使いなんかじゃありませ――――ん!!』

『えー、次は4日前に取材に成功した――――』

『あの有名な子供先生、ネギ・スプリングフィールド君も魔法使いである可能性が――』

「魔法」「魔法使い」の存在が、当たり前のように語られていた。

◇――――◇――――◇

『これで君達の負けネ。些か納得のいかない敗北ではあろうが……』
『最も良い戦略とは戦わずして勝つこと。悪く思わないで欲しい』
『ネギ坊主のカシオペアには仕掛けを施させてもらていたヨ。この手紙を読んでいる頃には君達は……なんとビックリ、歴史改変後の世界にいるハズヨ』
『もう今までの君達の日常には戻れないがネ』

『――――――ようこそ諸君、我が新世界へ』

これが、ジオラマ球に貼りつけてあった手紙に残されたメッセージ。

「これが事実なら……我々は戦わずして超殿に負けたということでござるな」

「え、何？　どーゆーコト！？」

「ええいホントバカだなバカレッド！！　つまり超の作戦は大成功だ！！

もうこの世界は魔法一杯・夢いっぱいのマジカル☆ファンタジー路線まっしぐらって訳だよ！！」

「う～む、ここまで見事にやられるとは……」

「超さんを侮っていましたね……これ程の策士とは……」

ネギがテレビで、千雨が電話回線からインターネットに繋いで確認した所――

――「今日」は、学祭最終日から一週間が経っていた。

つまり超の手紙の内容は――――――全て事実。

そしてメディアの反応を見ればすぐに分かった。魔法が、バレたと。

この余りの事態に、ネギパーティは2階の一室に集まって話し合っ

ていた。

「いや、しかし早めに気づけたのは助かったぜ。この世界じゃ俺達は1週間も行方を眩ましてることになってるハズだからな。
ホイホイ外を出歩いたら何かしら問題になってたかもしれねえ」

「しかしどうするのですか？　この状況を覆す手があるとは私には思えないのですが……」

そう、超の作戦は既に終了している。今からどうにか出来るものなのか――――。

「それを考える材料……情報が俺達には足りねえな……」
「おい小動物、そんなこと考える必要あるのかよ」

発言者の千雨に視線が集中した。

「先生が持ってる航時機（タイムマシン）で最終日に戻れば、超の作戦を止められるんじゃねえのか？」

「……ダメなんです、千雨さん」

「……え？」

ずっと黙ってソファに座っていたネギが一言で否定した。無言でテーブルにカシオペアを乗せて、カモが句を継ぐ。

「この航時機は世界樹の魔力充ちる学祭期間中しか使えねえ。
見ろ、針が動いてねえだろ？　これじゃただの懐中時計としても役に立たねえ」

「「「えええええええっっ！！？」」」

「そんな……それじゃあ世界は…本当にこのまま……！？
ど、どうすんだよ……！！」

タイムマシンでなんとか出来ると思っていた、いや思いたかったのだろう。
その最善に思える手段を否定され、冷静だった千雨もみるみる顔を青くしていく。

「焦るんじゃねえよちうっち。まだ何か…何か手があるハズだ！」

「……とりあえず超さんを見つけてブッ飛ば「少し黙ってろバカレッド」」

確かに超を見つけ出して捕まえれば何とか出来るかもしれないが、ネギ達をここまで見事に嵌めた彼女を探し出すのは容易ではないだろう。現実的な方法ではない。
ネギとカモは必死に打開策を思考するが――楓が外を見つめて呟いた。

「考える時間はなさそうでござるよ。
……どうやら、向こうから出向いて来たようでござるな」

全員が窓の向こうに目を向ける。

「あれは確か…神多羅木先生、それに刀子さ……」

――――――そして。

「士郎殿、でござるな」

オールバックの髪にヒゲ、サングラスをかけた黒スーツの男性と、
野太刀を持った
ストレートロングの髪の女性。
そして赤いシャツに黒いジャケットを羽織った、赤髪の青年が門の
前に立っていた。

「シロウ……何で!?」

士郎は学園祭初日から麻帆良を離れていた筈。それがどうしてこん
な所にいるのか。

「いや、今日は旦那がいなくなってから１０日目になる。確か旦那
はそんくらい空ける
って言ってたんだろ？　帰って来ててもおかしくねえ」

「しかし、なぜ魔法先生が……!?」

「……超殿の仲間と疑われたか、ネギ坊主の仲間だからか……。
どうする？　話し合うか？　それとも……」

”――――――戦うか。”

こちらは約半数が非戦闘員。どちらを選んでも――簡単には済みそうになかった。

第６３話　強制時間跳躍（後書き）

～御説明・弁明～

：フツーは少なくともまほら武道会編くらいは書くのが当たり前？という感じですが、（一応）主人公である士郎が不在なので、その間のストーリーがほぼ原作通り・原作の流れに沿った展開になるのが目に見えおり、敢えて省かせて頂きました。

勝手な言い分かと思いますが、こちらの主張としましては「この小説は作者が楽しむ為に書いているもの」であり、第１章のまえがきに「・ストーリーが作者の自己満足で進んでいきます。」と既に宣言しております。

また、学祭編を省くことはこの小説を書き始めた頃から決めていた展開でした。実は工夫次第では学祭編を書くことも出来たのですが、総合的に考えた結果全て省いてしまった方が良いと判断し、当初の予定通り省略することになりました。

「学祭編書けよー！」「武道会書けよー！！」という意見の方が当然いらっしゃるかと思いますが、読者の皆様には深い心で御理解を戴ければと思っております。

これからも「剣製の凱歌」をよろしくお願い致します。

・・・展開を決めただけで謝る必要あるのかな、と思い始めていたり・・・・・・。

それでは次回。

第６４話　錯綜編　未来攻防（前書き）

番外編としてバレンタインデーのお話を書こうと思い立ったけど、オチがつかなかったのでやめました。

ていうか昨日がバレンタインだってことを本気で忘れてました。
俺には関係ねーからね！！

でも、チョコが貰えないことは悲しくないけれど・・・。

「チョコが貰えないことに慣れてしまっている」ことが悲しいです・・・。

それでは第６４話、どうぞ。

第６４話　錯綜編　未来攻防

『――エミヤ、とんでもない事になったぞ――』

彼女が言っていた通りだ。
向こうでもこちらでも、メディアを確認すると必ずどこかで「魔法」の事が話題に上がっている。

『世界に、魔法がばれた――――――』

「ホントに、とんでもないコトになったもんだ。」

その「魔法バレ」の中心――発生地が、この麻帆良だというのだから。

こんな事態だ。いま学園長（じいちゃん）に顔を出したら何か仕事を任されそうなので家に帰ることにする。いや、今回の件で本国に行っているかもしれない。どっちにしろ学園には行かない方向で。

「……ん？」

森の方角へ進む道、遠く先を行く二人組。

「刀子さんに……神多羅木先生？」

第６４話　錯綜編　未来攻防

「まさか超が主犯だとはねぇ。大それたことしたな」
「何を暢気なコトを。この事態の重さが分かっているのですか！？」

エヴァンジェリンの家の前。士郎は刀子と神多羅木から大まかな事情を聞いた。

「で、１週間　行方不明だったネギ達（アイツら）が探知に引っかかったから……」
「事件の重要参考人として連行します。抵抗するなら戦闘も辞さずに、との事です」

超の仲間と疑われているのだろうか。そうでなくても何かしらの事情を知っている
可能性があると判断されたのだろう。それにしても力ずくとは……
協会はよっぽど余裕が

ないらしい。

刀子が静かに、だが響くように声をあげた。

「――ネギ先生、そして神楽坂明日菜以下9名。そこに居るのは分かっています。

大人しく出て来て私達に同行してください。危害を加えるつもりもあなた方の不利益になるようなことをするつもりもありません。

ただ今回の事件の重要な参考人として、事情を聞かせてほしいだけです。」

丁寧な言葉にも関わらず、その声には強制するような意志が含まれている。

(……神多羅木先生。刀子さん固いっていうか……何か威圧的じゃないですか?)

(その――、何だ。少しばかり嫌なコトがあったというか……仕事に逃げてるだけだ、気にするな)

反応はなく……ネギ達が刀子の呼びかけに応える様子はない。

「……5分だけ待ちます」

「――って言ってるぜ? ああ言ってるうちに出てった方がいい

んじゃねーか？」
「フッ、諦めるのが早いぜちうっち。よく考えてみろ、世界を巻き込む大事件の参考人だぜ？　どれくらいの時間　拘束されるのか見当がつかねえ。そんなコトしてる間に……逆転のチャンスを逃しちまうぞ？」
「……逆転？　出来るんですか！？」
「何か策があるでござるな、カモ殿」
カモがニイッと笑った。
「ちうっち、ＰＣで調べてほしいモンがある」
「この状況じゃ無理だろ。せめて駅前の無線ＬＡＮエリアまで行ければ……」
「ＯＫそれでいい。兄貴、何かあるか？」
「出てきましたね」
玄関のドアから、刹那・楓・ネギ・のどか――だけが出てきた。
「……他の皆さんはどうしたのですか？」
「すみません。今お二人には従えません」
「――何ですって？」

ネギの返答に刀子は眉間に皺を寄せる。

「ネギ先生……なぜ従えないのですか？」

「理由は言えません。ただ僕達は超さんの仲間ではありません。そしてこの状況を好転させる手段があります。この場は見逃してくれませんか？」

タイムマシンのことを話しても信用してもらえない可能性がある。カシオペアが使えない以上、実証が不可能だからだ。「自分達には状況を好転させる手段がある」。発言出来るのはそこが限界だ。

「それを信用しろと？　話せないということはやはり……あなた達は超鈴音の仲間なのではないのですか？　――私の人生を滅茶苦茶にしたあの、超鈴音の……！！」

「へ？　人生？」

何故かみるみる機嫌が悪く――というか、怒っている？

「あ――葛葉、少し落ち着いてみたらどうだ？」

「これが落ち着いていられますかっ！！」

見かねた神多羅木が声をかけるが、効果は無かった。

「今回の件で私は行ったこともない『魔法の国』へ強制島流し！！しかも最低３年は

オコジョ収容所入りなんですよ!?
しかも私……せっかく一般人の彼氏つかまえてうまくいきかけてたのに……」

「まあ今回のコトでその彼とも隠し事なく付き合えるようになるかもしれんし」
「なりませんよ!!　片方が魔法の国のオコジョなんてどんな遠距離恋愛ですか
それはっ!!　終わりですよ破局なんですよっ!!」

「えーと、アレは……？」
「その、刀子さんは8年前に西洋魔術師と結婚して麻帆良に来たのですが、今は離婚されています。それで懲りたのか苦労して一般人の恋人と付き合っているそうです」

「まあ何事も諦めなければ輝ける未来が「どんな未来があるってゆーんです!!
戻ってきたら私3●歳になっちゃうんですよ!?　うっ……ふぇぐ……うえぇ……」」

「え、えーと……」
「どう反応すればいいでござるか……」

「ぐすっ……丁度いいです。この怒りと悲しみをどうするか困っていたところでした……。ええ、あなた達が超鈴音の仲間であろう

となかろうともう関係ありません。
　従わないというのであれば私のこの剣で――」

「とっ、刀子さん！？」
「死になさ――――いっ！！！」

「くっ、『風障壁』――――――！！」

“――――――雷鳴剣！！！”

青天の空の下で、雷が鳴った。

――――ガカァンッ！！

「「「キャ――――――――――！！？」」」

刀に気を纏わせて帯電させ、電気エネルギーを放つ技「雷鳴剣」。
刀子が刀を振り下ろすと周囲が吹き飛び、地面が砕けて爆発した。

「っ兄貴！！」
「！　カモ君おかえり！！」
「こっちは首尾良くいったぜ！　それよりここはもう限界だ、嬢ちゃん！！」
「は、はいっ！」

「刀子さんっ！　真っ昼間からこんな大技を……！！」
「もーいいんですよ！　バレたって騒ぎになったっていーんです問

題ありません！！」
「問題はあるでしょう！！　自棄にならないでくださいっ！！」
「――――葛葉刀子さん！！」
「！？」
土煙の向こうには、光る本を携えた宮崎のどか。
「おい衛宮……まさかあの本は――」
「先生の予想通りですよ。」
「今、高畑先生はどこにいるんですか――――！？」

DIARIUM（ディアーリウム）　EJUS（エーユス）

6月30日　月曜日　　トウコ

ええ、もう魔法はバレてるんですから技が派手だろーが森が吹き飛ぼーが気にする必要なんてないんです！！今の私に楯突いた以上、多少のケガは覚悟してもらいますよ！！
それにしても……彼女達のあの肌の張り、ツヤ。あの若さならばこれからいくらでも時間があるではないですか。ああ羨ましい。
ええ、若くてピチピチの女子中学生のあなた達に私の気持ちなん

て分かるハズが――

のどか「……。」

カモ「……。」

ネギ「……。」

（（聞こえてない――――――――――!?））

「ありゃ頭に血が上ってんな……」

「って、どうしようカモ君!?」

「よし、さっそく保険を使う時だぜ!!」

爆煙が収まりきらぬまま――刀子が刹那に接近していた。

下方から振るわれた剣閃を、夕凪を抜刀して防ぐ。――が。

――ギシッ!

「!!」

夕凪が刀子の刀――いや、鞘に斬り込んで填まった。動かせない。

今まで刀子は剣を抜刀せずに戦っていたのだ。

（では先の雷鳴剣も？　鞘で、何て威力――――！！）

――――パチンッ！！

「！！」

刀子が今度こそ抜刀した。

「アデアット！　ろ・は二刀！！」

鞘と刀による二刀剣戟を匕首（シーカ）・十六串呂（シシクシロ）の二刀で防ぐ。

しかし”気”で強化された攻撃を咄嗟に召喚したアーティファクトで防げるはずもなく、

ろ・はの二刀は刀身を容易く砕かれる。

「アーティファクトですか？　やりますね、刹那」

夕凪は今の攻防で刀子の後ろに弾かれてしまった。新たに二刀召喚する。

（激していても太刀筋は冷徹……。さすが熟練のプロフェッショナルだ……！！）

「誰が熟女の年増ですって――――――――――！！？」

「言ってませ――――ん！？」

「あーもう！　刀子さん落ち着いて！！」

「「！？」」

今まで静かだった士郎が――――刀子を羽交い締めにした。

「何のつもりですか！！　放してください！！」
「落ち着けって言ってんですよ！！」
「は、放してくださいっ！　人を熟女だの年増だの言う躾のなってない子に痛い目を
見せてやるんですから――――！！」

じたばたと士郎の腕の中でもがく刀子。だいぶ頭に来ているらしい。
年齢に関する発言は聞き間違いなのだが。

「刀子さんは美人だから大丈夫ですって！！」
「美人だから何だってゆーんですかぁ！！　もう彼とは破局確定なんですよ！！
帰って来たら三十路過ぎてますし！！　もうお嫁に行けませ――――ん！！！！」

美人は否定せんのかい。
ちなみに周りはこの茶番を黙って見ていた。

「ああ――ったく！　もし行き遅れたら俺が貰ってあげますから！！」

「……へ？」

場の空気が一変し、その場の全員がぽかんと口を開けた。

「……ふっ、ふざけないでください！！　『貰ってあげる』ですって！？　あなたは
何様のつもりですか！！」

士郎の腕を振りほどいて、正面から向き合う。

「……そ、それに、私はこれからオコジョになって、3年は…収容所入りですし……」

俯いていて前髪で見えなかったが、刀子は頬を紅潮させて上目遣いで士郎を見ていた。

「ああ、大丈夫ですよ。待ってますから」

――ニコッ。

「はうっ！？」

『もし行き遅れたら俺が貰ってあげます』というのは方便で、「それくらいの気持ちで気を楽にしてこれからの恋愛を頑張ってください」という意図だったのだが……

ノックアウト。刀子は耳まで茹でダコになった。

「よし、今だ嬢ちゃん！」

「は、はい！　葛葉刀子さん、高畑先生は今どこにいるんですか――！？」

「……は、はいぃ？」

――ボウッ……。

「いどのえにっき」に情報が記された。

「で、出ました！　ＯＫです――――っ！！」
「よっしゃ兄貴、ズラかるぜ！！」
「うん、のどかさん！！」
「は、はいっ！！」

開かれた玄関ドアの向こうには。

『ネギ、早く！』
『のどか急ぐです！！』
『んじゃ裏口からさっさと逃げるよ♪』

刀子はまだ頭が茹で上がっているのか混乱しているのか、彼女達を追おうとは
しなかった。
この場に残ったのは刹那・楓と士郎・刀子・神多羅木。

「……衛宮。お前狙ってやってるだろ」
「？　何をですか？」
「……いや、なんでもない」

士郎は神多羅木の言いたいことが分からなかったが、目的が達成できたので良しとする。

「で、あのオコジョとは何を話してたんだ？」

「……気づいてたんですか」

『すみません。今お二人には従えません』
『――――何ですって？』

『あ――――葛葉、少し落ち着いてみたらどうだ？』
『これが落ち着いていられますかっ！！』

『旦那、旦那。』
『お、カモミール。また厄介な事になってんな』

士郎の足元にカモが立っていた。

『へへ。さすが旦那、話がわかる。時間がねえからカンタンに話すぜ。実は――――』

『――――ってワケで、旦那には裏から俺っち達の手助けをしてほしいのよ』

『ま、しょーがない。しかしタイムマシンとか、また突拍子ないな。』
『兄貴の周りはいつだってそうさ。』
『はっ、確かに。分かった。任せとけ』

のどかが出てきた時点で読心狙いなのは分かっていたので、頭に血が上っている刀子を
落ち着かせて心が読める状態に持って行くこと。それが士郎の狙いだった。

「少なくとも、事態を好転させられるっていうのは嘘じゃないみたいですね」

「ほう、そりゃいい。じゃあ俺達はもう帰るか？」

「……いいんスかそれ」

あまりの発言に呆れて聞き返す。

「なに、いま見逃した所でこれ以上事態が悪くなることはない。むしろ好転させてくれるなら邪魔する理由はないさ。」

「……ありがとうございます」

こちらの事情を汲んでくれた神多羅木に、士郎は心から感謝した。

（しかし刀子さんヤケに静かだな。どうしたんだ？）

士郎の正面で、刀子はまだ俯いたまま立っていた。

「いつか背中を刺されても知らんぞ」

「何ですかそれ。物騒なコト言わないでくださいよ」

――スッ……

「？」

煙草を咥えたまま、神多羅木が指を向けた先には――――――

「せ、刹那～」
「な　ん　だ　楓」
「その、もう少し冷静になった方がいいでござるよ？」
「何　を　言　っ　て　い　る　？　私　は　冷　静　だ　ぞ　。
あ　あ　、こ　れ　以　上　な　い　程　に　冷　静　だ　よ。
フ　フ　……」
回収した夕凪をこちらに向けて構えている、刹那。
「……怒ってるんですか、アレ？」
「そう見えないならお前の目は節穴だ。言っておくが原因はお前だぞ？」
そしていよいよ、刹那の纏う”気”が鋭くなった。
「……このような機会は滅多にありません。
――士郎さん。私の修行の成果……見てくださいっ！！」
「おお――――いっ！？」
刹那が、士郎に向って突進した。
（ヤバイ。実力で負けているとは思わないが――今の刹那は怖い。
なんか怖い。）
動揺はしながらも、一瞬で干将莫邪を投影する。

しかし刹那の剣は士郎には届かなかった。

「――――刀子さん……！！」

刀子の剣が、刹那の道を阻んでいた。

「刹那……仮にも近衛家に連なる者に斬りかかるなど、この私が許しませんよ」

「本当はそんな理由じゃないでしょう。それにこれは師弟の問題です。あなたは
引っ込んでいてください！！」

「……恩師である私にそんな口をきくとは、いい度胸ですね？」

「あ、あのー……？」

「ドロドロだな」

「ござるー……」

女の戦いに、男性陣と忍者は蚊帳の外だった。

◇――――――――――◇――――――――――◇

『僕、タカミチに会いにいくよ』

『何でだよ？　そんなコトしてる時間はねえぞ！？』

『わかってるよ、でも聞いてカモ君。麻帆良にいる魔法先生は少なくないし、弱くもないんだよ。なのに超さんは計画を成功させた……。学祭最終日に何があったのか、知っておいた方がいいと思うんだ。いや、知らなきゃ元の時間に戻れても結局何も出来ないかもしれない』

『……む、確かに……』

『僕達の話を信じてくれそうなのは、タカミチと学園長先生くらいだ』

『ほんならおじいちゃんのトコ行ったほうがええんちゃう？　ウチも説得できるえ？』

『いや、これだけの事件だ。学園長は本国……「魔法の国」に行ってるかもしれねえ。探すならタカミチが無難だな』

タカミチも居ない可能性もありえるが、実力的に学園のＮｏ．１（近右衛門），２（タカミチ）が揃って不在という事態はないだろう。そう思いたい。

『しかし表にいる３人は手練れです、簡単には逃げられません。誰

かがここに残って
足止めをする必要があるでしょう。そのうえ先生が離れるわけには
……』

足止め役は現ネギパーティの実力者である刹那と楓しかいない。
明日菜と古菲は魔法使いに対抗できる戦闘力を持っていても、圧倒
的に経験が少ない。
そこにネギがパーティを離れたら、非戦闘員である木乃香・のどか・
夕映・ハルナを守る
には心もとない。

『ってコトだ兄貴。独断行動はやめて全員で行くしかないぜ』

魔法先生・魔法生徒を敵に回したこの状況では隠密行動が望ましい
のだが、
ネギ・明日菜・古菲・木乃香・のどか・夕映・ハルナ・千雨の８人
という大人数での
行動を余儀なくされた。

『のどか嬢ちゃんのアーティファクトの出番だな』

『神多羅木先生は下の名前が分かりません。女性の名前は葛葉刀子
さん。私に剣を教えて
くれたこともある恩師です』

『魔法先生の方が事情に詳しそうだな。心を読むのは旦那じゃなく
てそっちにしよう。
表に出る４人以外は裏口から逃げられるようにしといてくれ。それ
でいいな兄貴！！』

『うん！！』

『――――それじゃ行くぜ嬢ちゃん達！！』

◇――――◇――――◇

8人は裏手の林道を走って逃げる。このまま行けば学園都市の東の端へ出るハズだ。

「オイ小動物、お前が欲しかったのはコレか？」

走りながら、千雨がＰＣの画面をカモに向けた。

「ん？　オォッ！？　そうだよコレコレ！！　ちうっち一体いつの間に！？」

「さっき宮崎が戻るまで意外と時間があったからな、その時に調べた」

「なになに？　どーしたん？」

「見てくれ兄貴！」

「え、なにカモ君？」

「――――これを見てください先生」

千雨のＰＣには麻帆良大学「世界樹をこよなく愛する会」によるここ数十年に渡る
世界樹の発光記録が表示されていた。

「世界樹が大発光した年は学祭から7～8日後の間も発光が確認されています。
つまり今年も同様です」

「ってコトは……！」

「ああ、最終日から1週間後の今日ならまだギリギリ魔力が残ってるかもしれねえ！
しかも……」

「いどのえにっき」から得た情報によると、魔法使いの本部が教会の地下にあるらしい。しかもその教会は地下30階――かなりの深部まで拡がっているという。
そして麻帆良の地下のほとんどに世界樹の根が張っている。
魔力が残っている可能性のある世界樹の根。そこに向かうのにもその教会は都合がいいかもしれない。

「タカミチに会って学祭最終日の話を聞くこと、世界樹の根を探すこと。楽観的だが、
上手くいけばこの二つを一緒にクリアできるぜ！！」

ようやく光明が見えだした。このまま目的へ向かって走るのみ。

「むっ？」
「どーしたの？　くーふぇ……」
「――来るアル！！」

「お待ちなさい！！」

林の中から、黒い衣服の3人が飛び出してきた。
杖を持った夏目、箒を持った愛衣。
そして背後に――仮面と黒衣を身に着けた人間のような――使い魔を従えて、
腕を組む高音が立ち塞がった。

「あ！　アンタはウルスラの脱げ女！！」
「脱げっ……！？」

高音・D・グッドマン。麻帆良学園聖ウルスラ女子高の2年生。
まほら武道会で工学部（超）開発のロボ「田中さん」戦、ネギ戦で計2回　観客の前で全裸
になってしまった、悲劇の魔法使い。

「ま、まあいいでしょう。大人しく同行してもらえるならよし、あくまで抵抗するというのでしたら……
――この正義の味方　高音・D・グッドマンが、成敗させて頂きます！！」

ネギ達を指差して、高らかに宣言した。

第６４話　錯綜編　未来攻防（後書き）

～補足・解説～

：玄関のドアから、刹那・楓・ネギ・のどか――だけが出てきた。
：のどかが出てきた時点で読心狙いなのは分かっていたので
読者の皆さんもこれは予想がついたでしょう。

：うっ……ふぇぐ……うえぇ……」」
赤松先生。この泣き声を出している時の刀子さんの表情が原作で描かれていないことが不満です。不満ですとも。

：今まで静かだった士郎が――
：「で、あのオコジョとは何を話してたんだ？」
士郎が静かだったのはカモと話していたからです。ちなみにカモは士郎の陰に隠れて、士郎は視線をカモに向けずに話していたけれど神多羅木にはバレました。

・オリジナル要素入れるとストーリーが面倒です。
オリジナル小説と違って作者が勝手に進めてったら原作ストーリーが破綻しちゃいますから、「原作重視」のタグを掲げるこの小説はある程度の整合性を保たなければいけないという辛さが・・・

それでは次回。

第６５話　錯綜編　時間逆行（前書き）

学期末が終わったというコトはもう春休みが来るというわけなんですが、どうしよう？
実家帰るのもいいんだけど、実家帰ると次話が投稿できない。
いつ帰ろうか・・・。

あとこれは私事なんですが、大学の教科で親に送られる成績通知を見ないと取得できたかわからない単位があるんです。
それを落としてると留年確定という恐怖・・・！
３月までは不安なエブリデイになりそうです・・・。

では気を取り直して、第６５話をどうぞ。

第６５話　錯綜編　時間逆行

「――ぜっ…はっ……！！」
「はあっ、はぁっ……」

高音達を退けて教会に辿り着き、魔法先生に見つかりながらもタカミチに会う事に成功した。
弐集院から学祭最終日の情報を貰い、地下を抜けて通路に進む。
どこに繋がっているのか分からないが壁や床には世界樹の根が張っており、進むごとに
それらが太くなっている。少なくとも世界樹の真下には近づいているのだろう。

――そして。

「見てください！！　世界樹の根が……！！」

まるで学祭期間中の発光現象のように、ぼんやりと神秘的な光を放っていた。

「おおっ狙い通りだ！　兄貴、カシオペアは！？」
「動いてる！　使えるよ！！」

「やったぁっ！！」
「これで学祭最終日に戻れるぜ！！」
「大ピンチ脱出ね！！」

「ま、待ってください！！」

喜んだのも束の間、気がつけば世界樹の光が――――――

「――――消えてく……！！」

魔力の光が根本に向かって消えていく。同時にネギのカシオペアが停止した。

「マズイ、魔力が消えてってんだ！　あの光を追わねえと！！
オイッなに固まってんだテメエら！？　戻れなくなっちまう――ぞ……」

――――ズシンッ……！！

カモが急かしても、ネギや明日菜の後方にいた木乃香達は動かなかった。
揃って何かを凝視して固まっていた――――

「Ｇｕｒｕｒｕ．．．．．」

――――その、理由は。

「――――あの時の――――」
「竜（トカゲ）……！！」

かつてネギ・のどか・夕映の3人を襲った、図書館地下深部の門番

――――竜（ドラゴン）。

「――――み……みんな逃げてくださ――――――い！！！」

第６５話　錯綜編　時間逆行

『わあぁぁ――――――――――――！！』

夕映を明日菜が、木乃香を古菲が抱え、その他３人がネギの杖に乗って遁走する。

「つ、つーかオイッ！！　アレは本物なのかよ！？」

「流石にこれは手に負えないネ！」

「何でもいいから逃げろ逃げろ――――――！！」

非日常（ファンタジー）がキライな千雨はまず竜の存在に文句をつける。

古菲は「手に負えそうな相手」だったらケンカ売ってたであろう台

詞を吐く。
ハルナさんその笑顔は何ですか。アンタ絶対この状況を楽しんでるだろ。
（地下でモンスターと遭遇キタ――――！！）とか思ってそうだ。

「ってラッキー！　あのトカゲ　デカ過ぎてつっかえてやがる！！」

その巨体が通るには廊下は狭く、ガリガリと音をたてて壁にぶつかっている。しかしそれでも諦めずに追って来る。
やがて竜は侵入者を排除するために、別の手段を使用した。

「――――――げっ……！！」

竜の口から――――炎が漏れた。

「まずい……ラス・テル・マ・スキル・マギステル――――」

竜の口から火球――――竜の息吹（ドラゴンブレス）が放たれる。

「Ｇｕｒｕａａａッ！！」

――――ボッ――――――！！

火球は風の防壁に弾かれて霧散した。

「風陣結界（リーメス・アエリアーリス）！！」

ひとまずは防いだが、こんな遣り取りを繰り返していては時間の無

駄だ。
戦力が――――欲しい。
ネギは仮契約カードを取り出した。

「兄貴、刹那姉さんを！」
「分かってる！　念話（テレパティア）。従者『桜咲刹那』！！」

思考の回線が繋がる。

《――――――――真・雷光剣ッ！！！　死に晒せぇぇぇぇぇぇッッ！！！》

『え〝え〝え〝え〝っ！？』

《――――え、ネギ先生？》

『え、は、はい。ちょっとコッチで問題が起きまして、刹那さんにお願いしたいんですが』

《くっ、分かりました。決着はまだですが仕方ありません。楓はもうそちらに向かいました、いつでもどうぞ！！》

（む、向こうで何が……）

少年よ、君が知るにはまだ早……くないかも。彼も未来の女泣かせで天然ジゴロだし。

「し、召喚！！　ネギの従者『桜咲刹那』！！」

「申し訳ありません刀子さん。もともと私達の目的は足止め。ここで失礼させて頂きます」

「なっ、待ちなさ――――」

――――パシュウゥゥッ

「――――ネギ先生　御無事で！！」

「刹那さんお疲れ様です、それであの、イキナリなんですが……アレ倒せますか！？」

「Ａｎｇｙａ――――――――！！」

「な！？」

退魔師（神鳴流）もビックリ。大口から牙を覗かせて向かい来る、竜。

「せ、西洋竜ですか、強そうですねー。専門の装備があってもちょっと……」

正直　先程までの刹那のテンションとモチベーションなら竜殺しは充分可能なのだが、

如何せん場所が悪過ぎる。
こんな狭い場所で決戦級の奥義でも使おうものなら、こちらも無事では済まない。

「ダメか」
「じゃあ逃げましょう！！」

竜種は高い魔力と対魔力、魔力障壁を持っているので眠らせることも出来ない。
刹那と合流したネギ達は全力で逃げることにした。

「出口！？　光に追いついたです！！」

先頭を走る夕映が叫ぶ。廊下を抜けるとそこは――

「ぎゃ」
「なっ……」
「すご～い、ひろ～～」
「ななななんじゃこりゃ――――――っ！？」

それは遺跡と呼ぶべき場所だった。ぽっかりと穴が開いたような広大な空間。
四方から伸びる通路が繋がるのは、六芒星（ヘキサグラム）の魔方陣が描かれた円盤。
その真下から柱が伸び、その周囲に数本の円環（リング）が浮遊する。
全てのパーツが宙に浮いて存在する、「魔法の遺跡」と呼ぶに相応しい代物。

「何で学園地下にこんなデカイ遺跡があんだよっ！！」
「知らないわよ！！」

「――――カモさんあの中央部……！！」
「おおっ、確かに！　皆あそこだっ！！　あの中心部！！　世界樹の魔力の最後の光！！」

その遺跡の中央に、強い輝きを放つ光球が在った。

「走れ走れ！　ここが正真正銘のゴールだ！！　急がねえとあのトカゲが追いつい――――」
「Ｇｏａａａａａッ！！」
「！！」
「き、来たぁっ！！」

竜が雄叫びをあげて翼を拡げた。もういつ飛び立ってもおかしくない。

「兄貴　カシオペアは！？」
「イケるよ！」
「よしっ、もういい行こうぜ！！」
「ダメだよ、楓さんがまだ――――」

――――ザンッ！！

「――――――お待たせしたでござる！」

どこからともなく楓が姿を現した。

「楓さん！！」
「いやいやドンピシャ！！」

「――全員揃った、オールＯＫ！　行こうっ！！」

全員で手を繋ぎ、時間跳躍を開始する。
しかし――――

「兄貴？」

（本当に、これでいいのかな……　超さんを止めることが本当に正しいのか……）

『……例えば君のお父さんならもしかすると…今回は超君の側についたかもしれない。細かいことにはこだわらない人だったからね』
『超君の計画の果てには多くの人達を救える可能性があった』
『……それで僕は、躊躇ってしまってね……』
『ただ個人的には彼女のやり方は間違っていると思うよ』

「――――何グズグズしてんだ兄貴っ！！」

「ひゃあっ！！　来た来た来たぁっ！！」

竜が飛来する。もう何秒もない。

（――今は戻ろう！！　皆その為にここに来たんだ！！）

「みんな捕まってください！！　行きます！！」

「絶対手ェ離すなよっ！！」

――――――――――カチッ

答えは出さず。全ての迷いを振り切って、航時機（カシオペア）のボタンを押す。

外界の時間と切り離され、時間流に逆らって跳躍を開始する。

この時、仲間達の端にいた夕映は

『――――悪い、ちょっと邪魔するぞ』

誰かに腕を掴まれたような気がした。

◇――――◇――――◇

気がつくと、そこは空だった。

「あ……ありのまま今起こったことを話すぜ！

『俺は地下に居たと思ったらいつのまにか空を落ちていた』。な、何を言ってるのか
わからねーと思うが俺も何が起こったのかわからなかった……」

「って言うべきだったよねーアレは？　アハハ」
「ハルナ、手を動かしてください」
「はいはい、じゃここトーン貼ってね」

ソファで横になって休むネギの隣で、ハルナ・のどか・夕映が学祭最終日に開かれる
学園全体イベントのポスターを作成していた。

長距離（？）時間跳躍の影響で座標がずれて、ネギ達は上空に転移してしまった。
このまま重力に従えば、高速で落下して即死は確定だ。

『クシャッと逝くと治せねーんだろ！？』
『こ、これは無理やなー。トマト的なスプラッタはちょっと……』
『具体例言うなあぁぁぁぁ！！　ちょっと想像しちまったじゃねーかぁぁ！！』
『大丈夫です、僕が！　風よ、我らを！！』

そんなアクシデントを乗り越えて、なんとか無事に1週間前――
学祭最終日の
午前8時半に着地した。

しかし、ネギはそこで魔力を使い果たして倒れてしまう。
ネギを介抱しながら、学祭期間は使用されない中等部図書館を拠点として作戦を練り
始めた。

『タカミチに聞いた情報を整理しよう。』
『超は今日午後7時頃までに約２５００体のロボと6体の巨大生体兵器（？）で6箇所の
「魔力溜まり」を占拠。直径３ｋｍの巨大魔方陣を作り、世界に対する
「強制認識魔法」を発動させる気だ』

『に……２５００……？』
『6体の巨大……なに？』
『お、多いですね……』

『しかしこの情報から1つの防衛策が浮かび上がる。「拠点防衛」だ。6箇所の魔力
溜まりのうち1つでも守っていればこの大魔法は発動しない。』

『おお！！』
『へー？』（↑わかってない）

『この大魔法は儀式魔法である以上　発動には術者による数十分の詠唱が不可欠です。
しかも巨大魔法である制約上、儀式は天井等の遮蔽物のない開けた場所で行わなければ
なりません』
『術者……おそらく超さんですが、術者は発動の数十分前から直径３ｋｍの魔方陣上の

どこかの屋外に姿を現すということです』

『つまり纏めると作戦はこうなる。
俺達が1箇所の魔力溜まりを死守している間は大魔法は発動しない。その隙に別動隊
が超鈴音を探し出しこれを捕らえる。それで俺達の勝ちだ。――――
どうでぇ!?』

『悪くない…というかそれしかないでしょうね』
『直径3kmという広大な範囲から超殿を見つけられるかどうかという不安要素もある
でござるが……』
『まあ流石の超も俺達が1週間後から戻って来てるとは思わねえだろ……多分。
その隙を突くしか――――』

『……待って、カモ君』

『――――兄貴!?　起きて大丈夫かよ!?』

『今の作戦……いいと思うけど、それだけじゃ…足りない気がする』

『――――だから、僕から提案があるんだけど――――――――』

「いいんちょに頼み事かー。気が進まないわね――」

明日菜と古菲は3－Aのお化け屋敷に向かっていた。

「大丈夫アルよ？　やほ――っいいんちょ居るアルか――っ？」

「あら　くーふぇさん？　え？　アスナさんが私に頼み事？」

「……ケッ。そーよ、悪い？」

『本当ならアンタに頼み事なんかしたくもないのにわざわざ頼みに来てやってんのよ』

とでも言いたいのだろうかこの人。

「あ～～ら？　このおサルさんはモノの頼み方を知らないのかしら？　まあおサルさん

じゃ仕方ありませんわね？」

「うっさいわね緊急事態なのよ黙って私の話を聞きなさいよこのバカ」

収拾が着かなくなりそうなので、古菲が切り札を投下する。

「あ――いいんちょ？　実はコレ　ネギ坊主たっての頼みアルが……」

「何故それを早く言わないんですの!?　そーゆーことでしたら!!　ネギ先生のため　なら例え火の中・水の中!!　湖の水だって飲み干してさしあげますわ――――!!」

「……。」

◇――――――◇――――――◇

木乃香と刹那＋カモは学園長に超の計画を報告していた。

「なんと……!!　これは本当かね!?」

報告書に記載されたあまりの内容に、近衛右門は声を荒げた。

「ハッ、全て事実です」

「信じてーおじいちゃん」

「……どう思うね?」

時間跳躍に関する部分は隠して後ろに控える刀子に報告書を見せる。

「にわかには信じられませんが……お嬢様と刹那がここまで言うのですから……。

ネットの方をもう一度調べてみます」

（ふむ。やはり熟考の価値アリ、かの）

「しかしこれが本当なら、超君は随分と気骨のある娘じゃのう。ふぉふぉふぉ」

「笑いごとではありませんよ学園長」

「――報告はわかったぞぃ刹那君や。このかも後はワシらに全て任せて安心して学園祭を楽しんできなさい」

「チッチッチッ、わかってねえな学園長先生よぉ」

近衛右門が目を向けると、メモを持ったオコジョが煙草を咥えて机の上に立っていた。

「アンタ達に任せたらダメだって事は歴史が証明済みなんだぜ？ここは俺達に任せとけって。――ついてはコレを用意してもらいてえ」

「……何と？　しかしこのような貴重な魔法具は……」

メモに目を通した近衛右門の返答は芳しくなかったが――

「フフフ……こっちにも独自の情報ルートがあってね。本国のクラウナダ異界国境魔法騎士団の第１７倉庫に大量に死蔵されてるハズだぜ」

「な……」

「転移魔法で空輸すれば夕方には間に合う筈だ。

アンタに本国とこの程度の交渉が出来る力があることも承知してる」

「……む……」

「これを最低１０００セット……できれば２５００セット頼むぜ。なーに、世界に魔法がバレる事に比べたら簡単なこったろ？」

カモは口の端を鋭く釣りあげて紫煙を吐いた。

「む、むう……！！」

あまりに詳細な情報。近衛右門のコネクションと本国での発言力の熟知。

そしてトドメは「世界に魔法がバレる事に比べたら」という言葉。

それを言われてしまったら、多少の無理はせざるを得ない。

近衛右門は目の前のオコジョに戦慄した。

（決まった……今までで最高の交渉だぜ……！！）

（カ、カモ君……）

（悪役ですね……）

あまりに邪悪な笑みを見て、恐ろしいと思ったのは学園長だけではなかった。

◇――――――――◇――――――――◇

「――――――暇だ」

ネギパーティと学園の魔法使いが慌ただしく動き回っている頃。
金髪の少女が、とある喫茶店のテーブルでダレていた。

「祭リデハシャギ疲レタガキミテェダナ」

彼女の正面に立てかけられた人形がケケケ、と笑いだす。

御存知、エヴァンジェリン主従である。
エヴァは初日と違い仮装はしておらず、いつも通りの黒を基調とした薄着の服装だ。

「あ～～～……ヒ――マ――だ――～～～～……」
「御主人、ホントニガキミテェダゾ」
「うるさい。何が悲しくて3日間も女一人で祭り見物をせねばならんのだ」
「ケケ、本音ガ出ヤガッタナ。ヤッパ寂シインジャネーカ」
「なっ、そんなワケないだろう！！」
「ドーダカ」
「くっ、コイツ……！！　そこを動くなよ、巻いてや――」

言いかけて、やめる。
手に持ったゼンマイの巻きネジを思わず見つめる。

「巻いてやる」相手は今、いない。

こんな時、下手な言葉で慰めようとする従者もいない。

――――寂しい、だと？　煩い。そんなこと――――

――――私が一番よくわかってる。

そんな、行き場のない感傷を持て余して空を見上げて、

「……ん？」

麻帆良祭最終日の学園都市。
初日ほどの盛り上がりは見えないが、それでも変わらず盛況である。
その紙吹雪が舞う空を、屋根から屋根へ跳んで動く黒い影。

「やっぱ無理か。」

目当ての物は見つからない。やはり姿を見せるのは事の直前なのだろう。
探し物は諦めて、取り敢えず適当な建物の屋上に腰掛けた。

「……あ――。」

学園祭の様子を眺めて呟いた。

「そういや一度きりだもんな」

彼がこの学園の生徒だったのは初等部の6年生、その1年間のみだ。
その後17歳で帰って来たが、学校には通わなかった。
だから、学園祭に生徒として参加したのは一度きり。
何故かその事実を思い出して懐かしく思う。

「いいなぁ」

楽しそうな人達を見ていて和む。やはり平穏こそが何よりも代え難いものだと思う。

――だが。

がしっ。

「え？」

後ろから細い両腕が回されて

「――ふんっ」

「――――へぐあぁぁぁぁぁっ！！？」

ヘッドロックで絞められた。

薄れゆく意識の中で彼――士郎が見たのは、金の長髪を持つ少女。

士郎に平穏が訪れるのはもう少し先のようだ……

第６５話　錯綜編　時間逆行（後書き）

～補足・解説～

：高音達を退けて教会に辿り着き、
行間ならぬ話間でやられちゃいました、あの３人（笑）。

：この時、仲間達の端にいた夕映は誰かに腕を掴まれたような気がした。
：薄れゆく意識の中で彼――士郎が見たのは、金の長髪を持つ少女。
夕映の腕を掴んだのは士郎です。何故士郎は過去へやって来たのか？

・次回は士郎とエヴァの絡みがあります。超難しかった。
なんつーか、俺が書くエヴァってすごく極端な気がする。
ギャグっぽく怒ったり怒鳴ったりしてるかと思えばすごくお淑やかになったり。
原作に近いエヴァを書けていないなぁ・・・。要精進ッス。
威厳のあるエヴァ様を読みたかったら原作をどうぞ・・・（泣）

それでは次回。

第６６話　反撃準備（前書き）

次回から麻帆良大戦・動乱編。
士郎にさせることは決まっているんですが、それだけだと地味なのでもう少し出番増やそうかなと検討中。

しかし、６７話がまったくできません。まだ１文字も打ってない。
どうしましょう・・・

それでは第６６話、どうぞ。

第６６話　反撃準備

『ムーサ達の母ムネーモシュネー（マーテル・ムーサールム・ムネーモシュネー）よ、おのがもとへと我らを誘え（アド・セー・ノース・アリキアット）』

《――いらない。そんな事は、望めない》

《……そうだ。やりなおしなんか、できない。死者は蘇らない。起きた事は戻せない。そんなおかしな望みなんて、持てない》

《――その道が。今までの自分が、間違ってなかったって信じている》

《俺は――置き去りにしてきた物の為にも、自分を曲げる事なんて、出来ない》

誰よりも「やり直し」を嫌悪した男は

《殺して、殺して、殺し尽くした。己の理想を貫くために多くを殺し、
無関係な人間の命なぞどうでもよくなるぐらい殺して、
殺した数の数千倍もの人間を救った》

《そんなことを何度繰り返したか・・・分からないんだセイバー》

《そら、そんな男は今のうちに死んだ方が世のためだとは思わないか？》

誰よりも切実に過去の抹殺を願った。

《そうだ、誰かを助けたいという願いが綺麗だったから憧れた！》

《故に、自身からこぼれおちた気持ちなどない。これを偽善と言わずなんという！》

《この身は誰かの為にならなければならないと、強迫観念につき動かされてきた。
それが苦痛だと思う事も、破綻していると気付く間もなく、ただ走り続けた！》

《だが所詮は偽物だ。そんな偽善では何も救えない。
否、もとより、何を救うべきかも定まらない――！》

やがて彼は己の生涯が

体は剣で出来ている。

“Ｉａｍ ｔｈｅ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ”

ただの一度も敗走はなく、ただの一度も理解されない。

“Ｕｎｋｎｏｗｎ ｔｏ Ｄｅａｔｈ. Ｎｏｒ ｋｎｏｗｎ ｔｏ Ｌｉｆｅ”

その体は、きっと剣で。

“■■■――ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ ｂｌａｄｅ ｗｏｒｋｓ.”

無意味だったと絶望した。

第６６話　反撃準備

３－Ａお化け屋敷「ＨＯＲＲＯＲ　ＨＯＵＳＥ」。

「あれ――エバちゃん、衛宮さんに付き添ってもらって学祭巡り？　良かったねー♪」

「フン、まあな」

普段なら子供扱いされて額に青筋が浮かぶ所だろうが、何故か今のエヴァは機嫌が良かった。

「でもいいのー？　ウチのお化け屋敷けっこーコワいよ～～～？」

「ほう、それはいい。この私を怖がらせることが出来るかな？」

「なんでそんなケンカ腰なんだお前・・・。」

「それでは２名様　御案内～♪　逝ってらっしゃいませ～～～？」

（逝っ！？）

――茶道部。

「あらマクダウェルさん、今日はお連れさんがいるのね？」

囲碁部。

「お兄さん筋がイイですね。これを機に囲碁を始めてみませんか？」

そして現在、超包子。

「……なぁ。何で俺は学祭巡りをしてるんだ？」

「無粋な事を言うな。デートの最中に文句を垂れるなど男として恥ずかしくないのか？」

「諦メロヤ士郎。御主人ニ見ツカッタノガ運ノ尽キダ。」

そう。結局　午前中はエヴァと過ごして終わってしまったのである。

「オイ。終わってしまったとはどういうイミだ。私と過ごすのは不満か？」

「イヤイヤイヤけしてそのようなことは」

今のエヴァは世界樹の魔力が満ちてきた影響で魔力が大幅に回復している。全盛期とは
いかなくても、とっくに大魔法使いクラスに達しているのだ。逆ら

ってはいけない。

「そもそも私に盾突く権利が今のお前にあるのか？　主に無断で出ていくなど、従者にあるまじき行為だ」

「いや、書き置きを残してっただろ？」

「馬鹿言え！　あんなものただの事後報告だろうが、事前に言えと言っているんだ！！」

バンバン！とテーブルを叩いて相当ご立腹の様子。

しかし人形のような少女が膨れっ面で怒っている様子は周囲の心を和ませた。

その怒りの原因であり矛先でもある男は苦笑いするしかない。

「しかも１０日の予定がたったの３日で帰って来るとは、向こうで何があったんだ？」

（――――――……。）

「――いや、色々あってな……。師匠とドンパチやったり、知り合いに会ったり」

「待て。誰と、何をやったと？　――それとその知り合い、女だな」

「……え？」

「図星か貴様ぁ――――――！！」

「……成程。お前は『超鈴音の計画が成功した未来』から来たのか」

「やっぱ知ってたんだな。時間跳躍術の事」

士郎は表情を変えて問いかける。ここからは――真剣な話だ。

「当たり前だ」

エヴァはあんまんを咥えながら答えた。

「茶々丸は奴等から譲り受けたものだ。機械の動力に魔力機関を組み込むという研究に協力した報酬としてな。そういう契約だ。いくら私が機械に疎いといっても、この時代の技術と未来技術（そうでないもの）の区別ぐらい出来る。」

士郎は不在だったため知らないが、まほら武道会に出場した「田中さん」ロボ。

彼は電力供給型だったが、その同系機の動力は世界樹の魔力であり、エヴァンジェリンが関わった研究の成果と言える。

「――それで。何で俺から超の情報を遮断したんだ？」

「……。」

口をへの字に曲げて噤んでしまう。

学祭前日にも訊いた。だがその時も話して貰えず、ギクシャクとした空気のままエヴァは自室へ籠ってしまったのだ。

お陰で士郎は「麻帆良を離れる」という話を書き置きで伝える羽目になったのだ。

「……はあ、まだ話してくんないのか」

どうやら、相変わらず話をする気はないようだ。
呆れて溜め息が出る。いったい何だというのかこの吸血姫は。

「……お前こそ」
「――――？」

エヴァはジト目で、しかし真剣な瞳で士郎を見やる。

「お前こそ、どうして過去なんぞにやって来た。≪やり直し≫は、お前が一番嫌いなモノのひとつだろう」

「……！！！！」

そう言ってまたプイッと目を背けてしまう。

（……あ――――――……。）

士郎は何か納得したような、そんな声色をしてまた溜め息を吐く。

「ったく、コイツは」

「……おい？何だ一体――――」
「四葉さん、お代ここに置いとくぞ――」

―はい、わかりました―

「おい。ホントに何だ――」

ガタンッと椅子から立ち上がって

「あっ、お、オイ！！」

エヴァの手を掴んで、強引に引っ張って歩き始めた。

「ケケケ、御主人。妙ナ火ィ着ケチマッタナァ」

その後ろを、面白そうにチャチャゼロが追いかけていった。

◇――――――◇――――――◇

「のどか、これベタお願いっ」

「うん」

中等部図書館。

ハルナとのどかは告知ポスター・パンフの作成に追われていた。

「……しかしまあ、先生にしては随分と大胆な作戦を考えたものですね」

「学園全体イベントの企画変更」の告知をネットで進める千雨が、ソファで休むネギに話しかける。

「もう……油断はできません。あの超さんなら僕達が未来から戻って来る可能性も当然考えていると思うべきです。だったら……超さんが驚くくらいの作戦じゃなきゃ勝てないと……思ったんです」

「……確かに」

ここではない、1週間後の未来。

学園の魔法使い全てを出し抜き、ネギ達を戦わずして敗北させたその知略。

「私達が戻って来たことすら超の計画通りなのではないか」。

千雨も学祭最終日に戻って来た時にそう思った。そして誰もその可能性を否定出来なかった。

「でも、本当にこれでよかったんでしょうか……。一般人まで巻き込んで……

これでは超さんと同じです。力に力で対抗するなんて……

それに僕……まだ超さんが本当に間違っているのかどうか――」

「――あぁ!?　何だよまだ悩んでんのかよ先生!?」

思わず作業を止めてネギの方を向く。

「力には力を!　言ってもダメなバカはブン殴ってでも分からせる!

世の真理だぜ、何が悪い！？」

話し合いに応じず暴力を翳す相手に無抵抗ではいられない。
当然、力には、力で対抗するしかない。でなければこちらが滅びる。

「で、でも……せめてもう一度　話し合いを――」
「アホ！」

「……確かにそれは世の真理です」
「――綾瀬？」

「でも、悩む事が悪いとは思わないです。自分が正しいと思ってしまえばそこで全ての
回路が閉じてしまうですから。
少なくともあなたは間違っていないと思うですよ。ネギ先生」

夕映の言葉がネギの心に染み入る。しかし、「間違っていない」では駄目なのだ。
ネギは「間違っていない」答えなら既に幾らでも出している。
だが……正解だけが出てこない。

ネギは――――――――――――、
――――――気づき始めていた。

◇――――――――――◇――――――――――◇

――世界樹前広場。

「注目注目――！　最終日学園全体イベント変更のお知らせだよ――――！！」

「あれ？　去年の鬼ごっこが凄過ぎたんで今年はかくれんぼって言ってなかったっけ？」

「変更かー、そうだよな。かくれんぼなんてつまらなそーだもんなぁ」

「えーと何々……？」

――――『火星ロボ軍団ＶＳ学園防衛魔法騎士団』。

：さあ君も騎士団に入団しよう！

：支給される装備を駆使し、世界樹を狙う火星ロボ達から６つの拠点を防衛して

撃退するのだ！

「……スッゴイＢ級感出てるけど」

「でも面白そうだな。サバイバルシューティングか？」

「参加してくださいねー？」

「――――以上のようにリニューアルした最終日イベント、皆様のご参加をお待ちしておりますわ！！」

「――これで告知も……終わりだ」

千雨がＰＣのキーを叩いて作業終了。

「よっしゃー！」

「お疲れ様ですー」

「おいおい浮かれてんじゃねーぞ。」

「ここからが本番でござる」

仕込みは終わった。夕方から麻帆良は、世界の未来を巻き込む戦場と化す。

「う……う～ん」

ネギの呻き声が聞こえる。

「やっと寝たと思ったら魘されてるぜ。こんなんでホントに回復すんだろな？」

現状、超に対抗できる可能性があるのはネギだけだ。回復してもらわなければ困る。

昨日の交戦時。ネギの「戒めの風矢」も、刹那の「稲交尾篭」も、刹那・楓の全方位

同時攻撃も――全く効果がなかった。絶対に躱せない・逃げられない攻撃から容易く
脱出し、気配もなく忍び寄られて反撃される。
楓が”ズル”と称したその術を、ネギは「なんとか出来ると思う」と言った。
だから最後の決着は、ネギに着けてもらわなければならない。

「うぅ……うぅ～～ん……」

ずれた毛布をかけ直してやる。

「ったく…何が正しいとか間違ってるとか、１０歳のガキには重過ぎる荷物だぜ」
「確かにネー。あたしらだってそんなのわかんないのに」
「……。」

ネギを見守る少女達に現時点で出来ることはもう無く、静かに開戦の時を待ち続けた。

◇――――――◇――――――◇

「――カチャ……」

金の少女が中国茶のカップを置く。

カウンターの自らの指定席に座る彼女の隣りで、赤髪の男がコーヒーを飲んでいた。

士郎とエヴァは現在アルトリアにいた。
マメな店主が普段から清潔にしていたので、3日間の不在ではそれほど埃も積もっていない。当然二人の貸し切りだ。表のドアには「準備中」の札がかけられている。
チャチャゼロがカウンターの奥で酒を飲んでいるが気にしない。

「で、何だわざわざ。こんな所まで連れてきて」
「別に。ただ静かな場所で、二人っきりで話したかっただけだ」

士郎はコーヒーを一気に飲み干した。

「で、さっきの話の続き。」

カップを置いて話し始めた。

「俺にとって此処は確かに過去で、やり直しには間違いない。でも、アイツらは違う」

ネギ達が1週間後に飛ばされたのは超の罠によるもの。言ってしまえば不測の事態
であり、事故のようなものだ。

「アイツらは偶然未来を知っただけの、間違いなくこの時代の人間だ。過去を変える
権利がなくても――未来を、選ぶ権利はあると思うんだ」

「話を逸らすな。あのガキどもの話をしているんじゃない。私はお前の――」
「心配だったんだよ。」
「……は？」

「心配だからついてきたんだ」
「……ッこ、の……お前は――――――！！」

エヴァは声を荒げて、射殺さんとばかりに士郎を睨みつけた。

『心配だからついてきたんだ』

――本当に――――この馬鹿は！！

コイツの事だ、どうせ時間跳躍なんて得体の知れない技術にどんな危険性があるとか
考え無しでガキどもについてきたんだろう。
コイツは。どうしてもっと自分を――――――――
――――大事にしないんだ。

憤るエヴァを、士郎は静かに視界の端に収めていた。

――――だってしょうがないじゃないか。

誰かが傷付くことに耐えられない。特にそれが近しい、大事な人間なら尚更。
士郎は過去の否定もやり直しも大嫌いだ。
人は誰かの犠牲の上に生きている。

過去でも現在(いま)でも未来でも、豊かな国も貧しい国もそれは変わらない。
その、自分が踏み潰してきた誰かを否定することなんて、士郎には出来ない。
――でも。
それ以上に、大事な人が傷付くことが許せない。

士郎にだって誇りや矜持はある。
だがそれがどうした？
誇りでメシが食えるか？　誇りで敵が倒せるか？

本当に大事なものの為なら、そんなもの知ったことではない。

なら俺は。木乃香達(アイツら)が日常を護ろうと戦うのなら。
彼らが無為に傷付くことがあるならば、守ってみせよう。
――――――過去(じかん)だって、やり直してみせる。

……気づくとエヴァは顔を背けてそっぽ向いていた。

（あ――――……。こりゃ本気で怒らせちゃったな……）

こんな俺をいつも心配してくれる彼女には、本当に感謝している。
ただ謝るだけでは彼女の気持ちに応えられない。

（さて、この状況はどうしたもんかな）

と考え始めた士郎の目の先に。空になった酒瓶が１０本以上転がっていた。

（……てめぇチャチャゼロ。後で覚とけよゴラ）
（俺ガ気ヲ利カセテ二人キリニシテヤッテルンジャネーカ。アリガタク思イナ、ケケケ）

士郎はエヴァの機嫌をどうしようかという思考と共に、この損失をどうしたものかと考えを巡らせ始めた。

◇――――――◇――――――◇

「全世界に対する強制認識魔法……！？」

魔法使い（マギステース）・人間界日本支部の教会で、集められた魔法使い達は戦慄した。

――強制認識魔法。
世界樹とその周辺の６箇所の魔力溜まりを占拠して直径３ｋｍの魔方陣を描きだす。
その膨大な魔力と強大な魔方陣で発動された「強制認識魔法」は、地球に１２箇所
存在する麻帆良と同等の霊地――「聖地」の魔力と共振・増幅され、僅か数時間で
全地球にその効果を及ぼす。
その効果は「魔法など超常現象・存在を意識するハードルを下げ

る」というごく簡単
な催眠術程度のものだが、計画にはそれでは充分。
魔法・魔法使い・魔法界の情報をネットにバラ撒く。魔法使いの
電子精霊が太刀打ち
できない程の強力なプログラムに守られて。情報の削除も閲覧制限
も不可能。多くの
人間がこれらを見れば、強制認識魔法の効果で容易く「魔法」を信
じる。
全て計画通りに運べば――半年後には、世界中の人間が魔法を
当たり前の存在
として認識するようになる。

「そんなことが可能なのか……」
「侮っていたな……。学園長、この情報は何処から？」
「今は情報源などどうでもよろしい。何としてもこの計画は阻止せ
ねばならん」
「――それでこの大作戦ですか」

教会には数十人の人間が集められていた。麻帆良にいる魔法使いの
ほとんど全てが。
だが「大作戦」とは、そのことを指しているのではない。
――学祭最終日イベント、『火星ロボ軍団ＶＳ学園防衛魔法騎士
団』。

「確かに……この祭りの人目の中で２５００の敵を相手にするのも、
生徒達を守るのも
難しい。それならば彼らを――当事者として参加させてしまおう
と」

「もちろん安全措置は充分に講じるつもりじゃ。何よりウチの生徒じゃしな」

（……ワシのアイデアちゃうけど。）

近衛右門は壇上で二ヤリと笑った。

「確かにウチの生徒はこーゆーの好きだし能力もありますからなぁ」

「存外　戦力として役立ってくれるかもしれませんね」

「この…6体の巨大生体兵器というのは……？」

「どうやら学園地下に封印されていた無名の鬼神を科学の力で使役するつもりのようです。これが出て来たら生徒は下がらせるべきでしょう」

「しかしどうするつもりだ？　学園結界の中では高位の魔物の類は動けんハズだ」

「まさか結界を落とすつもりか。」

「バカな、ウチの防壁を甘く見ているのか……」

「――――いずれにせよ」

近衛右門の一声で、ザワつく魔法使い達は瞬時に思考を切り替える。

「これ程の計画を進める超君の力を侮る事は出来ん。心してかかるがよい。本国からの応援も間に合わんじゃろう。超君の計画を阻止できなければ世界が変わる。

諸君　全力でこの作戦にあたってくれ！！」

『――――ハッ！！』

◇――――◇――――◇

世界樹前広場のすぐ傍。
喫茶店のテラスにて、カモが朝倉に事情の説明とイベント司会の依頼をしていた。

「成程ね。臨時戦力と陽動を兼ねた、無自覚の一般人による防衛作戦か」

渡された書面を見て冷静に分析する。

「確かにゲームならみんな喜んで参加するだろね。例年のイベント通り賞金も出るし。
でもいくらウチの生徒が色んな意味でデキる奴が多いっていっても――――
所詮は一般人。あの超りんのロボ軍団の相手になるの？」

「そこで”装備”っつって配ってる魔法具の出番さ。魔法古道具（アンティーク）マニアの兄貴が
思いついてゆえっちが『世界図絵（オルビス・センスアリウム・ピクトゥス）』で探し出した。
あの魔法具は非生命型の魔力駆動体――――人形やゴーレム――――を活動停止に

追い込む専用の魔法具でな。世界樹の魔力で動いてる超のロボどもには効果絶大だ。
　これがありゃ一般人でも充分渡り合えるって寸法さ」

「――確かに悪くない作戦だね。でもこれって…超りんが一般人に危害を加えない事が大前提だよね？」

「超が本気でカタギに手を出すようなことがありゃすぐに引かせるさ。その場合　奴はそこまでの人間だったってこった。
　逆にそんな小悪党なら与し易い……と学園長や魔法先生は考えてるだろうぜ」

「……この作戦立案したのはネギ君だよね。ネギ君もそう考えてたと思う？」

「……グフ。」

「それよそれ！　いやー俺っちもまさか兄貴の口からこんな作戦が出てくるとは思わなくってよー！！」
「ネギ君一皮剥けちゃったかな――っ！？　他人様の迷惑まで勘定に入れて動けるよーになればリーダーの素質充分だよねぇ？」
「いやも――おっちゃん嬉しくなっちゃってよぉ――――っ！！
　兄貴は甘ちゃんの良い子ちゃんでマジメ過ぎなのが心配の種だったんだが」
「そっか――遂にネギ君もヤラシー大人への階段登っちゃったか

――――っ
お姉さん複雑だな――♪」
「ムヒョホホホホ♪」
「にゃへへへへへ♪」

下卑た声で笑い合う女子中学生とオコジョ、という不気味な光景は、
イベント前で
盛り上がった周囲には幸い意識されなかった……。

◇――――――――――◇――――――――――◇

エヴァンジェリンは未だに士郎の方を見ようとしない。
不機嫌を隠そうともせず、ずぅ～～っとあらぬ方向を見つめている。
「ホントに子供じゃないんだからさ、それ以外の反応ないのか？」
「煩い。もうお前と話すことなどない」

「――――俺は違うぞ」
「……？」

「妙に心配症だよな　お前って。まぁ俺みたいな頼りないヤツが相手じゃ仕方ないだろうけどさ」

「――――何の話だ。」

「それで素直じゃないんだから、人によっちゃ勘違いされるよなー」

「おい、いったい何の話を……」

「――――――エミヤシロウ（アーチャー）の話」

「ッ！！？」

『ムーサ達の母ムネーモシュネーよ、おのがもとへと我らを誘え』

「まったく『魔法』ってヤツは便利だよな。記憶の追体験なんて」

エヴァンジェリンは士郎の全てを知っている。

当然、魔術も。固有結界も。もう一人の彼のことも。

彼が――――――どんな人生を歩んだのかも。

「……な、に……を」

「超の計画を知れば、俺がそれに協力すると思ったんじゃないのか？」

エミヤシロウは正義の味方。錬鉄の英雄。正義の体現者。
彼と士郎は基が同じなだけで全くの別人だ。

だが彼らは別人でありながら、同時に間違いなく同じ人間だ。
士郎は幼少の悲惨な経験も手伝って、根っこの部分が特に似ている。

――誰かが傷付くことに耐えられない。

超の計画は多くの人間を救える。少なくとも、士郎がその事実に反応しないわけはない。

Q、もし士郎が超の計画に協力したら？
士郎の特異な能力では正体を隠して協力することは難しい。素性はばれ、事が終われば
共犯として追われることになる。ならここには居られない。麻帆良を離れることになる。
ならば彼は何処に行く？

――――――A、戦場。

旧世界・魔法世界問わず紛争に身を投じるだろう。
そこまで予想がついたとき、エヴァンジェリンは恐怖した。

“まるで、エミヤシロウ（アーチャー）の人生と、同じ――――――。”

「お前が俺を心配してくれるのは嬉しいよ。――でもさ。もう少し……信じてくれよ」

――――違う。信頼とか、そういう問題ではないのだ。
学園に封印されているエヴァンジェリンは麻帆良から離れられない。
エヴァンジェリンが、彼女が恐れたのは――――

「俺は違うぞ」

「――――え？」

「俺は奴とは違う。アイツのようにはならない。顔も知らない誰かの為に、大事な人を切り捨てたりしない。そりゃ俺は自分勝手でワガママで、我慢のできない性格だけどさ。
今回だってお前に黙って出てったし……。でも」

体を向けて、エヴァンジェリンの目を真っ直ぐ見詰める。

「約束する。もうお前を置いて出てったりしない。お前の魔法使い（ミニステ・マギ）の従者として、
――――俺は、絶対に、お前から離れない」

――――だから。

「そんな顔しないでくれ」

士郎はエヴァを抱き締めた。

エヴァンジェリンは最初は居心地悪そうにもぞもぞと動いていたが、やがてその温もりに身を委ねた。

（……どうしたんだ私は。）

「おい、私がどんな顔をしているというんだ」とか、
「そんなコト言って、どうせまた勝手に出て行くんだろう」とか。
言いたいコトが山ほどあるのに、口から言葉が出てこない。

彼女は「腕を払い除けてやろうか」とも思ったが、結局。

エヴァは士郎の腕から離れなかった。

◇――――◇――――◇

士郎は一つだけ隠し事をしていた。
エヴァはそれに気づけたのに気付かなかった。

「絶対に離れない」。その約束を士郎が果たせる機会は――――

――決して無いということに。

◇――――――――――◇――――――――――◇

数時間後。

「やれやれ、何とか間に合いそうだな」
「既に６割以上の配置が完了しています。」

急ピッチの作業に内心ハラハラしていたカモだったが、見たカンジの作業進度と刹那の報告で一息つく。
未来の情報では超の計画は午後６時半に開始される。現在の時刻は５時２０分。

「まだ１時間以上もある。余裕だな」

「しかしカモさん。超鈴音が我々の作戦を見て計画を断念するという事は……？」
「それはそれで万々歳さ。敵役の来ないイベントは大失敗だがな」

「ではフェイントで計画を遅らせてくる可能性は……」
「それはねえな。大魔法を世界に行き渡らせる為の時間的制約がある。1時間以上は
遅らせられんハズだ」

「では裏をかいて計画を早める可能性は？」
「――――！　……確かにそいつはあり得るな……。念のため
兄貴を早めに起こした
方がいいかもしれねえな、連絡を！」
「ハイ！……む！？」
「どうした！？」

「電話が通じません……！」
「何ィ！？」

「……超さん、念話妨害及び電波妨害用のナノマシン散布を開始しました。あと
６４８秒で麻帆良全域に完全に充満・散布完了します」

「うむ。分かたネ。――――それでは始めようカ、魔法使いの諸君」

ハカセは、格納庫と湖底を繋ぐ通路を開門した。

第６６話　反撃準備（後書き）

士郎のプロポーズの回でした（笑）

原作の流れを極力変えないようにしたいので士郎の出番って裏方とか、裏で暗躍とか、表立っての出番がないんですよねぇ。魔法世界編までは。

次話以降の士郎の出番は地味だと言っていいでしょう。ううん、主人公なのに・・・。もうネギとのW主人公な気がしないでもないよ・・・。

それでは次回。

第６７話　動乱編　開戦（前書き）

お久しぶりです！　佐藤Ｓと剣製の凱歌、帰って来ました！！

そして今すごく眠いです。

ホントは６８話も一緒に投稿したかったんですが眠いので今回は１話分だけ

投稿します。

あと、今からトチ狂ったこと言います。

――――――改訂版を書こうと思う。

――――でも面倒になってやっぱ書かないかも・・・。

理由としては、なんか最近書いてて面白くないから。

作者が楽しんでないのに読者が楽しめるわけない、なんてプロの小説家みたいなことは言いませんが、やっぱ趣味で書いてるので楽しみたいです。

俺のわがままです。

というワケで、「現・剣製の凱歌」と併行して「剣製の凱歌・改訂版」を作成していきたいと思います。その影響で本小説の更新速度は低下すると思われます。

改訂版の為に現作を疎かにしては皆様に失礼かと思いますが、今後ともこの小説を読んでいただけると嬉しいです。

それでは第６７話、どうぞ。

第６７話　動乱編　開戦

「――麻帆良湖湖岸に大量のロボット兵器出現！」

麻帆良学園・学園警備管制室。
１０名弱の魔法使いがモニターの前でキーを叩く中、センサーが反応し警報が鳴る。

大柄な男性のような人型ロボと、６本脚の多脚戦車のようなロボが大量に湖から現れる。
現実にはありえない、映画のワンシーンのような異様な光景がモニターに映し出された。

「早いな。」

情報より１時間以上も早い。

「数は２５００体を超えています！」
「やはり余剰戦力を持っていたか」

管制室室長・明石は表情を崩さない。ここまでは充分に想定範囲内だ。

「葛葉教諭から連絡入りました。一般人が攻撃されましたが、武装解除魔法と同様の
効果に留まっているようです。危険はありません」
「教授、電波及び念話回線に乱れが見られます。妨害されている恐れが」

「マニュアルに従って対応してくれ。向こうがどんな手段を使っているかわからない
以上手間をかけ過ぎる訳にはいかない、回復できないようであれば無理はしなくていい」

現場に待機している魔法先生達は仮にもプロだ。連絡網が潰されてもその場に則した対応
が出来る。
今この管制室に求められているのは学園結界の防衛だ。それ以外の事に手を回し過ぎては
いられない。いずれこの部屋も戦場と化すのだから。
――――電子の海の情報戦が始まれば。

《――――さあ大変なことになってしまいました！》

世界樹前広場のステージで朝倉がマイクを握る。

《開始の鐘を待たず火星ロボ軍団が奇襲をかけてきたのです！　麻帆良湖湖岸では既に
戦端が開かれている模様。さあ魔法使いの皆さん準備はいいですか！？》

「朝倉また司会……」
「ニクイ演出だね――♪」

《――――――ゲーム、スタート！！》

第６７話　動乱編　開戦

管制室のモニターに、麻帆良生たちが次々とロボを撃破してゆく姿が映る。

「ス　スゴイです、湖岸一般人大隊　善戦しています！　撃破数１６０！！」

「さ、流石ウチの生徒達だなー」

こうなることを期待した作戦だったわけだが、「本当にウチの生徒達は何者なんだ」と
明石は苦笑いした。

「防衛線を突破されました！人型兵器１２体、世界樹広場前の防衛拠点に到達します！」

「！！」

いくら麻帆良生が優秀でも所詮は一般人。しかも湖岸は２５００以上もの敵の発生地、勢いに押されてしまうのは当然だ。それに彼らはこの戦いをゲームだと認識している。
手を抜いているわけではないが、「敵を取り零してはならない」という意識がない
――――必死さが欠けているのだ。

そして世界樹広場に向かって人間よろしく走っていた１２体の人型ロボが――――跳ねた。

『うわっ！？』
『飛んっ……』

拠点前に待機していた生徒達は度肝を抜かれ、その間に敵は広場へ向かう。

「わわわ来た来た来たよ――ッ！！」
「スゴイジャンプ力だ……」

世界樹広場に集まっていた裕奈、アキラがロボの接近を確認した。

「よっし反撃！」
「準備は？」
「ＯＫ！！」

亜子・風香・史伽も揃って武器を構え――――

『敵を撃て（ヤクレートゥル）！！！』

参加者の持つハンドガン・杖・バズーカから放たれた光がロボ達を迎撃した。
魔法具の効果で世界樹の魔力を絶たれたロボ達は次々と活動を停止していく。

「あははは　どんなもんよ――――？」

――――ガシャンガシャッガシャンッ！！

「おわっと！？」

更にロボが現れた。しかも1体や2体ではない、次々と広場に向かってくる。

「ど、どんどん出てくるよこのロボさん達――！！」
「なんのなんの、点数稼げてラッキー♪」
「優勝賞金は僕達がＧＥＴだね！」

麻帆良女子中３－Ａに続けと言わんばかりに、広場前で戦闘が開始され、カモ達はその
様子を広場から見ていた。

「ゆーなノリノリあるネー」
「流石は俺が見込んだ３－Ａの嬢ちゃん達だぜ」
「カモ、やっぱダメ　カードも通じない！」
「念話も妨害されている可能性があります」
「やっぱ直接呼びに行くしかねえか……。姉さん達は仕事があるから――」

「ごめんくーふぇ、ネギを呼んできてくれる？」
「ウム、ＯＫアル！」

◇―――――◇―――――◇

図書館。

「はぁー、いよいよ作戦開始だねー。ネギ君起こさなくていいかなー」
「焦るな　まだ1時間以上ある。ギリギリまで寝かせておいてやれ」
ネギはまだ回復しきってはいないようだが、魘される様子もなく穏やかに眠っている。

「あの、千雨さん……。超さんと、ネギ先生のことなのですが……」
「ん？」

夕映がおずおずと話しだした。

「……超さんがやろうとしている事は厳密にはテロなどではありません。強いて言うならば『革命』……世界中の人々の意識を根底から覆す、誰の血も流れない
『世界革命』と言えるでしょう。そしてこの革命によって……」

第1点。
「今　世界各地で苦しんでいる人々を『魔法』という新たな力によって助けられるかもしれない」ということ。
第2点。
「未来人である超はこの革命の帰結として不幸な未来を回避しようとしている」こと。

「これらのことがネギ先生に『本当は超さんが正しいのでは』と悩ませているのではないかと思うですが……」

「た、確かにそれだけ聞くと超さん良い人みたいだね――……」
「コラコラのどか」
「ケッ…くだらねえな」

「それでその……
以上の2点を踏まえても尚、超さんを止めねばならない理論的根拠のようなものは提示できるのですが……」

「何？」

その場の全員が驚いた。
超が正しいかどうかは、ネギパーティでも随分と意見が交わされた。
「超を止めなければ世界が混乱する」、そう結論してネギは戦う決意を固めた。

――正しいかどうかは棚に上げて。
だが夕映はその疑問に、ある程度の解答を与える事ができるという。

「そんなのがあるんならこいつが起きたら言ってやれ。」
「し、しかしこれはあくまで私の意見ですし、言った所でネギ先生の助けになるかどうか……」
「いいから！　こいつにゃお前の言葉が必要だ！　未来（あっち）の高畑の話を聞いただろ!?」
「……！」

「悩むのもいいかもしれんがな。このままじゃコイツもあっちの高畑同様、最後の最後で詰めを誤るぞ!?」

世界樹広場前・防衛拠点。

『うわぁあっ！』
『キャッ!!』
『うぷっ!?』

多脚戦車のビームで１０人近くが脱落（リタイア）した。
ビームを喰らっても失格にはならないが、やられた者は陣地に戻って再装備しなければならない。この混戦、乱戦状況で一時的でも前線から戦力が離れるのは痛い。

「くそ！　あの戦車みてーなの、バズーカでも8発当てないと倒せねえ！！」

拠点前で誰かが叫ぶ。その人物の目に映るのは更に迫り来る数台の戦車。

「キツいなオイ……！」

このままでは――――防衛線が破綻する。

「このロボ軍団キリがないよ！」

「押されてるね……」

裕奈とアキラの口からも弱音が漏れる。

広場にも多数のロボが押し寄せており、こちらもギリギリの戦況バランスを保っていた。

「上の広場を占拠されたら終わりなんでしょ！？」

「負けたら賞金パアですか！？」

もう、これ以上は――――――

『行こうか、刹那さん』

『ハイ』

「！？」

―――ガシャシャシャシャシャンッ！！！

裕奈達の目の前に数十機のロボが降って来た。

「だ……大軍団……こりゃヤバイかも……」

「賞金パアですかー？」

諦めかけた彼女達の頭上に―――影が射した。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

―――――

『火星ロボ軍団ＶＳ学園防衛魔法騎士団』

：さあ君も騎士団に入団しよう！

：支給される装備を駆使し、世界樹を狙う火星ロボ達から６つの拠点を防衛して

撃退するのだ！

＊ゲーム開始後しばらくすると、強力な力を持つお助けキャラクター

「ヒーローユニット」が現れます。

彼らと協力して敵を撃破し、高得点を目指せ！！

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

―――――

「―――どいて　ゆーな！！」

「へ？」

―――――ドッ―――――！！

「な〝っ……！」

轟音と共に一瞬で戦車が真っ二つになる。そこに大剣を持った戦士と、

「――――――奥義」

野太刀を抜いたサムライが降り立った。

“――――百烈桜華斬――――――――！！”

刀を振るうと”気”の花びらが舞い、ロボを微塵切りにした。

「わあああっ！？」

吹き荒れる突風と共にロボの破片が周囲に飛び散る。

悲鳴をあげた裕奈が顔を上げるとそこには。

「お待たせ、ゆーな」

残骸の上に悠然と立つ、騎士姿の明日菜と和風メイド姿の刹那がいた。

「――――アスナ！？　何やってんの！？」

《お待たせしました！　ヒーローユニットの登場です！！

強力な戦闘力を持つ彼らと協力して高得点を目指し、世界樹を防衛してください！》

『ヒゲグラだっ』
『グラヒゲ先生だ！』
『指パッチン！？　あのスゴイの指パッチンなのか！？』

『あれトーコ先生だぜ！？』
『御御足（おみあし）の写メＧＥＴォ――――――！！』
『なっテメ、ソレ後でコピーよこせ！』

「なるほど――――ゲームの演出ってことなら魔法使い（わたしたち）も思う存分力を使えますもんね。
　よく考えられた作戦ですねー♪」

魔法使いの力（ヒーローユニット）によって、６箇所の拠点は徐々に勢いを取り戻し始めた。

◇――――――――――◇――――――――――◇

《ＥＭＥＲＧＥＮＣＹ！――――非常事態――――ＥＭＥＲＧＥＮＣＹ！――――非常事態！》

管制室。敵の撃破数が千体を超え、全て順調にいき始めたそのとき、

「どうした！？」

「こっ…これは……警備システム本体が何者かのハッキングを受けています！！」

「何だって！？」

それを引き裂くものが現れた。

（メインに侵入されるまで気がつかなかったのか！？　そんな、幾重にも張り巡らされた
多層防御プログラムをどうやって――――！？）

「サブシステムダウン！」

「学園結界、出力２０％低下！！」

メインへの攻撃を察知した時には既にサブが停止。警報が鳴って数秒でこの事態。
明石の背中に冷たいものが流れる。

「くっ――――防壁展開して！」

「……突破されました！」

「０３式電子精霊群　第３から８群まで解凍！！」

「かっ、解凍を妨害されました！！」

早い。速い。速過ぎる。攻撃の速度も精度も段違い。管制室の対応・対策は先回りされて
潰される。正面から潰される。即座に潰される。
彼らの首に――――着実に、確実に死神の鎌が迫っていた。

「マッ、ママズイです！　システム中枢へのアクセスコード既に８ケタまで掌握されました！　コード変更不能！　あっもう１２ケタ……速いッ……！！」

（……このスピード、人間技じゃない……！！）

「このままでは――――学園結界が落ちますっ！！！」

――――――――――――落ちた。

『学園結界停止を確認。鬼神（オニガミ）６騎、侵攻します』

その頃。麻帆良湖から６本の水柱が立った。

湖岸防衛隊が気づいてそれに視線を向けると、水柱の中から――――

図書館。

「何か外が騒がしくない！？　遠くの方から地響きが……」

「ああ学祭ライブニュースを見てみよう」

一同は千雨のノートＰＣに集まる。

「お、始まったでござる」

『…ザ……ザザ……ッ…これもゲームの演出なんでしょうか？　スゴイ！』

「――――ちょっと、コレって……！！」

再生された映像に、一同は驚愕した。

戦い（ゲーム）が既に始まっていることも驚きの理由のひとつだったが、何より彼女達が

驚いたのは――――

「何あの巨〇兵！」

「クソッ超の奴　計画を早めたか！」

「画質　悪いでござるな」

「つーかオイ、結界とかのせいでこんなデカブツは動けねーんじゃなかったのか？」

「そ、そのハズなのですが」

「うし、私達も行こう！」

「う、うん、せんせーを起こさなきゃ……」

「……待て」

「え？」

千雨はネギをチラリと一瞥した。

「まだ早い。まだ完全に回復してるようには見えねえ。コイツがどうしても必要になるのは超との最終的な決戦の時だけだ。
ギリギリまで起こすんじゃねえ。とりあえずあの小動物に連絡だ！」

◇――――――◇――――――◇

麻帆良湖から新たに現れたのは6騎の巨人。
その正体は科学技術で制御された無名の鬼神。装甲・甲冑を装備した6騎はまるで巨大ロボットのようで、顔にも装甲が仮面のように着けられている。一見してこの巨人達が鬼だと思う者は事情を知る者以外にいない。

「で……でかっ！！」
「あれガ○ダム！？　ねえあれってガン○ムッ！？」

作者はどちらかというとエ●ァン●リオンみたいだと思ったんですけどね。

《こっこれは凄まじい光景だ！　流石の麻帆良生もこの巨大火星ロボには激震が走ったか！！》

《反対側の岸からも3体が上陸した模様。彼らは真っ直ぐ6箇所の拠点を目指しています！

さあこのピンチを前にどう戦う！？　学園防衛魔法騎士団！！≫

『うっせー！　ピンチなんかじゃねーよ！！』
『やったるわー！！』

「う――ん……ここで士気が下がるどころか上がっちゃうんだもんなぁ。流石ウチの生徒達」

そう呟く人影は、杖を持って屋根の上に立つ瀬流彦だった。

「鬼神に突撃してケガしなきゃいいけど。……まあ、そうならないように僕らがいるんだけどね」

世界樹広場へ向かう鬼神を目指して瀬流彦が走る。
ガンドルフィーニと神多羅木も彼の元に駆け付けた。

瀬流彦は建物の屋根に立ち、他2人は魔方陣を足場にして呪文を唱え始める。

「さて、たまには僕もいいトコ見せなきゃ」

――――――――――――――ズシンッッ！！

≪……ッ！！≫

3人が展開した魔方陣――捕縛結界が鬼神を封じ込めた。
装置で制御されているためか鬼神は声も発しないが、苦しんでいる様子が見てとれる。

『止めたぁっ!?』
『スゲーッ！　ヒーローユニット!』
『よーし今のうちにっ!!』

「――まあ京のスクナに比べれば霊格が格段に落ちるワケだが……」

魔法具があろうと一般人では相手にならない。
必ず魔法先生が出てくる、鬼神がいる場所に必ず現れる。そして彼らを潰せば――

「そろそろ私の出番か。」

全身を黒いローブで隠したスナイパーが、静かに動き始めた。

◇――――――――――◇――――――――――◇

既にネギ達は図書館を出た。一人になった部屋で、千雨は静かに呪文を唱えた。

「――アデアット」

カードの光が収まると、千雨の手にはアニメの魔女っ子が持っているようなステッキが握られていた。

（こ、こんなのが私のアイテムかよ……ホントにネット関係の能力なんだろな？

つーかキスひとつで便利アイテムが手に入るなんて　魔法使いの仮契約システムってのはどーなってんだ？

……しかしリアルとファンタジーがごっちゃになった世界には耐えられん。ここは仕方ねえ）

夕映が『世界図絵』で調べてくれた説明書を手に、渋々作業を始める。

「よし、行くか！

広漠の無、それは零。大いなる霊、それは壱。電子の霊よ水面を漂え。

我こそは、電子の王――――――――！！」

直径4メートルほどの魔方陣が千雨の足元で輝きだす。

（さて……相手は超か茶々丸さんか……いや、葉加瀬も仲間らしいな）

そんな事を考えていたが、千雨には妙な確信があった。

相手は茶々丸だという、自分でもわからない謎めいた確信が。

――光は徐々に増していき、千雨の視界は白で染まった――――。

◇――――――――――◇――――――――――◇

「どうにもならないのか!?　物理的に電源を落として全システムを再起動は!?」

「もう試しました、それも出来ません!速さが違い過ぎて追いつけません!!」

「くっ――相手は何者なんだ!?」

思わず疑問を口にする。こんな速度の攻撃が、人間に出来るはずがない。

「あっ、教授!!」

「うわっ!」

「!?」

管制室のモニターが次々とブラックアウトしていく。

室内の光が消え、機器の電源が落ちていく――――

「なっ……!!」

（馬鹿な――管制室が、乗っ取られ……！！）

――――ウゥン・・・・・・・・・

……機械の停止音が室内に響く。いや、まだ音は聞こえる。明かりもある。

唯一生き残った――いや、生かされたモニターから、最終日イベントの映像が流れている。そこから仲間が戦っている様子をまざまざと見せつけられる。

『管制室にはもうシステムを統べる能力はありません』

『そこで大人しくされているのがよろしいかと』

そんな声が聞こえた気がした。

「学園警備システム制圧完了。完全に掌握しました」

茶々丸は静かにそう呟いて次の作業に移行した。

《――ヴィーッ！　ヴィーッ！！》

「……流石、学園の警備システムは優秀ですね」

もはや警備システムは全て茶々丸の支配下だ。学園を守るシステムは超達に仇為す敵を

探し出す、超の警備プログラムと化していた。

茶々丸の傀儡と化したシステムが、彼女の敵を発見した。

「……いらっしゃいましたか、千雨さん」

モニターに映っていたのは自身のクラスメイト、長谷川千雨。

彼女も開いたのだ。この、電子の海へ繋がる扉を。

「――お相手いたします」

茶々丸の瞳が妖しく輝いた。

――――――――――――――――――――――ゴボゴボッ……

……！！

「な、なんだここは――海！？」

気がつけば千雨は水の中にいた。しかし呼吸はできるし服も濡れていない。本物の水

ではないようだ。

（ネットの海……電脳世界ってことか？）

『……いらっしゃいましたか、千雨さん』

――――――ゾクッ

（――――――――見られた。）

「やっぱあんたか……？　茶々丸さん」

（つーかロボって事は頭脳（？）はコンピュータなんだよな……。
アーティファクト（コレ）で
同じステージに立てたとはいえ、人間が立ち打ち出来んのか？）

――残念ですが……あなたがそのパソコンで出来ることはありません――

――随分あっさりブッ倒れたな――

――あ　安心したのでしょう。魔力を使うことは精神力を削ることですから。
　ゆっくり寝かせてあげましょう。今日は先生とっても頑張りましたから……――

――……何かあんた妙に嬉しそうだな？――

――えっ…いえ　そんなことは……――

――つまり先生はあんたの膝なら安心するっつーことだな――

――そっそれはどういった意味の……――

――先生に協力する義理はないが……あんたと戦うのは面白そうだ。茶々丸さん――

ネギと茶々丸と千雨は学園祭で、一緒に観覧車に乗った。
千雨はあまりに現実離れしたロボである茶々丸をフザけた存在だと思っていた。
だが、なんてことはない。話してみれば彼女は千雨の――ただのクラスメイトだった。

（――へっ。相手がロボ？　コンピュータ？　上等ォ！）

≪――ちう様　何なりと御命令を。我ら電子精霊群　千人長七部衆、如何なる命令にも
従う所存≫

千雨の目の前に、ハムスターのようなネズミのような生き物が7匹現れる。

「てめーらが話に聞いてた電子精霊か……。よし、いくぜ！
隠し事も出来ないような生まれたてのロボが、このちう様に勝てると思うなよ！！」

IDOLUM（イドルム） VIRTUALE（ウィルトゥアーレ）――「バーチャル・アイドル」。
アーティファクト『力の王笏（スケプトルム・ウィルトゥアーレ）』。
魔法使い（ミニステル・マギ）の従者・長谷川千雨――――――出陣。

第６７話　動乱編　開戦（後書き）

改訂版としてせっかく書き出すんだから、今まで書けなかったものを書きたいナァ。京都過去編とか。
過去編・英国編は全部書き直します。京都修学旅行編もちょっと、京都決戦編は完全に書き直します、多分。

しかしこれらはあくまで予定です！！

気分屋なので改訂版を書くことすら中止するかもしれないくらいです。

まあ、生暖かい目で見守ってくれると嬉しいです。

それでは次回。

第６８話　動乱編　乱戦（前書き）

改訂版を書く、と言っても直す必要がない部分や使いたい部分は本作から
コピペするので「なんじゃこりゃ」って思う人がいるかもなー・・・。

それでは第６８話、どうぞ。

第６８話　動乱編　乱戦

世界樹が望める距離の麻帆良の空に、１組の男女と人形が飛んでいた。

「オー、飛ベルゼ。ヤルジャネーカ妹ヨ、学園結界ヲ落トシヤガッタカ」

主の封印が解け、チャチャゼロは自由に動き回っていた。

「何カヤルナラ今ジャネーカ御主人。」

「フン」

エヴァンジェリンは魔法使いのトンガリ帽子を被り、お猪口を片手に箒に座っている。

「野暮な事を言うな、丁度　見せ物が面白くなってきた所だ。それにな、面白いことに
結界は落ちていないようだぞ？」

「……ワケワカンネーゾ？」

「私もよく分からん、科学は門外漢だ。まあ今日はゆったり見物だ、お前も飲め
チャチャゼロ」

「アイヨ」

胡坐をかいた格好でエヴァの隣に浮いている士郎が口を開いた。

「……俺の店の酒なんだけど」
「ああ、タダ酒は美味いなチャチャゼロ」
「格別ダナ。ケケケ」
「……。」

士郎は頭が痛くなった。

『悪いな先生、勝手に仮契約させてもらったぜ』
『お前が望んだ通り外はもう戦場だ。ネットの方はこの私に任せとけ！』
『いいか詰めを誤るなよ！？　まだ迷いがあるようなら、綾瀬の話を聞け！』
『――お前の出番だ！　さあ行って、超の奴をブン殴ってこい！！』

ローブ、指輪、杖――戦装束を身に纏い、今ネギは決戦の場所を目指す。

「――行きましょう！！」

第６８話　動乱編　乱戦

最終日イベント開催エリア、その付近の救護テント。

「え～ん！　え～ん！」
「ハーイじっとしててなー」

“プラクテ・ビギ・ナル。汝が為にユピテル王の恩寵あれ。『治癒（クーラ）』”

赤十字マークの帽子を被り、白い服を着た木乃香が呪文を唱える。
すると男の子の膝の出血していた擦り傷が、跡形もなく消え失せた。

「……あ、あれ？　痛くない！？　スゴイお姉ちゃんどーやったの！？」
「えへへ。お姉ちゃん魔法使いやから？」

「ありがとー！　魔法使いのお姉ちゃーん」
「はいなー？」

少年は手を振りながら駆けていった。

「お疲れーこのか」

傍らのナゾのシスター……もとい美空は紅茶を飲んでサボっていた。
相棒のココネは呆れたようにイベントの方を見ている。

「これくらい何でもあらへんよー。でも思ってたより怪我した人来んなー、張り切ってたのに」

「打撲・擦り傷程度は完全に防ぐ魔法のローブが支給中だからねー。さっきの子みたいに参加者以外がケガする確率の方が高いくらいだよ。
ま、お茶でも飲んでゆっくりしてよーよ」

「……ミソラ」

「なにーココネ？」

「――何　油を売ってるんですか！　世界の危機なんですよ！？」

「イエッサァ――シスターシャークティ――――！！　仕事してきまぁーす！！」

（……でもあたし達の仕事って何？）

（……さあ）

「まったくもう……！」

プンスカ、という擬音が聞こえてきそうな台詞を残してシャークティーも去っていった。

「ケガ人が出ないんは安心やけど、アスナやせっちゃんは大丈夫かなー」

前線に赴く親友2人を思って木乃香は世界樹を見上げた。

◇――――――◇――――――◇

「刹那さんアレ！」

「あれは……！　あれが巨大生体兵器！？」

30m程の大きさの鬼が、麻帆良の街を侵攻していた。

「京都の時のあのデカイ奴みたいじゃんっ！」

「行きましょうアスナさん！！」

「スタジアム方面、鬼神（オニガミ）Bを捕縛結界に捕えました！」

数人の魔法使い――封印処理班と弐集院が鬼神を取り囲む。

「よくやった！　どうだ、封印は可能かい？」

「いえ、やはりこの霊格　大質量です。このままでは……」

「弐集院先生！」

「何か私達に出来ることは」
刹那と明日菜が駆け付けた。
「おおっ君達は確か神鳴流の……」
（あれ？　初対面？）
（アスナさん、私達を手伝ってくれたのは『未来の』弐集院先生ですから……）
（あ、そっか）
「丁度良かった、このデカブツを封印したいんだがダメージを与えなければ無理だ。念話を妨害されて応援も呼べない。鬼退治は君達の専門だよね、手伝ってほしい！」
「ハ、ハイ分かりました！」
「――待ちなさい」
刹那の後ろにタカミチが立っていた。
「元教え子にそんな危ない真似はさせられない、僕がやるよ」
「高畑先生！」
「6体もいるんだ、急ぎでいくよ」
その言葉通り、両の手を合わせていきなり咸卦法を発動した。
――――――ドォン――――！！
空中に跳び上がり、動けない鬼神に『豪殺居合い拳』を叩き込む。

（む……硬いな）

だが――――――無傷。

≪――――――――……ッ！！≫

「うわあぁっ！」

「こっ、拘束破られました！！」

タカミチの攻撃を受けて鬼神が暴れ出し、弐集院が声を張り上げた。

「マズイッ……高畑先生！」

――――――――ド――――ゴ　ン　ッッ！！！！！

「うわっ！」

「うひゃあっ！？」

大気の震えが収まると。

処理班の側に鬼神の腕が落下し、腹に穴が開いた本体はその場に倒れ込んだ。

タカミチは自分に伸びてきた鬼神の腕を一撃で千切り、次の瞬間には腹に風穴を空けていた。

「スゴイ、さすが高畑先生……！」

「やっぱこんなバトル出番ないって――」

「って美空ちゃん!?　いつの間にっ」
「あははー。ナゾのシスターっつってんだろバカレッド」
タカミチは魔方陣で足場を作って空中に着地した。
「科学装置で制御されてるから再生力は弱いハズだ、今のうちに!」
「うむ高畑君!」

『（悪いがそれは困るんだよ、高畑先生）』

「ッ!」

――――キュキュッ!――――――ボキュッ!!

「「!?」」

タカミチの放った無音拳が、何かにぶつかって飲み込まれた。

「どうした高畑君!?」
「狙撃です　気をつけて!」
「何!?――――例の特殊弾というヤツか!!
全員魔法障壁全力展開!　障壁貫通弾の可能性がある、対抗策忘れずに!
封印処理続行急げ!!」

「了解!」

『（バカな……。今のを防ぐとは…さすが「悠久の風（AAA）」のタカミチ・T・高畑……。
最優先目標は狙撃できず……か）』

樹木の陰から獲物を狙う真名は、タカミチの能力に冷や汗を流していた。

（いいだろう、予測通りではある。仕事を続けよう）

しかしその動揺をいつまでも引き摺らない。彼女は間違いなくプロの狙撃手（スナイパー）だった。
そして彼女の得物は、次の獲物へ火を吹いた。

◇――――――――――◇――――――――――◇

千雨は電子の海の中で椅子に座っているような姿勢で浮いていた。
高速でキーボードを叩いて、敵の電脳攻撃から自らの精神（データ）を守る。

「電子の海」という表現とかけているのか、敵の攻撃は全てマグロだとかクラゲだとか
魚介類の映像に変換されて向かって来る。
電子精霊曰く『データの状態・状況推移をグラフィカルに再現したもの』らしいが、

千雨は自分のノートＰＣで立ち打ち出来なかった「高度な電脳戦」
がこんなものだとは
思いたくなかった。

そして戦況は芳しくない。元々こちらが不利なのだ。
学園の警備システムが防御に回っているので茶々丸は全力で千雨を
攻撃すればいいだけだが、千雨は自らを守りつつ防壁を潜り抜けて
学園のシステムに干渉しなければいけない。
敵である茶々丸は自らの場所（アドレス）を完璧に隠蔽しているため、攻撃データを辿っても
彼女には辿り着けない。
千雨の攻撃は茶々丸に届かない。茶々丸本体を潰すことは出来ない。

≪ちう様ー、あの鬼神、戦力としてだけでなく巨大魔方陣生成の為
の魔力増幅装置も
兼ねてるみたいですー！≫

「だろーな、でなきゃわざわざあのデカブツを守る必要はねえ。」

千雨の前に浮かぶ無数のモニターのひとつに、銃を構える黒いロー
ブの人物が映っていた。
それが自らのクラスメイト・龍宮真名だと千雨は知らない。

「おい！　学園結界の資料（データ）まだか！？」
≪スミマセンちう様、収集は終わりましたが解析がまだ……≫
「構わんソレよこせ！　その間の防御は任せる！！」
≪了解ですちう様！≫

電子精霊の処理――膨大な情報の中から術者が必要とするであろ
う情報を選別する作業

――が省かれたデータは言うまでもなく膨大だ。
だが、人間が閲覧するには膨大過ぎるそのデータが千雨には必要だった。茶々丸と
学園システムからの攻撃回避を精霊に任せて、自らが望む情報を見つけるべく目を走らせる。

――結界の内側では高位の魔物はその力を封じられる――
――結界は××年より科学技術を利用した展開システムを導入しており――

（……違う。……違う。違う、これじゃない……私が知りたいのは……！）

――学園結界は、聖地である麻帆良に群がる魔物・部外の魔法使いから土地を守る為に
開発されたのが起源とされ――
――大戦を経た現在でも年に数回、外敵の侵攻が発生することがある――
――その時より西との確執が強まり、一部の陰陽術師が侵入するケースが確認――

「これだ……！」

千雨が目を見開いた。

『超さんがやろうとしている事は――誰の血も流れない「世界革命」と言えるでしょう』

そうだ。超が本当に無血革命を為そうとしているのならば、悪戯に結界を剥がすわけにはいかないハズだ。結界が失われればその間は麻帆良が無防備になってしまう。

――だから。

「だから結界が落ちてないのか……！！」

既存のシステムを書き換えたのか。新たなプログラムをインストールしたのか。

いま学園に張られているのは――

麻帆良に侵入しようとする外敵のみを排除し、内側の魔物に対する制限を排除（オミット）した、

『超の学園結界』。

「――クソッ、面倒なコトしてくれやがって！」

本来なら。学園の警備システムと茶々丸の怒涛の攻撃を防ぎながら、彼らを出し抜いて結界のシステムに侵入してハッキング――結界を復活させればよかった。

だが『超の学園結界』が判明した今、そうはいかない。

既存のシステムを書き換えて作られたのなら、再びシステムを『書き直す』必要がある。

新たなプログラムをインストールしたのなら、『現在の結界を落とし』て本来の結界を再起動させる必要がある。

ただでさえ不利な状況の中、結界の復活に必要な手順が増えてしまったのだ。

≪ちう様ー！　防壁の第七層　破られました！！≫

敵の手に落ちた学園警備システム。『超の学園結界』。

眩暈がする頭を振り切って、千雨は再びキーボードを叩き始めた。

◇――――――――――◇――――――――――◇

「ちょっ、今の皆　殺られたんスか！？」

「わからん！」

壁に貼り付きながら美空が叫ぶ。その他も彼女と同様に壁に隠れる。

初めに、処理班の魔法生徒の障壁に何かが当たった。

弐集院が懸念した障壁貫通弾ではなかったようだが――それはある意味、貫通弾よりよほどタチの悪いモノだった。

障壁に当たった銃弾を起点に羅針盤のような魔方陣が出現し、黒い球状の渦が魔法生徒を飲み込んで消滅した。

それは次々と封印処理班の魔法使い達を飲み込んでいった。

（魔法障壁ごと飲み込まれた、見た事もない武器だぞ！？　狙撃手はこの壁の真裏方向
……どうする！？）

（狙撃手――――龍宮か！……む！？）

――――ズキュッ！

狙撃が来ない位置でありながら――――黒い球体が出現した。
刹那がアスナを伏せさせ、ココネが美空を蹴り飛ばし――――

「っココネ！？」

――――美空を庇って飲み込まれた。

「ホッ……ミソラ……」

――――ズギュンッ！！

「コッ……ココネ――――！？」

（――――馬鹿なっ！　狙撃手はこの壁の向こう側のハズだ！　敵は複数……！？）

思考を巡らせた弐集院の視界で、何かが正面の屋根に反射した。

（……まさか――――）

「跳弾か……何という技術……！！」

そこに思い至った時点で、弐集院の意識は途切れる。

彼も、飲み込まれた。

◇――――――――――◇――――――――――◇

「に……弐集院先生！！」

「ちょっ、冗談キツイって……ココネ……！！」

「落ち着いて！　今のは多分　強制転移魔法だよ！　撃たれた皆は無事だ！！」

「あ、そーなんスか？　……ホッ」

残ったのはタカミチ・刹那・明日菜・美空の４人――戦士系と見習い魔法使いのみ。

封印処理は済んでいない。グズグズしていては鬼神が復活してしまう。

しかし応援は呼べない。このままじっとしているだけでは事態は好

転しない。
だが、動けば撃たれる。

「……しかし……」
「ああ。弾丸にそんな力を込めても精々３ｋｍ飛ばすのがやっとの筈だ。そんな事をして何の意味が……」
「その通りネ」

（（（（（――――――――――――！！！）））））

「戦場ならともかく……今この状況で３ｋｍ先に転移した所で、戦略的にさほど意味はない。」

――――ザッ……ザッ……

声が聞こえる。　足音が聞こえる。　≪彼女≫が、近づいてくる。

「しかしそれが３ｋｍ先ではなく……」

――――――ゾクッ……！！

声の主が持つ絶対の自信が、聞く者に畏怖を抱かせる。
タカミチ以外の３人は激しい悪寒に襲われた。

「――――3時間先だったら……どうカナ？」

「超鈴音（チャオシンシェン）！」

「超さん！！」

「超りん……」

黒を基調とした強化戦闘服に身を包んだ、今回の事件の首謀者――超鈴音。

浮遊する４つのポッドを従えて、彼らの前に現れる。

「３時間先……だって？」

元生徒との邂逅よりも、タカミチの耳に残ったのはその言葉。『時間を飛ばす』。

即ち時間跳躍術。

「ただし魔法ではなく科学だがネ。」

（……フッ……）

超は明日菜と刹那を一瞥して、薄く笑った。

「よくぞ私の罠を抜けて戻てきた。明日菜サン刹那サン」

「「……！」」

「加えてこの大胆な作戦。正直私も驚いたし大変慌てたヨ。まさか君達がここまでデキるとは思わなかた。賞賛の言葉を贈るネ」

「ぬけぬけと……。貴様の方から現れてくれるとはな」

一触即発の空気が満ちる。刹那は超から視線を逸らさない。

しかし対称的に、明日菜は刹那に視線を送っていた。
ネギ・刹那・楓が超に立ち打ち出来なかったことは聞いている。いつものように突っ込む
だけではどうにもならないと明日菜も理解していた。

だが刹那は反応を示さない。明日菜に視線を返す余裕がない。
一瞬でも隙を見せれば、負ける。

夕凪を握る手に力が籠もる。

（来るなら来い……。指一本でも動かせば、斬る……！）

「おっと刹那サン。止めた方がいいヨ、昨夜の二の舞ネ」
「……っ！！」

「この作戦を立案したのはネギ坊主ダナ。ネギ坊主は何処カ？」

（……！！）

その言葉で――明日菜の頭に血が上った。

明日菜の脳裏に浮かぶのは、魔力を使い果たして倒れたネギ。
苦しそうに息をして、全身に汗をかいて、力なくソファに横たわる姿。

「――ネギはいないわ馬鹿リンシェン！！　あんたは私達がブッ飛ばしてやるわよ！！」

ネギ・スプリングフィールドの従者として。明日菜はそう啖呵を切った。

「フ……元気がいいネ明日菜サン。だが――」

「え？」

――バシイッ！！

「……かっ…は……っ！？」

雷を纏った超のパンチが明日菜の腹に収まった。

ただし雷撃ではなく電撃。戦闘服から放たれた電気が明日菜の体を貫いた。

魔法でない以上――マジックキャンセルは効果を発揮しない。明日菜は糸が切れたように崩れ落ちた。

「――――貴様ァッ！！」

「ネ？　昨夜の二の舞ネ」

――その声は背後から。

振り抜いた剣の先に人影などなく。後ろからは機械音が聞こえる。

超のポッドが自分に向けて攻撃を放つのだと、刹那は後になって理解した。

◇――――◇――――◇

明日菜は身体能力が「異常に」高い。気も魔力も使わなくとも容易く常人を超えた動きをする。魔法使いのネギや、神鳴流剣士の刹那が驚く程に。特に高いのが脚力・瞬発力、視力――動体視力。一般人に見えないように放たれた小太郎の攻撃も、それを叩き落とすタカミチの無音拳も、明日菜は察知できるし視ることも出来る。

なのに、「気がついたら」其処にいた。拳を握り、踏み込んだ超鈴音が目の前に。

「ネ……ギ…」

そして明日菜は、そう呟いて気絶した。

『悪い、明日菜は間に合わなかった』

「……これは驚きネ」

超の足元には、煙を上げる機械の残骸。刹那に光弾を放つ前に爆発した4機のポッド。

「衛宮サン。貴方までいたとはネ」

超の右方の遥か遠くに、漆黒の矢が4本突き立っていた。

エヴァンジェリンの傍らで、魔方陣の上に立って士郎が弓を構えている。

（ああ。やはりコイツの弓はいい）

限りなく「自分」を無にして弓の究極――『正射必中』を体現する衛宮士郎。

その射は見る者全ての心を容易に惹き込む。

「アデアット」

数本の剣が士郎の周りに現れる。それらを全て片手で掴み取って弓に番えた。

その様を酒の肴に、エヴァとチャチャゼロは静かに笑った。

「士郎、さん……！？」

困惑を隠せない刹那は声を洩らし、タカミチは不敵に笑った。

（――――――最高の援軍だ）

『刹那、とそこのシスター。明日菜を連れてここから離れろ』

ナノマシンで念話を妨害されているため、士郎は魔術で大気と風に

干渉し、自分の声を
拡声器（スピーカー）の如く遠くへ飛ばしていた。

「な……！！　し、しかし――」

『お前じゃ無理だ。俺だって負けないにしろ、今の超に勝つのは不可能だ。明日菜の治療と拠点の援軍に行ってくれ』

――――――お前じゃ、無理だ――――――

――ギリッ……！

刹那が歯軋りする。

「ホラ、行こうよ桜咲さん」

「……春日さ…ナゾのシスターさん……」

美空が明日菜を抱えた。

「人には適材適所ってのがあるんだって。あーいうのはデキる人達に任せとけばいーんだよ」

『デキる人達』の強さに半ば呆れたように、片目を瞑って刹那を見やった。

（――――励まして、くれているのだろうか。）

「……ありがとうございます」

『ああそこのシスター。シャークティーさんからの伝言だ。念話が妨害されて大変だからお前が伝令役になれってさ。足には自信があるんだろ？　適材適所だ、頑張れよ』

「ええーーーーっ！？　このかの所でまたサボれると思ったのにいーーーー！！」

（あ、さっさと逃げてサボろうとしただけか……）

先ほど抱いた美空への感謝の念を、刹那は心の中で取り消した。

――――――ドッ！！

数本の剣（や）が地面に突き刺さる。

『行け！！』

剣の爆発と同時に2人は跳ねて、木乃香の元へ駆けた。

◇――――――◇――――――◇

真名は逃げる2人を撃てなかった。そんなことをしたら、彼女が射られていた。

「そういえば探知が得意だったな……士郎さん」

自分の中に固有結界――1つの「世界」を持つ士郎は、世界の異常を感知＝優れた
空間認識能力や探知能力を持つ。
魔法使いでない人間も、少なからず魔力を持っている。
士郎はそれを感知して超や真名の位置を探し出した。

「まったく、スコープ越しに睨みつけられるなんて初めての経験だよ。どれほど離れて
いると思っているんだ？」

（いいよ士郎さん、あの2人は諦める。この場は超に任せて他の魔法先生の所へ向かうと
しよう。
――さて、今の超を相手にどう戦う？）

超の味方でありながら、真名は士郎に何かを期待していた。

第６８話　動乱編　乱戦（後書き）

～補足・解説～

‥胡坐をかいた格好でエヴァの隣に浮いている士郎が口を開いた。
・以前は飛べなかったのになぜ？　と思う人がいると思いますが、飛べるようになった何かがある、ということです。

‥「……俺の店の酒なんだけど」
「ああ、タダ酒は美味いなチャチャゼロ」
「格別ダナ。ケケケ」
・さー、前話から考えて「アルトリア」の損失はどれだけでしょう？（笑）

‥（アスナさん、私達を手伝ってくれたのは『未来の』弐集院先生ですから……）
・裏設定。タカミチと弐集院がネギパーティを手伝ってくれました。

‥まったく、スコープ越しに睨みつけられるなんて初めての経験だよ。
・スコープで見つめた相手と目が合って、尚且つその相手に殺気でも飛ばされた日にはそりゃービビりますよ。てゆーか士郎と真名、アンタらゴル○１３みたいだな。

千雨ちゃんには頑張ってもらいたいです。でももう決着まで出番ないス。
オー、シット！！

・・・すいません、ちょっとテンションがおかしいというか調子に

乗ってるかもしれんです。

それでは次回。

番外話　過去編１４　麻帆良過去編（前書き）

ただいまスランプ中につき、第６９話の作成がストップしております。

よってスランプ前に書いた　改訂版に掲載する予定だった、新たな過去編を投稿します。

復活までもうしばらくお待ちください。

番外話　過去編１４　麻帆良過去編

１９９８年１２月２５日　イギリス・ウェールズ

『私が憎ければいつか魔法世界（ムンドゥス・マギクス）まで来るがイイ……。
私は吸血鬼・ボールドウィン・コーンフィールド！！
いつか来るその時までにこの傷を癒し、君との殺し合いに備えよう！』
『私が憎ければ追って来なさい……魔法世界まで』

あの日から――――――――――――――――――２年と８ヶ月。２００１年８月末日。

「……フ、ハ――――ハハハハハハハハハハハハハッ！！！！！！！！
見事！　見事だコノエ・シロウ！　あの少年がまさかここまで成長して来るとは！！」

聖剣と摂理の鍵で地面に縫い付けられ、脱出も再生も出来ない吸血鬼はただ叫ぶ。
――――――後はとどめを刺すだけ。

「いいだろう私を殺すがいい！！　しかし努努忘(ゆめゆめ)れるな。私は人間ではないが、
君が1人の命を奪うことには変わりない！！
命を奪うことで君の心は縛られて、殺すことで君のその手は血濡られて、殺した罪で
君の魂は穢れるだろう！！
君は決して――――――私の呪縛から逃れられない」

カリバーンとデュランダルを新たに1本ずつ投影し、吸血鬼の頭と心臓に突き刺した。
そしてシロウと呼ばれた少年は後ろへ跳び退く。

『君は決して――――私の呪縛から逃れられない。そう、決して！！
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！！』

「――――――――――――――壊れる幻想(ブロークン・ファンタズム)」

魔力の暴発で吸血鬼は四散し、聖なる魔力に汚染された肉体は二度と再生しなかった。

――――――数日後

群青色の海が、港が見える。港から続くなだらかな斜面に沿って建物が建てられており、
ヨーロッパの港町のように見える。
だが実際は違う。
ここは「異界」「新世界」と呼ばれる場所。魔法が満ちた世界、「魔法世界（ムンドゥス・マギクス）」。

その町の小高い広場、塀の上。そこに腰を下ろして港を眺める赤髪の少年がいた。
いや、彼は何も見てはいない。その目に何も映していない。
心ここに在らず、彼はただぼーっと虚空に視線を送っていた。

「ったく、いつまで腑抜けてんだテメエは」

広場の入口から大男が歩いてきた。
長身で大柄、筋肉質な褐色の体を持つ金髪の男。頭に赤色のバンダナを巻いている。

その正体は１８年前の大戦で魔法世界を救った英雄「紅き翼（アラルブラ）」の１人。
最強の傭兵剣士、「千の刃の男」ジャック・ラカン。
今は――広場で黄昏れている少年の師をしている。

「……。」

しかし少年は反応を返さない。
師は困ったように頭を掻きながら、しかし鋭い目で弟子を見やる。

「っハァ～～、重傷だなこりゃ。……お前が言ったんだぜ、自分が殺るってな」

その問いで少年の瞳に、僅かに感情の光が灯る。

少年は復讐する為にこの世界へ来た。親友を殺した男を殺す為に。
そして――――――――――――――――その目的は果たされた。

「……わかってますよ。俺が決めた事です。その為に魔法世界に来たんですから」

だがそれだけ。その問いに返答すれば少年は再び生気を失う。
その様子を見てラカンは懐に手を入れて、用意した物を弟子に渡す。

「オラ」
「？」

少年は何か書かれた紙を手渡される。

「明日の午前９：３４分……メガロメセンブリアのゲート通行許可証……？」
「確かイギリスの……ウェールズだったか？　そこに通じてるのはメガロのゲートだったろ、確か」
「……師匠？」

「ったく世話の焼ける弟子だぜ。師匠の手を煩わせんじゃねぇーよ。
今のテメエに必要なのは休養だ。生まれた世界に帰って、魔法世

界での
事は一旦忘れろ。気分転換ってやつだ。
チケット料金の利子は付けねえ。士郎――――いつか必ず返しに来い」

そうして少年は新世界を後にして、旧世界へと帰還した。

一（マイナス）1話　過去編・麻帆良（２００１年９月―士郎１７歳）

弟子がゲートを通ったのを確認して、ラカンはゲートポートから出て行った。

「これで満足か？」

ラカンがそう言うと、彼の後ろにスーツ姿の金髪美女が姿を現す。

「ドネット」

メガロメセンブリアの魔法使い、ドネット・マクギネス。

「それは貴方が決めることでしょう？　私は貴方の相談に乗って意見を述べたまでよ。
　でも以外ね。貴方なら力づくでなんとかしてしまいそうだけど」

ドネットは腕を組んだままラカンに話しかける。

「ああ。オレ様なら1発ブン殴って喝を入れてやるところなんだが……今のアイツじゃ
それだけでおっ死んじまいそうな気がしてよ」

「私も次代の英雄がこんな所で抜け殻になるのは忍びないわ。
近衛詠春の養子（むすこ）でジャック・ラカンの弟子……
――――――「無限の剣」の近衛士郎。彼は間違いなく大成する」

「あいつはメガロにゃ付かねーぞ？」
「それは彼が決めることよ」

2人は不敵に睨み合う。先にドネットが視線を逸らして目を瞑った。

「そうそう……彼の不法入国記録の末梢と正式な入国記録の偽造、出国申請、チケットの
手配、とても大変だったわ。貸し1つにしておいてあげる」

そう言って再びラカンに視線を向け、ラカンは二ヤッと笑って答えた。

「何だそんなことかよ。だったら今夜にでも返すぜ？」

「結構よ、貴方のお酒好きと女好きは知ってる。飲みにでも行って潰されちゃ
堪らないわ。それじゃあまた会いましょう、千の刃」
そう言い残して彼女は颯爽とその場を去って行った。

（――さて……あの子の心は息を吹き返すかしら）
赤い髪の少年を思って、ドネットは魔力充ちる空を見上げた。

・　・　・　・　・

ウェールズからは逃げるように去った。
誰にも気づかれぬように、会わぬように、静かに。

ゲートポートで換金しておいたポンドでチケットを買い飛行機に乗り込む。
そして――――

「……着いた」

士郎は久しぶりに――――4年ぶりに麻帆良を訪れた。

「……抜かった」

成田空港からタクシーで新宿駅へ、そこから電車で麻帆良に向かい、着いた頃にはもうすっかり夜も更けていた。綺麗な満月が空で光る。

そして忘れてならないのは、麻帆良は学園都市――「学校」だということである。

学校関係者用以外の宿泊施設などない。電車は士郎が乗って来たのが終電だ。

「しょうがない、今日は野宿か」

瞬動で走れば夜中のうちに近隣の都市に行くこともできるが、それは何となく億劫で

野宿を選択する。魔法世界ではしょっちゅうだったので苦ではない。

だが都市部で野宿していては怪しまれる。浮浪者扱いは勘弁なので森で野宿することにした。

「まったく、気分だけで旅行なんてするモンじゃないな」

休めと言われて何処に行こうか考えた。そして士郎が最初に思いついた場所は、何故か

実家の京都ではなく……ここ麻帆良だった。

森の方へ向かうまで、ついでに夜の学園都市を観察しながら歩いていった。

◇――――――――――◇――――――――――◇

《ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！》

また1体、鬼が斬り伏せられて還って行く。

「はっ、――――はぁ――――……っ！」

《ガキのくせにいい腕しとんのう》

《しっかし娘っ子1人相手にこんな大人数なんて気分悪いわ》

《仕方あらへんやろ　それが命令なんやから》

《嬢ちゃんホンマ堪忍な。ていうかな、嬢ちゃんが素直にココ通してくれるんやったらワシらも手ェ出さんで済むんやで？》

「く……！！」

大量の鬼の軍勢に囲まれているのは神鳴流剣士・桜咲刹那。

愛刀・夕凪を構えて息を切らしている。

麻帆良学園の正体は関東魔法協会。

その組織に恨みを持つ魔法使いや陰陽術師がこの街を襲おうとする。

（今夜はツイてないな……おそらく偶然だが、今日はこのエリアに襲撃が集中している……！）

ここは麻帆良の端の森。その中の開けた場所で、刹那は僅かに冷や

汗を流していた。

《気ィ抜いとる場合とちゃうで！》

「――――――――……っ！！」

軍勢の数体が刹那に向かい、先頭の1体が大剣を振り下ろした。

――――ボッ――――――――！！

《――――――――あ？》

振り下ろした腕が――――何かに抉られて千切れ飛んだ。

《――――なっ……なんやコラァッ！？》

何が起こったか理解できないその鬼は絶叫し、刹那と他の鬼達は無意識に動きを止めた。

その時。片腕を失った鬼の視界に――――――

――――――ズドォオンン！！

突如乱入したその人物に、全員が呆気にとられた。

赤い髪に黒いコート。黒塗りの弓を持つ男。一体この人物は何者か。

彼は自分より遥かに大柄な鬼の頭を掴むと、そのまま物凄い勢いで地面に叩きつけたのだ。その鬼は今、ピクリとも動かない。

「こいつらって、全員敵？」
「――――――え？」
（……あれ？　この人……？）
刹那はこの人物に、妙な既視感を覚えた。
「……どうなんだ？」
「え？　あ、はい。一応全て、排除すべき敵ですが……」
（って、ハッ！？　私はこの得体の知れない男に何を無防備に……！！）
「ってことは――――だ。ここにいる化け物全員、狩り尽くしてもかまわないんだな？」
「……は？」
《――――ナメんやないで！！》
先ほどやられた鬼が起き上がって――――残った腕で拳を握って振り抜かぶった。
「しまっ……！」
（危ない――――――――！！）

結果を言えば、刹那の心配は杞憂だった。

《……な……っ》

鬼の拳は、男の弓に遮られて止められた。
そして男はその時　既に、そのまま矢を番えて敵の眉間に狙いを定めた。

だがそれを矢だと思った者は、この場でその男以外にいなかっただろう。
彼が弓に番えていたモノはどう見ても――――”剣”だったのだから。

――――――ドッ！

放たれた剣は当然のように鬼の頭蓋に突き刺さった。

「弓道と違って弓術には対接近戦用の技がある。それと同じだ――覚えておけ。
真の弓兵は、接近戦でも負けはしない」

男が弓を持っていたから、弓兵だと思ったから――――鬼は無謀に殴りかかろうとした。
その鬼も刹那も、勘違いしていたのだ。「弓兵だから、接近戦には脆い」と。
ただ彼は――――弓兵ではないのだが。

「来たれ（アデアット）」

男の手に、身の丈ほどの鉛色の斧剣が現れる。
今まで様子を見ていた他の鬼達に、男は手招きをして言い放った。
「――来いよ」
《はっ、よう言った兄ちゃん》
《ワシらをそこらへんの奴等と一緒にするんやないで?》
《――オオオオオオオオオオオッ――――――!!!》
「――――――――――――――――是、射殺す百頭（ナインライブズブレイドワークス）」
一瞬で叩き潰された。
◇――――――――――――――――◇――――――――――――――――◇
≪命を奪うことで君の心は縛られて、殺すことで君のその手は血濡られて、殺した罪で
君の魂は穢れるだろう!!≫
あれ以来。自分の手が赤黒く見える。どす黒い血の色に。
あれ以来。鏡で自分を見るたびに、昏い昏い影が見える。殺した男の嗤う姿が。

≪君は決して――――――――私の呪縛から逃れられない≫

だから怖くて仕方なかった。力を、魔法を、魔術を使うのが。

“そもそも俺は――――何で、魔法使いになりたかったんだっけ……？”

何処に向かえばいいのか分からなくなって。師匠に呆れられて。旧世界に帰って来て。

麻帆良に戻って、妙な気配がやって来て、探してみれば大量の化け物と、それに立ち向かう女の子の姿。

だというのに。

目の前でその子が危ない目に遭っているというのに、助けることさえできやしない。

怖い。力を使うのが怖い。

呆然と立ち尽くしていた時、ふと女の子の顔が見えた。

「――――せ――――――――」

――――――せつな。刹那。桜咲刹那。

瞬時に、無意識に――――過去の記憶がフラッシュバックした。

義妹の木乃香が。幼馴染みの刹那が川で溺れた時の事。

実の肉親を失って。でも俺は独りぼっちで生きていて。

近衛家に引き取られて。でも俺は淋しくて。

2人が川に流されて、姿が小さくなっていくのを見て――――――

気がつけば、士郎の手には弓と剣(や)が握られていた。

「……！！」

怯えていたのは心だけ。迷っていたのは心だけ。

身体はたとえ1度だって答えを見失っていなかった。

『例えこの手が血に濡れようが、この魂が穢れようが。その果てに、

大切な誰かを。

大事な何かを守れるならば――――――』

……戦える。これからも頑張れる。

士郎は弓に剣を番えた。

◇――――――◇――――――◇

（……すごい）

刹那の見つめる先には、何もなかった。何も無かったのだ。
辺り一面を覆う程の数の鬼。それらの姿は何処にもなく、抉られた地面のみが残っていた。
その、大地を削った男が――――刹那の顔を覗き込んだ。

「っ！！」

一足跳びで数メートル後退し、男に向かって剣呑な声色で話しかける。

「……何故助けた。何者だ。貴様のような人間が学園にいるとは聞いていない」

出来るだけ鋭い〝気〟を込めて睨みつけるが、男は呑気な顔で頭を

掻いて呟いた。

「ああ、やっぱりそうだ」

「……？　質問に――――」

「デカくなったな。刹那」

男はそう言って破顔した。

「え……」

（――もしかして――――――）

赤い髪。そして目の前の、人懐っこい笑みは――――――。

「……し、ろう？」

6年ぶりの再会だった。

「ははっ、当たり。やっぱ気づいてなかったんだなー　俺はすぐ分かったのに。

それにしても、随分可愛くなった――――……いや、美人になった」

（……へ！？）

「い、いやそんなウチなんか――――そ、それに士郎かて背が伸びて格好良くなって……

…ってウチなに言うとるん！？」

刹那は髪を振り乱し、顔を真っ赤にして混乱していた。

『其処の男、貴様　何者だ？』

「「！？」」

木々の陰から誰かの声が聞こえた。

（誰だ？　声が異様に高い。女――――いや子供？）

「その声は――――エヴァンジェリンさんっ！？」

闇から現れたのは。

月光を受けて輝く金色の髪。その身に纏う漆黒のマント。

その容姿は――――――――１０歳程度の幼い少女だった。

「……で　刹那、いつまでイチャついているつもりだ？」

彼女はからかう様にチラリと半目で刹那を見た。

「――――いっ…イ、イチャついてなど……！！」

「『ああ、すっかり美人になった』『アナタもとても格好良くなって……』

ああ吐き気がする。これのどこがイチャついてないというんだ？」

「うっ……！？　ううう……」

「と、そんな事はどうでもいい。そこの男。貴様一体何者だ？」

エヴァンジェリンは殺気を込めて士郎を睨んだ。

◇――――――◇――――――◇

エヴァは森に、自分の近くに大量の”気配”がするのに気づいていた。
警備の魔法先生や魔法生徒が出張るだろうと静観していたが、何時まで経っても気配は消えない。
今日が満月――僅かに魔力が回復する日――ということもあり、業を煮やして自ら出向いてみれば……
圧倒的な力で鬼を屠る男。彼女はその人物が久しく見ない”本物”だと直感した。

（いや……それは色目で見過ぎか。だがいずれ……アイツは必ず”本物”に届く）

だがその男が何者かだけは確認しなければならない。
機を窺って、エヴァは木の陰から声を発した。

◇――――――◇――――――◇

「そこの男。貴様一体何者だ？」

エヴァンジェリンは殺気を込めて士郎を睨んだ。
だが士郎は、そんなエヴァを食い入る様に見つめていた。

――――――士郎が生まれて初めて見た、最初の魔法使い。
彼女に瓜二つ――――いや、間違いなく本人だった。

（馬鹿な……アレはもう何年前だと……！？　何で、あの時のまま――――）

ほんの数日前、士郎が殺した男が答えを持っていた。――――――”吸血鬼”。

（吸血鬼で、少女……子供……！？）

――――――――――真祖の吸血鬼（ハイディライトウォーカー）、『童姿の闇の魔王』。

「……『闇の（ダーク）……福音（エヴァンジェル）』……！？」

「ほう？　よく気づいたな。いや　誰かにでも聞いたか？　そう、私こそは悪の大魔法使い
――――『闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）』！！　ふふん、この偉大さが解るか？」

――――ド……ザッ！

「「！？」」

エヴァが誇らしげに名乗った直後、士郎は地面に膝をついて――――土下座した。

「お願いします。俺を、貴女の従者にしてください」

この後　紆余曲折を経て、士郎は「従者候補その１」としてエヴァの家に居候することになる。

◇――――――――◇――――――――◇

――――――――１９９６年１２月２５日　士郎１１歳

金糸の髪を靡かせて、冬の街に降り立つ小さな魔法使い。
彼女が何か呟く毎に、光が奔って化け物共が凍りつく。

『フン、他愛のない。数だけの雑魚が私の手間を取らせるな』

封印されているとはいえ、アイツは圧倒的だった。

「俺は、弱い自分が大嫌いだった。大切な誰かを守れる力が欲しかった」

「――だから。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの強さに、俺は憧れたんだ。

いつか彼女のように。いつか彼女に――並び立てるような存在になりたいと」

これが後に語られる、士郎が魔法使いを目指した理由だった。

番外話　過去編１４　麻帆良過去編（後書き）

要素を詰め込み過ぎた気がする。

そしてドネットさんへの借りを魔法世界編で返す羽目になる。予定。

第６９話　動乱編　苦戦（前書き）

お久しぶりです、佐藤Ｓです。
スランプ脱出……とまではいきませんが何とか調子が戻ってきました。

ちなみに私の３月の運勢は「今まで順調にいっていた物事がうまくいかなくなる」んだそうです。

順調だったかどうかは分りかねますが、けっこうイイ感じで書いていた小説が
うまくいかなくなったことを考えるとちょっと納得。

でも占いってウマい商売ですよね。良い運勢でも悪い運勢でも、後から考えると
「あれ？　これってもしかして占いで言ってたことなのか？」と人間が勝手に
「当たってるかもしれない」と考えてしまうのですから。
そりゃー大概　当たりますよ。

あとこれは余談なんですが、今まで問題なかったＰＣが何故か昨日インターネットに繋がらなくなってマジ焦りました。
３時間唸ってたらちょっとしたことで回復。くそ、アナログ人間にはハイテクは辛いぜ……。

何が言いたいのかと言うと、小説と同じなのかなと。
「今まで問題なかった」ＰＣの調子が不良になった……。もしかして、あの
占い当たってる！？

それでは第６９話、どうぞ。

第69話　動乱編　苦戦

「キャア！」
「ぐっ！？」
「うわぁっ！！」

瀬流彦達が動きを止めた鬼神（オニガミ）。それを封印すべく動いていた弐集院達とは別の処理班が”特殊弾”の餌食になった。

「い…今の銃弾は！？」

「退りたまえ瀬流彦君！――――ぐっ！？」

「ガンドルフィーニ！！」

「！　神多羅木さ……」

――――ゴキュン！！
――――ギョンッ！
――――――――ガキュッ

……誰もいなくなった屋根の上。
黒いローブのスナイパーが籠った熱を逃がすようにマスクを外した。

「……フ――――……。……難関クリアだな」

ガンドルフィーニ・神多羅木・刀子が――――リタイアした。

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

学祭期間――――学祭最終日に限り、超の戦闘力は無敵に近くなる。
航時機で時間を操りあらゆる攻撃を回避する。未来へ飛ばす特殊弾で敵は全て排除する。
３時間後に敵を飛ばすことは、その敵を３時間無力化するに等しい。
超はその間に悠々と
儀式を進めればいい。
だが超が時間を操ることができても、
彼女に勝つことは難しいにしろ――――対抗できる者が学園にいないわけではない。

「だガ……これは、……予想外だったヨ」

超は腹を押さえて地面に跪いていた。

第６９話　動乱編　苦戦

≪――最優先ターゲット他５名確認。攻撃開始≫

「うおおっ、こいつはまたＳＦチックな多脚砲台♪　――うひゃあああっ！？」

――ドドドドドドドッ！――ガキュキュキュキュッ！！

”特殊弾”がネギパーティに放たれる。

イベント開催エリアに入った。ネギ達は明日菜・刹那との合流と、現在地から１番近い世界樹前広場の防衛拠点を目指していた。

「ちょっとちょっと何よあのブラックホール弾!?」
「ロ、ロボさんの思考は読めませ――ん!」
「私の方でも流石にあのロボットの情報は皆無です!」
「……」
(この感覚……もしや超殿のあの”ズル”と同じ……?)
――――――――ドガンッ!!
「む」
「――――来たれ虚空の雷、薙ぎ払え――――『雷の斧(ディオス・テュコス)』!!」
雷の拳で砲台を突き上げて無力化し、『雷の斧』を力任せに叩き落とす。
ロボは火を吹いて停止した。
「よしっ……行きましょう!」
この程度の障害など何でもないと言うように、ネギは仲間を促した。
(む……成長したアルネ　ネギ坊主)
(……フ)
ネギの頼もしさに、古菲と楓は密かに口元を緩めた。
「でもさ、ネギ君　杖で飛べるんでしょ?　私達のこと放っといて先に行った方がイイんじゃない?」

「いやハルナ殿、超殿には先程のような正体不明の銃弾があるでござる。空を飛んでは狙撃されやすい」

「……！　皆さん　場所が開けました。気をつけて僕について来てください」

ロボの残骸が散乱している大通りには誰もいない。ネギ達は超包子の屋台に隠れながら通りを渡る。

――ザザザ……

「！」

誰か――走ってくる。

速い。一般人の足音ではない。息を潜め、杖を構えて機を待つ――

「――シャークティー先生！」

現れたのは魔法先生・シスターシャークティーだった。

「ネギ先生　大変な事になりました！　魔法先生の主力の大部分が超鈴音の特殊弾に！」

「！！！」

「奴の弾は障壁ごと周囲の空間を飲み込んで――」

（そんな……未来（あっち）のタカミチが言ってた通りに……！！）

――――――ガキュッ！！

「しまっ……」

「シャークティー先生！！」

――――――キンッ！

「兄貴っマズイこれは」

「狙撃でござる！　位置は掴めなかった…全員物陰へ急ぐでござる！！」

◇――――――◇――――――◇

「士郎、お前何をした？」

「別に上手くいくとは思ってなかった。ただの実験さ。もう1度やろうと思っても多分出来ない。でもそれで充分だ。これで超は俺の手札を1枚多く勘違いしてくれる」

エヴァの目には――――タカミチの無音拳のタイミングに合わせて、士郎が超の「反則技」を打ち消したように見えていた。

「――超君　もう諦めなさい。今ので判ったろう、君は僕達に勝てない」

たとえ超がタカミチに攻撃をしかけても、その隙に士郎が超を射抜く。そうすれば
簡単に決着がつく。そしてこの遠距離では超は士郎には攻撃できない。

「……高畑先生。そう言って…諦めるくらいなら、初めから……こんな真似はせぬヨ」

拳圧を受けた腹部に手を当て、息も絶え絶えに呼吸して声を出す。
だが彼女の眼には
未だ強い光が宿り、顔は不敵に笑っている。

「…たとえ君の計画が成功しても、たとえ君が今日1人の犠牲を出さずとも、ひとたび
魔法の存在が世界に知れれば　相応の混乱が世界を覆うことになる。
君はそれをわかっているのか？　超君」

「モチロン承知ネ……だがこの…方法が最も混乱と……リスクが少ない。それは
高畑先生も……いや高畑先生。貴方だからこそわかる筈ダ。
――この世界の不正と歪みと不均衡を正すには、私のようなやり方しかないと」

「……！」

超の言葉にタカミチが揺らぐ。
フゥーと息を整えて、超は更に言葉を紡ぐ。

「聞いているだろう衛宮サン……貴方も同じハズだ。2年半、師と共に新世界を巡った
貴方は見た筈ダ。
大戦から20年を経た今も、紛争と暴力の絶えぬ救いのない世界を……！！」

「……。」

「……どうかな、お二方。私の味方にならないカ？」

『……幸福という名の椅子の数は限られている。それは常に全体の数より少な目でしか
用意されない』

「……？」

「……」

士郎が、朗々と語り始めた。

『お前の計画が成功すれば、本来その椅子に座れなかった筈の――
―零れ落ちる運命に
あった人達を魔法で助けられるかもしれない。でもそれは、逆も同
じだろう』

――”逆”――それは魔法によって――――傷つく人間が出て
くるということ。

『魔法という新たな力によって、幸福の椅子から引き摺り下ろされ
る人が生まれるかも
しれない。「本来　幸福であった筈の運命が不幸に成り替わる」…
……』

『――――――そんなの――俺は、嫌だね』

「……そうカ」

超は士郎に、それ以上何も言わなかった。

「では、貴方はどうかな高畑先生？」

「……。」

士郎の言っていることは正しい。だが、超も正しい。
超は「救われない人々を救いたい」。士郎は「その為に生まれる犠
牲が許せない」。
国連ＮＧＯで活動するタカミチにとって、それは――

――――――コンッ

タカミチの背中を――超が叩く。その手に握られているのは特殊弾。

『ッ！！』

（しまっ……！）

「隙アリ……僅かに動揺したネ。
では高畑先生……私の計画が成就した3時間後の世界で」

――――ガキュキュキュキュキュ……キンッ！――――ドッ！！

タカミチが消えたと同時――超の両手両足を矢が貫いた。

「タイミングを逃したネ衛宮サン」

――――筈が――超は、数メートル離れた場所に平然と立っていた。

「先程の技……どうやら連続では何度も使えないようネ？」

『（こいつ……分かって……！？）』

いや、それはたった今わかったことだ。
例え時間回避を無効化され　攻撃を喰らってでもタカミチを消し飛

ばす。超はその覚悟で
臨んだだけ。無論、士郎の性格なら致命傷にはならないだろうという打算もあったが。
それでも。傷ついてでも目的は果たす。それだけの決意が超にはあった。

「この場は退くとしよう、これ以上　消耗するわけにはいかないからネ。ただ…ひとつ
だけ答えて欲しい衛宮サン。
――――――――貴方は何処から来た？」

『1週間後』

「……衛宮サン。貴方は自分が何をしているのか分かっているのカ？」
『……ああ』
「ならばまだ遅くはない。その刻が来てからでは遅いヨ。衛宮サン…私に手を出さない
と約束してくれるならこの航時機（カシオペア）弐号機、貴方に貸して――」

『いい。これは俺が望んだことだ。――結末まで、見ていたい』

「……」

「理解できない」という気持ちと、「納得できる」という相反するふたつの感情が超の
胸の中に生まれる。

「――衛宮サン。貴方ほど真性の馬鹿を、私は見たコトがないヨ」

『そりゃ、お前に比べたら誰だって馬鹿に見えるさ。それにな超鈴

音、馬鹿と天才は
紙一重って知ってるか？』

「……それは嫌味カ？　皮肉カ？」

『どう取るかはご自由に』

超は笑って姿を消した。

「タカミチがやられたか。アイツめ　だらしない事この上ない。それにしても見事に
揺さぶられたな？　タカミチも――――お前も。
　まったく……男というのは大概バカだな」

超の無力化に失敗したばかりかタカミチまでやられて、士郎は肩を竦めるしかない。

「それで、次は何をする気なんだ？」

はぁ――、と力を抜くように溜め息をついて、士郎はエヴァの傍に腰を下ろした。

「待ってる」

「ん？」

「待ってるんだよ、俺は」

それだけ言って、士郎は眼下の戦いを見下ろした。

◇――――――――――◇――――――――――◇

『私は超の志に共感し、彼女の計画に賛同し協力している』

『私は私の信念に従い行動している。君に対して恥じることはなにひとつない』

『フフ……もっとも報酬もしっかり頂いているがな』

狙撃を受けて、6人は二手に分かれて屋台の中に避難した。相手が真名だと見当をつけた矢先、路面電車の運転席で無線が繋がった。敵は――――やはり真名だった。

『このまま君達との根比べを楽しみたいところだが　生憎他にも仕事がある。悪いが君達にはここで消えて貰おう』

『じゃあ……元気でなネギ先生』

「！！」

「イカン　ネギ坊主　電車を出ろ！！」

――――――――――――――――ガキュッ！！

ネギが乗っていた方の路面電車が――――黒い球体に飲み込まれた。

「ネギ坊主！！！」

楓とハルナは窓に貼りつくように隣の電車の事態を見つめる。

『着弾した瞬間　対象を周囲の空間ごと3時間後へ送り飛ばす強制時間跳躍弾（B・C・T・L）。
超鈴音いわく「最強の銃弾」だそうだ』

ただしカシオペアと同じく　世界樹の魔力が充ちる学祭期間中しか使えない、２２年に１度の限定武装。
魔法障壁ごと対象を飲み込み、剣で斬られてもその機能を失わない。
大きく回避するか
遠くで撃ち落とすしか防ぐ手段が存在しない、『最強の銃弾』。

『ひとたびこの銃弾を喰らったが最後――――あの闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）ですら脱出は不可能……
……だそうだ』

「ネギ坊主――――――」

――――――――キンッ！

ネギ・のどか・古菲・夕映を乗せた路面電車が、完全に消滅した。

◇――――――◇――――――◇

同時刻。世界樹広場前は静寂に包まれていた。

絶えなかった戦いの喧騒は鳴りを潜め、ゲームの参加者達は揃って物陰へ。

司会の朝倉も身を潜めながら解説を続ける。

《さ――――大変な事になってきました。圧倒的な火力差を前に世界樹前広場が
敵の手に落ちようとしています》

今まで無手だったタイプと違い、いま広場に攻め込もうとしている人型ロボは銃で武装
していた。その内の1機が持つガトリングガンによって　多くの参加者が消し飛ばされた。

《さあどうする、学園防衛魔法騎士団!?》

ロボ達の銃に装填されているのは当然”B・C・T・L”。当たった瞬間に3時間後の未来へ無料で強制ご招待となる。

「……しかし消えてしまった人達はどこへ行ってしまったんだ?」

そして生きた人間が目の前で消えれば混乱が起きるのは当然。だがその混乱と　劣勢による停滞を切り裂く者が現れた。

《――フハハハハハハハハ!!!　苦戦しているようネ魔法使いの諸君》

「うおっ!?」

麻帆良の空に、巨大な超がローブの袖を翻して現れた。

「何アレ――ッ、デカイ超りん!?」
「巨大立体映像……?」
「え?　え?　何で超りんが!?」

《私がこの火星ロボ軍団の首領にして、悪のラスボス超鈴音ネ》

「オイ超鈴音だぜ!」
「超包子の社長の!?」
「麻帆良の最強頭脳!!」

突如現れた超の姿に麻帆良生達は各地で度肝を抜かれた。

『また超りんプロデュースだった!?』
『ノリノリだねー』

『くっ……超鈴音……!』

『わー、超（チャオ）でけー』
『デケー』
『まったく、本当によくやる』

《前半の君達の快進撃は見事だた　流石は麻帆良生ネ。やられても復活アリのルールは有能な君達には少々優し過ぎたようダ。そこで新ルールを用意したヨ》

超は懐から1つの銃弾を取り出し、参加者達に見えるように掲げる。

《――この銃弾に当たると即失格。おまけに工学部のヒミツの新技術で当たった瞬間に負け犬部屋へ強制搬送。ゲームが終わるまでグッスリ寝ててもらう事とした》

『厳しいなオイ!』
『あの銃はそーいうコトか』
『眠らせて強制搬送……？　新技術ってどーゆー技術よ』

《ゲーム失格よりもこの学園祭のクライマックスを強制就寝で過ごすは大変なペナルティ
だと思うが？　フフ…スリルが出てきたかナ？　いつ棄権してもよ

ろしいヨ？
　ちなみに君達の頼みの綱であろうヒーローユニットは既に私の部下がほぼ始末した！！
さあ　君達の力だけで我が火星ロボ軍団の進攻を止めることが出来るかナ！？》

「マジかよ！！」
「刀子先生も！？」

《――――――――諸君の健闘を祈ろう》

《……ちなみに今回のロボ軍団は全て麻帆大工学部と超包子の提供ネ♪
『世界全てに肉まんを』超包子をよろしくネ♪》

雰囲気ブチ壊しの一言を加えて去ろうとしたが――

《――――さあ遂に現れました、悪の大ボス超鈴音！
今イベント雪広グループとの共同出資者「超包子」主催　超鈴音さんが自らラスボス役を
買って出てくれました！》

特殊弾の使用による混乱を防ぐ為、超を敵として堂々と倒すため、
2人はゲームとして
表向きの口裏を合わせる。

《超鈴音はゲーム中エリアの何処かに潜んでいます！発見した方にはボーナスポイントと

特別報奨金をプレゼント！尚これは一般の方も参加できます！》

その時、朝倉と超の視線が――立体映像と視線が合う筈はないが――合ったように見えた。

（――ニッ……）

（フ……）

目こそ合わないものの、当然互いの音声は聞こえているのだろう。

朝倉は超に一時的に協力し、彼女の息がかかった「まほら武道会」の司会を務めた。

かつては共犯だったが今は敵。彼女達は含みのある笑みを同時に浮かべた。

《――よかろう朝倉、楽しみに待てるネ》

今度こそ超は姿を消した。

◇――――◇――――◇

削られた空間――ついさっきまで屋台があった場所には土煙が立ちこめる。

「そ、そんな……ネギ君達が……」
「ハルナ殿　電車の中は危ない、外へ出るでござる」
「でっでも楓さん！」
狼狽えるハルナを宥める楓は冷静に見えるが…静かに冷や汗を流していた。
「位置は掴んだ……だが、拙者達だけで何とかするしかなくなったようでござるな」
電車が消し飛んだのを確認して、真名は狙撃体勢を解いて楓達を見た。
（どうする楓……まだ戦るか？）
真名にはまだ”仕事”がある。このまま諦めてくれれば無駄な時間が減るのだが――
「私達だけってヤバイじゃんっ！」
「うむ…銃使いである真名に対してこの距離は圧倒的に不利」
――確証はありませんが……超さんは僕が何とかできると思います――

（しかも　もしこの場を切り抜けられたとしても、ネギ坊主がいない今　超殿に対抗できるのか……！）

「けほっこほっ」

「な、何が起こったんですかー」

「！？」

「あ……！」

『な……』

土煙が――――――――――晴れた。

「――――――ネギ君！！」

電車と共に消えた筈の４人、ネギ・のどか・古菲・夕映――――が其処に居た。

目の前の出来事に　真名でさえ目を剥く。

『（……！！）』

「なんと……！」

『……驚いたな……何をしたんだ先生？』

「企業秘密です龍宮隊長」

――――――・・・バチッ……

何処からか聞こえた異音。その出所は、ネギの手の――

（！？）

「ネギ先生っ！」

「兄貴それは……！！」

（しっ！　隊長に聞かれます）

ネギの手の中にあったのは航時機（カシオペア）。だが夕映とカモが焦ったのは別の理由。

カシオペアにはヒビが入り火花を放ち、壊れていないのが不思議な状態だと一目で判った。

（どこで壊れたのか…1週間の長距離時間跳躍で無理がかかったのかもしれません。

今のは何とか切り抜けましたが……超さんとの戦いもあります。

もう今の脱出技は使えません）

（……！！）

真名という狙撃手に”Ｂ・Ｃ・Ｔ・Ｌ”。この強敵を出し抜くのにカシオペアが使えないというのは厳しいように思えた。

（落ち着くでござる夕映殿。ここは切り抜けられる）

（…楓さん？）

姿を隠すのを止めた時から、楓はただ一点に注意を向けている。

「今の狙撃で方向も距離も分かった……龍宮真名は拙者が引き受ける。行けネギ坊主」

「でっでも楓さん！」

「拙者を信じろ」

普段は細めている目を開いてネギを見つめる。時間の無いこの状況を考えれば、ネギはそれを承諾するしかない。

「ひ……1人で大丈夫ですか？」

「ん――――多分？」

「……わかりました楓さん。お願いします！……スミマセンっ修学旅行の時と同じようになってしまって……！！」

（……フ……同じか……）

「ネギ坊主はあの頃より幾分か成長したようでござるが」

「え？」

「――――さあ急げネギ坊主！！」

「ハッハイ！　皆さんいいですか！？」

「うむ！」

「オッケー♪」

「……龍宮さん」

『？』

――私は私の信念に従い行動している。君に対して恥じることはなにひとつない――

「龍宮さん　それでも僕は――――あなた達の計画を止めさせてもらいます！！」

『……そうか』

決別と対立を宣言してネギは走りだす。

「行きます！」

「……しばしお待ちを！龍宮さん、ひとつだけお聞きしたいことがあります！

超さんが変えようとしている不幸な未来とは、地球…或いは人類の存亡といった
究極的事態に関係しているのでしょうか？」

『……いや…そんなＳＦめいた大袈裟な話はないさ。奴の動機の源泉は今現在もこの
世界のどこかで起こっているありふれた悲劇と変わりはないだろう』

「……そうですか　ありがとうございます」

「ホラ行くよ！」
「すいませんです！」
「楓さん気をつけてください！」

「……随分簡単に通してくれたでござるな。撃たなくて良いでござるか」

『どうせお前が撃ち落とすだろ？　無駄弾は使わん主義でな』

１ｋｍ以上離れた相手が、まるで目前にいるかのように言葉を交わす。
だがそれも当然。既に互いが互いの間合いに入っているようなものだ。
楓は狙われた時点で、真名は居場所がばれた時点で、互いの首に刃が突きつけられている。

『――――――――さあ、戦ろうか楓』

戦いは始まっている。

◇――――――◇――――――◇

世界樹広場前の拠点では未だに膠着状態が続いていた。いきなり提示された新ルールに
参加者達は動揺を隠せず、行動に踏み出せない。

「どうする？　一撃失格はキツイぜ」
「ああ、このルールで続行は自殺行為だ」
「だがここで諦めるのも……」

――ただ1人を除いては。

「なるほど……そーいうことか超りん」

裕奈は落ちていた帽子を拾って被り、口の端をニィッと上げた。

「いいじゃん一撃失格。それくらいのスリルはないとね。超りんも転校前にニクイ
イベント用意してくれちゃって～♪」

「おおっ　ゆーなカッコイイ！」

風香とアキラだけでなく、周りの参加者も裕奈の言葉に聞き入っていた。

「フフフ超りん、あんたの挑戦受けてやろーじゃん！　亜子と史伽の死を無駄にしない
ためにもね！！」
「いや、死んでないって……」

「――確かにこれくらいのペナルティがねえとなぁ！！」
「言うじゃねーかねーちゃん！」
裕奈の戦意は周りに伝染し一気に士気が上昇する。
「皆で一斉にかかればいけるぜ！」
「おっしゃ！」
「まずはあのガトリングだ！！」
「――――GO！！」

膠着していた戦局は動き出し、各地でも戦闘が再開された。

◇――――◇――――◇

「――――のどかさん、のどかさんっ！！」
「のどか……！」

その場にいたのはネギと夕映・カモのみ。楓と別れた後　更に古菲とハルナがロボを
引きつけるべく離れていった。
そしてのどかがネギを庇って――――飛ばされた。

『ここは私達に任せるアル。そんで……超が本当に悪いコトしてるならお前に止めて
欲しいアル。――頼む。超は私の親友アルからネ』
『行ってネギ君!!　私達なら大丈夫、任せといてって?』

『あのっその私…今回はお役に立てないですのでっ』
『その……頑張ってくださ――』

「くっ……!!」
「落ち着け兄貴、龍宮隊長の話じゃ3時間後に飛ばされるだけだ!
嬢ちゃんに大事は
ねえっ!!」

表情を歪めて歯軋りするネギをカモが諭す。

「皆に迷惑をかけるコトはわかってたハズだけど……っ」

「そうです、先生」
「?」

夕映は唇を固く結んで――

「ここまで皆を巻き込んだからには…何としても決着をつけねばならないです。
――――行きましょう。超さんを止めるです」

夕映の眼に、もう迷いは無かった。

第６９話　動乱編　苦戦（後書き）

～補足・解説～

：エヴァの目には――――タカミチの無音拳のタイミングに合わせて、士郎が超の
「反則技」を打ち消したように見えていた。
・『１０日間の不在』を経て士郎が会得したチート能力の一端、「幕を下ろす枢（デウス・エクス・マキナ）」
（枢（くるる）…本来は戸に関わる一部の仕掛けの名前だが、「仕掛け」「からくり」
という意味も持つ。）

：『――――――そんなの――――俺は、嫌だね』
・「お前ら……満足か…？　こんな……世界で……」
「俺は……嫌だね」
ロックオン兄貴いいいいい！！　ニール兄貴いいいい！！
「衛宮士郎」っぽくさせるなら「嫌だ」と言い切る形の方がいいと思ったんですが、どうしても「嫌だね」と言わせたかったので。

：「タイミングを逃したネ衛宮サン」
：「それにしても見事に揺さぶられたな？　タカミチも――――お前も」
・はっきり否定の意を示しておきながら、少なからず士郎も動揺していました。

：「まったく……男というのは大概バカだな」

・男は、サイテーで。男は、サイコーだ。（某テレビＣＭより）
男性は肉体が強い代わりに精神が弱く、女性は肉体が弱い代わりに精神が強いんだそうです。

∴夕映の眼に、もう迷いは無かった。
・ネギと同様に迷っていた彼女ですが、ここに来て覚悟が据わったようですね。
主人公、彼女を見習えぃ。

∴おまけ（ボツ文章）

「聞いているだろう衛宮サン。貴方も同じハズだ。２年半、新世界を巡った貴方は見た
筈ダ。大戦から２０年を経た今も、紛争や争いが消えぬ救いのない世界を。
それに貴方は、幼少時に悲惨な――」
瞬間。超の頭蓋を捻れた剣（や）が貫いた――――――――情景（シーン）を幻視した。

『知ったような口をきくなよ、クソガキ』

昏くて、冷たくて、何て、鋭い――――――――――――殺気。

タカミチは背中に滝のような汗を流して呆然としていた。
その矛先となった超は――――目を見開いて――――呼吸を忘れた。
士郎の心の1番深い所から、闇が顔を覗かせた。

‥→超が一小節　余計なことを言った所為で士郎キレる。
しかしこうなると超のラスボスとしての格が下がる気がしたのであえなく没になりました。

それでは次回！

第７０話　動乱編　決戦へ（前書き）

実は私、麻帆良には広場が多いことから
世界樹による６つの魔力溜まりと広場をごっちゃにしてました。
６つの魔力溜まりは全て広場だと勘違いしてましたｗ（実際は２箇所のみ）

コミックスを読みなおしてみたら龍宮神社とか礼拝堂とか高校の敷地内
だとか……。間違った文章書いたの何話だったかなぁ？直さなきゃー

それでは第７０話、どうぞ。

第７０話　動乱編　決戦へ

――龍宮神社――

「ダメだ止まらねぇ――――！！」
「総員退避――――っ！！」

鬼神１騎が境内に侵入する。ゲーム参加者は敵わないとその場から離れ、鬼神は鳥居と
本堂の中間地点、参道の上で停止すると――

「お。ひとつ陥ちたか」

突然　天を衝く光の柱が立ち上る。エヴァはその様子を朱に染まった顔で眺めていた。

「さて、どーするぼーや　劣勢だぞ？」
「ドーカナ、俺ハアノガキニ賭ケトクゼ」
「フン、どっちだっていいさ」
「――事態の帰結に興味はないようじゃな」

「……じじいか」

学園長・近右衛門が空を歩いてやってきた。

「ふん、魔法がバレようがバレまいが私には関係ないからな。私が麻帆良から離れられんことには変わりない」

「本当に良いのか？　超君の計画が成功すれば、可愛い弟子とは二度と会えなくなるぞ？」

「そうなったらそこまでの縁、そこまでの男だったということだ。あっちへ行け　酒がマズくなる」

「そう言わず混ぜとくれい。ふぉふぉ」

「人の酒を飲むなッ！」

ここに士郎が居たら「俺の（店の）酒だ！！」と言っていたであろう。

「ケケケ。御主人ハ士郎ニフラレテ機嫌ナナメダカラナ」

「？　士郎じゃと？」

近右衛門は士郎が未来から来たことを知らないが、諸々の事情に自分で察しをつけて納得した。

一応言っておくがチャチャゼロの言う「フラれた」とは「誘いを断られた」という意味である。近右衛門はわざとらしい声色でエヴァをからかった。

「ひょ、それは残念じゃったのぉ～。ふぉふぉ」
「ええいうるさいっ！　それより貴様は止めに行かんでいいのか！？」

「若い奴らが止められれば止めるじゃろ。止めらんかったら責任は取る」

「オイオイ　トンデモネェジジイダナ」
「ふぉふぉふぉ」

「……フン」

（士郎（あのバカ）、光の柱が立った途端　龍宮神社に飛んで行って……何をする気だ？
……ま…私には関係ないが……）

「……うそつきめ」

「ひょ？」

「ケケケ。熱烈ナプロポーズダッタナァアレハ」

表情が少し翳ったエヴァとそれをからかうチャチャゼロに、近右衛門は首を傾げた。

「――さあ、いよいよ最終段階ネ」

直径３０m近い魔方陣の端に立ち、超は静かに呟く。

「……どうした……来ないのかネギ坊主？」

おそらく自分を止められる唯一の人物を、来ない方が良いとは理解しながら――

――彼女は待っていた。

「……どうなってるんだ？」

龍宮神社、鬼神の足元で士郎が胡坐をかいて唸っていた。

「この魔方陣、構造がおかしい……？」

士郎が『待っていた』のは魔方陣が浮き出る時。何処かにいる超の元にある儀式の中心

――大本にある魔方陣と同期して姿を現す、６拠点の六魔方陣。

ちなみに鬼神は拠点に到達したら停止するよう制御装置で設定されているため、士郎に

攻撃等は仕掛けてこない。士郎はそれを知らないが。

（儀式の構造を解析（みて）割り込めないか調べようと思っただけなんだけど……）

「――――――陣の術式が簡素過ぎる」

思わぬ事実が判明した。

（いや、『天才』の超なら俺なんかが予想できないほど効率的に無駄を省いた魔方陣を描けそうなもんだが…これは違う。明らかに足りない）

6箇所の拠点に求められているのは「魔法陣を形作ること」と「鬼神の配備による魔力増幅」のみ。儀式の大本、超の元にあるオリジナルの魔方陣に機能が集中していると考えれば納得できるが、それにしても術式が簡素過ぎる。

「これじゃあ呪文詠唱の時間が延びるぞ……何を考えてる？」

超の『強制認識魔法』は儀式魔法であり尚且つ大魔法であるため、十数分もの呪文詠唱が必要となる。その大魔法を行使する魔方陣を簡素にしてしまえば、必然的に唱える必要のある呪文の量が増えてしまう。敵が多いこの状況では儀式に必要な時間は短いほどいい筈だ。

その危険を冒して得られる利点は――――

「儀式の途中で、魔法の効果を変えられる……」

途中で詠唱内容を変更すれば、発動する魔法の効果も変わる。

（……超の目的は、「魔法を世界にバラす」ことじゃないのか？）

『マジで願いが叶ってしまうんじゃよ』
『こと恋愛に関しては、その成就率１２０％！！』
『人の心を永久に操ってしまうなど魔法使いの本義に反する』

世界樹は「人の心に作用する願いを叶えることに絶対的な効力を持つ」。

超の、「もう一つの願い」は――――――――

『この世界の不正と歪みと不均衡を正すには、私のようなやり方しかない』
『大戦から２０年を経た今も、紛争と暴力の絶えぬ救いのない世界……！』

『――――衛宮サン。貴方ほど真性の馬鹿を、私は見たコトがないヨ』

「……馬鹿はどっちだ超鈴音」

時間を越えて歴史を変える。世界を正す。そんな夢みたいなことを現実的に思考して
実行しようとする少女。
そう　夢だ。彼女の「計画」の　「野望」の　「理想」の根底にあるのは――――――

「――――――夢。か……」

士郎は踵を返すべく立ち上がる。
彼にはもう、超を止めようとする意志は無かった。

◇――――――◇――――――◇

「先生　先に行ってください！　私のせいで遅れてるです、後から追いかけます
行ってください！　のどかの言った通りこの戦いで私達はお役に立てそうにありません」

もうとっくに日は落ち、別の場所では花火が夜空に咲いている。ネギと夕映は屋根を
伝って世界樹広場を目指していた。

「もう迷いも吹っ切れたようですね。さあ先生超さんの所へ」

「……いえ。まだです夕映さん」
「――――え？」

「超さんは止めます。でも…まだわかりません。それが本当に正しい事なのか」

――――ぐいっ

「え……」

腕を掴んで、夕映を自分と同じ場所まで引っ張り上げる。
浮いた帽子が再び夕映の頭に収まった。

「夕映さん」

『いいか詰めを誤るなよ!?　まだ迷いがあるようなら――――』

「――――あなたの言葉を、聞かせてください」

◇――――◇――――◇

世界樹前広場・特設実況中継席。

《マ…マズイッ非常にマズイ　最悪の状況です!》

ステージ上で朝倉が叫ぶ。

《この世界樹前広場を除く5つの防衛拠点が全て占拠されてしまったとの情報が入ってきました！
残るこの広場を占拠されてしまえば全て終わり！我々の負け！！ジ・エンドです！！》

だというのに、ネギはまだ現れない。

《このまま我らが魔法騎士団は火星ロボ軍団の軍門に下ってしまうのでしょうか！？
今年の学祭最終イベントは勝者なしのしょんぼりな結果に終わってしまうのか！！》

「へっ何言ってんの朝倉。ここの敵はあらかた制圧したっての♪」
「おうよ！」
「まだまだ余裕だぜ！」

とは言うものの、陥落した他の拠点とこの広場には決定的な違いがある。
他の5箇所は全て鬼神に陥とされている。広場にはまだソレが来ていないだけだ。
鬼神が来れば、おそらくこの広場も――――

《ですがまだ希望を捨ててはいけません！逆転するチャンスはまだあります！！世界樹前
広場が占拠されてしまう前に敵の首領……超鈴音を発見し捕獲するのですッ！！》

（カモっちの話だと超りんの大魔法発動は7時37分ころ……）

時計を見ると現在7時17分。たった今18分を回った。

（あと20分もないってか……く――時間ないね～！！）

《ラスボス超はゲームエリアの屋外に、直径30mの魔方陣のような地上絵の上で待っているということです！》

「30m!?　んなの楽勝じゃん！」

「さっきからケータイ復活してるぜ！」

「皆に連絡とって人海戦術だ！」

《発見者・捕獲者それぞれに報奨金が授与されます、皆さん奮ってご参加を！観客の方も参加可能です！！》

「ゆ――――な――――――っ！！」

「へ？――――柿崎！」

広場に繋がる大通りを走って来る集団。その先頭に柿崎・釘宮・桜子がいた。

それは麻帆良湖湖岸で戦っていたゲーム参加者達。

「来た来た来たよ――――！　デカイの来た――――――！！」

「迎撃ぃ――――――――――！！」

彼女達の後ろには。

――――――――ズシンッ！

「うお！？」

――――――――――――――――鬼神（オニガミ）。

その重さによって歩くだけでコンクリートに亀裂が走り、その巨体は進むだけで周囲の建物を傷つける。

「こりゃホントにデカイっ！」

「よぉし迎撃だッ！」

『オウッ！！』

『――――――――――敵を射て（ヤクレートゥル）！！！』

光の矢が雨のように鬼神に降り注ぐ。

鬼神の足は、全く歩を緩めなかった。

◇――――◇――――◇

――麻帆良ヶ丘公園・演劇部打ち上げ会場――

「カンパーイ！」

「あはははは」
「オイ見たか？」
「ああ、今年のイベントすげーな！」

最終日イベントの観戦による喧騒の中、妖精の衣装を着た夏美がコップを片手に
千鶴に近寄る。

「ちづ姉、この大イベントの盛り上がりの中でも天体観測するの？」

天文部員である千鶴はいそいそと天体望遠鏡の準備をしていた。

「私も望遠鏡で参加しようと思ってね♪」
「あー、超りん探すの？」

「あら――……？　何かしら」
「え？　まさか見つけ……ってどしたのちづ姉？」

街や建物の屋上を見るでもなく、千鶴は空を眺めていた。

「空に超さんはいないでしょ？」
「ん――――何かスゴイ空の上の方でね……」

「……夏美ちゃん。もし見つけたら…どこに連絡すればいいのかしら？」

◇――――――――――◇――――――――――◇

「上の広場まで撤退――――っ！！」

広場まで１００ｍもない距離まで鬼神に詰め寄られ、「（通称）脱げビーム」を喰らって
装備を失った者達が逃げ惑う。鬼神の歩みは止まらない。

「くううう　こぉのデカブツめ――ッ！」

（撤退なんてしてたらその間に攻め込まれちゃうっての！）

「みんな怯むなッ！
ここが陥ちたら私達の負けだよ　踏みとどまって戦うんだ――――！！」

「言われなくても！」
「うぅーっしやっちゃうよー！！」

３－Ａの面々とそれに続く者達が一斉に鬼神を攻撃する。

『敵（ヤクレートゥル）を射て――――――――――！！』

広場に撤退して再装備した参加者達も援護する。

「撃て撃て――――――――っ！！」
「撃ちまくれ――――！！」
「倒れろォ――――――！！！」

≪――――――――……≫

――――――――止まらない。

数多の光矢をその身に受けても、体に傷のひとつもつかない。

「効いてねえっ！！」

「くぅっ」

（うぅ……ダメか――――）

――――――――ギュア〝ア〟ッ――――ドッッ――――

――！！！

『ッ！！？』

耳を劈く轟音に、その場の全ての人間が思わず目を瞑る。

アキラが目を開けると　鬼神の体は傾いていき

史伽の眼に映ったのは　胴体が真っ二つに千切れ飛ぶ鬼神の姿。

裕奈が振り向いた先には――――

「ネギ君！？」

箒に乗って飛び、片手を掲げるネギがそこにいた。

貫いたのは『雷の暴風』。紫電の雷閃が槍となって敵の体を貫いた。

「おおっ子供先生だ！」

「子供先生――――っ！」

「ネギ君！　超は世界樹直上４０００ｍの飛行船の上にいるって！」

「！！　わかりました朝倉さん！」

「ネギ君！！」

直ぐに飛んで行こうとするネギを、朝倉がもう１度呼び止める。

「――君は、これから自分のすることの意味をわかってる？」

「そのつもりです」

（……即答か）

「そうか……なら言う事は何もない。――――行ってきな！！」

「ネギくーん」

「ネギせんせー！」

「ゆーなさん、皆さん！」

「スゴイじゃんネギ君！　さっきの何？　どーやって空飛んでんの！？」

「……ＣＧです！」

「へ？　ちょっＣＧって」

「ネギ先生ー！」

生徒の声を背中に受けて、これから出す速度に備えて杖に跨り直す。

「加速（アクケレレット）」

いざ、決戦の場所へ。

◇――――――◇――――――◇

「……そろそろ正念場じゃのう」

「ケケ、全員集合ダナ。イネェ奴モイルケドヨ」

2人の視線の先では、空で敵に囲まれたネギを援護する　明日菜達の姿が見えた。

『あんたがこの学園から……私達の前からいなくなったりなんかしたら承知しないんだからね！　超さんをブッ倒してきなさい！！』

『申し訳ありません　私達では全く歯が立ちませんでした。ネギ先生、超さんをお願いします』

『早よ行けやネギ。ここは俺達に任せとけ』

『……うん。』

『アスナさん刹那さんお任せします！　行ってきます！！』

「アノ程度ノ敵　造作モネエダローガ…今ハ時間ガ無エカラナ」

空戦ロボを明日菜達に任せ、ネギはぐんぐん上昇していく。

「ンなもんどーでもいーだろーが」

2人が横に視線を向けると

「あのバカめ……何が『お前を置いて出てったりしない』だ、この……！」

エヴァがすっかりできあがっていた。空中に十数本の空の酒瓶が浮いている。

「士郎もなにも『四六時中一緒にいる』と言ったワケではなかろうに……」

――――ギンッ！！

「うひょっ！？」

鋭い眼光に射抜かれて近右衛門は萎縮する。

「荒レテンナァオイ、ケケ」

「くそ……もう無いのか酒は」

「ミネラルウォーターならあるぞ？」

「そんなもんいらん……って、ん？」
「いいから飲めって。吸血鬼でも酒の飲み過ぎは良くないぞ？（多分）」
「士郎！　お前今まで何をして――」
「まあまあ、一緒に大人しく観戦してよう、な？」
エヴァを抱き抱えて、胡坐をかいた足の上に座らせた。
（士郎はエヴァの宥め方を分かっとるのかのぅ？）
（イヤ　子供扱イシテルダケダゼ。「抱ッコスレバ大人シクナル」ッテナ）
ペットボトルに口をつけながらエヴァが士郎を見上げる。
「何だ、お前はもう手を出さんのか？」
すると士郎は困ったような顔をした。
「……ああ……俺はもう、超（あいつ）と戦いたくなくなっちまった」
いつの間にか近右衛門とチャチャゼロも2人に視線を向けている。
「――そうか」
小さな主は、士郎に何も聞かないでくれた。
『妙に心配症だよな　お前って。まぁ俺みたいな頼りないヤツが相手じゃ仕方ないだろう

けどさ』

「心配症なのは俺の方だったな」

決戦の場となる飛行船に昇るネギの顔を見た時。過去に来る必要などなかったと士郎は気づいた。

「アイツはもう、歩いていける」

（仲間たちと一緒に進んでいける。もう、俺の「お守り」なんて必要なかった）

この戦いがどんな結末に終わろうと、それだけは確信できた。

「ああ――安心した」

「……士郎……？」

士郎は静かに、天を仰いで目を瞑った。

◇――――――◇――――――◇

「『世界はアイオーンの内を行き』『時は世界の内を行き』『生成は時の内に生ず』」

飛行船の上部。そこに2人の少女が立っていた。
言うまでもなく飛行船とは下部のゴンドラに乗りこむものであって、決して上部に人が
居ることなどあり得ない。だが彼女達はローブとコートを羽織ってそのあり得ない場所
に佇んでいた。

「地球上の12箇所の聖地及び月との同期完了です。後は残る世界樹前広場の占拠を待つ
のみ……いよいよですね――」

葉加瀬の足元で巨大な魔方陣が光を放つ。その周囲で輝くのは、今までに占拠された
5箇所の地点と共鳴した5つの魔方陣。――――残りは1つ。

「よし……ハカセは儀式の最終段階、最後の呪文詠唱に入るネ」

幾分か離れた場所に超が立っている。

「仕上げの呪文は11分6秒です、大丈夫でしょうか――？」
「大丈夫ヨ　始めてクレ」

「……でも本当にいいんですか―超さん。この計画を完遂して……」
「……ああ」

――――――――――来た。

「……いや、この場面において計画の成否を決めるは……彼ネ」

「！」

――――バサバサッ――――！！

杖に片足を乗せて立つ、ネギのローブが風で靡く。

「ネギ先生！」

「超さん……葉加瀬さん」

「よくここまで辿り着いたネ　ネギ坊主。

そして――――これで君は私と同じ舞台に立った」

「……！」

「さあ……それで、どうするネギ坊主？」

『私を止めてみるがいい。ネギ先生』

『残念だたネ　ネギ坊主』

『さて…これはネギ坊主の負けという事でよろしいカ？』

「今度こそ…あなたを止めます！　超さん！！」

「……よかろう。では私も私の思いを通すために、持てる力を揮うとするネ！！」

第７０話　動乱編　決戦へ

「――――――――――――行くヨ……」

２つの航時機（カシオペア）が音をたてて瞬いた。

第７０話　動乱編　決戦へ（後書き）

～補足・解説～

：「――――――夢。か……」
：士郎は踵を返すべく立ち上がる。
：彼にはもう、超を止めようとする意志は無かった。

・士郎は超が世界樹にかけた「もうひとつの願い」に気づきました。
彼はもう参戦しません。
――――――!?　まてよ。俺は何のために士郎を参戦させたんだ!?
ヤバイ、意味なくなった（汗）

：「夕映さん」
：『いいか詰めを誤るなよ!?　まだ迷いがあるようなら――――』
：「――あなたの言葉を、聞かせてください」

・女性（夕映）の名前を呼びながら他の女性（千雨）のことを考えているネギ。
……女たらしだ……女たらしだ！　お巡りさ――ん！　ここに女たらしがいま――す!!

：「……夏美ちゃん。もし見つけたら…どこに連絡すればいいのかしら？」
・この後「金一封」と書かれた封筒を持って　ほくほく顔してる千鶴さんは
かわいいと思う。

‥「アノ程度ノ敵　造作モネエダローガ…今ハ時間ガ無エカラナ」
・原作のように小太郎に助けてもらわなければならないようなピンチには
なりませんでした。士郎との修行（イジメ）で『轟く五星』から逃げ続けた成果ですw
でも時間がないので小太郎や明日菜たちに任せて最終決戦へ。

あれ、今回これしかあとがきに書くことないや。
マトモな解説あんまりしてない気がするんだけど。
まあほとんど原作通りだしなー。

この小説、「原作沿い」「原作重視」というよりは「原作再構成」
ぽくね？
と思ったのはつい最近。
いや、やっぱ「原作沿い」か。ほぼそのままだもんな。

それでは次回！

第７１話　動乱編　学祭決戦？―時間跳躍戦闘―（前書き）

遊び書き。

「『無限軌道』とはッ！
「戦車のキャタピラ」「メビウスの輪」「堂々巡り」そして「無限の回転」ッ！！
回転だッ　全ては『回転』に帰結するッ！！」

：→Ｗｅｂｌｉｏシソーラスで調べた「無限軌道」の類語を（作者なりに）ジョジョっぽく書いてみた。うん、それだけ。

それでは第７１話、どうぞ。

第７１話　動乱編　学祭決戦？―時間跳躍戦闘―

「ネギ君ヤバイんじゃない！？　私達もあそこに行けないの！？」
「でも地上４０００ｍ……あんな所にどうやって」

遥か上空におけるネギ達の戦いはモニター中継され、麻帆良生はそれに釘付けだった。

「ひゃああっ！？」
「何？　どしたの史伽！？」

≪――――――……ッ！！≫

「ネギ先生がまっぷたつにした巨大ロボが…上半身だけでこっちに来る――――！！」
「「でえぇっ！？」」

強制時間跳躍弾（B・C・T・L）を握った拳が背後に迫る。
回避して背後に回り、「雷の一矢」を付加した”？打頂肘”で腹を打ち抜く。

「――――――――ぐっ……！」

一瞬で接近して背後をとり”Ｂ・Ｃ・Ｔ・Ｌ”を喰らわせる。回避される。
『白き雷』を放とうとするが、肘を逸らされて躱される。

「！？」

驚きは葉加瀬のもの。飛行船を足場に戦っていた2人は――気がつけば空中に。
もはや当事者以外には、何が起こっているのか理解できない。

攻守が文字通り目紛るしく入れ替わる。超の”Ｂ・Ｃ・Ｔ・Ｌ”の黒い渦とネギの雷が場に満ちる。一瞬で攻撃され、一瞬で回避され、一瞬で戦局が変化する。

「――――――――『我が手に宿りて敵を喰らえ』」

――――――――――――ガカァァアン――――――――――――!!

「ひゃぁあっ!!」

雷撃と電撃が火花を散らし、飛行船を閃光で照らしめる。

（これが航時機（カシオペア）同士の戦い……計算以上です……!!）

超が音をたてて葉加瀬のすぐ側に着地した。

「フフ……ネギ坊主まさかここまでとは。この短期間でカシオペアをここまで使いこなすとは……!!」

自分の額に冷や汗が流れるのを感じながら、超は杖に立つネギを見上げ、ネギは超を見下ろす。

「……流石は私のご先祖サマネ」

「カシオペアを戦闘に利用しようと考えればすぐに思いつくことです」

「回避不能の一撃を喰らっても　その瞬間に別時間へ時間跳躍すればどんな攻撃も簡単に回避できる。更にほぼ同時間・同空間への超高速連続時間跳躍を行う事で疑似的に時間を止めたような効果を得られることも確認しました」

「な……しかし先生　どちらも口で言うほど簡単ではないです!

直接戦闘において
カシオペアを有効に運航する為には、ナノ秒以下の精密操作と跳躍後の時空間の正確な
事象予測が必要不可欠！！」

「うむ…現に私の背中のカシオペア参号機も最高性能のＡＩで制御されてるネ」

まるでそれに応えるように、超の軍用強化戦闘服のカシオペアが音を鳴らす。

「…その種明かしは……これです」

「！！　それは……精霊ですか？」

ネギが自分のカシオペアを懐から取り出す。それは魔力の光を帯びていた。
羽根・尾・耳が生えた妙な生き物がカシオペアのダイヤルを手で回している。
その精霊の上には小人のような少女が乗っていた。

《回スッスヨ～》
《予報しまーっちゅ♪》

「魔法使いなら誰もが最初に習う『小物を動かす魔法』と『占い（未来予報）の魔法』。
それを司る精霊です」

「し…しかしそんな基本的な魔法で」
「はい。もちろんこの単純な精霊で葉加瀬さんの言うような精密操

作と事象予測を行う
には大変難しい魔法学的応用と高度な術式設定が必要となります。
でも僕……」

自信に満ちた表情で言った。

「こういった基本魔法は得意中の得意なんですよ。ここ十年で1番
の成績でメルディアナ
魔法学校を卒業したくらいですから。それでも実験に丸1日かかり
ましたが」

「と、『得意』……！？」

（我々が実用化に2年かけたのと同じ事をたった1日で……得意
などというレベルを
超えています……！！）

「むむ――……さすが天才少年ネギ先生です……」

葉加瀬ですらネギの頭脳に感嘆するしかなかった。

「さあ超さん、これであなたの戦力的優位はなくなりました！大人
しく降参し計画を
中止してください！！」

「……大丈夫ヨ　ハカセ、最終詠唱に入てクレ」

「！？」

「え？　でも……」

「大丈夫ネ、問題ない」

「超さん　僕の話を聞いていたんですか!?　カシオペアによる優位が崩れた今あなたは
僕に勝てません!!　今すぐ儀式を中断して」
「どうしたネギ坊主　随分と饒舌ネ。らしくないヨ？」

（――――――――ッ!!）

「『我に応えよ十二の聖地』『扶余』『洛陽』『雲崗』『アンコール』」

葉加瀬の朗々とした声が静かに聞こえてくる。

『どうした』と疑問の形で聞いているが違う。超はもう気づいている。

（そんな……こんな簡単に悟られるなんて――!）

「その焦り……何か隠し事があるのカそれとも……この戦いを早めに終わらせねば
ならない理由でもあるのカ――――」

「ナ？」
「!!」

背後を取られ――左手にある物を見られた。
ガラス板にヒビが入り火花を放つ、今にも壊れそうなカシオペア。

「――――――やはり」

（しまった！！）

時空間を跳んで超から離れる。

「ハハハ、交渉事はまだまだネ」

「くっ……！」

余裕を見せる超に対しネギの表情は固い。それも当然だろう。

――――――チュイイイィィィ・・・・・・・・・・

――――――バチバチッ――バチッ――――

ＡＩで計算され高速で稼動する超の参号機（カシオペア）と、今にも壊れそうなネギの壱号機（カシオペア）。

それは現在の両者の戦力差を如実に表していた。

超は強化服で宙を飛び、ネギは飛行船の上に立つ。

超はネギを見下ろしネギは超を見上げる。２人の立場と形勢は完全に逆転した。

「そのカシオペア、良くて後３回　悪ければ……後１回で使い物にならなくなるネ」

だが――――――――まだだ。

「……一撃あれば充分です」

開発者である超が保証してくれた。最低でも後１回は保つ。

その１回、その一撃で――超のカシオペアを破壊する。

「……待てネギ坊主。その一撃の前に、今一度問おう」

その一撃を警戒したのか、それとも本気の問いなのか。

「事ここに至って　頭のいい君にはわかっているハズネ。私の計画が意味するものを」

「――――――ネギ坊主。
私の同志にならないカ？　悪を行い世界に対し僅かながらの正義を成そう」

「……！」

ネギが息を呑んだのを、超は目を細めて見つめていた。

―◇――――――◇――――――◇―

飛行船直下の空域でロボと戦う魔法使いと従者達。

「アスナさーん、あたしもう帰りたいんスけど」
「うっさい美空ちゃん！　……刹那さん、ネギ大丈夫かな！？」

箒で飛んで明日菜の足場係をする美空。
彼女の愚痴を無視して、明日菜は刹那に問いかける。

「あいつ超さんの味方になったりしないよね！」
「！　まさか……」
「でも…あいつ悩んでたし……」

『――――あなたの言葉を、聞かせてください』

遠くで花火の音が聞こえる。花火の光が2人を照らす。
夕映が、口を開いた。

「論理的に考えて……私達が超さんに協力しなければならない状況は存在します」

「それが……地球…或いは人類の滅亡という究極的事態ですね」

「その通りです。その場合には私達も全力で協力せねばならぬことは明白です。
　そしてそれ以外の理由での歴史の改変を認めることはできないと思うのです。超さんの計画は……そうではありません」

「彼女が回避しようとしているのは今もこの世界にありふれる悲劇……しかしそれら
全てを無かったことにすることが正しいのか？……正しいとは
言えないでしょう」

「嬉しいことだろうと哀しいことであろうと、受け容れ難い悲劇であろうと。起こって
しまえば全て過ぎ去った過去。受け容れざるを得ない現実。
人はその上に立って歩みゆくしかないのです」

「或いは超さんは…我々には想像もつかないほどの悲劇を経験したのかもしれません。
しかしそれが彼女の悲劇である以上どこまでいっても、世界を変える理由には
成り得ません」

「――――酷なようですがそれは彼女のエゴ。ワガママと言う他はないものなのです」

「更に実践面でも問題が――――」
「待ってください夕映さん」
「？」

「そこまでは僕も……夕映さんと同じ事を考えました」

「！？　で、では…先生は何を迷って――――」

「超さんの計画が成功すれば…そのありふれた悲劇の中にいる人達の何割かを助ける
ことが出来る。これだけは……何度考えても確実なんです。そして
この一点がある限り
どうしても……僕は超さんを……否定できません」

「それに過去を変えることがいけないなら……1週間後から帰った僕達も同じハズです」

「超さんは自ら、僕達に未来人であることをバラしました。でもそれを知らなかったら、
僕達は超さんの計画を否定できたでしょうか」

「ネギ先生……！！」

「ある人から言われた言葉があります……。
『何を恨んだり逃げたりして得た力でも、それは立派な力だ』と
……」

「ちょ、ちょっと待てよ兄貴！　じゃあ超の奴が正しいとでも言うのかよっ！！　奴の
計画が成功したら兄貴はこの学園を去らなきゃなんねーんだぜ！？」

「カモ君…僕達　人間世界で暮らす魔法使いの使命は世の為　人の為に力を使うことだよ。
　計画で大変な事になるのは僕達　学園の魔法使いだけ、それなら――」

「で、では……そんな　ネギ先生！　超さんに協力するつもりなのですか！？」
「兄貴……っ！！」

「待ってくださいそれは地に足の着いていない議論です！！　誰とも知れない他人の為に
自分の日常や未来を投げ捨てるなど……！！」

「……。」

ネギは何も言い返さない。まるで……もう答えが決まっているかのように。

「ではっ……の、のどかのことはっ……のどかへの返事はどうするのですか！？
卒業したら返事をするのでは……ッ」

「超さんに協力してこの学園を去ってしまうのですか！？アスナさんや仲間のみんなや
……わ…私……や……、」

「……クラスのみんなを置いて…行ってしまうというのですか……？」

「僕が……みんなと一緒にいたいと思うこと……。
……それも……ワガママだとは言えないでしょうか……？」

（――――――――――――――――――――！！）

『――――――――――ネギ先生！！！』

「――――――――隙アリ」

超の”Ｂ・Ｃ・Ｔ・Ｌ”がネギを、電撃が航時機（カシオペア）を狙い打つ。

――――――ゴキュッ――――！

周囲に雷が迸り、葉加瀬がそこに視線を向けると――――

黒い渦が現れて――――カシオペアが砕かれた。

――◇

◇――――――――――――――◇――――――――――――――

「流石です千雨さん。私と学園システムからの攻撃を受けつつ、念話・電波妨害用
ナノマシンの散布を停止させ…鬼神の制御システムに干渉して動きを妨害するとは」

「――しかし」

《ちうたま――――!!　第４防壁突破されました!!》

「っなろォ……!!」

忙しなくキーボードを叩く千雨。防壁はあと3枚。新たな防壁を張る余裕などない。
だが残りが破られるまでに彼女が勝利条件を達成できる確率は――

「くそっ――魔法なんてモン世界にバラされてたまるか……!夢と現実がごっちゃに
なった世界なんて願い下げだぜ!!」

『――夢と現実ですか……』

「っ!?」

（――――回線を繋がれた――――――――――!?）

《第3防壁破られました!!》

『比較的　過酷な人生を送ってこられた超さんは……ここでの毎日の方が余程
夢のようだと仰っていました』

「……やっぱ茶々丸さんか」

『誰もが生きることに不自由しない時代……楽しく空虚で何不自由ない世界。
他の時代　他の世界から見ると――ここはまるで偽りの楽園のようだと』

《第2防壁突破されました!!　ちう様　これ以上は……!》

『……終わりです千雨さん。あなたがここまで粘るとは…私の計算以上でした。
あなたの技術と技量に敬意を表します』

「……ッ!!」

《ちう様、このままではちう様の精神（データ）に侵食が……!　脱出（ログアウト）を!!》

「……へっ……ここが、……退き時か」

『……』

「ああ、そもそも私みたいな傍観者が舞台に上がること事態　間違ってたんだ。ったく
何をやる気になってたんだか」

『……いえ、そのようなことはありません。あなたの行動は決して無駄ではありません
でした』

「ホントにロボらしくねえなアンタ。敗者に慰めなんて要らねーよ、だから人の話は
最後まで聞きな。
……だからさ。私じゃ逆立ちしても無理だから……出来る奴に任せるよ」

『――――――？』

「やっぱ癪だからな――――　一矢くらいは報いらせてもらうぜ。
夢だか楽園だか知らねーが……現にここに生きている以上これが私達の現実だ。
私は私の現実を守る！！　あんたらの好きにはさせねーぜ！！！」

――――――――――タンッ

キーボードのＥｎｔｅｒキーを――――――逆転へ向かう一手を、打つ。

「――――――――――――――探知（ディテクト）」

『ッ！？』

千雨がもう1度キーを叩くと　茶々丸の座る情報管制室――超の極秘ラボの一室に存在するその場所の、電気が、機器の電源が、モニターの光が消えていく。

『そんな、72のセキュリティと36のファイアウォールを突破して――私の居場所（アドレス）を探知したのですか…！？　いや……しかしそれだけで』

（あの攻勢の中ではアドレス探知が精一杯のハズ、私を攻撃する余裕など……！）

「ああ。私自身は手一杯だった。だから『茶々丸（あんた）』を探して攻撃するプログラム』を組んで実行した。それだけのことさ。指のいい運動になったな。

――だからもうすぐ落ちると思うぜ、アンタんトコのコンピューター」

《ちう様っ、最終防壁　破壊されました！！》

マグロの魚群――に見えるサイバー攻撃の像が千雨の視界に入った。

「勝負は私の負けだが…それなりに楽しめたぜ？　じゃあな茶々丸さん。『退室（ログアウト）』」

情報処理許容量を超える大量のデータを送信し、コンピュータやネットワークを機能停止に追い込むサイバー攻撃――『ＤＯＳ』。

アクセスルームのモニターが次々とブラックアウトしていく。茶々丸はギリギリ接続を切って回避できたが、超のラボに繋がる全てのコンピュータが完全に停止した。

暗闇で茶々丸が呟く。

『これがあなたの狙いですか千雨さん……私を行動不能にして、学園警備システムのコントロールを――』

『――――――!?』

明かりが戻る。コンピュータが立ち上がる。モニターが開く。学園警備管制室の全ての機能が復活する。

「明石教授！　これは……！？」

「……状況は分からないが好機とみていいだろう。現状の分析を開始しろ！！

学園結界の復活急げ！！」

『ハッ！！』

◇――――◇――――◇

「……頼んだぜ明石教授、プロだろ？　給料分は働けよ」

電脳世界にアクセスしていたのは精神のみ、肉体は図書室で眠るように倒れていた。

ログアウトした千雨は起き上がって机に座り、自身のＰＣを立ち上げる。

「ったく、あのノー天気な明石（あかし）裕奈の父親まで魔法使いかよ。ホントにこの学校はどうなってんだか」

独り言を言いながら学祭ライブニュースにアクセスする。

「任せとけ、なんて偉そうなこと言っておいて仕事は果たせなかったが……結果オーライだろ」

『――――え――こちらＭＮＮ、麻帆大軍事研のヘリで飛行船に向かっています！　地上４０００ｍの飛行船上で行われている子供先生と超社長の一騎打ち、果たしてどうなって

いるのでしょうか！？』

「だから先生。あとはアンタが勝つだけだ」

その後、千雨は一度もＰＣから目を離さなかった。

第７１話　動乱編　学祭決戦？―時間跳躍戦闘―（後書き）

今回は補足すべきことは特にありません。

ただ、作者は根っからのアナログ人間であり、ＰＣ機器やネット知識をほぼ
持っておりません。
そんな中で今話は千雨ｖｓ茶々丸の電子情報戦を書いたわけですので、専門の人から見れば「これおかしい」と思う部分があると思います。

そのような点にお気づきの方は感想にてお寄せくださるとありがたいです。
出来る限りすぐに修正いたします。

それでは次回！

第72話　動乱編　学祭決戦？―正義の在り処―（前書き）

遊び書き・その2。

超「コード解凍『燃焼（フレーム・オン）、開始』。呪紋刻印　封印解除。ラスト・テイル」

ネ「呪文!?　まさか……!!Σ（・□・；）」

超「私が魔法を使えるとオカシイカ？
　私はネギ坊主とサウザンドマスターの子孫ヨ？（＾∀＾）」

ネ（あれは……？　超さんの全身に呪紋処理が施されてる。
　見たこともない魔法様式……いや科学!?（´Д`；））

士（違う！　馬鹿なアレは――――魔術刻印――――――!!Σ（◎Д◎；）

以上、ボツネタでした。

カシオペア戦→魔法戦→ネギ魔力切れ、しかし超が魔術発動。魔術回路に世界樹のマナを
流し込み魔力満タン。ネギピンチ→■■■→最終決戦

とか考えました。■■■は今後使えるアイデアかもしれないので非公開です。
それに呪紋回路より魔術回路の方が負担小さそうだからこの流れは変だなと思ったし、

超に魔術を使わせるのは設定的に難しいかなと考えたので没に。

それでは第７２話、どうぞ。

第７２話　動乱編　学祭決戦？―正義の在り処―

魔法使い・人間界日本支部の教会。

「よし、これだけの情報が聞けりゃ充分だぜ！　後は急いで１週間前に戻るだけだ！」

「ここから世界樹地下に続くルートを通れるようにしておいた。いつでもＯＫだよ」

「ありがとよ弐集院先生、タカミチさん！　よっしゃ兄貴　行こうぜ！！」

「……カモ君、先に行ってて」

「へ？」

「どしたのネギ君？」

「何言ってんのよネギ！　モタモタしてたら帰れなくなるのよ！？」

「必ず追いつきます。どうしても聞いておきたいことがあるんです」

「……わかった、必ず追いついて来いよ兄貴！　みんな、行こうぜ！！」

その後も少々揉めた末、明日菜は渋々、のどかは心配しながらネギを置いて走って

いった。

現在の時間軸は――超の計画が成功した未来。

第72話　動乱編　学祭決戦？―正義の在り処―

「――何が気になってるんだい？」

ネギが聞く前に、タカミチの方が口を開いた。

「……タカミチ、超さんを追い詰めた最後の瞬間に『躊躇った』って言ったよね。
あれは……どういうこと？」

「……うん……」

タカミチは何から話すべきか、どう話すべきか考えているようだった。

灰皿に煙草の火を揉み消す。

「もちろん超君の行動は容認していいものじゃない。ただ……そうだね」

「……例えば君のお父さんならもしかすると…今回は超君の側についたかもしれない。
細かいことにはこだわらない人だったからね」

「え……と、父さんが超さんの側に……！？」

「ああ、これはまあ極端な例え話だけどね」

父親の事になると過敏になるネギを落ち着かせるように言葉を付け足す。

「『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』を目指す君には充分わかっていることだと思うけど…世界は
今でも紛争と貧困に苦しむ人達であふれ返っている。
……この学園で生徒達の笑顔を見ていると忘れてしまいそうになるけどね」

『忘れてしまいそうになる』。この学園に在る平和と子供達の笑顔は、タカミチにとって
それほどまで眩しいものだった。

「僕達はそういった人達を救うべく日夜努力しているわけだが…制約は多く活動は限定
されざるを得ない。僕達の力には限界がある。でも……
超君が目指し　事実そうなってしまったこの『魔法がバレた世界』

ならば、僕達は存分
に動ける……いや、僕達だけの力ではなく　より多くの人達を救
えるかもしれない」

「ま…待ってタカミチ！　じゃあ、超さんは正しいの!?　超さん
は世界を救うために」
「いや違う。そうは言ってない」

「世界はそう単純には出来ていない。そう簡単に世界は救えない。
……ただ確かに、
超君の計画の果てには何もしないでいるよりも多くの人達を救える
可能性があった」

「……それで僕は、躊躇ってしまってね……」

「で、でも……じゃあ……超さんが間違ってるとは言い切れない
んだね……」

「それも違う」

「!?」

タカミチは言った。躊躇ってしまったと。彼は今、後悔している。

「いかに超君に大義があろうと力で無理矢理　計画を実行したこと
は正当化できない。
もっとやり方があったはずだ」

新しい煙草に火をつけて咥える。

「個人的には、彼女は間違っていると思うよ」

「じゃ、じゃあ超さんの計画は止めるべき……？」

「……その判断は君がするんだ。僕達のやり方は完全に失敗だった、僕にどうこう言える資格はないと思う」

「……。」

「ん……スマナイ、混乱させるつもりはなかったんだけど……」

タカミチはチラッと腕時計を一瞥した。

「……もう行った方がいい。これ以上は追いつけなくなる」

「う、うん……。ありがとうタカミチ」

「――――もし君が失敗しても、君一人が責任を感じる必要はない」

「え……」

タカミチは優しく笑い、ネギは驚いたような表情で固まった。

「だから迷う必要はない。君の思う通りにすればいい。――――行けネギ君。頑張れ！」

「――うん！！」

タカミチに送り出されて、ネギは勢いよく駆けていった。

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

「……わ…私……や……、
……クラスのみんなを置いて…行ってしまうというのですか……？」

「僕が……みんなと一緒にいたいと思うこと……。
……それも……ワガママだとは言えないでしょうか……？」

（――――――――――――！！）

「――――――――――ネギ先生！！！」

――――ぱしんっ

「……あっ……」

乾いた音が鳴った。
夕映の右手が、ネギの頬を叩いた。

「――――す、すすすスミマセンつっ、つい私…！」
「い、いえ大丈夫です」
「私としたことが何とアホな……！！」
「いえ　気にしないでください、あんな事を言えば殴られるのも当然だと……」
「し、しかし！　い…痛かったですか！？」
「……いいビンタでした」
「も、も、申し訳ないですぅぅぅう！！！」

夕映は涙目になって完全にパニクっている。

「……ホントに気にしないでください。
もしかして僕……夕映さんに殴ってほしかったのかも……」

「えっ……」
「な……兄貴　そっちの趣味に……？」

「――――本当はわかっていたんです……今ので……心が決まりました」

「『そう簡単に世界は救えない』。超さんは僕が止めなくてはいけません」

「……ネ…ギ先生」

「でも…夕映さんはさっき『誰とも知れない人を助けるために』と言いましたけど……
世界を回って仕事をしているタカミチや龍宮さんにとっては多分……親しい人達や
友人……仲間なんです。
だからタカミチは迷って…龍宮さんは超さんについた。そしておそらくは超さんも……
……そんな中の一人なんです」

「すみません夕映さん　僕の方から話を伺ったのにこんな……。
でもこれ以上……
超さんが間違っている理由だけ考えても僕……ダメなんです」

（……そうです……ネギ先生が私の思った通りの人ならば…もはや……自分が正しいと
思い込むことなどで）

「もう……自分が正しいと思うことだけでは……」

「これ以上――――　一歩も先へ進めません」

「夕映さん…本当の事を言ってください。超さんは止めるべきです。
でもそれと同時に
僕は……」

「……僕は――――――――」

「僕は僕達自身の日常の為に悪を行う。それを逃れることは出来ないのだと」

超は手段こそ正しいとは言えないが、誰かを救うことが出来る。
だがネギはそれを止める。阻止する。
人を救うことを阻止する、その理由に――――――少なくとも正義は存在しない。
それでも止める。

超鈴音は悪である。
そしてネギ・スプリングフィールドも悪である。

それを認める。それを受け容れる。それでも止める。
学園の皆と一緒にいる為に。

―◇―――――――◇―――――――◇―

「――――――――――隙アリ」

超の”Ｂ・Ｃ・Ｔ・Ｌ”がネギを、電撃が航時機（カシオペア）を狙い打つ。

――――ゴキュッ――――――！

周囲に雷が迸り、葉加瀬がそこに視線を向けると――――

黒い渦（Ｂ・Ｃ・Ｔ・Ｌ）を回避して背後に回ったネギに――――超のカシオペアが砕かれた。

「ぬぅっ！！！」

超がネギの背後に回る。彼女の参号機（カシオペア）はネギの壱号機（カシオペア）と同様に火花を放つが――――
まだ壊れない。

しかしネギは更に彼女の背後をとる。

（ッ！　マズイ――――『疑似時間停止』――――――！！）
（無駄です！！）

カシオペアの超高速連続使用である擬似時間停止は言うまでもなく負担が大きい。
破壊一歩手前のカシオペアでは満足にその機能を発揮できる筈がない。

“――――雷華崩拳――――――――――！！”

――――――ドッ――――――ズズゥ……ン――――――!!

時間停止が不発に終わり、ダメ押しの一撃が超のカシオペアを穿つ。
超は船体に衝突、
そのまま気球部分を貫通して吹き飛んでいった。

――――夕映さん…本当の事を言ってください。
――――僕は僕達自身の日常の為に悪を行う。それを逃れることは出来ないのだと。

『……その”悪”というものについては尚　議論の余地がありますが……。
でも……あなたがその言葉によって前へ進めるというのなら……』

『そのとおりでしょう』

『……しかしネギ先生。その悪はこの学園……いえ　この国……
いや　この世界に住む
全ての人々が背負うべき類の何かです。私達で良ければ……一緒に背負うですよ』

『……！』

学園の、クラスのみんなと一緒にいたい。その自身の願いの為に。
ネギは、超の計画で
救えるかもしれない人々を見捨てる選択をした。
でもタカミチは、失敗しても自分だけが責任を感じる必要はないと言う。
でも夕映は、みんなでその罪を一緒に背負ってくれるという。
成功しても失敗しても、自分を肯定してくれる。自分を許してくれる。

ネギは、涙が出そうだった。

『……あ……』

――――ネギ（じぶん）には、こんなにも素晴らしい仲間がいる――――――

『ありがとうございます！！』

「ぐ……ぅ……ッ！」

開いた大穴から超が這い出てくる。彼女のカシオペアは煙を噴いて停止していた。

「超さん……僕はあなたを否定できません」

「――――ですが」

「あなたの仲間にもなりません！！」

ネギがそう言うのを見届けて、ネギの航時機（カシオペア）は爆散した。

カシオペア壱号機。超鈴音をこの時代へ誘って、彼女を止めるために砕け散った。

「フ……。……君はそう言うとわかていたヨ」

――――ババババババ――――

「「「！」」」

戦いの場を切り裂く爆音。

《こちら上空４０００ｍ！！　皆様ご覧頂けるでしょうか！？》

麻帆良ケーブルＴＶ局ＭＮＮが乗った軍事研のヘリが現れた。

「カメラ外に出れるか？」

「ムリですよ、外は何℃だと思ってるんですか！」

「なんであの人達　平気なんだ？」

《ラスボス超がボロボロです！　子供先生の一撃が決まったぁ――――！！！》

「やった！」
「ネギくーん！」
「ナイス子供先生！！」

モニターを通じて戦況が地上に伝わる。

「これは……決まったな。超の切り札を仕留めたぜ」
「……」
「どうした　ゆえっち？」

「……私にもわからなくなってきてしまったです」

善とは何か。悪とは何か。何が正しくて何が悪いのか――――その境界線は何処に？
そう、境界線。いつの時代も引かれるのは1本の線（ライン）。

「あの決断は紙一重。先生はそこまでちゃんと考えていたのですね。だというのに私は
何を分かった気になっていたのか……」
「オイオイゆえっち、兄貴の悩みグセが伝染ったか？
　いくら超に理と義があろうと世界をひっくり返していいってことにゃならねえ。
超の側（あっちがわ）に行っちまうのも俺っちにゃ痛てえほどわかるが……やっぱそりゃダメさ」

この言を深読みするなら、このオコジョもなかなか壮絶な人生（？）を送って来たようである。

「結局の所　俺達はこっち側に踏み留まってグダグダやってくしかねぇ…ってな。それがギリギリの正義って奴よ。だろ？俺っちが言うのもアレだがよ」

「……いずれにせよ　私達のような子供には分を越えた問題です……」

「へ…こんな役が回ってくるたぁ兄貴も難儀だな。なんせまだ１０歳」

「オイ見ろ！　社長の奴まだ戦る気だぜ！！」

「「！！」」

・　・　・　・　・

「超さんもうやめてください　勝負はつきました！！」

降伏を促しながら、超の攻撃を避けるべく空に逃げる。

「いやまだネ　ネギ坊主。まだ終わらぬヨ！！」

――――――ジャラッ……

「……！！　ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！」

眼前に拡がるのは百や二百で済まない数の銃弾（B・C・T・L）。無数の弾丸は弾頭をネギに向けて静止する。

弾丸底部が着火して――発射された。

（『乗杖飛行（イクウィターレ・ヴィルガ）――高速機動（モービリテル）』！！）

――――ゴキュキュキュ――ガキュッ！！――ゴキュン！！

――

ガキュッ！！――ガキュキュッゴキュッ――ゴキュン――ガキュン！！

――ゴキュンッ！！――ガキュッ――ガキュッ――ゴガギュギュギュンッ――

――ガキュンッガキュッゴキュッ―ガキュキュキュ――ゴキュンッッ！！

航時機（カシオペア）を失った以上ネギに対抗策はない。喰らうどころか掠っただけでアウトとなる。

――だが。

「確かにその銃弾は脅威です」

「――――ム」

超から離れた空域でネギが平然と杖の上に立っていた。

「ですがもう簡単には喰らいません。絶対的優位を保証していた航時機（シオペア）が使えない以上……

魔法を使えないあなたに僕は倒せませんよ！　さあ超さん！」

「……魔法ネ。さあ…それはどうカ？」（カ）

「……！？」

「コード解凍『燃焼（フレーム・オン）、開始』。呪紋回路解放――封印解除。ラスト・テイル」

ｆｌａｍｅ，ｏｎ．

――それは

「マイ・マジックスキル・マギステル」

――始動キー

「――契約に従い我に従え炎の覇王。来れ浄化の炎、燃え盛る大剣」

そして――

「呪文!?　まさか……っ！！」

「――私が魔法を使えるとオカシイカ？　私はネギ坊主とサウザ

ンドマスターの子孫ヨ？」

溢れ出る膨大な魔力に、ネギは攻撃を避けることも忘れた。

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

「このぉ――――！　いい加減止まれっての！！」

世界樹前広場。

最後の鬼神が――――動かない身体を無理矢理引き摺って広場に迫っていた。

「動きが鈍くなって大分経つけど　全然止まんないじゃんっ！！」

「効いてねえのか――――」

――――――――――空が光った。

――――――――ドッ――――――ズグァアン――――――――――――――！！！！

「ひゃぁあああっ！？」
「キャアッ！」
「うわあああああっ！？」
「な、な、な、何いまの！？　空で――――」

（……空、って）

『何だ今の爆発！』
『リアルタイムＣＧ映像！？』
『でも空の上の方も光ったぜ！？』
『何かわからんけどラスボスが正体現したぞーっ！！』
『子供先生大丈夫！？』

「ば、爆発！？」

そう、爆発。その衝撃が大気を震わせ轟音の雨を降らせた。
裕奈達は急いで空を見上げるが、もう何も見えない。

『オイオイ　マジかよ……！　超が魔法……！？』
『……ネギ先生……！！』

夕映とカモも、ネギの無事と勝利を祈るしかなかった。

第７２話　動乱編　学祭決戦？―正義の在り処―（後書き）

～補足・解説～

：人を救うことを阻止する、その理由に正当性などない。少なくとも正義は存在しない。

・時と場合によって考えは変わります。人を救わないことで他の何かを守る場合もあります。それは自分の命だったり、より多くの命だったり。「何かを切り捨てること
で何かを守る」、それは人間として当たり前に行う行為です。
だからこそ目を逸らしてはならない罪であり悪であると、この文章を書かせて
いただきました。

：そしてネギ・スプリングフィールドも悪である。

・この文章にも賛否両論あるかと思いますが、書いていてやはりネギはスゴイと思い
ました。
関わりの薄い他人よりも、自分に近しい家族や友人たちを優先するのは人間として
不自然ではない、当然の行為だと思います。しかしネギは、その選択によって生まれる
救われない人々の存在に心を傷めます。
自分の取った選択に存在する僅かばかりの正当性を手放し、自らの罪から目を
逸らさずに受け入れる。その「自分は悪を行う者である」と言い切

る潔さと心の強さが、
Ｋｃ３１巻で月詠に言い放った「僕の目の届く範囲では、誰も傷つけさせません」という
『ネギの正義』に繋がっていくんですね。
しかしネギ、お前ホントに１０歳か？

：――――――ネギ（じぶん）には、こんなにも素晴らしい仲間がいる――――――

・正直に言います。
この文章、週刊少年マガジン掲載時（現時点でまだコミックス未収録の話）のアオリをパク……モジったものです。
『立ち止まるな、前へ進め。キミにはたくさんの仲間がいる――――！！！』
この文章を読んだ時、ファミリーマートで鳥肌が立ちましたｗ

：カシオペア壱号機。超鈴音をこの時代へ誘って、彼女を止めるために砕け散った。
・運命を感じますよね。「最初の起動から2年半くらい経っている」と
言っていたことから超が壱号機でこの時代にやって来たと（安直に）考えました。

：「コード解凍『燃焼（フレーム・オン）、開始』。呪紋回路解放――封印解除。ラスト・テイル」

・『燃焼（フレーム・オン）、開始』をどうしても使いたかった……。
ちなみにフレーム（フレイム）・オンは『ｆｌａｍｅ，ｏｎ．』＝『炎上。』となる。
ただこれは「燃え上がる、という意味の」炎上ではなく単純に「炎・

上」と
並んでいるだけである。

それでは次回！！

第７３話　動乱編　学祭決戦？―勝者なき決着―（前書き）

「申し訳ない　４月１０日追記」にも書きましたが、↑４／１６に削除。

「時事的に扱い辛い内容になると思うから更新停止するよ」

←

「書いてみたらそんなことなかったから更新します♪」

ということです。お騒がせしてすみません。

しかも文章量が多くて分割したので、停止の理由になった文章は今話ではなく次話になります。

さらに分割によって士郎の出番が・・・ああ。

あと、サブタイトルの「勝者なき決着」。なんで勝者がいないのかも次話でその描写が描かれます。

長くなりましたが、第７３話、どうぞ。

でも９９，９９％原作通りなんですけどね！！

第７３話　動乱編　学祭決戦？―勝者なき決着―

「ラスト・テイル・マイ・マジックスキル・マギステル」

超は”気”と北派小林拳の使い手で魔法は使えない。少なくともネギはそう聞いていたし、実際彼女から魔力を感じたこともない。

「契約に従い我に従え炎の覇王。来れ浄化の炎、燃え盛る大剣」（ト・シュンボライオン・ディアーコネート・ホモオ・ユラネ・フロゴス・ゲネートー・カタルセオース・ロギネー・ロンファイア）

だが眼前の少女からは膨大な魔力が溢れ、魔方陣が光を放つ。

「ほとばしれよソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を死の淵に」（レウサントーン・ピュール・カイ・テイオン・ハ・エペフレゴン・ソドマ・マルトートゥス・エイス・クーン・タナトゥ）

（な…に、この魔力――――！？）

「障壁最大！！」（バリエース・マーキシム）

超の左手がネギに向けられた瞬間、ソレは空気を突き抜けた。

“――――――――――『燃える天空』（ウーラニア・フロゴーシス）！！！”

夜を赤く照らして爆ぜた炎は爆煙を撒き散らし――――ネギに直撃した。

第７３話　動乱編　学祭決戦？―勝者なき決着―

超とネギの戦いは、彼らの場所からよく見えた。

『ほとばしれよソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を死の淵に』

「ふおっ！？　こ、これはイカンッ！！」

超が放つ魔力に近右衛門が瞠目して腰を浮かす。だが直後、彼は動きを止めた。

“――――――――――『燃える天空（ウーラニア・フロゴーシス）』！！！”

夜を赤く照らして爆ぜた炎は爆煙を撒き散らし――――ネギに直撃した。

「手を出すな…あの戦いは奴の道。無粋な真似をすれば貴様とて容赦せんぞ」
「……ぬ……」
――キンキンキンキン……！
空気中の水分が音をたてて凝結する。
エヴァンジェリンの『断罪の剣（エクスキューショナーソード）』が近右衛門の首に添えられていた。
「――それに見ろ。あの程度でくたばるようには鍛えとらん」
『かはっ……ぐっ！』
爆煙からネギが落下しながら飛び出した。
――◇――◇――◇――
「…素晴らしい。今のを持ち堪えたかネギ坊主」
ネギは杖で体勢を整えて上を見上げる。その胸中は穏やかではなかった。
（……障壁を全力展開しなければ完全にやられていた。確実に僕

以上の魔法……
……なんて魔力だ！）

いくら超が天才でも、魔法すら自分を上回るという事実にネギは困惑を隠せない。
なんて、魔力――――。

（……何だこれ？　何か変な魔力の流れが……何か、異常な――――）

「フハハ……ここまでくればもはや策などない。
後は互いの思いをかけた力のぶつかり合いがあるのみネ」

異常を視線で追った先には。妖しい輝きを放つ紋様が超の体に浮き出ている。

（あれは？　超さんの全身に呪紋処理が施されてる。見たこともない魔法様式……いや
科学！？）

「ラスト・テイル・マイ・マジックスキル・マギステル！
火精召喚、槍の火蜥蜴２９柱……ッ！！」
「！！」

両手で一本槍を構える”火蜥蜴”が超の周囲に現れる。
同時にネギは確信した。
超の顔が苦悶の表情に染まっていることを見逃さなかった。

「超さん待ってください！　そんな……」

（間違いない……超さんはあの呪紋の力で無理矢理　強力な魔力を

行使している！）

「問答無用ネ！」

超の意志に従って槍の火蜥蜴がネギに群がる。

「く――――風精召喚・戦の乙女17柱！」

槍と盾を持つ戦乙女（ヴァルキュリア）が火蜥蜴を迎え撃つ。数こそ劣っているが精霊の位は
ネギの方が上だ。精霊達が相殺してゆく中　2人は空中で拳を交える。

「そんな力を使っちゃダメです！　呪文を唱えるだけで凄まじい痛みがあなたを襲ってる
ハズなんですよ!?　なんで……っ！」

「ほお…そんな事までわかるのカ。……だが」

「――――がッ……！！」

呪紋に気を取られたネギの無防備な腹に　超の拳が振るわれる。

「げほっごはっ……かは……ッ！」

「今さら手を緩めてどうする？　死ぬゾ。それに…意見を違えた君と話すべきことはもう
何もない」

「けほっ……ぐっ！」

「ネギ坊主、私はこの為だけにこの時代にやって来た。２年の歳月と全ての労力をこれに
注いだのダ！この計画は私の全てだネギ坊主！！」

（――――――――――――『全て』。）

「言葉などでは止まらぬヨ！！」

（――――――全て？）

「――火の精霊５９柱、集い来たりて敵を射て！」

（――――――――――――――――違う！！！）

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！光の精霊３７柱・集い来たりて敵を射て！！」

「『魔法の射手（サギタ・マギカ）』・連弾（セリエス）・火の５９矢（イグニス）！！」

「『魔法の射手（サギタ・マギカ）』・連弾（セリエス）・光の３７矢（ルーキス）！！」

火と光の９６矢が互いの身を喰らい合う。

「ぐっ――――！！」

ぶつかり合って弾ける魔力が嵐のように吹きつけて、超は一瞬　目を閉じる。
目を開くと周囲は煙で何も見えない。煙に乗じて攻撃してくる気配もない。

（甘いナネギ坊主　まだ迷っているのカ？それでは私は止められぬヨ！！）

「ものみな焼き尽くす浄化の炎……『紅き焔（フランマ・ブルガートゥスフラグランティア・ルビカンス）』！！」

ネギを灼くべく火炎が煙を貫くが、そこにその姿はなく。

「……む」

遥か下方から超を見据えて立っていた。

「やっと本気カ……？　そうダそれでいい。
この計画を止めたくば　私を力で倒せ完膚なきまでに。サウザンドマスターの息子ダロ」

超は息が上がっている。魔法を使用する度に身体に激痛が走るならば、既にかなりの
体力を消耗しているだろう。
だが彼女は今、笑ってすらいる。

「……ひとつだけ、教えてください」

だが、決着の予感を遮って最後の問いを投げかける。

「このためだけにこの時代へ来たと言いました。…これが全てだと。

――では。くーふぇさんや葉加瀬さん……クラスのみんなと過ごしたこの2年間は……超さんにとって何だったんですか」

「――――――――――――――――――――クラスの、みんな」

そう呟いた超は、その時だけは――――戦意も敵意も理想も野望も。全てが頭の外へ追いやられた。

「フ……そうネ」

2年間の出来事が、水泡のように浮かんで消える。

「それが私の唯一の計算違い。驚いたことにこの2年間は……」

本人も知らぬうちに、口には笑みが零れていた。

「とても楽しい2年間だたヨ」

そう言って笑う超は、年相応の少女のように見えた。

「だが…それも私にとては儚い夢のようなモノ……」

「……」

クラスメイトとの思い出でさえ、超を止めることは叶わなかった。

（……そうだ。超さんが全てをかけたこの計画。言葉で止めようなんて間違いだ。

――全力で真正面から超さんを倒す。それだけが今の僕に出来ることだ！！）

「おしゃべりはここまでネ」

雲の上の決戦場。耳に痛い程の静寂。２人の傍の飛行船が飛ぶ音だけが響いている。

「ラスト・テイル・マイ・マジックスキル・マギステル！！

契約に従い我に従え炎の覇王！！」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！　来れ雷精　風の精！！」

『！　あれは……！！』
『な、なんですかカモさん！？』
2人の両手で火焔と紫電が迸る。
（――――やってくれたナ、ネギ坊主――――――――！！）
『燃える天空』。一定の空間内に超高温の炎を発生させる、広範囲焚焼殲滅魔法。
着弾した個所から一気に発火・着火・燃焼して対象を灰塵へと変える大呪文。
――――ならば。火焔が到達する前に。火炎が最大威力に達する前に。
（――――僕の呪文で、貫く――――――――――！！）
「来れ浄化の炎　燃え盛る大剣！！　ほとばしれよソドムを焼きし……」
「雷を纏いて吹き荒べ南洋の嵐！！」
『威力は劣るが、詠唱は兄貴の方が早い！　行けえ兄貴ィ――――！！』
「あああああああああああああああああ！！！」
「火と硫黄！　罪ありし者を死の、塵に――――――――――！！！」

“――――――――――――ヨウィス・テンペスターズ・フルグリエンス『雷の暴風』！！！”

“――――――――ウーラニア・フロゴーシス『燃える天空』――――――――――――！！！”

敵を消し炭にしようと迫る爆炎、それを貫こうと走る一条の雷閃。

雷は焔に阻まれる。焔は雷に阻まれる。

ありったけの魔力を込める。魔力を行使することは精神力を削ること。

呪紋回路を超過稼動する。それは激痛を齎す諸刃の剣。

膝が笑う。体が震える。眩暈がする。――それでも、退けない。

「ぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぁあああああああああああああああああああああッッ！！！」

「ふぅぅぅあああああああああああああ！！！」

――終わりは突然だった。いや…それとも必然か。

――パキィンッ……

限界を超えた呪紋回路が砕け散る。超から魔力は失われ『燃える天空』の猛りが消える。

紙のように脆くなった炎の壁を『雷の暴風』が貫通し、その雷霆が一直線に超へ走る。

「！！　超さ……ッ」

雷に身を焼かれる寸前。超は全て受け容れたように、穏やかな表情で目を閉じた。

―◇―――◇―――◇―

雷が炎を突き抜けた光景がモニターに映る。

「いいよっしゃ――撃ち勝ったぁッ！　魔力は超の奴が上でも、魔法戦闘の経験は兄貴が圧倒的に上だったようだな！」

「し…しかし超さんが！」

「ぬあっ！？」

気絶した超が、力なく空を落ちてゆく――――――

――クラスのみんなと過ごしたこの2年間は…超さんにとって何だったんですか――

『超(チャオ)…鈴音(リンシェン)、で良かたアルか？私は古菲(クーフェイ)言うアル！イヤー、同じ中国人がいてくれて嬉しいヨ♪異国で一人は正直心細かたアル。よかたら、友達になてくれぬか？』

『ス、スゴイです！その発明は驚嘆に値します！一体どのような理論を用いれば……いや、これは理論だけではなく構造部分にも画期的なシステムが…む！？この熱処理は一体』

―「超包子」……ですか。楽しそうですね。私でよければ…よろしくお願いします―

『こ、この論文は！？　君！　ウチの研究室に来ないかね！？』

『あははー教授、私まだ中学生アルヨ』

『超さん…いえ超会長！あなたこそこの東洋医学研究会の会長に相応しいです！』

『……イヤ、その頼みは吝かではないが。中学生が大学生を差し置いて会長になるは
イイのカ？』

『は、初めまして。今日からまほ……英語を教えることになりました

ネギ・スプリングフィールドです。３学期の間だけですけどよろしくお願いします』

『古菲、昨夜はどこ行ってたアルネ？さっさと吐くヨロシ』
『そ、それは言えないアル』
『うーん、じゃあ仕方ないですねー。出でよ暴飲暴食マシン、「肉まんクンZ」！！』

『超りーん！　除霊武器作ってよ！！』
『何ネ藪から棒に。ユーレイなど非科学的なモノがいるワケないヨ』
『いやいや出たんだってウチのクラスに！』
『ホラ今日のまほスポ１面見てよ！！』

『古（クー）。クラスの皆には言わずに行くつもりだたが…お前にだけは言ておきたくなたネ』

『ようこそ！　超りんお別れ会へ！！』

『……やはりこの程度では天才・超鈴音は泣かないか』
『フフフかかったね超りん。このお別れ会にはもうひとつ別の目的があったのさ』
『それはあんたの……「涙」を拝ませてもらうことだ――――ッ！！』

『我が師からもらた双剣ネ。超にやるアル』
『何と？…そんな大切なモノは頂けないネ』
『超の故郷はとても遠くて会うのはもう…難しいアルネ？だから超にもらて欲しいアル』

『……ありがとネ……古』

『……ありがとうみんな。
私はここで学校を去るが……みんなは元気で卒業して欲しいアル』

『おうっ任せとけー！』
『元気でね――超りん！！』

――――――ああ――――何て楽しい、夢――――――――――――。

「超さん！！」

（……う……？）

「ネ……ギ坊主…？」

魔力も気力も限界の体で、必死に超の腕を掴む。

「超さん、良かっ……」

同時刻。千雨の残した妨害プログラムを振り切って――最後の鬼神が世界樹前広場に手をついた。

「……強制認識魔法……発動…してしまったようネ」

ネギの背後で飛行船から光が打ち上げられた。光は世界樹の真上に到達し、光が収束して光輪を形作る。

「…な……そんな……！！」

「フ…当然のコトネ。私を…倒してもハカセを……止めねば儀式は…完成する」

もっとも、超が葉加瀬を守っている以上それは無理だったろうが。

上空１万８千ｍまで打ち上げられた大魔法はさらに世界樹の魔力を吸い上げ、数分後に世界１２箇所の聖地と共鳴する力を得る。

「それで…終わりネ。私との戦いに時間をかけ過ぎたナ」

「なら…止めるだけです！」

――ぐいっ

「ぬ」

超を抱き上げて杖に跨る。

「まだ数分あるんでしょう!?　それなら……!」

――ゴプッ

（……え?）

ネギの口から何かが滴った。

「ぐ……ッうぶ…こふっ……!?」

体の内から熱いものが込み上げる。口を押さえた自らの手を見やる。

ネギの掌は真っ赤に染まっていた。

「ま……さか、魔力の…限界……ッ…こんな……大事な時に……!」

（あと少し…あと少しなんだ!　最後の、力……を……ッ!）

「あああああああっ!!」

――プツン

「――――――あ……」

ネギの中で、大事な何かが切れた。

まるで糸の切れた人形。電池が切れたオモチャのよう。
無い物ねだりもいいところ。最後の力など何処にも無い。完全に限界だった。

（ダメだ……超さんも抱えてるのにこんな……ところで……）

主が力尽き　杖が重力に逆らう力を失う。杖が傾く。２人と共にゆっくりと。

（無理もないネ……最後のは、この子に出せる全力だた）

だが結果はこのザマだ。高度４０００ｍの空で魔力を使い果たして気絶。計画も止められず
このまま敵と心中するなど本末転倒。

（フ……やはり詰めが甘いまだ子供。だが…子供にしては本当によくやたカ）

崩れたネギを超が受け止める。

「浮遊（アンチグラビティ）システムは……ダメか、イカれてるヨ」

杖を置き去りに２人は落下を開始する。眼下の大地、光る世界樹と麻帆良のネオンが超の
視界に収まった。

（フム…このままでは一巻の終わりネ。私に未練はないガ……）

自らが腕に抱く傷だらけの少年を見る。愛おしそうに目を閉じて――そのまま少年を抱き締めた。

（……仕方あるまい。最後の魔力で私が盾となって何とかこの子だけでも……）

庇うように、守るように、一層強く抱き締める。

（御先祖様を死なす訳にはいかないからネ）

少年と少女が　空を滑るように落ちてゆく――――――

「超さん！　ネギ先生ッ！！」

葉加瀬が叫ぶ。背中の飛行装置（フライトユニット）で飛び立とうとするがそれを遮る音が鳴る。

彼女の前にモニターが現れた。

――――――”Ｆｏｒｃｅｄ　Ｒｅｃｏｇｎｉｔｉｏｎ　Ｍａｇｉｃ（強制認識魔法）”《ＥＲＲＯＲ（エラー）》

「!?　むむ……強制認識魔法は確かに発動しました！　しかし……これは……！」

国際大学付属高校、工学部キャンパス中央公園、礼拝堂、フィアテル・アム・ゼー広場、
龍宮神社、――そして世界樹前広場。

「おおっ!?　巨大ロボが…消えていく!」

六騎の鬼神が音を立て煙を巻いて消えていく。麻帆良各地で歓声が沸き上がった。

「学園結界の復活……じゃあ茶々丸は……」
『ハイ。申し訳ありませんハカセ、完敗でした』

「!?　茶々丸、無事なの?」

『はい。ボディもデータも問題ありません。しかしラボのコンピュータを全て落とされてしまいました。今そちらに向かっています』

「そっかー。千雨さんにやられちゃったかー」

『申し訳ありません……しかし超さんがネギ先生に敗北した時点で我々の勝敗は決していたかと。それも結果論ですが』

『……オイ。そりゃどーいうこった?』

「あれ?　千雨さん?」

『いつから聞いていらしたんですか？』

『んなこたどうでもいい！　今の言葉、私の戦いが無意味だったって聞こえるぞ！？』

「それは……計画開始直前に超さんが宣言したのです。
『もし自分がネギ先生との真っ向勝負に負けることがあれば、その時点で負けを認め
潔く引く』と」

『超さんがネギ先生に負けた時点で　同時に我々の負け。その瞬間に強制認識魔法の内容
自体が無害なものに差し替えられるようになっていたのです』

『な…マジかよ……！私の努力は一体…キスまでして……仮契約（キス）？　……待て。
もしかして私も既にファンタジーの住人！？』

『無駄ではありませんよ千雨さん。千雨さんの妨害がなければ　超さんと先生の決着の前に
儀式は終わっていたでしょう』

『ミ、ミイラ取りがミイラに……』

「聞こえてないみたいよー茶々丸」

『……そのようで。それとハカセ。先生と超さんを追う必要はありません』

「え？」

『彼女が、既に行っています』

……ドサッ

何処かに落ちたような感触。

（……む……随分近い地面ネ。それにもと衝撃があるかと思たガ）

「よしっ受けとめた！」
「スゲーよあんた2人分をっ」
「さすが馬鹿力！」
「ゴリラッ！！」
「あんたらケンカ売ってんの！？」
「怪我人の傍で騒いだらアカンえ♪」

聞いたことのあるような声。覚えのある喧騒。朦朧とした意識でそれを感じとる。

（……何やら騒がしいあの世ネ、一体何の騒ぎ……）

「大丈夫？超りん」

裕奈、アキラ、風香、木乃香、桜子、釘宮、柿崎、明日菜に美空。
目を開くとそこにいたのは、イベントに参加した3－Aクラスメイト達。

「みんな……こ、これは……？」

彼女達が乗っているのは路面電車の屋根の上。超包子の屋台が火を吹いて空を飛んでいた。

（ハ　そうか。コレはこんなこともあろーかと作っておいた我が路面電車屋台の飛行機能……五月カ！）

予想通り。屋台の操縦桿を握る四葉五月の姿があった。

「って超りん全然大丈夫じゃな――い！？」

「何コレ全身大ケガじゃんっ」

「おわっ！？　ネギ君も！」

「ここここ　これ特殊メイク！？　リアル過ぎっ！！」

「あはは大丈夫やて、こんなんウチがこの扇子を振るとあら不思議～♪」

「ふぅ……」

その様子を遠くから見つめるのは、空戦ロボを殲滅した魔法先生・魔法生徒達。

「良かった…みんな無事なようですね」

「へっ、祭りに死人を出すわけにもイカンしなー」

「本当に良かったですね！　これも世界樹のお陰でしょうか？」

「ん？　なんやソレ」

「この学園祭は毎年各所でケンカやバカ騒ぎが起きるのに、死傷者が出たことは一度もないんですよ！魔法使い(わたしたち)の働きもありますが、世界樹の御加護とも言われてるんです」

「ふーん…加護ねー」

小太郎はそんなものを信じない。樹が守るだけで済むのなら戦う者など必要ない。

愛衣の言う通り、死傷者が出ないのは魔法使い達の苦労の賜物なのだろう。

だが。

「ま。今日くらいは感謝したるか」

少しだけ世界樹に目を向けてから、地上を見下ろした。

《さあ皆さん！！　敵火星ロボ軍団はあらかた壊滅、巨大ロボも皆さんの活躍で消滅していきます！！　さらに…ラスボス超とのガチバトルも子供先生が勝利を収めました。

――――ということは？》

『ということは？』

『……と、』
『いうことは……？』
世界樹真上の光輪――――強制認識魔法が光の渦になる。
『それで。差し替えられた「無害な内容」って何なんだ？』
「むふふー。聞いて驚かないでくださいよ千雨さん！」
『超さんが世界樹にかけた「もうひとつの願い」。それは――――』
宣言と同時に、その光は流れ星のように世界に降り注いだ。
《我々　学園防衛魔法騎士団の――――――――――――完全勝利です！！》
『その内容（ねがい）とは「世界に魔法をバラすこと」ではなく。「今日1日、せめて明日1日。
憎しみも悲しみもなく世界が平和であるように……」です』
『……な〝……？』

千雨の口からはそんな言葉しか出てこない。天才・発明家・社長であるあの超鈴音が、
そんな夢みたいな願いを持っていたとは到底考えつかなかったのだ。

「2年の歳月を費やしたんです、この程度の願いは許して頂きたいものですねー。
ちょっとハズカシイですがー」

葉加瀬は誇らしげに鼻を鳴らす。茶々丸も心なしか笑みを浮かべているように見えた。
2人は千雨の知らない超を知っているのだろう。彼女の『願い』には得心がいっているようだ。

『……超が世界平和ねぇ。血も涙もない現実主義者（リアリスト）かと思ってたが……』

――――――とんでもない夢想家（ロマンチスト）だね、あいつ。

『今日1日、せめて明日1日。憎しみも悲しみもなく世界が平和であるように……』

世界樹の力なら、世界中の人間の心に作用してそれを実現させるだろう。

おそらく今、この地球で争いの起こっている場所などないのだろう。

『人の心を操ってしまうなど魔法使いの教義に反する』

しかし『今日1日、せめて明日1日』。短くてあと数時間、長ければ明日の24時まで

「世界平和」が実現することもまた事実。ならば――――

「お前の勝ちだ超鈴音。そして魔法使(おれたち)いの敗北だ。」

“――お前の願いは、叶ったんだから。”

そう言った士郎の顔は、満足したような、幸せそうな。

――――今にも消えてしまいそうな顔で笑っていた。

「……。」

――――ガンッ!!

「へぐぁっ!?」

士郎が奇声をあげる。顔面にエヴァ後頭部の頭突きを喰らった。

「っ痛(て)ぇ……!!　何だよエヴァ!?」

「うるさい馬鹿者。私は寒い。もっと強く抱き締めろ」

いくらここが上空とはいえ、魔力が充ちている今のエヴァが「寒い」などありえない。

（ま、コイツのわがままは今に始まった事じゃないか）

彼女の言う通り、腕に力を籠めた。

「………………ふん」

外野はその様子を――――表面上はニヤニヤしながら――――暖かい目で見つめていた。

だが一瞬、士郎の表情が翳ったのに気づいた者はいなかった。

――――――――――――――――――――カチッ

時計の音が、士郎の頭に木霊した。

雲海を漂って下降する電車屋台。世界樹から降る光の雪が麻帆良に舞う。

「う…………」

「あ、ネギ気づいた？」

瞼を開けると明日菜が見える。ここは何処だと、視線を巡らせ――――

「フ……やれやれ。革命者は己が志　潰えた時には死すべき覚悟も持っているものだが……」

「超さん」

「超りん、アスナー！　ネギ君連れて早く屋台に入りなよー！」
「風邪ひくよ――！」

「フフ……参ったネ。クラスの皆には私も敵わないヨ」

その笑顔は、今まで彼女が見せたどれよりも眩しかった。

第７３話　動乱編　学祭決戦？―勝者なき決着―（後書き）

～補足・解説～

：――ならば。火焔が到達する前に。火炎が最大威力に達する前に。

・「燃える天空」は広範囲・高威力の呪文なので、同時に呪文を発動しては爆炎に飲まれてしまいます。だからネギは「燃える天空」よりも詠唱が短い「雷の暴風」で先手を打った・・・と、作者は原作を解釈しています。

それでは次回！

第７４話　去りゆく者（前書き）

俺節全開、の巻。

佐藤Ｓは訳のわからない理屈を展開するのが得意です（苦笑）。

読むのが面倒な方は下にびゃーっとスクロールしてください。

ケータイからアクセスしている方は［1］次　を何度か連続で押すことに
なるでしょうｗ

それでは第７４話、どうぞ。

第７４話　去りゆく者

麻帆良が丘。

「なんと『強制時間跳躍弾』……！そんな事が可能なのか」
「ええ。個人差があるようで3時間きっかりというわけではないようですが」

魔法先生達が3時間前から飛ばされて来た。
周りでは徐々に脱落者が解放され始め、逸早く銃弾を受けた魔法先生達が顔を揃える。

「そ、それで高畑君　超鈴音の計画は……！？」
「ご安心を　ガンドルフィーニ先生。ネギ君とそのお仲間さん達が…全て解決してくれましたよ」

「な……本当かい？」
「あの…ネギ君が……」

瀬流彦から伝えられた事実に、彼らは開いた口が塞がらなかった。

「あっ高畑先生」
「やあ和泉君」
「あ、あのー、イベントの方は……」
「ああ、どうやら終わったみたいだよ」
「ええっ！？　終わったってどーいうコトですか！？」

「あ――っ！　いたいた――――!!　亜子――っ、ふみちゃーん！！」

まき絵と風香が走って来た。

「失格になった人達ここで解放されるって聞いたから」
「おねーちゃーん！」
「あはははは、泣くなってば史伽！」
「まき絵！　もう全部終わってもーた!?」

「アハハッココネ　こいつぅ――！」
「ミソ……うぷっ」
「無茶しやがって…もぉ――――っ」

「ウチら寝てたらしーんやけどあれから何時間経ったん!?」
「もう学園祭全部終わっちゃったんですか――!?」

「何言ってるの　まだ１０時前だよッ♪　ほら2人ともこっちこっち！
学園祭最終日の夜は…まだ始まったばっかだよ!!」

「「わあ！」」

輝く世界中を背景に、麻帆良が丘は麻帆良生で埋め尽くされていた。

「「そっかー後夜祭やー」」
「イベントが大成功だったから今年はみんな盛り上がってるよ～。
３一（ウチ）Ａも朝まで
突っ走るって♪」

シートを敷いて飲み食いする者、キャンプファイヤーの周りで騒ぐ者。
世界樹と花火の光に照らされて、夜でも困らない程に明るい。

その後もロボ撃破数４位の賞金を得た裕奈が強請られたり
３時間前から飛んできた真名と楓の攻撃が火種となってケンカ騒ぎが起きたり
それをタカミチが鎮圧したりと、相変わらず騒動は続いていた。

「高畑先生も大変よねー」
「いやーでも…気のせいか３－Ａが騒動の発端だったような……」
「気にしたら負けやせっちゃん？」

「は――～～……でも私　今回はホント役に立てなかったなー。超さんには一発でやられるし」
「そんなことないですよアスナさん」
「でもホンマ今回はみんなで解決したゆー感じやったな♪
……あれ？そーいえばネギ君は？」

『あのっその私…今回はお役に立てないですのでっ！　その…頑張ってくだ――』

「――――――さいっ！！……あれ？」

「のどか……良かった」
「あれ？　ゆえ！？　不思議ー……」

のどかも無事に解放された。

「安心するです、全て上手く納まったですよ」

「ホント!?　そっかー、よかった……。……それで今ネギせんせーは……？」

「あちらです」

第７４話　去りゆく者

麻帆良が丘の中でも小高い場所。ストーンヘンジのように、この場所に不釣り合いな
四角い石柱が何本か立っている。
その内の２本。それぞれの上に立つ２人の人影が見えた。

「全て…終わたナ。ネギ坊主」

「……超さん。……行ってしまうんですか？」

「ああ。私の全てだた計画は消えた。もうココに用は無い」

一切の迷いなく言い切る超に、ネギは悲しそうに眉を顰めた。

だが、まだ聞かなければならないことがある。

「……ひとつだけ、聞きたいことが……

超さんの全身に施された……呪紋処理のことです。あれは……超さんが自分でやったものじゃないですね？」

「……」

「あれは……正気の沙汰とは思えません！　あれは術者の肉体と魂を喰らって、それを代償に力を得る狂気の技です！！　一体誰があなたに――――何のために……！！

超さんあなたに…あなたの過去に何があったんですか？　その『何か』が……あなたに計画を実行させた理由なんですか？」

「フフ……未来のコトは話せないヨ？　タイムパトロールに捕まるネ（笑）」

「超さんっ！」

「ネギ坊主」

お道化て真面目に答えようとしない超に声を荒げるが、それも彼女に遮られる。

「誰かの過去を知ることで誰かの事を理解できるなどとは思わぬコトダ。私を知りたければ歴史の教科書を開くか今夜のニュースでも聞け。今現在も世界に溢れるありふれた悲劇と何ら変わらぬ――つまらぬ過去ネ」

「超さ…」

「お前達が勝た。その事実で充分のハズヨ？　言たハズネ」

「――君と話すことはもう何もない」

――――チャラッ……

「！！」

超が取り出したのは――

「ではこれで……」

（あれは航時機（カシオペア）――弐号機！？）

「サヨナラネ」

――ガチッ！！

「駄目です。超さん」

瞬動で近づいて、ネギが超の腕をとってカシオペアを停める。

自分を見つめる毅い瞳に、超は見惚れた。

「ムム…今の瞬動は素晴らしいネ！縮地レベルヨ」
「ごまかさないでくださいよっ！」

――――ザ……

「超……」
「超さん……」

古菲、五月、葉加瀬、茶々丸。

「……みんな……」

「……超さん」

上空の戦いから、ネギがずっと伝えたかった事。その思いを、言葉にして紡ぎ出そう。

『この計画は私の全てだネギ坊主！！　言葉などでは止まらぬヨ！！』
『とても楽しい2年間だたヨ。だが…それも私にとては儚い夢のようなモノ……』

「全てだなんて…嘘ですよ。儚い夢だなんて、そんなハズありません」

超の眼に、友人4人と、遠くで輝く世界樹が見える。
世界樹。それは計画の根幹であり　ここ麻帆良の象徴。
手合わせした。研究した。料理をした。勉強した。遊びとは無縁だ

ったが、くだらないことをしたりふざけあったり。
彼女達との友情が、思い出が現実の証。
この2年間が夢に過ぎなかったなど――――彼女達が認めない。

「超さん……僕と一緒に立派な魔法使い(マギステル・マギ)を目指しませんか？」

「……！！」

「同じ時代を…この時代を生きる人間として一緒に未来を変えていくのなら、僕が
誰にも文句は言わせません」

石柱の周りには、思いを同じくする仲間達が集まっていた。

（――本当に……この子は――……）

思ったより良い奴で、思ったよりも頑固で。思ってもみなかったことを言ってのける。

（お前達と一緒に……立派な魔法使い(マギステル・マギ)を目指す……か……）

そんなことは有り得ない。そう思いつつも、超はネギの言う未来が容易に想像できた。

「そうネ……そんな未来も、悪くないかもしれぬナ」

「じゃ、じゃあ超さ「いや帰るネ」ええっ！？」

「ど、どうして――」

「そんなことよりイイのカ？　私にそんな愛の告白のようなコトを言て？」

「……あいの？」

「『共に立派な魔法使い（マギステル・マギ）を目指そう』というのは魔法界では生涯を添い遂げようと言うに等しいネ。仮にも血の繋がた私にプロポーズはマズイのではないかネギ坊主？」

「えっ、いえ……あのっ」

マズイと言いつつ、誘惑（からかう）するようにネギの頭を掴んで自分の顔に近づける。

しかも今の超は服が所々破れていて、胸やうなじがよく見えて色気を纏っている。

ネギは目のやり場に困って赤面した。

「コラーーーッちょっと超、あんたーーーッ！！」

「黙って聞いてりゃ何言ってんのアンタ！？」

「アハハ怒るな冗談ネ」

外野の援軍でネギはようやく解放される。

「超さん！　冗談じゃないです僕は本気で――」

「なお悪いバカ坊主。今のは聞かなかた事にしといてやるネ。そん

な言葉はお前の大切な
誰かの為にとておけ」

「超さんッ！　何でそんな頑固に……！」
「クドい。やれやれ…これも力で決着を着けねばわからぬカ？
――よかろう。ならば私も最後の切り札を切ろうこの超鈴音
最大最強の一撃ネ」

「――――え！？」

「ククク……先程の戦いでこれを使えば確実に私が勝てただろうがあまりに危険過ぎて
あえて封印していた程の代物ヨ」

「な……！？」
「くっ、超鈴音！　まだやる気か！？」

超の言葉に反応し、ネギパーティが各々の武器を構える。

葉加瀬「そんなのあったっけー？」
茶々丸「さあ……」

「ちゃっ…超さん！？」
「フフフ…後悔してももう遅い。これを使えば君達の仲間割れは必至、未来の力を結集した究極の心理攻撃兵器……！！　それが――――」

超「――――――――これネ！！」

……。

ネギ「……超家（チャオけ）、家系図（かけいず）？」

超が腰から取り出したのは、そう書かれた古い書物。何処に収納してたんだとか、何で肌身離さず持っているのか、『雷の暴風』を受けて何で無事なのかとかツッコミ所は満載だが、ギャグパートなのだからこれ以上は何も言うまい。

……もしかしたらド●えもんよろしく四次元ポケットでもあるのかもしれない。

超「私がネギ坊主の子孫とゆーコトは、ネギ坊主は誰かと結婚して子を生したとゆーコトネ。ならば当然この家系図にはその誰かの名前も……」

ネギパーティ「……。」

ネギパーティ（究極兵器（アルテミット・ウェポン）だ――――――――――――！！！！）

（一部を除き）全員が顔を真っ赤にして反応した。明日菜は呆れて石になっている。

朝倉（これはマズイッ！！）

千雨（いろんな意味でッ！！）

委員長「ネギ先生の結婚相手がなんですの！？」

雪広あやかｗｉｔｈ佐々木まき絵　見参！！

千雨「どんな地獄耳だアンタら！？」

朝倉「とにかくマズイっネギ君それを守ってッ！」

ネギ「えっ、あっハイ！」

――――ぱしぃっ！！

ハルナが『落書帝国（インペリウム・グラフィケース）』の鳥型ゴーレムで空を飛び、颯爽と家系図を奪って行った。

ハルナ「こっこんな…こんな危険なモノ……！　私が責任持って処分しとくわー！！

ア――ッハッハッハ！！？」

明日菜「嘘つけパルーーーーーーーーーッ！！」

超「ちなみにアレにはネギ坊主の結婚相手だけでなく、今から何年後に結婚するか、

何人の子供を作るかまで事細かに記されてるネ」

カモ「ウヒョッ、マジで悪魔の書だな！」

のどか「あわわわ……！」

木乃香「ひゃ～～～？」

委員長「そ、そんな恐ろしいモノが……？」

千雨（信じた！？）

委員長は顔を真っ赤にして吐血（鼻血）した。

千雨「くっ予想以上だ！　神楽坂・桜咲！　アレを誰にも見せるなッ何があってもだ！！」

明日菜「言われなくても！」

ハルナ「――ぴぎゃっ！――ぎゃあああぁぁぁぁぁ――へぶっ！！」

明日菜の投げた『ハマノツルギ』でゴーレムが消滅し、悲鳴をあげて落ちるハルナを
刹那が受け止めた。
ヒラヒラと不規則な動きで落下した家系図は――

――パサッ

のどか「はうっ」

恋する司書の手に落ちた。

明日菜「見ちゃダメ本屋ちゃんっ処分して！！」

のどか「ハ……ハイッ！　……ど、どーやって――……」

何もない丘で誰の目にも触れないように処分するなど無理だろう。
迷っている間にハイエナ達が群がって来る。具体的にはカモ、木乃香、まき絵、夕映
、息の荒い委員長。

のどか「しょ……しょぶん……」

完全にテンパったのどかの手が、誘惑に負けて、ページを開く――

千雨「見るなっつってんだろ――――――――!!」

大声で叫びハイエナ達を怯ませて、すかさず家系図を奪い取る。
『力の王笏（スケプトルム・ウィルトゥアーレ）』で殴り倒したように見えたのは気の所為だ、うん。

千雨「アホかてめーら！　こんなもん見てもなんもなんねーぞ!!
大体　未来ってのはな
!!　……あ――――……（…ちらっ）」

明日菜「見るなぁ――――ッ!!!」
千雨「ぎゃあああああ!?」

アスナ　の　めつぶし　！　きゅうしょ　に　あたった　！
ちさめ　の　メガネ　が　われた　！　ちさめ　の　めいちゅう
りつ　が　さがった　！

千雨「目がッ！　目がぁぁあああああ!?　何すんだ神楽坂ッ!!」
明日菜「見ようとしたでしょあんた今!?」
千雨「見てねーって目がちょい行っただけだろ!?」
明日菜「ちょいでもダメなのぉっ!」

委員長「せめて頭文字だけでも……」
ハルナ「いいじゃんちょいぐらい　アスナー♪」
夕映「ダダダダメですハルナっ!」
ハルナ「何でよー?」
夕映「とにかくダメぇぇ――――ッ!!」

ネギ「あ……あああ……！！（ガクガクブルブル）」

超「アハハハ計算以上ネ」

・　・　・　・　・

「では…私はそろそろ行くとするネ」

「超さん」

遠くではまだ家系図争奪で騒いでいる。

「……どうしてもなんですか？」

「フフ、楽しい別れになたヨ。礼を言うネギ坊主。私には上々ネ」

「でも…本当に良かったんですか！？　超さんあなたは何ひとつ……！」

「いや……案ずるなネギ坊主。私の望みは既に達せられた。」

「え……。そ、それはどういう……」

「我が計画は消えた。だが私はまだ生きている。

ならば私は私の戦いの場に戻ろう。ネギ坊主　君はここで戦い抜け」

生きていれば、生きてさえいれば、可能性はゼロではない。
ゼロでなければ、夢は潰えない。――だから。

「超さん……」

巨大な魔方陣が幾層にも宙空に現れる。それはまるで未来へ続く門のよう。
その魔力に引かれて超の体と、突如現れたクラスメイトからのプレゼントが宙に浮く。

「五月。超包子を頼む、全て任せたネ」
―…うん。任せて―

「2人とも御苦労だた　ありがとう」

葉加瀬と茶々丸に礼を言う。

「ハカセ、未来技術（オーバーテクノロジー）への対処は打ち合わせ通りに。あとこの前の実験途中のデータだが……」
「――全て。わかっていますよ超さん」

「茶々丸。お前はもう自立した個体だ。好きなように生きるがいい」
「……了解しました。ありがとう超鈴音」

ふと、視線を感じて空を見上げる。

『惜しいのう。優秀な生徒を手放すのは残念じゃ』
『ケケケ。魔法使(テメエ)いノ敵ニ回ルヨウナ奴ヲ手元ニ置キテェノカヨ』
『未来(むこう)でもコーヒーばっか飲まなきゃいいけど』
『フ……』

「古！！」

金色の吸血姫に笑みを返して、最後の親友に顔を向ける。

「いつかまた、手合わせするネ！！」

――――いつか、また。

「……ッ！　ウム！！　必ず！！」

舞い散る世界樹の光の雪。その魔力を吸収して魔方陣が輝きを増していく。

「超さんッ！！」

超の体が少しずつ上昇していく。

そして。

「さらばだネギ坊主！――――――また会おう！！」

「ハ、ハイッ！！　いつかまた……！！」

B・C・T・Lとは比べ物にならない程に時空が歪み、超鈴音は姿を消した。
周囲に満ちた光はその場の全ての者達の目に焼き付いた。
“いつかまた……”

「――きっと……」

ネギは、魔力の残光が消えるまで空を眺めていた。

◇――――◇――――◇

――空が白んでいる。
夜が明けて朝日がもうすぐ顔を出す。もう騒いでいる生徒達はほとんどおらず、残っている生徒は後片付けをしている者ばかりだ。

「終わったねー学祭！」
「疲れましたね～」
「ホントに朝まで騒ぐんだもんねー」

「あそこまだ騒いどるえー♪」

彼女達もそんな生徒達の一員だ。手にゴミ袋を抱えて歩いている。

「そういえば家系図はどーしたアルか？」
「アスナさんが燃やしちゃいましたー」
「何と！　思い切ったアルネーアスナ」
「あんなもん百害あって一利なしよ」

「でもさ、アレって贋物の可能性高くない？」
「はっ確かに」
「ぐっ……どこまでも人の悪い女だ」

「……あ。ネギ」

超が旅立った石柱の下で、ネギが静かに昇る朝日を眺めていた。

「行っちゃいましたね……超さん」

誰に向けて言ったわけでもなく、そう独りごちる。

「……とても……強い女（ひと）でした」

その背中に声をかけることは、不思議と躊躇われた。

「でも僕……彼女に何もしてあげられなかった。……先生としても……」

ネギは若干１０歳の若輩者。教師を始めて約半年。自分でも頼りないと自覚している。

今回に至っては彼女がこの時代へやって来た目的、理想すら潰してしまった。
ネギは彼女に、何も与えることができなかった。

「そんなコトないアルヨ」

「……くーふぇさん」

「あいつ…最後　笑ってたアル。心配するなネギ坊主」

ネギを励ます為でも、元気づける為でもない。古菲は本心からそう思っているのだ。
超は確かに、得たものがあったのだと。

「……ハイ」

だからネギは、その言葉を素直に受け取ることにした。

「ホラっ帰るわよ」
「わっアスナさん？」

アスナに促され、ネギは寮へと歩き出す。

――この戦いに勝者はいない。

少女は新たな理想を手にした。戦いに敗れて。

少年は識った。自分の求めていた『正義』など、世界の何処にも存在しないのだと。

少女も少年も、大いなるものを手に入れた。
少女も少年も、傷を負わずにはいられなかった。

――――だからきっと、この戦いに勝者はいない。けれど――――

《麻帆良祭一夜明けまして　本日と明日は振り替え休日となっております》

「よぉーーーっし今日と明日は部屋で思いっきりゴロゴロするわよーッ！！」
「せっちゃんウチ来る？」
「ハ、ハイ。皆さんがよろしければ…」
「おっ私も行っていい！？　ネギ君　ヒーローインタビューさせてよ！」
「わ、私達も行っていいですかー？」
「千雨さんもいらっしゃいますか？」
「誰が行くかっ！！」
「お！？　いいねーついでに早めの打ち上げ突入しちゃうーーー！？」
「さんせーーー！！」
「まだ騒ぐのかテメーらっ！？」
「無限の体力アルネー」

「若さですね……」

守れたものは、あったのだろう。

―◇―――◇―――◇―

『やあネギ坊主、ニーハオ。この手紙を読んでいるというコトは…
私の計画は失敗した
とゆーコトダナ』

『私とお前達がどのような別れ方をしたかはわからぬが……悪いも
のではなかたと
信じているヨ』

『だがその時、ゆくり話す時間があるかわからぬからナ、こうして
急遽メッセージを
残すこととした。故に画像が粗いのは勘弁して欲しいネ』

『ネギ坊主……お前に言ておかなければならぬコトがある』

『お前は私以外にもうひとり……近しい人間と別れを告げねばならなくなるダロウ』

『ネギ坊主。計画を実行するにあたて私が最も気をつけたコトは何かわかるカ？』

『未来技術……この時代から見ればオーバーテクノロジーに当たるそれを歴史に影響せぬよう運用することにも気を遣たが……』

『私が関わた出来事で決して死人を出さぬコト。それが最も懸念すべき事項だた』

『死人が出るということは歴史に最も影響を与えるものなのヨ』

『計画実行の際、ロボ軍団に敵の装備を剥がす程度の戦力しか持たせなかたのはこれが理由』

『犠牲を厭わず、ただただ強力な兵器を持たせれば計画はもと簡単に行う事が出来た。だが死人を出すわけにはいかなかた。もっともこれは私の矜持も相俟っての選択だたガ』

『だがもし私が矜持を捨てて計画に臨んだ場合、ここ麻帆良で大量の死者が出たという「歴史との大きな差異」が生まれたダロウ』

『「本来の歴史」との差異が大きくなると、ある問題が発生する』

『ネギ坊主…話は変わるが君は「並行世界論」という理論を知ているカ？』

『この世界の外側には無限の拡がりがあり、そこには可能性の数だけ本来の歴史から分岐した無数の世界があるという考え方ダ』

『要するに、この世界の外側にはこの世界と微妙に違うそっくりさんの世界が連なているゆーコトネ』

『もしかしたら君の父親・サウザンドマスターが行方不明になていない世界もあるかもしれぬナ』

『ここで話を元に戻そう。「本来の歴史」との差異が大きくなると発生する問題、
それは「世界の分裂」ネ』

『私が計画を強行手段で実行した場合。歴史に最も影響を与える「人間」が「大勢死んだ」という「大きな差異」によって、世界はそこで分岐してしまうのヨ。「並行世界の誕生」ダ』

『本来の流れ……「何事もなく麻帆良祭が終わった世界」と、「超鈴音によって大量虐殺が行われた世界」にネ』

『そんな事になったら本末転倒ネ。歴史を変えるべく介入したというのに、「私が救いたかった世界」と「私が改変した世界」が分かたれてしまっては歴史を変える意味がない』

『だから「世界」から身を隠して動いた。出来る限り世界への影響を少なく、小さく。
干渉出来る範囲の限界を超えてしまわぬよう細心の注意を払た』

『全て上手くいけば、世界を騙して歴史を改変することが出来たハズ』

『ネギ坊主、お前達は見たハズネ？　私の計画が成功した未来を』
『だが歴史は更に上書きされた。おそらくその未来は並行世界へと分岐することなく、
完全に消滅したと思われるヨ』

『だから……もし、その世界からやって来た人物がいたとしたら…
その人物はどうなると思う？』

『その人物がやって来た世界はもう存在しない。残っていたとしても、既に世界は分断されてしまっているネ。帰る手段も存在しない。己の世界との繋がりを絶たれ、その人は己が存在するルーツを完全に失った「存在しないはずの存在」と為ってしまう』

『その矛盾を、異常を。「世界」は決して認めない』

『並行世界論、次元論が絡み合った稀なケースのタイム・パラドックスになるネ』

『「彼」が消える前に……君がこの手紙を読んでくれていれば良いガ』

――こうでもしなければ、誰にも別れを告げずに行ってしまいそうだからネ――

「……やめたネ」

学祭最終日、儀式直前の飛行船の上。
担任に残そうとした”手紙”。それに録音した音声を消去する。

「いいんですか超さん？」

「無駄に悲しみを拡げる必要はない。知らなければそれに越したことはないネ。
ハカセ、このことは他言無用ネ」

だが、「彼」と出会ってしまった人物はいる。
近衛近右衛門、タカミチ・T・高畑、春日美空、桜咲刹那、
――エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

明日から、この時代の「彼」が本来帰って来るはずの7日後まで。
彼らは「彼」の姿が
ないことを不審がるだろう。だが、その程度ならまだ大した問題にはならない。

『まだ遅くはない、衛宮サン。私に手を出さないと約束してくれるならこのカシオペア、
貴方に貸して――』
『いい。これは俺が望んだことだ。――結末まで、見ていたい』

「今ならまだ帰れる可能性があるというのに。貴方も大概　堅物ネ」

だがそれが彼の決めたこと。彼が選んだ道。

たとえその先に、避けえない滅びが待っていようとも。

『お前こそ、どうして過去なんぞにやって来た。≪やり直し≫は、お前が一番嫌いなモノのひとつだろう』

『心配だからついてきたんだ』

それだけの理由で自らを犠牲にする。

例え自分が消えようと、この時代の自分がいるのだから――

――自分が消えても問題ないなどと、馬鹿な事を考えたのだろう。

「――――貴方は、自分の価値を全く理解していない」

貴方が消えて傷つく人が、どれだけいると思っているのだ。

「衛宮サン。せめて彼女には、別れの言葉を――――」

その呟きは、夜の闇に呑まれて消えた。

◇――――――――――◇――――――――――

―◇

「超の計画が成功した未来」から来た士郎は、未来が変わったことによって生じたタイムパラドックスにより消滅する。

今までこの時間に居られたのは未来が不確定だったからだ。

だが未来は書き換わった。世界は分岐し、時計の針は違う時を刻み出す。

そこに、彼は居られない。

――彼らの別れに何があったのか、多くを語るつもりはない。

ただ、語るべきことがあるというのなら記そう。――僅かばかりの終幕を。

士郎の体が――急速に透けていく。

――待て……っ消えるな！！

『……ムチャ言うなよ、お前らしくもない』

申し訳なさそうに苦笑して、主である少女を諭す。

「……だ」

『うん？』

「……お前は、いつだってそうだ……！！」

殺気すら籠めた青い瞳に見つめられ、士郎は思わず息を呑んだ。

「ふらりと麻帆良（ここ）にやって来て……私の家に居着くようになって。私の従者になって……そして、勝手にいなくなるんだ！！」

彼は突然現れた。赤の他人に馬鹿みたいに愛想を振りまいて。人の心に土足で踏み込んでくる。そこに勝手に居座って、居場所を作って。

そして――――――最後は去っていく。

『……ごめんな。俺、自分勝手だから。大丈夫、まだこの時代の俺がいる。二度と衛宮（オレ）士郎会えなくなるわけじゃない』

「巫山戯るな！！」

一緒に学祭を回ったお前は。一緒に世界樹の光を見たお前は。今、こうして話しているお前は。

「今ここにいるお前には、二度と会えないんだろう！？」

士郎の体は、もうほとんど消えかけていた。

『……参ったなぁ、切嗣（オヤジ）に怒られちまうよ』

≪――――士郎、女の子を泣かせちゃいけないよ――――≫

『またな。エヴァ』

そう言って、彼はこの世界から消失した。

第７４話　去りゆく者（後書き）

～言い訳～

・今章の士郎の扱い、実は苦し紛れの策だったんです。

・士郎が麻帆良祭の時に不在、というのは以前から決めていました。でもそうすると麻帆良祭編で主人公が長期不在になってしまう。さあどうしよう？と考えて閃いたアイデアが、「そうだ！未来の士郎を連れてこよう！！」というものでした。

・それを煮詰めた結果、本編のようなシナリオになったのです。「超の計画が成功した未来から来たんだから、ネギ達が勝ったら歴史が元通りになる＝変化する。じゃあ未来士郎の存在がそのままなのは変だな・・・と考えた結果・・・こんなことに・・・。

こんな扱いになるんだったら長期不在の方が良かっただろうか？

：自分を見つめる毅い瞳に、超は見惚れた。

・毅い＝つよい。意志が強いさま。つまり「強い」。

：――彼らの別れに何があったのか、多くを語るつもりはない。

：ただ、語るべきことがあるというのなら記そう。――――――僅かばかりの終幕を。

・ぶっちゃけ手抜きです。別れのシーン自体は去年に書いたヤツを持ってきて、そこに至るまでの描写が面倒だったので。反省してます？いいえ。

～愚痴～

・なーんで俺が書くエヴァ様はしおらしくてお淑やかな面が強いのだ。

・新学年忙しいわ！！今年の更新速度遅くなるよ多分

・改訂版に手がつけられない。俺の器では無理だったのか・・・ッ！

現在　京都過去編を作成中（最近手をつけてない）。

それでは次回。

第７５話　麻帆良祭　後日談（前書き）

～改訂版進行状況～

設定話　完成済×３
番外話　完成済×１
過去編　　未完成×４　↑これが完成するまで投稿する気ナシ。
過去編　完成済×１

本編　　第１話・第２話　完成済

新訳・英国過去編と京都過去編ができてねえんです・・・。

・感想に書き込まれたとある質問があるのですが、うっかりその質問に関しての返信を忘れてしまったのでこの場で返答させていただきます。

Q、士郎の仮契約相手はエヴァだけですよね？
A、今のところは。

それでは第７５話、短いですがどうぞ。

第７５話　麻帆良祭　後日談

麻帆良祭振り替え休日２日目。図書館島深部。

（父さんの友人のクウネルさんのお茶会に招待されました）

ネギ・明日菜・木乃香・刹那の４人で訪れた。

「ようこそ。お待ちしていましたよ」

「今日はお招き頂きましておおきに～」

木乃香に合わせてお辞儀をする。

「あのクウネ……いやアルビレオさん」

「ネギ君！！」

「は、はい！？」

「私のコトはクウネル・サンダースと呼んでほしいと言ったはずです」

「ハ、ハア……」

「フフフフフフ」

アルの背後に、恰幅のいい白いスーツの老人が見えたのは気の所為

ではないだろう。

「それではこちらへ」

アルに促されてテラスへ進む。

「あ、エヴァちゃん」

「遅かったな」

そこでは既にエヴァンジェリンがソファに座って中国茶を飲んでいた。

傍にチャチャゼロも座っている。

（……師匠（マスター）？）

吸血姫はどこかぎこちなかった。

いつもの覇気、不敵さがないエヴァを、アルが感情の籠もっていない目で見ていた。

◇――――◇――――◇

「おいしい！　これが龍井紅（ろんじんこう）……九曲紅梅ですか。ホントに梅のような爽やかな……

う～～ん、素晴らしいです！！」

「喜んでいただけて何よりです。他にも色々ありますよ。フフフ」

「ホント美味しいわねー」

「スイーツもおいふぃな」

お茶会は和やかな雰囲気で催された。お茶とお菓子に舌鼓みを打って顔が綻ぶ。

「それでぼーや。今回の事件はどうだった？」

「……」

空気が、一気に引き締まる。

「何か得ることはあったか」

テーブルにカップを置いた。

「……自分が。どんな場所に…どんなモノの上に立っているかを知りました」

「いえ。超さんに言われる前から僕は知っていたハズでした」

――――一歩を踏み出した者が、無傷でいられると思うなよ？――――

「マスターの言うとおりです」

――思いを通すは、いつも力ある者のみ。　正義だろうが、悪だろうがネ――

自分の「正しい」と思うコト、自分が信じるモノ。それは人によって違う。千差万別。
己の思いを通す為には、時に他人の思いを蹴落とさねばならない。
己の正義を貫くためにはどうしても。

「キレイなままではいられない。いやそもそも、最初から僕達はキレイなどであるハズがない……」

「……フ。超鈴音は上出来だったな。お前のような真っ直ぐで才能ある、前途有望だが世界を知らぬ若造（ガキ）には、それを思い知らせるのが最も難しい」

明日菜と刹那はじっとそれを聞いていたが、シリアスな空気についていけない木乃香は
密かに冷や汗を流していた。

「そのとおりだぞぼーや。透徹した目で見れば『生きること』と『悪を成すこと』は
同義。この世界の構造上何人もこの理からは逃れられぬ。
『悪』こそこの世の真理だ。ようやくその認識に至ったか」

其処には間違いなく、悪の大魔法使いが座していた。

だが『悪こそ世の真理』。ネギはその言葉には納得できなかった。

「流石はエヴァンジェリン」

ここで会話の流れを持って行ったのは、以外にもアルだった。

「生真面目な少年をよくぞここまで導きました、やはり師は悪人（バッドガイ）に限る……見事です。

英雄の息子もゆくゆくは大魔法使い…いや『闇の福音』の後継者という訳ですか？

フフフフ……」

「フン。大きなお世話だ」

「……ツレませんねえ」

からかい甲斐の無い、と少し残念そうに呟いた。

「それでネギ君。その認識の上に立ちこれからどうするのです？」

「えっ……ハ、ハイ、だからこそやっぱり立派な魔法使い（マギステル・マギ）を目指そうかと」

「超さんの計画を阻止した僕が立ち止まるわけにはいきません……前に進まなければ。

だから…父さんのこととは別にちゃんと立派な魔法使いになって、僕に出来る限り

色々な人の力になれたらと思います」

「へ……変でしょうか？」

「いえ素晴らしい、大変よい答えですフフフフフ」

この、人を小馬鹿にしたような笑いはどーにかならないもんだろうか。

（フンつまらん。そんな所だろーとは思っていたが）

予想通りの答えではあったものの、エヴァはどこか期待外れと言わんばかりの表情だった。

「しかし成程…そういうことでしたらネギ君。どうです私の弟子になってみませんか？」

ブゥ――――――――――ッ！！！

エヴァが盛大に茶を噴き出した。

「え…で、弟子ですか？」

「はい♪」

「ちょっと待てぃアルビレオ・イマ！」

エヴァが立ち上がって叫ぶが、それは容易く無視された。

「エヴァンジェリン……あれはイケマセン、あんなのに師事しては人生を棒に振ってしまいますよ？」

「えっ……」

「何だとアル貴様ァ――――――――！？」

「それに私ならサウザンドマスターの戦い方をより詳しく教えられます」
「え？」
「（ガーン！）あっコラぼーやまで「え？」とか…！」
（エヴァンジェリンは氷系ですし、風系の教師としてはイマイチ…ヒソヒソ）
「ハ、ハア…」
「聞こえているぞコラッ！　アルビレオ・イマッ！！　おいアル！！」
「重力魔法などいかがです？　応用範囲が広いですよー」
「むむ…じゅーりょくですかー」
「……！！　クウネル！！」
「何でしょうかキティ？」
クウネルと呼ばれた途端にエヴァの方へ首を向ける。
（（（あの名前、そこまで気に入ってたんだ……））））
「おやおや、そこまでネギ君のことを好きだったとは？（確かに身長的に身体の相性は良さそうですが……）」
「聞こえていると言ってるだろう　何の話をしているエロナスビ！！　ええいッ貴様　何を企んでいる！？　ぼーやを弟子にとるなど何が目的だ！！」
アルの胸倉に掴みかかって怒鳴り散らした。
「何が目的って……」

「貴女がムキになって慌てふためく姿を見たいからに決まっているじゃないですか♪」
「死ねえぃ！！！」

「いいように遊ばれてるわねーエヴァちゃん」
「ホントに天敵なんですね…」
「好きな娘いじめてる小学生みたくも見えるな。それにエヴァちゃん元気出たんとちゃう？」
「あ……もしかしてクウネルさんはその為に……？」

エヴァの爪がアルを襲う、が幻影であるアルには届かない。

「いやいや貴女の嫉妬する姿というのもなかなか見物です」
「私がいつ嫉妬したーッ！？」

「イヤ、アレハ見タ通リ遊ンデルダケダ」
「あああああ……！！」

・・・・・・・

「それであの…クウネルさん。今日お訪ねした理由なんですが…」
「ええ」
「……父さんは……」

「――彼は今も生きています。それは私が保証しましょう」

風が凪いで、滝の水音だけが聞こえる。誰も言葉を発さずにネギを見ていた。

「……やっぱり……ホントに……」

6年前の雪の夜。あれは間違いなく自分の父親だったのだ。

サウザンドマスターは…ナギ・スプリングフィールドは生きている――――

「ネギ！　やったじゃん！」

「ハ、ハイ！！　そ、それでクウネルさん　父さんは今どこに……」

「……申し訳ありません、私にはそこまでしかわからないのです」

「え……？」

「じゃ、じゃあ何で生きてるってわかるんですか？」

「それは……これです」

「……パクティオーカード？」

「はい。これは私とサウザンドマスターとのカードです。そして『このカードは生きている』。これが彼の生存の証拠です……ちなみに『カードが死ぬ』とこうなります」

アルの右手にはナギとの仮契約カード、左手にはその他のカードがある。

『死んだ』カードからは称号・徳性・方位・色調・星辰性・アーティファクトなどの
記載が失われ、白地の目立つただのカード…「契約記念品」となってしまう。

「そうですか……でも…とにかく、父さんは生きてるんですね。……何か手掛かりのようなものは？」

「今の私には何も…。しかしどうしても彼の事が知りたいのなら
貴方の故郷・英国が
ウェールズに戻るとよいでしょう。
あそこには『魔法世界』……”ムンドゥス・マギクス”への扉があります」

「魔法世界（ムンドゥス・マギクス）……」

「魔法世界て『魔法の国』ゆーこと？」
「おそらく……しかし私も詳しいことは……」
「うわっぷ！――何よこの風！？」

魔法世界に考えを巡らす木乃香達に突風が吹きつける。その風の中心に。

拳を握るネギが立っていた。

修学旅行以来手に入らなかった父親の手がかり。明確な指針。目指すべき場所。
それを手に入れたネギは無言で闘志を燃やす。

ちょっとした竜巻に瀕した周囲はそれどころではなかったが。

「ひゃーーーん何コレー！？」
「ネ、ネギ先生漏れてます！　魔力漏れてますよーー！？」
「ちょ　ちょっとネギ！　やる気はわかったからこの風やめーーー！」

アルとエヴァは何も言わずに少年を見ていた。

「じゃあ行ってきます！！」

（（（（――どこへ！？））））

ネギは出口に踵を返した。

――くいっ

――びた――ん！！

「へぶぅ！？」

エヴァンジェリンの”糸”に足を絡め取られ、床と強烈なキスをする。

「！？　っ！？」

何が起きたかわからないというより、なぜ引き止められたのかがわかっていないようだ。

「アホか貴様！！　行くって何処へ行くかわかっているのか！！」
「え……そ、それは」

「大体あんなところホイホイ行ってすんなり通してくれる訳がなかろう！！」

「え。そうなんですか？」

「兄貴、ハワイやグアムじゃねーんだから」

「そうよ！　全くお父さんのことになるとすぐ周りが見えなくなるんだから！」

「で・でも居ても立ってもいられなくて……ちょっとくらいなら」

「いいわけないでしょ！　クラスの皆を放っとくつもりなの！？先生でしょ期末テストもあんのよバカっ！！」

「はうっ！　そ、そうでした……」

「フフ……卒業か、少なくとも夏休みまではお預けですね」

「しゅん……」

「あ、あのクウネルさん。じゃあせめて今日は父さんの昔の話を……」

「いや……今日は無理ですね」

「え！？」

「こんにちわー！！　おじゃましまーす！！」

声の主はハルナ。ネギパーティ＋小太郎が階段を下りてやってきた。

「何であんた達がここにいるのよ！？」

「だってお呼ばれしたもーん♪」

「竜は大丈夫だったか？」

「んー？」

「退いてくれたわ」

「あれがくーねる！　ウワサ通りの超イケメン！」

「あー、千雨ちゃんも来たん？」

「すっかり仲間だな」

「バッ違っ…茶々丸(こいつ)がムリヤリ」

「彼女達も招待していたもので。静かな話は難しいでしょう、話はまたの機会ということで」

「あう～」

ネギは情けない声を出して涙した。

だが既に充分な収穫だ。ナギの残した地図の先にはその友人アルビレオが。

さらに彼から新たな手掛かりの在り処を知ることが出来た。これは大きな前進だ。

（――父さん……）

生徒達の声を後ろに聞きながら、父親に思いを馳せた。

時の流れは川に例えられる。
時間は進むだけのものであり、万物はその中を流れる舟だ。
生命は川を下り続け、寿命を経て舟は水底に沈む。
時は不可逆であり、また抗うことの出来ない絶対の概念（そんざい）。

「時」の前に――――――人間（ヒト）は、余りにも無力だ。

――――それでも。人は抗う事を諦めない。

人は無理でも。人の、想いは――――――

「……なんでさ」

こんにちはみなさん、衛宮士郎です。ちょっと”とある場所”に遠出して、１０日ぶりに
麻帆良に帰って来ました。
学園祭を見られなかったのは残念だったな。来年はエヴァ達と一緒に回りたいもんだ。

で？　この状況は何ですか？
俺はただフツーに帰って来て「ただいま」って言っただけなのに。
何故かエヴァの熱い抱擁を受けている。身長が足りていないので俺にしがみつくような
格好になっているが。

「ど、どうしたエヴァ？」
「……」

無言。
困った。実に困った。無断で出てったことを怒られているのならこんなことにはなって
ない筈だ。原因がわからんことには対処のしようがない。
助けを求めて周りに視線を配るが、茶々丸の慈愛に満ちた微笑みとチャチャゼロのいつも
通りの不気味な笑いしか返って来ない。
チクショウ、誰だよこの事態の原因は！！

「……はあ」

駄目だ、焦っても仕方ない。

「どうしたんだよエヴァ？」

出来るだけ優しい声で話しかけて頭を撫でる。

「……」

少しだけ身動ぎしたが、それだけだった。

……。

「ちょっと今回の遠出で色々あってな。帰って来たら言おうと思ってたんだ」

「……？」

「まあ、ぶっちゃけると死にかけてな。その時後悔したんだよ。ああ、俺、ちゃんとお前の従者をやれてなかったなってさ」

「……死……ッ！？」

「俺は自分勝手でワガママで、我慢のできない性格だ。今回だってケンカ別れして、お前に黙って出て行ったし……。でも」

エヴァを体から引き剥がして、しゃがんで目線を同じにする。

（――――待て。待て士郎……！　その言葉は…その、先は――――――）

エヴァの頬を両手で包んで、眼を真っ直ぐ見詰める。

「約束する。もうお前を置いて出てったりしない。お前の魔法使い（ミニステ）の従者（ル・マギ）として

――――俺はもう、絶対に、お前から離れない」

強い決意を籠めて見つめる。そしてそのあと、屈託なく笑いかけた。

士郎がエヴァから解放されたのは、もうしばらく後のことだった。

第７５話　麻帆良祭　後日談（後書き）

～補足・解説～

：人は無理でも。人の、想いは――――――――
：――――俺はもう、絶対に、お前から離れない」
・時間を越えて伝わる思い。やっぱり士郎は士郎なんです。
ただ、魔法世界編ではタカミチと真名に力づくで、さらに近右衛門の学園長権限でムリヤリ連れていかれますが（泣）

：「まあ、ぶっちゃけると死にかけてな」
・次章はこのエピソードを書きます。「裏五章　『１０日間の不在』編」。
シリアスな内容です。終業式→夏休み編に入りたいのに。
そして・・・ヤバイです。次章の構想自体はずっと前からできてるのに、まったく筆が進まない＝文章にならないんです。
これはプロットを作った方がいいかもしれない。

・未来士郎はネギの精神面での成長に満足していましたが、現在の士郎は学園祭でのネギを見ていないのでまだまだ子供扱いします。

・次章で士郎が遂にチート能力を手に入れる！・・・失敗だったか？
・そのチート能力の一端『幕を下ろす枢』・・・「デウス・エクス・マキナ」。
能力名、厨二すぎたかなぁ。
でもラテン語にしても「デウス・エクス・マキーナ」なんだよなー。
それに他の能力も「かっこよくしようとして実はかっこよくない」名前ばかりだし。
・そもそも士郎にチートが必要だったんだろうか？ううむ、今から

無かったことにもできないし。悩む。

それでは次回！・・・今月中に更新できるだろうか・・・。

ー０９話　設定７　裏設定＋ａ（前書き）

チート化士郎の能力～、パワーアップ後の士郎のチート能力の設定話を投稿してぇ～

　でも・・・チートチート言い続けてきたけどそうでもない気がする。

チートは「反則」というニュアンスの言葉であって「最強」ってワケではないんですよね。

そもそも反則と言える程の能力でもない気がしてきた。普通のパワーアップかもしれない。

　その関係でいろいろ調べてたんですが、ネギの「雷速瞬動」って先行放電が１５０ｋｍ／ｓ、主雷撃は少なくとも２２６０ｋｍ／ｓ以上だそうです。速過ぎじゃボケ。

なんでコレについていける人達がいるんだ・・・。人間じゃねえ。

士郎はこの速さにはついていけるようになります。代償は大きいですが・・・。

ー09話　設定7　裏設定＋a

進級して大学の課題に忙殺されており、なかなか執筆の時間がとれません。
なので今までの設定話に書き損ねていたネタを投稿します。
設定話は頭の中にある文章をただ書けばいいのですぐ完成するんですよねー。
対して今書いている裏五章はオリジナルストーリーなので原作キャラらしさに気をつけて
書かなきゃいけないので四苦八苦です。〇〇〇氏が勝手に動き回り過ぎて手綱がとれぬｗ
中身は統一性のないごちゃごちゃな内容ですが、それでよければ読んでください。

《原作と設定が違う宝具・魔術礼装》

・『マグダラの聖骸布』：女性にもある程度の拘束効果がある。
・『遥か遠き理想郷（アヴァロン）』：セイバーとの魔力パスがないのに使用可能。
・『無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）』：轟く五星が貯蔵されている。：約束された勝利の剣（エクスカリバー）と乖離剣（エア）を投影できる。

《無限の剣製と神造兵器》

・前述の通り、ウチの士郎は神造兵器（エクスカリバーとエア）を

投影できるという設定があります。

その話をするにあたって”ニコニコ大百科”より「無限の剣製」の記述を引用表記します。
コラそこ、事実だがコピペとか言うな。あくまで引用だ！

～なお、剣であればほとんどのものがストックされるが、その例外となるものも存在している。具体的にはエクスカリバーやエアなどの神造兵装はストックできず、したがって投影もできない。（ただし、ルートによっては士郎がエクスカリバーを投影したり、関係者が「（エクスカリバーを）投影してみせよう」と言っていたりするなど若干矛盾している点も見受けられる）～

このように、本来ならば「無限の剣製」を持つ士郎でさえ神造兵器の投影は出来ない。

＊エアに関してのみ言えば、エアは”剣”という概念が生まれる前に誕生した存在であるため、”剣”というカテゴリに当て嵌まらないというのも理由のひとつ。

「無限の剣製」内に貯蔵できない以上、剣の設計図が無いため投影ができない。しかし「剣製の凱歌」の士郎は”アーチャーの記憶”を持っている。これは「無限の剣製」に保存（士郎の魂に焼き付けられている）されており、ビデオやＤＶＤのようにいつでも再生・閲覧できる。

士郎はこれに記憶されたエクスカリバー&エアの情報を閲覧することで「投影に必要な設計図が得られない」という障害をクリアしている。

残る問題は「神造兵器＝膨大な神秘と情報量を持つが故に解析が困難」という点と「神造兵器を投影＝複製しようとする行為に対する世界の修正」の2つ。

「解析が困難」という点については以前の設定話で記述した通り。

「世界の修正」は舞台がネギま！世界であるために発生しない。

よって士郎はエクスカリバーとエアの投影が理論上可能となっている。

《士郎アーティファクトその2》（その2を作るとしたらの話）

『偽造万能鍵（レジーナ・ヴォーラ）』（レジーナ・ヴォーラ＝”盗賊の女王”）

：外観：大きさの違う銀色の3つの鍵。それらはリングとチェーンに繋がれていて、チェーンの先には血のように紅いルビーの装飾（遠坂家秘伝の宝石みたいなヤツ）が付いている。

：能力：3つの鍵がそれぞれ「侵入」「脱出」「逃走」を司る。

（このアーティファクトの能力は心理的・物理的にも作用する）

「侵入」鍵ー　どんな場所にも侵入できる。

「脱出」鍵ー　どんな場所からも脱出できる。

「逃走」鍵ー　どんな追跡にも探知されない。

例）

（心理的効果）

・門番の目の前を素通りできる。・建物に侵入しても内部の人間に不審がられない。

（物理的効果）

・侵入時・逃亡時に限り、誰も鍵の所有者の進行を妨げられない。

・結界を通過できる。・壁抜け出来る。

：どんな場所への侵入も許されるマジック・ピッキングツール。神

の入場許可証。
ここだけの話、この能力は作者の脳内オリジナル小説・第二部主人公（女の子）の能力の劣化版だったりします。

《第2回・オリジナル宝具》

「必中（フェイルノート）する無蹉跌の弓」（ひっちゅうするむさてつのゆみ）
＊蹉跌＝失敗する、みたいな意味の言葉。

・アーサー王伝説に登場する円卓の騎士トリスタン、彼が作った竪琴のような形状の弓。
「無駄なしの弓」と呼ばれる。

・能力：狙った場所に必ず当たる矢を放つ。しかしそれは弓の能力ではなくトリスタンの技能（スキル）だという説もある。

・「フェイルノート」は出典不詳の名称で、有力な名称は「アッキヌフォート」。
作者の好みで「フェイルノート」を選びました。

：「大御葬歌（ミストルティン）」（おほみなりのうた）

・北欧神話に登場する剣。
・能力：投擲、または矢として使用した時に真価を発揮する神殺しの剣。神霊クラスの存在を完全に滅ぼす力を持つ。

・北欧神話の光の神・バルドルは世界中のあらゆるものから傷つけられない力を持っていた。しかしその唯一の例外がヤドリギの木であり、それが突き刺さって彼は死亡。ラグナロクのきっかけとなった。ラグナロクで荒廃した世界に復活し、世界を照らす光明神になると言われている。

・ミスティルティン、ミストルティンは剣の名前であると同時に「宿り木」を意味する言葉でもある。

・「剣の名前」であり「神を殺したヤドリギ」である「ミストルティン」。この2つの伝承がミックスされて生まれた神滅宝具。

・大御葬歌（おほみなりのうた）＝日本の天皇の葬送のときに演奏するもの。
出典：武神と崇められるヤマトタケルノミコトが死した際、彼の妻と子供達が歌った三首の歌。神の死を悼みあの世へ送り出した歌。

・北欧神話と日本神話をごちゃ混ぜにしたネーミングの宝具。北欧神話系統の宝具は4文字の名前が多いのでこれ幸いと混ぜてみた。
大神宣言（グングニル）や轟く五星（ブリューナク）みたいなカンジで。
俺的にミョルニルは「雷神鉄槌」です。

《おふざけ宝具》

「痴態晒す中二病（フォーティーンイヤーズ）」（ちたいさらすちゅうにびょう）
「羞辱記す厨二病（フォーティーンイヤーズ）」（しゅうじょくしるすちゅうにびょう）

・名前こそ違うもののほぼ同じ宝具。日本の中学2年生（14歳）辺りの全ての男子はこの宝具を会得できる。現代に誕生した新たな神秘によって期間限定の伝承保菌者（ゴッズホルダー）になる（ウソ）。技や能力というよりは流派に近い。

《裏五章》

・学園祭時から１０日間不在だった士郎サイドの話。

第五章の裏側＝「裏五章　『１０日間の不在』編」。第７６話からスタート。

現在、執筆絶賛停滞中。

・皆さん。覚えておいででしょうか？この小説には「ＢＬＥＡＣＨ（鬼道）」というタグがついていることを。

そして士郎にはアーティファクト『六道籠手（マヌサス・セクス）』があるということを・・・。

士郎があんまりにも使わないのでかなり影が薄くなっていますが、この２つ、次回からの「裏五章」のために作った設定なんです。

なのでいきなり鬼道が出てきて「なんでブリーチ混ざってんの！？」と驚かないでくださいね。

それでは次回。

－０９話　設定７　裏設定＋ａ（後書き）

～余談～

：ここだけの話、この能力は作者の脳内オリジナル小説・第二部主人公（女の子）の能力の劣化版だったりします。

・いつか書いてみたい。「剣製の凱歌」が完結しないと無理だろうけど。

ちなみに第一部の主人公は男。彼は徐々に強くなって覚醒する、成長タイプの主人公。第二部主人公の娘は最初からチート。ただし心に闇を抱えていて、精神の成長を描いて物語が展開されるタイプです。

そして脳内小説の構想はもうひとつあります。ただ、こっちは設定だけでストーリーが全然出来てないんですけどね。

前述した通り、忙しくて続きが書けませんごめんなさいしくしく・・・。

それでは次回。

第７６話　魔法学術都市アリアドネー（前書き）

今回の話は短いため、活動報告に「７７話と一緒に投稿します」と書いたんですが、なかなか７７話の作成が進まないため７６話を投稿することにします。

原作キャラの口調がムズイ、という感覚を久々に味わいました。なんか新鮮。

そしてこのＧＷ、課題の為に実家に帰らねばならないので小説作成にはあまり活用できないのが残念です。

それでは第７６話、どうぞ。

第７６話　魔法学術都市アリアドネー

以前から兆候はあった。偶に見る妙な夢。そして俺を決心させた奴の言葉。

『魔法世界はいずれ滅ぶ。そしてそれは避け得ない、回避不可で絶対の運命だ』

アルビレオさんは言った。

『アーウェルンクスが言ったことは事実です。魔法世界は云わば氷の城。世界を構成する
魔力が枯渇し、いずれ必ず氷は融けるでしょう』

『――――、ですか？　さて…私には何のことだかわかりませんね』

『「完全（かれら）なる世界」の今の動向ですか。今の私ではなんとも…なにしろここ１０年ずっと引き籠っていましたからね』

『少なくとも私などより、向こうにいるあなたの師匠の方が詳しいと思いますよ』

「――――じいちゃん。俺、明日から１０日間くらい麻帆良を離れるから」

ウェールズの校長に話を通して向こうへ渡る手続きをしてもらった。
いざ再び、魔法世界（ムンドゥス・マギクス）へ。

◇――――◇――――◇

麻帆良を離れて2日目、早朝。メセンブリーナ連合国。
首都メガロメセンブリアのゲートポートを出ると見知った顔が近づいてきた。

「驚いた、まさかお前が迎えにきてくれるなんてな。元気してたかフィン？」
「好きで迎えに来たわけじゃない。偶々休みだったからお前に宛がわれてしまったんだ。
まったくどうしてくれる、折角の休暇がパアだ」

碧緑の目とエルフ耳を持つ、銀の長髪を後ろで結え上げた女性が不機嫌そうに士郎を見る。

「う。そりゃスマン。今度お詫びに付き合うからさ」

途端にその女性は喜色を露わにした。
フィンレイ・チェンバレン。2年前はアリアドネー魔法騎士団候補生、現在は卒業して
騎士団に所属する士郎の知人。

「そうかそうか♪今回は別に急ぎの用事じゃないんだよな？じゃあ明日にでも古書店巡りに付き合ってもらおうか、勿論代金はお前持ちでな♪」

「へいへい」

そんなやりとりを終えて、士郎は彼女と共に魔法学術都市アリアドネーへ足を向けた。

そこを拠点にして調査を開始する。探すのは自身の師、ジャック・ラカン。

・　・　・　・　・

「よお士郎！　デカくなったじゃねえか！」

「――――なんでさ」

今。俺の目の前に師匠――――〝千の刃の男〟ジャック・ラカン――――が立ってます。

展開早ッ！！

士郎は連合に知人がいない。だがウェールズのメルディアナ魔法学校校長以外にゲート渡航の手続きが出来る人物とのパイプがないため、ウェールズ・連合間のゲートを使用せざるをえない。
それにメガロメセンブリアは（元老院など上層部こそ信用できないものの）治安が良いため
厄介事に巻き込まれにくい。治安の良さで言えばアリアドネーも同様であるが。
　そのアリアドネーに飛行艇で飛び到着する。
アリアドネー魔法騎士団総長、セラスさんの執務室のドアを叩いたら。

「何で居るんですか……師匠……」
「フフフ……強いて言うなら俺様の第六感（シックス・センス）が働いたといった所か」
「つまり勘ですね…ハァ」

ソファの上にどっかりと座る師匠。目的の第一段階があっさり片付いてしまった。
この人は理屈で説明できない存在だからな……

「久しぶりね士郎君」

窓を背にして机に座る、頭から角を生やした亜人の女性。ここアリアドネーを統治する
「アリアドネー魔法騎士団」のトップ、総長（グランドマスター）セラス。
２０年前の大分裂戦争で騎士団の精鋭部隊「戦乙女旅団」のリーダーを務め「紅き翼」に
協力した過去を持つ。

「お久しぶりですセラスさん」
「あなたも元気そうで何よりよ。それに明るくなったわ、だいぶ印象が変わったわね」
「だよなー！　あのいつも根暗だったガキとは思えねえ！だっはっはっは♪」

「変な事言わないでください」と言おうとしたが、その場にいた全ての者が同意している
雰囲気だったのでその言葉は呑み込んだ。

「……俺そんなに暗かったか？」
「ああ、ゲートで会った時に驚いたくらいだ。同一人物かと疑ったぞ」

即答されて落ち込んだ。俺…そんなに暗かったかなぁ……。

「……で、何しに俺に会いに来たんだお前。借金の返済か？」
「んなモンありませんよ！？」

この人に借金なんてしてみろ、元金が高い上に利子で破滅する。

「お前の旧世界行き、誰が手配したか忘れたか？」
「……あ」

『チケット料金の利子は付けねえ。士郎――いつか必ず返しに来い』

「……わかりました、今返します。いくら「１０万ドラクマ」高けぇ！！」」

「馬鹿言えオメー５万で世界一周できんだぞ？　新旧世界間旅行がそれより高いのは当然だろ」

「旅行じゃねー！！」」

その理屈が通ったとしてもチケット１枚に１０万ドラクマは高過ぎる。

士郎の脳裏に浮かぶのは修行時代の出来事。

弟子入りし、授業料を修行がてら賞金稼ぎになって稼いだ（実はラカンはそれとは別に詠春に授業料を請求している）。

この人は何か入り用があると必ず俺に稼がせた。酒代、店代、女代。

ラカン正面のソファに音をたてて座る。

「……師匠……アンタとは一度キッチリ話をつけなきゃならないと思ってたんだ」

「ほう……勝てるか、この俺に？」

値切り合戦の末、俺は師匠に２０万ドラクマ支払うことになった。

あ、あれぇ！？

・　・　・

・　・

「で、ホントに何しに来たんだお前？」
「話を逸らしたのはアンタでしょうに……」

２０分後、ようやく静かになった執務室で本題に入る。

「チケット料金を返すために来たと本気で思ってるワケじゃないでしょう？」

ラカンがニイッと笑った。

「お前はメンドクセーからな。また大層な厄介事　背負（しょ）ってきたか？」

士郎はラカンの所為で苦労したと思っているがそれはラカンも同じだ。弟子が首を
突っ込んだ厄介事の尻拭いや後始末に何度奔走したことか。
そんな師匠の思いも知らず、弟子は今回の目的を告げる。

「師匠。あなたが持っている『完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）』の情報が欲しい。
新旧両世界、過去・現在問わない。何でもいい。全ての情報が知りたい」

セラスの顔に動揺が浮かび、フィンは何のつもりかと士郎を見ている。
ラカンの双眸が一瞬、とても深い色を映したように見えた。

―◇

◇―――――――――◇―――――――――

「９０００万」

提示された金額にフィンが瞠目し、セラスは予想通りといった表情をする。

（…やっぱりか）

この人は「自分の為にしか戦わない主義」で、決してタダでは動かない。

金に細かく、ことあるごとに報酬として法外な金額を要求してくる。

金額の高さは予想外だったがこの事態は予測済みだ。師匠にとって２０年前の戦いはやはり特別な思いがあるのか、俺に――いや、誰にも話したくない何かがあるのか。

だがそのようなことは問題ですらない。

最強の傭兵剣士ジャック・ラカンよ、今日が貴様の膝に土がつく日だ――――！！

「わかりました。９０００万ドラクマですね」

「「「……は？」」」

ラカンだけでなく、セラスやフィンも間の抜けた声を出す。だが士郎の目は本気だった。

「９０００万ドラクマ払いましょう。取り敢えず今は小切手でいいですか？」
「……マジで？」
ラカンはポカンと開けた口が塞がらなかった。士郎がそんな額が払えると思っていなかったのだ。
（師匠。金に執着する者はより多い金に、力を信じる者はより大きな力の前には無力なんですよ！）
修行時代、ラカンの為に金を稼がされた士郎は極秘裏に口座を作って預金していた。
それは連合・帝国・アリアドネーの３つの銀行に分割され、今ではドラクマで総額８ケタほどの金額になっている。だが賞金稼ぎをした貯金だけでこれほどの大金になる筈がない。士郎は一体何をしたのだろうか。
額面未記載の小切手に９０００万ドラクマと書き込んでテーブルの上に置く。周りはその様子を呆然と見ていた。
「じゃあ話して貰いますよ」
「……あ――それはだな――――……」
ラカンはダラダラと汗をかきながら目を泳がせた。
（ええーこれマズイんじゃねえの？まさかマジでこんなあっさり９０００万出せるとか思わねえだろフツー。ヤベェなおいマジでどうするよ――――はっ！）

「士郎！俺は９０００万ドラクマ払えとは言ってねえ！ただ『９０００万』て言っただけだぜ！！」
「くっそう来たかッ！」

（このまま押し切れれば良かったんだが……やっぱそう上手くはいかないか）

このままゴネられたら話が進まない。この人は下手したらヘンな言い訳でこの場から逃げてしまいそうだ。
……やはり当初の予定通り……。これだけは避けたかったが。
――――仕方ない。

「師匠。俺と賭けをしませんか？」
「ほう？」

この人は勝負ごとには必ず食いつく。

「俺が勝ったら全て話してもらいます。俺が負けたらその９０００万――いや。ちょっと色をつけて１億２０００万払いましょう、勿論ドラクマで」

ちょっとどころではない、３０％以上の割増だ。一騎士であるフィンはもう話についていけない。国のトップであるセラスなどとは違う、ただの一個人が払える金額をとっくに超えている。

「まあ悪い話じゃねえな。一体何に賭けるんだ？」
「俺と師匠が戦うんですよ」

今度こそ――――ラカンは目を白黒させた程度だったが――――執務室の全員が絶句した。

「俺は俺の勝ちに賭けます」

――――――アンタなら受ける筈だ師匠。勝負好きの師匠なら必ずこの勝負を受ける。そして俺が、勝ちさえすれば――――

「――――クッ……くくく」

フィンとセラスが同時にラカンを見る。彼は自身の内から込み上げる感情を抑えられなかった。

「くく……く……はは――――は――――っハハハハハハハハハハハハハ！！！！！」

「……ッ！」

部屋の空気がビリビリと震える。鼓膜が痛い。眼前の男の存在感に気圧される。冷や汗が、止まらない。

「ハハハハ……くくっ……。あのガキが……」

いつも必死な顔をしてラカンの修行についてきた子供。戦いは楽しむものには成り得ない。武術・戦術・戦闘力――「強さ」は手段でしかない。強くなる喜びなどない。強くなると決めたから身を削る。それも目的の為に過ぎない。

――ああ。そんなガキだった。
だから言った。「戦いを楽しめねえ奴は強くなんかなれねえ」と。
その言葉に本気で「解らない」と言いたげな表情をした、あのガキが。

理由があるとはいえあいつが。俺に。「戦おう」と言ってきた。
こいつが俺の強さを知らないわけがねえ。「紅き翼（あいつら）」を除けば、俺の強さを一番知ってるのは士郎だ。
それでも――勝負をかけてきた。

『よお士郎！　デカくなったじゃねえか！』

――くくっ……本当に……大きくなりやがった。

ラカンは笑うことを禁じ得なかった。

「士郎。何でそんなコトを聞く？」

――何故「完全なる世界」の情報が欲しいのか。
ラカンの顔は未だ笑っていたが、目は笑っていなかった。
数多の死線を潜り抜けた戦士の眼を、逸らすことなく真正面から受け止める。

「俺の、大事なものを守る為に必要なんです」

奴等とぶつかる時が必ずやってくる。その時になってからでは遅い。
今知りたい。

「そうか…ならもう余計な事は言わねえ」

懐からカードを、黒い色調の仮契約カードを取り出す。

――――ズンッ！！

「――いいぜその勝負。「紅き翼（アラルブラ）」の1人、ジャック・ラカンが受けて立つ！」

AF『千の顔を持つ英雄（ホ・ヘーロース・メタオキン・プロソポーン）』を床に突き刺して宣言した。

「……はっ」

士郎の内に湧き上がる感情。2年前には感じられなかった高揚感。それに従い、剣を投影し師に倣って床に突き立てる。『勝利すべき黄金の剣』。

（アンタと戦うのが――”楽しみ”だよ師匠）

師弟は笑みを浮かべて睨み合った。

第７６話　魔法学術都市アリアドネー（後書き）

《おまけ》

セラス「床の修理代は出してもらえるのかしら？」
ラカン「じゃーな士郎、後は任せたッ！」
士郎　「ああっ師匠！？」
フィン（総長も意外とケチだな…）

～補足・解説～

：以前から兆候はあった。偶に見る妙な夢。
・「偶に見る妙な夢」の描写は第２９話と第６０話。この２話で士郎は妙な夢を見ています。

：『――――、ですか？　さて…私には何のことだかわかりませんね』
・新旧両世界合わせて５人といない超希少能力、『完全魔法無効化（マジックキャンセル）』能力者。
幼い頃から身寄りがなく、タカミチ――『紅き翼（アラルブラ）』のひとりに育てられた。
麻帆良学園学園長――近衛詠春の義父が「学費は払わなくてもいい」とまで言って学園に置いておこうとする存在。
　怪しいと言えば怪しいことこの上ない。

：麻帆良を離れて２日目、早朝。メセンブリーナ連合国。
：魔法学術都市アリアドネーへ足を向けた。
：展開早ッ！！

・メガロメセンブリアとアリアドネーは１９０００ｋｍくらい離れているので、魔法の飛行艇かなんかでゆっくり移動しました。
　そもそも日本→イギリスの移動時間、さらにゲートが開く時間（原作を見るに早朝にしか開かないのか？）も考えると、この時点で麻帆良を出立して既に２日目になっているでしょう。
　士郎とラカンが会っている時間は、士郎が麻帆良を離れて２日目の昼ころになります。

：フィンレイ・チェンバレン―性別：女性、１８歳（数えで１９歳）
・魔法世界における士郎の知人、というロールのキャラクターです。それだけのキャラクターです。実はイイトコのお嬢様で親からお見合いの話を迫られて辟易している。業を煮やした父親がフィンを無理やり騎士団から退団させて結婚させるという状況になり、そこでようやく彼女は自身が持つ士郎への感情を自覚する。はたして士郎は彼女を救えるのか!?……みたいな展開にならないかなぁ。ならないかぁ。だって作者的には士郎の未来の嫁、決定してるし。「続・剣製の凱歌」（↑書かないけど）の主人公はその２人の娘だし。固有結界はもちろん継承しています。

：ウェールズのメルディアナ魔法学校校長以外にゲート渡航の手続きが出来る人物とのパイプがない
・近右衛門ならツテがあるんじゃね？と思いましたが、そのツテがメルディアナの校長だけかもしれない＝結局、祖父・孫揃って校長にしかツテねえじゃん。という考えに達した。原作ではもっと広い人脈を持ってそうですけどね、この小説ではこの程度です学園長。

：騎士団の精鋭部隊「戦乙女旅団」
・戦乙女旅団＝トゥールマ・ヴァルキュリアーリア。別の場面では「戦乙女騎士団」と呼ばれていたりと名称が統一されていないっぽい？

２０年前は旅団で、現在は騎士団と呼ばれているのだろうか？

‥ドラクマというお金の単位（原作より）
・５万ドラクマ＝魔法世界１周旅行ができる。
・１００万ドラクマ＝１０年遊んで暮らせる額

今回はこんなトコですかね。
それでは次回！！

第７７話　千の刃と無限の剣（前書き）

この話を投稿するまで随分と遠回りをしたような気がするなぁ…（独白）

今回は本編に入る前にいくつか言っておきたいことがあります。

１）更新速度について

以前のあとがきにさらっと書いただけだったので、ここではっきり記述しようと思います。

大学で進級し、新学年の忙しさから小説の作成にかけられる時間が著しく減ってしまいました。よってこれからは月に１～４話程度の更新になると思います。

以前は月に最大１４話ほどのペースで更新していただけに、今の状況が悲しくもありますが、細々とでも投稿を続けようと思います。

これからも「剣製の凱歌」を応援して頂けると嬉しいです。

２）７７話について

一度書いてみた結果、あまりの違和感に「鬼道」を使う事をやめました。

元々ｖｓラカンの為に加えた要素だったのに、使ったのが修学旅行編だけという結果に。私の筆では世界観の違いから来る違和感を解消できませんでした。

それにあたって修学旅行編を修正する予定はありません。しかし改訂版では”ＢＬＥＡＣＨ（鬼道）”のタグを外せるように修正したいと思います。ちなみに改訂版を書くことは諦めてません。

長々と書いてしまいましたが……「第77話　千の刃と無限の剣」、
どうぞ。

第77話　千の刃と無限の剣

――ギャリンッッ！！

火花を散らして剣が鳴る。幾度となく打ち合いを繰り返し　迫る刃を避け続ける。
決まった型の無いラカンの剣術。だが限りない死線を越えてきた彼の刃はこれ以上なく
洗練されていた。速く、重く、無駄もなければ隙も無い。
故に。ただ敵に剣を振るう、それだけの筈なのに――

――ブシュッ！

士郎の頬に一条の傷が刻まれた。

ただ剣を振るう、それだけで鉄壁。攻め入る機会を窺う内に士郎の方が傷を負う。
目の前に立つ壁は。見上げれば天より高く、見果てれば地平線よりも遠い。
何てぶ厚い――壁。

「油断すんな。戦場じゃあ致命的だぜ？」
「ッ！！」

敵の強大さに怯んだ瞬間。ラカンの剣が士郎の肩を切り裂いた。

第７７話　千の刃と無限の剣　「１０日間の不在」２日目

無駄な情報の一切を排除する。眼前の敵を倒す事だけ考えろ。
心がこれ以上なく澄み渡る。頭の中を限りなくクリアに。

ラカンに師事し、士郎は何度も彼と戦ってきた。その中で培った直感と心眼を極限の集中力で扱うことで、ようやく弟子は師と斬り結ぶことが可能となる。
それでやっとラカンの足元に追い縋る。だがその「足元」も剣術での話。
――――ジャック・ラカンは「素手の方が強い」。

対象的にラカンは余裕が見てとれる。弟子が２年前からどれだけ成長したのかを見極めようとしている。英雄はまだ、本気を出していない。

ラカンの剣が士郎の肩を切り裂いた。

「……っ！」

左腕に力が入らない。士郎は瞬時に後退し　ラカンから距離をとる。

「カラダ・ハ・ツルギ・デ・デキテイル！　全工程（セット）投影完了！　全投影連続層写（ードバレルフルオープン）！！！」

二十七の剣群が、一斉にラカン目掛けて飛来する！

“――――――――――――『千の顔を持つ英雄（ホ・ヘーロース・メタオキン・プロソポーン）』”

「フ……斬艦剣（ザンカンケン）！！」

「なっ！？」

ラカンの大剣が更に大きく、巨大な姿に変化する。ビル程もある巨大な剣。

自身の十数倍も大きいそれを振りかぶり、水平に薙ぎ払った。

「くっ――――！！」

剣群は当然のように吹き飛ばされ、斬艦剣から逃れるべく士郎も上に跳ぶ。

「―――遅せえ」

「ッ！？」

士郎の顔に影が射し、見上げればそこには――――拳を握るラカンの姿。

気づいた時には遅かった。

―――――◇―――――◇―――――◇―――――

土煙が周囲に満ちる。その中心には小規模のクレーターが空いていた。

「コノエ……！！」

フィンが顔を真っ青にして呟いた。

アリアドネーから東南東に約８０００ｋｍ。生けるもののない名もなき荒野。

其処に在る戦いを見届けるべく、２人の女性が遥かな空から男達を見つめていた。

「フィンレイ、今　彼は近衛ではなく「衛宮」と名乗っているそう

よ」
「総長（グランドマスター）！　今はそんなことはどうでも――」
「落ち着きなさいフィンレイ・チェンバレン。これは勝負よ。あの子は望んでラカンに挑んでいるの。過ぎた心配は彼への侮辱だわ」
「……ッ！！！」

下唇を噛んで口を噤む。

「……申し訳ありません」

フィンが冷静さを取り戻したのを見て　セラスは再び眼下の2人に視線を向ける。

「フィンレイ。さっきラカンが何と言っていたか判るかしら」
「……いえ。私には」
「そうね。貴女はあの子しか見ていなかったものね？」
「グ、総長ッ！？」

「――――遅い、と言ったのよ」

フィンの目が騎士のそれに変化する。

「遅い……とは？」

未だ晴れない土煙。士郎の姿は現れない。

「動きのことじゃないわ。気づくのが遅いと言ったのよ」

肩を斬られた士郎は距離と時間を稼ぐために剣群を射出した。

「自在に剣を生み出す」ラカンと士郎、だがその消耗度合は違う。
契約の力（アーティファクト）で武器を召喚するラカンは消耗ゼロ、対して士郎は投影する度に魔力を消耗する。ラカンという強敵と戦うために、士郎は魔力の無駄な消費を控えなければならなかった。
故に　先ほどのように咄嗟の投影で作りだす剣は全て無銘のものとなる。宝具の投影など以ての外。だから剣群が防がれることは想定通りだった、ただ対処の仕方が予想の上を行っていた。

ラカンの『千の顔を持つ英雄』は士郎の剣のように射出させることができる。
そして彼は敵の攻撃を回避するタイプではなく、あえて受けて立つことが多い。

「ラカンは剣群に対し足を止めて、武器を射出して防御する」、士郎はそう考えていた。
それだけの動作時間が費やされれば　自分が体勢を立て直すには充分だろうと――
――愚かにも気を緩めた。

ラカンは斬艦剣を振り抜いた。ビルのような大剣は　振り払えば剣群と同時に士郎も射程距離に収める。予想が外れ攻撃が自身に迫る。
焦りは思考の乱れを呼び、士郎はラカンの接近を容易く許した。
だから彼は今、土埃に塗（まみ）れているのだ。

「そ、それは、あの一瞬でそこまで……！？」
「いいえ、ラカンの勘…経験則よ。大したことではないわ、ラカンが士郎君の甘さを突いただけ。
どうするの士郎君。出し惜しみしているようでは決して、貴方はラカンに届かない」

セラスは静かに事実を述べた。

◇――――――――――――◇――――――――――――――◇

未だ晴れぬ土煙の中。クレーターの中心部。

「ぐ…かはっ……ゴプッ…！！」

夥しい量の赤い液体。吐き出される血の塊。地に這い蹲り　息も絶え絶えに吐血する。

拳を喰らった腹部は服が千切れ穴が開き、そこから見える肌には青痣ができていた。

魔法障壁で軽減された筈が―――いや、はたして障壁などあったのかと疑いたくなる程の損傷(ダメージ)。

ともすれば闇に沈みそうな意識を、士郎は必死に繋ぎとめていた。

「くっ……そ……っ…！！」

『――――――――――。』

――声が、いや、音が聞こえる。金属音？　遠くから響く剣の音――。

――貴方が越えようとしている相手はその程度の戦士だったのですか？

――貴様如きが手を抜いて勝てるような男だったか？

――その結果がこのザマか。

――――――――不甲斐無い。

――ああ。その通りだ。

本気を出しても到底足りない。死ぬ気で挑んでも尚足りない。

勝機がないのは当然だ。

あの人が生きた年数と、俺の生きた年数では大きく開きがある。

あの人が越えてきた死線と　俺が踏んできた場数では差があり過ぎる。
力の足し算では絶対勝てない。
何処かで掛け算しなければあの人には追いつけない。あの人は越えられない……！

――命を燃やせ衛宮士郎。お前はまだ生きている（たたかえる）――――！！

“――体は剣で出来ている”

（――体は剣で出来ている）

「体は…剣で出来ている！！」

極致に立つ無限の剣よ、出番だ起きろ。
救世の英雄ジャック・ラカン。敵はお前達と同じ『伝説』の住人だ。
もう出し惜しみしない。俺の全力で伝説に挑む――――！！

「――――この体は、硬い剣で出来ている……ッ！！」

「おーい、まだ出てこねえのかよ？」

ラカンが腰に手を当ててクレーターを覗き込む。

（油断を誘ってんのか？　いや、あいつはそんな狡い真似はしねえな）

『――――――この体（カラダ・ハ・）は、硬い剣（ツルギ・デ・デキテイル）で出来ている。』

「ん？」

声が聞こえる。徐々に晴れてゆく、土煙の向こうから。

体を剣に。

「Ｍｙ　ｂｏｄｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｓｗｏｒｄ.」

血潮を鉄に。

「Ｍｙ　ｂｏｄｙ　ｉｎ　ｂｌｏｏｄ.」

己が限界を越えて、飽くことなく歩き続けろ。

「Ｂｅｙｏｎｄ　ｔｈｅ　ｌｉｍｉｔｓ　Ｉ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　ｗａｌｋｉｎｇ　ｗｉｔｈｏｕｔ　ｇｉｖｉｎｇ　ｕｐ.」

「――――――――――――――――『剣製の凱歌（ヴィクトーリア・ブレイドワークス）』」

――――――ド　ゴンッ！！！！

「ぐ……はっ……！？」

ラカンの口から呻きが漏れる。

その原因は――彼の腹に、士郎の拳が収まっていた。

「……へっ…！」

咄嗟に腕を振り上げ反撃するが――

――ガンンッッ…！！

「！！？」

巨龍をも打ち倒すと言われるラカンのパンチ。

にも関わらず、その拳で頭部を殴られた士郎は微動だにしない。――

――硬い。

――ギシッ……

「っ！！」

気がつけば、軋むような音をたてて士郎が、拳を握って構えていた。

「遅いな、師匠」

そのまま士郎が――――ラカンの顔面をブチ抜いた。

――◇

◇――――――――――◇――――――――――

ラカンが切れた口の血を拭う。自身が与えた士郎の傷は塞がっていた。

「効いたぜオイ……！！」

数多の伝説と　それに違わぬ実力を持つ男、ジャック・ラカン。
「最強の奴隷剣闘士」「最強の傭兵剣士」「千の刃の男」「死なない男」。
そしてその強靭な肉体を示す「あのオッサン剣が刺さんねーんだけどマジで」という異名。

少年時代から続く命懸けの戦い。その極限状態の”気”に練り込まれ、実戦で鍛え上げられた鋼の肉体。それは生半可な手段では掠り傷すら負わせられない。
――――その鉄壁の防御を突破した。

「だがそりゃ何だ、イメチェンか？」

黒いコート、黒いズボン、黒いブーツ。黒づくめの服装は間違いなく士郎のもの。

――だが。今、それを身に着けている人物は。

浅黒い肌に、色素が抜け落ちたような白髪、鋼色の瞳。

「手品のタネをバラす魔術師（マジシャン）はいないでしょう？」

「つまんねえ奴だなオイ」

そう言いつつラカンの顔は笑っていた。

弟子が、ただの拳で自分に傷をつけた。その事実が、師として堪らなく嬉しい。

「だが……このまま負けてやる道理はねーな！！」

「投影開始（アデアット）」

――鶴翼欠落ヲ不ラズ（しんぎむけつにしてばんじゃく）。

――心技泰山ニ至リ（ちからやまをぬき）、

――心技黄河ヲ渡ル（つるぎみずをわかつ）。

――唯名別天ニ納メ（せいめいりきゅうにとどき）

――両雄、共ニ命ヲ別（われらともにてんをいだかず）……！

「『千の顔を持つ英雄』」

「『千将莫邪――オーバーエッジ』！！」

互いの得物を握りしめ、２人は同時に駆け出した。

「ふっ！」
「！？」

士郎が息を吐き出す。腕を交差させるように双剣を構え瞬動で突進してくる。
それはラカンの意表を突いた。正面からの突進、あまりにも無謀な攻撃。

（――ダメージ覚悟――特攻か！）

ラカンの懐に――入った。身体を捻じり、独楽のように回転し始める。

「だが…少し無謀過ぎんじゃねーか！？」

回転動作を視界に収め、ラカンが剣を振り下ろす！

――ギャリッ！！
――ズパンッ！！

「ッ！！」

斬りつけられた胸から血が噴き出す。

（浅い――いや、一歩退いて逃げられた）

胸を斬られたのは、先に剣を振り下ろしたラカンの方。

（――おいおいマジかよっ！？）

振り下ろされたラカンの剣は、金属音をたてて士郎の体に弾かれた。
「体は剣で出来ている」。そして。
士郎の攻撃は終わっていない。

「ぬ……オラッ！！」

ラカンの剣に莫邪が弾かれ、士郎の右手から飛んでゆく。

「壊れる幻想（ブロークン・ファンタズム）」
「ぬおっ！？」

残った干將が爆発し、ラカンの視界が爆煙に埋め尽くされる。

「…目眩ましか」

（チ…アイツをまだナメてたか。パンチは効かねえ、剣もダメ……）

――空を切る音がした。

「　『千の顔を持つ英雄』　」

音の方向へ無数の武器を射出する。その運動で煙が晴れる。

――――ギィインッ！

弾かれたのは、先ほど吹き飛ばした筈の莫邪。

（士郎（アイツ）は――――――――）

「――――――『グラム』！」

背後から士郎がグラムを振るう。ラカンも流石に宝具と打ち合うつもりはない、剣を振い士郎の手からグラムを弾く。士郎はすかさず新たな宝具を投影する。

「『原罪（メロダック）』！！」

弾かれる。

「『絶世の銘剣（デュランダル）』！！」

弾かれる。

「『ゲイ・ボルク』――――憑依経験　共感終了。同調（トレース・オフ）、完了」

「お」

「――――振るえ――――――――槍術（しょのつち）・初の槌――――！！！」

真紅の槍を投影し、繰り出された神速の突きも――――躱された。

まるで序盤と同じ展開。能力が上昇したにも関わらず、何故か士郎の剣はラカンの体に掠りもしない。

「確かにその技はスゲェ、この俺に拳でダメージを与える奴なんざナギ以来だ。
だが、強化されるのは出力（パワー）と防御力のみ……スピードは変わらねえ」

数歩後退してラカンが口を開き、その言葉で士郎の表情が険しくなる。そう、どんな強力な攻撃も当たらなければ意味が無い。
顔面への一撃も莫邪での斬撃も　意表を突いたからこそのもの。まともに戦り合えば士郎より速いラカンに攻撃が当たるわけがない。

「だがお前は俺の拳を受けて立ち上がり、俺の体に傷をつけた」

槍の投影を破棄したところで、ラカンが再び口を開いた。
切れた口元で血が滲み、胸の傷からは今も出血している。

「師匠としては及第点……だがこれは真剣勝負。
――――もちっと本気、出させてもらうぜ」

「な――――ぐっ！？」

無数の剣が飛来して地面に突き刺さる。まるで、士郎を絡めとるように――。

――ゾクッ――――！

『お前にゃ大アイアスの盾があるだろ？　耐えてみせろよ』

ラカンは一瞬で士郎との距離を更に開け、投擲槍を召喚していた。槍を構え、それに気を練り込む。尋常でない量と密度の気を込められた槍は光を放ち、もはやその輝きで槍本体が目視できない。なんという力――――！！

「ぐ、クソッ！！」

周囲に剣を突き立てられ、士郎は雁字搦めにされている。脱出は可能だが、槍を回避するには間に合わない。バッ！　とラカンに向けて掌を突き出す。

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ　……ッ！！」

「――――オラァァアアアアアアアアアアッッ！！！！！！」

「『熾天覆う（ロー）――――――――七つの円環（アイアス）』――――――――――――――――！！！！！」

戦場に咲いた真紅の花弁に光の槍が突き刺さる。
トロイア戦争の英雄アイアス、その盾が宝具と化した『貴き幻想(ノウブル・ファンタズム)』。
七枚羽の盾は、「投擲武器に対して無敵」という絶対能力で光の槍を受け止める――――!!

――筈だった。

◇――――――――――◇――――――――――◇

『セラス総長!この空域は危険です!緊急退避します!!』

運転席から操舵手の悲鳴が聞こえた。
ラカンが槍を投げた直後、荒野一体が光に包まれた。
爆発。轟音。粉塵。熱風。それはセラスとフィンの乗る飛行艇にもダメージを与える。
2人は衝撃でまともに立っていられなかった。

「…まったく嫌になるわね、あのバカは……!!」

セラスはそう毒づき、フィンは不安げに瞳を揺らしながら操舵手の声を聞いていた。

「……やべえ」

「やり過ぎた」。ラカンはそう言わんばかりの表情をしていた。人間離れした防御力とアイアスの盾を持つ士郎。だが周囲の有り様を見て、ラカンは自身の攻撃に士郎が耐えられたとは思えなかった。顔から汗を滝のように流している。

（いやー、だって久しぶりに「本気」出したもんよぉ。…20年ぶりか、そりゃ加減くらい間違えるわな？　……死んじゃいねえと思うが……生きてっかな――……）

――――ガキンッ！

飛来した剣を召喚した大剣で打ち落とす。

「……ほぉ、壮観だな」

粉塵の向こうから光が射し、煙が徐々に晴れてゆく。

世界を別つ炎の円環。赤土の荒野に無限の剣。地平から射す金の曙光。

――固有結界『無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）』。

虚空に座して連なる無数の剣、それら全てがラカンに刃を向けて静止する。

視界が完全に晴れた。外見が通常に戻った士郎の姿が見える。赤い外套を身に纏い、身の丈ほどの片刃の大剣をその手に握る。

その刀身には「ＥＮＳＩＳ　ＥＸＯＲＣＩＺＡＮＳ」と刻まれていた。

（――おいおい無傷だと？　そりゃ流石にねーだろ！）

それはアーティファクトを完全再現（コピー）するアーティファクト。

衛宮士郎がエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルと交わした契約の力。

アーティファクト『六道籠手（マヌサス・セクス）』・形態（フォルマ）『ハマノツルギ（エンシス・エクソルキザンス）』。

「――――――――往け！！」

その一声で、剣の雨がラカンの元に降り注ぐ――――！

「――ぬんっ！！」

ラカンの仮契約（パクティオー）カードが輝き、無数の武具に変化して射出させる。
無数のあらゆる武具に変化する、「無敵無類」のＡＦ『千の顔を持つ英雄』。
数秒後には全ての剣が撃ち落とされてしまうだろう――――そう、このままなら。

「カラダ・ハ・ツルギ・デ・デキテイル――――――『無銘（タクティキ・シディロルゴース）の刀工』！！！」

――――高速解析・瞬間理解・術式改変・反転投影。
剣群を撃ち落とそうと迫る無数の武器、その悉くを模倣（コピー）して反撃する。

――――――ズガガガガガガガガッゴガッバギンッガガガガガッガッガギッッ！！！

「うおぉっ！？」

その驚きは当然だろう。
自分が撃ち出した武器と寸分違わず同じモノが自分の武器を砕いてゆく。
自分の攻撃が、自分の攻撃で防がれる――――防がれた。『千の顔を持つ英雄』が。
迫る剣群を遮るものはもう何も無い。ラカンの体に、剣の雨が降り落ちる――――！

「――――まだだ」

刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルク）　硬き稲妻（カラドボルグ）　絶世の銘剣（デュランダル）　太陽剣（グラム）　原罪（メロダック）　勝利すべき黄金の剣（リバーン）　偽・螺旋剣（カラドボルグ？）　赤原猟犬（フルンディング）　大神宣言（グングニル）　雷神鉄槌（ミョルニル）　大御葬歌（ミストルテイン）　轟く五星（ブリューナク）　方天戟（ゴ）　神五兵（ツドフォース）　雷霆降す金剛杵（ヴァジュラ）　血の復讐者（ダインスレフ）　串刺城塞（カズィクル・ベイ）　蛇狩りの鎌（ハルペー）　万象毀つ神槌（シャルウル）　雷の牙（ヴァジュランダ）　斬り抉る戦神の剣（フラガラック）――――

「やべっ……！！」

「――――――『無限の剣舞（アンリミテッドブレイドダンス）』」

――――――ドドドドドドドドドドドドドドドドドドッッッ！！！！！

宝具がラカンを赤い大地に縫い付けた。

「ぐっ……お……っ！」

「カラダ・ハ・ツルギ・デ・デキテイル」

「！！」

士郎の顔が、ラカンの目の前に。

「風の精霊１００１柱・縛鎖となりて敵を捕らえよ！！
『魔法の射手（サギタ・マギカ）・戒めの風矢（アエール・カプトゥーラエ）』！！」

「――――ぬっ――――――ぐぁぁあああああああああああっ！！」

『魔法の射手』は基本攻撃呪文。矢の量を増やすことでその威力を強化する。
故に。矢の数が膨大なまでに増加すれば、容易く基本魔法を超えた力を発揮する。
千一の封矢に縛られたラカンは、激痛を伴ってその行動を封印される。
だがそれでも――――

「……おいおい……まさか、この程度で俺を止めたと思ってんのか……ッ！？」

――――みしぃっ……！！！

呪文が軋みをあげている。宝具と「戒めの風矢」の重ね掛け、それでも師匠相手では
５秒も保たないだろう。だがそれで充分だ。
荒野に突き立つ無銘の剣、いや、それに映るモノに視線を向ける。
弓兵の魂に刻まれた”聖剣”の記憶。
片目は記憶に目を凝らし、もう片目を瞑り己の内側へ心を飛ばす。
集中した一瞬は、僅か数秒を永遠まで引き延ばす――――！

ここが師匠を倒す　最初で最後のチャンス。
ならば為すべき事はひとつだけ。導く先は一点のみ。あの剣を。星の聖剣を模倣する！

体は剣で出来ている。
「――――――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．」

――――創造の理念を鑑定し、基本となる骨子を想定し、
あまりの情報量に脳が沸騰する。鋭い痛みが頭に走る。
もう魔力が足りない。
魔術回路に周囲のマナを引き入れる。荒れ狂う魔力に回路が悲鳴をあげる。

――――構成された材質を複製し、製作に及ぶ技術を模倣し、
血液が逆流する。
毛細血管が断裂し　爪の先から血が噴き出す。開いた目から血の涙が流れ落ちる。
血だらけの掌で魔力が迸る。閃光が剣の輪郭を形作ってゆく。

――――成長に至る経験に共感し、蓄積された年月を再現し、

人々の願いを受けて生み出された神造兵器。星が鍛えた最強の幻想（ラストファンタズム）。

あらゆる行程を凌駕し尽くし、

顕れるのは十二の英傑を従えた騎士王、その剣。彼女の剣。

真名アーサー・ペンドラゴン。剣士の英霊セイバー。衛宮士郎の永遠の相棒――――！！

――――――――――ここに幻想を結び剣と成す。

「――――――――――投影（トレース・オフ）、完了」

「ぬぅおおおおおお……！！」

力づくで封印を撥ね除けようとする師匠の姿が目に入る。

あまりに強大な力は大気を震わせ大地を揺らす。おそらくあと1秒もないだろう。

だが焦ることはない。この手には、あらゆる勝利を約束する剣がある――――！！

――――――ドスッ

黄金の剣は、面白いくらい簡単に鋼の身体を貫いた。

「……お？」

呆けた声はラカンのもの。

思考が現実に追いつかない。まさか自慢の肉体が、こうも容易く――

「約束（エクス）された――――――――――」

剣を突き刺した密着状態からの、肉体内部からの魔力斬撃解放だ。

――師匠。アンタでもこれは耐えられまい――――――！！

「――――勝利（カリバー）の剣――――――――――――――――――！！！！！！」

天に奔る極光が、２人の人間の体を焼いた。

第７７話　千の刃と無限の剣（後書き）

・さあ、どちらが勝ったでしょう！？

１）当然バグでチート無限のラカン
２）エクスカリバー出たら士郎の勝ちでしょ
３）ｖｓネギみたく引き分け
４）…そのどれでもない……！？

次話をお楽しみに。あと今回の～補足・解説～は長いです。覚悟してくださいｗ

～補足・解説～

：「そうね。貴女はあの子しか見ていなかったものね？」
「グ、総長ッ！？」
・フィンはちゃんとラカンも見てました。セラスが彼女をからかっているだけです。

：あの人が生きた年数と、俺の生きた年数では大きく開きがある。
・気づく人は気づく文章。言峰さんの熱いセリフが元になってます。

「勝機がないのは当然だ。
お前の生きた年数と、私の生きた年数では大きく開きがある。
何かで掛け算でもしないかぎり、埋められる数値ではあるまい……。
――命をかけろ。　或いは、この身に届くかもしれん――！」

：「――――――――――――――――――『剣製の凱歌（ヴィクトーリア・ブレイドワークス）』」

・『剣製の凱歌』《ヴィクトーリア・ブレイドワークス》

　固有結界「無限の剣製」を体内に展開した状態、それを発動・維持する技。
魔法で制御術式を開発・使用して暴走（体中から剣が突き出るような症状）を抑えている。制御術式は自己封印・暗黒神殿（ブレーカー・ゴルゴーン）のような作用反転系のモノ。
　肉体を剣と化して防御力・魔力・投影速度が上昇する。
・防御力：肉体が鋼鉄のように硬くなる。
・魔力：内包する聖剣・魔剣・神剣・銘剣・宝具の魔力を己のモノとして使用できる。
・投影速度：体内に「無限の剣製」を既に展開している状態なので、そこからすぐに剣を取り出せる。
これを使用している間は副作用で髪が白髪に、肌が褐色に染まる。
使用後は体力を著しく消耗する。
基本的に使用は1日1回。2回以降の使用では全身に痛みを伴う。
3回目以降は……

：「手品のタネをバラす魔術師（マジシャン）はいないでしょう？」
・ある意味士郎は魔術師（メイガス）ですけどね。

：「『干將莫邪――――オーバーエッジ』！！」
・〝鶴翼三連〟の最後に呪文を唱えて出現する、大剣形態の干將莫邪。
　とりあえず、呪文唱えとけば形態変化するかなっていう希望的観測で登場。
＊正確には「干将莫耶」。「干將莫邪」は古い字。

：弾かれたのは、先ほど吹き飛ばした筈の莫邪。
・ラカンに弾かれてすぐ（「壊れる幻想」を使用する前の）干將に引き寄せられて戻って来ました。

：ラカンも流石に宝具と打ち合うつもりはない
・正確には「真名解放した」宝具と打ち合いたくないという事です。

：「――振るえ――――――槍術（しょのつち）・初の槌――――！！！」
・Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡ登場のランサー兄貴の技（スキル）。兄貴マジかっけー。
ランサー「そんじゃまぁ……いきますかねぇ！！」

：七枚羽の盾は「投擲武器に対して無敵」という絶対能力で光の槍を受け止める。
――筈だった。
・ラカン師匠のバグでチートな力技に破られた。アイアス不憫……相手が悪かった。

：『セラス総長！この空域は危険です！緊急退避します！！』
・ラカン師匠のバグでチートな力技で被害甚大。ラカンだから。

：――固有結界（アンリミテッドブレイドワークス）『無限の剣製』。
・言わなくても分かると思いますが一応補足。
粉塵でラカン師匠が士郎を見失っている間にこっそりちゃっかり瞬間契約（テンカウント）。

：――――アーティファクト『六道籠手（マヌサス・セクス）』・形態（フォルマ）『ハマノツルギ（エンシス・エクソルキザンス）』。
・原作のネギｖｓラカンと同じ展開になってしまった。反省。

：「カラダ・ハ・ツルギ・デ・デキテイル。――――『無銘の刀工（タクティキ・シディロルゴース）』！！」

・「ネームレス・ソードメーカー」をギリシャ語「タクティキ・シディロルゴース」に変更。「タクティキ」の響きが好きだ。

：雷神鉄槌（ミョルニル）　大御葬歌（ミストルティン）　万象毀つ神槌（シャルウル）　雷の牙（ヴァジュランダ）

・数の水増しのため、オリジナル宝具を大量投下。既存の宝具にも独自解釈の漢字をふったりしました。

例）

・ハルペー→蛇狩りの鎌、ヴァジュラ→雷霆降す金剛杵　など

オリジナル宝具ボツネタ）

・「惑い眩ます光焔の剣（クラウ・ソラス）」、「人喰い刀（エピタム）」、「遍し守りを貫くもの（エッケザックス）」

：万象毀つ神槌（シャルウル）：うーん、この宝具、俺オリジナルなハズなんだけど、どっかの二次小説サイトで見た気がするんだよなぁ……。無意識で影響受けてんのかな、自信無い。

「このサイトに載ってたよ！」という情報ありましたら感想までお寄せください。

：「――――――『無限の剣舞（アンリミテッドブレイドダンス）』」

・Ｆａｔｅゲームからの技。最初に無銘の剣を敵に当てると発動、宝具の雨が降る。

：「風の精霊１００１柱・縛鎖となりて敵を捕らえよ！『魔法の射手（サギタ・マギカ）・戒めの風矢（アエール・カプトゥーラエ）』！！」

　士郎の得意属性は光・火・闇。ならば火属性の『紫炎の捕らえ手』を使うのが自然かとも思いますが、『紫炎の捕らえ手』では捕縛能力が低いと思われます。

　そして本編に書いた通り

↓『魔法の射手』は基本攻撃呪文。矢の量を増やすことでその威力を強化する。
　故に　矢の数が膨大なまでに増加すれば、容易く基本魔法を超えた力を発揮する。

　得意属性でなくとも基本魔法であるため扱い易く、矢の数を極端に増やすことでラカンというバケモノの動きを封じました。

：宝具と『戒めの風矢』の重ね掛け、それでも師匠相手では5秒も保たないだろう。
・ラカンさんマジチート。

～第７７話　Ｑ＆Ａ～

エヴァ「まったく、呼ばれてみれば何だコレは？」

木乃香「作者はん曰く『～補足・解説～』で補足しきれんかった部分を解説して欲しいんやて」

エヴァ「なぜ私達が不甲斐無い作者の尻拭いなぞせねばならんのだ。そして何故この人選なんだ？」

木乃香「そんなん作者はんの胸三寸やん？」

エヴァ「お前なかなか達観しているな……。まあいい　さっさと終わらせて帰るとしよう」

木乃香「せやなー、終わらせへんと帰れなそーやしなー」

エヴァ「それでは早速始めるか」

木乃香「Q、なぜ士郎は最初から『ハマノツルギ』を使わなかったのか？　やて」

エヴァ「ふむ……。これは士郎の得手が剣であり、ラカンの得手が拳闘だからだな。

　原作でぼーやがラカン相手に素手の勝負を挑んだろ、あんなのはハッキリ言って自殺行為だ。それでもぼーやがそれを行ったのは、士郎が剣を撃ち出すような『千の顔を持つ英雄』への対策をぼーやが持っていなかったからだ。結果、ラカンの得意である拳闘で戦うことになろうとも、『ハマノツルギ』で『千の顔を持つ英雄』そのものを無効化する必要があったんだ。何よりぼーやには『雷天大壮』という切り札があり、ラカン相手にも殴り合えるという算段があったからだがな」

木乃香「…え、えーと……？」

エヴァ「ラカンは素手の方が強い、つまり「剣を使う方が弱い」ということだ。

　『ハマノツルギ』で『千の顔を持つ英雄』を無効化してしまったら、ラカンは素手で戦いを挑んでくるだろう。それは士郎にとって避けたい展開だったのさ。自分の得手である剣で、そしてラカンにもその土俵で戦わせるように仕向けたんだ。

　といっても士郎の剣は宝具だ。流石にラカンでも素手では相手に出来んだろうから、わざわざそんな事を気にする必要は無かったんだが…少しでも勝率を上げたかったんだろうな。

つまり。士郎は得意分野で、ラカンは本気を出せない状態で戦うことになる。士郎はラカンが本気でなかろうと「勝てればいい」と考えていたのさ」

木乃香「……うん、なんとなくわかったわ」

エヴァ「……（本当に分かっているのか？）…では次だ」

木乃香「Q、何でわざわざ『剣製の凱歌』を解除して「無限の剣製」を発動したの？」

エヴァ「これは『剣製の凱歌』の特性「投影速度上昇」に関わる疑問だな。

既に固有結界を体内に展開している状態であるため、そこから剣を取り出すだけでいい。それが結果的に投影速度の上昇に繋がっているわけだ。

だが士郎は後にエクスカリバーを投影する算段だったんだ。「無限の剣製」は「あらゆる剣を構成する要素」で満ちた世界だ、それを展開することでエクスカリバー投影の成功率を上げたかったんだろう。あのタイミングでしか長ったらしい呪文を詠唱しきる時間はなかっただろうしな」

木乃香「派手に場面を演出して盛り上げたかっただけとちゃうんやなー」

エヴァ「そういうことは言ってやるな……。ホラ、次だ」

木乃香「Q、作者・佐藤Sは「『六道籠手・形態：ハマノツルギ』で原作のネギｖｓラカンと同じ展開になってしまった。反省」と言っているけど、無理に使わずに『全て遠き理想郷』を使えば良かっ

たのでは？」

エヴァ「これもエクスカリバーが理由だな。エクスカリバーの投影・真名解放前に無駄な魔力を使いたくなかったのだろう。同じ効果が得られるなら、魔力消費なしのアーティファクトで防ごうとするのは自然な流れだ」

木乃香「ほえー。エヴァちゃん士郎の事よくわかっとるなー」

エヴァ「ふふん当然だ。アイツは私の従者で、私はアイツの主だからな」

木乃香「Q、以前あとがきで作者が「フィンが士郎を好きになる展開」について書いてたけど、本編の現時点でフィンは士郎のことをどう思っているの？」

エヴァ「……アイツめ、また女をひっかけおって……！！」

木乃香「3年前に知り合ったらしいで？」

エヴァ「何ィっ！？　私は聞いていないぞ！？」

木乃香「『フィンが顔を真っ青にして』『フィンは不安げに瞳を揺らしながら』

……むむむ。せっちゃんもうかうかしとられんなー」

エヴァ「……ふ、ふふふふ……！　後で問い詰めてやらねばな……！！」

士郎（……ビクッ！？）

……以上の解説を踏まえて尚　疑問に思う点、またはお気づきの矛盾点がありましたら感想にお寄せください。

次回「第７８話　墓守り人の宮殿（仮）」
それでは次回！！

第７８話　旧オスティア廃都（前書き）

エクスカリバーは魔力を、熱量を持った斬撃に変換して放出する。
それは強力な「対城宝具」故に、周囲への被害も尋常ではない。
「約束（エクス）された――――――――――――」
このまま真名解放すれば、俺もただでは済まないだろう。魔法障壁に回す魔力もない。
「――――――勝利の剣（カリバー）――――――――――――――――――！！！！！！」
俺は静かに、体を灼く極光に身を任せた。

第78話　旧オスティア廃都

「――――――――――……。」

立ち上った光の柱が収まると、その場所に残ったのは2人の男。
剣の丘は姿を消し、夕日によって荒野の岩が朱に染まる。

青年は黄金の剣を　大男の腹に突き刺している。
大男は青年の剣に身を貫かれている。

大男を大地に縫い付けた無数の武器は斬撃（エクスカリバー）の熱で溶解した。
大男は上半身の服全てが、青年は赤い外套が焼け落ちている。
まるで彫刻（スカルプチャー）のように、2人はそのまま静止していた。

「――――――――――」

――ラカンの指が動いた瞬間。

場に満ちる静寂がその呟きに破られた。

「――――壊れる幻想（ブロークン・ファンタズム）」

――――唸る轟音。音にならない程の音。

体を貫く幻想を暴発させた。咄嗟にあの場から離れる力など残ってなかった。ラカンは体の内側から爆ぜりを喰らい、士郎はその爆発に巻き込まれる。

もはや四肢に力は入らず、士郎の体は人形のように吹き飛ばされた。

「ぐっあ……がはっ！！」

受け身もとれずに投げ出され、身体中が悲鳴をあげる。

魔力の暴発をモロに受け、今度こそ体に力が入らない。

魔術回路である神経はボロボロ。エクスカリバーを投影した反動で体中から出血。

魔力は空っぽ。弱った体では”気”も使えない。

「ああ、満身創痍というのはこの事か」と、今の自分に苦い笑いが込み上げる。

大丈夫、まだ笑える――――――――充分だ。

「形態転換（ムターレフォルマ）・『コチノヒオウギ（フラーベルム・エウリー）』」

士郎が手に纏う赤錆びた手甲が光を放ち、扇へと姿を変える。
それが輝けばみるみるうちに士郎の傷が癒えてゆく。

魔術回路にマナを引き入れて魔力の回復を開始し、身体の状態を確認する。傷は治ったものの何処か気だるい体を起こして立ち上がる。
視線を前に向ければ、とても綺麗な夕焼けが見えた。

――――――――――――――夕陽（それ）を遮る大きな影も。

「……ごぷッ……。――――ペッ……あ〝――――……。……よお、弟子」

――――――勝てる気がしない。

間違いなく効いている。眼前の相手はもはや死に体だ。
だが……放たれる気迫が。迫り来る威圧感（プレッシャー）が。
今までの比ではないのは、何故――――――――

「……何ですか、師匠」

腹に力を込め、敵に呑まれぬように声を出す。

「今後、俺を師と呼ぶ事を禁ずる」

「――――!?」

「お前はもう弟子とは呼べねえよ。お前は今日で弟子卒業……免許皆伝だ。

――――――――――よくやった。褒めてやる」

それが――――その勝負で、士郎が覚えている最後の言葉だった。

―◇―――――◇―――――◇―――――

目が覚めると、目の前には天井。体に感じる倦怠感。

今の俺ははっきりいって重傷だ。腹、背中、左腕、頭には包帯がぐるぐる巻きにされている。それ以外の損傷は魔法で治療されているであろうにも関わらず、身体中で痛みを感じない場所はない。

エクスカリバーを使った後の事は覚えていないが……おそらく俺は負けたのだろう。

だが…妙に晴れ晴れとした気分だった。

「……目が覚めたか?」

此処はアリアドネー騎士団隊舎の医務室。士郎はベッドの上に横になっていた。
傍にはフィンがいる。俺の目が覚めるまでずっと横にいたことは容易に判った。
感じる既視感。3年前と同じ光景だ。

「前にも言ったかもしれないけどさ、別に付きっきりじゃなくていいんだぞ？」

「…仕方ないだろ。最後まで見ていなければ気になってしょうがない」

気恥ずかしそうに彼女は呟いた。
「気になって」は「心配で」。それが判るくらいには、士郎は目の前の友人を理解している。

「ありがとな、フィン」

彼女の優しさが嬉しくて、士郎は笑って感謝した。
するとフィンも、満足したように目を閉じて口の端を上げた。

――――ガチャッ

「オィーッス♪」

宝具に貫かれた箇所と　重傷である腹部に包帯を巻いたラカンがやって来た。
言っておくが彼も重傷である。何故に出歩ける？

「あ、師匠」
「ぬんっ！」
「ごへぇあっ！？」

ラカンチョップが士郎の頭に降り掛かった。

「師匠って呼ぶなっつったろーが」
「ラカン殿っ！　コノエは病人ですよ！？」
「あ？　バカヤロウ俺だって病人だ！」
「尚更大人しくしていてください！！」

フィンとラカンの争いは、士郎が血を流して気絶していることに2人が気づくまで続いた。

「いやー悪りぃ悪りぃ、まださっきの勝負気分が抜けなくてよ、力加減間違えちまった。
ワッハハハ♪」
「気分の問題で人を気絶させられるなんてのはアンタくらいですよ」

フィンに頭の包帯を巻き直してもらいながら半目で師匠を見る。

「――――勝負は俺の負けです。完敗でした」

きょとん。師匠はそう形容するのがぴったりな表情を浮かべた。

「お前、覚えてねえのか？」
「…何をですか？」

「……いや。ならいい」
「？？」

そんな態度を見せられるとこちらも気になってくる。俺が覚えていないところで何かあったのだろうか？

「まーまー気にすんな、俺様に勝てる奴なんてそうそういねえんだからよ♪　オウ！」
「……ラカン殿……」

そう言ってバンバン肩を叩かれてはぐらかされた。うん、スゲー痛い。やめて。
……フィンが隣で呆れたように呟いていたが、何なのだろう？

「ふむ……というコトで。この１億２千万ドラクマは俺の物だ――ッ！！」

いつ掠め取ったこの守銭奴……！
師匠は１２０，０００，０００Ｄｐと記載された小切手を天高く掲げていた。

「おい士郎。いつまで師匠って呼んでんだ？」

…心を読んだ…だと……！？　まあこの程度でいちいち驚いてられないんだけどな、この人の場合。

「――俺にとってジャック・ラカンは師匠以外には成り得ませんよ」

「……そうか」

師匠は穏やかな表情で笑みを漏らし、部屋には和やかな空気が流れた。

「てゆーか守銭奴だとぅ――――――!!?」

さっきの雰囲気は数秒も保たなかった。胸倉を掴まれて持ち上げられる。

すると直後、師匠の背後から凶々しい殺気が――――

「……ところで、さっきの免許皆伝の話なんですが」

「おー？」

頭から血を流したたままラカンは応える。

「実際、俺はこの世界でどれだけ通用しますか？」

「ふむ……」

腕を組んで考える素振りをしながら唸り始めた。

「そーだな……魔法の精度は大分上がったな。投影の速度も上がった。体も出来てきたみてえだし剣術のムラも減った。やっぱ動きが遅せーのが足を引っ張ってんな――。個々のスペックは上位クラスだがどれも一流には届いてねえ。

――アレだな！　お前は「中途半端」だ！！」

……本気で落ち込んだ。

「……コノエ……まあ、その……何だ。頑張れ」

（フィンやめろぉ…！　その優しさが胸に突き刺さるんだ……！）

血潮は鉄で、心は硝子。二重ガラスでも強化ガラスでもないんだよくそぉ……。

「フィンレイ嬢ちゃん、ちょいと席外してくれや」

「……嬢ちゃんはやめてください」

「ホレいいからいいから、これから男同士の話があんだよ」

医務室から半ば無理矢理フィンを追い出し士郎の隣の椅子に座る。

「さて士郎。教えてやるよ。お前の知りたいコトをな」

士郎は目を見開いた。驚きの表情でラカンを見る。

「……どういう事ですか」

「ンな怖いカオすんな、俺は満足してんだぜ？お前の成長に。だがな…まだだ。お前はもっと上に行ける。だが俺じゃあお前をこれ以上強くすることは出来ねえ。

さっきはああ言ったが、総合的に見りゃあお前の力は既に最強クラスにも通用する。お前はもう、弟子なんて器に収まるようなヤツ

じゃねえ」

もう自分の下に居るような奴ではない。そしてもっと高みを目指して欲しい。

免許皆伝。その決断は、師から弟子に贈られた期待だった。

「分かるか？　俺ぁもう、とっくにお前の事を認めてんだよ」

「……！」

――――――士郎の胸の内から、熱いものが込み上げた。

「っつーワケで、この1億2千万ドラクマは情報料として頂くぜ♪」

小切手をピラピラとチラつかせて笑う。熱いもの？気の所為だったかもしれない。

「士郎。俺がこれから言うことはお前にゃ……いや。
この世界の誰もが　知るには重過ぎる。覚悟は出来てんだろうな？」

いつになく真剣な目を向けてくるラカンに僅かにたじろぐ。だが――

「はい」

是非もない。その為にここに来たのだ。

―◇

◇―――――――◇―――――――

結局、「完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）」の動向に関わる情報は得られなかった。
手に入ったのは、手に入れてしまったのは　別のコト――。

「――――――俺たち魔法世界人は　この魔法世界（ムンドゥス・マギクス）と同じもので出来ている。
　つまり幻想（まぼろし）なんだよ。当然俺も、セラスも……フィンレイ嬢ちゃんもな」

その言葉を反芻しながら、ベッドで夜を過ごしていた。

京都で奴……アーウェルンクスと交わした言葉を思い出す。

『魔法世界はいずれ滅ぶ。僕らが手を下さずとも自然にね。そしてそれは避け得ない、回避不可で絶対の運命だ』
『だから滅ぼす。壊して、新たな世界へ魔法世界人（かれら）を導き彼らを救う。
　それが僕らの目的だ。無駄な犠牲は出したくないし、無駄な戦いはしたくない』

『お前がやろうとしていることは正しい。だが手段が間違っている』
『俺は、その滅びを肯定しよう』

『滅びるのではなく、誰かに滅ぼされるというなら立ち塞がるさ』

アイツらの、「誰かを救うために誰かを犠牲にする」、そのやり方が気に喰わない。

それくらいなら俺は、滅びを選ぶと、そう言った。でも――

「結局俺は……何も知らなかっただけか……！！」

独白は闇に沈む。

◇――――――――――◇――――――――――◇

丸1日を休養に費やして、今日から再び行動を開始した。

ヒマだからと言ってついて来た師匠は新オスティアで遊んでいる。

そして俺は旧オスティア廃都の調査だ。収穫は期待していない、ほんの見学程度の気分だ。他にアテもないしな。

広がる残骸。立ち並ぶ廃墟。散らばる瓦礫。かつての「千塔の都」。

霧に覆われて見えない箇所もあるが、それでもかつての栄華が垣間見える。

神代から続く歴史と伝統の国・ウェスペルタティア王国。

「空中王都オスティア」――その成れの果て。『廃都オスティア』。

霧に包まれたかつての浮遊都市群は魔獣の巣となっており、その巨大で複雑な構造も合わせて危険地帯と化している。

僅かに白髪が混じった髪を弄りながら、士郎は岩の上から古都の街を眺めていた。

『「剣製の凱歌（ヴィクトーリア・ブレイドワークス）」……固有結界を体内に展開してそのチカラを直接使役する技……か。確かに普通に使うより幾分か戦闘向きになってんな』

『だがよ、タダで使えるわけじゃーねえんだろ？　頭、白くなってんぞ』

「まさかこんな形で副作用が出るとは思わなかったけどな……」

アーチャー……英霊エミヤの外見は投影魔術による反動だ。

その固有結界の力を無理やり引き出す「剣製の凱歌」に反動がない道理はない。

幸いこの白髪はすぐに元の色素を取り戻すようだ。これは警告なのかもしれない。

「やっぱ　あんまり使わない方がいいんだろうな。いつの間にか白髪になんてなったら絶対アイツらに何か聞かれるだろうし……」

某吸血鬼・某ロボ・某妹の姿が士郎の目に浮かぶ。

少し疲れたような溜め息を漏らしつつ、廃都の探索を始めたその矢先。

「グルルァア……！！」

長高２０ｍはある、巨大な黒狼が霧の中から現れた。口を開け、涎を垂らしガチガチと牙を鳴らす。

「……魔獣か。しかしデカイな、この辺りに出る魔獣は強いって話は本当なんだな」

目の前の魔獣は明らかに強い。強大な魔力とそれに伴う魔力障壁、身体能力。
そこらの冒険者や魔法使いでは確実に喰われるだろう。

「グルァアアアアアアアアッッ！！！」

「投影（アデアット）、重装」

――ズドドドドッ！

「――――――ガァッ！！」

視線も向けずに呪文を唱え、剣が魔獣の体を縫い付ける。
殺しはしない。この魔獣もそうなのかは知らないが、狼は群れを成す生き物だ。
下手に殺して群れ全体に襲われるような事態だけは避けたい。
もっとも、このクラスの魔獣が群れを組んでいると思うとゾッとするが。

「でも、師匠と戦った後じゃーなぁ。全っ然負ける気がしないな」

そう呟いて、士郎は今度こそ探索を開始した。

この日、廃都に棲む魔獣の類が　その数を3分の1にまで減らしたのを知る者はいない。

◇――――――――◇――――――――◇

２０年前の大戦、その最終決戦が繰り広げられた場所。
辿り着いたのは旧オスティア最奥部、『墓守り人の宮殿』。落下したままの状態なのだろう、大地に突き刺さるようにして佇んでいる。

「……？」

特別おかしいことはない。だが、士郎は違和感を感じていた。

大戦で発動された儀式――――≪世界の始まりと終わりの魔法≫。
世界を無に帰す儀式。既に発動してしまったそれを、効果範囲――「反魔法場」――を丸ごと封印することで世界の滅びは回避された。
――その代償にオスティアを滅ぼして。

「反魔法場」が封印された『墓守り人の宮殿』――――王都を中心とする直径５０ｋｍ圏内からは魔力が失われ、魔法も使えぬ不毛の大地へ変容した。２０年経った今も、約２０ｋｍ圏内の魔力は消失し

たままだ。

その後ウェスペルタティア王国は、復興支援の名目で派遣されたメガロメセンブリア軍によって実効支配されてしまう。

そうして生まれた復興都市が『メガロメセンブリア信託統治領オスティア』。

通称「新オスティア」。

『昔は大小百の島々が天然の魔法で浮かぶ、そりゃあキレイな古都だったんだよ』

『だが２０年前の大戦の時にな、その島が全部落っこちた。

直径５０ｋｍに及ぶ魔法災害「広域魔力消失現象」によってな』

『「紅き翼（おれたち）」は世界を救った英雄なんて呼ばれちゃあいるが……』

『……はっ、何が「英雄」だよ』

そうだ、落ちたハズなんだ。ここに辿り着くまで幾つも見てきた。

落下した衝撃で崩れ、壊れ、瓦礫と廃墟だらけになった街並みを。

だというのに。

何故、目の前の建造物は。『墓守り人の宮殿』は、無傷で佇んでいるんだ――――？

「ポヨ。こんな所で何をしているポヨ？」

――――ぞくっ

咄嗟に跳び退いて後ろを振り向けば――――

「――――ザ…？……っ君は…ザジちゃん……！？」

黒い肌、銀の髪、灰の瞳、ピエロのような顔の模様。

麻帆良学園女子中等部３－Ａ生徒、ザジ・レイニーデイが後ろに立っていた。

――――――違う。

「違う……誰だお前……！」

干将莫耶を投影して構えた。

目の前の人物は――――面白いものを見るような目で、不敵に口角を釣り上げた。

「何処かで見た事があると思えば成程……我が妹の…麻帆良の。初見で見破られるとは感心したポヨ、『無限の剣』」

「……妹、だと…？」

それが真実だとしても警戒は解けない。何故なら眼前の敵は、明らかに士郎に敵意を持っていた。

「君の話は≪彼ら≫から聞いているポヨ。世界の滅びを回避しようともせず、世界を救おうとする≪彼ら≫と対立する愚かな魔法使い」

今度は、士郎が笑みを漏らす番だった。

「何がおかしい？」

「いや、期待してなかったんだがな、この場所には。俺の幸運値は低い筈なんだが……今日はツイている」

情報が、向こうからやって来た。これを逃す手などない。

だらんと下げていた腕を、干将莫耶を持ち上げる。

「話して貰うぞ、お前の言う≪彼ら≫――――「完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）」についてな！！」

「何処で油を売っているかと思えば……何をしておる」

（――――――っ！？）

偽ザジに駆け出そうとした瞬間。

「スマナイ我が友よ。直ぐに終わるポョ」

背後から、子供のような声が――――

「模造品（レプリカ）にも届かぬ試作品だけれど、実験には丁度良い」

“――――――――アーティファクト『見果てぬ夢』”

『堕ちて眠るといい衛宮士郎。
≪完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）≫の見せる、安らかで幸福な終わらぬ夢（みはてぬ）へ』

――灰は灰に。塵は塵に。夢は夢に。幻は幻に。全ての者に永遠の安らぎを。

第７８話　旧オスティア廃都（後書き）

《おまけ》

・「１０日間の不在」３日目。病室での一幕。

士郎「だーかーら、『衛宮』だって」
フィン「……エ…エィミア？　エミィア……エィミヤ……」
士郎「そういや最初の頃は『近衛』も上手く言えなかったなー。
　確かに、一部の日本人性は外人には発音し辛いって聞くけど……」
フィン「……エイミア……エミア、おおっ今のはどうだ？」
士郎「……」
フィン「……オイ、何をニヤついている」
士郎「いや、舌足らずなお前も可愛いなと思ってさ」
フィン「……！！！！」

セラス（あの２人、私はお似合いだと思うんだけれど。あなたはどうかしら？）
ラカン（いやぁ～どーかな？　アイツ旧世界辺りに女の気配を感じるんだよな～。ぬはは♪）
騎士Ａ「お二方……覗きはどうかと……」

～補足・解説～

：ラカンは体の内側から爆ぜりを喰らい、

「爆ぜり」という言葉は（多分）ありません、造語です。まあ「爆ぜる＝爆発」だと知っていればニュアンスは伝わるかと。

：「形態転換（ムターレフォルマ）・『コチノヒオウギ（フラーベルム・エウリー）』」

・現在『六道籠手（マヌサス・セクス）』に登録されているアーティファクト

（？）『ハマノツルギ』

（？）『コチノヒオウギ』

（？）『ハエノスエヒロ』

（？）『匕首・十六串呂』

（？）―

（？）―

＊木乃香のカードは1枚で2つのＡＦが現れるため二枠を占めている。

個人的には『匕首・十六串呂』を削除して『千の顔を持つ英雄』、『天狗之隠蓑』『孤独な黒子』を追加させたい。え？今の章でラカンさんに頼めばいいって？「１０００万♪」だそうです。この前の一件で士郎は散財したので払えません。現在、士郎の口座残金は６９０，２２０ドラクマです。

：「お前はもう弟子とは呼べねえよ。お前は今日で弟子卒業……免許皆伝だ。

――――――――――よくやった。褒めてやる」

・免許皆伝のレベルは「ラカン４級」。ちなみに原作でネギは「ラカン３級をやろう」と言われていました。現時点では士郎は「雷天大壮」会得後のネギより下、というワケです。＊この解説は投稿後４８分後に追記したものです。

：いつ掠め取ったこの守銭奴……！

「てゆーか守銭奴だとぅ――――――――！？」

・「守銭奴」は「お金を貯め込んで使いたがらない人」という、ラ

カンを示すにはちょっと意味が違う言葉なのですが、ちゃんと「ケチな人」という意味もあるので無問題。

：「――――アレだな！　お前は「中途半端」だ！！」

最強クラスに片足突っ込んでるというか、扉に手をかけているというか。

ラカンを瀕死に追い込みはしたものの、それはエクスカリバーがあってこそ。でもエクスカリバーを投影するのにはいちいちリスクを冒さなければいけないので著しく実践に向きません。

よって中途半端という評価はエクスカリバーの力を差し引いて、です。

でも士郎、やっぱ中途半端です。相手が最強クラスでも初見の相手には負けません。が、2回目以降は手の内がバレているので上手くいきません。今の士郎がフェイトと戦っても修学旅行の時のようにはいかないでしょう。

：血潮は鉄で、心は硝子。二重ガラスでも強化ガラスでもないんだよくそぉ……。

強化ガラスはともかく。二重ガラスは（建築用具的には）硝子が割れた時に飛び散らない、安全対策としてのガラス処理。つまり壊れること前提。ダメじゃんよ士郎。

：この日、廃都に棲む魔獣の類が　その数を3分の1にまで減らしたのを知る者はいない。

地味に治安向上に貢献しとる。

＊旧オスティアに入るには許可が必要。ちゃんと申請して入りました。

：丸1日を休養に費やして、今日から再び行動を開始した。

3日目で休養。フィンの休暇はこの日までなので、4日目以降は同行できなかった。

：『墓守り人の宮殿』は、無傷で佇んでいるんだ――？

浮かんでたものは一度全部落下したはずですよね？　なのに原作で魔力が復活した際、特に壊れた様子もなくフツーに浮いとる。何故にー。

「実は落ちてなかった」は流石に無いですよね。調査チーム（刹那・楓・朝倉・さよ・茶々丸・古菲・パル）が調査・作成した旧オスティア地図に「刺さってる？」って記述があったし。

墓所の主さんが20年かけてちまちま修理したんだろうか。それとも王族の亡骸が眠る重要な場所なんだから、何か特別な仕掛けがあるんだろうか？

：「ポヨ。こんな所で何をしているポヨ？」

今話の特別ゲストそのいち。

作者は『幻灯のサーカス』が正規の（誰かと契約して手に入れた）アーティファクトだとは思っていません。「完全なる世界」と造物主が目指した理想世界のレプリカを作り出すAF、そんなものが都合よく出現するとは思えませんし、そんなアーティファクトがあるものなのか？と思います。

よって『幻灯のサーカス』は契約で手に入れたものではなく、原作で彼女が言っていた「私の研究機関」なる組織（若しくはそれに類する組織）が開発したアイテムなのではないかと考えています。

赤松先生、設定を開示してください……。34巻に期待？

：「模造品（レプリカ）にも届かぬ試作品だけれど、実験には丁度良い」

“――――――アーティファクト『見果てぬ夢』”

・前述した意見に基づいて作ったオリジナルアーティファクト。≪完全なる世界≫のレプリカを作り出す『幻灯のサーカス』の試作品（プロトタイプ）

という設定。でも何でそんなＡＦを作ったのか、という所までは設定を作っていない。

・見果てぬ夢＝最後まで見終わらない夢。心残りなことや実現不可能なことのたとえ。

意味合い的にも、≪完全なる世界≫が持つ「永遠の園」という性質を表しているかと。

：「何処で油を売っているかと思えば……何をしておる」

「スマナイ我が友よ……直ぐに終わる、ポョ」

・特別ゲストそのに。

この小説はコミックス派の人の為に原作ＫＣ未収録の言葉や設定を出さないようにしていましたが、以前ＫＣ３２巻発売前に「動く石像」を記述してしまった事があります。そしてまたそれを破る羽目になりそうです。

コミックス派の人ごめんなさい。つかさっきの「墓所の主」も、というかそれです。

《ラカンｖｓ士郎、勝負の結果》

ぶっちゃけ引き分け。

・エクスカリバーでラカン瀕死、士郎戦闘不能→士郎回復、ラカン復活（でもやっぱり瀕死）→ラカン、戦闘続行→魔力不足の為、士郎魔法使えず。消費の少ない干将莫耶を武器にし、”気”で身体強化して戦闘続行→→→→……。

原作のネギｖｓラカンよりも流血・重傷・瀕死。結果２人とも重体に。ただしラカンは治療後すぐに回復。士郎は６時間後に目を覚ました。

ただ引き分けというよりは、何と言うか、うやむやになったカンジ。で、頭の怪我で勝負をよく覚えていない士郎に負けを押しつけて1億2千万ドラクマを……。

ただこれは金のためではなく士郎のためです。「負けた」ことにしておいた方が慢心せずに向上心を持つだろうと。ラカンは読者の皆さまが思っている以上に士郎の成長を期待しています。

そしてこのようなうやむやな決着となったのは、

「エクスカリバーは最強、ラカンは無敵」

という2つの究極・そのどちらがどうなって決着するか、という「落とし所」を見つけられなかった作者が勝負をうやむやにした結果でもある……。

正直な話、「エクスカリバーの零距離真名解放…やり過ぎた……」と思いました。

「第79話　≪完全なる世界≫（仮）」

――その楽園からは、逃れ難い――。

それでは次回！

一10話　オリジナル宝具その3（前書き）

短いですが投稿します。今話は第77話のおまけみたいなものです。

―10話　オリジナル宝具その3

《帰って来たオリジナル宝具コーナー》
他の設定話に載せたものを含めると通算3回目の企画。第77話とその後書きで記述した宝具達です。よければ読んでください。
お断りしておきますと、これらのオリジナル宝具は基本的に本編に登場しません。77話は例外です。一部の宝具の能力が強過ぎるので。

：「万象毀つ神槌（シャルウル）」（ばんしょうこぼつしんつい）
ルガル神話（？）に登場する棍棒。
戦闘と農業の神ニンウルタの持つ武器。「すべてのものを破壊するもの」という意味の名前で、「戦闘の洪水」という異名を持つ。

・能力：即死宝具（オーバーキル・ファンタズム）。有機物・無機物・物質・エーテル・実体・霊体関係なく、この宝具の攻撃を受けた者は例外なく破壊され殺しつくされる。ただしこの宝具よりランクが上の宝具や魔術は破壊できない。そしてひとつの対象につき一度しか使用できない。
防御系統の宝具（結界宝具）が使用された場合は、その宝具のルールが優先して適用される。「投擲されたシャルウル」なら「ロー・アイアス」には勝てないし、当然「アヴァロン」は貫けない。

：「雷の牙（ヴァジュランダ）」（いかずちのきば）
インドの伝承「ラーマヤナ」という物語に登場する、ラーマとい

う英雄の持つ投げ槍。とある聖者より授かった神々の武器だという。
ラーマは神々の化身である猿たちの王スグリーバに協力し、スグリーバの兄である猿王バーリをこの槍で倒した。

・能力：
「神殺し」の概念を秘めた対神兵装。神霊クラスの霊格を完全に討ち滅ぼす力を持つ。

：「惑い眩ます光焔の剣（クラウ・ソラス）」（まどいくらますこうえんのけん）
ケルト神話に登場する剣。
ダーナ神族の王ヌアザが所持する剣。鞘から出れば光を放ち周りの者の目を眩ます。他にも「抵抗すらさせずに敵を二分する不敗の剣である」「隠れた敵を探し出してひとりでに倒す」「不敗の剣」「光の剣」「炎の剣」、などの伝承を持つ。

・能力：鞘に納められた状態で真名を開放すると、抜刀した際に閃光を放ちそれを見た者の視力を奪う。奪われた視力を回復する為にはこの宝具の担い手を倒すしかない。ただし視力を奪われたのがサーヴァントの場合、パスを通してマスターの視界を共有して物を見ることはできる。
「ゲイボルク」のように、宝具として複数の真名を持つ。「惑い眩ます光焔の剣」は「光で敵の目を眩ませるクラウ・ソラス」の真名。
「光で敵の目を眩ませる」「隠れた敵を探し出して攻撃する」、この2つのクラウ・ソラスの真名を開放した相手にのみ、第三の能力「抵抗すらさせずに敵を二分する（仕組みはゲイボルクやフラガラックのような因果逆転による攻撃キャンセル）」が発動可能になる。しかし第三の真名解放は一度しか行えず、第三の能力を使用し

た相手には以後　他2つの真名も解放できなくなる。

：「人喰い刀（エピタム）」

アイヌ民話に登場する人喰い刀。別名「エペタム」。

祈りを込めるとひとりでに飛んでいき何百人の敵でも追い払う。飛ぶ際に稲妻のような光を放ちながら光の尾をひいて飛び回る。また刀の出す「カタカタ」という不気味な音を聞くと敵が逃げ出すという。

ある村の酋長の家に安置されていた刀。エピタムは1人の英雄の武器ではなく、その村の老人たちだけが知っている「祈り（＝制御方法）」にて運用されていた。しかし老人たちが亡くなって祈りを知る者がいなくなると暴走を始め、村人が神に縋って解決法を得るまでに多くの人間を喰らったという。その際の「稲妻のような光を放つ」「音を鳴らす」という伝承から能力が形作られた。

・能力：特定の担い手も「祈り」を知る者もいない為、制御ができない。一度鞘から抜かれれば人間を喰らい続け何をしても止まらない。ただし応急処置のような方法は存在する。この刀は人を食べない時は石を食べていたと言われており、「石」の近くにいれば僅かな間だけ鎮めることができる。

この刀の鳴らす音を聞いた相手の戦意を削ることができ、敵のパラメータをワンランク低下させる。この宝具の担い手がサーヴァントであった場合、担い手とそのマスターのパラメータ低下は発生しない。

：「遍し守り（エッケザックス）を貫くもの」（あまねしまもりをつらぬくもの）

ゲルマンの伝承「シドレクス・サガ」に登場する剣。

ディートリッヒが巨人エッケを倒して手に入れた「エッケの剣（サクス）」

という意味の名前の剣。この剣にはどんな丈夫な楯でも耐えられないという。

・能力：この宝具よりもランクの低い魔術やスキル・宝具による防御を破壊・無視してダメージを与える。ランクを上回る防御でも「（筋力値＋魔力値）×５０％」の貫通ダメージを対象に与える。ただしやはり「アヴァロン」は例外。

それでは次回！

―１０話　オリジナル宝具その３（後書き）

第７９話はまだ書き始めていません。これからです。お楽しみに。

第７９話　嘘（前書き）

・３４巻で「墓所の主」が登場したので、前回のあとがきで言ったネタバレ云々の心配がなくなりました。いや良かった。
　そもそも「墓所の主」という名前だけなんですけどね、今話に出る彼女の情報は。王家の血縁だとか、実はあの人こそパクティオー制度の元になった伝説の魔法使い「■■■■」なんじゃないか、という話は今回出ませんので。

・ＫＣ３４巻にて、遂に出たぜ　ガトウ直伝無音拳！　そして登場セクストゥム！！
　某感想サイトに「別人とはいえ、あのフェイト（＝セクストゥム）を脱がすとは！　流石だぜ赤松先生……！」みたいなコメントがありましたｗ

　ああ、早く魔法世界編書きてぇ……！！

無駄話はここまでにして。それでは第７９話、どうぞ！

第７９話　嘘

――気がつけば士郎は、先程とは違う場所に立っていた。

「――――――――……？」

時刻は朝。タイルの敷かれた街道。立ち並ぶ街灯。レンガ造りの建物。洋風の街並み。

（…何処だ此処は？）

だが士郎は、ここに見覚えがあるような――

《学園生徒の皆さん、こちらは生活指導委員会です。今週は遅刻者ゼロ週間。始業ベルまで１０分を切りました　急ぎましょう》

「え？」

ドドドドドドドドドドドドドド

『遅刻遅刻ーーーー！！』

『急げーー！！』

学生が大通りに溢れ返るように走っている。路面電車に掴まって移動する者、移動購買部なるものからパンを買う者など、急いでいる割に余裕な様子を見せる者が多い。
しかし遅刻しかねないというこの状況にしっかり危機感を持っている真面目な生徒も、
毎日この時間帯に登校していては無意味なのだが――

（え……いや、ちょっ待っ……！）

困惑しながらも思考を回し、何かを探すように辺りを見渡して――

「…世界樹……」

正式名称『神木・蟠桃』、通称『世界樹』。樹高２７０ｍにも及ぶ巨大な「魔法の樹」。
……それが意味するのは。

「まさか此処は、麻帆――」

「シ――ロウッ！　どうしたの？」

――――――――――――――――――――――――。

今度こそ思考が停止した。

腰まで届く銀糸の長髪。／あの時、それは瓦礫の下で煤けていた。
血のような紅い瞳。／あの時、それは生気もなく濁っていた。
雪のように白い肌。／あの時は、血の気の無い不気味な白さだった。
身長は記憶よりも高く、／８歳の俺より少し大きい程度だった筈だ。
顔立ちは思い出と違って大人びている。／まだ、彼女は１１歳だった筈だ。

待て。ちょっと待ってくれ。時間を、少しだけ、待って、考える、
待て、時間を、待て、待って、待てって、待て待て待て待て待て待て
て待て待て待て待て待て待て待て、待っ

「早くしないと遅刻しちゃうよ？　シロウ♪」

姉さん。

士郎の目の前にいた人物は――――――衛宮イリヤスフィール。

◇――――――◇――――――◇

「衛宮士郎は8歳の折、テロに巻き込まれて家族皆と死別しているポヨ。それは大きなトラウマとなり彼は精神を患った。彼は12の歳になるまで学校にも通っていなかったんだポョ。
彼(か)の為に形成される≪完全なる世界(コズモ・エンテレケィア)≫、それがどんな世界か…想像は容易い」

ザジの姉なる人物はそう言って地面に突っ伏す士郎を見下ろす。
≪完全なる世界≫を模したアーティファクト『見果てぬ夢』は、幻想の存在である魔法世界人ではない「人間」を肉体までは取り込めない。
ただしその精神――――魂を連れ去って封じ込める。倒れている士郎は唯の抜け殻だ。

「そこまで調べておいての「実験」というわけか……。お主、悪辣じゃの」

ザジの姉に言葉を返したのは、黒いローブのフードを目深に被った人物。
子供のような身長で、見様によっては老婆にも小柄な少女のようにも見える。

彼女こそ『墓守り人の宮殿』の管理者にして守護者――――「墓所の主」。

『墓守り人の宮殿』はウェスペルタティア王国の代々の王族が眠る巨大な墓。
それを守る為に彼女、「墓所の主」のような役職が生まれた。死後の王族を守るという重要な役目を担った彼らは、とある時代には強大な権力を握ったとすら言われる。

故に『墓守り人の宮殿』。その名は彼らが全盛を誇った名残りなのだ。

「世界を救うためには、多少の犠牲には目を瞑るしかないポヨ」

ザジ姉の指が甲高い音と共に伸びて鋭利な刃に変化する。今の彼女の両手はまるで鉤爪。そしてそれが士郎の首に当てられる。

「さよなら衛宮士郎、今まで疲れたろう。其処は君を優しく包み込んでくれる楽園だ」

彼女は腕に力を込める。その爪が、士郎の首を――――

「安からに眠るといい」

第７９話　嘘

「え、あ、いや、何でもないよ」
「ふぅ～ん、そう？　何か悩み事とかあるなら言ってね？　私はシロウのお姉ちゃんなんだから♪」
……そうだ、何を混乱していたんだ俺は？　目の前にいるのは俺の実の姉じゃないか。
寝惚けてでもいたのか、春の陽気にやられたか。
「あ～あ。就職どーしよっかなー。ニホンは不景気で就職難だし、そもそも何がしたいのかわかんないな～」
「……まだ進路決めてなかったのか」
姉さんは麻帆大４年生。今年で学生を卒業して社会に出ることになる。
３つ下の俺は麻帆大工学部の１年生だ。毎朝途中までは一緒に登校している。
「姉弟じゃなかったらシロウのトコに永久就職できたのにぃ」
「ヲイ」
今年で２２になる女性がンなコト言うんじゃないこのブラコン。
「お母様に相談してみようかな～。あれ、いつ頃　帰って来るんだっけ？」
「確か昼過ぎ頃……だろ。放課後に学園長室　行くように言われたし」
「あーそうそう！　えへへ～、母様とキリツグ元気かなぁー」
親父も「お父様」って呼んでやれよ……。結構落ち込んでるぞ。

親父曰くアハト爺ちゃんの所為らしいが俺はそう思わない。
母さんが親父を「切嗣」って呼ぶのを見て育ったからってだけの話じゃないのか？

「あ、ここでお別れだね。じゃあねシロウ！　大学の勉強、しっかり頑張りなさい♪」
「ぐっ……善処します……」

姉さんは笑顔で手を振って俺と別れた。……はぁ、ホントやめて欲しいな、絶世の美女だって自覚を持って欲しい。周りの男どもの射殺さんばかりの視線が痛いんだよ……。

◆――――――――――◆――――――――――◆

放課後。

「やほ――っ！　シロウ！　姉様――っ！！」
「お？」

声のした方に顔を向けると、木乃香と刹那がやって来た。

「あら　どうしたの？　2人して」
「切嗣はんとアイリさんと一緒にウチのお父様も来てるんやて♪」
「へー、そうなのか」
「ハイ、先ほど連絡が入ったばかりですが。そして皆様方は本校舎の学園長室にいらっしゃると」

そりゃ良かった。女子中等部の学園長室に行くのは落ち着かないからな。

「ていうかさ木乃香、何で俺だけ呼び捨てなんだよ？」
「？？　シロウはシロウやん？」
「そういうコトよシロウ、コノカの言う通り！」

「姉様！」
「コノカ！」

「いや、なんでさ」

ワケがわからん。つーか道のド真ん中で美女と美少女が抱き合うな、周りの男子がちらちら見てるぞ。一部鼻息の荒い女子もいるが。

「士郎さん、あまりお気になさらず……」

ああ刹那、俺に気を配ってくれるのなんてお前くらいだよ。衛宮家の男子はヒエラルキーが下級だからなぁ……ぐすっ。
よし、良い子は頭を撫でてあげよう。うりうり。

――――――――――――――――――――。

今、隣を通り過ぎた誰か。

その金色は、俺の目を釘付けにした。

「――――――エヴァ」

知らず俺は、その言葉を口にした。
踝にまで届く金の長髪。小学生のように小柄で可憐に映る、まるで人形のような少女。

「……？」

横を通り過ぎるだけだった筈の少女は俺の声で足を止めた。
鮮やかな青い瞳が、俺を見て快訝な色を浮かべている。

「……誰だ？　何処かで会ったか？」

その一言で息が止まった。

「悪いが、生憎と私は知らんな。他人の空似というコトもある。誰かと間違えているのではないか？　…行くぞ茶々丸」
「はい、マスター」

その少女は何事もなかったかのように去って行く。
だが彼女が完全に立ち去った後も、俺は呆然と立ち尽くしたままだ

った。

「シロウ、なにあの娘？　知り合い？」
「あれ、ウチのクラスのエヴァちゃんやん。会ったことあるん？」
ない……筈だ。

そうだ、会ったことも話したこともない、知らない女の子の筈だ。
なのに。

彼女に「誰だ？」と言われただけで。
悲しくて、寂しくて、虚しくて、悔しくて
こんなにも苦しいのは、何故だろう――？

――亀裂が走る。
――違和感が燻り始める。

◆――――――◆――――――◆

「近衛翁、お茶のお代わりはどうですか？」

「おおスマンのぅアイリ殿。客人にそのような事をさせてしまって」

現在、学園長室では４人の人間が集まって談笑していた。

「しかし…あの子らも大きくなったのう」

近右衛門は豊かな顎鬚を梳いて笑う。

「ええ本当に。木乃香も昔は「お父様」と言って私にくっついてばかりだったのに……」

詠春も穏やかな表情を浮かべる。

「ええ、子供が育つのはあっという間ですね」

イリヤと瓜二つの女性。イリヤと士郎の母親、アイリスフィールが顔を綻ばせた。

「くそう詠春……僕だって…僕だってイリヤに「お父様」って呼ばれたいのに……！」

この　ボサボサの黒髪に黒いスーツ、不精髭の男性が２人の父親・衛宮切嗣。

落ち込む彼の肩を叩いて詠春が慰めていた。

「これも皆　義父さんの所為だ……あのジジイ、イリヤの前で僕の悪口ばかり」

「分かります、分かりますよ切嗣。私も義理の父には本当に参っていまして…」

「ムコ殿、ワシここにいるんじゃが」

「キリツグ――――――っ！！」

ドアをバンッ！と勢いよく開けてオヤジに飛びつくイリヤ。士郎は思わずこめかみを押さえる。頭が痛い。

（ダメだ…この姉、どう見ても成人している女性に見えない……！）

そんな士郎の服の袖を、木乃香がくいっと引っ張った。

「だいじょーぶやえシロウ。ウチ姉様のあーゆーとコ好きやから♪」

「社会に出れば自然と成人らしくなるものです。気にし過ぎる必要はないと思いますよ」

心優しい幼馴染みを持って幸せだと、士郎は密かに目尻を押さえて涙した。

◆――――――◆――――――◆

『せっかく桜が咲いてる時に来たんだから、花見でもしなきゃ損でしょ♪

ここをまっすぐ歩いて行くと川沿いの桜並木が見えてくるのよ！

川面に映った桜も、散った花びらが浮いてるのもとてもキレイなの！　人がほとんど来ない穴場なのよ』

家族水入らずで夕食をとり、日もすっかり落ちた頃。俺たちは姉さ

んの提案で川沿いの桜並木に足を向けていた。

「士郎、イリヤを甘やかしてない？」

「む。母様それどういうコト？」

他愛もない会話をしながら道を歩く。

「だってあなた自炊しないじゃない。食事時はいつも士郎の寮部屋に上がり込んでるでしょう？」

「うっ」

「駄目だよイリヤ、あと1年で大学を出るんだ。士郎に甘えてちゃいけないよ」

「キリツグまで……。だって、シロウのごはんが美味しいんだもん……」

「いや、褒められてるのは嬉しいんだが、それを理由に自炊しないっていうのは……」

「だって！　可愛い弟の部屋にいけば何もしなくてもそこらへんのお店より美味しいごはんが出てくるのよ!?　自炊する気もなくなって当然だわ！　責任取りなさいよシロ――――!!」

「わかった。明日から姉さんの食事は一切作らないことにする」

「そうだね、やっぱり女の子は料理を作れる方が家庭的で魅力的だと思うよ」

「花嫁修行にもなるわね♪」

「……ひっく……ふぇぐ……文句言ってごめんなさい、明日からすぐっていうのはやめてお願い……」

ふっ、勝った。餌付けの力を思い知ったか。皆に見えない角度で拳をグッと握った。

しかしマジで我が姉が２１歳に見えない。主に中身が。

ザァッと風が吹き、桜吹雪が目に留まって一同の視線が前を向く。

目の前には、桜の木が広がっていた。

桜の枝が風に靡いて揺れている。その度に桜の花弁が飛んで舞う。

散った花びらは川面に落ちて、花弁の絨毯が出来ていた。

「ね？　とってもきれいでしょう？」

「まあ、ホントね♪」

「いいね、綺麗な夜桜だ」

どうやら皆満足のようだ。

俺もここは　初めて来たが／毎日通っている　が、この桜は本当に

――――

「――――え……？」

そうここは、いつも通っていた桜並木。いつも通り過ぎていく景色。

今年の春も毎日そうして歩いてた。■■■のいる家に帰る道――――。

――――亀裂が走る。

――――違和感が増していく。

『フン、他愛のない。数だけの雑魚が私の手間を取らせるな』

『お願いします。俺を、貴女の従者にしてください』

『仮契約カード……これでめでたく、お前の従者ってワケだな』
『フン。あくまで仮の契約だ。使えないと思ったらいつでも破棄してやる。
だが、どうしてもと言うのなら――――……背中くらいは、護らせてやる』

『俺は、弱い自分が大嫌いだった。大切な誰かを守れる力が欲しかった』
『だから。――――――――の強さに、俺は憧れたんだ。
いつか彼女のように。いつか彼女に並び立てるような存在になりたいと――――』

――亀裂が走る。歯車が狂い出す。
――思い出せ。〝アイツ〟は、誰だ――――

「どうしたのシロウ？」

姉さんが俺の顔を覗きこむ……「姉さん」。

そうだ、俺には3つ歳上の姉がいる。／違う。
隣りには親父がいる。／違う。
その隣には母さんがいる。／違う。

――――――――違う――――……みんな、『死んだ』んだ……
……。

――亀裂が走る。歯車が狂い出す。世界にノイズが混ざり始める。

親父は死んだ。母さんも死んだ。姉さんも死んだ。みんな死んだ。
死んだんだ……もういないのに。なのに。

「姉さん」が俺を心配そうに見つめる。「親父」と「母さん」もそうして俺を見ている。

――――――――――――――――巫山戯るな。

「シロウ？　ホントにどうし――――」
「五月蠅い」

それは俺の家族の顔だ。それは俺の家族の目だ。それは俺の家族の声だ。
その顔で笑うんじゃない。その目で俺を見るんじゃない。その声で

「俺の名を、呼ぶんじゃない――――――――！！！」

瞬間。≪完全なる世界≫はその色彩をモノクロに染め上げた。

≪完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）≫

それは「最善の可能世界」
それは「有り得たかもしれない」幸福な現実を作り出す楽園

その異界に、魔法世界の全ての人間を封じ込める。
そこは誰もが幸福でいられる場所。
そこはみんなが幸せになれる世界。

それはまるでエミヤシロウ／アーチャーが夢見た世界。
精神が摩耗するまで追い求めて終ぞ辿り着けなかった理想の具現。
それをまるで嘘のように容易く実現させるモノ。

――だからこそ。その嘘を認めることなんて、出来ない。

だって…そうなったら嘘になる。
あの涙も、あの痛みも
胸を抉った、あの現実の冷たさも。

――――――――――――みんな、みんな嘘になる――――。

こんな、こんなものが「完全なる世界」だと？

幸福？　理想？　平和？　救い？　「世界を救う」？

こんな、こんなモノがお前らの理想だと――――言うのなら。

「――――その理想、俺がこの手で沈めてやるよ……！！」

全てが停止した世界が目に映る。――――ああ目障りだ。壊してやるよこんな世界。

世界を破壊する手段など士郎にはひとつしかない――――「対界宝具」。

まだ混沌しか存在しなかった世界を両断し、天と地を生み出した名前のない剣。

それは神々の手によって、暴君であり最高の賢帝であるウルクの王に渡された。

彼はこの剣をこう呼んだ――――――乖離剣（かいりけん）エア、と。

「投影（トレース・オン）、開始――――――――――！！」

◇――――――――――◇――――――――――◇

「どうした？」

墓所の主が声をかける。士郎の首に爪をかけたまま動きを止めた旧友に。

「……」

左手を通常の指に戻し、懐に手を入れる。

――――ピシッ……。

取り出した『見果てぬ夢』のカードは……罅だらけの無残な姿になっていた。

「……何事か起きたか？」

墓所の主は冷静に言葉を紡ぐが、ザジの姉は困惑を隠せなかった。

「……ありえない。≪完全なる世界≫が耐えられないなど……！」

（衛宮士郎……この男　何者――――！？）

衛宮士郎に許された唯一の魔術、固有結界。

それは心象風景の具現であり　魂の設計図「世界図」。心に宿るひとつの世界。

『造物主』が造り出した魔法世界と違い、アーティファクトが造り出した≪完全なる世界≫は世界としては不安定で、不完全な権能しか持ちえない。
魂の内にひとつの「世界」を内包する士郎の魂の巨きさに、矮小な世界は軋みと悲鳴をあげていた。

「……キミは危険だポヨ。やはりキミにはここで舞台から降りて貰う」
「無理な相談だな、それは」

――ヒタリ。

ザジの姉、彼女の首に紅い刀身が当てられる。同時。
彼女の左手のアーティファクトカードが粉々に砕け散った。

「――馬鹿な」

背後に立つのは、目覚めた衛宮士郎。その手が持つのは黄金の柄と真紅の刀身を持つ剣。まるで筒のような刀身、剣としては異様な剣。
それは対界宝具・乖離剣（エア）。

エアは世界を断裂した剣。空間を切断する力を持つがそれだけではない。
世界を開闢したが故に、この剣の担い手はエアを
「創生の歴史を、真実を識る者」――「創世記叙事詩（エヌマ・エリシュ）」とも呼んだ。

創世紀を記した法典であり、世界を切り裂く神託の剣。
刀身に刻まれた法典は空間を支配し、刀身から吹き荒れる風は世界を軋る。

空間に対する王権。領域支配。空間断裂。それがエアの能力。
――――――――故に。どんな空間（せかい）もこの剣の前では無力と化す。

「……ふ、ふふ…フハハハ……！　なるほどポヨポヨ、私はキミを見縊っていた」

「悪いな、これ以上なく胸クソ悪い……最高の悪夢から目覚めたばかりなんでね。素直にその讃辞を受け取れるような気分じゃない」

彼女は士郎への評価を改め　愉しそうに声をあげた。無駄な会話に付き合うつもりは無いと、ガシャッと音をたてて士郎はエアを握り直す。

「ポョ、アレを悪夢と言うのか。私の予想では家族に再会できたのではと思っていたが」

「巫山戯るな。死んだ人間に会えるわけがない。あんなもの…俺の家族に対する侮辱だ」

確かに、皆が生きていたらああなっていたのかもしれないと、心の何処かで思っていた。
でも。それを誰よりも望んでいたのは――――俺じゃないだろう。

「ああ。もう一度言ってやろうか。――――最高の悪夢だったぜ」

墓所の主の表情は見えない。だがザジの姉は、まるで母親が自分の子供を見るかのように、穏やかに目を細めた。

「そうか……君には。その壊れた心に、空っぽの器に愛を注いでくれる誰かが……いたポヨね」

ありえたかもしれない…だからこそありえない夢などよりも。今この世界を生きていたいと感じさせてくれる……誰かが。

憎むにはこの世界は美しすぎる。愛するにはこの世界は醜すぎる。

――それでも、世界は美しい。

（……だが。全ての者がキミのように幸運な者だけではない。世界はそんなに優しくはないんだ）

「ひとつだけ言っておくポョ。ここは旧オスティアの魔法災害地域のほぼ中心部。

私のアーティファクトは一瞬でも発動できれば魂を封じられるが……ポヨ。キミのその剣はどうなのかな？」

「！！」

――ドガァッ！！！

突然見えない力に押し退けられて、士郎は後方に吹き飛ばされる。

「――――グッ――――ッ！！」

エアは先程の会話の最中に霧散し始めて、完全に消滅した。

魔力で編まれた投影品は、魔力消失現象に逆らえない――。

「――――くっ……！」

体勢を整えてむりやり着地するも、視線を向けた時にあの２人組は居なかった――――

◇――――◇――――◇

……ようやく乖離剣（カギ）を引き当てたか。待ちくたびれたぞ？

さて…説明してやるのも面倒だ。一度しか言わぬからよく覚えておくがいい。

――――並行世界（ほかの）ではどうだったか知らぬが、少なくともこの世界において

貴様は贋作者（フェイカー）などではない。

その力は”Ｏｒｂｉｓ（オルビス）　Ａｄｕｌｔｅｒｉｎａ（アドゥルテリーナ）”。

――――――自由に世界を描き出し、自在に世界を書き換える。

そうだ。貴様は貴様の作り出す結界（せかい）の中において

ヴィシュヴァカルマンであり、デミウルゴスでもあり、ライフメイカー足り得るのだ。

喜べ。これで貴様は、スタートラインに立ったのだ――――。

◇――――――――――◇――――――――――◇

「ああ、そういうことか……」

目が覚めて開口一番、士郎はそう呟いた。

今年の春、大停電の夜。エヴァに橋の上から湖に突き落されて風邪をひいた。

さっきの夢は、その時見た夢の続きなんだと理解した。

しかし…今回は魔法世界(こっち)に来てから寝てばかりのような気がする。

――――ガチャ。

「お。目ェ覚めたか」

腕に紙袋を抱えた師匠が入って来た。

「ビックリしたぜ、宿に帰って来たと思ったら熱出してばたーん！

だモンよ」

ああそうだ、あの後やたら頭が痛くてすぐ帰ったんだ。その後の意識がないのはそういうことなんだろう。

「ヤバイ風土病の類じゃねーかと思って医者に見せたが原因は分かんなかったそうだ。何か変なモン拾って食ったか？」

「俺を何だと思ってんですか。犬じゃあるまいし」

その犬でもヤバイもんは食わんよ。

「そうだな、そろそろフィンレイ嬢ちゃんが来る頃か」

「……？　何でフィンが？」

「お前が倒れたって昨日　電話で軽ーく話したからな。多分来んじゃね？」

「いやいやいや、何でわざわざそんな連絡入れるんですか。そもそも今日はアイツ勤務が……って昨日？　あれ、俺どれくらい寝てたんですか！？」

「おう、丁度いま午後の5時だ」

（……ほぼ丸1日ぶっ倒れてたのか……）

――ドタンッ！バタンッ！！……パタパタパタドタドタドタ……！！

1階から騒がしい物音が聞こえる。ちなみに今2人が居るこの部屋は2階だ。

「噂をすれば何とやらってな」

「……いや、流石に騎士団の仕事を休んで来るはずな」

――――――バタ――ンッッ！！！

「エミヤァアアアッッ！！　まぁた無茶しおってこンの阿呆ォ――――――――！！！！」

結え上げた銀髪を振り乱して、私服姿のフィンレイ・チェンバレンがドアをぶち破った。

（……来たよ。）

師匠、なにニヤニヤ笑ってんすか。

◇――――――◇――――――◇

ここから世界は分岐する。

片や正史に繋がる未来。そしてもうひとつは存在しない――消滅した未来。

士郎はベッドで上半身だけ起こして、フィンが剥いた林檎を大人しく食べている。

フィンは今も林檎を剥き続け、いま8個目に手を伸ばした……も

う食えないです。

「……仕事はいいのか？」

「勘違いするな、お前の見舞いの為に来たワケじゃない。総長（グランドマスター）から特別に休暇を貰って来た」

（…セラスさんも一枚噛んでる？　何かあったのか？）

「ごくろーさんフィンレイ嬢ちゃん♪　で、どーだった？　俺ァどうでもいいんだが、コイツは違うだろうからな」

俺を見て師匠が言う。ホントに何だ？　一体何事……。

「……エミヤ、とんでもないことになったぞ」

林檎とナイフを置いて、真剣な表情で俺を見る。

「単刀直入に言う。旧世界で魔法がばれた。その発生地、原因とも言うべき場所は……お前の居た、麻帆良だ」

こうして「衛宮士郎」は、消滅への道を歩み始める――。

◇――――――◇――――――◇

ここから世界は分岐する。

片や消滅した未来。そしてもうひとつは――――繋がれた未来。

「……なんでさ」

何故か俺は今、エヴァの熱い抱擁を受けている。身長が足りていないので俺にしがみつくような格好になっているが。

「ど、どうしたエヴァ？」

「……」

困った。怒っているわけでもないようだし、原因がわからんことには対処のしようがない。同じく理由はわからんが茶々丸とチャチャゼロの助けは期待できなさそうだし。

チクショウ、誰だよこの事態の原因は……。

（……しかし…）

コイツがこんな状態になるなんて、よっぽど何かが堪えたのだろう。でも俺は口下手だし、うまい事言って励ましたりはできないしな……。

（……でも、言いたいことならある。）

”あの世界”から何度も俺を掬い上げようとしてくれたのは……間違いなくコイツで。

あそこで俺が、一番後悔したのは――――

――――この時、誓いは交わされた。

これが麻帆良祭と、その陰で行われた戦いに関わらなかった男の１０日間。

第７９話　嘘（後書き）

《おまけ・現役時代の魔術師殺し（マーダー・メイガス）》

「クロー・ト・クロノ・ス・フォルトゥーナ。　一番（ウヌム）・二番（ドゥオ）・三番（トリア）・四番（クァルト）・解放（リラーゼ）！」

地面に撃ちつけられた魔弾、それらが内包する呪いが解放される。
魔弾同士が光の線で互いを結び、光の四角形（スクエア）が敵の周囲を取り囲む。

「『固有時操作結界（ムーヴェオ・プロパリウス・テンパス）』――――――十重停滞（ディカプル・スタッグネイト）」

『魔術師殺し』とは戦うな。もしも戦うことがあるのなら。
罠に嵌められ、魔法を殺され、己が身に流れる時間をいとも容易く強奪される。

切嗣の『固有時操作』に侵された憐れな男は、１／１０にまで時間経過を制限された。
彼はいま、自分の身に何が起こっているすら分かるまい。

……ジャカ……ガキンッ！

握る銃の弾倉にその魔弾を装填する。『火炎の魔弾・燃える天空（ピルラム・ウーラ・ニア・フロゴーシス）』。

――ダンッ！――ダダンッ――ダンッ！！――

何の躊躇いもなく敵に銃弾を撃ち込む。切嗣の銃弾は結界に侵入すると、敵と同じようにその時間を停滞させてスローになる。
そして――――死の予言が宣告された。

「――――制御解除（リラーゼ・アールテルエーミッタム）。解放」

それは時間遅延解除の呪文と、火炎を解放する言霊。「時間」が戻って来た時にはもう遅い。４発の『燃える天空』が、彼の敵を焼くだろう――――

――――唸る轟音。燃ゆる立つ火柱。天すら焦がす赤光（しゃっこう）を背負い、衛宮切嗣は紫煙を吐いて戦場に背を向けた――――。

＊始動キーの出典は「クロートー」「クロノス」「フォルトゥーナ」の三神から。

それぞれ「運命（寿命）」「時間」「運命」を司る。ちなみに左から女神、男神、女神である。何か舞弥、切嗣、アイリみたいな並び方な気がする。

あと、「固有時制御」じゃなくて『固有時操作』になっているのは仕様です。間違えてるワケじゃないです。

～補足・解説～

：衛宮イリヤスフィール（≪完全なる世界≫Ｖｅｒ．）

２１歳。１１月２０日の誕生日で２２歳になる大学４年生。髪型と表情などの雰囲気以外はアイリスフィールにそっくり。だが身長はアイリより低く、スリーサイズも全てアイリより小さい。

大人版で登場。しかし内面も年相応にしてしまうとイリヤっぽさが感じられなくなると思い、成人女性らしからぬ幼さ・無邪気さのある性格にしました。

：衛宮夫妻（≪完全なる世界≫Ｖｅｒ．）
　この世界でも切嗣は若い頃荒れていたので一箇所に留まれない。近右衛門がそのコネと権力をもってしても麻帆良に匿うことは出来なかった。そのためイリヤ・士郎だけを麻帆良に預け、夫婦で転々とした生活を送っている。
　ちなみに子供達が２人とも成人する頃合いになったら「衛宮切嗣は死んだ」という情報を流して麻帆良に隠居する予定だった。アイリは麻帆良に子供達だけを置いて行きたくなかったが、足手纏いになるかもしれなくとも夫を支える為に共に逃亡生活を送ることを選んだ。

：親父曰くアハト爺ちゃんの所為らしいが俺はそう思わない。
　この小説の設定ではアイリの父親がユーブスタクハイトで、彼に対して「アハト翁」という呼び名はありません。しかし幼い頃のイリヤと士郎が「ユーブスタクハイト」と発音出来なかった為、彼と同じ名前を持つ８代目当主の呼び名「アハト」を持ち出して呼ばせた。という設定。

：ホントやめて欲しいな、絶世の美女だって自覚を持って欲しい。
　通称「麻帆良の女神」。彼氏と勘違いされて恨まれたり、弟だと言っても「羨ましい」と逆恨みされる。夢の中でさえ、実の姉すら女難に一役買われる士郎。不憫。

：「やほ――っ！　シロウ！　姉様――っ！！」
　声のした方に顔を向けると、木乃香と刹那がやって来た。
・詠春と切嗣が友人同士なので、≪完全なる世界≫の中でも木乃香・刹那とは幼馴染み。

：「姉様！」「コノカ！」
　なんかウマが合うらしい。

：「くそう詠春……僕だって…僕だってイリヤに「お父様」って呼ばれたいのに……！」

娘バカ。え？息子はどうしたって？　野郎は甘やかさぬ。でもちゃんと愛してる。

：そうここは、いつも通っていた桜並木。いつも通り過ぎる景色。

KC3巻より。でもあの道は茶々丸が帰りに歩いていただけで、エヴァの家まで行く道ではない可能性アリ。教会で野良猫にエサやるために通ってただけかも。

：それはまるでエミヤシロウ／アーチャーが夢見た世界。

正確には≪完全なる世界≫＝「アーチャーの理想」じゃないんですけどね。ていうかそんなコト書いたらアーチャーに失礼です。だから「まるで」って付けてます。

：「そうか……君には。壊れた心に息を吹き込み、空っぽの器に愛を注いでくれる誰かが……いたポヨね」

木乃香、刹那、詠春、近右衛門、メルディアナ魔法学校長、エレナ（過去編）、ドナ（過去編）、ラカン、セラス、フィン、エヴァ。支えてくれる誰かがいる。それが士郎にとって生きる力になったのだと信じたい。……小説の人物に何言ってんだ俺は。

：突然見えない力に押し退けられて、士郎は後方に吹き飛ばされる。

「あれ？　魔力消失現象で魔法の類は使えないんじゃないの？」と思った方、それと「見えない力」と聞いて原作からポヨの力を連想した人。士郎を吹き飛ばしたのはポヨではなく墓所の主です。王家の魔力はマジックキャンセルの影響を受けませんから。

：視線を向けた時にあの2人組は居なかった――――

元々、この2人が落ち合おうとした場所に偶然士郎がやって来てしまっただけの話で、これ以上の接触は無意味と判断して撤退しました。

‥そうだ。貴様は貴様の作り出す結界の中においてヴィシュヴァカルマンであり、デミウルゴスでもあり、ライフメイカー足り得るのだ――――。

ヴィシュヴァカルマン…古ヴェーダ神話における創造神。後に工匠神となった。
デミウルゴス…ギリシア思想における「世界を作る職人」という意味の名前の創造神。
ライフメイカー…言わずと知れた有名なＳＦ小説の用語、ではない。

一応これで裏五章、終了！　次回から「第六章　夏休み編」に入ります。
最初は終業式の辺りからですが…次話の構想が全くできていないので予告ができないｗ
つまり次回の更新は未定です。気長にお待ちくだされば幸いです。

それでは次回！！

―１１話　設定８　オリジナルアーティファクト　＊６／２２追加（前書き）

活動報告に書きました、６月上旬（１０日ころ？）まで続く『大学・春の課題☆地獄２０１１～勿論テストもいっぱいあるよ～』の中間報告です。
第一の峠を越えました。でもまだ忙しいので小説書けない。

提出直前に課題の書式を間違えてる事に気づいて「あーこの教科の単位落としたわー」と思ったら、「間違ってたけど、出来がいいからオマケしてあげる」的なことを言われ、来週までやり直してくれれば減点なし、やり直してこなくても僅かな減点で受け取ってくれるそうです。
・・・努力って報われるんだね・・・！

まだまだ忙しいので更新は難しく、今回の番外話を投稿します。
どうか気長にお待ち頂ければと。

次回から「夏休み編」が始まりますが、次話・第８０話は終業式、８１話はネギま部（仮）の話でシリアスです。
はっちゃけサマーバケーションなお話は８２話以降になりそうです。どうかお楽しみに。

―11話　設定8　オリジナルアーティファクト　＊6／22追加

今話の内容は本編とほぼ関わりがないのですが、ひとつだけ本編に登場しているアーティファクトがあり、その解説を含んでいるため設定話としました。

まだまだアイデアの練り込みが甘いものの、所詮本編には登場しないのでこの程度のクオリティでいいでしょ（↑オイ）。

タイトル通り、佐藤Sオリジナルのアーティファクトズです。よければ読んでいってください。

1）『大憲章（マグナ＝カルタ）』

深緑のカバー装丁が施された薄い本のようなＡＦ。このＡＦの使用説明項・前文が書かれたページを除き６３のページがある。この６３Ｐには契約書のような書式が記載されている。

・能力

行動封印の呪いを与える、契約系魔法具（アーティファクト）。

相手を強制契約で縛り一定の行動を封印する能力。しかしそれと引き換えに自分にもその効力が及んでしまう。発動の際に相手の名前を唱えなければならず、名前が分からなければ能力を使用できない。さらに契約の際に、その内容を”相手に聞こえるように”言わなければならない。

例）「〇〇〇さん！　アナタと私の『魔法の使用』を禁じます！」と言えば、発動者（この時点で”締結者”）がこの強制契約を破棄しない限り、その契約効果が永久に履行・持続される。

ちなみに例に挙げたこの契約（魔法禁止）は締結者が魔法を使え

なくても履行可能。つまり封印する行動、契約内容によっては、相手にのみ制限をかける事が出来る。

契約を破棄したい場合は契約が記された『大憲章』のページを燃やせばよい。但し一度燃やしたページは二度と復活せず補充も出来ない。つまりこのＡＦは契約ページの数＝６３回までしか使えない。アーティファクトカードが死ぬとページ数がリセットされ、完全な状態で新たな担い手の元へ現れる。

・出典：「マグナ・カルタ」

大憲章。Ｍａｇｎａ－Ｃａｒｔａ。

１２１５年、イングランド王ジョンが封建貴族たちに強制されて承認、調印した文書。前文と６３条からなり、国王の徴税権の制限、法による支配などを明文化し、王権を制限、封建貴族の特権を再確認したもの。権利請願・権利章典とともに英国立憲制の発展に重要な役割を果たした。＊ＹＡＨＯＯ！辞書・大辞泉より。

２）『天翅の毒羽（デストロイング・エンジェル）』

使い手の背中に天使のような純白の四枚翼が現れる。肩甲骨の辺りに大きな翼が２枚、腰の辺りから小型の翼が２枚現れて飛行が可能になる。翼自体に飛行魔法を成す力があり、羽ばたかせるなどの操作はいらない。

・能力

飛行能力・状態異常付与系ＡＦ。羽根に攻撃力があり、翼から羽根を飛ばして攻撃する。翼を翳して防御することも可能。羽根には猛毒が含まれており、触れた者はその瞬間　毒に侵されてしまう。麻痺毒・神経毒などその他諸々、多種多様な毒を含んでいる。呪毒であるためレジスト・ディスペルは可能。

ただし毒羽を喰らわなくても無事では済まない。翼から抜けた羽

根の毒は少しずつ気化して周囲に散布・拡散・充満し、気づかぬうちに使い手以外の全てを侵食してゆく。毒の最大散布領域は直径９ｋｍ。
　一対多数の戦闘を得意とする広域戦術魔法具。

・出典：「ｄｅｓｔｒｏｙｉｎｇ　ａｎｇｅｌ」。猛毒性を持つ白色のキノコ。

３）『殺陣師（ヴィアム・ベッツリ）』
　装衣型アーティファクト。コジロー（＝小太郎）が着ていたような拳闘士の服装が装着される。Ｖｉａｍ　ｂｅｌｌｉ．＝「戦いの道」、直訳は「戦闘の方法」。

・能力
　敵の戦闘力を再現（コピー）する能力。３分間　敵の攻撃を受け続けなければ発動しない（防御・反撃してもよい）。
　３分かけて喰らった敵の動きを記憶し、完全に模倣して１０分間だけ再現する。コピー出来るのは発動直前に攻撃を受けた相手の能力のみ。使用者の身体能力や魔力がコピー対象より劣っていても、アーティファクトが周囲の魔力を吸収して自動で術者を強化する。魔法もＡＦが自動で使用してくれる。

・出典：「殺陣師（たてし）」。
　時代劇などで戦闘シーンの立ち回り＝殺陣の型を考案し、出演俳優に指導する専門家。

４）『見果てぬ夢』
　実体を持たないアーティファクト。発動した瞬間にアーティファ

クトカードが輝き、周囲の空間を依り代（媒体）にして異界＝「疑似・完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）」を形成する。

・能力
　発動時に放たれる閃光を見た人物の魂を異界に封じ込める。精度・質はともかく、展開される「疑似・完全なる世界」の性質はオリジナルと遜色ない。この異界に封じられた者は永遠に醒めない夢に生き続ける。有り得たかもしれない幸福な現実、「最善の可能世界」。描き出されるその世界を体験すれば現実を忘れ、脱出しようとする意思すら失う。その楽園からは、逃れ難い。

・出典：原作に登場するＡＦ『幻灯のサーカス』の試作品（プロトタイプ）。という設定。

・背景：
”黄昏の姫巫女”、”造物主”を欠いた状態で計画を進める為に研究・開発された、『”疑似・完全なる世界”を発生させるアーティファクト』。その実用化第一号。ようやく実用化に漕ぎ着けた段階で、完成と呼ぶには程遠い粗悪品。性能実験も不十分。
　取り敢えず形となった研究成果を友人に見せるべく、ポヨによって持ち出され、偶然遭遇した士郎が丁度良いとばかりに実験台にさせられた。その後エアによって破壊される。

５）『二重の黄金（ジェミィヌス・アウルム）』
　四葉のクローバーを模ったエメラルドのような翠水晶がついた金色の指輪。

・能力
　幸運値をＵＰさせる。

発動していなければただの指輪だが、発動すると装着者（ミニステル・マギ）とそのマスターの幸運値を、ＥＸ＋＋（↑こんなランクは無い。程度を表すとこのくらい、という例えです）まで上昇させる。その「幸運」が引き起こす現象は、周囲の事象を強制的に操作してでも発生する。そこまでいくともはや呪いの域。超幸運を持つ主従にしても、彼らに害を為そうとする者に対しても。

ただし。発動を解くと「発動中に訪れなかった不運」のツケが一気に回って来るという恐ろしい反動がついている。

・出典：「黄金律（Ｆａｔｅ）」、「黄金時代」、「四葉のクローバー」

『黄金律』

Ｆａｔｅに登場するスキル。人生においてどれほどお金が付いて回るかという宿命、金運における超幸運。哲学や宗教の黄金律のことではない。

『黄金時代』

全盛期、絶頂期のこと。

『四葉のクローバー』

言わずと知れた「幸運の象徴」。その葉は「希望」「信仰」「愛情」、そして４つ目の葉が「幸運」を表す。基督教でも幸運・幸福のしるしと言われている。

・『二重の黄金』は「黄金律（Ｆａｔｅ）」と「黄金時代」の『２つの黄金』から付けたネーミング。さらに言うと桜子のアーティファクトの能力が「マスターのＬＵＣＫ（幸運）値ＵＰ」らしいということで、それに触発されて作ってみた。

反動を除けばチートなアーティファクトになってしまいましたが。

＊以下、２０１１／６／２２に追加したもの。

6）『聖なる杯（アートグラフ）』
長高４ｍほどの巨大なトロフィー。見る者によってこのＡＦの色は変化する（本来は銀色）。
防御系ＡＦ。「聖杯」、それは神の子イエスの血を受けとめた杯。その名を冠するこのＡＦは「あらゆるものを受け止める力」を持つ。
この杯に零れ落ちたエネルギー（魔力や気）は吸収されてゼロになる。

7）『歌姫のため息（インジェミーシェ・ディーヴァ）』
プラチナカラーのマイク型ＡＦ。
音波攻撃を行う。さらに、このマイクで拡張された音声を聞いた者を催眠状態にして操る力を持つ。ただし使用者よりも魔力の少ない者にしか効果はない。
このマイクで歌を歌うと必ず周りに観客が集まる。

・歌姫のため息＝「Ｉｎｇｅｍｉｓｃｅ　Ｄｉｖａ.」

8）『オンキョウソウチ（ヴォイス・ボラーレ）』
一辺２ｍ程度の正方形のスピーカーが2つ出現する。プラチナカラーのラインが入った、ツヤなしブラックカラー。空中に浮遊しており、その上に乗って飛ぶことも可能（手すり付き）。
『歌姫のため息』とセットの魔法具で、同じアーティファクトカードから出現する。『歌姫のため息』の出力を強化し、射程距離・攻撃力・特殊効果を増幅させる。

・ヴォイス・ボラーレ＝「Ｖｏｉｃｅ　ｖｏｌａｒｅ.」＝「飛行

する声」

9）『開幕の鐘（オールウェイズ・ビギニング）』

漆塗りの木の柄がついた、ツヤのない金色のハンドベル。柄の先にはオレンジ色の飾り紐が付いている。

トラップ解除用アーティファクト。この鐘を鳴らすと待機中の魔法や魔方陣が強制的に発動する。喰らう前に発動させてしまうことで罠を回避するＡＦ。

このＡＦの音を聞いた魔法使いにも作用し、遅延呪文が一斉に発動（＝呪文が暴発）してしまう。暴発によるダメージに加え、魔力と精神力が急激に削られる。

・オールウェイズ・ビギニング＝「Ａｌｗａｙｓ　Ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ.」直訳は「常に始まり」。

ガンダムビッグエキスポ風に言うと「いつだってはじまりだ。」かっけー。

10）『カクレンボ（エト・クウァエリーテ・ヒーデ）』

ありきたりなアイデア。本来のアイデアはＡＦとして描写するには面倒なものだったので、要素を削っていったらこうなった。ちっ。

空間系アーティファクト。異空間を形成してそこに術者と対象者を閉じ込める。

空間内部にはシル〇ニアファミリーに登場するような、森に囲まれた赤い屋根の屋敷がある。脱出条件はふたつしかなく、１つ目は術者自身が解除すること。２つ目は、屋敷に隠れた術者を探し出してタッチし、「みーつけた（インヴェーニ）！」と言うこと。そして解除条件を対象に教えてから逃げなければならない。

・かくれんぼ＝エト・クウァエリーテ・ヒーデ＝「ｅｔ　ｑｕａｅｒｉｔｅ　Ｈｉｄｅ」
・「みーつけた！」＝インヴェーニ＝「”ｉｎｖｅｎｉ！”」

思いついてアイデアが増えたらまた追加するかも。それでは次回。

―11話　設定8　オリジナルアーティファクト　＊6／22追加（後書き）

忙しいッスよーマジで。大学生疲れるわー。

第80話は完成度60%、労力的な視点で見ると40%。

やっぱ原作ストーリーよりオリジナル展開書いた方が楽しいやー。

原作ストーリーに戻った途端　筆のスピードが落ちる下がるw

それでは次回。

ー12話　設定9　士郎のステータス？

＊第79話現在の士郎のステータス設定。一部以前との変更点アリ。

主人公：衛宮士郎
…とはいえ、名前と能力以外はオリ主。ネギま！世界出身の魔法使いで魔術師。

8歳で実の家族と死別し、「弱い自分」に嫌悪を抱くようになる。とはいえ自分のような凡人に何か出来るはずもないと、一般人として普通に生きてきた。しかし12歳のクリスマスの時　後にマスターとなるエヴァンジェリンと魔法を目撃し、「魔法があれば強くなれる」と考えて魔法使いを志す。

その数年後　友人を殺され、自らも臨死体験する。そのとき平行世界の自分と魂が同期して「固有結界」を通して魔術を会得した。そして再び自分の無力を痛感した士郎は「自分には価値がない」という考えを無意識に抱くようになり、自分より他人を優先するようになる。結果「まさか自分なんかが」という考えから、他人からの期待・信頼・好意に対して異常に鈍感になっている。
しかしその異常な感性は現在、エヴァンジェリンによって矯正されつつあるらしい。

「千の刃」ジャック・ラカンに師事し、魔法界では「無限の剣」という異名を執る。
木乃香やネギ達が何かに巻き込まれた際には「基本的に」自ら戦

うことはせず、当事者達に任せようとするが、荷が重いと判断すればその力を揮う。

第７８話で魔法世界の秘密を知り、『完全なる世界』（フェイト）の行う「救い」が正しいのかどうか迷い始める。しかし７９話で疑似≪完全なる世界≫を体験し、彼らの行いは救いなどではないと結論。彼らと敵対する道を選ぶ。

《ステータスデータ》

・年齢：１９歳　身長：１８４→１８６ｃｍ　体重：７４→７６ｋｇ

・魔力量（魔力容量）：木乃香の３／４程度→木乃香の2倍弱程度（まだ増加中）

さらに魔術回路の魔力伝導効率が上昇。投影に消費する魔力量が減少した。

《使用できる技法》

「魔術」

解析、強化、投影、固有結界、オーソドックスな魔術全般、「仇血剣製」

「魔法」

魔法学校卒業程度の魔法。得意属性は光・火・闇。

「固有魔法」

・『無銘の刀工（タクティキ・シディロルゴース）』

名称・詠唱呪文を変更。敵の使用した魔法や陰陽術の類を解析・投影して敵に反射する、迎撃魔法（カウンターマジック）。

Ｆａｔｅの魔術とネギま!の魔法をブレンドした技術のため、分類は「魔術＋魔法」。

・『剣製の凱歌（ヴィクトーリア・ブレイドワークス）』
固有結界「無限の剣製」を体内に展開した状態。魔法で制御術式を開発・使用して暴走（体中から剣が突き出るような症状）を抑制した。
肉体を剣と化して防御力・魔力・投影速度が上昇するが、発動中は副作用で髪が白髪に、肌が褐色に染まる。分類は「魔術＋魔法」。

・『■■■■■（オルビス・アドゥルテリーナ）』
≪完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）≫に魂を封じられ、そこから脱出する際に発生した「固有結界の異常」によって覚醒した能力。分類は「魔術＋魔法」。
詳細な設定は設定話をお楽しみに。

「気」
肉体に宿る”力”を燃焼させて使役する（＝気を練る）。基本的に体や武器に纏わせて強化する。

「咸卦法」
別名「気と魔力の合一（シュンタクシス・アンティケイメノイン）」、「究極技法（アルテマ・アート）」。反発する”気”と”魔力”を融合させた”咸卦の気”を体に供給する（纏う）。肉体強化、物理・魔法防御、加速効果、耐熱、耐寒、耐毒その他諸々の効果が得られる。
士郎はこれを１０数秒間のみ使用可能。「自分を無にする」という、この技法を会得するのに最も難しい関門は容易に越えたが、それを持続することに関して全く才能がなかった。

「瞬動術」

クイック・ムーブ。気もしくは魔力で強化した脚を使った高速移動術。加速動作を「入り」、停止動作を「抜き」と呼ぶ。一度「入る」と「抜く」まで方向転換できない。類似の技法で大陸系統の「活歩」がある。

「虚空瞬動」
瞬動術の空中移動版、「空中瞬動術」。何も無い「虚空」を蹴ることで加速動作を行う。これを用いれば瞬動の「方向転換できない」という弱点を解消できる。しかし空を蹴ることができるのは一瞬で、この技法を用いて空中に立ったりはできない。

《スキル》
・直感：A～E
「そんな気がする」という程度のものから虫の知らせ、未来予知レベルのものなど、精度が定まらない不安定（ランダム）な直感。

・心眼（真）：B
修行・鍛錬において養われた戦闘を有利に進めるための洞察力。経験に裏打ちされた戦闘論理。僅かな勝率が存在すればそれを生かすための機会を手繰り寄せる事ができる。

・千里眼：C
純粋な視力の良さ。遠距離視や動体視力の向上。高いランクの同技能は透視・未来視すら可能にするという。

・道具作成：B
魔力を帯びた道具を作成できる。このランクで開発できる道具は一級の性能を持つ。さらに高い同技能は、疑似的な不死を可能にする薬を作ることもできるという。

《アーティファクト》

・『六道籠手（マヌサス・セクス）』

布部分は朱色の生地で、金属部分が赤く錆びた鉄の手甲。

一言で表すなら「赤錆びた鉄甲」。

・能力

他人のアーティファクトを６つまで登録し、その形状と能力を完全再現する。

・アーティファクト発動時に現れる装衣：黒いロングコート、赤い外套、赤いジャケット

・現在『六道籠手』に登録されているアーティファクト一覧

（？）『ハマノツルギ』

（？）『コチノヒオウギ』

（？）『ハエノスエヒロ』

（？）『匕首・十六串呂』

（？）ー

（？）ー

＊木乃香のカードは１枚で２つのＡＦが現れるため二枠を占めている。

・アーティファクト考察

六道籠手の「六道」は迷いのある者が彷徨う六つの世界を表す。故にこのアーティファクトの「六道」は「世界」に通じる概念が込められている。

また”六”は数学的に「完全数」と呼ばれる。悪魔の数字”６６６”は悪魔が人間より完全であることの象徴だという説もある。

また、出典不明の情報だが”７”は「２で割ることができない＝完全な数字」だという考えがある。元々”７”は基督教など一部の宗教で特別な意味を持つ数字であるが、六道籠手は本体と登録したアーティファクトの数――１＋６＝７つの姿を持つ為、「７は完全な数字」という思想にも通じている。

つまり六道籠手は「世界」と「完全」という、上位の概念に通じるアーティファクトであると言える。

＊魔力量の大幅な増加と『オルビス・アドゥルテリーナ』に関する「固有結界の異常」。これはいつか設定話で投稿しますので、どうぞお楽しみに。

かなり読みにくい文章になってますがｗ

それでは次回！

―12話　設定9　士郎のステータス？（後書き）

最近　設定話が多いですが、イコール作者の調子が悪い、イコール本編の作成が滞っているということです。

どうかご容赦を。

第８０話　終業式（前書き）

＊活動報告にも書いたことを書きます。

ちょくちょく書き進めていた８０話。まだまだ８１話の作成に入れなさそうなので投稿します。それにしても…久しぶりに原作沿いストーリーを書いたら調子が悪い。「書き方」忘れました。なんてこった。

課題地獄、第二の峠を越えました。あとは最後の峠のみなんですが・・・。

その最後の課題のために集めた資料を全て紛失してしまうという大ポカをやらかしました。また１から集め直さなきゃ……こりゃ金・土・日は潰れるな……。

それでは第８０話、どうぞ。

第８０話　終業式

英国・ウェールズ。

《お元気ですかネカネお姉ちゃん。僕が日本に来てもう半年近くが経ちました》

早朝、山奥に佇む山村の丘に１人で立つ金髪の女性。弟のように思っている少年からの手紙はここで読む。それが彼女、ネカネ・スプリングフィールドの習慣だった。

《今回は写真を同封しておいたよ》

「まあ…あらホント」

魔法使いが使う　立体映像が再生される手紙。それに映るネギが言う通り、今まで過ごした約半年の出来事が写真に納められていた。

《まだ期末テストっていう難関が残ってるけど、それが終われば夏休みです》

「……あら？　アーニャ！　ネギよ～」

自分の方へ歩いて来る、見知った赤い髪の少女を呼ぶ。

「…ネギ？」

《たった半年とは思えないくらい色んなことがありました。３－Ａのみんな、アスナさん達やコタロー君。修学旅行や学園祭……それに格闘大会に…》

「フフ……楽しそうね。見てアーニャ、たった半年で随分凛々しくなったと思わない？」

「はあ？　ネギが？　……どこがよ全然変わってないわ。相変わらずチビでボケでマヌケなんだから」

「ふふ、そうかしら」

手紙に再生されるネギの姿を見て、アーニャは幼馴染みの成長をキッパリと否定する。その様子を見たネカネは楽しそうに笑っていた。

「夏には帰って来るそうよ」

「……ふ～ん」

それを聞いたアーニャは落ち着かない様子で髪を弄り始める。

（～～～♪）

「楽しみなのはわかるけど　そんなすぐに帰らないわよ？」

「え！？　べっ別に楽しみなんかじゃ！」

顔を真っ赤にして言い訳を捲くし立てるアーニャから、ネカネは空へ視線を向ける。

「もうすぐ会えるのね……ネギ」

2人は同じ人間を思って、透き通る蒼い空を見上げた。

◇――――――――――◇――――――――――◇

同時刻、夕方の日本・麻帆良。

「あんた今日　授業中ボーっとしてたでしょ！」

「で、でも、確かに少しボーっとしてたかもしれませんけど、僕授業はしっかり」

「あんたがちゃんとやることやる奴だってのは知ってるわよ！　そのこと言ってるんじゃなくて！」

波乱の文化祭も終わり、３－Ａにひとつの空席が生まれたことを除けば、いつも通りの生活が帰って来ただけなのだと誰もが思っていた。

武道会や最終日イベントなど、麻帆良祭で少しばかり有名になったネギや一部の３－Ａ生徒達も。時間が経てば熱も冷めて元通りの日常に戻るだろうと。

「あんた…今お父さんの事で頭いっぱいなんでしょ」

「……！？」

だが『彼女』が少年に与えた……いや、残したものは。時間が消してくれるような小さなものではなかったのだ。

「――気づいてる？　今のあんた…あの超さんにすごくよく似てるわよ？」

「……！！」

――この計画は私の「全て」だネギ坊主！！――

「自分が超さんに何て言ったのか、よく思い出してみなさいよ」

明日菜の言ったことは的を射ていた。ネギは頭が真っ白になり、何も言えずに棒立ちになってしまう。

（……その通りだ。僕は、アスナさんの言う通りで、僕は――）

「……あ……。ご、ごめん、ちょっと言い過ぎ……ちょっ、ネギ！」

走り去っていくネギを追う事も出来ず、明日菜は地団駄踏みながら愚痴を溢した。

「あ～も～～！　何でいつもこーなっちゃうのよ――――！！」

「っだッ！！」

楓と古菲が興味深い目で見守る中、小太郎が背中から地面に落ちた。

「おーい、もういいだろ？」

呆れた声で士郎が声をかける。

「小太郎、もう力の差はわかったでござろう？」
「早くせぬとエヴァとの約束に遅れるアルよ～」

「ねーちゃん達は黙っとき！　こんなカンタンに終われるかい！」

小太郎が地面に掌を付ければ、影から狼の式神が姿を現す。

「往けぇ狗神ッ！」

黒い尾を引いて弧を描き、６体の黒狼が突進してくる。こんな単純な攻撃　ワンステップで避けられるが、士郎の後ろにはエヴァの家がある。

（受けるしかないってか……でもそこまで考えてないな小太郎のやつ。血が上って周りが見えてない）

「……ルギ・デ・デキテイル。『無銘の刀工（タクティキ・シディロルゴース）――”偽・狗神”』」

ズガガガガンッッ！！！

「おらぁっ！」

小太郎の狗神をコピーしてぶつけ相殺させるが、その隙に接近した小太郎の拳が迫る。

だが。

「――――おらっ」

「おわっ！？」

後ろに引っ張られるような感覚。小太郎の視界がぐるりと反転し――

――――ぺいっ。

「っだッ！！」

小太郎が背中から地面に落ちた。デジャヴ。

「投影（アデアット）、開始」

宙から降り注いだ剣の檻が一瞬で小太郎を閉じ込めた。

「これで気が済んだろ？　さっさと草むしりに戻りたいんだが」

庭の隅に、使いっ放しのスコップやゴム手袋などが放置されていた。

「いだだ……な、何をしたんや？　殴りかかったら突然ぐいって引

っ張られて……」

檻の中で首を捻る小太郎を2人の少女がニヤニヤと見つめる。

「我らには見えていたでござるよ。ニンニン♪」

「パンチが届く前に師父が学ランの襟を掴んで投げただけアルよ。コタロより師父の方が腕のリーチが長いからとーぜんアル♪」

小太郎が負けていたのは、力の差ではなくリーチの差。

「な……なんやソレぇ――!!　そんなんナシやで兄ちゃん!正々堂々、正面からもっかい勝負せえ――――!!」

「正々堂々？　はっ、戦場にそんな矜持や誇りなんてのは要らないんだよ。
そんなもんそこらの狗にでも食わせちまえ。それより今は草むしりだ」

「犬言うな――――――――!!」

しかしそろそろ『別荘』に入る時間だ。大分時間をくってしまった。
聞かん坊のように駄々をこねる小太郎を尻目に、結局士郎は道具を片付け始めた。

第８０話　終業式、夏休みへ

――ちゅど――ん！

「全く…何度言えばわかる　足を止めるな！！」

爆発で煤だらけになった姿で正座して、ネギは大人しくエヴァの説教を聞いていた。

広場に乱立していた氷柱が消滅し煙が晴れてくる。魔力を込めただけの峰打ちで周囲が半壊。別荘内で魔力が僅かに回復しただけでこの威力、本来のエヴァンジェリンがどれほど強大かが窺える。

「ガード後　次の攻撃に対処できなければ意味はない！　足を止める状況に追い込まれた時点で負けと思え！！」

「あうう……」

エヴァンジェリンが声を荒げる度にネギが小さくなっていく。

「だが……ようやく1分保つようになったか……悪くはないな。やはり百日の修行より一度の実戦だ」

「……え？」

（ほ、褒められた…？　師匠（マスター）が褒めるなんて学園祭のタカミチの時以来……）

（ケケケ）

（素直にお褒めになればよろしいのに……）

「よし……明日からは多少の応用に入ってやろう」

「え……ええっ！？　ほ、本当ですか！？」

――ギンッ！

「の　ぼ　せ　る　な　よ。

ようやく扉の前に立ったというだけの事だ。明日から地獄の深さが倍になると思え」

「……ハひ…」

（ガクガクガク……）

殺気すら秘めた視線に射抜かれて、ネギとカモは震えあがるしかなかった……。

「まあそれでも第一段階は突破だ。新しい修行相手を用意してやる、入れ！」

「え」

後ろを振り向いたネギが見たのは。

「よッ！」
「コタロー君！？」
そこには小太郎が立っていた。広場入口には楓と古菲に士郎もいる。
「ど、どーしてコタロー君がここに！？」
「へっ、お前だけ1日が2日やなんてズルイやろ？」
「最近もっと時間増えてるけどなー」
「でもコタロー君……何でボロボロ？」
「！！　な、ンなワケないやろピンピンしとるわ！　むしろ元気やで！？」
小太郎の学ランは土埃や砂に塗れて白くなっていた。所々生地も破けている。
そして士郎が呆れたような顔をしていた。
「コタロの奴、『外』で我慢できずに師父にケンカ売ったアルよ」
「あっコラばらすなやクーねーちゃん！」
「えっ、シロウとケンカ！？」
「心配するなネギ坊主。食ってかかる小太郎に士郎殿が遊んでやっただけでござる」
「はっ、やっぱ犬だな」
「なんやとオコジョ！」
「騒がしいぞ貴様ら。ぼーや、そこの犬はお前にうってつけの相手だろう。ウォームアップだ試してみろ」
「また”犬”……誰か名前呼んでやー――……」

「はい！　マスター！」

広場の中央を境界に、２人は視線をぶつけ合う。

「おいえーんか？　修行で今はヘロヘロやろ？」
「平気だよ、それにコタロー君もボロボロじゃん」
「アホ、俺やって平気や」

「「……」」

２人の拳が交差した。

「では私達は下へ行くぞ」
「おう、頼む」
「ム？　２人ともドコ行くアルか？」

ネギと小太郎の様子も見ずにこの場を離れようとする、エヴァと士郎に声をかける。

「ああ、士郎の新呪文の開発だよ。実戦で実験調整したいらしい」
「楽しそうでござるな？　エヴァ殿」

途端にエヴァの口が吊り上がる。不気味な笑みと漏れる魔力が周囲の温度を下げてゆく。
聞いた楓も、古菲も士郎も思わず顔を青くする。

「フッ、従者の面倒を見てやるのも主人の役目だよ。それにこれはまたとない機会だ……。士郎を嬲る大義名分が得られるからな♪　コイツは何かと勝手に動き回るからな……クク、しかと躾けてやろう」

士郎は自分の血の気が一気に引けていくのが分かった。

「……あれ、何か急に調子が悪く……。エヴァ、やっぱ今日は」

「さあ士郎！　主が従者に付き合ってやろうと言うのださっさと行くぞ！」

ずるずると、首根っこを掴まれて下の浜辺へ連れて行かれる士郎。

数分後、海から聞こえてきた悲鳴はネギ達を震え上がらせたという。

◇――――――◇――――――◇

……このまま。このまま緩やかに時間が過ぎて、平和な日常を過ごすんだと思ってた。

学校でみんなの先生をやって、マスターやコタロー君と修行して、楽しく過ごして。

でも立ち止まってみると、心に生まれるのは前へ進もうする気持ち

ばかり。
そして…立ち止まってはいけないような焦燥感。
アスナさんに言われてしまった。それは「あの人」と同じだと。
『自分が超さんに何て言ったのか、よく思い出してみなさいよ』
『この計画は私の全てだネギ坊主！！言葉などでは止まらぬヨ！！』
『全てだなんて…嘘ですよ。儚い夢だなんて、そんなハズありません』
（その通りですアスナさん……超さんにああ言っておいて僕は……。
でも、じゃあ僕はどうしたら……！）
――立ち止まるなネギ坊主。前へ進め。
――気に病むコトはない。所詮君は私と同類……。
「――――こちら側の人間だ」
（ッ！！？）
――――「彼女」の声が、聞こえた気がした。

◇――――――――◇――――――――◇

――ミ――ンミンミンミンミ――ン……。

外から聞こえる夏の足音。赤い夕陽が窓から学校を照らしている。

『え――と、一学期も残すところあと少し。期末テストまで一週間。
そこで簡単な小テストをやってもらったわけですが。この結果と前回の中間テストの結果を合わせて考えると……』

『僕達３－Ａはこのままいけば、『学年最下位返り咲き確実』ということがわかりました――――！！』

『というワケで、バカレンジャーの皆さんには今日から居残ってもらいます』

「も――何で私だけこんな遅くまで」
「しょうがないですよ、アスナさんだけ点　悪いんですから」
「うっ、うるさいわね！」
「アハハハ、でもちゃんと良くなってますよ！」

赤く染まる階段をネギと明日菜が歩いていた。

（……。）

「あのさ、ネギ…こないだのこと……まだ気にしてる？」

「え？」

明日菜の言葉で、ネギは踊り場で足を止める。同時に明日菜もそこで止まる。

「……ぼ、僕なにか様子が変でした？」

「いや別に、全然いつも通りだけど……。なんとなく、ね」

「はぁ～～、さすがアスナさん」

「うっ、じゃやっぱりそうなのね……」

途端に明日菜が気まずそうな表情になる。

「え、あの、アスナさん？」

「その…ゴメンあんなこと言っちゃって！　私が悪かった！　アレ全部なしっ忘れて！！」

突然両手を合わせて頭を下げた。

（アレって……）

「ええっ！？　まさか……アスナさんもこないだの話　気にしてたんですか！？」

「そりゃ気にするわよっ！！」

「…プッ……アハハハハハハッ！」
「ハ……ハハハハ……？」
自分が悩んでいる時に明日菜も悩んでいたと知って、可笑しくなってネギは笑い始める。
つられて明日菜も笑ってしまうが、
「「……。」」
それが収まるとどちらともなく、気まずい沈黙が流れてしまった。
「……でも、アスナさんが謝ることないですよ。あの話は本当のコトだと思いますから」
「う、」
沈黙を破ったネギの言葉に明日菜は詰まる。
「アスナさんの言った通り…父さんは僕の全てです。……いえ、全てが言い過ぎでもほとんど全てです。
超さんが決して立ち止まれなかったように……僕もやっぱり止まれません」
「……っ！　ネギ……！」
ネギの表情は見えない。彼の言葉が止まる気配もない。
「何度も考えたんです。でも……これだけはいくら怒られても変わりません。変えられないんです」

「ネ――」

ネギが顔を上げて、明日菜を見つめた。

「夏休みが終わる前に僕はウェールズに帰ります。もしかするともう……帰って来れないかも」

「……！」

「その時は……アスナさん。パートナーとして僕と一緒に来てもらえますか？」

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

その言葉で明日菜は固まった。

「パートナーとして一緒に……って」

――そんなことよりイイのカ？私にそんな愛の告白のようなコトを言て。『共に立派な魔法使いを目指そう』というのは魔法界では生涯を添い遂げようと言うに等しいネ――

――共に立派な魔法使いを――

『アスナさん。パートナーとして僕と一緒に来てもらえますか？』

――――生涯を添い遂げようと言うに等しい――――

「バッ……！？」

明日菜はその顔を一瞬で朱に染め上げた。

「バッババババババババカ……ッ！　な、何言いだすのよ……！！」

先程までネギを見つめていた目は落ち着きなく泳ぎ始め、決してネギに視線を向けない。

「とっ、とと突然そんなこと言われても困っ……え、え？　な、何で私なの？　だってあんた本屋ちゃんとかホラ……　そ、それに私にはほら、高畑先生ってゆー心に決めた人が！　……フ、フラれたけど……」

挙動不審に両の人差し指をつんつんと突き合わせて、もにょもにょと弄り始める。

「ア、アスナさん？」

「……（ムフ？）」

この場でただ1人、明日菜の勘違いに気づいたカモが下世話な笑みを漏らしていた。

――――――バサバサバサッ……！

「ッ！！？（ビクゥッ！）」

明日菜が思わず肩を震わせる。音のした方――――階段の上を見上げると。

のどかに夕映、そしてハルナが立っていた。

先程のは、運んでいたプリントをのどかが落としてしまった音だった。

3人とも顔を赤くしてネギと明日菜を凝視している。のどかは顔が引き攣ってしまい笑っているような表情になり、夕映は口を逆三角形にして呆然としており。ハルナは「面白いものを見てしまった」と言わんばかりに口が笑っていた。

「……あ…あの……しょの……」

「…そ……そうだったですか。いえわかりました確かにそういった可能性は当然考慮されて然るべきでした全く何という浅慮のどかとの関係以前に先生ご自身の……」

「意外に早く決着が着いちゃたわね～？」

「ほっ……本屋ちゃ……」

「「し、失礼しま――――す／です――――ッ！！」」

「ま、待って2人とも！　ちょっこれは違うのよパルッ！！」

その後。誤解が解けるまで一騒動あったのは言うまでもない。

『え…さっきのは告白じゃない……？』

『アスナさんは僕の「魔法使いの従者（パートナー）」でしょ？　まずはアスナさんに言わなきゃって思って。みんなにも後から言うつもりでしたけど』

『なっ……！あんな言い方誤解するに決まってんでしょ！？純な乙女の心を弄んで――ッ！！』

『純な乙女て……』

◇――――――◇――――――◇

「まったくもー赤っ恥じゃない！」

夕日に染まる道を下校する5人と1匹。心なしかアスナとネギの間にかなり距離があるように見える。

「あんたもあんたよ！　そういえば帰って来れないってどーいうこと！？

ウェールズに行って帰って来ないつもり！？　みんなのことはどーすんのよ！！」

「そ、そんなことありませんッ、帰るつもりです！　でも……。

――もしかすると帰って来れないこともある……ということです」

「……む」

『……それで、どうするんだい？　ネギ・スプリングフィールド。僕を倒すのかい？』

「アスナさんには前にも言いましたが……父さんが行方不明になったことには理由があるハズです。何事もなく父さんを見つけることが出来ると考えるのは楽観的過ぎます」

『君のおじさんやその仲間を石にして、村を壊滅させたのもこの私だ』

「多分……危険な事もあるでしょう。
父さんを追うのを諦めればいいのかもしれませんが……それはできません」

誰も言葉を発しない。いま彼の言葉を遮ってはいけない。その声を聞かなければならない。
一同はそんな思いを抱いていた。

――ザァッ……。

風が凪いだ。ネギと明日菜、２人の髪を攫って撫でる。

「――――スミマセン　アスナさん……あれからたくさん悩みました。でもどうしても父さんを諦めることは出来ない…それが僕です。父さんを諦めてしまえば僕は僕ではなくなってしまう…そんな気がするんです」

もはや蝉の声も聞こえない。言葉に出来ない静寂がこの場には確かに在った。

「……うん。……それで……？」

「……とんでもないワガママだと思います。みんなの先生として無責任過ぎるんじゃないかと。じゃあやっぱりやめた方が…？いえそれはできません。

結局……『答えは出ない』。これが今の僕の結論です」

「これからも僕は同じ事で悩み続けると思います。ふっ切ることもできない。

だから……僕はこのまま前へ進みます。

『ふっ切った、悟ったは勘違い』『デカイ悩みなら抱えて進め』。

尊敬してるある人の言葉です。」

「……は～～～～～……」

明日菜が呆れたように息を吐いた。

「わかったわかったわよ。あんたがそーゆー奴だってのはずっと前から知ってた」

子供のくせに、子供らしからぬ努力と無茶をする。
生真面目で馬鹿正直で。悩み過ぎるくせに結局は前に進むことしかしない頑固者。

『そんなにネギ先生が心配なら、私達で守ってあげればいいんです』

『あのコがまた無茶をしそうになったら、私達があのコを守りましょう。例えどんなコトがあっても』

「いいよネギ、そのまま進みな。お父さん目指して真っ直ぐに。そんなあんたを守るって……刹那さんと決めたんだった」

夕陽を背にした明日菜はそう言って、優しくネギに笑いかけた。

「……アスナさん」

「あっ、あの……ネギ先生!!　私も行きます!　連れて行ってください!!」
「の…のどかさん!?」
「あううっ…と、止めてもダメです――――!!」

「わ…私も行くです!!」
「夕映さ――ん!?」

「……やれやれ男の子ってのは……。何てったって魔法世界だもんね――?　置いてかれたってついてくよ～?」

「ハルナさん……皆さん……」

『貴様は、超を傷つけ自らも傷つくことを恐れている』
『あのデコボコパーティもそうだぞ？お前に好意と信頼を持って協力を惜しまぬ女ども』

『お前は奴等が傷つくことに耐えられない』

『貴様は結局奴等が見えていない。彼女達を仲間と認められないでいるのだ』
『奴等の信頼にお前も信頼で以て応えるという気概も持てんのか』

『キレイであろうとするな。他者を傷つけ自らも傷つき、泥にまみれても尚　前へと進む者であれ。それでこそ、我が弟子だ――』

（……師匠（マスター））

「皆さん……ありがとうございます！」

自分ひとりでは出来ないこともあるだろう。ネギは礼を言って頭を下げた。
超と戦う時に決めたのだ。彼女達を信じると。

「で、でも、やっぱり危険なことがあったら僕の言うコトを聞いて――」
「馬鹿ね――アンタがそーいうコトにならないように私達がついて

くのよ」
「だ、大丈夫ですー……！」
「お役に立つです」

「……でもさー…ネギ君。夏休みなのに遊んだりしないの？　夏休み始まってすぐイギリスに行くワケじゃないでしょ？」

「え？　ハ、ハイ。修行とかもありますし、前半はみっちり……」

「じゃ遊ぼうよ！　せっかくの夏休みなんだしさ！！♪」

ハルナの予想外の発言にネギは目を丸くした。

「い、いいと思いますー……。先生ずっと大変だったし……」
「確かに良い意見です。英気を養うべきかと」

夕映とのどかは肯定するが、正直ネギは乗り気ではない。

「で、でも僕…遊ぶってあんまり得意じゃ……」
「アッハッハッハ？　カワイイなーもー♪　だーいじょーぶ任せときなって！　遊ぶことに関しては女子中学生はエキスパートだよん！？」

「ハ、ハア……。えーと、アスナさんこれは……？」
「いいんじゃないー？　あんたに足りないのはそーいうトコだと思うわよ？」

「そうと決まれば早速計画立てる！？　ネギ君は海派？　山派？」
「う、海かなー」
「いいわねー海」

「浴衣で花火とかいいわねー♪そうだネギ君！　夏に開かれる漫画の祭典知ってる！？」
「ハルナ、流石にそれは……」
「……ってちょっと皆さん！　その前に期末ですよ――――！？」

赤い夕陽が、彼女達の行く手を明るく照らしていた。
そして同様に。その後ろに暗い影が伸び始める――――。

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

「……夏休みというものは、暑くて集中できん中、無理やり子供達を学校に通わせることを良しとせぬ考えから生まれたものじゃ。最近ではクーラーを設置する学校が増えてきており、夏休みの最初の意義は失われつつある。じゃがそれでも夏休みが無くなることはない。それは諸君らにたくさんのことを経験して欲しいからじゃ。
　学校では学べぬことがあるし、夏休みにしか出来ぬ事もある。家族で旅行へ行くも良し。友人達と少し遠出するも良し。好きな事に思いきり打ち込むも良しじゃ。ダラダラと過ごすのも、新学期への英気を養うという点では良いじゃろう。とにかく、何でもよいから何かに挑戦して……」

あれから何事もなく期末テストを迎え、３－Ａは見事　学年２位の点数を叩き出した。

そして今日は終業式。炎天下の空の下、生徒達は学園長の長い話をだらだらと聞き流していた。

「皆はもう予定なぞあるかのう？　ワシなんぞは海が好きじゃのぅ。夏といえばやはり……太陽ッ！　海ッ！！　そして水着のギャル達じゃっ！！！」

「以上で学園長のお話を終わります。次は夏休み中の生活について生活指導の新田先生から……」

「ひょ！？　刀子君ッ！？」

・　・　・　・　・

「もー、ホンマ嫌やわじーちゃん」

「アハハ……いえ、学園長も少しは面白い話でもしようと思ったのでは」

「せやからってあんな話せんでもえーやん……も～～」

「戸締りはもういいですか？」

「オッケー、こっちは閉めたわよ」

午前中で学校が終わり、人の居なくなった３－Ａにネギ・明日菜・木乃香・刹那の４人が残っている。教室の戸締りを終えてこれから一緒に下校する。

「皆これからカラオケだって。ネギあんたはどーすんの？」
「え？　修行ですが」
「ダメよー、一学期の打ち上げなのよ？　それにあの別荘ならいつ行っても同じでしょ？」
「で、でもー」

「じゃ、条件」
「へ？」

「お父さんを捜すのは止めないけど。その代わり皆の遊びには付き合うこと！」

「え――――？」
「えーとは何よ。ホラ行くわよっ！」
「わ――！　待ってくださいアスナさんッ！」

結局、ネギは無理矢理アスナに抱えられて連れ出された。

「うわー暑ーい。でもええ天気――――。」

昇降口から出て、頭上の太陽を見て木乃香が呟く。

「へへへ……夏休み日和やっ♪」

見上げれば輝く太陽。深緑に萌える世界樹。上に広がる大きな雲。

空が、蒼い。

――――――夏休みが始まる。

第８０話　終業式（後書き）

《おまけ》
士郎「……間座標、空間認識、空間設定、設定完了！　代入呪文『戦いの旋り……』」
エヴァ「遅い！　長い！（術式が）穴だらけだ！　『氷神の戦鎚』！！」
士郎「えっちょ…それヤバっ……!?　――――『熾天覆う七つの円環』――！！」
エヴァ「……のやみ！　『えいえんのひょうが』！！」
士郎「ぎゃーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

ネギ＆小太郎「……ガクガクブルブル……！」

～補足・解説～

＊今話の、原作との時系列の違いを説明します。
・・原作
１）期末テスト一週間前～５日前にエヴァとの修行で１分保つようになる。
２）期末テスト４日前、明日菜達に魔法世界行きを打ち明ける。
・・剣製の凱歌・８０話
１'）期末テストより一週間以上前にエヴァ修行で１分保つようになる。
２'）期末テスト一週間前の日に明日菜達に魔法世界行きを打ち明ける。

まあ士郎との修行でだいぶ前に３０秒保つようになってますからね、ネギは。

‥「それより今は草むしりだ」

草むしりの合間にやられるコタローｗ　大丈夫だ小太郎、君はもっと強くなる！

小太郎にもオリジナル技を作りたいんですけど思いつかないんですよねー。こうなったら全身真っ黒にして、ブリーチみたく「最後の狗音影装…それは」「俺自身が」「狗神になることや」とかやっちゃいま……イカン。よっぽど煮詰まってるな。

‥「あっコラばらすなやクーねーちゃん！」

この頃はまだ「菲部長」って呼んでないんですね。

‥「ああ、士郎の新呪文の開発だよ。実戦で実験調整したいらしい」

『オルビス・アドゥルテリーナ』（↑まだ正式な技名はヒミツ）の実験検証・調整中。まだまだ呪文が長すぎたり効率が悪かったりして士郎はエヴァにボッコボコに。頑張れ。

‥『あのコがまた無茶をしそうになったら、私達があのコを守りましょう。例えどんなコトがあっても』

このシーンの刹那の笑顔が可愛くて眩し過ぎてページを直視できないです。

‥「夏といえばやはり……太陽ッ！　海ッ！！　そして水着のギャル達じゃっ！！！」

原典は、現在は休刊（実質廃刊）している講談社の少年向け雑誌の主人公の台詞。

●●ダ●「夏ッ！　海ッ！　そして水着のお姉さんっ！！」

：「アハハ……いえ、学園長も少しは面白い話でもしようと思ったのでは」
　これ、刹那は「普段の学園長の話は面白くない」って言ってるようなもんですよね。

次回予告。

「よう嬢ちゃん、名前は？」
「……アスナか。いい名前だ」
「よしアスナ待ってな。行くぜアル！　詠春！　敵は雑魚ばかりだ行動不能で充分だぜ！」

少女に背を向ける赤い髪の魔法使い。
野太刀を抱える眼鏡の男。フードを被る黒髪の優男。
彼らは戦場など何でもないとでも言うように、悠々と歩いていった――。

「第８１話　ネギま部（仮）発足！～明日菜、部長へ至る道～（仮）」

　書いてみないと分かりませんが、もしかしたら前後編になるかもしれません。
それでは次回！

第８１話　ネギま部（仮）発足！～真夏の極寒サバイバル～（前書き）

ソロモンよ！　私は帰ってｋ・え？　このネタ前もやった？

……こほん。それでは気を取り直して……。

皆様！！　佐藤Ｓと剣製の凱歌、２４日ぶりに帰って来ましたーーーーーーーー！！

長かった・・・今まで経験したことのない超不調。
小説がここまで書けなくなるとは思いもしませんでした……。
何とか立ち直れたのも、応援してくださる読者の方々のお陰だと思っております。

ではでは、挨拶はこの辺りにして早速いきましょう。
「剣製の凱歌」第８１話、どうぞ。

第８１話　ネギま部（仮）発足！～真夏の極寒サバイバル～

騒々しくも楽しかった一学期が終わり、麻帆良生は夏休みを謳歌し始めた。
「北風と太陽」もかくやと言わんばかりの眩しい陽光と蝉の声に囲まれて、ネギパーティの間でもそれぞれの夏休みが始まる。
彼女の場合、それは。

「――――さ・・・さむ――――――――――――――――いっ！！！！」

びゅごおおおおおおおおおおおお・・・・・！

雪、雪、雪、雪。そこは暗い銀世界。
明日菜の周囲で激しい吹雪が吹き荒び、刺すように冷い風が容赦なく体を叩く。

「ど…どこなのよココは――――ッ！？」
「どこって雪山やろ。ヒマラヤらしいで？　ホンモノちゃうけど」
「だ、大丈夫ですかアスナさん！？」
「だいじょーぶじゃないわよ！？　さ・・ささ寒ッ！こっちは夏服なのよっ！？」

目を凝らさなければすぐにでもホワイトアウトしてしまいそうな視

界の中、後ろからネギと小太郎が平然と歩いてきた。

「俺らだって夏服やて。姉ちゃん咸卦法使えるんやろ？」

「アスナさん咸卦法を使ってください！」

「え！？　う、うん……？」

“――右手に「気」……左手に「魔力」……『咸卦法』！！”

”気と魔力の合一”によって生まれた”咸卦の気”が明日菜の体を覆い尽くすと。

「あ…ホントだ寒くない！」

「でもそんなダダ漏れやとすぐガス欠やで。３０分後には凍死やな」

「ええーーーーーッ！？」

スー○ー○イヤ人の如く咸卦（オーラ）の気を放出する明日菜に、小太郎からの猛烈なダメ出し、そして事実が突きつけられる。

「ちょっ、そんな　どーすんのよーーー！！」

「落ち着いてくださいアスナさん」

「落ち着けるわけないでしょーー！　このままだと私３０分後に凍死するんでしょ！？

なんでただの女子中学生の私がこんな、生きるか死ぬかの瀬戸際に――」

「いや、あの、でも…やるって言い出したのはアスナさんなんですよ？」

事の発端は、その日の朝に遡る――。

群れを成して夜空を泳ぐ、空飛ぶクジラのような船…「鯨船」。
その艦隊が発する空気は、無知な者でもただ事ではないと理解できるほど物々しい。
彼らが通った後に残るは煙と残骸。今「この国」は、敵国から攻撃を受けていた。
更に国土を蹂躙せんと、鯨船から無数の光が一直線に放たれる。
明らかに害意を秘めたその光はしかし、ひとつの塔の前で?き消された。

『せ…精霊砲全弾消失！』
『消失！？　王都の魔法障壁ではないのか！？』
『待ってくださいこれは…「広域魔力減衰現象」を確認！　減衰速度加速中…間違いありません！　”黄昏の姫御子”です！！』

『チ――――気に入らねえぜ……！』

――――ここは、どこ？

目の前には夜の空。どこかの高い塔の上。
星は見えない。それより眩しく、気持ちのよくない光が瞬いている。
それは魔力の光。魔法で人が殺しあう。

この世界はいま、戦争をしている。

――――戦争？
何言ってるのよ、日本でそんなのあるわけ……そうだ、ここはどこ――――？

塔の下には広大な樹海が広がっている。どう見ても日本ではない。
そしてそこには、こちらに向かって歩を進める光の巨人。

――何あれ？　京都の時みたいな、学園祭の時みたいなデカイやつ……。

数体のそれがこの塔を取り囲む。その内の一体が手をこちらに、いや。

――――「私」に手を伸ばして――――

『防御結界！』
『――間に合いません！』

『うわぁっ！！』

――「私」の周りにいた、ローブを着た大人達は我先にと逃げて行く。

――鎖に繋がれた、「私」を置いて――――。

――――――――――――――――ドンッ！！！

手を伸ばした光の巨人――「巨神兵」の胴体が、圧倒的な暴力によって千切れ飛んだ。

『そんなガキまで担ぎ出すこたねえ。後は俺に任せときな』

『な……お前は：「紅き翼（アラルブラ）」、「千の呪文の……』

『――――そう、ナギ・スプリングフィールド！！　またの名をサウザンドマスター！！』

『…自分で言ったよコイツ』

『フフフ、ノリノリですねー』

まだ１０代に過ぎないであろう赤毛の魔法使い、ナギが宙に立つ。

そして彼の傍らには、若き日の近衛詠春、今と変わりないアルビレオ・イマがいた。

塔に迫る敵を駆逐するべくその力を滾らせる。

詠春は口を一文字に結んで野太刀を構え、アルは何気ない表情のまま手をかざす。

そしてナギが呪文を紡いだ。

『えーと…百重千重と重なりて走れよ稲妻（ヘカトンキタス・カイ・キーリアス・アストラプサトー）――行くぜ、オラァッ！！！』

“――――――『千の雷（キーリプル・アストラペー）』！！！！”

振り抜かれたナギの右腕から雷轟・雷霆・雷閃・雷電、無数の雷が走り出し、一撃で数体の巨神兵を消し炭にして亡ぼした。
技が大味過ぎるナギ、彼が取り零す他の敵を詠春とアルが殲滅する。

『お、おお……！』

■■■を置いて逃げ出そうとした魔法使いが感嘆の声をあげた。

『――安心しな俺達が…全て終わらせてやる』
『……な！？　し、しかし、敵の数を見たのか！？　お前達だけで何が……』
『俺を誰だと思ってるジジイ？　俺は。最強の魔法使いだ』
『な……！』

――3人は塔に降りて「私」の前にやってきた。

『よう嬢ちゃん、名前は？』

――彼は「私」を繋ぎ止める鎖を砕いて、腰を下ろして「私」の目を覗きこむ。

『ナ…マエ…？』

――私の、「私」の、名前は――――。

『――アスナ。アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア』

『なげーなオイ。けど…アスナか。いい名前だ』

ナギはそう言って立ち上がり、笑顔でアスナを見下ろした。

――……いい、名前？　そんなこと言われたの初めて……。

そしてその、笑顔。彼女／私が他人からそんな表情を向けられたのは。

一体、いつが最後だったろう――――？

『よしアスナ待ってな。行くぜアル！詠春！敵は雑魚ばかりだ行動不能で充分だぜ！』

『…やれやれ。雑魚でも数はシャレにならんぞ？』

『クスクス……』

少女に背を向けて戦場へ向かう、赤い髪の魔法使い。

野太刀を抱える眼鏡の男、フードを被る黒髪の優男。

彼らは気負う様子など微塵もなく。

戦場など何でもないと言うように、悠々と歩いていった。

――それを少女／私は、その場に立ち尽くして眺めていた――

◇――――――――◇――――――――◇

――――チチチチ……

――――ミーンミンミンミンミーン……

日本、麻帆良。女子中等部学生寮の少し遅い朝。

「：ハッ……ハァッ：ハッ――……ハアッ」

明日菜は汗だくの体をベッドから身を起こして、いま見た夢を反芻していた。

「あ：あああーーーーっ！！　思い出したーーーーーーーーー！！！」

「ねえこのかっ……ってあれ、いない？　ネギーーーっ、エロガモーーーっ！！
　も――夏休み初日の朝からみんなどこ行ったのよーーー！？
刹那さ――ん！」

寝間着のまま自室を飛び出して刹那の部屋へ駆ける。誰でもいい、いま見た夢を誰かに話したい――そんな子供のような思いで勢いよくドアを叩けば。

――バンッ！！

「聞いて大変なのっ！　私、私の本当の名前を思いだひゃっ！？」

「……あや。」

明日菜の視線の先には、正座して対面する木乃香と刹那。
2人とも相手に顔を突き出している最中、明日菜と木乃香の目が合った。

「ホラいけって！　ブチューッと、ムチューッといっちまえよ！
はぁはぁ」

興奮して邪魔者の来訪に気づかないカモが2人を促している。
体を震わせて、顔を真っ赤にしながら、刹那がゆっくりと、木乃香の唇に、自分の唇を近づけて――

「……あ」
「――え」

「「――……。」」

「――ごっゴゴゴメンお邪魔しましたどうぞごゆっくりッ！！」

「アアアアスナさんちがっ違うんですこれはそのパクぱくッパク……！！」

明日菜の足に刹那が一瞬でしがみつく。

「たくよー、いいトコロで邪魔が入るぜ。…チッ」

「あははは、パクテオーはまた今度やなー」

「いやですからこれは違うんです誤解です思い違いです勘違いです違うんですッ！！」

「いえいえ私のコトなんかお気になさらずどうぞ2人で心ゆくまでっ！？」

混乱の極みに達した2人が取っ組み合いを始めてようやく、木乃香が仲裁のため口を開いた。

「アスナー、そんなに慌てて何の話やったん？」

「……え？」

（……。）

「……忘れたわよ。朝からスゴイもん見ちゃったから、はは」

「アスナさん　だから仮契約（パクティオー）――ッ！」

（……はあ。なんでアレが私の本当の名前だなんて思ったんだろ？　長いし…このかのお父さんとかネギのお父さんまで出てきて…）

――――でもあの名前…なーんかしっくりくるのよねー。

刹那の叫びを素通りして、明日菜は静かに思考の海に沈んでいた。

◇―――――◇―――――◇

さて、なぜ明日菜は雪山修行を敢行する羽目になったのか？
ここからはダイジェストでお送りしよう。

？ナギさん捜し！　ネギま部（仮）発足！

「アスナさんこんな所に呼んで何の用事ですか？　……新クラブ設立申請書？」

「そ。あんたさ、「魔法の国」に行ったら帰って来れないかもって言ってたわよね」

「え？は、はい」

「ダメよ帰って来るつもりじゃ。「絶対に」帰って来なきゃダメ！！　帰って来るって約束しなさい、それがみんなの先生としてのあんたの責任よ！！」

「はうぅっ！」

「……でも。その責任をあんた一人に押しつけるほど私も鬼じゃな

いわ」

「あんたお父さんをみつけるまでは止まれないのよね。だったら私も本腰入れて協力して、ガンガン積極的にお父さん捜しして　早いトコ見つけちゃおーってわけ。いいんちょにも協力を頼んだわ」

「つまり。このクラブは『ネギのお父さんを捜し出して、しかもちゃんとこの学園に帰ってくる』そのためのクラブよ。
　名前募集中！　当然ネギ先生（あんた）が顧問ね！　文句ある？」

？名誉顧問の招聘と部室確保！

「…ネギま部（仮）？　焼き鳥でも食いに行くのか？」

「ネギのお父さんの大魔法使いのナギさんを探すクラブよ文句ある？」

「成程…それで予算もせしめてウェールズに行こうという腹か…くだらん」

「もーエヴァちゃんまたそんな言い方～。エヴァちゃんの目的もナギさんなんだから損はないでしょ？　学園の外に出られないエヴァちゃんの代わりに私達が探してくるからさー」

「……ふん…わかったよ。『名誉顧問』……なってやらんこともない。その代わりナギの情報は全て渡して貰う、いいなそれが条件だ。しかし貴様ら、名誉顧問など何の意味が…」

「う、うん、それでね…お願いがあるんだけど」

「……『別荘』を部室にね。それが目的か」

？新しいダイオラマ球、レーベンスシュルト城へ！（ダイジェストスピードダウン）

「うっひゃあああぁ～～～～～！？」

「こりゃまたスンゴイわね～～～ッ！！」

「熱帯ジャングルアル～～～♪」

地下室には、『別荘』のものより一回りから二回りも大きいジオラマ球が５つも増えていた。その中に入ってみるとなんと、彼女達の視界にジャングルの大瀑布が飛び込んできた。

――――ドドドドドドドドド……

棚田のように段になった滝、だがその規模は棚田の比ではなく、高層ビル一つが軽く建つ程の巨大な崖を水が流れ落ちている。

その崖を自らの一部として取り込んで、塔のような巨大な城がジャングルに聳え立っていた。城に流れ込んだ水は魔法で温められて温泉と化している。

激しい水音が響くなか、メイド服を着た茶々丸がやって来た。

「ようこそ”レーベンスシュルト城”へ。

四方の魔方陣から修行場へ転移できます。手前の魔方陣は城への近道となっております、この塔から城まで５００ｍはありますので」

「ヤッホ――――♪」

「ひゃ――」
「ジャングル～～～！！」
誰も聞いてなかった。
？名誉顧問、早くも職権発動！？
「アスナさーん　いらしたんですね！　ということは師匠（マスター）の許可も？」
「もちろん！　バッチリよ！」
「さーて、名誉顧問も決まって部室も確保できたことだし。『ナギさん発見』に向けて本格的に動き始めるとしますか！」
「よーしそれじゃあ……頑張るぞ――――――ッ！！」
『オオ――――――ッ！？』
「せや！　部長も決めた方がええんちゃうかなー」
「あ――確かに」
「……そういうことでしたらアスナさんが適任かと」
「っえ？」
「アスナさんはリーダーシップありますし――……」
「文化祭での活躍を見ても納得の人選かと」
「賛成です！　私達から動くためにクラブを作るなんて…私には思いつきません」
「い、いやー…」

「おお～、アスナ　人気うなぎ上りやなー」
「ふむふむなるほど。こりゃあんたしかいないね！　いよっアスナ部長ッ！」

「う、うん…そ、そお――？　そっかー、みんながそこまで言うなら部長やっちゃおうかなー、エヘヘヘ」

明日菜は照れたように頭を掻いて引き受けた。これで部長が決定したと思われた……のだが。

「お前が部長か…私にはとても適任とは思えん」

場の空気に水をさすように、黒を基調とした、いつもの服装に着替えたエヴァンジェリンが歩いてきた。

「名誉顧問として反対票を投じさせてもらおう」

ちなみにどの辺が名誉顧問なのかと問われれば、それは今かけているメガネなのである。

「エヴァンジェリンさん……？」
「な、何よエヴァちゃん、私が部長だと何か問題でもあるの？」

一同の視線が眼鏡をかけた名誉顧問に集中する。全員一致で決定した部長が否認されたのだ、明日菜自身も彼女達も何が問題なのか解りかねる。

「フン…神楽坂明日菜。お前も「ネギ（ぼーや）を守る」などと言っていたらしいが……

ただの女子中学生のお前にそれができるのか？　どうせ今回の事もテキトーな思いつきだったんだろう？」

言葉の棘を隠そうともしないエヴァに、ネギま部（仮）の面々は何事かと動揺する。

「お前は口先だけだからな」

「な…何言ってんのよ！　そんなことないわよ！！」

そんな中、遂に明日菜が食ってかかった。待ってましたとばかりにエヴァが提案する。

「ならばひとつテストをしよう。お前が部長に相応しいかのテストだ受けるか？」

「…いいわよ。受けて立つわよ！！」

？明日菜ＶＳネギ！　部長就任テスト！

「ルールはぼーやの弟子入りテストの時と同じ！　貴様がぼーやに一撃入れられれば合格だ！　ただし制限時間は１５分！！」

「いいのそんなカンタンな条件で？　私だってネギに一撃入れるくらい楽勝なんだから」

「あのー、僕、部長はアスナさんでいいと思いますけど…」

「黙れガキが！　いいな本気で行け！少しでも手を抜けばすぐにわかるぞ！！」

「うひゃいっ！！」

「‥‥では――――」

（フッ、ネギの魔法は私には効かない！　障壁は壊せるし、上手くなってきた咸卦法でスピード・パワーも負けてないハズ！　何より‥私があんたを守るために）

「――――始めるがいい！！」

（負けられないッ――――いくわよ！！）

？１５分後

「…う…うぅ～～ん……」

全身　打ち身と擦り傷だらけになった明日菜が、テラスの中央で力なく倒れていた。
服の袖が破け、前髪のアホ毛は元気を失ってしんなりしている。

３－Ａ　８番　神楽坂明日菜。
学園非認可クラブ　ネギま部（仮）　部長就任試験――――――――――不合格。

「フン‥‥その程度で誰かを守ろうなどとは片腹痛い」
「う‥‥ううっ」

（こ……こんなに差があったなんて……）

「……アスナさん……」
「アスナー……」

「――――足手まといだ。やはりお前は口先だけだな、神楽坂明日菜」
（～～～……っ！！）

「いっ、言ったわね！　口先だけじゃないわよ！！」
「ああん、じっとしいやアスナー。ウチが治したるから」

「はっ、貴様はたまに偉そうなことをほざくが、結局はただの経験浅い女子中学生に過ぎん。ぼーや相手に手も足も出ないようでは部長どころか、とんだ足手まといになることくらいわかるだろう」

「う…確かに実力不足は認めるけど……。で、でもネギだって1日を2日にして修行してるんだから少しくらい差があったって当然でしょ！？」

「ほう？　ではぼーやと同じ修行をすれば追いつけると？」

「――え……と　当然よ！　すぐに追いついてみせるわッ！」

（――――に　や　り。）

「それは頼もしい、では我が修行を受けると？　言っておくがやめるなら今のうちだぞ。後で泣きを見ても知らんからな」

「…え」
「ア、アスナさんそれは……っ」

売り言葉に買い言葉。もう遅かった。

「う‥‥も…もちろん！　やるわよ、やってやるわ！！」

びゅごおおおおおおおおおおおおお‥‥‥！

「――って確かに言ったけど　この修行はマズイでしょ――ッ！？」

こうして明日菜は冒頭に至る。

◇――――――――――◇――――――――――◇

「むむむ～～……。プラクテ・ビギ・ナル～、倒れえっ（セー・インウェルタント）！」

‥‥カランッ

３ｍほど離れた場所に立てられた鉛筆・消しゴム・油性ペンその他

諸々。
そのうちの鉛筆が、魔法によって2本倒れた。
「おおーーー！」
「スゴイッホントに倒れた！」
「やた――っ！これでウチもエスパーや――――♪」
「素晴らしいですお嬢様！」

エスパーじゃねえ。木乃香さん、あんたが目指してるものは何なんだ。

「でも思いっきり息吹くと倒れたりして。っホフウゥゥゥ！」

――――カランカランッ！

「ふお！？　スゴイ肺活量アル！」
「（ガーン！）ズ、ズルしたらアカンーッ！！」

木乃香の努力をハルナが一瞬で粉砕した。‥‥3m離れてるんですけど‥‥。

「しかしお嬢様、いつのまにここまで‥‥」
「アスナも頑張ってるしウチらも頑張らなな！」
「バフゥッ！」

――――カランッカラランッ！！

「オオッ私の方がスゴイアルヨ？」
「ぬぐっ！？　やるわねくーふぇ！」
「皆さん盛り上がってますねー」

「あ♪　ネギ君　コタ君♪」

明日菜についていった筈のネギと小太郎が帰って来た。しかし漫画家と拳法家は盛り上がる方向をどこか間違えている気がする。

「ネギ先生　アスナさんはどうなりました？」

「それが…「お前達はコーチ失格だ」と追い出されちゃいまして…」

一般人の明日菜を気遣いサポートし過ぎ、しまいには「こんだけ快適なら地獄の雪山修行も楽しいもんね～♪」と明日菜がほざいた結果。

『アホかーーーーーーーーッ！！！』

エヴァンジェリンの怒りを買ってネギと小太郎は追い出された。

「アスナさん心配だなー…僕たち2人でも死にそうな修行だったのに…」

「え・そうなん？」

「いやー。俺も仕事で結構修羅場は潜ってきたけど、ホンマに死ぬ思たんはアレが初めてや」

――コ：コタロ君　僕：も：ダメ…

――アホしっかりせんかー　ホレ、あの丘の上に温かい夕飯が見えるやんけ――…

――わー？　ホントだ――♪

「フフフ……」
「へへへ……」

悟った様に笑い出す2人を見て、木乃香と刹那は冷や汗をかき始めた。
するとそこへ茶々丸がやってくる。

「大丈夫ですネギ先生。マスターは厳しくはあってもお優しい方ですから……」
「……そ、そうですよね！　安心です！」
「ええ。安心です」
「そかー、安心やー♪」

（（……そうかなー……））

どうしても共感できない刹那と小太郎だった。

明日菜の命運や如何に？
後半に続く。

第８１話　ネギま部（仮）発足！～真夏の極寒サバイバル～（後書き）

＊士郎が出てこないんだけど？という感想が投稿後２０分足らずで寄せられました。
　早い、いや速いです。そしてご安心を、補完する話を投稿する予定です。
　更に言うと彼はエヴァの家でお留守番です。士郎は家に誰もいない状態にしたくないので。
「誰かお客さんが来たら困るだろう？」ｂｙ士郎

《おまけ・ｉｆ》

エヴァ「貴様がぼーやに一撃入れられれば合格だ！　ただし制限時間は１５分！！」
アスナ「いいのそんなカンタンな条件で？　私だってネギに一撃入れるくらい楽勝なんだから。
　今まで散々　蹴ったり殴ったりハタいたりしてきたんだからっ！」
　ネギ「……。」
コタロ「ネギぃ……元気出せぇ……」

～補足・解説～

‥ここからはダイジェストでお送りしよう。
　最初は真面目に逐一　展開を書いていたのですが、あえなくオミット。明日菜ＶＳネギはぜひ載せたかったんだけどなー。

：？名誉顧問の招聘と部室確保！
招聘：しょうへい…人材を招き入れること。

：？名誉顧問、早くも職権発動！？
「権力は使ってこそ権力だ」　ｂｙエヴァ

：？明日菜ＶＳネギ！　部長就任テスト！
本編には書けませんでしたが、この勝負でネギは「喰らうとマズイのであれば、喰らわなければいい」という士郎が以前言った言葉を反芻して実行してたりします。

：学園非認可クラブ　ネギま部（仮）
まだ非認可です。

：「やた――っ！これでウチもエスパーや――♪」
：エスパーじゃねえ。木乃香さん、あんたが目指してるものは何なんだ。
学術的に見れば似たようなモンなんですけどね。ＥＳＰ（超感覚的知覚）とか。

：後半に続く。
イメージは「ちび○るこちゃん」のナレーションの人のボイスです。

次回予告。

そうよ、最初から無理だったんだって。
エヴァちゃんだって言ってたじゃない。中学生らしい夏休みを送った方がいいって。

ただの女子中学生が４日も保ったのよ？　むしろ褒められたってイイくらいよね？
ネギ達は・・・何て言うかなぁ。偉そーなこと言っておいてダメだったけど

――ゴメンみんな。頑張ったけどね、ダメだったよ――――

第８２話　ネギま部（仮）結成！～明日菜、部長に至る道～
それでは次回！

第８２話　ネギま部（仮）結成！～明日菜、部長に至る道～（前書き）

◎新コーナー「今日のＦａｔｅ／名・迷セリフ」。
　このコーナー果たして何回続くのか。

アーチャー
「なに、心構えはできるだろう。冬のテムズ川は厳しいぞ？泳ぎは達者になっておけ」

　アーチャーの生前の苦労が垣間見える一言。憎んでいる過去の自分にさえ忠告したくなるほど壮絶だったんでしょうね（泣）
　「衛宮士郎は遠坂凛とロンドン橋に行くとテムズ川に落とされる」。諦めろ士郎、それはアカシックレコードとか根源に記録された「定められた事実」なんだ…！
　そういえばウチの士郎もエヴァに、橋から湖に突き落されて風邪ひいたなぁ。
　なんだ、どこに行っても彼は橋から落ちる運命なのか！？と思っていたら、ＴＹＰＥ－ＭＯＯＮ　Ｗｉｋｉによると「橋は士郎にとって鬼門」らしい。やっぱりなぁ、ｈｏｌｌｏｗじゃ橋を渡ろうとするとアーチャーに殺る気Ｍａｘで狙撃されるしなぁ。ガンバレ士郎！

それでは第８２話、どうぞ。

第８２話　ネギま部（仮）結成！～明日菜、部長に至る道～

明日菜の修行。
それは雪山で、装備なしで、独りで、７日間生き延びること。

ネギも小太郎も当然エヴァも、魔法使いやそれに類する者は、あらゆる環境に対応できる術を持っている。この雪山ではいわゆる「対寒」、寒さ（外気）を遮断する術を使うことになる。

そしてこの過酷な環境の中では、それをほぼ２４時間使用し続けなければならない。
少しでも術、明日菜の場合は咸卦法に無駄なエネルギーを使えばガス欠…術は切れて極寒の世界に投げ出される。

確かに「術の効率化」を鍛えるのに適した修行ではある。常人離れしているとはいえ明日菜は未だ一般人の域を出ない。戦い慣れしている者ならば多少手こずりはしても、彼女に勝つことは難しくないだろう。

たとえ明日菜が「究極技法」咸卦法を使うことができるとしても。
素人まる出しの使い方では、本当の意味での”戦い”では通用しない。

危険な魔法世界に行くならば術の効率化を図り、咸卦法をまともなレベルまで引き上げることは最低条件…ということなのだろう。そ

してそれは、一般人の明日菜には土台無理な話だった。

「冗談じゃないわよっ！こんなの修行じゃないでしょー！？　それにネギとコタ君抜きで7日間なんて無理に決まって」

「ならやめろ。別に止めんぞ」

「…え？」

「ただの中学生は中学生らしく夏休みを過ごした方がいい」

明日菜は予想外の返答にポカンとしている。構わずエヴァは懐から出したハンドベルを明日菜に投げ渡した。

「…その鐘を鳴らせば助けに来てやる。ただしそこで修行は全てなしだ。何ならいま鳴らしてもいいぞ？　どうせお前は口先だけだからな」

「バ…バカにしないでよ！」

「…フン。いいかよく聞け。

私は貴様のような人格には何の興味も持てん。明るく屈託なく考えなしにモノを言い行動する…どこにでもいるアホな女子中学生だ」

上から明日菜を見下ろして、何の感情もなく吐き捨てた。

「――貴様が大嫌いだよ神楽坂明日菜。どちらかといえば刹那や超鈴音…ついでに言えば士郎のような人格が私は好みだ」

「……う……。あ…そう。そりゃ…悪かったわねこんな性格で。まーエヴァちゃんは好きでしょーね士郎が」

「ふむ。ではこれも預かっておこう」

「え!?」

明日菜の手からハマノツルギ――仮契約カードを問答無用で取り上げる。

「ちょ、ちょっと！　カード（それ）がないと咸卦法使えないし……！」

「……そうかな？」

――思い出してみるといい。

「え…？　何を…？」

「ま、せいぜい頑張れ。どうせすぐ鐘を鳴らすだろうがな」

「あっ」

言うだけ言って、明日菜を措いて吹雪く空へ飛んでゆく。

そのままエヴァンジェリンは白い闇へ消えていった。

「そっそんなのカードがないし当たり前でしょ!?　メチャクチャ言わないでよ――!!

もーっ、どーしろっていうのよエヴァちゃん――――!!」

ネギが作った雪洞はエヴァに砕かれ、小太郎が温めた湯は水に変わっていた。
おまけにカード――ネギの魔力がないため咸卦法も使えない。
残っているのはネギ達が唯一残した、雪で濡れてしまったタオルのみ。

「ガチガチ……ホ、ホントにヤバイわね……何も無しに雪山に放り出されて……！」

ひとまず氷山、ネギの作った雪洞跡の陰に座って風をしのぐ。つい、と右手のハンドベルに視線が向く。

――鐘を鳴らせば助けに来てやる

「…ふ、ふん……そう簡単に諦めないわよ……！　エヴァちゃ…の……バ…カ……」

（……Ｚｚｚ．．）

「――ってダメダメダメ！！　寝たらダメっ寝たら死ぬわよマジで！！」

「いやホン…トに、マズ…イ…っ…て……」

「……Ｚｚｚ．．．．」

◇――――――――◇――――――――◇

風の流れに逆らって、エヴァンジェリンが空を進む。

「アホな女だ。前からイケ好かん奴ではあったが」

「．．ンア？」

独白が、一緒に来ていたチャチャゼロの耳に入る。

――ではエヴァンジェリン。武道会での約束…アスナさんの情報をお話ししましょうか――

エヴァの脳裏にアルビレオの言葉が再生される。まほら武道会。明日菜対刹那の勝敗、その賭けの賞品。
彼らが生み出しそして隠した、「神楽坂明日菜」の”秘密”――――。

「・・・いや、何の皮肉なんだかなこれは。あのアホはようやく手に入れたモノを自分から手放そうとしているぞ？」

「全ての過去を置き去りに。ようやく手に入れた平穏と幸福を」

懸賞金６００万ドル。悪の大魔法使いは――魔力を封じられ、麻帆良に縛りつけられて
数多の悪意に利用され、狙われ続けた姫御子は――全てを忘却の彼方に

――――平穏を手に入れた。

だが、エヴァンジェリンは気づいていない。

アスナは平穏など望んでなかった。
ただ大切な人達と一緒に居られればそれでよかった。

それはエヴァも同じであったかもしれない。
”誇りある悪”を敷く彼女はチカラを捨ててまで、今さら平穏など欲しくはなかったかもしれない。

……だが。

得た平穏は明日菜の意思によるものではなく。

箱庭の外へ飛び出そうとしているのは、間違いなく明日菜の意志だ。

エヴァンジェリンは気づいていない。

この修行は明日菜に、魔法世界行きを諦めさせるためだけのものではないということを。

――――――試したいのだ。

アスナではなく、神楽坂明日菜が。

暗闇の荒野に踏み出せる強さを、持っていられるのかを――――――。

「まったく……愚かな女だ」

今度の呟きは、チャチャゼロの耳にも届かずに風と消えた。

◇――――――◆――――――◆

アスナちゃん　いいかい？

何…？　タカミチ。

あ・ゴメン、寝てたのかな？

ううん目を閉じてただけ。何か用？

いやあ実は：咸卦法のコツを教えてくれないかなと思ってさ。

：：簡単だよ。自分を無にするの。

けどそれがなかなか難しくてさー。

難しくなんかない：右手に気：：：左手に：：：：ハイ。

――――ボウッ！

おおっ！？　スゴイなあアスナちゃん！なんでそんな鮮やかに：：：

：：：：？　なんでって：無になるなんて簡単。私には元々なにひとつないもの。

：：：：：：：：：：：：：：。

：：：どうかした？　タカミチ。

：：：：いや、アスナちゃん。そんなこと言っちゃダメだよ。少なくとも今の君には…ナギさんや、師匠や…それに僕だっているだろう？

：：：：：：：：。でもアナタの師匠の煙草はキライ。

ハハハ、それは勘弁してやってくれ――――――――――

◆――――――◇――――――◇

「ん……」

（なんだろう今の夢――――……夢？）

「ハッ！？　いま私寝てた！？　死んじゃうわよ！！　ってアレ、寒くない……」

――キキキキキキ……

「咸卦法使えてる……何で？　もしかして私って天才かも！？　スゴイ私っ！！」

『フ…ここまでは予想通り。だがすぐ音をあげて鐘を鳴らすさ』

「まあ…これでなんとか凍死は避けられそうだけど、あと7日間ってのはいくらなんでもキツイわよねー……。今だってこの咸卦法が1日保つかもわかんないのに」

「ってことはアレ？　ヤバッ！やっぱり休めるように洞窟は絶対必

要じゃん！」

そう。明日菜は最低条件…いや、前提条件を満たしたに過ぎない。睡眠用の寝床、水、食料、火……必要なものは多い。明日菜の命がけの生活はまだ、幕が上がってすらいなかった。

『鐘を鳴らすがいい。
自らの無力を思い知れ。心折れた者は旅には出られぬ。それが…貴様の為でもある』

1日目は、雪洞掘りと薪探しを終えて咸卦法が限界。震えながら眠りに就いた。

2日目。

「も……無理。お魚なんて取れない……。あ、当たり前よね何も食べてないし…咸卦法でどんどん体力減っていってるんだから」

「……もぉ――――――っ！！　何なのよコレ　エヴァちゃ――――う…ダメ叫んだら体力が……。
き、今日こそは火を起こさないと……」

3日目。

「ううぅ…ごはん……おさかなー…。……おさかなー……ネギ～……」

（――――――！！）

「最初に…ネギ達が焼いてくれたお魚があった…ハズ…！……あったッ！！発見！！」

「咸卦の気で解凍して……！　…んむっ、マズ……。でも…おいしいー……！　はむ……んむっ……んっ…んぐっ……」

「……っく……ひっく……ぐすっ……ふえぇ……」

――――4日目。

雪原にはただひとつ、倒れ伏す人影だけがある。そこに唯一、少女の傍に寄り添うように転がる小さな鐘。遥か遠くからそこへ向けて、金の少女と小さな人形が視線を飛ばす。

『考えてもみるがいい…ただの女子中学生の貴様がここまでする義理があるのか、あのぼーやに？　こんなバカげた修行がお前にとって何の意味が？』

「…か……考えてみたら……ここまでやんなきゃいけない理由…あったっけ……？」

「こんな死ぬ思いまでして…ネギのために……せっかくの夏休み、

なのに……」

明日菜に声を出す力など残っていない。だが今は、心の裡から漏れ出る気持ちが勝手に口を動かしている。

「ハハッ…あはは……なーんだ…こんな中途半端な気持ちだったんだ…ダメじゃん私…」

『…そうだ。だから鐘を鳴らすがいい』

そうよ、最初から無理だったんだって。

『なんでただの女子中学生の私がこんな、』

エヴァちゃんだって言ってたじゃない。中学生らしい夏休みを送った方がいいって。

『ならやめろ。別に止めんぞ』

私が意地張ってただけなんだよね。

『ま、せいぜい頑張れ。どうせすぐ鐘を鳴らすだろうがな』

エヴァちゃんの言った通りになっちゃうのは癪だけど…ただの女子中学生が4日も保ったのよ？　むしろ褒められたってイイくらいよね？

ネギ達は…何て言うかなぁ。偉そーなこと言っておいてダメだっ

たけど

アスナさん大丈夫ですか！？
アスナーケガしてへん！？　ウチが治したるえ！
お疲れ様でしたアスナさん。
せやな、姉ちゃんは女やし一般人やししゃーないわ。むしろよくやったモンやで。

（――ゴメンみんな。頑張ったけどね、ダメだったよ）

――カラン・・・

明日菜が、ハンドベルに手を伸ばした。

◇――――――――――◇――――――――――◇

「カンパーイ！！」

「いやーウマいわ！」
「アハハバーベキュー最高ね～！！」

外の時間で7時間、ダイオラマ球内で7日目。
夕陽に染まるレーベンスシュルト城のテラスには、7日前のメンバーに加えて朝倉とさよがいた。

「ああっそこ、鉄板焼きなのに普通にトウモロコシを焼くんじゃない！　茶々丸、アルミホイルないか？」

ハルナの言った「部活動」が気になってやってきた士郎もいるが、本来の目的を完全に忘れて料理係（ピットマスター）に勤しんでいる。この男、筋金入りの主夫である。

「にしてもココすごいねー。バーベキューしてて気持ちいいよ♪」
「んー♪」
「にくにく♪」

「こらクー、肉ばっか食うな。野菜も食えホラ」
「ッ師父!?　野菜だけの皿なんていらないアル！！」
「おかわりありますので遠慮なく」

「ところでこれ何のパーティーなんだ？」
「アスナさんの7日間修行完遂記念パーティーです――――……」
「おいおい、主役がいねえのに始めてていいのかよ？」
「そろそろ戻る時間なんですが…心配ですね。私迎えに行ってきます」

「千雨ちゃんすっかり仲間やなー」
「バッ…ちがっ、茶々丸（アイツ）がムリヤリ…」
「コンビニで暇そうにしているところをお誘いしました」
「ウソつけ半分拉致ったろテメエッ！」

「…確かに心配です、僕も行きます刹那さん！」
「もぐもぐ…オレもいくでネギ！　ごくん、姉ちゃんが心配や」
「早く行くよコタロー君！」

「ま、待てまだ肉がー！」

3人は足早に修行場へ駆けていった。

「修行ってアスナの奴なにやってんのよ？」

「そ、それが――……」

「「――エヴァちゃんの極寒雪山サバイバル部長就任テスト～～～！？」」

◇――――◇――――◇

「姉ちゃんおらへんな――」

「この霧を抜ければ山頂です。残りはそこくらいしか……」

「はい」

歩く度に雪が踏みしめられて音が鳴る。視界を塞ぐ霧の中、何も無い雪の世界で彼らの足音と声だけが響いている。

――ブワッ

突風に一同は目を瞑る。同時に霧が晴れ、目を開けた先には。

「――――7日間!!　持ち堪えたわよ!!　文句ある!?」

別荘とも時間の流れが違うこの場所で、雲海から朝日が昇る。
ハマノツルギを受け取って、明日菜は息を切らせて啖呵を切る。彼女の前には、チャチャゼロを従えるエヴァンジェリンが憮然と佇んでいた。

「……」

「何とか言ったらどうなのよ――!?　死にかけたのよ!?」

「…なぜ諦めなかった？　お前にここまでする理由はなかったハズだ」

「……そんなの知らないわよ」

「あのぼーやの為か？」

「違ッ――――、……ま…そうよ」

「ハッ」

（――くだらん）

「でも」

嘲るように嗤うエヴァの思考を、その声は遮った。

「それだけじゃないわ」

＊――――――――――＊――――――――――＊

――ゴメンみんな。頑張ったけどね、ダメだったよ。

明日菜がハンドベルに手を伸ばしたその時。鐘の曲面に映る自分の姿が見えた。

――――――本当にそんなこと言うつもり？

あいつらの顔見て言える？　眼を見て言える？　心の底から、そう言えるの？

――――――言えない。言えないよ。そんなこと――――絶対に言えない。

だって、今だけの話じゃない。

『私、心配なのよアンタのことが。いつも無茶ばっかりして…いつか私の知らないところで大ケガしたり……死んじゃうんじゃないかって……。

　無関係なんて言わないで、ちゃんと見てよ。ネギの従者（パートナー）として私を見て。守らせてよ。あんた（あんた）のこと』

『アスナさんは僕の「魔法使いの従者（パートナー）」でしょ？　まずはアスナさんに言わなきゃって思って』

『…これが私の正体……。奴らと同じ……化け物です』

『あんたさあ、このかがこんなことであんたのことを嫌いになったりすると思う？　ホントにもう……バカなんだから。

　それに……こんなの背中に生えてくんなんてカッコイイじゃん』

『‥わかるか？　私はもう人並みの幸せを得るには殺し過ぎたし、長く生き過ぎた』

『‥‥大丈夫。今からだって全然遅くないよエヴァちゃん。幸せになる権利は誰にだってあるんだから』

あいつらと、今まで通り付き合える？

今までと同じ顔して話せる？

偉そうなこと散々言っておいて。「私、一般人だからダメだった」なんて言ったら。

――――もう私、普通（あいつら）じゃない人達と一緒にいられない――――――――！！

（……あ…き、ら、め、て…たまるもんか……！）

「――――諦めるわけないでしょ……！！」

手を伸ばして鐘を手に取り、顔を上げる。決意が溢れる。

『――――なに？』

（……いま、お前は。何と言った――――）

「――――あきらめない」

腕に力を。上体を起こす。脚に力を。膝を曲げる。雪を蹴る。踏みつける。立ち上がる。

死相すら浮かぶ顔の瞳に光を宿して。死に体の身体を感情だけで突き動かす。

「あきらめない…あきらめないあきらめないッ！！！」

それは有り得ない光景だった。エヴァンジェリンが目を瞠る。

気力体力限界の筈の明日菜が纏うのは、輝くそれは間違いなく”咸卦の気”だった。

「あきらめないわよ――――エヴァちゃんのバァカ――――――――！！！！」

手に握るハンドベルをありったけの力で、遥か彼方へ――――――投

げ捨てた。

『……。』

これ以上に呆けた主の顔は二度と見れないであろうと、チャチャゼロは思った。

＊――――――――＊――――――――＊

「それだけじゃないわ」

「ん……？」

――くしゃっ

明日菜がエヴァンジェリンに向かって歩き、そのままエヴァの頭を撫でた。

「あんたみたいなバカやあいつらと友達でいるために…絶対ココで諦めたらダメだって思っちゃったのよ」

その笑顔は心からのもので。その言葉は、掛け値なしの本音だった。

『心折れた者は旅には出られぬ』。だから。折れてやるわけにはいかなかった。

友達でいたかった。友達でいることを、諦めたくなかったから。

「――――私は、エヴァちゃんのことキライじゃないけど？」

「……あ？　…ええい離せうっとおしいっ」

「ギャーーー！？」

エヴァの合気で投げ飛ばされた。

「も――素直じゃないなー」

「黙れ。…しかし……せっかく逃げ道を用意してやったというのに」

「へ？」

エヴァは、いつもと変わらぬ眼で自分を見つめる明日菜を見やる。

（何かを思い出した様子もない。アホがアホのまま乗り切ったか……）

「――――フ…アハハハハハハッ！！！」

「な、何？」

「――よかろう」

――――貴様の強さはホンモノだと証明された。

「ならば我が弟子としてぼーや共々私が直々に鍛え上げてやろう！！　我が配下に連なるに相応しい立派な戦士……悪の中ボスにな！！」

そう言い放って颯爽とコートを脱いだエヴァの服には「師匠」の２文字。

……うん。ていうか準備してたのか。準備してたのか。

「え…ちょっそんなの聞いてないわよ!?　弟子って何!?」

「もう遅い！　中途半端は認めん　やるならとことんまでだ!!」

「だ・だって悪の中ボスとかそんなカッコワルイのいやっ――」

「問答無用!!　尚　修行中の貴様の服は常に黒！　ゴスロリ服とする!!」

「やめて――――っ!!!　ヒラヒラ服　似合わないからそれだけは――――!!!」

「アスナさ――――ん!」

「お疲れ様ですアスナさん!」

「姉ちゃん明日から修行仲間かーそらええわー♪」

学園非認可クラブ　ネギま部（仮）、部長決定。３－Ａ・８番――――神楽坂明日菜。

1959

第８２話　ネギま部（仮）結成！～明日菜、部長に至る道～（後書き）

《おまけ》

アスナ「やめて――――っ！！！　ヒラヒラ服　似合わないからそれだけは――――！！！」

エヴァ「フフフ安心しろ、実は既に用意してあるぞ我が弟子よ！これがッ悪の中ボスドレスだ――――！」

ネギ（：服に「中ボス」って刺繍が……）

刹那（……。）

コタロ「センスないわー」

アスナ・ネギ・刹那（コタ君／小太郎君ーーーーーーーー！！！）

エヴァ「……ビキッ……」

南ー無ー。

～補足・解説～

：この雪山ではいわゆる「対寒」、寒さ（外気）を遮断する術を使うことになる。

　寒さを遮断するということは熱を遮断することであり、その熱を伝達する空気を遮断することですからね。呼吸用の外気の温度調節とかはどーやってんでしょうね？

：「――――貴様が大嫌いだよ神楽坂明日菜。どちらかといえば刹那や超鈴音…ついでに言えば士郎のような人格が私は好みだ」

　かつて悲劇を経験し、それに耐え、乗り越え、立ち上がったが故に強さ（と歪み）を持つ者。ということなんでしょうか。士郎を加

えたのはぶっちゃけノリです。士郎は今でもたまにウジウジ悩むけど。

（精神的な面で）最初から強かったナギやラカン、明日菜とは対称的ですね。

‥――――――試したいのだ。

エヴァは必ず「抜け道」を作ってくれているんですよ（と、少なくとも私は考えています）。

魔法世界に行かない方が明日菜の為。咸卦法が使えるとはいえ明日菜はただの女子中学生、キツイ修行をぶつければ諦めるだろう。エヴァはそういう意図があったのでしょうが、逆にクリアしてしまえば文句は言えず反対もできず、認めるしかありません。

ネギと弟子入りテストの時もそうです。弟子などいらないエヴァは「一撃入れる確率は3％以下」という試験をネギにさせました。しかし「一撃入れれば合格など破格の条件だ」と言っていたように、彼女にとってはかなりの譲歩だったと伺えます。

エヴァの性格的に、いつまでも付き纏われたり、煩く頼み込まれるのが嫌で、「厳しい試験を出してそれが駄目なら諦めさせる」方が相手も納得して引き下がるだろうと考えただけかもしれません。今回の明日菜の場合は「自分の無力さを実感させる」という意図でしたが。

しかしこの「試験」という課題には「抜け道」があります。そう、合格すればいいんです。エヴァはわざわざ試験という形をとり、受験者が目的を達成できる道筋を用意してくれているんです（合格した際には相手の要求を呑むというエサで引き寄せ、試験を受けさせ

不合格にしてやろう、という意図なので当然ですが）。

麻帆良に封印されて丸くなったエヴァのお人好しな部分が出ているのかもしれませんが、私はやはりエヴァの中に無意識の「期待」があったのではないかと思います。

ナギの息子であるネギ。自分と重なる境遇を持つ明日菜。

この2人がどこまでやれるのか、どこまでいけるのか……。

：鉄板焼きなのに普通にトウモロコシを焼くんじゃない！

焼き網だとそのまま焼いて美味しく食べれるけど、鉄板焼きの時はアルミホイルで包んで焼かないと美味くならない、という話を聞きました。にわか知識です。正しいんですかね？

：ピットマスター…バーバキューにおける調理係のこと。大体お父さんの役割。

：「私、一般人だからダメだった」なんて言ったら。

一般人じゃねえだろ、とか言わないで。本人は一般人のつもりなんですから。

……さて、明日菜の心情は上手く書けたかなあ？

明日菜はあそこで諦めることで、ネギや刹那と今まで通りの関係でいられなくなることが怖かったんじゃないかな、と私は思いました。

次回予告。

ダイオラマ球・レーベンスシュルト城での7日間。

そこで蚊帳の外だった男の話。

それでは次回！

第８３話　ネギま部（仮）設立！　ｓｉｄｅ士郎（前書き）

第２回「今日のＦａｔｅ／名・迷セリフ」。
２回目からテンプレを無視してみる。今回は２本立て。

衛宮切嗣
「士郎――誰かを救うというのはね、他の誰かを救わないっていうことなんだよ」

言峰綺礼
「――衛宮。助けた者が女ならば殺すな。目の前で死なれるのは、中々に応えるぞ」

かつてのライバル２人を並べてみた。
この２人の台詞には、それぞれ別の意味で驚きました。切嗣の台詞にはハッとさせられて、言峰の台詞には「この人こんな台詞も吐くんだ……！」と、ちょっと失礼なカンジにびっくりしました。

それでは第８３話、どうぞ。

第８３話　ネギま部（仮）設立！　ｓｉｄｅ士郎

チチチ……チュンチュン……

鳥の囀りが聞こえてくる。射した光が俺の顔を覆い尽くす。
この時期になると太陽も随分と早起きだ。二度寝しようと努力するも、覚めてしまった頭は再び夢の世界に行くことは叶わず。俺は諦めてベッドから這い出ることにした。
さて、今日も今日とて鍛錬に行きますか。

第８３話　ネギま部（仮）設立！　ｓｉｄｅ士郎

今日は土曜日。ただし今日からこの街――麻帆良学園都市は夏季休業期間に入る。

喫茶店アルトリアは今のところ通常営業の予定だ。
下校途中の生徒、下校ついでに寄ってくれる生徒が主な客層であるため、夏休みに入ると客は減るだろうと思うのだ。
だがありがたいことにウチの店にも（少ないながら）常連さんというのがついているので、客が減るからといって安易に店を閉めてしまうのも躊躇われる。

結論は取り敢えず保留。しばらく様子見をしてから判断しよう。

……などと考えていた時期が俺にもあったさ。
さほど人気がある店とは思っていなかったが、料理の腕に関してはそれなりの自信があったのだ。ある程度は――少ないながらも――お客さんが来てくれると思っていたんだ。

鍛練後　家に帰って家事を終え、店を開けてみると。

――学生が貴重な夏休みの初日から、ウチの喫茶店で過ごそうなんて奇特なお客様は1名様しかおられなかったとここに記しておこう。
…営業者、いや料理人のプライドが音をたてて崩れた気がしたとも追記しておく。

まあそれはそれで、みんな健康的に夏休みを過ごしているのだなと安心した。うん学生諸君よ、青春を存分に謳歌してくれたまえ。
……しかしだ。それを言うとその1名様が心配になってくる。いや、ただ静かな場所が好みというだけかもしれないが――

「千雨ちゃん、アイスコーヒーおかわりいるか？」
「あ、はい。頂きます」

それが某電子精霊使いだったから、なおさら心配になったんだ……。

◇――――――――――◇――――――――――◇

そんなだから千雨ちゃんが帰った後はさっさと店を閉めた。ううむ、しかしやはり悔しい。夏休み中は完全に店を閉めて修行でもしようか…。そうだ、四葉さんのトコに顔を出してみようかな？

時刻は１０時頃。今日の昼食は何をを作ろうかと考えてながら家に帰るとネギ達がいた。

「あ、シロウ」
「士郎さんお邪魔してます」
「オッス！」
「お邪魔してるです」
「こ、こんにちは――…」

ネギ、刹那、小太郎に夕映ちゃんとのどかちゃん。珍しい組み合わせだな。いや、共通点を探そうと思えば「魔法」とか「こちら側」の事情しかないのだが。
大体……のどかちゃんは読心系最高クラスのＡＦ、夕映ちゃんは連合の深度Ａクラスの情報まで閲覧できるＡＦ……。なんでこんなに危なっかしいものばかり発現するんだ…胃が痛い。

「士郎さん、私はネギ先生達を別荘までお連れします」

「ああわかった」
「なんやにーちゃんは来えへんのか？　もっかい勝負しようや！今度は負けへんで！！」
小太郎の誘いを躱し、茶々丸とネギ達を見送った。

『……「別荘」を部室にね。それが目的か』
『アハハハ、まーまー♪』
『いよっエヴァちゃん太っ腹！』

お、エヴァ帰って来たな。でも他の声は誰だ？

――ガチャッ

「お帰りエヴァ。ネギ達はもう別荘に入ってるぞ」
「うむ、ただいま」
「「「お邪魔しまーす」」」
エヴァ以外は…明日菜に古、楓に早乙女さんか。……また魔法関係か？

「お前ら、ぞろぞろと何の用なんだ？　のどかちゃん達も入ってったけど」
「部活動でーす！」
「……は？」

明日菜→美術部（幽霊部員）
木乃香→占い研（部長）、図書館探検部
刹那→剣道部
のどか→図書館探検部
夕映→哲学研、児童文学研、図書館探検部
ハルナ→漫研、図書館探検部
楓→さんぽ部
古菲→中武研（部長）、超包子

……？　部活……？

（ちょっとパル！　余計な事言わないの！）
（へ？　何で？）
（士郎に言ったら絶対反対されるわよ！！）
（反対されてもいーじゃん？　保護者でもないんだし）
（そーだけど…）

「――ああ士郎。もしかしたらしばらく出て来ないかもしれんから昼食はいい」
「そうか、わかった」

早乙女さんの言葉に首を傾げつつ、意気揚々と地下へ歩いて行く少女達を見送った。

◇――――◇――――◇

掃除・洗濯は茶々丸が終わらせた後だったのでゴミ捨てに行き、商店街で買出しをした。なんでもバーベキューをするんだと。帰ってからは夏の陽射しですっかり乾いた洗濯物を取り込んだ。

さあ、次は何をしようか？

普段は店にいるので家にいるとすぐ暇になってしまう。家事も、夏休みで家にいた茶々丸がほとんど終わらせてくれたのですることがない。

よし、なんか作るか！

……やりすぎた。

キャロットケーキとミルクレープと抹茶ロールケーキとかぼちゃプリンと苺ムースと白桃ゼリーと杏仁豆腐とキャラメルアイスと牛乳寒天と、余った材料でトロピカルジュースといちご牛乳ができた。

…冷蔵庫に入らん。せっかく作ったのにこのままでは悪くなってしまう。

『部活動でーす！』

『もしかしたらしばらく出て来ないかもしれん』

……だんだん気になってきた。差し入れがてら様子を見に行くか？

――――ガチャ。

「お邪魔しまーす。おっ、士郎さんこんにちわー♪」
『こ、こんにちわー‥』
そんな事を考えていたら朝倉がやってきた。え、さよちゃんもいるって？
……俺、霊感ないんだ……。と、茶々丸が言った通りに来たな朝倉。
「よし、じゃあ一緒に行くか」
『わー朝倉さん！　向こうに美味しそうなお菓子がたくさんありますよー♪』
「あんたは食べれないけどね。‥‥バーベキューも」
『……はっ！？』

◇――――――――◇――――――――◇

滝と崖を自らの一部として取り込んだ巨大な城。レーベンスシュルト城のテラスでバーベキューが行われていた。
「カンパーイ！！」
「いやーウマいわ！」
「アハハバーベキュー最高ね～！！」
焼き網じゃなくて鉄板か‥‥アルミホイルが欲しいなぁ。

「にしてもココすごいねー。バーベキューしてて気持ちいいよ♪」
「んー♪」
「にくにく♪」

育ち盛りが肉ばかり食べるんじゃないっての、まったく。

「こらクー、肉ばっか食うな。野菜も食えホラ」
「ッ師父!?　野菜だけの皿なんていらないアル!!」
「おかわりありますので遠慮なく」

「ところでこれ何のパーティーなんだ?」
「アスナさんの7日間修行完遂記念パーティーです――――……」
「おいおい、主役がいねえのに始めてていいのかよ?」
「そろそろ戻る時間なんですが…心配ですね。私迎えに行ってきます」

……修行…?　7日間?　おっと、バラ肉が焦げる焦げる。

「千雨ちゃんすっかり仲間やなー」
「バッ…ちがっ、茶々丸(アイツ)がムリヤリ…」
「コンビニで暇そうにしているところをお誘いしました」
「ウソつけ半分拉致ったろテメエッ!!」

ああ今度は野菜が焦げ……ってさっきから野菜が全然減ってねえ!
お前ら野菜も食え!

「…確かに心配です、僕も行きます刹那さん!」
「もぐもぐ…オレもいくでネギ!　ごくん、姉ちゃんが心配や」
「早く行くよコタロー君!」

「ま、待てまだ肉がー！」

ああもう小太郎！　食いながらしゃべるな食い物持って走るなぁあ！！

ネギ達3人は足早に修行場へ駆けていった。

「修行ってアスナの奴なにやってんのよ？」

「そ、それが――……」

「「――エヴァちゃんの極寒雪山サバイバル部長就任テスト～～～！？」」

◇――――――◇――――――◇

1973

がつがつがつがつ……むしゃむしゃむしゃむしゃむしゃ……もぐもぐもぐ……！！

ネギま部（仮）一同「……。」

もぎゅもぎゅ……ゴックン、がつがつもぐもぐもぐもぐ……

「――んっ、みずっ！！」

「…はいよ」

「っごっくごっくごっくごっく…ぱぁああ――――！！　ありがとっ」

「……よく食うな」

俺達の前で猛烈な勢いで食い物を咀嚼しているのは、明日菜。
すぐに飯に在りつきたかったらしいが「先に風呂に入ってこい」とエヴァにお預けをくらい、空腹が限界に達したらしい。今ようやく7日ぶりのマトモな食事と相成ったのだという。
ネギ達は、俺が持ってきたデザートをつつきながら明日菜を凝視している。

「…ホントによく食べますねー」
「アイヤー、私でもあの量は無理アルヨ」
「無理もないですが…やはりスゴイですね」
「アスナー太るよー？」
「食べ過ぎの腹痛はウチでも治せへんえー」

――――ギンッ！！

一同「ビクッ！？」

「こっちは7日間　水と魚しか食べてないのよ……！　身体が血肉と食物繊維を欲してるのっ邪魔しないで文句言わない五月蠅い黙ってて！！」

物凄い形相で睨まれた。死線を越えてきたばかりの明日菜の眼にはいま、確かに殺気が乗せられていた。「私の取り分が減るだろう」などとは言えず、エヴァはバーベキューを諦めた。

「士郎……食べ物の恨みは恐ろしいな……」

微妙に違う気がするが、呆気にとられた表情で呟くエヴァに俺も素直に賛同した。

「士郎！！　肉おかわり！！　さっさと焼く！！」

「っえ、あ、はい。ただいま」

……食は人を変えるんだなぁ。

――ゴンッ！

「？」

鈍い音がして振り向くと。

「……Ｚｚｚ・・・」

箸と皿を持ったまま、明日菜がテーブルに突っ伏していた。

「・・・ぷっ」

（まあ…限界だろうな）

むしろすぐ倒れなかったのが不思議なくらいだ。帰ってきて、安心して緊張が切れれば普通はそうなる。しかも風呂に入れられて、心身ともに多少はリラックスした筈だ。
空腹が邪魔をしていたのかもしれないが……それでも、倒れなかったのはタフだと言わざるを得ない。

――――この娘は、強い。

「エヴァ」
「わかっている。あと1日くらいはココに泊めてやるさ。茶々丸！」
「はい。マスター」

茶々丸とその姉たちに運ばれていく明日菜は、とても穏やかな表情をしていた。

◇――――◇――――◇

ネギま部（仮）も全員帰宅の途につき、外もすっかり暗くなった頃。
エヴァの家。

「ふ――――」

士郎はドサッとソファに座りこんで息を吐いた。エヴァは斜め向かいのソファに寝っ転がって本を読み、茶々丸はキッチンでお茶の用意をしている。

「なぁエヴァ、一体今日は何だったんだ？　雪山でサバイバルとか……やり過ぎだろ」

「ん？　……ああそうか。お前はあの古本から何も聞かされてなかったんだったな」

「……古本？」

「あとぼーや達は……まあお前に言ったらまず間違いなく反対されるだろうからな、話したくなかったんだろう」

「おい……一体何だって」

（――ニヤリ。）

「奴等、この夏休みに魔法世界（ムンドゥス・マギクス）へ行くんだとさ」

――――――士郎は、言葉が出なかった。

（クク……私などより、士郎（コイツ）の方がよほど障害になるだろうな？　ぼーや達）

ネギま部（仮）の、魔法世界行きへの試練は――――まだ始まったばかりだった。

1978

第８３話　ネギま部（仮）設立！　ｓｉｄｅ士郎（後書き）

《おまけ》

後日、寮部屋にて。

ネギ「あれ、アスナさんどうかしましたか？」
明日菜「……。」

ＷＥＩＧＨＴ―●●ｋｇ　↑体重計の表示

明日菜「ムキ――――――ッ！！！」
ネギ「わあああああっ――――！？」
木乃香（こりゃカロリー高いごはん作れへんなー……）

＊マトモに食べてなかった状態から食事をすると、体はここぞとばかりにエネルギーを吸収しようとします。すなわち断食後はリバウンドしやすいので、ちゃんと三食食べる生活でダイエットをしましょう。

～補足・解説～

・喫茶店アルトリアについて
　要するに、夏休みは休業しますよって話。そうしないと魔法世界に行けないですから。
　そして士郎は知らないけど、士郎が思ってるよりアルトリアは人気もあるしリピーターもいます。でも皆さん学生で、夏休み初日の午前からは流石に行かなかったよってだけの話。

：それが某電子精霊使いだったから、なおさら心配になったんだ……。

ケーキをテイクアウトして帰りました。ケーキはクーラーのガンガン効いた部屋で電子精霊たちと一緒に美味しく頂きました。

：…胃が痛い。

実際に痛くなるほどヤワではない。例えです。

：……俺、霊感ないんだ……。

今まで「剣製の凱歌」でさよの出番が無かったのはこれが理由だったりする（マジで）。

：「食べ過ぎの腹痛はウチでも治せへんえー」

『治療（クーラ）』は対象者の治癒力を魔法力で活性・促進させて治すものなので、食べ過ぎによる腹痛は治せないと思います。

：「…古本？」

夏休み編～ウェールズ編辺りにエヴァがアルをこう呼んでましたよね。その意味がわかる日は…遠くない。

：（ククク……私などより、士郎（コイツ）の方がよほど障害になるだろうな？ぼーや達）

：ネギま部（仮）の、魔法世界行きへの試練は――まだ始まったばかりだった。

もったいぶるのもアレなんで言いますけど、魔法世界行き許可試験、的なイベントを予定しています。試験官は当然士郎で。

それでは次回！

第８４話　それぞれの夏休み　そのいち。（前書き）

第３回「今日のＦａｔｅ／名・迷セリフ」。
今回は壮絶なバトルシーンから抜粋。

ギルガメッシュ
「セイバーァァアアアアアア――――！！！！！！」

それでは第８４話、どうぞ。

第８４話　それぞれの夏休み　そのいち。

麻帆良学園女子寮、夏の夜。

「まったく、どうしてそう行儀が悪いんですの!?　ネギ先生の爪の垢でも煎じて飲ませてあげたいですわ!」

礼儀正しい子供が好み。ネギＬｏｖｅのショタコン、３－Ａ委員長　雪広あやか。

「ハッ、ガキやし行儀悪いのはしゃーないやん。むしろネギの行儀の良さの方が異常やで?」

それに対するは夏美の弟（偽称）、ネギの友人　犬上小太郎。

「なんですってえーーー!?　ネギ先生をバカにするのは許しませんわ!!　都合のいいときだけガキのふりしてぇーーー!!」

「おおっやるか姉ちゃん!」

ある雨の日に居候を迎えて以来、６６５号室では日常と化した戦いが繰り広げられていた。

――ギャ――ギャ――――!!

それを生暖かい目で観戦するのは

見た目は３－Ａ最年長、みんなの保母さん那波千鶴と、

そばかすがコンプレックスの普通少女　村上夏美。

「あーあまた始めたよあのふたり」
「仲がいいですわね～あの2人は。楽しそう♪」
「え・・・そう？」
「喧嘩するほど仲がいいっていうでしょ？　・・・あら、冷蔵庫の中がもうなくなるわ。夏美ちゃん、私は用事があるから、悪いけど明日買い物に行ってくれない？」
「うん、いいよー」

夏休みの日常、開幕。

第８４話　それぞれの夏休み　そのいち。

鳥の囀り、蝉の声。太陽も張り切って天高くに昇る朝。

麻帆良学園、教職員宿舎。

明石教授が、教職にも研究とも関わりのない、とある書類に目を通していた。
「ＦＡＴＥ　ＡＶＥＲＲＵＮＣＵＳ」なる人物の調査――その報告書。

（……不気味だ）

それが、書類を読んだ彼の感想だった。

（調べれば調べただけの情報は出てくる。だが幾ら叩いてもまったく埃が出ない。だが…それが不自然だ。探られても痛くも痒くもないように、あらかじめ用意されていた個人情報（パーソナル）……）

釣られたかもしれないと、明石教授は思った。
「調べれば調べただけ情報が出てくる」。だから調査を続ければいつか、その尻尾を掴めるかもしれないと調査を引き延ばし続けた。
――成果が出る筈のない調査ルートで。
そうしている間に、足がつくような情報は全て消されてしまっているのだろう。

「……これ以上は無理かな――」

――バタンッ！！

「オハヨ――♪　おとーさん！！」

（ッおおっとっ！）

すぐさま書類を机の下に隠す。

「――来てたのかゅーな」

彼の愛娘にして３－Ａの元気娘、明石裕奈が戸を開けて立っていた。

◇――――◇――――◇

「やれやれホントおとーさんは。私がいないとダメなんだから」

だらしない父親の世話を焼きながら裕奈は呟いた。夏休みとはいえヒゲは剃らない、シャツはズボンから出ている、ズボンのチャックは開いている。とはいえ重度のファザコンである彼女は当然、その世話焼きにもまんざらではない表情だが。

「…ん？　何か落ちたよおとーさん」

ヒゲを剃りに洗面所に向かった父が落とした何かを拾い上げて…固まった。

（……！？　何この金髪美女の写真…し、しかも電話番号まで……！？）

――トゥルルルッ

「ッ！！」

明石教授の電話が鳴った。

「お、出る出る。ゆーな、パス」

「はいよ」

「サンキュ。（ピッ、）　Ｈｅｌｌｏ！　Ｔｈｉｓ　ｉｓ　Ａｋａｓｈｉ．」

（え、英語…外人！？　それに写真と同じ番号……！！）

ケータイに表示された番号を瞬時に記憶した裕奈の思考が（間違った方向に）加速してゆく。

「……Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！　（ピッ。）　ごめんゆーな、今日ちょっと用事ができたよ。帰りが遅くなるかもしれないから夕御飯は先に食べててくれるかな？」

（ま…間違いなし！）

「「「ええ――――！？　ゆーなのお父さんが浮気――――ッ！？」」」

裕奈の口から出た衝撃の言葉に、一同は揃って大声をあげた。

◇――――――――――◇――――――――――◇

「……ん？」

途中、彼は雑踏の中に見知った人物を見つけた。
視界の端に、映画館に向かって歩く――身長の高い、黒い長髪の後ろ姿。

「――中学生一枚」
「バカ言っちゃいけないよ。大人一枚で１８００円ね」
「何！？　学生証を見てくれ！」

（……なんか、良く知った娘が受付でモメている。うん、どう見ても中学生には見えないよなアイツ。）

「ハッハッハ、老け顔は損でござるな」
「何か言ったか楓？」
「…ソレは仕舞って欲しいでござる」

周囲に見えぬよう自分の体を盾にして、真名はデザートイーグル（ｉｎ硬質ゴム弾）をぐりぐりと楓の腹に押しつける。

（……あの娘も女の子というよりは女性だもんなぁ）

同じく老け顔の忍者が参戦したことで興味を引かれ、彼はもう少しこの場に留まることにする。

「…たかが３００円で器の小さい」

「馬鹿言え中学生は１０００円だ。８００円の差は大きい……！」
「儲けている割にケチでござるなぁ……。フフ、ならば見ておれ真名ッ！」

笑みすら浮かべてお金の大切さを力説する真名の前で、楓は一瞬で服装を入れ替えた！

「なッ…！…学生服…だと……！？」
「ふふふ、これで拙者が何の変哲もないただの女子中学生であることは一目瞭然！」

ダメ押しとばかりに学生証をその手に掲げ、約束された勝利へ向けて進軍を開始する！

「中学生一枚」
「コスプレかい？　大人１８００円ね」

（――――ブフッ！！）

士郎は思わず噴き出した。

――――ドンドンドンドンッッ！！
――――ガカカカカカッッ！！！

「――――む…？　妙だな、確かに腹立たしい気配を感じたんだが…」
「おかしいでござるな、あの弾丸とクナイの雨を避けられる御仁などそうおらぬし……」

（――怖っわぁ――――――――――――――!!）

士郎はガクガク震える体を抑え、必死に気配を隠しながらコソコソとその場を離れた。

◇――――――◇――――――◇

士郎が悪鬼×2から逃れたのと同じ頃。

「アレ？　でもゆーなのお父さんて…」
「…うん、確か独身」
「とにかく浮気ッ！　色んな意味で浮気なのーー!!」
「で、でもだからって尾行は…」
「うん、やり過ぎ」
「しっ来たッ！」

「キャ――――ッホントに来たーーー!!」
「スッゴイ綺麗な人だね～」
「ぬぬぬぬぅ～～～!!!」

「ママー、あのお姉ちゃんたちなにしてるのー？」
「しっ、見ちゃいけませんっ」

裕奈、アキラ、まき絵、亜子が集まって、物陰からカフェテラスの様子を伺っていた。

「久しぶりだねドネット君。変わりないね君は」
「お久しぶりね明石教授。貴方も元気そうで何よりだわ」

挨拶も程々に、近づいてきた店員にコーヒーを頼んで明石教授の前に座る。

「ところで明石教授？　……何かヒドく稚拙な尾行がいるようだけれど……」
「ああアレね、僕の娘だよ。何であんなコトしてるのかはナゾだけれど。大丈夫、僕達の会話は第三者にはたわいのない会話に聞こえるようになってる、だからなるべくにこやかにしててね」
「まあ！　ということはあれがユーナね！　ふふ、夕子に似て活発そうで可愛らしいわ！」

バレバレだった。

「――さて、それじゃあ仕事の話をしましょうか」

ドネットの目が鋭く光る。明石の眼鏡は光を反射し、彼の表情を覆い隠した。

「超鈴音とフェイト・アーウェルンクスの繋がりは一切認められなかった…これは間違いないわ」
「やはり超鈴音は単独だったか…こうなると未来人という話もあな

がち……フム。
　ドネット、学園長は学園祭の事件を本国へは報告していなかった。記録上あの事件は存在していないんだよ。実際人的被害もない。ただ例年より派手なイベントがあったというだけだ」
「…流石…、学園長は賢明ね」

『ちょっと、スンゴイ楽しそうやで！』
『ぐぬぬぬ～～～！！』

認識阻害の魔法により、周囲には男女が仲良く歓談しているようにしか映らない。実際は見事なまでに仕事の話であり色気など皆無なのだが、裕奈は当然気づかない。

「さてここからが本題だけど、爵位級悪魔ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマンの学園内侵入の一件…」
「やはりアーウェルンクスと何らかの関係が？」
「ああ、ネギ君の友人の犬神小太郎という少年と……もう1体の爵位級悪魔の証言でね。士郎君が封印したアロイスという伯爵なんだけど、彼が色々吐いてくれたよ」
「…それは本当なの明石教授？　彼らは召喚者の情報は決して明かさない筈だけれど」
「まあ……いわゆる司法取引というヤツかな」

――――爵位級悪魔（デモン）2体の侵入には、フェイト・アーウェルンクスが関わっている。

『このっ……女狐がっ！！』
『女狐！？』

そんな重苦しい話を続ける2人を尻目に、裕奈の勘違いは更に加速していった。

◇―――――◇―――――◇

「ええ…確かにあの娘からしてみれば不本意なのかもしれません。しかし彼女の御両親も交えての約束なのですよ、高校卒業までは魔法使い…シスター見習いとして教会に勤めることは。嫌味なのかあの娘は”契約”と呼んでいますが」

「いや、そんなつもりで言ってるんじゃないと思いますよ？　周りに嫌味を振りまくほど悪い子じゃないですよあの娘は」

「…あの娘といったらいつまでもあの悪癖（イタズラ）が治らなくて…。御両親が修行に出そうとしたのもわかりますよ…ふぅ。もう少し気品のある…いえそこまでは言いません、せめて歳相応の振る舞いをして貰いたいものです…」

「あの…そんなに酷いんですか……？」

「ええ、一時期は大人しかったのですが…最近また…」

あーあー、こちら衛宮士郎。「黒鍵の補充をお願いしたい」という用件の電話を貰って来てみたら、何故か愚痴を聞かされるという状況に陥っております。至急説明を要請する。

ここは教会の礼拝堂。「取り敢えず座りましょう」と立ち話を中断して既に５０分。今はシャークティーさんの話を聞き始めてもう１時間になる。この人らしくない行動だと思うが色々ストレスが溜まっているのだろう、主にナゾのシスター絡みで。
しかも愚痴の内容がほぼその話題で独占されているのだから、俺も少しくらい彼女を怒りの矛先にしても問題あるまい。むしろ進んで矛先にしてやる。
では――――イイとばっちりをありがとうナゾのシスター。罰当たれ。

『ナハハハ～♪　ゴメンねシローさん私の所為で♪　ぷぷっ』
『…反省してない……』

「不安で仕方がありません、数日後に本国に発つというのに……。年長者の高音さんに何とかして頂くしかないですね……」

――――え？

「すいませんそれどういう事ですか！？　美空ちゃんとグッドマンが本国へ……？」

「…？　ええ、オスティアの終戦記念式典へ、麻帆良学園代表として行くことになったのです」

――――オスティアの終戦記念式典へ――――

「４人の魔法生徒――高音さん、佐倉さん、そしてうちのふたり――美空とココネです。今年は終戦２０周年で大規模な式典が催され

ますから尚更不安で……。ふぅ……」
「…余計なお世話かもしれませんけど、疲れてるんじゃないですか？　今日のシャークティーさん、らしくないですよ」
「大丈夫です。……いえ、そうかもしれませんね。心配をかけて申し訳ありません」
『――おおっあのふたり何かいい雰囲気!?　シスターシャークティーと士郎さんか……よし激写ッ！　これは朝倉に高く売れるッ!!』
「「……」」
「……どこぞのパパラッチ娘みたいなコトしてんじゃねえぞナゾのシスター」
「ぬああバレてたッ！　くっ、流石は伝説の英雄の弟子ッ!!」
柱の陰からナゾのシスター：もとい美空とココネが顔を出した。
「――美空」
美空もココネも士郎も停止画のように一瞬で動きを停める、冷たい声が響き渡った。立ち上がり、幽鬼のような足取りでシャークティーが歩きだす。この教会特有の、やけにスカート丈が短い修道服（命名：ミニスカ修道服）のスカートをたくし上げ、シャークティーは黒鍵に手に取った。
「あ…ははは…ジョーク、ジョークだって！　ホントにこの写真売ろうなんて考えてないッスから!!　あっココネ逃げるな裏切り者ォッ!!」
「聞く耳持ちません問答無用です！　魔法世界に行く前に貴女には

厳しい躾が必要ですね……！！」

士郎の陰に隠れたココネが「自業自得……」と呟いた瞬間、紅い十字架から魔力で編まれた刀身が現れる。右手の3本の黒鍵はさながら鉤爪のようだ。
彼女はそれを高く振り上げ――

「――ギャァアアアアアア――――――！！」

ナゾのシスターの叫びを耳に、士郎は目を閉じて合掌した。

（…南ー無ー……。いやこの場合アーメンか）

――――――ぱたり。

「「「……え？」」」

……。

……。

……倒れた。

黒鍵を振り上げた勢いそのままに、シャークティーがばたんっと倒れた。

「えええええっ！？　ちょっと、大丈夫ですかシャークティーさん――――！？」

彼女の身体を抱き起こす、よく見ると顔が赤い。ヘッドドレスを捲くり額に手を当てると、僅かに紅く染まった黒い肌と金髪が露になる。

「……熱があるな。やっぱり調子悪かったのか…」

彼女の額に手を当てて呟いた。

「美空ちゃんへの心労で熱を出して倒れるなんて……苦労してるんだなぁ」

士郎が呆れた目で美空を見やると、シスターは手をぶんぶん振ってそれを否定した。

「いやいやいや違うから。（多分）そこまで苦労かけてないし。多分理由は別にあるし」

「え？」

ぐいっと、士郎の服をココネが引っ張った。

「……今朝」

『ミソラ、手　動かす』

『わかってるよー。うー、掃除メンドクサーイ』

『……終わり』
『よっしゃー！　あとはバケツの水を捨てるだけ……』
『…ミソラ？』
『この水、外に捨てちゃわない？　打ち水にもなるっしょ！　よしそうしよう！』
『あ……ミソラ、待っ』
『それじゃあ…どっせーーい！！』
ばっしゃーん！

「ミソラが、シスターシャークティーに頭から水をかけた」

……。

「…てへ☆」

「やっぱお前じゃないかぁあああああああああ！！」

士郎の叫びが礼拝堂に木霊した。
この後　士郎の1日はシャークティーの看病で消費されたとここに記しておく。

ドアを開けた途端に襲ってきた、むわっとした熱気。外出する気を削がれそうになるも
夏美は何とか耐えて歩きだす。

（‥‥うぅ、暑い‥‥もう少し涼しいといいのにナー‥‥。――――むむ？　あれは‥‥‥）

それを視界に収めると同時、夏美は物陰に身を潜める。

『あんたとはいずれ決着つけたらなな、デコチビ』
『いつでも受けて立つですよ？』

（夕映とのどかと‥‥？　珍しい組み合わせ‥‥）

のどかを挟み、他愛のない口げんかをしながら夕映と小太郎が歩いていた。ちなみに小太郎は麻帆良祭の時、夕映に口論で打ち負かされている。そんな小太郎の声は遠過ぎて聞こえないため、夏美はただ様子を窺うだけである。

（結構親しそうじゃん‥意外だなー小太郎君。あ‥今度は長瀬さんと！）

2人と別れた後、小太郎は楓と出くわした。

『明日は砂漠に行ってみるでござるか？』
『ええな』

小太郎は得意気に腕まくりして、ダイオラマ球内での修行内容を話し合う。
ちなみに。

（そっか、一緒に修行してるって言ってたもんね）

程なくして楓と別れた小太郎の後ろを、バレないようにそそくさとつけていった。
……夏美さん。
あなたのしていることは尾行というより　もはやストーカーというやつでは……。
いや、尾行自体がよくない行いなのですけれど。

（……わ？　また別の女の子と！？）

『こっ、こここんにちわ小太郎さん』
『よお、修行進んどるか？』
『ハ　ハイ、また何かご指導ありましたら』
『やめてや。俺も修行中の身やし』

まほら武道会で敗れて以来　小太郎を尊敬している魔法生徒、麻帆中2年の佐倉愛衣。年下である小太郎相手に堅苦しく恭しい挨拶をしている。

（ああっあれは学園祭の時の……！　むむむ～～～……、小太郎君てば……）

本人は気づいていないが、小太郎が女性に会う度に夏美は眉を顰め

ていく。

「――面白くなさそうな顔してるわね？　夏美ちゃん」

「（びくぅっ！）わあっちづ姉！？　用事あったんじゃないの！？」

「これからよ。それしても…女なんか関係ないって顔して意外とやるわねえあの子♪」

千鶴さん、あんたも尾行けてたんかい……！　この学園にまともな人間はいないのか…！

「――夏美ちゃん。そのもやもや…恋ね？」

「うそぉっ！！？」

夏美は一瞬で顔から火を吹いた。それを見て千鶴はからかう様に笑いだす。

「ホホ、冗談よ♪　……でも夏美ちゃん？　あなたこないだ小太郎君のシャツに顔を埋めてなかった？アレは一体……」

「そんなことしてませ――――――――ん！！」

・・・数十分後。

「まったくもーちづ姉はー」

買い物帰りの夏美は両手に荷物を抱え、先ほど別れたルームメイトに毒づきながら帰宅の途についていた。

「お、夏美姉ちゃんやん。いま帰るとこ？」

（ドキ――――――ンッ！！）

からかわれる原因となった学ラン姿の少年が、夏美の気も知らずにやってきた。

「あ――…うん、小太郎君」

（わわっちづ姉が変なこと言うから変に意識…顔赤くなってないよね！？）

「俺も帰るとこや、一緒に帰らへんか？　買い物持ったるわ　重いやろ」

「……。…ん♪　よろしく♪」

何処か上機嫌な気分のまま、夏美は小太郎と並んで寮へ帰って行った。

◇――――――◇――――――◇

「あー疲れた。ただいまー」

「おかえりなさい士郎さん」
「……お帰り士郎……むっ？」

テーブルにぐでっとダラけていたエヴァが、何かに反応したように身動いだ。
何かを嗅ぐように鼻をすん、と鳴らしている。

「茶々丸ー、今日の晩メシは何にしようか？」
「マスターが焼きそばを食べたいと仰ったのでそれにしようと」
「焼きそばか。キャベツ、もやし、豚肉…あれ、もやしって冷蔵庫の中にあったか？」
「――――士郎」

振り返ると、ムスッとしたエヴァが立っていた。眉を顰めてジト目で士郎を見上げている。言うまでもなく不機嫌モードなのだが士郎は気づかない。

「ん、どーした？　なんか食べたい具でもあるか？　それともソースの味――」
「お前から女の臭いがする」
「……はい？」
「それに……カビ臭いな。そう、まるで教会のような陰湿な場所の臭いだ」

え、えーと…何だろうこれ。やましいことなんて何もしていないのに、まるで悪いことをしたような気分にさせられるこの雰囲気は。
あれ！？　何でしょうその不機嫌まる出しで立ち昇るオーラは！？
　プリーズテルミー！
ああっ逃げるな茶々丸！　置いてかないで！！

「待てエヴァ、お前は何か勘違いをしている。俺は何もしていない
冤罪を主張する！」
「さあ、私に何か話すことはあるか？」

あれ、聞いてない？

「いえ、その…実はかくかくしかじかで」

抵抗を諦めて日中の出来事を正直に、ただ正直に事実を話したら…
それだけで何故か殺気が膨らんだ。……ああ…彼女の足元に魔法薬
の試験管が落ちている。
そうか、いろいろ準備万端かチクショーッ！

「抱っこ。抱っこか、いいなぁ…それはいい。私にだってしてくれ
ないのになぁ……」

そんなわけのわからない怨嗟の声を最後に、俺の意識は飛んでいっ
た。
はは、俺なにかしたかなぁ？

◇―――――◇―――――◇

「もぉ――――ちょーハズカシイですッ」
「ハハハ　おっちょこちょいだなーゆーなは」

明石親子が、夕陽に染まる土手の一本道を歩いていた。

『『プッ‥‥アハハハハハハッ！』』
『な、なんだよー』
『だ、だって私と彼が結婚なんて‥あははっ』
『会うのも十年振りだってのにね』
『え‥じゃ　じゃあカン違い！？　だってだって‥スンゴイ仲良く話してたし‥‥！』
『ああ、私はあなたの母親の友人だったのよ』
『友人‥‥友達？　しかもおかーさんの？』
『ええ。フフ‥あわてんぼうな所までソックリね。あなたお母さんに似た美人に育つわ』

「‥‥‥ねえ。おかーさんのコト今でも好き？」
「もちろんさ。ゆーなと同じくらいにね」
「‥‥エヘヘ？　でも別に再婚しても怒らないからね――」
「ハハハ、そりゃどーも」

父娘は仲睦まじく、腕を組んで帰って行った。

2004

◇――――――――◇――――――――◇

「痛ってえ……」

ずきずきと痛む頭を押さえながら起き上がる。茶々丸が運んだのだろう、そこは士郎の自室だった。窓の外が暗い。もう既に夜のようだ。

「す――……す――……」

自分の傍らで穏やかな寝息をたてるお姫様を視界に収める。勝手に暴れておいて、それでいて心配してくれるのだからタチが悪い。結局士郎は彼女に文句も言えなくなってしまう。

「ったく……寝るなら自分の部屋で寝ろ」

エヴァを彼女のベッドまで運び、食べ損ねた夕食をとろうと階段を下ると。ケータイに着信が入った。

――――ピッ。

明石教授からの電話を切る。疲れたように溜め息を吐いて士郎はソファに座りこんだ。

「……散々だな今日は……いろんな意味で」

――奴等、この夏休みに魔法世界へ行くんだとさ――

――オスティアの終戦記念式典へ――

――爵位級悪魔2体の侵入には、フェイト・アーウェルンクスが関わっている――

折角の夏休みだというのに。何で考えたくない事ばかり耳に入るのか。

――何ならお前も、ぼーや達を試してみるか？――

エヴァンジェリンに言われた言葉が、士郎の頭を巡っていた。

第８４話　それぞれの夏休み　そのいち。（後書き）

《おまけ》

教会・あのあと。

「まあいい、取り敢えずシャークティーさんを運ぼう。横になれる場所とかあるか？」

「あっち……」

美空に対して溜め息を吐きたくなる気持ちを抑え、士郎は倒れたシャークティーの体の下に腕を入れて抱っこして持ち上げる。

「おおっシスターシャークティーのお姫様だっこ姿ッ！　これは使える…！？

ちょっ、シローさん待って写メ写メ！！」

「病人の耳元で騒ぐなコラ。つかお前反省してないな？」

「……さっき叫んでたの…誰？」

「ぐはぁっ！」

ぐったりしている身体を揺らさないように、優しく抱いて、ゆっくりとした足取りで気を遣って歩を進める。

そのときシャークティーの目が僅かに開いていたことに、士郎は気づかなかった。

～補足・解説～

：ヘッドドレスを捲くり額に手を当てると、僅かに紅く染まった黒い肌と金髪が露になる。
　シャークティーさんは金髪で、肩にギリギリかからないくらいのショートヘアーです。

：はは、俺なにかしたかなぁ？
　安心しろ士郎、君は何もしていない。ただこの場合、何もしてない事が罪なのだよ…！
　で、読者の皆様。今話でウチのエヴァが「（士郎に）抱っこされたことない」と言いましたが、……されたことって無いんでしたっけ？（↑覚えてない）この場合の抱っこは「お姫様抱っこ」です。今までの「剣製の凱歌」の展開全てを覚えているという奇特な方がいましたら感想にてご一報を。

今話は原作の時系列を無視して一話に統合・編集。
そして（一応）主人公なので士郎の出番が他の人よりもちょっと多めです。
あと何気にアロイス伯爵とかフェイトとか、シリアス分の話も補完。
次話では完全なる日常編を書いてみせる……ッ！

次回予告。

「…ていうかさ、今こそあんたの季節だよね」
『はい？』

「第８５話　肝試し大会（仮）」

……ここで、読者の皆様にお願いがあります。

次話の肝試しなんですが、何かいいゲーム名はないでしょうか？
修学旅行の「くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦？」みたいな。
現在は暫定的に「暗闇でドッキリ☆３－Ａ肝試し大会」となってます。ベタすぎるしヒネリもないなぁ～と思いましたが他に思い浮かばず、読者様のお力をお借りしようと。
いいアイデアがあるぜ　げへへへ、という方はこぞってメッセージをお寄せください。
お願い致します。

それでは次回！

2009

第８５話　舐めて掛かると痛い目に遭う　肝試し前編（前書き）

前話のあとがきで募集した肝試しゲーム名のアイデアの数々、ありがとうございました！
検討の結果、グラムサイト2さんのアイデアを参考に、もとい一部使用させて頂きました。
皆さんの貴重なアイデア、本当にありがとうございました！

実は今話……プロローグ・過去編・設定話を含めると通算１００話目で、尚且つ日常編では初の完全オリジナル、
そして何より、「剣製の凱歌」１周年という記念すべき回だったりする。

記念企画をやると面白いんでしょうが、この佐藤Ｓにそんな器量はないッ！
ついでに学期末なので時間もない！！　ゆえに何もせぬと明言しておこう！！

……ごめんよ、つまらない作者で……。

それでは第８５話、どうぞ。

第８５話　舐めて掛かると痛い目に遭う　肝試し前編

――朝倉ー、今日の夜みんなで花火やるんだけど来ない？　寮の前に集まってさ！

その誘いを快諾して電話を切った彼女は、再び思考の海に潜る。

（「魔法世界」かぁ…まずはイギリスに行かなきゃいけないんだよね。やっぱさよちゃんは行けないのかな…、まず学外に出られないし）

『朝倉さんの部屋キレイですね～！　あ、この壁に貼ってある写真、全部朝倉さんが撮ったんですか？』

６０年振りの「友人の家に遊びに行く」という行動にテンション上がりまくっている幽霊――相坂さよの隣で、朝倉は彼女の異世界訪問に良い手はないかと考える。さよは朝倉を依り代に（というかいま既に半ばとり憑いている状態）すればある程度は遠出できるが、その距離の程度もわからない。

（……ダーメだ）

そもそも彼女は、魔法やユーレイなどという非常識な存在に関わって半年も経っていない素人なのだ。いくら考えたところで答えなど出るハズもない。だがわからないなら聞けばよい。奇しくもこの学

園は魔法使いがつくった街。その手のツテなど余りある。
そう結論づけて肩の力を抜くと、ふと先の話が思考に浮上してきた。

（――花火かあ…何か、もっと面白くならないかな？）

『カメラがいっぱいあります～！！　あれ？最近のテレビって小さいんですね！　あ、私だってテレビくらい知ってますよ！　えっへん！』

（……。）

数秒間、朝倉の視線がさよに固定される。そして彼女はゆっくりとその口を開いた。

「…ていうかさ、今こそあんたの季節だよね」

『はい？』

そう呟くとガバッと立ち上がり、朝倉は慌ただしく動き始めた。

◇――――――――◇――――――――◇

――カランカラン。

「はーい」

鐘（ベル）が鳴り、洗い物を中断してドアを開ける。

――ガチャッ。

ドアの向こうには、白が混じった髪と髭の、初老の男性が立っていた。

身長は１６０ｃｍくらいだろうか、穏やかな表情が良く似合う御老人だった。

◇――――――◇――――――◇

「とゆーワケで！　”ドキッ！！美少女だらけの肝試し大会！！”スタート～！！」

2013

第８５話　舐めて掛かると痛い目に遭う　肝試し前編

「ワァァーーーーッ！！」
「イェーーーーイ！！」
「とゆーワケで、ってどういうわけよ」
「いーじゃんアスナー♪」
「おっもしろそ――♪」
「「オ、オ、オバケ怖い／です～……！！」」

花火大会に参加したメンバーは３－Ａ生徒＋ａ。
刹那、木乃香、ネギ、明日菜。柿崎、釘宮、桜子、亜子。まき絵、裕奈、アキラ。美空、ココネ、鳴滝姉妹、のどかに夕映、ハルナ。真名と楓、委員長、千鶴、夏美、小太郎。千雨、茶々丸、古菲、葉加瀬、四葉。さよとザジ、そして主催者（？）の朝倉。

――多いなぁこんちくしょう。くそ、この企画早まったかな……（ｂｙ作者）。

「楓、流石にもう帰りたいんだが…」
「まあまあ、ここまできたら付き合うでござるよ♪」

「…あんた何で小さくなってんだ？」
「本体が分解清掃（オーバーホール）中で……」

――――キラ――ン！

その平和なやりとりの中に、獲物を狙う獣の如く目を輝かせる少女

達が存在した――――！

（――肝試し……それは恐怖を喚起させられる場所へ赴き、それに耐える力を試す日本の伝統的なゲームの一種……出典：Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ）

（それはつまり暗闇の中で好きな人とふ…２人きりになったり、あわよくば密着しても許されるというはや辿り着けぬ理想郷（アヴァロン）……！！）

（ククク……さあ、このチャンスをモノにしてネギ君へアプローチするのよ２人共！）

→ちなみに上からいいんちょ、まき絵、ハルナである。このときの彼女達は鼻息が荒く、周囲に気味悪がられていたと記しておく。

「こ、ここ怖いです～……！」

「だ、だらしないなあ史伽～、あ、あたしは全っ然怖くないよ！？」

そんな鳴滝姉妹の声を聞いた朝倉は、にやりとイイ笑顔を浮かべて２人に近づいた。

「ふみちゃ～ん、逆に今くらいの時期の方がまだ怖くないんだよ？」

「…？　どーいうことですかぁ？」

――――カチッ。

「「ひっ！！？」」

何処から取り出したか、懐中電灯で顔を下から照らして朝倉は話を続ける。すると他のメンバーも話に耳を傾け始めた。

「ふーちゃん、ふみちゃん。お盆って行事が何のためにあるか知ってる？」

「……祝日？」

「違うよお姉ちゃん、お盆っていうのは御先祖様の「くよう」をするんですよ」

「んー、まあそうだね。正確には「祀る」んだけど、私達にとっちゃ似たようなもんだしね。で、何でそんなことをするのかっていうと…お盆は年に一度だけ、御先祖様の霊がこの世、私達の所に帰って来るときなんだよ」

へー、と鳴滝姉妹は感心する。だが、ここからが本題なのだ。

「そして…その時期、お盆には……「増える」んだよね……」

声のトーンが一気に下がる。漂い始めたおどろおどろしい雰囲気と夜の闇が…彼女達を昏く包み込む――――。

「…ふ、増えるって……何が……！？」

「――――水難事故がさ」

先祖の霊は川からこの世へ戻り、川からあの世へ帰っていく。子供が川に流される。子供が池で溺れる。海で、何かに足を掴まれる。

「お盆は御先祖様が帰って来るって話したでしょ…？　お盆には、水辺に近寄っちゃいけないって言われてるんだ……。――――――御先祖様に「引っ張られて」、連れて行かれちゃうからねぇぇぇえええええええええ！！！！」

『ぎゃあああああああああああああああああああッッッ！！！！』

……もはや怪談になってませんか？

「だからお盆に近い日よりさ、今のうちにやっといた方が怖くないと思わない？　うんうん、みんなわかってくれて嬉しーね♪　それじゃルールを説明するよ！」

「「イヤァァアアアアア――――――！？」」

こうして一行は麻帆良共同墓地の入口前に立っていた。

～ドキッ！！美少女だらけの肝試し大会！！～

・クジ引きで相手を決めて2人でペアを組む。
・霊園の奥に置かれたお札を取って墓所入口に戻って来ること。
・より速いタイムでクリアしたペアが優勝。
・優勝したペアには豪華賞品をプレゼント（賞品の内容はヒ・ミ・ツ☆）。

「こんなトコかな？」

（ちょっと朝倉！　またカモと一緒になってヘンなコト考えてないでしょーね！？）

明日菜が小声で耳打ちする。なにせ彼女達には前科がある、そのときの「豪華賞品」があろうことか――仮契約（パクティオー）カードだったのだから。

（いやぁ～それも捨てがたいんだけど今回は違うよ（カモっちも地獄を見ただろうし）。今回は純粋に皆の怖がる姿とかあられもなく逃げ惑う画とかを撮りたいだけさ♪）

（・・・充分タチが悪いわよ）

（あははは。まー後は：あわよくばホンモノの心霊写真でも撮って記事にできたらなぁって？）

（…本物？　さよちゃんが憑いてるじゃない）

（・・・・・・あんないい子、記事にできないよ……）

（…朝倉……！…ホロリ……）

「ハーイじゃあくじ引きするよー！　さあ引いた引いた！」

ハルナが持ってきたくじ引き箱に全員が群がり、次々とくじを引いていくと。

結果、こうなった。

ペア一覧

のどか・夏美
釘宮・ココネ
木乃香・史伽
亜子・千雨
古菲・四葉
真名・楓
明日菜・桜子
委員長・夕映
まき絵・風香
ネギ・アキラ
裕奈・茶々丸
刹那・美空
千鶴・小太郎
柿崎・ザジ

委員長&まき絵（（……アキラさん／アキラぁ……！！））

アキラ（――ビクッ!?）

ネギ「？　どうかしましたかアキラさん?」

のどか（いいなーアキラさん……）

まさかこんなペアになるとは思わなかった。

2019

そんな作者の思惑も絡み合いながら、遂にゲームが開始される！

《――それでは！”ドキッ！！美少女だらけの肝試し大会！！”スタート～！！》

マイクで拡張された声が霊園に響き渡った。

◇――――◇――――◇

《のどか・夏美》

「……。」

「……。」

――ビュウッ――ザワザワザワ……。

「「……。」」

星も月もない漆黒の帳。風に靡く木々の音。無機質な石造りの霊園。先の見えない闇だけが、２人の前に広がっていた。――「一寸先も闇」――。

2020

（（――――こ……ここ怖いぃーーーーーーーーーーーーーーー！！））

（何で！？　私なんでこんなことに！？　しかもパートナーがのどかって！！　あの大人数でクジ引きやって何で非力でひ弱な地味ーズが揃っちゃったワケ！？　カミサマ――――ッ！！）

（あわわわわわ……ゆゆえぇ…ハルナぁ……ネギせんせ――――――ッ！！）

初っ端からパニクっていた。

《釘宮・ココネ、木乃香・史伽》

「へ――、初等部の留学生なんだ。でもってシスター見習い？　クリスチャンなの？」

「……そーいうわけじゃない……でもこっちに来たらそうするように決められた……」

「ふーん。そうだ、美空とはいつ知り合ったの？」

「…私が麻帆良に来てすぐ……。ミソラは、私の最初のトモダチ……」

「へー。そーなんだ。仲いいよね♪」

「このかさぁ～ん、コワイです～……！」
「だいじょーぶやえふみちゃん、ウチがついとるさかい♪」

特にヒネリもオチもない、平和なヒト達で一括り。

《亜子・千雨》

――ガサガサッ…

「ひぃっ！？」

（あ――メンドクセ…風で草が揺れただけだろ……）

キョロキョロと辺りを忙しなく見回す亜子に少しイラつきつつ、千雨はふと学園祭の出来事を思い出した。

「そーいや和泉、あのガキ…先生のいとこの兄さんとはどうなったんだ？」
「――ふぇえっ！！？」

亜子が面白いくらいとび跳ねた。

「えっえっ…べっ別にどうにもなるよーな感じやあらへんよ！？
ちょこっとメールするくらいのお友達やし……てゆーか何で千雨ち

ゃんが知っとるんや！？」
「（ぎくっ！）あ…いやまぁ何だ！　そ、そんなことよりどうなんだよ、えぇ！？　ホントにその程度なのかよ和泉！？」
「な…何でもないって言うてるやろ――――！！」

互いにボロを出し合っていた。案外いいコンビかも。

《刹那・美空》

「うっひゃ～…やっぱフンイキあるねー…。どっちかってゆーと私は仕掛ける側の方が性に合ってるんだケドなー……」

「問題ありません。私は神鳴流ですから退魔には慣れています。いざというときは……斬ります」

「だよねー、見習いシスターに除霊（エクソシズム）とか悪霊退散（ゴーストバスター）とか無理だし。じゃ、任せたよ桜咲さん♪」

（この人、努力とかプライドとかないんだろうか……）

「そういえば木乃香はだいじょーぶかね？」
「……どういう意味ですか？」

「だって木乃香ってまだ魔法習いたてなんでしょ？　とんでもない魔力（チカラ）があるけど身は守れないって、典型的な”憑かれやすい”体質

じゃん」

（……。）

「――お」

「…お？」

「――お嬢様ァ――――――――――――――――――！！！」

「ギャアッ！？　錯乱すな――ッ！！」

《古菲・四葉》

「ふふふふ、安心するアル五月。ワタシがいる限りオバケなどに後れをとることなどありえぬヨ！　大船に乗ったつもりでいるヨロシ！！」

―くーさん、お化けは殴ったりできないと思うけど…ー

「何っ！？そうアルか！？　しかし修学旅行の時は……」

―？　修学旅行……？―

「っイ、イヤ！　何でもないアル！」

中国では鬼もお化けの一種なので、古菲が日本の鬼と幽霊を同一視するのは仕方がないことではある。このあと、「な、殴れない…！？　どうすればいいアル…！？」と頭を抱え始めた古菲を五月が励

ましたりするのは余談である。

《真名・楓》

「……ま、真名？　何故ずっと黙っているのでござる……？」

墓地に入ってすぐ、真名は辺りに視線を巡らせながら無言を貫いていた。真名の眼…とりわけ左目の”魔眼”はあらゆるモノを見通せる。もしや自分には見えない何かが見えているのではないかと、楓は冷や汗をかき始めていた。

「真名～～～……」

すると真名は突然フッと笑い、視線を楓の方に向けた。

「…なんだ？　たくさん”いる”と言ったら安心するのか？」

「ッッ！？」

楓の全身が総毛だった。

「冗談だ」

「――――へ」

（じょ…冗談……？）

「ホッ。そ、そうでござるか～。まったく真名も人が悪いでござる

よ～～♪」

「いや悪かった、お前がそこまで怖がると思わなくてな。安心しろ、言うほど大した数じゃない。ほとんど無害な奴らばかりのようだ。麻帆良は墓地も平和だな」

「真名ァァアアアアアアアア！！？？」

◇――――――◇――――――◇

《明日菜・桜子》

「にゃはは～～♪　ただ墓地を歩くだけでもけっこう雰囲気出るねー♪　そういえば優勝賞品って何かナーアスナ～？」

「そうねえ……朝倉だからマトモなのは期待しちゃいけない気がするケド」

――ガサッ！

「「っ！？」」

2人の視線が物音がした方向へ同時に向けられる。

数メートル前の墓石。その陰、その後ろから、確かに物音が――

……。

「…気のせい？」

「…みたいだね――」

「あーもう…ホントにびっくりしちゃった」

「あははー、アスナもオバケは怖いんだ～」

2人は笑ってその場を通り過ぎた。

『――……――＊――ィ――。』

《まき絵・風香、委員長・夕映》

（フフフ…ネギ先生とペアになれないというのなら……！）

「きょ、恐怖というものはそもそも現実もしくは想像上の危険及び喜ばしくないリスクに対する強い生物学的な感覚のことでありその感情を持つことは決して不自然なことではなく…」

（「偶然」会っちゃえばいいんだよねー♪）

「まき絵ー、なに黙ってんの？」

（そして合流した後に何かに怯えたように見せかけて抱きつき……）

「…ですから私は怖くなどな……委員長、何を考えてるですか？」

（そのまま勢いで2人っきりではぐれちゃえばオールオッケ――♪）
「おーいまき絵ー？」

「「よーしそれじゃあ／それでは早速……！！って、あれ／え？」」

委員長とまき絵が、ばったりと鉢合わせた。

――ぐるんっ！！

「え」
「へ？」

すると2人は一足で方向を変え、早足で同じ道へ進みだした！夕映と風香を置き去りに！

「あ、あれーいいんちょ奇遇だねー？　てゆーかゆえちゃん置いてけぼりだよー？」
「ホホホまき絵さんこそ風香さんを置いて来てよかったんですの？戻った方がよろしいんじゃありません？」

（（抜け駆けはさせないよいいんちょ／させませんわまき絵さん――――――！！））

恋は盲目。憐れネギの事で頭が一杯になったふたりは――――。

『――ィ――――ア――――――ゞ――』

「「・・・え・・・・・」」

《ネギ・アキラ》

「何か、学園祭を思い出しますね」
「え、どうして？」

特に怖がるわけでもなく、２人は会話を楽しみながら墓地の中を歩いていた。アキラは最初は怯えていたのだが、ネギと話しているうちにそれもだいぶ紛れてきた。

（ネギ君て意外と度胸があるんだな・・・）

「ウチのクラスのおばけ屋敷ですよ。あのときアキラさんに案内してもらったでしょ？　何かその感じに似てるなぁと思って」
「…ああ、確かに。それはそうと、あのときは少しやり過ぎた・ゴメン先生」
「あ…あはは・・・。い、いえ、あれはあれで面白かったですよー」

『『きゃぁぁぁぁあああああああああああっ！！！』』

「「！？」」

「ネ、ネギ君いまの声――」
「ハイ、確かにまき絵さんといいんちょさんでした！」

耳を劈くその悲鳴は、夜の墓場に痛いくらい響き渡った――。

第８５話　舐めて掛かると痛い目に遭う　肝試し前編（後書き）

《肝試し・ボツ企画名》
以前募集したこの企画ですが、その一部を発表したいと思います。

「暗闇でドッキリ☆３－Ａ肝試し大会！！」
→単純過ぎてボツ。作者のアイデア。

「気になるあの娘とムフフな展開！？３－Ａ肝試し大会！！」
→参加者がほぼ女性なので、残念ながらボツに。

「第一回、ネギ先生＆土郎さん、誰が一番驚かせられるか大作戦」
→既にストーリーが出来ており、それにハマらなかったので残念ながらボツに。

・皆さん、ご意見ありがとうございました。

～補足・解説～

：初老の男性が立っていた。
物語のスターターにしてオチである人物。詳しくは次回を待て。

：オーバーホール
製品を分解・解体して清掃・洗浄し、その性能を新品時の状態に戻す作業。つまり茶々丸のボデーは分解中でバッラバラ。

：出典：Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ
今話を書くにあたってとても役に立ちました。他にもグーグル翻

訳、ヤフー辞書、類語辞典・シソーラスはなくてはならない存在です。

‥はや辿り着けぬ理想郷（アヴァロン）

まき絵はこんな小難しい言い回ししないだろーなと思いつつも言わせてみた。

‥御先祖様に「引っ張られて」、連れて行かれちゃう

スピリチュアル好きな看護師の母に聞きました。小学生のとき、「お盆の時は近所の堰（用水路）には一人で行っちゃダメ」と言われたのを覚えています。

ちなみに御先祖様たちに悪意はありません。だから私たち生きてる人間が気をつけなければならないのです。

‥まさかこんなペアになるとは思わなかった。

リアルにくじ引きした結果です、あのペア一覧は。色々いいペアが生まれて面白かったです。

‥特にヒネリもオチもない、平和なヒト達で一括り。

だってそうでしょ？　平和すぎるでしょこのひとたち。どう書けと……！

‥まだ出ていない方々の出番は次話になります。乞うご期待。

次回予告。

「？　あれ！？　アキラさん！？」

「いやぁぁあああああぁぁぁああっ！！」

『■■■■■■■――――！！』

「行くよっ、撃ぇッ！！」

「――――全機破壊…活動停止を確認。コンプリート」

「……えっと、もしかして…君がさよちゃん？」

それでは次回！

第８６話　災難は忘れた頃にやってくる　肝試し後編（前書き）

第４回「今日のＦａｔｅ／名・迷セリフ」。
　偶にはっちゃけるのはこの人の所為ではない。中の人や神たる菌糸類がはっちゃけているだけなんだ……！

アーチャー（ＥＸＴＲＡ・赤）
「私が、私たちがサンタムだ……！」

　実際の発音で記述するなら「私が、私達が…サンタムだ！」である。
ダブルオーな機動戦士アニメの主人公、そのパロディであることは疑いようがない。
激しく間違えているサンタの仮装で現れたアーチャーのセリフ。
（登場作品：Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡおまけ企画「きかせて！！ブロッサム先生　メリクリ編」）

それでは第８６話、どうぞ。

第８６話　災難は忘れた頃にやってくる　肝試し後編

前回のあらすじ。

朝倉の思いつきで肝試しをすることになった３－Ａメンバー。
星も月もない漆黒の夜、無機質な石造りの霊園、闇と恐怖だけが存在する場所。
ただ少し怖い思いをするだけだったはずの肝試し。
しかしてその最中、墓地全体に形容し難いほどの悲鳴が響き渡った――――！

「ネ、ネギ君いまの声――――」
「ハイ、確かにまき絵さんといいんちょさんでした！」

耳を劈くその悲鳴は、夜の墓場に痛いくらい響き渡っていた。

「あっちです！　行きましょうアキラさん！」
「う、うん！」

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

墓地は碁盤の目のように整えられているうえ、墓石の高さがないために遠くまで見渡せる。そのため方向を見誤ることなど本来ほぼありえない。だがそこは暗闇の中。同じような墓石ばかり並んでいる場所を進み続けていれば――最後には感覚が麻痺してくる。焦りも相まってネギとアキラは、自分達が今どこを走っているのか、全く分からなくなっていた。

「ぜっ――はぁっ…ぜっ…はっ……！」

進んでも進んでも見えるのは同じ景色。辺り一面は灰色と闇色だけ。まるでゲームのダンジョンに迷い込んでしまったかのような現実味のない感覚。そう、まるでもう戻れない何処かへ迷い込んでしまったかのような――――

「？　あれ！？　アキラさん！？」

気づいた時、アキラの姿は無くなっていた。ずっとネギの後ろについて走っていた筈なのに、今は足音すら聞こえない。

（――――ゾクッ……！）

一気に血の気が引けていく感覚と、頭に血が上ってくる感覚。相反する筈のそれを冷静に自覚しつつ、ネギは混乱を避けられなかった。

（そんな…何が起きて……さっきの悲鳴だってただ事じゃな――――）

「――そうだしっかりするんだ、今は……！」

（いいんちょさん……まき絵さん……！！）

アキラは遅れているだけかもしれない。下手に探しに戻って道に迷えばそれこそ危険だ。

よってネギは、向かうべき方向が明確な、委員長とまき絵の悲鳴が聞こえた方向へ走りだした。

「いやぁぁあああああぁぁぁぁあっ！！」

「キャアアアアアアア！！」

「！！」

間違いない、今の声は――――！

第８６話　災難は忘れた頃にやってくる　肝試し後編

声の出所は直ぐそこだ。魔力で脚に加速（ブースト）をかけ、一気に墓地を走り

抜ける。

（あの道を左に――――曲がれば！！）

「なななっ、何なんですのこの方たちは――――――ッ！？」

「イヤーンやめて――――！！」

委員長とまき絵が、ヘンなモノに服を脱がされていた。

――――ドガシャーーーーン！！！

ネギはすっ転んだ。

「――ごめん先生、空き缶で転んで遅れ――――どうしたんだ？　うわぁっ委員長！？まき絵！？」

「うわ――っ！？　本物のオバケだ――――！？」

「いえどう見ても違うでしょう風香さん。しかしこれは一体……」

遅れてきたアキラ、次いで同じタイミングで夕映と風香も合流した。

そしてトンデモナイ光景が目に入る。グロテスクでリアルなゾンビと、ヌイグルミのようなファンシーなオバケが少女の服を剥いでいた。

倒れているネギにアキラが手を差し伸べる。

「大丈夫かネギ先生？」

「う、うーん：ありがとうございます：」

「ネギ先生！」

「あれ？夕映さん？」
「先生、これは一体何なのでしょう？」
「いえ…僕にもさっぱり……」
「先生にも心当たりがないですか……。……ではやはり……」
「ちょっと――！？　とりあえず助けてくれませんこと――！？」

◇――――――――◇――――――――◇

霊園入口前で、３人の美少女が即興の実況席に陣取っていた。
「さあいよいよ始まりました”ドキッ！！美少女だらけの肝試し大会！！”の真骨頂♪
解説席に座るのは技術提供及びスポンサーの葉加瀬さんと早乙女さんです！！」
「こんばんわ～♪　科学に魂を売った女、狂科学者（マッドサイエンティスト）葉加瀬聡美でーす」
「漫画界・未来の巨匠にして召喚絵師の早乙女ハルナで～す！」
「それではさっそくおふたりに解説をお願いしましょう。参加者を襲っているアレは一体なんなのでしょうか！？」
「ハイ！　あれは我が工学部の技術を結集して造られたゾンビ型ロボ群と！」

「私の全筆力を込めて描いた、『落書帝国（インペリウム・グラフィケース）』特製オバケゴーレムなのです！！」

葉加瀬はメガネをクイッと上げ、ハルナは胸を張って言いきった。
いかにも「頑張って作りました」的なことを言っているがこの2人、実際は超楽しんで作業していただろうことは想像に難くない。なんとまあ能力の無駄遣いである。

「これからの時代、技術にもエンターテイメント性が求められますからねー、いい経験になりました♪」
「いやー私も勉強になったよ♪　今度ホラー漫画描いてのどかと夕映に見せてやろっかなー？　ぐふふ」

霊園中に仕掛けられた隠しカメラと音響装置を通して、3人は阿鼻叫喚の渦に巻き込まれたクラスメイト達の姿をモニターからチェックする。
その姿を肴に、彼女達はお菓子など食いながら満面の笑みを浮かべていた。鬼畜ッ！！

「おっとそろそろ仕事を……」

マイクスイッチ・オン。

《――――これは何ということでしょうか！？　突如として墓地に現れたのは無数のゾンビとオバケの群れ！　この事態に、果たして参加者は無事にお札を入手して霊園を脱出できるのかぁ――――――！！？》

『お前の仕業か朝倉ァ――――――――――――――――――――――――

！！！！』

このとき、墓地の中にいた３－Ａ女子の心はひとつになった。

◇――――――――――――◇――――――――――――◇

《小太郎・千鶴》

『――――――ッ――――！』

『――――――ォッ』

『――――――――！！』

「へっ！　こないな雑魚に負けるワケないやろ！」

自分達に殺到するゾンビとオバケの尽くを撃退する。一般人である千鶴の前で派手に狗神は使えないが、この程度ならそれでも充分だった。

「あらあら、小太郎君やっぱりスゴイのね～」

「当たり前や！！」

蹴りを決めて着地し、千鶴の前でぐっとガッツポーズを決めた。

――ガシャリ。

「んなっ！？」

「…あらあら～」

倒した筈のオバケ達が起き上がる。

「へっ…、雑魚や思うとったら頑丈やんけ！　千鶴姉ちゃん下がっとき！

ええわ、二度と起き上がれんくらいボコったる！」

「小太郎カッコイイわよ～♪」

《おおーっと小太郎選手、オバケ狩りを開始しました！　那波選手もそんな彼を拍手して応援しております！　しっかりしろ、ペア揃ってゲームの目的を忘れたか――ッ！？》

《裕奈・茶々丸》

「どわあっ！　こ、これが例のオバケだねっ！」

周囲の墓石の陰から１０体程のゾンビの群れが飛び出した。

「ピピ……解析…分析…考察終了。あのゾンビの表面はゴム製素材による特殊メイクです。内部の駆動体はロボット…識別コードを見るに工学部製です。ハカセが一枚…いや数枚噛んでいると思われま

す。

どうしますか？　マップ通りならもうすぐお札のある場所に到着しますが」

気象衛星をハッキングし、高解像カメラで撮影して作ったマップ。それによると　もうすぐ墓地の折り返し地点に着くらしい。だがそこに真っ直ぐ向かうことは、２人を囲むゾンビ達が簡単には許してくれまい。

「だったらっ――力づくで行くしかないっしょ！！」

啖呵を切った裕奈の両手に、学祭最終イベントで使用された魔法銃が握られていた。

「……明石さん…その銃はイベント後　返却するように言われていたハズですが…」

「細かいコトは気にしない♪　行くよっ、撃(て)ぇッ！！」

――ドンドンドンドンッ！！

裕奈の魔法銃が火を吹く。魔力の弾丸は吸い込まれるように命中しゾンビ達を倒していった。

「――フ…手応えないね。この”ゆーな☆キッド”の前に立つとは…」

――ガシャッ……

「え」

確かに聞こえた機械音に、裕奈が後ろを、ゆっくりと振り向いた。

『■■■■■■■――――――!!!!』

ゾンビ　が　ふっかつした！

「ぎゃああ!?　ちょっと茶々丸さん　コレって工学部のロボなんじゃないの!?」

「最終(あのとき)イベントのものと同系機だとは一言も言ってませんが……」

《葉加瀬：ふっふっふ。甘いですね裕奈さん、そのゾンビロボの動力は魔力ではなくバッテリーです。魔力供給型ではないロボにその銃は効きません!!あははははははは!!》

《朝倉：何というピンチ！　明石選手　武器を隠し持っていましたが想定していた程の効果を発揮せず！　憐れこのまま脱がされてしまうのか――!?》

――――チュンッ。

《え》

ちゅど――――――――――ん!!!!

辺り一帯を光が照らし、走った閃光はゾンビの頭部を薙ぎ払って爆発した。

ゾンビロボの首からは煙が立ち上り、首なしゾンビの出来上がり。

茶々丸の目ビーム（レーザー）である。

「――全機破壊…活動停止を確認。コンプリート」

そう呟いたと同時、ゾンビロボ全てが音をたてて崩れ落ちた。

「では行きましょうか、明石さん」

「……あ――、はい」

肝試しが終わるまで、裕奈は妙に静かだったという。

《柿崎・ザジ》

「うひゃあああッ!?　なにコレ!?」

『■■■――――!!!』

『■■■■■ッッッ!!!』

『ハァハァ……パンツ…パンツハァハァ』

「きゃあああああああっ!!?　いやぁぁぁぁぁぁぁあっ!!」

明らかに誰かの悪意が込もった魔手が、柿崎に迫る――――!!

――食べチャッテ、イイスカ。

――うん。いいよ――――

――――イタダキマース。

「……あ、あれ？」

いつまで経ってもやってこない魔の手。柿崎が目を開けると何故か、そこにはオバケの姿など何処にもなかった。

――――ぎゅっ。

「っ！？」

何かに腕を掴まれて体をビクッと震わせる。だがそれは。

「あ……（忘れてた）…ザジさん。え？　あ、ちょっと！？」

幸か不幸か、この周囲に朝倉のカメラは仕掛けられていなかった。ザジに腕を引っ張られ、柿崎は「何も聞くことなく」その場から離れた――――。

――――バキッ―ボリッ――バギメギィッ――――……。

◇――――――――――◇――――――――――◇

「ロ、ロボさんの思考は読めませ――――ん！！」
「読むって何!?のどか――――！！」

目をぐるぐる巻いて混乱しながらのどかと夏美は全力で駆け抜ける。
途中、空き缶やらその他のゴミで転んでボロボロになりながらも、
見敵即逃――――敵見たら即逃げる――――の実践により2人はなんと
か生き延びた。
そして――――

「あっ！　みんな――――――！！」

夏美が叫ぶ。彼女達の進む先には神社のような小さな社があり、ぱ
っと見　そこには他の全てのメンバーが集まっていた。
2人は限界が近い体に鞭打ってそこに飛び込む。

「よかったです――！」
「助かったよ――――！」

皆の傍まで来たことで安堵して、膝に手をついて乱れた呼吸を整え
る。

『……。』

だが、仲間達は全く反応しなかった。

「……あ、あれ？　みんなー？」
「…よぉ、夏美姉ちゃん」

小太郎が、重々しく口を開いた。

「落ち着いて、落ち着いてやで？　…前、見てみ」
「？？　前？」

未だ整わない息のまま、小太郎の言う通りに顔を上げて視線を前へ向けると。

『・・・カカカカカ…………。』
『オ゛オオオ゛オ゛オオ゛オオオ゛・・・・・・・』

(———それはゾンビとオバケの大軍が、私達を取り囲んでいるところだったのです。)

「ってギャァァア———————————————！！？」

「やっぱ無理やったか……落ち着け言うんは」

「ちょっとちょっとー——！？　これはやり過ぎでしょ朝倉———ッ！！」
「何十体いんのよ！？」
「(魔眼で)数えてみたが……………９０体近くいるな」
「バカでしょ！？　バカでしょ朝倉！！　いや葉加瀬か！！」

《フフフ諦めなよみんな。このまま大人しくその痴態を私のテープに収められるんだね！
（これはいよいよ本当に大ピンチです！　この未曾有の危機に力を合わせて対抗しようとする選手達ですが、戦力差は歴然！　果たしてこの危機を脱する術はあるのか！？　それとも３０人近い美少女がこのままあられもなく脱がされてしまうのか――――ッ！？）》

「本音と建前が逆ですよ！！？」
「うわーーんヤダ――――！！」

そしてこの状況の中、ネギ達は。

（ちょっとネギ、これ本当にヤバイわよ！？）
（い、いえでも…いいいんちょさん達の前で魔法は使えないですし……）
（アーティファクトも神鳴流も常人離れして派手ですし……）
（あれ刹那さん？　美空ちゃんは？）
（……逃げました……）
（あんのナゾのシスタァァアーーーーーー！！！）

（コタロー君、狗神で何とかできない？）
（影に足沈めて止められるけど、全部は無理やで？　アイツら空も飛べんねや）
（無駄に高性能にしちゃってぇぇハカセのバカーーーーー！！）

（なら私が皆を眠らせようか？（具体的には麻酔弾で））
（撃っちゃダメですよ龍宮さん――――っ！　…いや、「眠りの霧」なら――）

『■■■■■――！！』

そんなことをしているうちに、似非ホラー軍団が雄叫びをあげて殺到した。

（――――やばっ）

対応が、間に合わない――――――――！！

《ぴぎゃーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！》

ＡＬＬ「！！？」

朝倉の断末魔と共に、お化け軍団が停止した。

◇――――――◇――――――◇

３人の少女――――パパラッチ娘、狂科学少女、漫画家は地面に正座して並んでいた。

「いやー…確かに？夏休みでちょーっと浮かれ過ぎたと……反省はしてるよ？本当に」
「……はい、ちょうどいい実験になると思って喜んで便乗しました……」
スゴク楽しかっ……くっ、そんな目で睨んでも私は屈しませんよ！　科学の発展の礎となるなら骨を埋める覚悟です、我が人生に一片の悔いなしッ……！」
「……認めたくないものだな…己の若さゆえの過ちというものは……」
――ビ　ゴンッ！！
「ふぎゃっ！！」
「ぴぎゃ！」
「あだっ！！」
鈍く重い音と共に、デコピンを喰らったハルナが吹っ飛んだ。音を聞けばその威力がわかる。朝倉、葉加瀬も次いでそれの餌食となった。
「「「～～～～～……！！」」」
あまりの威力に吹っ飛んだ頭――後頭部を地面に強打し、３人は痛みに悶えながらのたうち回るしかなかった。
「自業自得だ」と、デコピンを放った張本人――士郎は溜め息を吐いてそう独りごちた。
「まったく…何をやっているんだバカどもが」
その後ろにエヴァがいた。腰に左手をあてて呆れたようにネギ達を

見ている。

「あ、エヴァちゃん」

「エヴァちゃんも花火に来ればよかったのにな～♪」

「師匠（マスター）、シロウと一緒に何を？」

「それは私が話しましょう」

いつの間にかエヴァンジェリンの隣りに、シスターシャークティーが立っていた。

その右手には、首根っこを掴まれてぐったりしているミｓ…ナゾのシスターの姿が。

「近頃、あなた達のように肝試しをする生徒が多いのですが…夏休みでタガが外れているのか、中にはマナーの悪い生徒がいるようなのです」

３－Ａメンバーは合点がいった。確かに墓地の所々にゴミが落ちていたのだ。

「かく言う私のいる教会も例に漏れず、外国人墓地にゴミが落ちている始末……。美空、今夜は私と一緒に見回りをする約束でしたよね？」

ぐったりしている美空に視線を向ける。へんじがない。ただのしかばねのようだ。

「それは貴様の教会に信心が集まらんからではないのか？　お前がシスターなんぞ勤められる程度だからな」

「お言葉ですがその考えは間違いです。信仰は教会ではなく主に捧

げるもの。そのようなことすら分からぬとは、貴女の６００年は無駄に歳を重ねるだけだったようですね」

「……ほう？ならばここで試してやろうか。夏風邪でぶっ倒れるようなだらしのない魔法使いが、この闇の福音に勝てると？」

「その言葉そのままお返しします。花粉症持ちの吸血鬼に負ける道理はありません」

バチバチッ！！と火花を散らして睨み合う。２人の間には、まるで結界のように侵し難い空間が生じていた。

「え、えーと…シロウ？」

「……さっきからこんな調子なんだよ。ネギ、やっぱシスターと吸血鬼って相性が悪いのかな？」

「さ、さぁ……」

（…シロウ……ついに先生にまで手ぇ出してもーたんや……）

士郎の背後の女性陣を見て、木乃香はそう思った。

閑話休題。

「で。俺はこの墓地の管理人の清水さんって人に頼まれてな。“自分はもう年寄りだから、若い人たち相手はキツイ”って言うからさ」

「あー、士郎の”お人好し”は有名よねー」

赤の他人に頼みごとをされるって、どんな風に有名なのだろうか。

「ってワケで、何故かエヴァもついて来て3人で墓地を廻ってたんだ」

「私は不肖の弟子に代わって見回りを手伝って頂いたお礼として一緒に。他意はありません」

「誰に言い訳しているんだ貴様」

そして彼女達のピンチに颯爽と登場（？）し、朝倉一味を無力化したのであった。

「朝倉和美さん、葉加瀬聡美さん、早乙女ハルナさん。いくら何でもやり過ぎです。よってあなた達には後日、罰としてこの墓地のゴミ拾いをしていただきます。そのつもりで」

「げ」

「え」

「うっ」

教師に見つかったのが運の尽き。3人は項垂れた。

「なーみんな、ウチらもゴミ拾い手伝わへん？」

「……まあ確かに、ココかなり広いからきっと大変よね」

「――わかりましたわ木乃香さん、その提案に乗りましょう！皆さん、明日はこの霊園の大掃除です！！　これは3－A委員長としての決定ですわよ！！」

「え――――？」

「でもまぁ…ここまできたら連帯責任かにゃ？」

「私達も多少騒ぎ過ぎましたし……」

「オッケー委員長！」
「明日は墓地の大掃除、決行だね！！」

朝倉の目尻が光った。

「ううう……ありがとうみんな……。今まで隠し撮りしたみんなの写真のネガとデータ、処分する事にするよ……！！」

ＡＬＬ「……。」

「いやいや、ありがたいことです」

いつの間にか、初老の男性が彼女達の前にやって来た。

「あれ、清水さんじゃないですか」
「衛宮さん、わざわざありがとうございました。それにしても…自分達から掃除を名乗り出てくれるとは、やはり麻帆良の子供達は親切ですなぁ」

「えへへへー♪」
「そうでもないよ～♪」
「調子に乗るなコラ」

「今は私の娘が墓地の管理をしているのですが、急な事で、娘には仕事の仕方も教えぬままに……これでようやく引退できます。それだけが、心残りで……」

………？　何だろう、この妙な言い回しは？
そう気づいたとき、士郎は目の前の老人に強烈な違和感を感じた。
「学園都市…学校側に相談するのに、この身では色々と面倒でしてな……。衛宮さんぁあなたが、噂どおりの親切な方で良かった………。これで…ようやく逝けます……」

――――本当に……ありがとう――――――――――。

感謝の言葉が耳に届いたとき、そこに老人の姿はなかった。

ALL「………………………………。」

3－A「ぎゃぁぁあああああ――――――――――――――――――――――――!!!」

「そう言えば先日、この霊園の管理者が亡くなったという話を聞きました……なぜ忘れていたのか……」
「霊とはそういうものさ。聖職者も魔法使いも、奴らには引っかかるというコトだ」

「いやぁぁああ――――！！　マジモンユーレイ――――――！？」
「おかーさーーん――――！！」
「なぜ私はカメラを持っていなかったのか――――――――！？」

士郎達は、阿鼻叫喚の光景を放置して眺めていた。

「いや、ユーレイって本当にいるんだなぁ」

『こっ、こここここ怖いです――――――――！！』

「……ん？」
『……え？』

――ばっちり、２人の視線が合った。

士郎の目には、黒いセーラー服のような制服に身を包む、色素が薄くて足のない、宙に浮いた少女がしっかりと映っていた。

「……えっと、もしかして…君がさよちゃん？」

『！！！』

――しろうは千里眼スキルで霊視がかのうになった！
――さよはともだちがひとりふえた！！

どっとはらい。

第８６話　災難は忘れた頃にやってくる　肝試し後編（後書き）

《おまけ》

霊園見回りをする前、エヴァンジェリンの家の前。
エヴァが、期待の眼差しである一点を凝視していた。

――――シュゥゥゥ……シュボボッッ！！

「おおっ！！」

初めておもちゃ花火（手で持つ花火）に火を着けたエヴァが感嘆の声をあげる。
平静を装ってはいるが、その目が輝いているのは花火の光が映っているから、というだけではないと一目でわかった。

――――シュボボボボ……！！

「……！！」

すっごくワクワクしている。

「ほらエヴァ、こんなことしてもキレイだぞ」

士郎は手に持った花火を指揮棒のように動かした。火が残像となって光の帯が描かれる。

「おお！！」
「よし、じゃあエヴァもやってみるか」

その後。

「凄いぞ士郎！　アハハハハハ！！」とでも言いだすんじゃないかというくらい、エヴァは楽しそうにはしゃぎながら、花火を持った腕をぶんぶん振り回していた。

――肝試し終了後。

「……ってことがあったんだ」

（士郎さん、なぜそんな可愛らしいマスターのお姿を撮っておかなかったのですか……！！）

茶々丸の慟哭を知る者はいなかった。

～補足・解説～

：その姿を肴に、彼女達はお菓子など食いながら満面の笑みを浮かべていた。鬼畜ッ！！

ちょっと外道が過ぎるのは、夏休みではっちゃけてるからというコトで。

正直に言うと、ストーリーのために彼女達らしからぬ行動をとらせてます。これも私の力不足ゆえ……。

ごめん3人とも。君達はこんなに非道い娘じゃないんだよね……！（たぶん）。

：『■■■■■■――――！！』

バーサーカーじゃないですよ？　台詞が面倒だっただけです。

：――――バキッ―ボリッ――バギメギィッ――――……。
スタッフが美味しくいただきました（嘘）。ザジの「トモダチ」であるヒトタチ、まさかの登場。

：（なら私が皆を眠らせようか？（具体的には麻酔弾で））
：（撃っちゃダメですよ龍宮さん――――っ！　…いや、「眠りの霧」なら――）
この描写がわからなかった人の為に説明。
みんな（一般人）を眠らせれば、堂々と魔法などでゾンビを駆逐できるということです。

：ＡＬＬ
オール。みんな、という意味。

：――――しろうは千里眼スキルで霊視がかのうになった！
これでやっとさよと会話できます。ここまで長かった。

＊初めは千里眼ではなく心眼と書いてました。即日修正。
心眼はあくまで「状況を打開する能力」であって霊視には関係ありません。千里眼スキルはランクが上がると透視や未来視が出来るようになるので、関係があるのはこちらでした。

：清水さん
ユーレイ。さよと反対に「存在感があり過ぎる霊」。なのでさよや真名も幽霊だと気づかなかった。悪意がないため放置していたが、実はエヴァは気づいていた。

完全オリジナル日常編・第一弾。いやぁ疲れました。第二弾も予定

しています。
そして来週から学期末で忙しくなるので、しばらく更新はありません。
ご了承ください。
それでは次回！

第87話　強制退部となります。　夏祭り前編（前書き）

第5回「今日のＦａｔｅ・名／迷セリフ」。
――お前にとって戦う相手とは、自身のイメージに他ならない――。

衛宮士郎ＶＳアーチャー
負けていたのは、俺の心。
自分が間違っていると気付き、アイツは正しいと受け入れた心が、弱かった。
負けていたのはそれだけだ。なぜなら、ずっと――

「……けんな」
「なに……？」

なぜならずっと――この体は、おまえには負けないと訴えていた。
偽者と。おまえの理想は偽りだと蔑まされる度に、力が籠もったのは何の為に――

「ふざけんな、こんちくしょう……！！！！」

「――お前には負けない。誰かに負けるのはいい。けど、自分には負けられない――！」

カッコイイなー士郎。己の理想の極地に立った未来の自分。自分よりも遥かに強い、もはや別人とさえ呼べる存在。それでも、敵が

エミヤシロウ――衛宮士郎であるならば。負けるわけにはいかない、負けてやる道理はない。「幾たびの戦場を越えて不敗」。

衛宮士郎が戦うべきは、いつだって自分自身…！“体は剣で出来ている”……ッ！！

それでは第87話、どうぞ。

第87話　強制退部となります。　夏祭り前編

「フォフォフォ……『英国文化研究倶楽部』か」

「は、はい。あの、そのー……」

真夏の学校の学園長室で、近右衛門がバ●タン星人のように笑う。

「フム…研究するのは英国文化だけではないようじゃの？」

「え、え～と、その……」

全て分かっていると語る口ぶりが3人を更に緊張させる。近右衛門の机の前に並んで立つ明日菜、木乃香、そして刹那。彼女達のこれからは目の前の老人に懸かっているのだ。

「学園長先生…」

明日菜が懇願するように近右衛門を見る。彼は顎鬚を擦りながら引出しに手をかけた。

「ウム…。可愛い子には旅をさせろと言うしのう。よかろう認可じゃ！」

「ありがとうございます！」

とある書類に、学園長の判子が押印された。

・・・・・・

「よし整列だ、点呼右から！」

「イチ！！」
「ニ！」
「サン！」
「よんー？」
「５！！」
「ろぉく！！」
「なな！」
「は　は　はち――」
「きゅッ！！」
「じゅー」
「１１！」
「じゅ…じゅーに……？」

「よし！　これでお前らのネギま部（仮）は学園に正式に認可された！
　世界有数の学園都市である麻帆良学園の認可があるということは、今後の情報収集、国内・海外活動に於いて多大なアドバンテージを得ることとなるだろう！！
　これで満足かガキども！？　満足なら返事をせんかぁ！！」

『ハイッ！！！』

中等部の屋上で、ネギま部（仮）一同は名誉顧問の号令に元気よく応えた。

第８７話　強制退部となります。　夏祭り前編

メンバーの姿を一眼レフに収めつつ、朝倉はハルナの隣で嘆声を洩らした。

「しっかしなかなか壮観って感じのメンバーだねー。実際ただの人間になら負けないくらい強いんじゃん？　なんつっても超りんの計画を退けるくらいだし」

「いやーまだまだよ、私のアーティファクトも極めれば極めるほど奥が深いし。

まあアスナは闇の魔王の個人指導でメキメキ実力上げてるけど」

「いやー、私もまだまだだって」

「むむ謙虚！その意気やよし！たゆまぬ自己研鑽ねっ！いよぉーし修行上等ーッ！！

まだまだレベルアップするよ――ッ！！」

『オオ――――ッ！！』

盛り上がる少女達。長谷川千雨はそれを、いつも通りの冷めた目で眺めていた。

（やれやれお気楽な奴等だぜ…こんな奴等が仲間なんだと思うと頭痛が……

――――ん…仲間？　オイ待て違うぞいつ私が仲間になったって！？）

「やれやれガキどもが大はしゃぎだな」

「何にしても皆さんが前向きに努力しているのは先生として嬉しいです♪」

千雨が自身の意識の変化に思わず頭を抱えていると、そんな声が耳に入った。

「出発はいつだ？」

「８月１２日の予定です」

「あと２週間と少しか。無理をすればさらに３、４ヶ月分の修行は可能だな」

「え〝っ……ま、まだそんなに？」

ネギが顔を青くするなか、千雨はなんとなく2人の会話に耳を傾けていた。

「だがどうせ首都を訪れるだけなんだろう？」

「ハイ、首都メガロメセンブリアで情報集めと……遠出をしても付近の観光地巡りぐらいです。僕もまさかこの休みで父さんの行方が判明するとは思ってません」

「だろうな。ま…あっちも文明国だ、治安もいい。首都を離れねばそうそう危険はなかろう。奴等の修行も無駄骨だろうな」

（いやまあ、そりゃそうか。生徒を平気で連れくくらいだからな…いやホントか？）

「危険なのはせいぜい出入国の時くらいか。なればこそ…貴様もそうして落ち着いていられるのだろうな」

「は、はあ」

「フ…まあ、ひとまず観光気分で魔法の国を楽しんでくるがいいさ」

――ニイッ…

（……！）

そう口にしてエヴァが嗤う。それを見た千雨は、魔法世界は「観光気分で」いられるような場所ではないと正しく理解した。

――何故ならその笑みは。
嘲るような、蔑むような。何も知らない自分達を憐れんですらいるかのような、冷たい笑いだったのだから――

「よぉーし！　みんなイギリスへ行きたいかー！？」
『オ――――！！』
「何が何でも行きたいか――――！？」
『オォ――――ッ！！』

「修行を終わらせてウェールズへＧｏ――――――ッ！！！」
『Ｇｏ――――――ッ！！！』

（……アホどもが…）

――くすくす♪　聞ーちゃった聞ーちゃったですぅ――～～
――クヒヒヒ、こいつは大ネタＧＥＴだよぉ～～♪

屋上の階段の陰に、会話を立ち聞きした双子がいたことを彼女達は知らなかった。

◇――――――――――◇――――――――――◇

中等部図書館。
ホテルのロビーのような談話室。まばらに座る生徒達の中、明日菜と委員長がその真剣な顔を突き合わせていた。委員長から受け取った書類を明日菜が睨む。

「死んじゃったわけじゃないのね？」
「さあ……。ただ行方不明らしいということしか…」

今日は以前、委員長――雪広コンツェルンに頼んでおいた「ナギ・スプリングフィールド」の調査結果が届く日だったのだ。

（う……ダメだちんぷんかんぷん。ネギに見せた方が早いわコレ。いやその前にカモとか夕映ちゃんとか、千雨ちゃんにも見せないと…）

「…それでどうします？　いずれにせよ書類による調査はここまでが限界。これ以上の積極的な捜索は大量の人員と時間が必要になってきますわよ？
　もちろんッ！ネギ先生の為なら全世界一万人規模の調査もわたくし辞さない覚悟で……！！」

「あ――っ待った待ったそこまではッ！私達にも心当たりがあるからしばらくはいいわ！」

「あらそうですの？」

立ち上がった委員長を慌てて鎮める。この人は本当にやりそうだから怖い。

「サンキュッいいんちょ。おかげでだいぶネギのお父さんに近づけると思う、恩に着るわよ。私達の方でも何かわかったら必ず報告するから」

「ええ…それはいいですが……その「私達」というのは何ですの？」

「え…いやそれは…」

――ズドドド……！

「…ん？」

「――――ぅぅぁアスニャ――――――――ッ！！」

「わぁあっ！？」

怒りのまき絵が鳴滝姉妹と共に現れた！

「これは一体どーゆーことなの――ッ！？　アスナの裏切りモン――！！」

「ええっなになに！？　何の話！？」

明日菜はまき絵が涙目で怒鳴る理由が判らない。だがそれはすぐに判明する。

「何の話って新クラブの話だよッ！！私達に内緒でイギリス旅行に行くんでしょー！？」
「あ……えっ…いやそれは…」
何故バレたのか。情報源（ニュースソース）はモチロン先ほど屋上にいた双子――鳴滝姉妹である。
「？　何のお話ですの？まき絵さん」
「聞ーてよいんちょ！！」
「あっ！ちょっまきちゃんストッ――――」
「なっ…何ですって――！？　ネギ先生のお父様を捜すための新クラブを作って、私達に内緒でラブラブ英国合宿旅行ですって――――ッ！？」
◇――――――――◇――――――――◇
「……なるほど…そこは危険な場所であり、特殊な訓練を積んでいる人でなければ行くことは出来ないと……」

「そ、そう！だか「そんな苦しい言い訳が通りますか――――ッ！！」きゃああっ！？」

「お返しなさ――――い！！」

「――――わっと」

「！？」

――――すかっ。

確実に明日菜の手から書類を奪う筈だった腕が、簡単に躱された。

――――ぶんぶんぶんぶんッ！

「ちょっ、いいんちょ……」

――――ひょいひょいひょいっ

「くっ…！　このぉぉっ！！」

繰り出される委員長の腕を避け、いなし、アスナは書類を防御する。

初等部以来の天敵であり親友であるこの2人が、それに違和感を抱くのは当然だった。

（あれ…いんちょ、遅い……？）

（な…はっ、速い…！？）

「くっ！」

――ダンッ！！

分が悪いと悟った委員長は丁寧にスリッパを脱ぎ、談話室の机の上に乗り上がる！

「まき絵さん、鳴滝さん！　Ｓ！　あの毒婦をひっ捕えなさ――い！！」

「「「合点！！！」」」

「ちょっと――ッ！？」

委員長、指示を出すためだけに高い所に登ったのか――ッ！？

ナントカと煙は高い所にのぼｒ……げふんげふん。

ドカーーン！

『ぎゃ！』

ズズーーンッ！！

『ぶぎゃっ』

『ふぎゃ！』

――きゅう．．．．

「あ――……」

４人がかりで捕らえにかかるも、闇の魔王（エヴァ）に鍛えられた明日菜の敵ではなく。まき絵のリボンに絡まって自滅し、彼女達は仲良く床に倒れ伏した。

「ホントにゴメンッ。いいんちょ、後で必ずネギ連れてお礼しに行くから」

「うぐぐ～」

「ゴメンね――――！」

後ろ髪を引かれながら、明日菜は駆け足で図書館から出て行った。

・　・　・　・　・

「あーん悔しいー」

「アスナさん、いつの間にあれほどの腕を…」

「ハハハ、散々だな委員長」

――ザッ……。

気落ちする彼女達の前に、初等部生徒用ウサちゃんスリッパを履いた人物が現れた…！

「エ…エヴァンジェリンさん？」

「特殊な訓練をせねば合宿旅行に行けぬというのは本当だ」

「で、でもなぜ貴方がそのようなことを……ハッ！？」

腕を組んで自分達を見下ろす金髪の美少女、その左腕の腕章に――――

――――――『名誉顧問』。

（（（（新クラブの名誉顧問――――――ッ！！？））））

史伽（でもなぜか納得――…）

「お前達にも腕試しの機会をやろう。クラスメイトだしな」

ニッと屈託なく笑って彼女は言った。

「おーいなに騒いでんのーッ？」

「――――そうそう。丁度今日は夏祭りの日だったな」

「？」

浴衣を着た見知った顔がやって来たのを見て、エヴァはそう呟いた。

◇――――――――――◇――――――――――◇

龍宮神社の周りは森が広がっている。それを貫く、神社に繋がる複数の道は途中で合流して一本道となり、そこは多くの人で賑わいを見せていた。露店の列は少なくとも５００m以上は続いているであろう。

その喧騒の中には、ネギま部（仮）の面々の姿もあった。

「わ――――♪」

初めて見る日本の夏祭りにネギが感嘆の声をあげる。隣を歩く小太郎と一緒に浴衣を着て、綿飴に口をつけている。

「いいね――お祭り♪」

「おっネギ、金魚すくいあるで　勝負せんか？」

「またせっちゃんと一緒に祭りに来られるなんてなあ♪」

「は……はい」

前髪を分けておでこを出している木乃香と、サイドテールを解いて髪を下ろしている刹那がネギ達の脇を通り過ぎた。

「あ、せっちゃん『まほら焼き』やて！」

「大判焼きですか？　懐かしいですね」

自分の手を引く木乃香を見て、刹那は自然と笑みが零れた。

「スイマセーンまほら焼き2つくださーい」
「いらっしゃい！　すいませんけど少々お時間を……あれ？」
「……ほえ？」
「……え？」

木乃香は指を2本立てたまま、刹那は木乃香に引っ張られた体制のまま。店主は2人の顔を見たまま硬直した。

「……そっか、お前らも祭りに来たのか」
「――――シロウ何しとるん？」

頭にハチマキ、捲られたTシャツにワインレッドのエプロン。そんな出で立ちの衛宮士郎が、串を持って屋台の奥に立っていた。その姿は完全に露店の店主である。

「いや、この屋台の店主のお爺さんが急病でさ。弟子の人が遅れてくるって言うからそれまでの代役を頼まれたんだ」
「あははー。シロウらしいなあ」

（「頼まれた」んやのーて「買って出た」んやろーけどなー）

「それにしても、髪を分けただけで随分印象が変わるんだな。似合ってるぞ木乃香」
「ホンマに？　ありがとー♪」

会話しながらも士郎は串を巧みに操り、鮮やかに大判焼きをひっくり返していく。

「……。」

刹那が俯きがちに、期待するような眼を士郎に向けていた。

（シロウ！！　せっちゃんも、せっちゃんも褒めてーな！！）

「よしできた。お待たせしましたお客様、まほら焼き2つです。お代は俺持ち（サービス）だ、熱いから気をつけろよ」

出来あがった大判焼きを、士郎は2人に手渡した。

（（――――ああ……。））

「…し、シロウ！せっちゃんの浴衣、カワイ――――」

「そういや刹那が髪下ろしてるのって、初めて見るな」

（――――え）

「……そ、そうでしたか？」

言われてみればそうかもしれない。だが今まで見せたことのない自分を見せていると思うと、刹那の中に妙な恥ずかしさが込み上げてきた。

「ああ、ヘアピンの花飾りも凄くよく似合ってる。可愛いな」

「～～～～～～！！！（赤面）」

そう言って士郎が破顔した。……言われた方は、顔から火が出そうだったが。

（――シロウ、ナイス！！）

顔を真っ赤にして俯く幼馴染みと、満面の笑みで自分にサムズアップしてくる義妹（いもうと）。

士郎は首を傾げながら2人を見送った。

・　・　・　・　・

妙な様子の義妹たちを見送って、士郎はホッと息を吐いた。

（ぎこちない顔になってなきゃよかったけど…）

つい先ほど、士郎は無理して笑っていた。内心動揺していたのだ。

（アイツら、本当に美人になったよな……。身内贔屓もあるかもしれないけど、十人のうち十人が美少女だと思うだろう、アレは）

屋台に2人がやって来たとき、士郎が固まったのは。

（……見惚れてたなんて、恥ずかしくて言えないよな――…）

そんなことを思いながら、左手でポリポリと頬を掻いた。

（ていうか、あれじゃあナンパとかされるんじゃないか？　いやでも中学生に手を出そうなんて馬鹿は麻帆良には…でも……いや、刹那がいるんだし大丈夫――――）

（…いや、ダメだ……！　刹那はそーゆーことに耐性がないだろうし。もしアイツがナンパされたりでもしたら――――）

「（……イラッ）」

「あんちゃん、焦げてんじゃねえのか？」

「え？　おわぁあっ！？」

隣りの屋台の店主に声をかけられて、士郎はようやく我に返った。

◇――――――――――◇――――――――――◇

士郎と別れた後しばらくして、木乃香と刹那は前方に友人を見つけた。２人もそこへ行くことにする。

「どしたの茶々丸さん。何これバッジ？」

「部員の皆さんにお配りしているところです」
「なになに？　アスナどうしたん？」
「あ、このか。刹那さん」

ちなみに茶々丸は未だオーバーホール中であり、木乃香達と同程度の身長のままである。

「マスターから皆さんへのプレゼントです」

明日菜・木乃香・刹那の3人は茶々丸から、白い翼の片翼を模った「ＡＬＡ　ＡＬＢＡ」と刻まれたピンバッジを渡された。

「何コレ――ッかわええ～～～♪　貰ってええのん？」
「人数分あります。このバッジは部員の証ですので今日の祭りにつけて来いとのことです」
「うん、つけるつける～かわええもん♪」
「エヴァちゃんがプレゼントってのも何か怪しいわね～～…」

木乃香は喜んで、明日菜は胡散臭いと思いながらも、3人は胸元にバッジをつけた。

「でも何で白い羽根なん？」
「はい、いつまでも『ネギま部（仮）』ではあんまりだろうということで、というかマスターがイヤだということで、対外的にはサウザンドマスターの『紅き翼（ALA RUBRA）』にならって『白き翼（ALA ALBA）』と名乗ってはどうかと仰っていました」

「え……」
「「白き……翼……？」」

白い翼と聞いて彼女達が真っ先に連想したのは、刹那の羽根だった。

「ええやんその名前――♪」

「エヴァちゃんも粋なこと思いつくじゃんか～♪　見直した！」

「え、いや、そ　そんな私……そそれはどうかと……」

「――ただし」

茶々丸の顔に、暗い影が射しこんだ。

「それは部員の証ですから……英国行きまでにバッジを失くされた方は強制退部となります」

「「「ええっ！！？」」」

青天の霹靂だった。

「そ、それはこわいバッジやな～」

「まあ失くさなければいい話ですが」

「何でそんな変なもの配るのよ～。やっぱ怪しいわねエヴァちゃん」

――同時刻。

『ふふふふ。あのバッジを奪えばイギリス旅行か～～』

木の上からのどかと夕映を監視する、まき絵・裕奈・アキラ・亜子

の姿があった。

――――やつら新クラブの部員どもはこれから夏祭りに行くそうだ。
部員は全員白い羽根の形のピンバッジを胸につけている。
それを奪取できた者は追加で入部を認めてやろう――――

「で、でも一番おとなしそーなふたりを狙うなんて卑怯ちゃう？」
「最も弱き場所を叩くは兵法の基本！！　確実にイギリスに行くにはやむを得ないと言えよう……！」
「でもあの２人も特殊な訓練とかゆーのやってるんじゃ…？」
「やっぱやめた方が……」
「大丈夫大丈夫！　とりあえず行ってくるッ」
「「「え？」」」

・・・・・・・・

「そういえばこのバッジなんだろうねー。カワイイけどー…♪」
「さあ…部員の証ということですが……」

のどかと夕映は、狙われているとも知らず人集りの中を歩いていた。

「よーよーそこの姉ちゃん達よぉ！　いいバッジ持ってんじゃねえ

か！！」

「「！？」」

その声に振り向くと。

「俺は通りすがりのバッジマニア！！バッジ仙人パッチもん！！」

何とも言えない怪しさ滲み出る、奇天烈な人物が立っていた。

浴衣の上から羽織った上着に無数のピンバッジ。「俺」と自称しているが、身長と体のラインは明らかに女性。肝心の顔はドラ●もんの贋物（パチもん）らしきお面に隠れてわからない。

「くくくそのバッジ気に入ったぜ。怪我したくなかったらそいつをよこしな」

……見たことある。絶ッ対見たことある。それは2人の共通認識。

激しく覚えがある。その声。そのシルエット。

そう。頭で揺れる、肩まで届くサイドテールの持ち主は――――――

「何をやってるですか裕奈さん」

「何ィ！！？　なぜバレたっ！？　さ、さすがゆえ吉……ッ！！」

――ズドドドドド……げしゃっ！！

「（――――何やらかしてんのゆーな――――――――――ッ！！）」

「――――へぶらっ！！？」

まき絵の飛び蹴りがパッチもんに直撃した。

こうして白き翼（アラアルバ）の夏祭りはエヴァンジェリンの姦計によって、
ネギま部員の部所属継続・及び新規入部試験となったのだった。
はたして彼女達は部員の証を守れるのか！？

第87話　強制退部となります。　夏祭り前編（後書き）

《おまけ》

祭りの数日前。

茶々丸「マスターの金髪は色が強いですから…青色は映え過ぎてしまいますね。やはり白い浴衣でいくべきでしょうか？」

エヴァ「いや、しかしな…私は外に出る時はよく白い服を着ているから…その、なんだ」

茶々丸「なるほど、普段とは違う姿を見せてギャップで墜と…いえ、魅せたいということですね。流石ですマスター、乙女です」

エヴァ「褒めているつもりか貴様……」

明日菜「えー？　私は青でもいいと思うけどなー」

木乃香「せやなぁ、エヴァちゃんせっかくキレーな金髪なんやしなぁ。黒もええなー」

エヴァ「！？　きっ、貴様ら何時からそこにいた！？」

明日菜「うーん、いま？」

木乃香「あっ！　エヴァちゃんコレ着てみーひん？　可愛えー♪」

エヴァ「そんなもの誰が…。　ッ！？　な、何をする神楽坂明日菜！？　離せっ！？」

明日菜「フフフ遠慮しなくていいのよエヴァちん。さあ脱がすわよこのかッ！！」

木乃香「おっけー♪」

エヴァ「あっコラ、ホントにやめっ…んあっ…やめろぉぉおおおお――――！！」

茶々丸「……♪　（記録用高画素デジタルカメラ起動中）」

「今日は夏祭りの日だったな」などと言いつつ実は準備していたエヴァのお話。
明日菜は若干、スパルタ修行の仕返しとか腹いせが入ってます（笑）

～補足・解説～

：（う……ダメだちんぷんかんぷん。ネギに見せた方が早いわコレ。いやその前にカモとか夕映ちゃんとか、千雨ちゃんにも見せないと……）

ネギに渡したら「ありがとうございますアスナさん！いいんちょさんにもお礼を言っておいてください！じゃあ僕さっそくコレを調べてみますね！」と言って持ち逃げされそうなので、その前に有識者（？）たちに見せようという判断。ネギ、信用されてねえ。

：委員長、指示を出すためだけに高い所に登ったのか――――ッ！？
原作に対する私個人の疑問。登った意味なくないですか？これ。
ツッコんじゃいけないのか。「あ、登ってるw」と軽く笑って流すところなのか。

：「あ、せっちゃん『まほら焼き』やて！」
：「大判焼きですか？　懐かしいですね」
地域によって同じ焼き菓子を「大判焼き」「今川焼き」と違う名称で呼ぶことがあるそうですね。私の実家の地域には2つともあったんですが。

：刹那が俯きがちに、期待するような眼を士郎に向けていた。

読者の皆様、わかりますか！？
士郎の方が刹那より身長でかいですよね。そんな彼に、俯いたまま視線を向けたら…！
――――刹那はこのとき、上目遣いになっているのです！！（作者ガッツポーズ）

ここ最近、課題、テスト週間、風邪をひくなど色々ありましたがなんとか生きてますｗ
いやー、刹那・木乃香・士郎・エヴァは書いてて楽しいなー♪
それでは次回予告。

「ひぐっ……ふぇえええ――――――ん！！　アスナさん、私どうじだら〝――――！！」
「えええええっ！？　何よどうしたの本屋ちゃん！？　何があったの！？」
「ゆえ、どうしたん！？」
「…このかさん、それが……」

『第８８話　私が…私達が…サンタムだ！』

それでは次回！

第８８話　私が…私達が…サンタムだ！　夏祭り後編（前書き）

第６回「今日のＦａｔｅ・名／迷セリフ」。
本日はＦａｔｅ／ＥＸＴＲＡより、赤セイバーさんです。自分的にはこれも名セリフだと思います。

セイバー（ＥＸＴＲＡ・赤）
「奏者よ、余は疲れた。あと飽きた。
早々に我らの部屋に戻り、余の働きを労うが良い」

尊大な態度をとるが、実は「構って欲しい」「愛して欲しい」という子犬系の困ったちゃん。要は「余は頑張ったぞマスター！さあ褒めるがよい！」ということ。
そんな彼女に「そなたが好きだ！」なんて言われた日には、そりゃあ悶えるしかないじゃないか……！！

それでは第８８話、どうぞ。

第８８話　私が…私達が…サンタムだ！　夏祭り後編

龍宮神社での夏祭り。
過ぎていく楽しい時間は名誉顧問（エヴァンジェリン）によって凄絶な試験と化した。
果たして明日菜たちは、部員の証である白い羽根（ピンバッジ）を守ることができるのか……！？

……守れた。

裕奈一味は実力行使に出たが、夕映の魔法で危機を脱出。のどかの「いどのえにっき」分冊召喚と思考追跡によって彼女達を撒き続ける。結果、裕奈たちはこのあと全くのどか達に遭えなくなった。

古菲とハルナは柿崎たちが嗾けた武闘派男子生徒を返り討ちに。
楓はなんなく鳴滝姉妹を躱し続けた。

そして明日菜は――――。

『本当に危険な場所だというならネギ先生…あなた達も行かせられ

ませんわ！！
　委員長として不許可ですッ！！』

『――――行かないワケにはいかないのよ。ネギ（あいつ）が自分でお父さんの行方を見つけなきゃ意味がないの』

『……！？』

『お父さんのことにケリがつかなきゃ、あいつは他のどこにも行けない。そーゆー面倒な奴だってようやくわかったから…私達も協力しようって決めたのよ』

『大丈夫、本当に危険な事になったらあいつの首根っこひっつかまえてでも逃げてくるわよ。そのために作ったクラブなんだから』

「……わかりましたわアスナさん。あなた達の覚悟も……」
「えっ…♪　いいんちょわかってくれた？」
「ただし…」

――――ぎゅむっ！

「こんな重要なコトを今まで黙っていたとは納得できませんわ。後で『もっと』『しっかりと』説明して頂きますからね……！」
「う〝……」

――――むににに……！！

（ヤバ…どうしよ。魔法とか言えないし…）

つねられる頬の痛みに耐えつつ、この後を考えて気が重くなる明日菜だった。

◇――――◇――――◇

「ほふ……いいんちょってば、思いきりやってくれちゃって～」

2人と並んで歩きながら、明日菜は赤くなった頬を擦って愚痴を零す。

「アハハ、ウチが治したろか？」

「しかし…流石ですね委員長さんは」

「…まーね」

あんな抽象的な説明で明日菜達を信用してくれる人物など、同年代では彼女くらいのものであろう。明日菜達は、その器の大きさに感謝するしかなかった。

「――――アスナさ――――ん！！」

「？」

振り返って声の主を捜すと、人混みの中を駆けてくる人影が目に付

いた。

「どうしたの夕映ちゃん、本屋ちゃん？」
「はぁっ――はっ……、はぁっ……ひっく…」
「へ？」

明日菜を見上げるのどかの目に、みるみるうちに涙が溜まっていく。

「ひぐっ……ふぇえええ――――――ん！！　アスナさん、私どうじだら〝――――！！」
「えええええっ！？　何よどうしたの本屋ちゃん！？　何があったの！？」
「ゆえ、どうしたん！？」
「…このかさん、それが……」

顔を青くしている夕映に木乃香が話を聞く。彼女はゆっくりと、震える唇を開いた。

「「「ええええ――――――ッ！？　バッジとられちゃった――――――――！！？」」」

……守れなかったようだ……

第８８話　私が…私達が…サンタムだ！　夏祭り後編

「ネギま部（仮）」改め「白き翼」、緊急招集・全員集合。
広大な神社の境内、その隅の方に全員が集まっている。

「ええっ師匠（マスター）からのテスト!?　そんなものがあったんですか!?」

顧問のネギと部外者の小太郎はバッジを持っていない。明日菜達から話を聞いてようやく事態を知る。のどか・夕映・古菲・ハルナが、部員の証である白い羽根のピンバッジを奪われた。

「……面目ないアル……」
「くっ…油断したわ…」

「そんな、まさか古老師（とハルナさん）までバッジをとられちゃうなんて……」

しょぼーん…と項垂れている古菲と、悔しそうに拳を握るハルナ。

ネギは驚くしかない。
古菲の強さは弟子である自分がよく知っている。
曰く「誰かが通り過ぎたと思ったらバッジがなくなっていた」という。傍ではのどかと夕映も揃って落ち込んでいる。

「しかしネギ先生…マスターの真意は私にはわかりかねます」

茶々丸が言いたいのは、エヴァンジェリンがどういう意味で「バッジを失くした者は退部」と言ったのかということ。つまり、一度バッジを奪われても、そのあと取り戻すことが出来れば退部にはならないのか。それともそうではないのかという事である。

「……わかりません。ですがバッジは取り返しましょう。たとえ一度奪われても、それを取り戻せる力があるという証明になります。その後は僕が師匠（マスター）に話をつけます。大丈夫、のどかさん達を退部になんてさせません」

「ネギせんせ――…」
「先生……」

「……あんたも言うよーになったじゃない」

そう言って、明日菜はネギに笑いかけた。

「よぉ――し！　それじゃあ犯人探しといきますか！！」
『オォ――――――――――――――！！』

千雨（ハァ、あんたのマスターも面倒なコトしてくれたな。私は

もう帰りたいんだが）
茶々丸（お褒めに与り光栄です）
　千雨（ていうかよ、誰とも知れない輩からもしバッジを取り戻せたとして、そのときアンタはマスターに何て言うんだ？）
茶々丸（……その時は、バッジは始めから奪われてなどいなかったというコトでしょう）
　千雨（…っとにロボらしくねえなアンタ）

やる気のない一部の人間を置き去りに、ネギ達の作戦会議が始まった。

明日菜「犯人は誰か。まずはバッジを奪う動機よね。やっぱイギリスに行きたがってるウチのクラスの誰か？」
小太郎「でもなアスナのねーちゃん、菲部長を出し抜くやなんてタダモンやないで？　んなヤツがこのメンバー以外でネギのクラスにおるんか？」
ネギ「そんな人いな――――」

言いかけてネギの頭に、「フフ…」と笑う巫女スナイパーの姿が浮かぶ。彼女はこんなことに関わらないであろうが、誰かから引き受けた”仕事”だというなら充分ありえる。

夕映「いえ先生。少なくとも、私とのどかからバッジを奪った人物は龍宮さんではありませんでした」

ネギ「!?　あ、相手を見たんですか夕映さん!?」

夕映「ハ、ハイ。というか堂々と現れてバッジを奪っていきました……。濃い赤色…真紅の浴衣を着た、浅黒い肌の、白い髪の男性です。顔はお面をつけていて見えませんでしたが…。身長は１９０ｃｍ近くありました」

明日菜「……そんな人、麻帆良にいる？」

刹那「少なくとも、私には心当たりは……（でも何かひっかかる…）」

木乃香「色黒の外人さんゆーたら、シャークティーさんとかココネちゃんとか、ガンドル先生くらいしか思い浮かばへんなー。あとはザジちゃん？」

のどか「な、なんか魔法使いさんが多いですね――…」

ハルナ「――――それだッ！！」

古菲「ど、どーしたアルかハルナ？」

ハルナ「フフフ……遂に私の見せ場が来たようね…。私の虹色の脳細胞が唯一つの事実を導き出したわッ！！　私のことは名探偵パル様とお呼びッ！！」

夕映「ポワロですか…しかし虹色は何処か混沌としているような気がしますよハルナ…」

ハルナ「夕映の言った特徴の人物……そんな目立つ外見の人に誰も心当たりがないなんて逆におかしいわ！　普段どこかで見かけていてもおかしくないでしょ！？」

テーマパークの様相を呈する麻帆良祭と違い、この夏祭りは学園関係者以外の人物はやって来ない。全くいないというわけではないだろうが、それでもその可能性はほとんどないだろう。

つまりハルナの言い分は、犯人は高確率で麻帆良の人間であり、夕映の証言通りの特徴を持っているなら誰かが学内で見かけたことくらいある筈だというもの。シャークティー、ココネ、ガンドルフィーニ、ザジ然り。特徴のあり過ぎる者は人の記憶によく残る。

ハルナ「――つまり今、犯人は変装している！」

ハルナは得意気に眼鏡をクイッとかけ直した。
「おお～～！！」と一同がパチパチと拍手を送る。

明日菜「…えっと、つまりどーゆーコト？」

ハルナ「つまり犯人は肌が黒くなくて、白髪じゃなくて、赤い浴衣を着てない人ってコトよ！！」

明日菜「……ってそんなの一杯いるじゃない――――！！」
ハルナ「げはぁっ！？」

明日菜のハリセンが炸裂した。

刹那「……振り出しに戻りましたね……」
木乃香「なんや刑事ドラマみたいやなー」

ネギ「……いえ。手掛かりはあります。運というか、賭けのようなものですが」

ＡＬＬ『え？』

一同が一斉にネギを見た。

ネギ「その人物がバッジ…それも、より多くのバッジを狙っていることは間違いありません。夕映さん達だけでなくハルナさん達からも奪っていったのがその証拠です。
つまり犯人は、ここにいる皆さんのバッジも狙って来る可能性があります！」

ネギの方がよっぽど名探偵（？）である。ハルナもある意味核心に触れてはいるのだが。

「……つまり、誰かが囮になって犯人をおびき出せば……」
「犯人が現れる…かも？」

『――――ああ、その必要はない』

ＡＬＬ『！！？』

上を見上げた彼女達は、境内の塀を飛び越える人物を視界に捉えた。

――――ザッ……！

ネギま部から数ｍ離れた場所へ着地する。浅黒い肌、色素が抜けたような白髪、赤い浴衣。そして赤い大佐のモビルスーツのようなお面を被った男性。

『私が……私達が…サンタムだ！！』

ネギ達は固まった。

◇――――◇――――◇

ネギま部（サ……サンタム……！？）

しかしサンタム（仮）の胸元に輝くものを見て、彼女達は硬直から我に返る。

「ああっアレは！」

「私達のバッジです――――！」

サンタムの浴衣には、奪った４つの白い羽根がついていた。

「クッ！　それは返して貰うアル！！」

「古老師！」

――――タタンッ！

独特のリズムを刻み、大陸版瞬動術・活歩によって一瞬で接近する！

『フム。その歳にしては中々の套路だが……まだ未熟だな』

「ッ！？」

クーの崩拳が、容易く掌で逸らされた。

（反応速度・体重移動・体のこなし――全てがとんでもなく速いアル！？）

『少女を殴るのは趣味ではない。だが――挑んできたのは君だ、眠れ』

――ゴッ！

「……っぐ…！！」

アゴ――人体急所のひとつ――に一撃。脳を揺さ振られ、古菲は呆気なく気絶した。

「ッくーふぇ！！」

「お嬢様ッ！？」

木乃香が治療の為に前へ飛び出し、それに刹那が遅れて反応する。

『戦えない者が前に出るなど話にならん。己の分を弁えろ。それと――守るのなら、常に気を配っておけ』

木乃香の横を風が通り抜けたと思えば――その胸に、バッジはなかった。

構わず木乃香は古菲の元へ駆け、サンタムは白き翼の後方に立っていた。

「……！！」

息を呑んだのはネギ・刹那・明日菜・小太郎・楓。

――違う。今まで戦ってきた誰とも違う。

自分達と彼の間に横たわる、圧倒的なまでの力の差――――――！

「くっ、アデアッ――」

『やめておけ神楽坂明日菜。後ろに参拝客がいるぞ？』

ここは神社の境内、そして今日は夏祭り。当然神社を訪れる人がいる。しかし――

「パルの推理はハズレだったみたいね！　他所者さん、麻帆良はね、大抵の騒ぎはどうにでもなるのよッ！！」

咸卦法を発動し、ハマノツルギ（ハリセンモード）を召喚して地面を踏み抜いた。

『！！』

明日菜が一瞬で接敵してみせる。そのスピードは予想外だったのか。サンタムは僅かに浮足立つも、振り下ろされたハリセンを危うげなく防御した。

『ただの一歩が瞬動並みか……まったく、デタラメだな君は』

「――――え？」

その言葉には、敵に向けるものではない感情が込められていた…ように思えた。

（…何だろうこの感じ。私、この人を知ってる――――？）

《明日菜さん離れてください！！》

（ッ！！）

「いけぇ狗神ッ！！」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！　『魔法の射手・戒めの風矢』！！」

――――ドドドドドドドドッ！！

念話の声に従い明日菜が飛び退いたと同時、ネギの魔法と小太郎の狗神がサンタムに降り注ぐ。そしてその後方で、刹那が印を組んでいた。

「人払いと認識阻害の結界を張りました。これで気兼ねなく戦えます」

敵は只者ではない。明日菜にＡＦの自重を促した点から見ても、間違いなく魔法を知る者だ。本気を出さねば勝てはしない。自分達も敵も、怪我は木乃香が治せる。
だから――本気で、思う存分に。

「やったの？　捕まった？」
「…いいえ、この程度で済んでくれたら儲けものです」

ネギに明日菜と小太郎が近づき、刹那・楓が他のメンバーを守るように立つ。のどかは「いどのえにっき」で読心を試みたが、やはり「サンタム」は偽名だったようで無駄に終わった。

土煙りが晴れる。
そこには当然のように、サンタムが腕を組んで立っていた。

『正体不明の敵を捕縛して情報を得ようとするのは解る。だが桜咲刹那。君は何故結界を張ったんだ？』

「……！？」

放たれるプレッシャー。それはまるで喉元に剣が添えられているかのよう。

そんなモノを放ちながら、攻撃ではなく言葉を放ってくる相手に疑念を抱く。そしてその内容も。彼は、一体何が言いたい――？

『――本気で戦う為だろう。私との実力差を感じ、君達は全力を出すべきと考えた。

ならばネギ・スプリングフィールド、犬上小太郎。君達はそんな相手を捕らえようなどと甘い事を、本気で考えていたのか？

――だとしたら浅はかだな。いや、実に子供らしい。思わず頬が緩んでしまうな』

「……っ！！」

「何やとコラァ…ッ！」

瘤に障るものはある。だがそれでも動けない。

突き刺さるような冷たい殺気が、ネギ達の足を強く地面に縫い付ける。

『そのような甘い考えでは容易く足元を掬われる。特に向こうではな。覚えておけ。新世界、夢の国、魔法の国……聞こえがいいのは名前だけだ。

「魔法世界（ムンドゥス・マギクス）」は。ともすれば旧世界（こちら）より危険な世界なのだと知るがいい』

「――やはり、あなたは魔法使い……！？　どうしてバッジを狙うんです！？あなたになんの意味があるんですか！！」

『これ以上の会話には意味がない。そして私は君達と戦うつもりも、その時間もない』

「――なんやて？」

「……御仁…戦うつもりがない、と言ったでござるか？」

『ああ。だから終わりにしよう――――――”■は■で出来ている”』

（――！？――始動キ――！？）

「皆さん！気をつけ――――」

『外界変造（アウターセット）・構造確定（ディフィニッション）。術式結界（オルビス・アドゥルテサーナロノス・オルガイ・ガタダトロフィー）「■■■■■」』

◇――――――――◇――――――――◇

屋台が並ぶ列の一角にある、客が腰を下ろせる長椅子。赤い敷布に日傘など、和の風情を感じさせるインテリア。そこに、人形のような金の長髪を持つ少女が1人で座っていた。

「……ヒマだ」

青い生地に向日葵の花が咲く浴衣、頭には白薔薇の花飾り。そんな装いのエヴァンジェリンが、足をパタつかせながら退屈そうに呟いた。（＊チャチャゼロは強制留守番）

「遅い。アイツは何をやってる……さっきから馬鹿な男どもが煩くて敵わん」

と言うものの、実態は「お嬢ちゃん、1人で来たのかい？」「お父さんやお母さんは？」などなど――見た目小学生の彼女を心配する親切な方々に声をかけられただけで、色気のある話ではなかったのだが。

口から溜め息が漏れる。だが不思議と、彼女はこの時間が苦ではなかった。

（……まあ、偶には待つというのも悪くない）

学園祭の時とは違う。1人であっても独りではない。
待ち人は必ず来ると、わかっているから。

（人助けを理由に約束を破ることがなくなったのは上出来だ。まぁ……遅れてくることはあるが。まだまだ要教育だな……クク…）

本人が聞いたら顔を青くしそうなことを考えながら。

（「約束」したからな――――）

エヴァンジェリンは心底楽しそうに、目尻を下げて頬を緩ませた。
雑踏の中から、待ち人がやってくるのが見える。

「――悪い、待ったか？」

息を切らせて彼女の前に立ち止まる、赤い浴衣に黒い帯の人物。
遅れてくるなら土産の一つでも持ってくればいいものを。
だがそれをしないのは、一刻も早く自分の元に駆けつけようとしてくれたからだ。
彼女は弾んだ気持ちを胸に仕舞い、努めて嫌味に聞こえるように口

を開いた。

「――――遅い」

ただその眼だけは。秘めた喜色を隠すことが出来なかった。
彼女も彼も、その事実には気づかなかった。

◇――――◇――――◇

「……あ、あれ？」

気がつけば何も無かったかのように、其処には誰もいなかった。

「……アホな、俺の狗神で足を捕まえとったハズやで…！？」
「…くっ…刹那、気の跡を辿れぬか？　なぜか気配が全く掴めぬ……」
「わかった、やってみよう」
「――――！？　ア、アスナさん……！」

「ん？　どーしたのよネギ？」

「……バ…バッジが……」

「……え？」

ネギに言われて、明日菜が自分の左胸を見る。

「……なっ…！？　ない…ない、ない！！　私のバッジが無い――――！！？」

「なっ…！？　そ、そんないつの間に……。　ッ！？　わ、私も――――！？」

「――――せ……拙者もやられたでござる……」

「んなぁっ！？　楓ねーちゃんと刹那まで！？」

「…おいおいマジかよ……あの人外集団を出し抜くってどれだけ……。魔法世界ってのはあんなのがごろごろいんのか？」

「いえ、あれほどの人物は稀です。ですが…２０年前の大戦を経験した猛者ならば、今の先生達を圧倒することは難しくないでしょう」

「……頭が痛てえ……」

「ど…どうしましょーアスナさん――――！！」

「わ、私に聞かないでよ！　てゆーかあんたさっきはあんな頼もし

いこと言ってたくせに――！　あああエヴァちゃんに嫌味言われる怒られる――――！！
　どーしよー刹那さ――――ん！！」
「えええぇ！？　わ、わ私に聞かれても――――――！？」

わたわたと騒がしく狼狽えるクラスメイトの声を聞きながら、千雨はこめかみを押さえて項垂れた。

・　・　・　・　・　・　・

「遅い」
「ご、ごめん」
「遅い」
「…すいませんでした」
「すごく待った」
「……申し訳ありませんでした」

士郎の頭の位置がどんどん低くなっていく。数秒後、恐る恐る顔を上げると。

「……お前なぁ……」

呆れた声が漏れる。必死に頭を下げる士郎を、エヴァがニヤニヤしながら眺めていた。

「何だ、女を待たせておいて文句を垂れるのかお前は。それでも我が従者か？」

「いや、カンケーなくないかソレ」

「大いにあるさ。まあなんだ、まずは座れ」

ぽんぽんと椅子を叩いて自分の隣に座るよう促す。士郎は反論を諦めてそれに従った。

『えッ！？　一等賞品がＰ５Ｐ！？　よっしやるぞー！』

『いやいや、祭りのクジ引きなんて当たらないようになってるに決まってるでしょー』

『何だ？何か欲しいおもちゃでもあるか？』

『パパー！これ買ってーー！』

『ええ～！？　今年は今川焼きのおじいちゃん来ないの？』

『もう歳だからね、諦めな』

――――――……ワイワイ……がやがや……

「……平和だな」

「ま、ここのところ厄介事が重なっていたからな」

吸血鬼事件、修学旅行、悪魔侵入事件、学園祭。思い返せば、波乱の半年間だった。

「ああ。こんな時間がなけりゃ、あの忙しさが嘘になるな」

両手を後ろについて上を見上げる。屋台の明かりの届かぬ空に、綺羅星が瞬いている。

「そして――その平和を自ら捨てようという馬鹿がいるというものだ」

一瞬で、士郎の表情が引き締まる。

「すまんな、無粋なことを言った。私もお前との祭りを楽しみたいところではあるんだがな……。――――――で、何人だ？」

神楽坂明日菜、近衛木乃香、桜咲刹那、宮崎のどか、綾瀬夕映、早乙女ハルナ、古菲、長瀬楓――――――計８名。

ネギま部（白き翼）の部員資格、剥奪。

第８８話　私が…私達が…サンタムだ！　夏祭り後編（後書き）

《おまけ》

その後。

士郎「お、エヴァ。綿飴あるぞ、食べるか？」
エヴァ「そんなガキっぽいものなぞ要らん」

士郎「あ。あっちにりんご飴が――」
エヴァ「それもいらん！」

士郎「はあ、じゃあ何なら食べるんだよ？」
エヴァ「いらんと言ってるだろうがッ！！　…わ、私は別に、お前と一緒に楽しめれば……それで…」
士郎「ん？　なんか言ったか？」
エヴァ「……ッ！！（赤面）　ええいこの朴念仁！！！」

――――げしっ！！（士郎の脛を蹴る音）

士郎「ッＮｏォォオオ――――――！？」

それは鈍感。或いは愚鈍。その名は野暮天。彼の名は衛宮士郎。
（同義語：遠野志ｋ……おや、誰か来たようｄ）

～補足・解説～

：広大な神社の境内、その隅の方に全員が集まっている。
神社の境内で騒いでいるのに、なぜ龍宮さんは出てこないのか？
それはし…サンタムが彼女を買収しているからです。だから騒ぎを黙認したうえ助けに来ない。
しかしサンタム…彼はいったい何者なんだ……？

：「ポワロですか…しかし虹色は何処か混沌としているような気がしますよハルナ…」
アガサ・クリスティーの推理小説に登場する探偵、エルキュール・ポワロの口癖。「私の灰色の小さな脳細胞が活動を始めた」。

：ネギま部から数m離れた場所へ着地する。浅黒い肌、色素が抜けたような白髪、赤い浴衣。そして赤い大佐のモビルスーツのようなお面を被った男性。
：『私が……私達が…サンタムだ！！』
楽しませて…もとい、ふざけさせて頂きましたw
ちなみに彼がつけているお面。それはシャア専用ザクでもシャア専用ゲルググでもない。
――――キャスバル専用ガンダムです！！（キャスバル＝シャアの本名）

：『フム。その歳にしては中々の套路だが……まだ未熟だな』
型の熟練度や経験は充分なんだけれど、いかんせん”気”の扱いをまだ自覚したばかりなので、今はまだこの程度の実力だろうと思います。

：『ただの一歩が瞬動並みか……まったく、デタラメだな君は』
古菲とは逆に、こっちは着実に修行の成果が出ている模様。

：術式結界（オルビス・アドゥルテリーナ）
あんまり引っ張り過ぎてもあれかなーと思い、ちょっとだけカミングアウト。「オルビス・アドゥルテリーナ」＝ラテン語で「世界の偽造」。ぶっちゃけ術式兵装の親戚。
原作で「術式兵装」のルビが「プロ・アルマティオーネ」からいつの間にか「アルマティオーネ」になったように、こちらもそのうち「術式結界（アドゥルテリーナ）」にしたいと思ってます。

：「オ・クロノス・イーナイ・カタストロフィー・アルガー・バンダ」
雷天大壮が「ヘー・アストラペー・ヒューペル・ウーラヌー・メガ・デュナメネー」なので、この名前が長いとは思いません。
この魔法名は「時間は一切のものをゆっくりと破壊する」という、ジュベールという人の格言をギリシャ語にしたものです。このギリシャ語は正確には「時間が全てのものをゆっくりと破壊している」という意味ですが。
断っておきますがザ・ワールドじゃありません。どちらかと言うとクロックアッ…げふんげふん。

：青い生地に向日葵の花が咲く浴衣、頭には白薔薇の花飾り。
ベッタベタな浴衣チョイスですが、何かこれが一番よさそうだったんで。
最初は黒い布地にオレンジのガーベラで、エヴァの金髪がよく映えると思ったんですが、何か暗いなぁと思って止めました。
ベタっていうのは王道ってことなんですよね。ちなみにこの浴衣セレクトは前話あとがきの3人によるものという設定です。普段のエヴァは青色の服とか自分から着なさそうですし。

：（「約束」したからな――――――）
学園祭の出来事を経て。ふたりが交わす「約束」に、今までにな

い重み（今まで以上の信頼）が生まれたのだということを描写したかった。このシーン、上手く描けたかなあ。

：「――――――で、何人だ？」

エヴァ様公認の試練でした。さあ、どうなるネギま部！？

……満足や……。この夏祭り2話で士郎×刹那（&木乃香）、士郎×エヴァが書けた……

もう、いつ夏休み編が終わってもいいや……。

え、魔法世界行き許可試験？　海水浴編？　アーニャ？

……別にいらなくない？（笑）

ていうかアーニャとはウェールズで合流する流れで問題ないと思う（なげやり）。

……あ、「それぞれの夏休み　そのに。」を書かないとロリ真名・ロリ楓が出せない。

これは問題だな……。

まあ、やる気が出たら書きます（↑遅い五月病？）。

それでは次回。

……と、まだ言う事があったんだ。

私の通っている大学は8月の2週目から夏休みです。

そして夏休みに入ったら……！　再び改訂版に取り組もうと思います！

それでは次回！

第８９話　それぞれの夏休み　そのに。（前書き）

お久しぶりです、佐藤Ｓです。

活動報告では「今回は設定話を投稿する」と言っていたんですが…
…やらかしてしまいまして、うっかり削除してしまったため、急遽
８９話を投稿することに。

８９話は９０・９１話と一緒に３話同時投稿するつもりだったのに
……はぁ。

あと、今話のオチはほとんどの読者様が途中でわかっちゃうと思い
ますが、どうか最後までご覧ください。

ついでに宣伝を。
「ネギま！―剣製の凱歌―」改訂版、「ネギま！剣製の凱歌・新編」
を投稿しました。
どうぞそちらもご覧ください。

それでは第８９話、どうぞ。

第89話　それぞれの夏休み　そのに。

ネギま部の合宿旅行で海にやって来たネギ一行。この日だけは修行を忘れて楽しく遊んでいた最中――それは突然やってきた。
燃える火の玉がネギと明日菜に向けて飛来し、着弾した海から水飛沫と水蒸気が立ち込めた。

「な、何よ今のは、敵!?　アデアット!」
「い・いえ…今のはまさか」

「フ…今のをよく避けたわ。相変わらず魔法戦闘の修行だけはやってるみたいだけど…
チビでボケボケなところも相変わらずね!!　ネギ!!」

「ア――ニャ――――!?」
「えええっ!?アーニャって…（あー!ネギの幼馴染みのおしゃまな女の子!）」

サイドを結えたツインテールと背中まで伸びる赤い長髪。
その姿は間違いなく、ネギの一つ年上の幼馴染みである少女――アーニャだった。

中々ウェールズに帰って来ないネギに業を煮やしたアーニャが、彼を連れて帰るべくはるばるブリテンからジパングまでやってきたのだ。「ネカネが淋しがっているから」という理由を免罪符に、アー

ニャはネギを無理矢理連れ帰ろうとするのだが。

「とにかく帰るわよッ！」
「ちょちょ、アーニャ！」
「アーニャちゃん何でそんな急いで帰ろーとするん？
んー…もしかしてアーニャちゃん、ネギ君のこと好きなん？」
「は…はぁあぁっ！？なっ…なな何よソレこのか！？何でそうなるの！？
私はネカネお姉ちゃんが淋しがってるからわざわざ……！」

――トゥルルルル・・・ピッ

「あ、どーもー日本のこのかですーネカネさん。ええ先日兄が、ハイ」
「え」
「ハイ、ネギ君の帰郷――ええ12日に。ええ　ハイ、スミマセン。ども、おーきにー。
（ピッ。）12日でOKやて。良かったなーあわてて帰らんでも大丈夫やえ♪」
「な〃。ち…ちがっそーゆーことじゃ…」
「あら？まだ帰りたいん？」

「まあ確かにこんな女の子でいっぱいの所にネギ君置いてたら…気が気やないもんなー
アーニャちゃん？」

「なっ…ち……違ッ、――ち……違うわよぉおお――――――――！！」

「あ」
「逃げた」
「これでしばらく大丈夫や。かわええなーあの子♪」
「て、手際いいわねこのか」
「素晴らしい危機対応能力ですお嬢様」

こうして結局、アーニャは8月12日まで大人しく麻帆良に滞在することになったのだが、まーいろいろあって（↑説明メンドくさくなった）彼女も魔法世界へ同行することとなり、「白き翼」はまたそのメンバーを増やしたのだった。

第89話　それぞれの夏休み　そのに。

「はい、確かにハンコ頂きました。それでは失礼しまーす」

ガチャ…バタン。

閉じられた玄関ドアの前で、待ち望んだモノの到着に彼女は静かに歓喜した。

ハッと我に返ると温めていた計画を実行すべく、その長く艶やかな黒髪を揺らして寮部屋の奥に踵を返す。彼女がタンスの奥から引っ張り出したのは小学生が着るような小さな服。長身で所謂スタイル抜群の彼女には当然着ることの出来ないもの。

そして届いた包みを開いて怪しげな瓶を取り出すと、中からこれまた怪しげな丸薬を取り出して手に取った。

――――遂にやってきた雪辱戦。あの日の屈辱を晴らすときだ――――――!!

口を開けて、彼女は丸薬を飲みこんだ。

◇――――――――――◇――――――――――◇

「ネギ君の所にウェールズから彼の友人が来とる筈なんじゃが、どうじゃ？」

――ぱちっ。

学園長室の応接用テーブルを挟んで、近右衛門が白の碁石を打つ。

――バチッ。

「ああ、アンナ・ユーリエウナ・ココロウァか。ぼーやの幼馴染みらしいからな、軽く脅かしてやったら面白いくらい飛び上がって逃げていったぞ？『食べられるぅぅぅぅ！！！』だとさ！アハハハハ！！

　クク……15年のブランクも、私の悪名を衰えさせることは出来ないというコトだな♪」

エヴァンジェリンが黒の碁石を打ち返す。

――パチン。

「意地が悪いのう。若い者で遊ぶのも程々にの。……して、その娘も行くのか？」

ばちんっ！

「当然だろう。あのデコボコパーティはもはやぼーやの女どもの集まりだ。ぼーやと仮契約している女が何人いるか教えてやろうか？」

……ぱちん。

「……出立はいつじゃったかのぅ？」

「逃げるなオイ教育者。自分の所の教師と生徒の関係を正しく知っ

ておいた方がいいと私は思うがな？　そら、王手だ」

――バチッ！

「むぅッ！？……むむむ……ま、まだじゃいッ！！」

――バチン！

「ほう？今日は粘るな。――ならば完膚無きまでに叩き潰してやろう……！」

「ぬ、ぬぅぅ…！　し、士郎、茶をくれい…！」

――ドンッ！！

碁石が浮く程の衝撃。思わず2人の動きが停まる。テーブルに、冷たい麦茶の入ったコップが置かれた。

「……ドウゾ、ガクエンチョウセンセイ」

青筋を浮き上がらせた顔で、士郎がニッコリ笑ってお茶を差し出した。

――ピキ……

「あ、あの……コップに罅が入っ…。いや、なんでもないぞい」

文句を言おうとした途端射るような視線を向けられ、心の中で両手を挙げる。

士郎はそのまま離れた場所に立つ茶々丸′（チャチャマルダッシュ）の隣に戻っていった。ちなみに彼女は、ハカセの下で調整中の茶々丸の代わりにやってきたロボである。

（何じゃい、あんなに怒らんでもいいじゃろうて……可愛い子には旅をと言うじゃろ……）↑念話

ネギま部の活動内容を知って尚クラブを公認しただけでなく、魔法世界行きの手配にまで関わった近右衛門に、士郎は腹を立てていた。

（そうだな、貴様と士郎を足して2で割ったら丁度いいのではないか？　私個人としては異論はないが、生徒を預かる身として貴様は些か無茶が過ぎるからな。士郎も士郎で甘過ぎる）↑念話

同じく士郎を刺激したくないエヴァも念話で話す。怒った士郎は怖いのだ。

（そういえば…部員資格がどうとか言っておったの？）

――――パチンッ。

（ああその話か…茶々丸と長谷川千雨、朝倉和美以外は全滅だ。アイツら翌日別荘に来た時はビクビクしていたよ。面倒だったからバッジ（そのツ）の話には触れずに修行を続けようと思ったんだが）

『そ、その……ゴッゴメンエヴァちゃん！　バッジ取られちゃった！面目ない！！』

（明日菜の馬鹿が馬鹿正直に白状してきたよ。おっと2回も馬鹿と言ってしまった…まぁ事実だし構わんか）

――――パチン！

（ふぉふぉふぉ、あの子はそういう子じゃよ）

エヴァが呆れたように声を漏らし、近右衛門が顎鬚を擦って笑った。

（全く…せっかく人がスルーしてやったというのにな。で、だ。その後は「対応は考えてある」と言ってテキトーにあしらった。実際嘘はついてない。今の奴らは仮部員といったところだ。
だが奴ら、お陰で前より真剣に修行に打ち込んでいるよ。怪我の功名だな）

（――――では、どうかの？）

豊かな眉毛に隠れている、近右衛門の眼が鋭く光った。

（問題ないだろう。このままいけばそこそこの強さにはなる。本物とでも戦り合わん限りはどんな危険にも対処できるだろうさ）

（……フォフォフォ。それは何よりじゃ。じゃがどんな小さなものであろうと…あの子らに危険が降りかからんことを願いたいものじゃのう）

――――ぱちんっ

（はっ。送り出す張本人が、どの口で何を言う）

「悪いエヴァ。そろそろ時間だ、俺はこの辺りで行くよ」

腕の時計に目をやって、士郎がそう切り出した。

「そうかわかった。行って来い」

「じゃあな茶々丸　、後は頼むぞ」

「いってらっしゃいませ」

――――ガチャ…バタン。

「――――――。」

士郎が部屋を出てすぐ、エヴァがソファから立ち上がった。

◇――――――◇――――――◇

「まったく…ホントどーなってるのよこの街は～」

もはや驚きを通り越して呆れたような声を出して、アンナ・ユーリエウナ・ココロウァ――アーニャが溜め息を吐いた。

「アーニャさんが見つけただけで６つですか……」

「お、多いね――…」

いくつか騒動を経てアーニャと友人になった夕映とのどか。２人はアーニャに麻帆良を案内しようと連れ添って街へ繰り出したのだが。

「流石は魔法使いが創った街ってコト？　パッと見フツーのお店なのに「実は魔法のお店です」ってパターン多過ぎよ！」

アーニャは両手を振り上げていきり立った。

ちなみに以前、士郎と真名がデートした際にはなんと銃器を扱う店が存在した。ちなみにそこは真名とガンドルフィーニ御用達の店だったりする。

「気になっちゃってせっかく来たのにあんまり楽しめなかったなー。……あの水晶中々の掘り出し物だったわね……貯金崩して買っちゃおうかしら」

「あはは、アーニャちゃん。また３人で一緒に遊びに来ようよ――…♪」

「私もマジックアイテムには興味があります……む？　アレは…」

「？　どうしたのユエ」

訝しげに街中の一点を見つめる夕映。２人が彼女の視線を追ってみると――

「あ、四葉さんだ――…」
「誰それ？」
「私達のクラスメイトです。同じネギ先生のクラスの生徒ですね。彼女は料理が得意でして、腕前は実際に屋台を回せるほど――――ではなくてですね２人とも。その後ろの右です、右」
「「右？」」

「フフフフ……超さんの下で同じ釜の飯を食べた仲としては、やはり気になりますよねぇ～？」
「あの…ハカセ？　これはいいのでしょうか？」
躊躇いがちな茶々丸を従えて、建物の陰から顔だけを出して通りを窺う白衣の人物。

「なに言ってるの、茶々丸だって気になるでしょ！　ちゃんとアイカメラ回し続けてね！　あ、マップと照らし合わせて次の行動予測パターンの分析も忘れずに…」
「何をやってるですかハカセ」
「――――うひゃっ！？」

背後から声をかけられて、葉加瀬が素っ頓狂な声を出して飛び上がった。

（いいから隠れてっ！）
（（（！！？））））

―……？―

五月が一瞬後ろを振り返ったが、何事もないようにしてまた歩き始めた。

「……ふぅ、危なかったです」

「あ、あの、ハカセ」

無理やり路地裏に押し込められた夕映・のどか・アーニャが窮屈そうに顔を顰める。

そして夕映の疑問を察した茶々丸が口を開いた。

「私がご説明します夕映さん。…その、実は……」

「「えええぇぇぇぇ！？　四葉さんに彼氏ができた――――――――！！？」」

◇――――――――――◇――――――――――◇

そんな色恋沙汰が起こっている街の中を、士郎が所在なさ気にぶらついていた。
相手の都合が悪くなり予定が変わってしまったのだ。

（まあ無理言ってるのは俺の方だしな。時間を作ってもらえるだけでもありがたい。
予定は狂ったが…たまにはこんなのもいいだろう）

家や学園長室に戻るのも億劫で、士郎は久しぶりに麻帆良の街を散策することにする。そんな手持無沙汰になった彼が、何気なく街を眺めて歩いていると。

「……ん？」

何やら微笑ましい光景が飛び込んできて――激しい眩暈に襲われた。

腰まで伸びる黒髪の小学生くらいの女の子が、腕を組んで映画館を睨んでいる。真剣な表情でじっと受付を見つめるその姿は、少女の可憐さと相まって周囲の心を和ませる。

――誰が知ろう。その少女が胸に秘めた、熱き闘志と強い決意を――――！

（――何やってんだアイツァ……恐ろしく嫌な予感しかしないぞ…！）

士郎は地面に両手両膝をついて項垂れた。

花飾りがついたつばの広い帽子。半袖ミニスカートの黒いワンピースドレスを纏った――彼女こそ。

何を隠そう…年齢詐称薬によって幼女へと変じた龍宮真名その人だった。

彼女は意を決して受付のおばちゃんへ歩を進めた。

胸が大きくて羨ましい。背が高くて格好いい。美人。美女。そんな風に言われてきた。

だが実際はそんないいものではない。

クラスメイトには老け顔などと言われ、周囲からはいつも年相応に扱ってもらえない。

決定的だったのはあの日の敗北。

なぜ、何故！　正真正銘中学生である自分が大人料金を支払わなければならないのか！

（今日こそ、今こそ――私はこの、呪われた運命を打倒する！！）

「――小学生一枚！」
「はい７００円ね」

仇敵とも呼ぶべき受付のおばちゃんの慧眼を騙しきり――3枚の硬貨を対価に、彼女は夢のチケットを見事手中にもぎ取った……！

「毎度ーお嬢ちゃん」
「フ……」

受付ゲートを過ぎたのちに帽子を脱ぐ。ロリ真名は必死に平静を保ちながら胸の中でほくそ笑んだ。

（勝った……流石は一粒２０００円の年齢詐称薬よ……）

「フフフ……」

「ハ――ハッハッハッ！！！」

彼女は今、運命に打ち克ったのだ――――！！

（ハ……？）

――一粒、２０００円……？

～ロリ真名ちゃんのよいこのさんすう☆～
：通常時
大人一枚＝１８００円

：変装時
子供一枚（７００円）＋年齢詐称薬（２０００円）＝２７００円

Q、どっちがお金がかかるかな？
こたえ：変装時

（――――勝ってないぞ！？）

いま気づいた驚愕の事実に、彼女は口をあんぐりと開けて衝撃を受けていた。

『フフフ無様でござるな真名』

「（ビクッ！）何！？」

まさか、今の私を一目で「龍宮真名」と見抜くとは！？　失態を見られた真名が顔を赤くして声の主に振り返る。

「戦場ならば致命のミスでござるよ。ニンニン♪」
「楓！！！」

セーラー服のような襟とリボンがついた、真名と同じ半袖ミニスカートのゆったりとした白ワンピース、そして黒タイツを履いた――ちっちゃい楓が真名の後ろからやって来た。その手には真名と同じ７００円の映画券が握られている。

「ちなみに拙者の姿（コレ）は身体操術に忍術を併用した自前の変化で経費０円でござる♪」

「喧嘩を売りたいようだな貴様」

経費０円を強調してピラピラとチケットを見せびらかすロリ楓に、ロリ真名が顔を赤くしたまま食ってかかる。

「いいだろういつぞやの決着ここで着けるか」

「いつでも受けて立つでござるよ？」

小さくなっても力は健在。体は子供、頭脳は大人！　２人の幼女は拳銃とクナイ、互いの得物を取り出して構え（何処から出した、とかそういうツッコミはもういい加減疲れた）、鋭い視線で敵を射ぬく。

２人の体から魔力と気が迸る。

周囲の大気は鳴動し、彼女達を中心にして旋風が舞い上がる――！

“――いざ尋常に！！”

“今日が貴様の命日だ！！”

「ハイハーイお嬢ちゃん達。仲良く見れないなら放り出すよー」

ふたりは一瞬で固まった。
宿敵である彼女のことはよく知っている。いつもつぶらな瞳で笑顔を絶やさぬ受付のおばちゃん、いま彼女の顔に――――青筋が浮いていた。

（（マズイ／でござる……本気だ。選択を一つでも誤まれば殺られる！！））

殺られる×　退場させられる○

大気に満ちるおばちゃんの怒気に幼女たちが戦慄する。滝のような冷や汗を背中に流して絶望に打ちひしがれたその時――――

「あー、スイマセンお騒がせして。ホラお前ら落ち着け、周りに迷惑かけるなよ」

2人の幼女は、聞き慣れた声に思わず振り仰いだ。

「士郎さん／士郎殿！」

「おや士郎君じゃないか。そうかいこのお嬢ちゃん達はあんたの連れかい、大変だねぇ」
「……ええ、本当に……」

士郎が乾いた笑いを浮かべながら受付ゲートをくぐって来た。

「映画観に来たんだろ？　早くしないと上映始まっちゃうぞ」

2人の頭をくしゃっと撫でながら士郎が微笑んだ。照れくさそうにして2人は俯き、すっかり毒気を抜かれてしまう。彼に免じて大人しく映画観賞することにしよう。

ロリ真名が士郎の袖をぎゅっと握った。

「士郎さん、折角だから一緒に見ないか？」

「まあ時間も余ってるし別にいいけど…そういや2人は何を見るんだ？」

「ＲＥＤ　ＳＨＡＤＯＷ　○影♪」（漫画原作アクション映画）

「パール・○ーバー」（恋愛映画）

「……楓、一緒に観ようか」

「んー♪」

真名（ガーン！）

士郎（ゴメン、恋愛映画はちょっと……）

そんなやりとりを遠巻きに見つめる二対の瞳に、士郎達は気づかなかった。

◇――――――――――◇――――――――――◇

「「「お……。お…」」」

…とて……とて……

「「「…お。……お」」」

彼女が拙い足取りで一歩一歩踏み出す度に、ネギとカモ・明日菜はつい声をあげてしまう。
テーブルの上で、デフォルメされたデザインの相坂さよ人形が歩いていた。

――――ぽてっ！

転んだ。が――実験としては充分な成果だった。

「「「おお～～～！！」」」
「スゴ――――イさよちゃん！　かわいい――――！」
『えへへ♪』

人形の中から照れながらさよが出てきた。それを見て朝倉が得意気に口を開く。

「地縛例のさよちゃんを何とか学外に連れ出せないかと、エヴァちゃんやらに聞いて果ては青森の恐山まで行って入手してきたアイテムなんだよ」

地縛霊ではあるが寄り代さえあれば遠くへ行けるという、さよの性質を鑑みて用意されたスペシャルアイテム・「さよちゃん人形」のお披露目会が行われていた。

「さよちゃんにも外の世界を見せてあげたくってさー」

『朝倉さん……！（じ～ん…）』

「へ――――」

「友情だねえ」

「ちなみに中身はワラ人形なんだけどね（ゴソッ…）」

『ひぃっ！？』

「コワッ！」

さよちゃん人形の背中から――ズルリと、藁人形が現れた……。

カモ（霊験あらたかだなー…）

ネギとカモは東洋の神秘を見た気がした。

◇――――――――――◇――――――――――◇

怪しい5人組と化した葉加瀬・茶々丸・のどか・夕映・アーニャが、学園から出て行く五月の後をつけて歩く。

葉加瀬（フフフ……彼氏かは未だ不明ですが、男性の影は見えてきましたね！）

学園の調理室でなされた、料理研究会の会話（もちろん盗聴）。

『あの！　四葉部長って彼氏がいるんですか!?』

――ええ!?　そ、そんな人いないよ……―

『でもでも、超包子の屋台で最近男の人とよく一緒にいるって聞きましたよ!』

―いや、その人はそういうんじゃなくて…一緒にお料理して勉強してるだけで…―

『キャーッ♪　一緒に料理をするんですか――イイな――♪』

夕映（何でしょう……もうオチが読めてしまったような気が……）

「どう思います？　のどか」

「四葉さんの彼氏かあ……どんな人なんだろ――…」

「むぅ…やっぱ胃袋を掴むのも一つの手なのかしら……」

「夕映さん、私達2人以外は気づいていないようです」

溜め息をつく夕映の肩を、茶々丸が叩いて励ました。

（――――――。）

「ど、どうしたですか茶々丸さん？」

「…レーダーに私と同系機の反応があります。それも近くに」

「おッ！？　キタ――――ッ！？」

葉加瀬が下卑た笑いを浮かべて興奮した。彼女の目線の先には、身長の高い男性が五月と合流して一緒に歩き始める光景。そして。

「……何…？今度は五月だと……！？　古菲…龍宮真名、長瀬楓…あのいけ好かないシスターと来て次は五月……ええいアイツは……！！」

「――――何をしてらっしゃるのですかマスター」

「うおうッ！！？（びくうっ！）」

「こんにちわお姉様」

コソコソと怪しく動く、金の少女とロボ娘に遭遇した。

「あれー？　何で茶々丸、とエヴァンジェリンさんが？」

「ということは四葉さんの彼氏というのはやはり…」

「予想通りです」

・・・・・・・

学園祭以来、常時営業となった超包子が見える場所に7人が集まる。

眼を凝らして見ると、屋台の中には笑う五月と、真剣な表情の士郎が手を動かしていた。

「五月ちゃんの隣にいるのは士郎さん？」

「料理の勉強会だと？」

茶々丸の言葉に、葉加瀬とエヴァが素っ頓狂な声をあげた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜

————ガチャ…バタン。

『さて、今日の勝負は貴様の勝ちということにしてやろう。行くぞ茶々丸’　』

士郎が部屋を出てすぐ、エヴァがソファから立ち上がった。

『む？　どうかしたかの？』

『ふふふ。何のために、今日に限って士郎をここに連れてきたと思っている。

————後をつけるぞ茶々丸’　!!』

『イエス、マスター』

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜

店を閉めている筈の士郎が毎日何処かへ出かけている。気になったエヴァは茶々丸’　伴って士郎を一日中尾行していたのだ。

「はい、士郎さんは料理の勉強がしたいと仰って五月に師事してい

るようでした」
「なーんだ、付き合ってるとかそーゆーことじゃなかったんだー」
あははは、と狂科学少女は笑い、吸血姫はだらしなく口を開けた。
「気になさっていたのなら直接訊けばよかったのでは？」
「ぐ…んなもん訊けるか！　わ、私がいちいちアイツの行動を気にしているなどと勘違いされたくないからな！！」
ＡＬＬ（ツンデレ……）
茶々丸（こういう時こそ主人権限を振りかざすべきでは……）
「大体それくらいのこと隠さずともいいだろう！勘ぐっても仕方ないではないか！」
「男には意地や見栄があるそうです」
基本的に何事にも無頓着、しかし料理には人一倍こだわる男。それが衛宮士郎。
でも実は…この世界で士郎が見栄を張る相手はエヴァだけだったりする。
「あーあ、午後は尾行で終わっちゃったね茶々丸ー。新ボディの性能実験もするつもりだったのに」
葉加瀬の言うとおり、麻帆良の街はオレンジ一色に染まり始めていた。
「お腹空きませんか皆さん？　せっかくだからあそこで食べていきましょう！
おーい五月ちゃーん！！」

超包子の調理場に立つ五月と士郎に声をかける。

一行はそのまま2人の料理に舌鼓を打ち、夏の太陽は沈んでいった。

《おまけ》

賑やかに食事をする7人。絶品中華を箸でつつきながら未だ愚痴を零すエヴァの言葉に、ポツリとアーニャが呟いた。

「そうね、シロウはたまに意地張るときがあるのよねー。ネギといい、男の子ってみんなそうなのかしら」

――ピクッ。

「アンナ・ユーリエウナ・ココロウァ。貴様士郎を知っていたのか？」

「（ビクッ！？）そ、そうよ？　だって士郎は昔ウェールズにいたし」

「……そうか…」

「？？　な、なに？」

「――アンナ・ユーリエウナ・ココロウァ。麻帆良（こちら）に来てからのぼーやの話を聞きたくはないか？」

――ピクッ！

「その代わり…ウェールズに居た頃の士郎の話を聞かせて貰おう」

「交換条件ってワケね…いいわ。その話乗ったッ！」

――ガシィッ！！

2人は熱く握手を交わしたのだった。

（――ぞくっ！）

―どうかしましたか士郎さん？―

「い、いや、なんか寒気が……」

その頃、木乃香たちの寮部屋。

「もーすぐ晩ゴハンできるからなー♪　ん？ネギ君どしたん？」

「い、いや、なんか寒気が……」

「…刹那さんどうしたの？　なんかすごく怖いカオしてるけど」

「い、いえ…何と言いますか、私は今、どこかへ行くべきような気がして……」

こんなカンジで麻帆良の日は暮れていく。

第８９話　それぞれの夏休み　そのに。（後書き）

～補足・解説～

‥アーニャ
　ほんとはもうちょっと文章を割いてギャグとか入れる予定だったんですが、ちゃっちゃと紹介を終わらせた方がいいかなと思ってやめました。

‥ククク……１５年のブランクも、私の悪名を衰えさせることは出来ないというコトだな♪
　６００年かけて築き上げられた悪名がたった１５年で消えるはずねーだろって話。もはやナマハゲ…伝承クラスですからね。

‥その後は「対応は考えてある」と言ってテキトーにあしらった。実際嘘はついてない。
　次回、ようやく士郎による試験が始まる……はず！

‥そら、王手だ」
　※読者様からご指摘を受けたので解説を。
　囲碁には「王手」というルールがないので、「王手ってこれは囲碁か将棋かどっちだよ？」というカンジの質問でした。
　――ぶっちゃけ知らなかった！！ｏｒｚ
　しかしこの描写はいわゆるエヴァの「勝利宣言のようなもの」なので、ルール的な問題ではないのです――というのが作者の弁。
　つまり今話における「王手だ」＝「どうだ、これで私の勝ちだろう！」という、囲碁のルールとは関係のない発言だと思って頂ければ。

：照れくさそうにして2人は俯き、すっかり毒気を抜かれてしまう。
：「……楓、一緒に観ようか」
：「んー♪」
楓にまでフラグを建てる気はないです。まあ彼女が士郎にデレたとしても、頼りになる兄貴分って感じですかね。

：さよちゃん人形
外装はメイドバイ士郎。主夫は裁縫も上手いのです。

：夕映（何でしょう……もうオチが読めてしまったような気が……）
もっと早くから気づいた読者様が大勢いらっしゃったことでしょうw

：「……何…？今度は五月だと……！？　古菲…龍宮真名、長瀬楓…あのいけ好かないシスターと来て次は五月……ええいアイツは……！！」

◎士郎の行動補足

・学園長室を出た後、超包子を訪れる。だが五月は料理研究会に行っていて「夕方頃にまた来てほしい」という伝言を古菲から伝えられた。
←
・散歩中、ロリ真名&ロリ楓に遭遇し、一緒に映画を見る。
←
・成り行きでシャークティーの教会の掃除を手伝う。
←
・五月と合流する。

会ってるの女性ばっかりだな士郎！！

：「い、いえ…何と言いますか、私は今、どこかへ行くべきような気がして……」
　従え！　その予感に従うんだ刹那ァァアッ！！

……なんか本編よりあとがきの方が書いてて面白かったな今回。

次回…次回こそ、士郎ｖｓ白き翼を書く……はずだと信じたい。

＊＊＊

……断っておきますが、「ネギま！―剣製の凱歌―」が一話しか更新しないのは改訂版に労力を割いていたからではないです。

改訂版はだいぶ以前から書き始めていたのでほとんど完成状態でした。

ノーマル剣製の凱歌は……次話が面倒な内容なので書くのが億劫になっているだけです……。
ごめんなさい。

＊＊＊

今月中に、私の今後の活動についてご報告をすることになると思います。
その時までは、今まで通り「剣製の凱歌」をよろしくお願いします。

それでは次回。

※重要なお知らせ※

今話は礼儀と誠意を込めて文章を書くべきなのだと思いますが、私こと佐藤Cの、ありのままの本音をお伝えしたいと考え、若干砕けた文章が含まれる場合があると思います。
何卒ご容赦を。

以前私は、「今月中に、私のこれからの活動についてご説明させていただく」と言いました。

結論を言いますと、佐藤Cは無期限の活動休止――小説の更新を凍結します。

理由と致しましては――あまり多くを語りたくはないのですけれど、新学期が始まって早々、今年は進級できない――大学で留年が決定したためです。
「もうどんなに頑張っても単位が足りない」ことが、学期開始時の時間割確認で判明しました。

本音を言うならば「だったらもう頑張る意味ないじゃん、バンバン小説書こうぜ」と行きたいところなのですが、留年すると怖いのが両親（私の場合は特に母親）でして、せめて良い成績をとらなくてはならないのです。

以上、私の一身上の都合によりまして、これよりは作品の更新を停止して学業に専念させていただきたいと思います。

せめてキリのいい所まで書き上げたかったのですが上手くいかず、夏休み編をラスト2話ほど残して活動休止という非常に残念な結果になってしまったこと、

また最近の更新停滞など、皆様にご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。

とはいえ、ストレスが溜まれば小説は書くと思いますし、冬休みや正月休みなどには「もしかしたら」更新することがあるかもしれませんが――お約束できないというのが現状です。

ただ、1年留年することでだいぶ単位取得に余裕ができますので、来年度には活動を再開したいと思っています。

その時まで待ってくださる読者様がいらっしゃるならば、これほど嬉しい事はありません。

また逢える日を楽しみにしております。「剣製の凱歌」を書き始めて早一年と二ヶ月。

本当に、応援ありがとうございました。

――Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ａｇａｉｎ！　ｂｙ佐藤Ｃ

お別れを言った直後にコンニチワ、佐藤Ｃです。

第９０話の更新よりだいぶ間が空いてしまっているので、お詫びと言いますか、サービスと言いますか、また更新停止かよとお思いの方々のためと言いますか……。

以下に、佐藤Ｃのユーザページに保存されているメモ文章を載せたいと思います。

※ぶっちゃけネタバレが含まれます。
※現時点（２０１１年９月現在）で未コミックス化の原作描写も一部含まれております。

「ネタバレ？　いーよいーよ全然いいよばっちこーい！！」という方のみ下の方へスクロールをお願いします。

ネタバレが嫌いな皆様は……ごめんなさい。そういった方々のためにポンと新しい話や番外編が書けるのなら私はとっくに９１話を投稿しておりますしくしく……。

（後先を考えない、妄想垂れ流しのような小説なら片手間で書けるんですけどね……）

……それでは、どうぞ。←

← ← ←

◇――――――◇――――――◇

人の為の善、と書いて偽善。

誰かのために善行を為す。誰かのために。何かのために。即ち利益を求める行為。
善意の先に何かを求めている時点で、その善は紛い物だ。

自分のしていること、自分のしたいことが、自然と正しい行いになっている者。
それこそが真に善を敷く者。

決して善行を為すことが。見返りも求めずにただ目の前の人間を助けることが。
それ自体が目的であるなどという、破綻した人間のことではない。

「では何が正しいのか？」

そんなことを迷っている時点で、それは「正義の味方」に成り得ない。

――だが。

迷わない者は。何が正しいのか考えようともしない者は、正義を示す価値もない。

迷わず進め、迷って進め人間よ。

お前の正義は何時もその先に在るだろう。

◇――――――――◇――――――――◇

嘗て、正義の味方を目指した男がいた。
理不尽に、無意味に、無価値に命が奪われていくのが許せなくて。
だけど彼には全てを救う力なんてなくて、理想を恨んで、絶望したけど諦めきれなくて。

彼は正義の執行者になった。

誰よりも人間の幸福を愛した男は、誰よりも多くの命を摘み取った。
いずれ零れ落ちる命を速やかに切り捨てて、生き残るであろう命を守るために。

彼は間違いなく正義の味方だった。そうならざるを得なかった。
ある人が言ったのだ。「正義の女神は娼婦である」――即ち「勝った者が正義である」と。
だから。正義の神さえ公平さを持たなかったから。

――無謬の天秤は、彼が担い手となった――。

出典：法学者・長尾龍一　氏
正義の実力的側面
「正義の女神は娼婦であり、戦いの結果が明らかになった段階で勝者の胸に抱かれる。また闘争が起こり勝者が入れ替わると新たな勝者の胸に抱かれる。正義の女神は腕づくで押さえこまねばならな

い」

＝勝った者が正義、という性質を揶揄したもの。

◇――――――――――◇――――――――――◇

※魔法世界編で完結する予定の「剣製の凱歌」ですが、もしその後も続けるとしたら登場するかもしれないキャラクター達です。←

「ユリアスフィール・フォン・アインツベルン」（Ｊｕｌｉａｓｖｉｅｌ　ｖｏｎ　Ｅｉｎｚｂｅｒｎ）

愛称はユリア。第二十九代目アインツベルン当主（現当主）の女性。

アインツベルンの一族は長命（↑一般人の１．２倍程度）で若作りであるため、実年齢４８歳に関わらず外見は２０代後半に見える。バツイチ子持ち。

魔法適性は地・火。

アインツベルン伝統の錬金術（アルケミー）が得意で、魔法具の開発、魔法骨董品の鑑定・修理・修復、アーティファクトの作成ができる。

現代のドイツに「法律上の貴族という存在」はおらず、「かつて貴族だった者達の子孫」がいわゆるドイツ貴族となる。

そんな中、アインツベルンは今でも貴族意識が強く、ユリアは他家（同じドイツ貴族、魔法使いの一族）から夫を迎え娘を儲けたが、

結局反りが合わずに離婚した（夫を城から追い出した）。

かつて魔法具開発の大家だったアインツベルン。彼女はその衰退した家の現状を憂いつつも昔の栄光を蘇らせることは完全に諦めており、アインツベルン家は「ただの魔法使いの家系となるか」「いっそのこと魔法を捨てるか」などと考えている。

だがその実、今でも心の奥ではアインツベルンの復興を望んでいることを自覚していない。

「ヴァレンティーネ・エルスヒェン・フォン・アインツベルン」（仮）

（Ｖａｌｅｎｔｉｎｅ　ｅｌｓｃｈｅｎ　ｖｏｎ　Ｅｉｎｚｂｅｒｎ）

愛称はティーネ。２２歳。ユリアスフィールの一人娘。

士郎の従姉にあたる女性で、誰に対しても敬語で話す。

アインツベルン一族の身体的特徴を持ち、分け目のない前髪を眉の上まで伸ばし、肩甲骨の辺りまで伸ばした後ろ髪を結んでポニーテールにしている。

魔法適性は地・雷。

家伝の錬金術は母・ユリアスフィールの意向により修得を許されなかったが、祖父に頼み込んでコソコソと教わっている。だがおおっぴらに学べないため修得に時間がかかっており、腕前は未だに半人前。

母親は（魔法使いの大家としての）アインツベルンを断絶させようか苦悩しているが、ティーネ自身は家を継ぐ意思を固めている。

そのため「一緒に家を継いでくれる人でなければ付き合えない」と考えており、その所為で身持ちが堅く彼氏ができないのが悩み。

その最終手段として密かに、日本に居るという自分の従弟に目をつけていた。

え？　ヒロイン増えるの？

※（ちなみにいとこ同士の結婚は合法）

◇―――◇―――◇

「これが戦場だよ、ネギ。お前が経験したお遊戯（あそび）と違ってな」

「敵の命も味方の命もあっという間に消えていく。生は無意味で、無価値だと言わんばかりに」

「死に物狂いで、必死で掴み取ろうとしなければ命は守れない」

「お前は。どこまで殺し合いを舐めれば気が済むんだ？」

◇―――◇―――◇

魔法世界編・士郎イベントアイデアメモ

・的屋の女の子を素で褒め（口説き）、赤面させる。そして同行者（真名ｏｒ刹那ｏｒフィン）に殴られる。

・フィンと一緒に新オスティアの市場を歩いていたら刹那と遭遇。刹那の眼は吊りあがり、フィンの放つ空気が変わる。修羅場その１。険悪な雰囲気の修正は叶わず、士郎が顔を引き攣らせながらこっそり後退しようとするも、背中に硬いものが押し付けられる。――真名のデザートイーグルだった。修羅場その２。

「楽しそうじゃあないか、士郎さん？」

その声で、士郎が逃亡しようとしていたことに前方の２人も気づく。

自分を包囲する３人の美少女――白烏（びゃくう）と巫女にエルフ……

士郎には今それが、鳳凰と巨龍と大虎のようにしか見えなかった。

いつからここは人外魔境となったのかッ……！？

◇――――――――――◇――――――――――◇

魔法世界編オリジナル魔法：

フィンレイ・チェンバレン（水・氷・風）

『風花（フランス）・桜東風壁（ヴェントゥス・デフェンシオーニス）』

術者とその周囲を守る旋風を発生させる風系広域防御結界。防御力もそこそこ高い。

《呪文》

来れ風精（ウェニアスピーリトゥス・ルタエリアイ・エレスガンス）　優雅に踊れ

常春（アバンカイ・ディ・パーチェム・オルディナーティオ）の谷の平穏と秩序を

「風花（フランス）・桜東風壁（ヴェントゥス・デフェンシオーニス）」

《出典、メモなど》

・桜東風（さくらごち）…桜が咲く頃に吹く風。東風。

『切り裂く氷輪（ルーナエ・ディスエッコ）』

刃のように研ぎ澄まされた氷の円環を無数に発射する。円環は直径２０ｃｍ～２ｍの間の様々なサイズをしている。

《呪文》

来れ氷精（ウェニアント・スピリトゥス・ステグラキアーレ）　冷気を旋れ（エーネ・アーエル）

蛮行轢（マウリス・バルバーリエ・アルジュントゥス）き断つ銀の車輪（ディスエッコ）

「切り裂く氷輪（ルーナエ・ディスエッコ）」

『雪崩れる津波（トゥーンナム・ヒョーノスティヴァーダ）』

氷属性を持った巨大な津波を広範囲に発生させ敵を飲み込む。この冷水を浴びたものは例外なく凍りつき、数秒後には津波自身も氷結して辺り一帯が氷原と化す。

《呪文》

契約（ト・シュンポライオン・ディアコネートキリオス・トゥン・ヴィソース）により我に従え水底の王

来れ至大（エピゲネーティ・メガッリ・バスィア・サーラサ）なる紺瑠璃の極洋、猛り立つ（ヒッポカムポス）海馬

冷冷（パーゴン・ティス・アークティキス）たる極北の氷雪、凍りつく（パーゴス・トリアイナ）刃

熱を奪え　時を停めよ（プギニイ　パゴステー）　水司る大地のわだつみ（キリアコン・ポセイドーシ・アポティジー）
「雪崩れる津波（トゥーンナム・ヒョーノスティヴァーダ）」

《出典、メモなど》
わだつみ＝海神。
極洋…南極や北極に近い海洋。
極北…北の果て。北極に近い所。

‥海馬
　ヒッポカムポス、またはシーホース。ギリシャ神話に登場する半馬半魚。普段はイギリスとノルウェーの間の海に棲んでいて、有事の際はポセイドンの戦車を牽いてゆくスゴイやつ。

‥水司る大地のわだつみ
　ポセイドンは海の神、水を司る神として有名だが、その起源は大地（地震）を司る神であったことから「大地を揺らす神」と呼ばれた。

◇――――――◇――――――◇

魔法世界編オリジナル魔法‥
フェイト・アーウェルンクス一地（石・砂・鉱物・溶岩）

『砂灼く竜巻（アネモストロヴィーオ・ト・カフティアモ）』（すなやくたつまき）
　高温に熱せられた砂と石を巻き込んだ竜巻を敵に放つ、灼熱の砂嵐。この攻撃を受けた者は、砂石と熱砂で体を刻まれ、高温の竜巻

によって蒸し焼きとなる。

《呪文》

契約により我に従え砂嵐の王
来れ怨敵を穿つ偉大なる牙
砂石を侍らせ風紋刻めよ熱砂の嵐
枯れた屍を砂海に晒せ
「砂灼く竜巻」

《出典、メモなど》

・砂石（しゃせき、させき）…砂と石。または小石。
・風紋…風によって砂地の表面にできる模様。

『岩垂氷（スタラクティーテス）』（いわつらら）

地面が隆起して鍾乳石の槍を作り敵を串刺しにする。しかし鍾乳石は下からだけ生えるものではない。下方の槍に意識が向いた敵の不意を突いて、下方からだけではなく上方からも石の槍が降り注ぐ。

《呪文》

地精（スピリトゥス）　突き出でよ　「岩垂氷（スタラクティーテス）」

《出典、メモなど》

・岩垂氷（いわつらら）…鍾乳石のこと。

◇――――――――◇――――――――◇

人間は、傍から見ればどんなに有り得ない出来事でも。
望みが叶ったと思ってしまえば容易くそれを信じ込む。
その代償が、どれほど大きいのかも考えずに。

では問おう英雄の子よ。その代価は、夢を見るに足るものか――。

「魔法世界編　第??話　夢の代価は（仮）」

「でも」

「これはホンモノじゃない。……そうですね？　ザジさん」

できることならずっと…この夢を見ていたいけど。
外には待ってくれてる人達がいる。
僕にはまだ、やらなきゃいけないことがあるんだ。

「……では」
「はい」

「――――――前へ」

夢なんて、見ていられない。

「ここから出るキーワードは『僅かな勇気（アウダーキア・パウラ）』です」

「え……」

「外で待つのは私の姉です。姉は手強いです、気をつけて」

「や、やっぱりあなたが…ホンモノのザジさん……」

「麻帆良で帰りをお待ちしています。委員長さん達と一緒に」

「……はい！」

“――――僅かな勇気（アウダーキア・パウラ）”

……英雄の子よ。お前にとってこの夢は代価を払うに安過ぎた。

だがそれでいい。

お前がその代価を――大事なものを引き換えにする時が来ないことを私は祈ろう。

灰は灰に。塵は塵に。夢は夢に。幻は幻に。全ての者に永遠の安らぎを。

僅かな勇気を持つ者に、祝福を。

◇――――――――――◇――――――――――◇

「ふざけるな……ふざけるなふざけるな巫戯山るなありえんッ！！
この世界の守護者たる我らが、たかが人間に劣るなど！！！」

クァルトゥムは顔を醜く歪めて喚き散らす。ハルナ達を甚振っていた時の余裕は既に無い。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト！！
契約により我に従え　炎の精霊……『紅蓮蜂（アペス・イグニフェラエ）』！！」

「射殺す百頭（ナインライブズ）」

――――――――――――――――。

「――――な……」

たった一匹で『紅き焔』の三十倍規模の爆炎を生む『紅蓮蜂』。無数に放たれたそれを士郎の斧剣が一瞬で斬り伏せる。その光景は今度こそ、クァルトゥムの思考を完全に停止させた。

（馬鹿な……僕は誰だ！！）

――世界の守護者アーウェルンクス。魔法世界の神たる造物主の使徒。

（そうだ。それで間違いない筈だ！！　間違いない、なら！！）

――僕より上に立つこの男は、何者（だれ）だ――――

圧倒的優位から弱者を嬲り、自分より強い者に出会えば何も出来ない。
有り得ないと、何かの間違いだと喚くだけ。
その様子を、士郎は冷ややかな目で眺めていた。

「アーウェルンクス」。
禍いを転じて福と成す、災禍を幸福へ変える神の御名。

『いいや、僕は悪者だよ』

魔法世界に住む全ての人間を　≪楽園≫に導こうとする石の王。

『この世界の守護者たる我らが！！』

眼前に立つ炎の王。

「――ああ…お前。もう喋るな」

士郎にとってそれは「フェイト」ではなく、「アーウェルンクス」ですらない。
滅ぼすべき――唯の敵だった。

我が骨子は捻れ狂う。
「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．」

「亡びろ人形。≪完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）≫に――――お前が逝け」

＊ＫＣ３４巻を購読直後、衝動的に書いてしまいました。

◇――――――――――◇――――――――――◇

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト。
極北の冥界より死人（しびと）の軍勢を抱（いだ）いて来たれ……『凍み結る氷（ナグル）の神船（ファル）』！！！」

「凍れ……！！」

◇――――――――――◇――――――――――◇

「――――研ぎ済ませ！　『鍛冶の神・火之迦具土（ヒノカグヅチ）』！！」

「――――泰始四年五月十六日丙午正陽、
（泰始四年夏の中月なる5月、夏のうち最も夏なる日の16目、火徳の旺んなる丙午の日の正午の刻に）
――――造百練鋼七支刀。
（百度鍛えたる鋼の七支刀を造る）
――――呂辟百兵。
（これを以てあらゆる兵器の害を免れるであろう）
――――宜供供侯王永年大吉祥。
（恭謹の徳ある侯王に栄えあれ、寿命を長くし、大吉の福祥あらんことを）

「――――招来せよ、『七支刀（ナナツサヤノタチ）』！！」

「往くぞ月詠。――――その闇と魔を、斬るッ！！！」

◇――――――――――◇――――――――――◇

「では仕事だ士郎。私を守れ。目障りな奴等を叩き潰せ」

士郎の口が不敵に吊り上がる。
声色は軽やかに。その声に万感の思いを込めて。

「仰せのままに。マイ・マスター」

黒塗りの弓と捻れた剣が士郎の手中に現れる。
近衛とは近(そば)で衛(まも)る者。そして衛宮は宮(みや)を衛(まも)る者。
そして彼は、そのふたつの名前を持っている。

「安心しろ悪魔共。防衛戦は得意分野だ――――！！」

“――――――Ｉａｍｔｈｅｂｏｎｅｏｆｍｙｓｗｏｒｄ．”

「風穴を空けろ…偽(カラドボルグ?)・螺旋剣ッッ！！！」

◇――――――◇――――――◇

“完全なる世界・全記録書庫より強制召喚！古龍・龍樹！！”

「あれは龍樹！少々マズイですね…！」
「何とかしてください、あなたの旧友でしょうあれは」
「やだよでけーし！あーもー操られちまって情けねーなー」

“――――――『ヴリトラ殺し（ヴァジュラ）』『グラム』『原罪（メロダック）』”

2本の魔剣が古龍の翼を穿ち切り、円錐の如き金剛杵がその胴を貫いた。
帝国の守護聖獣は竜殺しの宝具によって溶岩の海へ落ちてゆく。

「師匠、弱音吐いてる暇があったらキリキリ働いてください」
「ヒデェ……弟子の言葉とは思えねーなオイ」

◇――――――◇――――――◇

「お前がこの世界の神だから勝手に書き換えるのか。魔法世界（ムンドゥス・マギクス）を≪完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）≫に。この世界の人達の意思を無視して」

「寝惚けるなよ。誰が神（おまえ）に、そうしていいと言ったんだ」

※出典：臨床犯罪学者・火村英生の台詞。
（推理小説作家・有栖川有栖先生の著作に登場する探偵役で英都大

学准教授。）

・原典←

「犯人の二人は、事故で命を落とした。これは、天の裁きということかもしれんな」

「天の裁きだって？神の御手のなせる業か。勝手なことしてくれるじゃねぇか。裁いていいと、誰がてめぇに言ったんだ」

・「神のどこが偉いんだ、神如(おまえ)きが手を出すな」という暴言を天に吐く、無神論者・火村准教授のありがたいお言葉。でも子供と猫には超優しい。

◇――――◇――――◇

「カラダ・ハ・ツルギ・デ・デキテイル。
涙の泉(ラクリーマス・アブステージェト)は私が枯らす。私が貴女(ヌンク・アウクシーリウム)を解き放とう。
聖女(カベアム・テルビノ・レジーナ)を縛る黒い檻よ、今すぐ此処(ベ・アブセンティス)から消え去るがいい(・イスティンク)！」

“――――『棄却(コントラクト・ブレイカー)する全ての契』”

「…これでお前は……自由だ…エヴァ」

「……！？」

「待…て。待て士郎……！！　何故、なぜ今そんな――――」

「――――じゃあな」

“狂った幻想（ディスイリュージョン・ファンタズム）”

それは限界稼働（オーバーロード）を超える臨界突破（メルトダウン）。

回路が生成（うみだす）する高エネルギーは回路自身をも熔解させる。

「トレース・オン――――――――偽・乖離剣（エヌマエリシュ）」

燃える剣はあらゆるものを焼き斬るだろう。

だが同時に…その炎熱で。剣も熔けるしかない。

「『万象穿つ（オ・コズモス・トリピステ）――――――――開闢の流星（テオス・ロンケーイ）』ッッッ！！！！！！」

その男はきっと。「体は剣で出来ていた」。

そして剣は、熔けていった。

以上です。
ああ、実際にちゃんとした形で書きたいなあ。
前後の展開がないとイマイチ盛り上がらないですね。

それでは皆様、今までありがとうございました。
私のような人間の駄文・駄作を読んでいただき、応援していただき
……本当にありがとうございました。

いつか必ず復活してみせます。

その時また逢いましょう！！

ありがとうございました！！！

※重要なお知らせ※（後書き）

《人生に悩みは尽きない》

……単位が足りなくなった原因は大学一年生、去年の5~6月に学校をサボリまくった所為です。

え？　学校サボって何をしていたのか、ですか？

――「小説を読もう！」の素晴らしい作品群にハマってましたｗ

そしてその後の7月、ユーザ登録をして「剣製の凱歌」を書き始めてしまったという流れです。

身から出た錆、とは正にこのこと。

あと……あと2単位だったんだ……。（遠い目）

ああ、学費と生活費が＋1年か……親に超言い辛い、まだ言えてない……。

早く言わないとなぁ……。

大学1年生、大学を舐め過ぎないように。

高校生！　俺みたいになるんじゃないぞ！！（泣）

駄文１　第９０話ボツネタ（前書き）

読者の皆様お久しぶりです佐藤Ｃです。

意外にも早過ぎる再会となりましたが、残念ながらまだ復活ではありません。

第９０話の作成中にできた没ネタがありまして、折角なので投稿してしまおうと。

ちなみにこの「駄文」は連載再開時に削除する予定と明言しておきます。

お目汚しになると思いますが、読んでいただけると幸いです。

それではどうぞ！

駄文１　第９０話ボツネタ

前後の展開あらすじ（仮）

　士郎の発言にカチンときたアーニャが”アーニャ・フレイム・バスターキック”を飛び蹴りで放つ。しかし裏五章ラストでチート化のキッカケを得た士郎は難なくエクスカリバーを投影し「風王鉄槌」で炎を吹き消してしまう。

※ウチの士郎の属性は光・火・闇で、基本魔法である「魔法の射手」のみ他の属性を扱える。なので炎を消すには風王鉄槌が一番手っ取り早かった。そこ、避ければいいじゃんとか言うな。

　炎が消えてただの飛び蹴りとなったアーニャのか細い足首を掴み、士郎は彼女を逆さ吊りにしてしまったのであった。もはや悪役だぞ士郎！
　どうしてそうなってしまったのかは、完全版・第９０話の完成を待て！！

「ちょっ、ちょっと何よ！！　離しなさいよーーー！！」

アーニャは逆さ吊りになったままジタバタと腕を振る。そう、彼女は気づいていなかった。自らのスカートの辺りがとんでもないことになっていることを。
耐えきれず、士郎はつい言ってしまった。

「……アーニャ、その…今度からスパッツとか、短パンとか履こうな」
「――――――。」

丸見えだったのである。

「……き」

ちなみに突風から解放された他メンバーと、比較的近い距離にいるネギにもバッチリ見られた。

「きゃあああああああああっっ！！！　なっなに見てんのよシロウの馬鹿ッ変態っ！！ロリコンッ！！！　ネッネギ！　アンタまさか見てないでしょうね！？」

「わああっ！ごっゴメン！　で、でもアーニャの下着なんて今更じゃ…僕ら幼馴染みなんｄ「何ですってぇぇぇえええええええ！！？」

のどか
「ね、ねえこのかー…。士郎さんがその…えーと…ロ、ロリコンっていうのは――…」
木乃香
「安心してやのどか、そんなコトあらへんよ？　もっとタチ悪いえ♪
下はエヴァちゃん、上はシャークティー先生から刀子先生まで口

説いとるし？」

古菲
「師父は女癖が悪いアルか？」

楓
「英雄色を好むと言うでござる」

小太郎
「士郎にーちゃんダラしないなー、見損なったわ」

千雨
（マ、マジか……？　…あの人だけはマトモだと思ってたのに……）

朝倉
「ククク…そーだよ！私はこんなスキャンダラスなネタを探してたんだよ！！　二学期最初のまほスポ一面はこの私が頂いたッ！！！　さあその話をもっと詳しく！」

刹那
「……ええ素敵ですよね刀子さんはいかにも大人の女性といった佇まいをしておられますし剣の腕も私などでは到底及ばず私などでは私など私なんかフフフフフフフフフフフフ……」

木乃香
「せっちゃん。……斬って、ええんよ？（にっこり）」

明日菜
「ッ！？（ビクゥッ！）」

ハルナ
「とある学園、女教師と学園長の孫……。祖父の権力を振りかざす孫に女教師は逆らえず……！　おおおキタキタキターーーー！！

次の新作はコレと『魔法少女ユエ』で決まｒ「殴りますよ？」ごめん。」

茶々丸「皆さんとても楽しそうです（●ＲＥＣ）」

ネギ「……えーと」
アーニャ「……そろそろ下ろしてよ」
士郎「……ああ……」

「……はあ。これだからこの連中は……」

つくづくシリアスが保たんな、というエヴァの声は誰にも聞こえず広場に消えた。

《補足・解説》

【前後の展開あらすじ（仮）】
・（仮）とは、９０話の完成までに内容を変更する可能性があるためです。

【裏五章ラストでチート化のキッカケを得た士郎は難なくエクスカリバーを投影し】
・難なく、は言い過ぎですが、投影するだけで死にかけることはなくなりました。エアは相性がいいので干将・莫耶と同程度の負担で投影できるようになりましたがね！（どや顔）

【完全版・第９０話の完成を待て！！】
・偉そうな言い方ですいません。

【今度からスパッツとか、短パンとか履こうな】
・原作を読んだ佐藤Ｃの心の声だったりする。あんなに見えちゃうくらいだったら履こうよ。……赤松先生では無理か……。刹那が特別なのか？
…いや、刹那はスパッツを履いていることによるエロさが……！
（自重しろ作者

【で、でもアーニャの下着なんて今更じゃ…僕ら幼馴染みなんｄ】
・けっこう見てるでしょ。恥じらいを知る前のアーニャとネギが一緒に遊んでいた時期もあったと妄想します。

【下はエヴァちゃん、上は刀子先生からシャークティー先生まで】
・見た目いちばん若い人が年長者という罠。オイそこの筋肉ダルマ、ロリババア言うな。
あと刀子さんに関しては未来士郎の仕出かした所業ですが。

【剣の腕も私などでは到底及ばず】

・卑屈になってこんなことを言っていますが、実際は刹那の方が強いです。とっくに超えています。

【もっとタチ悪いぇ♪】

【せっちゃん。……斬って、ええんよ？（にっこり）】

・祝☆ブラック木乃香、爆誕。

それでは次回。また逢いましょう！

駄文1　第９０話ボツネタ（後書き）

第９０話、方向性が二転三転四転五転六転としまして（↑マジで）まだ未完成です。

さっさと魔法世界編に入りたい……。

ていうか最近課題多いわー

気長に頑張ります。

駄文2　第二回オリジナルアーティファクト，s

まだ二回目なんだねという、作者ももはやどんなものを作ったか覚えていないオリジナルアーティファクト。こういう使わない設定ばかり出来てしまうのが悩みです。

暇つぶし程度に読んでください。

11）『無垢な童女（プエラ・イノーチェンス）』

真っ赤なチョーカー。

決して会話の中で嘘を言うことが出来なくなる能力。

使用者はチョーカーを身に付けている間は決して嘘を言う事が出来ず、使用者と会話する相手も嘘を言う事ができない。もし使用者に何か質問されたなら、その人物はその問いに真実で答えるしかない。

ただし、相手がＡＦの力に気づき無言を貫いてしまうと対抗できない。「何故か本当の事を言ってしまう」という状況に相手が混乱している内に必要な情報を引き出せるかが重要。

会話による情報収集に有効なアーティファクト。応用次第で駆け引きにも通用する。

《出典・メモなど》

無垢な少女＝Ｐｕｅｌｌａ　ｉｎｎｏｃｅｎｓ．＝プエラ・イノーチェンス

（正確には「Ｐｕｅｌｌａ　ｉｎｎｏｃｅｎｃｅ」）

◇――――――――――◇――――――――――◇

１２）『星月夜の駆逐艦（エクステルミナトーレ・ノヴァ）』（ほしつきよのくちくかん）
戦艦。大型アーティファクトであり戦艦型アーティファクト。

イメージは、ヘラス帝国のインペリアルシップを少し小さくし、白金色にして、メセンブリーナ連合の鯨船のヒレが複数装備され、艦尾に二つのブースターが付いたようなビジュアル。

大型精霊砲一門（主砲）・中型精霊砲二門・対艦砲・対空砲・対艦魔法障壁・レーダー・小型艇格納庫・精霊エンジンその他諸々の装備武装兵装設備を積んでいる。ちなみにバスルーム・シャワールーム完備の１１Ｌ２Ｄ２Ｋ（笑）。

艦の運用は精霊達が行ってくれるため、ＡＦ所有者が意向を示せばその通りに艦を動かしてくれる。アナログなのかハイテクなのか。

アーティファクトとしては大型であるものの、戦艦としてみれば決して大きくはない。それなのに大型精霊砲なんてモンを積んでいるため、主砲をブッ放すとしばらく艦の出力が落ちるという、精霊エンジン過労死寸前の燃費の悪さを誇る。

《背景》
設計・開発者の夢とロマンを乗せて１２年前に開発され、「魔法使いの従者」契約システムに登録された一品。
開発者は高齢のため今は引退しているが、設計者は未だ現役で「

フライマンタシリーズ」設計の統括責任者を務めているとか（捏造設定）。
「星月夜の駆逐艦」は１２年前に開発された旧式戦艦だが、開発者一族が趣味でちょくちょく改修しているため装備は何気に最新鋭だったりする……夢とロマンを優先しているために燃費の悪さなどの弱点があるが。

《イメージ（嘘）》
？？？「弾幕薄いよ！　何やってんのォ！！」
茶々丸「……ハルナさん、何をしているのですか？」
ハルナ「いやー、鉄板ていうか…セオリー？」
茶々丸「いえ、私にはわかりませんが」

《出典・メモなど》
１１Ｌ２Ｄ２Ｋ
リビング１１室、ダイニング２室、キッチン２つという意味です。

エクステルミナトーレ・ノヴァ
ラテン語の「ｅｘｔｅｒｍｉｎａｔｏｒｅ（破壊者、駆逐艦）」と英語の「ｎｏｖａ（新星）」を組み合わせた造語。

星月夜
晴れて星の光が月のように明るい夜のこと。

◇――――――――――◇――――――――――◇

１３）『子供遊びの悪戯暗号（トリックアート・アナグラム）』
実体を持たないアーティファクト。呪文を唱えることで能力が発

動する。
　能力は精神交換。カード所持者以外の人物の精神（魂）をランダムで入れ替えてしまう。ランダムなので入れ替わらないパターンもある。対象となるのはＡＦ発動時にカードが発した閃光を浴びた人間すべて（亜人含む）。
　能力解除方法は「誰にも話したことのない秘密を声に出してバラすこと」。当たり障りのない秘密でよいのだが、頭の固い人物は深く考え過ぎて時間がかかったり秘密を言えなかったりする。
　ぜひ夕映に使いたい（ネギが好きという秘密が頭に浮かんで赤面するでしょうｗ）。

《呪文》
「アデアット、楽しみなさい！（ディスケ・ガウデーレ）”子供遊びの悪戯暗号（トリックアート・アナグラム）”！！」

《出典・メモなど》
ディスケ・ガウデーレ
　ラテン語の格言「Ｄｉｓｃｅ　ｇａｕｄｅｒｅ.　」。意味は「楽しむことを学べ」。

◇――――――◇――――――◇

１４）『綺羅星巡る航海図（ナウティカルテーブル・オブジンクション）』（きらぼしめぐるこうかいず）
　行きたい場所まで確実に行くことができる道筋を示してくれる地図。

《出典・メモなど》
ナウティカルテーブル・オブ・ジンクション
＝Ｎａｕｔｉｃａｌ　ｔａｂｌｅ　ｏｆ　Ｘｉｎｇｔｉａｎ.＝

◇――――――――――◇――――――――――◇

１５）『教会元型（バシリカ）』

中心にルビーが填め込まれたロザリオのネックレス。発動すると巨大化し、十字架を模した１７０ｃｍ程の長さの杭へ変化する。

杭を刺した地点を中心に、十字の意匠が描かれた直径１００ｍほどの魔法陣を発生させる。魔方陣の内側にいる者は魔力と”気”が半減（４９％補正が掛かる）して弱体化させられる。同様に魔力・魔法・気・陰陽術によって能力を強化している場合もその効力が半減する。

神以外の存在による奇跡の一切を否定する、傲慢で神聖な結界領域。

《出典・メモなど》

バシリカ（バジリカ）

古代ローマの集会施設で、キリスト教教会の元型（アーキタイプ）といわれる建築物。

・シャークティー先生に使わせてぇ。

◇――――――――――◇――――――――――◇

１６）『空の王冠（オーバーフライト）』

ターコイズが鏤（ちりば）められ、羽根の意匠が刻まれた金色の王冠（クラウン）。

この王冠を被った者はあらゆる場所の制空権を奪う能力を得る。

制空権だけでなく、奪われた空においてこのＡＦ使用者の命令は絶対となる。効果範囲は支配した空の中・もしくは空の下に居るもの全てで、地に足の着いていない「飛んでいるもの」全てが対象となる。ただし命令で出来るのは「行動を制限・変更する」ことのみ。「〇〇を攻撃しろ」などのように「行動させる」ことはできない。

例えば発射された弾丸、放たれた魔法に対し「堕ちろ」と命令することで撃墜できる。それらに効果が及ぶのは、弾丸も魔法も「空の下」の「飛んでいるもの」であるため。

《イメージ》

使用者は能力発動時、王冠を斜めに被り片目を閉じて口角を上げ、人差し指で対象をビシッと指さす。どや顔。

「――――さあ、墜ちて跪きなさい！！」

《出典・メモなど》

制空権

（主に航空兵力によって）一定範囲の空域を支配する権力のこと。

ターコイズ

緑がかった青色の宝石。「地球を包む大いなる空」を意味する天然石。

オーバーフライト

＝ｏｖｅｒｆｌｉｇｈｔ．領空侵犯。

◇――――――――――◇――――――――――◇

17）『天の采配（ケ・セラ・セラ）』

呼び出す度にランダムに姿を変えるアーティファクト。

その形態ごとに異なる能力を発揮する。

？『先んずれば即ち勝つ（コウキイッスベカラズ）』

直径５ｃｍほどの大きさの宝石が頂部についた、長さ１ｍほどの錫杖（ステッキ）が現れる。このステッキは魔法発動体としても機能する。

能力は自身の攻撃命中率を１００％にすること。どんな見当違いな方向へ攻撃を放っても必ず狙った対象に命中する。

「当たるまで狙い続ける」という効果ではなく、因果律に干渉して「この攻撃は〇〇に命中する」という事象を捏造してしまう。

攻撃必中能力。

？『勝負なき日と知るべし／凶事に友を引く（ホシヲワケアウ／シナバモロトモ）』

／勝負なき日と知るべし

カードが朱の漆塗りの軍配に変化する。敵と自分、互いが攻撃できなくなる能力。

／凶事に友を引く

使用者が死に瀕した時のみ発動可能。自分が負った致命傷を敵の魂と肉体に投影して道連れにする。瀕死時限定の、宝具「偽り写し（ヴェルグ・アヴェスター）示す万象」のようなもの。

？『先んずれば即ち負ける（セイテハコトヲシソンジル）』

左腕に盾が装着される。

この盾を装備している間、このＡＦ装備者を標的とした攻撃は全て攻撃した本人へ返ってゆく。相手の攻撃をそのまま相手に返す、攻撃自動反射（フルオートリフレクション）能力。その代わり装備者も、盾を装備している間は一切攻撃ができない。

つまりは敵が攻撃してこなければ攻撃できない能力。

？『仏滅（ニルヴァーナ）する大凶事』

くじ引きで言うハズレ。仮契約カードが真っ黒に染まる。

この形態が発現してから２４時間は新たにＡＦを発動することができない。

？『大いに安し（アスピーシャス・ディ）』

銀の腕輪が右手首に装着される。

３０分間だけ、何をしても思った通りになるほどの超幸運が訪れる。とはいえ非現実的な出来事や不可能な事象は実現しない。幸運は腕輪を装着している間のみ持続する。

幸運値上昇能力。

？『赤光（シャッコウ）』

２ｍの刀身と３０ｃｍの柄を持つ、両刃の紅い大剣を召喚する。

正午（午前１１時～午後１時）の間のみ能力が著しく上昇し、刀身に炎を纏う。能力上昇時は斬撃発射・障壁貫通・障壁破壊、魔力増幅・身体強化・高速思考・魔力障壁展開などの能力が追加される。

正午の時のみ戦闘力を上昇させる能力。

《出典・メモなど》

ケ・セラ・セラ

スペイン語で「なるようになる」。

＝運を天に任せる、天の配剤に任せる、明日は明日の風が吹く

・上記の六形態は、カレンダーなどに表記される”六曜”――【先勝（せんしょう）】【友引（ともびき）】【先負（せんぶ）】【仏滅（ぶつめつ）】【大安（たいあん）】【赤口（しゃっこう）】――の六つの運勢をモチーフにしています。

例）第六形態『赤光』の能力は、【赤口】の「正午だけ幸運」「刃物と火に気をつける」という性質を元にしている。

今回はこの7つです。

「星月夜の駆逐艦」はたぶん強過ぎるし「天の采配」は色んな意味で扱い辛い。というか週刊少年ジャンプのハンター漫画に「天の采配」みたいな能力の人がいた気がするんですよね。

他にも真名の専用アーティファクト案『竜騎士の円環（キルクラーリス・ドラグーヌム）』『百頭竜の火顎門（トゥン・ヒュドラー）』があるんですが、まだ設定が煮詰まっていないので掲載断念。

ていうかさっさと本編書けよ、という声が聞こえてきそうなのでこれにて退散。

それでは皆さんまた次回！！

駄文3　第９０話ボツネタ？（前書き）

第９０話が書き終わった記念に投稿します。

いやースンゲー時間かかったわー第９０話。大学が忙しいってのもありますけど、９０話自身もかなりの難産でした。

さて…明日、１時限目から数学小テストがあるのに勉強してねえ。

でも眠いから勉強しません（、・ω・´）キリッ↑ダメ人間

それでは読者の皆さま方、良い夢を。俺は寝ます。（勉強しろ

駄文3　第９０話ボツネタ？

先日、ようやく完成した第９０話（タイトル未定）。そのボツネタ投稿第二弾。
今回はギャグではなくシリアスです。
興味のある方はどうぞ。

◇―――――◇―――――◇

「そらみろ。結局お前は理想しか見えていない、何も知らない子供だっていうことだ」

違う。そんなことない……なんて言えない。でも。それでも。

「それでも僕には……この道しかないんだ……！」

何とかその一声を絞り出した英雄の子に、英雄の弟子は憐れむような眼を向けた。

「そんなの唯の勘違いだ。お前が気づいてないだけで、それ以外の道なんて幾らでも広がってる」

いや…気づかないふりをしているのか。それとも――

逃げている、だけなのか。

ああ。本当に――

「誰かさんに、そっくりだ」

→

作成初期の、第９０話冒頭の文章。

結局この文章を考えた時に想定していた展開に着地できなかったのでボツに。

◇――――――◇――――――◇

前後のあらすじ
いき過ぎとも言える、ネギ達の魔法世界行きを拒絶する士郎の態度。まーいろいろあって遂に士郎はブチ切れて、キツイ言葉を吐き散らした。

その言葉は重かった。

大げさな、と言える者はいなかった。言わせないだけの何かが彼にはあった。

――だからこそ、訊かなければいけないと思った。

”彼女”にしたのと同じ問いを、少年は青年にぶつけた。

「士郎さんあなたに…あなたの過去に何があったんですか？　なんでそこまで拘るんですか？　何があったんですか――魔法世界で」

明日菜や夕映には即座に反論してきた士郎の口が…止まった。

ネギは待った。あの女（ひと）は答えてくれなかったけど、この人は答えてくれる。そんな確信があったから、ネギは士郎が話し出すのをただ待った。

「――――初めて、人を殺したよ。」

ようやく開かれた口からは、そんな言葉が飛び出した――――

◇――――◇――――◇

子供達は絶句した。

「こ……殺した……って……え？」

「いや、ちょっとコレはさすがに……ウソでしょ…」

次いで言葉にならない言葉が漏れ出る。

「――――シ、シロウ……ホ、ホンマに……？」

「……マジかよおい……！！」

呆然とする仲間たちの中で、ネギの脳裏を師の言葉が過ぎる。

――――――　一歩を踏み出した者が、無傷でいられると思うなよ？

（――ああ……）

――この人でさえ、キレイなままではいられなかったんだ。

「魔法」という、自分が身を置く世界の重さを、ネギは改めて感じ取る。

「……まあ厳密には人間じゃないんだがな。ウチの主人（マスター）と似たようなもんだ」

「オイ。あんな亜人と真祖を一緒にするな」

「ああ、でも――」

士郎の言葉に周囲の混乱は続いていたものの、今までの刺々しい雰囲気はその軽口で霧散した。だが。

”――しかし努努（ゆめゆめ）忘れるな。

私は人間ではないが、君が1人の命を奪うことには変わりない！

！――”

「誰かを殺したことには、変わりない」

それを再び引き締めたのも士郎だった。

（あれ……？）

その違和感に気づいたのは僅かだっただろう。

木乃香、刹那……ネギと明日菜も何となく判ったはずだ。

――士郎の「人を殺した」という発言に、昏いところが一切ない。

それはいったい何故なのかまでは、彼らには解らない。でもネギは思った。

（この人はきっと、乗り越えたんだ）

人間は、良心がある限り罪の意識に苛まれる。

良心の呵責、後悔、心の痛み。決して消えない刻印と下ろせない十字架を背負い、汚れた手にこびり付いた罪は一生消えることはない。

彼はきっと、それを受け入れた。

顧みることはある。後ろを振り向くことはある。だけどそこで絶望しない。歩みを止めることはない。再び前へ歩いていける。

だから彼はそんな責め苦を、子供達に味わわせたくない。

それでもネギは思う。

（こんな強さを手に入れるまで、一体なにを見てきたんだろう――）

きっと、自分達は何も知らない。ならば訊くべきだ。

（――僕達は、何を知らないのか。）

→

～補足・解説～

・文章や台詞が粗いのはご勘弁。ボツネタですから。

《ボツ理由》

・この文章を取り入れると、本来目指した流れに着くまで遠回りになってしまうから。

・ネギが不自然なほど精神面で大きく成長している。まだこんなに大人じゃない。

……などです。

：「こ……殺した……って……え？」

：「いや、ちょっとコレはさすがに……ウソでしょ…」

：「――シ、シロウ……ホ、ホンマに……？」

：「……マジかよおい……！！」

→上から明日菜、ハルナ、木乃香、千雨です。

：「オイ。あんな亜人と真祖を一緒にするな」

過去編で少年士郎が殺した吸血鬼ボールドウィン・コーンフィールドは「真祖ではない通常の吸血鬼」という設定です。この小説の独自設定ですが、”通常の吸血鬼”は魔法世界に住む亜人の一種です。

：「人を殺した」という発言に、昏いところが一切ない。

過去を乗り越えた、という意味で「昏いところが一切ない」と書きましたが、これは「誰かを殺した癖に罪の意識が無い」とか、そういう人間として間違った解釈ではありませんのでご注意を。

：汚れた手にこびり付いた罪は一生消えることはない。

嘘をついたり、虫を遊び半分で殺したり、友達のおもちゃやカードを盗んだり、誰かを騙したり、怪我をさせたり、貶めたり、恥ずかしめたり……。人間誰しも経験するような小さな罪でも、それは一生消えません。

死の間際、私達が最期に見る自分の手は……一体どのように映るのでしょうね。

◇――――――――◇――――――――◇

さて皆さま。これをお読みになったのなら、第９０話がどのようなお話かだいたいお分かりになったと思います。まあ要するにメンドクセー話です。

要約すると←

ネギ「ねーねー何で魔法世界行っちゃダメなのー？　ねーなんでー―！？」

士郎「五月蠅え餓鬼ども。何も知らないテメエらに現実を教えてやんよ」

という平和的な話し合いです（嘘）。まあ決裂して９１話でバトルするんですけどね。

それでは皆さんまた次回！

駄文４　オリジナル魔法（何回目？）

２０１１／１１／１１。こんな記念すべき日に投稿しない手はないだろうと思って載せました。

まあ、駄文シリーズ及び仮設章は本編再開時に削除する予定なんですけどね……。

そんなワケで、短いですが、興味のある方はどうぞご覧ください。

◇――――――――◇――――――――◇

『狂い咲く氷梅（ラビドウス・ゲル）』（くるいざくこおりうめ）

氷結させた対象を砕き破壊する「おわるせかい」の簡易縮小版。対象を一瞬で氷結させて閉じ込めた直後、それを砕いて内部にダメージを与える。凍結範囲が小さい分「おわるせかい」や「凍てつく氷柩」などよりも凍結速度が速い。

攻撃の出が速く使い勝手が良い。だがそれが利点と成り得るのは並みの魔法使い程度までに留まる。例えばエヴァンジェリンの場合、通常の氷系呪文でも「狂い咲く氷梅」と同等以上の凍結速度を叩きだせるため。

《呪文》
来れ氷精（ウェニアント・スピリトゥヴァグラキアボルラロレスカット・フヴィレグラキエース）　砕け氷牢　氷華の如き氷裂文
『狂い咲く氷梅（ラビドゥス・ゲル）』

《出典・メモなど》
氷梅（こおりうめ）
染め模様の名前。「氷の割れ目（氷裂文）」を全体に描き、所々に梅の花を散らしたもの。梅花氷裂（ばいかひょうれつ）。
ラビドゥス・ゲル（Rabidus gelu.）
＝狂った霜。

◇――――――――◇――――――――◇

←以前も載せましたが、その時はルビ等が未完成だったので再録。
『砂灼く螺旋（アネモストロヴィーオ・ト・カフティアモ）』（すなやくらせん）
高温に熱せられた砂を巻き込んだ竜巻を敵に放つ、灼熱の砂嵐。

《呪文》
契約（ト・シュンポライオン・ディアコネートーン・リアース・ティス・アモフィエラ）により我に従え砂嵐の王
来れ怨敵（エピゲネーエポフトース・ティス・フォニアードン）を穿つ偉大なる牙
砂石（カピステプリゲース）を侍らせ風紋刻めよ熱砂（・スティン・アモ・カイゴンタス）の嵐
枯れた屍（エゴ・セトナクト）を砂海に晒せ
「砂灼く螺旋（アネモストロヴィーオ・ト・カフティアモ）」

《出典、メモなど》

アポフィス・ティス・フォニアードン

＝訳は「アポフィス（アペプ）の殺害者」。

アペプとは大蛇の姿をしたエジプト神話の悪の化身。太陽神ラーと敵対したことから「太陽を飲み込む月の蛇」といわれることもある。正体は先代太陽神。

ラーを相手取れる強大な邪神だが、嵐の神セトが天敵。”Ａｐｅｐ（アペプ）の殺害者”とはセト神を意味している。

セト神

かつてはホルス神やオシリス神を超える、もしくは並ぶ力を持っていた嵐の神。”砂漠の王”、”偉大なる強さ”などと形容される。彼が砂嵐を生み出しているとされていた。

大地を象徴する存在でもあるという。

セトナクト

「セトによって勝利する」という意味の言葉。エジプトのとあるファラオの名前でもある。

エゴ・セトナクト

＝Ｅγω，Σετναχτ．

＝私は、セトによって勝利する。（ΣετναχτはＳｅｔｎａｃｈｔ…セトナクトの適当な当て字。実際のスペルは分からなかった）

アネモストロヴィーオ・ト・カフティアモ

＝Ανεμοστροβιλο τουκαυτη αμμο．

＝熱い砂の竜巻。

『爆ぜる雷轟』（ディスプロードー・フルゴーリス）

術者の掌から無数の雷閃が走り、雷と接触した箇所から起爆して爆発を引き起こす。雷撃＋爆炎という、生身の人間が喰らうには凶悪に過ぎる呪文。

術者の実力に比例して雷の貫通力が増し、「接触したものを手当たり次第に爆発させるレーザー」のようにもなる。

《呪文》

来れ火の精、雷の精（ウェニアント・スピーワルガスエンティス・イグニース）
激烈たる爆熱孕み炸裂せよ夏の雷（アッフェル・ヴィオレンタ・フラゴトルトルス・アエスタース）
「爆ぜる雷轟」（ディスプロードー・フルゴーリス）

《出典・メモなど》

アッフェル・ヴィオレンタ・フラゴール（Affer violenta FRAGOR.）
＝激しい爆発をもたらす。
トニトルス・アエスタース（Tonitrus aestas.）
＝夏の雷。
ディスプロードー・フルゴーリス（Displodo fulguris.）
＝雷の爆発。

以下は時間系の呪文。
作者の構想如何ではもしかしたら必要になるかもしれないので作ってみた。

『髪結いの時計（クロック・バールベル）』
時間攪乱の呪文。この呪文にかかっている間は、速く動こうとすればするほど時間遅延に縛られて動きが遅くなり、ゆっくりと動こうとするほど体が速く動く。
対象の時間流を狂わせて動作を逆さにする、逆理の時計。

《出典・メモなど》
バーバークロック（ｂａｒｂｅｒ　ｃｌｏｃｋ）
理容室などで使われる、鏡越しに見るために文字盤・針の動きが逆になっている時計。

◇――――――◇――――――◇

『遅れる光陰（ヴィーチス・タールドゥス）』
時間遅延の呪文。対象の時間経過を緩やかにする。敵の動きを鈍らせたり、傷の出血を遅らせたり、アイスが融ける時間を伸ばしたりと、使える場面は多い。

《出典・メモなど》
光陰…年月。時間。「光陰矢の如し」。

ヴィーチス・タールドゥス（Ｖｉｃｉｓ　ｔａｒｄｕｓ.）
直訳は「時間は遅くする」。意味は「ゆっくりな時間」。

◇――――――◇――――――◇

『疾走する幾星霜（テンパス・アクケレレーティオー）』
時間加速の呪文。対象の時間経過を激しくする。対象の動作や思考を加速させたり、時間をおいて効果が出るものなど（発酵食品などを作る）に対して使用する。

《出典・メモなど》
幾星霜
年月。歳月。幾年月。苦労を経た上での長い年月。「どのくらいの年月が経っただろうか」という意味で使われることが多い。

テンパス・アクケレレーティオー（Ｔｅｍｐｕｓ　ａｃｃｅｌｅｒａｔｉｏ.）
訳は「加速の時間」。

◇――――――◇――――――◇

駄文シリーズはユーザページにある書きっ放しのアイデア、小説作成の過程で生まれたボツ文章を放出しているだけなので、読み応えが無くてすいません。

忙しくて９１話も書き始めていないので、載せられるのはこの程度です。

大学は遊ぶ時間が一杯ある、なんてのは文系の話ですよ。その文系だって大変なトコは大変ですし。

……高校生のみんな。

「やりたいことが見つからないから、大学に通いながら見つけたい」という考えの人は……理系の大学はお薦めしないッ！！　課題をこなすだけで必死で、遊んだり、夢を探したり、進路をゆっくり考えたりする余裕なんてほとんど無いんだからね！！

※上記の記述はあくまで個人の感想であり、佐藤Ｃはこの意見の記載によって読者または第三者が被害を被った際に一切の責任を持ちません。

よく考えて進路を決定して頂くようお願い申し上げます。

それでは次回。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5149m/

ネギま！―剣製の凱歌―

2011年11月11日18時05分発行